奈良文化財研究所学報第94冊

飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ

― 藤原京左京六条三坊の調査 ―

本　文　編

2017

奈良文化財研究所

奈良文化財研究所学報第94冊

飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ

― 藤原京左京六条三坊の調査 ―

本　文　編

2017

奈良文化財研究所

序

持統天皇８年（694）12月、持統天皇は飛鳥の地を離れ、藤原宮の大極殿で朝政を執り行いました。ここに、天武天皇が計画したものの、天皇の死去などにより一時中断していた藤原京への遷都がなされました。

藤原京は、条坊制を備えた日本最初の中国式都城です。その規模についてはさまざまな議論がなされてきましたが、現在では東西・南北が5.3キロメートルにも及ぶ、大規模なものであったと考えられています。京内には、寺院、貴族の邸宅や庶民の家、宮外官衙などが置かれていました。

奈良文化財研究所は、藤原宮の継続的な調査を計画的に進めてきました。これまでに調査した面積は宮域全体の約12パーセントと、まだ十分なものではありませんが、大極殿院、朝堂院の中枢部をはじめ、官衙地区においても多くの事実を解明することができました。

一方、藤原宮の調査と並行して、藤原京の調査も実施しています。本書で報告するのは、飛鳥藤原宮跡発掘調査部（現都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区）の新庁舎建設に伴い、1986年から87年にかけて左京六条三坊で実施した発掘調査です。左京六条三坊の地は、藤原宮東南隅部に東接する、京内でも一等地にあたります。調査の結果、古墳時代から中世にわたる多数の遺構を検出し、当地が長期にわたって活発に土地利用されていた状況が明らかになりました。

特に、藤原京期には四町にわたる敷地を有する、大規模な施設が存在したことが判明しました。これは寺院以外では複数町占地を明らかにした初めての例で、以後、同様な事例が確認されていきます。この施設の性格は、今回の分析・検討により、当初は京師の民政を司った「京職」、次いで「左京職」に変わることが明らかとなりました。また、奈良時代にも大規模な施設が存在したようで、「香山」と記された墨書土器のまとまった出土が注目されます。

今回報告する発掘調査成果が、今後の藤原京の調査研究の基礎資料として活用されることを期待いたします。

最後になりましたが、調査の実施にご協力をいただいた奈良県教育委員会と橿原市教育委員会、発掘調査のご指導とご助言をいただいた皆様と、関係諸機関に厚く感謝申し上げる次第です。

2017年３月

奈良文化財研究所
所長　**松村恵司**

飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ

── 藤原京左京六条三坊の調査 ──

目　　次

第Ⅰ章　序　　言……1

1　藤原京について……1

A　藤原京の沿革……1　　B　藤原京の条坊呼称……3

2　調査経緯……6

3　調査組織……9

4　報告書の作成……9

第Ⅱ章　調査概要……12

1　調査地域……12

A　位置と環境……12　　B　地区割りと測量……19

2　調査の概要……22

A　第45次調査……22　　E　第53次調査……24
B　第46次調査……22　　F　第133-7・13次調査……25
C　第47次調査……23　　G　関連調査……25
D　第50次調査……24

3　調査日誌抄……26

A　第45次調査……26　　E　第53次調査……43
B　第46次調査……29　　F　第133-7次調査……45
C　第47次調査……35　　G　第133-13次調査……45
D　第50次調査……39

第Ⅲ章　遺　　跡……46

1　遺跡の立地と地形……46

2　遺構各説……48

A　藤原京期の遺構……49
B　奈良時代の遺構……71
C　藤原京造営以前の遺構……74
D　平安時代～中世の遺構……83

第Ⅳ章　遺　　物……96

1　瓦塼類……96

A　軒　瓦……96
B　道具瓦・刻印瓦など……114
C　丸瓦・平瓦……122
D　塼　仏……176

2　土器・土製品……180

A　東西大溝SD4130・井戸SE4740出土土器……181
B　道路側溝・その他の溝出土土器……206
C　井戸・土坑出土土器……218
D　建物・塀出土土器……228
E　藤原京造営以前の土器・中世の土器……233
F　陶硯・特殊土製品……242
G　墨書・刻書土器……253
H　墨書土器「香山」とその字形……256

3　木製品……261

A　東西大溝SD4130出土木製品……261
B　井戸SE4740出土木製品……284
C　その他の遺構・包含層出土木製品……292
D　中世井戸内出土曲物……297
E　建築部材・井戸枠……300

4　金属製品・銭貨……313

A　金属製品……313
B　銭　貨……318

5　石製品・鋳造関係品・石器……321

A　石製品・鋳造関係品……321
B　石　器……328

6　木　　簡……329

第Ⅴ章　自然科学分析……332

1　動物遺存体……332

2　植物遺存体……333

A　分析結果……333　　B　考　察……334

3　木製品の樹種調査……338

4　金属製品・銭貨・塼仏の分析……342

第Ⅵ章　総　　括……356

1　遺　　構……356

A　遺構の変遷……356　　B　藤原京内の官衙……370

2　土　　器……379

A　SD4130・SE4740出土
　土器の検討……379　　B　陶硯からみた
　調査地の性格……385

C　古墳時代の土器……389

3　瓦塼類……393

4　文字資料からみた調査地の性格……400

A　香山正倉をめぐって……400　　C　左京職をめぐって……409

B　香具山宮をめぐって……406

5　藤原京の発掘調査……418

A　藤原京における占地……418　　C　藤原京の実態……444

B　右京七条一坊西南坪を
　めぐって……437

6　結　　語……452

A　遺　構……452　　C　調査地の性格……454

B　遺　物……453

補　論　都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
庁舎および収蔵庫の建設 ……456

1　敷地の選定……456

2　土質調査……456

3　設計と施工……457

A　建設の経過 ……457　　C　各棟の概要 …… 459

B　設計の基本方針と構造 ……458

4　藤原宮跡資料室の展示と屋外遺構表示……460

別　　図 ……463

別　　表 ……473

英文要旨（English summary）……495

中文要旨（中文提要）……525

韓文要旨（한국어 요지）……543

出土木簡釈文 ……巻末

挿 図 目 次

Fig.

1 藤原京・平城京比較対照図……4
2 大藤原京域と調査位置……5
3 周辺の遺跡……16
4 第54-1次調査出土木簡……17
5 左京六条三坊調査位置図……18
6 調査地と地区割り……20
7 第45次調査 Ⅰ区・Ⅲ区・中央区……26
8 調査風景（第45次）……27
9 SE4031調査風景……27
10 第45次調査 Ⅱ区（西区）・Ⅳ区……28
11 第45次調査 Ⅱ区（東区）……29
12 第46次調査区……30
13 調査風景（第46次）……31
14 調査風景（第46次）……31
15 現地説明会（第46次）……32
16 現地説明会（第46次）……32
17 標定点設定風景（第46次）……33
18 空撮風景（第46次）……33
19 SE4468調査風景……34
20 SE4469調査風景……34
21 第47次調査区……35
22 写真撮影風景（第47次）……36
23 調査風景（第47次）……36
24 標定点設定風景（第47次）……37
25 現地見学会（第47次）……37
26 断割図作製風景（第47次）……38
27 SE4740調査風景……38
28 第50次調査 西区……39
29 調査風景（第50次）……40
30 調査風景（第50次）……40
31 文化庁長官来訪（第50次）……41
32 第50次調査 東区……41

Fig.

33 現地説明会（第50次）……42
34 現地説明会（第50次）……42
35 SD4143調査風景……43
36 第53次調査区……43
37 SE5940調査風景……44
38 調査風景（第53次）……44
39 第133-7・13次調査区……45
40 左京六条三坊周辺地形図……46
41 調査区と周辺の地形……47
42 SD4139・4311断面図……49
43 SD4143断面図……51
44 SE10175平面図・断面図……54
45 SD4255瓦出土状況……55
46 SA4283・4990柱穴平面図・断面図…56
47 SA4286柱穴平面図・断面図……57
48 SB4726・SA4730柱穴平面図・断面図……58
49 SB5000・4332柱穴平面図・断面図…60
50 SB4340・4330柱穴平面図・断面図…62
51 SK4325・SE4335平面図・断面図……64
52 SE4740断面図……65
53 SE4740和同開珎出土状況略図……65
54 SE4740平面図・断面図……66
55 SD4130断面図……67
56 SD4131・SX4133・4134平面図……69
57 SE5950平面図・断面図……70
58 SB5050柱穴平面図・断面図……74
59 SJ4260平面図・断面図……76
60 NR4225・4226推定流域と周辺の竪穴建物……77
61 SI4231・4232平面図・断面図……79
62 SI4233平面図・断面図……80
63 SI4234・4235平面図・断面図……81

Fig.

64 SI4236平面図・断面図 ……82
65 SE4466・4467・4468
平面図・断面図……87
66 SE4474平面図・断面図 ……89
67 SB4405柱穴平面図・断面図 ……89
68 SD4755・4745・4743断面図 ……91
69 SE5940平面図・断面図 ……93
70 SK5015断面図 ……95
71 軒丸瓦１A型式……97
72 軒丸瓦１B型式 ……99
73 軒丸瓦２～５E型式…… 101
74 軒丸瓦５F～７型式 …… 103
75 軒丸瓦８型式…… 104
76 軒平瓦１A型式…… 106
77 軒平瓦１B型式 …… 107
78 軒平瓦２型式…… 109
79 軒平瓦３～６型式 …… 111
80 軒平瓦７～９型式 …… 113
81 面戸瓦 …… 115
82 熨斗瓦・土管 …… 116
83 隅切平瓦 …… 117
84 塼・刻印瓦・瓦製円盤 …… 119
85 中世雁振瓦 …… 121
86 中世面土瓦・熨斗瓦 …… 123
87 中世隅軒瓦・刻印瓦・不明道具瓦 … 124
88 丸瓦Ⅰ類B1～D1 …… 126
89 丸瓦Ⅰ類D2…… 127
90 丸瓦Ⅱ類段部の屈曲４種 …… 128
91 丸瓦Ⅱ類段部ア …… 129
92 丸瓦Ⅱ類段部イ …… 130
93 丸瓦Ⅱ類段部ウ …… 131
94 丸瓦Ⅱ類段部エ …… 133
95 丸瓦Ⅲ類D …… 134
96 平瓦Ⅰ類A …… 137
97 平瓦Ⅰ類B（1）…… 139
98 平瓦Ⅰ類B（2）…… 141
99 平瓦Ⅰ類B（3）…… 143
100 平瓦Ⅰ類B（4）…… 145

Fig.

101 平瓦Ⅰ類C（1）…… 146
102 平瓦Ⅰ類C（2）…… 147
103 平瓦Ⅰ類C（3）…… 149
104 平瓦Ⅰ類C（4）…… 151
105 平瓦Ⅰ類D（1）…… 153
106 平瓦Ⅰ類D（2）…… 154
107 平瓦Ⅰ類E …… 155
108 平瓦Ⅱ類（1）…… 157
109 平瓦Ⅱ類（2）…… 158
110 平瓦Ⅱ類（3）…… 159
111 平瓦Ⅱ類（4）…… 160
112 平瓦Ⅱ類（5）…… 161
113 平瓦Ⅱ類（6）…… 162
114 平瓦Ⅱ類（7）…… 163
115 平瓦Ⅱ類（8）…… 165
116 平瓦Ⅲ類 …… 166
117 中世丸瓦ⅰ類（1）…… 168
118 中世丸瓦ⅰ類（2）…… 169
119 中世丸瓦ⅰ類凹面の吊り紐パターン
…… 170
120 中世丸瓦ⅱ類（1）…… 171
121 中世丸瓦ⅱ類（2）…… 172
122 中世平瓦ⅰ類（1）…… 173
123 中世平瓦ⅰ類（2）…… 174
124 中世平瓦ⅰ類（3）・ⅱ類…… 175
125 藤原宮出土方形三尊塼仏B …… 176
126 須恵器杯B蓋・杯G蓋の計測点 …… 180
127 SD4131・4132出土土器…… 211
128 SD4135出土土器…… 213
129 SD4143出土土器…… 215
130 その他の溝出土土器…… 217
131 SK4327出土土器…… 223
132 SK4265出土土器…… 225
133 SK4271出土土器…… 226
134 SK4266・4365・SJ4260出土土器 … 227
135 掘立柱建物出土土器…… 231
136 掘立柱塀出土土器 …… 232
137 縄文土器 …… 233

Fig.

138 SI4231・4233出土土器 …… 235
139 SI4230・4232・4234出土土器…… 237
140 SI4235・4236出土土器 …… 239
141 韓式系土器 …… 240
142 SJ5007土器出土状況 …… 241
143 緑釉獣脚硯 …… 243
144 法隆寺献納宝物金銅小幡と緑釉獣脚硯 …… 244
145 定型硯 …… 247
146 転用硯 …… 248
147 土馬Ⅰ型式 …… 249
148 土馬Ⅱ・Ⅲ型式 …… 250
149 小型模造土器 …… 251
150 製塩土器 …… 252
151 「香山」の代表例 …… 257
152 「香山」の字形 …… 258
153 SD4130中層出土木製品（1）…… 261
154 SD4130中層出土木製品（2）…… 262
155 SD4130中層出土木製品（3）…… 263
156 SD4130中層出土木製品（4）…… 264
157 SD4130中層出土木製品（5）…… 265
158 SD4130中層出土木製品（6）…… 266
159 SD4130中層出土木製品（7）…… 267
160 SD4130中層出土木製品（8）…… 269
161 SD4130中層出土木製品（9）…… 271
162 SD4130中層出土木製品（10）…… 272
163 SD4130中層出土木製品（11）…… 273
164 SD4130中層出土木製品（12）…… 275
165 SD4130中層出土木製品（13）…… 276
166 SD4130中層出土木製品（14）…… 277
167 SD4130中層出土木製品（15）…… 278
168 SD4130上層出土木製品（1）…… 279
169 SD4130上層出土木製品（2）…… 280
170 SD4130上層出土木製品（3）…… 281
171 SD4130上層出土木製品（4）…… 282
172 SD4130上層出土木製品（5）…… 283
173 SE4740最下層・下層出土木製品 …… 285

Fig.

174 SE4740下層出土木製品（1）…… 286
175 SE4740下層出土木製品（2）…… 287
176 SE4740中層出土木製品 …… 288
177 SE4740上層出土木製品（1）…… 289
178 SE4740上層出土木製品（2）…… 290
179 SE4740上層出土木製品（3）…… 291
180 SB4332・4737出土木製品 …… 292
181 SK4325出土木製品 …… 292
182 SE4790出土漆器 …… 293
183 SE4790出土木製品 …… 294
184 中世井戸出土木製品（1）…… 295
185 中世井戸（2）・包含層出土木製品… 296
186 中世井戸出土木製品（3）…… 297
187 SE4177・4468出土曲物 …… 298
188 SE5001・4464出土曲物 …… 299
189 SA4730出土柱根のえつり穴 …… 300
190 SB4445出土柱根の底面加工痕跡 …… 300
191 SA4730・SB5000出土部材 …… 301
192 SB4330・4331・4332・4445・4738・5050出土部材 …… 303
193 北西隅柱新枘穴と横桟圧痕 …… 304
194 北東隅柱旧枘穴 …… 304
195 南東隅柱旧仕口 …… 304
196 SE4740隅柱（1）…… 305
197 SE4740隅柱（2）…… 306
198 北横桟角枘 …… 307
199 南横桟角枘 …… 307
200 SE4740横桟 …… 308
201 SE4740横板（1）…… 309
202 SE4740横板（2）…… 310
203 SE4740横板（3）…… 311
204 鉄製品（1）…… 314
205 鉄製品（2）…… 315
206 鉄製品（3）…… 316
207 銅製品 …… 317
208 無文銀銭 …… 318
209 銭貨の計測点 …… 319

Fig.

210 石製品（1）…… 321
211 石製品（2）…… 322
212 石製品（3）…… 323
213 石製品（4）…… 324
214 鋳造関係品（1）…… 325
215 鋳造関係品（2）…… 326
216 石器 …… 327
217 小円礫 …… 328
218 藤原京左京六条三坊のモモ核 …… 336
219 藤原京左京六条三坊の種実 …… 337
220 棒状金銅製品とその顕微鏡写真 …… 342
221 銅鏡と透過Ｘ線画像 …… 343
222 無文銀銭の穴部分の顕微鏡写真 …… 344
223 和同開珎の透過Ｘ線画像 …… 344
224 和同開珎の化学組成（銅－錫－鉛）… 346
225 和同開珎の化学組成（鉄－銅）…… 346
226 各資料の化学組成の特徴 …… 347
227 既報告資料の化学組成の特徴と銭文 347
228 各タイプのスペクトル一例 …… 348
229 化学組成の平均値による
各タイプの特徴 …… 348
230 中国銭29と透過Ｘ線画像…… 349
231 破片Ａ …… 350
232 破片Ａ衣文凹部の白色部 …… 350
233 破片Ａ白色下地の上の褐色物質 …… 350
234 破片Ａ白色下地の上の褐色物質
（光沢有）…… 351
235 破片Ａ裏面の濃褐色・褐色付着物（漆）
…… 351
236 破片Ａ赤褐色部 …… 351
237 破片Ａ銅釘の先端部 …… 351
238 破片Ａ金箔 …… 351
239 破片Ａ銅釘の透過Ｘ線画像 …… 351
240 破片Ｂ …… 351
241 脇侍破片Ｂ蓮華座凹部の白色下地 … 352
242 破片Ｂ白色下地上層の褐色物質 …… 352
243 破片Ｃ …… 352
244 破片Ｃ白色下地 …… 352

Fig.

245 破片Ｃ褐色部 …… 352
246 破片Ｄ …… 353
247 破片Ｄ胎土と赤褐色部 …… 353
248 破片Ｄ淡赤色部と白色部 …… 353
249 破片Ｅ …… 353
250 破片Ｅ褐色物質 …… 353
251 破片Ｅ赤色顔料（朱）と白色下地
もしくは白色顔料（鉛白）…… 353
252 蛍光Ｘ線分析結果の一例（破片Ａ）… 354
253 破片Ａ裏面の褐色物質のFT-IR結果
…… 355
254 Ⅰ期の遺構 …… 357
255 Ⅱ期の遺構 …… 357
256 Ⅲ-Ａ期の遺構 …… 359
257 藤原京右京七条一坊西南坪 …… 361
258 Ⅲ-Ｂ期の遺構 …… 362
259 藤原京期の井戸SE4740と
平安時代の井戸SE4467 …… 363
260 Ⅲ-Ｃ期の遺構 …… 365
261 Ⅳ期の遺構 …… 367
262 Ⅴ期の遺構 …… 368
263 Ⅵ期の遺構 …… 368
264 平城宮兵部省 …… 370
265 平城京左京五条二坊十四坪 …… 370
266 藤原京左京六条三坊（Ⅲ-Ｃ期）・常陸
国庁（Ⅲb期）・大宰府政庁（Ⅱ期）… 372
267 前殿SB4340および周辺の柱穴列
SX4342～4349と幄舎…… 375
268 藤原京左京六条三坊の建物配置復元図
（Ⅲ-Ｂ期）…… 376
269 藤原京左京六条三坊の建物配置復元図
（Ⅲ-Ｃ期）…… 377
270 SD4130中層・SE4740下層における
主要供膳具の出土地区と点数 …… 384
271 硯の出土パターン …… 387
272 陶硯の出土地分布 …… 388
273 甕口縁部の形態分類 …… 389
274 軒丸瓦1aと吉備池廃寺ＩＡの
同箇所比較 …… 393
275 本調査区出土溶着資料 …… 396

Fig.

276 軒瓦の分布 …… 397
277 丸・平瓦の分布 …… 398
278 左京四条三坊東北坪・西北坪
遺構配置図 …… 419
279 左京七条一坊遺構配置図 …… 420
280 右京二条一坊遺構配置図 …… 421
281 右京二条二坊東北坪・西北坪
遺構配置図 …… 422
282 右京十一条二坊東北坪・西北坪
遺構配置図 …… 423
283 左京二条三坊西南坪遺構配置図 …… 423
284 左京七条三坊西南坪遺構配置図 …… 424
285 右京一条二坊東北坪遺構配置図 …… 424
286 右京二条三坊東南坪・西南坪・
三条三坊東北坪・西北坪
遺構配置図 …… 425
287 右京七条一坊・八条一坊東北坪・
西北坪遺構配置図 …… 427
288 左京二条二坊西北坪遺構配置図 …… 428
289 左京七条二坊東南坪遺構配置図 …… 429
290 左京十一条一坊西南坪遺構配置図 … 429

Fig.

291 左京十一条二坊西南坪遺構配置図 … 430
292 右京北五条十坊西南坪遺構配置図 … 430
293 右京一条一坊遺構配置図 …… 431
294 右京四条六坊東北坪・東南坪
遺構配置図 …… 432
295 右京五条六坊東南坪遺構配置図 …… 433
296 右京六条五坊東北坪遺構配置図 …… 434
297 右京十条四坊西北坪遺構配置図 …… 434
298 右京十条五坊東南坪遺構配置図 …… 435
299 右京十一条三坊東北坪遺構配置図 … 435
300 左京十一条三坊西南坪遺構配置図 … 436
301 右京七条一坊西南坪発掘遺構図 …… 439
302 SB4975平面図・断面図 …… 440
303 右京七条一坊西北坪・西南坪・
八条一坊西北坪遺構変遷図（1）… 441
304 右京七条一坊西北坪・西南坪・
八条一坊西北坪遺構変遷図（2）… 442
305 藤原京における占地 …… 445
306 完成した新庁舎 …… 457
307 新庁舎の現在の建物配置 …… 459

表目次

Tab.

1 各調査の地区と基準点……21
2 発掘調査一覧……25
3 土師器の調整手法…… 180
4 墨書土器「香山」等一覧 …… 259
5 SD4130中層出土加工棒一覧 …… 274
6 SE4790出土箸一覧 …… 293
7 SE4740横板 樹種・製材方法一覧 …. 312
8 銭貨計測表 …… 319
9 小円礫計測表…… 328
10 動物遺存体一覧 …… 332

Tab.

11 種実同定結果 …… 335
12 木製品の器種別樹種 …… 341
13 飛鳥・藤原京出土銀銭の蛍光X線
分析結果 …… 344
14 無文銀銭および和同開珎定量
分析結果 …… 345
15 中国銭の測定結果 …… 349
16 塼仏胎土分析の結果 …… 354
17 官衙等の規模 …… 371
18 各遺跡出土の陶硯比率 …… 386

Tab.

19　竪穴建物出土土器の各属性
　　出現頻度 …… 390

20　本調査区出土軒瓦一覧 …… 393

21　主要遺構出土の軒瓦 …… 398

Tab.

22　藤原京占地一覧（右京域）…… 446

23　藤原京占地一覧（左京域）…… 447

24　建築概要と構造 …… 458

別図目次

1　SE4031・4460・4461・4462
　　平面図・断面図…… 465

2　SE4463・4464・4465
　　平面図・断面図…… 466

3　SE4469・4470・4471・4472・4473
　　平面図・断面図…… 467

4　SE4739・4765・4790
　　平面図・断面図…… 468

5　SE4782・4793・4980・5001
　　平面図・断面図…… 469

6　SE5010・5022・5023・5055
　　平面図・断面図…… 470

7　SE5060・5065・5076・5095・5920
　　平面図・断面図…… 471

別表目次

1　井戸一覧…… 475

2　7世紀の土師器の器種 …… 476

3　7世紀の須恵器の器種 …… 478

4　7世紀土器の大別 …… 480

5　SD4130出土土器の器種構成 …… 481

6　SE4740出土土器の器種構成 …… 483

7　SD4130・SE4740出土土器一覧…… 484

8　墨書土器一覧…… 487

9　大型種実計測値 …… 489

10　SD4130出土木製品樹種一覧 …… 491

11　SE4740他出土木製品樹種一覧…… 492

12　建築部材樹種一覧 …… 493

飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ

― 藤原京左京六条三坊の調査 ―

第Ⅰ章　序　　言

本書は奈良県橿原市木之本町に所在する藤原京左京六条三坊において、奈良国立文化財研究所（2001年度以降は奈良文化財研究所。以下同じ。）飛鳥藤原宮跡発掘調査部（2006年度以降は都城発掘調査部。以下同じ。）が、飛鳥藤原宮跡発掘調査部新庁舎建設に伴って、1985年度から1986年度にかけて実施した藤原宮第45次、第46次、第47次、第50次、第53次調査と、2004年度に実施した飛鳥藤原第133-7次、第133-13次調査の成果をまとめたものである。

1　藤原京について

A　藤原京の沿革

史料にみる造営過程　6世紀末に推古天皇が豊浦宮に即位して以来、宮室は一時難波、近江に移った以外は、一貫して飛鳥の地にあった。壬申の乱に勝利した天武天皇は飛鳥浄御原宮に即位し、天皇親政による律令国家の樹立を目指し、次々と行政改革を実施した。天武天皇5年(676)には「新城に都つくらむとす。限の内の田園は、公私を問はず、皆耕さずして悉に荒れぬ。然れども遂に都つくらず。」の記事にみえる様に新たな京を造ることを意図したが、実現はみなかった。天武天皇11年（682）3月には小紫三野王と宮内官大夫等を派遣して新城の地形を調査させ、その直後には天皇自ら新城を行幸している[1]。天武天皇12年7月と翌年3月には天皇が京師を巡行し、宮室の地を定めたとされる。一方、天武天皇12年12月には「凡そ都城宮室は一処に非ず、必ず両参を造らん、故にまづ難波に都せんとす」と詔勅を発して難波宮の造営を進め、複都制を目指した。

これらの計画は朱鳥元年（686）の難波宮の焼亡とそれに続く天武天皇の死によって一旦頓挫するが、天武天皇の遺志を継いだ持統天皇は、持統天皇4年（690）10月に太政大臣高市皇子に耳成山、畝傍山、香具山の大和三山に囲まれた藤原宮地を観させ、次いで12月には自ら藤原宮地を訪れた。翌持統天皇5年10月には「使者を遣わして新益京を鎮め祭らし」め、12月には宅地班給の基準を示している。持統天皇6年には1月に新益京の路巡視、5月に「浄広肆難波王等を使わして藤原宮地を鎮め祭らし」ている。そして、同月に伊勢、大倭、住吉、紀伊大神に奉幣使を遣わして藤原宮造営開始を報告し、6・7月の藤原宮地の巡視と続く。藤原宮の建物配置などの最終的な造営プランは、この持統天皇6年に最終的に決定されたと考えられている。藤

原宮の造営はその後本格化し、持統天皇７年２月には造京司への墳墓屍収容命令が出され、持統天皇８年（694）１月に天皇は藤原宮行幸を行い、その日のうちに飛鳥浄御原宮に帰っている。この持統天皇８年正月乙巳条の記事は「藤原宮」であり、「藤原宮地」ではないことから、この時点ではかなり宮内の体裁が整っていたと考えられる。そして12月１日に天皇は藤原宮の大極殿で朝政を行い、ここに藤原京への遷都をみたのである。

藤原京内の坊は平城京とは異なり、固有名詞で呼ばれていた。平城宮朱雀門下層の下ツ道西側溝SD1900出土木簡から「左京小治町」があったことが知られ、これは雷丘の東方に所在したものであろう。『続日本紀』には「林坊」の名があり、左京七条一坊出土の木簡には「軽坊」の名があった。下ツ道と山田道の交差点付近は「軽の衢（ちまた）」と呼ばれており、軽坊はその周辺とみられる。

藤原京は持統、文武、元明の三代16年間にわたり都として機能したが、後半には既に問題点が明らかとなり、文武末年には遷都のことが議せられていた。元明天皇が即位すると直ちに平城遷都の詔勅を発し、２年後にはそれが実現し、藤原京は廃都となった。平城京遷都後は左大臣石上麻呂が留守官となり、藤原宮に残った。『扶桑略記』によれば、藤原宮は和銅４年（711）に大官大寺とともに焼亡したというが、発掘調査では火災の痕跡は確認していない。

発掘調査による検証　藤原京は条坊道路で縦横に区画された街区をもつ、日本初の中国式都城であった。藤原京の造営に関しては史料上では上述の様な経緯があるが、発掘調査によっても新たな事実が明らかとなってきている。

藤原京の造営が始まった当初には藤原宮の位置は決定しておらず、宮内には宮の造営以前に掘られた先行条坊が縦横に走り、最近では先行四条大路以北において先先行条坊の存在も指摘されている。宮の西南部や朝庭の調査等では、先行条坊に伴う塀や建物遺構も検出している。また、藤原宮中枢部の調査では、２時期にわたる大規模な整地を確認し、それぞれ藤原京造営と藤原宮造営時の整地に比定している。大極殿北で調査した、宮造営の資材を運搬した運河SD1901Aは先行条坊の施工後に掘削されたもので、天武天皇11～14年（682～685）と考えられる木簡が出土し、この頃には宮の造営が本格化していたことを示す。

京に目を転じれば、本薬師寺は天武天皇９年（680）発願で、持統天皇２年（688）の無遮大会時には少なくとも金堂は完成していたとみられる。寺域が右京八条三坊の坊内に正しく収まることから、藤原京の造営は本薬師寺の造営開始時には既に本格化していたと考えられており、発掘調査でも興味深い事実が明らかとなった。1992年の中門の調査で下層に西三坊坊間路を検出[2]し、1994年の調査ではその北延長を確認するとともに、右京八条三坊西南坪の西辺を限る掘立柱塀と西南坪に建つ掘立柱建物を検出した[3]。これらの遺構は本薬師寺造営の整地土で埋められており、寺の造営時には京の造営が本格化し、既に居住域としての体裁を整えつつあったことを示す。

これらは、天武天皇５年の新城造営が実体を伴わないものではなく、かなりの範囲で進んでいたことを示すのに十分な知見と言えよう。また、ここで検出した西三坊坊間路は藤原宮内の先行条坊にあたるもので、遷都時には埋められている。このことは、京内においても検出した条坊遺構が遷都時に確実に存在することを保証するものではなく、条坊遺構を確認しても遷都当初から複数の坪にわたる占地が考えられることも示したと言える。

B　藤原京の条坊呼称

藤原宮・京の位置　持統、文武、元明三代の宮である藤原宮は、条坊道路によって整然と区画された京域を伴う宮である。『日本書紀』に「新益京」と記されるこの都は、一般に「藤原京」と称される[4]。

藤原宮・京の比定地に関する研究は、長く文献と遺存地割を基に、その中心を高殿大宮土壇とする説と醍醐長谷田土壇とする説の二説が拮抗する状態にあったが、1934年から1943年にかけて日本古文化研究所が行った調査[5]によって、高殿大宮土壇の周辺に大極殿院や朝堂院を構成する建物が展開することが明らかにされ、その決着をみた。その後、宮域、京域の復元研究が大きく進展したのは、1966年以降のことである。古文化研究所の調査以後、藤原宮の発掘調査は一時中断状態となっていたが、一方で平城宮や難波宮の調査が進展し、宮の始原としての藤原宮の重要性も高まっていた。その折、もちあがった国道165号線のバイパス化計画において、その路線が藤原宮の内裏推定地を横切ることが予定された。急遽、奈良県は「藤原宮跡調査指導委員会」を組織し、1966年から1968年にかけてバイパスルートにあたる藤原宮の北東部および西部の調査を実施した。一連の調査の結果、北面大垣とその東隅、および西面大垣の位置が判明し、宮の東西規模が確定したのである。

岸説藤原京　さらに大きな成果として、調査指導委員の一人であった岸俊男による藤原宮・京域の復元研究がある[6]。岸によれば、緊急発掘調査という性格上、限られた時間と費用の中で効率的に調査を進めることが求められたため、発掘調査成果を順次図上で検討し、藤原京の条坊を推定しながら調査を進める必要があったという。岸は喜田貞吉以来の文献研究の成果をふまえ、遺構と大和の古道との位置関係を1/3000縮尺図上で検討した。岸が復元した藤原京は南北12条東西8坊で、1坊は半里（約265m）四方で4町からなる。京極は東は中ツ道、西は下ツ道、北は横大路で、南は山田道を利用したと考えた。その後に進められた調査においても、岸の推定位置に条坊道路が見つかり、以降岸説はしばらく通説となった。

「大藤原京」の復元　ところが1979年以降、岸説藤原京の範囲外にあたる場所の調査で条坊道路とみられる遺構の検出が相次いだ。これらの条坊道路は、既に定着していた岸説の条坊呼称を延長した名称（以下、岸説延長呼称。）で呼びならわされ（Fig. 1）、岸説藤原京域を超える範囲の藤原京域、すなわち「大藤原京」域の復元案が様々に提出されるようになった。議論が活発化するなか、1996年に西京極と東京極にあたるT字形の条坊道路が橿原市土橋遺跡と桜井市上之庄遺跡で確認され、「大藤原京」の東西規模が確定するに至った。これを受け、中村太一や小澤毅により京域を十条十坊とする案（Fig. 2）が出された[7]。これは、阿部義平が提唱する1坊を16町、1里（約530m）四方とする立場[8]に立つもので、条坊道路幅に三段階の規格性がみられることの説明を可能にするとともに、岸説の根拠ともなっている「養老令」の戸令および「職員令」の規定にも合致する極めて有力な説と目され、今後の発掘調査を通じた検証が待たれるところである。現在のところ、南京極の条坊遺構は未だ確かめられてはいない。十二条大路以南においては推定位置に条坊道路が検出されておらず、京の南部から東南部にかけての丘陵地に、平地と同様の条坊道路が果たして造られたのかという計画と施工に関わる課題も残されている。以後、本書でいう「藤原京」はこの「大藤原京」のことである。

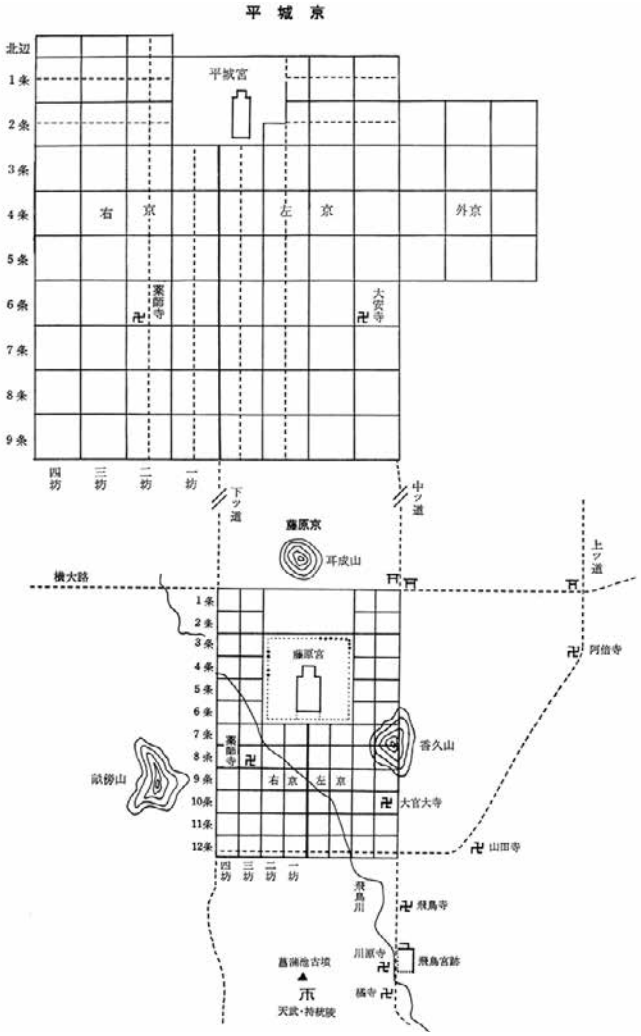


Fig. 1　**藤原京・平城京比較対照図**（註6文献より転載）

本書で報告する調査区は、すべて岸説藤原京で復元するところの左京六条三坊に収まるが、以上のような「大藤原京」の復元を鑑みれば、異なる条坊呼称もあり得る。たとえば十条十坊説に従うなら、左京六条二坊にあたる。しかし、これまでの調査研究状況を踏まえ、混乱を避けるため、本書では岸説延長呼称を用いて報告を行うものとする。

1）天武天皇5年の記事は造営の放棄ではなく中断で、この時点で再び造営を決定したと考えられる。天武天皇5年時にも既に京内の造作は進んでいたとみられる（橋本義則2000「「藤原京」造営試考」『研究論集XI』奈文研）。

2）奈文研1994『藤原概報24』。

3）奈文研1996『藤原概報26』。

4）喜田貞吉1900「藤原京」『歴史地理』第2巻3号。喜田貞吉1913「藤原京考証1-3」『歴史地理』第21巻1・2・5号。

5）足立康1936・1941『藤原宮阯伝説地高殿の調査』1・2日本古文化研究所。

6）奈良県教育委員会1969『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第25冊 藤原宮―国道165号線バイパスに伴う宮域調査―』。

7）中村太一1996「藤原京と『周礼』王城プラン」『日本歴史』第582号。小澤毅1997「古代都市「藤原京」の成立」『考古学研究』第44巻第3号。

8）阿部義平1986「新益京について」『千葉史学』第9号。

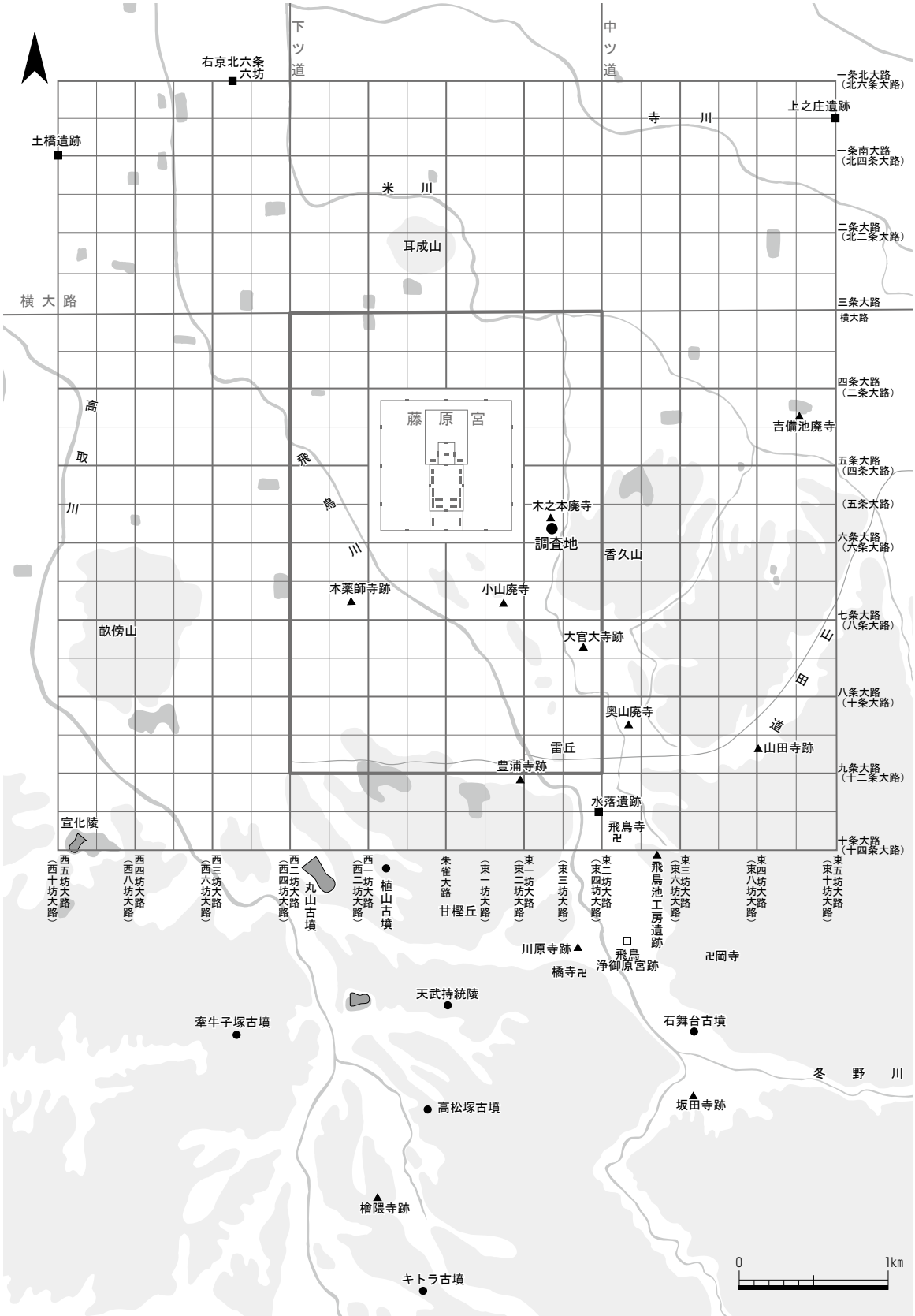


Fig. 2　大藤原京域と調査位置　1:40000（括弧内の条坊呼称は岸説延長呼称による。）

2　調査経緯

1954年、大和平野農業用水導水路（吉野川分水）計画が確定し、飛鳥地域では多くの重要遺跡が路線の通過対象となった。施工にあたっては、事前の発掘調査で遺構の状況を確認することが必要となり、1955年以来、文化財保護委員会（現文化庁）の要請により、工事を契機とした飛鳥地域の発掘調査を奈良国立文化財研究所（以下、奈文研とする。）が実施することとなった。平城宮の発掘調査を中断して、1956・57年度に飛鳥寺、1957・58年度に川原寺、1959年度に伝飛鳥板葺宮跡の調査を行った。しかし、その頃平城宮において、近畿日本鉄道による宮西南隅部への検車区建設計画、あるいは平城宮東辺に接して通過する国道24号線バイパス計画による宮跡の保存問題が喫緊の課題となり、あるいは一条通沿いの史跡指定による開発制限撤廃運動も起こった。そのため奈文研は、伝飛鳥板葺宮跡の調査を奈良県立橿原考古学研究所に託し、再び平城宮の発掘調査に専念することとなった[1]。その間、1966年からの藤原宮大極殿北を通る国道165号線バイパス計画に伴う奈良県教育委員会の調査で、宮の北面大垣とその東端、および西面大垣が明らかとなった。この一連の調査では多数の木簡も出土し、道路計画は変更された。また、飛鳥地方では橿原市域から波及する宅地開発によって、明日香村の歴史的風土の保全も問題となっていた。こうした情勢と文化財の保存を求める世論を受けて、政府は1970年に「飛鳥地方における歴史的風土および文化財の保存等に関する方策」を閣議決定し、藤原宮を含む飛鳥地域の遺跡の調査と保存を、国家的事業として実施することとなった。

一方奈文研は、1969年に藤原宮の調査を奈良県教育委員会から引き継いだ。また、飛鳥藤原地域の発掘調査のための人員と予算の要求を独自に行っていたが、1969年度に調査費のみが認められ、平城宮跡発掘調査部の人員をさいて、藤原宮南面中門の調査を藤原宮第１次調査として行った。翌年、1970年度には２名の人員増も認められたため、４月17日に平城宮跡発掘調査部に研究員６名、研究補佐員３名で飛鳥藤原宮跡発掘調査室を設け、以後継続的に飛鳥藤原地域の調査を行うこととなった。藤原宮は1934～43年の日本古文化研究所の調査により主要な殿舎の配置が明らかとなっており、1946年には内裏、大極殿、朝堂院を中心とした地域が史跡指定され、1952年には特別史跡となった。当時の大きな問題は藤原宮の史跡追加指定と大極殿院に所在する鴨公小学校の改築であり、小学校は藤原宮の西端に移転することとなった。1970年度以降、鴨公小学校の移転地の調査を３年間で行い、藤原宮西方官衙の様相を明らかとした。

1973年４月12日には、飛鳥藤原宮跡発掘調査部（以下、藤原調査部とする。）が14名の研究員をはじめ、総勢20名の人員と第一、第二の２調査室で発足した。その後、1978年４月５日には考古第一、考古第二、遺構、史料の４調査室に増加し、体制を充実した。

1980年５月には、明日香特別立法（明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備等に関する特別措置法）が公布された。この法は「明日香地方の遺跡等の歴史的文化遺産がその周辺の環境と一体をな」すものであると明確に規定し、「遺跡分布の学術調査及び緊急発掘調査を速やかに行いうるよう、政府は財政上、技術上及び体制上の十分な援助を行う」こととなった。文化庁はこれにより明日香特別立法施行後の発掘調査体制の充実を図ることとし、1981年度に藤原調査部に２名の人員を増加し、予算措置も講じた。

藤原調査部では、1970年の調査室発足以来、藤原宮跡の東南に隣接する民有地を借り上げてプレハブの仮設的な施設を設けて調査拠点とし、発掘調査にあたってきた。その間、発掘調査の進展や増加に伴い、施設は順次増設され、約6,700㎡の土地にプレハブ31棟（面積約3,200㎡）が建ち並ぶこととなった。一方では1984年度には人員も31名を数え手狭になり、業務の効率に差支えが生じるとともに、収蔵能力も限界に達するに至った。調査資料の保全と発掘調査業務の充実を計るため、恒久的な施設の建設が望まれた。また、調査研究の成果を一般に公開する必要にも応えるために、新庁舎「飛鳥藤原宮跡保存管理施設（仮称）」の建設を構想した[2]。

新庁舎の建設地の選定にはいくつかの条件があり、藤原宮跡を外れることを基本原則とする一方で、調査部の発掘業務の遂行上、飛鳥地域からも藤原宮域からもあまり離れられないため、候補地として4つの案を呈示して検討を重ねた。その案のうち、1983年度に藤原宮東南隅の東方、東面大垣にほど近い橿原市木之本町97、藤原京左京六条三坊東北坪・東南坪の地に決定した。用地は1984年度から橿原市の（財）土地開発公社によって先行取得がなされ、1985年度には土地購入を完了した。

この場所は大和三山の一つで古くから和歌にも詠われ、歴史の舞台としても重要な香具山の西北麓で、北には啼沢女命を祭神とする式内社、畝尾都多本神社が所在する。また、持統天皇10年（696）に檜隈女王が亡き高市皇子を偲んで詠んだ挽歌の哭沢の杜は、この地とされる。天武天皇の長子で壬申の乱でも活躍した高市皇子の邸宅は「香具山宮」と呼ばれ、具体的な場所は不明であるものの、香具山の周辺にあると考えられている。こうした歴史的背景と、藤原宮に隣接する一等地であることから、大規模な宅地か重要な施設の存在が強く予想されたため、新庁舎建設の事前調査を実施することとした[3]。

敷地は、藤原京左京六条三坊東北坪・東南坪と西南坪の東端にあたる。調査は面積が約20,000㎡と広大であるため、数次に分けて行うこととした。敷地内の遺構の有無と残存状況を探るために、まず1985年4月3日に第45次調査として幅6ｍのトレンチを総長330ｍにわたって東西、南北に入れた。その結果、西南部では地盤が高く、遺構の残存状況も良好であることが把握できた。東半部は香具山の西麓を北流する中の川に向けて低くなっていく地形から、遺構の残存状況は不良で密度も低いと予想していたが、東北部で東西大溝SD4130を検出した。この結果新庁舎建設地全域に遺構が広がっていることが予想され、全面調査が必要であることが明らかとなった。敷地の西南部は次に第46次調査として実施することとし、第45次調査では東北坪東半部を中心とし、調査区を拡張して面的な調査を実施した。その結果、東西大溝SD4130が調査地を通して貫流することが判明した。調査期間は1985年4月3日から9月21日[4]で、発掘作業は8月12日まで継続した。調査面積は拡張を重ねた結果、約3,410㎡となった。

第45次調査の知見をもとに、敷地西南部分、東南坪の西北部にあたる地で第46次調査を行った。一部削平が著しい箇所があるものの、遺構の残存は良好で、東三坊坊間路をはじめとした藤原京期の遺構、および古墳時代と7世紀代の遺構、奈良時代から平安時代、中世の遺構を多数検出した。この調査では坊間路上に東西棟建物SB4340を検出したことが特筆され、後に藤原京期に四町占地の時期があることが判明するのであるが、この時点では奈良時代の遺構と認識していた。四町占地の時期の遺構は、ほとんどをこの調査で検出している。調査期間は1985年8月6日から1986年1月28日で、調査面積は5,965㎡である。

第47次調査は、第46次調査区に北接し、東北坪西南部を中心とした地域の調査である。東西大溝SD4130の続きを確認するとともに、その南岸に接して井戸SE4740を検出した。「香山」と記した墨書土器から、奈良時代の「香山正倉」との関係が注目された。また、7世紀代の瓦が多数出土し、瓦を用いた施設が周辺に存在することが示唆された。調査期間は1985年11月28日から1986年6月20日で、調査面積は約2,500㎡である。

第50次調査は、東南坪北東部の東区と、東南坪西北隅から東北坪西部にかけての西区の2箇所に分けて実施した。西区では第46次調査のSB4340と同様、東三坊坊間路上に大規模な東西棟掘立柱建物SB5000を検出した。この建物は藤原宮期と判断され、四町占地の時期があることが判明した。東西大溝SD4130からは稲の収納に係わる木簡が出土し、第47次調査の知見と合わせて、この地が奈良時代には「香山正倉」であったと考えられた。東区では、南北大溝SD4143が藤原京の東堀河かと推定された。調査期間は1986年7月28日から12月19日で、調査面積は約2,500㎡である。これまでの調査で、調査面積は新庁舎建設予定地の7割強に達した。

第53次調査は、一連の最後の調査である。調査地は第45次調査区東方の香具山西麓部と、第46次調査区と第50次調査区の間の東南坪東半部の2箇所に設定したが、後に第46次調査区南方の未調査地に調査区を設け、計3箇所である。これによって各調査区が面的にほぼ連続し、全体の状況をよく知ることができることとなった。調査期間は1987年2月13日から5月12日で、調査面積は約3,030㎡である。ここに、新庁舎建設地の事前調査は完結した。調査終了後は判明した成果をもとに遺構の保存に万全を期し、可能な部分は平面や標柱、植栽などで表示する等の配慮をしたうえで、1989年に新庁舎の完成をみたのである。

新庁舎完成後、藤原調査部は藤原宮中枢部の主要殿舎や、石神遺跡などの重要遺跡の継続的な調査を実施してきた。その結果、土器、瓦をはじめとした遺物はさらに膨大な量となり、途中で収蔵庫の増築をしていたものの、計画時には数十年の余裕をみていた収蔵庫が早くも一杯になるという事態となった。そのため、敷地北部に収蔵庫をさらに増床することとなり、2004年度の秋から冬にかけて、当該地として17年ぶりに第133-7次調査と第133-13次調査を行った。その結果、南方から続く遺構の状況をさらに明らかにすることができた。調査期間と面積は、第133-7次調査が2004年9月4日から10月25日で343㎡、第133-13次調査が2005年3月7日から4月18日で約200㎡である。

これら一連の発掘調査で、東南坪の約50％、東北坪の約36％を調査したこととなり、藤原宮に隣接する一等地での様相を明らかにするとともに、前後する時期でのこの地の性格も明らかにすることができた。小規模なものを含めて7次にわたる全調査面積は、およそ16,970㎡であった。

1） 奈文研1972『奈良国立文化財研究所二十年史』。

2） 奈文研1989『奈文研年報1989』。

3） 調査地は、2000年策定の藤原京の調査基準では、藤原宮を取り巻く地域として無条件に発掘調査を実施する場所である。

4） 調査終了日時については埋め戻し完了日を基本とし、調査日誌等で復元できる場合はそれをとった。そのため、各概報の記載とは一致しない場合がある。

3　調査組織

本報告書は奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が藤原京左京六条三坊において実施した藤原宮第45次、第46次、第47次、第50次、第53次、飛鳥藤原第133-7次、第133-13次調査の報告である。

以下に各々の発掘調査の責任者と調査担当者を掲げ、他の発掘調査関係者は一括して列記する（※は研究補佐員、※※は調査補助員）。

調査次数	年　度	所　長	部　長	調査担当者
藤原宮第45次	1985	坪井清足	狩野　久	佐藤興治
藤原宮第46次	1985	坪井清足	狩野　久	大脇　潔
藤原宮第47次	1985・86	坪井清足	狩野　久	深澤芳樹
		鈴木嘉吉	岡田英男	
藤原宮第50次	1986	鈴木嘉吉	岡田英男	川越俊一
藤原宮第53次	1986・87	鈴木嘉吉	岡田英男	安田龍太郎
			牛川喜幸	
飛鳥藤原第133-7次	2004	町田　章	金子裕之	山崎信二
飛鳥藤原第133-13次	2004	町田　章	金子裕之	小池伸彦

石田由紀子※、岩本圭輔、岩本正二、内田和伸、加藤　優、木下正史、黒崎　直、小寺　誠※、清水真一、菅原正明、角　浩行※、高野　学※、高橋公一※、立木　修、土肥　孝、飛田恵美子※、納谷守幸※、西口壽生、箱崎和久、宮川伴子※、村上訒一、山岸常人、山本忠尚、網　伸也※※、大江真人※※、春日井恒※※、清水康二※※、成瀬正勝※※、藤本啓二※※、山本義孝※※

4　報告書の作成

発掘調査の終了後、報告書の作成にとりかかったが、当時は他に先行して刊行する報告書の編集が進んでいた。一方、藤原調査部の発足以来、藤原京の調査が進展し、京内の様子が徐々に明らかになってきた。特に大藤原京の確認以後は、京内各所での様相の違いが注意されるとともに、その実態の解明が課題となり、藤原宮に隣接した一等地を広範囲に調査した当遺跡の正式報告の作成が待たれていた。報告書作成に向けての整理作業計画は、2006年度に新たな体制を整えて正式に開始し、2016年度刊行となった。

資料整理については遺構関係を遺構研究室、出土遺物のうち木製品、金属製品、石製品を考古第一研究室、土器・土製品を考古第二研究室、瓦塼類を考古第三研究室、木簡と墨書土器の解読は史料研究室が中心となって行った。動物遺存体の分析は山﨑 健（埋蔵文化財センター）、木製品の樹種の調査は藤井裕之（埋蔵文化財センター客員研究員）、木製品の年輪年代調査は星野安治（埋蔵文化財センター）、金属製品・銭貨の分析は降幡順子があたった。また、植物遺存体の分析を（一社）文化財科学研究センター金原美奈子氏に依頼し、その報告を第Ⅴ章2に掲載した。

本書の刊行に先立って、各調査の概要は『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』と『奈良文化財研究所紀要』に報告している。報告書の作成にあたっては、調査部を中心として検討会を開催して意見の調整を行った。調査時点での見解や概要の報告段階での解釈と異なる点もあるが、本報告をもって現時点での正式見解としたい。

本書の執筆分担は次のとおりである。

第Ⅰ章	1A・2・3・4	玉田芳英
	1B	高橋知奈津
第Ⅱ章	1A・2・3	玉田
	1B	高橋（知）
第Ⅲ章	1	黒坂貴裕
	2	番　光・黒坂
第Ⅳ章	1A・B・C	中川あや
	1D	次山　淳
	2A・G	若杉智宏
	2B・C・D・Eⅱ・F	小田裕樹
	2Eⅰ・ⅲ	高橋　透・尾野善裕
	2H	山本　崇
	3A・B・C・D・4・5	豊島直博・木村理恵・石橋茂登
	3E	番
	6	市　大樹
第Ⅴ章	1	山﨑　健
	2	金原美奈子
	3	藤井裕之
	4	降幡順子
第Ⅵ章	1	黒坂
	2A	若杉
	2B・C	小田
	3	中川
	4	市
	5・6	玉田
補　論		高橋（知）
英文要旨		石村　智（企画調整部）
中文要旨		加藤　遙・加藤真二（企画調整部）
韓文要旨		朴　宣映（元慶北大学校博物館助教）

遺構・遺物の写真撮影と印刷用原稿の作成は井上直夫が行い、栗山雅夫と岡田愛、飯田ゆりあが協力した。X線写真の撮影は降幡が行い、杉田知桂子が補助した。

図面、図版、挿図、表の作成は各執筆者があたり、以下の各氏の協力を得た。

諫早直人、大澤正吾、金　宇大、西山和宏、森川　実、張　祐榮、

稲田登志子、乾　陽子、井上富美子、井上美穂、笠谷香代、須藤聖子、清水妃代子、玉木学恵、長田美知代、成迫智美、牧村幸代、枡田巳容子、増田朋子

藤原京の発掘遺構図の作成には、橿原市教育委員会の多大な協力を得た。記して感謝したい。

奈良国立文化財研究所、奈良文化財研究所の出版物に関しては下記の略称を使用した。機関名についても、以下、奈文研と略称する。

『飛鳥・藤原宮発掘調査報告〇』　→　『藤原報告〇』
『飛鳥・藤原宮発掘調査概報〇〇』　→　『藤原概報〇〇』
『奈良国立文化財研究所年報〇〇』　→　『奈文研年報〇〇』
『奈良文化財研究所紀要〇〇』　→　『奈文研紀要〇〇』
『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報〇〇』　→　『藤原木簡概報〇〇』

遺構図の座標値は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）による。高さは、東京湾平均海面を基準とする海抜高で表す。なお、2002年４月１日からの改正測量法の施行に伴い、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、本調査地での発掘調査は飛鳥藤原第133-７・13次調査を除いて日本測地系によっているので、本文中挿図（Fig.）の平面座標は一部を除いて日本測地系で表示し、巻末の図版（Pl.）のみ（　）内に世界測地系の数値を示すにとどめた。両測地系の差（世界測地系座標値－日本測地系座標値）は、南北方向（Ｘ座標）が＋346.48m、東西方向（Ｙ座標）が－261.58mである。つまり、当該地域における日本測地系から世界測地系への変換は、Ｘ座標に＋346.5mを加え、Ｙ座標からは261.6mを引く必要がある。

発掘調査で検出した遺構は、文化庁編2010『発掘調査のてびき』に準拠し、遺構の種別を示す下記の記号と一連の番号との組み合わせにより表記した。本遺跡の地区割りは第45次調査から第53次調査までが大地区が６AJCと６AJD、第133-７・13次調査は５AJCで、一連番号を付すことにした。

SA（塀）、SB（建物）、SD（溝）、SE（井戸）、SF（道路）、SI（竪穴建物）
SJ（土器埋納遺構）、SK（土坑）、SP（柱穴）、SX（その他）、NR（自然河川）

７世紀と藤原宮期の土器の時期区分は、飛鳥Ⅰ～Ⅴを用いる。現在言われている各時期のおよその年代は、以下の通りである。

飛鳥Ⅰ：推古朝から皇極朝頃
飛鳥Ⅱ：斉明朝頃
飛鳥Ⅲ：天智朝頃
飛鳥Ⅳ：天武朝頃
飛鳥Ⅴ：藤原宮期頃

本書は藤原京域の報告であるため、遺構の時期を示す呼称は「藤原京期」を用いる。ただし、遺物の時期には「藤原宮期」を使用した。

藤原京の条坊呼称については、第Ⅰ章1Bを参照されたい。

本書の編集は調査部長 巽淳一郎・松村恵司・深澤芳樹・杉山 洋の指導のもとに、玉田芳英が行った。

第Ⅱ章　調査概要

1　調査地域

A　位置と環境

i　遺跡の位置

藤原京左京六条三坊は、現在の行政区分では奈良県橿原市木之本町・高殿町にあたる。調査地は藤原宮の東面南門から南東に約250ｍの、香具山西北麓の地である。香具山は大和三山の一つで、古来特別な存在とされてきた。『万葉集』には、舒明天皇や中大兄皇子、あるいは持統天皇の歌をはじめ、香具山を詠んだ歌が15首残されている。

香具山は「天」という尊称が付くように、三山のうち最も神聖視されていた。『伊予国風土記』逸文には、天から山が２つに分かれて落ち、１つが伊予国「天山（あめやま）」となり、１つが大和国「天加具山」になったと記されている。

その信仰を表すように、周辺には多くの神社が所在する。北麓にある天香山神社は、正式名称を天香山坐櫛真智命神社という。卜占を司る神、櫛真智命神[1]が祭神である。十市郡の式内社で、天平２年（730）の大倭国正税帳に神田一町歩をもち、『新抄格勅符抄』によれば、大同元年（806）の太政官牒では、大和国に新封一戸を寄せられたという。本殿の背後には、屏風のような巨石が３個ある。古代の祭祀形態の磐座で、当社の神の依代であったとも言われる。

山頂にあるのが、国常立命（国之常立神）を祭神とする国常立神社である。国常立命は天地開闢の際に出現した神で、『日本書紀』では最初に現れた神とされている。２宇の小さな祠があり、そのうちの１宇には、祈雨、止雨、灌漑の神として信仰される高龗神を祀る。ここを、本来の「天香山坐櫛真智命神社」とする説もある。なお、香具山東麓の伊弉諾神社と伊弉冊神社は、この神社の末社である。

南麓には天岩戸神社があり、式内社の坂門神社ともされる。天照大神の岩戸隠れの伝承地とされる、岩穴や巨石を神体とする。そのために神殿はなく、巨石の前に拝殿のみを配すという、古代の原始的な祭祀形態を残す。

香具山西北麓、調査地のすぐ北には、啼沢女命（泣沢女神）を祭神とする式内社、畝尾都多本神社が所在する。『古事記』上巻には、伊邪那美命が火の神軻遇突智を産んだことにより身罷られたことを、伊邪那岐命が悲しまれた時のこととして「坐香山之畝尾木本、名泣澤女神」と記載がある。ちなみに畝尾とは山の裾のことで、木之本町の地名はこの故事による。また、持統天皇10年（696）に檜隈女王が亡き高市皇子を偲んで詠んだ挽歌、「哭沢の杜に　神酒すゑ祈れども　我が王は　高日知らしぬ」の哭沢の杜は、この地とされる。

畝尾都多本神社のすぐ東には、畝尾坐健土安神社が所在する。この社も式内社で、香具山の

埴土にまつわる健土安比売命（波邇夜須毘売神）を祭神とし、香具山との間には赤埴山という小丘がある。

『日本書紀』神武即位前紀や崇神紀によれば、香具山の埴は神聖視され、倭国の物実（ものしろ）、即ち大和国支配のシンボルとみなす観念があった。天香山の埴土を取って祭器を造り、諸神を祭ったという。土を取った所を名付けて埴安と言った、という地名説話がある。香具山西北麓、畝尾坐健土安神社との間の赤埴山には、埴安伝承地の石碑が建つ。1915年刊行の『奈良県磯城郡誌』は天香山村の赤埴山の項で、「香具山の西北に接続し、全山赤色粘土なれば赤焼土器に適するならん。土人これを赤せん山と称し、香具山の中央西側は白色粘土なるを以て、土人これを白こと称せり」と記している。天香山神社境内に「赤埴聖地」、国見台付近には「白埴聖地」の石標が建っている。また、赤埴山には「埴安伝承地」の碑がある。

香具山の周辺には、多くの池があったという記録がある。西麓にあったとされる埴安池は『万葉集』所収の柿本人麻呂が高市皇子の死に際して作った挽歌や、藤原宮御井歌に「埴安の堤」としてみえる。香具山の東麓の磐余池とともに、現在では失われてしまった。磐余池に関しては、近年の橿原市教育委員会の継続的な調査により池の堤などを確認し、徐々にその姿が明らかになりつつある。

調査地の東には、香具山の西麓に沿って中ノ川が北流する。中ノ川は上流にさかのぼると、大官大寺を経て奥山廃寺の西を通り、飛鳥坐神社の北に至る。飛鳥坐神社のすぐ南方の飛鳥東垣内遺跡[2]では、幅10mにおよび、石積み護岸をもつ7世紀中頃の大溝を検出しており、『日本書紀』に記載がある、斉明天皇が築かせた「廼水工をして渠穿らしむ。香山の西より、石上山に至る。（中略）宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の人の謗りて曰く、狂心の渠」の跡と推定されている。同様の素掘溝は「宮の東の山の石垣」であることが確実な酒船石遺跡のすぐ北の飛鳥池東方遺跡[3]でも確認しており、北に目を転ずれば奥山廃寺西方の中ノ川東岸でも検出している[4]。こうした状況から、かつて田村吉永が推定した[5]ように、中ノ川はその多くが狂心渠を踏襲しているものであると考えられ、今回の調査で大規模な溝が直線的に北流していることが判明したことからも、香具山西麓を経て北に向かうとみてよいであろう。

ii　周辺の遺跡

縄文～古墳時代　調査地付近において人間の活動を示す最も古いものとしては、縄文時代前期の土器が藤原宮東方官衙地区[6]や高所寺池[7]等で出土している。中期～晩期にかけての土器もみられるが、いずれも断片的なもので、大規模な集落の存在をうかがわせるものではない。香具山南方の大官大寺下層からは、中期末～後期前葉と後期末～晩期前葉の土器が多数出土した[8]。あわせて土坑も検出しており、継続的な居住地であったと考えられる。

弥生時代に入ると、西方の飛鳥川右岸に四分遺跡が出現し、中期から後期にかけては拠点的な集落として繁栄した[9]。また、藤原宮東北隅の榊田遺跡では円形周溝墓を検出している[10]。

古墳時代には多数の遺構を確認しており、活発な土地開発と利用が知られる。藤原宮下層では、豪族居館と目される建物群を検出している[11]。また、高所寺池の調査では韓式系土器や陶質土器が出土[12]し、渡来人との関係で注目される。古墳は墳丘を残すものは少ないが、日高山の横穴墓群をはじめ、朱雀大路や藤原宮の造営で破壊された古墳を多数検出している。また、調査

地のすぐ東方には、形象埴輪を出土した香具山北麓遺跡が所在する。

7世紀前半～天武朝　調査地周辺はいわゆる狭義の飛鳥地域からは外れるが、現在の山田道より北、香具山の周辺にも多くの7世紀の遺跡があり、また高市皇子の「香具山宮」からも、当地は飛鳥中枢部での様相と関連させて考えるべきであろう。調査地西方では飛鳥Ⅲの土器を出土する井戸を検出[13]し、7世紀中頃の時期にある程度の土地利用があったことを推測させるが、小規模な調査であったこともあり、具体的な様相は不明である。

香具山の南方、橿原市南浦町から明日香村小山・奥山にかけて展開する小規模な盆地には、多くの遺跡が埋もれている。大官大寺北方遺跡では7世紀中頃の大規模な整地と石組暗渠を検出した[14]。整地の範囲は東西400m、南北300m以上の範囲におよぶことが判明しており、宮殿あるいはそれに類する遺跡の存在が推定されている。盆地東端の上の井手遺跡でも、延長73m以上におよぶ大規模な石組暗渠と、それに伴う厚さ1mほどの整地を検出した[15]。石組暗渠は後述する小山廃寺の下層でも検出しており、これらは飛鳥地域の開発の進行を示すものとして注目されている。

香具山の東南麓に位置する興善寺跡の調査では、7世紀後半に位置づけられる7間×4間の大型四面廂付掘立柱建物を検出[16]し、香具山宮との関連が考えられた。また、明日香村奥山の奥山・リウゲ遺跡では、天武朝と考えられる大規模な掘立柱建物を検出[17]し、貴族邸か皇子宮である可能性が指摘されている。

この地域の西端近く、飛鳥川の右岸では、藤原京の完成に先立つ時期に大規模な施設を造営しており、それは藤原京の時期にも存続している。雷丘北方遺跡[18]では、正殿と脇殿等を備えた大規模な建物群や区画塀を検出し、官衙か貴族の邸宅と推定される。これは京の計画がある程度進行した時期に造られたとみられ、藤原京期にも左京十一条三坊の西北坪・西南坪の二町占地の施設として存続する。雷丘東方遺跡（左京十一・十二条三坊）では7世紀後半の長大な南北棟建物を2棟検出[19]し、天武朝から藤原京期にかけて存続したとされている。また、石神遺跡でも天武朝から藤原京期にかけての一連の遺構を検出している。

藤原京期　調査地周辺では、藤原京の調査で注目される成果が得られている。左京一・二条四坊の調査では東四坊大路東側溝から「穂積親王宮」と記した木簡が出土[20]し、天武天皇の第五皇子、穂積親王の邸宅がその近辺にあることが推測された。調査地北方の左京四条三坊東南坪・西南坪では、少なくとも二町以上にわたる宅地を確認した。また藤原宮南面の左京七条一坊では四町占地の可能性が高い施設を確認し、多量に出土した木簡から当初は中務省関係の施設の可能性が考えられ、現在では衛門府であるという見解が出されている[21]。朱雀大路をはさんだ右京七条一坊では、西南坪で一町占地の宅地を確認した。一方、藤原宮に接する西北坪では一転して遺構密度が低く、坪内を分割して利用している状況もうかがわれ、六条大路との間を画する掘立柱塀も検出していない。この様に藤原京の調査では興味深い成果が上がっているが、それについては第Ⅵ章5で改めて論じることとしたい。

寺　院　調査地の周辺では7世紀代の瓦が出土することが古くから知られており、木之本廃寺と称されていた。この木之本廃寺は、舒明天皇発願の百済大寺に比定されることがあったが、吉備池廃寺の調査で彼の地が百済大寺である可能性が強くなると、百済大寺を移建した高市大寺である可能性が考えられた[22]。しかし、明確な寺院関連の遺構はまだ見つかっていない。

調査地の西南約700ｍには、外縁に雷文をもつ軒丸瓦が特徴的な小山廃寺（紀寺跡）が所在する。寺域は藤原京の条坊では左京八条二坊の四町を占め、近年の研究により、寺の中軸線と条坊が整合性をもつことが明らかとなり、その創建は京の造営開始以後となることが知られる。この寺については、紀氏の氏寺とする説や天武朝の大官大寺（高市大寺）とする説があるが、決着はみていない。

香具山の南麓には現在も日向寺があり、その周辺が日向寺跡である。創建年代は不明だが、聖徳太子の建立とする記録があり、蘇我氏同族の箭口氏の氏寺とする説もある。明治初年まで心礎と考えられる巨大な石が残っていた記録があるが、発掘調査は進んでおらず、詳細は不明である。また、調査地の北東約800ｍには膳夫寺跡がある。礎石が一部残り、瓦も出土するものの、伽藍配置などは未確定である。

奈良時代　平城京遷都後には左大臣正二位石上朝臣麻呂が留守官となり、藤原旧京内に残された施設の管理にあたった。藤原宮では、大極殿をはじめ大垣にいたるまで、主要な殿舎や施設の部材、瓦、礎石等は平城宮に持ち去ったと考えられる。その結果、宮域は広大な空閑地となったのであろう。一方、宮外周の外濠はその後も基幹排水路として機能しており、10～13世紀に最終的に埋没するようである。藤原宮西北隅の調査では、奈良時代の井戸を検出し、外濠からは多量の奈良時代前半の土器が出土した[23]。

藤原宮や京は、平城京遷都後ほどなくして耕地化されたと考えられる。全域に条里が施工され、遺存地割りからは条坊はおろか、藤原宮の痕跡も読み取ることができない。わずかに大極殿の土壇が残るのみである。発掘調査では、耕地に伴う耕作溝が縦横に走る状況を常に見るところである。藤原宮大極殿院南門の調査では、一部の耕作溝よりも新しい奈良時代の掘立柱建物を検出するとともに、一帯を整地している状況を確認した[24]。建物群は、南門基壇上に桁行6間の東西棟建物を建て、その北方に柱筋を揃えて同規模の東西棟がある。その間の東西には桁行3間、梁行2間の南北棟建物を配するという、計画性の高い配置をとる。柱穴や整地土からは平城宮土器Ⅲに比定される土器が出土し、奈良時代中頃に新たな造作があったことが知られる。また、大極殿院の調査でも同時期の可能性が高い掘立柱建物や、土器埋納坑を検出した[25]。これは蓋をかぶせた須恵器杯Ｂを埋納したもので、内部には和同開珎5枚を納めていた。その他、宮内各所での調査で同様の時期の遺構や遺物を確認しており、奈良時代中頃の土地利用がかなり広範囲にわたる可能性があることが注意される。

平安時代以降　先に述べた藤原宮西北隅の調査では平安時代の井戸も検出しており、木簡が出土した。これは弘仁元年（810）10月から翌2月にかけての荘園の出納簿で、周辺がこの時期には荘園化していたことを示すものである。また、朝堂院地区の一連の調査では、朝堂や回廊の基壇がしばらくは高まりとして残っていた状況がみてとれ、9～10世紀にはそれを利用して建物を建てていた。その周囲には、11～13世紀頃の掘立柱建物も散見され、継続した土地利用がうかがわれる。これは藤原宮内に限ったことではなく、周辺も同様の状況であった。

中世においては、高殿町や別所町をはじめ、調査地周辺で方形に巡る深い溝に囲まれた「方形区画」を検出している。これらは13～14世紀および14世紀後半～15世紀の時期に区分でき、後者の段階は方形区画が現在の集落へと再編される時期であるとされる[26]。なお、調査地の西南に隣接する地は木之本環濠とされているが、実態はわかっていない。

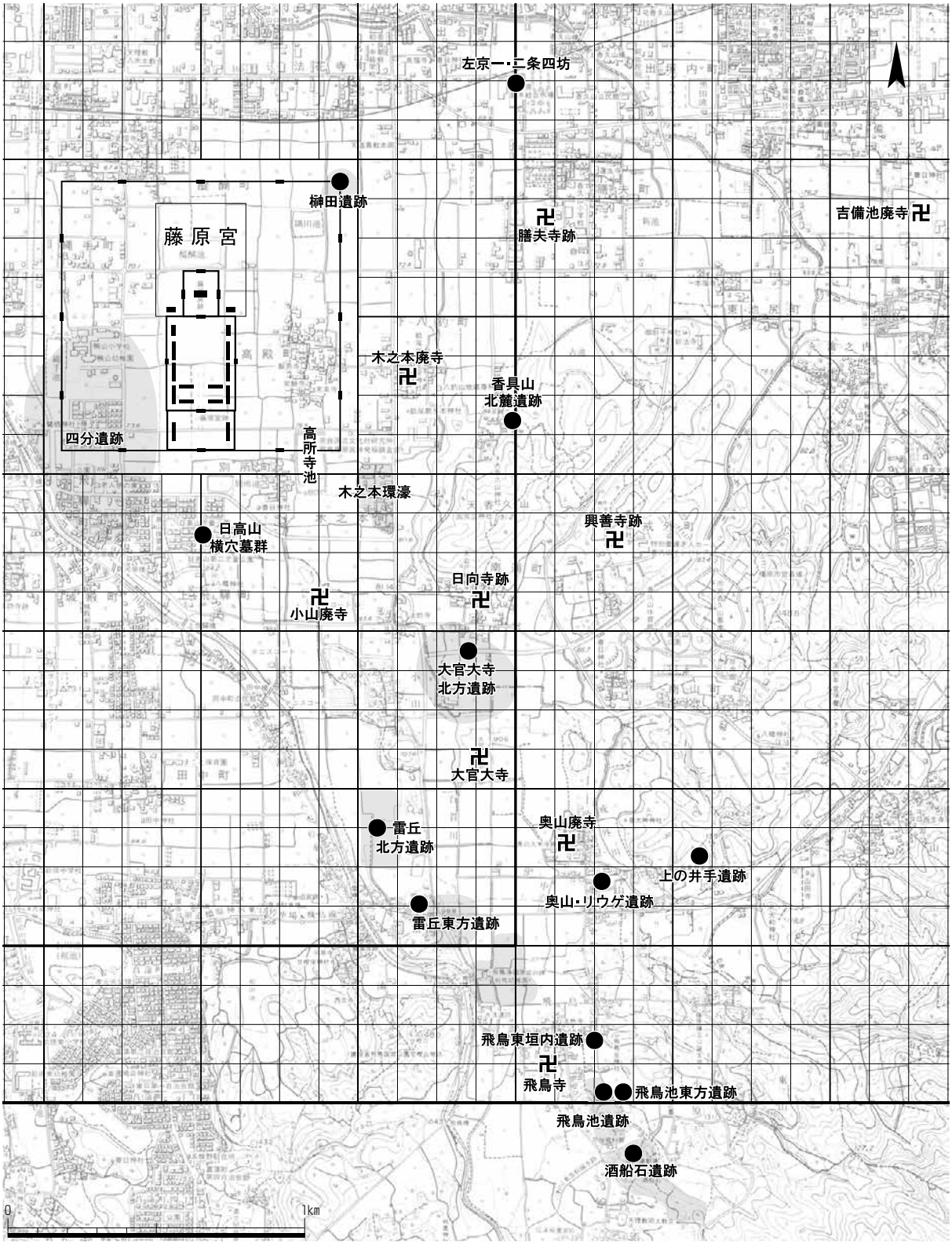


Fig. 3　周辺の遺跡　1:20000

iii　左京六条三坊における調査

本調査区の位置する左京六条三坊では、今回報告する以外にも小規模な調査を数回行っている。それによって坊内の様相をより明らかにすることができるため、ここではそれらを概観することとする。

第21-2次調査　本調査区の西を南北に通る市道165号～小山線の拡幅に伴い、道路西側の西北坪・西南坪東辺を、延長約590ｍにわたり調査した。調査区の幅は狭小であり、遺構は主として断面観察により検出した。そのうち六条三坊に関わる箇所では、条坊道路では五条大路北側溝、六条条間路南側溝、六条大路両側溝を検出したとみられる。その他、六条条間路の北で幅約４ｍの東西大溝を検出しており、これは本調査区の成果により、東西大溝SD4130と中世の環濠であることが判明する。1977年２月～1978年１月（奈文研1978『藤原概報８』）。

第23-2次調査　個人住宅の新築に伴い、西北坪と西南坪にかけて逆Ｌ字形の調査区を設定し、約200㎡を調査した。予想された位置には六条条間路を確認できず、その場所には南北塀を検出し、条坊のあり方に関して問題を投げかけた。その他、藤原京期の小規模な南北建物１棟と、飛鳥Ⅲの土器を出土する井戸を検出した。1978年７月10～24日（奈文研1979『藤原概報９』）。

第37-7次調査　畝尾都多本神社の西方、西北坪に東西14ｍ、南北３ｍの調査区を設定して調査した。藤原京期の遺構は確認できなかったが、型押し忍冬唐草文軒平瓦が出土し、藤原京造営以前の寺院の存在が指摘された。1983年９月13～17日（奈文研1984『藤原概報14』）。

第45-3次調査　個人住宅建設に伴い、西北坪の東北部で五条大路推定地を調査した。調査区が東西２ｍ、南北６ｍと狭小であったこともあり、五条大路に関わる遺構は検出できなかった。1985年７月23～26日（奈文研1986『藤原概報16』）。

第54-1次調査　作業場新設に伴い、西北坪で本調査区と市道をはさんで西側の場所を、東西３ｍ、南北12.8ｍの調査区を設定して調査した。本調査区で検出した東西大溝SD4130の続きを検出したが、南岸が推定位置より約10ｍ北へずれており、溝が未調査区との間20ｍの部分で曲折することが判明した。SD4130からは、奈良時代の堆積層から「尾張国海部郡魚鮨三斗六升」と記した木簡（Fig. 4）が出土[27]したほか、多量の土器や軒瓦が出土している。このうち軒瓦は型押し忍冬唐草文軒平瓦１B型式を既に報告[28]しており、そのほかに山田寺式重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦２型式１点と軒平瓦１B型式が２点ある。1987年４月８～10日（奈文研1988『藤原概報18』）。

Fig. 4
第54-1次調査出土木簡

第60-4次調査　市道建設に伴い、本調査区の東北方、東北坪の東辺を調査した。東三坊大路西側溝推定地に、東西２ｍ、南北18ｍの北で東にやや偏する調査区を設定したが、地山が北に向けて下がっていき、沼状の落ち込みとなる状況であり、側溝を確認することはできなかった。1989年５月10日（奈文研1990『藤原概報20』）。

第66-10次調査　個人住宅建設に伴い、本調査区の西北方、西北坪の東北部を調査した。調査区の大きさは東西7.5ｍ、南北10ｍ。藤原京期かとみられる土坑や小穴を検出したのみで、顕著な遺構は確認できなかった。1991年11月11～14日（奈文研1992『藤原概報22』）。

第69-3次調査　個人住宅建設に伴い、本調査区の西、西南坪の北辺で、後述する藤原京期の正殿SB5000の西約20mの箇所を調査した。調査区の大きさは東西3m、南北4m。藤原京期の顕著な遺構は検出できなかった。1992年5月19・20日（奈文研1993『藤原概報23』）。

第69-14次調査　個人住宅建設に伴い、第69-3次調査区の西約20m、西南坪の北辺を調査した。調査区の大きさは東西7m、南北5m。藤原京期の顕著な遺構は検出できなかったが、出土した瓦が本調査区出土のものと胎土、焼成、製作技法が一致することが注意される。1993年2月25日～3月2日（奈文研1994『藤原概報24』）。

第81-11次調査　個人住宅建設に伴い、東北坪の北東部を調査した。調査区の大きさは東西3m、南北9m。東北方に向けてゆるやかに下がる沼状の落ち込みを検出した。1996年10月14～17日（奈文研1997『奈文研年報1997-Ⅱ』）。

第81-15次調査　個人住宅建設に伴い、西北坪の西南部を調査した。調査区の大きさは東西5m、南北3m。藤原京期の小柱穴2基を検出したが、建物としては把握できていない。1997年1月31日～2月3日（奈文研1997『奈文研年報1997-Ⅱ』）。

この様に、左京六条三坊では他にも小規模な調査を重ねてきているが、坊内全体の遺構配置を復元できるような知見は得られていない。そのなかで、西北坪と西南坪間で推定位置に六条条間路が検出できなかったこと、かつその位置に塀が存在することが明らかになっていることは、坊全体の占地の問題を検討する資料ともなり、貴重な成果であると言えよう。

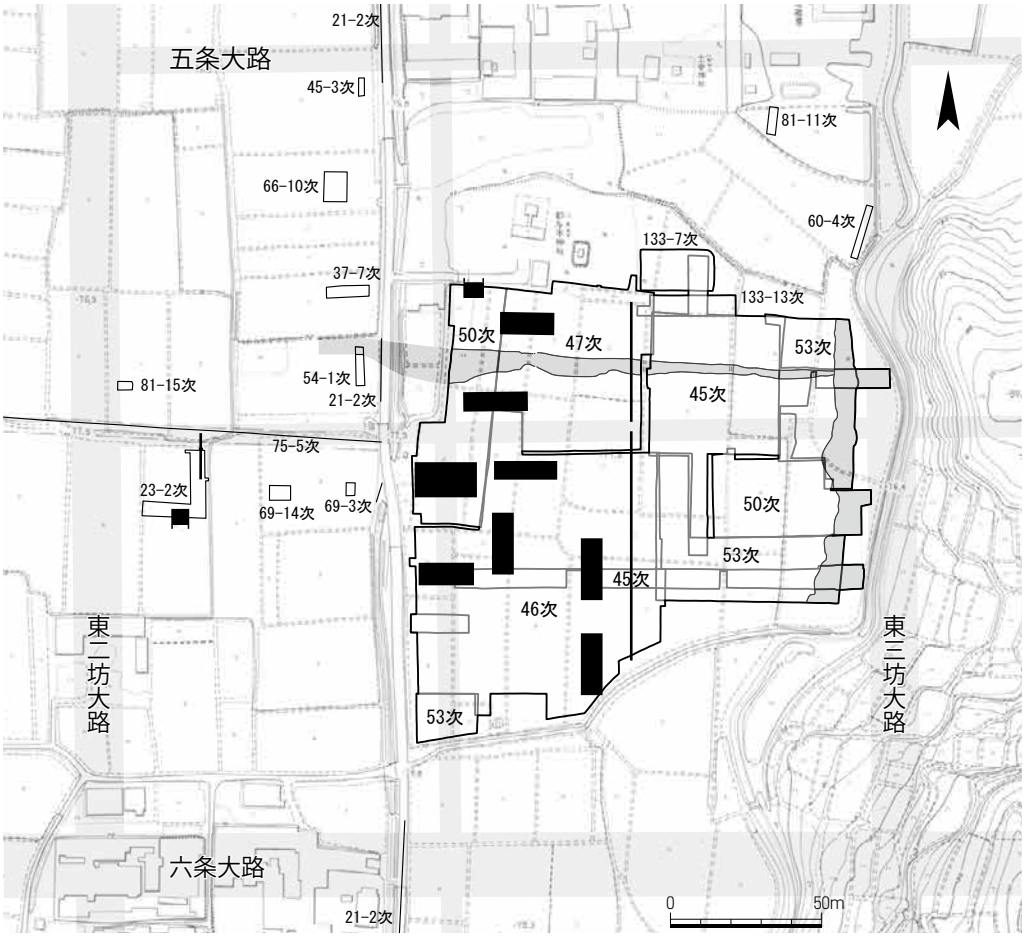


Fig. 5　左京六条三坊調査位置図　1：2500

B　地区割りと測量

測地系　奈文研では、2002年4月1日の改正測量法の施行を受け、2003年度から当研究所の発掘調査は日本測地系から世界測地系に移行した。本書で報告する調査のうち、第45・46・47・50・53次調査（以下、第45次～第53次調査とする。）は日本測地系、第133-7・13次調査は世界測地系に基づく。日本測地系から世界測地系への改算は、飛鳥藤原地域の座標変位量である、X座標＋346.5m、Y座標－261.6mを日本測地系の値にそれぞれ加えることで可能である[29]。本書では本文中挿図（Fig.）は一部を除いて日本測地系で表示し、巻末の図版（Pl.）のみ（　）内に世界測地系の数値を示した。

基準点測量　調査で使用した基準点は、第45次～第53次調査までと、第133-7・13次調査とで異なっている（Tab. 1）。

第45次～第53次調査までは、第45次調査に先立って調査区西の道路に新設した、基準点No. 3およびNo. 4から、開放トラバースによって各調査区際に基準点を移して使用した。No. 3・No. 4は、1977年設置の基準点No. 7（別所池西北隅）・No. 8（高所寺池西北隅）を与点とする閉合トラバースにより設置した点であるが、第53次調査終了後の1987年6月に、No. 7・No. 8の再測を行った結果、1977年設置時の値と大きな誤差が生じていることが判明した。そこでNo. 7・No. 8の再測値をもとにNo. 3・No. 4を改算した結果、ともにX座標＋0.41m、Y座標－0.01mの移動量が認められた（改算後の値はNo. 141・No. 142）。その移動量にしたがい実測図を平行移動させた結果、第133-7・13次調査の成果にも整合した。よって本書掲載の第45次～第53次調査に関わる図面は、以上の手続きで補正を行ったものである。

第133-7・13次調査では、1997年に調査区西の道路に設けた三級基準点No. 162およびNo. 163の座標値を、世界測地系へと改算したうえで使用した。第133-7次調査では、これら2点を与点に、開放トラバースにて調査区際に基準点を移して使用し、第133-13次調査ではGPS・RTK法を用いて測量を行った。

標高は、第45次～第53次調査では、藤原宮跡に1977年に設置された基準点・水準点No. 30からの直接水準測量によるが、本報告では1997年に行ったNo. 30の再測結果に基づき、実測時の標高値に－0.15m加え修正を行った。修正後の値は、1997年に設置した三級基準点・水準点No. 162からの直接水準測量による、第133-7・13次調査の成果と整合する。

地区割り　次に、調査時の地区割りについて説明する。奈文研では、1993年度末までは、条里制の遺存畦畔を基準とする地区割り（以下、旧地区割りと呼ぶ。）によって調査を行ってきた。第45次～第53次調査は旧地区割りによる。旧地区割りでは、約125m四方の条里畦畔の区画（1坪）を基本単位とし、南北3坪、東西6坪からなる計18坪分（南北約375m、東西約630m）を大地区として設定する。大地区名は、時代を示す数字1文字、遺跡の種別をあらわすアルファベット1文字、遺跡名/位置をあらわすアルファベット2文字の計4文字で表記する。この大地区を東西方向に3分割、南北方向に6～8分割した区画が中地区である。中地区には東北隅から順にアルファベットを付す。そして中地区をさらに3m間隔で分割した区画を小地区とする。小地区名は中地区のうち東南隅となる区画を起点のA01とし、北へアルファベットを、西へ数字を順に付す。以上を原則としつつ、実際には、調査ごとに調査区の位置や形状に合わせて中地区を拡

大して適用するなど、柔軟な運用を行ってきた。そのため、特に調査区境界では、隣接する地区名が必ずしも一致せず注意を要する。

1994年度からは、上記の旧地区割りを廃止し、平面直角座標系（日本測地系）第Ⅵ系（原点：北緯36° 東経136°）に基づく新地区割りに移行した[30]。地区の規模や配列は概ね旧来のものを踏襲しつつ、新地区割りでは、平面直角座標系によって地区境界を定め、規格的なものとした。大地区は東西672m南北324m、中地区は大地区を18に分割した区画で東西222mまたは228m、南北54mである。小地区は旧来の規模と同じく3m四方とする一方、東南隅の小地区名称をA10に改めた。2002年の世界測地系への移行の際には、両座標系に基づく方眼にずれが生じ、日本測地系に基づく小地区の東南隅の点から南へ1.5m、東へ0.6m移動した別の点に、世界測地系に基づく同名の小地区東南隅が設定されることとなった。第133-7・13次調査は、世界測地系移行後の新地区割りによる調査である。以上、本報告で対象とする調査区と旧・新地区割りの関係を、Fig. 6に示す。大地区は、Tab. 1に併せて記載した。

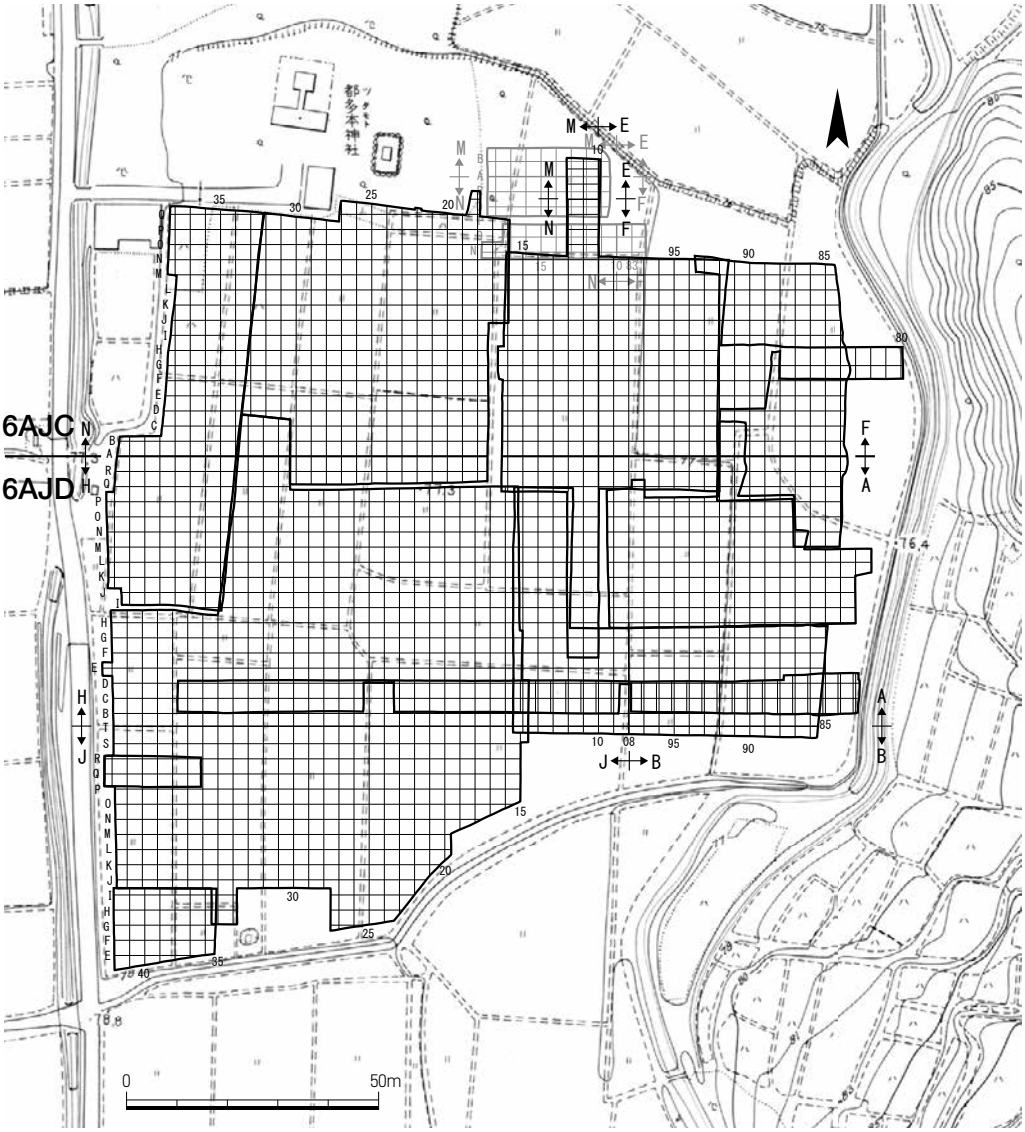


Fig. 6　調査地と地区割り　1:1500（網掛け線部分は新地区割りによる。）

Tab. 1　各調査の地区と基準点

調査次数	調査年月	大・中地区	測地系	基準点		
45次	1985. 4- 9	6AJC-F・M・N　6AJD-A・H・J	日本測地系			
46次	1985. 8-1986. 1	6AJD-H・J		No. 3	X-167,052.74	Y-16,766.92
47次	1985.11-1986. 6	6AJC-N　6AJD-H		No. 4	X-166,950.24	Y-16,768.70
50次	1986. 7-12	6AJC-N　6AJD-A・H		No. 141	X-167,052.33	Y-16,766.93
53次	1987. 2- 5	6AJC-F　6AJD-A・B・H・J		No. 142	X-166,949.83	Y-16,768.71
133-7次	2004. 9-10	5AJC-M・N	世界測地系	No. 162	X-166,600.999	Y-17,029.801
133-13次	2005. 3- 4	5AJC-F・N		No. 163	X-166,377.713	Y-17,042.813

1） 神名は日本書紀により、古事記の神名は（　）内に記した。
2） 明日香村教育委員会2000「1998-24次 飛鳥東垣内遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報―平成10年度―』。
3） 奈文研1998「飛鳥池東方遺跡の調査 第86次」『奈文研年報1998-Ⅱ』。
4） 奈文研1977「奥山久米寺西方の調査（狂心渠推定地）」『藤原概報7』。明日香村教育委員会1991「奥山久米寺近接地の調査」『明日香村遺跡調査概報―平成2年度―』。
5） 田村吉永1965『飛鳥京藤原京考証』綜芸社。
6） 青木敬2011「東方官衙南地区の調査 第162-1次」『奈文研紀要2011』。
7） 奈文研2006『高所寺池発掘調査報告』。
8） 奈文研1978「大官大寺下層遺跡の縄文式土器」『藤原概報8』。加藤雅士2009「大官大寺の縄文土器（1）」『奈文研紀要2009』。石田由紀子2010「大官大寺の縄文土器（2）」『奈文研紀要2010』。
9） 奈文研1980『藤原報告Ⅲ』（奈文研学報第37冊）。
10） 奈良県教育委員会『藤原宮 国道165号線バイパスに伴う宮域調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊。
11） 奈文研1985「藤原宮東方官衙地域の調査（第38・41・44次）」『藤原概報15』。
12） 奈文研2006『高所寺池発掘調査報告』。
13） 奈文研1979「藤原宮第23-2次の調査」『藤原概報9』。小田裕樹「食器構成からみた「律令的土器様式」の成立」『文化財論叢Ⅳ』奈文研。
14） 奈文研1990「左京九条四坊の調査（第58-20次）」『藤原概報20』。
15） 奈文研1973「飛鳥資料館建設地の調査」『藤原概報3』。
16） 橿原市千塚資料館1991『平成2年度埋蔵文化財発掘調査速報』。
17） 明日香村教育委員会1990「奥山・リウゲ遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報―平成元年度―』。
18） 奈文研1994『藤原概報24』など。
19） 奈文研1994『藤原概報24』。
20） 露口真広2005「藤原京左京一・二条四坊」『大和を掘る23 2004年度発掘調査速報展』奈良県立橿原考古学研究所。
21） 奈文研2009『飛鳥藤原京木簡二』（奈文研史料第82冊）。市大樹2010『飛鳥藤原木簡の研究』塙書房。
22） 花谷浩2000「京内廿四寺について」『研究論集XI』（奈文研学報第60冊）に簡潔にまとめてある。
23） 奈文研1984「藤原宮西北隅地域の調査（第36次）」『藤原概報14』。
24） 高田貫太ほか2008「大極殿院南門の調査第148次」『奈文研紀要2008』。
25） 森川実ほか2015「藤原宮大極殿院の調査第182次」『奈文研紀要2015』。
26） 安田龍太郎2005「藤原宮周辺の方形区画」『飛鳥文化財論攷―納谷守幸氏追悼論文集―』納谷守幸氏追悼論文集刊行会。
27） 奈文研2009『飛鳥藤原京木簡二』（奈文研史料第82冊）。
28） 奈文研2003『吉備池廃寺発掘調査報告』。
29） 内田和伸・小澤毅・金井健2005「測量法改正（世界測地系導入）に伴う測量業務の対応」『奈文研紀要2005』。
30） 奈文研1994「飛鳥・藤原地域における地区設定基準の改定」『藤原概報24』。

2　調査の概要

藤原京左京六条三坊の地の約20,000㎡を対象として、1985年４月から1987年５月まで飛鳥藤原宮跡発掘調査部庁舎建設に伴う事前の発掘調査を実施した。これに加え、収蔵庫増築に伴う調査を2004年度に２回行った。調査面積は、対象地ほぼ全域の約16,970㎡となる。検出した遺構は、古墳時代から中世までおよぶ。主なものとしては、条坊道路２条、掘立柱建物83棟[1]、竪穴建物８棟、掘立柱塀45条、井戸38基、溝37条、土器埋納坑４基などであり、他に多数の土坑も検出している。遺物としては、東西大溝SD4130を中心に、木簡、瓦塼類、土器、土製品、木製品、金属製品、石製品、鋳造関連遺物等が出土した。本節では、各次数ごとに調査の概要を述べる。調査の進行状況や遺構の概略については、次節の調査日誌および各次数の遺構略図を参照されたい。

A　第45次調査

敷地全域にわたる試掘調査で、遺構の有無とその残存状況の確認を目的とした。調査地は６AJC-F・M・N区から６AJD-A・H・Ｊ区にわたる。幅６ｍのトレンチを東西に３本（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区）、南北に１本（Ⅲ区）設定した。Ⅰ区が敷地北半部の６AJC-F区に長さ80ｍ、Ⅱ区は南半部の６AJD-A・H区にわたる延長130ｍである。６AJC-F区から６AJD-A区にかけては、Ⅰ区と直交する形で長さ100ｍのⅢ区を南北に設定した。西南部の６AJD-Ｊ区には、東三坊坊間路の確認を目的として、後に長さ15ｍのⅣ区を設定した。また、Ⅰ・Ⅲ区の交差部を中心に南北18ｍ、東西18ｍの範囲で拡張し、中央区とした。ここではⅠ・Ⅲ区と中央区の概要を述べ、東三坊坊間路等を検出したⅡ・Ⅳ区の遺構については、第46次調査にゆずることとする。

検出した遺構は六条条間路SF4750とその両側溝、藤原京期から奈良時代の東西大溝SD4130の他、掘立柱建物、掘立柱塀、南北大溝SD4143、素掘溝などである。調査地は東北坪と東南坪の東半部で、溝を多数検出した他は掘立柱建物等の遺構密度は薄く、藤原京の明確な宅地割りの状況は認められないとされた。この時点では東北坪西南部に位置する藤原京造営期の区画塀SA4170・4171は藤原京期とみており、坪西半部では違った土地利用を推定している。SD4130は藤原京期から奈良時代を中心とし、中世に埋没する。東三坊大路推定位置にはSD4143が流れることを確認し、大路が存在していないことを指摘した。また、六条条間路に関しては、両側溝は検出していたものの、推定位置よりも北にずれるために条間路としての確証はつかめておらず、側溝も中世の溝かとされた。

B　第46次調査

第45次調査Ⅱ・Ⅳ区で東三坊坊間路と藤原京期の遺構を検出したため、東南坪西北部の様相を明らかにすることを目的として実施した。調査地は６AJD-H・Ｊ区である。古墳時代から７世紀、藤原京期、奈良時代、平安～鎌倉時代にかけての多数の遺構を検出し、当地の土地利用の様相が判明した。

東三坊坊間路は両側溝を検出し、規模は側溝心心で7.0～7.5ｍとなる。藤原京期を通じて存

続するとされた。側溝の脇にはそれぞれ東南坪、西南坪の周囲を画する塀がめぐるが、北側は削平が著しく、残存しない。坊間路上には藤原京期の東西棟建物SB4340を検出したが、この時点では側溝との重複関係から奈良時代の遺構と認識している。

他の藤原京期の遺構は重複関係から2時期に分かれ、A期は掘立柱建物2棟、掘立柱塀5条、素掘溝3条、B期には掘立柱建物4棟、掘立柱塀3条があるとされた。特にB期の遺構は東南坪を東西にほぼ二等分する位置に南北塀を設け、規模のほぼ等しい掘立柱建物を計画的に整然と配置する等、官衙との共通性が指摘されている。また、東西棟建物SB4333は条間路の推定位置にあることから、東北坪との一体の土地利用も考えられた。

奈良時代に関しては、主殿SB4350と前殿SB4351の2棟の掘立柱建物を検出し、その西と北を掘立柱塀と素掘溝がめぐる状況が明らかとなり、邸宅風の遺構とみられた。

一方、藤原京造営以前の時期に関しても、多くの知見が得られた。古墳時代では、2群に分かれて分布する5世紀後半の竪穴建物7棟を確認した。これらの竪穴建物からは韓式系土器が出土し、注目されている。また、7世紀代の遺構としては小規模な掘立柱建物10棟、素掘溝3条等がある。この時期の瓦が調査区北半から多数出土し、北方に寺院の存在が推定された。瓦には吉備池廃寺[2]出土瓦との強い関連が示され、「池上」刻印瓦からは斑鳩地方の寺院との関連が推定された。

また、中世の遺構を多数検出した。それらは調査区内の3箇所にまとまりをもって分布しており、その周辺が集落の中心部であると判断できる。

C　第47次調査

東北坪西南部を中心とした地域（6AJC-N区、6AJD-H区）で、第45次調査区と第46次調査区から続く遺構の状況を確認することを目的とした調査である。藤原京期には少なくとも二町以上の占地であったことが確認でき、奈良時代にはこの地が「香山正倉」であった可能性が浮上した。

東西大溝SD4130は西への続きを確認するとともに、その南岸に接して大規模な井戸SE4740を検出した。この大溝や井戸は藤原京期から奈良時代にかけて存続し、中世に埋没したものである。土器をはじめ豊富な遺物が出土し、特に「香山」と記した墨書土器から、大和国正税帳にみえる奈良時代の「香山正倉」との関連がうかがわれた。

六条条間路は両側溝を検出し、やや北に偏しているものの、これが条間路であろうと判断した。第46次調査区で検出した2条の南北塀SA4286・4320は、それぞれ条間路上に門SB4726・4725が開き、SA4730・4729としてさらに北に延びることを確認した。これによって、左京六条三坊は、少なくとも東北坪と東南坪を一体として利用していたことが判明したのである。

また、第45次調査では藤原京期とみていた区画塀は7世紀代のものであることが判明し、南面中央に門が開く方形の区画の存在が明らかとなった。同時期の瓦が多数出土し、第46次調査と同様に瓦を用いた施設が周辺に存在することが予想されたが、遺構としては確認できていない。

調査区西北部では屈曲する中世の大溝を検出し、集落を区画するものであると考えられる。

D　第50次調査

敷地西北部で未調査地として残っていた部分の西区（6AJC-N区、6AJD-H区）と、第45次調査の所見では遺構が希薄であった、東南坪東北部の東区（6AJD-A区）における状況を探るための調査である。東三坊坊間路上に正殿SB5000を検出したことにより、左京六条三坊では藤原京期に四町占地の土地利用があったことが判明するという、画期的な成果が得られた。これらの遺構群は、官衙的な性格をもつとされた。

西区では東三坊坊間路上で、第46次調査で検出したSB4340の北約20mに、桁行7間、梁行4間で南に廂が付く大規模な掘立柱東西棟建物SB5000を検出した。この建物の身舎中心は左京六条三坊の中心と一致することから、藤原京期の建物と判断された。そして、第46次調査で検出した建物群や、奈良時代としたSB4340をも含めて計画的な配置関係がみられ、藤原京期に四町占地の時期があることが明らかとなった。また、六条条間路は南側溝SD4311が東三坊坊間路東側溝と接続することが判明し、推定位置よりは北に偏するものの、条間路である蓋然性が高まった。

東西大溝SD4130からは霊亀3年（717）の紀年がある稲の収納に係わる木簡が出土し、第47次調査で出土した「香山」銘の墨書土器と合わせて、この地が奈良時代には「香山正倉」であった可能性が強いと考えられた。なお、SD4130北の調査区西北隅では3間×3間の小規模な総柱建物を検出した。これは正倉に関わる遺構である可能性が指摘され、正倉本体はさらに西方に展開するか、と考えられた。

遺物では緑釉獣脚硯が注目され、木簡には稲の収納に関わるものや、「左京職」「菜取司」の官衙名を記したものがある。

東区では、第45次調査で一部確認していた方形区画の続きを検出した。これは二重の区画となることが判明したが、東側は削平のために失われている。調査区東端の東三坊大路推定位置には、第45次調査と同様に南北大溝SD4143を検出した。この溝は奈良時代以前まで遡ることが判明し、藤原京の東堀河かと考えられた。

E　第53次調査

一連の最後の調査で、これまでの未調査地の様相を解明することを目的とした。調査地は、当初第45次調査区東方の東北坪南東部（北区：6AJC-F区、6AJD-A区）と、第46次調査区東方の東南坪北東部（中区：6AJD-A・B・H・J区）の2箇所に設定したが、後に第46次調査区南方での、東三坊坊間路の未調査地（南区：6AJD-J区）に調査区を設けたため、計3箇所となった。

北区と中区は遺構密度が希薄で、方形区画の区画塀の延長や中世の小規模な建物が点在するのみである。調査区東端ではSD4143の西肩を検出し、香具山西麓を直線的に北流することが判明し、藤原京の東堀河である可能性が高まったとされた。

南区では東三坊坊間路の両側溝とその東西の掘立柱塀を検出したが、遺存状況は不良で、側溝は南端が削平されている。また、藤原京期の施設の南端を区画する掘立柱塀の検出も期待されたが発見できず、区画はさらに南方まで展開することが判明した。

Tab. 2　発掘調査一覧

調査次数	調　査　地　区		調　査　期　間	調査面積
45次	6AJC-F・M・N	6AJD-A・H・J	1985. 4. 3～1985. 9. 21	3,410㎡
46次	6AJD-H・J		1985. 8. 6～1986. 1. 28	5,965㎡
47次	6AJC-N	6AJD-H	1985. 11. 28～1986. 6. 20	2,500㎡
50次	6AJC-N	6AJD-A・H	1986. 7. 28～1986. 12. 19	2,500㎡
53次	6AJC-F	6AJD-A・B・H・J	1987. 2. 13～1987. 5. 12	3,030㎡
133-7次	5AJC-M・N		2004. 9. 4～2004. 10. 25	343㎡
133-13次	5AJC-F・N		2005. 3. 7～2005. 4. 18	200㎡

F　第133-7・13次調査

新庁舎が完成した後、新収蔵庫建設に伴う事前調査である。調査地は第45次調査区の北側で、第133-7次調査が5AJC-M・N区、第133-13次調査が5AJC-F・N区となる。

第133-7次調査区では藤原京期の遺構は希薄であったが、南から延びる7世紀代の掘立柱塀SA4170を2間分検出し、それより北には延びないことを確認した。

第133-13次調査では第45次調査区から延びる遺構を確認するとともに、新たに藤原京期の井戸1基を検出した。また、礎石の座った据付掘方を1基検出したが、建物としては確認できない。

G　関連調査

新庁舎建設に伴う調査ではないが、本調査地の理解に資する周辺の調査成果について、再度整理しておく。

1977年に調査地西を通る市道拡幅の事前調査として、第21-2次調査を行った。三条大路から六条大路南まで長大な南北トレンチを入れたもので、本調査地に関わるものとしては、六条条間路南側溝を検出した。他にSD4130をはじめ、大規模な溝3条も確認している。

1978年度に六条条間路推定位置から西南坪にかけて行った第23-2次調査では、推定位置に条間路は検出できず、藤原京期の掘立柱南北塀があることを確認した。その他には藤原京期の掘立柱建物1棟と飛鳥Ⅲの土器を出土する井戸1基、藤原京期以前の斜行溝1条等を検出した。

第37-7次調査は、1983年に畝尾都多本神社の向かいの西北坪で行った。7世紀代の斜行溝から型押し忍冬文軒平瓦が出土し、付近に寺院が存在していた可能性が高まった。

1987年4月には、調査地西側の店舗の作業所新設に伴い、第54-1次調査を行った。左京六条三坊西北坪の東南部にあたり、東西大溝SD4130の西延長部となる。SD4130はその南肩を検出したものの、推定位置より北に約10m偏していた。その結果、SD4130は間の未調査地で曲がることが推定された。出土遺物には尾張国の荷札木簡や7世紀中頃の瓦[3]があり、第47次調査での所見と同様、付近に寺院の存在が指摘されている。

1）棟門3基を含む。

2）当時は吉備池廃寺の調査前で、吉備池瓦窯として認識されており、そこで焼成した瓦とみている。

3）一部は奈文研2003『吉備池廃寺発掘調査報告』で紹介している（83頁Fig. 60-20）。

3　調査日誌抄

A　第45次調査　6AJC-F・M・N区、6AJD-A・H・J区
1985年4月3日～9月21日

4.3　基準点測量。

4.17　発掘区を幅6ｍで設定。Ⅰ区東西長80m。Ⅱ区東西長約130m。Ⅲ区南北長約100m。面積は約1,800㎡。耕土上面より磁気探査を実施。

4.22　発掘作業開始。重機にて表土掘削開始。

4.23　重機掘削。

4.24　重機掘削終了。

4.25　調査地整備。

4.26　2回目の磁気探査を実施。

4.30　発掘準備。ベルコンを設置。

5.1　人力による掘り下げ開始。Ⅰ区：暗褐土の下は灰褐色砂質土で、藤原宮期の遺物を含む。Ⅲ区：床土下の暗褐土で中世の小溝を検出。

5.2　Ⅰ区：小型柱穴列あり。穴は浅く、中世のものかと思われる。Ⅲ区：暗褐土掘り下げ。

5.4　Ⅰ区：耕作溝検出。Ⅲ区：暗褐土掘り下げ。

5.7　Ⅰ・Ⅲ区：耕作溝を検出し、掘り下げる。

5.8　Ⅰ区：包含層の掘り下げ開始。小柱穴列SA4121は7間となる。

5.9　Ⅰ区：西端NF14～16地区で、東西柱穴列（SB4761）検出。FG88～90地区で東西大溝（SD4130）検出。土坑とみていたが、幅約3ｍの溝となる。

5.10　Ⅰ区：SD4130掘り下げ。遺物多い。西端部はSB4761周辺の精査。

5.11　Ⅰ区：SD4130掘り下げ。Ⅲ区：遺構検出。

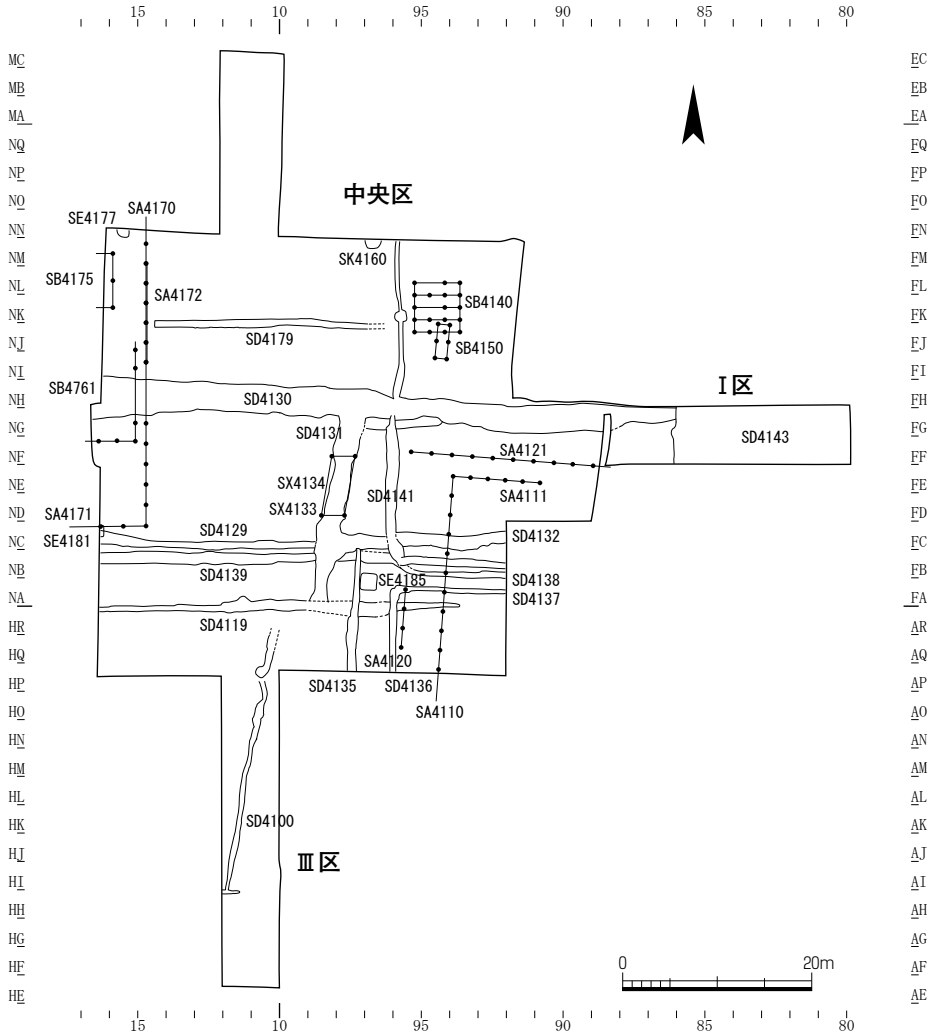


Fig. 7　第45次調査 Ⅰ区・Ⅲ区・中央区　1:800

5.13　Ⅰ区：92地区でSD4130掘り下げ。やや溝幅は狭くなる。Ⅲ区：灰褐色土上面で遺構検出。
5.15　Ⅰ区：SD4130掘り下げ。95地区の上層で8基の石を検出。溝中に投げ込まれたものか。Ⅲ区：HK～N地区の東壁沿いに4基の柱穴列確認。
5.16　Ⅰ区：98ラインから東へ進む。現在の面では遺構検出は難しく、粘質砂層を数㎝下げて灰色粘土の肩を出す。SD4130上層は遺物が少なく、下層は未掘。Ⅲ区：HG～K地区にて耕作溝検出。
5.17　Ⅰ区：97地区で、SD4130に注ぎ込む南北溝（SD4131）を検出。流木がSD4131の壁内にもぐっていることから、さらに古い時期の自然流路があったとみられる。Ⅲ区：南端HF区まで遺構検出終了。清掃後、写真撮影。再び北へ向かって遺構検出。
5.18　Ⅰ区：西半部の写真撮影。87ライン以東の遺構検出開始。Ⅲ区：遺構検出。
5.20　Ⅰ区：86ライン東で、灰褐色の粘質砂面が中世の削平により急速に落ちる模様。SD4130も削られて、以東はなし。Ⅲ区：10地区の斜行溝（SD4100）はさらに北東へ続く模様。遺物は瓦が少量のみ。
5.21　Ⅰ区：耕作溝検出続行。Ⅲ区：HQ・HRラインに東西小柱穴列あり。深さ5㎝前後と浅い。
5.22　Ⅰ区：SD4130掘り下げ。午後に写真撮影。Ⅲ区：NC～F地区には小穴が多い。
5.23　Ⅰ区：瓦器の入った褐色土を掘削し、橙褐色砂面を出す。Ⅲ区：東西柱穴列（SB4761）と南北柱穴列（SA4170）を再度検討して確定する。SB4761は南側に対応する穴がなく、北へ延びる南北棟建物とみられる。東側の柱穴列（SA4170）は建物より新しく、塀とみられる。
5.27　Ⅰ区：東端から灰色粘土を掘り下げる。Ⅲ区：遺構検出。ほぼ北まで行きついて、折り返し清掃を開始。
5.29　Ⅰ区：遺構検出。86ライン付近で、南北大溝（SD4143）の西岸検出。Ⅲ区：清掃。
5.30　Ⅲ区とⅠ区東半を清掃後、写真撮影。Ⅱ区の調査開始。Ⅱ区は東区と西区があり、東区はさらに10ライン上の農道をはさみ、東半（A地区）と西半（H地区）に分かれる。東区から開始し、東半で南北方向の耕作溝検出。
5.31　本日よりⅡ区に専念。西半で耕作溝検出。東半は顕著な遺構なく、東端まで遺構検出終了。
6.1　東区西半は、10～12地区で遺構検出。東半は写真撮影。
6.3　西半は、15～16地区で柱穴検出。南北棟（SB4240）となる。東半は西から遺構検出。
6.4　西半は18ライン西に南北塀（SA4320）を2間分検出。掘方は南北に長く、いずれも抜取穴あり。22地区で南北棟（SB4242）検出。16地区のSB4240と柱筋を揃える。東半は耕作溝検出。
6.5　東区：東端まで行き着く。西区：調査開始。
6.6　東区：西半、東半の両トレンチ写真撮影。東半は東端で厚さ約15㎝の茶褐土の残りを掘りながら、西へ進む。西区：耕作溝検出。
6.7　西区：28～30地区で円形の小穴を多数検出。柱痕跡があり、古い瓦器が埋土に入る。31地区の暗褐土中より、重弧文軒平瓦1点出土。東区：東半の86地区で径2ｍ弱の円形の凹みを検出。井戸（SE4031）か。
6.8　西区：HC31～33地区に10尺間隔で並ぶ柱穴（SB4332）検出。建物の南妻となるようで、いずれも抜取穴がある。掘方は一辺1.5ｍの大型。東区：東端の灰青粘土層を掘り下げる。川の堆積層か。86地区の井戸（SE4031）より瓦器が出土。
6.10　西区：西端から戻り始める。東区：井戸（SE4031）の掘り下げ。12～13世紀の土器や曲物が出土。
6.11　西区：西端の坊間路東側溝かと考えられる溝は明確でなく、西南の水田に新たに調査区を設定し、そこで溝が検出できなければ戻って来て再検討することにする。東区：SE4031の底に曲物を確認する。
6.12　西区の西南に新たにⅣ区を設け、重機掘削開始。東区：SE4031周囲の清掃後、写真撮影。
6.14　Ⅳ区：西から遺構検出を始める。西端42ラインに南北溝（NR4226）検出。新旧2条の溝となるか。41ライン上に、南北塀（SA4283）検出。
6.15　Ⅳ区：39地区で南北溝（SD4302）検出。

Fig. 8　調査風景（第45次）

Fig. 9　SE4031調査風景

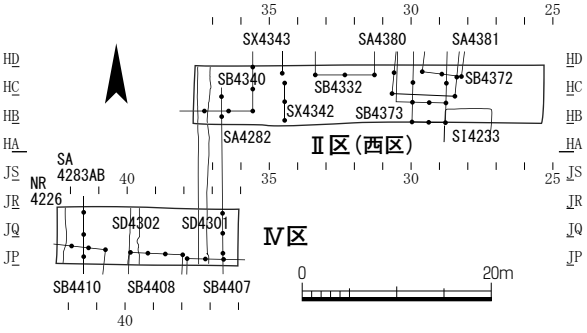


Fig. 10　第45次調査 Ⅱ区（西区）・Ⅳ区　1:800

6.17　Ⅳ区：SD4302掘り下げ。埋土は硬く締まっており、水の流れた痕跡なし。壁は切り立ってしっかりしている。西端の溝との間隔は心心で8ｍで、この間が坊間路とも考えられるが、この溝は推定位置より西にずれる。旧道の畦溝の可能性もあり、東に5ｍ拡張して再確認することとする。本日よりⅠ・Ⅲ区の交点周辺に重機を入れて、東西34ｍ、南北39ｍの範囲で拡張開始。中央区とする。旧Ⅲ区は敷地際まで約20ｍ北へ延ばし、北拡張区を設定。

6.19　Ⅳ区：37地区でSD4302と同様の埋土の溝（SD4301）を検出し、この間が坊間路となる模様。溝幅0.6ｍ。水の流れた痕跡なし。36地区で、南北塀（SA4282）の柱穴を9尺間隔で2間分検出。宅地西限を画する塀とみられる。

6.20　Ⅱ区：Ⅳ区での知見をもとに、西区西端を精査。SD4301の延長部を確認。幅はわずかに広くなっている。溝が埋まった段階で、大型の柱穴（SB4340）を掘っている。SA4282の延長部は、南に1基あるようだが浅く、北には続かない。

6.21　Ⅳ区：写真撮影。中央区：重機掘削終了。西北部にベルコン設置。以後は中央区に専念。

6.24　中央区：既検出の旧Ⅲ区西端から西へ向けて遺構検出。

6.26　14ライン西で南北方向の柱穴列（SA4170）検出。各柱穴間に楕円形の別の柱穴らしきもの（SA4172）があり、輪郭はやや不鮮明。鮮明な方の柱穴列は、南で既に検出済みの塀（SA4170）の北延長とみられる。16ライン東に3基の柱穴列検出。東西大溝（SD4130）の下層も掘り始める。

7.1　Ⅱ区：遣方設定。

7.4　雨天が続いていたが、本日は久しぶりに作業が進行。輪郭を確認しながら柱穴を掘り下げ。15ライン西で南北柱穴列（SB4761）の北延長部の柱穴を探すが、確認できず。東北部はSD4130の肩を検出しながら東へ進む。

7.5　FM96地区の北壁部分で、灰褐土をやや掘り下げた段階で瓦散布面（SK4160）を検出。ほぼ平面に落下した状態のもの。SD4130は、上層埋土のみ掘り進める。

7.6　瓦散布面（SK4160）は、黒褐色土の地山上に貼りついている様である。

7.8　93～95地区の遺構検出。柱穴集中部確認。

7.9　92～94地区遺構検出。Ⅱ区、Ⅳ区：実測。

7.10　柱穴集中部を精査。建物（SB4140・4150）を検出。SD4130の上・中層を掘り下げる。

7.11　東南部の灰褐土を掘り下げる。SD4130は南岸に沿って石が散布。一部を残す。

7.12　東南部99ライン以東の遺構検出。

7.13　96ラインの瓦器が入る南北溝（SD4141）は、Ｃラインの南で東に折れ曲がるらしい。

7.15　94ラインで、やや北で東に振れる柱穴列（SA4110）を10間分検出。北端は東に折れて東西柱穴列（SA4111）となり、2間分を検出。

7.16　92～94地区の遺構検出。SA4111はさらに1間分検出。Ｌ字形の溝（SD4141・4138）は瓦器を含み、中世の溝とみられる。

7.17　92～97地区精査。南北塀（SA4120）検出。

7.18　Ｃラインの東西溝（SD4129）掘り下げ。藤原宮期の土器出土。南北溝（SD4131）との重複関係を精査し、SD4129の方が新しいことを確認。東西溝（SD4132）は、SD4131より西への延長が判然としない。97ラインの南北溝（SD4135）はＣラインの東西溝（SD4132）より古いが、その北への延長部にはない。

7.19　SD4131掘り下げ。Ｑ～Ｃ地区にかけては瓦が多い。SD4132との関係は、当初下層の南北溝があり、その後SD4132を掘削してト字形の流れの時期（上層）があるとみられる。SD4131北半の溝底両側には、護岸状に杭が連なっている。

7.20　12ライン付近で遺構検出。

7.22　ヘリコプターにて発掘状況写真撮影。

7.23　14～16地区の遺構検出。南北塀（SA4170）はNDライン東西塀（SA4171）と接続することを確認。

7.24・25　清掃。

7.26　写真撮影。

7.27　遣方用杭打ち終了後、貫板打ち。北拡張区遺構検出開始。

7.29　遣方設定。北拡張区遺構検出。

7.30　北拡張区遺構検出。Ⅱ区実測開始。

7.31　東西塀SA4111・4121の延長部を確認するため、89～92ライン間の旧Ⅰ区の南に沿う形で、南北6ｍ、東西8ｍ拡張。

8.1　Ⅱ区：実測、標高記入まで終了。Ⅲ区：南半部埋め戻し。Ⅰ区：東半部で地山確認のためにサブトレンチを設定し、掘り下げ開始。

8.2　中央区：拡張区のＥライン上にSA4111の掘方2基検出。その東側の所定位置には掘方は検出できず。Ⅰ区：サブトレンチは礫層に到達。礫層

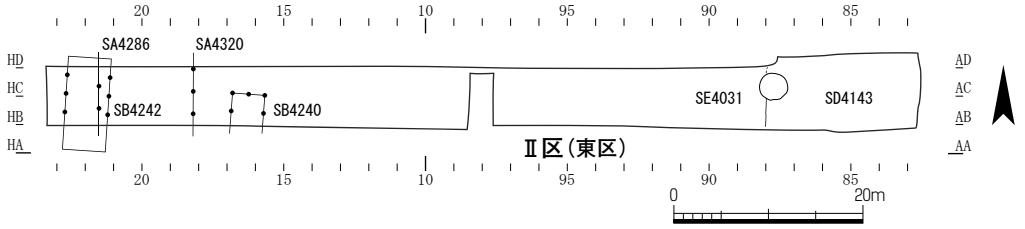


Fig. 11　第45次調査 Ⅱ区（東区） 1:800

直上まで瓦器が出土。礫層中からは弥生土器や瓦片などが出土。著しく磨滅している。

8.3　Ⅰ区：サブトレンチ掘り下げ。堆積層が下に続くようであるが、湧水が激しく、壁も崩れ始めたため、掘り下げを断念。

8.5　Ⅱ区：東端に幅1ｍ、長さ9ｍのサブトレンチを設定。1ｍ掘り下げた所で礫層にあたり、下に砂の堆積が続く。砂層の掘り下げは、壁が崩れてきたために断念。

8.6　北拡張区：平面実測。標高記入。記者発表。

8.7　中央区：東北隅の溝状遺構掘り下げ。南側へ下降する低地の整地層であることを確認。柱穴の断ち割りを始めるが、雨のため中断。Ⅰ区：東半埋め戻し。

8.8　柱穴断ち割りを本格的に開始。

8.9　北拡張区北端の西壁際を掘り下げ。古い溝か土坑があることが判明。南北溝（SD4131）は、護岸（SX4133）内の堆積土を完掘して底を確認。

8.10　瓦散布面（SK4160）精査。瓦は土坑状の窪みに入ったものであることを確認。SD4131は、FDラインで溝の両岸に沿って大小の柱穴らしきものを検出。

8.12　SD4131はFDラインの両岸の柱穴に対応して、FFラインにも2基の柱穴があることを確認。この4基の柱穴は橋状遺構（SX4134）となり、この部分が東西方向の通路となっていたらしい。本日にて調査終了。埋め戻しは次班に引き継ぐ。

8.17　砂入れ。柱穴埋め戻し。

8.22　埋め戻し開始。

9.21　埋め戻し終了。

B　第46次調査　6AJD-H・J区
1985年8月6日～1986年1月28日

8.6　調査区縄張り。面積約4,200㎡。重機で表土掘削開始。

8.7～10　重機掘削。

8.12　ベルコン設置。西壁を整え排水溝を掘る。西から包含層を掘り下げ、遺構検出開始。

8.13　41ラインで塀と思われる柱穴列10基検出（SA4283）。

8.14　北半部の遺構検出。北西隅の水田は一段と低く地下げしており、遺構検出面は深い。遺構は消失しているか。

8.17　盆期間の土曜日のため、第45次調査区砂入れ。柱穴埋め戻しのみ。

8.19　坊間路西側溝（SD4302）を検出。深さ約10㎝と浅い。

8.20　SD4302掘り下げ。南に行くにつれて浅くなるが、北は約30㎝の深さあり。北西隅の水田部分の遺構は、ほとんど削平されている。

8.21　JK38地区で井戸と思われる大土坑検出（SE4462）。

8.22　SE4462を一段掘り下げる。

8.23　坊間路東側溝（SD4301）を一部検出。西側溝よりやや深い。2間×2間の建物（SB4408）検出。側溝より新しく、柱穴埋土より瓦器出土。

8.24　JR・S37地区で東側溝（SD4301）検出。東肩にからんで柱穴（SB4405）が見える。柱穴を残しながら東側溝を掘り下げる。

8.26　東側溝（SD4301）を南から北まで検出。JOライン以北ではきわめて深くなり、逆台形の断面形となる。遺物はきわめて少ない。JS37地区で、側溝埋土上面で検出できる柱穴1基（SX4349）を確認。HB37地区の第45次調査既検出の方形柱穴状遺構（SB4340）は柱痕跡が明確でなく、SD4301より新しい。

8.27　36ラインで南北塀（SA4282）の柱穴12基検出、既検出分と合わせて14間となる。JS36地区で井戸と思われる山土を含む大土坑（SE4463）検出。HG36地区で、HG37地区で検出したものと同様の柱穴を検出（SX4344）。

8.28　SE4463は南寄りに円形の井戸枠抜取穴あり。13世紀の瓦器を含む。SA4282の柱穴はHA地区でその痕跡を確認したが、それ以北では点々とわずかに残るだけで、既に削平されているか。

8.29　JI～K35地区で柱穴3基（SB4291）検出。北妻柱があるようで、南北棟になるか。

8.30　JI・J34地区でSB4291の東側柱4基検出。南妻は調査区外にある。HD35地区の方形土坑（SB4340）の南方で、同形同大の土坑2基を南北に検出。北側のものは中央に東西方向の柱抜取穴風の土坑が重複。南側は輪郭を確認したのみで、性格不明。

8.31　HC・D35地区で検出した土坑群周囲を精査し、計9基の大柱穴（SB4340）と判明。東側溝（SD4301）よりは新しい。東西3間以上、南北3間の建物になると思われる。

9.2　33ラインで浅い南北溝SD4358検出。その東に柱穴5基検出（SA4356）。HD～G33地区でSB4332の大柱穴4基検出。南端の柱穴は東側へ、他は西側へ柱抜取穴が延びる。

9.3　SB4332の柱穴4基を掘り下げる。柱掘方は一辺1.5m程度。柱間は2.7～2.8m。

9.4　33ラインで検出した溝（SD4358）はJSラインで東へ曲がることが判明（SD4357）。南北塀（SA4356）も同じく東へ折れる（SA4355）。南北棟建物（SB4332）東側柱列の南から2基目の柱穴検出。北端で布留式中段階の土器を含む古墳時代の大土坑（SI4236）検出。

9.5　SB4332東側柱の柱穴4基検出。柱は全て東へ抜き取る。JS30地区周辺で、竪穴建物と思われる方形の大土坑（SI4235）検出。埋土中より布留式土器出土。JOラインで柱穴5基（SA4284）が東西に並ぶ。JMラインで、東西に並ぶ柱穴3基（SB4243）検出。

9.6　JP～R29・30地区にかけて、池状の大土坑（SK4390）検出。西岸に沿って点々と玉石が並ぶ。平安時代の黒色土器出土。古墳時代の竪穴建物（SI4235）は、東側に別の竪穴建物（SI4234）が重複している。

9.7　HA27・28地区で大土坑（SI4233）の南半を一部検出。古墳時代の竪穴建物と思われる。

9.9　JJ・K27地区で柱穴3基検出。東西棟建物の西妻か。JN～P27地区で柱穴3基（SB4350）検出。東西塀（SA4284）と重複し、塀より新しい。

9.10　JJ・K26地区で柱穴2基を検出し、昨日検出した3基と合わせて東西棟建物（SB4351）になる。別の柱穴列（SB4290）と重複し、SB4351が新しい。JN・O26地区の柱穴2基は東西棟建物（SB4350）になる。SB4350とSB4351は西の柱筋を揃えており、間隔は8.2m（27尺）である。HE・

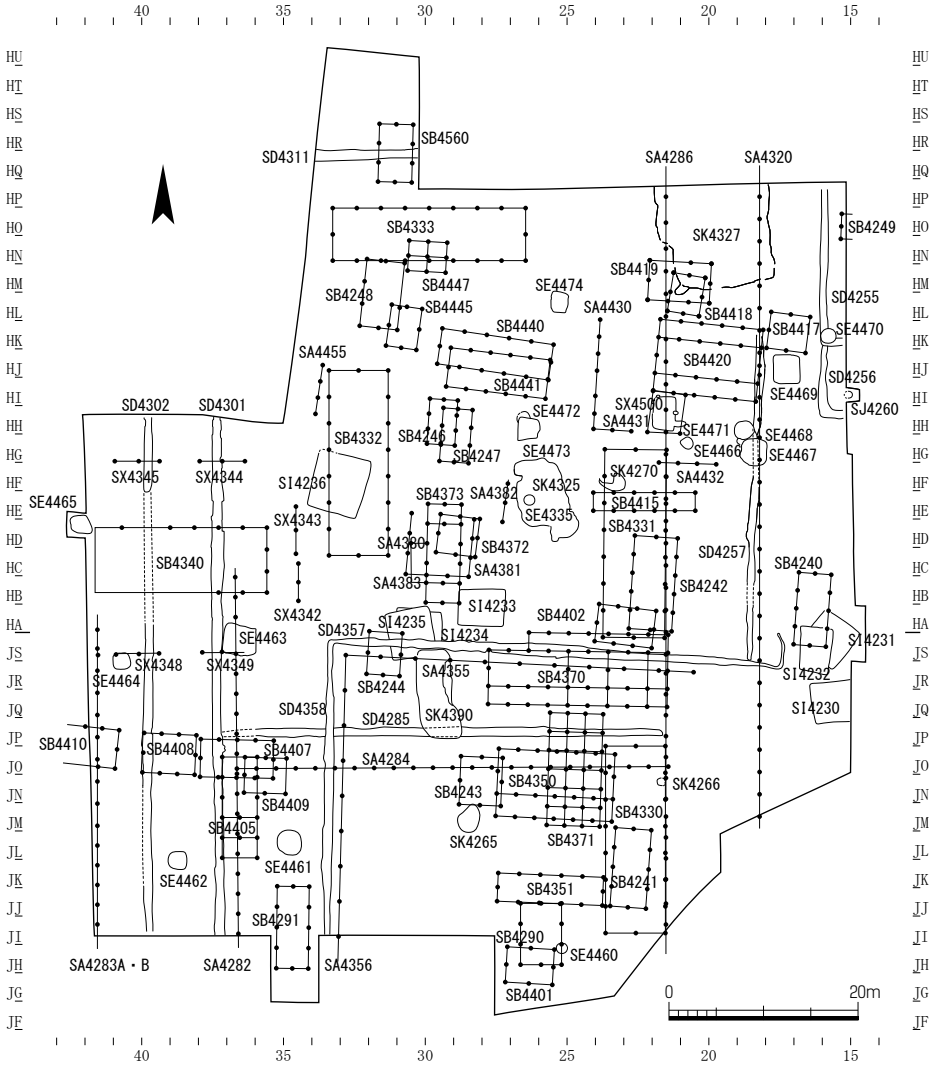


Fig. 12　第46次調査区　1:800

F27地区では、山土を含む大土坑（SK4325）がある模様。瓦の出土量やや多くなる。

9.11　SB4350は3間以上×3間の東西棟建物で、南廂を有することが判明。

9.12　SB4351と重複するSB4290は南北棟建物であることを確認。大土坑（SK4325）は輪郭を検出。単弁八弁軒丸瓦、瓦片、かえり付きの須恵器杯蓋などが出土。

9.13　SB4351は5間×2間でまとまる。23ラインで新たに柱穴5基（SB4330）検出。SB4351の柱穴と重複しており、それより古い。南北棟建物の西側柱筋になるか。大土坑SK4325の東肩検出。輪郭確認にとどめ、掘り下げず。

9.14　SB4350の東妻柱列検出。6間×3間で南廂付の東西棟になる。SB4351と同じく方位が北で東に振れ、他の柱穴との重複関係もSB4350・SB4351は最も新しい。同時期の建物と思われる。23ラインで南北に並ぶ柱穴8基（SB4330）を検出。重複関係はSB4350・4351より古い。藤原宮期の建物か。SB4330と重複して柱穴5基（SB4241）検出。SB4330より古い。大土坑（SK4325）はほぼ全形を確認。

9.17　SB4241は4間×2間の南北棟となる。21ライン付近の精査。JL～P地区で複雑に重複する柱穴を多数検出。7間×2間の南北棟建物（SB4330）としてまとまりそうだが、これより新しい時期の柱穴群が確実に存在する。小柱穴建物（SB4370）は東西8間以上になる。JS～HE地区で柱穴6基（SB4331）検出。いずれも西側へ柱抜取穴あり、藤原宮期か。SB4290の規模確定のため、調査区南端27ラインより以東を拡張。

9.18　21ラインで、調査区全域にわたり南北に連なる柱穴列（SA4286）検出。SB4330の柱穴と重複し、SB4330が新しい。東西塀（SA4284）は22ラインまで続くが、それ以東は不明。その北の東西溝（SD4285）は、22ラインのSA4286付近で消滅。5間×2間の南北棟建物（SB4242）検出。南北塀（SA4286）より新しい。南拡張区重機掘削終了。北側の15～34ライン間に南北18mの幅で拡張区を設け、東から重機掘削開始。

Fig. 13　調査風景（第46次）

9.19　18ライン西で南北塀（SA4320）を12間分検出。JSラインの東西溝（SD4357）と重複し、塀の柱穴が古い。SD4357は、17ライン西で北へ直角に曲がることが判明。

9.20　SA4320を15間分検出。その西側で南北溝（SD4257）検出。SA4320と重複し、塀が新しい。4間×2間の南北棟建物（SB4240）まとまる。2棟重複する竪穴建物（SI4231・4232）検出。西側のSI4232が新しい。壁に沿って木炭や焼土が顕著で、焼失建物か。南側でも竪穴建物（SI4230）検出。北拡張区：重機掘削続行。

9.21　竪穴建物SI4232掘り下げ。韓式系土器出土。北拡張区：灰色砂の面で遺構検出開始。

9.24　竪穴建物（SI4231・4232）の埋土を掘り下げる。新しいSI4232は北壁に竈あり。完形品に近い土師器杯や高杯出土。北拡張区：掘り下げは、まだ遺構面まで達していない。瓦器、土師器皿等が多く出土。

9.25　竪穴建物（SI4232）を床面まで掘り下げる。底面上に炭化材が放射状に点在し、焼失建物と確認。北拡張区：18～21ライン間を遺構面まで掘り下げる。

9.26　HH15地区以北で南北溝（SD4255・4256）検出。HHラインで東へ曲がる。瓦を多量に含み、「池上」刻印を有する丸瓦出土。

9.27　SI4232の炭化材を精査し、写真撮影。終了後、土器を取り上げる。HJ17地区で一辺3m近い方形の掘方を有する石組井戸（SE4469）検出。石組内より瓦器、土師器皿など出土。北拡張区は遺構検出を続行。

9.30　北拡張区で南北塀（SA4320）の柱穴7基検出。HG18地区で土坑（SE4467）検出。花形飾金具出土。

10.1　21ラインの塀と建物の重複関係を精査。東西塀（SA4284）が最も古く、南北塀（SA4286）が次ぎ、南北棟建物（SB4330）が最も新しい。北拡張区：遺構検出を続行。

10.2　SB4330は南妻を検出し、7間×2間となる。南北塀（SA4286）は、HAライン以北は南北棟建物（SB4331）の柱穴が重複しており、SB4331が

Fig. 14　調査風景（第46次）

新しい。北拡張区：中世の柱穴群を検出。

10.3　南半は遺構再検出。北拡張区でSB4331の北妻を検出し、7間×2間の南北棟建物としてまとまる。西側柱の北から第2柱穴は瓦溜（SK4270）と重複。SK4270が古く、柱穴が新しい。SK4270からほぼ完形の単弁八弁軒丸瓦が出土。

10.4　北拡張区で塼仏出土。夏見廃寺出土例と同笵の中尊頭光部分の小片。HE25地区の西に広がる大土坑（SK4325）を掘り始める。南拡張区のJH・I25地区で柱穴3基検出。南北棟建物（SB4290）の東側柱になりそう。

10.5　SK4325は東南隅に不整形の土坑が重複していることが判明。丸瓦、平瓦、土師器、須恵器、フイゴ羽口、鉄滓、銅滓と、藤原宮式軒丸瓦1点出土。中央部は清掃を兼ね、遺構再検出。

10.7　SK4325を一段掘り下げる。27ライン以西は浅くなり、痕跡程度。北拡張区では多数の小柱穴、小穴群を検出。竪穴建物（SI4233）を東西に畦を残して耕作溝群の底まで掘り下げる。

10.8　HG・H28・29地区で東へやや振れる3間×2間の南北棟建物（SB4247）検出。7世紀後半の建物か。2棟の竪穴建物（SI4234・4235）を耕作溝群の底近くまで掘り下げる。

10.9　藤原宮期の南北棟建物（SB4332）東側柱の柱穴3基検出。7間×2間で確定。昨日検出したSB4247の、西北方に重複して建つ南北棟建物（SB4246）検出。これも3間×2間になるか。

10.11　SB4332の北妻柱検出。HE32地区以西に広がる竪穴建物（SI4236）の全形確認。北壁やや東寄りに竈らしき焼土あり。昨日までに検出した南北棟建物2棟（SB4246・4247）の重複関係は、SB4246が古い。

10.12　東西棟建物（SB4340）の東に、南北柱穴列（SX4342・4343）検出。

10.14　SB4340の柱穴を精査。いずれも柱抜取穴明瞭。遺物は新しいものを含まない。坊間路東の南北塀（SA4282）は北半を精査するが、HCライン上でかろうじて底が残る柱穴1基を検出したのみ。北半は削平されたものと考えられる。東西塀（SA4284）は37ラインまでは確実に延び、南北塀（SA4282）の柱穴と重複するか、あるいは取り付くか。

10.15　JR～HA間の西側溝（SD4302）を完掘。HEライン以北で西側溝の延長部を検出。

10.16　坊間路西の南北塀（SA4283）の柱穴を検出し、掘り下げる。北側に古い柱穴が重複するものあり。HD40地区でSB4340の柱穴を検出し、6間以上となる。北辺西端に幅10m、長さ15mの拡張区を設定。

10.17　記者発表。現地説明会準備。清掃。

10.18　現地説明会会場設営。北拡張区は重機掘削後、遺構検出。東西棟建物（SB4333）の西より3間分検出。南側柱筋西より2つ目の柱穴は、その南の建物（SB4248）の柱穴より新しい。HRライン付近で東西溝を検出。条間路南側溝か。

10.19　現地説明会。

10.21　北拡張区遺構検出。調査区北半再検出。

10.22　SB4333の規模確定のため、北拡張区を南北10m幅で調査区東端までさらに拡張し、表土掘削。調査区北半は遺構再検出。

10.23　SB4333は7間目まで確実だが、以東の柱穴は不明瞭。調査区南半遺構再検出。

10.24　SB4333の規模は7間×2間で確定。21ライン西で南北塀（SA4286）の柱穴らしきものを1基検出するが、北では未確認。30～35ライン間を北へ8m拡張し、重機掘削開始。

10.25　南北塀（SA4286）の柱穴6基検出。重複して大土坑（SK4327）あり。18ラインの南北塀（SA4320）は、この土坑により見えない。16ラインの南北溝（SD4255）は北へ延びる模様。

10.26　北拡張区の遺構検出。条間路北側溝は検出できず。東北隅で南北溝（SD4255）を検出。北へ向かって浅くなっている。溝の東に、柱穴3基（SB4249）が南北に並ぶ。SK4327の輪郭を確認し、掘り下げを始める。南北塀（SA4320）の柱穴は、土坑に覆われているようだ。

10.28　南北溝（SD4255）を底まで完掘。大土坑（SK4327）は、SA4320の柱穴を探すため底まで掘り下げる。7世紀末～8世紀の土師器、須恵器が比較的多量に出土。SA4320の柱穴4基はSK4327

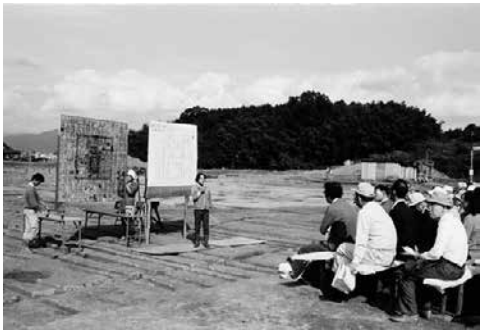


Fig. 15　現地説明会（第46次）

Fig. 16　現地説明会（第46次）

によって破壊されていることを確認。東西棟建物（SB4333）の東妻柱を確認し、一段掘り下げる。遺構検出終了。

10.29　空撮に備え清掃。

10.30　終日排水作業を行う。

10.31　終日排水作業。清掃。標定点打ち、測量。

11.1　排水作業。清掃。空撮。

11.2　清掃。南半の建物を中心に写真撮影。

11.7　排水作業後、一部清掃。

11.8　北半を清掃。写真撮影。

11.9　清掃。写真撮影。

11.11　排水作業。清掃。写真撮影

11.14　排水作業。清掃。

11.15　清掃。写真撮影。

11.16　清掃。写真撮影。杭打ち開始。

11.18・19　遣方設定。水糸配り。

11.20～22・25・26　平面実測。

12.2　平面実測。標高記入。断ち割り調査開始。南端のSB4291の規模確定のために南に拡張し、精査。建物は3間以上となるか。

12.3　実測終了。標高記入。南拡張区で柱穴5基検出。SB4291は4間×2間の南北棟建物となる。柱穴断ち割り。JM28地区、飛鳥Ⅲの土器が入る土坑（SK4265）東西畦の掘り下げ開始。

12.4　柱穴断ち割り。竪穴建物（SI4232）の畦を撤去し、掘り下げる。床面は重複するSI4231の方が深い模様。SB4241・4330・4351の新旧関係を再確認。SB4351の柱痕跡底には玉石を据えている。JH25地区のSE4460掘り下げ開始。

12.5　標高記入終了。柱穴断ち割り。HE25地区の大土坑（SK4325）を南北に畦を残して掘り下げる。中央が深い。南側にチョウナ削り屑の腐ったものが多い。型押し忍冬唐草文軒平瓦1点出土。

12.6　SK4325掘り下げ。畦の土層観察より円形土坑（SE4335）がSK4325上面より掘り込んでいることが判明。東方に隅丸方形の深い部分あり。木簡状木製品数点や、軒丸瓦、丸・平瓦、土器多数出土。SB4350の柱穴断ち割り。浅い。

12.7　SK4325上層の土層図を作製し、写真撮影。JH25地区のSE4460をさらに掘り下げる。

12.9　SK4325を底まで掘り下げ、全景写真撮影。SE4335は縦板組みの井戸で、完形の土師器甕などが落ち込んでいる。

12.10　柱穴断ち割り。竪穴建物（SI4232）の写真撮影。実測終了。SE4335掘り下げ。

12.11　柱穴断ち割り。SE4335は底に小判形の大きな曲物を東西を長軸にして据え、その外側に幅約20㎝の板を組み立てた多角形の井戸と判明。JL34地区SE4461掘り下げ。竪穴建物（SI4233）は床面まで掘り始める。竈らしき焼土あり。

12.12　柱穴断ち割り。SI4233は南東隅に竈があり、南壁に接して貯蔵穴がある。一部砂入れ。

12.13　柱穴断ち割り。HL25地区のSE4474は、縦板組の中に上段に大型、下段には中型の曲物を据えている。完形の把付き短刀出土。

12.14　柱穴断ち割り。竪穴建物（SI4233）を床面まで精査。

12.16　柱穴断ち割り。SI4233全景撮影。

12.17　柱穴断ち割り。HJ17地区の石組井戸SE4469に着手。井戸内を掘り下げ、大型の曲物を埋め込んだ底に達する。JS30地区の重複する竪穴建物（SI4234・4235）の掘り下げ開始。竪穴建物（SI4233）は竈断ち割り。古い竈の焚口上に、高杯を芯にした新しい竈の支柱を造りつけていることが判明。

12.18　北壁土層分層。北端の大土坑（SK4327）を北壁際で断ち割り。SI4235は周囲に壁溝が巡る。南壁中央に竈らしき焼土あり。

12.19　柱穴断ち割り。北壁土層実測。重複する竪穴建物（SI4234・4235）は古いSI4234の床面が深い。銅釧片1点出土。西北部埋め戻し。

12.20　柱穴断ち割り。HK15地区井戸（SE4470）の東半を断ち割り。掘方は二段掘りで、曲物を七段以上積み上げる。HH21地区の石列で囲まれた

Fig. 17　標定点設定風景（第46次）

Fig. 18　空撮風景（第46次）

土坑（SX4500）精査。下層に南北塀（SA4286）の柱穴確認。

12.21　柱穴断ち割り。SE4470の曲物を取り上げる。SX4500は、石列の外側に柱穴を多数検出。SI4234・4235は床面までほぼ掘り下げる。全景写真撮影。

12.23　柱穴断ち割り。HH18地区の土坑は石組井戸（SE4468）となる。底面に曲物あり。HE32地区竪穴建物（SI4236）の東半を掘り始める。

12.24　柱穴断ち割り。

12.25　柱穴断ち割り。HG20地区の土坑は、曲物を三段以上積み重ねた井戸（SE4471）となる。SI4236は床面まで掘り下げ。貯蔵穴中から韓式系土器の蓋形土器出土。

12.26　柱穴断ち割り。SE4468の実測終了し、底の曲物を取り上げる。SE4471は実測しつつ曲物を取り上げる。SI4236写真撮影。貯蔵穴内の土器を取り上げる。

1.8　柱穴断ち割り。HG18地区の井戸（SE4467）に着手。方形縦板組井戸と判明。HH26地区の井戸（SE4473）は、円形の石組井戸と判明。

1.9　柱穴断ち割り。SE4467掘り下げ、全景写真撮影。SE4473の平面および断面図実測。竪穴建物（SI4236）の貯蔵穴と床面精査。四隅に柱穴を検出。

1.10　柱穴断ち割り。SE4467上半部を実測し、終了後東半を掘り下げる。横桟組で四隅に柱あり。SE4473は井戸内を掘り下げ、底の曲物を取り上げる。鉄鎌片出土。

1.11　坊間路西の南北塀（SA4283）の重複する柱穴断ち割り。平面検出とは逆で、南側が新しく、北側が古く浅い。SE4473立面図実測終了。

1.13　SE4467の井戸枠周辺および枠内を底まで掘り下げる。井戸枠の取り上げ開始。SE4473の北に重複する土坑を掘り下げたところ、曲物を数段重ねた井戸（SE4472）となる。

1.14　柱穴断ち割り。SE4467の井戸枠と底の曲物を取り上げる。井戸枠は建築部材を転用したもの。柄付の鉄鎌が出土。下半まで埋め戻す。HG18地区の井戸（SE4466）は埋土上部を少し掘り下げる。SE4473は最下段の曲物を実測し、取り上げた後に埋め戻す。

1.16　柱穴断ち割り。SE4466の掘方を底まで掘り下げる。JS36地区の井戸（SE4463）は井戸枠を全て抜き取っており、底の曲物のみ残る。JR40地区の井戸（SE4464）に着手し、南半全体を少し掘り下げる。JK38地区井戸（SE4462）掘り下げ。方形縦板組の井戸枠がわずかに残る。

1.17　柱穴断ち割り。SE4463を底まで掘り下げ、写真撮影。SE4464は南半を掘り下げる。円形の石組井戸で、底に大型の曲物を二段以上埋め込んでいることが判明。全景写真撮影。SE4462の全景写真撮影。実測。

1.18　柱穴断ち割り。SE4463掘方断ち割り。写真撮影、実測。SE4462縦板材を実測。

1.20　柱穴断ち割り。SE4464実測終了。曲物を取り上げる。SE4462写真撮影、実測終了後、縦板材を取り上げる。JN21地区土坑（SK4266）北半を断ち割り。古墳時代と飛鳥Ⅲの土師器出土。

1.21　東壁、西壁、北壁の一部土層図作製。南拡張区平面実測。

1.22　HD42地区西壁にかかる井戸（SE4465）を掘るため、西に拡張。抜取穴西半を掘り下げる。曲物井戸か。

1.23　SE4462は板材を取り上げて終了。SE4465の清掃、写真撮影、実測。HI14地区東壁にかかる須恵器甕周辺（SJ4260）を精査するため、一部拡張。上半を欠失する須恵器甕を伏せ、周りに小石を並べている。甕内には小石が約7～8個あり、その下に7世紀代の完形品の土師器杯あり。西壁土層図作製。重機で本格的に埋め戻しを始める。

1.24　SE4465全景写真撮影。曲物を取り上げ、掘方断ち割り。写真撮影、実測終了。埋め戻す。JS14地区の竪穴建物（SI4231）の埋土を掘り下げる。須恵器甕（SJ4260）精査。

1.25　南壁土層図作製。SI4231掘り下げ。

1.27　南壁土層図終了。南拡張区清掃、SB4291の全景写真撮影後、柱穴断ち割り。SI4231精査、全景写真撮影。

1.28　SI4231実測、竈断ち割り、写真撮影。

Fig. 19　SE4468調査風景

Fig. 20　SE4469調査風景

C　第47次調査　6AJC-N区、6AJD-H区
1985年11月28日～1986年6月20日

11.28　調査区を設定。東西50m、南北60mの3,000㎡。
12.9　西端より重機掘削開始。
12.10～19　重機掘削。
12.20　西側に地区杭打ち。西、北側に排水溝を掘る。
12.21　調査区西から包含層（灰褐土）を掘り下げ。西北端で地山を検出。
12.23　灰褐土掘り下げ。
12.25・26　重機掘削のみ。
12.27　ベルコンを並べ、機材整備。
1.7　ベルコンを始動。灰褐土掘り下げ。
1.8　西端の灰褐土を掘り下げ。斜行する南北溝（SD4755）を検出。
1.9　灰褐土掘り下げ。北端で土坑や柱穴などを多数検出。
1.10～14　灰褐土掘り下げ。
1.16　灰褐土掘り下げ。重機掘削終了。
1.17・18　灰褐土掘り下げ。
1.20　北東隅で遺構検出。
1.21　東南部に残っていた灰褐土を取り終え、西に折り返し遺構検出。
1.22　調査区北端、NMライン以北に山土混褐色土が広がる。整地土の可能性を考えて、この上面で遺構検出。径約15㎝の柱穴が北端に集中する。
1.23　NG～Ⅰライン間で東西大溝SD4130の肩を一部確認。
1.24　灰褐土掘り下げ。大土坑（SK4327）検出。
1.25　灰褐土掘り下げ。
1.27　NCライン南に幅1.25mの東西溝（SD4139）あり。埋土に瓦を包含。
1.28　SD4139検出。計算値では条間路は第46次調査で検出したHRライン南の東西溝を北側溝に比定すべきであるが、当溝は北に偏し過ぎているきらいがある。
1.29　灰褐土掘り下げ。
1.30　22ライン東で南北に並ぶ柱穴列（SA4730）を検出。第46次調査で検出したSA4286の北延長上にあたる。
1.31　灰褐土掘り下げ。
2.1　NJ23地区に円形掘方の井戸（SE4782）あり。14世紀前半。
2.3　条間路南北両側溝と推定される二条の東西溝（SD4311・4139）検出。
2.4　NK・L24地区で方形の柱穴（SB4786）検出。
2.5　SB4786は遺物包含層を掘りこんで柱穴を穿っている。遺物包含層が竪穴建物などの遺構になるものか否かは、現段階では不明。
2.6　灰褐土掘り下げ。NL26地区周辺で円形や方形の柱穴を多数検出。

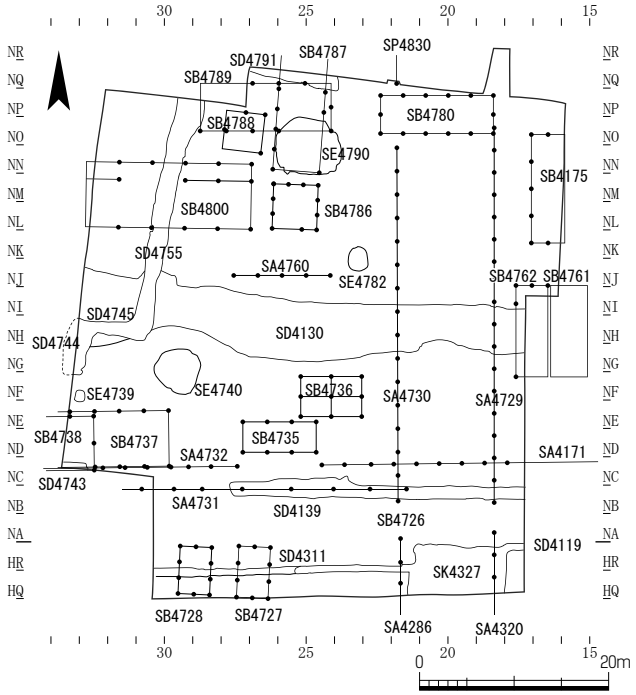


Fig. 21　第47次調査区　1:800

2.7　27ラインで一辺1.25ｍの柱穴２基（SB4800）を検出。
2.8　ND27地区で柱穴２基（SB4735）を検出。
2.10　NN24地区周辺精査。井戸（SE4790）検出。
2.12　北半に南廂付東西棟建物（SB4800の北廂部）あり。南方約5.1ｍの位置に、柱筋を揃えて一辺約１ｍの柱穴が並ぶ。
2.13　西南隅で南北棟建物（SB4728）、西北隅で中世の南北大溝（SD4755）を検出。埋土は肩部に焼土が集中し、瓦器が入る。
2.15　SD4755の最上層を掘り下げる。NI30地区で西に折れ（SD4745）、調査区西端で南北溝（SD4744）に接続する。塼仏や、鎌倉～室町時代の菊水双雀鏡出土。
2.17　SD4755は、NH・Ｉ地区の東岸に瓦が集中している。
2.19　南廂付東西棟建物（SB4800）は、桁行が4間以上となる。
2.20　写真撮影に備えて清掃。
2.21　地上写真撮影。終了後、西端より折り返して遺構の再検出作業開始。
2.22　南廂付東西棟建物（SB4800）は、調査区内に北側柱なし。西南隅のNC～Ｆライン間で２棟の東西棟建物（SB4737・4738）検出。重複関係は不明。
2.24　SD4755と東西大溝（SD4130）掘り下げ。
2.25　SD4130の南、NF29・30地区で土坑状の落ち込み（SE4740）を検出。井戸と思われる。SD4755の東肩でSD4130確認。埋土から藤原宮期か奈良時代初頭の土師器杯Ｂ出土。
2.26　SD4745・4755などの中世大溝写真撮影。条間路南側溝（SD4311）を掘り始める。SD4311と南北棟建物（SB4728）は、建物が新しい。
2.27　南西端で３間×２間の南北棟建物（SB4728）検出。
2.28　26～29ラインにかけてSD4130の最上層を掘り下げる。10世紀代の黒色土器など出土。
3.1　SB4737の東妻柱は不明。側柱の東延長上に同規模の柱穴は見つからない。SD4130から出土する瓦は、藤原宮期以前に限られている。
3.3　SD4130掘り下げ。SB4728の東にあり、同形同大の南北棟建物（SB4727）を検出。条間路南側溝（SD4311）より新しい。
3.4　25ラインまで遺構検出。
3.5　ND・Ｅラインに沿って、柱筋を揃えて東西に延びる２条の柱穴列（SB4735）検出。
3.6　SD4130掘り下げ。
3.7　条間路北側溝（SD4139）の出土土器は、飛鳥ⅣかⅤ。瓦が多い。埋土を掘り上げると東西柱穴列（SA4731）検出。
3.8　NN24地区の大土坑（SE4790）を、南北に畦を残して掘り下げ。下層に暗灰粘土が深く堆積し、井戸の様相がさらに深まる。昨日検出した東西塀（SA4731）は、SD4139より古いと確認。
3.10　19ラインまで遺構検出。
3.12　SD4130以北を精査。SA4730の北への続き検出。
3.13　北で整地土（山土混褐土）を掘り下げて初めて柱穴を検出（SA4730・SB4780）。SD4311は東の第45次調査区で検出したSD4119に接続する公算が大。
3.15　SD4130北で遺構検出。
3.17　SD4130以南は東壁に達し、折り返す。
3.18　SD4130の北で、整地土を５㎝掘り下げて遺構検出。大型柱穴は山土混褐土、灰色粘質土上面では検出できない。18ライン南北塀（SA4729）がSD4130を越えるか否かは不明。
3.19　SA4729がほぼ北端に達していることが判明。北２つの柱穴埋土には山土が交じっており、他の柱穴と異なる。山土混褐土の上面で検出はできなかったが、埋土を重視すれば山土混褐土は柱穴より古いと考えられる。
3.20　北東端の掘立柱建物（SB4780）は、東西３間まで確認。調査区外北に延びる。NDライン南の掘立柱列は、北、南に筋を揃えた柱穴列がないので、東西塀（SA4171）と考えられる。

Fig. 22　写真撮影風景（第47次）

Fig. 23　調査風景（第47次）

3.22　24ラインまで遺構検出。
3.24　25ラインまで遺構検出。
3.25　東西塀（SA4171）は3間×1間の東西棟建物（SB4735）の前で途切れる。22ライン南北塀（SA4730）については、ND～Gラインの間で少なくとも3回の重複関係がある。SD4130以北では大土坑（SE4790）の南に3間×3間の建物（SB4786）が建つ。
3.26　SD4130以北で遺構検出。南北棟建物（SB4787）検出。南廂付東西棟建物とみていたものは、北廂付建物（SB4800）となるようだが、妻柱がない。
3.27　SD4130掘り下げ。東西棟建物（SB4737）と東西塀（SA4732）の重複関係を精査。SB4737が新しい。
3.29　23ライン以東のSD4130で青灰細砂層（中層）を掘り下げ。灰粗砂層（下層）上面を検出。
3.31　SD4130の23ライン以東で灰粗砂層を掘り下げ。土器は飛鳥Ⅴを主体とし、溝の開削はそれ以前か。NG30地区土坑（SE4740）の茶褐土層はSD4130の茶褐土層（上層）と同質のものであり、埋没時期が近いと思われる。
4.1　SD4130の青灰粘土層、青灰細砂層（中層）を掘り下げ。「香山」と記した墨書土器出土。
4.2　写真撮影および実測。SE4740東西畦南面の土層図作製。
4.3　写真撮影。
4.5　SD4130の灰粗砂層等を掘り下げる。青灰粘土（中層）から、底部に「馬」とヘラ書きした須恵器出土。
4.7　SD4130の23～28ライン間を完掘。SA4729および周辺の柱穴を精査。東西塀（SA4171）のNC17地区の柱穴が、2基重複しているものであることが判明。
4.8　清掃。空撮用標定点設定。
4.9　清掃。測量。
4.12　排水作業。
4.14　空撮。地上写真撮影。
4.16　清掃。
4.17　地上写真撮影。
4.18　記者発表。
4.19　現地見学会。約90名来訪。
4.21　貫板打ち。
4.22・23　遣方設定。
4.24　平面実測。
4.25　平面実測。標高記入。
4.26　標高記入。
4.30　北辺の27ライン以東で南北4ｍ幅、東辺のJIライン以北で東西3.5m幅の拡張区を設定。重機掘削開始。
5.1　南西部で柱穴断ち割り。北拡張区：遺構検出開始。
5.2　拡張区：重機掘削終了。
5.7　北拡張区：西半より遺構検出。北端に中世集落の区画溝とみられる東西溝SD4791検出。
5.8　北拡張区：西半部整地土上面（山土混褐土）で遺構検出。
5.9　北拡張区：整地土上面での遺構検出終了。写真撮影。東半は整地土下に柱穴がかなり隠れていると思われる。東拡張区：整地土上面で遺構検出開始。
5.10　東拡張区：整地土上面での遺構検出。
5.12　東拡張区：整地土上面での遺構検出終了。第45次調査区へ続く建物（SB4761・4762）は、5間×4間の可能性が高い。北拡張区：整地土掘り下げ開始。南北塀（SA4729）の北延長部を確認。
5.13　東拡張区、全景写真撮影。北拡張区：整地土掘り下げ。2条の南北塀（SA4729・4730）の間に東西棟建物（SB4780）検出。
5.15　北東部の断ち割り調査開始。東拡張区：整地土掘り下げ。
5.16　SB4780は5間×2間と判明。SB4780内で

Fig. 24　標定点設定風景（第47次）

Fig. 25　現地見学会（第47次）

SA4730の延長部を掘り下げて精査するが、SA4730の柱穴はなし。拡張区：遺方設定。
5.17　北東部の断ち割り。拡張区：平面実測。
5.19　北東部の断ち割り終了。拡張区の平面実測も終了。
5.21　柱穴断ち割り。NN24・25地区の大土坑（SE4790）掘り下げ。石組井戸と判明。
5.22　柱穴断ち割り。SE4790掘り下げ。
5.23　柱穴断ち割り。SE4790掘り下げ。石組下に曲物を検出。
5.24　柱穴断ち割り。SE4790平面・立面実測。
5.26　柱穴断ち割り。SE4790底の曲物を取り上げ。SE4740横板組井戸枠内の掘り下げ開始。
5.27　南東部柱穴断ち割り。拡張区：清掃。
5.28　午前中写真撮影。SE4790周囲の大土坑の性格を明らかにするため十字形にトレンチを入れ、井戸の抜取穴と掘方を確認。
5.29　南北塀（SA4729）北延長部に長さ５ｍの拡張区を設定し、灰褐土を掘り下げる。SE4740は横板組の四隅に角杭を打つ。出土遺物は９世紀。
5.30　SA4729北の拡張区：包含層掘り下げ。SE4740の掘方および井戸枠内掘り下げ。
5.31　SE4740井戸枠内掘り下げ。地表下約２ｍで砂混褐色粘質土（中層）となり、多量の土器を包含している。奈良時代末。「宅」墨書土器出土。北拡張区にSA4729の北延長部はなし。
6.2　SE4740横桟の上で和同開珎出土。奈良時代後半の土師器、須恵器と「香山」墨書土器出土。SE4790東側掘り下げ。北拡張区：写真撮影。
6.3　SE4740東西畦南面の土層図作製。南北塀（SA4730）および門（SB4726）の柱穴断ち割り。北拡張区：平面実測。
6.4　柱穴断ち割り。写真撮影。
6.5　柱穴断ち割り。SD4130の30ライン以東を掘り下げ。SA4732がSB4737より古いことを再確認。
6.6　SD4130掘り下げ。木簡の削屑１点出土。
6.7　清掃。
6.9　SD4130掘り下げ。SE4740周囲の土坑を四分の一掘り下げた結果、井戸掘方であることが判明。井戸周囲の小さい土坑は、抜取穴とすべきであろう。
6.10・11　SE4740掘方の掘り下げ。
6.12　SE4740写真撮影。井戸枠は柱などを荒削きした材を横に並べただけで、特別な木組は行っていないことが判明。このために、裏込めはかなり丁寧になされている。
6.13　SE4740井戸枠取り上げ。井戸最下層から無文銀銭、棒状金銅製品、呪符木簡など多数出土。
6.14　SE4740井戸枠内底の地山に到達。北拡張区：柱穴断ち割り。
6.16　SE4740掘方を掘り下げる。北拡張区：柱穴断ち割り。
6.17　SE4740の井戸枠を全て取り上げた後、掘方の写真を撮影し、埋め戻し。柱穴断ち割り終了。
6.18　南壁、北壁面土層図作製終了。
6.19　西壁面土層図作製終了。清掃。
6.20　重機による埋め戻し開始。

Fig. 26　断割図作製風景（第47次）

Fig. 27　SE4740調査風景

D　第50次調査　6AJC-N区、6AJD-A・H区
1986年7月28日～12月19日

7.28　第47次調査区の西に調査区（西区）を設定し、調査準備着手。重機によりコンクリート舗装などを除去。

7.29　コンクリート舗装除去。

7.30　重機にて北から表土掘削。床土の下は中世の土器を包含する灰褐色土層。

7.31　重機掘削。ベルコンを設置して灰褐土掘り下げ開始。

8.1　重機掘削。灰褐土掘り下げ。基準点設定し、地区杭打ち。NP36地区で土坑（SE5055）検出。NP32地区から塼仏出土。

8.2　重機掘削。灰褐土上半掘り下げ。

8.4～8　重機掘削と並行して灰褐土上半掘り下げ。地区杭打ち。

8.9　HO～Qライン間の遺構検出。HPライン上で東西棟建物（SB5000）の北側柱列検出。第46次調査で検出したSB4333と柱筋を揃える。東三坊坊間路東側溝（SD4301）より新しい。東側溝は北で東折し六条条間路南側溝（SD4311）となる。

8.11　HPライン上の柱穴に組み合う柱穴を、HMライン、35・42ラインで検出。7間×3間の建物（SB5000）と考えられる。重機掘削終了。

8.12　HM40地区でSB5000の柱穴検出。柱穴と坊間路西側溝SD4302の関係は、溝より柱穴が新しいことを確認。

8.18　南から北進して遺構検出。坊間路の東西両側溝（SD4301・4302）を検出。SA4283に続くと思われる柱穴を3基検出。HLラインに沿って、目隠塀かと考えられる柱穴を8基検出。柱穴と側溝の関係は、柱穴が側溝より新しい。

8.19　HM～Pライン間の精査で、SB5000の身舎の規模が桁行7間、梁行3間と確定。昨日検出したHLラインの柱穴列は、SB5000の南廂と考えられる。柱穴とSD4301の関係を写真撮影。

8.20　西側溝（SD4302）はHRライン付近で再び途切れた。SB5000の東側、北側を精査するが、廂は検出できない。

8.21　NAラインから北へ遺構検出。

8.22　東西大溝（SD4743）の掘り下げ。NCラインに沿って柱穴4基検出。第47次調査で検出した東西塀SA4731の続きとなると考えられる。

8.23　NFラインで、第47次調査検出の中世大溝の続きと考えられる溝（SK5004）の南肩を検出。

8.25　SK5004検出。13世紀末～14世紀の瓦器、土師器、瓦を含む。

8.26　SK5004完掘。大土坑（SK5015）が重複していることが判明。SK5004の方が古い。

8.27　SK5015とNG33地区の土坑（SD4744）は、SD4744が新しく、第47次調査で確認した中世大溝が南折しているものらしい。上層より鬼瓦を含む多量の瓦が出土。SK5004東端には一辺約2ｍの土坑（SE5010）が重複。SK5004より古い。NF35地区の中世土師器小皿埋納坑（SJ5007）実測、土器取り上げ。

8.28　SD4744を掘り下げる。

8.29　NGラインの北1.7ｍから始まった淡褐土の厚い堆積はNJラインの北1ｍで終わり、それ以北は褐色土となる。この間が東西大溝（SD4130）か。

8.30　褐色土は東西大溝SD4130北岸の土層で、NKライン付近でなくなり、以北は黄灰褐土の地山となる模様。

9.1　中世の土坑3基と柱間6尺の柱穴群を検出。総柱建物（SB5020）か。NK33地区の耕作溝から、緑釉獣脚硯片出土。

9.2　昨日検出した柱穴は、3間×2間の南北棟総柱建物（SB5020）としてまとまる。

9.3　NNラインの北で大型の柱穴2基を検出。第

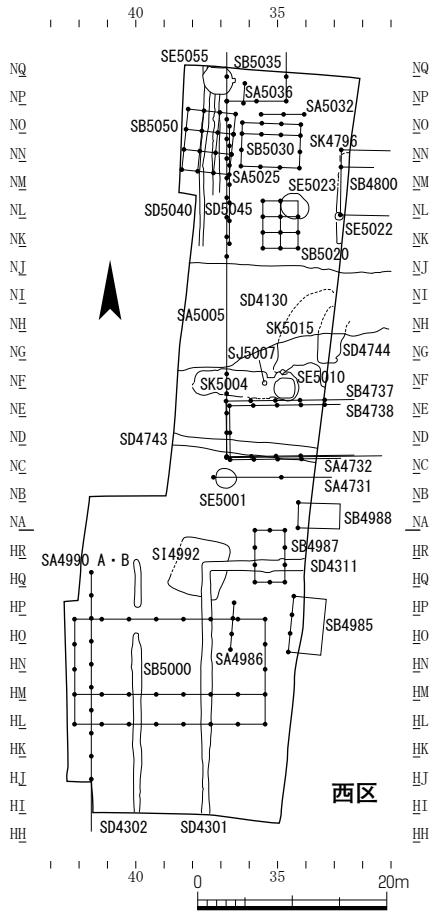


Fig. 28　第50次調査 西区　1:800

47次調査で検出した東西棟建物（SB4800）の西妻の柱穴。NNラインの北で東西３間分の柱穴（SB5030）を検出。

9.4　東西棟建物SB5030は北に廂が付く。柱穴から瓦器出土。西北部では大型の柱穴が出始める。

9.5　西北部で建物２棟（SB5035・5050）を検出。SB5035は南北棟と推定され、南妻柱列と側柱１間分を検出。SB5050は南北３間×東西１間以上。西北隅のNP・Q37地区では、直径約３ｍの土坑（SE5055）を検出。

9.6　SB5050の柱穴を一部掘り下げ。抜取穴から平安時代の土器出土。

9.8　SB5050は南北３間、東西２間以上の総柱建物となる。

9.9　SB5050周辺の遺構検出。第45次調査中央区の南東に、東区設定準備。

9.10　SB5050に重複して、それより古い２条の小柱穴列（SA5005・5025）を検出。

9.11　東西大溝SD4130南のNFライン上には、重複する柱穴列がある模様。

9.12　NG34地区周辺の大土坑（SK5015）南半部を完掘。NFライン上に東西３間分の柱穴を検出。47次調査で検出した東西棟（SB4737・4738）の西延長部にあたる。37ライン沿いに塀と考えられる柱穴３基（SA5005）を検出。

9.13　NG33地区SD4744、NG34地区のSK5015とNK・L32地区のSK4796掘り下げ。

9.18　SD4130南肩からNBライン間の遺構検出。

9.19　39ライン以西HQ～NB間の遺構検出。坊間路東側溝（SD4301）と条間路南側溝（SD4311）の交点周辺に、方形の暗褐砂土が分布する。竪穴建物（SI4992）と思われる。

9.20　SD4311より新しい小柱穴２基を検出。３間×２間の南北棟建物（SB4987）の側柱。

9.22　NAライン以北の清掃。土坑、溝、小溝の写真撮影。NC～Kライン間に遣方設定。

9.24　NC～Kライン間の平面実測。NKライン以北清掃。柱穴と土坑を掘り下げる。

9.25　標高記入。NKライン以北の写真撮影。SK5015の下層を掘り下げる。

9.26　SK5015を完掘。写真撮影。

9.27　NDライン東西大溝（SD4743）の南肩から、北に向かって遺構検出。４カ所に重複した柱穴を検出。東西棟建物（SB4737・4738）の南側柱と、東西塀（SA4732）の柱穴となる。

9.29　NFライン南で重複した柱穴を検出。最大で４基重複し、最も新しいものは５間×２間の東西棟建物（SB4738）にまとまる。建物の西妻柱筋と重複して南北塀（SA5005）あり。

9.30　ND・Ｆライン南の柱穴を検出。SD4130南肩の検出を開始。

10.1　SD4130北肩の検出のため、NI～Ｋライン間の精査。

10.2　SD4130の北肩を検出。

10.3　SD4130最上層の淡褐粘質土を掘り下げる。SA5005より約60㎝東で南北塀（SA5025）の柱穴４基を検出。

10.4　SD4130掘り下げ。暗青灰粘土（上層）から「香□」と記した墨書土器出土。

10.6　SD4130暗青灰粘土掘り下げ。遺物は少なく、新しいものは９世紀代のもの。暗青灰粘土の下は暗茶褐有機土（上層）となる。この層も東へ続かず、溝が南へ広がる部分にのみ堆積する。

10.7　SD4130青灰粘土（中層）掘り下げ。土器は奈良時代後半のものが中心。東区を設定。

10.8　SD4130青灰粘土下半及び暗灰砂土（中層）の掘り下げ。暗灰砂土から木簡２点出土。「収稲霊亀二年」。東区：重機掘削。

10.9　第47次調査区を含めて、SD4130灰褐砂（中層）を掘り始める。31ライン東で断ち割ったところ、灰褐砂の下に杭を打った小さな井堰状の施設がある。

10.11　SD4130灰褐砂掘り下げ。

10.13　SD4130北肩の褐色粘土（中層）を掘り下げ、さらにその下の青灰砂（中層）を掘り下げる。青灰砂の下は暗灰褐砂礫（中層）となり、木質を多く含む。緑釉獣脚硯、木簡、斎串など出土。

10.14　SD4130の33ライン以西で暗灰褐砂礫掘り下げ。第47次調査で未掘の29・30地区では、淡灰粗砂（中層）を掘り下げる。井堰とみていた杭群

Fig. 29　調査風景（第50次）

Fig. 30　調査風景（第50次）

は、東西方向にも杭列が延び、L字状になる。暗褐粘土層（中層）中に木屑層確認。杭群の東側のみに存在する。

10.15　SD4130灰色細砂（中層）掘り下げ。奈良時代の土器出土。北半で残していた暗灰褐砂礫（中層）を掘り下げ。

10.16　SD4130掘り下げ。青灰微砂（中層）の南には青灰細砂（中層）が薄く堆積。その下は灰色砂礫（下層）、その下が茶褐砂礫の地山となる。井戸（SE4740）周囲の大土坑は、石敷きを残していた部分も含めて完掘。

10.17　SD4130北肩を検出。溝底近くは青灰粘土が堆積。NI37地区を中心に、青灰粘土や微砂を含む暗灰褐砂礫が地山直上にある。NH32地区暗灰砂土から「菜採司」木簡出土。

10.18　SD4130灰色細砂（中層）掘り下げ。第47次調査での青灰細砂に相当する。出土土器は、奈良時代前半のものを中心とする。NI31地区で「左京職」木簡出土。

10.20　SD4130暗灰粘土（中層）掘り下げ。杭列写真撮影。最下層を茶灰砂礫とする。東区：重機掘削が終了し、測量と地区杭打ち。

10.21　SD4130奈良時代流路写真撮影。茶灰砂礫（下層）掘り下げ。土器は藤原宮期以前に限られ、奈良時代の遺物は認められない。

10.22　SD4130茶灰砂礫の掘り下げ。

10.23　SD4130茶灰砂礫完掘。SD4130の調査はほぼ終了。

10.24　西区：南から清掃。東区：西から東へ向けて遺構検出。文化庁長官来訪。

10.25　西区：SB5000西妻柱列の柱穴全体を出すために、西へ約1ｍ拡張。東区：遺構検出。

10.27　本日より西区中断、東区の調査に集中。東へ向けて遺構検出し、柱穴、溝等を検出。

10.28　91ラインまで遺構検出。柱穴はいずれも塀となる。塀は第45次調査で検出した区画塀SA4110の延長部と、その外郭の塀と考えられる。

10.29　AL90地区周辺で、2間×2間の建物（SB5070）を検出。南北塀（SA5080）の西に南北溝（SD4135）があり、南で東へ折れる様だ。

10.30　西から遺構再検出。98ライン西にある南北溝（SD4135）は塀と同様に南で東折（SD5084）し、塀と一連のものであることが判明。

10.31　西から清掃。SB5070の柱穴掘方から中世の小皿出土。

11.1　91ライン以西の清掃。写真撮影。

11.4　87～89ライン間の遺構検出。87ライン西には東に向けた落ち込み（SD4143）がある。最下層は7世紀代の遺物のみで、堀河の西肩か。

Fig. 31　文化庁長官来訪（第50次）

11.5　87ライン以東の遺構検出。小柱穴が散在する。SD4143の肩は、南で西に広がる。AL87地区の土坑は円形を呈し井戸（SE5065）になる模様。完形の瓦器椀出土。

11.6　SD4143の西肩を出す。AKライン北に試掘トレンチを設け、掘り下げる。

11.7　西半部の清掃と写真撮影。SD4143の最上層掘り下げ。中世の遺物を含む。

11.8　清掃後、写真撮影。

11.10　西区を再開し、南から清掃。東区：空撮用標定点設置。

11.11　西区：南からSD4130南肩まで清掃。

11.12　西区：SD4130南肩から北に向けて清掃。空撮用標定点設置。

11.13　空撮。東区：遣方設定。

11.14　東区：水糸配り。西区：遣方設定。

11.15　東区：平面実測。西区：水糸配り。

11.17　東区：平面実測。SD4143青灰微砂の掘り下げを開始。西区：水糸配り

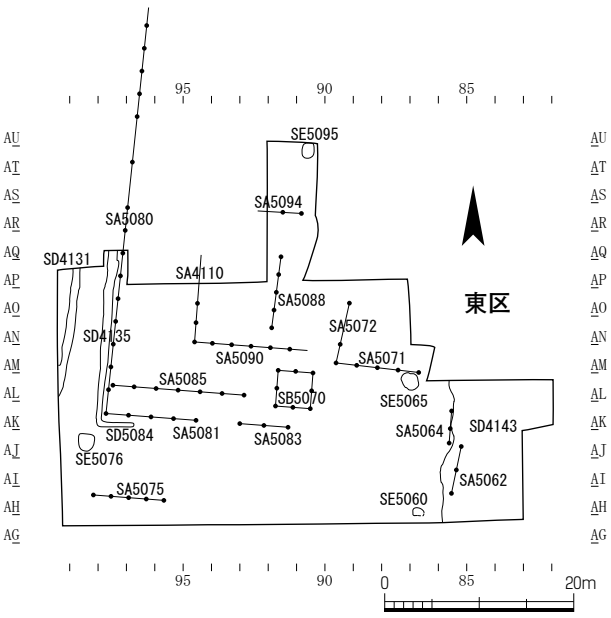


Fig. 32　第50次調査 東区　1:800

11.18　東区：SD4143の青灰粘土、青灰砂礫の掘り下げ。標高記入。西区：平面実測。
11.19　東区：SD4143の青灰砂礫掘り下げ。土器は飛鳥Ⅳ・Ⅴが目立つ。西区：平面実測。
11.20　東区：SD4143を掘り上げ、写真撮影。西区：平面実測。
11.21　東区：SD4143の実測終了。西区：平面実測終了。午後記者発表。「香山正倉」に注目集まり、反響大。
11.22　現地説明会。伊豆三原山大噴火のため、奈良新聞以外は記事を掲載せず。聴衆約80名。
11.25　SD4143を測距器実測。東区：SA4110などによる区画内部の様子を探るため、AP～AU間で92ラインより東に８ｍ幅で拡張し、重機で上土掘削。西区：標高記入。
11.26　東区：拡張区の重機掘削終了。耕作溝掘り下げ。北西隅のSD4131・4135、SA5080がかかる部分を、第45次調査区まで北へ拡張。西区：SD4130実測終了。
11.27　東区：両拡張区の遺構検出。北東拡張区の東北隅に楕円形の土坑（SE5095）あり。炭、フイゴ羽口、鉄滓を含む。
11.28　東区：北東拡張区の精査。塀による区画内に、中心的な建物はない。北西拡張区：遺構検出。
11.29　東区：SD4131の清掃。柱穴の写真撮影及び実測。
12.1　東区：拡張区の実測。AH86地区の土坑は中世以降の井戸SE5060で、曲物を井戸枠とする。西区：NB37地区の井戸（SE5001）掘り下げ。円形の石組枠内に曲物あり。
12.2　東区：SE5060の調査。曲物四段が残る。西区：SE5001石組みの写真撮影。時期は中世大溝とほぼ一致する。
12.3　東区：SE5060実測。西区：SE5001井戸枠の曲物取り上げ、埋め戻し。
12.4　東区：SD4143の東肩を探るため、南北幅５ｍで東へ３ｍ拡張するが、検出できず。一部埋め戻し開始。
12.5　東区：SD4143を掘り下げるが、湧水が著しく断念。西区：NL32地区井戸（SE5022）と、NL34地区井戸（SE5023）の掘り下げ。ともに曲物を井戸枠とする。西壁南半土層図作製。
12.6　西区：西壁北半の土層図作製。東区：埋め戻し。
12.8　西区：SE5023の井戸枠取り上げ。SE5022は井戸枠三段目の写真を撮影後、実測。SB5000の柱穴断ち割りを北側柱列から開始。東区：埋め戻し。
12.9　西区：西北隅の井戸（SE5055）の掘り下げ。SB5000柱穴断ち割り。東区：埋め戻し。
12.10　西区：SE5055の掘り下げ。石組みが現れる。奈良時代の総柱建物（SB5050）の全体を知るために、西北隅を東西2.5m、南北13ｍで西に拡張。東区：埋め戻し終了。
12.11　西区：SB5000柱穴の断ち割りと実測。東区の塀（SA5080）は第45次調査区では未検出のため、その部分を東西４～５ｍ、南北22ｍの範囲で再調査。南半の約10ｍで柱穴を検出。
12.12　西区：柱穴断ち割り、実測。北壁土層図作製。SE5055は写真撮影後、曲物を取り上げて埋め戻す。拡張区でSB5050の柱穴を検出。東区：再調査区でSA5080の柱穴８基検出。写真撮影後実測。
12.13　西区：拡張区ではSB5050を東西３間まで確認。東区：再調査区柱穴の断ち割り、実測。砂を入れ一部埋め戻し。
12.15　西区：坊間路西側の塀（SA4990）はHNライン以北は未検出のため、北側の整地土を部分的に掘り下げて柱穴検出。
12.16　西区：Ｌ字に交わる側溝（SD4301・4311）を掘り下げる。SA4990は条間路に入った場所で途切れるのを確認し、実測。
12.17　西区：SD4301・4311完掘、写真撮影。SB5050の柱穴断ち割り。
12.18　西区：SB5050柱穴断ち割り。南辺から砂をまき、重機で埋め戻し開始。
12.19　器材を撤収し、砂をまき、埋め戻し。

Fig. 33　現地説明会（第50次）

Fig. 34　現地説明会（第50次）

E　第53次調査　6AJC-F区、6AJD-A・B・H・J区
1987年2月13日～5月12日

2.12　北区と中区の2箇所の調査区設定。第45・50次調査区と一部重複。北区から開始。
2.13～20　重機による表土掘削。
2.21　ベルコンを設置し、遺構検出開始。
2.23　南から清掃。地区杭を打つ。
2.24　南から遺構検出。重機掘削終了。
2.25　包含層（茶褐砂質土）を掘り下げ、南北大溝（SD4143）を探す。
2.26　北区：SD4143の西肩検出。中区：重機による表土掘削開始。
2.27　AR～FFラインで遺構面まで掘り下げ。
3.2　第45次調査区埋め戻し土除去後、北側の床土と灰褐土を掘り下げ。暗褐粘質土上面まで掘り下げる。
3.3　SD4143の上面、及び暗褐粘土まで掘り下げる。
3.4　暗褐粘土及び黄色粘土の層で耕作溝検出。
3.5　北端に達し、南へ折り返し遺構検出。
3.6　西半部には灰褐砂質土があり、掘り下げる。SD4143は、ほぼ南北に直線的に通る。
3.7　灰褐砂質土掘り下げ。
3.10　FJ～Hライン間の調査。FI91地区に円形の土坑（SE5920）があり、井戸と思われる。
3.11　FG～Cライン間の精査。
3.12　北区：FC～ARライン間の精査。小型の柱穴による2間×2間の南北棟建物（SB5925）検出。中区：重機掘削終了。
3.14　北区：AR～Qライン間の精査。86ライン西でSD4143の西肩検出。
3.16　北区：SD4143西肩は、AR～AOラインにかけて約3m西側へ広がる。南からSD4143の掘り下げ開始。中区：地区杭打ち。
3.17～19　北区：SD4143掘り下げ。
3.20　北区：SD4143掘り下げ。北まで行きつく。
3.23　北区：北端部の斜行する溝状遺構（SD5921）掘り下げ。

Fig. 35　SD4143調査風景

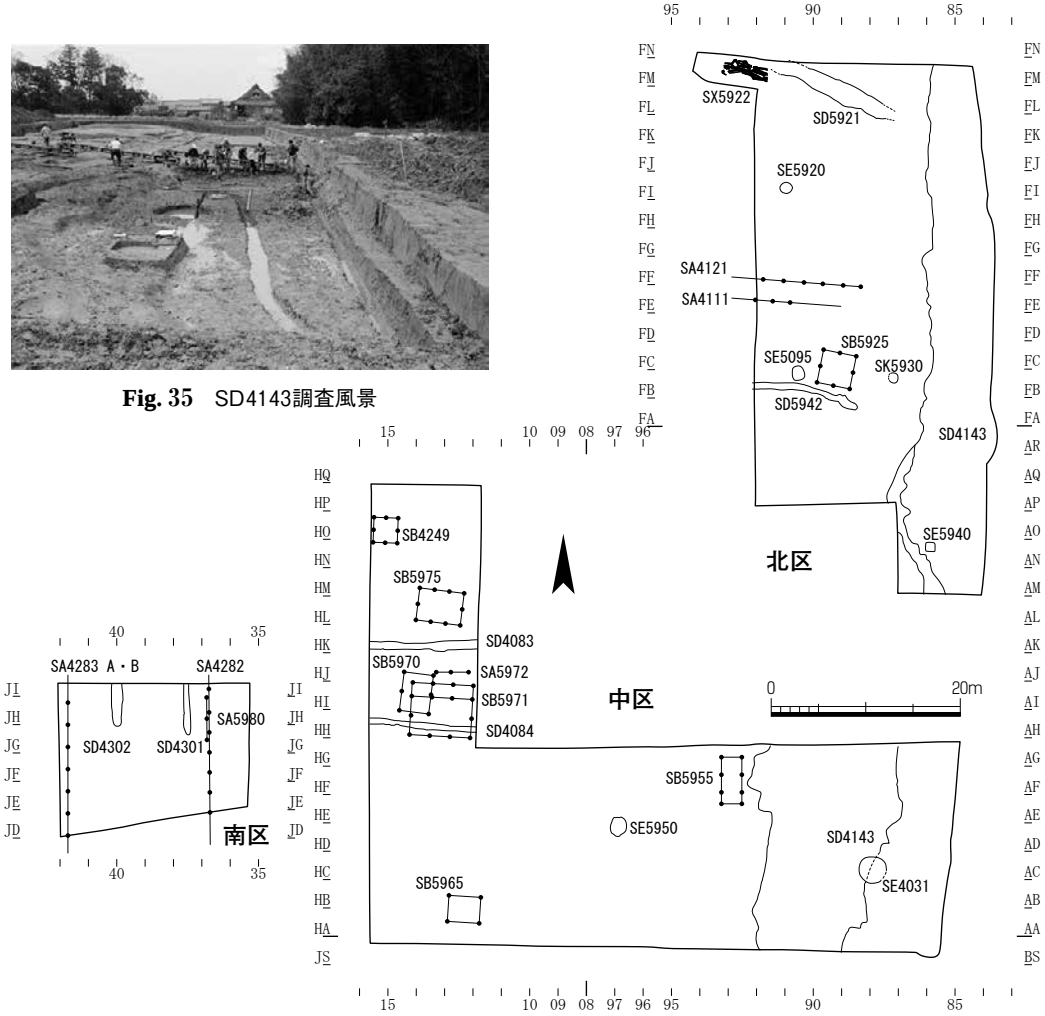


Fig. 36　第53次調査区　1:800

3.25　北区：北から清掃。
3.26　北区：清掃。写真撮影。
3.27　北区：遣方設定。中区：ベルコンを設置。
3.28　北区：遣方設定。中区：南辺部の排土。
3.30　北区：遣方設定。水糸配り。中区：88～91ライン間の灰褐土掘り下げ。
3.31　北区：平面実測。中区：東から進んでいたが、現場班交代に向けて西北端にベルコンを移動。
4.1　北区：実測。中区：本日より新現場班に引き継ぎ。HP～Ｊラインまで遺構検出。
4.2　中区：HJ～Ｂラインまで遺構検出。
4.3　北区：SD4143北端部を幅3ｍで掘り下げ。暗青灰微砂となり、底と判断する。北壁土層図作製。中区：HBラインから南端まで到達し、東へ向け08ラインまで遺構検出。
4.4　北区：SD4143をFJラインまで掘り下げ。中区：08～95ラインまで遺構検出。
4.6　北区：SD4143の掘り下げ。調査区北端部分で、青灰粘質土中から自然木が東西に数本まとまって出土（SX5922）。柱穴断ち割り開始。中区：90～95ラインまでの遺構検出。3間×1間の建物（SB5955）検出。
4.8　北区：FB87地区の土坑（SK5930）は浅い。AN85地区土坑（SE5940）は縦板組井戸と判明し、北半を断ち割り。FI91地区土坑（SE5920）は中央部の暗灰土を掘り下げる。中区：90～89ラインまでの遺構検出。
4.9　北区：SE5940北半断ち割り。土層図作製後、井戸枠取り上げ。中区：89～87ラインまでの遺構検出。
4.10　北区：SD4143の縦断面となる東壁土層図作製。FI91地区土坑（SE5920）南半を断ち割り。素掘りの井戸と思われる。中区：87ライン～東端までの遺構検出。
4.13　北区：西北隅の拡張。SX5922の木は自然木であるが、2～3本は上下を人工的に切った痕跡が認められる。中区：SD4143の西肩を検出。
4.14　北区：拡張区のSX5922を清掃、写真撮影、実測。中区：SD4143の掘り下げ。敷地西南隅部の東三坊坊間路がかかる位置に調査区を設定し、南区とする。表土掘削。
4.15　北区：SX5922の実測後、木を取り上げ。中区：HP～Ｈライン間を清掃しながら遺構検出。南区：表土掘削終了後、測量。基準点設定。
4.16　北区：SX5922の木材取り上げ。埋め戻し。中区：清掃、写真撮影。
4.17　中区：清掃、写真撮影。
4.18　中区：写真撮影。
4.20・21　中区：遣方設定。南区：遺構検出。
4.22　中区：平面実測。南区：遺構検出。
4.23　中区：平面実測。標高記入。南区：遺構検出。
4.24　中区：空撮用標定点設置。南区：坊間路東の塀（SA4282）の続きの柱穴を検出。これらの柱穴に接して、一回り小さい柱穴（SA5980）を検出。
4.25　北区：空撮用に清掃。中区：空撮標定点の設置。
4.27　南区：西から東へ遺構検出。坊間路西の塀（SA4283）の延長を検出。2回以上の建て替えがあった模様。坊間路両側溝（SD4301・SD4302）の延長を検出。非常に浅く、JHラインで途切れる。
4.28　南区：清掃後、写真撮影。
4.30　北・中・南区空撮。中区：井戸（SE5950）を半截。南区：遣方設定。
5.2　中区：半截した遺構の写真、土層図作製。南区：平面実測。
5.6　中区：北半の柱穴断ち割り。SE5950掘り下げ。南区：平面実測。標高記入。
5.7　中区：SB5970・5971の柱穴断ち割り。南北大溝（SD4143）の断ち割り開始。SE5950は地表下50㎝で土師器甕が転倒した状態で出土し、その一層下から「□記」の墨書がある土師器出土。
5.8　中区：SD4143を、南北2箇所で断ち割り後実測。西壁土層図作製。
5.11　中区：埋め戻し。南区：SA4282・4283柱穴断ち割り。
5.12　中区：埋め戻し終了。南区：SA4282柱穴断ち割り。浅いが、掘方が二段になるものを確認。土層図作製後、埋め戻し。調査終了。

Fig. 37　SE5940調査風景

Fig. 38　調査風景（第53次）

F　第133-7次調査　5AJC-M・N区
2004年9月4日～10月25日

9.4・7　調査区内の木の伐採作業。
9.8　調査区設定。重機による表土掘削開始。
9.9～14　重機掘削。
9.15　13～15ライン間の包含層掘り下げ。北へ向かって地形が傾斜している。
9.16　西端に行き着き、折り返して遺構検出。
9.17　16ラインで柱穴2基検出。南北塀（SA4170）の続きか。北の柱穴には柱根あり。
9.21　15ラインから、第45次調査区西端に設けた畦まで遺構検出。
9.22　SA4170の柱穴と、13～16ライン間の斜行溝（SD9952）掘り下げ。NP14地区に落ち込みがあり、遺物は古墳時代の土師器のみ出土。
9.24　16～17ライン間の遺構掘り下げ。
9.27　南西隅の灰褐砂質土の掘り下げ。写真撮影に向けて、第45次調査区清掃。
9.28　清掃。写真撮影。
9.30　排水作業。水糸配り。平面実測。
10.1　標高記入。SA4170柱穴断ち割りと西壁土層図作製。
10.4　斜行溝（SD9952）に土師器壺の底部を据えた遺構（SJ9953）を検出するが、SD9952とは無関係と判断する。13ライン西の畦の土層図作製。調査終了し、砂まき。埋め戻しまで一時中断。
10.18　埋め戻し開始。
10.25　埋め戻し終了。

G　第133-13次調査　5AJC－F・N区
2005年3月7日～4月18日

3.7　調査区設定。南北7m、東西40mの範囲のアスファルト除去。
3.8　重機掘削。改良地盤が固いために、掘削に手間取る。
3.9　重機掘削。
3.10　重機掘削。調査区東南隅で花崗岩を検出し、礎石であることが判明。根石もあるが、性格は不明。第47次調査区で旧流路を確認し、掘り下げ。
3.11　重機掘削。
3.14　重機掘削。南壁際で石組井戸（SE4177）検出。地区杭を打ち、東から遺構検出開始。調査区西端付近は攪乱が著しく、浅い遺構は残存しない。
3.15　重機掘削終了。東部にベルコンを設置し、遺構掘り下げ。遺構面は整地土とその上を流れた旧流路上面。遺構はいずれも中近世のもの。
3.16　東半の遺構検出、掘り下げ完了。東南隅の礎石に対応する遺構は、本調査区内にはない。石組井戸（SE4177）の埋土を約30cm掘り下げ。石組上面を清掃して石の輪郭を露出。
3.18　16ラインで南から延びるSA4170の柱穴列を検出したが、残存状況は良くない。FO17地区でSB4175の東北隅の柱を検出。その南方の柱穴は撹乱で失われている。SE4177は埋土を約60cm掘り下げたが、危険なため底部まで約1mを残して掘り下げを断念。曲物、瓦器等出土。
3.24　清掃。写真撮影。
3.25　水糸配り。平面実測。
3.28　標高記入。
3.29　標高記入。土層図作製。
3.30　NN15地区の大土坑は、埋土中に藤原宮期かそれ以前の土器を多量に含む。
3.31　NN15地区の大土坑は井戸（SE10175）と判明。埋土は大きく3層に区分されるが、大部分が井戸枠抜取穴の埋土で、掘方埋土はわずかに残るのみ。
4.1　SE10175の東壁に残されていた掘方埋土の掘り下げ。SA4170とSB4175の柱穴断ち割り。
4.4　北壁、東壁の土層図作製。砂まき。
4.5　土層図の注記。
4.6　南壁土層図作製。調査終了。
4.14　埋め戻し開始。
4.18　埋め戻し終了。

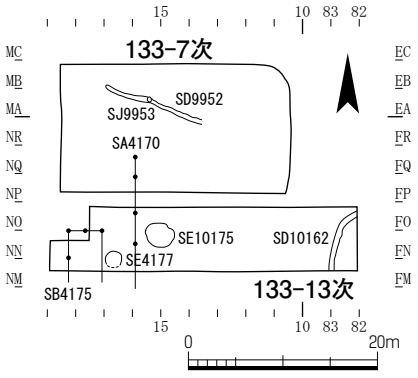


Fig. 39　第133-7・13次調査区　1:800

第Ⅲ章　遺　跡

1　遺跡の立地と地形

遺跡の立地　本調査地は奈良盆地の南東に広がる竜門山地の北西縁辺部に位置し、調査地東側には、竜門山地から北西に延びる尾根の末端である香具山がある。香具山は耳成山・畝傍山とともに大和三山と称されるが、耳成山・畝傍山が火山性であるのに対して、香具山だけは閃緑岩・斑糲岩といった硬岩石からなる残丘である。また、香具山と調査地の間には米川に向けて北流する中ノ川があり、調査地は中ノ川左岸の平坦な沖積地に位置する。

奈良盆地南東部を流れる河川は、基本的に北西方向の盆地中央部へ向かって流れるが、直線的な箇所や直角に折れ曲がるものが多い。したがって、河道の現状は条里制地割りなどの後世の人為的な改造を受けたものと考えられている[1]。このような視点に立つと、調査地東側の中ノ川は香具山の裾を廻りつつも、ほぼ真北方位を向いて直線的に流れたのちに米川に合流するため、人為的な改造を受けた河川の一つと考えることが可能である。それより以前については不

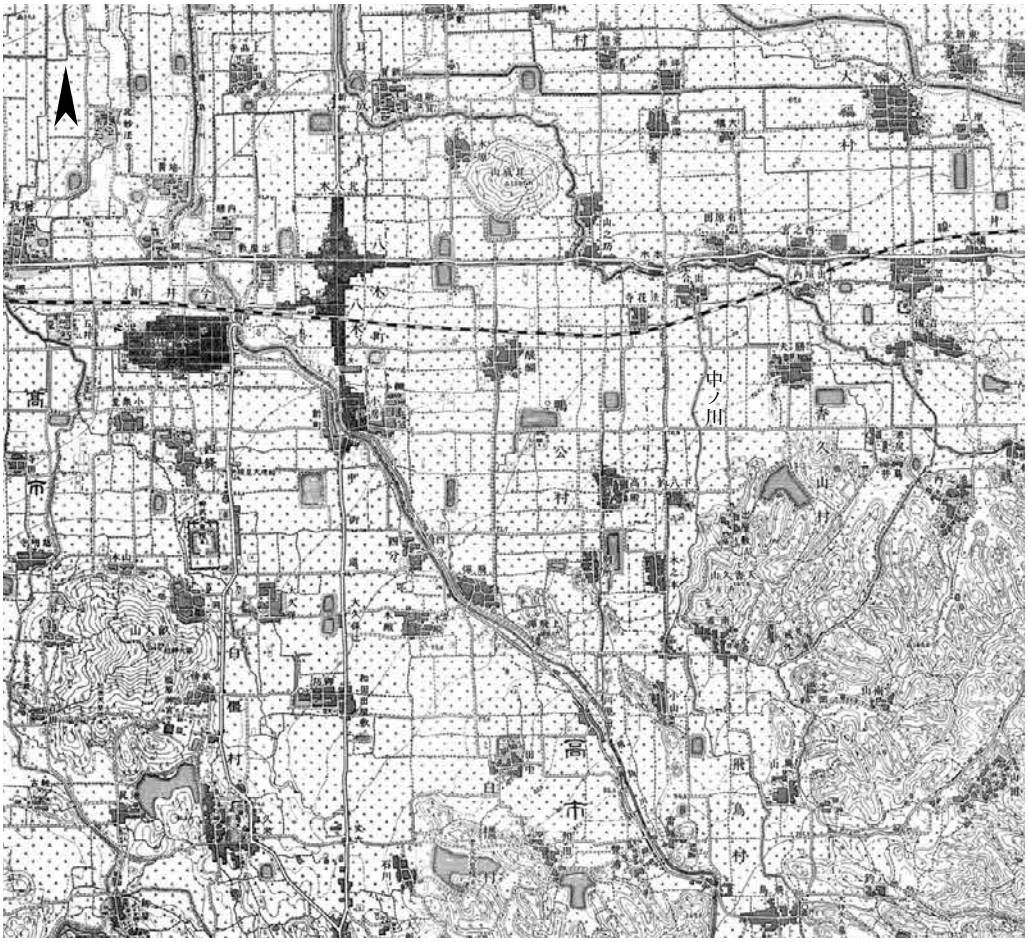


Fig. 40　**左京六条三坊周辺地形図**　1:40000　正式二万分一地形図「高田」「櫻井」（共に明治四十三年）に加筆。

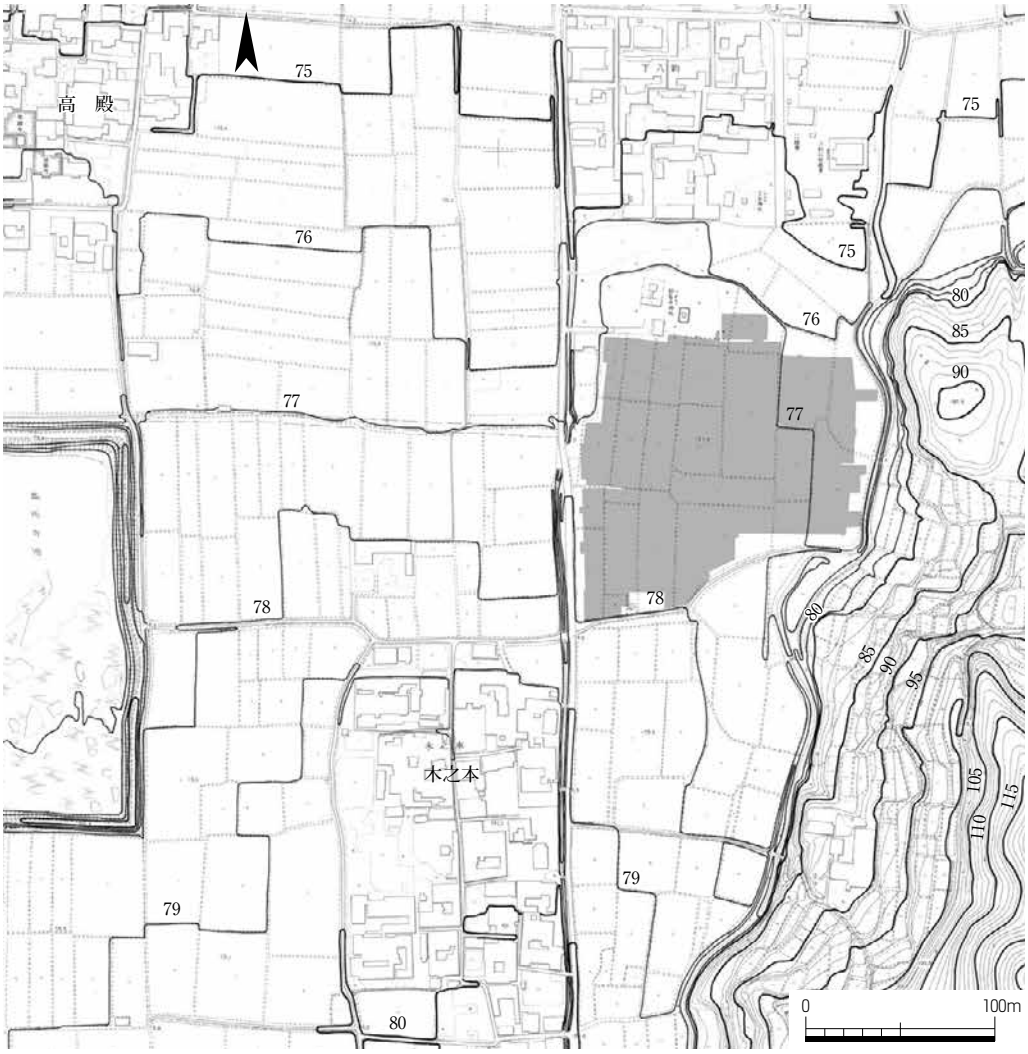


Fig. 41　**調査区と周辺の地形**　1:4000

明だが、調査区中央で確認した古墳時代以前の流路跡は、深さが明らかでないものの幅広で蛇行しながら北流しているため、旧河道にあたる可能性がある。

遺跡の地形　奈良盆地の南東部は、大半が低く平らな沖積地であり、これらの沖積は飛鳥川・米川などの竜門山地から北西へ流れる諸河川に起因する。そのため、沖積地は全体的に南東から北西方向にゆるやかに傾斜し、竜門山地に近い藤原宮跡周辺は、僅かながら扇状地性の段丘（低位段丘）として認めることができる。しかし、調査区西方にある高殿・木之本の集落から西側では、北西への傾斜が認められるのに対して、調査地では発掘前の水田の状況を見ると地形は南西から北東へ傾斜している。これは、高殿・木之本の集落は自然堤防状の微高地に立地し、調査区は中ノ川の浸食が及んでいた河道域と理解することができる。前述の古墳時代以前の旧河道だけでなく、調査区東端では中ノ川の浸食跡の一つを確認している。

以上の地形条件は、調査で確認した遺構群が平坦な沖積地の利用を意図したものと考えられる一方で、藤原京期の計画的な土地利用においては、河道により近い範囲では利用が少ないこととなって反映している。

1）丸川義広1987「自然環境と考古空間」『橿原市史』下巻。

2　遺構各説

本調査では、古墳時代から中世に至るまでの多数の遺構を検出した。これらは竪穴建物、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、溝、土坑、条坊道路など多岐にわたり、属する時代も様々である。これらの遺構の併存関係や変遷については、すでに『藤原概報16』・『同17』で報告し、また他の変遷案も出されている[1]。本報告書ではこれら既往の成果を参照しつつ、新たな検討を加えて変遷案をまとめ、第Ⅵ章1に示した。

それによると、藤原京造営期より前の時期は古墳時代と7世紀中頃の2時期に分けられ、Ⅰ期、Ⅱ期とする。造営期を含めた藤原京期についてはⅢ期とし、藤原京造営期、藤原京期前半、藤原京期後半の3時期に細分し、それぞれⅢ-A期、Ⅲ-B期、Ⅲ-C期とした。これ以降の時期については、奈良時代をⅣ期とし、それ以降は平安時代前・中期と平安時代後期以降の2時期に分けて、Ⅴ期、Ⅵ期とした。本節で扱う遺構の時期は、基本的にこの変遷案にしたがうこととする。

記載にあたっては、本調査区の遺構の中核をなす時期である藤原京期（Ⅲ期）、奈良時代（Ⅳ期）の遺構に関して最初に記し、以下、7世紀中頃（Ⅱ期）、古墳時代（Ⅰ期）、平安時代前・中期（Ⅴ期）、平安時代後期以降（Ⅵ期）と進めた。最近の藤原宮や藤原京の調査成果により、藤原京造営期にも塀や建物の遺構が存在することが判明してきており、今回はその時期の遺構も藤原京期に含めた（Ⅲ-A期）。また、藤原京期の遺構は前半（Ⅲ-B期）と後半（Ⅲ-C期）の変遷があるが、ともに四町占地であるために一括して記述した。井戸については、主要なものを本文にて記述し、その他のものは475頁の別表1に概要を記す。

調査区の旧状は水田であり、西から東に向かってゆるやかに傾斜する。地盤の高い調査区西半部では遺構の遺存状態は良好であるが、調査区東端の中ノ川沿いでは遺構検出面が約1.5m下がり、遺構の密度が比較的薄くなる。また、水田によっては深く地下げしている箇所もあり、遺構が失われているところも多い。

調査区の基本層序は、上から耕作土、床土、包含層が堆積する。包含層の状況は場所によって異なるが、おおむね灰褐色土、茶褐色砂質土が堆積し、その下が黄褐色粘質土の地山となる。灰褐色土は調査区のほぼ全面に広がり、中世の遺物を含む。茶褐色砂質土は弥生時代の遺物を含み、遺構の検出はこの茶褐色砂質土、ないしは地山上面で行った。また、古墳時代の流路にあたる部分では、その埋土上層にあたる灰色砂層の上面で遺構を検出した。地山は基本的には黄褐色粘質土であるが、場所により灰褐色砂質土や暗褐色砂礫土となる部分がある。

第47次調査区SD4130の肩付近などで、灰褐色土と茶褐色砂質土の間に砂交じり灰褐色砂質土の薄い層がみられ、整地土の可能性もあるが、部分的なものであり、藤原京期の明確な整地土は確認できなかった。

建物平面模式図の記号については次のように使い分ける。又、番付は、東南隅を「イ一」とし、南北方向を「イ、ロ、ハ……」、東西方向を「一、二、三……」とした。

○ 掘方・抜取り穴のみの柱穴　● 柱根を残す柱穴

⦿ 柱痕跡を残す柱穴　⊗ 礎板（礎板石）を残す柱穴

A　藤原京期の遺構

i　藤原京造営期（Ⅲ-A期）の遺構

条坊道路が通り、一町占地の時期。先に条坊遺構について概観し、その後各坪の遺構について記述する。

a　条坊関連遺構（Pl. 2～10，Ph. 5・6・8・12・22・23・30・36・41・42）

六条条間路SF4750　第50次調査西区から第46次調査区、第47次調査区、第45次調査中央区にかけて検出した東西方向の道路。北側溝SD4139と南側溝SD4311の、いずれかを確認した総長は約87ｍにおよぶ。第47次調査区で両側溝を揃って検出した場所が約19ｍあり、側溝心々間距離は8.8ｍである。上面は強く削平されており、道路を築いた整地は確認されず、両側溝とも東側では礫交じりの暗褐砂質土の地山面から掘り込んでいる。大土坑SK4327以東では南側溝と考えられていたSD4119がSD4311より３ｍ北に位置し、道路幅が途中で３ｍ狭くなる可能性が指摘されていた。しかし、今回は一連の遺構とみなすことはせず、SK4327以東では南側溝は削平されたか、施工されなかったものと考えたい。道路心は坊の南北二等分線より北へ14ｍずれるが、南側溝SD4311が東三坊坊間路東側溝SD4301と繋がること、側溝の埋土の状況が似ていることから、条坊道路であると判断した。

六条条間路北側溝SD4139（Fig. 42）　第47次調査区から第45次調査中央区にかけて検出した東西方向の素掘溝。合わせて約57ｍを確認した。西端はⅢ-Ｂ期の塀SA4730から17ｍ西まで延び、東端はⅢ-Ｂ期の南北溝SD4131付近で途切れる。東端は、『藤原概報16』では第45次調査区東端までを一連の溝とみていたが、検出状況や断面形状からみて、SD4131より東は中世の南北溝SD4141とつながり、第50次調査東区と第53次調査北区で検出した東西溝SD5942と一連となるとみて、SD5942に含めた。SD4131との重複関係は検出時に明らかにすることができなかった。検出面での幅は1.1～2.0ｍ。北岸は場所によりやや蛇行するが、南岸はほぼ直線となる。断面は方形に近く、底は平坦である。検出面からの深さは20～40㎝を測る。底面の標高は西端で75.6ｍである。

六条条間路南側溝SD4311（Fig. 42）　第50次調査西区から第46次調査区、第47次調査区にかけて検出した東西方向の素掘溝。合わせて48ｍを確認した。西端は東三坊坊間路東側溝SD4301に接続し、東端は藤原宮期の土器を出土する大土坑SK4327に連なる。検出面での幅は0.6～1.3ｍ、深さは20～30㎝を測る。埋土は地山由来と思われる礫交じりの暗褐色砂質土で、一気に埋め立てた状況を呈する。底部には灰色の粘質土が10㎝ほど堆積しており、溝の機能時にはごく

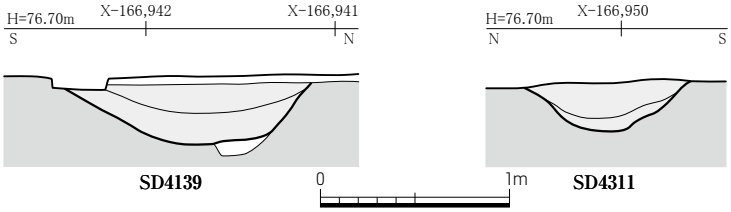


Fig. 42　SD4139・4311断面図（Y-16,707）　1:40

ゆるやかな水流、または滞留の状態であったことがうかがえる。溝底は基本的には西に向かって低くなり、SD4301との接続部付近でごくわずかに深くなる。底面の標高は西端で76.3ｍである。SK4327との重複関係は、検出時には明らかにすることができなかった。埋土の状態から判断すると、SK4327の上層とSD4311が同時に埋没した可能性も否定できないが、SK4327出土の土器の方がやや新しい様相を示す。

東三坊坊間路SF4300　第50次調査西区から第46次調査区、第53次調査南区にかけて検出した南北方向の道路。SD4301を東側溝、SD4302を西側溝とし、確認した総長は約87ｍにおよぶ。側溝心々間距離は7.4ｍである。上面は強く削平されており、道路を築いた整地は確認していない。両側溝には流水または滞水の痕跡は特にみられず、また、両側溝の埋没後にⅢ－Ｂ期の建物SB5000やⅢ－Ｃ期の建物SB4340の柱穴を掘り込んでいることから、SF4300が道路として機能していた期間は比較的短い可能性が高い。道路心は朱雀門の心から東に666ｍ（約2250尺＝2坊半）に位置する。

東三坊坊間路東側溝SD4301　第53次調査南区から第46次調査区、第50次調査西区に向けて北流する南北方向の素掘溝。合わせて約87ｍを確認した。北端は六条条間路南側溝SD4311に接続し、南は遺構面の削平により、第53次調査南区で途切れる。検出面での幅は0.8～1.3ｍ、深さは10～60㎝を測り、断面は法面がなだらかな円弧状または逆台形となる。埋土は砂質土で、底部に流水や滞水の痕跡は特にみられない。溝底は基本的には北に向かって低くなり、底面の標高は北端で76.3ｍである。東南坪中央部の東西溝SD4285との交点付近で、溝底に30㎝ほどの段差がみられ、北が深い。後述するように、東三坊坊間路西側溝SD4302の溝底にも位置は異なるが同様の段差が認められ、施工時の作業工程やその単位をうかがうことができる。溝埋土の上からⅢ－Ｂ期の建物SB5000やⅢ－Ｃ期の建物4340の柱穴を掘り込んでおり、これらの建設以前に廃絶したものである。

東三坊坊間路西側溝SD4302　第53次調査南区から第46次調査区、第50次調査西区に向けて北流する南北方向の素掘溝。第46次調査区では一部で後世の強い削平を受けており、断続的に約87ｍを確認した。北端は六条条間路SF4750の南側で止まるが、西側にその南側溝は検出していない。南端は第53次調査南区で、削平のために途切れる。検出面での幅は0.6～1.1ｍ、深さは５～45㎝を測る。断面は方形に近く、底は平坦である。埋土は黄灰色の砂質土で、底部に流水や滞水の痕跡は特にみられない。溝底は基本的には北に向かって低くなり、底面の標高は北端で76.4ｍである。東三坊坊間路東側溝SD4301と同様に、東南坪中央部の東西溝SD4285の延長付近で溝底に30㎝ほどの段差がある。他にも段差がみられるところが数か所あり、溝底はなだらかな傾斜をもつものではなかった可能性がある。流水による影響をあまり受けず、施工時の姿がそのまま残ったものとも考えられる。溝埋土の上面からⅢ－Ｂ期の建物SB5000の柱穴が掘り込んでおり、SB5000の建設以前に廃絶したものである。

南北大溝SD4143（Fig.43）　調査区全体の東端で検出した、北流する南北溝。第45次調査Ⅰ・Ⅱ区を含め、第53次調査北区、第50次調査東区、第53次調査中区で、長さ94ｍにわたり西岸を確認した。西岸は調査区北半ではほぼ直線であるが、南半では大きく西に広がる。東岸を確認した箇所はなく、全体の幅は不明である。第45次調査では、Ⅰ区において西岸から19ｍ分を確認しており、現地形等を勘案して幅は25ｍほどと推定している。香具山の西麓に沿って流路は

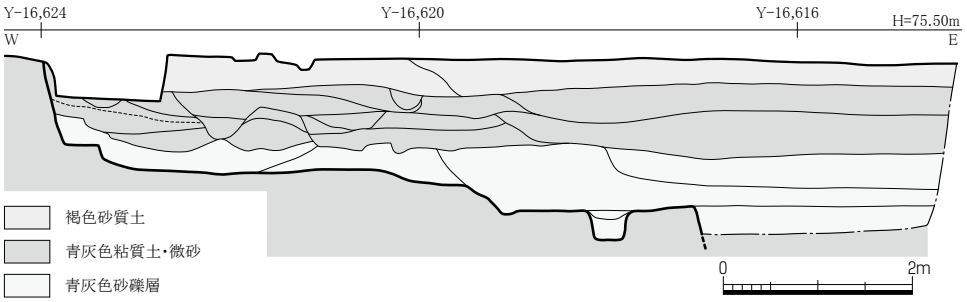


Fig. 43　SD4143断面図（X-166,968）　1:80

蛇行し、調査区より北では直線状に延びるという、現在の「中ノ川」と大差ない流路を調査区周辺では基本的にたどっていたと推定される。

深さは検出面から最大1.5mを掘り下げたが、底の確認には至っていない。検出長が長く、埋土の状況は場所により異なるが、おおむねは以下のとおりである。最上層は厚さ30cmの褐色砂質土で、流路の西肩よりもやや西にはみ出して堆積しており、最終的な流路埋め立て土とみられる。この層からは12世紀後半の土器が出土しており、その時期がわかる。その下に厚さ60cmほどの青灰色の粘質土や微砂が堆積しており、この層には中世の遺物を含む。その下に青灰色の砂礫層を、最大70cm確認した。磨滅した瓦や土器を含むこの層は固くしまっており、奈良時代や藤原宮期、および断片的な飛鳥Ⅰ・Ⅱの土器を含む。底面には段を形成する箇所がみられ、その直上にこの砂礫層が堆積する。幅や深さ、流路を少しずつ変えながら、堆積と激しい水流による浸食を繰り返していた様子がうかがえる。

b　東北坪の遺構（Pl. 2～4，Ph. 4・6・9・10・22・23・25・30・43）

南北塀SA4170　第45次調査中央区と第133-7・13次調査区で検出した掘立柱南北塀。20間分、約42mを確認した。南端はSA4171と接続し、北端は第133-7次調査区内で途切れる。柱間寸法は場所により1.8～3.1mとばらつきがある。特に第133-13次調査区で検出した、南から15～17基目の間は柱間寸法が3.1mで、これ以外の箇所は1.8～2.4mにおさまる。柱穴は楕円形、隅丸方形、長方形や不整形と様々で、長辺の長さは0.6～1.3mと、形や大きさにばらつきがみられる。深さはおおむね検出面から40～60cmを測るが、場所により遺構面が削平され、深さ15cm程度しか残らない柱穴もある。北端の柱穴には径14cmの柱根が遺存するが、北に大きく傾いており、廃絶時の抜取または切断作業により傾いたと考えられる。SA4172とおよその柱筋と方位を揃え、柱穴に重複関係があり、SA4170の方が古い。南から7・8基目の柱穴は東西大溝SD4130に壊されており、それより古い。SA4170・4171・4732・5005が一連の塀で、南に門SB4735を開く、区画施設に相当すると考えられる。西限の区画塀SA5005との距離は、66.1mとなる。

南北塀SA4172　第45次調査中央区で検出した掘立柱南北塀。6間分、12.6mを確認した。SA4170とおよその柱筋と方位を揃え、柱穴が重複し、それより新しい。南端はSD4130以南には延びず、北に隣接する第133-13次調査区では検出していない。柱間寸法は場所により若干ばらつきがあるが、おおむね2.1m（7尺）等間である。柱穴は隅丸方形または東西に長い隅丸長方形で、長辺は0.6～0.9mである。深さは検出面から25～30cmを測る。柱穴の埋土には炭化物

を含み、柱痕跡や柱根は確認していない。

東西塀SA4171A・B　第47次調査区で検出した掘立柱東西塀。SA4171Aは9間分、約20mを確認した。柱穴は9基のみ確認しているが、西端から4基目はSA4171Bの柱穴と完全に重複する。柱間寸法は場所によりばらつきがあり、2.1～3.0mで、2.4mまたは2.5mとなる箇所が多い。柱穴は隅丸方形で、一辺は0.7～0.9mである。深さは検出面から40～55cmを測る。柱痕跡や柱根は確認していない。Ⅲ-C期の内郭東限の南北塀SA4729と遺構の重複関係があり、それより古い。

SA4171Bは、SA4171Aを同位置で建て替えたもの。12間分、約29mを確認した。東端はSA4170の南端に接続し、西端は門SB4735の東南隅柱より0.6m東、1.4m南の位置で止まる。柱間寸法は場所によりばらつきがあり、2.1～3.0mで、2.4m前後となる箇所が多い。柱穴は隅丸方形で、長辺は最大1.3mとなるものがあるが、おおむね0.8m程度である。深さは検出面から25～45cmを測る。西端から6基目の柱穴には柱痕跡として灰褐色の粘質土が残り、柱径は20cm前後であったと推定される。Ⅲ-B期の南北塀SA4730と遺構の重複関係があり、それより古い。区画の南限塀。

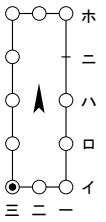
東西塀SA4732　第47次調査区と第50次調査西区で検出した掘立柱東西塀。西半を中世の溝SD4743によって壊されており、東側5間分12.2mと、西端の柱穴1基を確認した。総長は28.3m、12間になると推定される。東端は門SB4735の西南隅柱より0.6m西、1.4m南の位置で止まり、西端はSA5005の南端に接続する。柱間寸法は東側の5間で2.2～3.8mで、2.4m前後となる箇所が多い。柱穴は隅丸または不整形な長方形で、長辺は0.6～1.0mである。深さは検出面から30～55cmを測る。柱痕跡や柱根は確認していない。Ⅲ-B期の建物SB4737およびⅢ-C期の建物SB4738と遺構の重複関係があり、それより古い。東西塀SA4171の延長上に位置し、ともに区画の南限塀である。

南北塀SA5005　第50次調査西区で検出した掘立柱南北塀。中間を東西大溝SD4130に壊される。北側で8間分16.4m、南側で4間分9.2mを検出し、総長は約38mで19間になると推定される。南端はSA4732と接続し、北端は中世の井戸SE5055に重複するため断定はできないが、調査区外へ延びると考えられる。柱間寸法はSD4130の両岸で確認されている部分においては、南端の1間が3.0mとなる以外は2.0m前後で、それによりSD4130に壊されている部分は6間になると推定した。柱穴は隅丸方形で、長辺は0.6～1.0mで0.8m前後になる箇所が多い。深さは検出面から30～60cmを測る。北端から3基目の柱穴には灰色粘質土の柱痕跡があり、柱径は12cm前後と推定される。遺構の重複関係により、Ⅲ-C期の建物SB5035・4738、Ⅳ期の建物SB5050より古い。一連の区画施設の西限塀である。

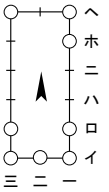
門SB4735　第47次調査区で検出した、桁行3間×梁行1間の掘立柱東西棟建物。建物の規模は桁行8.0m×梁行3.2mで、柱間寸法は桁行が2.67mである。柱穴は隅丸方形で、一辺が0.9～1.4mである。深さは検出面から55～80cmほどである。東南隅の柱穴には柱痕跡が灰色粘土として残り、柱径は18cmほどである。南側柱筋が東西塀SA4171・4732より1.4m北にあり、南北塀SA4170と南北塀SA5005による区画の中軸線に心が一致する。SA4170・4171・4732・5005が一連の区画施設で、区画の南辺中央に開く門。

東西塀SA4760　第47次調査区で検出した、4間の掘立柱東西塀。長さは10.2m、柱間寸法は

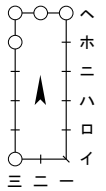
2.55m。柱穴は1辺0.9～1.1mの隅丸方形で、検出面からの深さは50cmほどである。両端の柱穴には柱痕跡が暗灰色の粘質土となって残り、西端の柱痕跡は中心に木質も遺存する。柱痕跡から推定される柱径は20cmである。門SB4735の北側柱筋から15.5m北、中央の柱がSB4735の中軸線に位置し、目隠し塀と考えられる。



掘立柱建物SB4175　第45次調査中央区から第47次調査区、第133-13次調査区にまたがって検出した、桁行4間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。ニ一の柱穴がSE4177に壊されなくなっている。建物の規模は桁行11.5m×梁行3.6m、柱間寸法は桁行2.88m、梁行が1.8mである。柱穴は隅丸方形で、一辺0.7～0.8mを測る。柱穴の深さは検出面から40cm程度が残る。妻柱の掘方は一辺0.6m程度、深さは側柱筋と変わらない。イ三の柱穴に柱痕跡があり、柱の径は15cm程度と推定される。

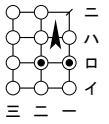


掘立柱建物SB4761　第45次調査中央区から第47次調査区で検出した、桁行5間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。第45次調査では南北塀SA4173と東西塀SA4174と認識していたが、第47次調査で北西隅の柱穴を検出したことにより、南北棟建物と判断した。東側柱筋の柱穴のうちハ一・ニ一は東西大溝SD4130に壊され、西側柱筋の柱穴のうちハ三・ニ三・ホ三は調査区外にあたる。SD4130の両岸で南妻の柱穴を確認しているが、北妻柱は検出していない。建物の規模は桁行9.7m×梁行4.1mで、柱間寸法は桁行が1.94m、梁行が2.05mである。柱穴は隅丸または不整形な方形で、一辺が0.7～1.2mである。深さは検出面から35～55cmほどである。柱穴埋土には拳大の石が入り、南妻の柱穴では特に多くみられる。ヘ三の柱穴が西側の建物SB4762と重複関係があり、それより新しい。ロ一の柱穴が南北塀SA4170と重複関係があり、それより古い。

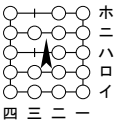


掘立柱建物SB4762　第45次調査中央区、第47次調査区で検出した、桁行5間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。東西大溝SD4130の北岸でホ三・ヘ一・ヘ二・ヘ三の柱穴を、南岸でイ三の柱穴を確認している。建物の規模は桁行9.4m×梁行3.7mで、柱間寸法は桁行が1.8m、梁行が1.85mである。柱穴は隅丸または不整形な方形で、一辺が0.7～0.9mである。深さは検出面から40～80cmほどである。ヘ一の柱穴が東側の建物SB4761と重複関係があり、それより古い。

土坑SK4734　第47次調査区で検出した不整形土坑。南北方向4.7m、東西方向1.9m。検出面からの深さは50cmで、底部にはところどころ10～20cmの窪みがある。壁の傾斜は比較的急で、底部の東西壁際に杭跡とみられる径5～10cmの円形小穴が並ぶ。埋土からは三重弧文軒平瓦や古代の道具瓦が出土した。遺構の重複関係があり、東西大溝SD4130より古く、建物SB4762より新しい。



掘立柱建物SB5020　第50次調査西区で検出した、総柱の掘立柱南北棟建物。桁行3間×梁行2間、建物の規模は桁行5.0m×梁行3.6m。柱間寸法は桁行が1.67m、梁行が1.8m。柱穴は隅丸または不整形な方形で、大きさは60～90cmである。側柱の柱穴より、内部の柱穴のほうが小型である。深さは検出面から30～50cmを測る。ロ一・ロ二の柱穴に柱痕跡が灰色または黄灰色の粘質土となり遺存する。痕跡から推定される柱径は20～25cmである。ニ一の柱穴はⅥ期の井戸SE5023に壊されている。



掘立柱建物SB4140　第45次調査中央区で検出した、桁行4間×梁行3間の掘立柱南北棟建物。ロ二・ハ二・ニ二の柱穴は間仕切りと考えられる。また、ロ三・ニ三の位置にも小型の穴があり、間仕切りなどであった可能性が考えられる。建物の規模は桁行5.3m×梁行4.9m、柱間寸法は桁行が1.33m、梁行が1.63mである。柱穴は一辺0.6～1.0m前後の隅丸方形または不整形な楕円形で、埋土は明茶褐色の砂質土が主体である。深さは検出面から30～45cmを測る。間仕切りと考えられる内部の柱穴は、一辺0.6mほどの不整形長方形で、深さも検出面から20cm程度と浅い。Ⅳ期の建物SB4150と柱穴の重複はないが遺構の重複関係があり、同時併存はしない。小型で間仕切りが多く、建物の性格は道具や物を置く小屋と考えられる。

井戸SE10175（Fig. 44）　第133-13次調査区で検出した井戸で、井戸枠は全て抜き取っている。平面は南北2.5m、東西2.7mの不整形な楕円形で、底面では南北1.5m、東西1.9mの隅丸方形を呈する。深さは検出面から1.6mを測る。埋土は橙黄色粘土塊交じりの灰色粘質土で、井戸枠抜取後に一気に埋め立てた土とみられる。底部は比較的平旦で、地山とみられる暗灰色砂礫土を検出している。方形板組の井戸であった可能性が考えられる。埋土からは藤原宮期の土器が出土した。

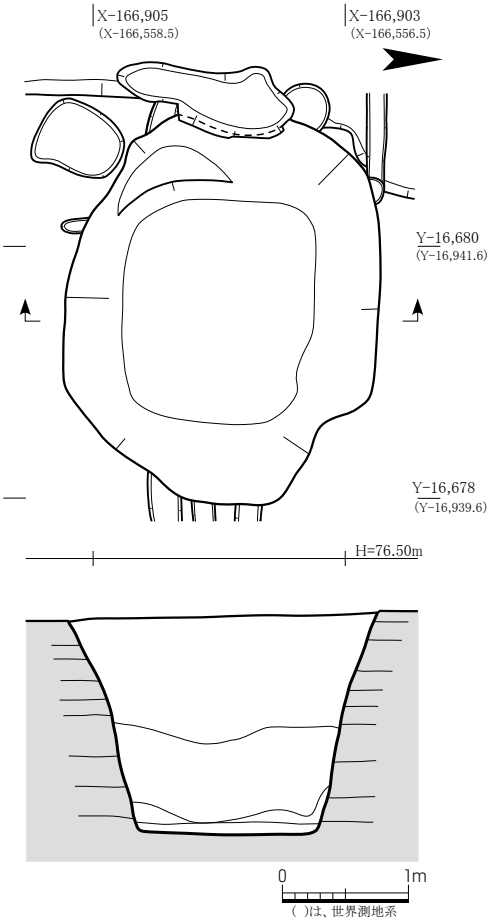


Fig. 44　SE10175平面図・断面図　1:60

c　東南坪の遺構（Pl. 6～8・10・11，Ph. 12・13・17・18・40・42）

南北塀SA4282　第46次調査区、第53次調査南区で検出した掘立柱南北塀。24間分、50.6mを確認した。南端は調査区外に延びる。北側は削平されたためか検出できず、第50次調査西区でも延長上に検出していない。柱間寸法はおおよそ2.1m等間である。柱穴は0.8～1.1mの隅丸方形。深さは検出面から15～30cmと非常に浅く、強い削平を受けているとみられ、特に北端の柱穴は15cmほどしか残存しない。明確な柱痕跡や柱根は確認していない。柱穴に重複関係があり、Ⅲ-C期の建物SB4340およびⅥ期の井戸SE4463より古い。東三坊坊間路東側溝SD4301の2m東に位置し、南から15基目にSA4284が接続する。六条三坊東南坪西限を限る南北塀。

東西塀SA4284　第46次調査区で検出した掘立柱東西塀。22間分、45.7mを確認した。3.8m北側に東西溝SD4285を伴う。柱間寸法はおおよそ等間隔で、2.08mである。柱穴は40～75cmの隅丸方形または不整形方形。深さは検出面から25～30cmを測る。東から11基目には黄灰色粘土

の柱痕跡がある。遺構に重複関係があり、Ⅲ-Ｂ期の南北塀SA4286、Ⅲ-Ｃ期の建物SB4330、Ⅳ期の建物SB4350より古い。六条三坊東南坪の南北二等分線よりやや北に位置し、坪を南北に分ける塀と考えられる。

東西溝SD4285　第46次調査区で検出した、東西塀SA4284に伴う東西方向の素掘溝。幅0.6～1ｍ、深さ0.2ｍ、長さ45ｍ。遺構の重複関係があり、Ⅴ期の大土坑SK4390より古い。SA4284の北3.8ｍに位置し、西端は東三坊坊間路東側溝SD4301に接続し、東端はSA4284の東端と揃う。

南北溝SD4255（Fig. 45）　第45次調査中央区から第46次調査区にかけて検出した南北方向の素掘溝。合わせて約28ｍ分を検出した。南端で、東西溝SD4083とＬ字状に接続する。幅は0.7ｍ、検出面からの深さは25～35㎝を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は底に粘質を帯びた黄灰色細砂が薄く堆積し、上層は約10㎝の暗黄灰色砂質土となる。その上面に７世紀中葉の丸・平瓦が堆積するが、溝全体ではなく断続的に瓦が集積する状況である。ただし、瓦は溝の外や溝肩より上まで広がることはない。遺構の重複関係があり、Ⅲ-Ｃ期の東西溝SD4119およびⅥ期の井戸SE4470より古い。

Fig. 45　SD4255瓦出土状況（北から）

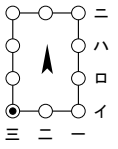
東西溝SD4083　第46次調査区、第53次調査中区、第45次調査Ⅲ区、第50次調査東区にかけて検出した東西方向の素掘溝。西端で南北溝SD4255に流れ込む。合わせて23.2ｍ分検出した。幅は１ｍ前後、深さは検出面から最大で20㎝を測る。

南北溝SD4256　第46次調査区で検出した南北方向の素掘溝。北端は南北溝SD4255から延び、南端で東西溝SD4084と接続する。幅0.5～1.0ｍ、長さ7.5ｍ、検出面からの深さは15㎝ほどの非常に浅い溝である。

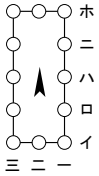
東西溝SD4084　第46次調査区東端から第53次調査中区にかけて検出した、東西方向の素掘溝。西端でSD4256と接続する。長さ11.8ｍ分を検出した。幅0.5～0.6ｍ、深さは検出面より10～20㎝を測る。方位は東で南に8.8° 振れる。

南北溝SD4257　第46次調査区で検出した南北方向の素掘溝。SD4256の約7.0ｍ西に位置し、断続的に総長約34ｍを確認した。非常に浅く、検出面からの深さは最大で20㎝程度が残るのみである。Ⅲ-Ｃ期の南北塀SA4320と遺構の重複関係があり、それより古い。方位は北で東へ1.7° 振れる。

掘立柱建物SB4290　第46次調査区で検出した、桁行３間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行6.4ｍ×梁行4.4ｍ、柱間寸法は桁行が2.13ｍ、梁行が2.2ｍである。柱穴は一辺0.9～1.0ｍの隅丸方形で、深さは検出面から25㎝程度である。イ三の柱穴には柱痕跡が暗灰色の粘土として残る。遺構に重複関係があり、Ⅳ期の建物SB4351およびⅥ期の井戸SE4460より古い。



掘立柱建物SB4291　第46次調査区で検出した、桁行４間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物



の規模は桁行8.7m×梁行3.3m、柱間寸法は桁行が2.18m、梁行が1.65mである。柱穴は一辺0.6mほどの隅丸方形または東西に長い長方形で、深さは検出面から35cm程度である。

土坑SK4325　第46次調査区で検出した大規模な土坑。南北7.2m、東西5.5mの不整形な楕円形を呈する。底面は凹凸があり、深さは検出面から30～70cmを測る。複数の土坑を重ねて掘ったような様相を呈しており、特に東南隅には一辺2.2mの隅丸方形に深く掘り込んだ部分があり、深さは検出面から1.6mを測る。この部分の埋土は、下から青灰色の微砂と粘質土が堆積し、その上にチョウナのはつり屑などの木屑を多量に含む腐植土層がある。土坑全体の埋土は、下層に瓦や土器等の遺物を多く含む山砂が、土坑の肩から流れ込むように細かい層をなして堆積しており、上層は山土交じりの灰褐色土で一気に埋めている。上層埋土には7世紀中葉の瓦を含む。SK4325の性格は、Ⅲ-A期の施設解体時の塵芥処理用の土坑と考えられる。土坑を埋めた後には、同位置にⅢ-B期の井戸SE4335を掘削する。

土坑SK4271　第46次調査区で検出した井戸状の土坑。平面は南北1.4mの円形で、検出面からの深さは90cm。断面形状は深さ70cmまではすり鉢状で、その下は幅80cmで垂直に掘り下げる。埋土は褐色の粘質土が主体で、人為的に埋め立てたものとみられる。埋土からは7世紀中頃の瓦や、飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が出土した。遺構はⅢ-C期の建物SB4333の内部に位置し、それより古い。

d　西南坪の遺構（Pl. 6・10, Ph. 12・30・42）

南北塀SA4283A・B（Fig. 46）　第46次調査区と第53次調査南区で検出した掘立柱南北塀。全長47.7m、21間分を検出し、南北ともさらに延びる可能性がある。第46次調査区西北部に位置する水田は地下げが著しく、多くの遺構が消滅してしまっている。SA4283Aは、21間分22基の柱穴を検出した。柱間寸法は1.8～2.7mとやや不揃いだが、2.2mまたは2.4mとなる箇所が多い。柱穴は一辺0.6～0.8mの隅丸方形。柱穴底面の標高は南から8～13基目で76.7～77.0mと低く、その南北両側は高い。それにともない、柱穴の深さは南から8～13基目で検出面から50～70cm、その南北両側では検出面から10～25cmを測る。柱掘方埋土は暗灰褐色の粘質土を基本とし、深い柱穴では層状をなすものもある。南から13基目の柱穴では柱痕跡が粘質土となって残り、その径は約15cmである。

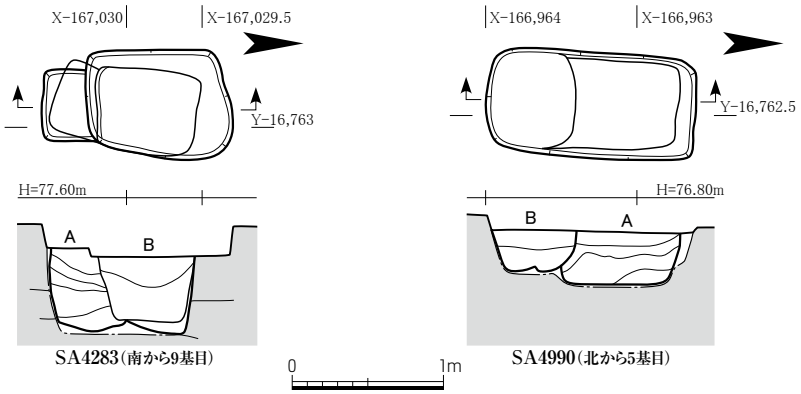


Fig. 46　SA4283・4990柱穴平面図・断面図　1:50

SA4283Bは、SA4283Aのうち南から８～10基目の３基と、18～22基目の５基の柱穴をほぼ同位置で建て替えたもの。８～10基目は柱間寸法2.0m等間、柱穴は長辺0.8mほどの隅丸方形。18～22基目は柱間寸法2.2m等間で、柱穴は一辺0.4～0.6mの隅丸方形である。いずれも深さは検出面から45～60cmを測る。埋土は黄褐色粘質土を基本とし、層状をなすものもある。東三坊坊間路西側溝SD4302の５m西に位置し、柱筋を北側に延長した位置に南北塀SA4990A・Bを確認している。六条三坊西南坪東限を限る南北塀。

南北塀SA4990A・B（Fig. 46）　第50次調査西区西端で検出した掘立柱南北塀。柱穴が重複しており、２時期の建て替えがある。SA4990Aは８間分９基の柱穴を、SA4990Bは８間分８基の柱穴を確認している。南は調査区外へ延び、第46次調査区北側では確認できず、南延長上で南北塀SA4283を検出している。柱間寸法はSA4990Aが2.3～3.4m、SA4990Bが2.4～2.8mと不揃いである。柱穴は0.5～0.8mの隅丸方形または楕円形で、深さは検出面から20～50cmを測る。形状や大きさ、深さはSA4990A・Bとも不揃いで、時期による傾向は認められなかった。SA4990Aの柱穴は掘方のみで、抜取穴も柱痕跡も確認できず、施工途中で立柱を中止した可能性も考えられる。SA4990Bの北から３基目の柱穴には柱痕跡が灰褐色の粘質土で残り、柱径は15cmほどである。遺構の重複関係より、Ⅲ-Ｂ期の建物SB5000とは並存しないため、Ⅲ-Ａ期以前で建て替えられたものと考える。東三坊坊間路西側溝SD4302の西５mに位置し、六条三坊西南坪の東限南北塀であると判断される。

ⅱ　藤原京期（Ⅲ-Ｂ・Ｃ期）の遺構

条坊を廃し、四町を一体として利用する時期。Ⅲ-Ｂ期とⅢ-Ｃ期に細分され、Ⅲ-Ｃ期は藤原京廃絶期の一時的な遺構をも含む。左京六条三坊は掘立柱塀で内郭と外郭に区画し、内郭には正殿を中心として大型の掘立柱建物を整然と配置する。ここでは初めに区画施設について記述し、その次に内郭の遺構、外郭の遺構の順に述べ、最後に藤原京廃絶期の遺構をまとめた。

a　区画施設の遺構（Pl. 3・7・11, Ph. 14・16・23・24）

南北塀SA4286（Fig. 47）　第46・47次調査区で検出した掘立柱南北塀。これまで『藤原概報16』・『同17』等ではSA4280・4281の２条の塀としてきたが、一連の塀と認定し、遺構番号も付け直した。36間分、84.9mを確認した。南端は調査区外へ延び、北端の柱穴はくぐり門SB4726の南側の柱を兼ねる。

検出した柱穴は34基であるが、第46次調査区と第47次調査区の間にもう１基柱穴があったと考えられる。南から24基目の柱穴の掘方が２基分重複し、南側が古い。南から16基目と20基目の柱穴はⅢ-Ｃ期の建物SB4331の東側柱筋の柱穴と完全に重複している。柱間寸法は場所によりばらつきがあり、最小は1.7m、最大は3.5mで、2.4m前後となる箇所が多い。柱穴は南北に長い隅丸長方形または隅丸方形

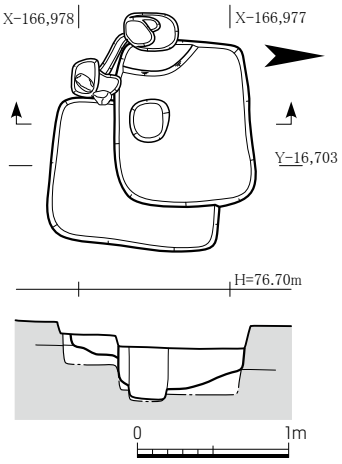


Fig. 47　SA4286柱穴
（南から24基目）
平面図・断面図　1:50

で、長辺は0.8～1.2mである。深さは検出面から15～40cmを測る。南半部は強い削平を受けて掘方は浅くしか残らず、柱痕跡や抜取穴は検出していない。一方、北半では柱痕跡が灰褐色の粘質土として残るものがあり、柱径は20cm前後と推定される。遺構の重複関係があり、Ⅲ-B期の大土坑SK4327、Ⅵ期の牛馬小屋SX4500より古く、Ⅲ-A期の東西塀SA4284、Ⅱ期の建物SB4242より新しい。位置は東三坊坊間路心から51m東で、Ⅲ-A期の東南坪西限の南北塀SA4282から45m東にあたる。SA4730とともに、Ⅲ-B期の内郭東限を画する塀である。

門SB4726（Fig. 48）　Ⅲ-B期の東限を画する塀SA4286北端の柱とSA4730南端の柱の間に開いたくぐり門。柱間寸法は4.0m。柱穴は、南側が一辺1.6mの隅丸方形で深さは70cm、北側が一辺0.8mの隅丸方形で深さは80cmである。SA4286・4730の柱穴よりかなり深く掘削している。いずれの柱穴にも掘方底部にまで達する抜取穴があり、柱は東の方向に抜き取っている。

南北塀SA4730（Fig. 48）　第47次調査区で検出した掘立柱南北塀。15間分、37.3mを確認した。南端の柱穴はくぐり門SB4726の北側の柱を兼ね、北端はSB4780の手前で途切れる。SB4726を挟んで、SA4286とは一連の塀とみられる。

柱間寸法は2.2～3.2mと場所によりばらつきがあるが、2.4m前後となる箇所が多い。柱穴は南北に長い隅丸長方形または隅丸方形で、長辺は1.0～1.2mである。深さは検出面から50～70cmである。南端から3～5基目の柱穴は検出面から90～100cmと深く、また穴の形もしっかりしている。3基とも北側に重複する形で検出面から10cm程度の浅い柱穴を伴っており、この3基のみ掘方を掘り直した、あるいは柱を立て直した可能性も考えられる。南端から3基目の柱穴には柱根が残っており、柱径は17cmほどである。遺構の重複関係があり、Ⅲ-A期の東西塀SA4171や六条条間路北側溝SD4139より新しい。位置は東三坊坊間路心から51m東にあたる。Ⅲ-B期の内郭東限を画する塀である。

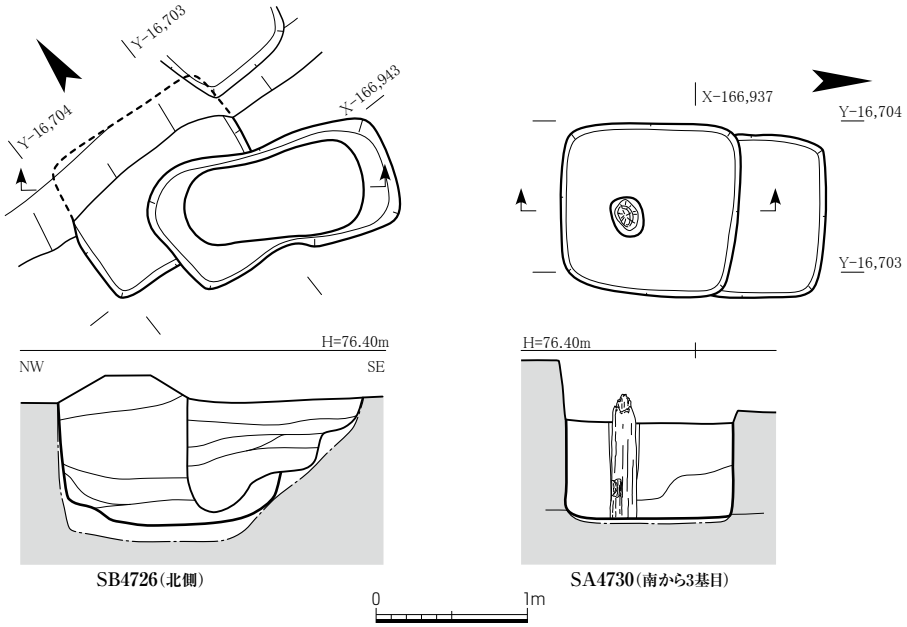


Fig. 48　SB4726・SA4730柱穴平面図・断面図　1:50

柱穴SP4830　第47次調査北拡張区で検出した掘立柱柱穴1基。SB4780の北側で、SA4730の延長上で検出したため、南北塀がさらに北へ続き、Ⅲ-B期の内郭東限を画する塀となる可能性がある。

南北塀SA4833　第47次調査区で検出した掘立柱南北塀。Ⅲ-C期の建物SB4780の西妻に重なって2間分、4.6mを確認した。柱間寸法は2.3mである。柱穴は長い隅丸方形または円形で、大きさは65～70cmである。深さは検出面から10cm未満しか残らず、ほとんど底が出ている。遺構の重複関係があり、Ⅲ-C期の建物SB4780より古い。柱筋は北で0.5°西へ振れる。先述の南北塀SA4730と柱穴SP4830の間、SA4730から1.5m西に位置し、SA4730とSP4830間の出入口の目隠し塀であったと考えられる。南端の柱穴はSA4730北端の柱穴から0.3m北、北端の柱穴はSP4830の2.0m南に位置しており、調査区外にもう1間北へ延び、全部で3間であった可能性も考えられる。

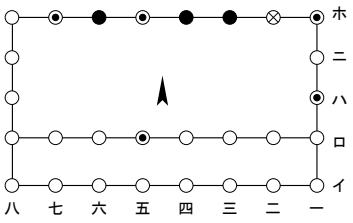
南北塀SA4320　第46・47次調査区で検出した掘立柱南北塀。31間分、73.9mを確認した。南端は調査区外へ延び、北端の柱穴はくぐり門SB4725の南側の柱を兼ねる。柱間寸法は場所によりばらつきがあり、最小で2.0m、最大で4.0mとなる箇所があるが、2.4m前後となる箇所が多い。柱穴は南北に長い隅丸長方形または隅丸方形で、削平されて小さくなっているものを除けば、長辺は1.0～1.3mで、深さは検出面から20～30cmを測る。埋土は黄灰色の砂質土または粘質土である。南端から9・20・24・28基目の柱穴には柱痕跡が灰色の粘質土として残っており、柱径は15～20cmと推定される。遺構の重複関係があり、Ⅳ期の東西溝SD4357、Ⅵ期の井戸SE4467より古い。東三坊坊間路心から約60m東の位置にあたる。SA4286を10m東に移設したもので、SA4729とともにⅢ-C期の内郭東限を画する塀である。

門SB4725　SA4320北端の柱とSA4729南端の柱の間に開いたくぐり門。柱間寸法は3.3m。柱穴は一辺1.3mの隅丸方形で、深さは南側の柱が110cm程度、北側の柱が80cm程度と、SA4320・4729の柱穴よりかなり深く掘削している。埋土は黄褐色の粘質土または砂質土である。南側の柱穴には柱痕跡が灰色の粘土として残っており、柱の径は20cm程度であったと推定される。SA4320・4729より柱穴が深いことから、建てられた柱の高さが高いこと、あるいは上部に冠木や簡易な屋根を載せたなど、塀部分とは異なる上部構造をもっていたことが考えられる。Ⅲ-C期の内郭東限を画する塀に開く門である。

南北塀SA4729　第47次調査区で検出した掘立柱南北塀。16間分、37.2mを確認した。南端の柱穴はくぐり門SB4725の北側の柱を兼ね、北端はSB4780の東妻に接続する。SB4725を挟んでSA4320とは一連の塀で、確認した総長は114.4mとなる。

柱間寸法は若干ばらつきがあるが2.3m前後となる箇所が多い。柱穴は南北に長い隅丸長方形または隅丸方形で、削平により小さくなっているものを除けば、長辺は1.0～1.2mである。深さは検出面から10～30cmが残る。南端から3・5基目の柱穴には柱痕跡が灰色の粘質土として残っており、柱径は20cm前後と推定される。遺構の重複関係があり、六条条間路北側溝SD4139より新しい。東三坊坊間路心から、約60m東の位置にあたる。SA4730を10m東に移設したもので、Ⅲ-C期の内郭東限の塀である。

b　内郭の遺構（Pl. 2・3・6・7・11，Ph. 5・15～17・22・24・25・27・30～32）



掘立柱建物SB5000（Fig. 49）　第50次調査西区で検出した掘立柱東西棟建物。桁行7間×梁行3間の身舎の南側に1間の廂が付く。廂は身舎と柱筋を揃えるが、西端の柱のみ東側に寄る。東三坊坊間路SF4300の両側溝を埋めた後に柱穴を掘っている。建物規模は身舎部分が桁行20.1m×梁行7.9m、廂の出は3.2mである。北側柱筋の3基の柱穴で柱根が遺存しており、これらから計測すると柱間寸法は桁行で2.86mとなる。梁行の柱間寸法は2.6mである。身舎の柱穴は一辺1.0～1.3mの隅丸方形。深さは検出面から45～85cmを測る。東西妻とも、北から2基目の柱穴（ニ一・ニ八）は浅い。廂の柱穴は0.6mの隅丸方形で、深さは20～30cm。身舎の柱穴より小さく、浅い。ホ三・ホ四・ホ六の柱穴には径30cmほどの柱根が遺存する。ホ二の柱穴底部には、木製の礎板が残る。礎板は32×36cmの方形で、厚さ10cm。遺構の重複関係があり、東三坊坊間路東

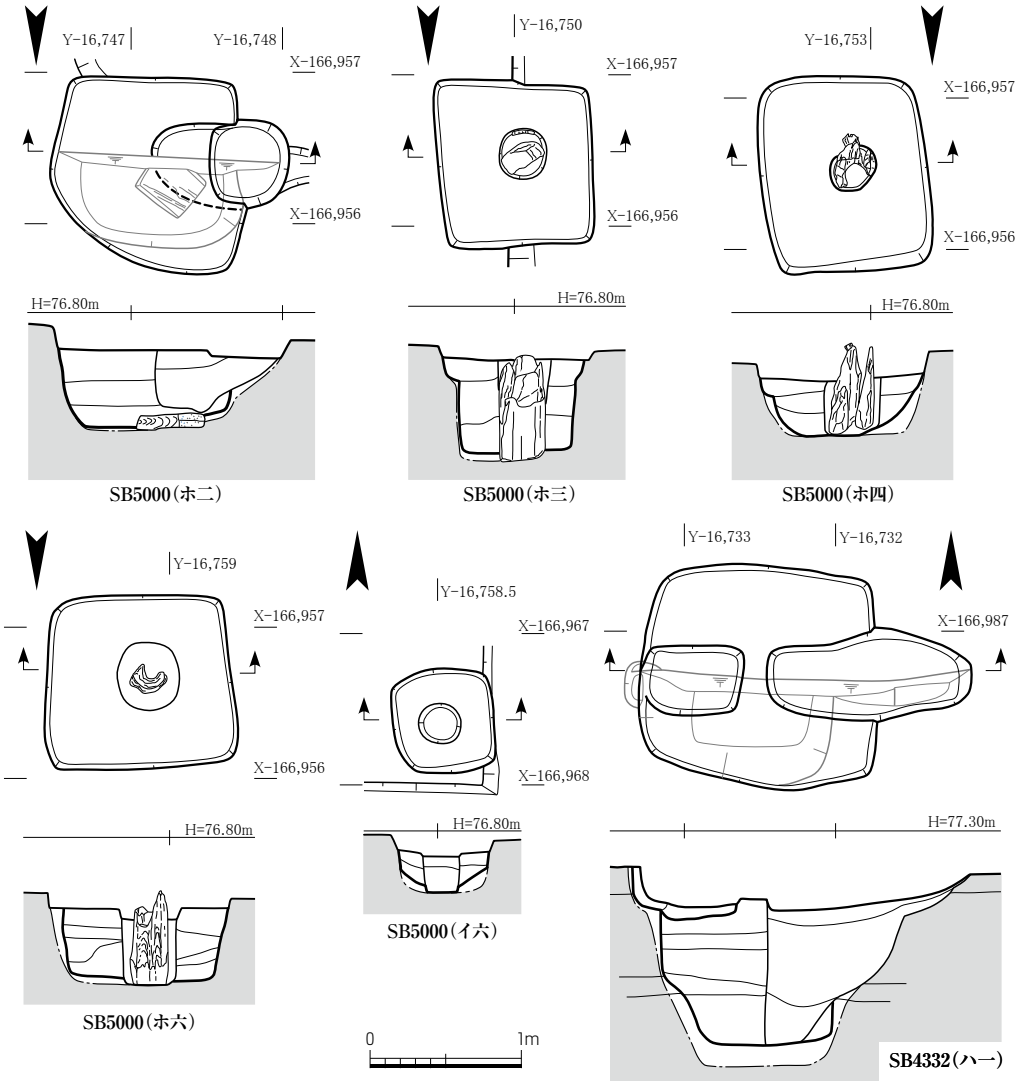
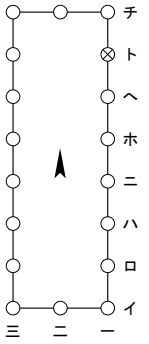


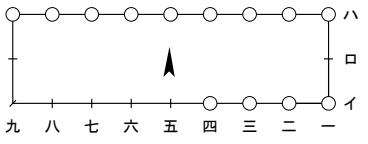
Fig. 49　SB5000・4332柱穴平面図・断面図　1:50

側溝SD4301より新しい。SB5000は、建物の東西中心線と坊間路SF4300の中心線が揃い、身舎の南北中心線は左京六条三坊の推定南北中心線と一致し、六条条間路と東三坊坊間路の交差点より13.7m南となる。坊のほぼ中心に位置することと、廂付きの規模の大きい建物であることから、左京六条三坊におけるⅢ-B期とⅢ-C期を通じた正殿と考えられる。



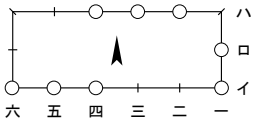
掘立柱建物SB4332（Fig.49）　第46次調査区で検出した、桁行7間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行20.0m×梁行6.3m、柱間寸法は桁行2.86m、梁行3.15mである。柱穴は南北方向に長い隅丸長方形または隅丸方形で、長辺の長さが1.4～1.6mである。深さは検出面から90～110cmを測る。柱穴の埋土は茶褐色の粘質土に灰色の粘土が交じり、層状をなし、底部は青灰色の微砂となる。大半の柱穴で抜取穴を確認しており、東側柱筋では東側に、西側柱筋では西側に、北妻では北側に、南妻では南側に柱を抜いた様子がわかる。ト一の掘方底部には大きさ24×19×10cmの木片が遺存し、礎板であった可能性がある。また、複数の柱掘方と抜取穴で、小木片を確認している。同規模のSB4330・4331に比べ、柱穴が一回り大きく、深い。また、SB4330・4331のように妻柱が特に浅いということはない。西側柱筋はSB5000の心から15.6m（約53尺）東、北妻柱筋はSB5000の南入側柱筋から8.8m（約30尺）南にあたる。正殿SB5000に対する、Ⅲ-B期の東脇殿である。

幄舎SX4342・4343・4344・4345・4348・4349　第46次調査区のSB4340周辺で検出した小穴群。4棟の幄舎（第Ⅵ章Fig.267参照）の妻側に刺した杭の痕跡。『藤原概報16』等では建物SB4340の四周を囲む掘立柱塀SA4341・4343・4344としていたが、解釈を改めた。幄舎は絵画資料よると簡易な骨組みに布の屋根を張ったもので、支柱の外側に打った杭で布を引っ張る。桁行・妻側の支柱はごく浅い掘削で痕跡が残らず、深く打ち込んだ妻側の杭のみが痕跡として残ったものと考える。SX4342・4343は南北方向に並ぶ3基単位の小柱穴群で、SX4342は全長3.7m、SX4343は全長5.2m。いずれも正殿SB5000の中心軸から東に12.4mの位置にある。東西棟幄舎の東妻側の杭の痕跡で、幄舎の桁行全長は中心軸で折り返すと24.8mとなる。SX4344・4345・4348・4349は東西方向に並ぶ3基単位の小柱穴群で、SX4344は全長4.5m、SX4345は全長4.6m、SX4348は全長4.5m。SX4349は西側の2基全長2.1mを検出し、東端の柱穴はⅥ期の井戸SE4463に壊される。SX4344が北妻でSX4349が南妻、SX4345が北妻でSX4348が南妻となる2棟の南北棟幄舎で、桁行全長はいずれも20.2m、4.5mの間隔で並行して建っていた。柱穴は隅丸方形または円形平面を呈し、大きさは最大50cm程度である。深さは検出面から最大50cmを測る。Ⅲ-B期にSB5000の正面に中心軸を揃えて建ち、前殿SB4340の建つ以前に儀式などの際に仮設していた可能性が考えられる。

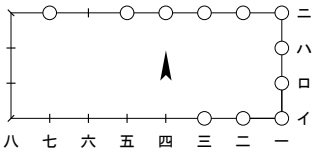


掘立柱建物SB4737　第47次調査区と第50次調査西区で検出した、桁行8間×梁行2間の掘立柱東西棟建物。建物規模は桁行21.4m×梁行6.0m、柱間寸法は桁行が2.66m、梁行が6.0mである。東西の妻柱は確認していないが、梁行の柱間は2間分の長さがあるので、妻柱の掘方がごく浅く削平されたとみられる。柱穴は一辺0.9～1.2mの隅丸方形。深さは検出面から20～60cmを測る。東のほうでより検出面が高くなるため、東の柱穴ほど残存が良好である。Ⅵ期の溝SD4743に重複するため、南側柱筋西半では柱穴

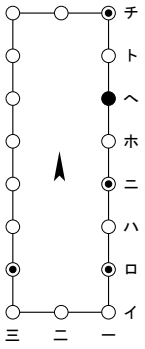
を明瞭に検出できなかった。南側柱筋はSB5000の身舎中心線から約20m北に位置し、東西中心線はSB4333の西妻に揃える。柱穴の重複関係があり、Ⅲ-A期の東西塀SA4732より新しく、Ⅲ-C期の建物SB4738より古い。正殿SB5000東北方に位置する、Ⅲ-B期の建物である。



掘立柱建物SB4789　第47次調査区で検出した、桁行5間×梁行2間の掘立柱東西棟建物。SA4833の4.3m西にある。建物の西妻柱は検出しておらず、すぐ西側で中世大溝SD4755を検出していることから、桁行方向がもう1間西に延びる可能性もある。建物の規模は桁行13.6m×梁行5.3mで、柱間寸法は桁行が2.72m、梁行が2.65mである。柱穴は0.7～1.1mの不整形な方形で、埋土は暗褐色砂質土である。深さは検出面から浅いもので25㎝、深いもので60㎝ほどである。イ三の柱穴はⅥ期の井戸SE4790に、ハ一の柱穴はⅥ期の斜行東西溝SD4791に壊される。内郭に位置するⅢ-B期の建物。



掘立柱建物SB4340（Fig. 50）　第46次調査区で検出した桁行7間×梁行3間の掘立柱東西棟建物。西半分は大きく地下げを受け、柱穴も削平されてしまっている。桁行方向は6間分を検出しており、その全長は15.6mである。西に1間延ばし桁行7間とするとSB5000と東西中心線が揃うため、それが妥当であろう。桁行7間に復元すると、建物の規模は桁行18.2m×梁行6.9m、柱間寸法は桁行が2.6m、梁行が2.3mとなる。柱穴は長辺1.2～1.5mの隅丸方形であり、遺構検出面からの深さは東南隅の柱（イ一）が100㎝、側柱が50～60㎝で、隅柱のほうが40㎝ほど深い。SB5000同様、東三坊坊間路東側溝SD4301より新しい。SB5000に対する、Ⅲ-C期の前殿と考えられる。



掘立柱建物SB4330（Fig. 50）　第46次調査区で検出した、桁行7間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行19.8m×梁行6.2m、柱間寸法は桁行2.83m、梁行が3.1mである。柱穴は南北方向に長い隅丸長方形または隅丸方形で、長辺は0.8～1.3mを測る。深さは検出面から40～80㎝である。妻柱の柱穴は浅く、深さは検出面から25㎝ほどである。柱穴の埋土は灰褐色の粘質土を主

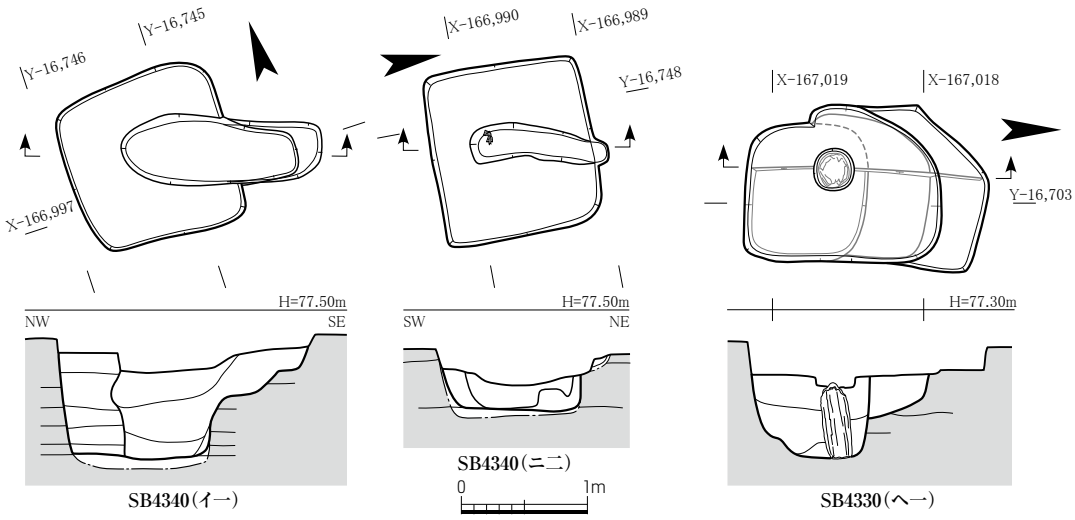
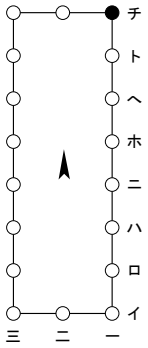
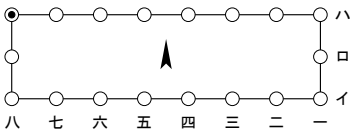


Fig. 50　SB4340・4330柱穴平面図・断面図　1:60

体とする。へ一の柱穴には径15㎝の柱根が残り、4基の柱穴に粘質土の柱痕跡がある。東側柱筋は、Ⅲ-B期の南北塀SA4286と同じ位置にある。北にあるSB4331との間隔は11.4mで、東西両側柱筋を揃える。柱穴の重複関係があり、SA4286より新しく、Ⅳ期の建物SB4350・4351より古い。Ⅲ-C期のSB5000の東脇殿と考えられる。

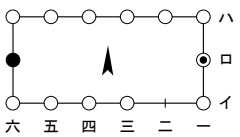


掘立柱建物SB4331　第46次調査区で検出した、桁行7間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行19.7m×梁行6.2mで、SB4330とほぼ同形同大である。柱間寸法は桁行が2.81m、梁行は3.1m。柱穴は南北方向に長い隅丸長方形または隅丸方形で、長辺の長さは1.0～1.4mである。深さは検出面から40～60㎝を測る。妻柱は浅く、検出面でほとんど底が出る。多くの柱穴で抜取穴を確認しており、西側柱筋では柱を西側に抜き取った様子がわかる。東北隅の柱穴に径25㎝の柱根が遺存する。柱穴の重複関係があり、Ⅳ期の建物SB4242より古い。正殿SB5000に対するⅢ-C期の東脇殿と考えられる。

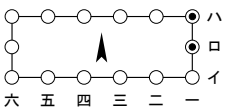


掘立柱建物SB4333　第46次調査区で検出した、桁行7間×梁行2間の掘立柱東西棟建物。建物の規模は桁行20.5m×梁行5.4m。柱間寸法は桁行2.93m、梁行2.7m。柱穴は一辺0.9～1.3mの隅丸方形。深さは検出面から30～60㎝を測る。妻柱の柱穴は浅く、底部の痕跡が残るのみである。柱穴の埋土は灰色砂が交じる粘質土で、北西隅の柱穴に柱痕跡が灰色の粘土として残る。同時期で同じ桁行長のSB4330・4331・4332と比べて梁行が狭く、規格が異なる。柱穴の重複があり、Ⅱ期の建物SB4248より新しい。SB5000と北側柱筋を揃え、5.9m（約20尺）隔てて東に並ぶ。Ⅲ-C期の東副殿と考えられる。

東西塀SA4731　第47次調査区と第50次調査西区で検出した、掘立柱東西塀。12間分47.4mを確認した。柱間寸法はかなり不揃いで3.1～5.1mと幅があるが、3.8m前後となる箇所が比較的多い。柱穴は東西に長い不整形な長方形または楕円形で、長辺が0.6～1.0m。深さは検出面から30～50㎝を測る。埋土に土器片や20㎝程度の石の交じる穴がある。明確な抜取穴や柱痕跡、柱根は確認していない。六条条間路北側溝SD4139に重複し、それより新しい。また、SA4731の東端の柱穴は、Ⅲ-B期の南北塀SA4730の南に開く門SB4726の柱穴より新しい。坊の南北中心線から、18.5m北に位置し、Ⅲ-C期の中心区画をさらに南北に分ける塀と考えられる。Ⅳ期まで存続した可能性がある。

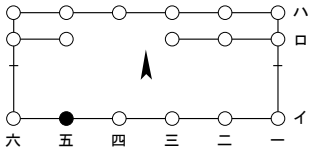


掘立柱建物SB4738　第47次調査区と第50次調査西区で検出した、桁行5間×梁行2間の掘立柱東西棟建物。建物規模は桁行12.4m×梁行5.7m、柱間寸法は桁行が2.42m、梁行が2.85mである。柱穴は一辺0.8～1.0mの隅丸方形。深さは検出面から40～70㎝を残す。柱穴の底の標高は比較的揃い、妻柱が特に浅いということはない。西妻の柱穴に径15㎝の柱根が残る。Ⅲ-B期のSB4737と西妻をほぼ同位置とし、桁行を縮小して建て替えたものと考えられ、柱間寸法もわずかずつ狭い。柱穴の重複関係があり、Ⅲ-A期の東西塀SA4732、南北塀SA5005および掘立柱建物SB4737より新しい。Ⅲ-C期の正殿北側区画の建物。

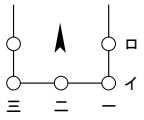


掘立柱建物SB4780　第47次調査区で検出した、桁行5間×梁行2間の掘立柱東西棟建物。建物の規模は桁行12.0m×梁行4.1m、柱間寸法

は桁行が2.4m、梁行が2.05mである。柱穴は一辺0.8m前後の隅丸方形で、埋土は暗褐色の砂質土が主体である。柱穴の深さは穴によってばらつきがあり、検出面から25～60cmを測る。ハ一とロ一の柱穴には柱痕跡が暗灰色の粘土として残り、柱径は15cmほどである。東妻柱筋（一列）に内郭東限の区画塀SA4729が取り付く。Ⅲ-B期のSB4789と南側柱筋を揃え、内郭東限の塀とともに東方に移設したものとみられる。Ⅲ-C期の正殿北側区画の建物。



掘立柱建物SB4800　第47次調査区と第50次調査西区で検出した、桁行5間×梁行2間の掘立柱東西棟建物。建物の規模は桁行17.5m×梁行7.0mで、柱間寸法は桁行・梁行とも3.5mである。北1間の中央に東は2間分、西は1間分柱穴が並び、間仕切りであった可能性が考えられる。柱穴は一辺0.9～1.3mの隅丸方形で、深さは検出面から40～70cmを測る。妻柱の柱穴は、大きさは一辺0.8～1.0mとやや小さめだが、深さは60cmが残る。北入側柱筋（ハ列）の間仕切りと考えられる柱穴の大きさは、側柱列の柱穴と同じ程度の大きさである。イ五の柱穴には、径25cmの柱根が残る。建物の東西中軸線は坊の心から26.5m（約90尺）東にあたり、SB4333の中軸線とほぼ一致し、南側柱筋はSB4333の北側柱筋から42.3m（約145尺）北に位置する。Ⅲ-C期の正殿北側区画での、中心的な建物とみられる。



掘立柱建物SB5035　第50次調査西区で検出した、桁行2間以上×梁行2間の掘立柱南北棟建物。南妻の柱穴3基と、1間北で東西両側柱を検出しており、北妻は調査区外へ延びると考えられる。柱間寸法は桁行が2.7m、梁行が3.15mである。柱穴は東西に長い隅丸長方形で、長辺が1.2～1.3m。深さは検出面から20～30cmを測る。西南隅の柱穴はⅢ-A期の塀SA5005の柱穴を壊しており、それより新しい。西側柱

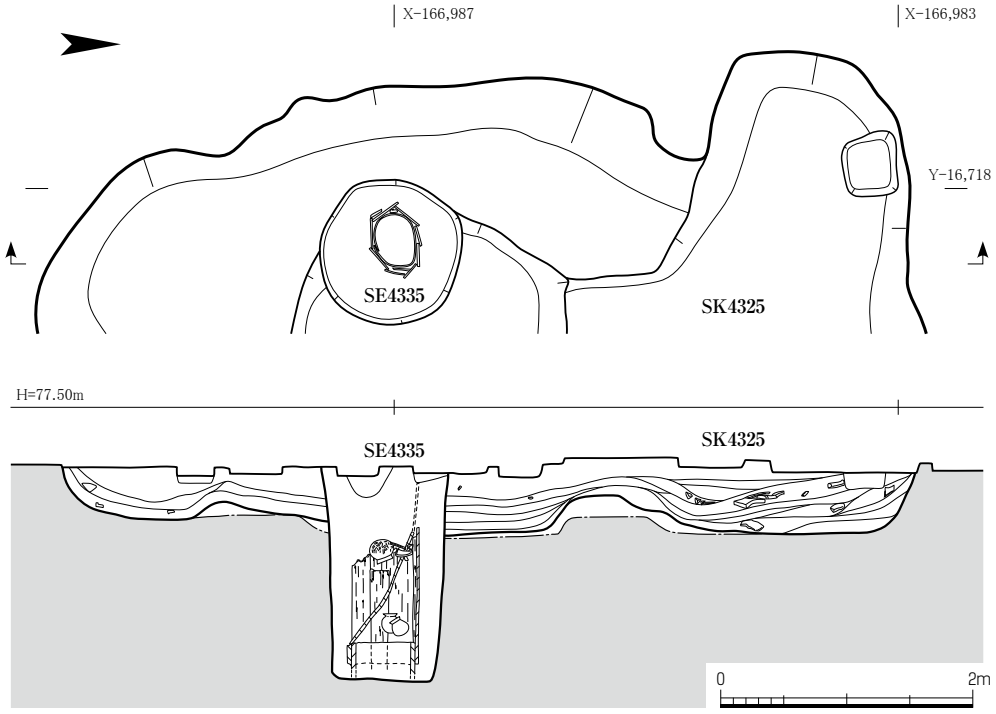


Fig. 51　SK4325・SE4335平面図・断面図　1:60

筋をSB4738の西妻柱筋と揃え、南妻柱筋はSB4780の棟通りに揃える。Ⅲ-C期の正殿北側区画の建物。

南北塀SA5025　第50次調査西区で検出した南北方向の掘立柱塀。6間分、12.5mを確認した。柱間寸法は南端の2.4mを除いて1.9～2.1mである。柱穴は隅丸方形または不整形な楕円形で、大きさはいずれも0.6m前後である。深さは検出面から20cmを測る。柱筋は北で東に0.7°振れる。SB4800の西約11.7mにあり、SB4738・5035の西妻柱筋と揃える。Ⅲ-C期の正殿北側区画内部の塀。

井戸SE4335（Fig. 51）　第46次調査区で検出した縦板組の井戸。SK4325に重複して掘削している。掘方は径1.1mの円形で、検出面より深さ1.8mを測る。掘方底に長径50cmの小判形の曲物を長軸を東西方向にして埋設し、その外側に縦板材8枚をつき合わせながら組む構造である。縦板は幅20cm程度で、長さは最大1.1mが残存する。8枚を基本的に時計回りにつき合わせながら巡らせ、その内側と外側にやや幅狭の補助の板を3枚入れる。南側の縦板2枚は曲物の天端で折れ、井戸内に倒れ込む。井戸内部からは、完形品に近い土師器甕や須恵器壺などが出土した。井戸廃棄後のくぼみには土器などを廃棄し、山土を含む土で埋め立てたものとみられ、倒れ込んだ縦板上の埋土から藤原宮期の土器が出土した。

井戸SE4740（Fig. 52～54）　東西大溝SD4130の南岸で検出した方形横板組の井戸。井戸枠の大きさは一辺0.9m、遺構検出面からの深さは3.6m。横板材12段分で高さ約3mが残存する。角材の隅柱を立て、底から0.5～0.6mの高さで背違いに横桟を枘差しする。横板は木組みをせず隅柱の外側にあてて、粘土で丹念な裏込めをしながら順に積み上げる。また、最下段の横板は内外に人頭大の石を置き補強し、井戸枠上端は人頭大の石で押さえていたとみられる。

掘方は南北4.8m、東西6.2mの不整円形。検出面からの深さ0.3～0.6mのところで径4mの円形に狭まり、そこからさらに漏斗状に狭まり、底部では一辺1.7mの方形になる。掘方の埋土は、底から0.7～1mの高さまでは青灰色砂礫である。横板の3段目より上は、横板の周囲に灰色粘土を巻きつけるようにして押さえ、その外側を灰褐色砂礫で埋めるという工程を繰り返しながら積み上げる。底から2mより上は円錐形にこの互層を積み上げ、周囲を淡褐色砂質土で埋めている。また、掘方の内側、井戸本体の周囲に改修時のものとみられる穴を検出している。一辺2.8mの隅丸方形で、深さは0.4m、埋土は暗褐色砂質土である。その際に、井戸の周囲に石を敷き詰め、舗装としている。

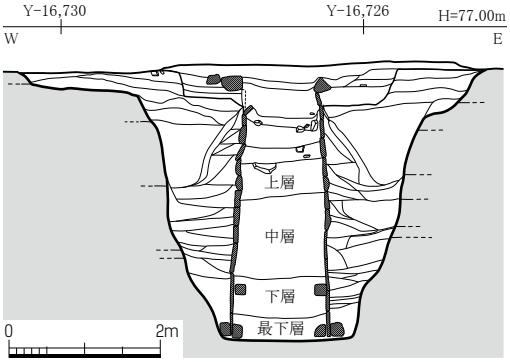


Fig. 52　SE4740断面図　1:100

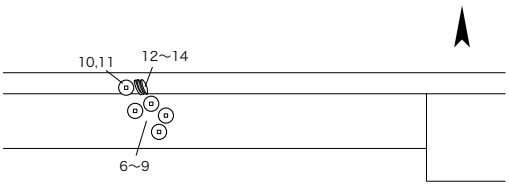


Fig. 53　SE4740和同開珎出土状況略図
（番号はPh. 158・159に対応）

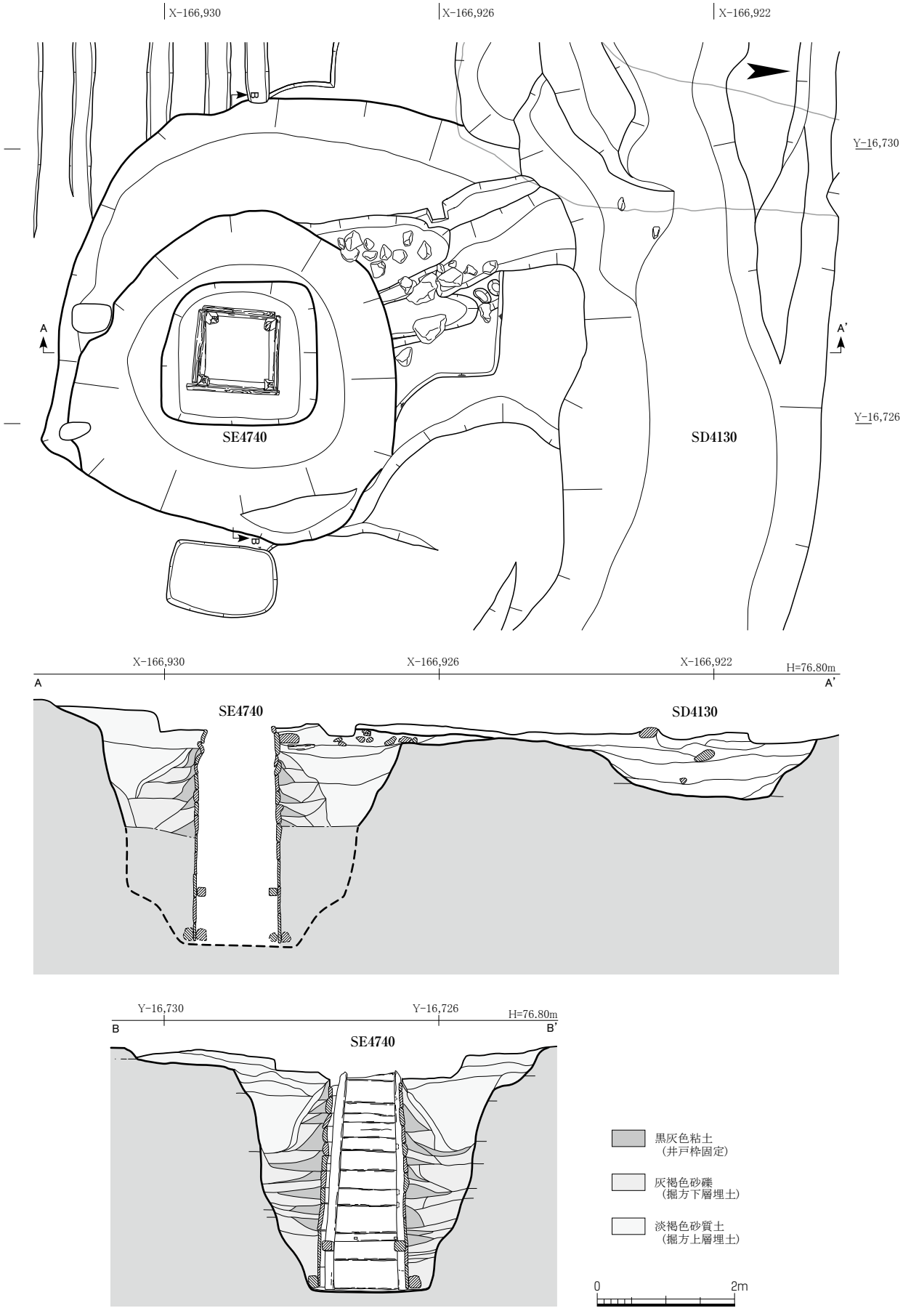


Fig. 54　SE4740平面図・断面図　1:80

井戸内の遺物は上層、中層、下層、最下層の４層に分けて取り上げた（Fig.52）。最下層は灰褐色砂礫で、土器、木製品、金属製品を含み、土師器甕が特に多く出土した。下層は褐色砂質土で、多量の土器と木製品を含み、「香山」の墨書がある土師器椀や皿が９点出土した。中層は砂交じりの褐色粘質土で、多量の土器と木製品を含み、記号の墨書がある土器が５点出土した。上層は青灰色から暗褐色を呈する粘質土で、土器や漆器が出土したが比較的遺物は少ない。10世紀前半の黒色土器を含む。また、最下層から無文銀銭１点、最下層および下層から和同開珎27点が出土している。和同開珎のうち９点は井戸北辺の横桟に置かれた状態で、７点はそのすぐ内側の埋土から出土している（Fig.53）。

SD4130との関係は、井戸掘方の北側埋土をSD4130の南肩が掘り込んでいるという所見で、SE4740の掘削が先とみることもできる。しかしSD4130の埋土は最終的に廃絶する際の堆積土であり、これをもって両者の先後関係を判断する根拠にはなり難い。出土遺物等から、藤原京期に掘削され、奈良時代末期にはほぼ埋没し、平安時代中頃に最終的に廃絶したとみられる。

大土坑SK4327　第46・47次調査区にかけて検出した大規模な土坑。南北17.5m、東西12.0mの隅丸長方形を呈する。底面は比較的平らで、北側に一部深い箇所がある。深さは検出面から30cmを測り、北側の深い部分で40cmである。埋土は上層から炭交じり黄褐色砂質土、炭交じり淡灰色粘質土、黄色粘土交じり黄褐色粗砂の順でおおよそ水平に堆積しており、顕著な滞水を示す状況はなく、一気に埋め立てられたものとみられる。埋土からは飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器がまとまって出土しており、他には古代の道具瓦や平瓦も出土している。西辺北側で六条条間路南側溝SD4311、北東隅でⅢ-Ｃ期の東西溝SD4119と交わるが、両者との前後関係は明らかにすることができなかった。Ⅲ-Ｂ期の廃棄土坑であろう。

c　外郭の遺構（Pl.２～５・８，Ph.10・22・26・27・33・37・39・41）

東西大溝SD4130（Fig.55）　第53次調査北区から第45次調査中央区、第47次調査区、第50次調査西区へ西流する、東西方向の大規模な素掘溝。調査区を横断し、合わせて約120m分を確認した。北岸はほぼ直線状だが、南岸は第47次調査区以西で大きく蛇行している。溝幅はおおよそ西側ほど広くなる傾向にある。第53次調査北区の溝東端近くでは2.3m、第45次調査中央区西壁では4.5m、その西約25mでは6.0mを測る。第47次調査区のSE4740の北では3.0mと狭くなるが、西方では幅を広げていき、第50次調査区西壁では11mに達する。溝底には凹凸があるものの、全体としては底の標高は東から西に向けて低くなっており、第53次調査北区の溝東

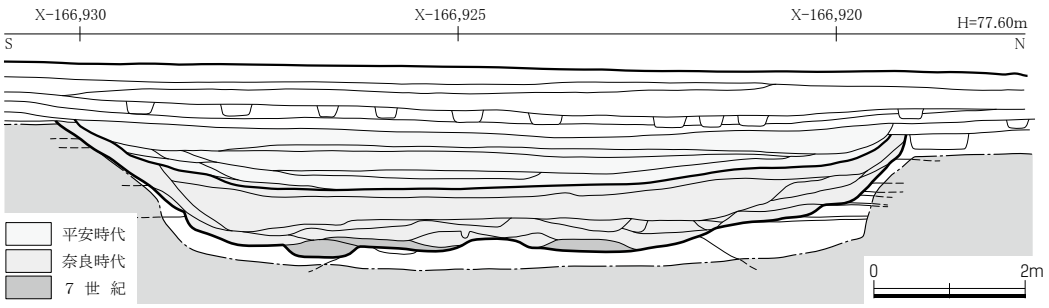


Fig. 55　SD4130断面図（Y-16,752）　1:100

端近くでは75.2m、第47次調査区東壁では75.0m、第50次調査区西壁では74.7mである。第47次調査区西端付近で、北岸から東に向かってＬ字形に並ぶ杭列を検出した。杭は径5㎝程度の半円形断面で、後述する上層に覆われており、中層から下層に打ち込まれていたとみられる。検出位置が中世大溝SD4755との交点付近にあたるが、SD4755より広い範囲から杭は検出されていることからも、SD4755に関する遺構ではなく、SD4130に伴った堰等の可能性が考えられる。

埋土の堆積状況は場所により異なるが、大きく3層に分けることができる。上層は褐色を呈する粘質土で、溝が最終的に廃絶した時の埋土である。中層は青灰色を呈する細砂や粘質土で、ところにより粘質土と砂が交互に堆積する。溝が機能していた時の滞水により堆積した層とみられる。下層は灰色を呈する粗砂または砂礫からなる層である。遺物はいずれの層からも出土しており、瓦、土器、木製品、木簡、金属製品、種実、動物骨など多岐にわたる。出土土器の年代により、下層は藤原京期、中層は奈良時代、上層は平安時代以降に該当する。遺構の方位は北岸で計測すると、東で南に3.0° 振れる。後述するSD4131と橋SX4134、およびSD4139・4132とともに、藤原京造営が本格化した際に設けられたとみられる。

斜行南北溝SD4131（Fig. 56）　第50次調査東区西辺から第45次調査中央区にかけて北流する南北方向の素掘溝。合わせて約40m分を確認した。北端はSD4130に流れ込み、その南に後述する橋脚SX4134や護岸施設SX4133を設ける。さらにその南でSD4132が東から合流する。検出面での幅は2.5m、検出面からの深さは80㎝を測る。断面形状は、検出面から深さ約50㎝までは緩やかな法面をもった逆台形で、それより下は幅60㎝、深さ約30㎝の長方形で、護岸施設SX4133を伴う。溝底はSD4132との合流点から北に４mのところで20㎝段を付けて掘り下げており、さらに北に向かい緩やかに傾斜する。北端で溝底の標高は73.7m、検出面から底まで90㎝を測る。SD4132との合流点から南では、遺構面の削平が著しい。第50次調査東区と第45次調査中央区間の未調査地で消滅する様で、南端の様相は不明である。SD4130と同時に掘削し、SD4132より開削は先と考えられる。埋土は下層と上層に分かれ、それぞれ当初の南北溝の時期と、後に東西溝SD4132が接続する時期に対応する。敷地東半の水を、SD4130に向けて排水するための溝であろう。

護岸施設SX4133（Fig. 56）　SD4131の内部にある板と杭による護岸施設。SD4132との交点から北に、約10mにわたり検出した。SD4131の法面下部を20～30㎝垂直に掘り込み、これに横板をあてて杭を打ち込んだものである。両岸で横板にあたる木材と、径5～10㎝程度の灰色粘土として残る杭の痕跡を検出した。横板は長さ１m～2.3m、厚さは薄いもので2㎝程度である。

橋脚SX4134（Fig. 56）　SD4131の両肩で検出した柱穴４基。SX4133の上部に位置し、SD4131にかかる橋の橋脚になると考えられる。柱穴はSD4131の振れにあわせて、南北6.3m、東西2.4mの平行四辺形に配置する。柱穴は0.4～0.8mの円形で、深さは溝肩から40㎝ほどである。SD4130とSD4132間を、通路として利用していたことを示すものであろう。

東西溝SD4132　第53次調査北区から第45次調査中央区へ西流する東西方向の素掘溝。合わせて23m分を確認した。やや蛇行し、幅は1.0～1.5m。断面形状は方形に近く、深さは0.6mを測る。西端で溝底の標高は73.3mである。溝の底部には暗褐色の粘質土が10㎝弱の厚さで堆

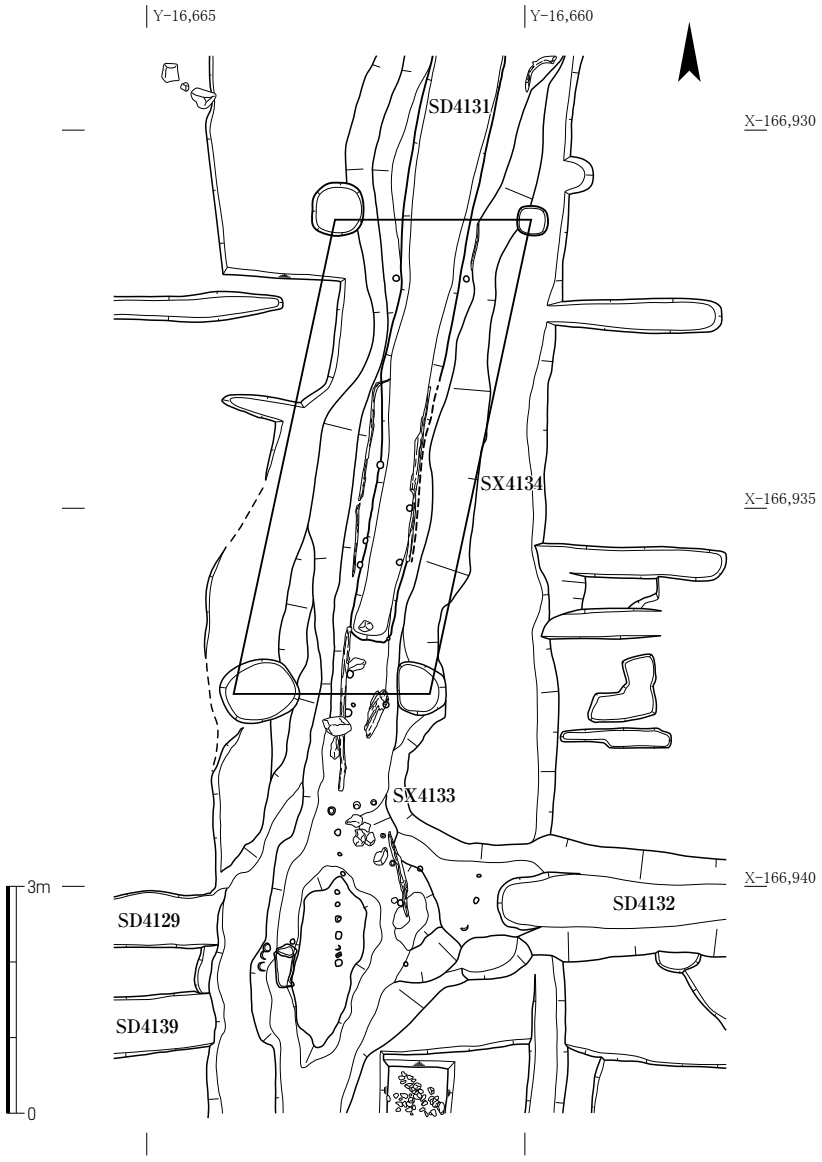


Fig. 56　SD4131・SX4133・4134平面図　1:100

積しており、あまり激しい水流がなかったことがうかがえる。開削はSD4131より後、廃絶は同時とみられる。SD4130と平行し、SD4130の南肩からSD4132の溝心までの距離は約13mである。

東西溝SD4119　第47次調査区から第45次調査中央区にかけて検出した東西方向の素掘溝。44m分を確認した。西端はSK4327の北東隅に接続し、東端はⅢ−B期の南北溝SD4131から約10m東で遺構面の削平のため途切れる。検出面での幅は0.4〜1.4m。断面形状は方形に近く、検出面からの深さは25〜40㎝を測る。SK4327との接続部は一体となって検出しており、重複関係は把握できていない。SD4131・4135とは遺構の重複関係があり、SD4131より新しく、SD4135より古いとされるが、SD4131とは並存する時期があったとも考えられる。門SB4725から東へ延びる、Ⅲ−C期の通路南側溝とみられる。

東西溝SD4129　第45次調査中央区で検出した東西方向の素掘溝。長さ約18m分を確認し、東端は南北溝SD4131上で途切れる。幅は0.5〜0.9m、深さは検出面から15〜55㎝を測る。遺構の

重複関係があり、SD4131より新しい。飛鳥Ⅱの特徴を示す須恵器が出土したが、遺構の年代を示すものではない。門SB4725から東へ延びる、Ⅲ-C期の通路北側溝とみられる。

井戸SE5950（Fig. 57）　第53次調査中区で検出した素掘りの井戸。検出面での形は南北2.0m、東西1.6mの楕円形で、深さ0.9mまではすり鉢状の土坑の様相を呈する。その下は、1.0×0.6mの隅丸長方形で、深さ1.6mをほぼ垂直に掘り下げる。深さは検出面から2.5m。井戸枠の部材や抜取痕跡はみられない。埋土は、上段の土坑状の部分は黄褐色の粘質土と暗灰褐色の粗砂が互層となり、検出面から0.5mの位置で土師器甕が倒立した状態で出土した。また、上段の最下層の暗灰褐色粗砂からは墨書のある土師器杯A（Pl. 33-454・455）が出土している。下段の垂直に掘り下げた部分は、暗褐色土塊が交った地山由来の黄褐色粘質土で一気に埋め立てられており、遺物も出土していない。最下層には細砂が薄く堆積する。断ち割り調査の際、底が砂層に達したにもかかわらず、湧水が非常に少なかった。このことから、実際には井戸として使用されずに埋め立てられた可能性も考えられる。Ⅲ-C期の井戸。

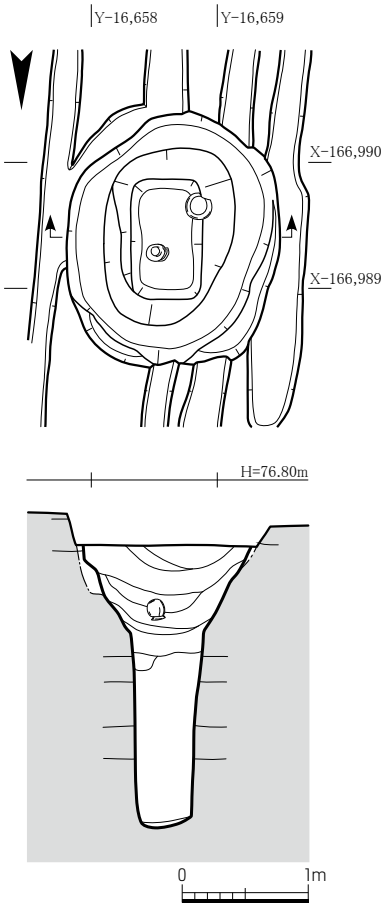


Fig. 57　SE5950平面図・断面図　1:60

d　藤原京廃絶期の遺構（Pl. 4・5・8・9，Ph. 8・36・37・39）

東西塀SA4111・南北塀SA4110・東西塀SA5090　第45次調査中央区から第50次調査東区にかけて検出した、「匚」形をなす掘立柱塀。北辺にあたる東西塀SA4111は5間分9.2mを確認した。柱間寸法はおおよそ等間で1.84m。柱穴は一辺60～80cmの隅丸方形、深さは検出面から30cmを測る。東端の柱穴には柱痕跡が遺存する。西端でSA4110の北端と接続する。柱筋は東で4.3°南に振れる。西辺にあたる南北塀SA4110は14間、28.9mを確認した。柱間寸法はおおよそ等間で2.06m。柱穴は隅丸の方形または長方形で、長辺は60～90cm、深さは検出面から30～40cm。南端から1・2・3・8基目と北端から2基目の柱穴で、柱痕跡を確認した。柱径は15cm程度。柱筋は北で東に5.0°振れる。南辺にあたるSA5090は5間分10.3mを確認した。柱間寸法はおおよそ等間で2.06m。柱穴は隅丸長方形で、長辺は70cm程度。深さは検出面から30cm。西端の柱穴で柱痕跡を確認した。西端でSA4110の南端と接続する。柱筋は東で南に2.8°振れる。3条の塀により区画施設をなすと考えられるが、内部に建物などの同時期遺構を確認できておらず、性格は不明である。

東西塀SA4121・南北塀SA5080・東西塀SA5081・入口SX5082・東西塀SA5083　第53次調査北区、第45次調査中央区から第50次調査東区にかけて検出した、「匚」形をなす掘立柱塀。先述したSA4111・4110・5090による区画の外側を巡り、西と南には素掘溝SD4135・5084を伴

う。北辺にあたる東西塀SA4121は、11間分24.0mを確認した。柱間寸法はおおよそ等間で、2.18mを測る。柱穴は40～80cmの隅丸方形または円形。深さは検出面から15cm。SA4111の2.4m北側に位置する。柱筋は東で南に4.3° 振れる。西辺にあたるSA5080は16間で長さ38.8m。柱間寸法は最大2.6mとなるところもあるが、おおよそ2.4mである。柱穴は50～70cmの隅丸方形または円形。深さは検出面から20～35cm。SA4110からの距離は北端で7.6m、南端で8.4m。柱筋は北で東に6.2° 振れる。

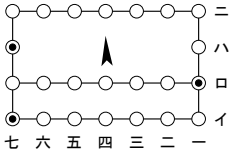
南辺は東西塀SA5081とSA5083の間に、入口SX5082が開く。西側の塀SA5081は4間で長さ9.6m。柱間寸法は2.4m。東側の塀SA5083は2間分5.0mを確認した。柱間寸法は2.5m。入口SX5082は柱間心々で4.2m。柱穴は50～60cmの隅丸方形で、深さは検出面から20～30cm。SA5081の西端から3基目の柱穴に、柱痕跡が粗砂交じりの灰褐色粘質土となり遺存する。柱径は15cmで、柱痕跡の部分が柱掘方の底より5cmほど沈み込む。SA5081の西端で、SA5080の南端に接続する。SA5090の8.2m南に位置する。柱筋はSA5081が2.3° 東で南に振れ、SA5083は3.5° 東で南に振れる。

東西塀SA5085　第50次調査東区で検出した掘立柱東西塀。6間分、13.7mを確認した。柱間寸法はおおよそ等間で2.28m。柱穴は隅丸方形で一辺が45～70cm。深さは検出面から20～30cm。SA5081の3m北を並行し、西端はSA5080の南端から2基目の柱穴に近接する。柱筋は東で南に3.0° 振れる。

南北溝SD4135・東西溝SD5084　第45次調査中央区から第50次調査東区にかけて検出した、L字形の素掘溝。SD4135は長さ29.6mを確認した。幅は40～90cm、深さは検出面から10～30cm。南端でSD5084に接続する。北端は東西溝SD4132の位置で途切れるが、関係は不明。溝底の標高は第50次調査東区では北に向かうにつれ低くなるが、第45次調査中央区では溝底が高くなる部分があり、機能時に水流があったかは不明である。SA5080の0.8m西に位置する。方位は北で東に3.5° 振れる。南辺にあたる東西溝SD5084は3.7m確認した。幅は40cm、深さは10cm程度と非常に浅い。SA5081の1.0m南に位置し、SA5081の西から1間で途切れる。方位は東で南に0.6° 振れる。

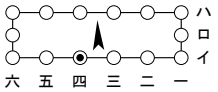
B　奈良時代（Ⅳ期）の遺構（Pl. 2～4・6・7・10・11, Ph. 6・13・16・18・19・28・30・34）

藤原京域では平城京遷都とともにほとんどの施設が廃絶し、遺構の展開もみられなくなる。しかし左京六条三坊ではSD4130をはじめ、奈良時代の遺物が多量に出土し、活発な活動の痕跡が認められることが特徴的である。遺構もその活動を反映して多数検出しており、配置は藤原京期から一変する。なお、井戸SE5920については475頁の別表1に概要を記す。



掘立柱建物SB4350　第46次調査区で検出した掘立柱東西棟建物。桁行6間×梁行2間の身舎の南側に1間の廂が付く。建物規模は身舎部分が桁行12.4m×梁行4.8m、廂の出は2.4mである。柱間寸法は桁行が2.07m、梁行が2.4mとなる。身舎の柱穴は一辺0.8～1.2mの隅丸方形または円形。深さは検出面から40～65cmを測る。妻側の柱のほうがやや深い傾向にある。廂の柱穴は0.6～0.9mの隅丸方形で、深さは25cm。身舎の柱穴より小さく、浅い。身舎柱のロ一・ハ七と廂柱のイ七の柱穴には、黄灰色粘質土または灰色微砂の柱痕跡が遺存する。ロ一の柱穴

では、柱痕跡が柱穴の底からさらに10㎝ほど沈み込んでいる。柱痕跡から推定される柱径は15～20㎝ほどである。遺構の重複関係より、Ⅲ-Ａ期のSA4284およびⅢ-Ｃ期のSB4333より新しい。後述するように、この時期には塀SA4355・4356および溝SD4357・4358による区画があり、区画とSB4350の東西中軸がほぼ揃う。SB4350はこの区画の正殿であったとみられる。

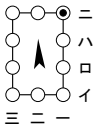


掘立柱建物SB4351　第46次調査区で検出した桁行５間×梁行２間の掘立柱東西棟建物。建物規模は桁行11.2ｍ×梁行3.0ｍで、柱間寸法は桁行が2.24ｍ、梁行が1.5ｍである。柱穴は一辺0.6～0.8ｍの隅丸方形。深さは検出面から35～60㎝を測る。SB4350より規模が小さく、柱穴も小さい。イ四の柱穴には灰色粘質土の柱痕跡がみられ、その中心には木質も一部遺存する。柱痕跡から推定される柱径は、15㎝ほどである。遺構の重複関係より、Ⅲ-Ａ期のSB4290およびⅢ-Ｃ期の SB4330より新しい。SB4350の６ｍ南に西妻を揃えて配置することから、その前殿であったと考えられる。

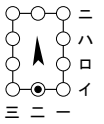
東西塀SA4355・南北塀SA4356・東西溝SD4357・南北溝SD4358　第46次調査区で検出した、東西塀SA4355と南北塀SA4356、および塀の外側の東西溝SD4357と南北溝SD4358が一連となったＬ字形の区画施設。東西塀SA4355は10間分、長さ36.7ｍを確認した。西端の柱穴がSA4356と接続する。柱間寸法は3.67ｍ。柱穴は一辺40～60㎝の隅丸方形または円形。深さは検出面から10～40㎝を測る。東方は遺構面の削平が著しく、SD4357の続く範囲までは塀が延びていた可能性もある。柱痕跡が西端から１・６・８基目および東端の柱穴で、灰色の粘質土として残る。柱痕跡から推定される柱径は17㎝前後である。南北塀SA4356は８間分、長さ29.5ｍ分を確認した。南端は調査区外に延びる。柱間寸法は3.69ｍ。柱穴は一辺40～60㎝の隅丸方形。深さは検出面から20㎝を測る。柱痕跡が南端から１・２基目の柱穴で、黄灰色や黒灰色の粘質土として残る。柱痕跡から推定される柱径は20㎝弱である。

東西溝SD4357は、SA4355の0.7ｍ北側に位置する東西方向の素掘溝。東端で４ｍ北折して途切れる。東西方向の長さは47ｍで、やや蛇行する箇所もあり、幅は0.5～1.4ｍを測る。断面は法面が緩い傾斜をなす。検出面からの深さは、最も深い場所で約30㎝、東端では浅く約10㎝である。溝底の標高は中央が最も低く、両端に向かうに従い高くなり、その差は最大で30㎝程度である。

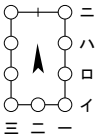
南北溝SD4358は、SA4356の0.7ｍ西側に位置する南北方向の素掘溝。南端は調査区外に延びる。長さ30.6ｍ分を確認した。幅は南端で0.5ｍ、北端で0.8ｍを測り、最大1.1ｍとなる部分がある。検出面からの深さは南端で10㎝、北端で20㎝を測る。溝底の標高は南に向かうに従い高くなり、溝の両端で25㎝の差がある。SD4357・4358ともに、溝底の標高が低くなる箇所に排水できる落水口がなく、流水のない空溝であったとみられる。遺構の重複関係より、SD4358はⅢ-Ａ期のSD4285より新しい。



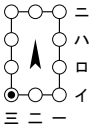
掘立柱建物SB4727　第47次調査区で検出した、桁行３間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行5.2ｍ×梁行3.2ｍ、柱間寸法は桁行が1.73ｍ、梁行が1.6ｍである。柱穴は40～60㎝の隅丸方形または不整形な楕円形で、深さは検出面から25～40㎝を測る。ニ一の柱穴に暗褐色粘質土の柱痕跡がある。痕跡から推定される柱径は15㎝程度である。直接の重複関係はないが、六条条間路南側溝SD4311と並存しない。



掘立柱建物SB4728　第47次調査区で検出した、桁行3間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行5.0m×梁行3.2m、柱間寸法は桁行が1.66m、梁行が1.6mである。柱穴は40～70cmの隅丸方形または不整形な楕円形で、深さは検出面から40～55cmを測る。南妻柱の柱穴に、暗褐色粘質土の柱痕跡がある。痕跡から推定される柱径は10cm程度である。遺構に重複関係があり、六条条間路南側溝SD4311より新しい。

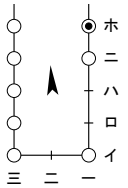


掘立柱建物SB4560　第46次調査区で検出した桁行3間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行6.0m×梁行3.4m、柱間寸法は桁行が2.0m、梁行が1.7mである。柱穴は50～90cmの隅丸方形または不整形な楕円形で、深さは検出面から15～35cmを測る。南妻柱はやや小さく、北妻柱は削平されたためか検出していない。直接の重複関係はないが、六条条間路南側溝SD4311とは並存しない。

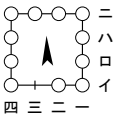


掘立柱建物SB4987　第50次調査西区で検出した桁行3間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行5.4m×梁行3.2m、柱間寸法は桁行が1.8m、梁行が1.6mである。柱穴は40～60cmの隅丸方形または不整形な楕円形で、深さは検出面から30～40cmを測る。イ三の柱穴に暗黄灰色粘質土の柱痕跡が残る。痕跡から推定される柱径は15cm程度である。遺構に重複関係があり、六条条間路南側溝SD4311より新しい。

SB4987・4560・4728・4727の4棟はほぼ同じ規模で、また北妻柱筋をおおよそ揃えて配置される。4棟の間隔はそれぞれの側柱筋間の距離で、SB4987とSB4560の間は9m、SB4560とSB4728の間は3.4m、SB4728とSB4727の間は3.2mである。



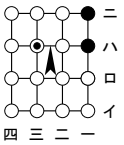
掘立柱建物SB4787　第47次調査区で検出した、桁行4間以上×梁行2間の掘立柱南北棟建物。北妻は調査区外に延び、南妻柱はⅥ期の井戸SE4790により破壊されて検出できないため、梁行は3間であった可能性もある。建物の規模は桁行8.4m以上×梁行4.9m。柱間寸法は桁行2.1m、梁行は2間とすれば2.45mとなる。柱穴は隅丸長方形または隅丸方形で、長辺の長さは0.6～1.0mである。深さは検出面から30～70cmとややばらつきがあるが、穴底の標高はほぼ同じである。ホ一の柱穴に柱痕跡が残り、柱径は25cm程度であったことがわかる。遺構の重複関係があり、Ⅲ-B期の建物SB4789より新しく、Ⅵ期の斜行東西溝SD4791と井戸SE4790より古い。南側に1.4mの間隔をあけて梁行が同規模のSB4786が側柱筋を揃えて並び、一連の施設と考えられる。



掘立柱建物SB4786　第47次調査区で検出した、桁行3間×梁行3間の掘立柱建物。建物の規模は桁行4.8m×梁行4.8mで、ほぼ正方形を呈し、柱間寸法は桁行、梁行とも1.6mである。柱穴は隅丸長方形または隅丸方形で、長辺の長さは0.6m、大型のもので0.9mである。深さは検出面から25～35cmとやや浅い。SB4787と一連の施設とみられ、SB4786が小規模で柱穴も小型であることから、SB4787が主屋でSB4786が付属屋とみられる。

掘立柱建物SB4150　第45次調査中央区で検出した、桁行2間×梁行1間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行3.8m×梁行1.3m、柱間寸法は桁行が1.9m、梁行が1.3mである。柱穴は一辺50～80cmの隅丸方形で、埋土は灰褐色の粘質土が主体である。柱穴は削平のためか非常に浅く、検出面から20～25cmを残すのみである。Ⅲ-A期の建物SB4140と柱穴の重複はないが遺構が重

複している。建物の方位は北で東へ5° 振れる。



掘立柱建物SB5050（Fig. 58）　第50次調査西区で検出した、総柱の掘立柱南北棟建物。桁行3間×梁行3間、建物の規模は桁行6.6m×梁行5.2m。柱間寸法は桁行が2.2m、梁行が1.73m。柱穴は隅丸方形または楕円形で、長辺の長さが0.9～1.4mである。側柱の柱穴より内部の柱穴のほうが小型である。深さは検出面から30～70cmを測る。ハ一・ニ一の柱穴には柱根が残る。ハ一の柱根は柱径35cmで、中心部と周囲が粘土化している。ニ一の柱根は大半が粘土化しており、木質が一部遺存する。柱径は約35cmとみられる。またニ一の柱根は柱穴底より17cm沈みこむ。ハ三の柱穴には柱痕跡が木質交じりの暗灰色粘質土となり遺存する。柱穴から出土した土器は奈良時代中頃のものが多いが、抜取穴からは平安時代初頭の土器が出土し、その時期に廃絶したとみられる。柱径が太く、総柱建物であることから、倉庫であったとみられる。

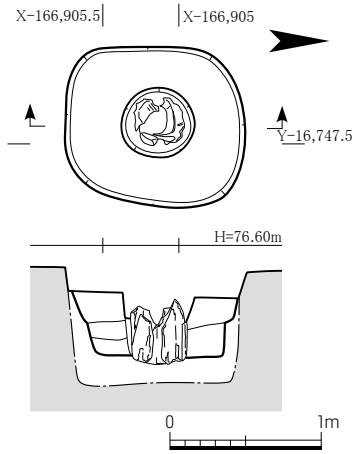


Fig. 58　SB5050柱穴（ハ一）
平面図・断面図　1:50

土坑SK4365　第46次調査区で検出した土坑。SB4340の南約9mに位置する。東西0.6m、南北0.8mの楕円形を呈する。埋土には20～30cm大の花崗岩片と、奈良時代の土器を少量含む。

C　藤原京造営以前の遺構

藤原京造営以前の遺構は、藤原京造営直前にあたる7世紀中頃～後半の遺構と、古墳時代の遺構に大きく分かれる。

i　7世紀中頃～後半（Ⅱ期）の遺構（Pl. 4・6～8・10・11, Ph. 13・14・16～18・40・41）

7世紀中頃～後半には第46次調査区を中心に小型の掘立柱建物が建てられるが、その配置に規則性はない。建物の方位は北で東に2° ～7° 振れる。

東西溝SD4179　第45次調査中央区で検出した東西方向の素掘溝。長さ22.5mを確認した。幅は50～90cm、深さは検出面から最大25cmほどである。飛鳥Ⅱ～Ⅲの特徴をもつ土器が少量出土した。

掘立柱建物SB4249　第46次調査区、第53次調査中区で検出した、桁行2間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行2.8m×梁行2.5m、柱間寸法は桁行が1.4m、梁行が1.25mである。柱穴は大きさ40～60cmの隅丸方形、または不整形の円形や方形。深さは検出面から25～35cmを測る。北側柱列中央の柱穴に残る暗灰褐色粘質土の柱痕跡からみると、柱径は10cm以下と、かなり細い。建物の方位は北で東へ2.2° 振れる。

掘立柱建物SB5975　第53次調査中区で検出した、桁行3間×梁行2間の掘立柱東西棟建物。建物の規模は桁行4.8m×梁行3.4m、柱間寸法は桁行が1.6m、梁行が1.7mである。柱穴は隅丸方形または楕円形で、大きさは側柱が35～70cm。深さは検出面から10～25cm、東南隅の柱穴のみ55cmである。北東隅、南側柱の西妻から2基目、北側柱の西妻から2基目の計3基の柱穴に柱

痕跡が残る。建物の方位は東で南に7.0° 振れる。

掘立柱建物SB5970　第53次調査中区で検出した、桁行２間×梁行１間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行4.2m×梁行3.1mで、桁行の柱間寸法は2.1mである。柱穴は40～70cmの隅丸方形または楕円形で、深さは検出面から10～25cm。南妻の柱穴２基に柱痕跡が残る。Ⅵ期の建物SB5971と柱穴どうしの重複関係はないが遺構の範囲が重複しており、同時並存はしない。建物の方位は北で東に7.2° 振れる。

掘立柱建物SB4240　第46次調査区で検出した、桁行４間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行7.8m×梁行3.3m、柱間寸法は桁行が1.95m、梁行が1.65mである。柱穴は一辺0.7～0.9mの隅丸方形。柱穴は非常に浅く、検出面から25cmを残すのみである。建物の方位は、北で東へ4.3° 振れる。

掘立柱建物SB4241　第46次調査区で検出した、桁行４間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行8.4m×梁行3.9m、柱間寸法は桁行が2.1m、梁行が1.95mである。柱穴は大きさ0.5～0.9mの隅丸方形または不整形な楕円形。柱穴は非常に浅く、検出面から15～25cmしか残らない。Ⅲ-Ｃ期の建物SB4330と遺構の重複関係があり、それより古い。建物の方位は北で東へ4.2° 振れる。

掘立柱建物SB4242　第46次調査区で検出した、桁行５間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行9.8m×梁行4.4m、柱間寸法は桁行が1.96m、梁行が2.2mである。柱穴は一辺0.6～0.9mの隅丸方形。深さは検出面から25～45cmを測る。Ⅲ-Ｂ期の塀SA4286およびⅢ-Ｃ期の建物SB4331と遺構の重複関係があり、それらより古い。建物の方位は北で東へ3.8° 振れる。

掘立柱建物SB4243　第46次調査区で検出した、桁行２間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行5.0m×梁行4.4m、柱間寸法は桁行が2.5m、梁行が2.2mである。柱穴は大きさ40～70cmの隅丸方形。深さは検出面から20～35cmを測る。SK4265と遺構の重複関係があり、それより新しい。Ⅲ-Ａ期の南北塀SA4284とⅣ期の建物SB4350とは、柱穴が直接重複しないが遺構の範囲が重複しており、同時並存はしない。建物の方位は北で東へ2.3° 振れる。

土坑SK4265　第46次調査区で検出した大土坑。南北3.0m、東西2.3mの不整形な楕円形を呈する。底面は凹凸があり、深さは検出面から北側の浅い部分が45cm、中央で95cmを測る。埋土は水平に近い堆積をし、下層は約40cmの暗青灰色の粘質土で、粗砂の交じる薄い堆積層を挟み、中層が約25cmの茶灰色の粘質土、上層が約30cmの淡茶灰色の粘質土となる。上層の埋土より、飛鳥Ⅲに属する土器がまとまって出土した。中層と下層には遺物を含まない。同じⅡ期の建物SB4243と遺構の重複関係があり、それより古い。

掘立柱建物SB4244　第46次調査区で検出した、桁行２間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行4.5m×梁行3.4m、柱間寸法は桁行が2.25m、梁行が1.7mである。柱穴は大きさ40～60cmの隅丸方形または不整形な楕円形。深さは検出面から35～50cmを測る。建物の方位は北で東へ3.7° 振れる。

掘立柱建物SB4245　第46次調査区で検出した、桁行２間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行4.0m×梁行3.4m。柱間寸法は桁行が2.0m、梁行が1.7mである。柱穴は大きさ30～55cmの隅丸方形または不整形な楕円形。深さは検出面から25～40cmを測る。Ⅳ期の南北溝SD4358と遺構の重複関係があり、それより古い。建物の方位は北で東へ6.4° 振れる。

掘立柱建物SB4246　第46次調査区で検出した、桁行３間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行5.0ｍ×梁行2.8ｍ、柱間寸法は桁行が1.67ｍ、梁行が1.4ｍである。柱穴は大きさ60～80㎝の隅丸方形。深さは検出面から25～40㎝を測る。北東隅と北妻の２基の柱穴は検出していない。SB4247と遺構の重複関係があり、それより古い。建物の方位は北で東へ3.8°振れる。

掘立柱建物SB4247　第46次調査区で検出した、桁行３間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行5.5ｍ×梁行3.0ｍ、柱間寸法は桁行が1.83ｍ、梁行が1.5ｍである。柱穴は大きさ65～90㎝の隅丸方形。深さは検出面から40～70㎝を測る。南妻柱と西側柱に粘質土の柱痕跡が遺存する。同じⅡ期の建物SB4246と遺構の重複関係があり、それより新しい。建物の方位は北で東へ4.3°振れる。

掘立柱建物SB4248　第46次調査区で検出した、桁行３間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行7.0ｍ×梁行4.2ｍ、柱間寸法は桁行が2.33ｍ、梁行が2.1ｍである。柱穴は大きさ50～80㎝の不整形の円形または方形。深さは検出面から30～40㎝を測る。Ⅲ-Ｃ期の建物SB4333と遺構の重複関係があり、それより古い。建物の方位は北で東へ6.3°振れる。

掘立柱建物SB4985　第46次調査区から第50次調査西区にかけて検出した、桁行３間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行5.8ｍ×梁行3.4ｍ、柱間寸法は桁行が1.93ｍ、梁行が1.7ｍである。柱穴は40～70㎝の隅丸方形または不整楕円形で、深さは検出面から15㎝程度しか残っていない。南東隅柱は削平されたためか、検出していない。遺構に重複関係があり、Ⅲ-Ｃ期の建物SB4333より古い。

南北塀SA5980　第53次調査南区で検出した掘立柱南北塀。２間分、4.6ｍを確認した。柱間寸法は2.3ｍ。柱穴は大きさ50～65㎝の隅丸方形で、深さは検出面から20㎝を測る。

斜行南北溝SD4100　第45次調査Ⅲ区南半を北流する、南北方向の素掘溝。北端は第45次調査中央区南辺付近で消滅する。長さは約20ｍ。幅は40～70㎝、深さは10～20㎝を測る。溝底の標高は北端で75.8ｍ。やや蛇行するが、方位は北で東に10°振れる。

土坑SK4160　第45次調査中央区北端で検出した土坑。東西1.6ｍ、南北1.2ｍ以上で、北半は調査区外に延びる。深さ20㎝の浅い窪みで、７世紀中葉の丸・平瓦を一括投棄していた。

土坑SK4161　第45次調査中央区で検出した浅い土坑。平面は東西1.3ｍのほぼ円形で、深さは検出面から25㎝。埋土は茶灰色の粘質土で、SK4160と同様の瓦をごく少量含む。Ⅵ期の南北溝SD4141と重複関係があり、それより古い。

土器埋納坑SJ4260（Fig. 59）　第46次調査区東壁中央部で検出した、土器を埋設した土坑。径0.7ｍ、深さ40㎝程度の円形の土坑を掘り、土師器杯Ｃを正位で納め、肩部以上と底部を欠く須恵器甕を逆位に伏せ、その上を拳大の石で覆う。杯内部および甕内の埋土には、特に埋納物

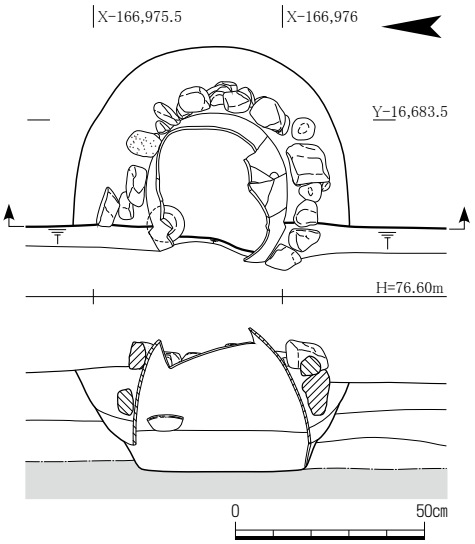


Fig. 59　SJ4260平面図・断面図　1:20

は認められなかった。土師器杯Cは、飛鳥Ⅰ新段階の年代が与えられる。

土坑SK4266　第46次調査区で検出した土坑。平面は不整形な円形で、幅0.8m、深さは検出面から25cmを測る。埋土は砂交じりの暗灰褐色粘質土で、炭粒と少量の土器を含む。土器は土師器杯、高杯、甕などが出土し、これらは飛鳥Ⅲの様相を示す。Ⅲ-C期の建物SB4330東側柱列と遺構の重複関係があり、それより古い。

土坑SK4267・4272　第46次調査区で検出した土坑。2基の土坑が重複しており、西側のSK4267が古い。SK4267の平面形は隅丸長方形で、東西1.6m、南北1.4m。断面形状は箱形で、深さは検出面から1.3m。下層は粘質土、上層は砂質土を主体とした埋土が10～20cm単位で堆積する。東側のSK4272の平面形は円形で、径1.4m。断面形状はすり鉢状を呈し、深さは検出面から0.8m。7世紀中葉の丸瓦や須恵器が出土した。Ⅲ-A期の東三坊坊間路SF4300の中央にあり、それより古い遺構である。

土坑SK4270　第46次調査区で検出した土坑。平面は東西2.7m、南北1.8mの楕円形で、深さは検出面から50cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土で、吉備池廃寺創建の所用瓦と同笵の軒丸瓦や、丸瓦、平瓦、隅切平瓦が出土した。Ⅲ-C期の建物SB4331と遺構の重複関係があり、それより古い。

ⅱ　古墳時代（Ⅰ期）の遺構（Pl. 3～8・10・11，Ph. 39・43～45）

古墳時代には自然河川が調査区中央を蛇行しながら北流し、その両岸に竪穴建物がまとまって建てられていた。

自然河川NR4225（Fig. 60）　第46次調査区から第45次調査中央区に北流する自然河川。第46次調査区、第53次調査中区、第50次調査東区では平面検出しており、第46次調査区の南から東へ蛇行するように流れ、第53次調査中区から第50次調査東区では東から北へ蛇行する様子が確認された。第45次調査Ⅲ区東壁断面で西肩の可能性がある落ち込みを確認しており、第45次調査中央区を若干東に振れながら南北に縦断して北へ抜けていたとみられる。規模は幅が最大約30m、深さは検出面から約90cmが残る。遺構は黄褐色粘土の地山を削り込んでおり、下層は黒褐色粘質土および砂質土が堆積し、上層に灰色砂が堆積する。上層は粗砂、細砂、粘質土の層が斜めに堆積しており、流水時の堆積とみられる。両岸の黒褐色粘質土の部分には竪穴建物

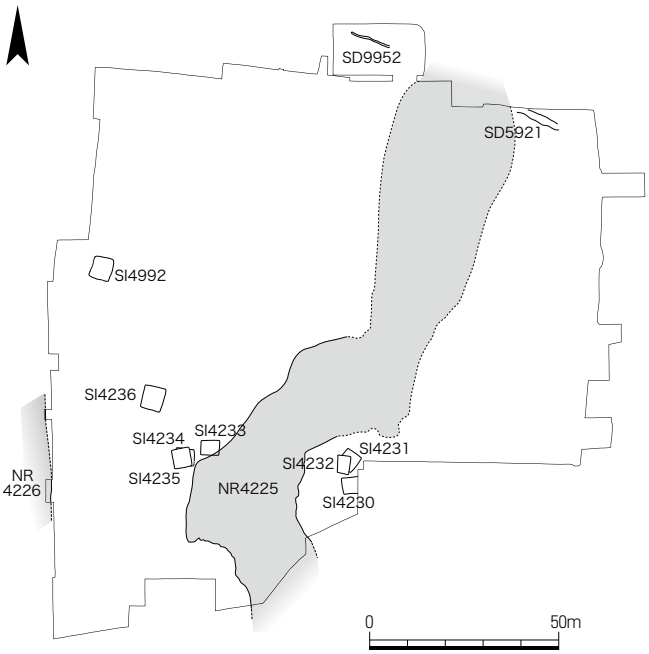


Fig. 60　NR4225・4226推定流域と周辺の竪穴建物　1:2000

が設けられており、また上層からは竪穴建物と同時期の土器が出土しているため、上層である灰色砂の範囲が竪穴建物と並存する範囲とみてよい。

自然河川NR4226（Fig. 60）　第46次調査区の西端をかすめて北流する自然河川。第46次調査区西辺の拡張区と第45次調査Ⅳ区西端で東岸を検出した。北側の第46次調査拡張区では長さ2.5ｍ、南側のⅣ区では６ｍを検出しており、合わせて長さ24.5ｍ分を確認した。南側では幅1.8ｍ深さ1.5ｍを確認するが、河川の中心までは及んでいないとみられる。埋土は上層と下層に分かれる。上層は肩から約１ｍの深さまで流水による灰色砂と茶灰色粘質土が互層に堆積し、下層は肩に沿って地山ブロックを含む黄灰色の粘質土が堆積する。上層からは６世紀の土師器甕と須恵器杯が出土している。

竪穴建物SI4230　第46次調査区で検出した竪穴建物。東端は調査区外に延びるが、一辺4.3ｍの方形平面になると推定される。北辺は東で北に約６° 振れる。削平が激しく、壁の立ち上がりは15㎝ほどしか残存しない。床面では４基の柱穴と小土坑を検出した。柱穴は東西1.9ｍ、南北2.0ｍの方形に並ぶ。柱穴は径25㎝の円形で、柱痕跡がある。小土坑は北西柱穴よりに位置し、径60㎝程度の円形で、埋土から布留式土器の高杯が出土している。竪穴外周の周堤、周溝、竈、および床面の壁溝、貼床は確認していない。竪穴内部には炭化材がみられ、北東隅の柱痕跡は北側が焼けている。焼失住居であろう。NR4225の東岸に位置し、検出面の標高がやや高くなっている。土師器高杯や韓式系土器が出土した。

竪穴建物SI4231（Fig. 61）　第46次調査区で検出した、竈をもつ竪穴建物。東西4.5ｍ、南北4.9ｍの長方形平面を呈する。長辺は北で東に38° 振れる。竪穴の壁の立ち上がりは40㎝ほどが残存する。床面で、壁溝、貼床、柱穴３基、貯蔵穴１基を確認した。壁溝は竪穴の壁際から５～20㎝の位置に北辺を除いた３辺で検出した。幅は15～30㎝、床面からの深さは10～15㎝程度。貼床は竪穴の南側で一部確認した。暗褐色の粘質土を厚さ３㎝ほど敷く。周溝と柱穴は貼床の上面から掘り込む。柱穴は西南隅では確認できていないが、東西2.4ｍ、南北2.5ｍの間隔で四隅に配されていたとみられる。柱穴は大きさ20～30㎝の円形または隅丸方形で、床面からの深さは30㎝。柱痕跡は竪穴埋土が15㎝堆積した面から確認された。貯蔵穴は竪穴の東辺北寄りに接して位置し、東西35㎝、南北50㎝の楕円形で、深さは10㎝。埋土からは高杯脚部が出土した。竈は北辺の中央やや東寄りに設けられ、主軸は竪穴の長辺とほぼ平行（Fig. 61　C-C'）。焚口から竪穴壁までが約70㎝、両袖最大幅が85㎝。竪穴壁から30㎝離れた主軸上に石を置いて支脚とする。煙道は確認されていないが、支脚の石から竪穴壁の間は底面が焼けておらず、上部に煙道があった可能性がある。竈前面には甕や甑が潰れた状態で散布していた。竪穴内埋土からは高杯や小型底丸壺、製塩土器が出土している。竪穴建物SI4232と重複関係があり、それより古い。床面の標高はSI4231の方が低い。自然河川NR4225の東岸、竪穴建物SI4230の北側に位置する。

竪穴建物SI4232（Fig. 61）　第46次調査区で検出した、竈をもつ竪穴建物。東西3.4ｍ、南北4.8ｍの長方形平面を呈する。長辺は北で東に約８° 振れる。竪穴の壁の立ち上がりは20㎝ほどが残存する。竪穴底部には炭化材が放射状に落下堆積しており、焼失住居とみられる。竪穴の南・西辺付近には特に壁に沿って炭化材が集積しており、最大で径10㎝程度のものも検出した。それら炭化材を含む堆積層を除去した床面から、壁溝、柱穴４基、貯蔵穴１基を確認した。壁溝

は竪穴の壁際すぐの位置に四周に掘られ、幅は5～10cm、床面からの深さは5cm程度。貯蔵穴は竪穴の東辺北寄りに接して位置し、東西50cm、南北60cmの隅丸長方形で、深さは25cm。土師器壺と甕が出土した。竈は北辺の中央やや東寄りに設けられ、主軸は竪穴の長辺とほぼ平行。焚口から煙道までが約90cm、袖は西側のみ確認しており、主軸からの最大幅が45cmである。燃焼部を楕円形に浅く掘りくぼめ、石を置いて支脚とする。煙道は北に延び、長さ30cmを確認した。竈内部からは甕が潰れた状態で出土した。埋土からは土師器高杯、小型丸底壺、須恵器甕、製塩土器、韓式系土器甕が出土している。竪穴建物SI4231と重複関係があり、それより新しい。

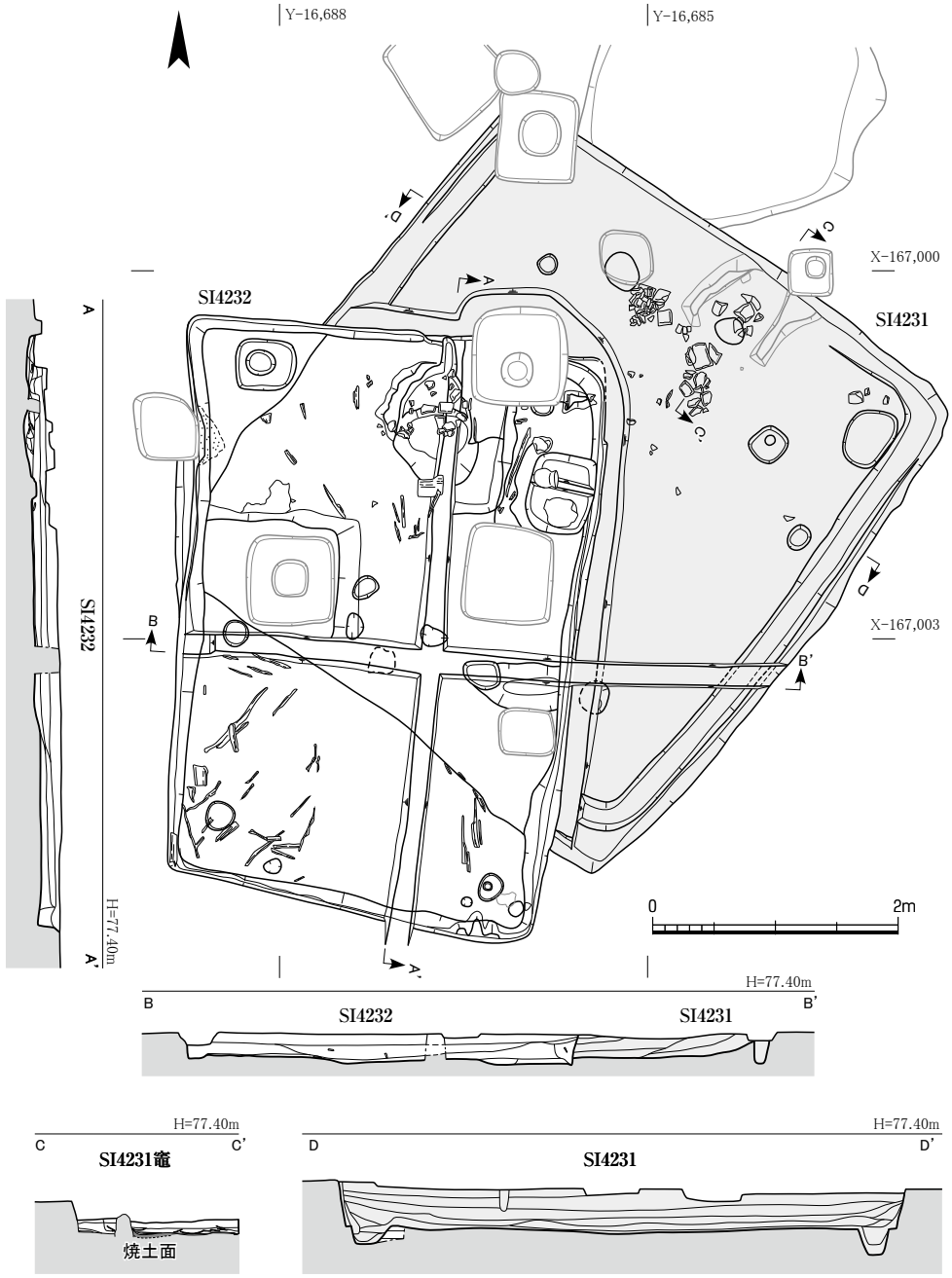


Fig. 61　SI4231・4232平面図・断面図　1:60

竪穴建物SI4233（Fig.62）　第46次調査区で検出した、竈をもつ竪穴建物。東西4.9m、南北3.9mの長方形平面を呈する。方位の振れはほぼ0である。竪穴の壁の立ち上がりは25cmほどが残存する。床面で、壁溝、柱穴3基、貯蔵穴1基を確認した。壁溝は竪穴の四周の壁際で検出したが、北辺東寄りで途切れる個所がある。幅は10～20cm、床面からの深さは10cm以上。柱穴は西北・西南隅と北辺南寄りで検出した。柱穴は大きさ35～50cmの円形または隅丸方形で、床面からの深さは25cm。貯蔵穴は竪穴の南辺北寄りに接して位置し、東西90cm、南北60cmの楕円形で、深さは25cm。高杯と甕の破片が出土した。竈は竪穴の東南隅に設けられ、主軸は竪穴の対角線方向（Fig.62　B-B', C-C）。竈は内側にずらして造りかえられている。第1次の竈は、第2次竈の支脚位置が焚口にあたるとみられる。焚口から竪穴壁までが130cm、両袖最大幅が60cm。焚口前面に浅い土坑を掘り、炭を掻き出していたようだ。焚口から30cmのあたりに支脚の残骸とみられる焼土面が残る。第2次の竈は焚口を50cm内側にして改修したとみられる。焚口から竪穴壁までが180cm、両袖最大幅は第1次と同じ60cm。焚口前面に浅い土坑を掘り、炭を掻き出す構造も同様とみられる。焚口から50cm離れた位置に、土師器高杯脚部を芯にして暗黄灰色の粘土を巻き、支脚とする。竈の燃焼部から焚口にかけて甕や甑が潰れた状態で散布していた。竈の燃焼部を中心として、第1次・第2次の竈に伴うとみられる炭層が竪穴底部に広がる。竪穴内埋土からは土師器や須恵器、製塩土器、韓式系土器が出土している。自然河川NR4225の西岸に位置する。

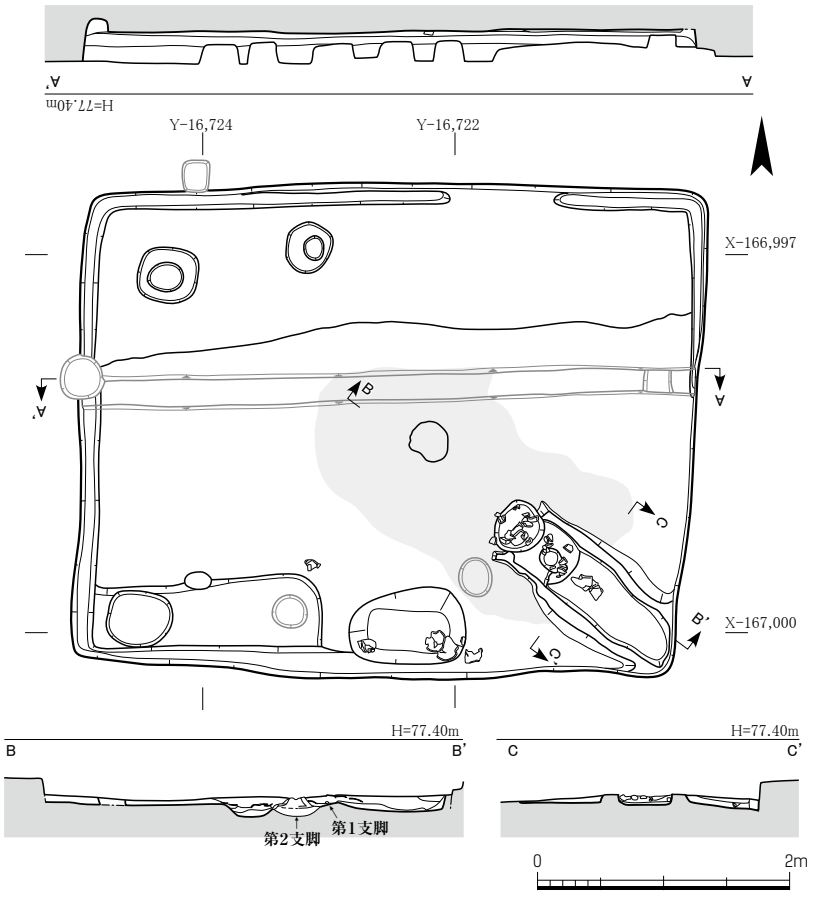


Fig. 62　SI4233平面図・断面図　1:60

竪穴建物SI4234（Fig. 63）　第46次調査区で検出した竪穴建物。大半を竪穴建物SI4235に壊される。東西5.0m、南北4.7mの長方形平面を呈する。長辺は東で南に6.5° 振れる。竪穴の壁の立ち上がりは25cmほどが残存する。床面で、貼床、柱穴2基、貯蔵穴1基を確認した。貼床は暗褐色粘質土塊交じりの黄褐粘質土を厚さ5cmほどで敷く。柱穴は貼床の上面から掘り込む。柱穴は北東・北西隅で確認し、2.6mの間隔で方形に配されていたとみられる。柱穴は大きさ40cmの隅丸方形で、床面からの深さは10cmまで確認した。貯蔵穴は竪穴の南辺東寄りに接して位置し、東西70cm、南北60cmの楕円形で、深さ20cmのすり鉢状。土師器小型丸底壺が出土した。竪穴内埋土からは銅釧の破片、韓式系土器の蓋などが出土した。SI4235と重複関係があり、それより古い。床面の標高はSI4234の方が低い。自然河川NR4225の西岸、竪穴建物SI4233の西側に位置する。

竪穴建物SI4235（Fig. 63）　第46次調査区で検出した、竈をもつ竪穴建物。東西4.7m、南北5.2mの長方形平面を呈する。長辺は北で西に11.5° 振れる。竪穴の壁の立ち上がりが5～10cmほどしか残存しない。床面から壁溝、柱穴4基、貯蔵穴1基、そのほかに小穴4基を確認した。壁溝は竪穴の壁際すぐの位置に四周に掘られ、幅は10～20cm、床面からの深さは10cm程度。柱穴は東西2.3m、南北2.4mで方形に配されていたとみられる。柱穴は大きさ30cmの隅丸方形。貯蔵穴は竪穴の東辺北寄りに接して位置し、東西75cm、南北100cmの楕円形形で、深さは20cm。南辺の中央に焼土と甕破片などが集中する範囲があり、竈の痕跡とみられる。竪穴内埋土からは土師器高杯、甕、韓式系土器が出土している。竪穴建物SI4234と重複関係があり、それより新しい。

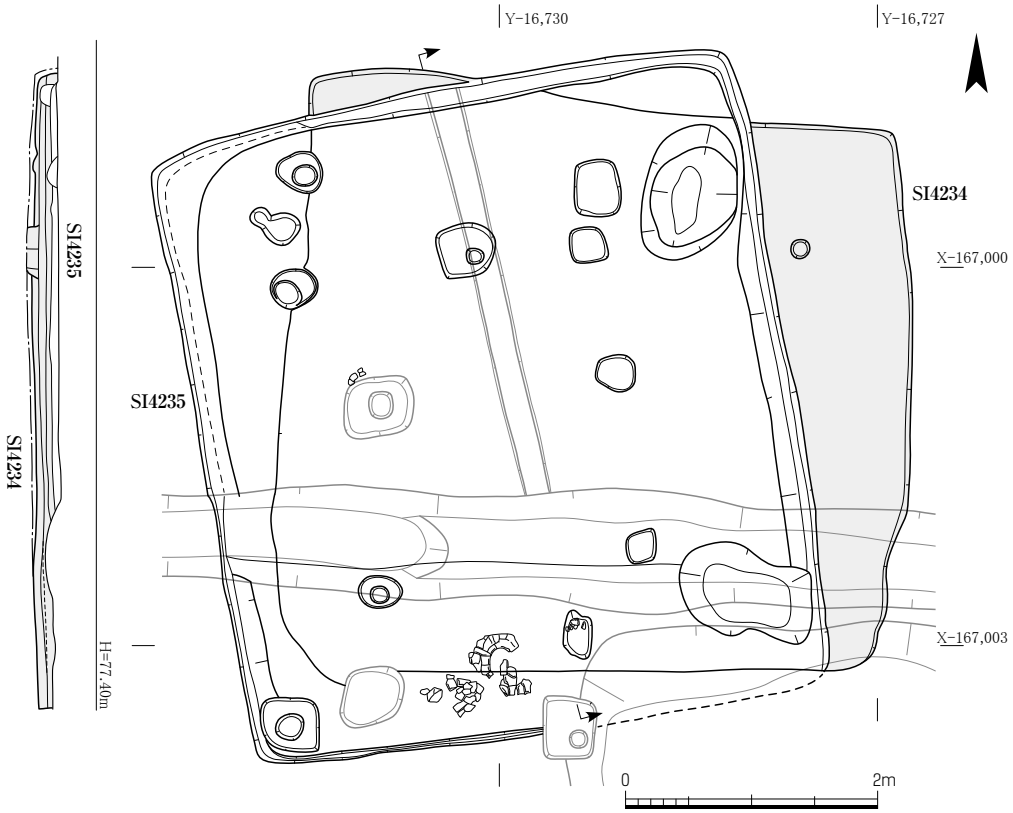


Fig. 63　SI4234・4235平面図・断面図　1:60

竪穴建物SI4236（Fig. 64）　第46次調査区で検出した竪穴建物。竪穴建物の中では最大規模のものである。東西5.7m、南北6.1mの長方形平面を呈する。長辺は北で東に約17.5° 振れる。竪穴の壁の立ち上がりは5～15cmほどしか残存しない。床面から、壁溝、柱穴4基、貯蔵穴1基、そのほかに小穴4基を確認した。壁溝は北辺以外の三辺で竪穴の壁際すぐの位置に確認した。幅は10～20cm、床面からの深さは5～10cm程度とごく浅い。柱穴は東西3.4m、南北4.0mの方形四隅に配される。柱穴は大きさ40～50cmの隅丸方形で、床面からの深さは30～40cmで、柱痕跡が径15～20cmの粘質土となって遺存する（Fig. 64　B-B'）。貯蔵穴は竪穴の南辺東寄りに接して位置する。東西75cm、南北65cmの隅丸長方形で、深さは40cm（Fig. 64　A-A'）。底面の四隅に打ち込まれた杭が粘質土となり遺存していた。土師器高杯、甕のほか韓式土器の蓋が出土した。北辺の中央に焼土があり、竈の痕跡とみられる。竪穴内埋土からは土師器高杯、甕、製塩土器、韓式系土器が出土した。Ⅲ-B期の建物SB4332と重複関係があり、それより古い。自然河川NR4225の西岸、竪穴建物SI4233の北西に位置する。

竪穴建物SI4992　第50次調査西区で検出した竪穴建物。東西5.5m、南北6.0mの長方形平面を呈する。長辺は北で東に22° 振れる。六条条間路南側溝SD4311と東三坊坊間路東側溝SD4301の交点に重複し、それより古い。藤原京期の遺構を保存するために掘り下げての調査を行って

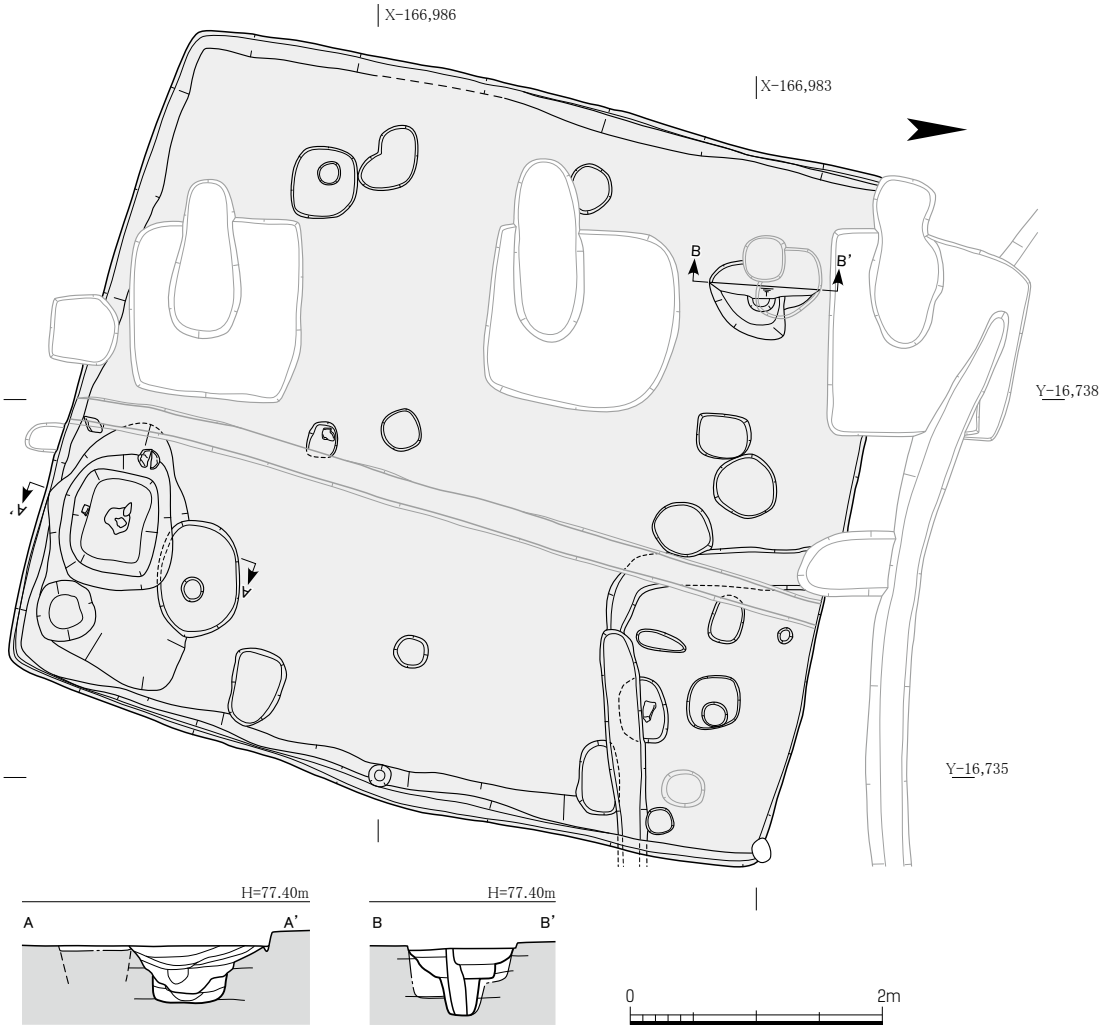


Fig. 64　SI4236平面図・断面図　1:60

おらず、詳細な構造は不明。

自然木集積SX5922　第53次調査北区北西隅の断ち割り調査で確認した、流路堆積土中の自然木の集積。流路は東で南に振れる東西方向で、東流するとみられる。木材は流路の灰色砂質土中に、流れに沿って方向を揃え、幅２ｍほどの範囲に集積する。長さ５ｍで調査区を西に拡張し、20点弱の自然木を確認した。自然木は大きいもので長さ2.3m、径25㎝ほどで、木口に伐採痕跡が認められるものもある。遺構の重複関係より、斜行東西溝SD5921より古い。古墳時代以前の流路とみられるが、年代が判明する遺物は出土していない。また、自然河川NR4225と一連である可能性も否定できないが、それを肯定する根拠を明らかにすることもできなかった。この周辺は土層の堆積からみて、数時期の流路が重複しているとみられる。

斜行東西溝SD5921　第53次調査北区で検出した東西方向の素掘溝。長さ13ｍを確認した。幅2.3m、検出面からの深さは10～20㎝程度と非常に浅い。方位は東で南に26.0° 振れる。自然木集積SX5922の上に明灰褐色砂質土の整地を行い、その上から掘削されている。

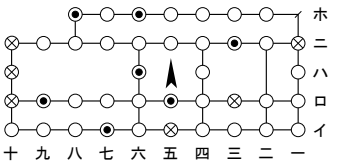
斜行東西溝SD9952　第133-７次調査区で検出した東西方向の素掘溝。長さ11ｍを確認した。幅は40㎝、検出面からの深さは30㎝程度。方位は東で南に20.6° 振れる。遺構の重複関係があり、土器据付穴SJ9953より古い。

土器据付穴SJ9953　第133-７次調査区で検出した土器壺底部を据え付けた土坑。直径55㎝のほぼ円形で、検出面からの深さは20㎝。斜行東西溝SD9952の埋土の上から据付穴を掘削し、灰褐色粘質土を穴底に入れ、土器の底部を据え付ける。

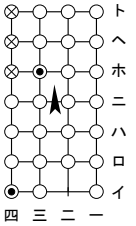
D　平安時代～中世の遺構

i　平安時代前・中期（Ⅴ期）の遺構（Pl. 2・3・6・7・10・11，Ph. 18・19）

平安時代は遺構が希薄になり、第46次調査区中央部に数棟がまとまって展開する状況を示す。SD4130は埋没が進みながらも存続し、その北には井戸が並ぶ。井戸SE4765・4782・4793・4980・5095については475頁の別表１に概要を記す。



掘立柱建物SB4370　第46次調査区で検出した掘立柱東西棟建物。身舎は桁行９間×梁行２間で、南側は全面、北側は東寄り７間に廂が付く。建物規模は身舎部分が桁行19.1ｍ×梁行3.7m、廂の出は南北とも2.0ｍである。柱間寸法は桁行で2.12m、梁行は1.8ｍである。妻柱筋のハ四・ハ六に柱穴を検出しており、間仕切りであった可能性が考えられる。柱穴は一辺2.5～4.0ｍの隅丸方形。深さは検出面から20㎝を測る。７基の柱穴で柱痕跡を確認した。また、礫が入っている柱穴が６基あり、根固めの石であった可能性がある。建物の方位は東で南へ0.9° 振れる。第46次調査区中央にまとまるⅤ期の遺構群の中で最も大きい建物であり、主屋であったと推定される。



掘立柱建物SB4371　第46次調査区で検出した、総柱の掘立柱南北棟建物。桁行６間×梁行３間、建物の規模は桁行12.0ｍ×梁行5.6m。柱間寸法は桁行がほぼ等間で2.0m、梁行はややばらつきがあり、1.7～2.0ｍである。柱穴は円形または隅丸方形で、大きさは25～40㎝である。深さは検出面から10～30㎝を測

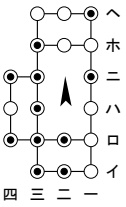
る。イ四・ホ三の柱穴には柱痕跡が灰褐色粘質土として認められる。西側柱筋の柱穴、ホ四～ト四は柱穴に礫が入っており、根固めの石であった可能性がある。南から3間目、西端の1間四方のほぼ中央に、重複する2基の土坑SK4392・4393がある。建物の方位は北で東へ1.7° 振れる。

土坑SK4392・4393　SB4371の内部で検出した重複する2基の土坑。SK4392は東西70㎝、南北60㎝の円形で、深さ20㎝のすり鉢状を呈する。埋土には木炭片や焼土塊を多量に含み、10世紀後半の土師器小皿や須恵器甕などが出土した。SK4393はSK4392の東南に重複し、東西80㎝、南北60㎝の楕円形を呈する。遺構の重複関係より、SK4392のほうが古い。

大土坑SK4390　第46次調査区で検出した池状の大土坑。東西4.0m、南北9.4mで深さは検出面から0.3mを測る。西岸に沿って玉石が点々と遺存していた。埋土からは10世紀末～11世紀初めの黒色土器、土師器の杯、皿、甕、須恵器などが一括で出土した。

掘立柱建物SB4372　第46次調査区で検出した、桁行2間×梁行2間の掘立柱建物。建物の規模は桁行4.2m×梁行4.0mでほぼ正方形を呈し、柱間寸法は桁行2.1m、梁行2.0mである。柱穴は円形または隅丸方形で、大きさは30～35㎝、深さは検出面から20㎝。4基の柱穴で柱痕跡を確認している。小溝群と重複関係があり、それより古い。建物の方位は北で東へ7.0° 振れる。

掘立柱建物SB4373　第46次調査区で検出した、桁行5間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行10.5m×梁行3.5m、柱間寸法は桁行が2.1m、梁行が1.75mである。南北両妻柱から1間内側、ロ二・ホ二で柱穴を検出しており、間仕切りであった可能性が考えられる。西側に2間分、ロ四～二四が廂として取りつく。柱穴は20～50㎝の円形または隅丸方形で、深さは検出面から35㎝を測る。小溝群と重複関係があり、それより新しいことから、SB4372より新しいといえる。建物の方位は北で東へ1.3° 振れる。



南北塀SA4380・東西塀SA4383・南北塀SA4381　第46次調査区で検出した、「凵」形をなす掘立柱塀。西辺にあたる南北塀SA4380は3間分6.2mを確認した。柱間寸法はおおよそ等間で2.07m。柱筋は北で5.5° 東に振れる。南辺にあたる南北塀SA4383は3間で、全長は6.5m。柱間寸法はおおよそ等間で2.17m。柱筋は東で南に1.3° 振れる。東辺にあたるSA4381は3間分6.1mを確認した。柱間寸法はおおよそ等間で2.03m。柱筋は北で東に5.5° 振れる。柱穴は円形または隅丸方形で、大きさは30～40㎝。SA4381の北端を除く全ての柱穴で、柱痕跡を確認している。3条の塀により区画施設などをなすと考えられるが、内部に建物などの同時期遺構を確認できておらず、性格は不明である。

南北塀SA4382　第46次調査区で検出した南北方向の掘立柱塀。2間分、4.2mを確認した。柱間寸法は2.1m。柱穴は円形または隅丸方形で、大きさは35～40㎝。柱筋は北で東に8.2° 振れる。

土坑SK4391　第46次調査区で検出した土坑。東西1.0m、南北0.85mの長方形を呈する。10世紀後半の土師器小皿と甕が出土した。Ⅲ-C期の建物SB4330と重複関係があり、それより新しい。

掘立柱建物SB4788　第47次調査区で検出した掘立柱東西棟建物。桁行2間×梁行2間、建物規模は桁行4.2m×梁行4.0m。柱間寸法は桁行で2.1m、梁行で2.0mである。柱穴は25～30㎝の円形。東妻柱は検出していない。建物の方位は東で南へ6.6° 振れる。

焼土坑SK4779　第47次調査区で検出した土坑。南北0.8m、東西0.7mの不整形な楕円形を呈する。深さは15㎝。土坑の底面と壁は被熱で赤色化する。底面の東壁際には部分的に青灰色粘質土が薄く堆積する。下層には炭交じり黒色粘質度が堆積する。炉の下部構造であった可能性が考えられる。

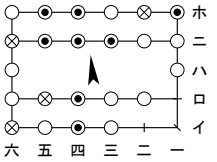
土坑SK4795　第47次調査区で検出した円形土坑。南北1.2m、東西1.0m、検出面からの深さは10㎝と非常に浅い。中央には20㎝程の石が数個あり、埋土からは羽釜が出土した。

ⅱ　平安時代後期以降（Ⅵ期）の遺構

本調査区では多数の中世の遺構を検出したが、その多くは第46次調査区の3箇所にまとまりをもって分布しており、その周辺が集落の中心部であると判断できる。そのため、ここではそれを東北部のA区、その西に約5mの空閑地をはさんで展開するB区、および西南部のC区に便宜的に分け、まずA～C区の遺構について記述する。次いで、第50次調査西区から第47次調査区にかけて検出した、集落を区画すると考えられる大溝とその周辺の遺構について記述し、最後にそれ以外の地区の遺構について記す。

a　A区の遺構（Pl. 7・8，Ph. 16・20・47）

A区では掘立柱建物SB4420・4421を中心として、掘立柱建物、塀、土坑、井戸を検出した。井戸SE4466・4468・4469・4470・4471については475頁の別表1に概要を記す。



掘立柱建物SB4420　桁行5間×梁行2間の身舎の南北に廂が付く掘立柱東西棟建物。建物規模は身舎部分が桁行10.5m×梁行3.7m、廂の出は南廂が2.0m、北廂が1.7mである。柱間寸法は桁行で2.1m、梁行は1.85mである。柱穴は一辺30～70㎝の隅丸方形または不整方形。8基の柱穴で柱痕跡を確認した。また、4基の柱掘方からは礫を検出した。建物の方位は東で南へ5.9° 振れる。A区にあるⅥ期の遺構群の中で、最も大きい建物である。

牛馬小屋SX4500　SB4420の南西にある、浅い皿状の土坑と桁行2間×梁行1間の掘立柱南北棟建物が組み合わさった遺構。西側柱筋をSB4420の西妻柱に合わせ、建物規模は桁行4.5m×梁行3.5mである。内部に位置する土坑は東西2.4m、南北3.6mの隅丸長方形。周縁部の南半には石列を伴い、東辺北寄りの一部を除いて杭列を確認した。近世の事例から類推すると、牛馬小屋にあたるとみられる。

掘立柱建物SB4421　SB4420に重複して検出した掘立柱東西棟建物。桁行5間×梁行2間の身舎の南北に廂が付く。建物規模は身舎部分が桁行10.8m×梁行4.2m、廂の出は南廂が2.1m、北廂が2.0mである。柱間寸法は桁行で2.16m、梁行は2.1m。柱穴は大きさ20～50㎝の円形または隅丸方形。9基の柱穴で柱痕跡を確認した。建物の方位は東で南へ3.5° 振れる。SB4420とほぼ同規模であり、柱位置が約2m南にずれる。先後関係は不明だが、柱位置をずらして建て替えたものであろう。SB4421の方が柱穴はやや小型である。後述するSK4496がSB4421に伴う遺構であれば、SB4421はSB4420より古いことになる。

土坑SK4496　SB4421の南西隅で検出した浅い皿状の土坑。東西3.0m、南北4.2mの隅丸長方形を呈する。遺構に重複関係があり、牛馬小屋SX4500より古い。建物との位置関係から、

SX4500と同様に、SB4421に伴う遺構である可能性もあるが、SB4421より方位の振れが大きく、SK4496の内部からもSB4421の柱穴を検出しているということもあり、断定はし難い。

掘立柱建物SB4422　建物SB4420の東南に重複して検出した掘立柱東西棟建物。桁行４間×梁行２間、建物規模は桁行9.0ｍ×梁行3.7ｍ。柱間寸法は桁行で2.25ｍ、梁行は1.85ｍである。柱穴は大きさ30～100㎝の不整方形。４基の柱穴で柱痕跡を確認した。建物の方位は東で南へ6.2° 振れる。

掘立柱建物SB4415　SB4420の南西で、後述する東西塀SA4432よりも南で検出した掘立柱東西棟建物。桁行５間×梁行１間、建物規模は桁行11.0ｍ×梁行1.9ｍ。柱間寸法は桁行で2.2ｍ、梁行は1.9ｍである。柱穴は30㎝前後の円形。建物の方位に振れはない。

掘立柱建物SB4416　SB4420の南東で検出した掘立柱東西棟建物。桁行３間×梁行２間、建物規模は桁行6.5ｍ×梁行3.5ｍ。柱間寸法は桁行で2.16ｍである。東西両妻柱は検出していないが、梁行の寸法より２間であったとみられる。柱穴は30㎝前後の円形。建物の方位は東で南へ4.1° 振れる。

掘立柱建物SB4417　SB4420の北東で検出した掘立柱東西棟建物。桁行２間×梁行２間、建物規模は桁行4.2ｍ×梁行3.9ｍ。柱間寸法は桁行で2.1ｍ、梁行は1.95ｍである。柱穴は30㎝前後の楕円形。建物の方位は東で南へ7.5° 振れる。SB4421とは柱穴の重複はないが、遺構範囲が重複しており、並存はしない。

掘立柱建物SB4418　SB4420の北西で検出した掘立柱南北棟建物。桁行２間×梁行２間、建物規模は桁行4.0ｍ×梁行3.5ｍ。柱間寸法は桁行で2.0ｍ、梁行は1.75ｍである。柱穴は30～70㎝の隅丸方形。４基の柱穴で柱痕跡を確認した。建物の方位は北で東へ9.3° 振れる。SB4420の北廂から0.9ｍの位置にあり、方位の振れや柱穴の形状から、その付属屋であった可能性がある。

掘立柱建物SB4419　SB4420の北西で検出した掘立柱東西棟建物。桁行３間×梁行２間、建物規模は桁行6.6ｍ×梁行4.2ｍ。柱間寸法は桁行で2.2ｍ、梁行は2.1ｍである。柱穴は30㎝前後の不整形または円形。５基の柱穴で柱痕跡を確認し、２基の柱穴には礫が入る。建物の方位は東で南へ3.2° 振れる。SB4418とは柱穴の重複はないが、遺構範囲が重複しており、並存しない。

南北塀SA4430・東西塀SA4431　SB4420の西で検出した、Ｌ字形をなす掘立柱塀。西辺にあたるSA4430は６間分、11.7ｍを確認した。柱間寸法は1.95ｍ。柱筋は北で3.5° 東に振れる。南辺にあたるSA4431は２間で、4.1ｍ。柱間寸法は2.05ｍ。柱筋は東で南に3.5° 振れる。柱穴は円形または隅丸方形で、大きさは25～45㎝。SB4420・4421を中心とした区画の西南を画する塀。

東西塀SA4432　SB4420の南で検出した掘立柱塀。３間分6.6ｍを確認した。柱間寸法は2.2ｍで、柱筋は東で南に1.5° 振れる。柱穴は円形または隅丸方形で、大きさは20～40㎝。SB4420・SB4421を中心とした区画の南限の塀。

東西塀SA4433　SB4420の南で検出した掘立柱塀で、SA4432の北２ｍにある。４間分9.0ｍを確認した。柱間寸法は2.25ｍ。柱筋は東で南に3.0° 振れる。柱穴は円形または隅丸方形で、大きさは25～50㎝。SB4420・4421を中心とした区画の南限の塀。

大土坑SK4501　SB4420と南北塀SA4430の間で検出した南北に長い池状の大土坑。東西3.5ｍ、

南北9.0ｍの不整形な楕円形。東西両岸は段状を呈し、深さは中央で55㎝を測る。埋土は検出面から40㎝が黄灰砂塊を含む灰茶色粘質土で埋め立て土とみられ、下層15㎝が木屑を含む暗青灰色粘質土である。

井戸SE4467（Fig. 65）　南北塀SA4320の柱穴および井戸SE4466を壊して掘られた井戸。掘方は一辺2.7ｍの隅丸方形で、深さ2.5ｍ。掘方の南側に井戸枠を据え、北側を底から0.9ｍで段掘りとしている。井戸枠は掘方底部で底を抜いた曲物、その上部で一辺0.7ｍの方形縦板組とする。縦板は厚さ２～３㎝で、一部の板で裏表に赤色顔料が認められ、転用材とみられる。縦板を止

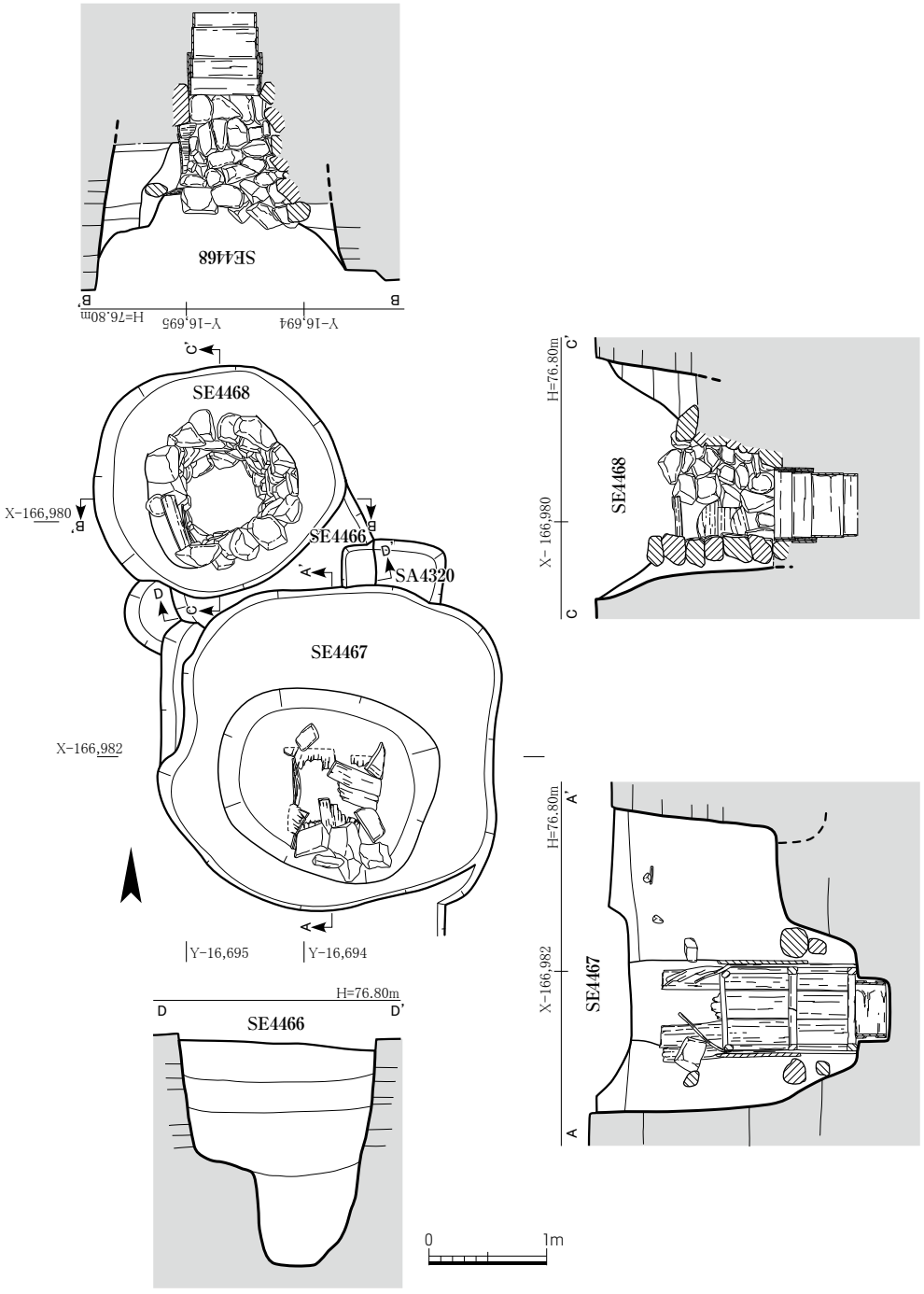
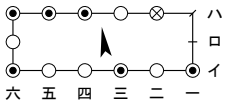


Fig. 65　SE4466・4467・4468平面図・断面図　1:60

める横桟は四隅に束をはさんで3段分が残り、縦板の目地には一部に裏板をあてる。井戸枠内から鉄鎌、上層から花形飾金具が出土している。11世紀末から13世紀の間で存続。

b　B区の遺構（Pl. 6・7，Ph. 13・20・48）

B区では掘立柱建物SB4440・4441・4442・4443を中心として、掘立柱建物、塀、素掘溝、土坑、井戸を検出した。井戸SE4472・4473については475頁の別表1に概要を記す。



掘立柱建物SB4440　桁行5間×梁行2間の掘立柱東西棟建物。規模は桁行12.0m×梁行3.9mである。柱間寸法は桁行で2.4m、梁行は1.95mである。柱穴は大きさ40～50cmの隅丸方形または円形。建物の方位は東で南へ8.3°振れる。SB4440・4441・4442・4443の4棟は、遺構の重複範囲からみて、柱位置や規模を少しずつ変えながらB区の主屋として建て替えられたものと考えられる。SB4440は柱穴の重複関係があり、SB4441より古い。

掘立柱建物SB4441　SB4440に重複し、やや南で検出した掘立柱東西棟建物。桁行5間×梁行2間、建物規模は桁行10.3m×梁行4.0mである。柱間寸法は桁行で2.06m、梁行は2.0mである。柱穴は大きさ40～80cmの隅丸方形または不整形方形。建物の方位は東で南へ7.0°振れる。柱穴の重複関係があり、SB4440より新しく、SB4442より古い。

掘立柱建物SB4442　SB4440に重複して検出した掘立柱東西棟建物。桁行4間×梁行2間の身舎の北に1間の廂が付く。建物規模は身舎部分が桁行8.0m×梁行3.9m、廂の出は1.95mである。柱間寸法は桁行で2.0m、梁行は1.95mである。柱穴は大きさ20～40cmの円形または隅丸方形。建物の方位は東で南へ5.8°振れる。柱穴の重複関係があり、SB4441より新しい。

掘立柱建物SB4443　SB4440に一部重複し、やや南で検出した掘立柱東西棟建物。桁行4間×梁行2間の身舎の南に1間の廂が付く。建物規模は身舎部分が桁行8.5m×梁行3.5m、廂の出は1.75mである。柱間寸法は桁行で2.13m、梁行は1.75mである。柱穴は大きさ25～40cmの円形または隅丸方形。建物の方位は東で南へ7.2°振れる。SB4440・4441・4442とは、柱穴の重複関係はない。

掘立柱建物SB4445　SB4440の西で検出した掘立柱南北棟建物。桁行2間×梁行2間、建物規模は桁行4.4m×梁行3.5m。柱間寸法は桁行で2.2m、梁行は1.75mである。柱穴は40～70cmの楕円形または隅丸方形。検出面からの深さは50～60cmを測る。南西隅の柱穴には径15cmの柱根が遺存する。建物の方位は北で東へ8°振れる。

掘立柱建物SB4446　SB4440の2.5m南で検出した掘立柱南北棟建物。桁行2間×梁行2間、建物規模は桁行4.2m×梁行4.0m。柱間寸法は桁行で2.1m、梁行は2.0mである。柱穴は25～30cmの円形または隅丸方形。棟通り中央にも柱穴があるが、東側柱筋中央の柱は検出していない。建物の方位は北で東へ3.4°振れる。

溝SD4520　SB4455の北側から西側にかけて検出した、鉤の手に曲がる素掘溝。西辺にあたる南北溝は長さ8m、幅は90～110cm、深さは検出面から40cmを測る。北端で東に折れる。方位は北で東に6.5°振れる。北辺にあたる東西溝は長さ8m、幅は70～170cm、深さは15～40cmで、東ほど幅広く、深さも深い。方位は東で南に2.5°振れる。SB4445の柱筋から溝心までの距離は約2mを測る。SB4440等を中心とした区画の、西と北を限る溝と考えられる。

掘立柱建物SB4447　SB4445・SD4520の北側で検出した、総柱の掘立柱東西棟建物。桁行2間×梁行2間、建物規模は桁行3.9m×梁行3.4m。柱間寸法は桁行で1.95m、梁行は1.7mである。柱穴は20～30cmの円形。棟通り中央にも柱穴がある。建物の方位は東で南へ3.3°振れる。

南北塀SA4455　SD4520の南西で検出した南北方向の掘立柱塀。3間分5.3mを確認した。柱間寸法は1.77m。柱筋は北で東に8.5°振れる。柱穴は円形で、大きさは30～45cm。SB4440等を中心とした区画の西限の塀。

井戸SE4474（Fig. 66）　SB4440の北側にある井戸。掘方は南北2.1m、東西1.8mの隅丸方形を呈し、深さは全体で2.1m。井戸枠は掘方の北西寄りに据える。枠板は抜き取られているが、一辺0.8mの方形縦板組であったとみられ、横桟が1段分残る。掘方の平面は検出面からの深さ1.25mのところでさらに径0.7mの円形に狭まり、底まで曲物3段を重ねる。埋土から横櫛、短刀が出土した。11世紀末から13世紀の間で存続した。B区に所在する3基の井戸は、出土遺物と遺構の重複関係から、SE4472、SE4474、SE4473の順に掘られたとみられる。

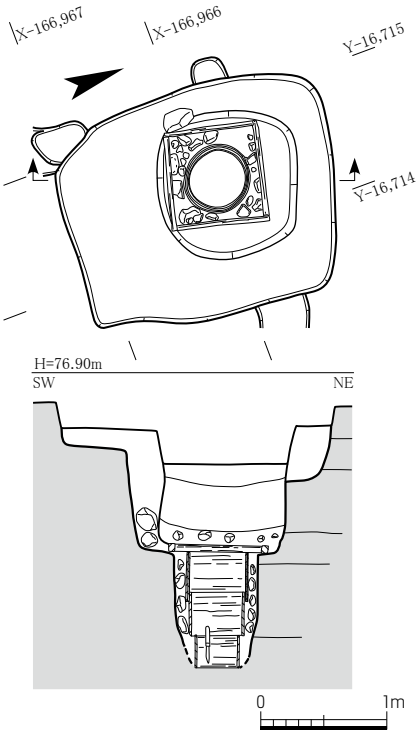


Fig. 66　SE4474平面図・断面図　1:60

土坑SK4510　SB4440の北東で検出した南北に長い溝状の土坑。幅1.1m、長さ4.3m、深さは検出面から35cmを測る。瓦器と古代の塼仏が出土した。

c　C区の遺構（Pl. 10, Ph. 13・19）

C区では掘立柱建物と井戸を検出した。A区・B区では中心建物が東西棟であるのに対し、C区では南北棟となる。井戸SE4461・4462・4463・4464・4465については475頁の別表1に概要を記す。

掘立柱建物SB4405A・B・C（Fig. 67）　桁行5間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。建物規模は桁行10.5m×梁行3.8m、柱間寸法は桁行で2.1m、梁行は1.9mである。柱穴は一辺30～40cmの隅丸方形または円形。南北とも妻柱は検出していないが、棟通りのロ二・ハ二には柱穴があり、間仕切りとみられる。また、全ての柱穴は東西方向に3基が重複しており、同じ規模と柱配置の建物を、西へ30cmずつずらしながら2回建て替えたものである。C区にまとまる平安時代後期から鎌倉時代の遺構群の中で、最も大きい建物である。SB4407・

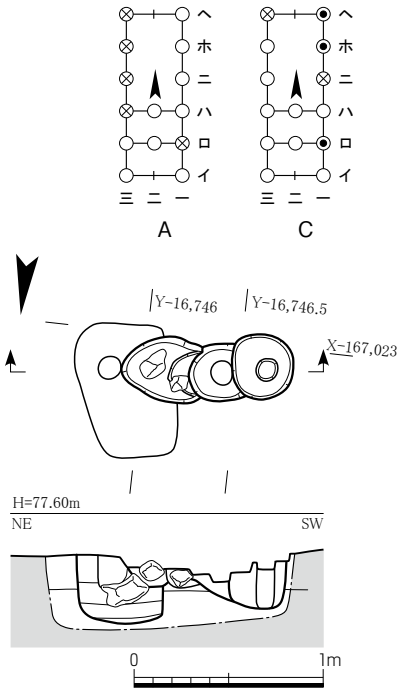


Fig. 67　SB4405柱穴（ロ一）平面図・断面図　1:40

4409とは並存しない。建物の方位に振れはない。

掘立柱建物SB4406　SB4405の西で検出した掘立柱東西棟建物。桁行４間以上×梁行２間で、西妻は調査区外へ延びる。建物規模は桁行8.8m以上×梁行3.7m。柱間寸法は桁行で2.2m、梁行で1.85mである。柱穴は25～40cmの円形または隅丸方形。建物の方位は東で南へ7.2° 振れる。SB4408・4410とは並存しない。

掘立柱建物SB4407　SB4405の北側で重複して検出した掘立柱東西棟建物。桁行３間×梁行２間。建物規模は桁行7.8m×梁行4.0m。柱間寸法は桁行で1.8～3.3mとややばらつきがあり、梁行は北側が1.7m、南側が2.3mである。柱穴は30～50cmの円形または隅丸方形で、西妻のみ80cmの不整方形を呈する。建物の方位は東で南へ1.2° 振れる。遺構の重複関係があり、SB4405より古く、SB4409とは並存しない。

掘立柱建物SB4408　SB4405の東で検出した掘立柱東西棟建物。桁行３間×梁行２間、建物規模は桁行5.7m×梁行4.3m。柱間寸法は桁行で1.9m、梁行で2.15mである。柱穴は30～40cmの円形。北西隅の柱は検出しておらず、また北側柱筋は柱穴が１基多く、柱間がやや詰まる。建物の方位は東で南へ2.6° 振れる。SB4406とは並存しない。

掘立柱建物SB4409　SB4405の西で検出した掘立柱東西棟建物。桁行２間×梁行２間、建物規模は桁行4.4m×梁行3.8m。柱間寸法は桁行で2.2m、梁行で1.9mである。柱穴は20～50cmの円形。北東隅柱と東妻柱の柱穴は検出していない。建物の方位は東で南へ1.7° 振れる。SB4405・4407とは並存しない。

掘立柱建物SB4410　SB4405の西で検出した掘立柱東西棟建物。桁行２間以上×梁行２間で、西妻は調査区外へ延びる。建物規模は桁行3.6m以上×梁行4.2m。柱間寸法は桁行で1.8m、梁行で2.1mである。柱穴は50～70cmの円形または隅丸方形。西妻柱から１間東に35cmとやや小型の柱穴を検出しており、間仕切りがあったか、あるいは総柱建物の可能性もある。建物の方位は東で南へ6.2° 振れる。SB4406とは並存しない。

掘立柱建物SB4411　SB4405の西で検出した掘立柱東西棟建物。桁行１間×梁行１間、建物規模は桁行2.2m×梁行2.0m。柱穴は30～35cmの円形または隅丸方形。建物の方位は東で南へ5.5° 振れる。

d　大溝とその周辺の遺構（Pl. 2・3・6，Ph. 28・32・34）

調査区の北西に、集落を区画する大溝の南東部分がかかる。大溝の内側では掘立柱建物と多数の井戸を検出した。大溝の外側では遺構が希薄になるが、掘立柱建物や井戸を検出している。大溝内側の井戸SE4739・5010・5022・5023・5055と、大溝外側の井戸SE4790・5001については475頁の別表１に概要を記す。

大溝SD4755・4745・4744（Fig. 68）　第47次調査区から第50次調査西区にかけて検出したクランクのある南北方向の素掘溝。北側の南北溝SD4755は長さ26m分を検出している。幅は最大で3.2m、深さは90cm。北端は調査区外へ延び、南端はSD4745の東端に接続する。方位は北で東に12.5° 振れる。クランク部分にあたる東西溝SD4745は長さ8.3m、幅1.6m、深さ70m。西端でSD4744の北端に接続する。方位は東で南へ2.0° 振れる。南側の東西溝SD4744は長さ5.6m、幅2.2m、深さ50cm。方位は北で東へ12.0° 振れる。溝の断面形状は逆三角形または逆台形

を呈し、底部には青灰色粘質土が厚さ10～15㎝堆積する。中層は灰色砂または灰色粘質土が堆積し、上層は炭や焼土の混じる灰褐色の砂質土で埋め立てている。遺構の重複関係より、東西大溝SD4130より新しい。埋土からは、塼仏、室町時代の銅鏡、大観通寶、中世の瓦、14世紀末から15世紀初頭の土器などが出土している。中世の集落を区画する大溝とみられ、後述するSD4791・4743と一連になる可能性がある。

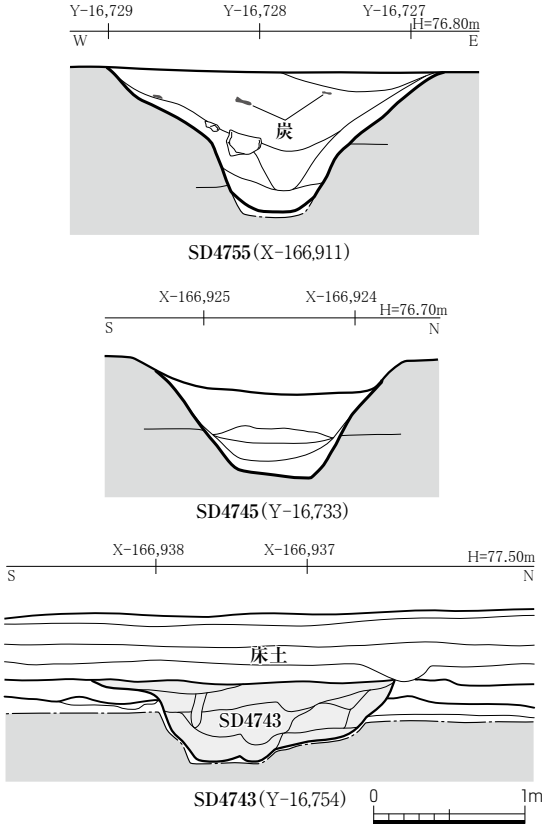


Fig. 68　SD4755・4745・4743断面図　1:50

東西溝SD4791　第47次調査区北端で検出した東西方向の素掘溝。西端は調査区外に延び、長さ9.5m分を確認した。北岸は調査区外にある。検出した幅は最大で1.1m、検出面からの深さは最大で90㎝を測る。遺構の重複関係があり、Ⅳ期の建物SB4787より新しい。埋土は下層が暗灰色粘質土、上層は黒褐色砂質土となる。法面が急で深い断面形状から、SD4755と一連の中世大溝であると考えられる。

東西溝SD4743（Fig. 68）　第50次調査西区から第46・47次調査区にかけて検出した東西方向の素掘溝。長さ18m分を確認し、西端は調査区外へ延びる。幅は1.4m、深さは検出面から50㎝である。14世紀後半の、土師器羽釜や瓦器などが出土した。SD4755などと一連の中世大溝であった可能性がある。

掘立柱建物SB5030　第50次調査西区で検出した掘立柱東西棟建物。桁行3間×梁行2間の身舎の北に、1間の廂が付く。建物規模は身舎部分が桁行6.3m×梁行3.4m、廂の出は1.0mである。柱間寸法は桁行で2.1m、梁行は1.7mである。柱穴は50～70㎝の円形または楕円形で、検出面からの深さは20㎝、埋土に石や瓦が交じる。建物の方位は東で南へ1.2° 振れる。南側柱列中央やや内側に、土器埋納坑SJ5029がある。

土器埋納坑SJ5029　SB5030南側柱列中央やや内側に位置する土坑。平面は径35㎝の円形を呈する。13世紀後半の土師器小皿が複数枚出土した。

東西塀SA5032　第50次調査西区、SB5030の北側で検出した東西方向の掘立柱塀。2間、長さ4.6mを確認した。柱間寸法は2.3m。柱穴は円形または不整方形で、大きさは50～80㎝。柱筋の振れはない。

土坑SK4796　第47次調査区から第50次調査西区にかけて検出した、南北に長い溝状の土坑。西肩は直線状に延びるが、東肩は蛇行する。幅は最も広いところで3.4m、長さ11.4m、検出面からの深さ50㎝。遺構の重複関係より、Ⅲ-C期の建物SB4800より新しく、井戸SE5022より古い。埋土から7世紀末の軒丸瓦、開元通寶、瓦器が出土している。

土坑SK5004　第50次調査西区で検出した、東西に長い溝状の土坑。幅2.7ｍ、長さ11ｍ。細長い楕円形で、途中がくびれたような形状を呈する。検出面からの深さは15～30㎝。底面は凹凸があり、また小穴も複数検出している。13世紀末の瓦器が出土した。

土器埋納坑SJ5007　SK5004北肩に位置する土坑。一辺30㎝の隅丸方形で、深さ10㎝。13世紀後半の土師器小皿が約15枚出土した。SK5004より古い。

掘立柱建物SB4736　第47次調査区で検出した、総柱の掘立柱東西棟建物。桁行２間×梁行２間、建物の規模は桁行6.2ｍ×梁行4.2ｍ。柱間寸法は桁行で3.1ｍ、梁行で2.1ｍである。柱穴は40～70㎝の隅丸方形で、深さは検出面から25㎝以上。建物の方位に振れはない。

掘立柱建物SB4988　第46次調査区から第50次調査西区にかけて検出した、桁行２間×梁行１間の掘立柱東西棟建物。建物の規模は桁行4.5ｍ×梁行2.6ｍ、柱間寸法は桁行が2.25ｍである。柱穴は40～70㎝の隅丸方形。建物の方位は東で南へ7.2° 振れる。

南北塀SA4986　第50次調査西区で検出した南北方向の掘立柱塀。３間、長さ4.95ｍを確認した。柱間寸法は1.65ｍ。柱穴は隅丸方形で、大きさは60㎝、検出面からの深さは20㎝。柱筋は北で東に4.5° 振れる。北から２基目の柱穴がⅢ-Ｂ期の建物SB5000の柱穴と重複しており、それより新しい。

ｅ　その他の遺構（Pl. 2～5・7～9・11，Ph. 8・13・16・36・37・39～41・51）

調査区の西側では遺構が希薄になるが、素掘溝や掘立柱建物・塀、井戸を検出している。井戸SE4031・4177・4460・5060・5065・5076については475頁の別表１に概要を記す。

南北溝SD4141・東西溝SD5942　第45次調査中央区から第50次調査東区、第53次調査北区にかけて検出したＬ字形の素掘溝。西辺にあたる南北溝SD4141は長さ34ｍを確認した。幅は30～85㎝、検出面からの深さは16～50㎝。南に向かうにつれ深く幅広くなり、底の標高も低くなる。方位は北で東に1.0° 振れ、東西大溝SD4130より北ではやや蛇行する。遺構の重複関係があり、Ⅲ-Ａ期の東西溝SD4132およびⅡ期の土坑SK4161より新しい。瓦器が出土した。南辺にあたる東西溝SD5942は長さ21.8ｍを確認した。これまでは第53次調査北区で検出したSD5942は六条条間路北側溝SD4139の東側に連なる位置にあるが、南方へ曲がり、堆積土に瓦器を含むことから、SD4139とは一連のものではないと判断していた。しかし、東西溝SD4139のうち南北溝SD4131より東の部分は南北溝SD4141と一体として検出していることや、溝の深さや底の標高などから、SD4139の東側はSD5942と一連とみて、SD5942に含めた。幅は50～90㎝、深さは25～50㎝。西ほど深く幅広いが、底の標高は東の南北大溝SD4143西岸に向かうにつれ低くなる。方位は東で南に3.8° 振れるが、東端5.3ｍは南へ大きく曲がり、この部分の溝埋土から瓦器が出土している。SD4141は南北溝SD4136の北延長線上に位置し、東西溝SD4137とSD5942の間は肩の間で2.2ｍ、溝心で3.0ｍ離れている。

南北溝SD4136・東西溝SD4137　第45次調査中央区から第50次調査東区にかけて検出した逆Ｌ字形の素掘溝。西辺にあたる南北溝SD4136は長さ８ｍを確認した。幅は最大で70㎝、検出面からの深さは最大27㎝で、底の標高は北に向かうにつれ低くなる。北端でSD4137の西端に接続する。方位は北で東に2.6° 振れる。北辺にあたる東西溝SD4137は長さ15.5ｍを確認した。幅は50～90㎝、深さは20～25㎝、底の標高は東に向うにつれ低くなる。方位は東で南に1.5° 振

れる。遺構の重複関係があり、SD4136はⅢ−A期の東西溝SD4119より新しく、SD4137はⅢ−C期の南北塀SA4110・4120より新しい。

東西溝SD4138　第45次調査中央区から第50次調査東区にかけて検出した東西方向の素掘溝。『藤原概報16』ではSD4141と一連としていたが、別の溝と判断した。長さ10m分を確認した。幅は50～60㎝、検出面からの深さは12～15㎝。方位は東で南に2.0° 振れる。

掘立柱建物SB5925　第53次調査北区で検出した掘立柱南北棟建物。桁行2間×梁行2間、建物規模は桁行3.7m×梁行3.5mである。柱間寸法は桁行で1.7～2.0m、梁行は1.75mである。柱穴は大きさ30～50㎝の円形または隅丸方形、検出面からの深さは20～30㎝を測る。4基の柱穴で底部に15㎝前後の礫を検出しており、特に西辺中央の柱穴には複数の礫が詰まる。建物の方位は北で東へ11.4° 振れる。

土坑SK5930　第53次調査北区で検出した円形土坑。直径1.0m、検出面からの深さ40㎝を測る。埋土から11世紀初頭の土器が出土した。

南北塀SA4120　第45次調査中央区で検出した南北方向の掘立柱塀。3間分、6.3mを確認した。柱間寸法は2.1m、柱穴は50㎝の隅丸方形で、検出面からの深さは30㎝程度。柱筋は北で東に5.0° 振れる。Ⅲ−A期のSD4119およびⅣ期のSD4137と重複関係があり、それより新しい。

東西塀SA5094　第45次調査中央区から第50次調査東区にかけて検出した東西方向の掘立柱塀。2間、長さ4.0mを確認した。柱間寸法は2.0m、柱穴は30㎝の円形を呈する。柱筋は東で南に6.6° 振れる。

南北塀SA5088　第50次調査東区で検出した南北方向の掘立柱塀。4間、長さ7.5mを確認した。柱間寸法は1.88m、柱穴は60㎝の円形で、検出面からの深さは10㎝程度とごく浅くしか残らない。柱筋は北で東に7.5° 振れる。

東西塀SA5071・南北塀SA5072　第50次調査東区で検出した、L字形をなす掘立柱塀。南辺にあたる東西塀SA5071は、4間分8.9mを確認した。柱間寸法は2.23m。柱穴は15～20㎝の円形または隅丸方形。柱筋は東で南に6.8° 振れる。西辺にあたるSA5072は、3間分6.5mを確認した。柱間寸法は2.17m。柱穴は15～20㎝の円形または隅丸方形。柱筋は北で東に13.3° 振れる。

井戸SE5940（Fig. 69）　第53次調査北区で検出した井戸。南北大溝SD4143が最終的に埋没した後に掘削している。掘方は一辺1.0mの方形で、深さ1.5m。井戸枠は一辺0.5mの方形縦板組で、各辺にそれぞれ2枚の縦板を組む。縦板は幅20～30㎝、厚さ2～3㎝、底部付近に横桟が一段残る。12世紀の土器が出土した。

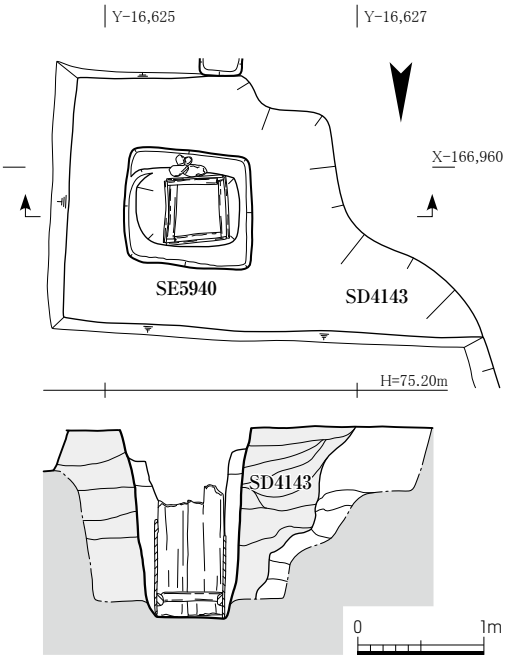


Fig. 69　SE5940平面図・断面図　1:60

掘立柱建物SB5070　第50次調査東区で検出した掘立柱南北棟建物。桁行２間×梁行２間、建物規模は桁行4.0ｍ×梁行3.6ｍ。柱間寸法は桁行で2.0ｍ、梁行で1.8ｍである。柱穴は40～75㎝の隅丸方形または円形。検出面からの深さは25～35㎝、北東隅と南西隅の柱穴には柱痕跡が残る。建物の方位は北で東へ1.0° 振れる。

掘立柱建物SB5955　第53次調査中区で検出した掘立柱南北棟建物。桁行３間×梁行１間、建物規模は桁行5.0ｍ×梁行2.1ｍ。桁行の柱間寸法は1.67ｍ。柱穴は15～30㎝の隅丸方形または円形で、検出面からの深さは30㎝を測る。建物の方位に振れはない。

東西塀SA5075　第50次調査東区で検出した東西方向の掘立柱塀。４間、長さ7.5ｍを確認した。柱間寸法は1.88ｍ。柱穴は隅丸方形または円形で、大きさは30～65㎝、検出面からの深さは20㎝。柱筋は東で南に4.3° 振れる。

掘立柱建物SB5971　第53次調査中区で検出した掘立柱東西棟建物。桁行３間×梁行２間の身舎の北に廂が付く。建物規模は身舎部分が桁行6.3ｍ×梁行4.2ｍ、廂の出は1.4ｍである。柱間寸法は桁行で2.1ｍ、梁行は2.1ｍである。柱穴は大きさ20～30㎝の円形または隅丸方形、検出面からの深さは15～20㎝を測る。２基の柱穴で柱痕跡を確認した。建物の方位は東で南へ3.2° 振れる。

掘立柱建物SB5965　第53次調査中区で検出した掘立柱東西棟建物。桁行１間×梁行１間、建物規模は桁行3.4ｍ×梁行2.6ｍ。柱穴は25㎝の隅丸方形で、検出面からの深さは20㎝を測る。建物の方位は東で南へ3.5° 振れる。

掘立柱建物SB4402　第46次調査区で検出した掘立柱東西棟建物。桁行３間×梁行２間、建物規模は桁行6.0ｍ×梁行4.0ｍ。柱間寸法は桁行、梁行ともに2.0ｍである。柱穴は25～30㎝の円形で、検出面からの深さは北側柱筋が30㎝、西妻柱は10㎝を測る。建物の方位は東で南へ7.0° 振れる。北西隅の柱穴が、Ⅲ-Ｃ期の建物SB4331の柱穴と重複関係があり、それより新しい。

掘立柱建物SB4401　第46次調査区南端で検出した掘立柱東西棟建物。桁行２間×梁行２間、建物規模は桁行5.0ｍ×梁行3.8ｍ。柱間寸法は桁行で2.5ｍ、梁行で1.9ｍである。柱穴の平面は20～30㎝の円形。建物の方位は東で南へ3.4° 振れる。

東西小溝SD4182　第45次調査中央区で検出した東西方向の耕作溝。幅20㎝ほどの素掘小溝で、長さ11ｍを確認した。溝埋土からウシ歯片などが出土した。

小土坑SK4061　第46次調査区の北東で検出した小土坑。長径38㎝の不整形な楕円形を呈する。埋土からウマ上顎歯、哺乳類種不明歯骨破片が出土した。位置はこの地区の中心的建物SB4420あるいはSB4421と重複する位置にあり、SB4420であれば南廂部にあたる。

南北溝SD4832　第47次調査区北西隅で検出したＬ字形の素掘溝。西辺にあたる南北溝は長さ７ｍ分を検出している。幅は50～80㎝。北端は調査区外へ延び、南端で東に折れる。方位は北で東に3.0° 振れる。南辺にあたる東西溝は長さ1.5ｍ、幅は80㎝。深さは検出面から10～15㎝ほどと浅い。南北溝の埋土からウシ歯片、哺乳類種不明歯片が出土した。

土坑SK5015（Fig. 70）　第47次調査区から第50次調査西区にかけて検出した、大規模な土坑。南北8.0ｍ、東西7.0ｍで、平面形状は北半分が楕円形、南半分は二股に分かれる。底面は10㎝程度の凹凸はあるものの比較的平旦で、検出面からの深さは55㎝を測る。土坑の肩には暗灰色の粗砂と粘質土が断面三角形に堆積している。下層の埋土は厚さ30㎝ほどで、暗灰色の粘質土

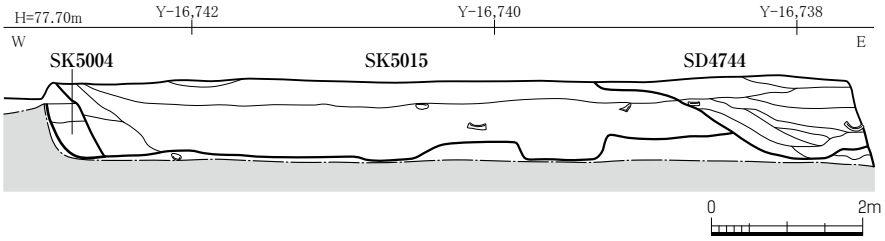


Fig. 70　SK5015断面図（X-166,929）　1:50

である。上層は褐色微砂塊交じりの暗灰褐色砂質土で、最終的な埋め立て土とみられる。遺構の重複関係があり、土坑SK5004より新しく、中世の大溝SD4744より古い。中世の軒瓦や丸瓦、および各種の道具瓦が出土した。

土坑SK4982　SK5015の内部で検出した浅い土坑。南北1.6m、東西1.4mの不整形を呈し、深さはSK5015の底から30cmを測る。SD4130の埋土を掘り込む。埋土は淡褐色粘土塊交じりの暗青灰色粘土に木屑を含み、マツ属の毬果が出土した。

土坑SK5078　第50次調査東区で検出した南北に長い溝状の土坑。幅0.7m、長さ2.1m、深さは検出面から25cmを測る。埋土からスッポン背甲骨板とヒト歯が出土した。

土坑SK5941　第53次調査北区で検出した、南北大溝SD4143西岸部に掘られた土坑。長径2m、短径1.2mの不整形な楕円形を呈する。埋土から土師器、瓦器、瓦が出土した。

1）玉田芳英2005「香久山のふもと」『明日香文化財論攷―納谷守幸氏追悼論文集』納谷守幸氏追悼論文集刊行会。

2）有効数字は小数点以下一位までの表示を原則としたが、柱間寸法では、それによらない場合もある。

第Ⅳ章　遺　物

1　瓦塼類

A　軒　瓦

藤原京左京六条三坊の発掘調査では、古代から中世におよぶ軒丸瓦が17種類121点、軒平瓦が25種類84点と多様な軒瓦が出土した。その一部はこれまでに『藤原概報』で報告され、特に吉備池廃寺創建瓦である重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦と型押し忍冬唐草文軒平瓦については、奈文研2003『吉備池廃寺発掘調査報告』において詳細な検討がなされている。

本調査区で出土した軒瓦のうち、古代のものの大部分は、大和盆地内各地の寺院や、藤原宮の所用瓦と同笵とみられるものである。本報告では、煩雑さを避けるべく一連の型式番号をふって説明と図示を行うが、それぞれの寺院や宮ですでに付された型式名を合わせて記す。一連の型式番号をふる際には、同一寺院・宮所用のもの、もしくは同種の文様をもつものに同一の数字をふり、その中のバラエティーについてはアルファベットで細分する。

i　軒丸瓦

軒丸瓦１A型式（Fig.71-1～3，Ph.52）　山田寺式重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦。吉備池廃寺創建ＩA型式と同笵。14点出土した[1]。残存状況の比較的良好な３点について、記述、図示する。

１はほぼ完形に近い資料。外縁幅は0.9～1.6cmとムラがあり、最も狭い部分では３条ある重圏文のうち最も外側の圏線までしか表出されていない。外縁内面の調整は不完全で、笵に粘土を充填する際のしわや木目痕跡が残る。側面は円弧に沿ってナデ調整する。外縁上面から0.7cmほどの範囲は、それ以下の部分と傾斜角度が異なり、かすかに凸線風にみえる部分もある。これはＡ型笵の痕跡の可能性がある[2]。瓦当裏面は中央がやや高く膨らむ。ヨコ方向中心にナデ調整するが、同心円状の凹凸がわずかに残る。丸瓦との接合面は、凹面を斜めに削って楔形に加工した丸瓦を当てるべく、瓦当の上面をカットしている。ただし、丸瓦は瓦当面には到達しない。丸瓦凹面に沿う位置には接合粘土を付加する。支持ナデつけの有無は不明であるが、接合粘土と瓦当のカット面はぴったりと密着している。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。瓦当径19.8cm。中房径4.1cm。HF23地区の土坑SK4270出土。

２は全体の五分の二ほどの資料。丸瓦取り付け位置は１と90°ずれる。外縁は破損し、全く残らない。側面は円弧に沿ってナデ調整する。瓦当裏面は中央がやや高く膨らみ、ヨコ方向中心にナデ調整。丸瓦との接合面は瓦当上面を削り、支持ナデつけを施したのち、接合粘土を付加している。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。NI29地区の東西大溝SD4130中層出土。

３は全体の五分の三ほどの資料。丸瓦取り付け位置は２と同じ。外縁内面には笵詰めの際の

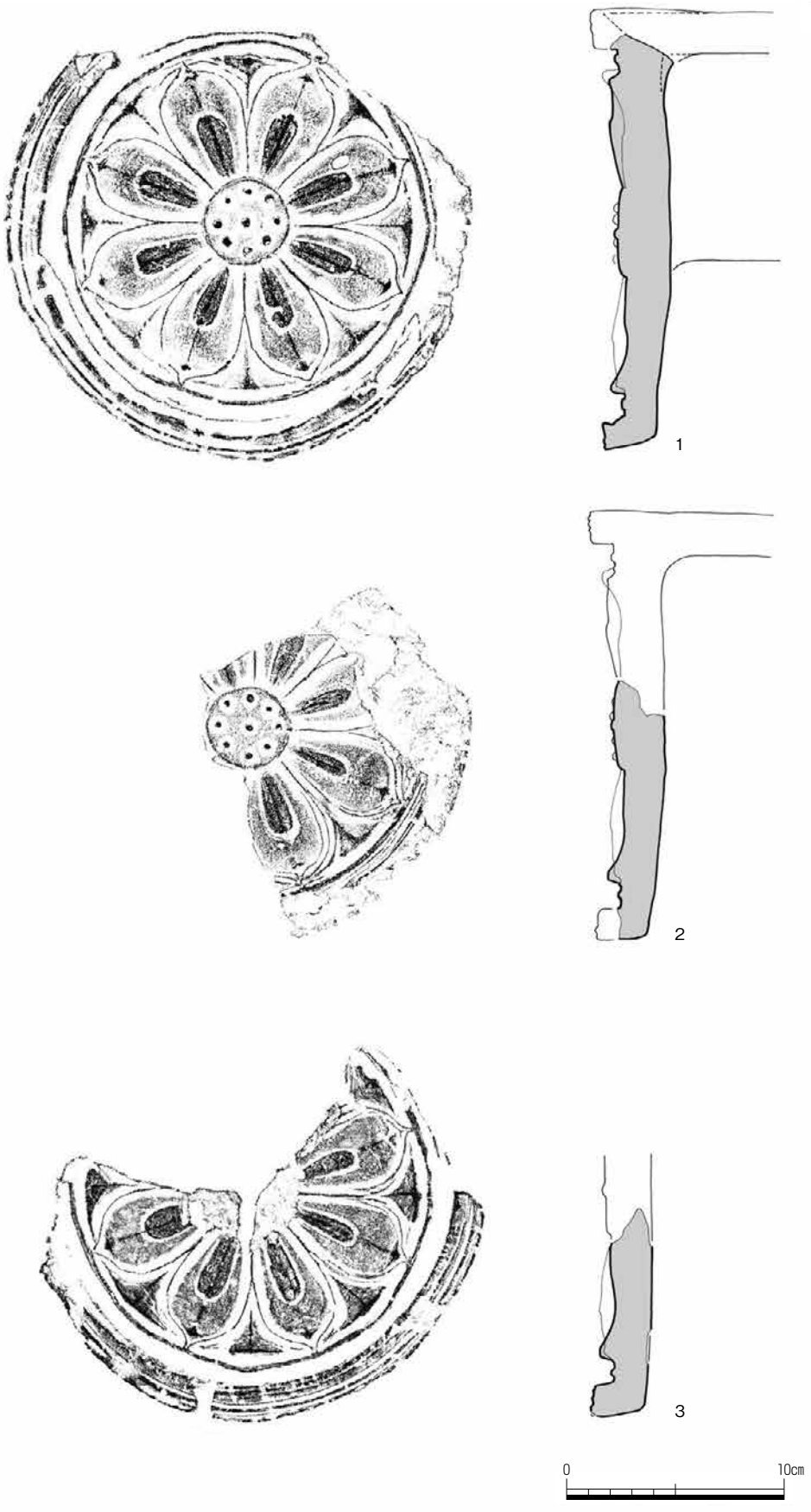


Fig. 71　軒丸瓦１A型式　1:3

粘土のしわや木目痕跡が残る。側面は円弧に沿ってナデ調整する。1と同様の理由から、A型笵とみられる。瓦当裏面はナデ調整し、比較的平坦。丸瓦との接合面は、瓦当上面を削る。支持ナデつけを施した後、接合粘土を付加している。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。NH33地区のSD4130上層出土。

軒丸瓦1B型式（Fig.72-4～7，Ph.53）　山田寺式重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦。吉備池廃寺創建ⅠB型式と同笵。13点出土した。残存状況の比較的良好な4点について記述、図示する。

4は完形に近い資料。中房上面に同心円状の凹凸がみられる。外縁内面の調整は不完全で、笵に粘土を充填する際のしわが残る。全体的に磨滅し、調整の観察が難しいが、側面は円弧に沿ってナデ調整するか。外縁上面から0.5㎝ほどの位置にわずかな段が走り、A型笵の痕跡の可能性がある。瓦当裏面は中央がやや高く膨らむ。調整はナデか。丸瓦との接合面は瓦当上面を削り、接合粘土を付加している。支持ナデつけは弱く、接合粘土と瓦当カット面との間には隙間がある。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、石英と長石が特に多い。復元瓦当径20.6㎝。中房径4.2㎝。HO11地区の包含層出土。

5は全体の四分の一ほどの資料。丸瓦取り付け位置は4と180°ずれる。外縁をほとんど欠損する。瓦当裏面の調整はナデか。丸瓦との接合は、笵に粘土を詰める過程で行ったとみられ、以下のように復元できる。①笵に粘土板（厚さ0.8㎝前後）を詰め、瓦当上面を斜めにカットする、②凹面を斜めに削り、楔形にした丸瓦を瓦当に当てる、③瓦当裏面に粘土板（厚さ0.8㎝前後）を足して、上面は丸瓦に沿ってナデつける、④丸瓦凹面に沿って支持ナデつけを弱く施し、接合粘土をナデつける。また、最初に詰めた瓦当粘土のみに丸瓦のキザミ（タテ方向）が転写されている。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。藤原京期後半（Ⅲ-C期）の南北棟建物SB4330の柱穴から出土。

6は全体の四分の一ほどの資料。丸瓦取り付け位置は4と同じ。外縁内面、側面は円弧に沿ってナデ調整。瓦当裏面は中央がやや高く膨らむ。調整は中央寄りがユビオサエで、周囲は円弧に沿ってナデ調整。丸瓦との接合面をわずかに残し、斜め方向のキザミが転写されている。支持ナデつけは非常に弱い。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、赤色粒子を含む。藤原京Ⅲ-A期の施設解体時の、塵芥処理用の土坑と考えられるSK4325から出土した。

7は全体の五分の一ほどの資料。全体的に磨滅し、文様も不明瞭。丸瓦との接合は、5と同様に笵に粘土を詰める過程で行ったとみられる（Ph.53細部写真）。筒部を一部残すため、幅6㎝ほどの接合粘土を付加している状況がよくわかる。支持ナデつけは弱い。丸瓦は凹面を斜めに削って楔形にし、そのカット面にタテ方向のキザミを施す。また、丸瓦の凸面先端にも接合粘土を付加する。丸瓦凹面は一部ナデ調整するが、布目痕跡を残す。側面調整は、全体に丁寧なヘラケズリを施し、両側縁に面取りをするc3手法[3]。厚さ2.3㎝。色調はにぶい黄橙色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、赤色粒子を含む。SK4325出土。

この他、本報告対象外の左京六条三坊において、接合部にキザミの転写を良好に残す資料が出土している（Ph.53細部写真）。

また、1Aか1Bか細分できない資料が8点出土した。

軒丸瓦2型式（Fig.73-8，Ph.53）　山田寺式重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦。奥山廃寺ⅧA型式と同笵。2点出土。8は中房を欠く。接合部が残るが、キザミの転写はみられない。接合粘土

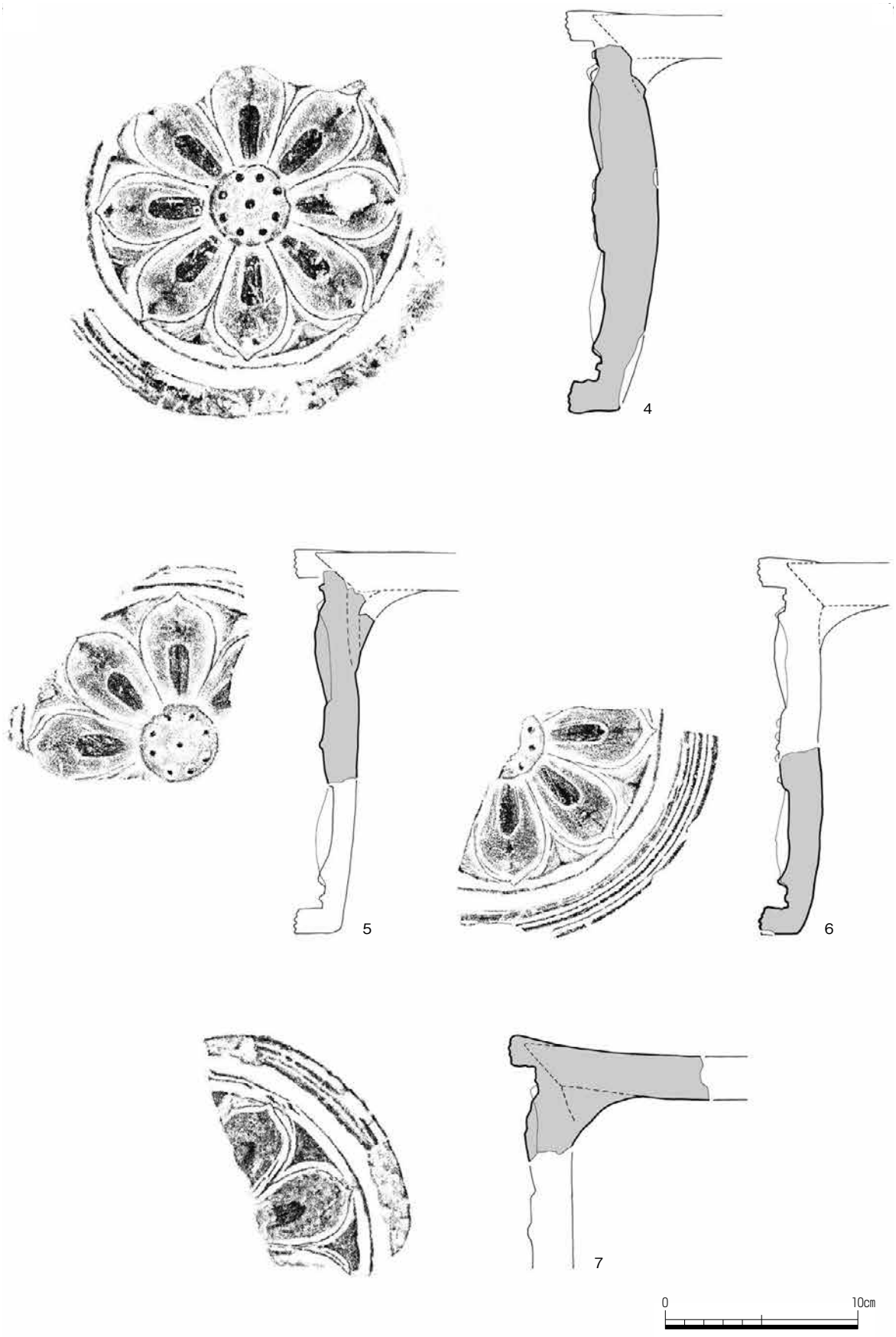


Fig. 72　軒丸瓦1B型式　1:3

にのみ布目痕跡が転写されていることから、丸瓦の凹面を浅く斜めに削って接合したと考えられる。側面、瓦当裏面はナデ調整する。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母を含む。HI18地区の土坑SK4491出土。

軒丸瓦３型式（Fig.73-9，Ph.53）　雷文縁複弁蓮華文軒丸瓦。小山廃寺創建KYM-４類と同笵[4]。１点出土。9は全体に磨滅が著しい。接合部の状況がよくわかる資料で、丸瓦は先端未加工で接合される。キザミは施されない。丸瓦の厚さは2.1㎝。丸瓦の凸面、凹面両方に厚く接合粘土を付加する。色調は灰色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多量に含み粗い。調査区北西部の中世の大土坑SK5015から出土。

軒丸瓦４型式（Fig.73-10，Ph.53）　法隆寺式複弁蓮華文軒丸瓦。長林寺４b型式の花弁と鋸歯文を彫り直した新型式[5]。１点出土。10は接合部端部をわずかに残す。外縁端にわずかな突出部分がみられ、Ｂ型笵の痕跡の可能性がある。側面は円弧に沿ってナデ調整。瓦当裏面は板状工具でナデ調整する。瓦当は非常に厚く、外縁部で4.1㎝を測る。破面観察により、粘土板を２回に分けて笵詰めしたことがわかる。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。NI28地区のSD4130上層出土。

軒丸瓦５A型式（Fig.73-11，Ph.54）　複弁蓮華文軒丸瓦。藤原宮所用6233Bb型式と同笵[6]。１点出土。11は瓦当面が磨滅し、蓮子が不明瞭である。側面はヨコ方向にナデ調整。外縁上面から0.7㎝ほどの位置に、凸線がかすかに走る。Ａ型笵の痕跡の可能性がある。瓦当裏面は平坦でナデ調整するが、接合部付近は部分的に接合粘土を付加してナデつけている。接合部には丸瓦を差し込んだ幅1.3㎝の溝が残り、丸瓦先端は未加工とみられる。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。HG19地区包含層出土。

軒丸瓦５B型式（Fig.73-12，Ph.54）　複弁蓮華文軒丸瓦。藤原宮所用6273B型式と同笵。５点出土。12は全体の五分の四ほどの資料。側面はヨコ方向にナデ調整する。瓦当裏面は中心寄りをユビオサエし、周縁はナデ調整する。接合部には丸瓦を差し込んだ幅1.8㎝の溝が残り、丸瓦先端に施されたタテ方向のキザミが転写されている（Ph.54細部写真）。丸瓦先端は削っていない。また、接合粘土を棒状工具で填圧した痕跡がわずかに残る。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。NL23地区の包含層出土。この他、丸瓦先端にキザミを施さない未加工のものも出土している。

軒丸瓦５C型式（Fig.73-13，Ph.54）　複弁蓮華文軒丸瓦。外区に珠文、外縁に凸鋸歯文を配する6273型式であるが、すでに確認されているＡ～Ｄ型式のどれにも該当しない。凸鋸歯文の形状は平坦な三角形ではなく、稜をもつために一見鏃状形を呈する。外区の珠文も大きめである。１点出土。13は側面をヨコ方向にナデ調整。外縁上面から1.4㎝の位置に凸線が走るが、笵端痕跡であるのかナデによる傾斜変換点であるのかは明確でない。瓦当裏面はナデ調整する。接合部が残るが、丸瓦が瓦当上面に接するほど取り付け位置が高い。接合粘土は剥離している。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質。胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。NE11地区の耕作溝出土。

軒丸瓦５D型式（Fig.73-14，Ph.54）　複弁蓮華文軒丸瓦。藤原宮所用6274Aa型式と同笵。３点出土したが、同一個体の可能性がある。14は瓦当裏面がほぼ全面剥離する。側面はヨコ方向にナデ調整するが、外縁寄りは一段強いためやや内傾する。瓦当厚は外縁部分で4.0㎝。色調は灰白色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含み精良。NH36地区の

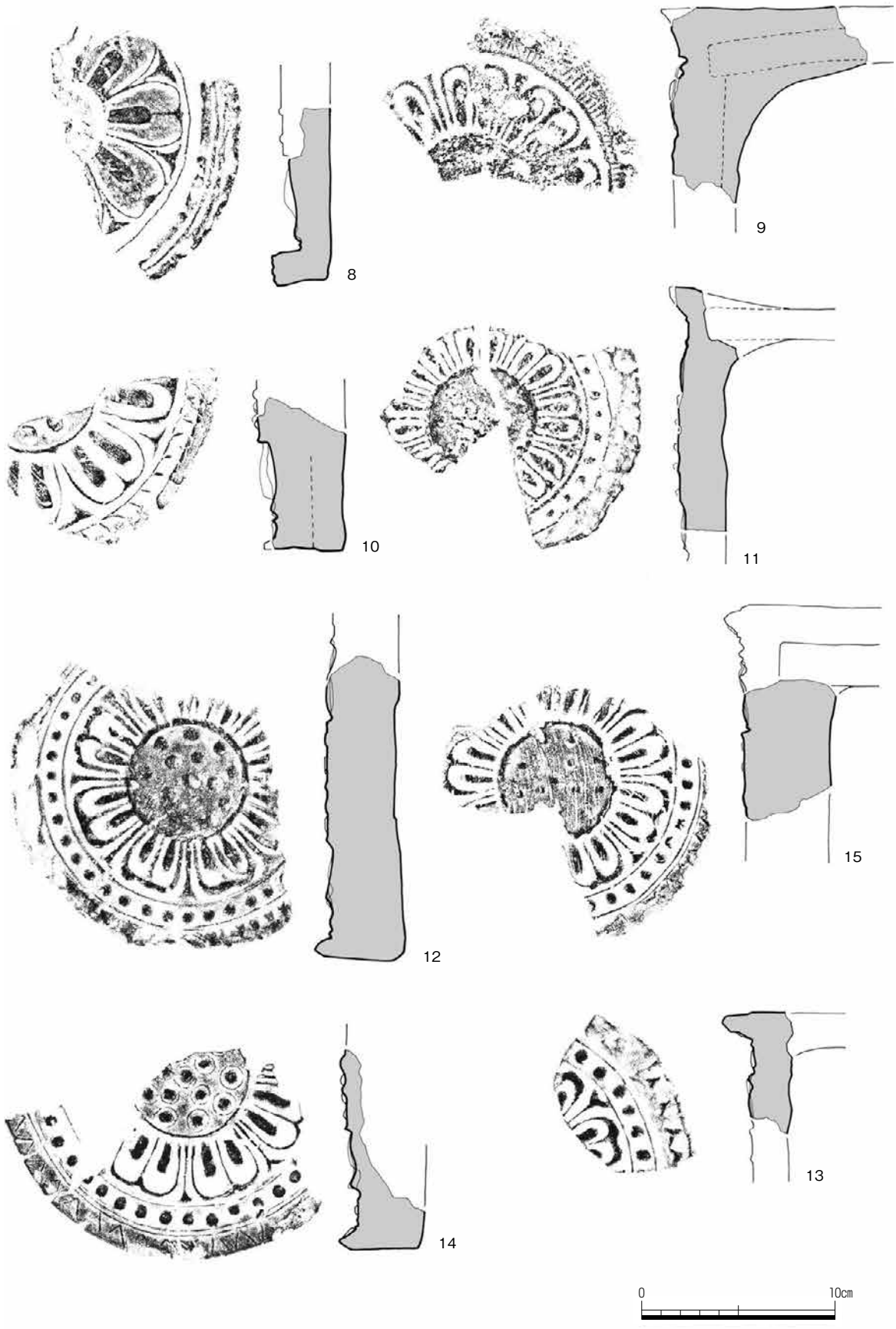


Fig. 73　軒丸瓦2～5E型式　1:3

SD4130中層出土。この他、瓦当上半から接合部にかけての部分を残す資料があり、丸瓦凸面に施したキザミが明瞭に転写されている（Ph.54細部写真）。キザミは5㎝以上の長さで、タテ方向が主であるが所々交差している。

軒丸瓦５E型式（Fig.73-15，Ph.54）　複弁蓮華文軒丸瓦。藤原宮所用6276C型式と同笵。１点出土。15は瓦当面に条線が走り、糸切痕跡とみられる。側面はナデ調整するが、外縁上面から0.8㎝ほどの位置で段差が生じており、Ａ型笵の痕跡と考えられる。瓦当裏面はナデ調整。接合部には厚さ2.3㎝前後の丸瓦が一部残る。丸瓦端部にキザミはみられないが、凹面にはタテ・ナナメ方向にキザミが施され、それが転写されている。破面観察により、粘土板を２回に分けて笵詰めしたことがわかる。色調は黄灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含み精良。NN24地区の中世井戸SE4790から出土。

軒丸瓦５F型式（Fig.74-16，Ph.54）　複弁蓮華文軒丸瓦。１点出土。16は磨滅が著しい。側面はナデ調整するが、瓦当裏面の調整は不明瞭。色調はにぶい黄色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、特に石英と長石が多く粗い。SK4325出土。

軒丸瓦６A型式（Fig.74-17，Ph.55）　複弁蓮華文軒丸瓦。文武朝大官大寺創建6231A型式と同笵。１点出土。17は外縁を欠損する。側面は円弧に沿ってナデ調整し、瓦当面に向けて外傾する。瓦当裏面は全体にナデ調整を施す。特に周縁に沿っては強いナデが施され、幅２㎝ほどの窪みが円弧に沿って巡る。接合部は支持ナデつけされるが、接合粘土は痕跡のみ残る。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。NL32地区SK4796出土。

軒丸瓦６B型式（Fig.74-18，Ph.55）　複弁蓮華文軒丸瓦。文武朝大官大寺創建6231C型式と同笵。１点出土。18は全体的に磨滅が著しい。文様のみならず、側面、裏面の調整も不明瞭である。丸瓦は瓦当上面よりもやや低い位置に取り付き、凹凸面に付加された接合粘土は多い。色調は灰オリーブ色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、特に石英、長石、黒色粒子が多く粗い。JH25地区の中世井戸SE4460出土。

この他、6231型式でＢかＣの可能性があるもの４点、細分できないものが２点出土した。

軒丸瓦７型式（Fig.74-19，Ph.54）　複弁蓮華文軒丸瓦。１点出土。外区に珠文を巡らせ、外縁は直立する。型式は不明であるが、奈良時代後期に位置づけられるか。19は側面、瓦当裏面ともにナデ調整。色調は褐色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。NI29地区のSD4130中層出土。

軒丸瓦８A型式（Fig.75-20・21，Ph.55）　右巻き三巴文軒丸瓦。巴は平板で頭はやや尖る。頭同士は接していない。外区の珠文は35個。外区に笵傷がみられ、笵傷進行を少なくとも３段階追うことができる[7]。丸瓦取り付け位置は180°でずれる。筒部には吊り紐痕跡が残る。調査区北西の中世大溝SD4744・4745・4755、SK5015（以下、SD4744等とする。）と周辺の包含層から、36点出土した。

20は丸瓦部が完形。笵傷は残存する範囲で４箇所確認できる。瓦当面には離れ砂が付着する。瓦当裏面は下半部をヨコ方向に、上半部は円弧を意識してナデ調整し、平坦に仕上げる。丸瓦先端は未加工のまま接続する。瓦当粘土の笵詰めは２回に分けており、丸瓦はその途中で設置される。接合粘土は凸面側が多く、凹面側は少ない。丸瓦凸面は縦位縄叩き目をタテ方向にナデ調整する。凸面段部から5.0㎝の位置に、径1.5㎝の釘穴を設けている。凸面から凹面方向の

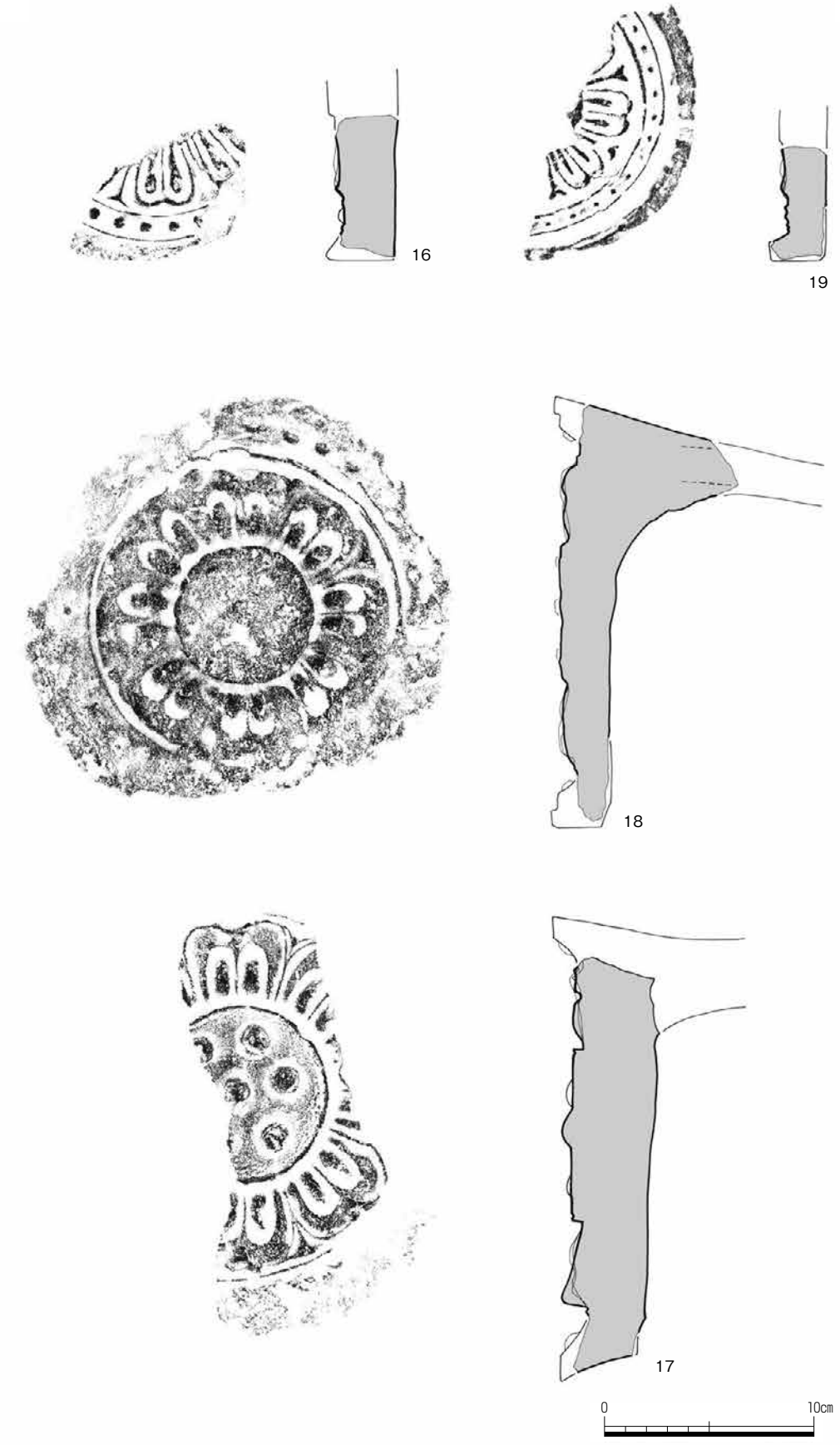


Fig. 74　軒丸瓦5F～7型式　1:3

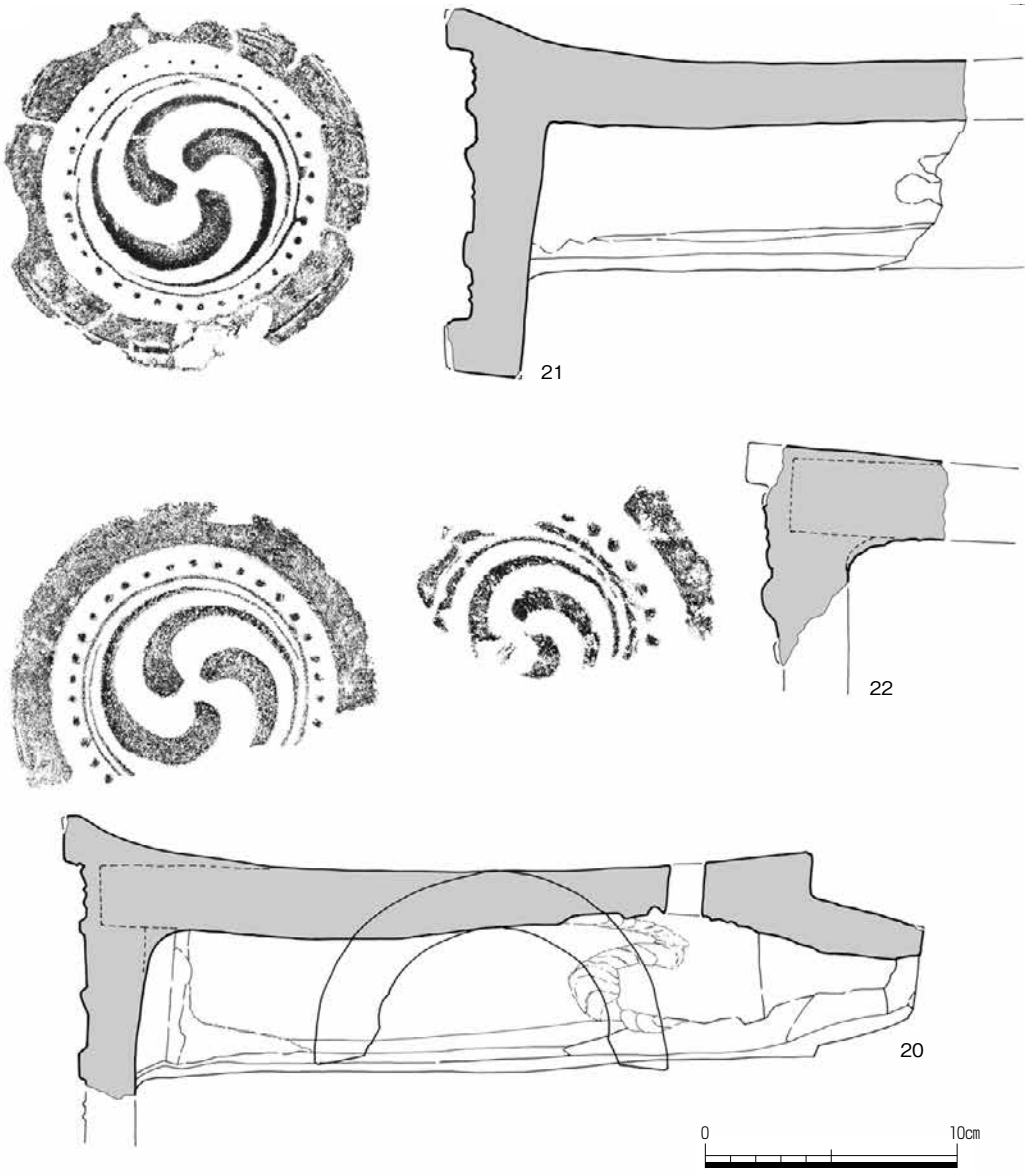


Fig. 75　軒丸瓦８型式　1:3

焼成前穿孔。側面は凹面側に玉縁部と一連の幅広い面取り。凸面側は玉縁部のみ面取りする。玉縁凹面端部も面取り。筒部凹面は部分的に軽くナデ調整するが、吊り紐、糸切り、粘土板合わせ目（Z）、布目の各痕跡を残す。吊り紐は通し縫いされるが、大部分が布袋の外側に出る。全長34.2cm、段部幅14.5cm、瓦当径14.5cm、瓦当厚は外縁部で2.9cm、外縁幅1.7～2.0cm。筒部厚さ2.5～2.7cm、玉縁長4.4cm。色調は黄灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石を多く含む。中世大溝SD4755出土。

21は瓦当がほぼ完形。瓦当面外区上面に糸切り痕が残る。笵傷が7箇所あり、笵傷進行最終段階のもの。瓦当面には離れ砂が付着する。外縁上面の一部には凸線が巡る[8]。丸瓦取り付け位置は20と同じ[9]。瓦当裏面の調整も20と同様。筒部凸面は板状工具でタテ方向にナデ調整する。側面は凹面側にのみ面取りをする。凹面は一部ナデ調整するが、吊り紐、糸切り、布目の各痕跡を残す。吊り紐痕跡は一部のみしか残らない。瓦当径14.9cm、瓦当厚は外縁部で3.0cm、外縁幅1.7～1.9cm。筒部厚さ2.4cm。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石を多く含む。中

世土坑SK5015上層出土。

本型式には、上記のように焼成が硬質のもの以外に、軟質のものもある。笵傷進行との比較を行ったが、資料数に限界があり顕著な対応がみられるとはいえない。また、年代については、吊り紐痕跡に着目すると、14世紀後半に位置づけることができる[10]。

軒丸瓦８B型式（Fig.75-22，Ph.55） 右巻き三巴文軒丸瓦。巴は丸みを帯び頭はやや尖る。頭同士は接していない。外区の珠文数は不明だが、８A型式よりも大きい。４点出土し、うち３点はSK5015からである。22は筒部を一部残す。磨滅が著しく、調整等はわかりにくい。丸瓦先端は未加工で接合している。瓦当復元径16.0㎝。外縁幅1.7㎝、色調は橙色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、赤色粒子を多く含む粗いもの。SK5015出土。

本型式は、すべて同様の色調、焼成、胎土である。丸瓦部を良好に残す資料がないため、製作技術に基づいて年代を絞り込むことが難しい。

上記２型式の他に、別型式の巴文と考えられる軒丸瓦が４点出土したが、外縁部の小片であり、詳細は不明である。

ⅱ　軒平瓦

軒平瓦１A型式（Fig.76-１～９，Ph.56） 型押し忍冬唐草文軒平瓦。吉備池廃寺創建ⅠA型式と同笵。22点出土[11]。うち、残存状況の比較的良好な５点について記述し、９点を図示する。

１は右側面を残す。やや磨滅し、瓦当面の調整は不明瞭。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡は残らない。瓦当付近はヨコ方向にナデ調整後、凹面側縁を面取り。瓦当文の押し型を押した圧力で瓦当上面が若干波打つため、調整後の押捺とわかる。凸面はタテ方向にナデ調整する。面取りは施さない。瓦当厚4.1～4.3㎝。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。NL34地区の14世紀の井戸SE5023出土。

２は右側面を残す。やや磨滅し、瓦当面の調整は不明瞭。２つの単位文様のうち、右（瓦当を正面から見て。以下同じ。）の単位文様が左のそれにつぶされる。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡をごくわずかにしか残さない。瓦当付近は１同様、押し型の押捺によって波打つ。凹面側縁は面取りをする。凸面はタテ方向のナデ調整。凸面側縁もわずかに面取りをするか。瓦当厚3.5～4.0㎝。色調は黄褐色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、赤色粒子を含む。SK4325出土。

３は右側面を残す。瓦当面に笵の木目の痕跡が残る。また、笵傷が明瞭である。左の単位文様が右のそれにつぶされる。凹面はタテ方向に強めのナデ調整。瓦当付近はさらにヨコ方向にナデ調整し、凹面側縁を面取り。凸面はタテ方向にナデ調整し、側縁を面取りする。粘土板合わせ目（Z）が残る。瓦当厚4.2㎝。色調は暗灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。調査区北西部の中世大溝SD4745出土。

４は側面を欠く。瓦当に施文する前に、円弧に沿いナデ調整する。文様の笵傷が明瞭。凹面はタテ方向に強めにナデ調整し、布目痕跡を残さない。瓦当付近はさらにヨコ方向にナデ調整するが、瓦当正面が若干波打つ。凹面はタテ方向にナデ調整する。瓦当厚4.1㎝。色調は灰白色でやや軟質。石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。NH27地区のSD4130上層出土。

５は右側面を残す。瓦当に施文する前に、円弧に沿ってナデ調整する。文様の笵傷が明瞭。

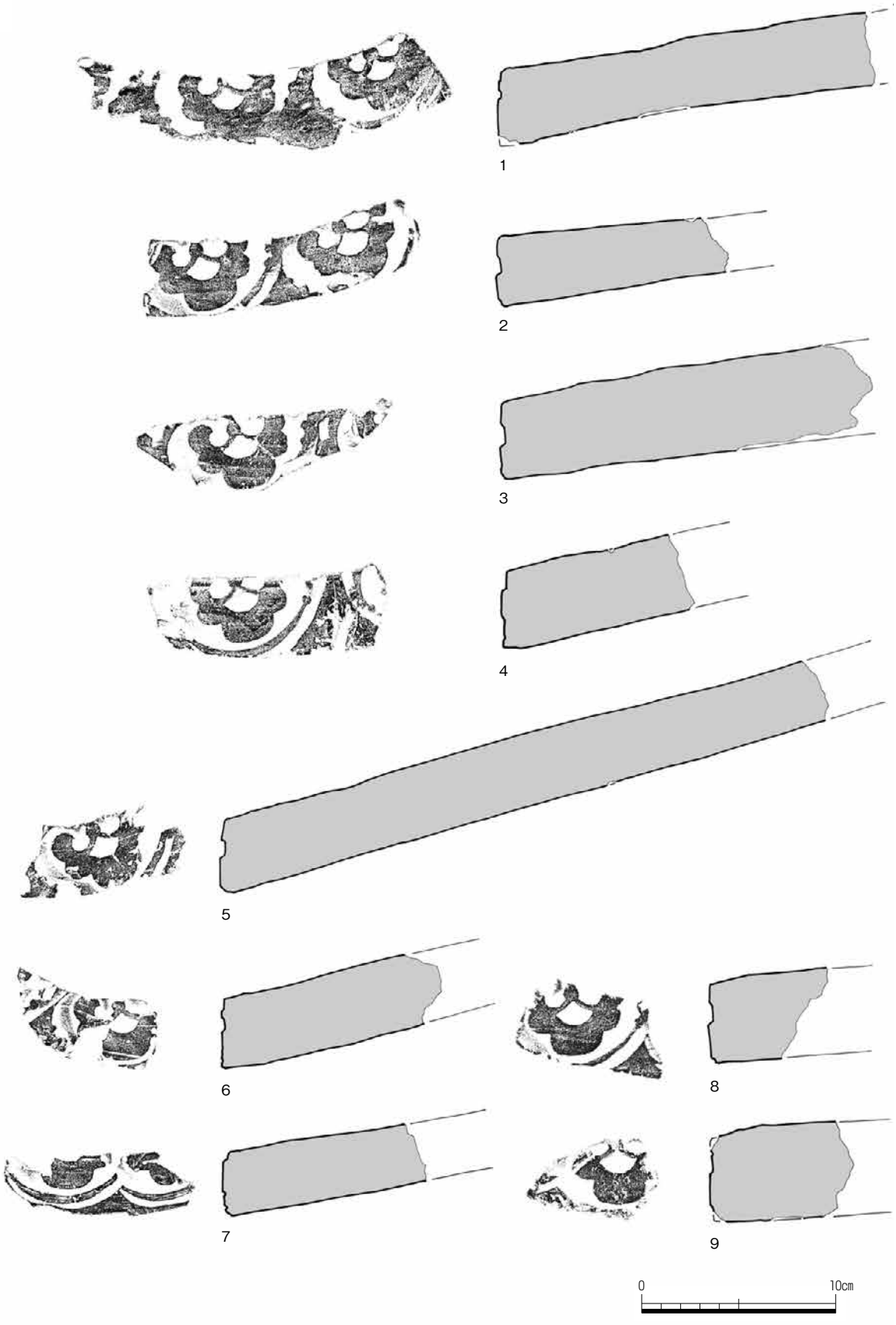


Fig. 76　軒平瓦1A型式　1:3

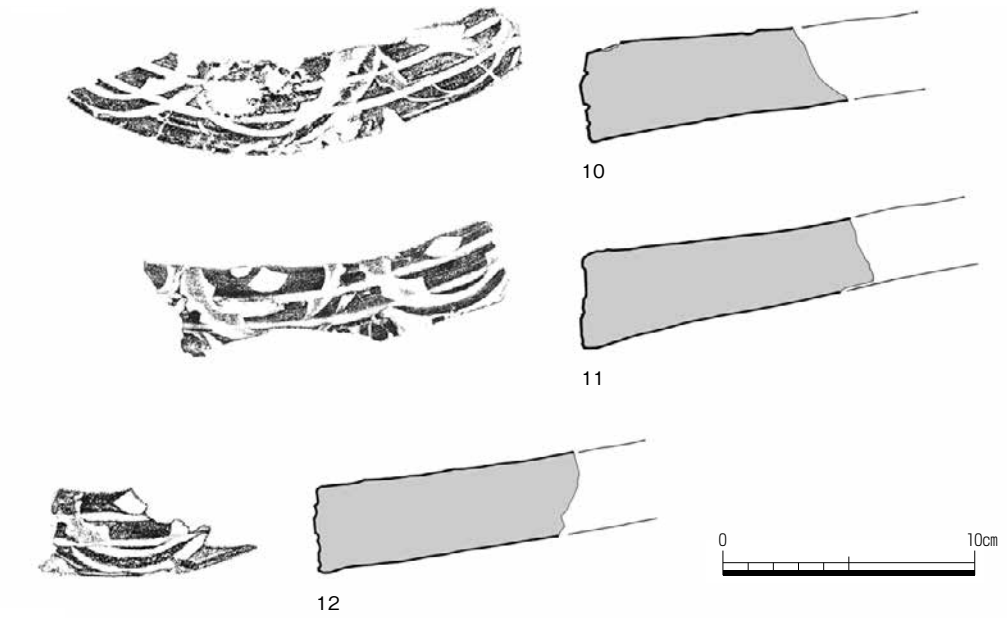


Fig. 77　軒平瓦１B型式　1:3

凹面はタテ方向に強めにナデ調整し、布目痕跡をわずかにしか残さない。瓦当付近はさらにヨコ方向にナデ調整する。側縁は面取りをする。凸面は大部分をタテ方向にナデ調整するが、一部、側縁寄りで平行叩き目がナデ消されずに残る（Ph. 56細部写真）。側縁に面取りはない。粘土板合わせ目（S）が残る。瓦当厚3.8㎝。色調は暗灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。NH30地区のSD4130下層出土。

この他、押し型の押捺順序を考える手掛かりになる資料が４点ある。６は瓦当厚3.3～3.6㎝、色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。HH21地区の土坑SK4500出土。７は瓦当厚3.3㎝、色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。NB28地区の耕作溝出土。８は瓦当厚4.1㎝、色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。NP38地区の包含層出土。９は瓦当厚4.5㎝、色調は黄灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、赤色粒子を含む。NH29地区のSD4130中層出土。いずれの資料も、右が左の単位文様につぶされる。

右京七条一坊と左京六条三坊の本報告対象外の地で同型式が５点出土し、うち右の単位文様が左のそれにつぶされるものが２点、逆のものが２点ある。また、単位文様の重複が両側にみられる資料もある（『吉備池廃寺発掘調査報告』PL. 38-10）。単位文様の重複順序と押し型の施文順序の関係については、第Ⅵ章３で述べる。

軒平瓦１B型式（Fig. 77-10～12，Ph. 56）　型押し忍冬唐草文軒平瓦。吉備池廃寺創建ⅠB型式と同笵。３点出土。

10は右側面を残す。重弧文（心々で1.1㎝間隔の２本の凹線。凹線は断面がV字形。）を施文したのち、押し型を押捺している。重弧文の施文方向は不明だが、右の単位文様が左のそれにつぶされる。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡は残らない。瓦当付近はさらにヨコ方向にナデ調整し、側縁を幅広く面取りする。瓦当上面は押し型の押圧によって波打つ。凸面はタテ方向、瓦当付近のみヨコ方向にナデ調整。部分的にかすかに平行線が確認でき、平行叩きもしくは木目の目立つ無文叩きが行われた可能性がある。側縁の面取りはない。瓦当厚3.2～3.7㎝で、瓦当の中

心寄りが厚い。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。六条条間路北側溝SD4139出土。

11は右側面を残す。重弧文（心々で1.1㎝間隔の２本の凹線。断面には丸みがある。）を施文したのち、押し型を押捺している。重弧文の施文方向は不明だが、左の単位文様が右のそれにつぶされる。凹面・凸面調整は９と同様。瓦当厚3.3～3.6㎝で、瓦当の中心寄りが厚い。色調、焼成、胎土も９と同様。SD4130に南から合流する南北溝SD4131下層出土。

12は右側面を残す。９同様の重弧文を施文したのち、押し型を押捺している。調整は９と同様。瓦当厚3.4㎝。色調、焼成も９とほぼ同様。HF20地区の包含層出土。

以上１B型式の３点は、単位文様の重複順序を除いて、よくまとまった特徴をもつ。この他、左京六条三坊の本報告対象外の地において、残存状況が良好な資料が出土した。詳細はすでに報告している（『吉備池廃寺発掘調査報告』p84、Fig.60-20）が、調整や焼成、色調が上記３点とは若干異なる。

また、１Aか１Bか細分できない資料が３点出土した。

軒平瓦２A型式（Fig.78-13，Ph.56）　二重弧文軒平瓦。凹線は、断面「凵」形で明瞭。凹線幅は0.2㎝。弧線は意識的に作り出されていない。13は直線顎。凹面はタテ方向に、瓦当付近のみヨコ方向にナデ調整。顎部には平行叩き（平瓦の節で後述する平行叩き目C13。）を軽くナデ調整する。瓦当厚1.9㎝。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。HD33地区の包含層出土。

軒平瓦２B型式（Fig.78-14，Ph.56）　二重弧文軒平瓦。凹線は断面「凵」形で明瞭。凹線幅は0.4㎝。弧線は意識的に作り出されていない。14は直線顎。凹面はタテ方向にナデ調整し、瓦当付近のみヨコ方向に削り調整。側縁は面取りする。凸面は平行叩き目（同じく平行叩き目C9。）が残る。瓦当厚1.5㎝。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石を少量含む。NI30地区のSD4130中層出土。

軒平瓦２C型式（Fig.78-15，Ph.56）　三重弧文軒平瓦。凹線はごく浅く、0.6～0.7㎝間隔である。弧線は意識的に作り出されていない。瓦当縁に完全には平行せず、瓦当縁に被さるような挽き型ではないとみられる。15は直線顎。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡は残らない。瓦当付近はヨコ方向にナデ調整。凸面もナデ調整。瓦当厚2.5～2.9㎝。色調は暗灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。NF17地区のⅢ-A期土坑SK4734出土。

軒平瓦２D型式（Fig.78-16，Ph.56）　三重弧文軒平瓦。凹線はごく浅く、1.0～1.2㎝間隔である。弧線は意識的に作り出されていない。15同様、瓦当縁に完全には平行しない。16は直線顎。凹面はタテ方向にナデ調整し、工具痕が平行に走る。布目痕跡は残らない。瓦当付近はヨコ方向にナデ調整。凸面もナデ調整。瓦当付近は無文の板で補足叩きをする。瓦当厚2.7～2.9㎝。色調は褐灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。SE4740出土。

軒平瓦２E型式（Fig.78-17，Ph.56）　三重弧文軒平瓦。弧線は丸みを帯び、凹線は深くU字を呈する。17は顎の形状が不明。凹面は瓦当付近をヨコ方向にナデ調整し、布目痕跡は残らない。凸面もナデ調整。瓦当厚2.9㎝。色調は明褐色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。NG17地区のSD4130上層出土。

軒平瓦２F型式（Fig.78-18，Ph.56）　四重弧文軒平瓦。弧線は丸みを帯び、凹線はわずかに平坦

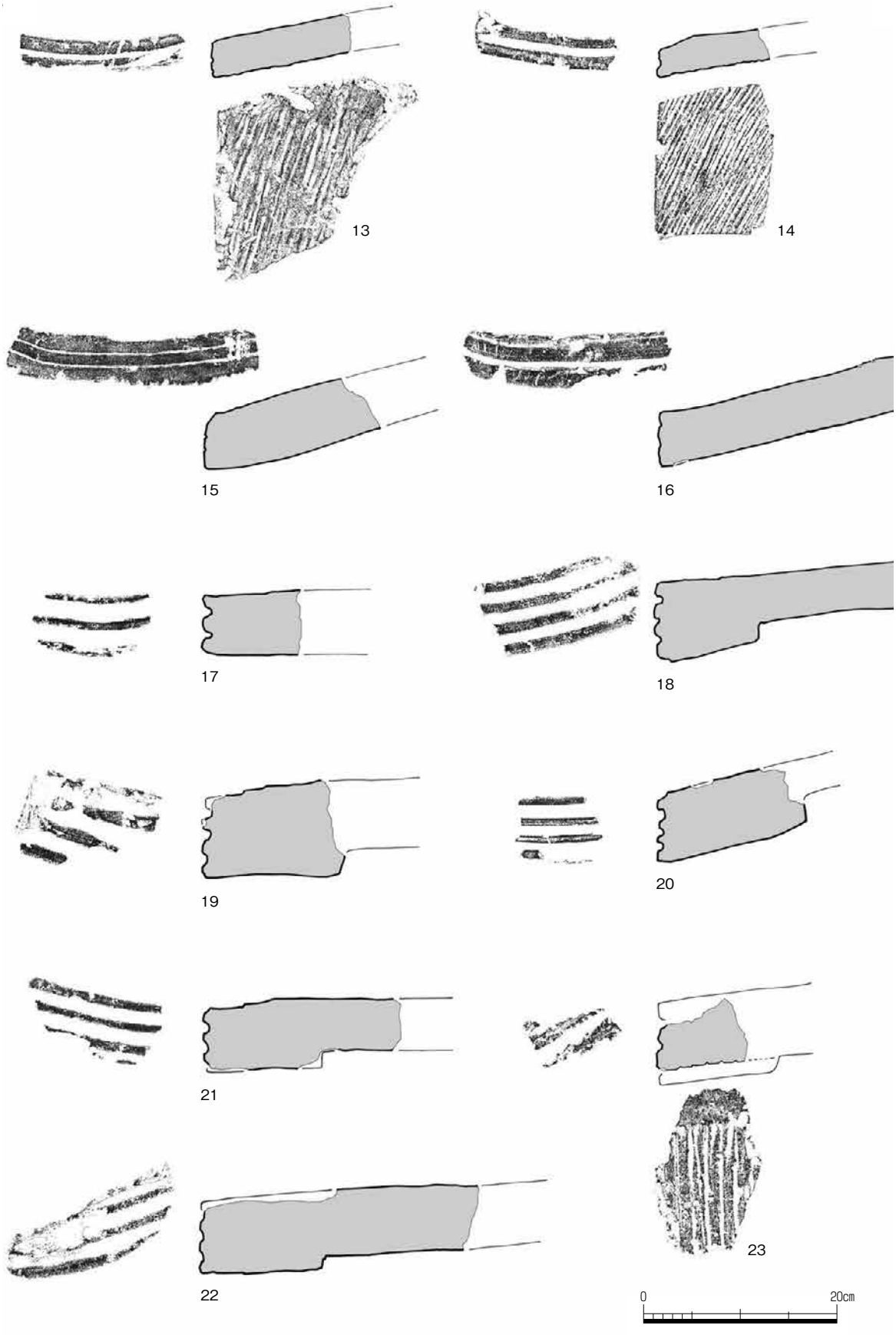


Fig. 78　軒平瓦２型式　1:3

面をもつ。弧線は凹線に比べ幅広い。18は長さ5.2㎝、深さ0.9㎝の段顎。凹面はヨコ方向、側縁付近をタテ方向にナデ調整し、布目痕跡は残らない。側面は顎部のみ面取り。顎部には瓦当面から0.5㎝ほどの位置に施文具のアタリが走る。凸面はナデ調整。瓦当厚3.9㎝。色調はにぶい黄褐色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を多く含む。NI23地区のSD4130上層出土。

軒平瓦２G型式（Fig.78-19，Ph.56）　四重弧文軒平瓦。弧線は丸みを帯び、凹線は明瞭に平坦面をもつ。弧線は凹線よりもやや幅広い。19は長さ7.2㎝の段顎。深さは欠損し不明。左側面をわずかに残す。凹面には瓦当面から1.2㎝の位置に施文具のアタリが走る。また、ナデ調整は部分的で、桶枠板、分割突起、布目の各痕跡を残す。枠板幅は3.2㎝で、分割突起（界点）は径1.3㎝。凸面はナデ調整。瓦当厚4.3㎝。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石を含む。HC31地区の包含層出土。

軒平瓦２H型式（Fig.78-20，Ph.56）　四重弧文軒平瓦。弧線は平坦で、凹線は丸みを帯びる。弧線と凹線幅はほぼ変わらない。小山廃寺KYH-５類に相当する[12]。20は長さ7.9㎝の段顎。深さは欠損し不明。凹面には瓦当面から1.7㎝の位置に施文具のアタリが走る。ナデ調整するが、布目痕跡を残す。凸面はナデ調整。瓦当厚3.3㎝。色調は黒褐色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。NG31地区のSD4130上層出土。

軒平瓦２Ⅰ型式（Fig.78-21，Ph.56）　四重弧文軒平瓦。第四弧線がごくわずかにしか表出されない。弧線と凹線ともに丸みを帯び、弧線は凹線に比べ幅広い。21は長さ5.8㎝、深さ0.7㎝の段顎。左側面を残す。凹面には瓦当面から2.1㎝の位置に施文具のアタリが走る。ナデ調整するが、布目痕跡をわずかに残す。側面は断面剣先形にケズリ調整する。凸面はナデ調整。顎部は磨滅し調整不明瞭、瓦当厚3.2㎝。色調は黄灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。NJ37地区のSD4130上層出土。

軒平瓦２J型式（Fig.78-22，Ph.56）　四重弧文軒平瓦。第一弧線がごくわずかにしか表出されない。弧線は丸みを帯び、凹線は平坦面が明瞭である。凹線は弧線に比べてやや幅広い。小山廃寺KYH-７類に相当する。22は長さ6.2㎝、深さ0.7㎝の段顎。右側面を残す。磨滅により凹面の調整は不明瞭。布目痕跡がわずかに認められる。側面は斜めに大きく削る。顎部には瓦当面から2.0㎝の位置に施文具のアタリが走る。顎部、凸面ともナデ調整か。瓦当厚3.4㎝。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。SE4740出土。

この他、重弧の数が不明な資料が１点ある（Fig.78-23，Ph.56）。23はわずかに右側面を残す資料。上部を欠き、かつ顎の部分が剥落する。弧線は丸みを帯びるが、わずかな平坦面がある。弧線に比して凹線は狭い。顎の接合面には挽き型で重弧文風の凹凸がつけられる。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。中世土坑SK5015下層出土。これ以外に、欠損により残存状況が良好でない資料が３点出土している。

軒平瓦３型式（Fig.79-24，Ph.57）　法隆寺式均整忍冬唐草文軒平瓦。法輪寺所用Ａ型式[13]と同笵。２点出土。24は外縁をすべて欠損。凹面をヨコ方向にケズリ調整し、中心寄りはさらにナデ調整。布目痕跡は残らない。側縁は面取りをする。凸面はタテ方向にケズリ調整する。瓦当厚5.8～6.2㎝。色調は黄灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。法輪寺出土資料と焼成、胎土などが非常に似る。NK26地区の小穴から出土。

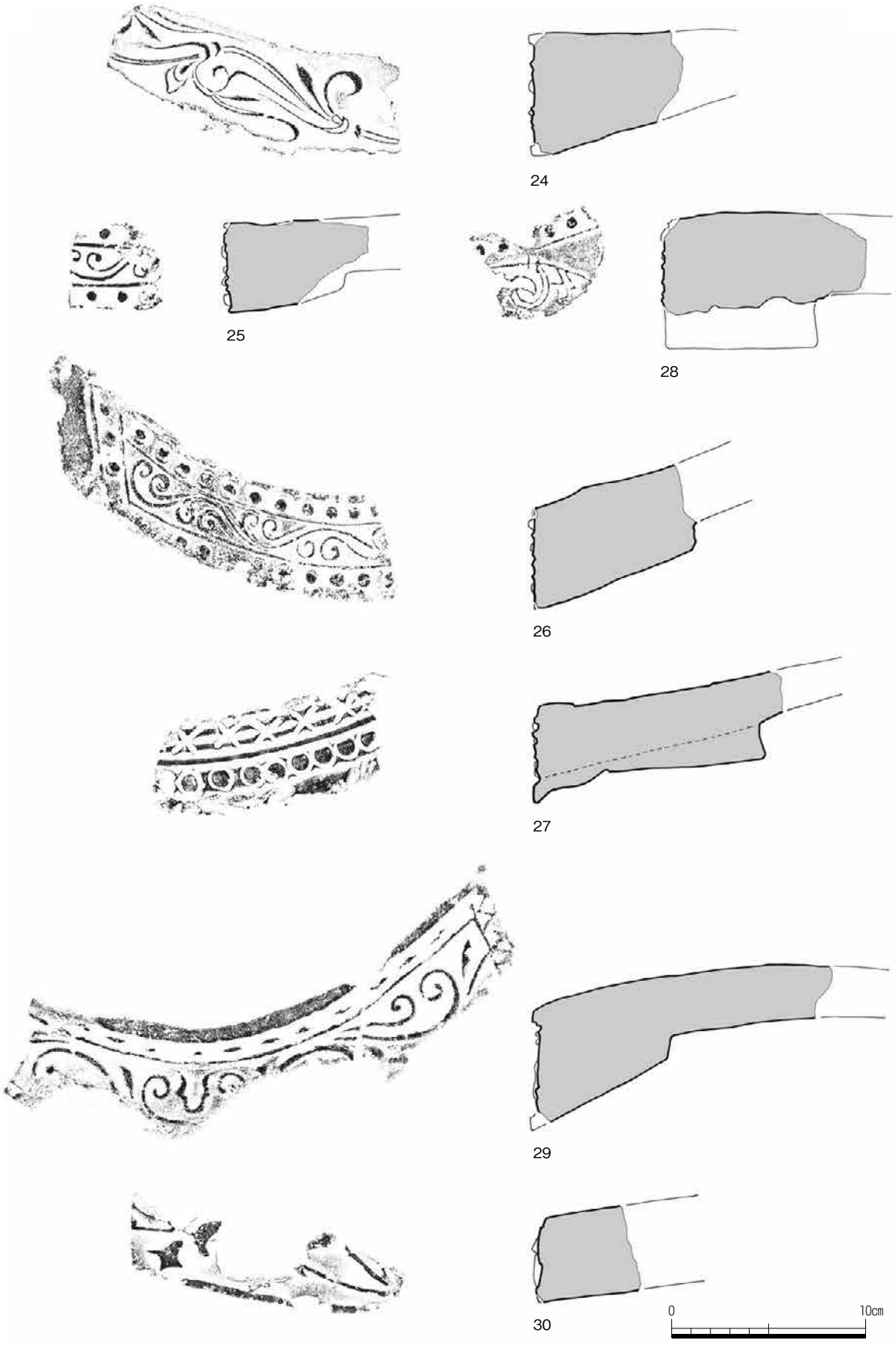


Fig. 79　軒平瓦3～6型式　1:3

軒平瓦４A型式　偏行唐草文軒平瓦。藤原宮式6641C型式と同笵。１点出土。瓦当のごく一部が残る。小片のため、図示しない。HD29地区の包含層出土。

軒平瓦４B型式（Fig. 79-25，Ph. 57）　偏行唐草文軒平瓦。藤原宮式6643Aa型式と同笵。１点出土。25は凹面瓦当付近のみヨコ方向にナデ調整し、その他は未調整で布目痕跡を残す。顎部はナデ調整。瓦当厚5.8～6.2cm。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。SE4740出土。

軒平瓦４C型式（Fig. 79-26，Ph. 57）　偏行唐草文軒平瓦。藤原宮式6643C型式と同笵。１点出土。26は長さ9.0cm、深さ1.2cmの段顎をもつ。凹面はヨコ方向にケズリ調整し、布目痕跡は一部にしか残らない。側縁は面取りする。顎部はナデ調整。瓦当厚5.2cm。色調はにぶい黄褐色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石を非常に多く含み粗い。HK17地区の小穴出土。

軒平瓦４D型式（Fig. 79-27，Ph. 57）　変形重弧文軒平瓦。藤原宮式6561型式と同笵。４点出土。27は長さ11.6cm、深さ1.8cmの貼り付け段顎をもつ。施文順序は、重弧文を挽き出し、スタンプ文を左から右へ押し（「×」と「○」の先後は不明。）、下縁部に押圧波状文を施す。凹面は瓦当付近をヨコ方向にナデ調整する以外は未調整で、桶枠板、布端、布目の各痕跡を残す。枠板幅は5.0cmと幅広い。側縁は面取りする。顎部は縦縄叩き目をヨコ方向にナデ調整する。瓦当厚5.0cm。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。NI22地区のSD4130上層出土。

軒平瓦４E型式（Fig. 79-28，Ph. 57）　変形忍冬唐草文軒平瓦。藤原宮式6647A型式と同笵。１点出土。28は右側面を残す資料。長さ8.0cmほどの段顎をもつが、貼り付けた部分が剥離しており、深さは不明。剥離面にはユビでナデつけた痕跡がある。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目はわずかにしか残らない。凸面はヨコ方にナデ調整する。瓦当厚5.6cm以上。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、粒の大きい黒色粒子が目立つ。NH36地区のSD4130上層出土。

　この他、型式は不明だが、藤原宮式軒平瓦と考えられる資料が２点出土した。

軒平瓦５A型式　均整唐草文軒平瓦。文武朝大官大寺創建6661A型式と同笵。１点出土。瓦当のごく一部が残る。小片のため、図示しない。NL34地区の中世井戸SE5023出土。

軒平瓦５B型式（Fig. 79-29，Ph. 57）　均整唐草文軒平瓦。文武朝大官大寺創建6661B型式と同笵。２点出土した。29は二次的に被熱したとみられる資料。長さ7.2cm、深さ1.0cmの段顎をもつ。顎部を貼り付けたのちに、さらに削り出しているか。凹面はナデ調整するが、一部布目痕跡を残す。瓦当付近のみヨコ方向にナデ調整。側縁の面取りはない。顎部、凸面ともにナデ調整する。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を多く含む。HK19地区の小穴から出土。

　この他、型式は不明だが、文武朝大官大寺所用軒平瓦とみられる資料が１点出土した。

軒平瓦６型式（Fig. 79-30，Ph. 57）　忍冬唐草文軒平瓦。中心から左右に伸びる茎と葉からなる。文様密度は低い。外区・脇区はない。外縁は瓦当下縁にのみある。顎の形状は不明。平安時代か。１点出土。30は左側面を残す資料。凹面はナデ調整し、布目痕跡はない。凸面は縦縄叩き目をナデ調整する。側縁の面取りは凹面、凸面ともにない。色調は黄灰色で、焼成はやや硬質。石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、黒色粒子や赤色粒子が多い。SE4790出土。

軒平瓦７型式（Fig.80-31，Ph.57）　連珠文軒平瓦。断面に丸みをもつ珠文を13個以上並べ、上下に界線を配する。瓦当貼り付け段顎である。６点出土し、いずれも調査区北西のSE4790、SK5015とその付近の包含層に限られる。31は左側面を残す。離れ砂が瓦当面と凹凸面に付着する。凹面は軽くナデ調整するが、布目痕跡を全体的に残す。凸面もナデ調整。顎部下面と裏面はヨコ方向にナデ調整。色調は灰色からにぶい黄褐色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。SK5015出土。

本型式には、凸面と顎部の境目に凹型台の圧痕を残すものが存在する（Ph.57細部写真）。

軒平瓦８型式（Fig.80-32，Ph.57）　花唐草文軒平瓦。６弁の花文を中心飾りとし、左右に唐草文を４葉ずつ配する。唐草文は巻きが弱く、それぞれは連結しない。界線は四周に巡らせる。瓦当貼り付け段顎である。18点出土し、いずれも調査区北西のSD4744等とその付近の包含層に限られる。32は瓦当面から25.0cmの位置に、円形の釘穴を有する。焼成前穿孔で、径は不明。瓦当外縁上面はナデ調整。瓦当上縁は0.6cm幅で面取りするが、下縁は部分的に傾斜が変わるも不明瞭。凹面はナデ調整し、布目痕跡をかすかにしか残さない。凸面もナデ調整。顎部は下面・裏面をヨコ方向にナデ調整した後、後縁を0.2～0.5cm幅で面取りする。瓦当幅25.2cm、瓦当厚4.9cm。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含み、石英、長石

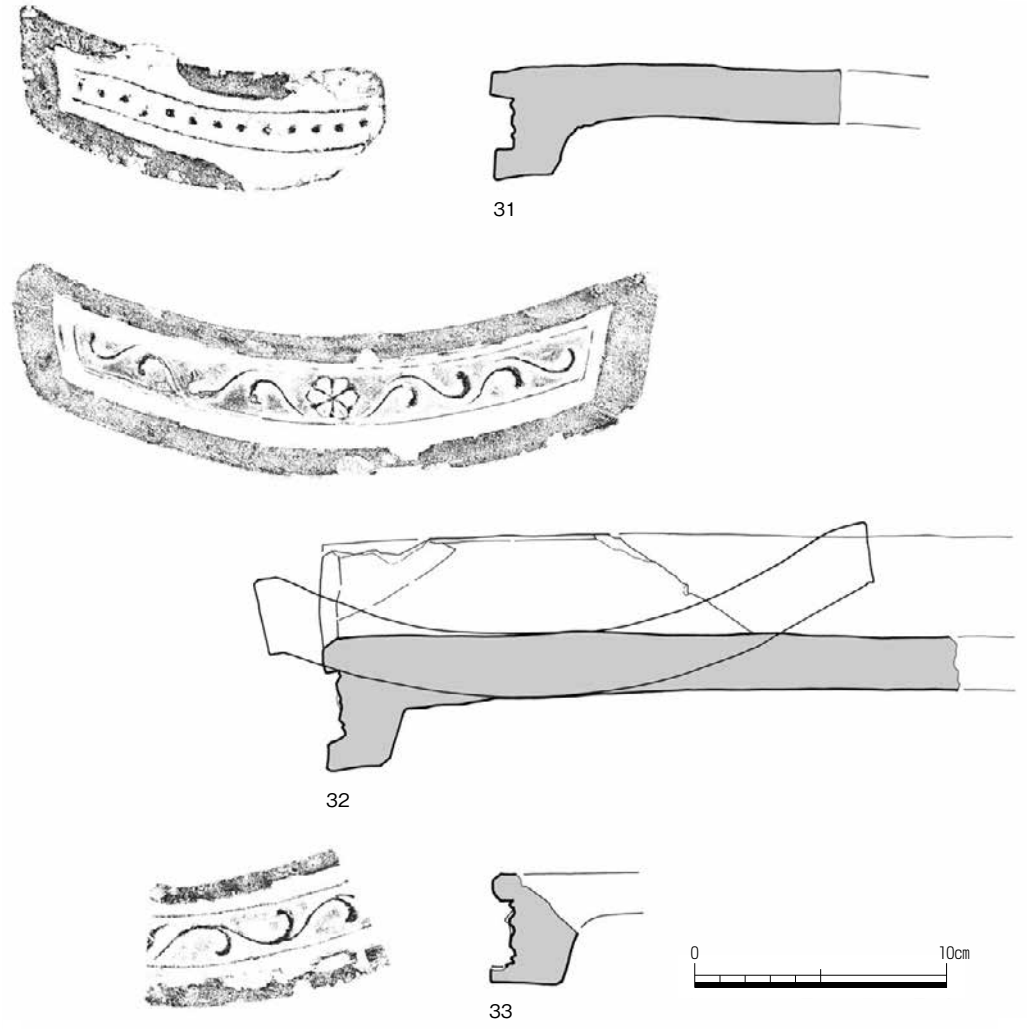


Fig. 80　軒平瓦７～９型式　1:3

が多い。SD4755出土。

本型式には、焼成が硬質のものと軟質のものがある。瓦当の面取りについては、上縁と顎部後縁に施される資料が多いが、明瞭でないものも若干存在する。また、平瓦との接合は、平瓦を斜めに削って瓦当裏に当て（Ph.57細部写真）、その部分で剥離した資料が複数認められる。

軒平瓦９型式（Fig.80-33，Ph.57）　蓮華唐草文軒平瓦。蓮華文を中心飾りとし、左右に唐草文を３葉以上配する。唐草文は巻きが弱く、それぞれが連結する。界線は上下には巡らせるが、左右は不明。瓦当貼り付け段顎である。１点出土した。33は中心飾りをわずかに残す資料。平瓦との接合面で斜めに剥離している（Ph.57細部写真）。瓦当面には全体に離れ砂が付着する。瓦当上縁は0.5㎝幅で面取りをする。瓦当下縁には面取りを施さない。顎部下面、裏面はヨコ方向にナデ調整した後、後縁を0.4㎝幅で面取りする。瓦当厚4.4㎝。色調は暗灰黄色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。FB96地区のSD4139出土。

以上の中世軒平瓦７～９型式の年代は、凹型成形台の圧痕の有無、瓦当と平瓦の接合方法、瓦当部の面取り等、技術面に着目すると、７型式は13世紀後半～14世紀前半、８・９型式は14世紀中頃～後半に位置づけることができる[14]。この年代観は各遺構で共伴した土器の年代観とも矛盾がない。また、軒丸瓦とのセット関係についてであるが、出土遺構とそれぞれの年代観から、軒丸瓦８A型式と軒平瓦８型式が組み合うことは確実である。これら以外については、出土量が少ない、出土遺構が異なる、といった点からセット関係を見い出すことが難しい。

以上が、本調査区で出土した軒瓦の全型式である。７世紀代の多種多様な軒瓦、そして鎌倉時代～室町時代の軒瓦が出土したが、その間の奈良時代、平安時代のものはごくわずかとみてよい。ただし、当該期に位置づけられる建物は確実に存在し、土器などの遺物も多く出土し、この地での活動があったことは確かである。したがって、奈良時代から平安時代に営まれた建物は、瓦葺きではなかった可能性が高い[15]。

B　道具瓦・刻印瓦など

今回の調査区内で出土した道具瓦・刻印瓦類は、古代から中世におよぶ。古代のものには面戸瓦、熨斗瓦、隅切平瓦、土管、塼などがある。この他、道具瓦ではないが刻印丸瓦がある。中世の道具瓦には、鬼瓦、鳥衾瓦、面戸瓦、雁振瓦、箱熨斗瓦、隅軒平瓦がある。以下、古代と中世に分けて、それぞれ記述する。

i　古代の道具瓦・刻印瓦

面戸瓦（Fig.81-1，Ph.58）　１点出土。１は完形の蟹面戸瓦である。丸瓦を焼成後に打ち割ったもので、右端部が丸瓦広端部にあたる。凸面は長軸方向にナデ調整。側面調整は、側面全体を丁寧にヘラケズリし、凹面側に面取りを施すc1手法。凹面は軽くナデ調整するが、糸切り、布綴じ合わせ目、布目の各痕跡を残す。右端部凹面はヨコ方向にナデ調整。舌部に粘土板合わせ目（S）がみられる。全長38.5㎝、幅23.2㎝、舌部長15.0㎝。厚さ2.2㎝。色調はにぶい黄橙色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含み、石英、長石が多い。HR21地区周辺の大土坑SK4327出土。

熨斗瓦（Fig.82-2～4，Ph.58）　３点出土し、いずれも切熨斗瓦である。

Fig. 81　面戸瓦　1:3

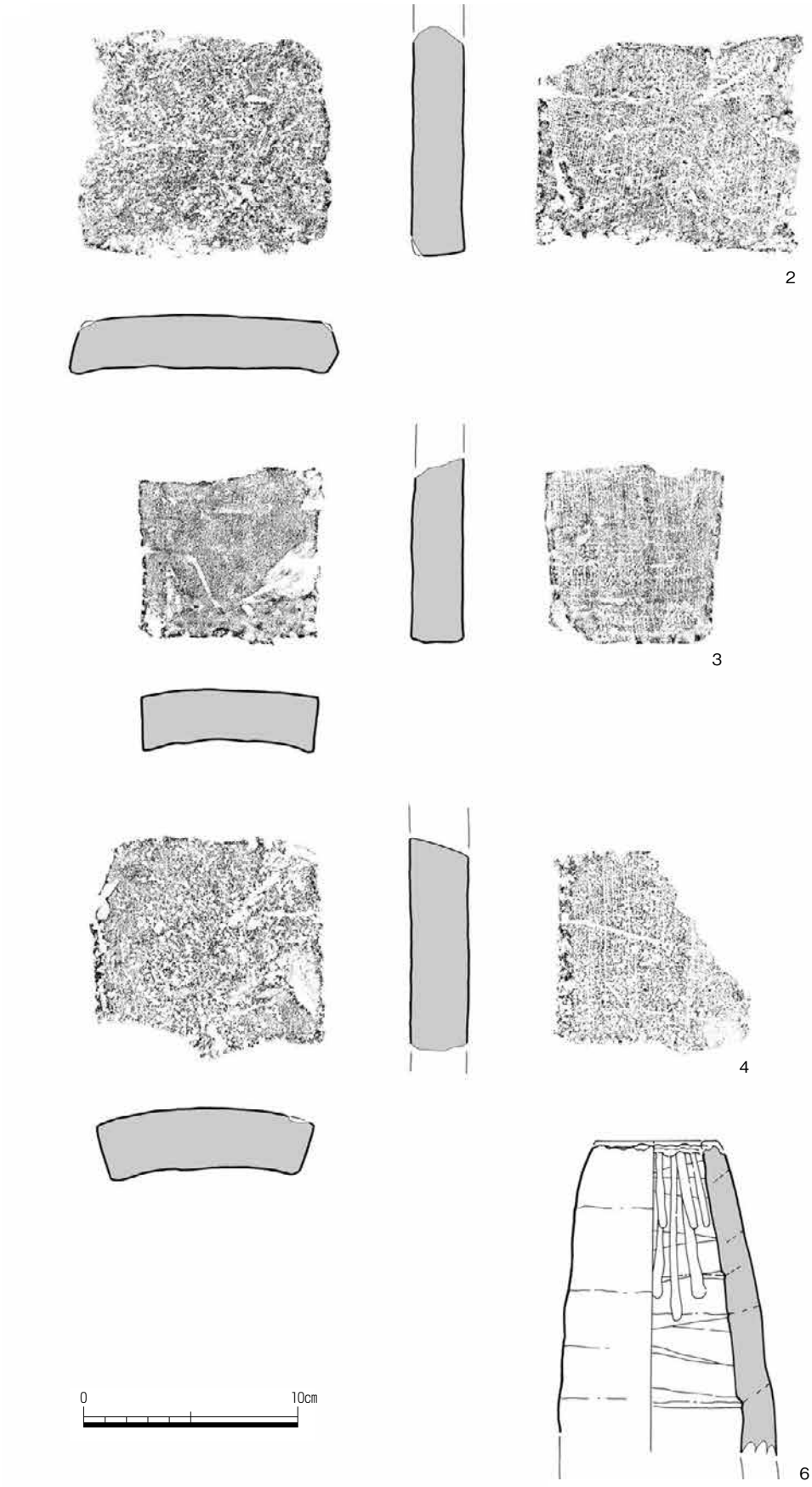


Fig. 82　熨斗瓦・土管　1:3

2は磨滅によりわかりにくいが、凸面はナデ調整、側面はケズリ調整、凹面はほぼ未調整である。凸面と側面が鈍角をなす。端部幅12.4cm、厚さ2.4cm。色調は灰白色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。調査区北西の中世土坑SK5015上層出土。

3は凸面をナデ調整、側面はケズリ調整する。凹面はほぼ未調整で、桶枠板と布目の各痕跡を残す。枠板幅は2.5cm。端部幅7.7cm、厚さ2.3～2.5cm。色調は灰白色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。SK4734出土。

4は端部が欠損している。凸面はナデ調整、側面はケズリ調整、凹面は未調整で桶枠板と布目の各痕跡を残す。幅10.3cm、厚さ2.9cm。色調は暗青灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、黒色粒子が多い。AI86地区の包含層出土。

隅切平瓦（Fig. 83-5，Ph. 58）　1点出土。5は広端部の右端（屋根に葺いた状態での左右。）をやや

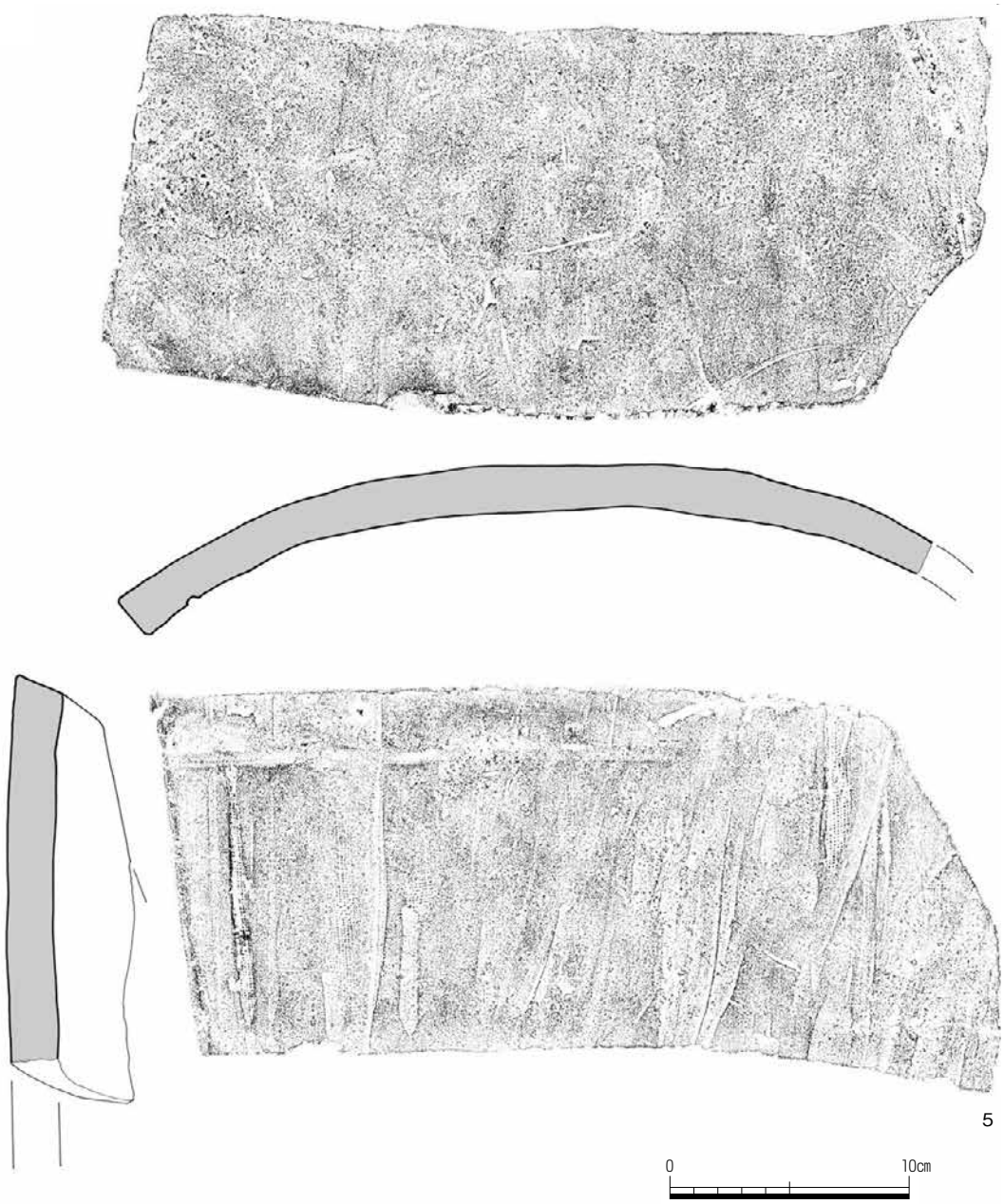


Fig. 83　隅切平瓦　1:3

内弯気味に切り落とす。凸面は丁寧にナデ調整する。側面調整はc３手法。凹面はタテ方向に粗くナデ調整するが、布目痕跡を部分的に残す。側縁からやや内側に走る凹線は分割界線の可能性がある。また、広端部から３㎝ほど内側に凹線が断続的に走る部分があり、その上をヨコ方向にナデつけている。性格は不明。広端幅30.7㎝、厚さ2.0㎝。色調は暗青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。SK4270出土。

土　管（Fig.82-6，Ph.58）　１点出土。６は粘土紐を積み上げて作っている。狭端，広端ともに欠損する。外面はタテ方向にケズリ調整、内面はヨコ方向に粗くナデ調整する。残存長15.0㎝。残存最大外径9.8㎝、残存最大内径6.5㎝。色調は暗青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母を含み，長石が多い。SE4740出土。

塼（Fig.84-7・8，Ph.58）　７点出土。比較的残存状況の良い２点について記述、図示する。

７は三辺を残す。一辺32.5㎝×9.2㎝以上、厚さ5.0㎝。上下面、側面ともにナデ調整。破面は均質で、粘土塊の単位はみえない。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。JS36地区の中世井戸SE4463出土。

８は三辺を残す。一辺16.0㎝×13.0㎝以上、厚さ7.0㎝。上下面は同一方向にケズリ調整、側面はナデ調整する。いくつかの粘土塊を型に詰め込んで成形したとみられる。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石を含む。SE4469出土。

同型式とみられる資料がHB29地区の耕作溝から、もう１点出土した。この他、厚さが４㎝前後と７・８よりも薄手で、断面台形を呈する資料も出土した。

刻印瓦（Fig.84-9，Ph.58）　１点出土。９は丸瓦の凸面段部付近に「池上」刻印を押捺している。刻印は1.4㎝×1.6㎝で、「池上」字を凸線が方形に囲む。向きは段部に平行。この刻印が押捺された瓦は、法輪寺において多数出土している。丸瓦は凸面をナデ調整し、凹面は未調整。段部はほぼ直角に曲がり、凹面には輪状圧痕が残る。筒部の厚さは0.9～1.3㎝と非常に薄く、玉縁も同様の厚さとみられる。色調は灰白色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。SD4255と連続する溝SD4256出土。

瓦製円盤（Fig.84-10，Ph.58）　１点出土。10はわずかに弧を描き、平瓦を加工したものの可能性がある。表裏両面ともナデ調整する。側面は焼成後に打ち欠いて成形したか。不整円形で、最大径7.1㎝。厚さ2.1㎝。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。NI37地区のSD4130上層出土。

ⅱ　中世の道具瓦・刻印瓦

鬼　瓦（Ph.59-11・12）　２点出土。11は頭頂部から顎にかけて円筒形の空洞を作る。非常に立体的な作りであるが、牙や角は欠損している。外縁に沿って幅3.0㎝の珠文帯を設ける。珠文は径2.2㎝。裏面は縁を残して大きく刳り込み、空洞部に平行して縦方向の把手を作り出す。残存高24.4㎝、残存幅25.9㎝、地板厚6.8㎝、下辺刳り込み高さ6.8㎝。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、赤色粒子を含む。調査区北西部の中世大溝SD4755から出土。

12は上顎以上を欠損する。11同様、頭頂部から顎にかけて円筒形の空洞を作る。珠文帯も11同様の法量をもつ。足下端はやや内弯気味で、底面には幅2.4㎝の溝が左右方向に走る。裏面は縁を残して大きく刳り込み、空洞部に平行して縦方向の把手を作り出す。残存高22.5㎝、残存

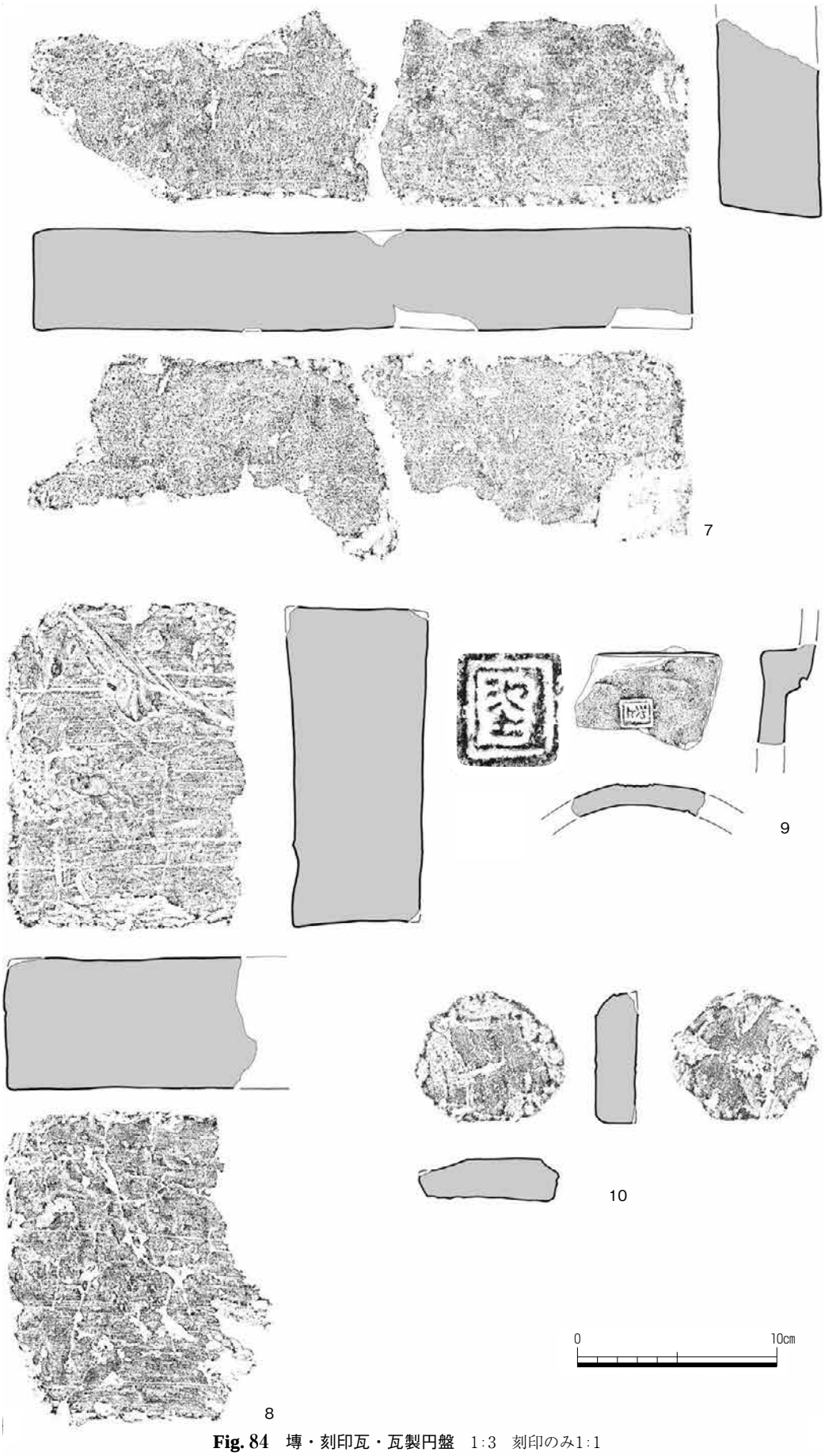


Fig. 84　塼・刻印瓦・瓦製円盤　1:3　刻印のみ1:1

幅32.9cm、地板厚6.4cm、下辺刳り込み幅14.6cm、高さ9.4cm。下辺刳り込み幅は、軒丸瓦８A型式の段部幅にほぼ一致する。色調は黄灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、赤色粒子を含む。調査区北西部の、中世大溝SD4745出土。

２点とも作風や技法が似ており、同工の作とみてよいだろう。

鳥衾瓦・雁振瓦（Fig. 85-14・15，Ph. 59） 計81点出土。小片が多く、総重量では38.1kgを測る。重量から換算すると約８個体分に相当するか。SD4755等から出土。

13は鳥衾瓦。顎部から瓦当部分と、胴部の大半は欠損する。胴部凸面は、縦方向に丁寧にヘラ状工具でナデ調整。凹面は平坦。調整は粗く、糸切り、布目の各痕跡を部分的に残す。胴部前端（瓦当側）は凹面側を削るが、首部との間は段をなす。背の反りは粘土板を重ねて作り出している（Ph. 59細部写真）。復元胴部幅27.6cm。高さ12.9cm。色調は浅黄色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、褐色粒子を含む。NH32地区の包含層出土。鳥衾瓦と明瞭にわかるのは、この１点だけである。

14は雁振瓦の後端部（玉縁側）。胴部凸面は、縦方向にヘラ状工具でナデ調整。凹面は糸切り、布目の各痕跡をほぼ全体に残すが、前端寄りは一部削ってやや凹ませる。玉縁端部凹面、側縁、胴部凹面側縁は面取り。復元胴部幅24.8cm、高さ11.3cm、玉縁長5.0cm。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、褐色粒子を含む。SD4755出土。

15は前端から後端までを残す資料。胴部の凸面と凹面の調整は14と同様だが、側縁の面取りは不明瞭。凹面前端縁は面取りする。また、凹面前端の中心を半円形に浅く削り込む。胴部長32.4cm、復元胴部幅25.6cm、高さ11.4cm。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、褐色粒子を含む。SK5015出土。

これら以外の資料も、14・15と同様の特徴をもつ。

面戸瓦（Fig. 86-16～18，Ph. 60） 23点出土。いずれも鰹面戸。SD4744等とその付近の包含層から出土した。

16は左傾する切り面戸瓦（屋根を下から見上げたときの左右。以下、面戸瓦については同じ。）。凸面はヘラ状工具でナデ調整。凹面は糸切り、布目の各痕跡を残す。凹面側縁の面取りは、上下は幅広いが、左右は狭い。長さ15.0cm、幅10.7cm、厚さ2.4cm。色調は黄灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、褐色粒子を含む。NF34地区の包含層出土。

17は右傾する切り面戸瓦で、玉縁がわずかに残る。一方の側縁は破損するが、焼成後に打ち欠いて弧の浅い面戸瓦に仕上げた可能性がある。凸面は縄叩き目をナデ調整する。凹面には吊り紐と布目の各痕跡が残る。凹面側縁の面取りは四周とも幅広い。幅9.8cm、厚さ2.6～2.8cm。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、褐色粒子を含む。SK5015出土。

18は左傾する割面戸瓦。17と同様、弧の浅い製品の可能性がある。凸面は縄叩き目をナデ調整する。凹面も軽くナデ調整するが、糸切り、吊り紐、布目の各痕跡を残す。側縁の面取りは幅広い。幅11.2cm、厚さ2.1～2.4cm。色調は灰黄色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、褐色粒子を含む。SD4755出土。

出土した23点のうち、左傾するものが12点、右傾するものが４点、不明が７点である。また、幅は8.4～12.0cmとばらつくが、大部分は10cm～11cm前後のものである。厚さはほぼ同じ。長さ

Fig. 85　中世雁振瓦　1:3

のわかる資料は２点と少ないが、いずれも15㎝前後である。凹面側縁の面取りは、上下方向は幅広く、左右方向はそれに比べ狭い傾向にある。

熨斗瓦（Fig.86-19，Ph.60）　１点出土。切熨斗瓦で、平瓦の広端部が残る。凹面側から分割線を入れたとみられる。凸面はナデ調整するが、端部には木目の目立つ無文叩き目が残る。凹面は丁寧にナデ調整し、布目痕跡を残さない。幅12.4㎝、厚さ2.1㎝。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。NP30地区の包含層出土。

隅軒丸瓦（Fig.87-20，Ph.60）　１点出土。軒丸瓦８A型式の瓦笵を利用したもの。ただし、瓦当は軒丸瓦８A型式の1.5倍ほど厚い。瓦当面に離れ砂が付着する。丸瓦接合後、瓦当下半部縁に沿って幅2.2㎝前後の粘土紐を二段積み上げ、土堤を設けている。瓦当裏面はユビナデ調整。丸瓦の法量、調整等も軒丸瓦８A型式とほぼ共通する。瓦当下半部の瓦当厚は5.8㎝。色調は灰色で、焼成はやや軟質で、胎土は石英、長石、雲母、褐色粒子を含み、石英と長石が多い。SD4755出土。

隅軒平瓦（Fig.87-21，Ph.60）　１点出土。軒平瓦８型式を加工したもの。瓦当左側の唐草文４葉目途中から、全体の二分の一ほどを斜めに切り落とす。斜めに切り落とした端部に沿って、径1.2㎝の釘穴を２箇所に開ける。凹面から凸面への焼成前穿孔。端部からは2.0㎝離し、両穴の間隔は13.5㎝である。凸面には「＃」の刻線がある。全体の調整は、同型式の軒平瓦と同様。瓦当幅22.3㎝、長さ24.5㎝。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含み、石英と長石が多い。SK5015出土。

刻印瓦（Fig.87-22，Ph.60）　１点出土。丸瓦玉縁部とみられる部分の凸面に、16弁の菊花文の刻印を押捺している。菊花文は径3.3㎝前後。平瓦は凹凸面、端面ともに丁寧にナデ調整する。端面はやや丸みを帯び、角が明瞭でない。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を少量含む。SK5015出土。

不明道具瓦（Fig.87-23，Ph.60）　１点出土。Ｌ字形に屈曲し、三面を残す。上面は平坦で、木目の目立つ工具でナデ調整。側縁は面取りする。側面はやや外傾し、ヨコ方向にナデ調整。色調は暗青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母、橙色粒子を少量含む。NP25地区の耕作溝出土。

以上の道具瓦のうち、熨斗瓦、不明道具瓦については包含層出土の破片資料であるため、時期を絞り込むことが難しい。それ以外のものは、軒丸瓦８A型式や軒平瓦８型式が多く出土した遺構からまとまって出土しており、同じく14世紀中頃～後半の所産である可能性が高い。

C　丸瓦・平瓦

今回の調査区内で出土した丸瓦は総重量966.1㎏、破片数3860点で、平瓦は総重量3083.9㎏、破片数22993点におよぶ。それらは７世紀から室町時代までの多様な遺構から出土し、大多数が完形品の二分の一にもならない破片資料である。このような瓦群がどのようなものか理解するにあたり、まず、７世紀代を中心とし奈良時代におよぶ古代の遺構出土資料と、中世の遺構出土資料に分けて整理を行いたい。

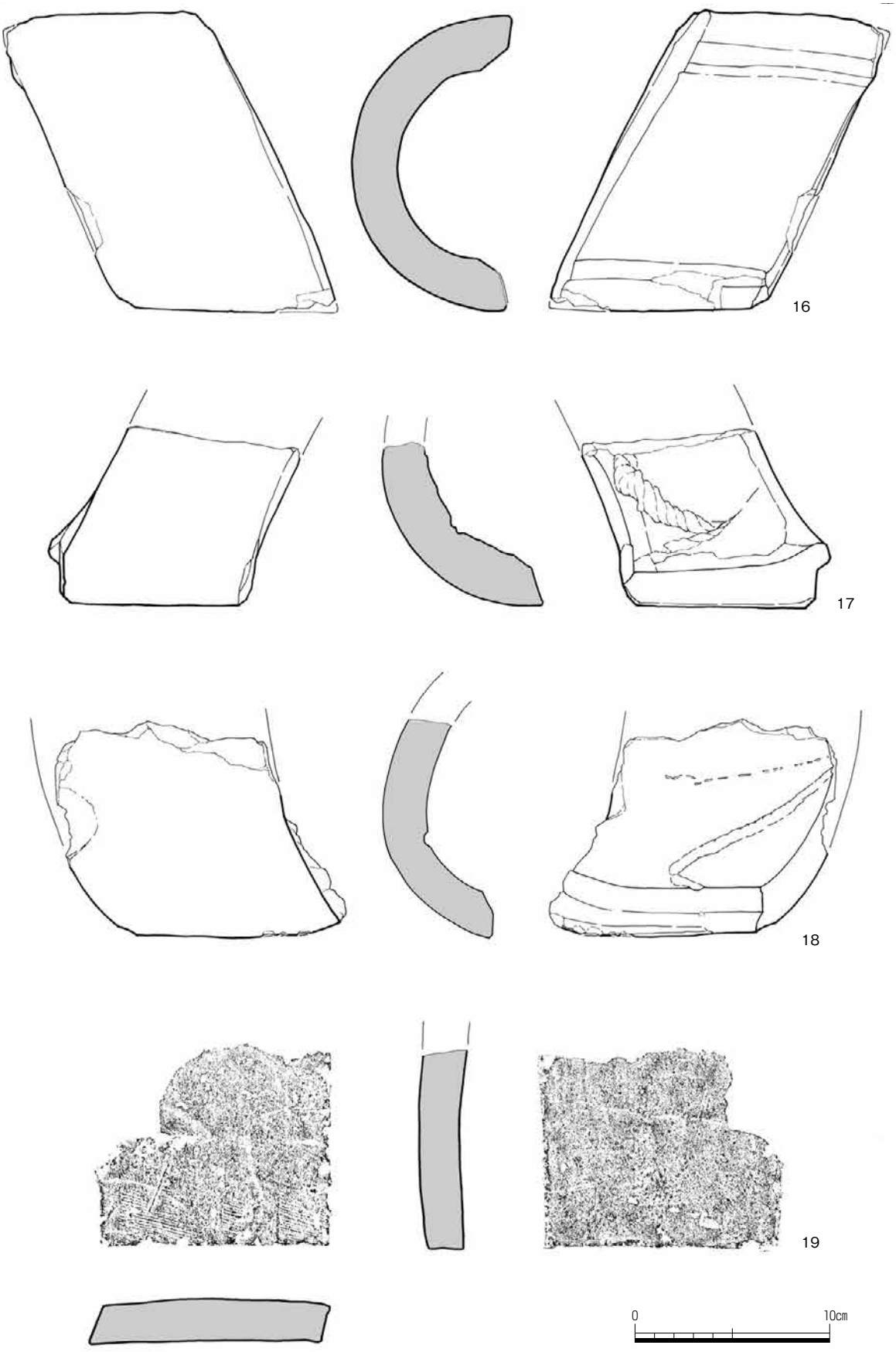


Fig. 86　中世面戸瓦・熨斗瓦　1:3

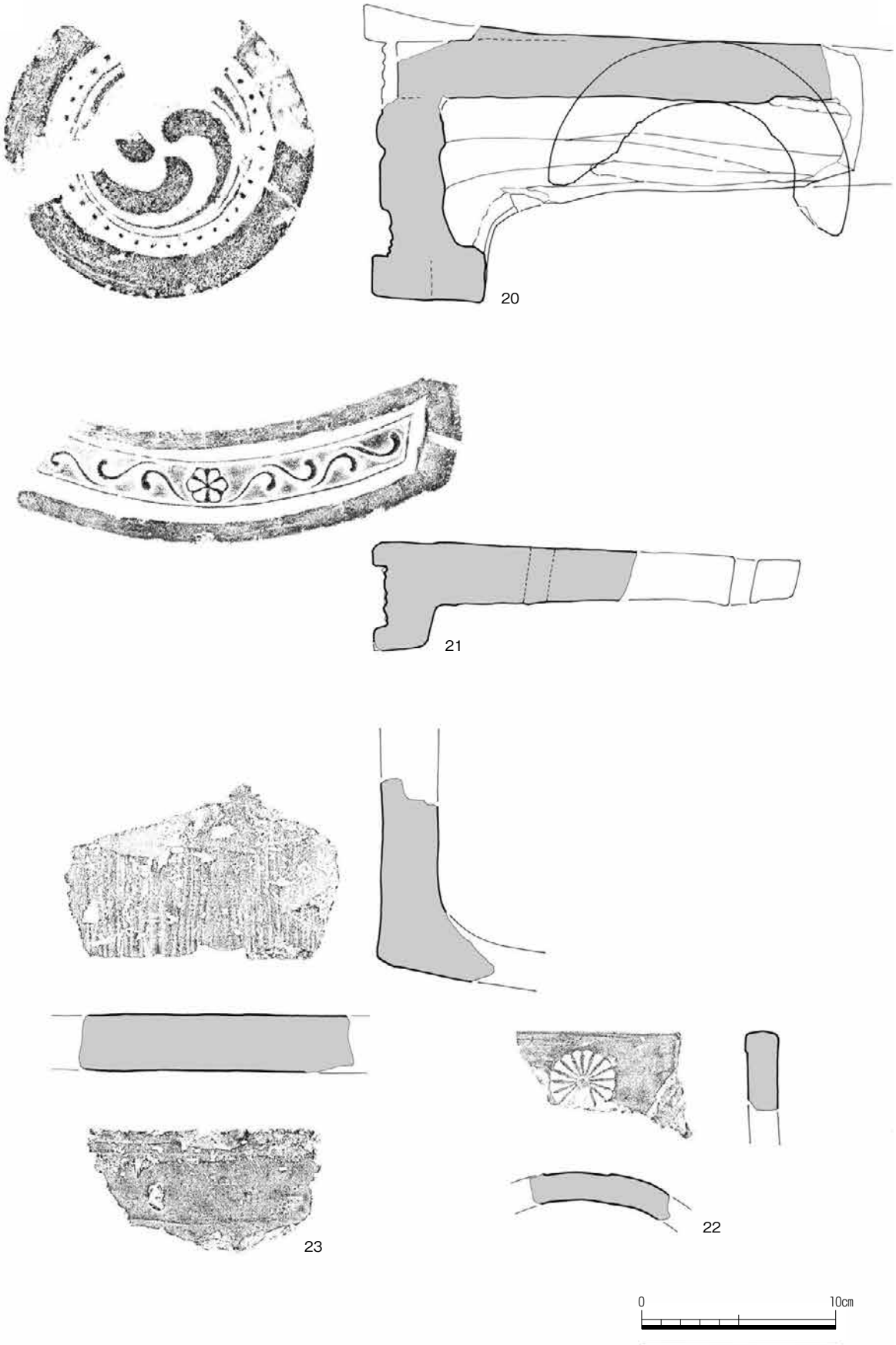


Fig. 87　中世隅軒瓦・刻印瓦・不明道具瓦　1:3

i　古代の遺構出土丸瓦・平瓦

古代の瓦は、東西大溝SD4130、六条条間路北側溝SD4139、SE4740、SK4160・4270・4267・4325、SD4255で比較的まとまって出土した。基本的に、これらの遺構から出土した丸瓦・平瓦について分類し、各分類のうち残存状況の良い資料を抽出して詳細を述べる。

a　丸　瓦

玉縁式に限られる[16]。粘土成形方法と凸面調整に着目して、以下のように分類する。

粘土板巻き付け作り丸瓦

Ⅰ類：叩き目の調整が不完全で一部残るもの

Ⅱ類：叩き目をほぼ完全に調整するもの（叩き目の観察が困難な資料）

粘土紐巻き付け作り丸瓦

Ⅲ類：叩き目の調整が不完全で一部残るもの

Ⅳ類：叩き目をほぼ完全に調整するもの（叩き目の観察が困難な資料）

粘土板巻き付け作り丸瓦　粘土板を模骨に巻き付けて成形した後、分割する一群。凹面に糸切り痕跡や粘土板合わせ目痕跡を残す。

丸瓦Ⅰ類　本調査区で出土した丸瓦のうち、確認できたのはB：斜格子叩き目、C：平行叩き目、D：縦位縄叩き目である[17]。B・Cともに資料数は非常に少ない。Dについては、古代の遺構から出土した丸瓦のうち、縦位縄叩きを残す資料が少なく（SD4130とSE4740にほぼ限られ、そのなかでも総重量の13％程度。）、かつ小片資料が多いため、粘土板巻き付け作りであるかどうかの判別が非常に難しい。

B：斜格子叩き目（Fig.88-1，Ph.61）　斜めに交差する格子目状の刻線を入れた叩き板を使ったもの。1種類ある。

B1は0.2㎝幅の刻線が約75°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は0.7㎝前後。刻線と木目との関係は不明瞭。1は広端部。凸面を横方向にナデ調整し、叩き目をほとんど消している。側面調整は浅い分割截面と破面をそのまま残し、凹面側を面取りするa1手法。凹面は広端部付近をヨコ方向にナデ調整する以外は未調整で、布目痕跡を残す。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母を含み、長石が多い。厚さ1.7㎝。NI37地区のSD4130中層出土。

C：平行叩き目（Fig.88-2，Ph.61）　平行する刻線を入れた叩き板を使ったもの。1種類。

C1は0.2㎝前後幅の刻線を刻んだ叩き板。密度7本/2㎝で、凹部幅は0.1～0.2㎝。2は凸面をタテ方向にナデ調整し、叩き目を部分的にしか残さない。玉縁部はヨコ方向にナデ調整。側面調整は丁寧なケズリを施し、面取りは行わないc0手法。凹面は段部を軽くナデ調整する以外は未調整で、糸切り、布目の各痕跡を残す。段部の屈曲が明瞭で、幅1㎝ほどの平坦面をもつ。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含み、石英と長石が非常に多い。筒部厚さ1.8㎝。玉縁厚さ1.5㎝。SD4255出土。

D：縦位縄叩き目（Fig.88・89-3・4，Ph.61）　縄を長軸方向に巻きつけた叩き板を使ったもの。2種類ある。

D1は5粒/3㎝の縄を、8本前後/2㎝の密度で巻き付けた叩き板。3は非常に小型の丸瓦。凸

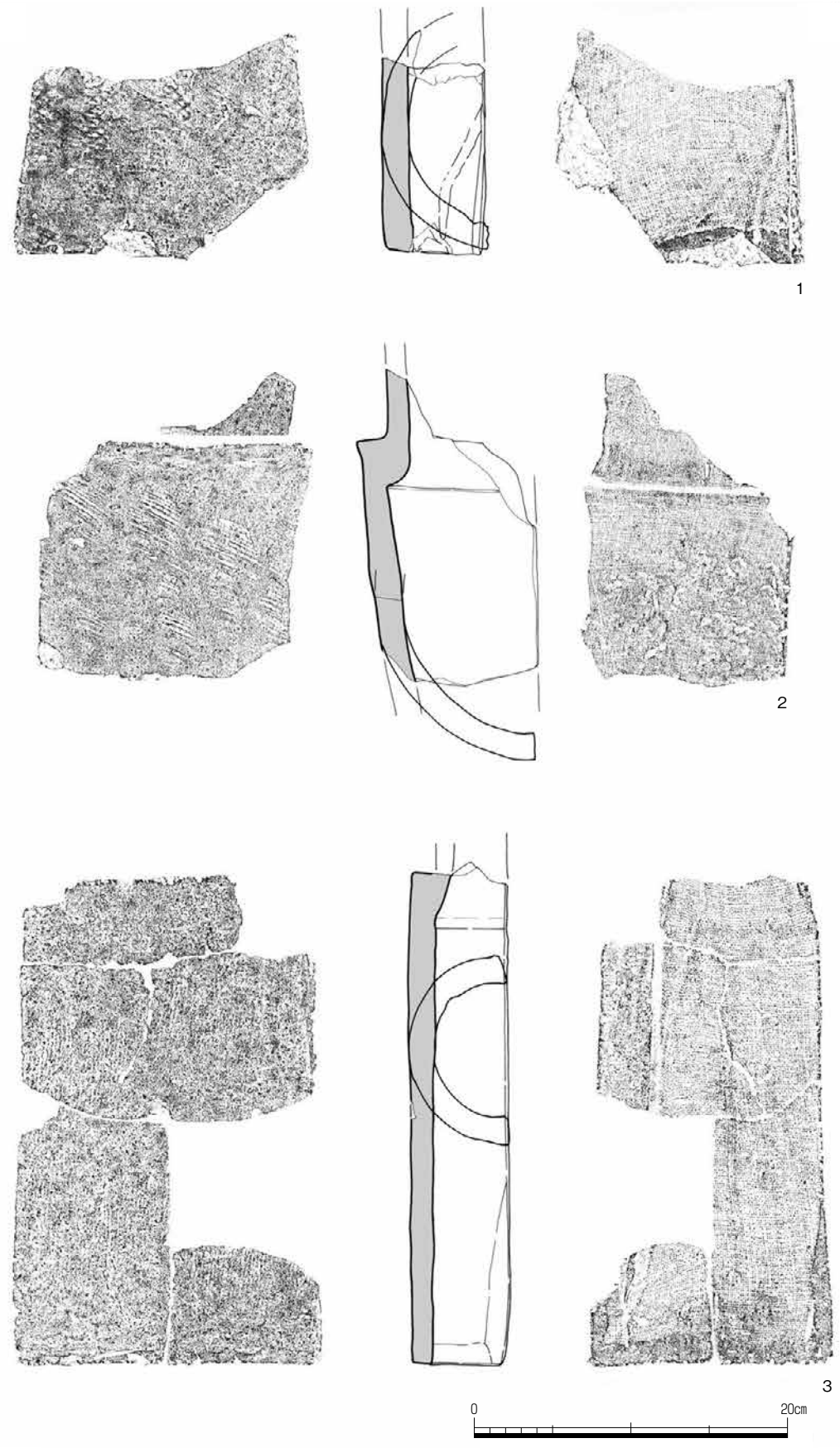


Fig. 88　丸瓦Ⅰ類B1～D1　1:4

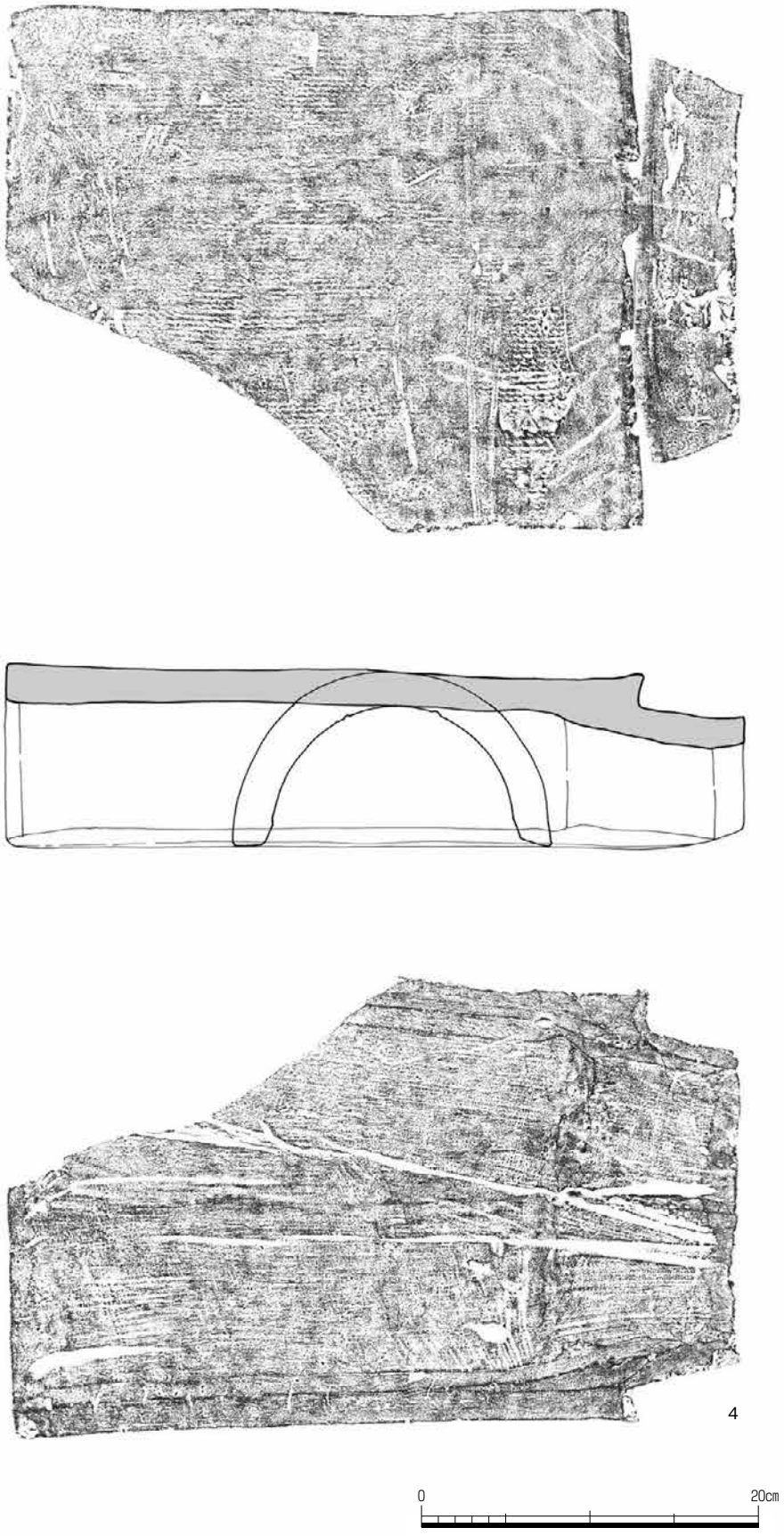


Fig. 89　丸瓦Ⅰ類D2　1:4

面をナデ調整し、叩き目はごくわずかにしか残らない。側面調整は大部分がc0手法だが、広端部寄り10cmほどの範囲はc1手法、段部寄り7cmほどの範囲はa0手法。凹面は広端部以外はほぼ未調整で、布目痕跡を残す。一方の側縁より内側3.0cmの位置に、幅0.7cm、深さ0.4cm前後の凹線が走り、その部分より側縁側には布目がみられない。模骨にかぶせたのが布筒ではなく、一枚布であった可能性がある。段部は屈曲が弱く、玉縁がほぼ直線的に伸びる。色調は暗灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。筒部長31.0cm、筒部広端幅13.5cm、筒部厚さ1.7cm。玉縁厚さ1.0cm。NH31地区のSD4130中層出土。

D2は5粒/3cmの縄を、6本前後/2cmの密度で巻きつけた叩き板。4は凸面下半はタテ方向、上半は主としてヨコ方向にナデ調整するが、叩き目をよく残す。凸面段部は、指でつまみ出して段を明瞭にする。玉縁凸面はヨコ方向にナデ調整。側面調整はc1手法。凹面は、広端部と玉縁端部をヨコ方向にナデ調整する以外はほぼ未調整。段部の屈曲は弱く、玉縁がほぼ直線的に伸びる。色調は灰白色で、焼成は硬質。石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。全長44.0cm、筒部長37.5cm、筒部厚さ2.4cm。玉縁厚さ1.6～2.0cm。FG98地区のSD4130上層出土。

丸瓦Ⅱ類　本調査区で出土した丸瓦の大部分が、この分類にあたる。玉縁に着目すると、側面調整、長さ、段部の屈曲などに多様性がある。なかでも、型の違いを反映する段部の屈曲に基づいて分類を試みる。屈曲が強いものから弱いものまで4種類ある（Fig. 90、1目盛は0.5cm）。

段部ア（Fig. 91-5・6，Ph. 61）　段部が明瞭でほぼ直角に近く、幅約1cmの平坦面をもつ。

5は広端部にかけて歪んでいる。筒部凸面をタテ方向、玉縁凸面をヨコ方向にナデ調整する。筒部側面調整、玉縁側面調整はc1手法。凹面は部分的にナデ調整するが、大部分は未調整。糸切り、粘土板合わせ目（S）、布綴じ合わせ目、布目の各痕跡を残す。筒部の粘土板合わせ目と布綴じ合わせ目は、上からナデつける。布綴じ合わせ目は玉縁と筒部で連続するが、段部付近から筒部にかけて、二股に分かれている。布を玉縁部のみ一周させて綴じ合わせ、筒部には三角形の隙間に別の布を縫い合わせたと考えられる。綴じ合わせ目の一方には、さらに襞をとって縫い合わせている。広端部凹面はヨコ方向にケズリ調整。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。全長54.4cm、筒部長46.4cm、筒部厚さ1.8cm、段部幅19.2cm、玉縁長8.0～8.2cm、玉縁厚さ1.7cm。SK4270出土。

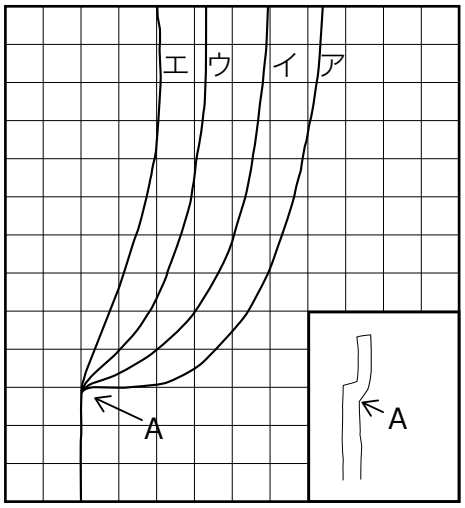


Fig. 90　**丸瓦Ⅱ類段部の屈曲4種**（A：屈曲点）

6は筒部凸面を丁寧にナデ調整するが、ごくかすかに平行叩き目、もしくは木目の目立つ無文叩き目を認めることができる。玉縁凸面はヨコ方向にナデ調整する。筒部側面調整、玉縁側面調整はc1手法。凹面は未調整で、糸切り、粘土板合わせ目（Z）、布綴じ合わせ目、布目の各痕跡を残す。段部には凹型台のアタリが残る。色調は暗青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母を含む。筒部残存長17.8cm、筒部厚さ1.8～2.1cm、玉縁長6.7～7.8cm、玉縁厚さ1.6～1.8cm。SK4325出土。

これらの他、段部アには焼成が軟質のものも

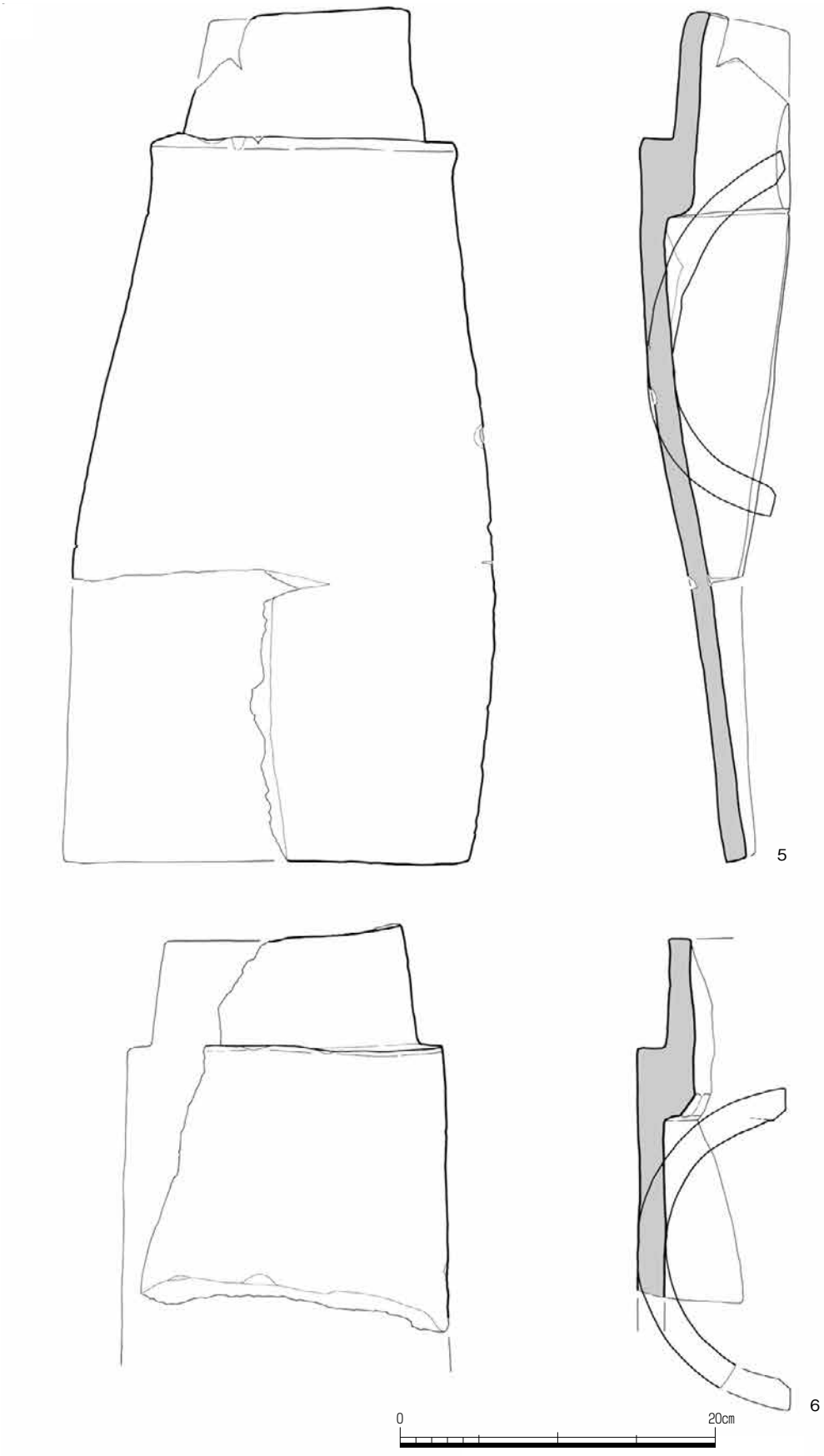


Fig. 91　丸瓦Ⅱ類段部ア　1:4

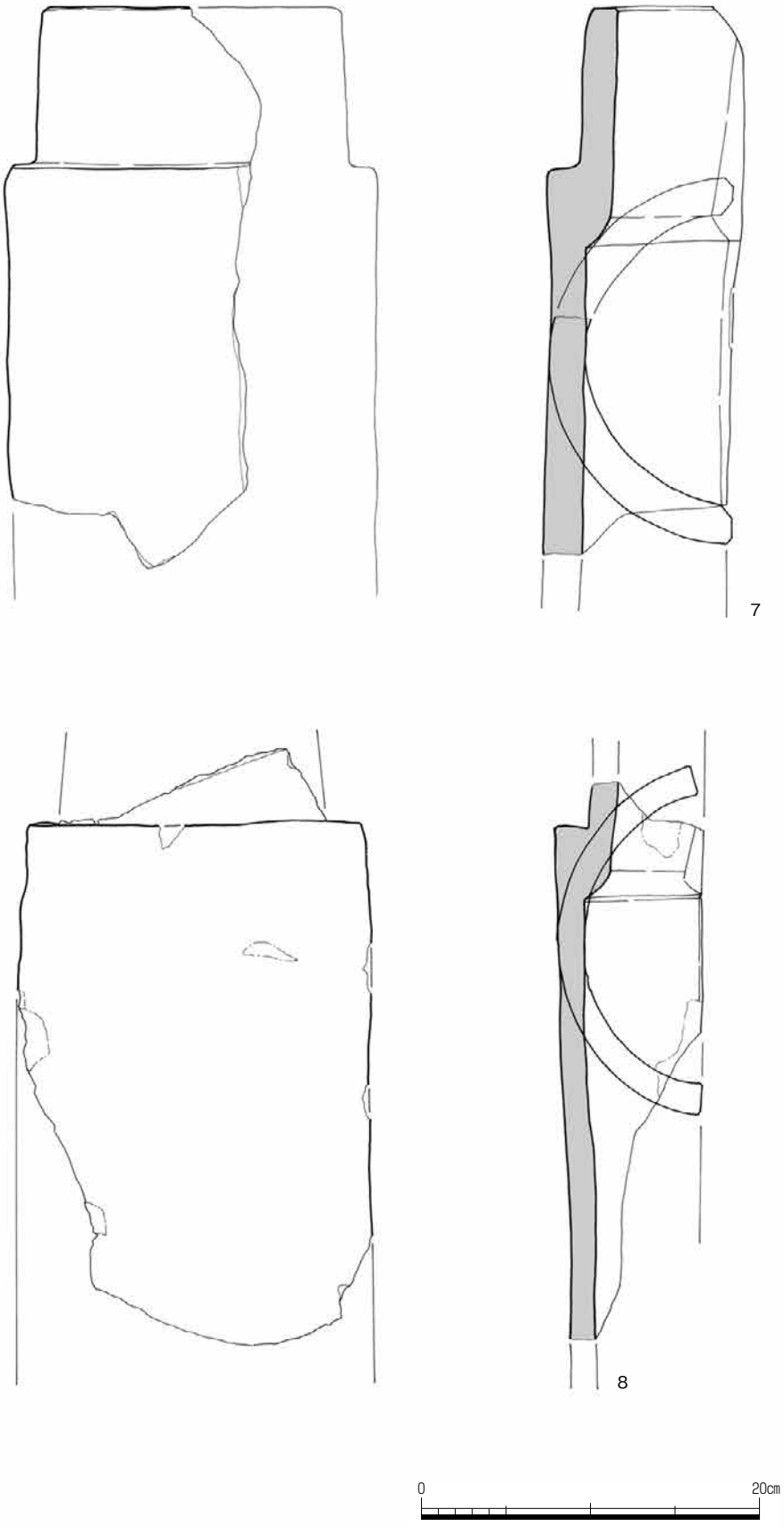


Fig. 92　丸瓦Ⅱ類段部イ　1:4

存在する。磨滅が著しく残存状況が良好でないため、データのみを記す。1点は、筒部厚さ1.8cm、段部幅19.4cm、玉縁長10.0cm、玉縁厚さ2.2cm。SK4325出土。もう1点は、筒部厚さ1.7cm、段部幅20.4cm、玉縁長7.8～8.2cm、玉縁厚1.7cm。SK4160出土。

段部イ（Fig.92-7・8，Ph.62）　段部は明瞭であるが、平坦面が少なく筒部と玉縁段部寄りが鈍角をなす。

7は筒部凸面をタテ方向に、玉縁凸面をヨコ方向にナデ調整する。筒部側面調整はc3手法、玉縁側面調整はc1手法。筒部凹面は磨滅が著しいために調整はわかりにくいが、布目はほぼ残らないため、ナデ調整であろう。玉縁凹面は、布綴じ合わせ目と布目の各痕跡を残す。色調は

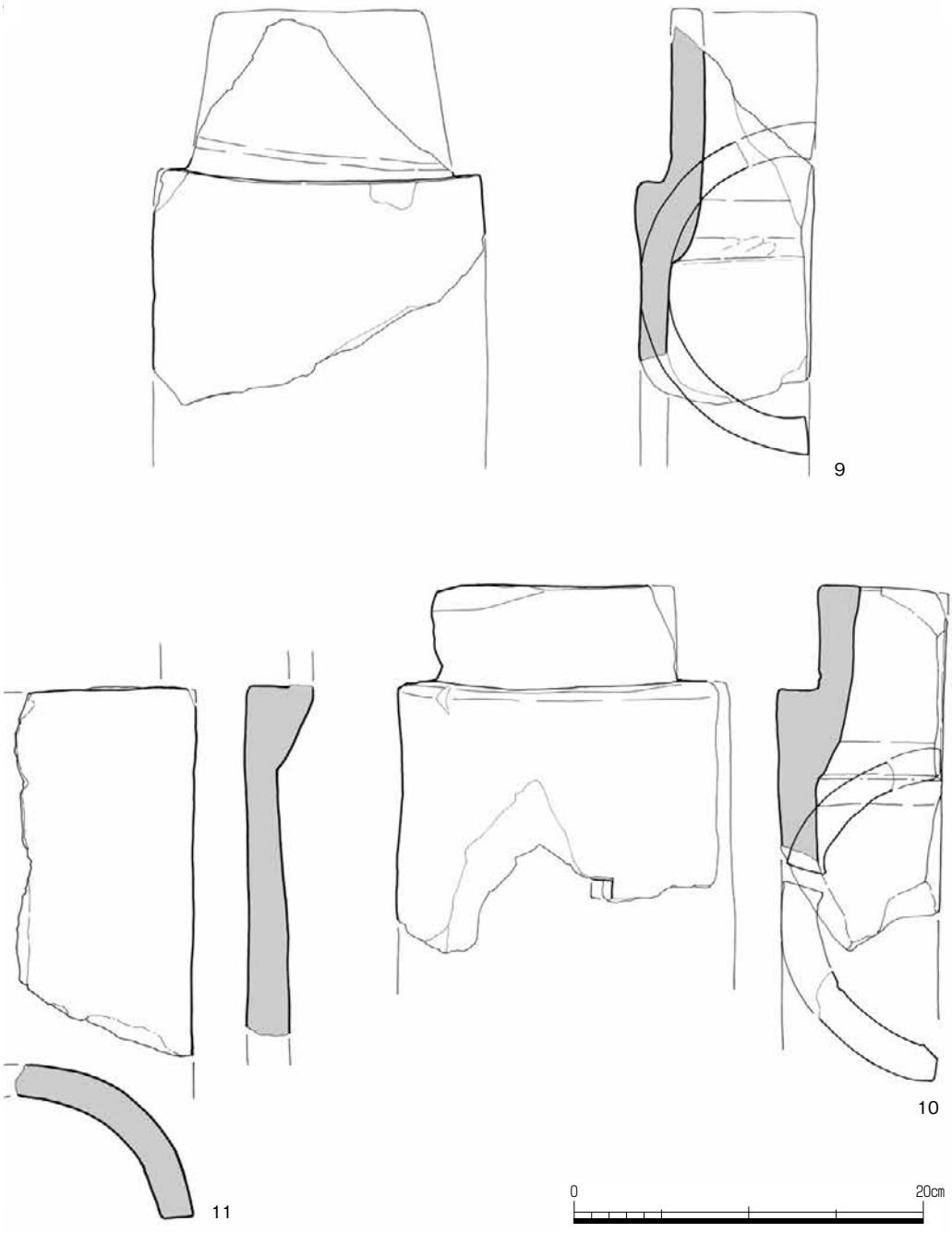


Fig. 93　丸瓦Ⅱ類段部ウ　1:4

灰黄色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。筒部残存長23.4cm、筒部厚さ2.3～2.7cm、玉縁長9.3cm、玉縁厚さ2.1cm。SK4160出土。

8は筒部凸面を丁寧にナデ調整する。玉縁はわずかにしか残らないが、凸面をヨコ方向にナデ調整する。筒部側面調整はc0手法だが、広端部寄りはc1手法。筒部凹面はタテ方向にナデ調整するが、糸切り、布目の各痕跡を部分的に残す。玉縁凹面は未調整。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、褐色粒子を含む。筒部残存長30.0cm、筒部厚さ1.7cm、段部幅20.2cm、玉縁長8.0～8.2cm、玉縁厚さ1.6cm。SK4160出土。

段部ウ（Fig. 93-9～11，Ph. 62）　段部の屈曲が弱く、玉縁が曲線的に伸びる。

9は筒部凸面を丁寧にナデ調整する。玉縁は一部分しか残らないが、ヨコ方向にナデ調整する。側面調整はc0手法。筒部凹面はナデ調整し、布目痕跡は部分的にしか残らない。玉縁凹面は軽くナデ調整する。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。筒部残存長13.5cm、筒部厚さ1.8cm、玉縁長9.2cm以上、玉縁厚さ1.9cm。NI37地区のSD4130中層出土。

10は段部から11.7cmの位置に方形の釘孔をもつ資料。凸面から凹面に向けての、焼成前穿孔である。筒部凸面、玉縁凸面ともにヨコ方向のナデ調整をする。側面調整はc1手法だが、筒部の凸面側にわずかに面取りをもつ部分がある。凹面はほぼ未調整で、粘土板合わせ目（S）、布目の各痕跡を残す。色調は暗青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石を含む。筒部残存長15.0cm、筒部厚さ1.8～2.1cm、玉縁長5.5～5.9cm、玉縁厚さ1.8～2.1cm。SD4256出土。

11は磨滅が著しく、調整等の観察がやや困難である。筒部凸面はナデ調整する。筒部側面調整はc1手法。筒部凹面は部分的にタテ方向のナデ調整をするが、布目痕跡を部分的に残す。玉縁凹面は段部を部分的にナデつけるが、ほぼ未調整。色調はにぶい黄橙色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。筒部残存長20.8cm、筒部厚さ1.8～2.4cm。SD4255出土。

段部エ（Fig. 94-12・13，Ph. 62）　段部の屈曲が弱く、玉縁が直線的に伸びるもの。

12は筒部凸面をタテ方向、玉縁凸面をヨコ方向にナデ調整する。筒部側面調整はc3手法で、凹面側の面取りが幅広い。玉縁側面調整はc1手法。凹面は磨滅するものの、ほぼ未調整で、粘土板合わせ目（S）、糸切り、布綴じ合わせ目、布目の各痕跡を残す。粘土板合わせ目は軽くナデつける。布綴じ合わせ目は、玉縁と筒部で連続する。玉縁凹面端部には面取りを施す。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、褐色粒子を含む。筒部残存長34.8cm、筒部厚さ2.4～3.0cm、段部幅21.0cm、玉縁長7.5～7.8cm、玉縁厚さ2.6cm。SK4267出土。

13は凸面を丁寧にナデ調整するが、ごくかすかに平行叩き目、もしくは木目の目立つ無文叩き目を認めることができる。筒部側面調整はc1手法だが、c3手法の部分もある。凹面側の面取りが幅広い。筒部凹面はタテ方向に軽くナデ調整するが、糸切り、布目の各痕跡を残す。玉縁凹面はほぼ未調整。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英や長石を含む。筒部長44.4cm、筒部厚さ2.0～2.4cm、段部幅19.6cm。SK4325出土。

以上の分類に基づき、丸瓦Ⅱ類のうち、段部を残す資料の出土数が比較的多い遺構についてみてみると、SD4255では段部ア・イ・ウ、SK4160では段部イ・ウ、SK4325では段部ア・イが

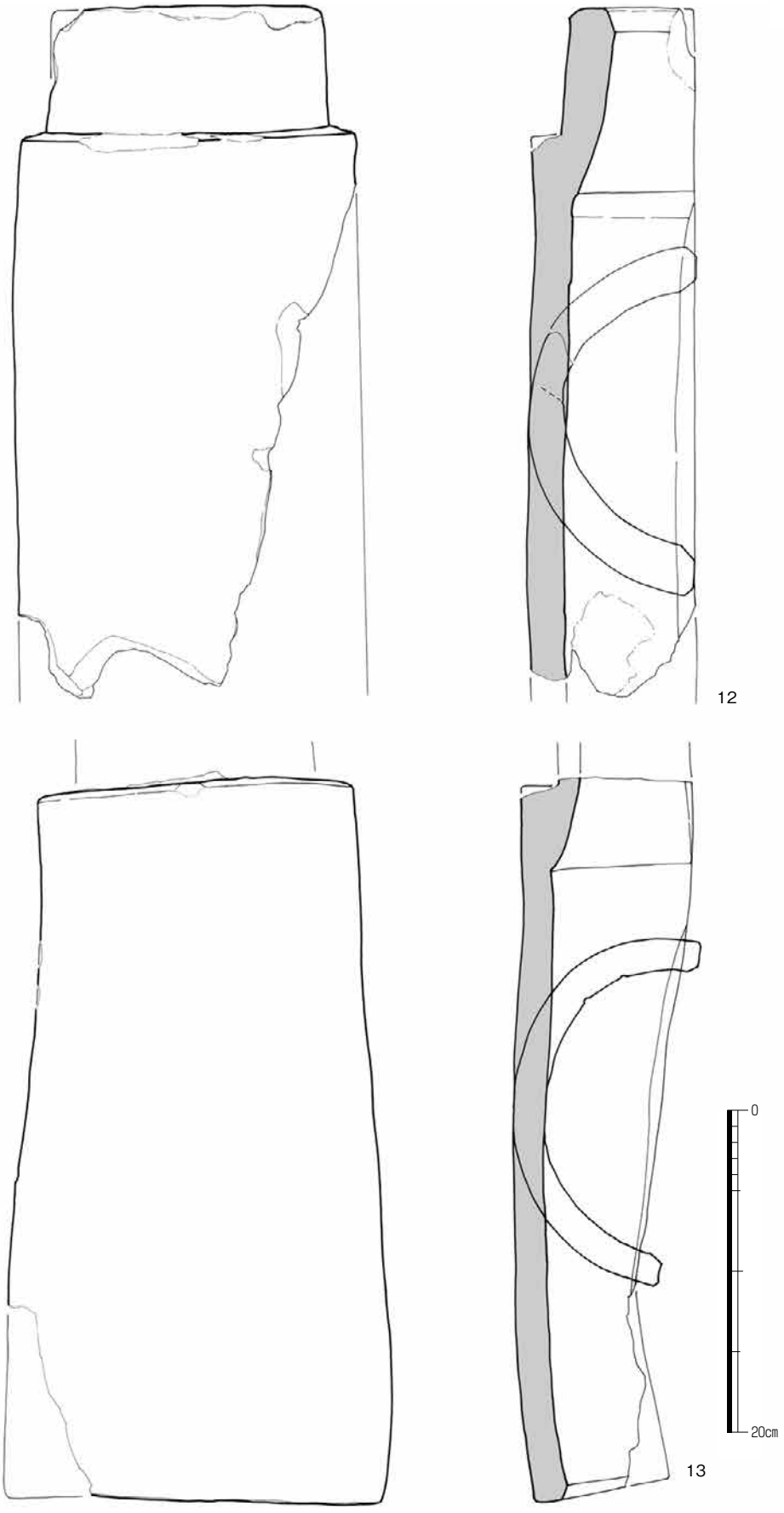


Fig. 94　丸瓦Ⅱ類段部エ　1:4

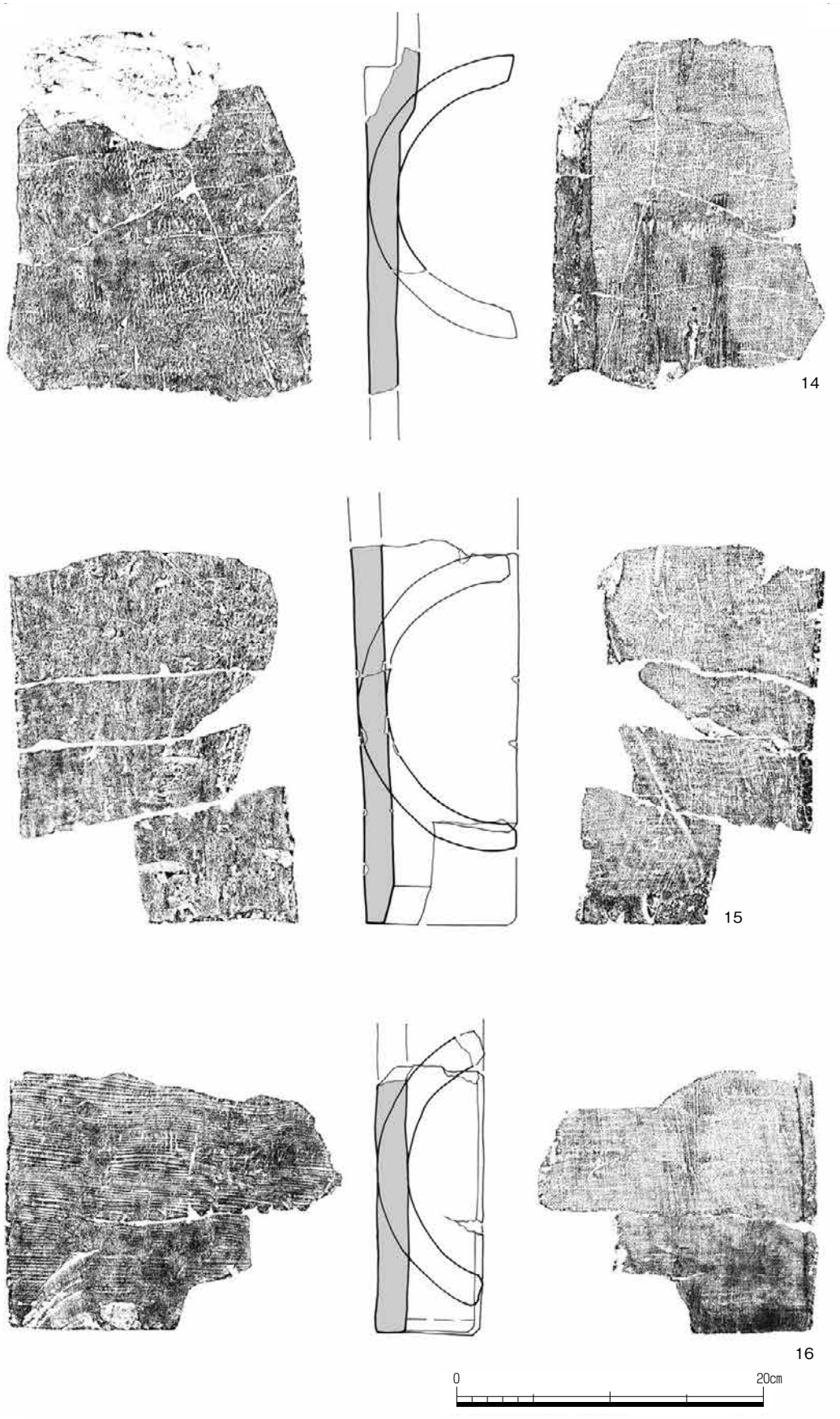


Fig. 95　丸瓦Ⅲ類D　1:4

主体をなす。そして、SD4130では段部アからエまでの多様な段部をもつ丸瓦が出土したが、他の遺構に比べてエの割合が多い。

粘土紐巻き付け作り丸瓦　粘土紐を模骨に巻き付けて成形した後、分割する一群。凹面や破面に粘土紐の単位を認めることができる。

丸瓦Ⅲ類　確認できたのは、D：縦位縄叩き目のみである。ナデ調整等によって明瞭ではないため、縄目に基づくさらなる細分は難しい。比較的残存状況の良好な資料を提示する。

D：縦位縄叩き目（Fig.95-14～16，Ph.63）　14は凸面をヨコ方向にナデ調整し、叩き目がごくわずかにしか残らない。側面調整はc1手法。凹面はほぼ未調整で、粘土紐の単位と布目痕跡を残す。粘土紐の幅は3.0～4.0cm。段部の屈曲は弱く、玉縁が直線的に伸びる。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。筒部厚さ2.1cm。NI31地区のSD4130中層出土。

15は広端部で、粘土紐の単位で破損する。凸面はナデ調整し、叩き目がごくわずかにしか残らない。側面調整はc1手法。凹面は広端部付近以外未調整で、布目痕跡を残す。広端部付近はヨコ方向にナデ。粘土紐の幅は4cm前後。色調は暗灰黄色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。筒部厚さ1.9cm。NI26地区のSD4130中層出土。

16は凸面をカキ目調整し、叩き目をほとんど消し去ってしまう。側面調整はc1手法。凹面は磨滅するが未調整と判断され、粘土紐の単位、布目痕跡を残す。粘土紐の幅は3.5cm前後。色調は浅黄橙色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。筒部厚さ2.1cm。NI28地区のSD4130上層出土。同一層から同様にカキ目調整した破片が数点出土しているが、玉縁部を残すものをみると、段部は屈曲が弱く、玉縁が直線的に伸びるという特徴をもつ。

丸瓦Ⅳ類　粘土紐の単位で破損した資料が、SD4130を中心に数点出土している。細長く、断面が傾斜している特徴をもつ。いずれも小片であるため、Ⅰ類のうち、叩き目をわずかにしか残さない資料との厳密な区別が難しい。良好な資料がないため、図示はしない。

b　平　瓦

平瓦は、粘土成形方法と凸面調整に着目して、以下のように分類する。

桶外巻き作り平瓦（粘土板桶巻き作り・粘土紐桶巻き作り）

Ⅰ類：凸面の叩き目未調整、もしくは調整が不完全で一部残るもの

Ⅱ類：凸面の叩き目をほぼ完全に調整するもの（叩き目の観察が困難な資料）

桶内巻き作り平瓦（粘土板桶巻き作り）

Ⅲ類：凸面の叩き目未調整、もしくは調整が不完全で一部残るもの

桶外巻き作り平瓦　粘土板もしくは粘土紐を桶の外側に巻き付けて成形した後、分割する一群。小片資料や凹面の調整が丁寧に施される資料の場合、粘土板と粘土紐の確実な識別が難しいため、まずは一括した。凸面の調整を残すⅠ類には、A：正格子叩き目、B：斜格子叩き目、C：平行叩き目、D：縦位縄叩き目、E：無文叩き目をもつものが確認できる。A・B・Cの叩き目をもつ平瓦には粘土板、Dの叩き目をもつ平瓦には粘土板と粘土紐の両方が存在したと推測される。具体的には各分類の項で述べる。

平瓦Ⅰ類

A：正格子叩き目[18]（Fig.96-1～4，Ph.64・70）　ほぼ直角に交わる格子目状に刻線を入れた叩き板を使ったもの。4種類ある。

A1は木目に平行・直交する0.2cm幅の刻線が交差する叩き板。刻線の間隔[19]は木目平行線が0.6cm、木目直交線が0.7cm前後。1は凹面をナデ調整し、桶枠板、布目の各痕跡はかすかにしか残らない。端部から約8cmと10cm内側に、端部に平行する3cm前後の凹線が1条ずつ走り、桶綴じ紐痕跡の可能性がある。色調はにぶい黄色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。厚さ1.3cm。SD4139出土。

A2は0.15cm幅と0.3cm幅の刻線が交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は前者が0.5cm、後者が0.7cm前後。2は広端部で、広範囲に斜格子叩き目B11と重複する。広端部付近は軽くヨコ方向にナデ調整。側面調整はc手法で、面取りは凹面が幅広く、凸面はわずかである。凹面はタテ方向にナデ調整するが、糸切り、布目、布端の各痕跡を残す。色調は黄灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.8cm。HI27地区の包含層出土。

A3は木目に平行・直交する0.15cm幅の刻線が交差する叩き板。刻線の間隔は、木目平行線が0.7cm、木目直交線が0.8cm前後。3は凹面未調整で、桶枠板、布目の各痕跡を残す。枠板幅は3.5cm。端部凹面側を面取り。色調はにぶい褐色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ2.0cm。HI24区周辺の大土坑SK4501出土。

A4は木目に平行・直交する0.3cm幅の刻線が交差する叩き板。刻線の間隔は、木目平行線が0.9cm、木目直交線が0.7cm前後。4は叩き目の大部分がつぶれる。凹面は軽くナデ調整するが、糸切り、布目、布縫い目の各痕跡を残す。色調は灰白色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。厚さ1.5cm。NI31地区のSD4130中層出土。

B：斜格子叩き目（Fig.97～100-5～35，Ph.64・65・70～72）　斜めに交差する格子目状の刻線を入れた叩き板を使ったもの。31種類ある。

B1は0.1～0.15cmと0.15～0.2cm幅の刻線が、約70°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は前者が0.4cm、後者が0.6cm前後。5は側面調整がc1手法。凹面は布目、桶枠板の各痕跡が残る。枠板幅は2.6cm。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.3cm。SD4255出土。

B2は木目に斜交する0.1～0.2cm幅と、同じく斜交する0.2cm幅の刻線が、約70°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は前者が0.4cm、後者が0.6cm前後。6は叩き目が一部つぶれる。凹面は布目痕跡を残す。色調はにぶい黄褐色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.3cm。SK4325出土。

B3は0.1cm幅と0.25cm幅の刻線が、約80°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は前者が0.4cm、後者が0.6cm前後。7は叩き目を一部ナデ調整する。凹面は全体にナデ調整するが、糸切り、布目の各痕跡を残す。端部付近は丁寧にナデ調整をする。色調は灰白色で、焼成は軟質。石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。厚さ1.5cm。SD4255出土。

B4は0.1cm幅と0.3cm幅の刻線が、約75°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は前者が0.3～0.5cm、後者が0.7cm前後。8は凹面を粗くタテ方向にケズリ調整し、布目痕跡

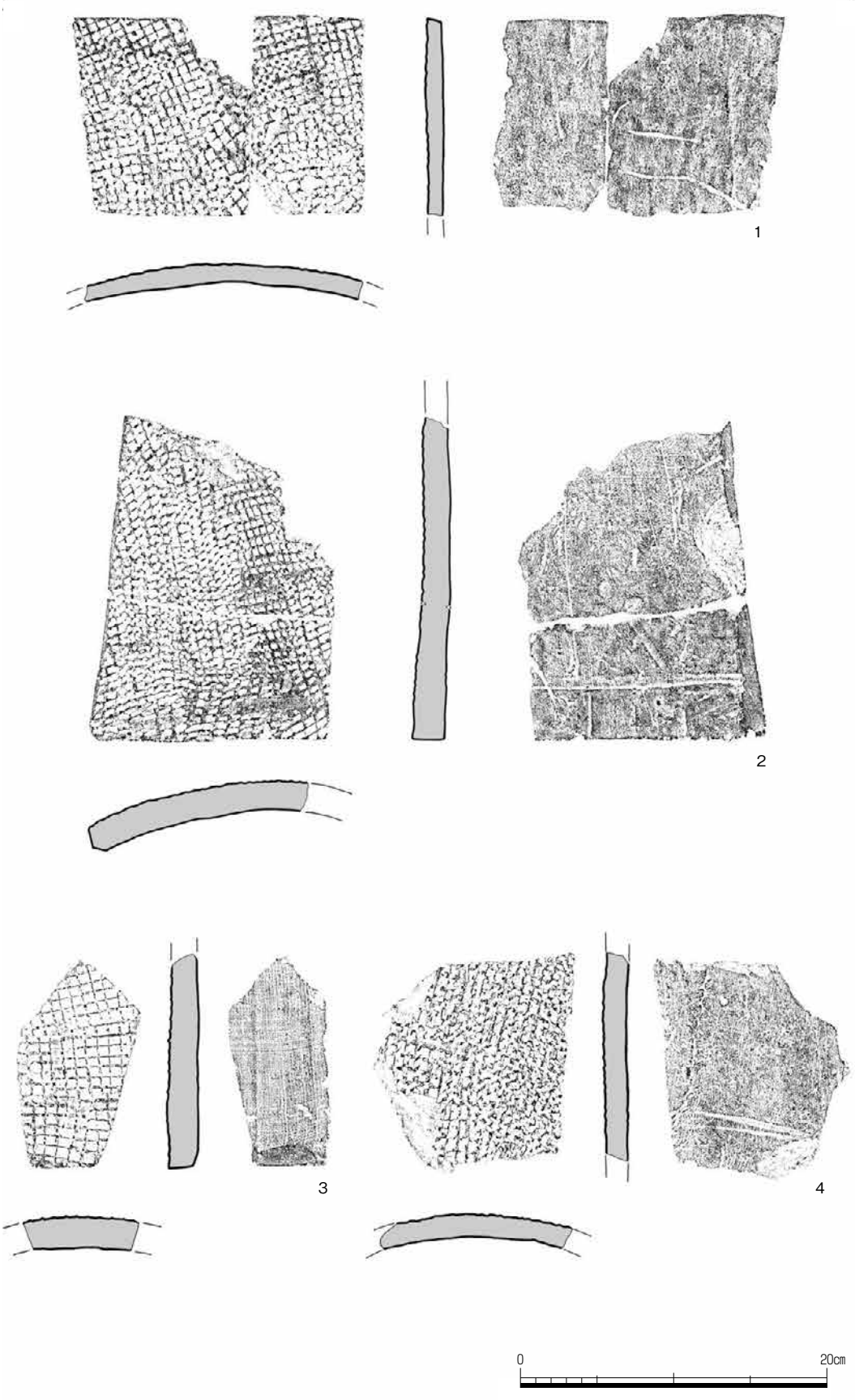


Fig. 96　平瓦Ⅰ類A　1:4

を部分的にしか残さない。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。厚さ1.5㎝。SD4255出土。

B5は0.15㎝幅の刻線、が約60°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔はいずれも0.5㎝前後。9は正格子叩き目A3と重複する。凹面は粗くナデ調整するも、糸切り痕跡と布目痕跡を明瞭に残す。側面調整は軽いヘラケズリを施し、側縁の面取りを行わないb0手法。色調はにぶい黄色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.2㎝。SD4139出土。

B6は木目に平行する0.1㎝幅と、斜交する0.2㎝幅の刻線が、約85°の角度で交差する正格子に近い叩き板。刻線の間隔は木目平行線が0.5㎝、木目斜交線が0.6㎝前後。10は一部、刻線がB6よりも若干間隔の広い叩き目が重複するが、残存する範囲が狭く明瞭でない。側面調整はc1手法。凹面は粗くナデ調整するが、糸切りと布目の各痕跡を残す。側縁から約11㎝内側に、径1.0㎝、深さ0.2㎝の円形の窪みがあり、内部には布目痕跡が残る。破面をみると、粘土板が合わさっていることがわかる（Z）。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。厚さ1.7㎝。SD4255出土。

B7は木目に斜交する0.2～0.25㎝幅の刻線が、約55°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は0.5㎝と0.6㎝前後。11は狭端部。凹面はナデ調整し、糸切り痕跡と布目痕跡をごく一部残す。側面調整はｃ手法で、凹面に面取りのみられる部分とみられない部分がある。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.4㎝。SD4255出土。

B8は木目に斜交する0.1㎝幅の刻線と、同じく斜交する0.15～0.2㎝幅の刻線が、約75°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は前者が0.5㎝、後者が0.6㎝前後。12は叩き目が一部つぶれる。凹面はナデ調整するが、糸切り、桶枠板、布目、布端の各痕跡をわずかに残す。枠板の幅は不明。端部から約10㎝内側に1.0㎝×0.6㎝、深さ0.3㎝の楕円形の窪みがあり、内部に布目痕跡を残す。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.4㎝。SD4139出土。

B9は0.1㎝幅と0.2㎝幅の刻線が、約75°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は前者が0.5㎝、後者が0.6㎝前後。13は狭端部。叩き目が一部つぶれる。端部付近には別種の叩き目がみえるが、明瞭でない。側面調整はc0手法。凹面は一部ナデ調整するが、ほぼ全体に布目痕跡を残す。色調は浅黄色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、褐色粒子を含む。厚さ1.5㎝。NI35地区のSD4130上層出土。

B10は木目に斜交する0.15㎝と0.2㎝幅の刻線が、約80°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は前者が0.8㎝前後、後者が0.5㎝前後。14は広端部。叩き目を部分的にナデ調整する。凹面は桶枠板、糸切り、布目、布端の各痕跡を明瞭に残す。枠板幅は2.1～2.7㎝。側面調整はc1手法。色調は灰白色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.5㎝。SK4325出土。

B11は木目にともに斜交する0.15～0.2㎝幅の刻線が、約75°の角度で交差する叩き板。15は狭端部。狭端付近と側縁付近で明瞭に確認できるが、大部分は斜格子叩き目B6と重複する。狭端部付近はさらにヨコ方向にナデ調整。側面調整はc3手法であるが、凹凸面ともに面取りのみ

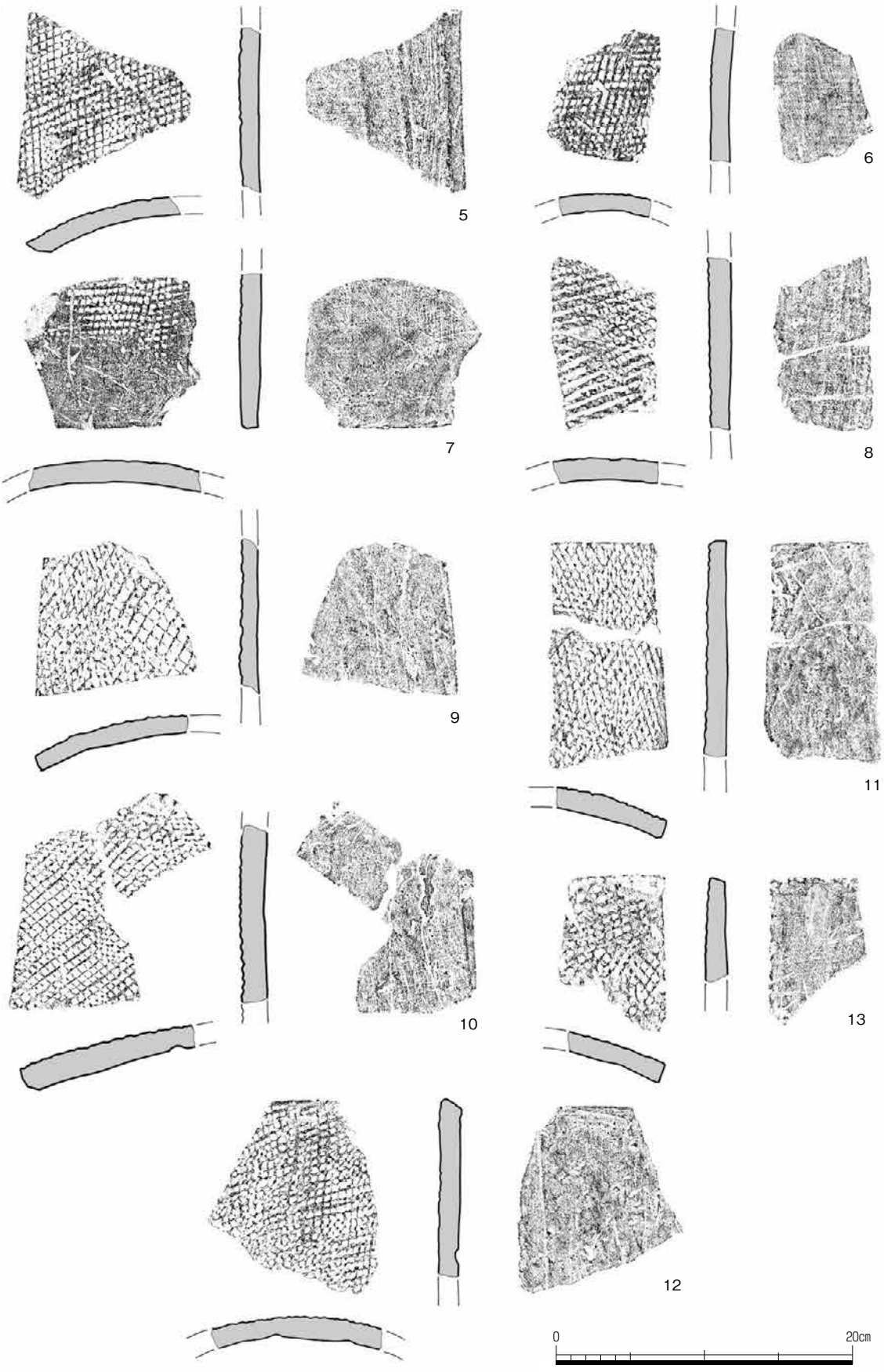


Fig. 97　平瓦Ⅰ類B（1）　1:4

られない部分もある。凹面はケズリ調整するが、糸切り、布目、粘土板合わせ目（Z）の各痕跡を残す。狭端部付近は面取り風にヨコナデ。色調は黄灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、赤色粒子を含む。厚さ1.6㎝。NH33地区のSD4130中層出土。

B12は0.2㎝幅の刻線が、約80°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。明瞭な部分の刻線の間隔はいずれも0.6㎝前後だが、バラつきが大きい。16は狭端部。狭端部付近は叩き目が重複しており、刻線の細いものがかすかにみえるが、異なる叩き板であるかは明瞭でない。側面調整は面取り幅の広いc3手法。凹面はタテ方向に粗くナデ調整し、布目痕跡が部分的に残る。狭端部付近は面取り。色調はオリーブ黒色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.6㎝。NH18地区のSD4130中層出土。

B13は木目に平行・斜交する0.15～0.2㎝幅の刻線が、約75°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔はいずれも0.6㎝前後。17は叩き目が一部つぶれる。側面調整はc0手法で、凹面はタテ方向に粗くケズリ調整し、布目痕跡は部分的にしか残らない。色調は暗灰黄色で、焼成はやや軟質、胎土には石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.3㎝。SD4255出土。

B14は0.15～0.25㎝幅の刻線が約80°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔はいずれも0.6㎝前後。18は凹面をナデ調整し、布目痕跡はわずかにしか残らない。色調は黄灰色で焼成は軟質。石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。厚さ1.7㎝。SD4255出土。

B15は0.15～0.2㎝幅の刻線が、約50°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔はいずれも0.6㎝前後。19は叩き目を一部ナデ調整する。側面調整はc0手法で、凸面と側面が鈍角をなす。凹面はナデ調整するが、布目、桶枠板の各痕跡を残す。枠板の幅は2.0㎝。色調はにぶい黄橙色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.4㎝。SK4325出土。

B16は木目に平行・斜交する0.15～0.2㎝幅の刻線が、約55°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は木目平行線が0.6㎝、木目斜交線が0.7㎝前後。20は凹面は軽くナデ調整するが、糸切り、桶枠板、布目の各痕跡を残す。枠板の幅は2.5㎝。また、布の継ぎ足し痕跡とみられる幅約1㎝の凹線が横断する。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.3㎝。SK4325出土。

B17は木目に平行・斜交する0.15～0.2㎝幅の刻線が、約60°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は木目平行線が0.6㎝、木目斜交線が0.7㎝前後。21は広端部付近をヨコ方向にナデ調整。側面調整はb3手法。凹面は未調整だが、広端部付近のみヨコ方向にナデ調整する。桶枠板痕跡が残り、幅2.8㎝。広端部より約3㎝内側に、端部と平行する幅0.25㎝の凹線が走る。布端痕跡にしては折り返し幅が狭く、紐の圧痕にみえるが性格は不明。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.6㎝。NH22地区のSD4130中層と上層から出土したものが接合した。

B18は木目に平行・直交する0.2㎝幅の刻線が、約70°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔はいずれも0.7㎝前後。22は側面調整がc0手法で、凹面は桶枠板痕跡、布目痕跡が明瞭に残る。枠板幅は2.0㎝。色調はにぶい褐灰色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.9㎝。SK4501出土。

B19は木目にともに斜交する0.2㎝幅の刻線が、約75°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔

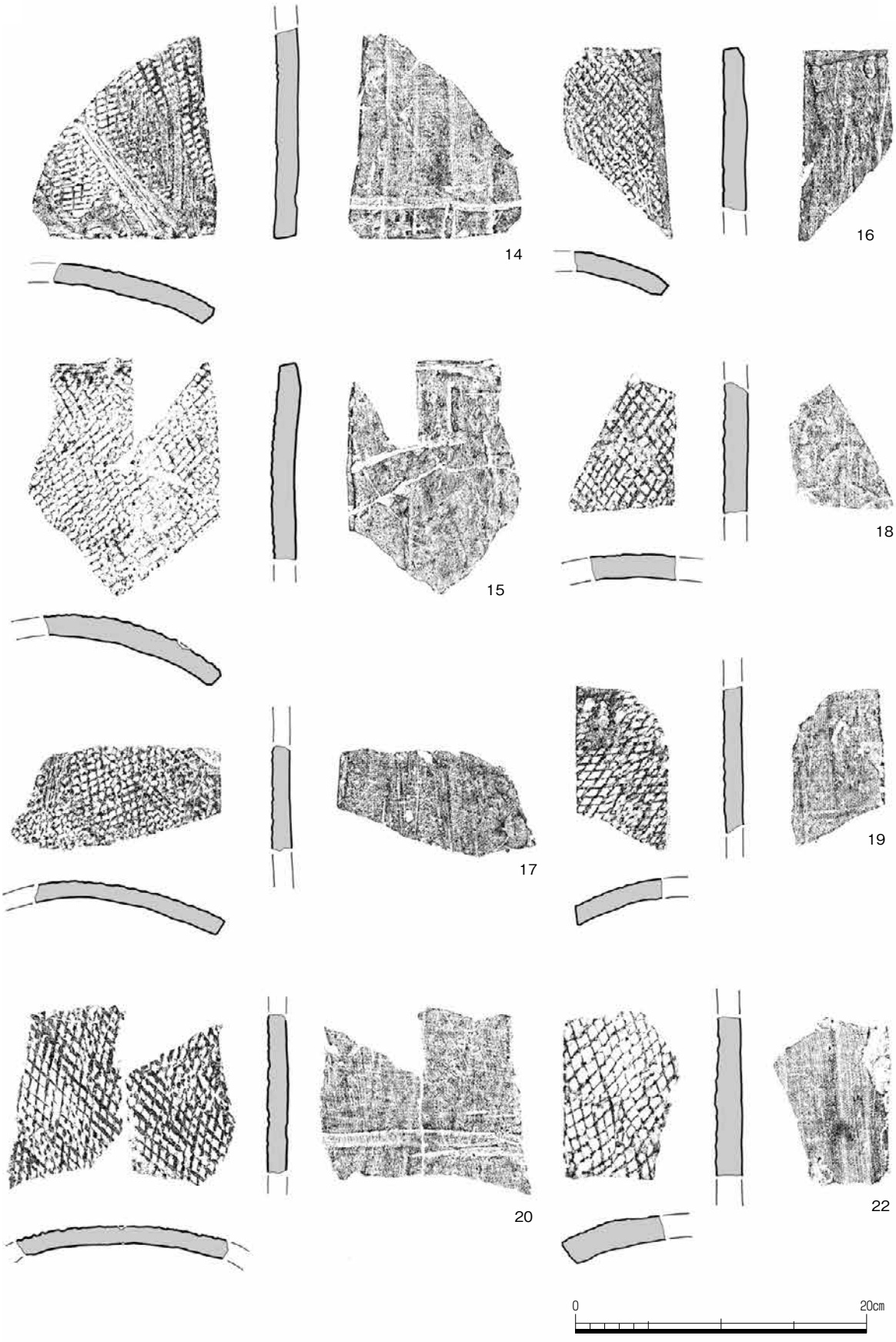


Fig. 98　平瓦Ⅰ類B（2）　1:4

はいずれも0.7㎝前後。23は狭端部。叩き目を一部ナデ調整する。側面調整はc0手法。凹面は粗くナデ調整するが、布目、粘土板合わせ目（Z）の各痕跡を残す。また、爪状工具のアタリがみられる。狭端部付近は面取り風にヨコナデ。色調は灰黄色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.5㎝。NH34地区のSD4130中層出土。

B20は木目に平行・斜交する0.2㎝幅の刻線が、約60°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔はいずれも0.7㎝前後。24は凹面をナデ調整するが、糸切り、布目の各痕跡を残す。色調は灰黄色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.6㎝。NH29地区のSD4130中層出土。

B21は木目に平行・斜交する0.2㎝幅の刻線が、約55°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は0.7㎝前後。25は広端部。斜格子叩き目B6と重複する。側面調整は欠損により不明瞭だが、c手法か。凹面はナデ調整するが、布目と粘土板合わせ目（Z）の各痕跡を部分的に残す。端部付近はヨコ方向にナデ調整。色調は暗青灰色～黄灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.6㎝。NI34地区のSD4130中層出土。

B22は0.3㎝と0.4㎝幅の刻線が、約60°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔はいずれも0.7㎝前後。26は叩き目を軽くナデ調整する。側面調整はc0手法。凹面はタテ方向にケズリ調整する。布目痕跡はほぼ残らない。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石を含む。厚さ1.1㎝。SK4325出土。

B23は木目にともに斜交する0.15㎝幅の刻線が、約80°の角度で交差する叩き板。木目が明瞭に走るのが特徴的である。刻線の間隔はいずれも0.7㎝前後。27は斜格子叩き目B26と重複する。側面調整はb0手法。凹面はナデ調整するが、布目痕跡を残す。色調は黄灰色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.6㎝。NH21地区のSD4130上層出土。

B24は木目に平行する0.15㎝幅と、木目に斜交する0.2㎝幅の刻線が、約80°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔はいずれも0.7㎝前後。28は凹面の布目痕跡を一部ナデ調整する。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石・雲母・赤色粒子を含む。厚さ1.6㎝。NH37地区のSD4130上層出土。

B25は木目にともに斜交する0.3㎝幅の刻線が、約60°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔はいずれも0.7～0.8㎝前後。29は狭端部。同一の叩き目が全面に重複する。側面調整はb0手法。凹面はナデ調整するが、糸切り、布目、分割突起の各痕跡を残す。端部付近はヨコ方向にナデ調整。色調は灰白色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.3㎝。NH25地区のSD4130中層とHM15地区のSD4255で出土し、接合した。

B26は木目に平行・斜交する0.3㎝幅の刻線が、約80°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は木目平行線が0.7㎝、木目斜交線が0.8㎝前後。30は側面調整c0手法。凹面はタテ方向にナデ調整するが、布目痕跡をわずかに残す。色調は黒褐色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。厚さ1.4㎝。SD4255出土。

B27は0.2㎝幅の刻線が、約75°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は0.8㎝と0.7㎝前後。31は凹面をタテ方向にナデ調整する。側面調整はc1手法で、凸面と側面は鈍角をなす。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ2.1㎝。NI28地区のSD4130上層出土。

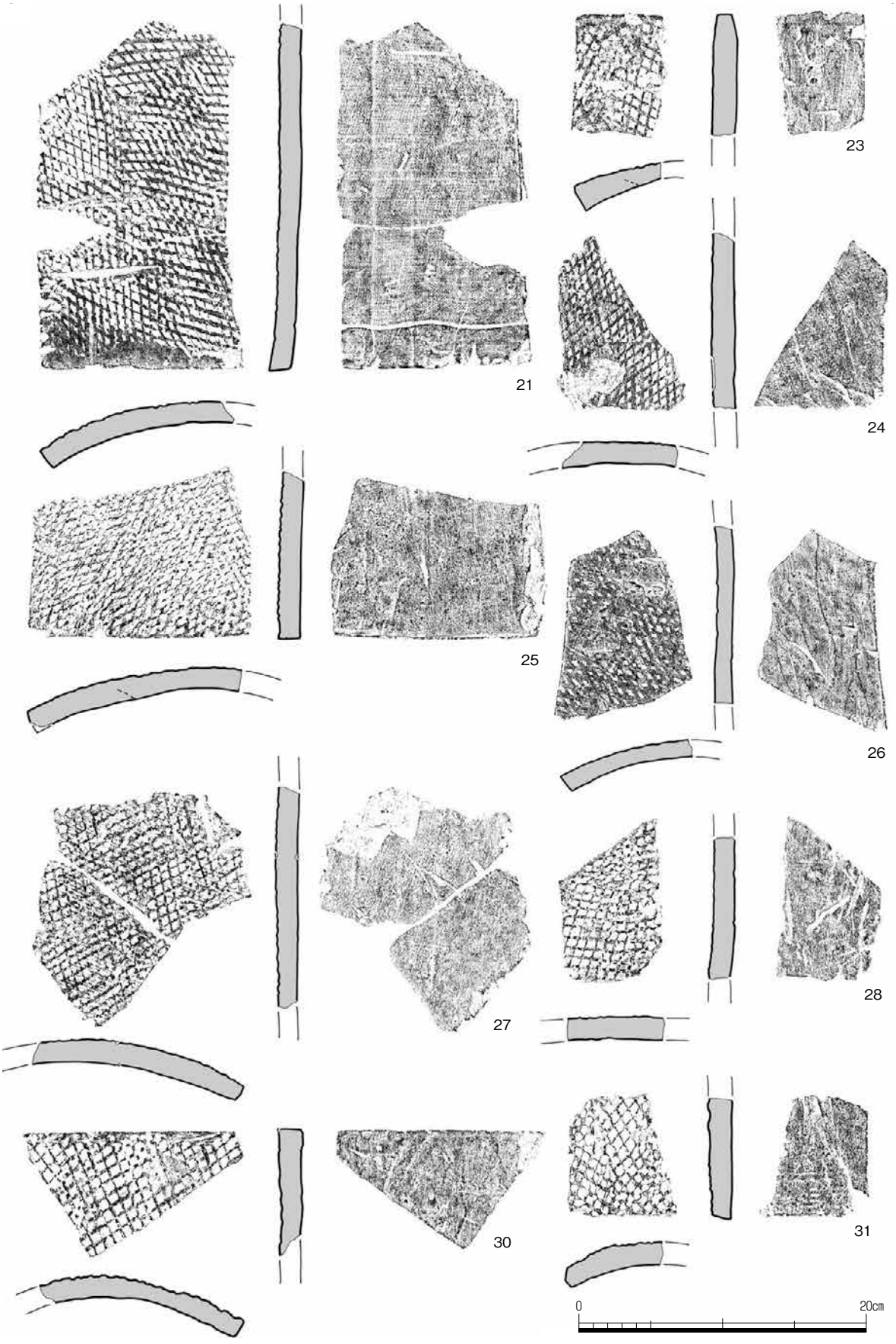


Fig. 99　平瓦Ⅰ類B（3）　1:4

B28は木目に平行・直交する0.3㎝幅の刻線が、約80°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は木目平行線が0.9㎝前後、木目斜交線が0.7㎝前後。32は狭端部。側縁付近には叩き目がみえる。側面調整c0手法。凹面は狭端付近をヨコ方向にナデ調整するが、桶枠板、糸切り、布目、粘土板合わせ目（Z）、分割突帯の各痕跡を明瞭に残す。枠板幅は3.2㎝前後か。側面調整はc1手法。色調は灰白色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ1.3㎝。NH24地区のSD4130下層出土。

B29は0.2㎝幅と0.3～0.35㎝幅の刻線が、約55°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は前者が0.7㎝、後者が1.0㎝前後。33は全体に磨滅する。凹面はナデ調整し、布目痕跡は部分的にしか残らない。色調は灰黄色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を少し含む。厚さ1.5㎝。SE4740出土。

B30は木目にともに斜交する0.2㎝幅の刻線が、約45°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は0.7㎝と1.0㎝前後で、断面はＶ字形を呈する。34は一部叩き目が重複する。側面調整はb0手法。凹面にも凸面と同じ叩き目がみられるが、ナデ調整する。色調は灰褐色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.2㎝。NN38地区の包含層出土。

B31は0.3㎝幅と0.4㎝幅の刻線が、約50°の角度で交差する叩き板。木目は不明瞭。刻線の間隔は前者が0.8㎝、後者が1.0㎝前後。35は狭端部で、端部付近には叩き目が重複する。側面調整はc0手法。凹面は粗くナデ調整するが、糸切りと布目の各痕跡を残す。端部付近はヨコ方向にナデ調整。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.5㎝。NH34地区のSD4130中層出土。

B32は木目にともに斜交する0.3㎝幅の刻線が、約45°の角度で交差する叩き板。刻線の間隔は0.8㎝と1.2㎝前後。斜格子叩きB28と重複する資料でのみ確認している。

この他に、叩き目が重複する資料として、A1＋B26、B4＋B13、B6＋B11＋B21、B13＋B23＋B26、B28＋B32が確認できた。

C：平行叩き目（Fig.101～104-36～50，Ph.65～67・72・73）　平行する刻線を入れた叩き板を使ったもの。15種類ある。

C1は0.05～0.15㎝幅の刻線を刻んだ叩き板。密度10～11本/2㎝で、凹部幅は0.05～0.15㎝。刻線幅と凹部幅にはバラつきがある。36は狭端部。側面調整はc3手法。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡はわずかにしか残らない。狭端付近はヨコ方向にナデ調整。破面をみると粘土板が合わさっていることがわかる（S）。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.8㎝。SK4325出土。

C2は0.15～0.2㎝幅の刻線を刻んだ叩き板。密度8～9本/2㎝で、凹部幅は0.1㎝以下。凹部幅が狭く、刻線も浅く断面がへ字状を呈するものがみられるため、木目の明瞭な無文叩き板の可能性もある。37は側面の分割破面が大きく突出して残るb3手法。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡はごく一部しか残らない。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母を含み、石英、長石が多い。厚さ1.9㎝。SK4325出土。

C3は0.1～0.3㎝幅の刻線を刻んだ叩き板。密度8本/2㎝で、凹部幅は0.15～0.2㎝。38は狭端部で、叩き目が一部つぶれる。側面調整はc1手法。凹面はタテ方向にナデ調整をし、布目痕跡は一部にしか残らない。狭端部付近はヨコ方向にケズリ調整し、面取り風になる。色調は青

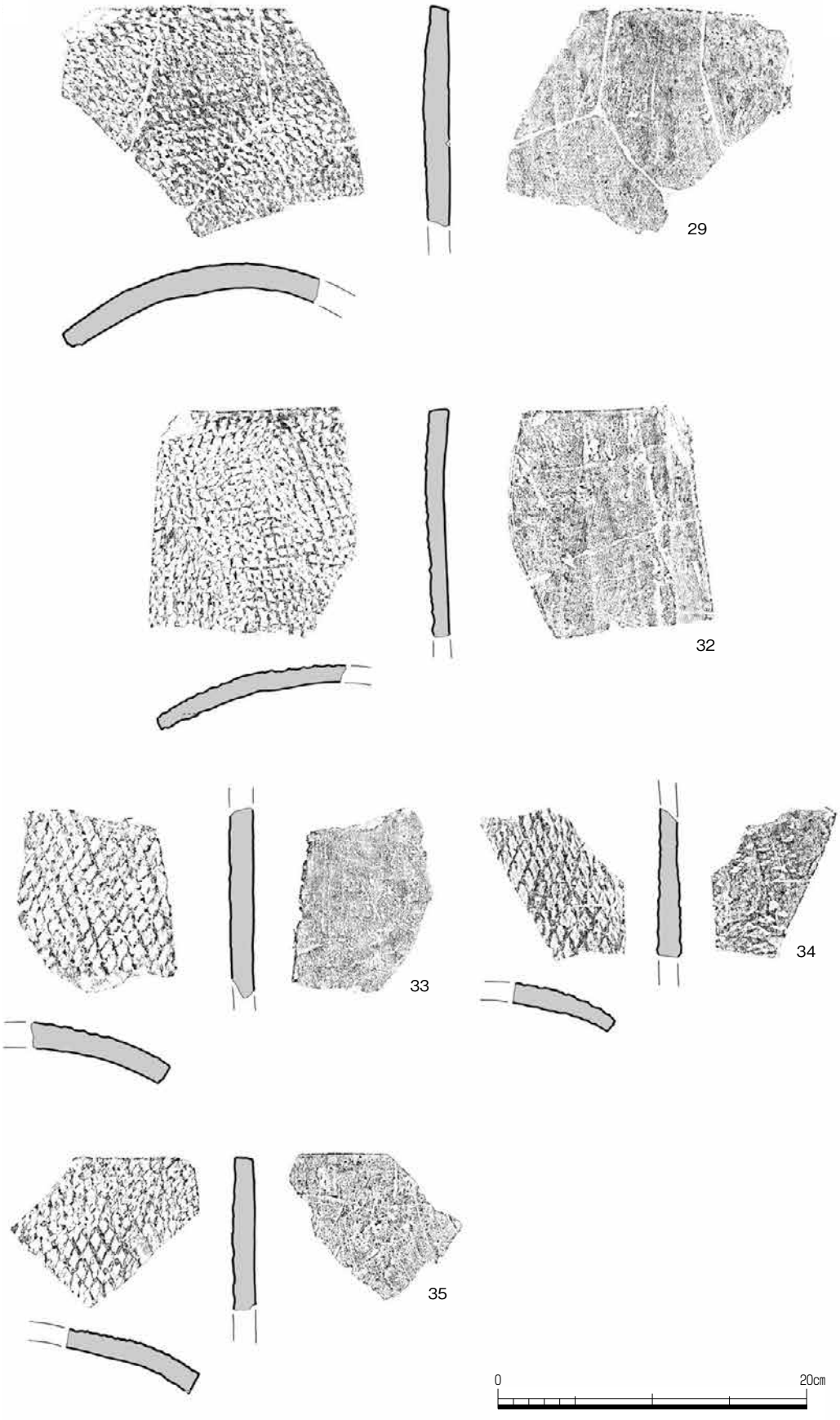


Fig. 100　平瓦Ⅰ類B（4）　1:4

Fig. 101　平瓦Ⅰ類C（1）　1:4

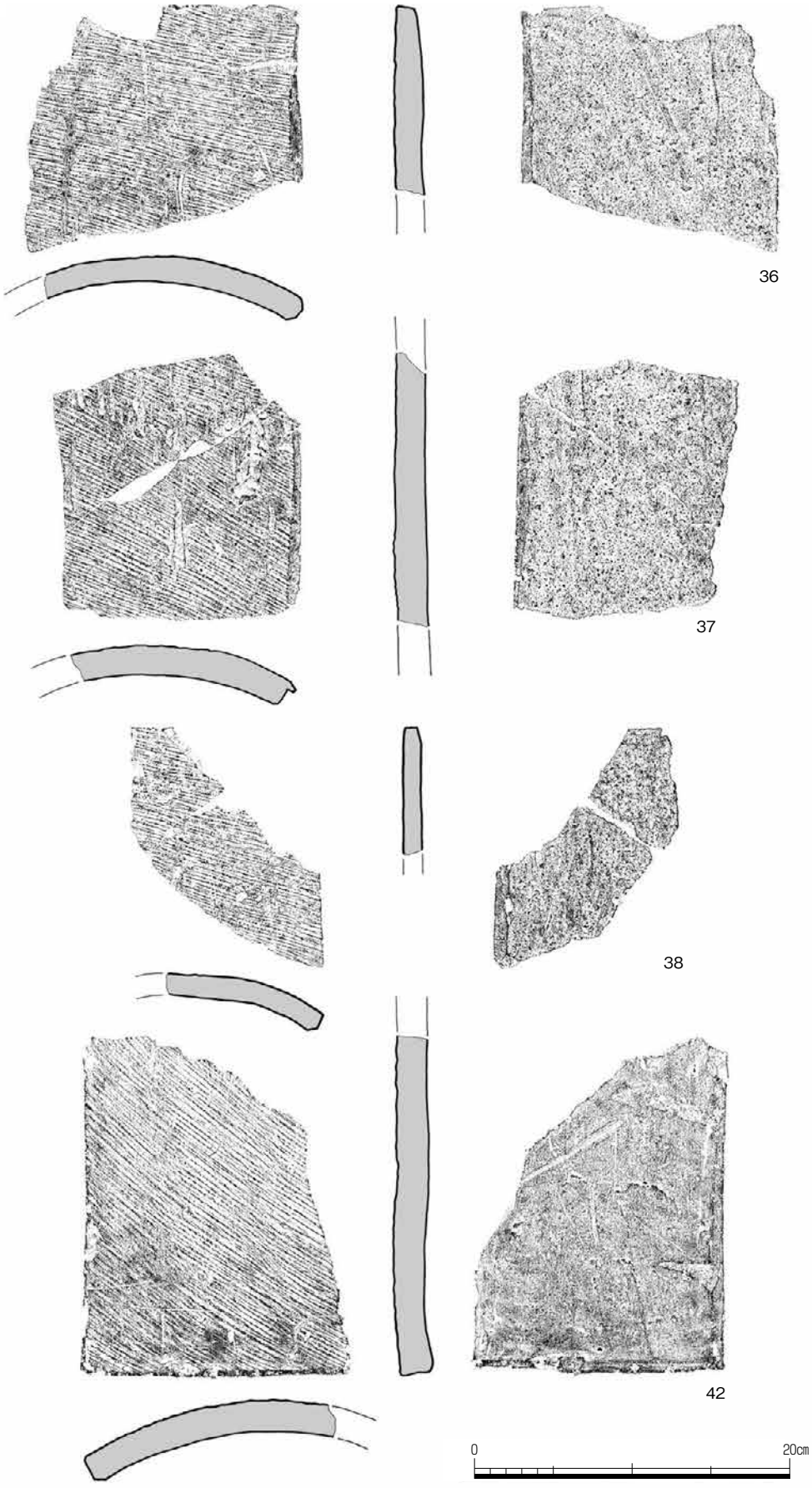


Fig. 102　平瓦Ⅰ類C（2）　1:4

灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.6㎝。NH24地区のSD4130中層出土。

C4は0.1～0.2㎝幅の刻線を刻んだ叩き板。木目は不明瞭。密度8本/2㎝で、凹部幅は0.1～0.2㎝。刻線幅と凹部幅にはバラつきがある。39は両端部、両側縁が残存し、長さ39.4㎝、幅33.0㎝。広端部は補足叩きを施し、さらにヨコ方向に軽くナデ調整する。側面調整はc0手法。凹面はほぼ全体をタテ方向にケズリ調整し、工具のアタリが筋状に残る。糸切り、布目の各痕跡がごくわずかに残る。広端付近は強くヨコ方向にナデ調整。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.8㎝。SK4325出土。

C5は0.05～0.15㎝幅の刻線を刻んだ叩き板。密度7～8本/2㎝で、凹部幅は0.1～0.3㎝。刻線幅と凹部幅にはバラつきがある。40は叩き目を一部ナデ調整する。側面調整はc3手法で、凹面の面取りは幅広い。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡は残らない。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.9㎝。NH24地区のSD4130下層出土。

C6は0.1～0.15㎝幅の刻線を刻んだ叩き板。密度7本/2㎝で、凹部幅は0.3～0.4㎝。粗い木目が刻線と直交し格子風にみえる。刻線幅と凹部幅にはバラつきがある。41は叩き板のアタリが残る。側面調整はc0手法。凹面は未調整で、桶枠板、分割突帯、布目の各痕跡が残る。分割突帯は撚り紐であることが明瞭。桶枠板の幅は3.5㎝。色調はにぶい褐色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母を含む。厚さ1.4㎝。NH17地区の包含層出土。

C7は0.1～0.25㎝幅の刻線を刻んだ叩き板。密度6～9本/2㎝で、凹部幅は0.1～0.2㎝。42は広端部。側面調整はc1手法。凹面はタテ方向にケズリ調整し、布目痕跡は残らない。色調はオリーブ黒色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ2.0㎝。SK4325出土。

C8は0.2㎝幅の刻線を刻んだ叩き板。密度6～7本/2㎝で、凹部幅は0.1～0.2㎝。43は狭端部。側面調整はc1手法。凹面は丁寧にタテ方向、狭端部付近はヨコ方向にナデ調整する。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.7㎝。SK4325出土。

C9は0.1～0.2㎝幅の刻線を刻んだ叩き板。密度6～8本/2㎝で、凹部幅は0.1㎝以下。C2と同様の理由により、木目の明瞭な無文叩き板の可能性もある。44は広端部。側面調整はc3手法。凹面はタテ方向に丁寧にナデ調整し、布目痕跡はわずかにしか残さない。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.7㎝。SK4327出土。

C10は0.1～0.15㎝幅の刻線を刻んだ叩き板。密度6～7本/2㎝で、凹部幅は0.1～0.15㎝。45は広端部。側面調整はc1手法。凹面はタテ方向にケズリ調整と、工具によるナデ調整をしている。布目痕跡は残らない。色調は青灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.5㎝。NH19地区のSD4130上層出土。

C11は0.1～0.25㎝幅の刻線を刻んだ叩き板。木目は不明瞭。密度6～7本/2㎝で、凹部幅は0.1～0.3㎝。刻線幅と凹部幅にはバラつきがある。46は狭端部。側面調整はc手法により、凹面に面取りを施す部分と施さない部分がある。凹面は全面をナデ調整し、布目痕跡はわずかに

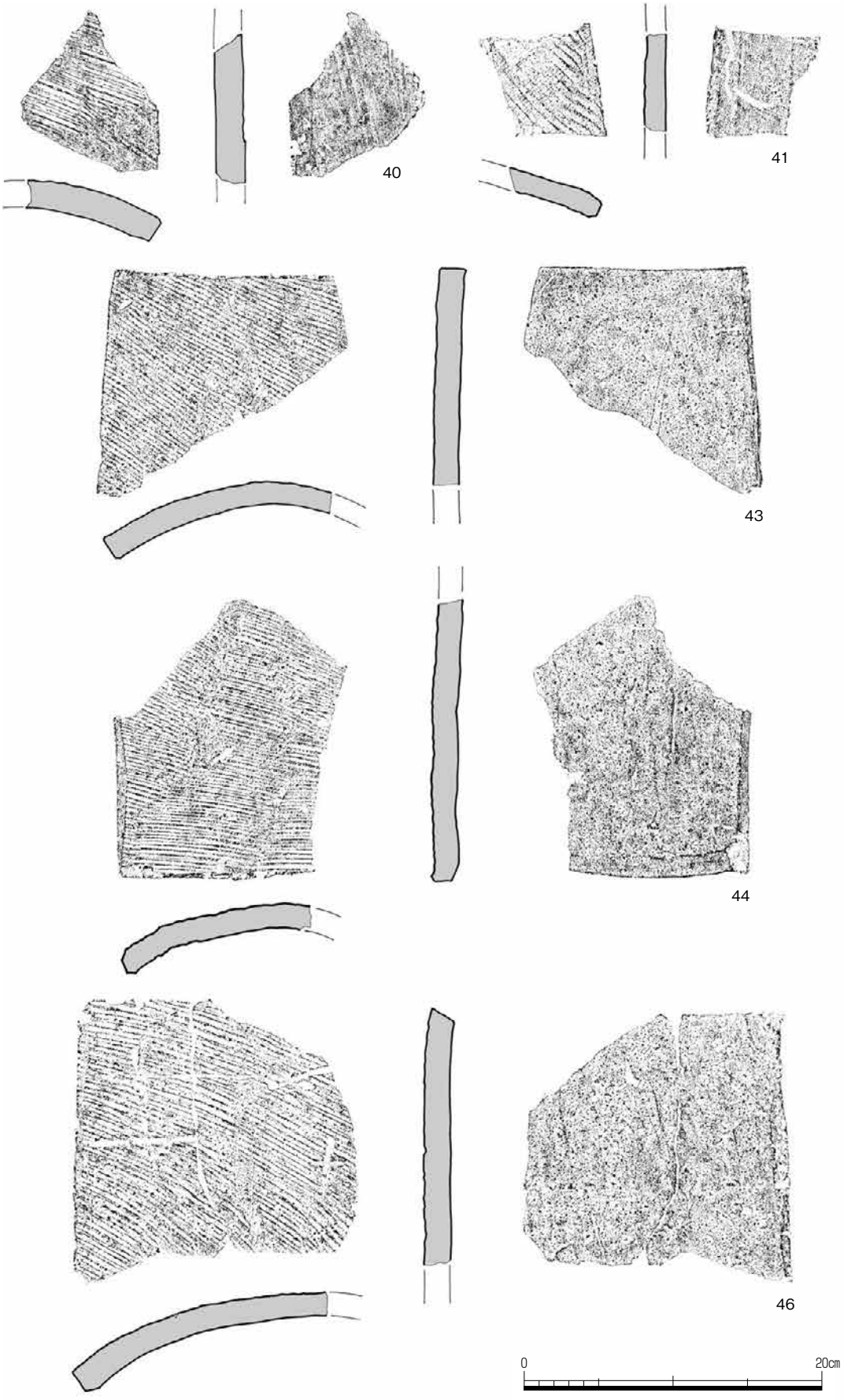


Fig. 103　平瓦Ⅰ類C（3） 1:4

しか残らない。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.5cm。SK4325出土。

C12は0.1～0.4cm幅と線幅にバラつきの大きい刻線を刻んだ叩き板。密度５～７本/２cmで、凹部幅は0.15～0.25cm。47は広端部。叩き目を一部ナデ調整する。側面調整はc０手法。凹面はナデ調整をするが、布目痕跡が部分的に残る。広端部から6.5cm、7.5cmの位置に、端部に平行する幅0.4cmの凹線が１条ずつ走り、凹線内部にも布目痕跡が認められる。桶枠板綴じ紐痕跡の可能性があるか。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母を含み、石英、長石が多い。厚さ1.6cm。NH35地区のSD4130中層出土。

C13は0.2～0.25cm幅の刻線を刻んだ叩き板。密度６本/２cmで、凹部幅は0.15～0.25cm。48は広端部。凸面と凹面の各所に、焼成時のものとみられる溶着物が付着する。側面調整はc１手法。凹面はタテ方向にケズリ調整し、布目痕跡は残らない。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母を少量含む。厚さ2.0～2.5cm。SK4325出土。

C14は0.1～0.15cm幅の刻線を刻んだ叩き板。密度５本/２cmで、凹部幅は0.2～0.3cm。49は凹面を丁寧にナデ調整する。オリーブ灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.7cm。NH25地区のSD4130中層出土。

C15は0.1～0.15cm幅の刻線を刻んだ叩き板。密度５本/２cmで、凹部幅は0.3～0.4cm。50は凹面をタテ方向にケズリとナデ調整し、広端部はヨコ方向にナデ調整する。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.8cm。HE24地区の包含層出土。

Ｄ：縦位縄叩き目（Fig.105・106-51～58，Ph.67・73）　縄を長軸方向に巻き付けた叩き板を使ったもの。８種類ある。D１～D５は粘土板桶巻き作り、D６・D７は粘土紐桶巻き作り、D８は不明である。

D１は7.5粒/３cmの縄を、８～９本/２cmの密度で巻き付けた叩き板。51は叩き目が一部つぶれる。凸面は未調整だが、側縁付近のみタテ方向にナデ調整する。側面調整はc１手法で、凸面と側面はほぼ直角をなす。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡は残らない。破面に粘土板合わせ目（Ｓ）が確認できる。色調は灰白色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、大きめの黒色粒子、赤色粒子が目立つ。厚さ1.7cm。NI28地区のSD4130中層出土。

D２は5.5～６粒/３cmの縄を、７本/２cmの密度で巻き付けた叩き板。52は狭端部が完存し、幅23.4cm。叩き目が一部つぶれる。側面調整はc０手法で、凸面と側面が鈍角をなす。凹面は軽くナデ調整するが、糸切り、布目の各痕跡を残す。色調は灰白色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.8cm。NG30地区のSD4130上層出土。

D３は５粒/３cmの縄を、５～5.5本/２cmの密度で巻き付けた、長さ15.5cm以上の叩き板。53は狭端部。側縁と端部付近の叩き目をナデ調整する。側面調整はc０手法で、凸面と側面が鈍角をなす。凹面は側縁付近と狭端部付近をナデ調整するが、それ以外は未調整で、糸切り、布目の各痕跡を残す。色調は灰黄色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.9～2.1cm。SE4740出土。

D４は４粒/３cmの縄を、７本/２cmの密度で巻き付けた、幅5.5cm、長さ14.5cm以上の短冊形叩

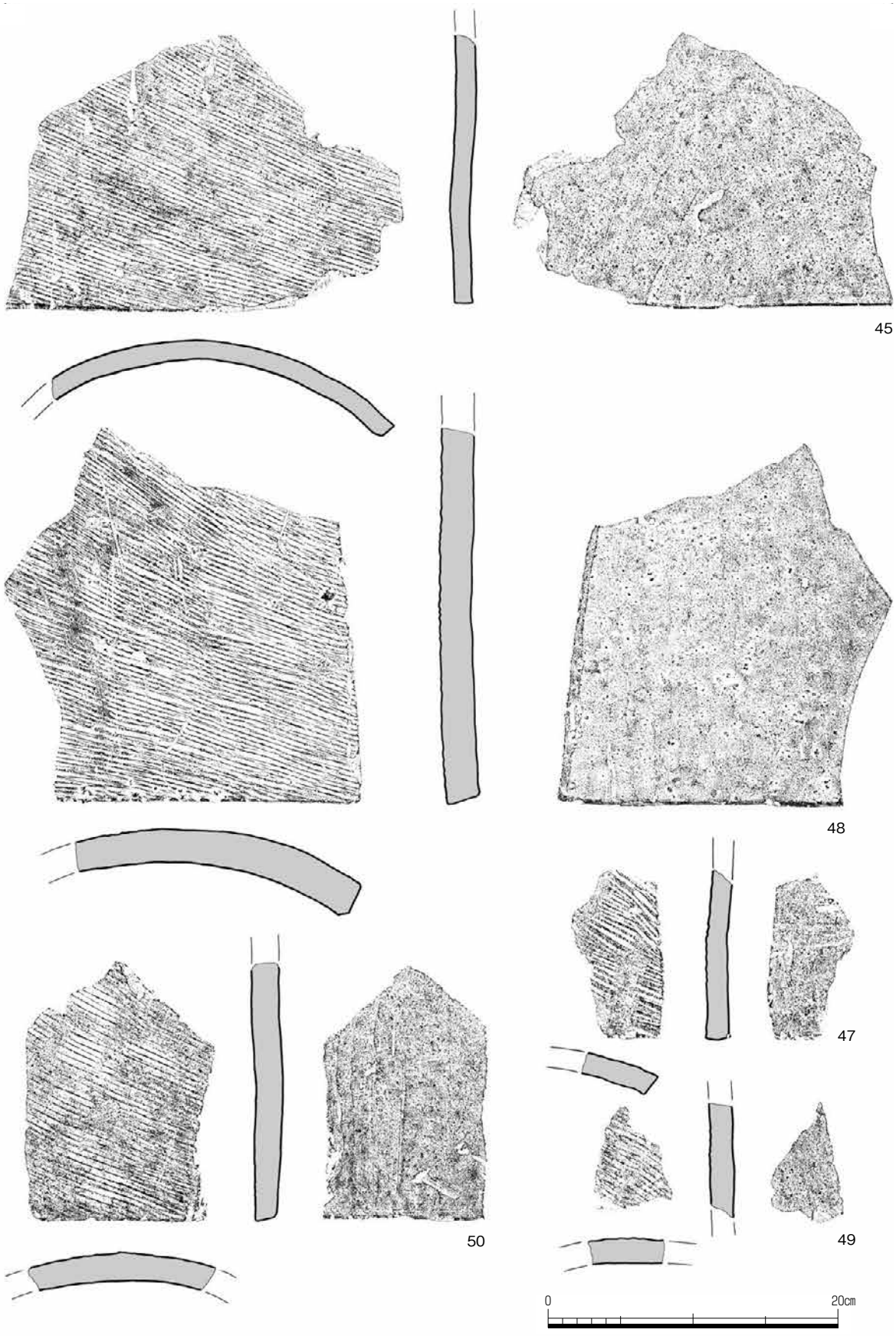


Fig. 104　平瓦Ⅰ類C（4） 1:4

き板。54は狭端部の幅がわかる資料で、幅21.6cm。叩き目が一部つぶれる。側面調整はc0手法で、凸面と側面が鈍角をなす。凹面は軽くナデ調整するが、ほぼ全面に布目痕跡を残す。糸切り痕跡はかすかに残る。色調は灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.7cm。SE4740出土。

D5は3.5粒/3cmの縄を、6本/2cmの密度で巻き付けた叩き板。55は叩き目が全体的につぶれる。側面調整はc3手法で、凸面と側面が鈍角をなす。凹面は未調整で、粘土板合わせ目（S・Zは不明。）、布目の各痕跡を残す。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。厚さ1.7cm。NH31地区のSD4130中層出土。

D6は5.5～6.5粒/3cmの縄を、7本/2cmの密度で巻き付けた叩き板。56は叩き目が一部つぶれる。側面調整はc0手法で、凸面と側面はほぼ直角をなす。凹面は軽くナデ調整するが、布目痕跡を残す。破面観察により、素材は粘土紐と考えられる。色調は黄灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、黒色粒子が多い。厚さ2.6cm。NH25地区のSD4130上層出土。

D7は5粒/3cmの縄を、7本/2cmの密度で巻き付けた、長さ13.5cm以上の叩き板。57は叩き目が一部つぶれる。側面調整はc0手法で、凸面と側面は鈍角をなす。凹面は軽くナデ調整するが、粘土紐継ぎ目と布目の各痕跡を残す。色調は灰白色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を少量含む。厚さ1.6cm。NH28地区のSD4130中層出土。

D8は4粒/3cmの縄を、4本/2cmの密度で巻き付けた叩き板。58は叩き目を一部ナデ調整する。側面調整はc0手法で、凸面と側面は鈍角をなす。凹面はタテ方向にナデ調整するが、布目痕跡を一部残す。粘土成形方法は痕跡がみられず不明。色調は灰色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.7cm。NG23地区のSD4130上層出土。

E：無文叩き目（Fig.107-59・60，Ph.67・73）　線を刻んだり、縄を巻き付けたりしない叩き板を使ったもの。刻線風に筋が入るものがあるが、凹部幅が非常に狭く、刻線も非常に浅い。この線は木目で、板に人為的に線を刻んだとは考えがたいため、無文叩きとした。主としてSD4130から出土している。

E1は幅0.1cmほどの凸線が走る叩き板。密度は9本前後/2cm。59は広端部で、凸面を叩いた後にタテ方向にナデ調整する。側面調整はc1手法で、面取り幅が1.8cmと広い。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡はかすかにしか残らない。広端部付近はヨコ方向にケズリ調整。色調は灰白色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ2.5cm。NI29地区のSD4130上層出土。

E2は幅0.1cmほどの凸線が走る叩き板。密度は12本前後/2cm。60は広端部で、凸面を叩いた後にタテ方向、広端部付近はヨコ方向にナデ調整。側面調整はc3手法。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡はかすかにしか残らない。広端部付近はヨコ方向にケズリ調整。色調は灰白色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ2.0～2.4cm。NI30地区のSD4130中層出土。

以上、本調査区で出土した桶外巻き作り平瓦のうち、叩き目未調整、もしくは調整が不完全で一部残るものの分類を示した。すべての資料をこれらの分類に当てはめることは難しいが、

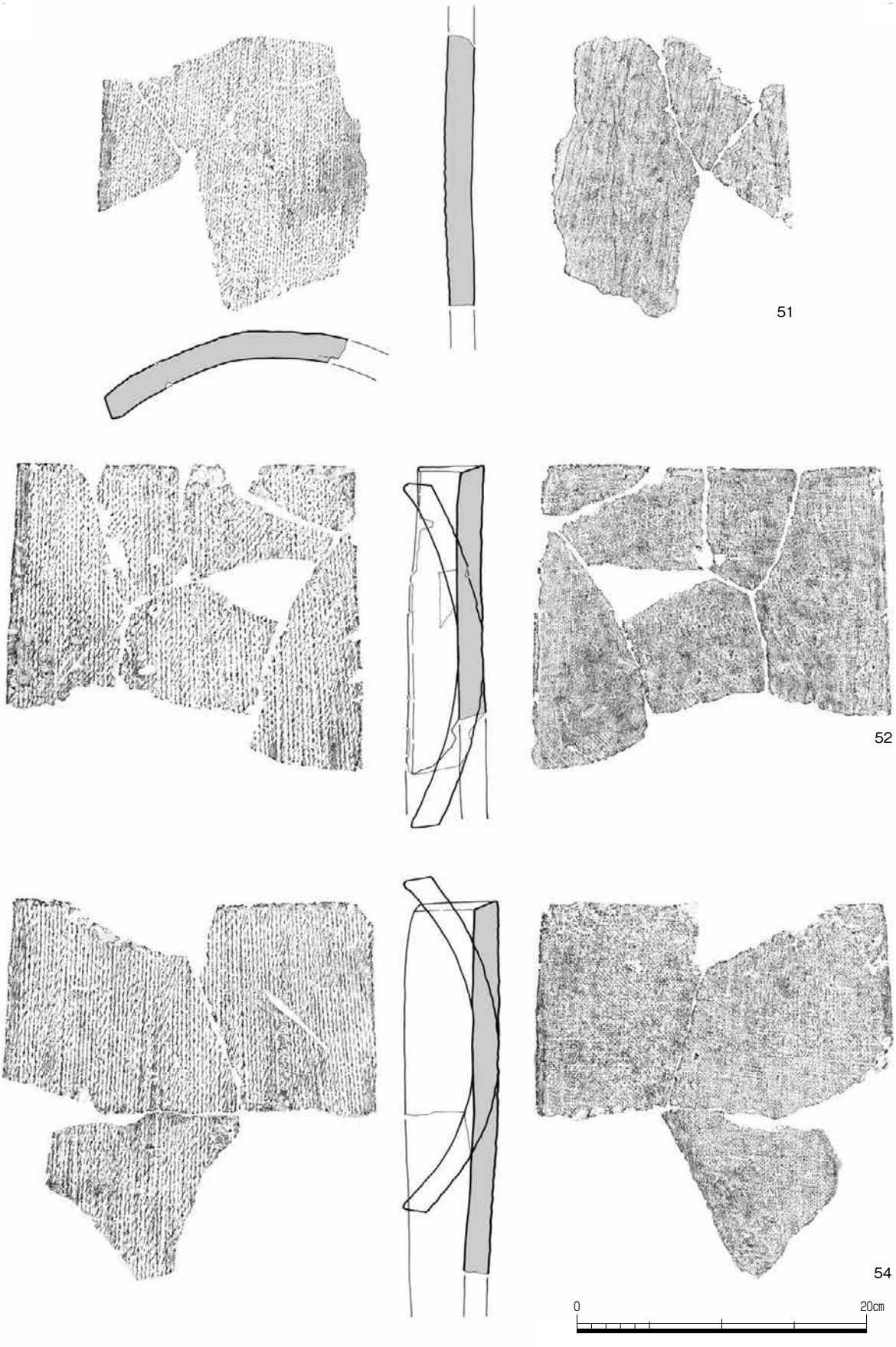


Fig. 105　平瓦Ⅰ類D（1）　1:4

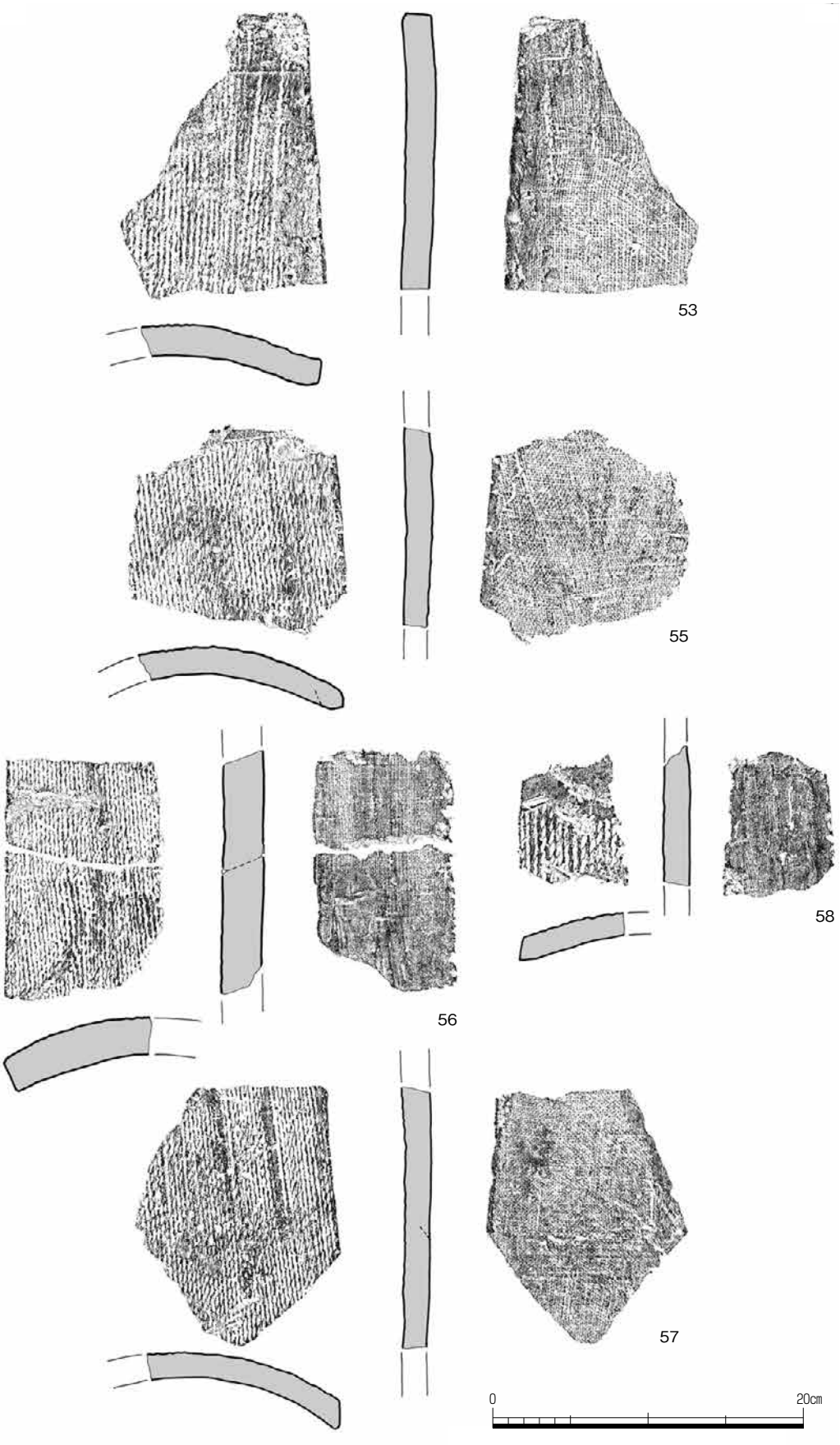


Fig. 106　平瓦Ⅰ類D（2）　1:4

極力分類を試みたところ、凸面調整とその他の属性に一定の相関関係がうかがわれた。まず、正格子と斜格子叩きをもつものは、1.3～1.6㎝の厚さで、調整は凹面が布目痕を残す程度の粗いナデ、側面は分割破面・截面ともに削るものの、面取りを施さないc0手法であるものが主体的である。色調は灰色～灰白色や黄灰色で、焼成はやや甘いものが多い。平行叩き目をもつものは1.6～1.9㎝の厚みで、調整は凹面が布目痕跡をほぼ残さない丁寧なナデを施すものが主体となる。側面の調整はc0手法と、分割破面・截面ともに削ったうえに凹面側に面取りを施すc1手法が拮抗する。色調は灰色～青灰色、焼成は硬質で、石英、長石を多く含むものが目立つ。縄叩きをもつものは1.6～2.4㎝の厚みで、調整は凹面がほぼ未調整、側面はc0手法で凸面と側面の角度が鈍角をなすものが主体である。色調は灰白色～黄灰色で、焼成はやや軟質で磨滅しているものが多い。無文叩きをもつものは、1.6～2.4㎝の厚みで、調整は凹面が布目痕をほぼ残さない丁寧なナデを施すものが主体的で、側面はc0手法と、分割破面・截面ともに削ったうえ凹面側に面取りを施すc1手法が拮抗する。色調は灰色～青灰色で焼成が硬質なものと、黄灰色で焼成がやや軟質のものに分かれる。

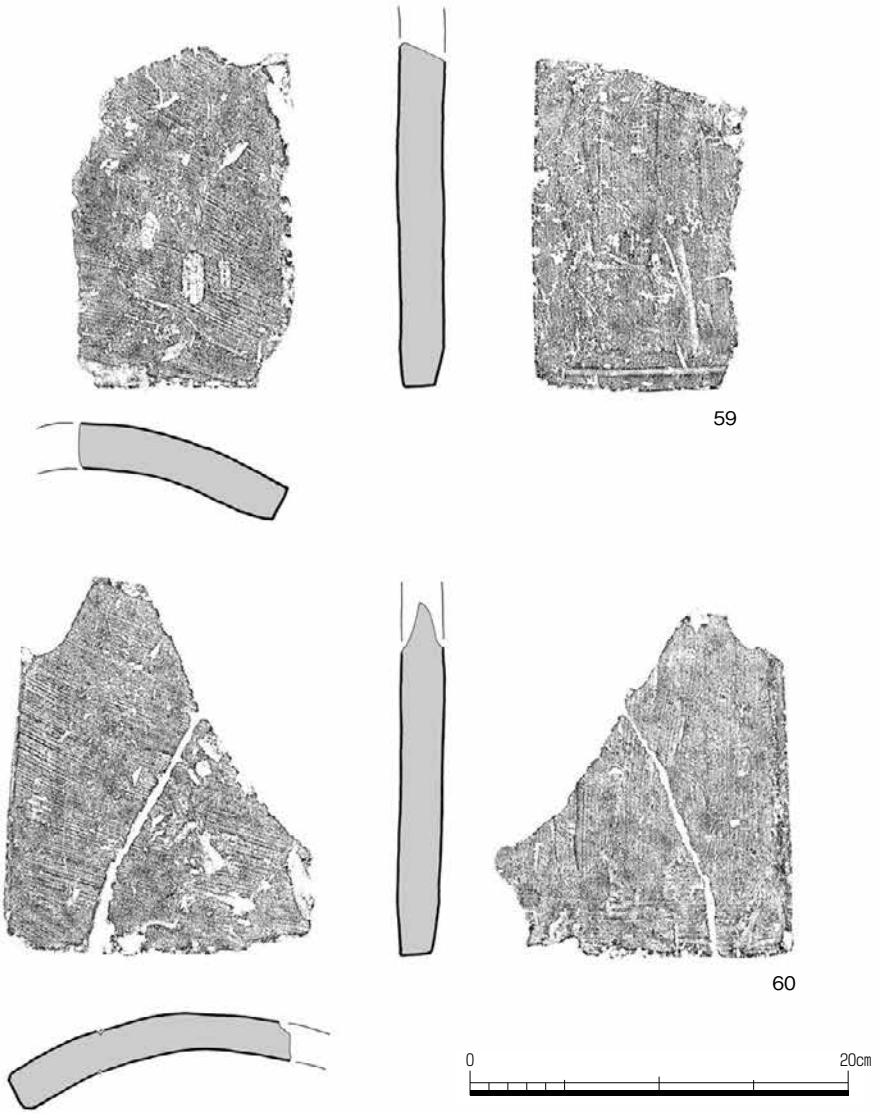


Fig. 107　平瓦Ⅰ類E　1:4

平瓦Ⅱ類　本調査区出土の平瓦は、ナデやケズリ調整によって叩き目をほぼ完全に調整するものが大多数を占める。有効な数値を示すことは難しいが、たとえば遺構別に出土点数を数えた場合[20]、7世紀（Ⅱ期）の瓦溜SK4160・4270では平瓦Ⅱ類が100％、同じくSD4255では平瓦Ⅰ類が約15％、平瓦Ⅱ類が約85％となる。Ⅲ-A期の土坑SK4325では平瓦Ⅰ類が約10％、平瓦Ⅱ類が約90％、東西溝SD4130のうち、もっとも平瓦Ⅰ類（特に縄叩き）の比率が高い上層でも、平瓦Ⅰ類は約30％、平瓦Ⅱ類は約70％という値を示す。

きわめて多量に出土した平瓦Ⅱ類を分類するにあたり、着目する属性としては調整（凹面、側面、端部）、焼成、色調、胎土、法量などが考えられよう。本調査区において吉備池廃寺の軒瓦が多数出土している以上、平瓦にも吉備池廃寺所用のものが含まれている可能性が高いが、その他の寺院や藤原宮所用のものも含まれているとみてよい。しかし、全資料を検討して、それら各々を抽出することは非常に難しい。必ずしも平瓦諸属性の組み合わせが排他的であるとは限らないからである[21]。

このような状況をふまえ、本調査区で出土した平瓦Ⅱ類については、瓦がまとまって出土した遺構における属性の傾向を述べたうえで、主体的、特徴的な資料について個別記述、図示を行うことにする。

土坑SK4160出土瓦（Fig.108・109-61・62，Ph.68）　1.8～2.3㎝の厚みで、凹面調整はナデ、側面調整はc0手法、焼成はやや軟質であるものが主体的である。

61は、狭端部を残す。残存長34.0㎝、残存幅23.0㎝。凸面はタテ方向、狭端部付近のみヨコ方向にナデ調整する。側面調整はc0手法で、凹面側に深く削り込むため、凸面と側面が鋭角をなす。凹面はタテ方向、狭端部付近のみヨコ方向にナデ調整。色調は灰黄褐色で、焼成はやや軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を多く含む。厚さ2.0～2.5㎝。

62は、凸面はタテ方向にケズリ調整する。側面調整はc0手法。凹面はタテ方向に粗くナデ調整し、糸切り、布目痕跡を残す。また、端部に平行して幅2～3㎜の凹線が走り、その凹線に重なるように縫い目の痕跡がみられる。凹線の上下で布目が似ているため、布のほつれをつまんで縫い合わせたか、布を継ぎ足した痕跡と考えられる。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ2.2㎝。SK4160出土瓦のなかで、焼成や凹面調整が異色な資料である。

瓦溜SK4270出土瓦　2.0～2.4㎝の厚みで、凹面調整はナデ、側面調整はc0手法、焼成はやや軟質であるものが主体である。SK4160出土瓦と同様の属性をもつ瓦が多い。小片のため、図示しない。

南北溝SD4255出土瓦（Fig.109-63・64，Ph.68）　1.6～2.4㎝の厚みで、凹面調整はナデ、側面調整はc0手法、c1手法、c3手法であるものが主体的である。焼成は軟質のものから硬質なものと幅広い。

63は、広端部をわずかに残す。凸面はタテ方向にナデ調整する。側面調整はc1手法。凹面はタテ方向にケズリ調整するが、布目痕跡を一部残す。端部から約6㎝内側に、長さ1.0㎝、幅0.3㎝ほどの凹線が4㎝の間隔をあけて2条、さらに1.5㎝内側に同様の凹線が1条認められる。桶枠板の綴じ紐痕跡の可能性がある。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.8㎝。

64は狭端部。凸面はナデ調整する。側面調整はc0手法であるが、一部分割破面が残る部分がある。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡をかすかにしか残さない。端部付近はヨコ方向にナデ調整し、面取り風になる。端部から約4㎝内側に、長さ1.7㎝、幅0.4㎝ほどの凹線が1条認められる。桶枠板の綴じ紐痕跡の可能性がある。色調は灰白色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ2.4㎝。

六条条間路北側溝SD4139出土瓦（Fig. 110-65・66, Ph. 68）　1.6～2.3㎝の厚みで、凹面調整はナデ、側面調整はc0手法、c1手法であるものが主体的である。凸面と側面が鈍角をなすものを若

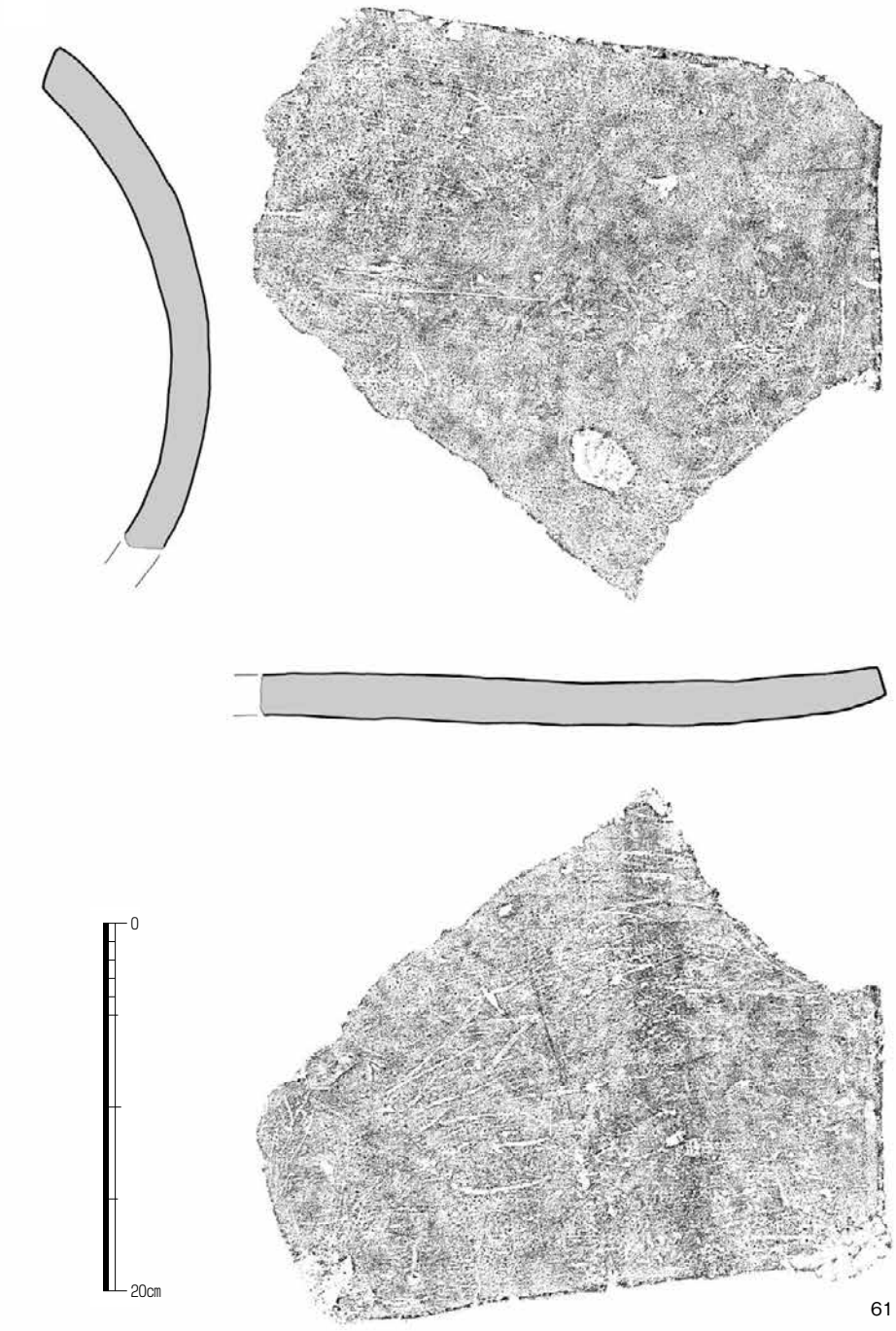


Fig. 108　平瓦Ⅱ類（1）　SK4160出土　1：4

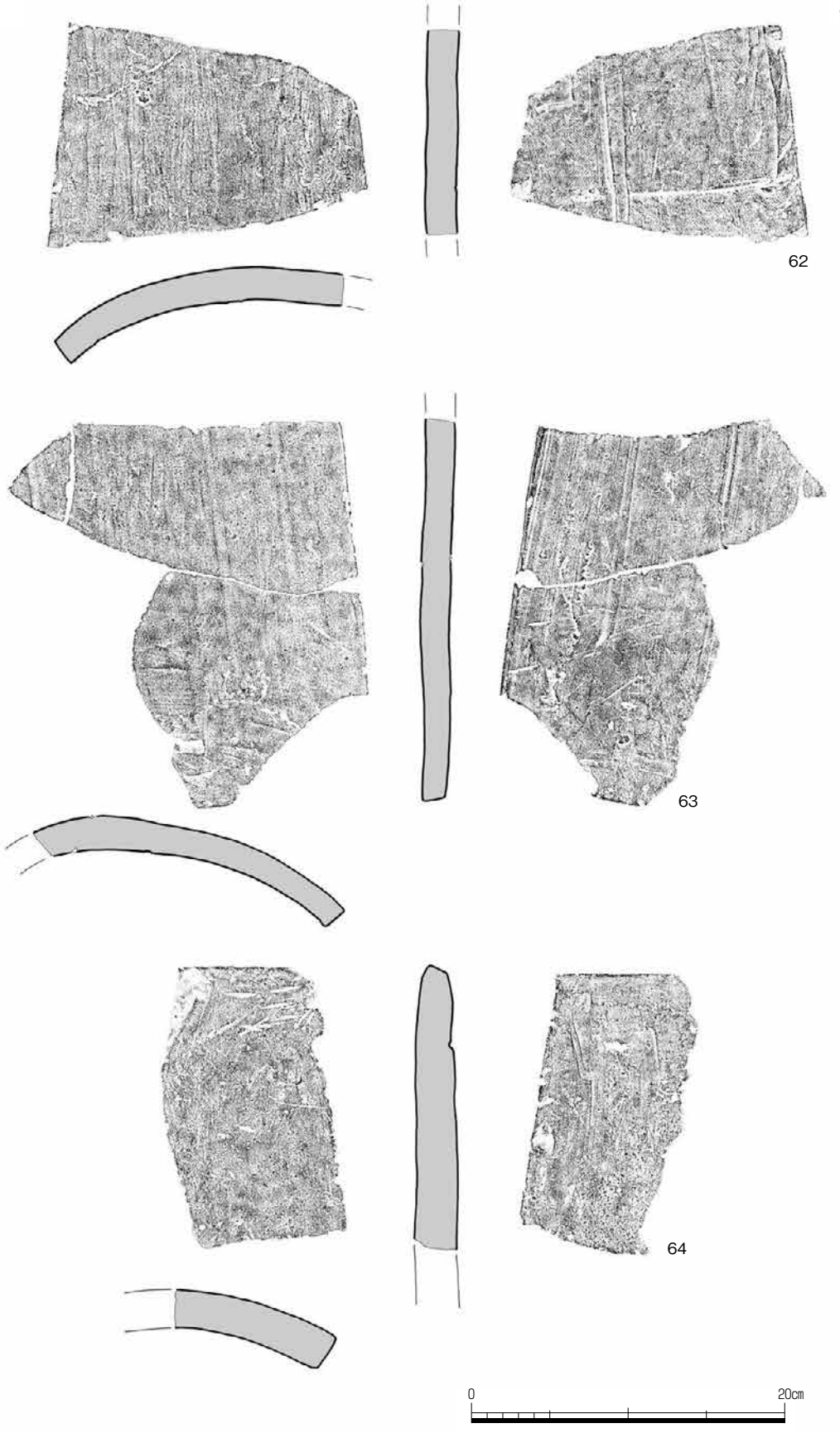


Fig. 109　平瓦Ⅱ類（2）　SK4160・SD4255出土　1：4

干含む。焼成はやや軟質と硬質のものの両者あるが、やや軟質のものが多い。

65は凸面をナデ調整する。側面調整はc1手法。凹面もナデ調整するが、桶枠板と粘土板合わせ目（S・Zは不明。）の各痕跡を残す。枠板幅は2.5cm。端部に平行する様に、幅0.3～0.4cmの凹線が1.5cmほどの間隔をあけて2条走る。内部に布目痕跡が残ることと、桶枠板の凹凸に対応してわずかな切れ目がみられることから、枠板の綴じ紐痕跡と考えられる。色調は灰白色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ2.2cm。

66は狭端部。凸面はナデ調整する。側面調整はc0手法で、凸面と側面が鈍角をなす。凹面もナデ調整し、布目痕跡を残さない。色調は明褐色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ2.0cm。

土坑SK4325出土瓦（Fig. 111～113-67～69, Ph. 68・69）　1.7～2.6cmの厚みで、凹面調整はナデ、側面調整はc1手法、焼成はやや軟質のものが主体的である。凸面と側面が鈍角をなすものを若干含む。他の遺構に比べ、破片の大きい資料がまとまっている。この他、焼成の時点で変形した資料が9点あり、厚さは1.8～1.9cm前後で凹面調整はナデ、側面調整はc1手法とc3手法、暗青灰色を呈し焼成は非常に硬質である。

67はほぼ全形がわかる資料。全長47.2cm。残存最大幅は33.4cm。凸面はタテ方向にナデ調整する。側面調整はb0手法だが、一部截面と破面の段差がない。凹面もタテ方向にナデ調整し、

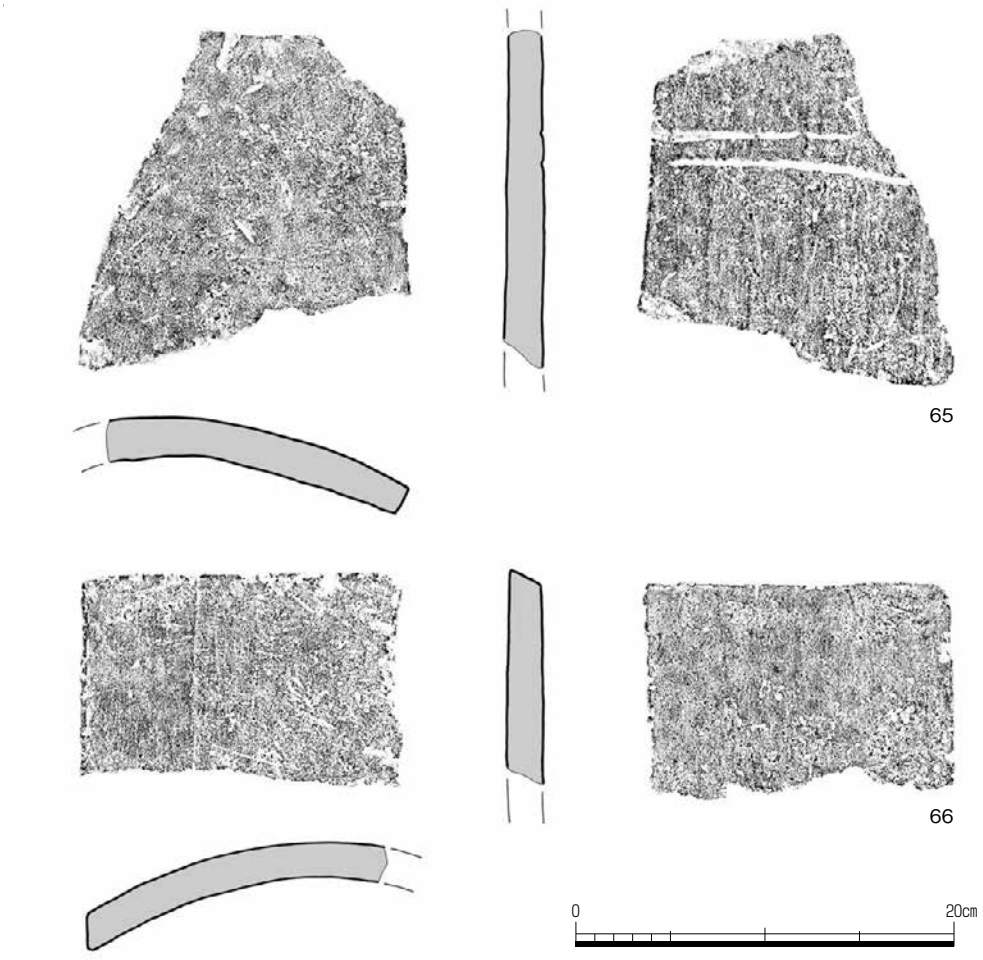


Fig. 110　平瓦Ⅱ類（3）　SD4139出土　1：4

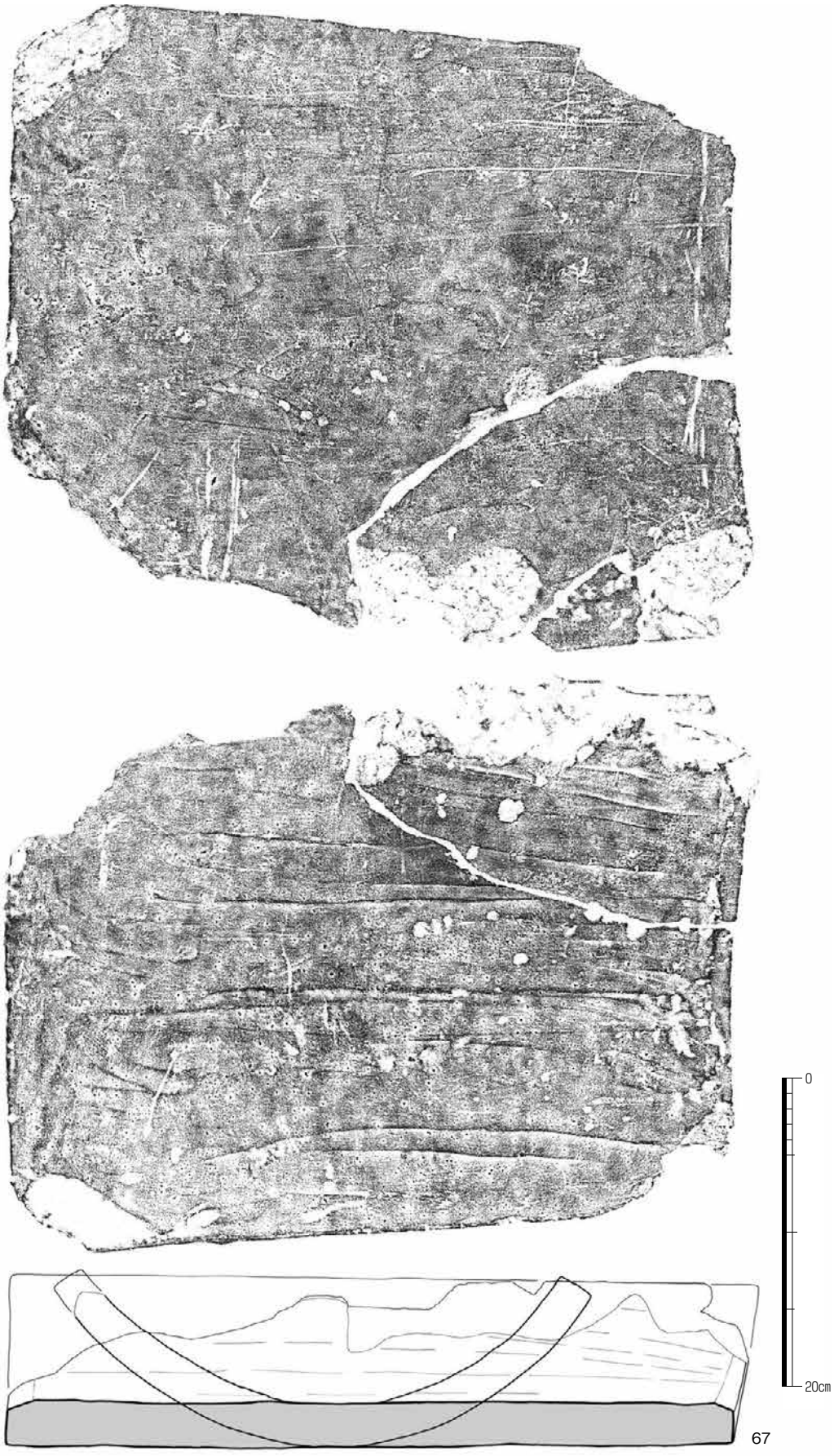


Fig. 111　平瓦Ⅱ類（4）　SK4325出土　1：4

布目痕跡を残さない。両端部は面取りする。狭端部から3.5cm内側、広端部から5.5cmにそれぞれ凹線が断続的に走る。不明瞭ではあるが、枠板の綴じ紐痕跡の可能性がある。破面は粘土板合わせ目（S）か。色調は明褐色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子、赤色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ2.4～2.8cm。

68は全長45.6cm、残存最大幅は27.8cm。凸面は木目の目立つ無文叩き後、ナデ調整する。凸面中央部には、最終調整後に縄をわたしたとみられる痕跡が横断する。側面調整はc1手法。凹

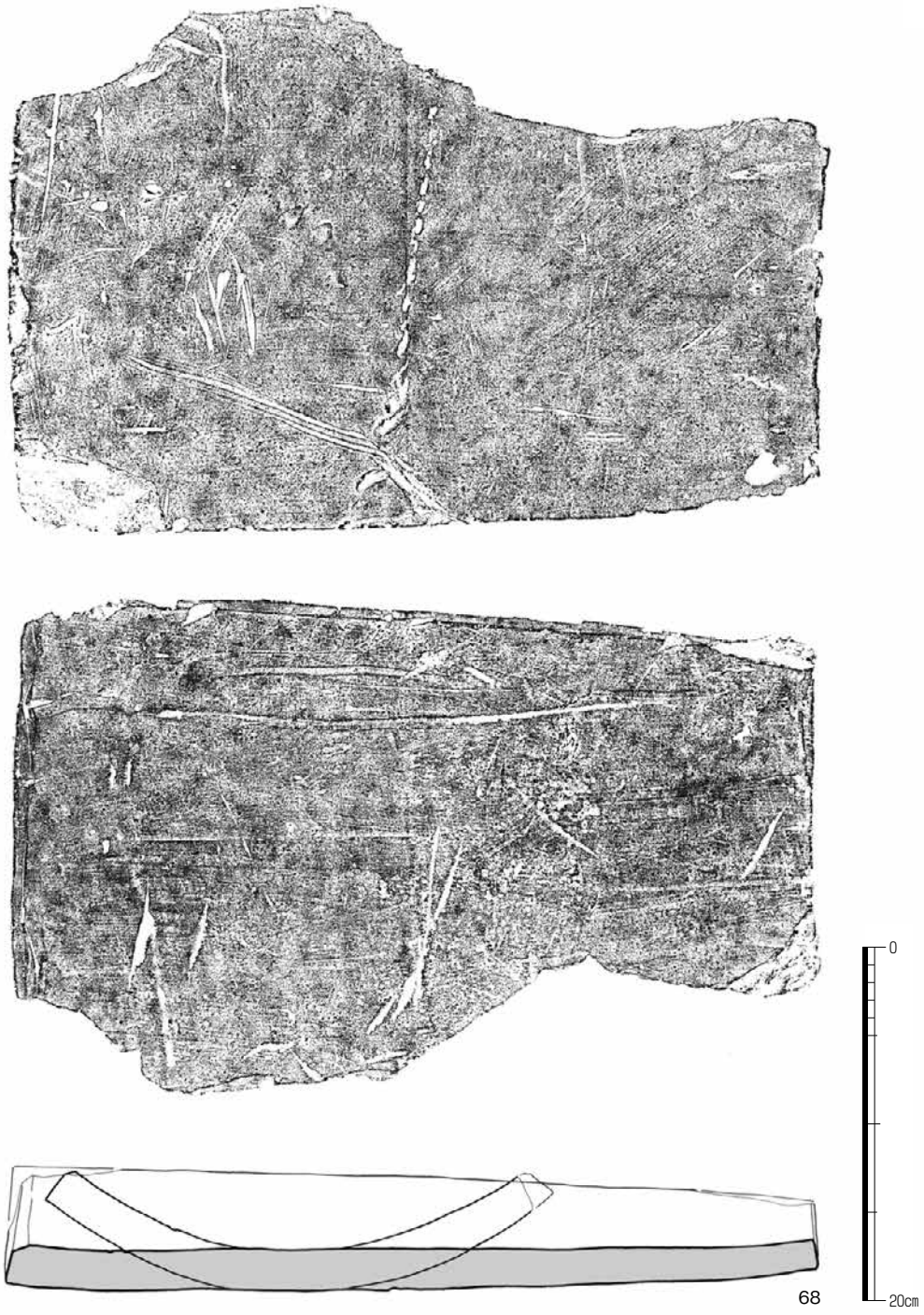


Fig. 112　平瓦Ⅱ類（5）　SK4325出土　1：4

面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡を一部にしか残さない。両端部は面取りする。広端部から5.5cm内側に幅0.3cm、長さ1.4cmの凹線が、さらに1.0cm内側にも同様の凹線がみられる。桶枠板綴じ紐痕跡の可能性がある。色調は黄灰色～灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。厚さ2.3～2.5cm。

69は焼成の時点で変形したとみられる、歪みの大きい資料。広端部を残す。凸面は板状工具でタテ方向にナデ調整し、端部付近のみ斜め方向にハケ目調整。側面調整はc3手法だが、一部分割破面の段差が残り、面取り幅はごくわずか。凹面はタテ方向にケズリ調整し、端部付近のみさらにヨコ方向にナデ調整。布目痕跡は残らない。色調は暗青灰で、焼成は硬質、胎土は石英、長石を多く含む。厚さ1.6～1.9cm。

東西大溝SD4130出土瓦（Fig. 114・115-70～74, Ph. 70）　1.6～2.4cmの厚みで、凹面調整はナデ、側面調整はc0手法、c1手法、焼成はやや軟質～やや硬質のものが主体である。凸面と側面が鈍角をなすものを若干含む。下層、中層、上層間で、出土瓦の様相に大幅な違いはない。

70は広端部。凸面はナデ調整し、端部付近のみヨコ方向にナデ調整。側面調整はc1手法。凹面はタテ方向、端部付近のみヨコ方向にナデ調整し、布目痕跡をわずかにしか残さない。両端部は面取りする。色調は灰色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を少し含む。厚さ2.4cm。NH28地区の中層出土。

71は狭端部。凸面は木目の目立つ無文叩きの後、ナデ調整する。側面調整はc0手法。凹面もナデ調整し、布目痕跡はみられないが、分割突帯の撚紐痕跡は残る。破面には粘土板の合わせ目（S）がみえる。色調は灰色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。厚さ1.8cm。NH31地区の中層出土。

72は広端部。凸面はヨコ方向にナデ調整。側面調整はc1手法。凸面と側面はやや鈍角をなす。

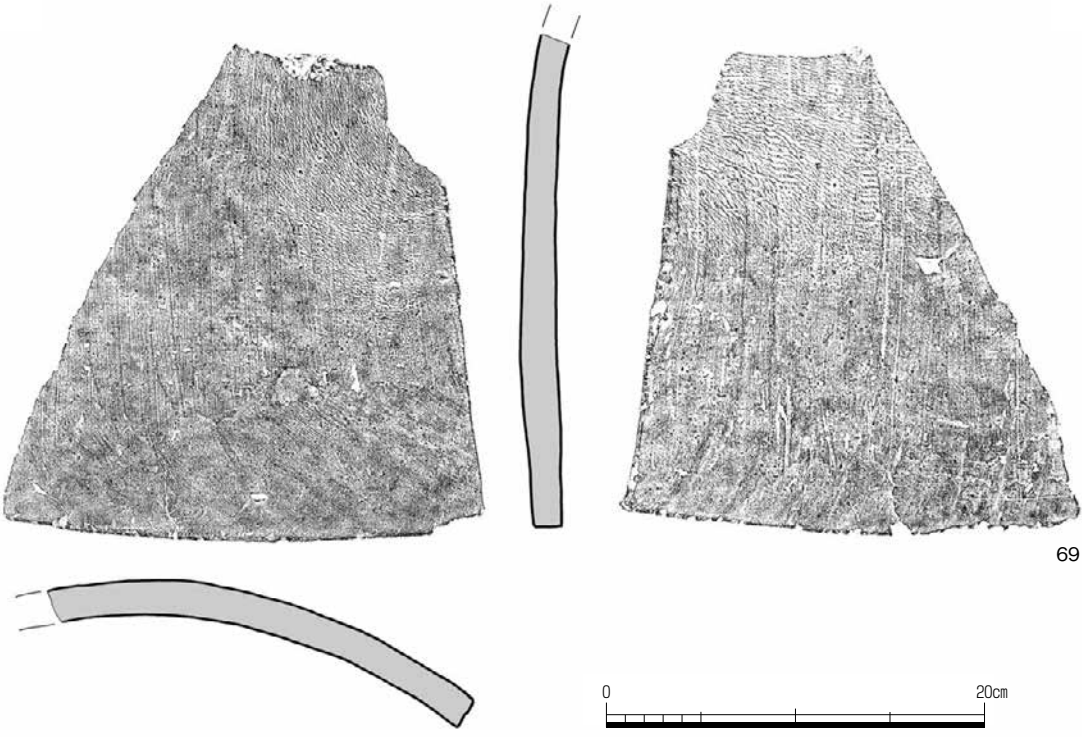


Fig. 113　**平瓦Ⅱ類**（6）　SK4325出土　1：4

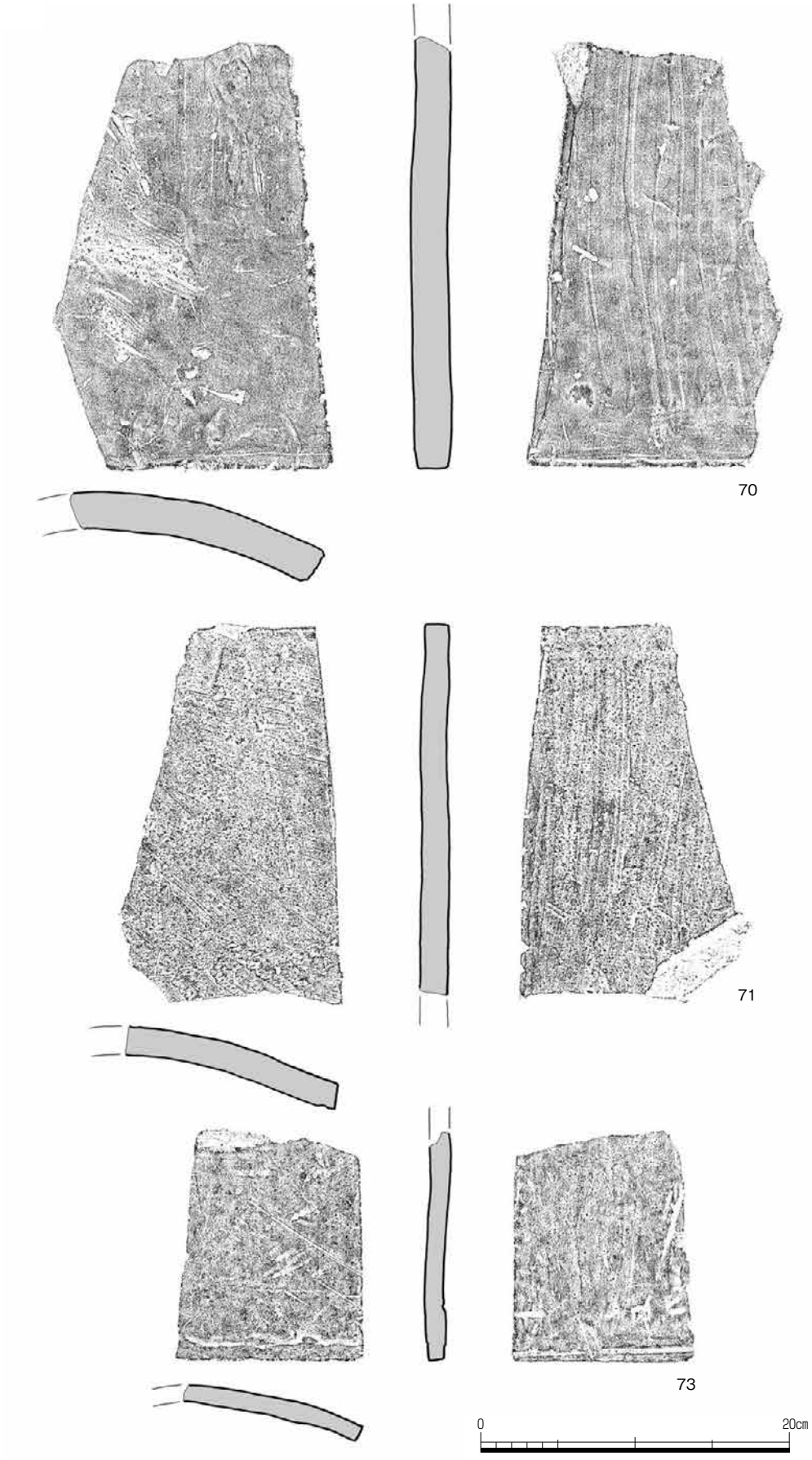


Fig. 114　平瓦Ⅱ類（7）　SD4310出土　1：4

凹面はほぼ未調整で、桶枠板、布目の各痕跡を残す。枠板幅は3.0～3.5㎝。色調は灰白色で、焼成は硬質、胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、赤色粒子を含む。厚さ2.1㎝。NH24地区の中層出土。本調査区で出土した平瓦Ⅱ類で、このような凹面未調整の資料は少ない。

73は広端部。凸面はナデ調整する。厚みを整えるために、端部の粘土をナデつけている。側面調整はc0手法。凹面はナデ調整するが、布目痕跡をわずかに残す。広端部より3㎝ほど内側の位置に、幅0.2㎝の凹線が断続的に走る。桶枠板の綴じ紐痕跡の可能性がある。色調はにぶい黄橙色で、焼成は軟質、胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、石英、長石が多い。厚さ1.3㎝。NH23地区の上層出土。本調査区で出土した平瓦Ⅱ類のなかで、非常に薄手の部類である。

74は木目が目立つ工具によって凸面を調整した資料。凹面はタテ方向にナデ調整し、布目痕跡を残さない。色調は灰白色で、焼成はやや硬質、胎土は石英、長石、黒色粒子を少量含む。厚さ2.1㎝。NI32地区の中層出土。SD4130では1点のみ出土した。

井戸SE4740出土瓦　2.1～2.5㎝の厚みで、凹面調整はナデ、焼成はやや軟質のものが主体的である。側面調整はc0手法、c1手法、c3手法に分かれる。凸面と側面が鈍角をなすものを若干含む。大部分が小片であり、製作の痕跡を確認するのは困難である。残存状況の良好な資料がないため、図示しない。

以上、平瓦Ⅱ類について遺構別の特徴を述べたが、凹面調整はナデを施し布目をほぼ消してしまうもの、側面調整はｃ手法のものが圧倒的多数であると言える。ｂ手法は、わずかにしか存在しない。また、厚みに着目すると、Ⅰ類の正格子、斜格子、平行叩きを施す資料と比較して、粘土素材の厚いものが大多数であると言える。このことから、平瓦Ⅱ類は正格子、斜格子、平行叩き目を磨り消した資料ではなく、縄叩きか、無文叩きが施された平瓦を調整したものである可能性が高い。ただし、縄叩き平瓦は凹面に布目を大部分残し、凸面と側面が鈍角をなすものが目立つため、平瓦Ⅱ類の大部分は無文叩きを調整したものとみるべきであろう。

また、粘土板、粘土紐、一枚作り等の成形方法については、凹面調整が丁寧になされる場合が多いために区別が困難であった。ただ、破面観察によっても、粘土紐であることが明確にわかる資料は非常に少なかった。

桶内巻き作り平瓦　粘土板もしくは粘土紐を桶の内側に巻き付けて成形した後、分割する一群で、いわゆる凸面布目平瓦と称される。

平瓦Ⅲ類（Fig.116-75～78，Ph.69）　調査区全体で36点出土したが、遺構から出土したものはごく少数であり、かつ、飛鳥地域周辺で凸面布目平瓦が盛行する7世紀代の遺構に限るとさらに少ない。いずれも小片であり、全体の大きさが復元できるものはない。残存状況の良い資料を記述、図示する。

75は狭端部。枠板幅は2.6㎝前後。凸面は未調整だが、一部布目痕跡がつぶれる。狭端部から8～9㎝の位置に、凹線が枠板の起伏に沿って波状に走る。桶の綴じ紐か。側面調整はc3手法。凹面は板状工具でヨコナデ。端部は面取りなし。焼成は硬質で、色調は灰色。胎土に石英、長石を多く含む。厚さ2.2㎝。NN24地区の中世井戸SE4790掘方から出土。

76は凸面に丁寧にタテナデを施し、枠板と布目痕跡の大部分を消す。枠板幅は4.6㎝前後か。側面調整は面取り幅が大きいc2手法による。凹面は丁寧にヨコナデ。焼成はやや軟質で、色調はにぶい黄橙色。胎土には石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.7～2.3㎝。SE4740周辺出土。

77は枠板幅2.8㎝前後。凸面は未調整だが、一部布目痕跡がつぶれる。側面調整は面取り幅が大きいc2手法。凹面はヨコナデで、さらに板状工具で斜め方向に軽くナデる。焼成はやや軟質で色調はにぶい黄橙色。胎土には石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.9～2.1㎝。SK4734出土。

78は、枠板幅2.7㎝前後。凸面は枠板の段差部分をナデ消す。側面調整は、凹面に比べ凸面の面取り幅が大きいc3手法による。凸面に撚り紐痕跡とみられる凹線が縦に走る。凹面はヨコナデ。焼成はやや軟質で、色調はにぶい黄橙色。胎土には石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ2.6～2.7㎝。NO21地区の包含層出土。

79は、枠板幅2.7㎝前後。凸面にはヨコナデを施すが、段差と布目痕跡がわずかに残る。側面調整はc3手法。凸面に、撚り紐痕跡とみられる粒列が縦に走る。凹面はヨコナデで調整。焼成は軟質で、色調は橙色。胎土には石英、長石、黒色粒子を含む。厚さ1.7㎝。NM30地区出土。

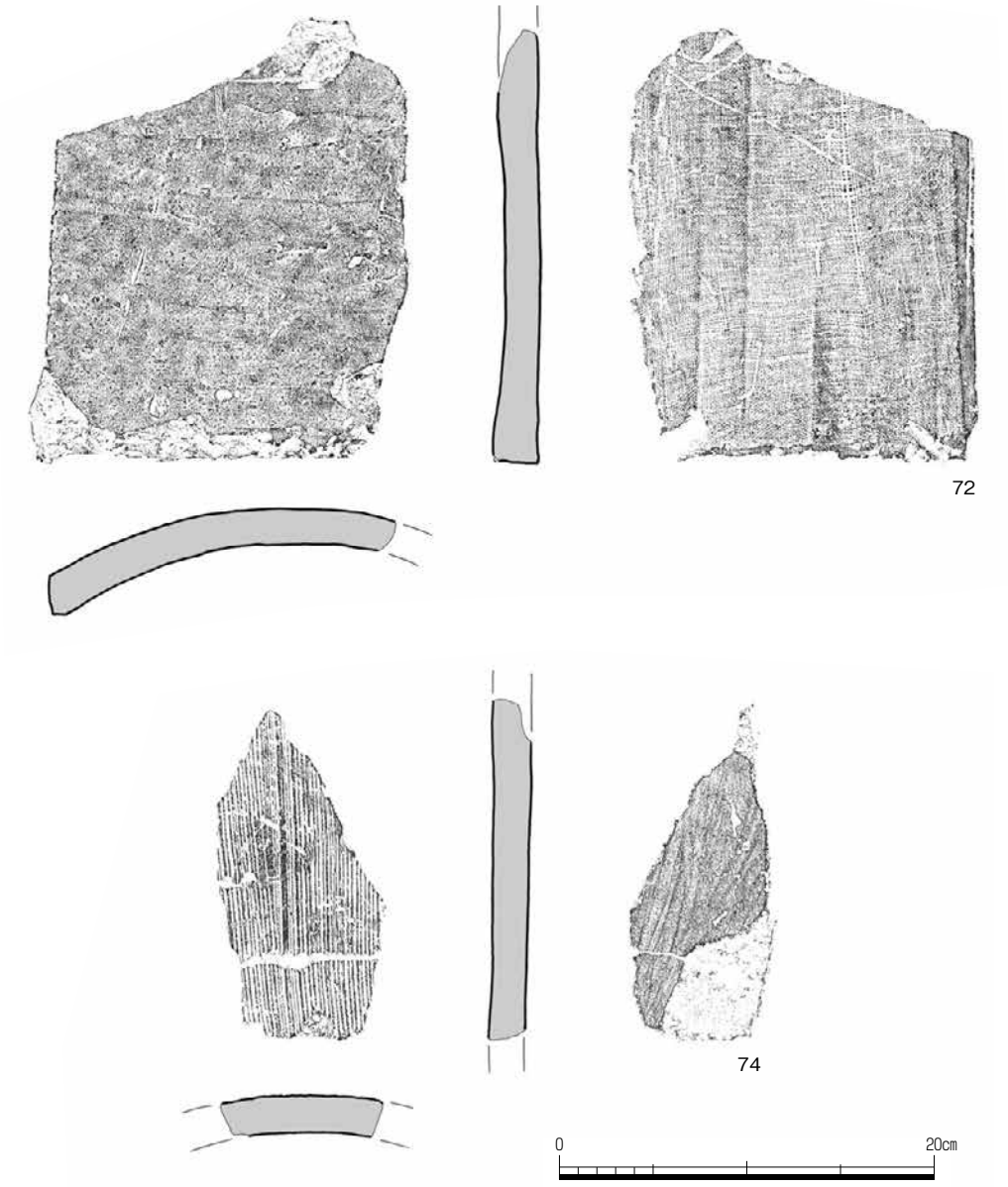


Fig. 115　平瓦Ⅱ類（8）　SD4310出土　1：4

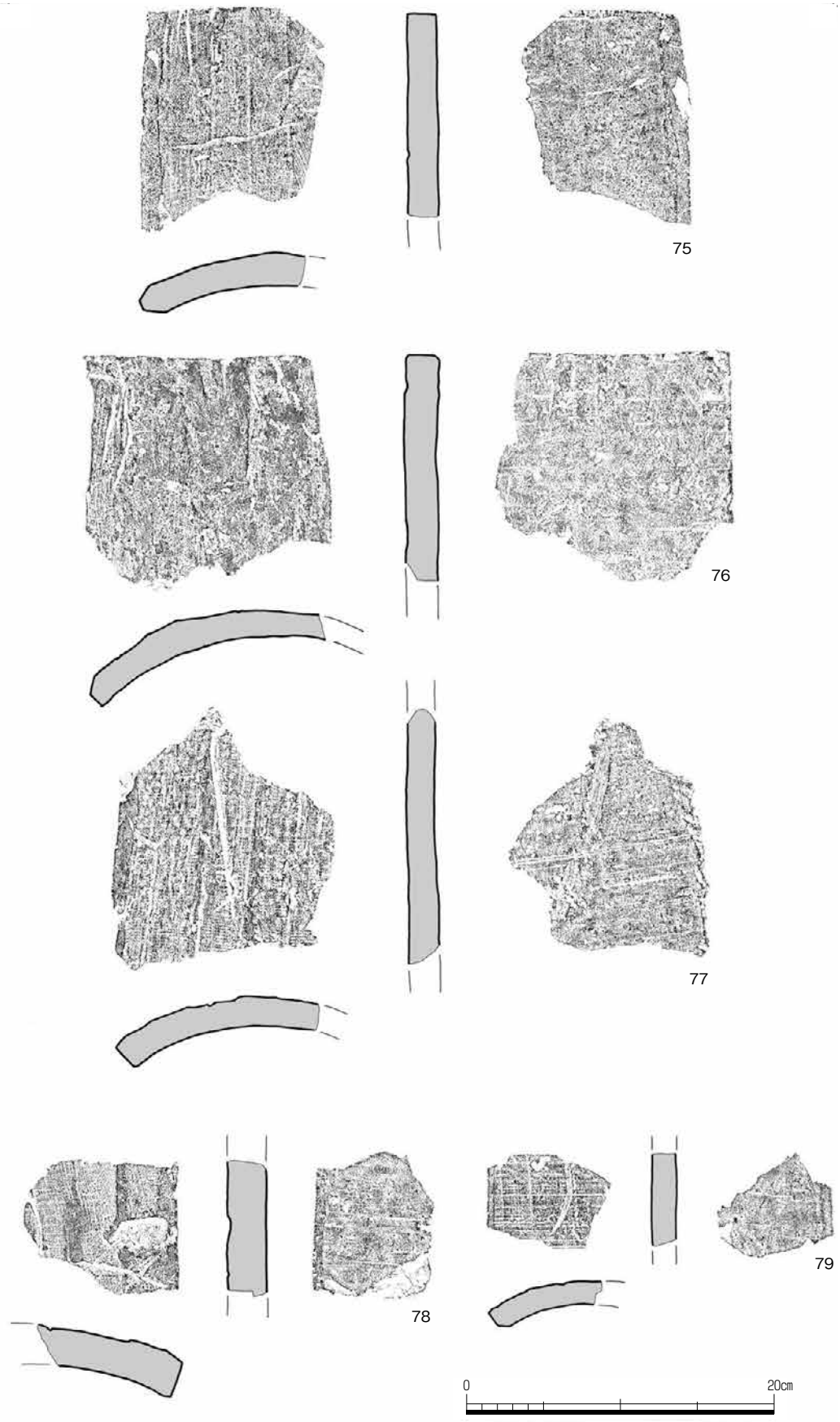


Fig. 116　平瓦Ⅲ類　1：4

今回出土した凸面布目平瓦の大部分は、凸面の桶枠板の段差を残し、未調整か一部をナデ調整、凹面はヨコナデ調整、側面調整はc3手法、枠板幅は2.4～2.8cm前後という特徴をもつ。凸面に、糸切痕跡や縦方向の撚紐痕跡を認める資料もある。色調と焼成は、灰色～暗灰色で硬質のものと、黄橙色～橙色でやや軟質のものの、大きく2種類がある。このような特徴は、小山廃寺の凸面布目平瓦に共通し、なかでも小谷徳彦が「3類」としたもの[22]とみられる。小山廃寺の凸面布目平瓦は多様であるなか、本調査区では一定の特徴をもつものに偏って出土したことは興味深い。

ii　中世の遺構出土丸瓦・平瓦

本調査区で、中世の遺構から出土した丸瓦・平瓦は、総重量約500kgである。出土地点は、SD4755等などが所在する調査区の北西部に集中している。調査区の他の場所では井戸などから出土したが、量はごくわずかである。

SD4755をはじめとする調査区北西部の溝や土坑では、規格のそろった丸瓦・平瓦が多量に出土した。それらをみると、法量や調整が非常に似通い、主体となる種類はほぼ一つに限定されるとみてよい。同じ遺構から出土した軒瓦の型式のまとまりを考えても、問題ないであろう。この主体となる種類に加えて、異なる種類のもの、そして混入品として古代の丸瓦・平瓦が若干含まれるというのが、本調査区における中世遺構出土瓦の状況である。

以上のことから、中世の丸瓦・平瓦のパターン抽出は、古代の丸瓦・平瓦に比べて容易であると言える。したがって、古代の丸瓦・平瓦で試みたような「成形方法」や「調整」に基づく分類や、遺構別に属性の傾向をみる作業は行わず、SD4755等で主体をなす種類と、若干数存在するその他の種類について記述、図示する。

a　丸　瓦

玉縁式と行基式がある。玉縁式をⅰ類、行基式をⅱ類とする。

丸瓦ⅰ類（Fig.117・118-1～5，Ph.74）　SD4755等出土丸瓦の大多数を占める。

1は完形。筒部凸面は、縦位縄叩きをタテ方向にヘラ状工具でナデ調整する。玉縁部凸面はヨコ方向にナデ調整。筒部凹面は軽くナデ調整するが、糸切り、布目の痕跡を全体的に残す。吊り紐は、大部分が布袋の外側に出る通し縫い。側縁は玉縁部と筒部を一連に2cm前後面取りする。広端部は幅5～6cmほど幅広く面取りし、さらに縁辺を0.2cm削る。玉縁端部も0.5～0.8cm面取り。全長33.2cm、筒部広端幅15.6cm、狭端幅14.8cm、筒部厚2.6cm、玉縁長4.8cm、重量2.29kg。焼成は硬質で、色調は灰色。胎土は石英、長石、雲母をごく少量含む。SD4755出土。

2はほぼ完形。調整は1と同様。筒部凹面には布の綴じ合わせ目痕跡が残る。全長33.7cm、筒部広端幅15.4cm、筒部狭端幅15.2cm、筒部厚2.5～2.8cm、玉縁長5.2cm。焼成は硬質で、色調は灰色。胎土は石英、長石、雲母、黒色粒子、褐色粒子を少量含む。SD4755出土。

3は段部から4.0cmの位置に径1.5cmの釘穴がある。凸面から凹面への焼成前穿孔。調整は1と同様。凹面の吊り紐痕跡には結び目が認められる。筒部狭端幅15.3cm、筒部厚2.6～2.8cm、玉縁長4.5cm。焼成はやや軟質でにぶい黄橙色。石英、長石、褐色粒子を含む。SD4755出土。

4は、玉縁部端部から2.9cmの位置に径1.3cmの釘穴がある。凸面から凹面への焼成前穿孔。ま

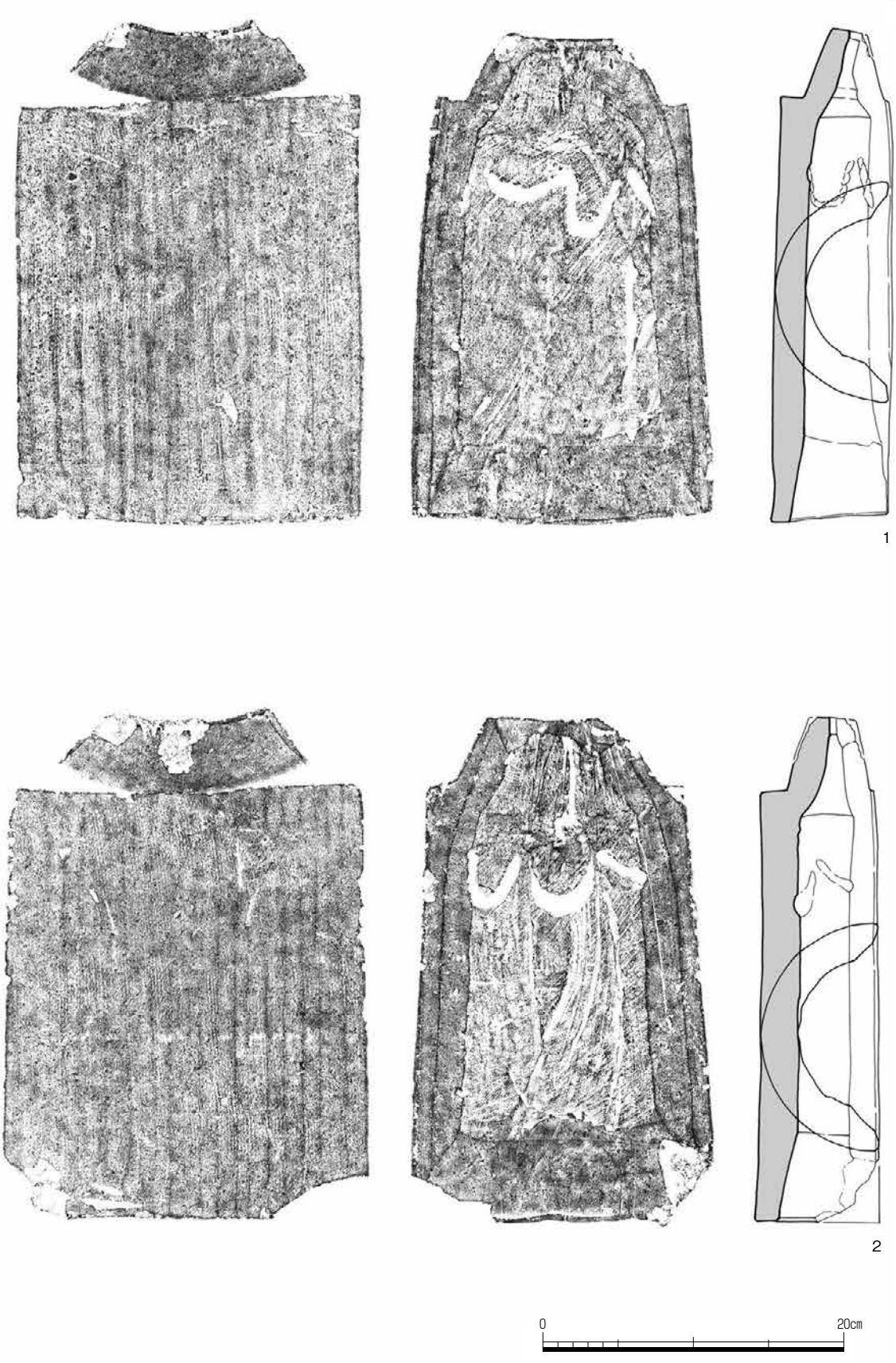


Fig. 117　中世丸瓦ｉ類（1）　1：4

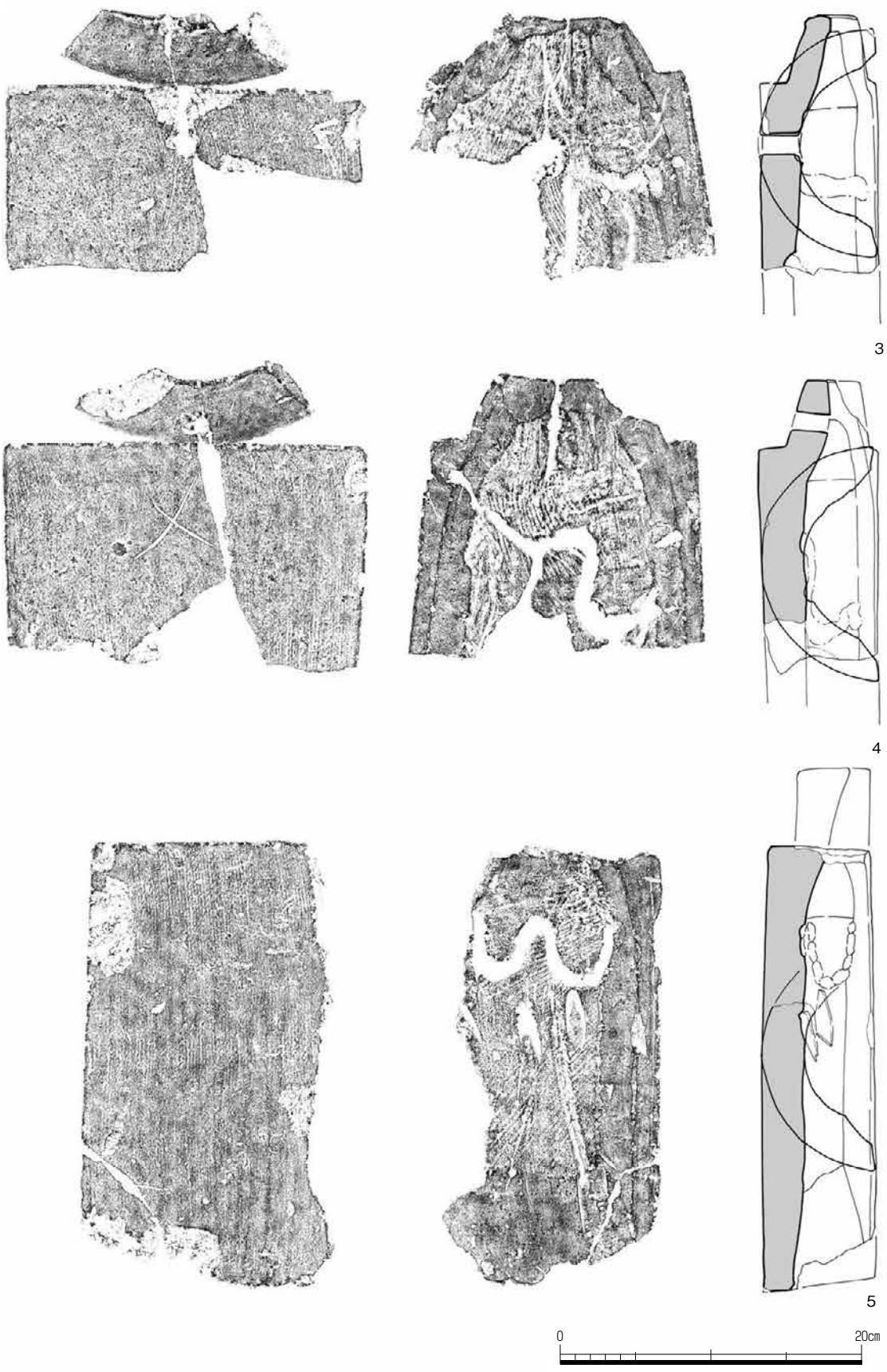


Fig. 118　中世丸瓦ｉ類（2）　1：4

た、筒部凸面に「×」の刻線がみられる。調整は1とほぼ同様だが、玉縁部凹面端部の面取りが2.0～3.0㎝と幅広い。筒部凹面の吊り紐痕跡には側縁寄りに結び目が認められる。筒部狭端幅15.8㎝、筒部厚2.6～2.9㎝、玉縁長4.5㎝。焼成はやや硬質で、色調は灰褐色。胎土は石英、長石、雲母、褐色粒子を含み、石英、長石が多い。SD4755出土。

5は筒部凹面に楕円形の圧痕を3箇所に残す。圧痕は玉縁側が狭く、深い。深い方が広端側を向く資料も他に存在する。機能は不明。焼成はやや軟質で、筒部厚2.5～2.7㎝。色調はにぶい橙色。胎土は石英、長石、雲母、褐色粒子を含む。SD4745出土。

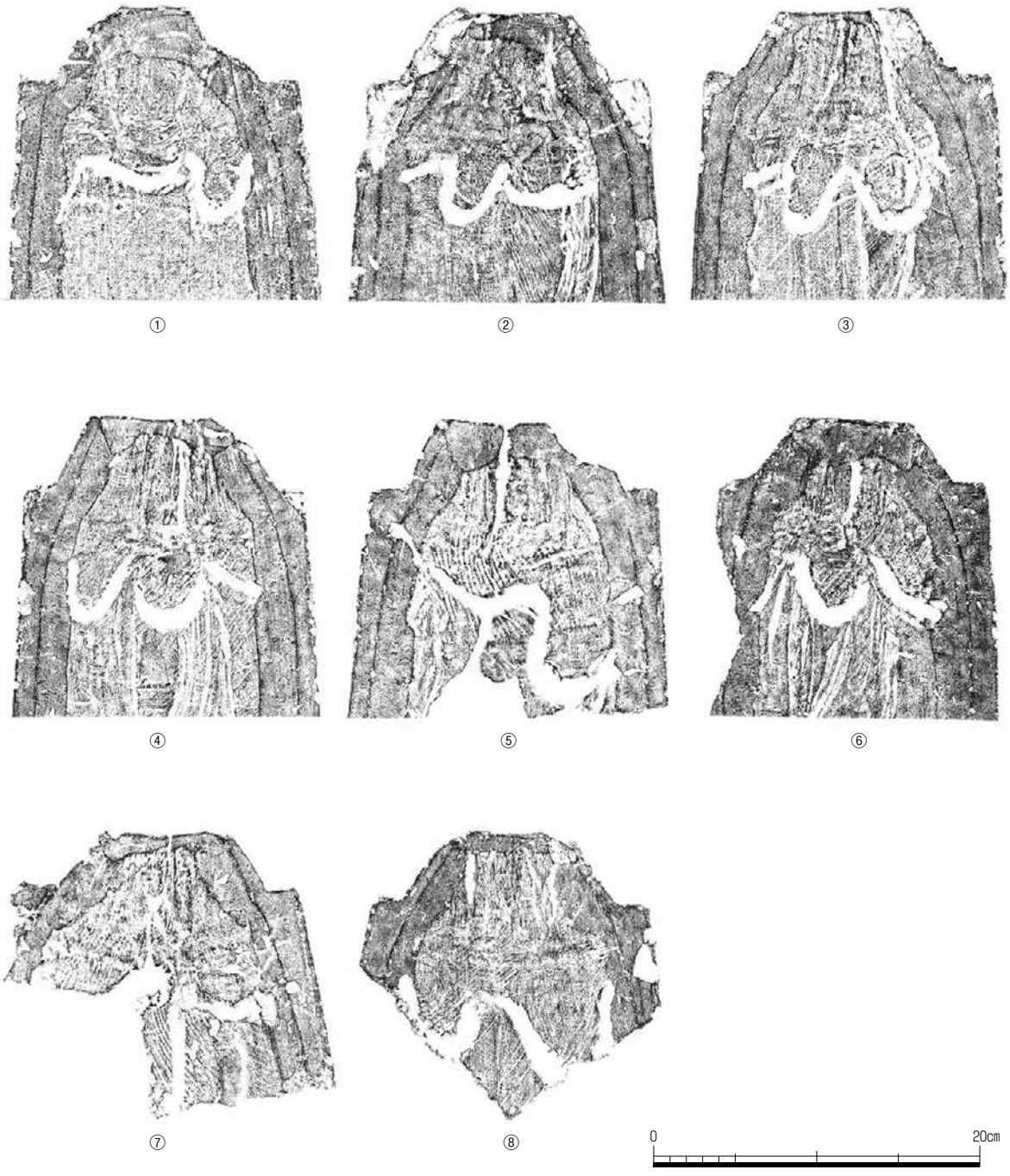


Fig. 119　中世丸瓦ⅰ類凹面の吊り紐パターン　1：4

ⅰ類丸瓦にみられる吊り紐痕跡のうち、残存状況の良好なものを分類すると、8パターンに分類することができる（Fig. 119）。丸瓦は粘土円筒を二分割して製作することから、少なくとも4種類の布袋が存在することになろうか[23]。また、吊り紐の結び目が筒部の側縁付近にくるか、どこにも現れないものが多いことから、結び目が分割突起の役割を果たし、分割の際の目安になっていた可能性が高い。

丸瓦ⅱ類（Fig. 120・121-6～8，Ph. 74）　SD4755・4744、SK5015で少数出土した。

6は、凸面をタテ方向にヘラナデ調整し、狭端付近はさらにヨコ方向にナデ調整。凹面は一部ナデ調整するが、吊り紐、糸切り、布目の各痕跡を残す。吊り紐は通し縫い。側縁は幅1.5cmほど面取りする。その後、狭端部を幅2.5～3.0cmほど面取り。復元幅15.3cm、狭端部幅9.3cm、厚さ2.0～2.4cm。焼成はやや硬質で、色調は黄灰色。胎土には石英、長石、褐色粒子を含む。SD4755出土。

7の調整は、6と同様である。凸面に、長さ3～5cm前後の刻線が平行して斜めに7条走る。また、凸面側縁を幅0.3cm面取りする。復元幅15.0cm、狭端幅8.7cm。厚さ2.1～2.3cm。焼成はやや硬質で、色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土には、石英、長石、褐色粒子を含む。SD4755出土。

8の調整は6と同様。復元幅14.0cm、厚さ2.2cm。焼成は硬質で、色調は灰色。胎土には石英、長石、褐色粒子を含む。SD4755出土。

ⅱ類はⅰ類に比べて出土数が非常に少ないが、吊り紐痕跡のパターンがいずれもⅰ類にみられた8パターンに含まれる。6の吊り紐パターンはFig. 119の④であり、7・8は吊り紐の残存状況が良くないが、それぞれFig. 119の⑥、③の可能性がある。また、ⅰ・ⅱ類ともに筒部幅や復元幅、狭端にかけての屈曲の度合いが近似する。このことから、丸瓦の構造が異なっても同一の布袋、ひいては同一の型で製作していた可能性が高い。

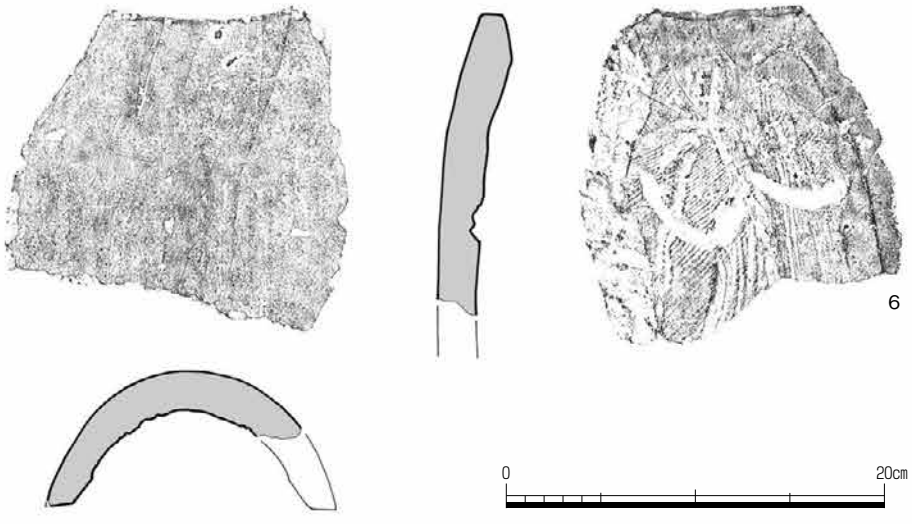


Fig. 120　中世丸瓦ⅱ類（1）　1：4

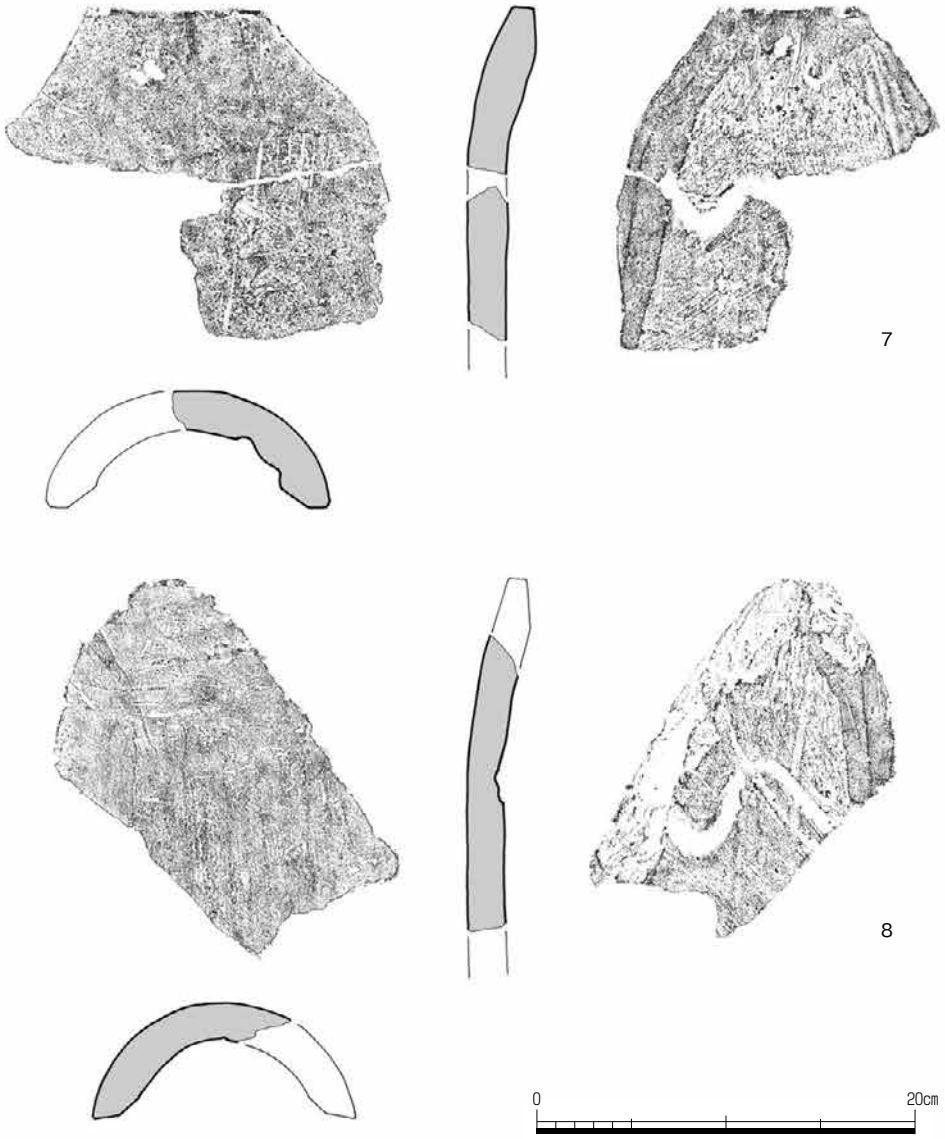


Fig. 121　中世丸瓦ⅱ類（2）　1：4

b　平　瓦

凸面を丁寧にナデ調整するものをⅰ類、叩き目を明瞭に残すものをⅱ類とする。

平瓦ⅰ類（Fig. 122～124-1～3，Ph. 75）　SD4755等から出土した平瓦の大多数を占める。

1は、凹面を丁寧にナデ調整し、糸切り痕跡を広端部の一部にしか残さない。狭端縁は幅1cmほど面取りし、側縁は角を丸く仕上げる。凸面もナデ調整するが、広端部付近の糸切り痕跡が大部分残る。凸面側の側縁に面取りはない。凹面に比べ、凸面の表面がざらつき、砂粒が目立つことから、凸面に離れ砂がまかれた可能性がある。全長31.4cm、狭端幅23.0cm、広端幅24.3cm、厚さ2.0～2.2cm。焼成はやや硬質で、色調は灰白色。胎土には石英、長石、雲母、褐色粒子を含む。SK5015出土。

2は1とほぼ同一法量だが、凹面側の四周に面取りを施す。調整も1と同様。焼成はやや硬質で、黄灰色を呈する。胎土には石英、長石、雲母、黒色・褐色粒子を含む。SK5015出土。

3は狭端部から5.2cmの位置に径1.1cmの釘穴を設ける。凹面から凸面への、焼成前穿孔である。凹面はナデ調整するが、布目痕跡が完全には消されていない。狭端縁と側縁には、面取りがない。凸面はナデ調整するが、狭端付近には糸切り痕跡を残す。また、側縁にわずかにバリ状の突出がみられるのは、凹型台を用いたためか。焼成はやや硬質で、色調は灰黄色。胎土には石英、長石、黒色粒子、褐色粒子を含む。SK5015出土。

平瓦ｉ類は、上記の資料のように灰色でやや硬質のものと、橙色で焼成がやや軟質のものに

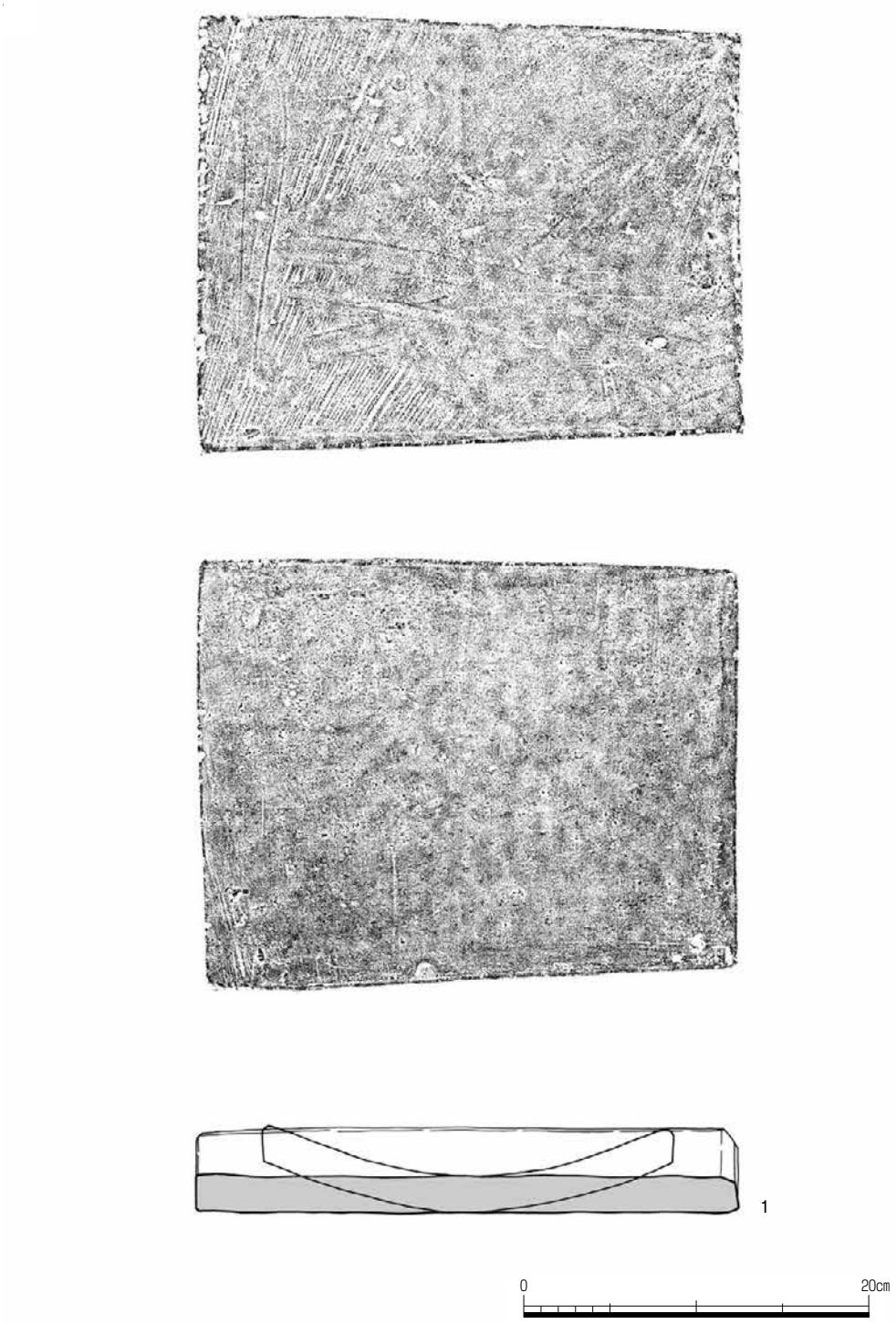


Fig. 122　中世平瓦ｉ類（1）　1：4

大別することができる。後者は、残存状況の良好な資料が少ない。

平瓦ii類（Fig.124-4・5，Ph.75）「＊」文様と直線を組み合わせた叩き目をもつもの。SE4790とその付近の包含層でのみ少数出土した。

4は狭端部。凹面はナデ調整し、狭端縁を1㎝ほど面取りする。凸面の叩き目が一部つぶれ、側縁にバリ状の突出がみられるのは凹型台を用いたためか。凹凸面の表面には砂粒が目立ち、離れ砂の可能性がある。厚さ1.9～2.1㎝。焼成はやや硬質で、色調は灰色。胎土には石英、長石、

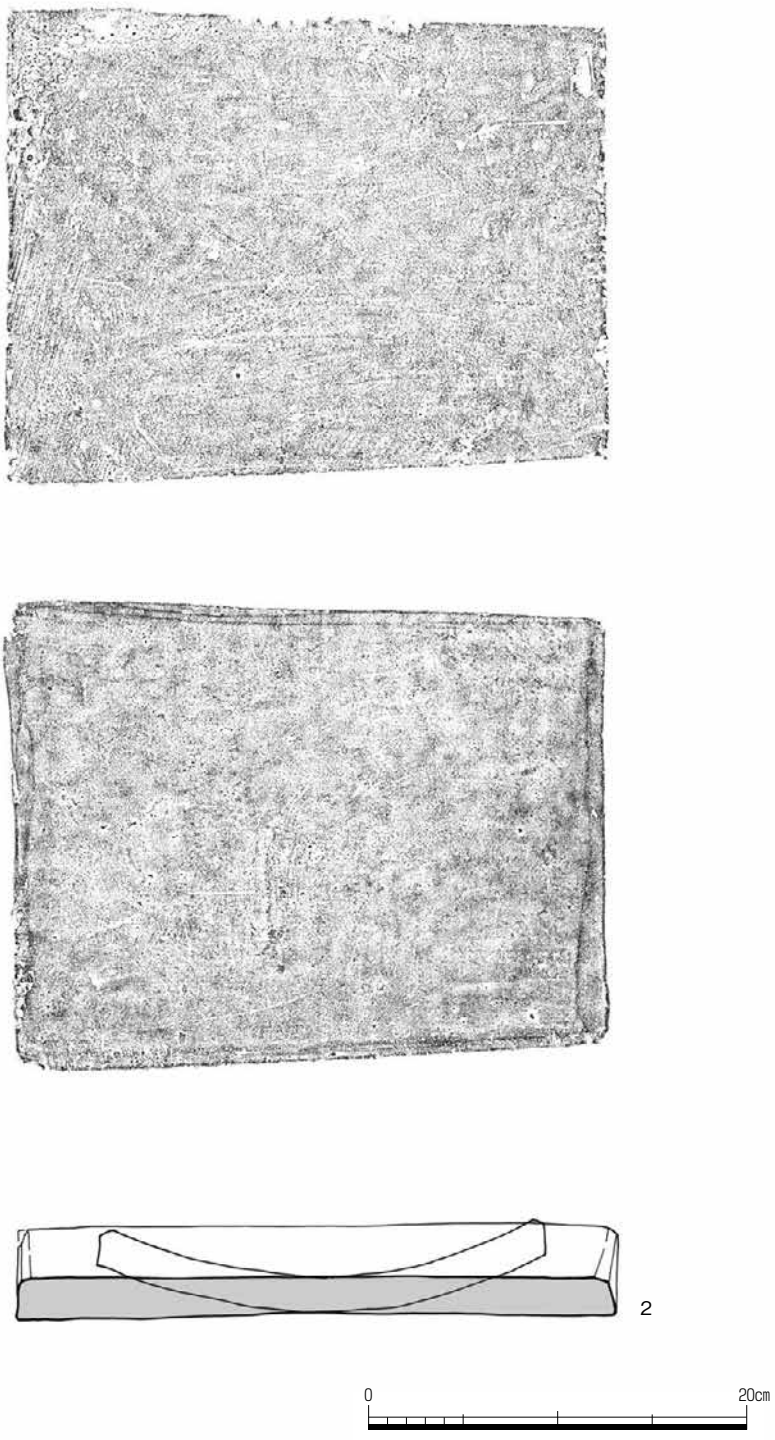


Fig. 123　中世平瓦ｉ類（2）　1：4

雲母、黒色粒子を含む。

5は二次的に被熱したとみられる、煤が付着した資料。狭端部分であり、4と同様の調整が施されている。ただし、凹面狭端縁の面取りはない。厚さ1.9～2.1㎝。色調は灰色を呈し、胎土には石英、長石、雲母、黒色粒子を含む。厚さ2.4㎝。焼成、色調、胎土ともに4と同様である。

以上が、本調査区で検出した中世の遺構から出土した丸瓦・平瓦の概要である。出土量や出土した遺構、およびその特徴から考えると、丸瓦ⅰ・ⅱ類、平瓦ⅰ類が軒丸瓦8A型式・軒平瓦8型式と、平瓦ⅱ類が軒平瓦7型式と一緒に用いられたとみてよいだろう。SE4790における丸瓦の出土量がごくわずかであるため、平瓦ⅱ類とセットになる丸瓦の存否は明らかにし得なかった。

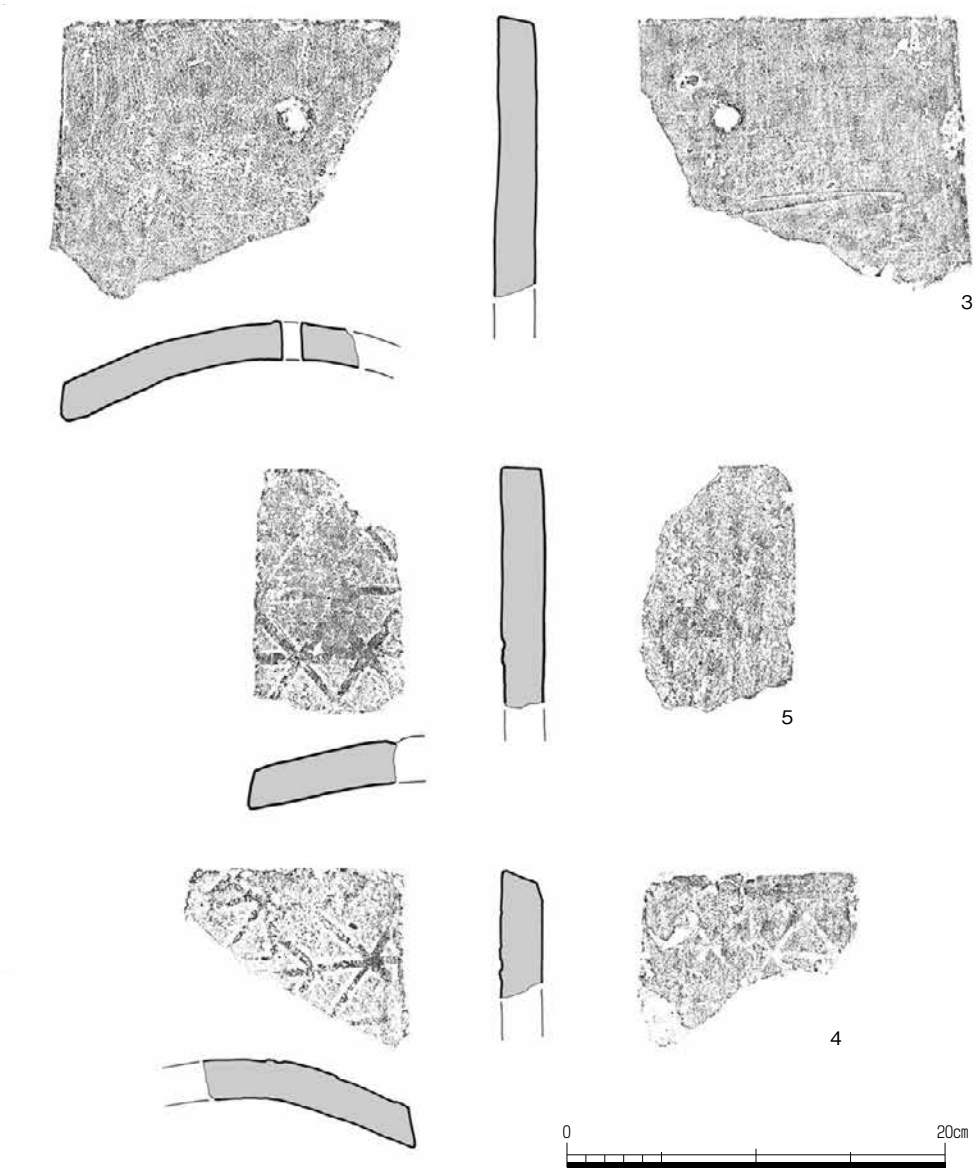


Fig. 124　中世平瓦ⅰ類（3）・ⅱ類　1：4

D　塼　仏

方形三尊塼仏の破片９点が出土した。出土地点を調査区全体からみると、北西部にまとまる傾向がある。出土した方形三尊塼仏にはＡ・Ｂ[24]の２種がある。

方形三尊塼仏Ａ（Pl.13-1）　長方形の区画内に、宣字座に倚坐し定印を結ぶ如来形を中心に置き、両脇侍に合掌する菩薩立像を配する三尊形式の塼仏である。主尊は袈裟を偏袒右肩として二重円光の頭光をもち、背には後屏を表す。脇侍の頭光はともに一重円光。三尊ともに茎のある単弁の蓮華座に乗るが、蓮華座の蓮肉部に蓮子の表現はない。主尊の上方には宝珠を戴く天蓋が懸けられ、その左右に飛天を配す（以下、左右は主尊を基準にする。）。右の飛天は両手を左右に伸ばし、左の飛天は右側の手を胸元に、左側の手に華籠を持ち上方に掲げる。主尊後部の両側には菩提樹を表現する。大きさは完形品で縦21～24cm、横16～19cm。奈良県橘寺、同川原寺、同坂田寺等に出土例がある。

１は、主尊右側足部、左側かかと、衣文、蓮華座、および宣字座の一部であり、下端側面の一部を残す。図像の表出は明瞭である。塼面に白色、および赤色を呈する付着物が認められ、蛍光Ｘ線分析の結果、白色の付着物からは鉛が、赤色の付着物からは水銀が検出された。裏面の観察から粘土を上端側より詰め、下端部側からナデつけることにより、平滑にしたことがわかり、一部に浅い木理条痕をとどめる。胎土は精良、焼成は堅緻、明褐色を呈する。縦残存長8.8cm、横残存長5.8cm。塼面の厚さ1.8cm。NP22地区の包含層出土。

方形三尊塼仏Ｂ（Pl.12・13-2～5）　Ａと同様、長方形の区画内に、宣字座に倚坐し定印を結ぶ如来形を中心に置き、両脇侍に合掌する菩薩を配する三尊形式の塼仏である。主尊は袈裟を偏袒右肩とし、茎のない単弁の蓮華座に乗る。光背は、２条の縦線と珠文からなる車輻文の円光の周囲に、中心に珠文をもつ12個のＣ字形を巡らす頭光と、火焔を表現した身光からなる。各Ｃ字形の間にはさらに栓形花を配す。左右の菩薩は同形で、茎の付く複弁の蓮華座に立ち、頭光は一重円光である。腰部分の裳とＸ字形の瓔珞は繊細に表現され、左右両脇には肩から天衣が下がる。天衣の裾が左右の縁上にかかることが特徴である。三尊ともに蓮華座の蓮肉部に蓮子を表現する。主尊の上方には宝珠を戴く天蓋がかかり、その左右に飛天を配す。右の飛天は両手を上方に折り曲げ、左の飛天は右側の手を胸元に、左側の手に華籠を持ち上方に掲げる。左右の飛天より下方に向かって２組の飛雲文を置く。主尊後部両側の菩提樹は、５葉を上方で展開する。三重県夏見廃寺[25]、奈良県駒帰廃寺[26]、同二光寺廃寺[27]、同藤原宮西南部外周帯[28]（Fig.125）等に類例がある。夏見廃寺例の復元で、縦21.3cm、横14.0cmとなる。

出土した８点の破片のうち４点（2）と２点（5）が接合し、残存部位、焼成、色調などから、2・3・5と4に分かれ、2と5は主尊蓮華座の右端蓮弁が共通することから別個体であり、最低３個体、多くて４個体があるものとみられる。

Fig. 125　藤原宮出土方形三尊塼仏Ｂ
（縦残存長：13.8cm）

2は左下隅の破片である。4点（a～d）が接合した。左脇侍の頭光、足部、天衣、主尊の身光、腕、衣文、宣字座、蓮華座、および右脇侍の蓮華座に一部かかる。宣字座の左下隅の外側に釘穴があり、0.2㎝角の銅釘の脚が遺存している。銅釘は表面側が尖端状になる。塼面に白色の付着物が残る。白色の付着物の表層には、褐色の付着物が遺存する箇所がある。また、釘孔の周囲で金箔が確認された。蛍光X線分析の結果、白色の付着物はケイ素・アルミニウムを主成分とする白土であること、褐色の付着物は赤外分光（FT-IR）分析の結果、漆を主成分とすることが判明した。また、赤褐色の付着物をとどめる箇所があり、蛍光X線分析の結果、鉄系赤色顔料であることが確認された。裏面は、布圧痕をとどめる押圧の後、その窪みに補充のための粘土を薄く重ね、さらに板状工具によるナデを行い平滑に仕上げる[29]。部分的に褐色の付着物（漆）が認められる。側面は長軸方向にほぼ平行する浅い木理条痕を残し、平滑に仕上げる。表面は灰黒色、内部は暗灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。縦残存長12.8㎝、横残存長13.1㎝。厚さは、周縁部で1.6㎝を測り、四周に幅3.5㎜、塼面から高さ約2㎜の縁部が巡る。a・b・cはNL34地区の井戸SE5023、dはNP32地区包含層からの出土。

3は主尊頭光右部の破片で、菩提樹の枝と葉、頭光の一部が残る。右下から5つ目のC字形の位置にあたる。塼面にわずかに白色の付着物が残る。裏面は剥離している。縦残存長4.5㎝、横残存長3.9㎝、残存厚1.3㎝。胎土、焼成、色調は2と類似する。HM24地区の溝状土坑SK4510からの出土。

4は左脇侍の胸部分の破片である。合掌する手と胸飾り、頭光の下端、および主尊の左辺身光の一部が残る。裏面は大きく剥離するが、笵詰めの状況を表している可能性がある。橙褐色を呈し、焼成は堅緻。二次的な加熱を受けた可能性がある。縦残存長3.8㎝、横残存長4.5㎝。外縁部の厚さ1.5㎝。外縁の幅約0.3㎝、塼面からの立ち上がりは約0.2㎝。NM30地区の中世大溝SD4755からの出土。

5は右下隅の破片である。2点（e・f）が接合した。主尊の右側足先と蓮華座、右脇侍の両足、左側の天衣、蓮華座が残る。蓮華座の蓮肉部には、沈線により周環を表現した蓮子が配される[30]。宣字座左下隅の外側に約2.5㎜角の釘穴を開ける。塼面にわずかに白色の付着物（白土）と褐色の付着物（漆）が残る。裏面と側縁には、長軸方向の木理条痕が残る。残存長6.4㎝、横残存長7.0㎝。胎土、焼成、色調は2と類似する。2点ともNP33地区包含層からの出土。

これら方形三尊塼仏Bについて縦幅は不明であるが、横幅は2と5の組み合わせにより約13.7㎝となる。

なお、これら塼仏については、胎土や付着物に関して自然化学分析を行った。その結果、焼成後に白色下地を行い漆塗布の後金箔をおく、あるいは赤色顔料による彩色を行っていたことが判明した。飛鳥時代の塼仏において、こうした彩色や色の使い分けが行われていたことは、橘寺出土塼仏の分析から指摘されていた[31]が、新たな類例を加えたことになる。また、方形三尊塼仏Aでは、鉛系白色顔料と水銀朱、方形三尊塼仏Bでは、白土と鉄系赤色顔料というように、型式によって白色下地および赤色顔料の組み合わせが異なることも判明した。詳細な結果については、第Ⅴ章4を参照されたい。

1）『吉備池廃寺発掘調査報告』では本調査区出土軒丸瓦ⅠAが11点、軒丸瓦ⅠBが14点、種別不明が6点としたが、今回改めて数え直したため、数値が異なっている。

2） 大阪府泉南市海会寺で確認されている同笵瓦にも、側面に笵端痕跡が確認されている。泉南市教育委員会1987『海会寺―海会寺遺跡発掘調査報告書―』。

3） 大脇潔1991「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』奈文研学報第49冊。以下、側面調整の分類はこの書による。

4） 近江俊秀1999a『7世紀後半の瓦づくり―藤原宮跡とその周辺寺院出土の軒瓦を中心として―』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別陳列図録第1冊。近江俊秀1999b「7世紀後半の造瓦の一形態―明日香村小山廃寺を中心として―」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集。

5） 長林寺白鳳時代の軒丸瓦は、報告書（河合町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所1990『長林寺』河合町文化財調査報告第3集）においてAとBの2型式が設定されていたが、その後大西貴夫によってそれらは同笵彫り直しであり、同一型式と訂正され（大西貴夫2009「平隆寺と長林寺の法隆寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅳ』奈文研）、彫り直しの前後で4a、4bと設定している。大西は以下に述べる10も4b同笵と書いているが、あらためて河合町所蔵長林寺出土4bと照合したところ、花弁の子葉が4bよりも長く、深く彫られ、本来は面違いである鋸歯文は線刻で表現され、また、外区鋸歯文帯の幅が4bよりも狭く、外縁はより幅広であることが判明した。したがって10は4bの彫り直しとみられる。瓦笵以外の点でも、長林寺4bに比べて瓦当が非常に厚く、胎土が精良で、焼成が堅緻であるという大きな違いがある。同様に4b型式同笵とされてきた藤原宮内裏出土資料（奈文研2000「内裏地区の調査―第100次」『年報2000-Ⅱ』）も10と同様の特徴をもつ。

6） 奈文研1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』。藤原宮所用、大官大寺所用軒瓦の型式については以下出典同じ。

7） 最初の段階からすでに笵傷があるため、他の地で用いられていた瓦笵が移動してきた可能性がある。

8） 外縁上面端よりも0.6㎝ほど内側に入っている。同型式別個体にも、同様の凸線が確認できるものがあるが、外縁端からの距離は0.2～0.5㎝と一定ではない。B型笵の痕跡の可能性があるが、同一個体の外縁幅に広狭があることからも、瓦当部笵径が実際の瓦当径よりも若干小さいのであろう。丸瓦取り付け位置から考えて、笵枠は長方形と考えられる。

9） 取り付け位置を確認できる資料14点中、20と同位置のものが8点、180°ずれるものが6点である。笵傷との対応はみられない。

10） 山崎信二は、中世丸瓦の諸属性のうち、吊り紐の変遷が最も編年に有効であるとする（山崎信二2000『中世瓦の研究』奈文研学報第59冊）。山崎の編年を参考にすると、本型式のように、吊り紐の比率（布に隠れた部分1に対する、布に隠れない縄目の鮮明に見える部分の比率）が1：6～7と大きいものは、14世紀中葉以降に位置づけることができる。さらに山崎は、吊り紐が完全に外に出る「外側のとじつけ」スタイルは1370年頃に出現すると考えており、その説に従えば、本型式のような「布袋の内外に通し縫い」のものは、それ以前に絞り込むことができるだろう。ただし、山崎の編年はあくまでも大和北部の瓦を中心に提示されたものであるため、完全に敷衍できるとは言い切れない。

11）『吉備池廃寺発掘調査報告』では本調査区出土軒平瓦ⅠAを25点、軒平瓦ⅠBを4点、種別不明を3点としたが、今回改めて数え直したため、数値が異なっている。

12） 奈良県立橿原考古学研究所所蔵小山廃寺出土資料と照合させていただき、判断した。以下で述べる軒平瓦2J型式についても同様である。

13） 平田政彦2009「斑鳩とその周辺の法隆寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅳ』奈文研。

14） 佐川正敏によると、「瓦当貼り付け技法」軒平瓦は、1250年前後に各地で採用され、1280年頃までには九州以外の各地に普及する（佐川正敏1995「鎌倉時代の軒平瓦の編年研究」『文化財論叢Ⅱ』奈文研）。そして、室町後期（1495～1548）には再び顎貼り付け技法になるという（佐川口頭発表による。山崎信二『中世瓦の研究』p9に記載。）。また、山崎信二によると、顎後縁の面取りは南北朝期以降、瓦当下縁の面取りは1390年以降に出現するという（山崎前掲註10文献）。

15） 後述する丸瓦・平瓦についても、確実に奈良～平安期に位置づけられる資料（たとえば一枚作り平瓦など）はほとんどみられなかった。見落としがあったとしても、全体の中での割合が非常に低いことは確かである。また、熨斗棟の可能性も低い。

16） 中世の遺構から古代のものとみられる行基丸瓦が1点出土したが、古代の遺構からは出土しな

かった。

17）Ａは正格子叩き目とする。後述する平瓦では確認できたが、丸瓦では未確認である。

18）叩き目の分類は本来、叩き板の分類を目指して行うべきであるが、本調査区出土資料は大部分が破片資料であるため、叩き板の抽出は難しく、瓦片内の限られた範囲に認められる叩き目の分類をするしかない。刻線の太さ、間隔、木目、交差角度によって極力同様の叩き目を省くよう努めたが、別分類とした叩き目同士が、実は同じ叩き板による可能性も完全には否定できない。

19）刻線の間隔は、刻線の心々間で計測した。凹部幅だと、同一の刻線でもつぶれ具合によって大きく変わることによる。

20）先述の通り、叩き板の種類によって粘土の厚みに異なる傾向が認められるため、重量での比較はより有意でないと考える。

21）たとえば、吉備池廃寺の創建期平瓦は、厚みに基づいて厚さ２㎝以上の「平瓦１類」と２㎝未満の「平瓦２類」に分類している。後者のうち、凸面を丁寧にナデ調整する「平瓦２類Ａ」は、側面調整、胎土、焼成に一定の傾向を見い出したが、一方で厚さ２㎝以上とした１類のそれはまとまりに欠け、厚み以上の共通性を見い出すのは難しい。本調査区で出土する厚さ２㎝以上の平瓦のすべてが、吉備池廃寺所用とは言い切れないだろう。

22）小谷徳彦2004「飛鳥における凸面布目平瓦の一事例」『奈文研紀要2004』。

23）パターンの組み合わせを見出し、一枚の布袋を復元するまでには至らなかった。後述の通り丸瓦を半截する場所がほぼ一定で、吊り紐の連続性の把握が難しかったためである。

24）方形三尊塼仏のＡ・Ｂは、大脇潔による（大脇潔1990「塼仏とその製作年代」『特別展 塼仏―土と火から生まれた仏たち―』倉吉博物館）。大脇は塼仏の型式を、板状部分の形、仏像の数などによって区分したうえで、同じ原型から作られた代表的な作品についてのみ、アルファベットをつけて区別するとし、橘寺出土例および川原寺裏山遺跡出土例を「方形三尊塼仏Ａ」、三重県夏見廃寺からまとまって出土したものを、「方形三尊塼仏Ｂ」とした。なお、このＡ・Ｂの対応に関して、大脇（1986）（大脇潔1986「塼仏と押出仏の同原型資料―夏見廃寺の塼仏を中心として―」『MUSEUM』No.418 東京国立博物館）を典拠とする文章がある（清水昭博1994「塼仏製作の一様相―図像分析を中心とした方形三尊塼仏Ａの成立についての検討―」『橿原考古学研究所論集　第十二』吉川弘文館。花谷浩2006「川原寺の調査―第133-２次出土瓦磚類」『奈文研紀要2006』）。しかし、大脇（1986）では、同原型資料と考えられる塼仏と押出仏の群別を行い、Ｂ群として方形三尊塼仏Ｂに言及するが、Ａ群は阿弥陀五尊像を中心に置く図像の一群であり、方形三尊塼仏Ａについてはふれていない。

25）名張市教育委員会1988『夏見廃寺』。

26）菟田野町教育委員会・奈良県教育委員会・関西大学文学部1971『奈良県宇陀郡菟田野町　駒帰廃寺（伝安楽寺跡）発掘調査概要』菟田野町。奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2002特別陳列『白鳳のイメージ―奈良県出土塼仏展―』。

27）奈良県立橿原考古学研究所2006「二光寺廃寺」『奈良県遺跡調査概報2005年（第二分冊）』。

28）奈文研1993「宮外周帯の調査（第69-９次）」『藤原概報23』。

29）同様の手法が、夏見廃寺出土例においても観察されている（中東洋行2012「塼仏にみる調整痕の違いについて―夏見廃寺出土塼仏を例に―」『関西大学博物館紀第18号』関西大学博物館）。

30）これに対し、夏見廃寺・二光寺廃寺例では膨らみをもつ突出した蓮子をもつ。本例と夏見廃寺例の蓮子の表現に相違のあることについては、真田廣幸の指摘がある（倉吉博物館1992『特別展 塼仏―土と火から生まれた仏たち―』）。

31）清水前掲註24文献。今津節生1999「塼仏の科学的調査」『橘寺』奈良県文化財調査報告書第80集、奈良県立橿原考古学研究所。

2　土器・土製品

調査区全域から、縄文時代から近世に至るまでの土器・土製品が出土した。土器・土製品は第45・46・47・50・53次調査分で整理用木箱374箱、第133-7・13次調査を含めて397箱分ある。7・8世紀の土師器と須恵器が大半を占め、次いで中世の土師器、瓦器や、古墳時代の土器がある。縄文時代および弥生時代の土器も出土しているが、量的には少ない。土器の大半は東西大溝SD4130と、それに南接する井戸SE4740から出土した。また、SK4325・SE4335・SK4327からもまとまった量の土器が出土した。他の溝や井戸、土坑、柱穴からも出土しているが、量的には少ない。ここでは7・8世紀の土器を中心に報告し、次いで他の時代の遺構出土土器と特殊土器・土製品について報告する。

土器の分類と編年　土器の器種名称は基本的に既刊の奈文研刊行物に従うが、7世紀の土器に関してはこれまでの分類を整理し、別表2・3として呈示する。土師器杯Gについては、杯Ga、Gb、Gcに細分している[1]。なお、同一器種でも法量差がある場合は、大きい方からⅠ～Ⅴの記号を付けて区別している。当該期の土器の大別と年代に関しては『藤原宮報告Ⅱ』において既に枠組みが示されているが、その後の新資料も含め、別表4にまとめた。奈良時代土器の器種に関しては『平城宮報告ⅩⅥ』、群別は『平城宮報告ⅩⅢ』に従う。

調整手法の分類　土師器食器類の調整は、その種類と施す範囲により記号化している（Tab. 3）。c手法のなかで、e手法によって調整した後、外面全体をヘラケズリするが、口縁端部にはヘラケズリが及ばないものをe-c手法として区別している。また、外面のヘラミガキ調整は、その範囲によりTab. 3のように記号化している。以上を組み合わせて、a0手法やc3手法というように調整手法を表記する。

また、内面の暗文については、口縁部に二段放射暗文や一段放射暗文、あるいは一段放射暗文および連弧暗文があり、底部内面には螺旋暗文を施す。放射暗文には、右上がりと左上がりがある。口縁部の連弧暗文については、各円弧間に小円を描く連弧暗文Aと、円弧が連続する連弧暗文Bに細分し、連弧の向きは口縁部に対して凸となる上向きの連弧暗文、底部に対して凸となる下向きの連弧暗文として表記する。

計測の基準　土器の口径や高さ、径高指数については、口縁部が六分の一以上残存する個体に限って表示した。かえりのある杯蓋の口径の計測点については、Fig. 126のbとした。文中の径高指数の数値は（器高÷口径）×100とし、小数点二位以下は四捨五入した。杯Bなどの径高指数は、高台を除いて計測した。

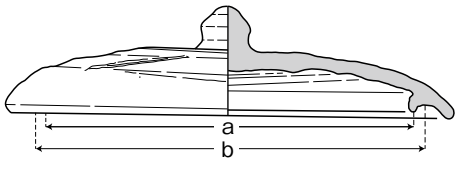


Fig. 126　須恵器杯B蓋・杯G蓋の計測点

Tab. 3　土師器の調整手法

手 法	口縁部外面調整	底部調整
a手法	ヨコナデ	不調整
b手法	ヨコナデ	ヘラケズリ
c手法	ヘラケズリ	ヘラケズリ
e手法	幅狭くヨコナデ	不調整

手 法	ミガキ調整の有無および範囲
0手法	ミガキ調整を施さない
1手法	口縁部のみ
2手法	底部のみ
3手法	口縁部から底部にかけて

A　東西大溝SD4130・井戸SE4740出土土器

i　SD4130出土土器

SD4130は、第53次北調査区から第45・47・50次調査区の北寄りを東西に流れる素掘溝である。溝の方位は東で南に若干振れており、第53次北調査区で南北溝SD4143に接続すると考えられる。六条条間路道路心からは、北に17～25mの距離に位置する。調査では総長124m分を検出したが、東側ほど削平が著しく、東端部ではわずかに溝底部が残るに過ぎない。溝の規模は、第50次調査区西壁で幅11.2m、深さ1.5～1.7mで、第45次調査区西端で幅4.5m、深さ1.1mを測る。8箇所ある土層断面図によると、溝底の標高は75.0m前後でほぼ水平であり、溝底の標高から、水流の向きを確定することは難しい。埋土は、調査時の所見からは、灰色砂礫、茶褐色砂礫を中心とする下層、青灰色粘質土を中心とし、細砂や粘質土が交互に堆積する中層、暗褐色粘質土、茶褐色粘質土、灰褐色粘質土、淡褐色粘質土などからなる上層の大きく3層に分けられる。第50次調査区西壁での各層の厚さは、下層が10～25㎝、中層が70～85㎝、上層が60～80㎝である。下層と中層は溝が機能していた時の流水や滞水により堆積した層とみられ、粘質土の上層は溝が最終的に廃絶した時の埋土と考えられる。

各層出土土器の器種構成は、別表5に示した。SD4130とSE4740については、個体数の算定は、基本的に口縁部が八分の一以上残存するものを対象とした。底部に高台の付く杯Bと皿Bは、口縁部の残存が八分の一に満たなくても、高台部分が八分の一以上残るものは算出対象とした。高杯の脚柱部や細頸壺頸部、平瓶頸部などの部位は、口縁部が残っていない場合でも、二分の一以上が残存していれば数に加えた。盤や竈、横瓶、提瓶などの器種は、口縁部が残っていない場合でも、器種同定が可能であれば算出した。また、各土器の出土地区、法量や調整手法については別表7にまとめたので、合わせて参照されたい。

以下、下層から中層、上層の順に、各層ごとに出土土器の報告を行う。

a　下層出土土器（Pl.14～16，Ph.76・80・81）

土師器（Pl.14）　土師器には、杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯G、杯H、皿A、皿B、皿B蓋、椀C、鉢、高杯A、盤、壺B、甕、鍋、甑、竈などがある。

1～5は杯A。1・2は杯AⅠ、3は杯AⅡ、4・5は杯AⅢである。2は口縁端部を内側に強く巻き込むが、その他は内側にわずかに肥厚させる程度である。1～4は二段放射暗文（以下、二段暗文とする。）をもち、4には底部内面に螺旋暗文がみられる。5では暗文が確認できない。調整は、杯AⅢ（4・5）がa0手法、杯AⅠ（1・2）がb1手法で、杯AⅡ（3）は磨滅のため不詳である。また、1の底部内面にはハケ目が確認できる。5の底部外面には指頭圧痕が目立つ。1は胎土に雲母を、4・5は胎土に赤色粒子を含む。

杯B（6・7）はともに二段暗文を施す。6はa1手法で調整し、胎土に赤色粒子を含む。7は口縁部をヨコナデした後にヘラミガキを施す。両者とも橙褐色を呈する。

杯B蓋（8）は頂部に径4.5㎝ほどの扁平なつまみを有する。口縁端部は肥厚する。内面には螺旋暗文、外面にはヘラミガキを施すとみられるが、風化のために不詳。

9～13は杯C。9が杯CⅡで、他は杯CⅠである。器形は9が若干深く、13は浅めである。11は口縁端部が外側に屈曲する。いずれも一段放射暗文（以下、一段暗文とする。）をもつ。9・12はa0手法、11はa1手法で調整する。13の内面および口縁端部外面には黒色のタール状物質が付着し、灯明皿として用いたと考えられる。

14・15は杯G。口縁端部は丸くおさめるもの（14）と内傾するもの（15）がある。ともに口縁部内面には斜め方向の工具痕がみられる。

杯H（16）は口径約10cmの小型品。ヨコナデにより口縁部が外反する。底部外面のヘラケズリは底部全面には及ばず、一部に不調整の部分が残る。胎土には径1㎜ほどの砂粒を多く含む。

17～19は皿A。18・19が皿AⅠで17は皿AⅡ。3個体とも底部と口縁部との境は明瞭ではなく、口縁部が丸みをもって立ち上がる。口縁端部の形状は、丸くおさめるもの（17）、上端に面をつくるもの（18）、内側に肥厚するもの（19）と様々である。17はb0手法で調整し、暗文の有無は磨滅のために不明。胎土に赤色粒子を多く含む。18・19は内面に一段暗文を施す。b0手法で調整するが、底部外面の一部に指頭圧痕が残る。

20は椀C。口縁端部は内傾し、底部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。

21・22は鉢。21は口縁端部が内側に肥厚し、22は口縁部上端に狭い面をつくる。口縁部の形状は21が開いて終わるのに対し、22は端部付近が内弯気味となる。両者とも内面に一段暗文を施し、21は底部に螺旋暗文も残る。外面の調整は、口縁部から胴部上位まではヨコナデ、胴部中位以下はヘラケズリで、口縁部および胴部上半にヘラミガキを施す。21は胎土に雲母を含む。

高杯A（23）は杯部の破片。口縁端部側面にヨコナデによる弱い凹線をもつ。内面の暗文は二段暗文となると考えられる。外面上半はヨコナデ、下半はヘラケズリで調整し、全体にヘラミガキを施す。

24～26は盤。24は内面に二段暗文および螺旋暗文を施す。外面はヘラケズリの後、上半部にのみヘラミガキを施す。大型の25・26は把手をもつ。25は口縁端部が内側にやや肥厚する。内面には一段の暗文が確認でき、その下には螺旋暗文がめぐる。おそらく二段暗文となるのであろう。胴部外面上半は横方向のナデで調整し、口縁部は端部のみを狭くヨコナデする。浅黄色を呈する。26は同一個体の破片から図上復元した。高台は大ぶりでハの字に開き、端部が外方に屈曲する。底部内面には螺旋暗文があり、胴部には放射暗文をもつ。胴部外面は把手部より下をヘラケズリで調整し、把手付近より上にはヘラミガキを施す。橙色を呈する。

壺B（27～31）は口径7cm、器高5cmほどの小型品（27～29）と、口径14cmほどの中型品（30・31）がある。小型品はほぼ同大同形であるが、27は頸部のくびれが若干弱い。調整は口縁部から頸部をヨコナデするのみで、胴部外面にはユビオサエによる指頭圧痕や粘土接合痕が残る。27はにぶい黄橙色である。28・29はともに浅黄橙色で、胎土に赤色粒子を含むが、28のほうが砂粒の含有量が多い。中型品は口縁部をヨコナデ、胴部をナデで調整する。31の胴部外面には指頭圧痕の凹凸が残る。30は橙色、31は浅黄色を呈する。

32～37は甕。把手の有無は、34を除き不明である。口径により、小型品（32～34）、中型品（35）、大型品（36・37）に分けられる。口縁端部の形状は多様で、つまみ上げるもの（32・36・37）、端部側面に面をもつもの（33）や、丸くおさめるもの（34・35）がある。36は口縁端部の側面が、ヨコナデによりやや凹む。32は胴部外面が縦方向のハケ目、内面はナデで調整する。

33は胴部外面にハケ目を施した後、胴部下半をヘラケズリで調整する。胴部内面には横方向のハケ目を短い単位で施す。34は、口縁部の一部を欠損する以外は完存する。外面は、底部をナデ、胴部下半を目が粗く条線の浅いハケ目で調整する。胴部上半はナデであるが、ユビオサエによる指頭圧痕が多く残る。頸部から口縁部はヨコナデで、頸部には先行して施した縦方向のハケ目がわずかに残る。内面はナデ調整で、口縁部には目の粗いハケ目を施す。35は胴部外面をハケ目、内面をヘラケズリで調整する。36・37は胴部外面をハケ目で調整し、内面は胴部をナデ、頸部から口縁部に横方向のハケ目を施す。32・36・37は都城型[2]、33は近江型、35は河内型である。33は胎土に雲母と砂粒を多く含み、34の胎土は赤色粒子と雲母を、37の胎土は赤色粒子と径1～2㎜の大きめの砂粒を含む。

鍋（38）は、口縁端部がヨコナデにより上下に肥厚する。胴部外面は縦方向のハケ目。胴部内面はナデで調整し、指頭圧痕が残る。頸部内面の一部に焦げが付く。

須恵器（Pl.15･16）　須恵器には、杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯H、杯H蓋、ⅢA、ⅢB、椀A、椀B、鉢A、高杯、盤、壺A、壺A蓋、壺C、壺K、平瓶、提瓶、横瓶、瑞、甕A、甕Cなどがある。

701～705は杯A。701～703は杯AⅡ、704は杯AⅣ、705は杯AⅤで、杯AⅡは器高の低いもの（701）と高いもの（702・703）に二分される。口縁端部の形状は丸くおさめるものが基本であるが、705は内側にわずかに肥厚する。底部外面は、701～704はロクロケズリで、705はヘラ切り不調整である。701・702は胎土に白色微砂を含む。702は焼成がやや不良で、灰白色を呈する。704は底部内面に自然釉が降着する。

706～711は杯B。口径により杯BⅠ（711）、杯BⅡ（708・710）、杯BⅢ（709）、杯BⅣ（707）、杯BⅤ（706）に分かれ、さらに杯BⅡには器高が低いもの（708）と高いもの（710）がある。口縁端部はいずれも丸くおさめる。底部外面の調整は、708・710がロクロケズリで、709はロクロナデと考えられる。706は高台の貼付位置が外に寄り、底部外縁に近い。707は高台が高く、端部を外方に突出させる。口縁端部内面と底部内面が平滑で、墨の付着がみられることから、硯として使用したと考えられる。708は口縁端部内面にタール状の付着物が確認でき、灯火器として使用した可能性がある。胎土に黒色粒子を含み、径1～3㎜の大きめの砂粒が目立つ。709は灰白色を呈し、焼成がやや不良で軟質である。器面は内外面ともに平滑。710の底部と胴部の境はロクロケズリにより明瞭な稜をなし、胴部外面には火襷がある。胎土には黒色粒子と白色微砂を含む。710は、下層出土と上層出土の破片が接合した資料である。711は胎土に白色微砂を含む。

712～717は杯B蓋。712・716は頂部がなだらかな弧状をなし、713・714は頂部が平らで、715は器高が高く笠形を呈する。712のみ、かえりをもつ。頂部外面は、全てロクロケズリで調整する。713は外面全面に自然釉が降着する。内面中央は非常に平滑で、墨痕は残らないものの、転用硯として使用した可能性がある。714は頂部外面の口縁端部よりやや内側に環状の剥離痕がある。胎土は精良で、灰白色を呈する。715は上部中央が突出する径約4㎝のつまみを付す。焼成はやや不良で、灰白色を呈する。716は、下層出土と上層出土の破片が接合した。内面外寄りには降灰が環状にみられ、重ね焼きしたことがわかる。胎土には黒色粒子を含む。717は外面外縁部にのみ、薄い自然釉が降着する。胎土と器形から、猿投窯の製品とみられる。また、

712は色調と精良な胎土から、猿投窯産と推定できる。

杯C（718）は口縁端部に外傾面をもち、内面をやや窪ませる。底部外面はロクロナデで調整する。内面および口縁端部外傾部分に自然釉の降着が著しい。胎土には黒色粒子を含む。

719は杯H蓋。口縁部は歪んでいるが、口径は約10cmに復元できる。天井部はヘラ切り不調整。外面の一部に自然釉が降着し、頂部外面には別個体の破片が融着する。

皿A（721）は口縁端部を丸くおさめる。底部外面はロクロケズリで調整する。胎土に黒色粒子と白色微砂を少量含む。

皿B（720）は高台が細く直立する。胴部下半から底部外面にはロクロケズリを施す。

椀A（722）は深い器形で、径高指数が57.6。底部外面にはロクロケズリを施す。胎土には径2～5㎜の大きめの砂粒を少量含む。

723は底部の大半と高台を欠損するが、器形と底部の調整から椀Bと判断した。胴部はわずかに開きながら立ち上がり、口縁部はやや内弯し、端部は丸くおさめる。内外面ともロクロナデで調整し、内面にはナデによる条線が明瞭に残る。灰白色を呈する。器形や胎土から、尾北窯産と推定できる。

鉢A（724）は口縁部が若干内弯する。調整は内外面ともロクロナデで、胴部内面下半には斜め方向のナデを施す。胎土には白色微砂を含む。

高杯（725）は脚部の破片で、裾部がラッパ状に大きく開く。端部内面は強いナデにより、わずかに肥厚する。調整は内外面ともロクロナデ。灰白色を呈する。

壺A（726）は、短く直立する口縁部をもつ。肩部外面に自然釉の降着が著しいが、蓋を被せた状態で焼成したため、口縁部付近は釉の降着を免れる。肩部には、蓋の口縁端部の一部が融着して残る。

727～729は壺A蓋。727は口縁端部が鋭く突出して内傾し、焼成時の融着を防ぐ形状を呈する。頂部外面はロクロナデ調整で、頂部内面には不定方向のナデを施す。728は口縁部がやや外開きで、端部には平坦面をもつ。頂部外面はロクロケズリ調整で、胎土は精良である。729は扁平なボタン状のつまみをもち、頂部外面にはロクロケズリを施す。焼成はやや不良で、灰白色を呈する。

壺C（730）は肩部外面に自然釉が降着するが、頸部付近で釉が弧状に途切れており、蓋を被せた状態で焼成されたことがわかる。胎土には黒色粒子が目立つ。

731～733は壺K。731は胴部と頸部は二段接合で、肩部内面の中央付近に体部形成時の絞り目が観察できる。頸部から肩部の外面と口縁部内面には、自然釉がみられる。732は、底部に下端を鋭く突出させた高台が付く。口頸部中位および肩部にはそれぞれ1条の凹線が巡る。調整は胴部下半がロクロケズリ、それ以外はロクロナデによる。口縁部上部と高台の一部を欠損するのみで、他は完存する。口縁部は意図的に打ち欠かれた可能性がある。頸部から肩部の外面と、口縁部内面には自然釉が降着し、胎土には白色微砂を多く含む。733は底部が狭い平底で、肩が強く張り、稜をもつ。高台は付さない。底部と胴部下端の外面はロクロケズリで、その他はロクロナデ。胴部と頸部の接合は二段接合。肩部外面と口縁部内面および底部内面には、薄緑色の自然釉が降着する。灰白色で精緻な胎土である。器形や胎土の特徴から、湖西窯産と考えられる。

平瓶（734）は頸部が細く、肩部は丸みをおびる。口縁部外面には凹線が1条巡り、体部の成形は円盤閉塞による。外面全面および口頸部内面には緑色の自然釉の降着が著しい。灰白色を呈し、胎土は精緻で砂粒はほとんど含まない。自然釉の状況や器形、胎土から、東海地方の製品と考えられる。

瓶（735）は肩が張り、低い高台が付く。口縁部上部以外は完存し、口縁部は意図的に打ち欠かれた可能性がある。肩部外面と口頸部内外面、および底部内面には自然釉が降着する。

736～743は甕A。口縁端部の形状は多様で、つまみ上げるもの（736）、玉縁状につくり出すもの（737・739）、短く外方に屈曲するもの（740・742）、内弯させるもの（741）、上下に肥厚させるもの（743）がある。胴部は叩き調整を基本とし、737・738では外面に平行叩きの後、カキ目を施す。740は外面に単位の短いカキ目が入り、内面には当て具の痕跡がみられない。742・743の内面には当て具の痕跡がほどんどみられず、わずかに観察できる程度である。また、736では底部内面中央にのみ当て具の痕跡がない。736は肩部に耳状の把手が3箇所に付き、灰白色を呈する。738の口縁部には波状文が入り、その上下に凹線が巡る。肩部外面と口縁部内面には自然釉の降着が著しく、739の口縁部内外面と742の口縁部内面にも自然釉がみられる。739は、胎土に黒色粒子を多く含む。742の胎土は精緻で、砂粒をほとんど含まない。743は灰白色を呈し、胎土には黒色粒子を多く含むが、砂粒はほとんど含まず、精緻である。

744～746は甕C。744は口縁端部を玉縁状につくり出す。口縁部の外反が強いが、口径と胴部最大径の比率から、甕Cとした。胴部外面は格子目叩きの後、目の粗い平行叩きを横方向に施す。胎土は白色微砂と黒色粒子を少量含む。745は口縁端部を玉縁状につくり出す。胴部外面を平行叩きで調整し、頸部内面にはヘラケズリを施す。灰白色を呈し、胎土には径3～6㎜の大きめの砂粒が目立つ。746は口縁部がほぼ直立し、端部内面がナデによりわずかに凹む。頸部内面にはヘラケズリを施し、口縁部内外面はナデ調整であるが、ロクロは使用していない。大型品であるため、使用できなかったのであろう。胴部外面は格子目叩きの後、ナデを施す。また、胴部内面には当て具の使用が確認できるものの、その痕跡はほとんど付かない。胎土には白色微砂と径2～3㎜の砂粒を含む。

b　中層出土土器（Pl.17～26，Ph.77・82～91）

土師器（Pl.17～21）　中層から出土した土師器には、杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯E、杯F、杯G、杯H、皿A、皿B、皿B蓋、皿C、椀A、椀C、鉢、高杯A、壺A、壺B、甕A、甕B、甕C、鍋、甑、竈などがある。なお、杯Aと皿Aの分類は、径高指数の値を基準とし、ほかに口縁部形状、暗文の施文方法などから判断した。おおよそ、径高指数15.5以上が杯A、それ未満が皿Aである。

39～80は杯A。口径が16.5cm以上の杯AⅠ（39～68）、口径が14.5～15.5cmの杯AⅡ（73～80）、口径が14.0cm以下の杯AⅢ（69～72）がある。口縁端部の形状は、ほとんどのものが内側に巻き込み肥厚させるが、その程度は様々で、肥厚の弱いもの（39・45・49・66・72・75・76）も散見する。また、65は通有のものと異なり、端部を外側に短く屈曲させる。内面の暗文は、39～42が二段暗文で、42では上段と下段の放射暗文の間に連弧暗文Aを入れる。43～48・69・73は、連弧暗文と一段放射暗文（以下、連弧暗文とする。）を施す。44・46・47は上部の暗文がループ状

をなす連弧暗文Ａで、連弧暗文Ｂのものより概して上部暗文の施文幅が広い。49～64・74～78は一段暗文を施し、65～68・70～72・79・80には口縁部内面に暗文が確認できない。51は口縁部内面と底部外面にそれぞれ「＋」のヘラ書きがみられる。72の口縁部内面には斜め右上がりの工具痕が残り、口縁部外面には「卌」と「×」のヘラ書きが並んで入る。いずれも焼成後のものである。71は底部外面に墨書がみられ、釈文は「□（記号カ）」である。

調整は、二段暗文のものは42がａ手法、他の３個体はｂ手法で、連弧暗文をもつものは全てｂ手法である。一段暗文のものは、64・76がａ手法で、その他は全てｂ手法で調整する。暗文の確認できないものは、65・70・71・79がａ手法、72・80がｂ手法、66～68がｃ手法である。口縁部が八分の一以上残存する資料で、調整手法が識別できるものは63点あるが、そのうちｂ手法は50点を数え、全体の約８割を占める。暗文をもつ個体では、暗文構成にかかわらずｂ手法が主体で、暗文が確認できないものではａ手法やｃ手法の割合が増える。ヘラミガキの有無についてはａ手法ではほぼ全てがa0手法であるが、ｂ手法ではb0手法とb1手法が等量ある。色調には大きく分けて橙色系と灰白色系の２つがあるが、それぞれにおいて発色や胎土の質には大小の差異がみられる。胎土は概して精良で、47・50・56は胎土に白色微砂を多く含む。

70・71・79は、器形としては杯Ａに分類できるが、粗製で器壁が厚く、他の個体と比べて異質である。口縁端部は丸くおさめ、暗文はもたず、a0手法で調整する。70はにぶい橙色、79は灰白色を呈する。71はにぶい黄橙色で、赤色粒子を多く含む。

81～84は杯Ｂ。図示したものは、全て口径19㎝以上の杯ＢⅠである。口縁部が斜め上方に開きながら立ち上がり、端部は内側に巻き込み肥厚する。81・82は二段暗文、83は連弧暗文をもち、83の連弧暗文は各弧間の円が大きい。３個体とも底部内面には螺旋暗文を施す。84は暗文をもたない。調整は81～83がb1手法。84はc3手法で調整するが、口縁端部にはヘラケズリは及ばず、奈良時代後半の所産である。81は胎土に赤色粒子を含む。

85～88は杯Ｂ蓋。口径19㎝以上の杯ＢⅠ蓋（85・86）、口径15.5㎝前後の杯ＢⅡ蓋（88）、口径14.5㎝前後の杯ＢⅢ蓋（87）がある。85・88は平坦な頂部と緩やかに短く曲がる縁部からなり、86は平坦な頂部から縁部が強く屈曲する。87は器高が高く、笠形を呈する。口縁端部は内側に肥厚するもの（85・86）と、丸くおさめるもの（87・88）がある。87は径約２㎝のボタン状のつまみをもち、88には長さ約３㎝の板状のつまみが付く。いずれの個体も外面には丁寧な分割ミガキを施し、内面はナデ調整である。85・86の内面には、螺旋暗文を施す。85・86の胎土には白色微砂を多く含み、87は胎土に径１㎜ほどの赤色粒子が目立つ。

96～106は杯Ｃ。口径が18.0～19.5㎝の杯ＣⅠ（96～100）、口径が16.0～17.0㎝の杯ＣⅡ（101～105）、口径が11.5㎝前後の杯ＣⅢ（106）がある。径高指数は、105が22.8、106が約27.5で深く、101が15.9とやや浅いが、96～100・104は17.9～19.1の範囲にまとまる。口縁端部の形状は、内傾するもの（98～105）が主体だが、丸くおさめるもの（96･97）、薄く尖るもの（106）もある。96～98・100～103は一段暗文をもち、底部内面には螺旋暗文が入る。調整は、99・101・103がa0手法、100がa1手法、98・104～106がb0手法、96・97・102がb1手法である。97・106の底部外面には、削り残した部分に木の葉圧痕が一部残る。99は底部外周にユビオサエによる指頭圧痕が多く残る。また、底部内面には刀子状利器による直線的な線刻が多数刻まれており、俎板として使用したものか。98の口縁端部には灯明痕がみられる。100の底部外面には、焼成

後に「＃」のヘラ書きを施す。101はにぶい黄橙色を呈し、99・105は胎土に赤色粒子を多く含む。

89～93は杯Ｅ。平底の底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。口縁端部は89・91～93が丸くおさめ、90は口縁端部が尖る。92は把手が1箇所に付く。器壁が薄い、精良な土器である。調整はいずれもc3手法であるが、90・91は口縁部上位を削り残す。外面のヘラミガキは基本的に密で丁寧であるが、91は他に比べやや粗い。89は底部内面にハケ目を施し、90は底部内面に指頭圧痕による凹凸が残る。91は口縁部内面の一部が黒色化しており、灯火器として使用した可能性がある。内面全面は黒褐色を呈し、漆状の物質が薄く付着していると考えられる。89・93は胎土に赤色粒子を含む。

杯Ｆ（94）は、杯Ｅに高台を付した器形で、器高はやや高い。調整はc1手法。橙色を呈し、胎土には赤色粒子を含む。高台の一部にＶ字状の切り込みを入れているが、何を意図したものかは不明である。

95は杯Ｇ。平底に近い形状を呈し、口縁端部は丸くおさめる。色調はにぶい黄橙色で、胎土に赤色粒子を含む。

杯Ｈ（107）は底部外面のヘラケズリが丁寧で、底部と口縁部の境には明瞭な稜ができる。橙色を呈する。

杯Ｘ（108）は、平底の底部から口縁部が内弯しながら立ち上がる。口縁端部は内側に巻き込み肥厚する。調整はb1手法で、口縁部下半はユビオサエにより横方向の帯状に凹む。

109～138は皿Ａ。口径が21.0～25.5cmの皿ＡⅠ（117～120・124～138）、口径が17.0～19.5cmの皿ＡⅡ（113～116・121～123）、口径が14.0～16.0cmの皿ＡⅢ（109～112）がある。全体の形状には、底部と口縁部の境が明瞭な一群と、底部から口縁部までがなだらかにつながる一群（112・114・120・123・134・137）があり、それぞれに口縁部がヨコナデにより外反するもの、内弯気味におさめるもの、直線的に開くものなどがある。口縁端部の形状は、内側に肥厚するものが最も多いが、その他に、内傾する面をもつもの（109～111・113）、丸くおさめるもの（112・122・136）、上端に狭い面を作出するもの（116）などがある。内面に施している暗文は、口縁部が八分の一以上残存するもので集計すると、一段暗文のものが35点、暗文の認められないものが12点で、二段暗文や連弧暗文をもつものはみられない。一段暗文をもつもののうち、暗文の密度が細かいものは21点、粗いものは14点を数える。調整については、a0手法が17点、a1手法が1点、b0手法が21点、b1手法が3点、c0手法が4点、c1手法が1点で、ｂ手法が全体の半数以上を占める。なお、暗文構成と調整手法に明確な対応関係は見い出せない。125・128の底部外面には木の葉の圧痕があり、127・129の底部外面には指頭圧痕が明瞭に残り、凹凸が激しい。色調は橙色系、灰黄色系、浅黄橙色系に大きく分かれるが、胎土の質や細かな色調には個体ごとに差異がみられる。111・113・120・121・127は胎土に赤色粒子を含み、123の胎土には白色微砂を含む。112・129・130・134は胎土に雲母を多く含む。

126・132・135の底部外面には、ヘラ書きがみられる。いずれも焼成後のものである。132は「＃」と「×」、135は「＋」で、126は記号の一部が残るのみで全容は不明である。129の底部内面には、刀子状利器による直線的な刻線が多数平行して走る。110は口縁端部の一部に煤が付着する。

139は皿Ｂ。口縁部上位は強いヨコナデにより大きく屈曲し、端部は内側に肥厚する。高台は低く、端部が外方に突出する。調整はb1手法。口縁部内面には一段暗文をもち、底部内面には螺旋暗文を施す。色調は浅黄橙色で、胎土に赤色粒子を含む。

140・141は皿Ｃ。口径は10.5㎝前後で、140の口縁部は斜め外方に直線的に開き、141は口縁部がヨコナデにより外反する。両者とも調整はｅ手法で、外面に粘土の接合痕が観察できる。140は灰白色を呈する。141はにぶい黄橙色を呈し、胎土に雲母を含む。

142～146は椀Ａ。口径は12.0～13.2㎝、深さは3.5～4.0㎝で、大きさはほぼ類似する。基本的に外面全体をヘラケズリで調整するが、142は口縁端部直下を削り残す。145以外はケズリの後にヘラミガキを施す。146は底部外面に墨書の一部が残るが、判読できない。142は底部外面に記号のヘラ書きを焼成後に施している。143～146は橙色を呈し、142は浅黄橙色で、胎土に雲母と赤色粒子を含む。

153～212は椀Ｃ。中層から出土した椀Ｃは、口縁部の八分の一以上が残存するもので計測して227点を数える。復元口径は10.0㎝～16.0㎝の幅があるが、12.0～14.0㎝のものが158点で、全体の７割近くにおよぶ。器高が判明するものは89点で、3.0～5.0㎝の範囲におさまるが、径高指数には22.9～35.1の幅がある。ある数値に極端にまとまることはなく、25.0～31.5の範囲に偏りなく分布する。口縁端部の形状は、内傾するものがもっとも多いが、丸くおさめるもの（153～156・162・163・172・175・180・184・186・187・191・201・207・212）や端部外面が外傾するもの（164）も存在する。調整はｅ手法で、体部から底部外面に指頭圧痕が明瞭に残るものが多い。内面はヨコナデ調整を基本とするが、162では底部内面にハケ目が残る。多くの個体で、体部外面に渦巻き状の粘土接合痕がみられる。また、口縁部内面に斜め方向の工具痕が残るもの（157・170・174・176・177・180・181・197・198・200・205・209・211）が散見し、製作時になんらかの工具を使用したと考えられるが、工具の具体的な形状や用途は不明である。196の口縁部外面や、199の底部外面には黒斑がみられる。

153は器壁が薄く、白色粘土を少量含み、196の内面には、全面に灰オリーブ色の薄い付着物がみられる。164・171～173・176・182は胎土に１～２㎜の砂粒を多く含み、内面器面の荒れが目立つ。色調には、橙色系、灰黄色系、灰白色系があり、胎土に赤色粒子を含むものが多くみられる。

165・189は口縁端部の一部に煤が付着し、灯火器として使用したもの。179の外面は煤の付着が著しく、一部には被熱による剥離がみられる。154・169は底部内外面の一部が黒色化する。188は内外面のほぼ全面が黒色化し、207は内面全面および外面の一部が黒色化する。

169の底部外面には、「□〔大ヵ〕」の墨書がある。155・156・158・165・166・180・201・204の底部外面と192の口縁部外面にも墨書がみられるが、釈文は「□」や「□（記号カ）」、あるいは墨痕で、内容は不明である。171の底部内面と198の底部外面には、それぞれ「＋」のヘラ書きがあり、196の底部外面には「卄」のヘラ書きがみられる。203の底部内面にも、ヘラ書きの一部が残る。いずれも焼成後のものである。

147～152は鉢Ｂ。小さな平底から体部が内弯する弧を描いて立ち上がる器形である。口径24㎝～27.5㎝の大型品（147・148）と、口径20㎝程度の小型品（149～152）がある。口縁端部の形態には、丸くおさめるもの（147）と、内側に巻き込み肥厚するもの（148・151・152）、ヨコナ

デにより内側に肥厚するもの（149・150）がみられる。外面の調整は、148～151は口縁部をヨコナデし、体部以下にヘラケズリを施す。150はヘラケズリの範囲が広く、口縁端部直下にまで及ぶ部分もある。一方、147・152は口縁部から体部上半までをヨコナデし、それ以下は不調整で、指頭圧痕が明瞭に残る。151・152は口縁部から体部外面にヘラミガキを加え、内面には螺旋状暗文を施す。また、147は体部内面にハケ目が残る。150は灰白色を呈し、白色微砂を含む。

213～217は高杯Ａ。213は杯部で、口縁端部は外傾する面をなす。外面調整は、杯部下半にヘラケズリ、口縁部にヨコナデを施し、その後分割ヘラミガキを加える。内面はヨコナデで調整し、丁寧な二段暗文を施す。

214～217は脚部で、いずれも心棒成形のⅡ群土器。脚柱部外面は、ヘラで上方から下方に向けて丁寧に面取りする。214は九面体、215は十二面体、216は十三面体とし、217は細かい面取りで25～30面を削り出す。214の杯部外面には横方向のヘラケズリを施し、さらにヘラミガキがわずかに確認できる。杯部内面には螺旋状暗文がある。脚部内面は横方向のヘラケズリで調整し、裾部外面には分割ヘラミガキを施す。脚柱部内面には縦や斜め方向の凹線が複数みられる。にぶい橙色を呈し、胎土には赤色粒子を含む。215の杯部外面には分割ヘラミガキがわずかに残り、杯部内面には螺旋状暗文がみられる。脚柱部上端外面には多数の爪状圧痕が確認できる。脚柱部を面取りした後に施しているが、何を目的としてなされたものかは不明である。216は杯部外面にヘラミガキを施し、胎土には赤色粒子を多く含む。217は裾部が大きく開き、端部は断面コの字形となる。裾部外面には丁寧なヘラミガキを時計回りに５分割で施し、内面には部分的にヘラケズリ調整がみられる。橙色を呈し、胎土には白色微砂と赤色粒子を多く含む。214～216では、杯部との接合部に粘土を足して補強している。216では杯底部が一部剥離しており、粘土紐を巻き付けて接合部を補強している状況がわかる。

218～220は壺Ａで、218・219は小型品。218は口縁部が外方に開き、体部は球形で肩の張りは弱い。外面は、口縁部から肩部をヨコナデで調整し、体部にはヘラケズリを施す。その後全面に丁寧なヘラミガキを加える。胎土には白色微砂と雲母を含む。219は短く直立する口縁部と肩の張った球形の体部からなり、口縁端部は内側にわずかに肥厚する。頸部には、ヨコナデにより狭い平坦面をつくり出す。底部に低い高台をもち、肩部に把手が剥離した痕跡がある。把手は器面に直接貼り付けている。外面は、体部中位以下をヘラケズリで調整する。その後、ヘラミガキを施すと考えられるが、磨滅のため不詳。器壁は薄く、色調は橙色を呈する。220は胴の張った球形の体部で、肩部に把手を挿入法により付す。底部には、高台が剥離した痕跡がみられる。外面の調整は、体部下半はヘラケズリのままで、上半はヨコナデを施した後、密なヘラミガキを施す。また、体部下半には、一部にヘラ状工具による短線状の痕跡が平行して残る。胎土には赤色粒子を多く含む。

221は壺Ｘ。やや内傾する口縁部が上端で直立し、端部は内傾する。体部は肩の張らない卵形をなす。外面は磨滅が著しく調整は不明であるが、肩部以下の広い範囲に赤色顔料が残る。また、体部外面には薄く煤が付着する。浅黄橙色を呈し、胎土には径１～２㎜の大きめの赤色粒子を含む。

226～228は甕Ｂ。いずれも都城型。226・228では口縁端部を上方に肥厚させ、227は端部を

わずかにつまみ上げる。体部の調整は、外面がハケ目、内面がナデによる。外面のハケ目は縦方向を基本とするが、228の体部下方では斜めから横方向となる様である。227・228の内面には板状工具の痕跡が残り、板ナデであることがわかる。口縁部内面は、226・227が横方向のハケ目、228がヨコナデで調整する。227には幅広で薄い舌状の把手が付き、把手には成形時の指頭圧痕がよく残る。把手の接合は貼付法により、接合部外面には部分的にヘラケズリを施す。226・228は把手の大部分を欠損し，形状は不明であるが、把手基部は226では下向きに緩い弧を描き、228では直線的となる。両者とも幅は約9.5㎝を測り、接合は貼付法による。また、228の体部下半には煤の付着がみられる。226・227はともに橙色を呈し、胎土に赤色粒子を含む。

222～225は甕Ｃ。口縁端部の形状は、上端に面をつくるもの（222）、つまみ上げるもの（223・225）、側面に面をもつもの（224）があり、多様である。口縁部の調整は内外面ともヨコナデ調整を基本とするが、225は内面にハケ目を施している。222の体部の調整は、外面は縦方向のハケ目で、内面は斜め方向のハケ目の後、体部上半をヘラケズリする。外面のハケ目は非常に目が細かく、目の粗い内面のハケ目とは異なる工具で調整を行ったことがわかる。225の体部外面調整は縦方向のハケ目で、同一個体と考えられる破片資料によると、体部下方にはヘラケズリを施すようである。内面は口縁部、体部とも目の粗い横方向のハケ目調整。外面のハケ目は目が細かく、222と同様に内外面で異なる工具を使用していたと理解できる。223の体部内面は、横および斜め方向のナデ調整である。体部外面は縦方向のハケ目であるが、体部上半に目の粗いハケ目を施した後、体部中位以下を目の細かいハケ工具により調整する。調整に異なるハケ工具を使用するという点で、222・225と共通する。224の体部内外面はハケ目調整。なお、222・223・225の体部外面には煤の付着がみられ、特に223で著しい。222は河内型、223は都城型、224・225は近江型。

229～231は都城型の甕で、把手の有無は不明。口縁端部の形状は、229では内側に巻き込み肥厚させ、231では上方につまみ上げる。230では断面コの字形をなし、端部側面には凹線が1条巡る。いずれも、体部外面を縦方向のハケ目で調整し、内面はヨコ方向のナデ調整である。口縁部内面の調整は、229がヨコナデ、231は短い単位の横方向のハケ目で、230は横方向のハケ目の後にヨコナデを施す。また、229の外面には煤の付着がみられる。

232～234は鍋Ａ。口縁端部の形状は、232・233では丸くおさめ、234では内側に肥厚させる。232の胴部外面は、下半に横方向のハケ目を施した後、全体をナデで調整する。内面は横方向のナデ調整である。233は平底になるとみられ、胴部外面上半に縦方向のハケ目を施し、胴部内面は横方向のナデで調整する。232・233ともに、口縁部内面に横方向のハケ目を施す。234は都城型で、器表面の磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、胴部外面にはハケ目がわずかに確認できる。また、胴部内面にはユビオサエの痕跡が残る。232の胎土は赤色粒子を多く含み、233は胎土に雲母を多く含む。234の胎土には１～３㎜の砂粒が多く目立つ。

235～238は鍋Ｂ。235～237は都城型で、238は近江型。いずれも半球形に近い扁平な体部に、大きく外反する口縁部が付く。口縁端部の形状は235・236では上方につまみ上げ、237では内側に巻き込み肥厚させる。238では上方への突出がほとんどなく、断面コの字形をなす。238は平底で、底部中央は円形に凹む。いずれも体部の２箇所に把手が付き、237の把手は幅広で薄く、隅丸三角形を呈する。237以外の把手は剥離または欠損するが、235・236では把手基部が薄く、

238では把手基部が厚い。把手の取り付けは235～237では貼付法、238では挿入法による。

口縁部内面の調整は、235・237・238はヨコナデ、236では横方向のハケ目による。235～237は、体部外面上半に縦方向、中位以下では斜め方向のハケ目を施す。内面はナデ調整である。238は体部外面に横方向のハケ目を施し、その後中位以下に横位のヘラケズリを施す。内面は、体部から底部までを横位および斜め方向のハケ目で調整する。体部内外面のハケ目は、非常に細かく浅い。

235～237では、体部外面の中位以下と口縁部外面の一部に煤の付着がみられ、236では頸部内面付近を中心に焦げが残る。238は、内外面に焦げや煤などの付着が全くみられない。235・237は橙色を呈し、237では胎土に赤色粒子を含む。236はにぶい黄橙色で、胎土に1～2㎜の大きめの赤色粒子を含む。238は浅黄橙色を呈し、胎土には1～2㎜の大きめの赤色粒子や雲母がみられ、砂粒はあまり含まない。

須恵器（Pl.22～26）　中層から出土した須恵器には杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯E、杯F、杯G、杯H、杯H蓋、皿A、皿B、椀B、鉢A、鉢D、高杯、盤、壺A、壺A蓋、壺B、壺C、壺E、壺G、壺K、壺Q、平瓶、横瓶、瓶、甕などがある。

782～797は杯A。口径20cm以上の杯AⅠ（782・783）、口径17.0～20.0cmの杯AⅡ（784～787）、口径14.0～15.5cmの杯AⅢ（792～797）、口径12.5～13.0cmの杯AⅣ（788～791）がある。径高指数が30代後半のものを中心とする器高の深いタイプ（782・792）と、径高指数が20代のものを中心とする器高の浅いタイプに大きく2つに分けることができるが、前者の出土量は少ない。後者には、器形が箱形に近いもの（784・791・793・794）と、口縁部の立ち上がりが外開きとなるもの（783・785～790・795～797）がある。

底部外面の調整は、口縁部が八分の一以上残存するもので算出すると、ロクロケズリが12点、ヘラケズリが1点（782）、ヘラ切り不調整が10点、ロクロナデが2点（794ほか1点）となる。786は口縁部から底部内面に火襷がみられる。794の内面には自然釉の降着が著しい。791・793・795は重ね焼きにより、口縁部付近のみが暗い発色となり、782・785・786・788・790・797は焼成がやや不良で、灰白色を呈する。782・785・787は胎土に雲母を多く含む。788・789の口縁端部には灯芯の痕跡が残り、789では3箇所に確認できる。また、785の外面には煤の付着がみられる。784・794の底部外面には墨書がみられるが、意味は判読できない。797の底部外面には焼成前のヘラ記号が入るが、欠損が大きく、記号の形は不詳。

755～781は杯B。口径20cm前後の杯BⅠ（758）、口径17.0～18.5cmの杯BⅡ（755～757）、口径13.5～16.0cmの杯BⅢ（759～773）、口径11.5～12.5cmの杯BⅣ（774～776）、口径11.5cm未満の杯BⅤ（777～781）がある。杯部の径高指数が37以上の器高が深いタイプ（759・777・778）と、20代のものを中心とする器高が浅いタイプに2つに大別でき、杯Aと同様に前者の出土量は少ない。口縁端部は丸くおさめるものが基本であるが、757では内面に1条の浅い沈線が巡る。758・769は底部が高台より突き出す所謂出尻タイプで、769の底部外面には螺旋状のヘラ切り痕跡が明瞭に残る。774は幅広で低平な高台をもつ。底部外面の調整は、口縁部または高台の八分の一以上が残存するもので算出すると、ロクロケズリが10点、ヘラ切り不調整が33点で、後者が格段に多い。771・773・781の高台内側には爪状圧痕が残り、773ではほぼ一周確認できる。780は口縁部外面に火襷があり、内面には自然釉の降着が著しい。755・763・765・775・

779は口縁部外面に、768・778は口縁部～底部外面に、766は底部内面に自然釉の降着がみられる。759・777は重ね焼きのため、口縁部上半や口縁端部付近の外面が黒く発色する。758・773は焼成がやや不良で、灰白色を呈する。770は浅黄色、762の内面と772は灰オリーブ色で、他と比べやや異質な色調である。760・761・764の胎土には、1～3㎜の砂粒が多く目立つ。762・768・778の底部外面には墨書がみられ、釈文は762が「＋」、768・778が「□」である。764の底部外面には3㎝×5.5㎝の楕円形状に墨が付着する。

747～754は杯Ｂ蓋。口径23㎝前後の杯ＢⅠ蓋（749）、口径18.5～19.0㎝の杯ＢⅡ蓋（747・748）、口径16.0～16.5㎝の杯ＢⅢ蓋（750～752）、口径13.0㎝前後の杯ＢⅣ蓋（754）、口径10.5㎝前後の杯ＢⅤ蓋（753）がある。形状をみると、笠形を呈するもの（747・748・751・753・754）、頂部中央から縁部にむかい直線的にのびるもの（749・750）、器高が低く扁平なもの（752）がある。750は口縁端部を小さくつまみ出し、段をつくる。口縁部が八分の一以上残存するもので算出すると、かえりの有るものが8点、かえりのないものが24点を数える。749のかえりは低平で丸みを帯びており、かえりの形状に明らかな退化傾向がみられる。つまみは幅が広く扁平なものが多く、頂部が若干突出するものと平坦なものがあるが、破片資料を含めると、両者はほぼ同数を数える。頂部外面はロクロケズリあるいはロクロナデで調整し、比率はロクロケズリがやや多い。753は、頂部外面に縦方向の刻み目文を巡らせる。747・751の外面には自然釉が降着し、754は焼成がやや不良で灰白色を呈する。747・748の胎土には、1～3㎜の大きめの砂粒が目立つ。

798～802は杯Ｃ。口径20㎝程度の杯ＣⅠ（801・802）と口径17.5～18.5㎝の杯ＣⅡ（798～800）がある。土師器杯Ａを模した器形で800・801は口縁端部内面にナデを加えて端部を肥厚させ、外面に外傾する面をつくり出す。798・799・802は口縁部内面に沈線が入り、端部を丸くおさめる。底部外面の調整は、798・802がロクロケズリ、799・800がヘラ切り不調整である。800・802の口縁部内面には火襷がみられる。798・801は雲母を多く含む胎土で、焼成がやや不良で灰白色を呈する。798の内外面には煤が付着する。

杯Ｅ（803）は銅椀を模した器形。平底と内弯しながら立ち上がる口縁部からなり、口縁端部はやや丸みをおびた面をなす。底部外面に丁寧なロクロケズリを施し、内面にはロクロナデの条線がよく残る。底部外面は灰白色、それ以外は灰色を呈する。

杯Ｆ（806）も金属器の模倣形態で、底部には高台を付すと考えられる。口縁部外面に鈍い稜を作出する。胴部内面には不定方向の細かいハケ目がみられる。焼成はやや不良で、灰白色を呈する。

杯Ｇ（816）は、口径9.5㎝ほどに復元できる。口縁部はわずかに外反し、底部外面はヘラ切り不調整である。胎土には微細な黒色粒子を多く含む。飛鳥Ⅱの所産と考えられる。

804・805は杯Ｘ。804は狭い平底で、口縁端部は外側に弱く肥厚し、上部に平坦面をつくる。口縁部は内外面ともロクロナデを施し、底部は外面をロクロケズリ、内面を不定方向のナデで調整する。砂粒をほとんど含まない精緻な胎土だが、焼成はやや不良。805は、底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。口縁部下半以下をロクロケズリで調整する。黒色粒子を含む精緻な胎土で、器表面は非常に滑らかである。灰白色を呈するが、重ね焼きのため、口縁部外面上半のみが灰色に発色する。

807～811は皿Ａ。口径が21.5～23.0㎝の皿ＡⅠ（810・811）と口径が20㎝前後の皿ＡⅡ（807～809）がある。底部外面は、809がロクロナデで調整し、その他の個体はロクロケズリを施す。807は焼成がやや不良で、外面全体と口縁部内面が燻したような灰色を呈し、底部内面のみが灰白色となる。808では内面全体が黒色化する。底部外面に墨書がみられるが、文字の一部が残るのみで意味は判読できない。809は焼成がやや不良で、全体が灰白色を呈する。810は還元炎焼成が完全でなく、内面が灰黄色、外面が黄灰色を呈する。811では、底部内面が口縁部内面に比べ明るい発色となる。重ね焼き焼成によるものと考えられる。

812～815は皿Ｂ。口径が25㎝以上の皿ＢⅠ（812・815）と口径が20㎝前後の皿ＢⅡ（813・814）がある。812・813・815は口縁部と底部の境が明瞭だが、814では底部から丸みをもって口縁部へとつながる。いずれも口縁端部は丸くおさめ、高台は太く高いもの（812・813）と、華奢で低いもの（814・815）がある。底部外面の調整は、812・813・815がロクロケズリで、814はロクロナデである。813は胎土に１～２㎜の砂粒を非常に多く含み、814は黒色粒子がロクロナデにより墨を流したようにのびる。812は焼成がやや不良で、灰白色を呈する。815は砂粒をほとんど含まない灰白色の精緻な胎土で、東海地方産と考えられる。

皿Ｅ（817）は小型の平底の皿で、口縁端部は強く外反する。底部外面はヘラ切り不調整で、内面には火襷がある。焼成はやや不良で、口縁部は灰色、底部は灰白色を呈する。

椀Ｂ（818）は深い器形で、胴部が垂直に立ち上がり、口縁部は欠失する。高台は底部外端に貼り付ける。底部内面はナデ、それ以外はロクロナデで調整する。

823・824は鉢Ａ。口縁部は内弯し、口縁端部は丸くおさめる。823は肩の張りが弱く、底部は平底になると思われる。口縁部は内外面ともロクロナデ調整で、体部下半の外面はロクロケズリ調整と考えられる。軟質の焼成で灰白色を呈し、胎土には白色微砂を含む。824は口縁部が強く内弯し、底部は尖底になるものであろう。内面はロクロナデ調整で、外面は口縁部から体部上位はロクロナデ、体部中位以下はロクロケズリによる。外面の一部には火襷がある。胎土には黒色粒子を少量含み、ケズリにより墨を流した様にのびる。

825～827は鉢Ｄ。平底で、外反する短い口縁部と上位で肩の張る体部からなる。826には断面台形の太い高台が付く。825は口縁部がやや外弯し、826・827の口縁部は直線的に開く。いずれも端部には平坦な面をつくる。外面の調整は、825・826では口縁部から体部上位までがロクロナデ、体部中位以下がロクロケズリによるが、825の底面にはケズリ調整は施さない。827は口縁部から体部下半までをロクロナデで調整する。825・827は焼成がやや不良で、灰白色を呈する。825は胎土に赤色粒子と２～３㎜の大きめの砂粒を少量含み、827の胎土は雲母を多く含む。826では体部外面下位に火襷がみられ、胎土には黒色粒子を多く含む。

820～822は高杯。820は杯部の破片で、平坦な形状をなし、口縁部を上方に短く折り曲げる。外面はロクロケズリを施した後、一部に不定方向のナデ調整を行う。脚部は上端部分が残るのみであるが、径は約2.5㎝と細い。胎土には黒色粒子を含み、ケズリやナデにより黒色粒子が墨を流した様にのびる。821は杯部を欠損するが、脚部はほぼ完存する。短脚の小型品で、脚部には径２～３㎜の小円孔を３方に穿つ。外面の大部分には自然釉の降着がみられる。７世紀前半の所産と考える。822は脚部で、裾部が大きく開き、端部は上下に突出する。外面全体に自然釉が降着する。

盤（819）は大きな平底からやや内弯する口縁部が斜めに立ち上がる。口縁端部を内外に肥厚させ、上部に面をつくる。口縁部および体部内外面はロクロナデ調整で、底部外面にはロクロケズリを施す。焼成がやや不良で、灰白色を呈する。

835～837は短頸壺。835・836はなで肩で胴部中位が最大径となり、短く開く口縁部をもつ。胴部下半から底部の外面をヘラケズリし、それ以外はロクロナデで調整する。835では胴部外面上半に、836では口縁部から胴部外面と、胴部下半内面に自然釉が降着する。837はなで肩で球形の胴部をもち、口縁端部内面に強いナデを加える。胴部外面下半をヘラケズリで調整し、その他はロクロナデ調整である。

短頸壺蓋（834）は径5㎝ほどの小型品。つまみは付さず、頂部外面は不調整で、若干の凹凸をもつ。それ以外はロクロナデで調整する。外面全体に自然釉が降着する。灰白色を呈し、胎土に黒色粒子と白色微砂を含む。

841～845は壺Ａ。平底で肩の張った扁球形の体部と、直立する短い口縁部からなる。841・842・845の口縁部は短く開き、843の口縁部は外反してやや長くのびる。842は肩の張りがやや弱い。844は肩部に耳状の把手が付く。調整はいずれも口縁部内外面と体部内面はロクロナデで、底部内外面はナデを施す。体部外面はロクロナデを基本とし、844・845は下半にロクロケズリを施す。外面にはいずれも自然釉がみられるが、頸部付近から口縁部にかけては円形に釉の降着を免れており、蓋を被せた状態で焼成したことがわかる。841の頸部裾には、蓋の口縁端部が一部融着して残る。844の胎土には2～4㎜の大きめの黒色粒子が目立ち、845は胎土に白色微砂を少量含む。

839・840は壺Ａ蓋。839は口縁部がわずかに内弯する。口縁端部は内側を薄く挽き出して小さな段をつくるが、挽き出した部分は焼成時に融着したようで、ほぼ全て欠失する。口縁部はロクロナデ、頂部内面はナデ調整で、頂部外面にはロクロケズリを施す。外面全体に自然釉が薄くみられるが、頂部中央には別個体を重ねて焼成したようで、その部分だけは釉の降着を免れている。胎土には黒色粒子を多く含む。840は頂部と口縁部の境が鋭い稜をなす。口縁端部は内側を薄く挽き出し、焼成時に身と融着しても容易に外せる工夫がみられる。つまみは断面逆台形を呈し、中央がやや突き出る。口縁部はロクロナデで、頂部内面には不定方向のナデを施す。頂部外面には自然釉の降着が著しい。

壺Ｂ（846）は肩部に稜をもち、短い口縁部はやや外反し、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面ともロクロナデによる。肩部外面は自然釉の降着が著しいが、頸部付近と口縁部にはみられず、別の個体を重ねた状態で焼成したと判断できる。

壺Ｃ（838）は肩の張る胴部で、口縁部は短くやや内側に入る。口縁端部には狭い面をもち、肩部には1条の凹線が巡る。ロクロナデ調整を基本とするが、底部外面には手持ちヘラケズリを施す。肩部外面および底部内面に、自然釉が降着する。器壁が厚く、小型だが重量がある。口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形。

828・829は壺Ｅ。平底で、胴部はやや内弯しながら直線的に開き、狭い肩部から短い口縁部が立ち上がる。底部には高台を付す。調整は、828は内外面ともロクロナデによる。829の内面はロクロナデで、外面は口縁部から胴部上半がロクロナデ、胴部下半にはロクロケズリを施す。底部外面はヘラ切り不調整。829は肩部外面と口縁部上端および底部内面に自然釉が降着する。

一方、828の肩部外面では、外端にのみ自然釉の付着がみられ、また内面には一切自然釉がみられないことから、焼成時に蓋が被っていたと考えられる。

847は壺Ｇ。底部は厚く、底面には静止糸切り痕が残る。胴部から頸部の内外面にはロクロ水挽き成形の凹凸がよく残り、特に内面は凹凸が顕著である。ロクロの回転方向は時計回りである。胴部下半外面には縦方向に並ぶ指頭痕がみられるが、ロクロから製品を持ち上げる際に付いたものであろうか。灰白色を呈し、胎土には黒色粒子を含む。

848・849は壺Ｋ。肩部に稜をもち、頸部は長く、口縁部は外反しラッパ状にひらく。848は漆容器で、胴部は三分の一ほど、底部は二分の一ほどが残存する。肩部に１条の凹線を施し、その上には羽状文が巡る。高台は高く、内端部を突出させる。外面には自然釉の降着が著しく、そのため調整は不明瞭である。胎土には黒色粒子を非常に多く含む。内面と底部外面に漆が付着し、胴部の破面にも広範囲に漆の付着がみられる。849の胴部外面はロクロケズリで調整するが、砂粒の移動方向は上部と下部では逆転しており、胴部の調整は正位と逆位の両方で行ったと理解できる。口頸部の接合は三段接合による。外面全体と、口頸部および底部の内面には緑色の自然釉の降着が著しく、高台の底面や内側面にも釉が及んでいる。底部には焼成時の焼け歪みにより亀裂が生じており、その破面の一部にも釉の付着がみられる。胎土は灰白色で、器形や製作技法の特徴などから美濃須衛窯産と考えられる。焼成時に底部が破損した製品を運んできており、調納制のあり方を考える上で興味深い資料である。

850～853は壺Ｑ。肩部に稜をもち、口縁部は大きく外反し、口縁端部を斜め上方に引き出す。853の高台は、端部の内側を下方に引き出す。いずれの個体も、口縁部および胴部上半はロクロナデ調整。852・853は、胴部外面の中位以下にロクロケズリを施す。口縁部内面と肩部外面、胴部内面下半には自然釉の降着がみられ、特に851の口縁部内面と852の胴部内面が著しい。852は胴部内面の上半に墨が付着し、器面の一部が平滑となっている。破片となった段階で転用硯として利用したものであろう。853は胎土に黒色粒子を含み、胴部外面は焼け膨れにより器面の凹凸が激しい。

830～833は平瓶。830は丸底で卵形をなす体部で、頸部は直立して立ち上がり、外反する口縁部につながる。口縁部には段をつくり、端部を大きくつまみ上げる。肩部に径１㎝強のボタン状のつまみが２箇所に付き、その下には２条の凹線が巡る。外面の調整は、口縁部から体部中位までをロクロナデで調整し、体部下半には平行叩きが残る。内面の調整はロクロナデで、体部にはナデの凹凸がよく残る。また、内面には全体的に白色固形物の付着がみられる。白色物質は肩部では薄いが、下方にいくほど厚くなり、底部では１㎝近くの厚さをもつ。この白色物質は、破面に沿って外面の一部にも付着し、内容物の成分に関わるものと考えられる。

831は小さな平底と、肩の張った扁球形の体部からなる。外面の調整は、口頸部から体部上半まではロクロナデで、体部下半から底部にはロクロケズリを施す。体部の成形は円盤閉塞による。口頸部と頂部の外面には自然釉が薄く降着する。漆の運搬具で、内外面の各所に漆が付着し、特に口頸部内面と頂部内面で厚い。口頸部の破面にも漆の付着がみられ、打ち割って漆を取り出したことが知られる。

832・833は平底で肩部には稜をもち、頂部は丸みを帯びる。頸部は直線的に開く。832の頂部には、断面長方形の把手の剥離痕が残る。外面調整は口頸部がロクロナデで、頂部はロクロ

ナデの後、ナデ調整を施す。体部側面は上半がロクロナデ、下半がロクロケズリで、底部は外縁にのみロクロケズリを施す。体部の成形は円盤閉塞による。胎土には黒色粒子を少量含む。833の体部の外面調整は、側面上半がロクロナデで、下半はロクロケズリの後、格子目叩きを施す。叩き目は底面外縁にもみられ、一部は底部外面の中央付近にも及ぶ。内面に当て具痕跡は認められない。頂部には自然釉の降着が著しい。内面にも広い範囲に釉の降着がみられ、口頸部は大きく開いた形態であったと推測できる。

これらの平瓶は830が７世紀中頃、831が７世紀後半、832・833が奈良時代の年代が与えられる。

854～874は甕。ほとんどは甕Ａになるものと思われる。口縁部の形状は、強く外反し口縁部の長いもの（855～857・859～863）、強く外反し口縁部の短いもの（873・874）、弱く外反するもの（864～867・869・870）、直線的に外に開くもの（868・871・872）、大きく開かず直線的に立ち上がるもの（854・858）などがある。口縁端部の形状も多様で、外側に縁帯をつくり玉縁状をなすもの（855・856・860・866・869）、端部が内弯し玉縁状をなすもの（858・865・867・870）、内側に弱く肥厚し、上端に平坦面をつくり出すもの（854・871）、上下に肥厚するもの（862・874）、上方に肥厚するもの（864・873）、下方に垂下するもの（857）、上端に面をつくり、薄く尖らせるもの（859）、内側に段をもち、やや内傾する面をつくるもの（868）、断面コ字形となるもの（872）などがある。底部形状については、861は尖底に近い丸底で、多くの個体がこの形状に近い底部をもつと考えられる。863は平底で、低い高台をもつ珍しい例である。

口縁部の調整は内外面ともロクロナデで、873・874の外面にはナデに先行する叩き目が確認できる。また867の外面にはナデの後、カキ目を施す。体部外面は、叩きの後カキ目を施すもの（854・856・858・860・862・863・865・867・869・873・874）が多いが、叩きのみのもの（859・864・866・871・872）も散見する。

855は口縁部に波状文が３単位巡り、その下方に２条の凹線を入れる。854は口縁部中位に１条の凹線が巡り、856は口縁部中位に２条の凹線を施す。857は外面に黄土を塗って赤黒く発色させ、体部内面の当て具痕は薄い。内外面に緑色の自然釉が降着し、口縁部内面には粘土接合痕が残る。尾張産と考えられる。861は灰白色を呈し、全体的に体部内面の当て具痕が目立たない。胴部のナデ調整などの特徴から、尾張産の可能性がある。862は体部内面の一部にナデを施す。863ではカキ目を入れた後、体部下端付近にヘラケズリを施す。底部外面は不調整で凹凸が残り、内面はナデ調整する。864は内面の当て具痕が薄く、不明瞭である。866は灰白色を呈し、断面はにぶい黄橙色に発色する。868は強いロクロナデにより口縁部外面の凹凸が著しい。870の体部外面下位には、叩きの後縦方向のハケを粗く施す。また、体部中位の一部にはカキ目を施す。871は頸部内面をケズリ調整する。856・859・867・870の肩部外面および870の口縁部内面には、自然釉の降着が著しい。

875～877は甕Ｃ。平底で胴径に比して口径が大きく、器高は低い。口頸部は短く直線的に開き、上端に平坦面をつくる。875は、口縁端部がヨコナデにより内側にわずかに肥厚する。肩の張りは弱い。外面調整は、口縁部から体部中位までは叩きの後ロクロナデで、器面に叩き目はほとんど残らない。体部下位にはヘラケズリを施す。内面は、口縁部から体部中位にはロクロナデを施し、体部下位は斜め方向のナデ調整である。叩き調整時の当て具痕跡はロクロナデにより消され、内面にはみられない。焼成がやや不良で、灰白色を呈する。876は肩部に耳状

のつまみを4箇所に付す。調整は内外面ともロクロナデ。灰色を呈し、胎土には白色微砂を含む。877は胴部最大径が約60cmとなる大型品。口縁端部は内側に大きく肥厚し、口縁部上端にやや内傾する面をつくる。体部外面は平行叩きを施した後、一部をナデ調整する。内面は、口縁部から肩部まではロクロナデ。それ以下は叩き当て具による青海波文が残る。

c　上層出土土器（Pl. 27～29，Ph. 76・92・93）

土師器（Pl. 27・28）　上層からは杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯E、杯G、杯H、皿A、皿B、皿C、小型皿、椀A、椀C、椀D、鉢、高杯A、高杯C、壺A、壺B、小型壺、甕A、甕C、鍋、甑、竈などが出土している。

239～249は杯A。奈良時代に属する239～245は、口径が20.5cm前後の杯AⅠ（243～245）、口径が18.5cm前後の杯AⅡ（242）、口径が15.5～17.0cmの杯AⅢ（239～241）に分けられる。口縁端部は内側に巻き込んで肥厚するもの（239～241・243～245）が主体であるが、242は口縁部上端に狭い面をもつ。243は口縁部の屈曲が著しく、新相を示す。240・241・245はa0手法、243・244はb0手法、239はb1手法で調整する。242は口縁部外面の磨滅が著しいが、b1手法であろう。241の底部外面には多くの指頭圧痕が残る。239は口縁部内面に連弧暗文を施し、放射暗文の間隔も密で、平城宮土器ⅡまたはⅢ古段階に位置づけられる。240・241・243～245は内面に一段暗文をもち、241・243は底部内面に螺旋暗文が残る。240は赤褐色を呈し、口縁端部には煤が付着する。

246～249は器形や調整の特徴が新相を示し、9世紀の所産。口径が18cm前後の杯AⅠ（246・247）と口径が13.0～14.0cmの杯AⅡ（248・249）がある。いずれも斜め上方に大きく開く口縁部を有す。口縁端部は246～248は内側に肥厚し、249は内傾する面をつくる。246～248はe－c手法、249はe手法で調整する。249の胴部外面には指頭圧痕が目立つ。

250は杯B。口縁部は内弯しながら立ち上がり、端部には外傾する狭い面をもつ。高台は断面台形で、外に開く。c0手法で調整する。橙色を呈し、胎土には白色粘土が混じる。

251は杯B蓋。口縁端部は丸くおさめ、外面はヘラケズリした後、全面に丁寧なヘラミガキを施す。

252・253は杯C。口縁端部はわずかに内傾する。252は口縁部外面をヨコナデし、内面に間隔の粗い一段暗文を施す。平城宮土器Ⅲ新段階。253は暗文をもたず、胎土に赤色粒子を含む。

254～261は皿A。口径が22～24cmの皿AⅠ（254～256・258・259）と、口径が17～20cm程度の皿AⅡ（257・260・261）がある。254・256・257・260は口縁端部を内側に肥厚させ、平底から口縁部が斜め上方に開く形態を呈する。255は口縁部がなだらかに立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。254～256はa0手法、257・260はc0手法で調整し、254は底部外面に指頭圧痕が残る。254～256・260は内面に一段暗文を施し、255は底部内面に螺旋暗文がある。257は外面に煤の付着が著しく、内面にも黒色炭化物の付着がみられる。255の底部外面には、「＝」と「×」を組み合わせたような意匠の記号のヘラ書きがあり（Ph. 125）、260の底部外面には「＋」のヘラ書きを施す。254～256・260はおおむね平城宮土器Ⅲ、257は平城宮土器Ⅳ～Ⅴに位置づけられる。

一方、258・259・261は口縁部がなだらかに立ち上がり、底部との境界は不明瞭である。261

は口縁部の開きが大きく、上部はヨコナデにより外反する。258・259の調整はc0手法で、261は口縁部を削り残すe－c手法である。258は口縁端部外面が一部黒色化する。259は赤褐色を呈し、胎土に径1㎜ほどの赤色粒子が目立つ。258は平城宮土器Ⅴ、259・261は平安時代のもの。

262・263は皿C。両者ともe手法で調整し、底部外面中央が若干凹む。263は口縁部と底部の境に弱い段を有する。262は胎土に雲母を多く含む。

264～266は小型皿。いずれも「て」字状口縁で、264は端部を上方につまみ上げ、265は端部を内側に肥厚させる。3者ともe手法で調整する。264・265はにぶい黄橙色、266は浅黄橙色を呈する。10世紀末から11世紀初頭の年代が与えられる。

267～272は椀A。狭い平底と、内弯しながら大きく開く口縁部からなる。267～270は器高が高く深い器形で、271・272は器高が低く、時期が下がる。268以外は口縁端部を丸くおさめ、268は端部をわずかに内側に肥厚させる。267は不明瞭であるが、外面にヘラケズリを施し、その他はいずれもc0手法で調整する。267～270は口縁端部を削り残す。

273～286は椀C。上層出土の椀Cで、口縁部が八分の一以上残存する資料は64点を数える。口径は10.0～15.5㎝の幅をもつが、11.5～13.5㎝を測るものが49点と全体の7割を超える。器高は3.2～4.5㎝の範囲におさまるが、径高指数には23.5～33の幅がある。口縁端部の形状は、内傾する面をなすものが多いが、丸くおさめるもの（277・280・284）、薄く尖らせるもの（274・283）、端部外面を外傾させるもの（273）や上端に平坦面をつくるもの（278）もみられる。調整はいずれもe手法で、外面には粘土接合痕が残るもの（276・279～284・286）が多い。277・281の口縁部内面には斜め方向の工具痕が一定間隔で並ぶ。278は胎土に赤色粒子を多く含み、285は径1～2㎜の砂粒を多く含む。280の底部外面には墨書がみられるが、判読はできない。

鉢（287）は、口縁部が内弯し、口縁端部は丸くおさめる。調整はe手法。体部外面には指頭圧痕が残る。

288は鉢B。体部は内弯しながら立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。外面は底部から口縁部直下までをヘラケズリする。にぶい黄橙色を呈し、胎土に白色微砂を多く含む。

289～290は高杯A。289は杯部。口縁端部は上方に肥厚する。口縁部をヨコナデし、杯部外面はヘラケズリの後、分割ヘラミガキを施す。内面は灰黄褐色を呈し、一部にタール状の付着物がみられる。290・291は脚部。290は心棒成形のⅡ群土器で、外面を縦方向にヘラケズリし、八角形に面取りする。内面下方にはヨコナデを施す。

291は高杯C。裾部がラッパ状に開き、端部は丸くおさめる。裾部内面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。7世紀代の所産であろう。

292～294は壺B。口縁部は外反し、端部はいずれも丸くおさめる。293は口頸部のヨコナデにより、肩部に弱い稜をもつ。色調は292がにぶい黄橙色で、293が赤褐色を呈する。294は小型品で、口縁部の一部を欠くが、ほぼ完存する。底部は平底に近い丸底をなす。外面調整は口頸部をヨコナデするのみで、体部にはユビオサエの痕跡がよく残る。内面はヨコナデで調整し、一部に粘土接合痕がみられる。灰黄色を呈する。

295～297は甕A。いずれも都城型の甕である。口縁端部は3個体とも内側に肥厚させるが、その方法は、内側に巻き込むもの（295・297）とつまみ上げるもの（296）がある。調整については、口縁部外面はいずれもヨコナデで、295・297ではヨコナデに先行するハケ目がみられる。

296の口縁部内面はヨコナデ調整で、ナデに先行する横方向のハケ目がわずかに確認できる。295・297の口縁部内面は横方向のハケ目調整で、295のハケ目は粗い。体部外面は3個体ともハケ目調整で、295・296のハケ目は粗く、体部内面はいずれもナデ調整である。297は体部器面の凹凸が激しく、浅黄橙色を呈し、胎土には赤色粒子が目立つ。295の外面にはほぼ全面に煤が付着し、296の体部内面には焦げが付着する。

298～300は鍋Ａ。口縁端部は、298・299では内側に肥厚し、300では上下に肥厚する。299は他に比べ、上方への突出が高い。口縁部の調整は、いずれも内外面ともヨコナデである。298は、体部上半をナデで調整し、中位以下に目の粗いハケ目を施す。体部の内面調整は、上半がヨコ方向を基本としたハケ目で、下半はナデ。内面のハケ目は細かく、外面のものとは異なる工具による。体部外面上半には、横方向に3㎝程度の帯状に煤の付着がみられる。色調はにぶい黄橙色を呈する。299の体部外面はハケ目調整。体部内面はナデであるが、指頭圧痕が残る。口縁部外面には粘土接合痕が確認できる。色調は橙色を呈する。300の体部外面の調整は、磨滅により不明瞭であるが、縦方向の板ナデあるいはハケ目と考えられる。体部内面はナデ調整である。体部の器面は滑らかではなく、凹凸がみられる。頸部以下の内面には、煤の付着が著しい。浅黄橙色を呈し、胎土に赤色粒子を多く含む。

黒色土器（Pl.27）　上層からは、土師器、須恵器の他に黒色土器も出土したが、多くは小片であり、図示できるものは少ない。大部分が内面のみ黒色のＡ類であり、全面黒色のＢ類の出土はわずかである。

1061～1067はＡ類椀。1061は口径18.0㎝を測る。口縁部をヨコナデし、体部外面をヘラケズリで調整する。外面にヘラミガキはみられない。胎土には雲母を多く含む。1062は口縁部をヨコナデし、体部外面にはユビオサエの痕跡が残る。外面にはヘラミガキはみられず、内面には密にヘラミガキを施す。1063は口径14.9㎝、器高4.0㎝。断面三角形の低い高台を付す。口縁部外面には粗いヘラミガキがみられ、内面は全面に密にヘラミガキを施す。口縁部内面には渦状の暗文が入り、底部外面には「≠」のヘラ書きがある。1064は底径9.4㎝で、他に比べ大きい。低い高台を有し、高台の断面は三角形に近い台形を呈する。内面には密なヘラミガキがみられる。1065～1067は底径が7㎝ほどである。1066・1067は、断面三角形の高台をもち、高台の高さは1067のほうが低い。両者とも内面には密にヘラミガキを施す。1065の高台は足高でハの字状に開く。

1068はＢ類の椀。高台は断面三角形で、端部が外側に小さく屈曲する。器面の磨滅が著しいが、内面にヘラミガキがわずかに確認できる。

須恵器（Pl.28・29）　上層から出土した須恵器には、杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｂ蓋、杯Ｃ、杯Ｅ、杯Ｈ蓋、皿Ａ、皿Ｂ、椀Ａ、椀Ｂ、鉢Ａ、鉢Ｄ、高杯、盤、平瓶、横瓶、瑞、壺Ａ、壺Ａ蓋、壺Ｂ、壺Ｃ、壺Ｄ、壺Ｋ、壺Ｌ、壺Ｑ、甕Ａ、甕Ｂ、甕Ｃなどがある。

901～905は杯Ａ。口径が13.0～15.0㎝の杯ＡⅢで、いずれも口縁端部は丸くおさめる。底部外面は、901・903・905がヘラ切り不調整、902がロクロケズリで、904がロクロナデである。903・904は焼成がやや不良で、灰白色を呈する。901・905の底部外面には墨書があるが、文字あるいは記号の断片であり、意味は不明である。

883～895は杯Ｂ。口径が19.0～23.0㎝の杯ＢⅠ（891～895）、口径が15.0㎝前後の杯ＢⅢ（888

～890)、口径が11.5～12.5㎝の杯BⅣ（884～887)、口径が10.0㎝以下の杯BⅤ（883）がある。径高指数が20代半ばの器高の低い一群（888～890・893・895）と、径高指数が20代後半から30代の器高の高い一群（883～887・891・892・894）があるが、その中間の様相を示す径高指数30代前半の個体も多い。口縁端部は丸くおさめるものが基本であるが、895は口縁端部上面に内傾する狭い面をもつ。884は口縁部上部が外反して開き、888は底部から口縁部がゆるやかに弯曲しながら立ち上がり、高台が底部の内側寄りに付く。底部外面の調整は、杯BⅠでは892がヘラ切り不調整で、その他の４個体はロクロケズリ。杯BⅢ～Ⅴでは、884は不明であるが、888はロクロケズリで、その他の６個体はヘラ切り不調整である。885・886・895では口縁部外面から底部外面にかけて自然釉がみられ、逆位で焼成したことがわかる。888・889では口縁部外面から高台側面にかけての範囲に自然釉が降着する。883の外面には底部から口縁部にかけて火襷があり、889は器表面に多くの気泡がみられる。894では、底部外面中ほどに爪状圧痕が四分の三周分ほど確認できる。890は淡緑灰色を呈し、胎土に多くの白色微砂と少量の黒色粒子を含む。また、891・894は焼成がやや不良で、灰白色を呈する。これらの杯Ｂの多くは奈良時代に属するが、889は底部外周縁に高台が付き、長岡京期のものとみられる。

878～882は杯Ｂ蓋。口径より、879・880は杯BⅠ蓋、882は杯BⅢ蓋、878は杯BⅤ蓋である。形態は多様で、頂部が丸みをもち、端部が下方に突出するもの（879)、同形で、非常に低いかえりを有するもの（882)、頂部が平坦で外縁部がわずかに傾斜し、端部が下方に突出するもの(878)、頂部が平坦で外縁部が屈曲し段をなすもの（880）がある。881は、焼成時の焼け歪みで頂部が凹む。頂部外面は、878・880・881がロクロナデ、879・882がロクロケズリ調整である。878・881・882のつまみは、頂部が突出する形状を呈する。882は外面全面に、878・880は外面外縁部にのみ自然釉が降着する。880は胎土に黒色粒子を多く含む。これら杯Ｂ蓋は、882が藤原宮期～奈良時代初頭、878・879が奈良時代前半、880が奈良時代後半の年代が与えられる。

杯Ｅ（906）は平底で、口縁部が内弯しながら立ち上がり、口縁端部には内傾する面をもつ。胴部下端はロクロナデにより、わずかに屈曲する。底部外面はヘラ切り不調整。焼成がやや不良で、内面は白色を呈し、火表にあたる口縁部から底部外縁までは灰色に発色する。底部外面には、直線のヘラ記号が１条入る。

皿Ａ（896）は、口縁端部を丸くおさめ、内面はヨコナデにより弱い凹線状の凹みを有す。底部外面はロクロケズリで調整し、胎土には黒色粒子を含む。

898・899は皿Ｂ。口径が30㎝前後の皿BⅠ（898)、口径が20㎝程度の皿BⅡ（899）がある。899の底部外面の調整はロクロナデによる。898は焼成がやや不良で白色を呈するが、重ね焼き焼成により、口縁部外面上部は灰色に発色する。899の底部内面には火襷がみられ、胎土には径３～５㎜の大きめの砂粒が目立ち、底部外面では黒色粒子が墨を流した様にのびる。

897・900は皿Ｄ。口縁端部に平坦面をつくる。900は底部中央を欠損するが、底部が高台より出る、所謂出尻状をなすとみられる。底部外面の調整は、897・900ともにロクロケズリによる。900の口縁部外面には、火襷がみられる。

鉢Ａ（907）は、体部から口縁部までが内弯しながら立ち上がる。底部は平底に近くなると思われる。口縁端部は内側に突出し、断面三角形状で、上部には平坦面をもつ。内面調整は、口

縁部から体部はロクロナデで、体部下端から底部にかけては不定方向のナデを施す。外面は、口縁部から体部中位までをロクロナデ、体部下半をロクロケズリの後、手持ちヘラケズリで調整する。還元炎焼成が完全でなく、淡黄色～灰黄色に発色する。

908・909は鉢Ｄ。908は短く外反する口縁部と、若干肩の張った胴部からなる。口縁端部には外傾する面をもつ。外面は、口縁部から胴部中位までをロクロナデ、胴部下半をロクロケズリで調整する。内面調整はロクロナデ。909の口縁部は短く直線的に開き、端部を上方につまみ上げる。肩の張りは908より弱い。内外面とも調整はロクロナデを基本とし、外面の肩部付近にのみロクロケズリを施す。体部外面下半は調整が不十分で、器面に凹凸がみられ、粘土接合痕が残る。体部外面には、斜め左上がりのヘラ描きが3条平行して走る。胎土には黒色粒子を含む。

高杯（910）は短脚で、杯部を欠く。裾端部は上方につまみ上げ、側面は凹む。調整は内外面ともロクロナデで、内面にはナデの痕跡がよく残る。脚部外面には、2箇所に自然釉が滴状に付着し、裾部では端部側面にのみ釉の降着がみられる。胎土には黒色粒子を多く含む。

915・916は壺Ａ。915は口縁端部に狭い面をもつ。体部外面下半をロクロケズリで調整し、その他はロクロナデ調整。肩部外面には自然釉が降着するが、口縁部付近には及んでおらず、蓋を被せて焼成したことがわかる。砂粒をほとんど含まない精良な胎土で、灰白色を呈する。916は口縁端部にやや内傾する面をもつ。残存部は内外面ともロクロナデ調整。蓋を被せずに焼成し、口縁部および肩部外面に自然釉が降着する。

912～914は壺Ａ蓋。912・914は口縁端部の内側を薄く挽き出し、焼成時の融着を軽減させる形態とする。913の口縁端部は狭い面をなす。調整は3個体とも同様で、頂部外面はロクロケズリ、口縁部内外面はロクロナデ、頂部内面は不定方向のナデによる。912には中央がやや突き出たボタン状のつまみを付す。913・914の外面には自然釉の降着がみられる。912は焼成がやや不良で、外面は灰白色～灰色、内面は白色を呈する。

924～926は壺Ｂ。肩部が強く張る、胴長の器形。924は口縁端部が肥厚し、肩部には径5㎜ほどの小孔があく方形の把手が付く。残存部の内外面はロクロナデ調整で、外面の肩部下半から胴部にかけてはカキ目を施す。灰白色を呈し、胎土は精良で、砂粒はほとんど含まない。器面の発色の違いから、蓋を被せて焼成していることがわかる。925は胴部から底部にかけて残存するが、底部中央を大きく欠く。平底で、胴部はバケツ状に開く。胴部内面はロクロナデ調整する。胴部外面は、下端から5.5㎝までの範囲にロクロケズリを施し、それより上はロクロナデで調整する。底部外面はヘラ切り不調整。胴部外面の一部には濃緑色の自然釉が流れ、一部は底面にも及ぶ。自然釉は胴部内面の一部にもみられる。焼け膨れが著しく、特に内面の器面は気泡による凹凸が激しい。926は平底とやや丸みを帯びた体部からなり、断面台形の低い高台が付く。ロクロ水挽きで成形し、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には、径2～4㎜の砂粒や黒色粒子を含む。

壺Ｄ（922）は扁平な体部の小型の壺で、短い口縁部が直立して立ち上がる。高台は付さない。底部外面はヘラ切り不調整で、外周のみに手持ちヘラケズリを施し整える。他はロクロナデ調整。胴部外面には自然釉が降着するが、蓋を被せた状態で焼成していたようで、肩部上半および口縁部は釉の降着を免れる。完形品で出土した。

921は壺Ｌ。口頸部上半を欠くが、それ以外は完存する。口頸部外面および胴部外面はロクロナデで、胴部下端にのみロクロケズリを施す。底部外面はヘラ切り不調整。体部の成形は円盤閉塞法により、肩部には薄緑色の自然釉が薄くかかる。胎土は精良で、砂粒をほとんど含まない。胎土の特徴や、底部の切り離しが糸切りでなく、製作技法が三段構成であることから、美濃須衛窯産の可能性がある。

919・920は壺Ｍ。919は口頸部を欠くが、それ以外は完存する。胴部外面はロクロナデで、底部外面はヘラ切り不調整。肩部外面および底部内面には、自然釉の降着が著しい。920は肩部下半以下が残存し、断面台形の高台をもつ。残存部は内外面ともロクロナデ調整。胴部外面および底部内面には自然釉が降着し、特に胴部外面の三分の一ほどが著しい。胎土には黒色粒子を多く含む。両者とも、ロクロ水挽きで成形したと考えられる。

壺Ｎ（923）は倒卵形の器形で、ロクロ水挽きで成形する。胴部外面下端にのみロクロケズリを施し、底部外面は不調整。底部内面には粉紅色の自然釉がみられる。灰白色を呈し、胎土は精良でほとんど砂粒を含まない。

壺Ｑ（917）は、平底で肩の張る胴部をもつ。頸部より上を欠くが、外反する広口の口頸部が付くと考えられる。高台は側面を外に引き出し、底端部は下方に短く突出する。肩部外面はロクロナデで、胴部外面はロクロケズリで調整する。底部外面は不調整で、布目状の圧痕が残る。また、高台の内側には爪状圧痕が四分の三周分ほど確認できる。内面は肩部および胴部がロクロナデで、底部は不定方向のナデ調整。肩部外面および底部内面には、自然釉が薄く降着する。

平瓶（911）は肩が張り、体部は台形状をなす。口頸部を欠き、頂部には断面方形となる把手の剥離痕がある。体部側面はロクロナデで調整し、下端にはロクロケズリを施す。底部外面は不調整で、布目状の圧痕が残る。体部は、円盤閉塞法で成形する。胎土には黒色粒子を多く含み、頂部から体部側面にかけて自然釉が降着する。気泡による焼け膨れがあり、器表面は凹凸が著しい。

瓶（918）は、口頸部上部を欠くが、それ以外は完存する。胴部は球状を呈し、頸部には１条の凹線を入れる。胴部中央には径約1.5㎝の孔を穿ち、胴部外面の上半はロクロナデ、下半はロクロケズリで調整する。肩部の内面には絞り痕がみられ、円盤閉塞の痕跡は確認できない。頸部外面および胴部下半から底部にかけての外面に広く自然釉が降着する。

927～931は甕Ａ。口縁端部の形状は多様で、断面がコの字形となるもの（927）、上端に平坦面をつくるもの（928）、内側をつまみ上げ突出させるもの（929）、玉縁状になるもの（930・931）などがある。いずれも体部は叩きで整形し、927・928・931は外面にカキ目を加える。口縁部は内外面ともロクロナデが基本であるが、927では外面に弱いカキ目を施し、928では頸部内面にケズリ調整を加える。また、930では口縁部外面にロクロナデに先行する叩きの痕跡がわずかに確認できる。927・929・930では、体部外面や口縁部内面に自然釉が降着するが、928・931には自然釉はみられない。928・931は灰白色を呈し、928は胎土に黒色粒子を含む。927は胎土に径１～２㎜の砂粒を多く含み、931の胎土は白色微砂を多く含む。

932は甕Ｃ。口縁部のみが残る。口縁端部は内側に肥厚し、上部に平坦面をつくる。口縁部は内外面ともロクロナデで、頸部内面にはヘラケズリを施す。体部も残存部はロクロナデ調整

で、叩き調整の痕跡はみられない。また、内外面とも自然釉の降着はみられない。灰白色を呈し、胎土に白色微砂を含む。

ⅱ　SE4740出土土器（Pl. 30・31，Ph. 78・79・94～100）

SE4740は、東西大溝SD4130南側の近接した位置に設けられた井戸である。建築部材を転用し、一辺0.9mの方形の井戸枠を組む。井戸掘方は、上部は径4.8～6.2mの不整円形を呈し、0.3～0.6mの深さで段をなして、径4m、深さ3mの竪穴を掘り込む。竪穴部分は下方ほど径を狭め、底部では径1.7mとなる。掘方の深さは3.6mである。

調査時の所見では、井戸枠内の埋土は、最下層（灰褐色砂礫）、下層（褐色砂質土）、中層（砂交じり褐色粘質土）、上層（青灰褐色粘質土）の大きく4層に分けられている。別表6には各層の器種構成を示した。個体数の算出はSD4130の場合と同様、口縁部が八分の一以上残存する資料を基準とした。以下、掘方および埋土各層ごとに報告する。

掘方出土土器（Pl. 30）　掘方からは、土師器では杯A、杯C、杯G、杯H、皿A、高杯C、鉢H、甕、須恵器は壺、甕が出土した。出土量は少なく、図化できたものは土師器のみである。

杯A（301）は、口縁端部が内側に肥厚する。暗文は一段分が残るのみであるが、施文角度から考えると、二段暗文であろう。杯C（302）は、口縁端部に緩い内傾面をもつ。a0手法で調整し、一段暗文は細く垂直に施す。杯G（303）・杯H（304）は、ヨコナデにより口縁端部が弱く外反する。鉢H（305）は口縁部付近の器壁が厚手で、口縁部が緩やかに波打つ。高杯C（306）は、脚部と杯部の境に、接合時のナデの痕跡が明瞭に残る。

甕（307）は、口縁端部が外側に肥厚し、内面は横方向のハケ目で調整する。口縁部外面中位には粘土接合痕が明瞭に残る。

これら掘方出土土器は断片的であるが、年代の判定できるものは飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。

最下層出土土器（Pl. 30）　最下層からは、土師器（308～329）杯A、杯C、皿A、椀C、蓋、甕A、甕C、鍋、須恵器（941～946）杯A、杯B、杯B蓋、平瓶、壺A、甕などが出土している。器種構成をみると、土師器では38個体中、甕が20個体で半数以上を占める。また、器種構成の算出からは除外しているが、土師器甕体部の破片が多量に出土しており、これらを含めると出土総量に占める甕の割合はさらに高くなる。

308～311は土師器杯A。いずれも口縁端部を内側に肥厚させるが、311は肥厚が弱い。310・311はb1手法で調整する。口縁部の暗文構成は、308・309が二段暗文、310・311が連弧暗文で、311は上部の暗文がループ状になる連弧暗文A。308は径高指数が23.7以上で上段の放射暗文帯の幅が広く、飛鳥Ⅳに属する。309は藤原宮期、310・311は平城宮土器Ⅱの年代が与えられる。

312は杯B蓋。頂部外面はヘラケズリの後、ヘラミガキを施す。胎土には赤色粒子を含む。

313～315は杯C。いずれもa0手法で調整する。径高指数は314で14.7。3個体とも一段暗文を施すが、315は暗文の施文間隔が粗い。314・315は胎土に雲母を含む。313は飛鳥Ⅴ、314・315は奈良時代前半のもの。

316・317は皿A。両者とも、口縁端部は内側に巻き込み肥厚する。調整は316がb0手法、317がc0手法。316は一段暗文をもつが、施文間隔は粗い。

318・319は椀Ｃ。口縁端部は、318では明瞭な内傾面をつくり、319は丸くおさめる。両者とも、口縁部内面には右上がりの工具痕が不定間隔で残る。

320～328は甕Ａ。口縁部は、外弯して開くもの（321～325）と直線的に開くもの（320・326～328）がある。口縁端部の形状には、つまみ上げるもの（321・323・327）、丸くおさめるもの（322・325・326）、ヨコナデにより上面が凹むもの（320）、断面コの字形のもの（328）などがあり、多様である。口縁部は内外面ともヨコナデで調整するものが多数を占めるが、323・324は内面を目の粗い横方向のハケ目で調整する。また、321では頸部内面に横方向のハケ目が残る。体部は外面をハケ目、内面をナデで調整するものが多く、321・323・324・327の外面のハケ目は目が粗い。325・326では体部外面下半にケズリを施し、内面をハケ目で調整する。328は体部内面上半にケズリを粗く施し、胎土には径１～３㎜の黒色砂粒を多く含む。320～324・327は都城型で、325・326は近江型、328は河内型。320の頸部外面には、粘土接合痕が横方向に長く残る。320・327は焦げにより内面全体が黒色となり、325は外面の大部分が煤により黒色化する。また、321・322・328は体部中位に黒斑を有する。326は胎土に径１㎜以下の細かい砂粒を多く含む。

鍋（329）は、胴部外面を縦方向のハケ目で調整し、口縁部内面には横方向のハケ目を施す。ともにハケ目は粗い。胴部内面はナデ調整で、口縁部外面には黒斑がある。

須恵器杯Ａ（945）の底部外面はヘラ切り不調整。胎土に白色微砂を含む。

943・944は杯Ｂ。両者とも底部外面はヘラ切り不調整で、胎土には黒色粒子を含む。944の底部内面には、不定方向の条線が入る。943の底部外面には、「一」状の墨線がみられる。

941・942は杯Ｂ蓋。両者ともかえりをもたず、頂部外面はロクロケズリで調整する。942は外面の周縁部にのみ自然釉が降着し、胎土には黒色粒子が目立つ。

946は胴部最大径約24㎝となる壺の胴部。外面下半は、ロクロケズリの後、叩きを施す。胴部上半は、内外面ともにロクロナデによる凹凸が明瞭に残る。肩部外面には自然釉が降着する。壺Ａになるか。

これら最下層出土土器には、藤原京期から奈良時代半ば頃までの年代が与えられる。

下層出土土器（Pl.31）　土師器（330～337）は杯Ａ、皿Ａ、椀Ａ、椀Ｃ、甕Ａ、須恵器（947～954）では杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｃ、皿Ａ、壺Ｌなどが出土している。下層出土土師器の器種構成で特筆すべき点は、椀Ｃが10個体と過半を占め、そのうちの８個体に「香山」の墨書をもつ点である。椀Ｃの比率が高く、かつ「香山」の墨書土器を含むことは、SD4130中層出土土器の特徴に共通する。また、須恵器では、壺Ｌの比率が高く、さらにほとんどが完形に近い状態で出土している点が注目できる。

330・331は土師器杯Ａ。330は口縁部の一部を欠くが、それ以外は完存する。331は口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部の肥厚が弱い。径高指数は330が19.3、331が19.7。両者ともにa0手法で調整する。330は口縁部に粗い一段暗文を施し、底部には螺旋暗文がある。底部外面には指頭圧痕が多くみられ、胎土に雲母を多く含む。平城宮土器Ⅲの新段階。331は暗文をもたず、底部外面に木の葉の圧痕が残る。

皿Ａ（332）は完形で出土した。b0手法で調整し、内面に暗文は施さない。灰白色を呈し、底部内面には「△」（記号）のヘラ書きを施す。

333・334は椀Ｃ。334はほぼ完形で出土した。334は「米」、333では全形は不明であるが、記号のヘラ書きを底部外面に施す。いずれも焼成後のものである。334は胎土に赤色粒子を含む。

335～337は甕Ａ。いずれも都城型で、口縁端部を内側に強く巻き込み肥厚させる。外面は、口縁部がヨコナデ、胴部はハケ目調整であるが、336・337では頸部から口縁部にかけて、胴部のハケ目に先行する、目の粗い縦方向のハケ目が残る。口縁部内面の調整は、335がヨコナデ、336・337が目の粗い横方向のハケ目である。胴部内面はナデ調整を基本とし、335・337では一部にハケ目がみられる。337では胴部下半を中心に指頭圧痕が明瞭に残る。３個体とも胎土に赤色粒子を含み、底部外面を中心に煤が付着する。また335・337は、焦げにより内面全体が黒色化する。

須恵器杯Ａ（947）は口縁端部を丸くおさめ、胎土に雲母を多く含む。

杯Ｂ（948）は完形品で、断面方形の低い高台が底部外周に寄って付く。底部外面には不定方向のナデ調整を施す。外面には広範囲に自然釉がみられるが、重ね焼き焼成のため、底部中央付近のみは釉の降着を免れる。

杯Ｃ（950）は土師器杯Ａを模した器形で、口縁端部内面に１条の強い凹線が巡る。底部外面はロクロケズリで調整する。灰白色を呈し、胎土には雲母を含む。

皿Ａ（949）は完形品。口縁端部内面には１条の凹線が巡る。口縁部のロクロナデが強く、口縁部外面にその痕跡がよく残る。底部外面には不定方向のナデを施す。色調は灰白色で、重ね焼きにより、口縁部外面上部のみが暗く発色する。胎土には雲母を多く含む。底部外面には焼成後の「丰」のヘラ書きを入れる。

952～954は壺Ｌ。球形の胴部で、直立する頸部から口縁部が強く屈曲し、口縁端部を上方につまみ上げる。954は口縁部をわずかに欠損するのみで他は完存する。952・953も頸部以下は完存するが、口縁端部を全て欠き、意図的に打ち欠いた可能性がある。952・953は、やや肩が張る器形となる。954は胴部外面下半をロクロケズリで調整し、952・953は胴部下端にのみロクロケズリを施す。953の高台底面には木目の条線が残る。木製の作業台の痕跡であろう。953・954には肩部内面に円盤閉塞の痕跡が認められるが、952では確認できない。３個体とも肩部を中心とした外面と、口縁部内面および底部内面に自然釉が降着する。

壺Ｍ（951）は、口頸部以外が完存し、口頸部を意図的に打ち欠いた可能性がある。胴部外面はロクロナデで、肩部外面と底部内面には自然釉が降着する。胎土には黒色粒子を多く含む。

これら下層出土土器には、奈良時代中頃の平城宮土器Ⅲから、奈良時代後半にかけての年代が与えられる。

中層出土土器（Pl.31）　中層からは、土師器（338～345）杯Ａ、皿Ａ、皿Ｃ、椀Ａ、椀Ｃ、壺Ｅ、小壺、甕Ａ、須恵器（955・956）杯Ａ、杯Ｂ、壺、壺蓋などが出土した。

338・339は土師器皿Ａ。339は口縁部の一部を欠くが、それ以外は完存する。ともにc0手法で調整する。338は口縁部外面に漆を塗布し、黒く光沢感をもつ。339は口縁端部外面が黒色化し、漆を塗布したとみられ、底部内面には「米」の焼成後の線刻がある（Ph.126）。細部は異なるが、SD4130上層出土の土師器皿Ａ（Pl.27-255，Ph.125）のヘラ書きと同じ記号であろう。

皿Ｃ（340）は口縁端部に内傾する面をもつ。e手法で調整し、底部外面には指頭圧痕の凹凸が多く残る。

341・342は椀Ａ。いずれも完形品で、口径はほぼ同じである。c0手法で調整し、341では口縁端部までケズリが及ぶが、342では口縁端部を削り残す。内面はハケ目調整の後、ヨコナデを施す。

椀Ｃ（343）も完形品で、内面はハケ目を施した後、ヨコナデで調整する。外面には、粘土接合痕が螺旋状にほぼ一周残る。胎土に赤色粒子を含む。

壺Ｅ（344）は底部のみ残存する。外面は磨滅が著しく、調整は不明である。胎土には赤色粒子と多くの雲母を含む。

甕Ａ（345）は、口径15㎝ほどの小型品で、ほぼ完形で出土した。口縁端部は内側に肥厚する。口縁部外面はヨコナデで、ナデに先行する縦方向のハケ目がわずかにみられる。口縁部内面および胴部外面にはハケ目を施すが、後者のハケ工具のほうが目が細かい。胴部内面の調整はナデで、一部に指頭圧痕が残る。底部外面は全面が煤により黒色化する。

須恵器杯Ａ（956）は、底部にわずかな丸みをもち、外面はヘラ切り不調整である。

壺蓋（955）は、つまみ以外が完存する。外面にはほぼ全面に自然釉が降着する。

これらの土器は、おおむね奈良時代末の平城宮土器Ⅴから、長岡京期に位置づけられる。

上層出土土器（Pl.31）　土師器（346～351）は杯Ａ、皿Ａ、椀Ａ、椀Ｃ、須恵器杯Ａ、杯Ｂ、壺Ｂ、および黒色土器（1069・1070）の椀Ｂなどが出土している。347～349・351は、胎土に雲母が目立つ点で類似する。

杯Ａ（346）と椀Ａ（347）は9世紀前半に比定できるもの。杯Ａは口縁端部が内側に肥厚し、c0手法で調整する。胎土には赤色粒子を多く含む。椀Ａは口縁端部を丸くおさめる。外面全面をヘラケズリで調整するが、ヘラミガキは施さない。

杯Ａ（348）および皿Ａ（349）は、9世紀後半の資料である。杯Ａは口縁端部が内側に軽く肥厚し、ｅ手法で調整する。外面には粘土接合痕がみられる。皿Ａは口縁端部を内側に肥厚させ、調整はｅ手法。底部内面には刀子状利器の使用痕が確認できる。

10世紀前半に比定できるものには、杯Ａ（350）と皿Ａ（351）がある。杯Ａはｅ手法で調整し、口縁部は強いヨコナデにより屈曲する。皿Ａは、口縁部がヨコナデにより外反し、口縁端部は内側に肥厚する。調整はｅ手法で、底部外面には指頭圧痕が残る。

1069・1070は黒色土器Ａ類の椀Ｂ。底部に断面三角形の低い高台を付す。ｅ－ｃ手法で調整し、両者とも外面のヘラケズリは粗い。1070は外面に粗いヘラミガキを施すが、1069にヘラミガキはみられない。内面には口縁端部に1条の沈線を入れ、密なヘラミガキを全面に施す。1069は口縁部に螺旋暗文が半周ほど巡り、底部には平行ミガキを施した後に崩れた螺旋暗文を入れる。1070は、口縁部中位に一単位のみの螺旋暗文が2箇所に入る。両者とも、胎土に赤色粒子と多くの雲母を含む。これらは350・351と同じく、10世紀前半の所産と考えられる。

Ｂ　道路側溝・その他の溝出土土器

ⅰ　六条条間路側溝出土土器（Pl.32，Ph.101）

六条条間路SF4750は、SD4139を北側溝、SD4311を南側溝とする。北側溝SD4139から比較的まとまった量の土器が出土した。

北側溝SD4139出土土器　土師器は杯A、杯C、杯G、杯H、杯X、皿A、皿H、皿X、高杯A、高杯C、甕、鍋、須恵器は杯A、杯B、杯B蓋、平瓶、壺C、短頸壺が出土した。

土師器杯A（361）は平底の底部から内弯気味に口縁部が立ち上がり、端部を内側に肥厚する。便宜上杯Aとするが、典型的な杯Aとは形態が異なり、暗文構成も異なる。同形態の杯は藤原宮SD2300[3]の他、一定量存在する。b1手法で調整し、口縁部直下までヘラケズリを施す。内面に放射暗文と下向きの連弧暗文Aを施す。杯Cは杯CⅠ（362）、杯CⅡ（363・364）、杯CⅢ（365）がある。362は底部付近の破片。外面は器面剥離が著しいが、a1手法で調整するとみられる。内面に一段暗文を施す。364はやや深い形態であり、口縁端部にわずかに内傾する面をもつ。363・365は浅い形態で、口縁端部に沈線状の段がある。一段暗文を施し、a0手法で調整する。363の復元口径は12.8㎝。杯GはGⅠ（366）と杯GⅡ（367）がある。366は薄手のつくりで、口縁端部内面に小さく内傾する面をつくる。精良な胎土で、杯Cに似た杯Gaである。367は口縁部が外反する。胎土に白色微砂と少量の金雲母を含む。杯Hはb0手法で調整する粗製の杯で、口縁部と底部との境に段があり口縁部が外反するもの（369）と境に稜がつくもの（370・371）がある。いずれも淡褐色の色調を呈し、胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。なおSD4139出土の杯Gと杯Hの破片量を比較すると、杯Hの方が多い。杯X（368）は口縁部を強くヨコナデし、口縁端部が面をなして内傾するものとした。器壁が厚く、胎土も粗い。皿A（372・373）は口縁部が底部から丸みをもって立ち上がる形態である。372は口縁部がやや内弯し、端部が内面にわずかに肥厚する。b1手法で調整する。373はやや深い形態で、口縁端部を丸くおさめる。b0手法で調整する。内面に薄くススが付着し、外面にもススが付着する。灯火器として使用したと考えられる。374は口縁部をヨコナデし、底部をヘラケズリで調整する粗製の皿Hで、口縁部と底部の境にわずかに段が付く。黄褐色を呈し、赤褐色粒子を多く含む。375は外面を口縁部直下までヘラケズリで調整する皿H。やや深い形態で、口縁端部を丸くおさめる。胎土と色調は杯Hに似ており、黄褐色を呈し、赤褐色粒子を含む。高杯A（376）は脚部の破片で、粘土紐を径4～5㎝の円筒で輪積みして成形するⅠ群土器である。外面を上向きの縦方向のヘラケズリにより面取りする。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。高杯C（377）は杯底部に口縁部の粘土を貼り付けて成形するもので、杯底部と口縁部の間に段をもつ。脚部内面には絞り痕跡が残る。

甕は口径25㎝前後の中型品（378・379）と口径30㎝前後の大型品（380）がある。378は口縁端部を上方につまみ出し、外側に面をなす。外面ハケ目調整、内面ナデ調整の都城型甕である。379は口縁端部を丸くおさめ、わずかに上方に肥厚する。体部外面をハケ目調整する。380は口縁端部上面に面をもち、内面に縦方向のケズリ調整を施す。胎土に赤褐色粒子と金雲母を含む。鍋（381～383）も中型品と大型品がある。381は口縁端部を丸くおさめ、灰褐色の色調を呈する。382は口縁端部に面をもち、外面に斜め方向、内面に横方向の粗いハケ目調整を施す。胎土、調整が後述のSK4327出土の522に似る。383は口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。外面に縦方向のハケ目調整、内面にナデ調整を施す。

須恵器杯A（961）は口縁部が外方に開く形態である。底部は丸みをもち、口縁部との境にゆるやかな稜がつく。ヘラ切りの後、ナデ調整を施す。胎土に白色微砂を含む。杯B蓋（962～965）は杯BⅠ蓋、杯BⅢ蓋がある。962・965は杯BⅠ蓋で、962は口縁端部とかえりの高さが等

しい。965は径3.4cmの大きなつまみを貼り付ける。胎土に白色微砂を多く含み、2～5㎜の白色砂粒が少量混じる。963・964は杯BⅢ蓋で、頂部から口縁部にかけてなだらかに弯曲する形態である。964は中央が突出する擬宝珠状のつまみを貼り付ける。つまみ径は2.2cm。胎土に黒色粒子と0.5～4㎜の白色砂粒を含む。

壺C（966）は口縁部が直立し、端部を丸くおさめる。短頸壺（967）は口縁部が直立し、端部をわずかに外方へつまみ出す。肩はあまり張らずなだらかな器形である。

南側溝SD4311出土土器　土師器杯C、須恵器杯A、杯B蓋、杯G蓋、壺C、甕A、甕Cが出土した。

土師器杯C（384）はやや浅い形態で、口縁端部はわずかに外反し、内面に内傾する面をつくる。b0手法で調整するが、ヘラケズリの範囲が広い。内面の暗文は磨滅により観察できない。

須恵器杯A（970）は平底で、外方に開く口縁部が丸みをもって立ち上がる。底部はヘラ切り不調整。胎土に白色砂粒を少量含む。杯BⅠ蓋（969）は頂部から口縁部にかけてゆるやかに下る。端部を欠損するが、かえりのつかないタイプである。径3.4cmの大ぶりの擬宝珠状つまみを貼り付ける。淡青灰色を呈し、胎土に白色微砂を少量含む。杯G蓋（968）は平坦な頂部から外方に開く口縁部が付き、かえりは口縁端部よりも内側に入る。山形のつまみを貼り付ける。

壺C（971）は口縁部が直立し、端部を丸くおさめる。肩部はなだらかで沈線状の段が1条巡る。体部外面の底部付近にロクロケズリを施す。肩部外面に「惣」の刻書があり、口縁部外面と体部外面中位には「∨∨∨」のヘラ書きがある。いずれも焼成前に先端の細い鋭利な道具で記している。甕A（972～974）は口縁部を図示した。972は口縁部を丸くおさめ、端部直下と頸部にそれぞれ低い突帯状の段をもつ。973は口縁部が外反し、端部外面に面をもつ。肩部にカキ目を施す。974は口縁部が外反し、水平に開いた端部を丸くおさめる。頸部に1条の沈線を施す。甕C（975）は口縁部が外方に直線的に開き、端部を内側に肥厚させる。

以上のSD4139・4311出土土器は飛鳥Ⅲの杯G蓋（968）を含むが、飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

ⅱ　東三坊坊間路側溝出土土器（Pl.32）

東三坊坊間路SF4300は、東側溝がSD4301で西側溝がSD4302となる。遺構の削平が著しく、土器の出土量も六条条間路両側溝に比べ少ない。

東側溝SD4301出土土器　土師器杯C、杯H、高杯C、鉢、甕と、須恵器杯B、横瓶、甕が出土した。

土師器杯CⅠ（386）はやや浅い形態で、口縁端部が内傾する面をなす。a0手法で調整し、ユビオサエの痕跡が明瞭に残る。胎土に白色砂粒を少量含む。杯H（387）は口縁部が外反し底部との境に鈍い稜がある。内外面に漆が付着する。385は鉢。口縁部が内弯気味に直立し、端部を丸くおさめる。体部外面は口縁部より下を手持ちヘラケズリで調整する。古墳時代の所産の可能性がある。

須恵器杯B（976）は底部の破片で、底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。底部内寄りに低平な高台を貼り付ける。底部はヘラ切りの後、軽くナデ調整を施す。横瓶（977）は口縁部が直立し、端部に外傾する面をつくる。外面は格子叩きで調整する。胎土は白色微砂をやや多く含む。

西側溝SD4302出土土器　土師器鉢Ａと壺Ａの破片、須恵器杯Ｇ蓋、壺Ｂが出土した。

須恵器杯Ｇ蓋（978）は平坦な頂部から口縁部がなだらかに開く。頂部内面はロクロナデ調整の後、中心部分を一方向のナデ調整で仕上げる。頂部に「｜」のヘラ記号を記す。壺Ｂ（979）は体部下半から底部にかけての破片。平底の底部で、体部が直立する。外面にロクロケズリを施し、底部外面はナデ調整を施す。内外面に自然釉が降着する。

これら東三坊坊間路SF4300の両側溝出土土器は、飛鳥Ⅱ～Ⅲに属する須恵器杯Ｇ蓋（978）を含むが、土師器杯Ｃ（386）や須恵器杯Ｂ（976）からみて、飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

ⅲ　その他の溝出土土器

南北溝SD4131出土土器（Fig. 127，Ph. 102）　SD4131は、東西大溝SD4130に南から合流する南北溝である。合流点の南方には橋脚SX4134、護岸施設SX4133を設けており、その南でSD4132が東から合流する。

出土土器には土師器杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｂ蓋、杯Ｃ、杯Ｇ、杯Ｈ、皿Ａ、鉢Ｂ、高杯Ａ、壺Ａ、鍋Ｂ、須恵器杯Ａ、平瓶、長頸壺があり、皿Ａなど土師器の出土量が多い点が特徴的である。層位は上層と下層に分かれ、当初の南北溝の時期（下層）と、後に東西溝SD4132が接続する時期（上層）がある。393・405・983が下層からの出土である。

389・390は土師器杯ＡⅠである。389は口縁部が直線的に開き、端部を小さく内側に肥厚する。b1手法で調整し、内面に二段暗文を施す。色調は褐色を呈し、胎土に白色微砂と赤褐色粒子を少量含む。390は口縁端部をわずかに内側に肥厚する。b0手法で調整し、内面の暗文は磨滅により不明である。径高指数は27.0。胎土に白色微砂と赤褐色粒子を含む。口縁部と底部内面にススと灯芯痕が残り、灯火器として使用したことが分かる。391は杯ＡⅢである。底部はやや丸みをもち、口縁部が外方へ立ち上がる。口縁端部をわずかに肥厚する。外面をb1手法で調整する。内面の暗文は、器面が磨耗しているために観察できない。径高指数は23.3。胎土に白色微砂と赤褐色粒子を含む。杯Ｂ（397）は底部から丸みをもって口縁部が立ち上がり、端部を小さく内側に肥厚する。底部外寄りに断面方形の高台を貼り付ける。b1手法で調整し、内面に二段暗文を施す。胎土がやや粗く、白色砂粒を多く含む。杯Ｂ蓋（388）は頂部が平坦な小ぶりのつまみを貼り付ける。頂部外面に4分割のヘラミガキを施す。内面は黒色を呈し、螺線暗文の有無は不明である。内面に「×」の針書きを焼成後に記す。392・393は杯ＣⅠである。392は浅い形態で、口縁端部を丸くおさめる。a0手法で調整する。393はやや深い形態で、口縁端部に内傾する面をなす。a0手法で調整し、内面に一段暗文を施す。径高指数は28.2。口縁部と底部内面にススと灯芯痕が残り、灯火器として使用したことが分かる。杯Ｇ（394～396）は、いずれも口縁端部に内傾する小さな面をもつGbタイプである。394・395は褐色の色調を呈し、胎土に赤褐色粒子を含む。396は黄褐色の色調を呈し、胎土に赤褐色粒子と白色砂粒を多く含む。皿Ａ（401～404）は、口縁部と底部との境が不明瞭で底部が丸みをもつ形態が多い。401は口縁部が内弯して開き、端部を小さく内側に肥厚する。a0手法で調整し、底部内面に螺旋暗文と一段暗文を施す。402は底部が平底気味で、口縁部が直線的に開く。口縁端部を内側に折り返し、上面に平坦な面をもつ。b0手法で調整し、底部内面に螺旋暗文と放射暗文を施す。器壁が薄く、シャープなつくりである。褐色を呈し、胎土に赤褐色粒子をやや多く含む。403は口縁端部を

内側に巻き込み、上面に平坦な面をもつ。a0手法で調整する。胎土に白色微砂と赤褐色粒子を含む。404は口縁端部を内側に肥厚し、外面に外傾する面をもつ。a0手法で調整し、胎土に白色微砂を少量含む。鉢Ｂ（400）は、外方に開く体部から口縁部が直立し、端部に内傾する面をもつ。内面を板状工具で調整した後、一段暗文を施す。外面は口縁部付近をヨコナデ調整、以下はヘラケズリを施す。高杯Ａ（399）は杯部から脚部にかけての破片である。心棒成形のⅡ群土器で、脚柱部外面に下から上への縦方向のヘラケズリを施し面取りする。内面には絞り痕が残る。杯部外面に分割ヘラミガキを施す。褐色を呈し、胎土に白色微砂をやや多く含む。398は大型の高杯としたが、蓋の可能性もある。口縁部が内弯しながら大きく開き、端部を内側に小さく巻き込む。外面は上から下方向へヘラケズリ調整を施し、口縁部との境に緩い稜をつくり出す。内面はヨコナデ調整で、暗文はない。胎土に１～３㎜の白色砂粒をやや多く含み、赤褐色粒子を少量含む。

405・406は鍋Ｂである。405は口縁部が外反し、端部外面に沈線状の段をもつ。外面にハケ目調整を施し、把手を貼り付ける。内面は口縁部にハケ目調整、体部にヨコナデ調整を施す。胎土に３～５㎜の白色砂粒を含む。406は頸部が「く」字状に屈曲し、口縁端部に外傾する面をなす。体部外面には単位幅の狭いハケ目調整を施した後、体部上半にヘラミガキを施す。把手は、貼り付け手法により接合する。口縁部に焼成前に上から下への刺突による径1.1㎝の円形の穿孔を施し、把手にも焼成前穿孔を施した痕跡がある。胎土に白色微砂と雲母を少量含む。内外面にススやコゲの付着は確認できず、内面の器面が磨滅するが、これは煮沸によるものかは不明である。口縁部と把手に穿孔を施し、外面にヘラミガキを施す同様な鍋は、飛鳥池遺跡のSD1130とSD1173から出土している[4]。

須恵器杯ＡⅡ（980）は、平底の底部と口縁部の境に稜がつく。底部はヘラ切り後、粗いナデ調整を施す。内面に焼成時の降灰がみられ、漆が付着する。平瓶（981）は肩部がほぼ水平で、底部と体部外面下半にロクロケズリ調整を施す。体部を円盤閉塞した後、口頸部を接合している。体部外面に焼成前の線刻がある（Ph.120）。淡青灰色を呈し、胎土に１～３㎜の白色砂粒を少量含む。胎土や形態からみて、猿投窯産の可能性が高い。982は長頸壺の口頸部。口縁端部を一部欠いており、その破面と頸部内面付近に漆が付着する。台付長頸壺（983）は体部下半が残存する。肩部下に櫛状工具による列点文を巡らせ、その下に１条の凹線が巡る。体部外面下半にロクロケズリ調整を施す。底部にハの字状に大きく開く脚部を貼り付け、脚端部は外方につまみ上げる。脚部内面に火襷がある。砂粒が目立つ胎土で、白色微砂を含む。底部内面に白色付着物が認められる。

これらSD4131出土の土器は、飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

東西溝SD4132出土土器（Fig.127，Ph.101）　SD4132はSD4130の約10ｍ南方を西流し、南北溝SD4131に流れ込む溝。SD4131と同時に廃絶したと考えられる。土師器杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｈ、皿Ａ、高杯Ｃ、須恵器杯Ａ、杯Ｂ蓋、甕が出土した。

土師器杯Ａ（407）はやや深い形態で、口縁端部を内側に小さく巻き込む。b1手法で調整し、内面に二段暗文を施す。杯Ｂ（408）は底部外端に外方へのびる高台を貼り付ける。口縁端部をわずかに内側に巻き込み、内面に二段暗文を施す。外面は器面剥離が著しく、調整は不明である。胎土に１~３㎜の白色砂粒をやや多く含む。杯Ｈ（413）はやや深い形態で、口縁部がゆるや

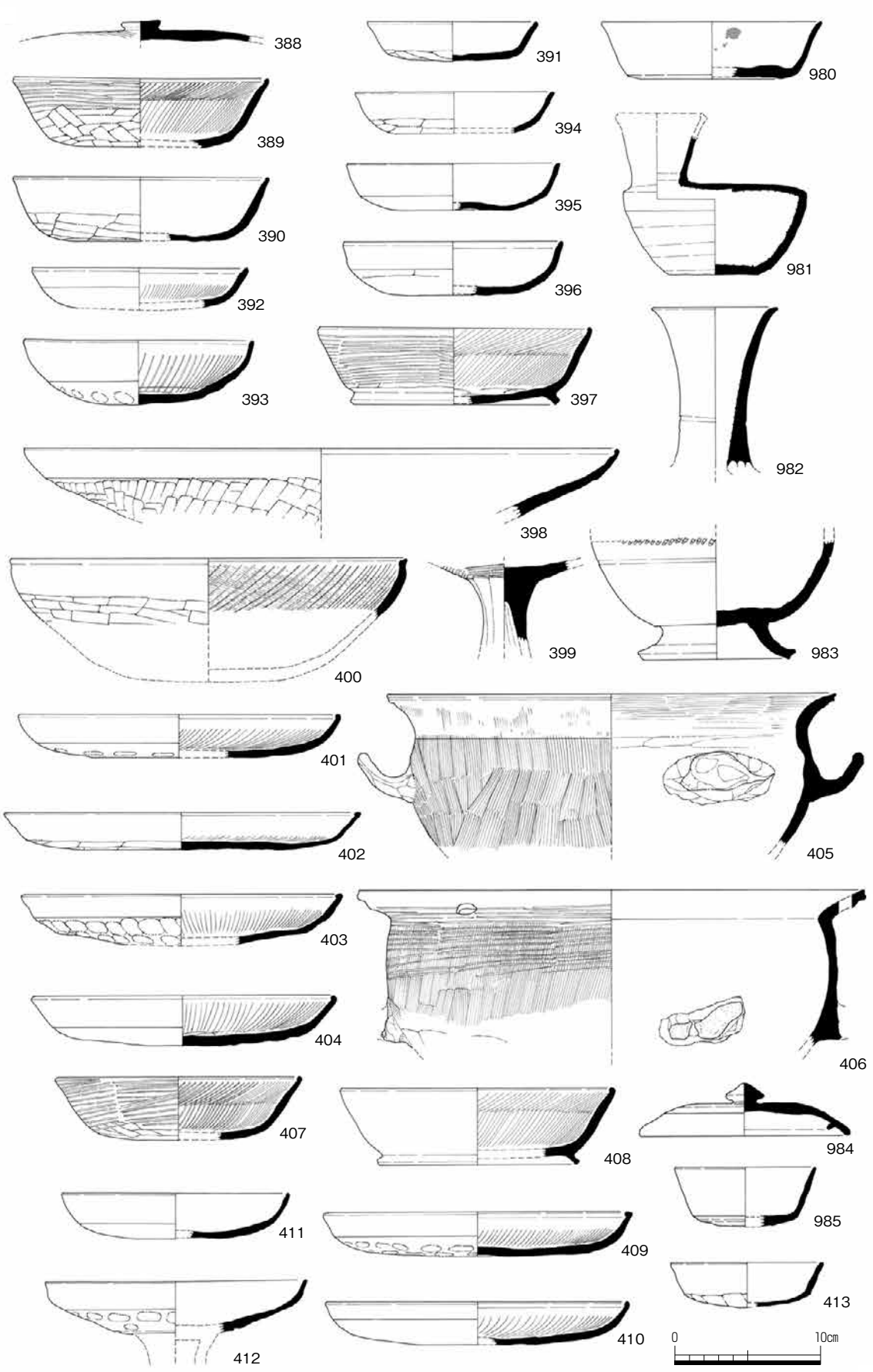


Fig. 127　SD4131・4132出土土器　1:4

かに立ち上がり、底部との境に段をもつ。皿Ａは皿ＡⅠ（409・410）と皿ＡⅡ（411）がある。409・410は、丸底気味の底部から口縁部がゆるやかに立ち上がり、端部を内側に肥厚する。a0手法で調整し、内面に一段暗文を施す。褐色を呈し、胎土に白色砂粒を含む。411は丸底気味の底部から口縁部がやや屈曲して立ち上がり、端部を丸くおさめる。a0手法で調整し、内面は磨滅のため暗文の有無は不明である。底部外面には黒斑がある。褐色の色調で、胎土に白色砂粒をやや多く含む。高杯Ｃ（412）は杯部の破片。浅い皿状の形態で、口縁端部を丸くおさめる。内面はヨコナデで調整し、暗文は施さない。

須恵器杯Ａ（985）は深い形態で、丸みをもった底部からゆるやかに口縁部が立ち上がる。底部はロクロケズリ調整を施す。胎土に白色微砂を含む。杯Ｂ蓋（984）は算盤玉状の径2.7㎝の大きなつまみを貼り付ける。頂部は平坦で口縁部にかけて丸みをもって下る。内面にかえりを有し、かえりは口縁端部よりも内側に入る。胎土に白色微砂を多く含み、3～5㎜の白色砂粒を少量含む。また、微細な黒色粒子を含み、ロクロナデ調整により墨流し状にのびる。

これらの土器は飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

南北溝SD4135出土土器（Fig.128，Ph.103）　SD4135は調査区東半を北流する溝で、東西溝SD4132以北では確認していない。土師器杯Ａ、杯Ｂ蓋、杯Ｃ、杯Ｇ、杯Ｘ、皿Ａ、皿Ｘ、高杯Ａ、盤Ａ、壺Ａ、甕Ａ、須恵器杯Ａ、杯Ｂ蓋、壺Ｋが出土した。灯火器に使用した土器が多い点が特徴である。完形の土師器壺Ａと盤Ａは溝の北半からの出土である。

土師器杯ＡⅠ（415・416）は415が口縁端部を小さく内側に巻き込むのに対し、416はヨコナデにより内側を凹線状に窪ませる。415はa1手法で調整し、内面に二段暗文を施す。415はb1手法で調整し、内面に二段暗文を施す。色調は褐色を呈し、胎土に白色微砂と赤褐色粒子を含む。径高指数は28.1。杯Ｂ蓋（414）は頂部から口縁部がゆるやかに弯曲し、端部を丸くおさめる。頂部外面に分割ヘラミガキを施す。杯ＣⅠ（417）はやや深い形態で、口縁端部を短く外反させ内面に内傾する面をつくる。b0手法で調整し、内面に斜放射暗文を施す。径高指数は21.8。杯ＣⅡ（418～422）はいずれも浅い形態である。418は口縁部が外反し、端部を内側に巻き込む。a0手法で調整し、内面見込みに斜放射暗文を施す。419は平底気味の底部から口縁部が内弯しながら立ち上がり、端部を丸くおさめる。a0手法で調整し、内面に一段暗文を施す。胎土に白色微砂を多く含み、赤褐色粒子を少量含む。420は口縁部が外反し、端部に内傾する面をもつ。外面は器面の磨耗が著しいが、a0手法とみられる。胎土に白色微砂を多く含む。内面にススが付着しており、灯火器として転用した可能性が高い。421は底部と口縁部との境に、ヨコナデによる鈍い稜がつく。口縁部を打ち欠いており、その破面にススが付着することから、灯火器に転用したもので、打ち欠き部に灯芯を据えて使用したことが分かる。422はa0手法で調整し、口縁端部に内傾する面をもつ。杯Ｇ（423）は浅い形態で、口縁部が底部からゆるやかに立ち上がり、端部を丸くおさめる。胎土に白色微砂を多く含む。灯火器に転用している。424は椀C^{5}である。口縁部を強くヨコナデし、端部外面に面をつくり、内面に凹線状の段が付く。a0手法で調整し、不調整部にはユビオサエ痕が顕著に残る。胎土に0.5～3㎜の白色砂粒をやや多く含む。皿Ａ（425～430）は丸みをもった底部からゆるやかに口縁部が開き、底部と口縁部との間にわずかに稜をもつ。いずれもa0手法で調整する。425～427・430は口縁端部を小さく内側に巻き込み、上面に丸みをもつ。428・429は口縁端部を肥厚させ、上面に平坦な面をもつ。425

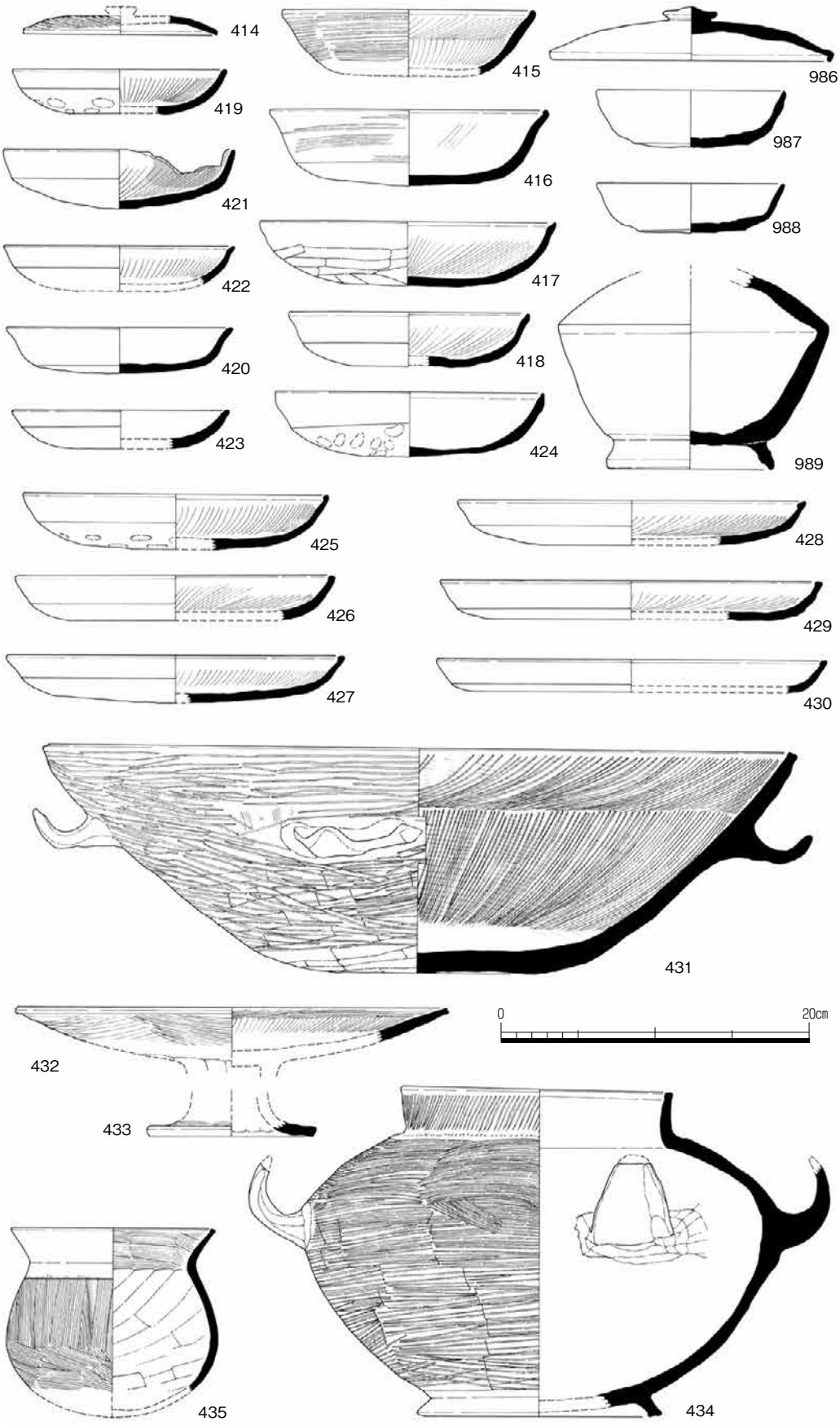


Fig. 128　SD4135出土土器　1:4

～429は内面に一段暗文を施す。430は器面の磨耗が著しく、暗文の有無は確認できない。428は灯火器として転用しており、内外面に二次被熱痕跡がある。432は高杯Ａ杯部の破片である。口縁部が直線的に大きく開く形態で、端部を丸くおさめる。内面に二段暗文を施し、外面にも分割ヘラミガキを施す。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含み、白色粘土が斑状に混じる。433は高杯Ａの脚部片である。外面に分割ヘラミガキを施す。大型の盤Ａ（431）は平坦な底部から口縁部が大きく外方へ開く。口縁端部は平坦な面をなす。内面は横方向のハケ目調整を施した後、二段暗文を施す。外面は体部上半に右上がりのハケ目調整を施し、底部と体部下半に分割ヘラケズリを施した後、太いヘラミガキを施す。外面に、把手を４箇所貼り付ける。色調は燈褐色を呈し、胎土に白色微砂と赤褐色粒子を含む。

壺Ａ（434）はほぼ完形に復元できる。直立する口縁部は長く、端部は内側をわずかに肥厚させ、上方に平坦な面をもつ。最大径部が体部中位より上にあり、やや幅広の長い把手を２箇所に接合する。底部には外方へ開く低い高台を付す。体部は分割ヘラケズリの後、８分割のヘラミガキを密に施し、口縁部外面にやや斜めに傾くヘラミガキを施す。甕Ａ（435）は小型で口縁部が外反し、端部を小さく内側に巻き込む。外面ハケ目調整、内面ヘラケズリの河内型甕である。

須恵器杯ＡⅢ（987・988）は浅い器形で、底部に丸みをもち、口縁部が外方へ開く。底部はヘラ切りの後、軽くナデ調整を施す。いずれも焼成がやや軟質で、胎土に白色微砂を含む。杯ＢⅡ蓋（986）は頂部から口縁部にかけてゆるやかに弯曲し、端部を折り曲げる。頂部に径3.4cmの中央が突出する擬宝珠状つまみを貼り付ける。胎土に0.5～２㎜の白色砂粒を含む。壺Ｋ（989）は肩部がなだらかに弯曲し、体部との境にゆるやかな稜をもつ。底部外寄りに高台を貼り付ける。高台は端部を強くヨコナデし、外面に面をもつ。底部外面に指頭圧痕が残り、ロクロケズリ調整は行わず、軽いナデ調整を施す。

これらの土器は飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

南北大溝SD4143出土土器（Fig. 129, Ph. 104）　調査区の東端で検出した大溝である。東三坊大路推定地にあたり、藤原京の東堀河とも考えられ、また、狂心渠の名残ともみられる。埋土は大きく上層（褐色砂質土・青灰微砂）と下層（青灰砂礫）に分かれる。下層、上層出土土器に分けて記述する。

下層出土土器　一部上層に帰属すると考えられる瓦器片や土師器小皿片が混じるものの、大部分は藤原宮期までの土師器、須恵器である。

437は土師器甕で、口縁部が外反し、端部を内側に折り曲げ、外傾する面をもつ。外面にスス、内面にススとコゲが付着している。438は土師器甕Ｃの口縁部である。口縁部が大きく外反し、端部を上方に折り曲げる。外面にハケ目調整を施し、内面は口縁部が横方向のハケ目調整、体部が横方向の板ナデ調整である。外面にススが付着する。

990～995は須恵器。杯Ｂ（991～993）は、いずれも底部と口縁部との境に緩い稜や丸みをもつ形態である。991は底部やや内寄りに幅の広い低い高台を貼り付ける。底部はヘラ切り後ロクロナデ調整を施す。胎土に白色微砂と黒色粒子、３㎜前後の白色砂粒を少量含む。992は底部外寄りに断面方形の高台を貼り付ける。胎土に３～５㎜の白色砂粒を多く含む。993は底部外寄りに断面方形の高台を貼り付ける。底部外面はヘラ切り後不調整である。胎土は992によく似ており、３～５㎜の白色砂粒を多く含む。底部外面に点状に墨痕が残る。研磨痕は全く認めら

れない。杯B蓋（990）はかえりがないタイプで、端部を外方に折り曲げる。壺C（994）はやや肩が張る体部に短く直立する口縁部がつく。最大径は14.6cm。体部下半はロクロケズリ調整を施す。青灰色を呈し、胎土に白色微砂を少量含む。外面の降灰の状況からみて、蓋を被せて焼成したことが分かる。甕A（995）は口縁部が外反し、端部下端に断面台形の突帯状の段が付く。体部外面は平行叩きの後、カキ目を施し、口縁部は平行叩きの後ロクロナデ調整を施している。胎土に1～3㎜の白色砂粒を含む。

上層出土土器　瓦器、土師器小皿、羽釜が多く出土した。439～447は土師器小皿である。439はいわゆる「て」字状口縁を呈する。赤褐色を呈し、胎土に白色微砂を少量含む。復元口径10.6cm。440～443は口縁部にヨコナデ調整を一周施し、端部を丸くおさめる。口径は9.0～10.0

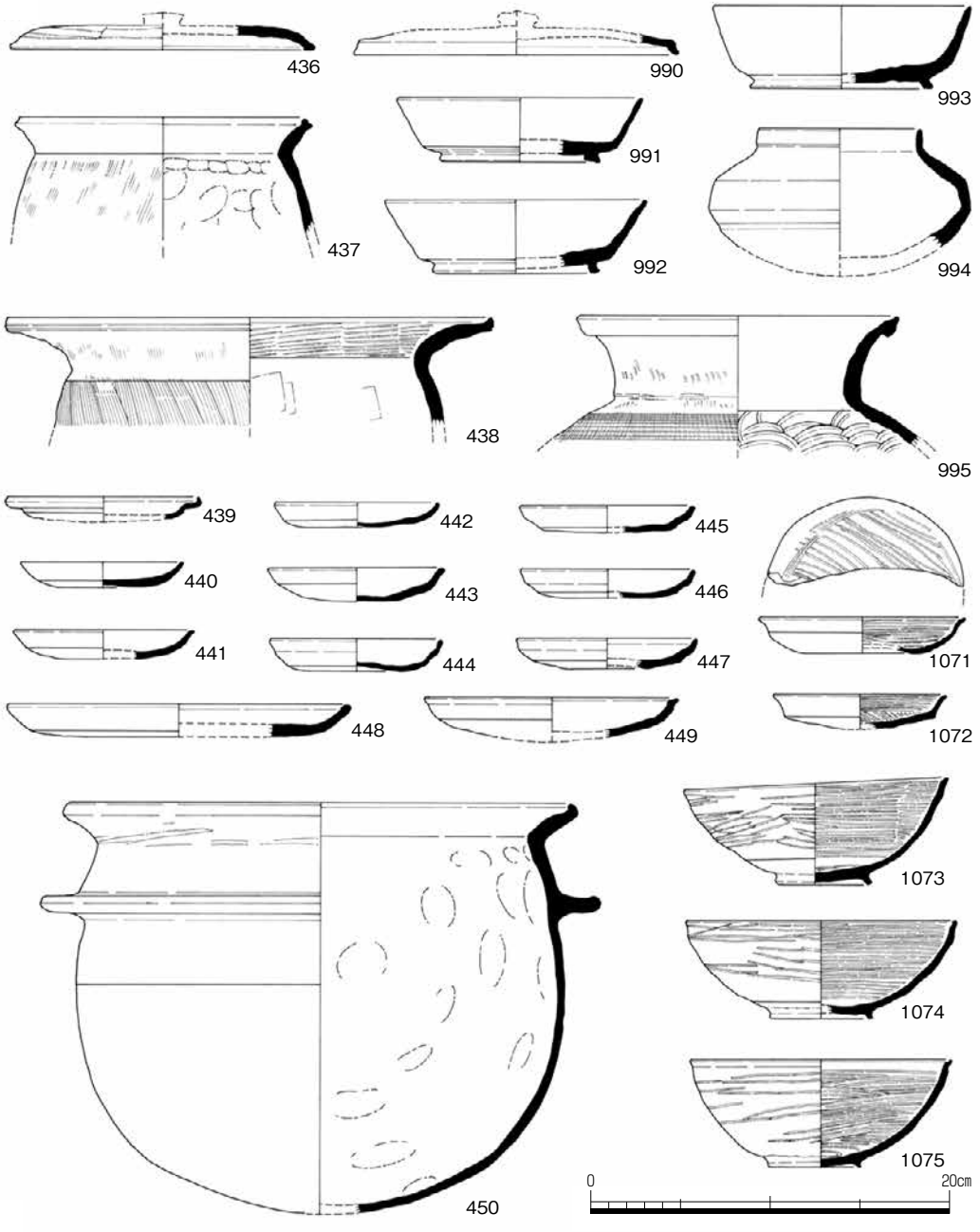


Fig. 129　SD4143出土土器　1:4

cmである。440は燈褐色を呈し、胎土は精良で赤褐色粒子と雲母を少量含む。442は完形品である。黄褐色を呈し、胎土に微細な雲母を含む。443も完形品で、褐色を呈し、胎土に白色砂粒を少量含む。444～447は口縁部下半と口縁端部の二段にヨコナデ調整を施す。口径は9.6～10.0cmである。445は赤褐色の色調を呈し、胎土に白色微砂をやや多く含み、5㎜大の赤褐色粒子を少量含む。444・446は灰褐色を呈し、胎土に白色砂粒を少量含む。444は底部中央が凹む。447は褐色を呈し、白色砂粒を少量含む。448・449は土師器皿。448は平底気味の底部から口縁部が丸みをもって立ち上がり、端部を丸くおさめる。褐色を呈し、胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。449は丸底の底部から短い口縁部が立ち上がり、端部上面に平坦面をなす。褐色を呈し、白色砂粒を少量含む。底部内面と口縁部にススが付着することから、灯火器として使用したと考えられる。

450は土師器羽釜である。球形の体部で口縁部は「く」字状に屈曲し、端部を丸く折り返す。体部上半に鍔を貼り付ける。内外面の調整はススの付着、二次被熱により不詳であるが、内面に当て具痕が残り、叩き成形であることが知られる。外面のススが体部、底部全面に付着し、鍔下面には付着しないことから、竈に掛けて使用したことが分かる。

瓦器は皿（1071・1072）と椀（1073～1075）がある。皿は丸底から短い口縁部が立ち上がり、内面は底部にジクザク状の暗文、口縁部に横方向のヘラミガキを施す。1071は口縁端部を短く外反させ、1072は口縁端部上面に平坦な面をもつ。椀は口縁部が内弯しながら立ち上がり、端部内側に1条の沈線を施す。口径は14.5～15.0cmの間におさまる。1073・1074は高さ5㎜前後で断面台形の高台を貼り付け、1075は断面三角形の低い高台を貼り付ける。内面は口縁部に横方向のヘラミガキを施し、底部に螺線暗文を施す。外面はいずれも粗いヘラミガキを施す。

以上、図示した土器は、上層が11世紀から12世紀後半頃、下層は飛鳥Ⅴの年代が与えられる。その他、飛鳥Ⅰ～Ⅱに比定できる須恵器杯G蓋や短脚高杯の破片も出土しているが、断片的である。SD4143は西半分のみの調査で、下層の掘削では湧水と砂層の崩落により完掘はしていない。そのため開削年代を定めることは困難だが、出土土器からみて藤原宮期以前に存在していた可能性は否定できず、藤原宮期から奈良・平安時代まで埋没しかけながらも存続し、13世紀を迎える頃に完全に埋没し、現在の中の川の流路となるのであろう。

東西溝SD4129出土土器（Fig.130，Ph.104）　六条条間路北側溝SD4139の北側にある素掘溝である。少量の土器が出土した。須恵器杯G蓋（996）は口径が小さく頂部に丸みをもつ形態で、口縁部のかえりは端部よりも内側に入る。胎土に白色微砂を少量含む。997は壺Cの蓋か。平坦な頂部と口縁部との境に丸みがある。口縁端部はわずかに外反し、丸くおさめる。焼け歪みが著しい。杯G蓋は飛鳥Ⅱの特徴を示す。ただし、黒色土器B類椀や瓦器椀の破片も少量含んでおり、溝の時期を示すかは不明である。

東西溝SD4179出土土器（Fig.130，Ph.104）　東西大溝SD4130の北約7ｍに位置する素掘溝である。少量の土器が出土した。土師器杯CⅡ（451）はやや浅い形態で、口縁端部を丸くおさめる。a0手法で調整する。内面は磨滅のため、暗文の有無は不明。土師器高杯C（452）は、杯部のみ残存する。やや深い椀形の杯部で、杯底部の粘土円盤と口縁部との境の段が明瞭である。内面にやや太い一段暗文を施す。赤褐色を呈し、胎土に白色微砂を含む。

須恵器杯B蓋（998）は、頂部から口縁部にかけてなだらかに弯曲する。口縁端部よりわずか

に内側に入るかえりを貼り付ける。胎土に0.5～3㎜の白色砂粒を含む。これらの土器は飛鳥Ⅱ～Ⅲの特徴を示す。

南北溝SD4255出土土器（Fig. 130, Ph. 104）　SD4255は第46次調査区東端で検出した南北溝。南で東西溝SD4083とＬ字形に接続する。土器の出土量は少ない。須恵器皿Ａ（1002）は丸底気味の底部から外反する口縁部が緩やかに立ち上がる。底部はロクロケズリ調整を施す。焼成は軟質で、灰色を呈する。胎土に白色砂粒を多く含む。内面見込み部分と、対応する底部外面にススが付着する。1001は須恵器蓋か。頂部に２条の低い突帯が付く。２条の突帯の間は平坦で、内側の突帯から中心へ向かって高まる。突帯間の平坦面に２箇所の剥離痕跡とその周囲にヘラ描き沈線がある。頂部に３箇所、平面が楕円形もしくは水滴形の装飾を貼り付け、ヘラで縁取りをしていたとみられる。裏面には１条の隆帯があり、焼成時の火襷がある。胎土に白色微砂をやや多く含む。皿Ａは飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

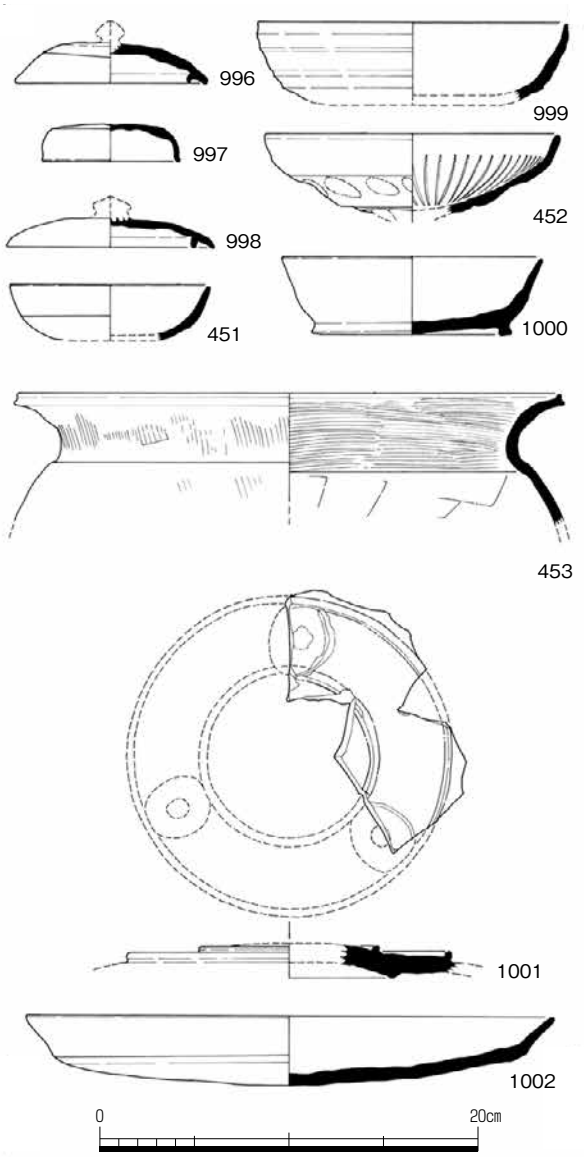


Fig. 130　その他の溝出土土器　1:4

東西溝SD4285出土土器（Fig. 130）　調査区南西部にある東西塀SA4284の北3.5ｍに位置する東西溝。遺物はごく少量出土した。須恵器椀Ｂ（999）は口縁部のみが残存し、高台は剥離している。口縁部が内弯気味に立ち上がり、下位に段が付く。外面にはロクロナデによる凹凸が明瞭に残る。

東西溝SD4357出土土器（Fig. 130, Ph. 104）　調査区南西部にある、奈良時代の遺構を区画する北限の東西塀SA4355の北側に位置する東西溝である。453は土師器甕Ａ。口縁部は外反し、端部をわずかに上方につまみ上げ、外面に面をなす。体部内面にナデ調整、外面に縦方向のハケ目調整を施す都城型甕である。

1000は須恵器杯Ｂ。口縁部がゆるやかに外反し、底部との境に丸みがある。低い高台を底部外端に貼り付ける。復元口径13.8㎝。底部はヘラ切り後に軽くナデ調整を施す。胎土に黒色粒子と白色微砂を含み、２～５㎜の白色砂粒を少量含む。これらの土器は、飛鳥Ⅴから奈良時代前半の特徴を示す。

C　井戸・土坑出土土器

調査区全域にわたり、多数の井戸や土坑を検出した。これらは藤原京期から中世までの時期にわたり、この地の利用状況や性格を知る手がかりとなる。ここでは藤原京期および奈良時代に属する井戸と土坑出土の土器を取り上げ、中世のものについては本節Ｅ：藤原京造営以前の土器・中世の土器で扱うこととする。また、SE4740については既に本節Ａで扱っている。

井戸SE5950出土土器（Pl.33、Ph.105）　SE5950は内郭の東区画塀SA4320東方約35ｍの空閑地に所在する、平面が楕円形の素掘りの井戸である。地表下0.9ｍまではすり鉢状で、それ以下は垂直に掘り下げ、深さ2.5ｍで砂層に達する。垂直に掘り下げた部分の埋土は、遺物を含まない。すり鉢状の部分の埋土は黄褐色粘質土と暗灰褐色粗砂の互層であり、これらを上から５層に分けて遺物を取り上げている。土器は土師器杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｃ、杯Ｇ、鉢Ｂ、盤Ｂ、高杯Ａ、甕と、須恵器杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｂ蓋、皿Ａ、高杯、壺、甕が出土した。図示した土器のうち、458・463・465は第３層から出土し、454は第５層からの出土で、その他は井戸と認識する以前の「土坑」として取り上げている。いずれも井戸廃絶後の埋立土からの出土である。

土師器杯Ａは杯ＡⅠ（454）と杯ＡⅢ（455）がある。杯ＡⅠは口縁端部がわずかに肥厚し、二段暗文上段の暗文帯幅が広い。b1手法で調整する。径高指数は27.1。底部外面に「十」の墨書がある。杯ＡⅢは口縁端部を小さく巻き込む。内面の二段暗文上段の暗文帯幅が狭く、放射暗文の傾きが大きい。径高指数は23.3。底部外面に「□記」の墨書がある。杯ＢⅢ（458）は口縁端部をわずかに内側に巻き込む。外方に開く高台を底部外よりに貼り付ける。復元口径は15.6㎝である。内面に二段暗文を施し、下段の放射暗文は斜めに傾き、上段の暗文帯幅は広い。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。杯Ｃ（456・457）はいずれも浅い形態である。456は口縁端部をわずかに内側に肥厚させ、内傾する面をなす。457は口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。径高指数は21.6。鉢Ｂ（459）はb1手法で調整する。内面の暗文は磨滅により不明である。胎土に赤褐色粒子をやや多く含む。盤Ｂ（460）は復元口径30.7㎝の大型品で、口縁部が外方に大きく開き、端部を内側に巻き込む。外方に開く低い高台を貼り付ける。外面は口縁部上位まで横方向のヘラケズリを施す。内面に二段暗文を施し、上段の放射暗文は左上がりである。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。内面に３㎜前後の円形の敲打痕と刀子の使用痕とみられる線状痕が残る。表面が磨滅しており、よく使い込まれている。高杯Ａ（461）は、杯底部の粘土円盤が擬口縁状に残る。杯底部に口縁部の粘土を継ぎ足す、高杯Ｃと同様の製作技法である。脚柱部は心棒に粘土を巻き付けて成形するⅡ群土器で、外面を下向きの縦方向ヘラケズリで面取りする。胎土に白色微砂を含む。

短頸壺（462）は直立する口縁部に、径約１㎝の穿孔を焼成前に施す。外面はハケ目調整で、内面はヨコ方向のケズリ調整を施す。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を多く含む。甕Ａは中型品（463・464）と大型品（465）が出土した。いずれも外面ハケ目調整、内面ナデ調整による都城型である。463は端部を上方につまみ出し、外方に面をもつ。外面は二次被熱が著しく、底部のススの付着状況から、３箇所に支脚を置いて使用したものと考えられる。464は口縁端部を上方に肥厚する。外面は二次被熱が著しく、口縁部内面にもススが付着する。口縁部内面にススの付着する部分と付着しない部分の境が輪状にまわることから、使用時に蓋を用いた可能性が高

い。465は口縁部が外反し、端部を上方につまみあげる。端部外面に面をなし、沈線状の段をもつ。色調は燈褐色で白色砂粒をやや多く含む。

須恵器杯Ｂ（1003）は器高が低いもので、口縁部と底部の境に丸みをもつ。底部外面はヘラ切り後にナデ調整を施す。復元口径11.4㎝。長脚高杯（1004）は脚部の破片で、ヘラ状工具で4方向に沈線を描いて透かし孔を表現する。胎土に0.5～3㎜の白色砂粒を少量含む。小型の甕Ａ（1005）は肩部がなだらかで、体部との境に丸みがある。外面下半に格子状叩きを施した後、ロクロナデ調整を施す。胎土に黒色粒子を多量に含む。

これらの土器は飛鳥Ⅴの特徴を示す。

井戸SE4335出土土器（Pl.33、Ph.107）　SE4335は南北棟建物SB4331の西にある井戸で、大土坑SK4325を埋め戻した後に掘られたものである。井戸枠内からは完形品５個体を含む土師器壺Ｂ、甕Ａや、土師器甕Ｂ、竈、須恵器皿Ｂ、高杯、壺Ｋが出土した。土器の出土量は少なく、須恵器はごく少量である。

471は土師器壺Ｂ。底部型作りにより成形する。内面上部を板状工具で横方向にナデ調整を施す。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。内外面にスス、コゲや二次被熱を受けた痕跡は確認できない。甕Ａは口径12～16.5㎝の小型品（466・468・469）と中型品（467・470）がある。466・467は外面を縦ハケ、内面はナデで調整する都城型甕である。466は目の粗い原体で外面と口縁部内面にハケ目調整を施す。内面下部に指頭圧痕がある。頸部内面より下に薄くコゲが付着し、外面は二次被熱による剥落がある。467は口縁端部を小さく上方につまみ出し、外面に面をなす。底部外面の中位以上にススと二次被熱が著しく、底部付近はススの輪郭がリング状に巡ることから、直置きの状態で火に掛けたものと推測される。468はやや長い口縁部が直線的に外反し、端部を丸くおさめる。外面にハケ目調整を施すが、肩部付近と体部下半で原体が異なる。内面は口縁部が横方向のハケ目調整、体部上半が横方向の板ナデ調整で、体部下半には指頭圧痕が残る。胎土に雲母片を多く含む。外面にススが付着し、二次被熱による器面の剥落がある。469は口縁部がく字状に屈曲し、端部を丸くおさめる。底部は平底気味の形態である。内面を斜め方向のヘラケズリで調整し、外面はハケ目調整を施す。胎土に赤褐色粒子と2～4㎜の白色砂粒をやや多く含む。体部外面には二次被熱による剥落がある。470は体部上半を欠く。内面にヘラケズリ調整、外面にハケ目調整を施す。伊勢型の甕である。外面に「十」字状の焼成前ヘラ書きがある。外面にススが付着するが、467と同様に底部付近にススの輪郭がリング状に巡る。甕Ｂ（472）は復元口径26.4㎝の大型品である。口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。外面にハケ目調整を施し、把手を貼り付ける。内面は下から上へヘラケズリを施し、内面上部に横方向のヘラケズリを施す。胎土に赤褐色粒子をやや多く含み、1～3㎜の白色砂粒を少量含む。竈（473）は小型のもので、庸を貼り付けるタイプである。口径13.2～14.3㎝で口縁端部をヨコナデにより丸くおさめる。外面はヘラケズリの後ナデ調整を施し、内面は横方向の板ナデ調整を施す。内外面ともに裾部は指ナデの痕跡が確認できる。庸はヨコナデ調整を施し、端部を丸くおさめる。庸の両側面は裾部のやや上でおさめるため、接地しない。焚き口はヘラケズリにより切り開ける。体部側面に半月状の孔を切り込む。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。内面にススが付着する。他に大型品の破片も出土した。

須恵器皿Ｂ（1006）は、SK4325出土の破片と接合した。口径30.0㎝の大型品で、底部から外

反する口縁部が立ち上がる。胎土に白色微砂と１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。1007は高杯杯部。口縁部が外反気味に外方へ開き、水平に近い杯底部との境に稜がつく。1008は壺Ｋ。肩部がやや張る形態で、胴部との屈曲部に２条の凹線状の段を施す。胴部外面にロクロケズリを施す。胎土に黒色粒子と白色微砂を含む。

これらの土器は飛鳥Ⅴの特徴を示す。土師器の小型の甕や壺Ｂが完形に近い形でまとまって出土したことが特徴で、かつこれらは都城型以外のタイプも含むことが注意される。

土坑SK4325出土土器（Pl.34，Ph.105・106）　SK4325は南北棟建物SB4331の西にある土坑で、手斧の削り屑や木片が出土するなど、藤原京期後半（Ⅲ-Ｃ期）建物建設時の廃棄土坑と考えられる。上層を山土で埋め戻した後、井戸SE4335を掘っている。土器は破片での出土が多い。

土師器は、杯Ａ、杯Ｃ、杯Ｇ、杯Ｈ、鉢Ａ、平底鉢、鍋Ｂ、甕Ａ、甑、竈がある。杯ＡⅠ（475）は口縁端部を小さく内側に巻き込む。二段暗文を施し、上段の暗文帯幅が狭い。杯ＡⅢ（474）は口縁端部をわずかに内側に巻き込む。内面の二段暗文は下段の放射暗文の傾きが大きく、上段の暗文帯幅が狭い。a1手法で調整する。径高指数は25.4。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含み、３～５㎜の白色砂粒を少量含む。杯Ｃ（476～478）はいずれも内面に一段暗文を施し、a0手法で調整する。476は口縁端部内面に内傾する面をもつ。焼成後に円形の孔を底部に穿つ。477は口縁端部を内側に肥厚させ、内傾する面をなす。478は口縁端部をわずかに外につまみ出す。灯火器として使用しており、内外面に二次被熱痕跡があり、内面にススが付着する。径高指数は27.6。杯ＧⅠ（479）は、口縁端部外面に外傾する面をなすGcタイプで、器形は杯Ａに似る。色調は淡褐色を呈し、胎土はやや粗い。杯ＧⅡ（480）は口縁部をわずかに外反させ、端部を丸くおさめる。器形は杯Ｃと同様で、Gaタイプである。杯Ｈ（481～484）は口径10㎝前後と12㎝前後の２法量に分かれる。481・482・484は口縁部が外方に開き、底部との境に段が付く。481は胎土に赤褐色粒子を多く含む。482・484は二次被熱を受け、内外面にススが付着することから灯火器として使用したことがわかる。483は口縁部が内弯気味に立ち上がり、口縁端部内側にわずかに段をもつ。底部との境は鈍い稜がつく。胎土に赤褐色粒子と１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。底部外面に黒斑がある。鉢Ｂには大型品（487・488）と小型品（485・486）があるが、486は小破片のため、口径がもう少し大きくなる可能性もある。485は口縁部が内弯し、端部を内側に肥厚させる。a1手法で調整する。色調は破断面では褐色を呈するが、器表面は黒色を呈する。486は口縁部が内弯し、端部を内側に小さく肥厚させる。a1手法で調整する。内外面に漆膜が残る、漆塗土器である。487・488は平底の底部から内弯気味に口縁部が立ち上がり、端部を内側に巻き込む。b1手法で調整する。ともに底部に黒斑がある。鉢Ｂの大型品は、この他にも１点出土した。

甕Ａには口径14～15㎝の小型品（489～491）と24～25㎝の大型品（492・493）がある。小型品は口縁部が大きく外反し、端部を丸く仕上げるもの（489・490）と、口縁部がくの字状に屈曲し端部に外傾する面をもつもの（491）に分かれる。490・491は胴部内面にヘラケズリを施す。大型品は、口縁端部を上方へつまみ出し、外側に面をなす。493は胴部内面に横方向のヘラケズリを施す。494・495は鍋Ｂである。494は口縁端部を上方につまみ出し、外面に面をもつ。被熱の痕跡が著しい。495は胴部の破片で、内面にユビオサエの凹凸が顕著に残る。内面にベンガラ[6]が付着する。被熱の痕跡は明瞭ではなく、ベンガラを塗布する際の容器として使用した

ものか。断面にベンガラは付着しない。甑（496）は外反する口縁部形態が甕Ａと共通する。底部を強いヨコナデで仕上げ、端部を丸くおさめる。

須恵器は、杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｂ蓋、杯Ｇ、杯Ｇ蓋、平瓶、細頸壺、甕Ｃがある。杯Ａ（1016～1019）は器高が低いものが主体である。1016は口縁部が丸みをもって立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部はヘラ切り不調整である。焼成がやや軟質で灰白色を呈し、胎土に白色砂粒を含む。内面と底部外面の一部に朱墨が付着する。1017は口縁部が丸みをもって立ち上がる。底部はヘラ切り不調整である。二次被熱を受け、内面に銅滴が付着する（Ph.106）。1018は外方へ直線的な口縁部が開く。底部をロクロケズリで調整する。底部と口縁部の境に鈍い稜をもつ。胎土に白色粘土が交じり、0.5～1㎜の白色微砂を含む。1019は底部をヘラ切りした後にナデ調整を施す。内外面に黒色の漆が付着する。杯Ｂ蓋には、かえりがあるもの（1010～1012）とないもの（1013）の両者がある。個体識別できた破片では4：2でかえりのあるタイプが多い。1010は口縁部が頂部からゆるやかに降る。口縁端部より内側に入る短いかえりを貼り付ける。頂部外面に薄く自然釉がかぶる。1011は平坦な頂部からゆるやかに口縁部がのび、つまみは径が大きく中央が突出する擬宝珠状を呈する。口縁端部より内側に入る短いかえりが付く。胎土に黒色粒子を含み、ロクロナデ調整により墨流し状にのびる。白色微砂を少量含む。1012は1010と同様、頂部から口縁部にかけてゆるやかに降る。短くシャープなかえりを貼り付ける。胎土に黒色粒子と白色微砂をやや多く含む。内面に墨が付着しており（Ph.116）、硯として転用したとみられる。1013は口縁端部を折り曲げ、ロクロナデ調整によりわずかに外方へつまみ出す。1014・1015は杯Ｂ。1014は器高がやや高く、ゆるやかに外反する口縁部が立ち上がり、底部との境は丸みを帯びる。低い高台が底部外よりに付く。底部はロクロケズリ調整で仕上げる。胎土に黒色粒子と白色微砂を含む。1015は直線的な口縁部と底部の境に鈍い稜がつく。底部外よりに外方へ開く高台を貼り付ける。底部をロクロケズリ調整で仕上げる。胎土に白色微砂をやや多く含む。外面全面に降灰がみられることから、倒立した状態で焼成したことが分かる。杯Ｇ蓋（1009）はゆるやかに降る頂部から屈曲して口縁部が開く。短いかえりを貼り付ける。皿Ｂ（1020）は復元口径24.6㎝の大型品で、口縁部と底部の境は稜をなして屈曲する。底部から口縁部中位にかけて、ロクロケズリ調整を施す。胎土に白色微砂をやや多く含む。

平瓶（1021）と細頸壺（1022）は内面に漆が付着し（Ph.106）、漆の運搬具として使用されたことが明らかである。平瓶の肩部は水平に近く、胴部との境に緩い稜をもつ。底部は平底で、体部外面下位に手持ちヘラケズリ調整を施す。内面から肩部外面にかけて漆が付着する。頸部の破面にも付着することから、口頸部は漆を取り出す際に打ち欠いたものとみられる。細頸壺は肩が張らず、二段構成で成形する。体部外面にカキ目を施した後、2条の沈線を施す。外面に自然釉が流下する。灰白色の色調でやや砂粒が目立つ胎土である。内面に漆が付着し、平瓶同様に頸部の破面にも付着することから、口頸部は漆を取り出す際に打ち欠いたとみられる。甕Ｃ（1023）は口縁部が直立し、端部は内傾する面をなす。外面は格子目叩き上にカキ目を施す。内面は当て具痕跡をロクロナデ調整によりナデ消している。

これらの土器は飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。先述の様に、SK4325は藤原京期後半（Ⅲ-Ｃ期）の建物を建設した時の廃棄土坑と考えられており、漆付着土器（1019・1021・1022）、銅付着土器（1017）、ベンガラ付着土器（495）、灯火器（478・482・490）、製塩土器が出土したことは、それ

を裏付ける。これらは金属工房や漆工房等に関わるもので、改作時に様々な活動を行っていた様子がうかがえる。

土坑SK4327出土土器（Fig.131，Ph.108）　SK4327は六条条間路南側溝SD4311と重複するが、先後関係は不明である。Ⅲ-Ｂ期からⅢ-Ｃ期の施設に改変した際の廃棄土坑とみられる。比較的多量の土器が出土した。

土師器は、杯Ａ、杯Ｃ、杯Ｇ、杯Ｈ、杯Ｘ、ⅢＡ、鉢Ｂ、小型鉢、甕Ａ、鍋、甑、竈がある。また、漆が付着した個体もある。杯Ａは杯ＡⅠ（499・500）と杯ＡⅢ（497・498）があり、ＡⅠにはやや深い形態（499）と浅い形態（500）がある。499は口縁部が外反し、端部を内側に肥厚させる。b1手法で調整し、内面には二段暗文を施すとみられるが、上段の放射暗文は風化のため観察が困難である。径高指数は27.9である。底部に黒斑がある。胎土に白色微砂と赤褐色粒子を少量含む。500は、口縁端部を小さく内側に巻き込む。b1手法で調整し、内面に二段暗文を施し、上段の暗文帯幅が広い。上段と下段の放射暗文間に上向きの連弧暗文Ａを施す。497はa1手法で調整し、密なヘラミガキを施す。内面見込みに「十」字状の針書きを焼成後に記す。径高指数は25.0。498は口縁端部を内側に小さく巻き込む。やや粗い胎土で、白色微砂を多く含む。内面の暗文は放射二段である。杯Ｃ（501）は口縁端部が内傾する面をなし、沈線状の段が付く。a0手法で調整する。502は小型の鉢Ｂで、口縁端部を内側に小さく巻き込む。外面に横方向のヘラミガキを施す。内面の暗文の有無は不明である。503～505は杯Ｇ。503は杯Gbで、口縁端部に内傾する沈線状の段が付く。a0手法で調整する。底部外面には黒斑がある。504は口縁部をヨコナデし、底部外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。胎土に白色微砂をやや多く含む。505は口縁部が外反する。内面にススが付着する。灯火器として使用した可能性がある。色調は灰褐色を呈し、胎土に１～３㎜の白色砂粒を含む。杯Ｘ（506）は杯Ｇと同様の器形で、外面底部をヘラケズリ調整する。胎土に赤褐色粒子と白色微砂をやや多く含む。ⅢＡ（507～510）はいずれも口縁端部を内側に巻き込み、内面に一段暗文を施す。507は底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部を内側に小さく肥厚する。a0手法で調整する。胎土に白色微砂を含む。508は底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。口縁部と底部の境にヘラケズリ調整を施し、底部に木の葉痕が残る。赤褐色粒子と白色微砂を含む。509は底部から丸みをもって口縁部が立ち上がり、端部に外傾する面をもつ。b0手法で調整するが、底部に木の葉痕が残る。510は口縁部が直線的に外反し、端部は内側に肥厚する。a0手法で調整する。511と512は鉢Ｂ。511は器厚が薄く、ゆるやかに口縁部が立ち上がり、端部を丸くおさめる。b1手法で調整する。内面の暗文は磨滅のため観察できない。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。512は小さな底部から口縁部が立ち上がり、端部を内側に巻き込む。外面に5分割ヘラケズリを施した後、ナデ調整で仕上げる。底部内面に螺旋暗文、口縁部には一段暗文と螺線暗文を施す。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。513は小型鉢。半球形の器形で、口縁部を丸くおさめ、内側にわずかな段をもつ。外面に把手を貼り付け手法で接合する。把手の数は不明であるが、2箇所であろう。内面にナデ調整を施し、外面は分割ヘラケズリ調整を施す。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。器壁が非常に薄く、内外面にススやコゲなどの使用を示す痕跡はみられない。実用的ではないため、祭祀などに用いられたミニチュア製品の可能性がある。

甕Ａは口径が13㎝台の小型品（518・519）と20～24㎝の中型品（515～517）、27㎝の大型品

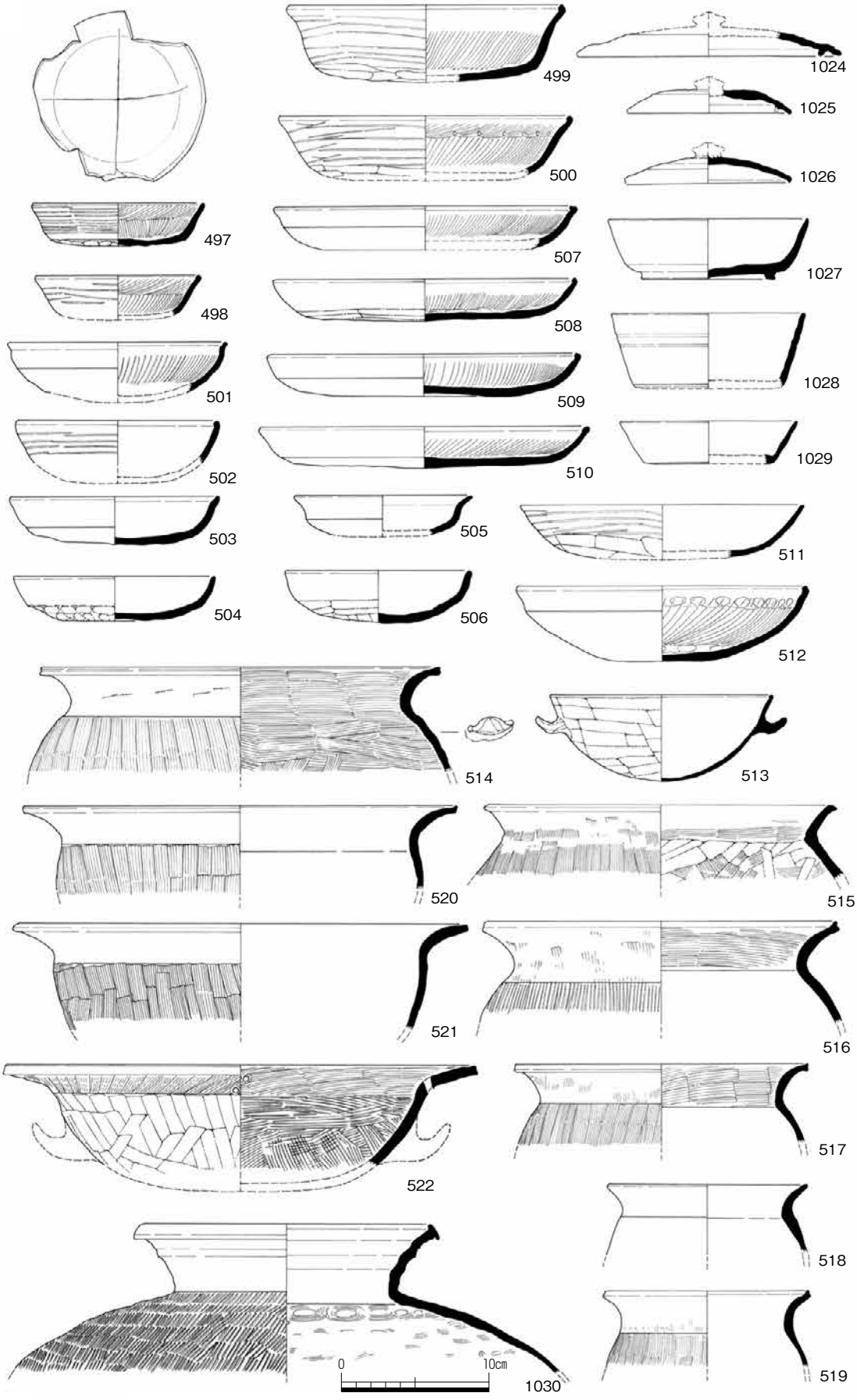


Fig. 131　SK4327出土土器　1:4

（514）に分かれる。518・519は口縁部が外反し、518は端部を丸くおさめ、519は端部を上方へつまみ出し外面に面をもつ。518は胎土に赤褐色粒子と白色微砂をやや多く含む。519は二次被熱が著しく、外面と口縁部内面にススが付着する。515は口縁部がく字状に屈曲し、端部を外方へつまみ出し、外傾する面をなす。内面にハケ目調整を施した後、斜め方向のヘラケズリ調整を施す。胎土に赤褐色粒子と金雲母を含む。516は口縁端部を上方につまみ出し、外面に沈線状の段が付く。1～5㎜の白色砂粒をやや多く含む。517は外反する口縁部で端部外面に面をもつ。1～3㎜の白色砂粒を含む。514は口縁部が外反し、端部外面に沈線状の段が付く。胎土に白色微砂と赤褐色粒子を含む。520～522は鍋。520は口縁部をわずかに上方につまみ出し、外面が面をなす。521は口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。外面にハケ目調整、内面にナデ調整を施す。胎土に金雲母や赤褐色粒子、白色微砂を含む。522は口縁部が外反し、端部に面をもつ。外面にハケ目調整の後ヘラケズリを施し、内面には粗いハケ目調整を施す。頸部の屈曲部付近に焼成前に穿孔を施す。口頸部に穿孔する鍋はSD4131からも出土しており（406）、孔に細棒を通して蓋を固定するものと考えられる。

須恵器には杯A、杯B、杯B蓋、甕がある。杯Aは器高の高いもの（1028）と低いもの（1029）がある。1028は口縁部が直線的に開き、端部を丸くおさめる。口縁部外周に2条の沈線を施す。1029は口縁部が外方へ直線的に開く。底部と口縁部の境に鈍い稜がつく。内面にススが付着しており、灯火器として使用したことがわかる。杯B（1027）は口縁部がゆるやかに立ち上がり、底部との境に丸みをもつ。低い高台を底部内寄りに貼り付ける。底部はヘラ切り不調整である。胎土に白色微砂をやや多く含む。杯B蓋はかえりのあるもの（1024・1025）とないもの（1026）がある。1024は扁平な器形で、口縁端部とかえりの高さが等しい。胎土に1～3㎜の白色微砂を含む。1025は平坦な頂部からゆるやかに口縁部が降る。短いかえりを貼り付ける。1026は頂部から口縁部にかけてなだらかに弯曲し、端部を小さく折り曲げる。精良な胎土で白色微砂をわずかに含む。尾張産の可能性がある。甕A（1030）は口縁部が外反し、頸部中位に突帯状の低い段をもつ。口縁端部を上下につまみ出し、外傾する面をつくる。器壁が薄く、内面は当て具痕をすり消す。これらの特徴から、湖西窯産の可能性が高い[7]。

これらの土器は飛鳥Ⅴ～平城宮土器Ⅰの特徴を示す。

土坑SK4265出土土器（Fig.132，Ph.109）　第46次調査区南部にある不整形土坑。埋土の上層から比較的まとまった土器が出土した。出土した土器には、土師器杯C、杯G、杯H、ⅢA、鉢H、盤B、甕A、甕C、須恵器杯A、杯B蓋、杯G蓋、甕Aなどがある。土師器杯Cは杯CⅠ（526）、杯CⅡ（523・524）、杯CⅢ（525）がある。526はやや浅い形態で、口縁端部内側に内傾する面をなす。a1手法で調整する。胎土に白色微砂をやや多く含む。523は浅い形態で、口縁端部を丸くおさめ、b0手法で調整する。524は口縁端部を小さく外反させ、内側に内傾する面をなす。a0手法で調整する。内面に細い一段暗文を密に施す。径高指数は31.1。525は外面の器面剥落が著しいが、a0手法とみられる。褐色の色調を呈し、胎土に白色微砂を少量含む。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。杯G（527）はやや深い形態で、端部を丸くおさめる。黄褐色の色調を呈し、胎土に白色微砂を含む。ⅢA（528）は平らな底部から口縁部が内弯しながら立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。a0手法で調整する。鉢H（529・530）は口縁部をヨコナデし、底部にヘラケズリ調整を施す。529は口縁端部を丸くおさめ、530は内傾する面をもつ。

盤Ｂ（531）は体部が内弯しながら大きく開く。把手を貼り付け手法により接合する。内面に横方向のハケ目調整を施した後、一段暗文を施す。外面は体部下半にヘラケズリ調整を施し、体部上半はナデ調整の後ヘラミガキを施す。甕Ａ（532）は口縁部が外反し、端部に面をもつ。褐色の色調を呈し、赤褐色粒子と１～３㎜の白色砂粒を多く含む。甕Ｃ（533）は口縁部が「く」字状に大きく屈曲し、端部を丸くおさめる。胎土に赤褐色粒子と白色微砂をやや多く含む。

須恵器杯Ａは深い形態（1033）と浅い形態がある。1033は底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。外面下部に２条の沈線を施す。底部外面をヘラ切りの後ナデ調整を施す。内面に炭化物が付着する。杯Ｂ蓋（1032）は平坦な頂部から口縁部がゆるやかに降る。短いかえりを貼り付ける。胎土に白色微砂と黒色粒子を含む。杯Ｇ蓋（1031）は平坦な頂部からなだらかに口縁部がのび、短いかえりを貼り付ける。器壁が厚い。胎土に白色微砂と黒色粒子を含む。甕Ａ（1034）は口縁部が長く、大きく外方へ開く。口縁端部に外傾する面をもち、その直下に１条の突帯を貼り付ける。外面の３箇所に１条沈線を施し、最下段のものは２条一組となる。この沈線間に板状工具の小口を斜めに刺突した列点文を施す。内面は頸部の屈曲部に乱ナデ調整を施し、当て具痕を一部ナデ消している。

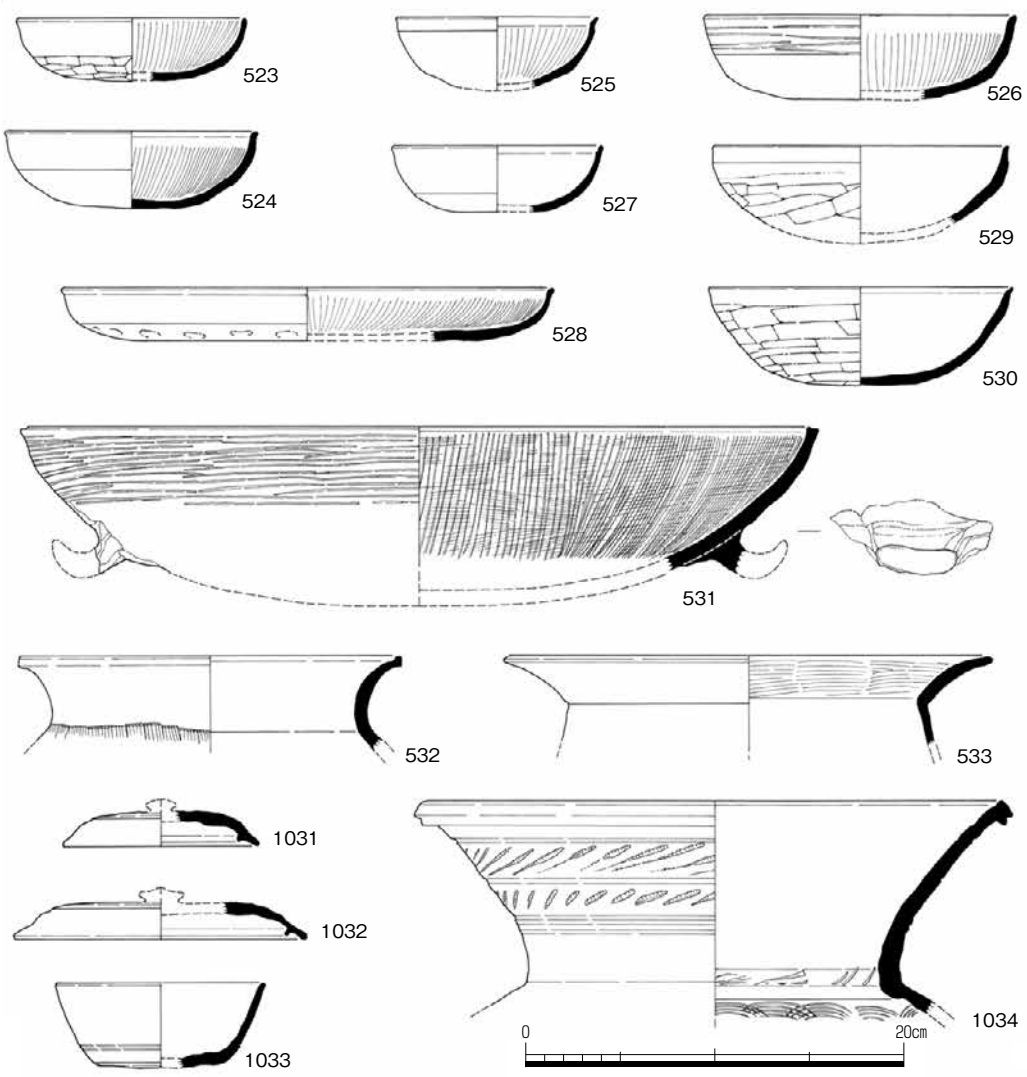


Fig. 132　SK4265出土土器　1:4

これらの土器は飛鳥Ⅲの特徴を示す。

土坑SK4271出土土器（Fig.133，Ph.109）　SK4271は藤原京期後半（Ⅲ-C期）の建物SB4333の内側にある井戸状の土坑。土師器杯A、椀C、高杯A、甕A、甕Cと、須恵器杯A、杯B蓋、壺K、甕が出土した。土師器椀C（534）は丸底の深い形態で、口縁端部内面に内傾する面をもつ。a0手法で調整する。高杯A（535）は脚部の破片。内面にヘラケズリを施すⅡ群土器で、外面に分割ミガキを施す。褐色を呈し、胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。甕A（536）は口縁端部を上方につまみ出し、外面に面をもつ。外面に縦方向のハケ目調整、内面にナデ調整を施す都城型甕である。胎土に1～3㎜の白色砂粒をやや多く含む。甕C（537）も口縁端部を強くヨコナデし、外面に面をもつ。体部外面は被熱痕跡が著しく、ススが付着する。

須恵器杯A（1035）は深い形態で、平底の底部から口縁部が直線的に外方へ開く。底部はロクロケズリ調整で仕上げる。胎土に1～4㎜の白色砂粒を含む。壺K（1036）は最下層からの出土。最大径は26.2㎝。口頸部に2条一組の沈線を3箇所に施し、肩部から胴部にかけての4箇所に同様の沈線を施す。灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。甕（1037）は口縁端部直下に断面三角形の段をもつ。1036・1037は胎土や色調、および形態からみて東海地方産の可能性が高く、特に1037は美濃須衛窯産の可能性がある。この他、かえりのない杯B蓋も出土した。

これらの土器は飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

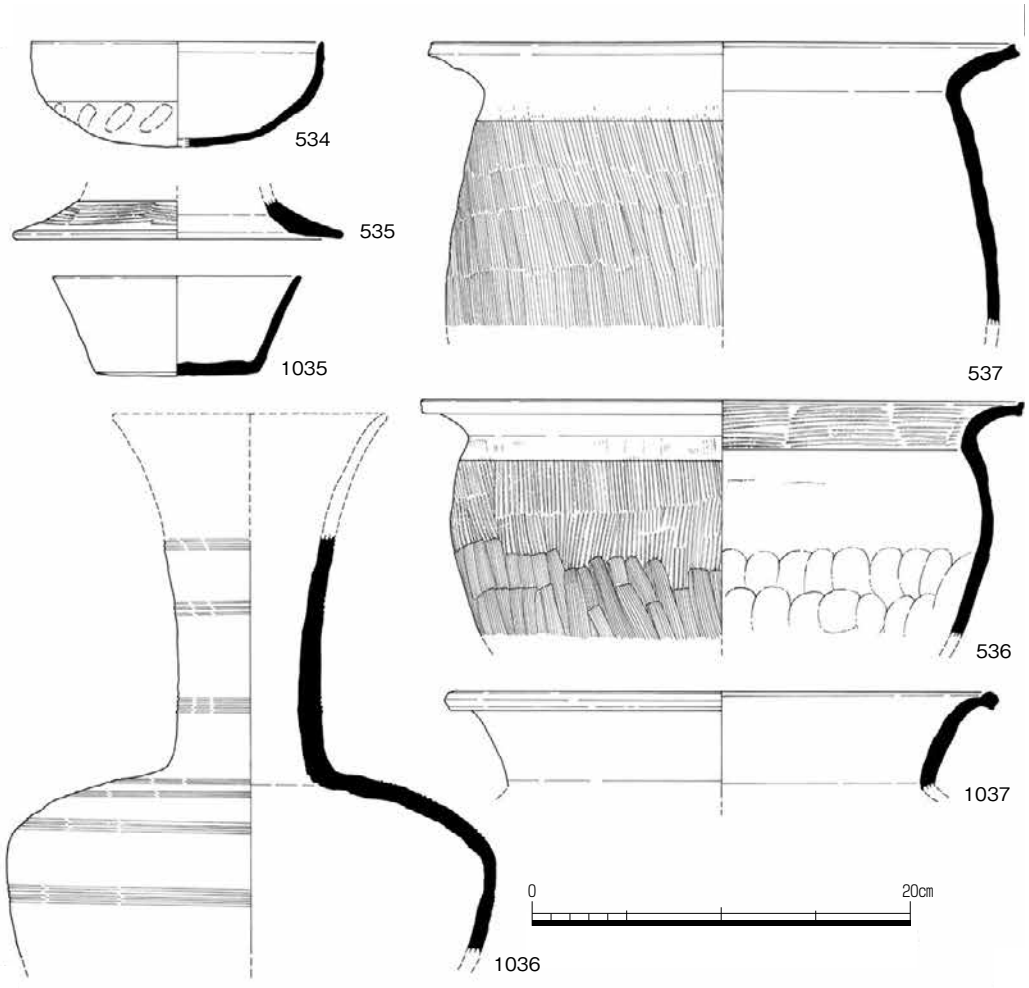


Fig. 133　SK4271出土土器　1:4

土坑SK4266出土土器（Fig. 134，Ph. 109）　SK4266は調査区南部にあり、藤原京期後半（Ⅲ-C期）の建物SB4330より古い小規模な土坑である。少量の土器が出土した。土師器杯CⅠ（539）は口縁端部をヨコナデし、内傾する面をもつ。b0手法で調整する。内面に板状工具によるナデ調整を施した後、右上がりの一段暗文を施す。色調は燈褐色を呈し、砂粒が目立つ胎土で赤褐色粒子と白色微砂を含む。杯CⅡ（538）はやや深い形態で、平底に近い底部から口縁部が丸みをもって立ち上がり、端部を丸くおさめる。a0手法で調整する。内外面にススが付着する。径高指数は31.6。高杯C（540）は杯部が椀形の深い器形である。内面に一段暗文を施し、脚部内面に絞り痕跡が明瞭に残る。杯部径高指数は23.5。甕A（541）は小型のもので、口縁端部を強くヨコナデし、外面に面をもつ。

これらの土器は飛鳥Ⅲの特徴を示す。

土坑SK4365出土土器（Fig. 134，Ph. 109）　第46次調査区で検出した東三坊坊間路のすぐ東にある小規模な土坑である。土師器椀C（542）は小さな平底の底部から丸みをもって口縁部が立ち上がり、端部は内傾する面をもつ。口縁部をヨコナデし、外面はユビオサエの痕跡が残る。SD4130やSE4770出土の椀Cと同型式で、奈良時代の特徴を示す。この他、図示し得ないが他に口縁端部を折り返す土師器甕の破片が出土した。

SJ4260出土土器（Fig. 134，Ph. 109）　SJ4260は第46次調査区の東壁中央部にある埋納遺構で、一部拡張して全体を検出した。肩部以上と底部を欠失する須恵器甕Aを倒置し、その内部に土師器杯CⅢを正位で納め、その上を拳大の礫で覆っていた。

土師器杯CⅢ（543）はやや深い形態で、口縁端部を外反させ内傾する面をもつ。a0手法で調整する。径高指数は35.5。須恵器甕A（1038）は胴部のみ遺存する。肩が張らない倒卵形の器

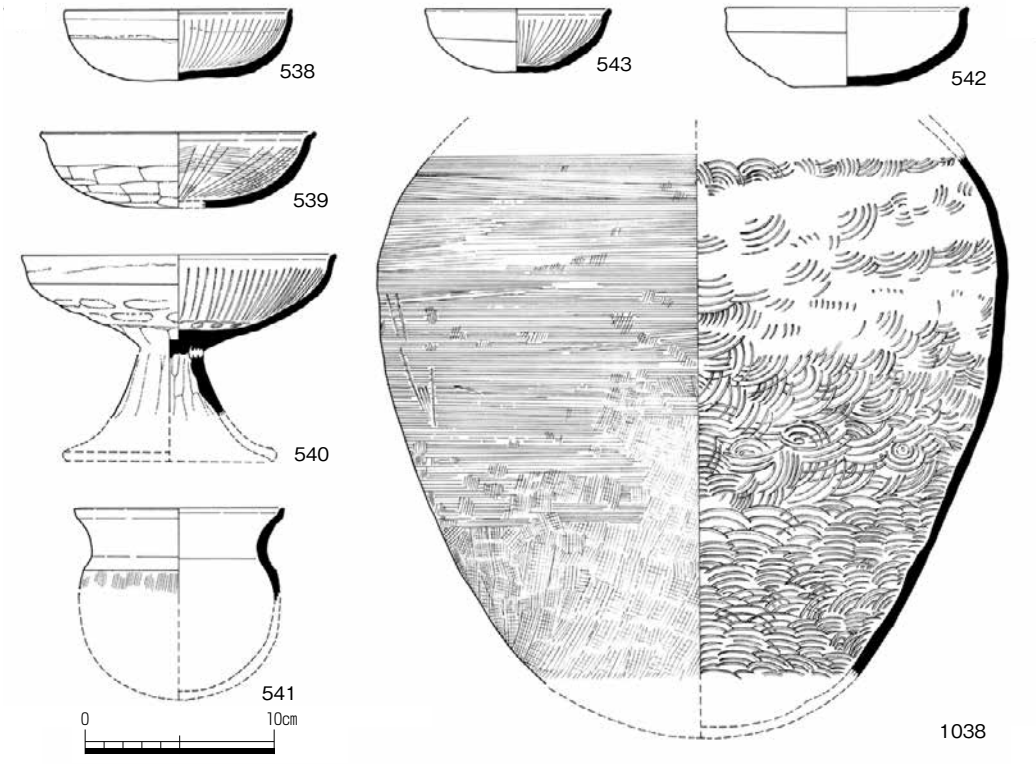


Fig. 134　SK4266・4365、SJ4260出土土器　1:4

形である。外面上半は平行叩きの後、カキ目調整を施す。下半はカキ目調整の後、平行叩きを施す。内面上半は当て具痕をナデ調整により一部消している。下半は当て具痕が密に観察される。当て具痕の重複関係からみて、胴部上半を叩き成形した後にカキ目調整を施し、その後底部を叩き出して成形したことが分かる。胎土に1～4㎜の白色砂粒をやや多く含む。土師器杯Cは飛鳥Ⅰの新しい段階の特徴を示す。

D　建物・塀出土土器（Fig.135・136）

建物や塀の柱穴出土土器は概して少量で、小破片のものが多い。その中でまとまった資料や遺構の時期判定に資する資料があり、ここではそれを中心に示す。

SB4735出土土器　藤原京造営期（Ⅲ-A期）の東北坪西側区画南端にある、桁行3間×梁行1間の東西棟建物。東西方向の掘立柱塀SA4171BとSA4732の間に位置し、門の機能が考えられる。各柱穴から土師器と須恵器が小片で出土した。須恵器杯G蓋（1039）は平坦な頂部から口縁部がなだらかにのびる。かえりと口縁部の高さが同じである。胎土に白色微砂を少量含む。この他土師器杯Bの底部片、杯C片なども出土した。

SB5020出土土器　西北区画内の西方に位置する桁行3間×梁行2間の総柱の南北棟建物。各柱穴から土師器、須恵器が破片で出土した。544・545・547・1040は柱抜取穴からの出土である。土師器杯A（544･545）はいずれもb1手法で調整する。544は口縁部が外反しながら立ち上がり、端部を内側に巻き込む。内面に二段暗文を施し、上段暗文帯の幅が広い。外面のミガキも密である。胎土に白色微砂をやや多く含む。545は544に比べやや深い形態であるが、二段暗文の上段暗文帯の幅は狭い。径高指数は26.7。口縁部内面にススが付着し、底部外面に「部女」の墨書がある。杯C（546）は皿に近い浅い形態である。口縁部が丸みをもって立ち上がり、端部内面に内傾する面をもつ。径高指数は21.9。a0手法で調整し、内面に斜めに傾く一段暗文を施す。内外面にススが付着する。鍋A（547）は口縁部がゆるやかに外反し、口縁端部を小さく内側に巻き込み外面に外傾する面をもつ。体部外面上半に目の粗いハケ目調整を施した後、下半を目の細かい原体によりハケ目調整を施す。胎土に1～5㎜の白色砂粒と赤褐色粒子を含む。器面は磨耗しており、内外面にススやコゲの付着は観察できない。須恵器杯B蓋（1040）は扁平な形態で、口縁端部を下方に折り曲げる。これらの土器は飛鳥Ⅴの特徴を示す。

SB5970出土土器　調査区中央部に位置する、桁行2間×梁行1間の小規模な南北棟建物。土師器甕C（548）が出土した。口縁部が外反し、端部に面をもつ。体部外面に縦方向のハケ目調整を施す。

SB4330出土土器　藤原京期後半（Ⅲ-C期）の南東部の脇殿をなす、桁行7間×梁行2間の南北棟建物。各柱穴から土師器や須恵器が破片で出土した。須恵器杯B（1043）は丸みをもった底部が高台よりも下方に突出し、底部と口縁部との境に稜をもつ。底部外面をロクロケズリで調整する。淡青灰色を呈し、胎土に白色微砂と黒色粒子を含む。形態や胎土からみて、東海地域産の可能性がある。

SB4331出土土器　SB4330の北側にある桁行7間×梁行2間の南北棟建物。SB4330と東側柱筋を揃え、2棟の脇殿となる。各柱穴から土師器、須恵器が破片で出土した。図示し得ないが、浅い形態の土師器杯Cや把手貼り付け手法による甕Bが出土した。

SB4332出土土器　SB4330・4331の西側にある、藤原京期前半（Ⅲ-B期）の東脇殿。各柱穴から土師器、須恵器が破片で出土した。図示し得ないが、土師器杯Aが出土した。器高が深い形態で二段暗文の上・下段の間に上向きの連弧暗文Aを施す。

SB4333出土土器　正殿SB5000の東側にある東西棟建物で、東副殿と考えられる。土師器杯H（549）は口径が大きく、底部と口縁部の境に鈍い稜がつく。この他、土師器鉢Hが出土した。

SB4737出土土器　正殿SB5000の北東側にある桁行8間×梁行1間の東西棟建物。各柱穴から土師器、須恵器が破片で出土した。551・552は土師器杯C。551は浅い形態で、口縁端部は丸みをもつ。内面に一段暗文を施す。胎土に白色微砂をやや多く含む。552は深い椀形である。器面磨滅により内面の暗文は観察できない。胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。須恵器杯A（1046）は平底の底部から口縁部が直線的に外反して立ち上がる。底部と口縁部との境が明瞭である。底部をロクロケズリで調整する。1044・1045は杯G蓋。1044は平坦な頂部から口縁部にかけてなだらかに弯曲し、かえりの高さが口縁部と同じ高さである。頂部に小さく高い宝珠つまみが付く。灰白色を呈し、やや砂粒が目立つ胎土で0.5～2㎜の白色砂粒を含む。1045は杯B蓋の可能性もある。平坦な頂部から屈曲して口縁部がのび、短いかえりを貼り付ける。このほか図示し得ないが頂部が丸みをもつ須恵器杯B蓋が出土した。内面にススが付着する。これらの土器は552・1045が飛鳥Ⅲ～Ⅳ、551・1046が飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

SB4340出土土器　正殿SB5000の前面にある推定桁行7間×梁行3間の東西棟建物。前殿の性格が考えられている。北東隅柱穴から須恵器杯B蓋（1042）が出土した。頂部から口縁部にかけてなだらかに弯曲し、頂部に径の大きな擬宝珠状のつまみが付く。短いかえりを貼り付ける。胎土に白色微砂をやや多く含む。この土器は飛鳥Ⅲ～Ⅳの特徴を示す。

SB4800出土土器　東西大溝SD4130の北側に位置する桁行5間×梁行2間の東西棟建物。各柱穴から土師器や須恵器が出土した。土師器杯A、杯C、杯H、杯蓋、皿A、鉢A、壺A、須恵器杯A、杯蓋、壺、甕Aがある。553・555・557・558・1047・1049は柱抜取穴から出土した。土師器杯Cは杯CⅠ（555）と杯CⅡ（556）がある。杯CⅠは口縁端部に内傾する面をもつ。a0手法で調整する。内面に杯Aにみられるような二段暗文を施し、上・下段の暗文間には上向きの連弧暗文Aを施す。杯CⅡは口縁端部がわずかに内傾する面をなす。内面に斜めに傾く一段暗文を施す。胎土に白色微砂をやや多く含む。杯AⅠ（553）は口縁部が外反し、端部を内側に肥厚する。b1手法で調整し、内面に二段暗文を施す。二段暗文は上段の暗文帯幅が広く、上・下段の暗文間に上向きの連弧暗文Aを、口縁部上方に上向きの連弧暗文Bを施す。557・558は杯G。557は口縁部をヨコナデ調整し、端部を丸くおさめる。胎土に白色砂粒と赤褐色粒子を多く含む。底部外面に粘土紐巻き上げ痕跡がみられる。558は口縁部が外反し、底部との境に段が付く。杯Hに似た形態だが、外面にヘラケズリ調整はなく、小さな平底となる底部を軽くナデ調整する。底部外面に粘土紐巻き上げ痕跡が残り、幅3.5㎝の粘土紐を巻き上げて成形したことが分かる。胎土に1～5㎜の白色砂粒を含む。皿A（554）は大きな平底の底部から口縁部が内弯しながら立ち上がり、端部を内側に肥厚する。a0手法で調整し、内面に螺旋暗文と一段暗文を施す。胎土に白色微砂を含む。1047・1048は須恵器杯A。1047は底部と口縁部の境に丸みをもつ。底部はロクロケズリ調整を施す。焼成はやや軟質で1～3㎜の白色砂粒をやや多く含む。1048は底部が丸底に近く、口縁端部は外反する。底部を丁寧にロクロケズリした結果、

底部と口縁部との境に鈍い稜をもつ。胎土に白色微砂と黒色粒子を含む。形態と胎土から東海地域産の可能性が高い。甕Ａ（1049）は、口縁部が外反し、端部直下に小さな段をもつ。胎土に白色砂粒をやや多く含む。これらの土器は飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

SB4725出土土器　藤原京期後半（Ⅲ-Ｃ期）の東区画塀に開く門。須恵器甕の口縁部が出土した（1050）。口縁部が大きく外反し、端部を丸くおさめる。外面に平行叩きを施す。

SB5000出土土器　左京六条三坊の中心に位置する、桁行７間×梁行３間の身舎の南に、廂が付く東西棟建物。左京六条三坊に占地する施設の正殿と考えられる。土師器と須恵器が少量出土した。須恵器甕Ａ（Ph.120-1077）は口縁部が外反し、端部を内側に巻き込む。頸部内面に「⋒」のヘラ記号を記す。

SB4786出土土器　調査区北側に位置する桁行３間×梁行３間の小規模な掘立柱建物。SB4787に並ぶ。各柱穴から土師器、須恵器が破片で出土した。土師器杯Ａ（559）は復元図化が困難だが、口縁部が外反し、端部を小さく内側に巻き込む。内面に一段暗文と上向きの連弧暗文Ａを施す。同様の破片がこの他１点出土している。また製塩土器も出土した。これらの土器は平城宮土器Ⅱの特徴を示す。

SB4787出土土器　調査区北側に位置する桁行４間以上×梁行２間の南北棟建物。SB4786の北に並んで位置する。土師器杯Ｃ（560）は口縁端部を丸くおさめる。a0手法で調整し、内面に細い一段暗文を施す。皿Ｈ（561）は丸底に近い底部から短い口縁部が外方に開く。底部と口縁部の境に稜がつく。この他、低い高台を貼り付けた須恵器杯Ｂ片が出土した。底部外面が磨耗して平滑である。転用硯の可能性もあるが、墨痕は観察できない。これらの土器は飛鳥Ⅴ～奈良時代前半の特徴を示す。

SB5050出土土器　調査区北西隅に位置する桁行３間×梁行３間の総柱建物。各柱穴から土師器と須恵器が破片で出土した。小型の壺Ａ（562）は最大径部より上に分割ヘラミガキを施し、下はヘラケズリの後ヘラミガキを施す。把手は貼り付け手法により接合する。この他、間隔の広い一段暗文を施す土師器杯Ａや、口縁端部を内側に巻き込む甕片が出土した。また製塩土器片が多く出土した。これらの土器は平城宮土器Ⅲの特徴を示す。土師器椀Ａ（563）は北柱列の西から２基目の柱抜取穴から出土した。器高が浅く、口縁部が直線的に外方へ開き、外面をｅ-ｃ手法で調整する。器壁が薄く、胎土に白色微砂、金雲母、赤褐色粒子を含む。平安時代初頭（SD650A段階）の特徴を示し、SB5050の廃絶時期の一端を示す。

SA4320出土土器　藤原京期後半（Ⅲ-Ｃ期）の内郭東限を限る南北方向の掘立柱塀。須恵器杯Ｂ蓋（1051）はかえりがつかないタイプで、平坦な頂部から口縁部が屈曲して続き、端部を短く折り曲げる。器壁が薄く、シャープな作りである。復元口径は10.8㎝。胎土に白色微砂を少量含む。他に図示し得ないが、土師器皿Ａ破片も出土した。平底から直線的な口縁部が立ち上がり、底部との境が明瞭である。これらの土器は飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

SA4729出土土器　藤原京期後半（Ⅲ-Ｃ期）の内郭東限の南北塀。北でSB4780の東妻に接続し、南のSA4320との間には門SB4725が開く。土師器高杯Ｃ（565）はやや深い椀形の杯部で、口縁端部は丸みを帯びる。胎土に白色微砂をやや多く含み、径３～５㎜の白色砂粒が少量混じる。須恵器杯Ｇ（1057）は、丸底の底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。口縁端部にわずかに内傾する面をもつ。底部をロクロケズリで調整する。軟質の焼成で灰白色を呈し、胎土に黒

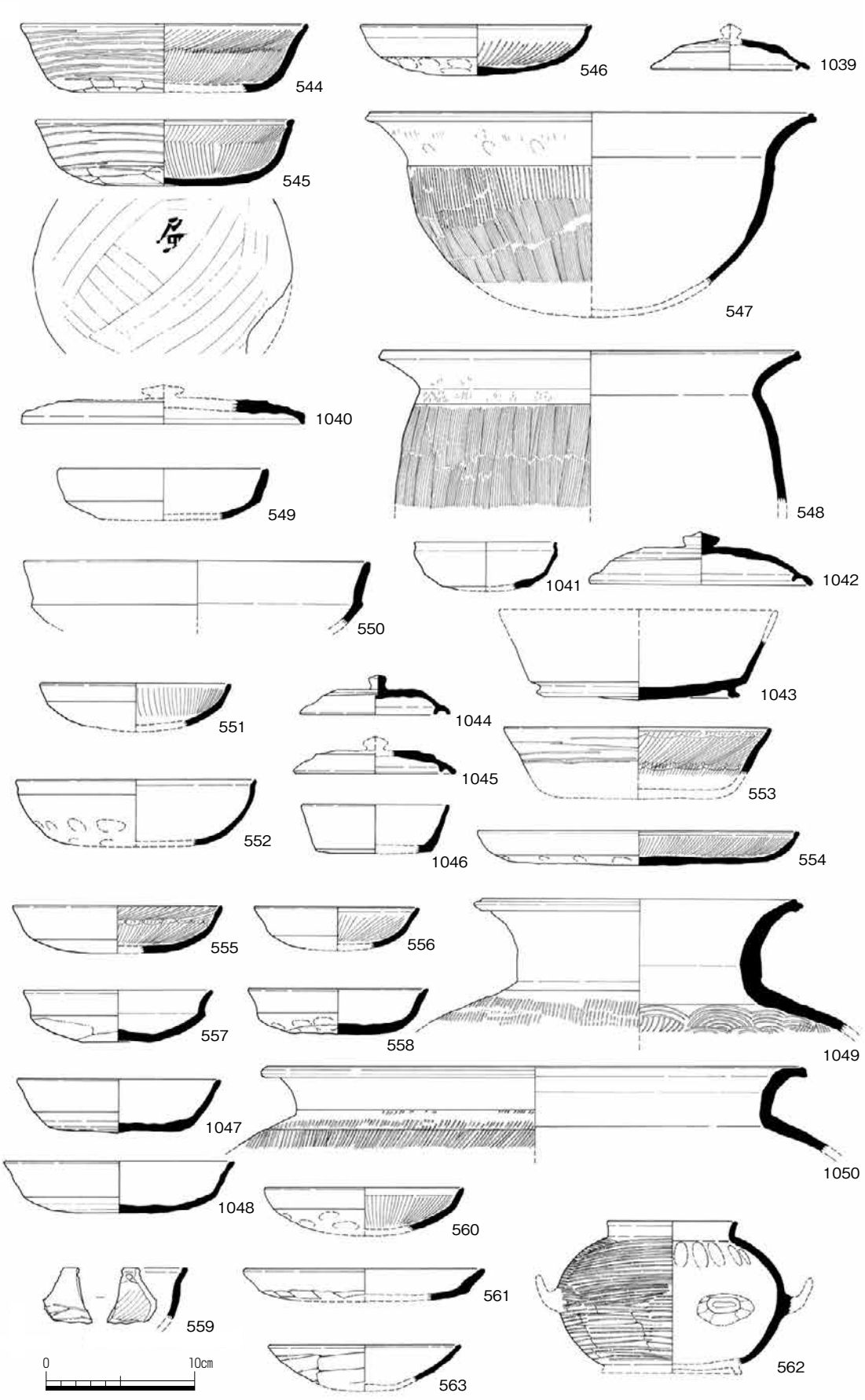


Fig. 135　掘立柱建物出土土器　1:4

色粒子を含む。これらの土器は飛鳥Ⅱ～Ⅲの特徴を示す。

SA4730出土土器　藤原京期前半（Ⅲ-B期）の内郭東限の南北塀で、SA4729の西に位置する。門SB4726を挟んで、SA4286の北延長上にあたる。各柱穴から土師器、須恵器が出土した。564・1052・1054・1055は柱抜取穴からの出土である。土師器鍋B（564）はほぼ完形である。口縁部が外反し、端部を上方につまみ出し、外面に面をもつ。外面ハケ目調整、内面ナデ調整の都城型である。把手を貼付手法により接合する。内外面にススやコゲ、二次被熱の痕跡はみられない。1052・1053は須恵器杯B蓋。1053は口縁端部を折り曲げ、1052は頂部に大ぶりの擬宝珠状つまみが付く。1054・1055は甕A。1054は口縁端部外面が丸く、小さな玉縁状になる。色調は淡青灰色を呈し、黒色粒子と白色微砂を含む。1055は口縁端部外面が丸く、下方に小さく垂れる。胎土に0.5～3㎜の白色砂粒を多く含む。甕C（1056）の口縁端部は上部に平坦面をもつ。口頸部は外面を平行叩きで整形した後、ロクロナデ調整を施す。胎土に1～4㎜の白色砂粒を多く含む。これらの土器は飛鳥Ⅴの特徴を示す。

SA4731出土土器　六条条間路北側溝SD4139に重複する東西方向の掘立柱塀。SD4139よりも新しい。土師器、須恵器が出土した。土師器杯A（567）は口縁端部の巻き込みが弱く、やや肥厚するのみで丸くおさめる。b1手法で調整し、内面に二段暗文を施す。鉢B（568）は口縁部

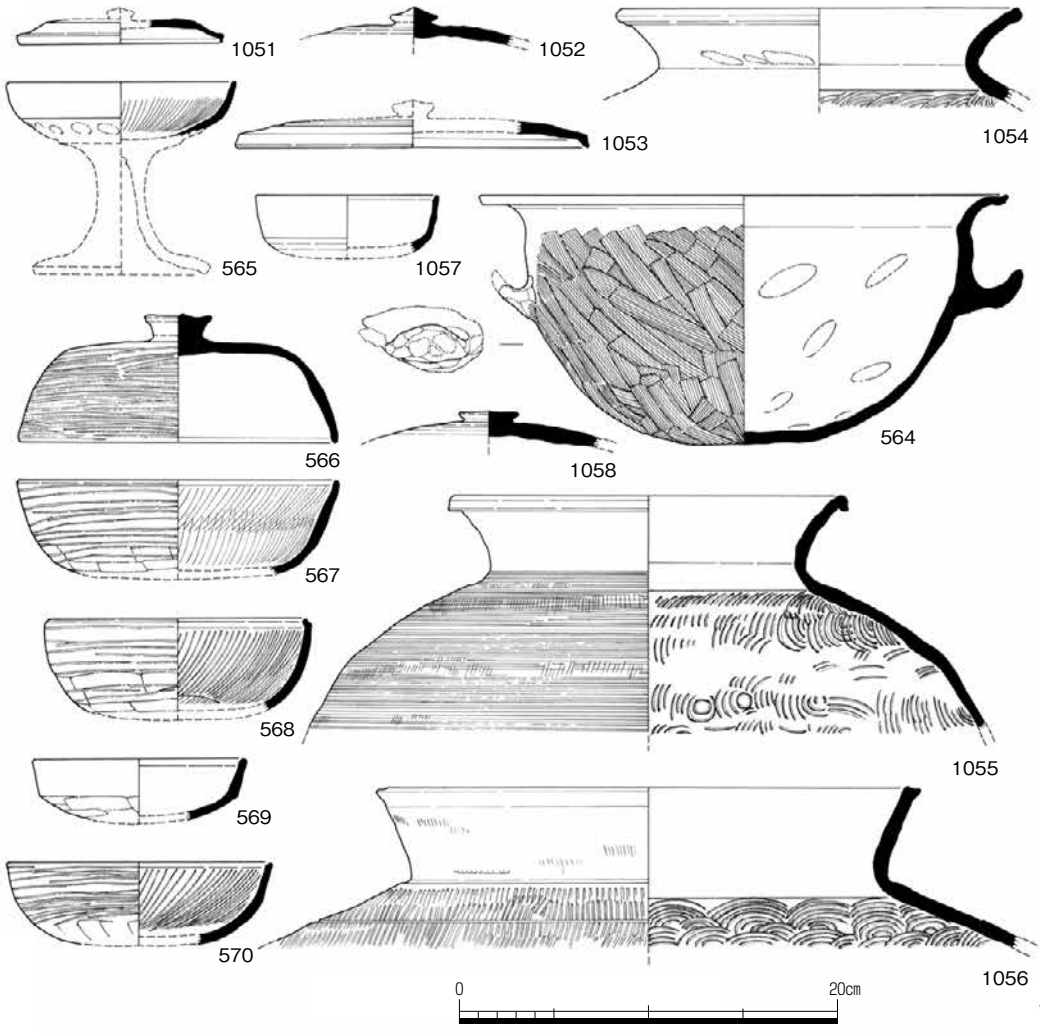


Fig. 136　掘立柱塀出土土器　1:4

が内弯しながら立ち上がり、端部を内側に巻き込む。b1手法で調整し、内面に一段暗文を施す。杯H（569）は直立する口縁部と底部との境に稜がつく。内外面と破面にススが付着する。壺A蓋（566）は杯Aを逆にした様な器高が高い形態で、口縁端部を丸くおさめる。頂部に中央が突出する高いつまみを貼り付ける。頂部外面に分割ミガキを施し、口縁部外面に横方向のヘラミガキを施す。内面に暗文はない。燈褐色の色調を呈し、胎土に白色砂粒を含む。須恵器杯B蓋（1058）は頂部がなだらかに弯曲し、扁平なつまみを貼り付ける。砂粒が目立つ胎土で白色砂粒や黒色粒子をやや多く含む。これらの土器は飛鳥Ⅳ～Ⅴの特徴を示す。

SA4990出土土器　東三坊坊間路西側溝SD4302の西5ｍに位置する南北方向の掘立柱塀。土師器杯CⅡ（570）はやや深い形態である。口縁端部に内傾する面をもつ。b1手法で調整し、内面に一段暗文を施す。口縁部内面にススが付着する。飛鳥Ⅱ～Ⅲの特徴を示す。

E　藤原京造営以前の土器・中世の土器

i　縄文時代、弥生時代の土器

縄文土器（Fig. 137，Ph. 113）　調査区全体から細片が20片ほど出土した。SD4130等からの出土で、本来の位置を保たない。1は口縁が外反して開く深鉢の口縁部。器壁は厚く、外面に粗い楕円押型文、内面には縦方向に太い沈線を施す。早期後半の高山寺式である。2・3は同一個体と考えられる深鉢の底部で、底面は剥落する。3にはLRとRLの羽状縄文が認められ、前期後半北白川下層Ⅱ～Ⅲ式に比定できる。4・5は刻目突帯文土器の深鉢口縁部。4の刻目はD字形で、晩期後半の船橋式。5の突帯は断面形が下向きの低い三角形を呈し、C字形の刻目を施す。晩期末の長原式に位置づけられる。6は頸部が屈曲する晩期の深鉢の胴部で、下半をケズリで調整する7は後期後半と思われる深鉢の胴部で、内面に巻貝条痕が残る。4～7は胎土に粗い砂粒を多く含む。

弥生土器　北東端の整地土などから、細片が少量出土した。図示はできないが、凹線文をもつ壺や棒状浮文を持つ無頸壺があり、底部に叩きを残す甕も多く認められることから、中期から後期のものが多いと考えられる。

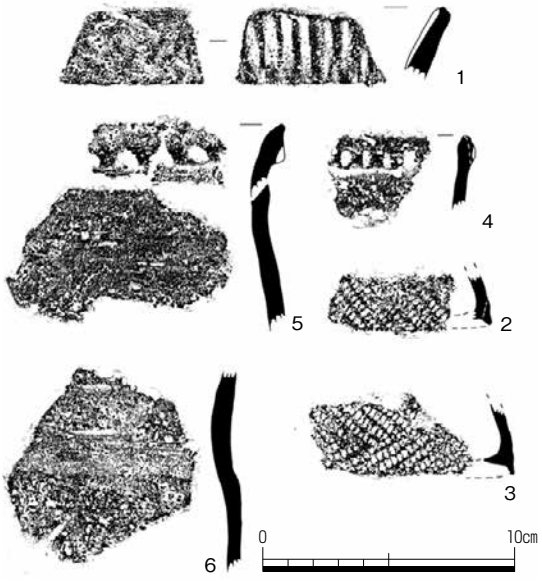


Fig. 137　縄文土器　1:3

ii　古墳時代の土器

古墳時代の土器は主に竪穴建物から出土した。溝、柱穴、包含層からも出土したが、いずれも小破片である。ここではまとまった出土をみた竪穴建物出土土器について記す。

土器には高杯、壺、甕、甑があり、特殊な土器として韓式系土器の甕片や両耳壺蓋がある。高杯は、辻美紀の分類[8]を参

考に、有段外反高杯、(600・614)、無稜外反高杯（581・595ほか)、無稜直口高杯（599)、椀形高杯（598）とした。また甕には大型の長胴甕と小型の球胴甕がある。

竪穴建物ＳＩ4230出土土器（Fig.139，Ph.110） SI4230は自然河川NR4225の東岸に位置する。削平が著しいが、炭化材がみられ、焼失住居である。596は柱穴からの出土である。

595は無稜外反高杯。脚部内面に絞り痕跡が残る。杯底部外面から脚柱部外面にかけて縦方向のヘラケズリを施す。脚裾部は低く、端部を内側に折り曲げる。胎土は赤褐色粒子と白色微砂をやや多く含む。596は高杯脚部。脚部がハの字状に広がり、外面は上から下方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラケズリを施す。この他、韓式系土器2片（Ph.113）が出土した。

竪穴建物ＳＩ4231出土土器（Fig.138，Ph.110） SI4231は自然河川SD4225の東岸に位置する。SI4232と重複し、SI4232より古い。北壁中央位置に竈を設け、石を置いて支脚としていた。584・585は竈前面からの出土、582は貯蔵穴からの出土である。

581は無稜外反高杯。外面は杯底部から脚裾部まで下から上にヘラケズリを施す。脚裾部はハ字状に開き、端部を内側に折り曲げる。赤褐色を呈し、白色微砂と赤褐色粒子を少量含む。582も同型式の高杯脚部だが、脚裾部がやや低い。杯部との接合部は粘土を巻き付けて補強する。583は小型丸底壺。口頸部はく字状に屈曲し、口縁端部は上方に小さくつまみ出す。肩部外面に板ナデの痕跡がある。外面に二次被熱の痕跡があり、口縁部内面にススが付着する。585は胴部がやや膨らむ形態の長胴甕。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。外面は縦方向のハケ目調整で、肩部に横方向のハケ目調整を施す。内面は斜め方向のヘラケズリを施す。体部外面下半にススが多く付着する。584は体部中位がやや膨らむ円筒形の甑。底部は丸底気味で、棒状の把手を挿入手法により接合する。底部の中心に1箇所、その周囲に円形や楕円形の蒸気孔を6箇所あける。この他、製塩土器3片と上から切り込みを入れた棒状の把手（Fig.141-1088）と格子目叩きを施す韓式系土器の甕片（Fig.141-1089）が出土した。

竪穴建物ＳＩ4232出土土器（Fig.139，Ph.111） SI4232は自然河川SD4225の東岸に位置する。SI4231より新しい。焼失住居であり、焼土や炭化した屋根材が落下していた。竈は北壁から約20㎝離れて設けられ、石を置いて支脚としている。東壁北寄りに接して貯蔵穴がある。604・607が竈内から出土し、605・608は貯蔵穴からの出土である。

598は椀形高杯。口縁部は内弯し、端部を丸くおさめる。杯底部外面にヘラケズリを施す。色調は赤褐色で、胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含む。599は無稜直口高杯。杯底部外面と脚柱部にヘラケズリを施す。脚柱部内面もヘラケズリを施し、砂粒の移動した痕跡が明瞭に残る。脚裾部は内外面ともにユビナデで成形する。胎土に1～3㎜の白色砂粒を多く含む。口縁部内外面に二次被熱の痕跡が残る。これは支脚転用ではなく、住居焼失時の被熱と考えられる。600は有段外反高杯。杯部は底部の粘土盤に大きく外反する口縁部の粘土を貼り付けて成形する。口縁端部に面をもつ。601・602は小型丸底壺。肩部以下を手持ちヘラケズリで調整し、内面もヘラケズリを施す。601は口縁部が短く外反する。赤褐色を呈し、赤褐色粒子と白色微砂を含む。604は直口壺の体部と思われる。体部下半に斜め方向、体部中位には横方向の手持ちヘラケズリを施す。赤褐色を呈し、胎土は赤褐色粒子と白色微砂を含む。甕（605～608）は口径12～15㎝の中型甕が多く、また口縁部形態が多様である。605は口縁部が内傾し、端部を内側に巻き込み、内傾する面をつくる。外面は縦～斜め方向のハケ目調整で、内面は指ナデ痕跡が明瞭で

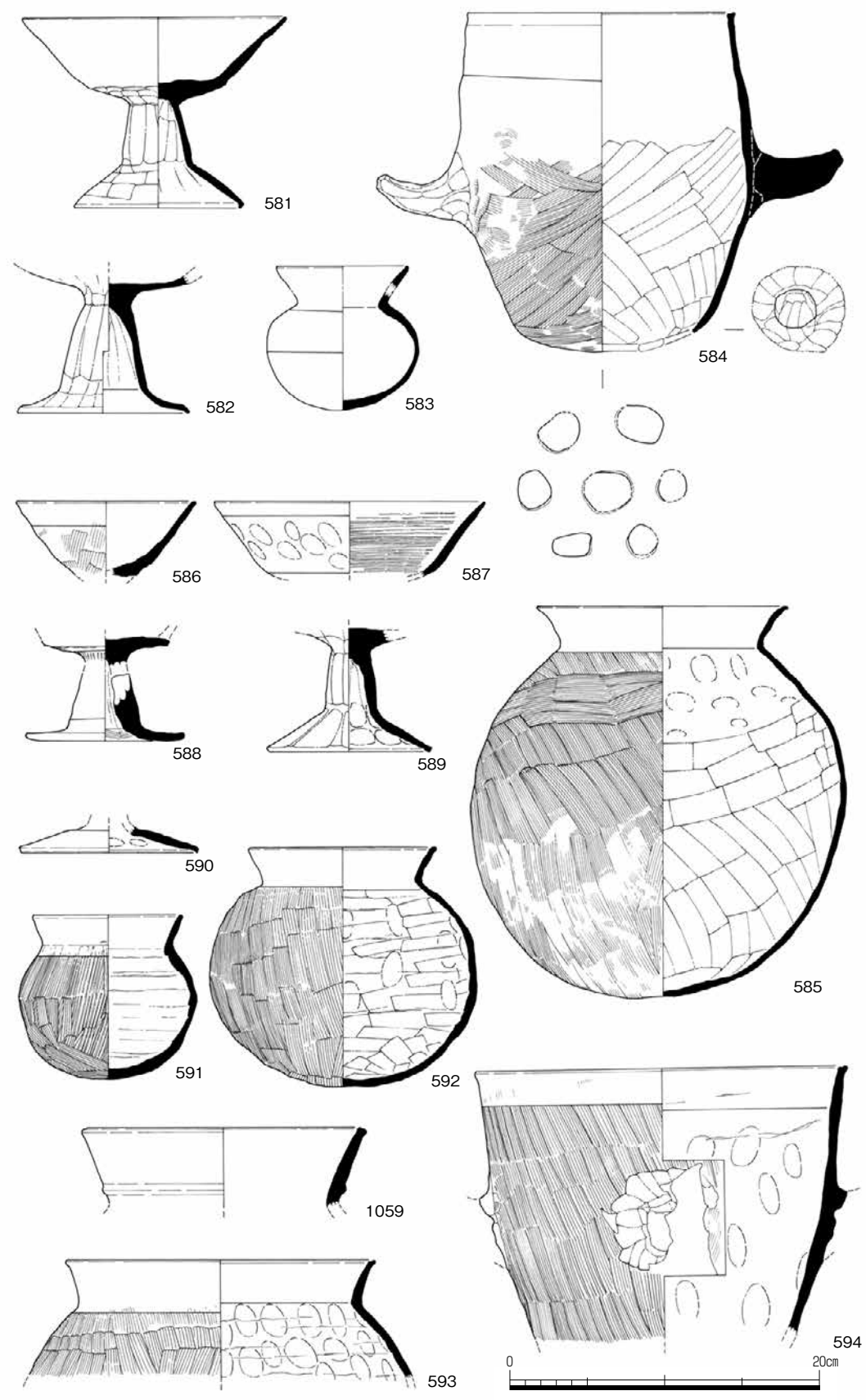


Fig. 138　SI4231・4233出土土器　1:4

ある。胎土に白色微砂を多く含む。606は長胴甕。口縁部はやや外反して開き、端部を丸くおさめる。外面は縦方向のハケ目調整を施し、内面は斜め方向のヘラケズリを施す。607は頸部が厚く、口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。体部外面は横方向に粗いヘラケズリを施す。内面はヘラケズリにより器壁をかき取る。赤褐色を呈し、金雲母をやや多く含む。608は台付甕。口縁部端部は外方と上方につまみ出し、三角形状を呈する。また、口縁部と頸部との屈曲部外面に小さく段をもつ。体部外面は櫛歯状の工具により、底部→体部中位、肩部→口縁部へとハケ目調整を施し、肩部に横方向のハケ目調整を１条施す。内面は体部下半に斜め方向のヘラケズリを下から上へ施し、体部中位は横方向の板ナデを施す。頸部はユビオサエの痕跡が残る。このほか、須恵器甕の口縁部片と製塩土器５片、韓式系土器甕が16片出土している。韓式系土器甕はいずれも外面に格子目叩きを施す（Fig.141-1090～1097）。1092は口縁端部が残存し、端部にヨコナデを施し、上面は平坦をなす。

竪穴建物ＳＩ4233出土土器（Fig.138，Ph.110）　SI4233は自然河川NR4225の西岸に位置する。竈は東南隅に斜め方向に設け、作りかえがある。第２次竈は土師器高杯脚部（589）を芯にして粘土を巻き、支脚とする。南壁のほぼ中央に接して貯蔵穴がある。593・594が竈内、588・591・592・1059は貯蔵穴、590は西南柱穴、587は竪穴床面からの出土である。

586は小型の高杯で、杯部外面下位にハケ目調整を施し、口縁部にヨコナデを施す。胎土が粗く、白色砂粒と金雲母を含む。588は杯底部と脚柱部の破片である。器壁が分厚く、脚裾部は平坦に近い。杯底部は擬口縁をなし、内面に口縁部の剥離痕跡があり、そこに杯部内面から続くハケ目痕跡がみられることから、杯底部となる粘土円板全体にハケ目調整を施した後、口縁部を貼り付けたことが分かる。杯底部外面と裾部内面にもハケ目痕跡が残る。586と同型式と思われる。587は無稜外反高杯。内面に横方向のヘラ磨きを施す。外面はナデ調整である。胎土に赤褐色粒子を多く含む。589は裾部がハの字状に開く高杯脚柱部。外面は縦方向にヘラケズリを施し、裾部はナデ調整である。赤褐色を呈し、胎土に白色砂粒を多く含む。590は脚裾部で平坦に近い。脚端部を下方につまみ出す。胎土は赤褐色粒子を多く含み、587に類似する。甕（591～593）は口径により、小・中・大の３つに分かれる。591・592は口縁端部を丸くおさめ、外面はハケ目調整。内面に粘土紐の痕跡が明瞭に残る。591は淡黄褐色を呈し、白色微砂を多く含む。592は白色微砂と金雲母を含み、外面にススが付着する。593は口縁端部を外方につまみ出し、上方に面をもつ。外面はハケ目調整で内面はユビオサエである。内面には粘土紐の痕跡が明瞭に残る。甑（594）は底部に向かって直線的にすぼまる形態で、把手を挿入手法で接合し、外面に粘土を貼り付けて補強する。外面は縦方向のハケ目調整を施した後、口縁部にヨコナデ調整を施す。口縁端部は外方につまみ出し、上方に面をもつ。1059は須恵器甕。口縁部はやや外反し、端部をわずかに肥厚させる。口縁部下位に１条の突帯状の段がみられる。この他、製塩土器１点と韓式系土器甕12片が出土した（Fig.141-1098・1099）。

竪穴建物ＳＩ4234出土土器（Fig.139，Ph.111）　SI4234は自然河川NR4225の西岸に位置する。大半がSI4235によって壊される。南壁東寄りに貯蔵穴があり、597は貯蔵穴からの出土。

1086は韓式系土器の蓋。頂部と口縁部との境をわずかにつまみ出す。頂部の２箇所に粘土を貼り付けて耳状の張り出しをつくり、上方の中心側から周縁に向けて刺突し、穿孔を施す。口縁部はやや外方に開く。淡褐色を呈し、胎土に0.5～３㎜の白色砂粒を多く含む。韓半島西南部

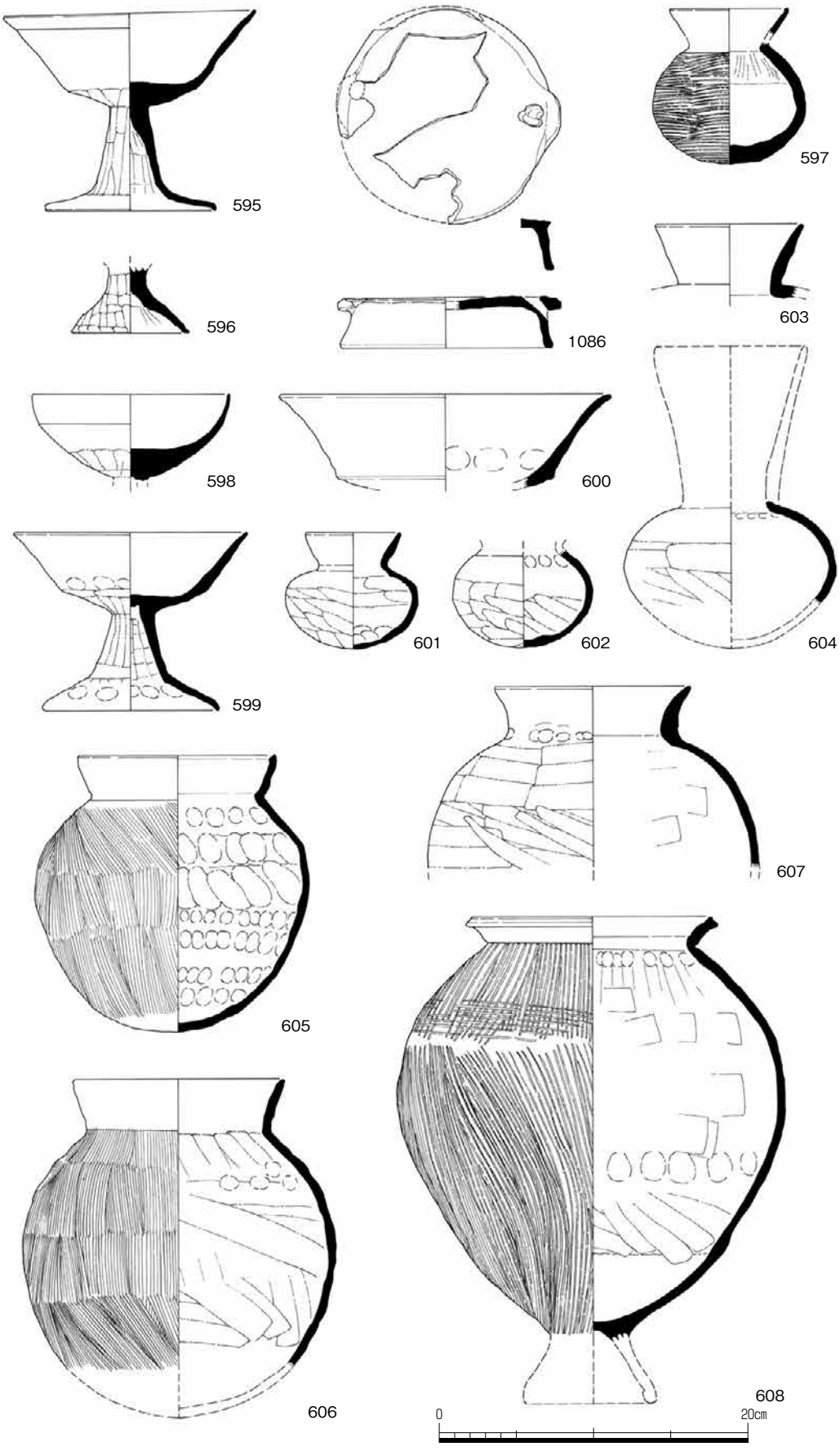


Fig. 139　SI4230・4232・4234出土土器　1:4

湖南地域（いわゆる馬韓の領域）に分布する両耳壺の蓋である。597は小型丸底壺。胴部最大径が体部下位にあり、下膨れの形態である。器壁が厚く、外面に粗い分割ヘラミガキを施す。口縁端部は内側に小さく巻き込む。この他、韓式系土器1点が出土した。

竪穴建物SⅠ4235出土土器（Fig.140，Ph.112）　SI4235は自然河川NR4225の西岸に位置する。SI4234よりも新しい。南壁中央に接して竈の痕跡があり、東壁北寄りに接して貯蔵穴がある。

609～613は無稜外反高杯。609は小型で、杯底部外面にヘラケズリを施す。赤褐色を呈し、赤褐色粒子と白色微砂を含む。610は器面の磨滅が著しく、調整は不明である。胎土に白色微砂と金雲母を含む。611・612は杯底部と口縁部との境が丸みをもち、椀形高杯に似る形態である。両者ともに脚部との接合部に刺突痕が残る。611は白色微砂と金雲母を含み、612は口縁部内外面にススが付着する。613は内外面にススが付着する。614は有段外反高杯で、口縁端部を欠損する。杯部が深いタイプである。杯底部外面にヘラケズリを施す。赤褐色粒子と白色微砂を含む。616は長胴甕。やや肩が張る形態である。口縁端部を内側に小さくつまみ出し、上方に面をもつ。外面はハケ目調整を施し、内面はユビオサエ痕跡が残る。また内面には粘土紐の痕跡が残る。この他、韓式系土器甕1片が出土した（Fig.141-1100）。

竪穴建物SⅠ4236出土土器（Fig.140，Ph.112）　SI4236は自然河川NR4225の西岸にある。竪穴建物で最も規模が大きい。北壁中央やや東寄りに竈の痕跡が残る。南壁東寄りに貯蔵穴がある。619・622・624・1087は貯蔵穴、621・623・626は竪穴床面、620は壁溝から出土した。

1087は韓式系土器の蓋。頂部と口縁部との境に稜をもち、口縁端部はやや外方につまみ出す。頂部の2箇所に粘土を貼り付けて耳状の張り出しを造り、上方から周縁に向けて刺突による穿孔を施す。穿孔位置と耳の位置は一致しない。頂部に分割ヘラミガキを施し、口縁部外面にも密なヘラミガキを施す。黒色を呈し、胎土に微細な雲母片を多く含む。1086と同じく、韓半島湖南地域に分布する両耳壺の蓋である。黒色に焼成する点や胎土に雲母片を含む点は他の竪穴遺構から出土する土師器とは異なっており、韓半島から直接搬入された可能性がある。ただし、韓半島の両耳壺蓋で頂部や口縁部にヘラミガキを施す例は、管見の限りない。617・618は無稜外反高杯である。杯底部外面にヘラケズリを施す。617は内外面に横方向のヘラミガキを施す。淡黄褐色を呈し白色微砂を含む。618は器面の磨滅が著しく、ミガキの有無は不明である。胎土に白色微砂をやや多く含む。619・620も無稜外反高杯で、外面底部から口縁部方向にハケ目調整を施す。620の口縁部は外反するが、619は外方へまっすぐ開く。また、619は内面にススが付着する。621は脚柱部で、外面に縦方向のハケ目調整を施す。内面に絞り痕跡が残り、裾部内面にはユビオサエ痕跡が残る。赤褐色を呈し、白色微砂を多く含む。甕（622～626）はいずれも大型の長胴甕である。622は口縁端部を丸くおさめ、口縁部中位の器壁がやや厚い。口縁部内面に横方向のハケ目調整を施し、体部内面は板ナデを施す。623は口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。内面を斜め方向のヘラケズリで調整し、外面は縦方向と横方向のハケ目調整を施す。胎土に白色砂粒を含み、外面にススが付着する。624～626は外面に縦方向のハケ目調整を施した後、肩部に横方向のハケ目調整を行う。624・626は、口縁端部を内側につまみ出し、上方に面をもつ。625は口頸部がくの字状に屈曲し、口縁部はまっすぐ外方にのびる。口縁端部は外方につまみ出し、上方に面をもつ。内面は624・625が斜めや横方向のヘラケズリを施すのに対し、626はユビオサエが明瞭に残る。626は淡褐色を呈し、白色微砂と金雲母を含む。

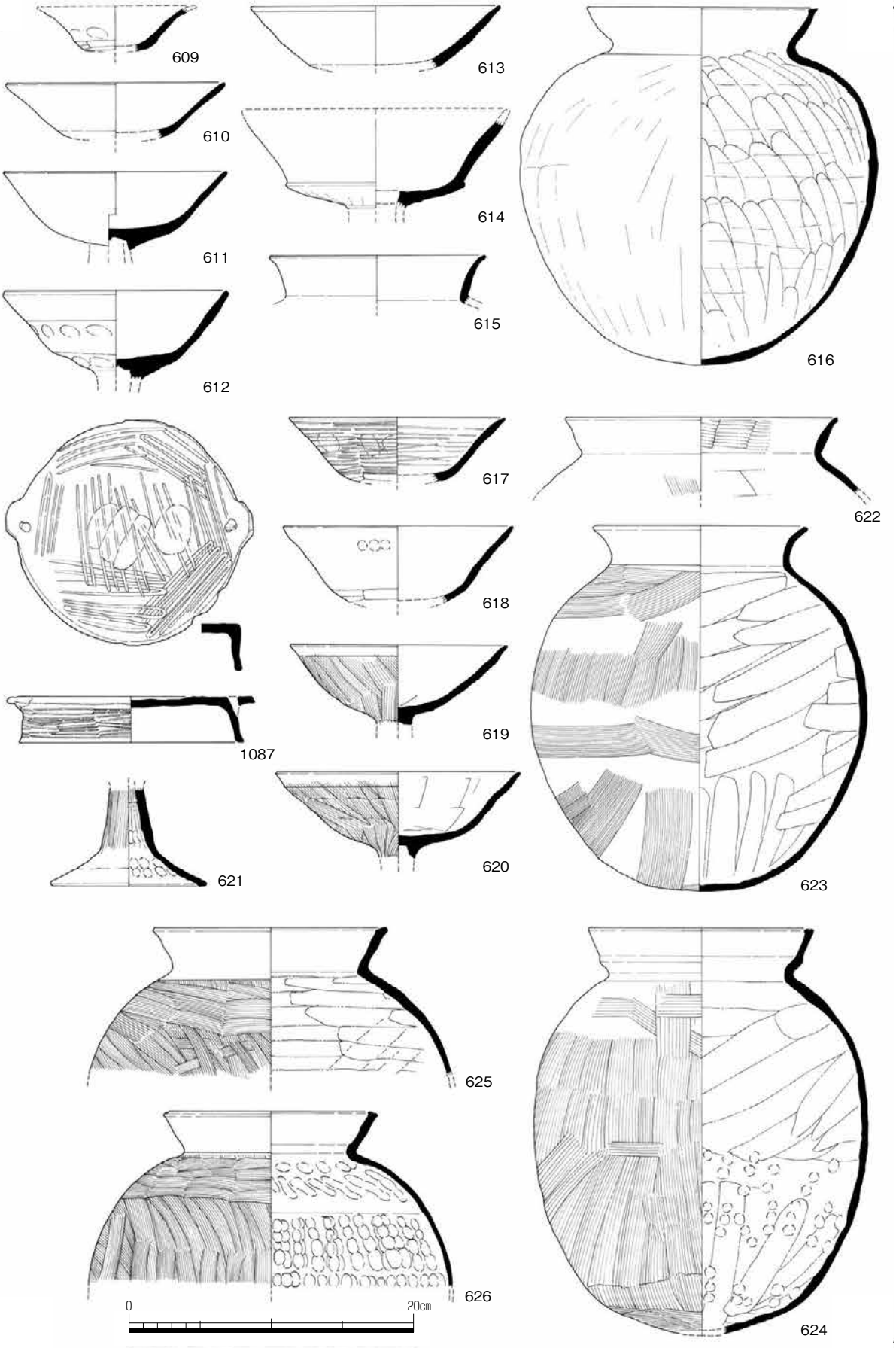


Fig. 140　SI4235・4236出土土器　1:4

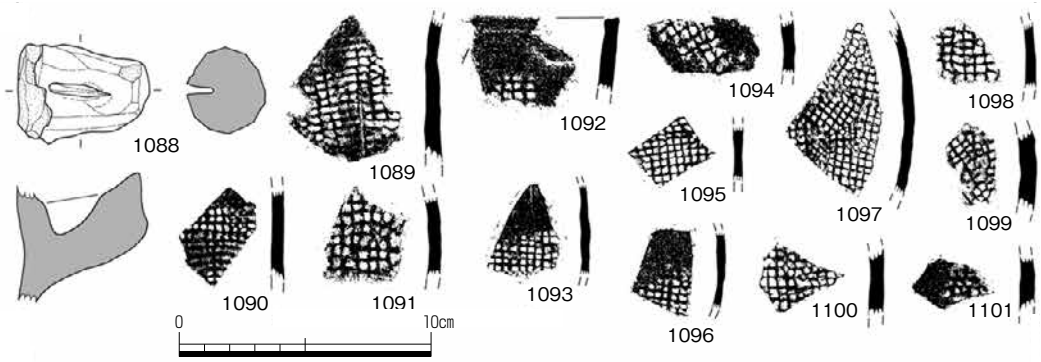


Fig. 141　韓式系土器　1:3

625は赤褐色を呈し、白色微砂を、624は白色砂粒と赤褐色粒子をやや多く含み、金雲母を少量含む。体部下半は器面磨耗が著しく、体部下半にススが付着する。この他、製塩土器と韓式系土器甕片が1点（Fig. 141-1101）出土した。

ⅲ　中世の土器（Pl. 35，Ph. 114）

調査区各地から多量の中世の土器が出土した。多くは井戸や溝などの遺構からの出土で、当地における土器様相を具体的に示す資料である。ここでは、資料的にまとまりのあるSE4790とSJ5029、SJ5007、およびSD4744・4745・4755出土土器について記す。

SE4790出土土器（Pl. 35）　土師器皿・羽釜、瓦器椀、須恵器鉢・甕がある。最下層の曲物内出土の土師器皿（631～634）はいずれも口縁部に沿ってヨコナデを施すもので、全てｅ手法で調整している。胎土はにぶい黄褐色を呈し、口径9㎝前後（631・632）と11㎝前後（633・634）の二群が認められる。石組内からは、瓦器椀（1102～1105）と土師器皿（635～642）、陶器鉢（1060）が出土した。口径9.9～10.5㎝の瓦器椀は川越俊一の分類[9]による第Ⅲ段階Ｅ型式に相当し、内面にのみ粗い渦巻状のミガキを施し、底部には形骸化した高台を付す。土師器皿は胎土がにぶい褐色を呈する一群（635～641）と灰白色を呈する一群（642）に大別でき、前者はさらに口径9㎝弱（635～639）と11㎝前後（640・641）の二法量に分化する。いずれも口縁部に沿ってヨコナデを施しており、調整がｅ手法であることも共通するが、褐色胎土のものと較べて灰白色胎土の642はごく薄手の作りで、京都近郊産と推定される。1060は「山茶碗」と俗称される東海地方産の無釉陶器で、体部外面下半にはヘラケズリを施している。胎土の特徴から尾張産と考えられる。井戸上層からは、瓦器椀（1106・1107）、土師器皿（643～649）・羽釜（650）、須恵器甕（1061）が出土した。瓦器椀は石組内出土品と同様に概ね第Ⅲ段階Ｅ型式の特徴を示すが、口径の復元値が若干大きく、むしろやや古相を呈する。土師器皿は石組内出土品のうち胎土がにぶい褐色を呈する一群との共通性が高く、やはり口径9㎝前後（643～646）と11㎝台（647～649）の二群に法量分化する。1061は胴部を叩き成形する須恵器甕で、外面に格子目叩き、内面には無文の当て具痕跡が認められる。焼成はやや軟質で胎土は灰白色を呈し、亀山焼と目される。土師器羽釜は、菅原正明の土釜分類[10]による大和B1型に相当する。内面口縁部から外面にかけて炭素（煤）の付着が著しい。

曲物内や井戸上層の出土品には、やや古手の遺物が混在しているようにも見受けられるが、石組内出土品は総じて残存状態が良好で、時期的にもまとまりのある遺物群と考えられる。伴

出の京都近郊産土師器皿（642）は、平安京左京六条二坊五町楊梅小路南側溝SD19出土品[11]に似るが、口径がやや小さく若干降る時期のものと考えられる。楊梅小路南側溝SD19は貞和元年（1345）に、勅諚で京都六条堀川に寺地を得た本國寺を建立した際に埋められたと推定され、出土品には14世紀前半の年代観を付与できる。よって、それよりも僅かに新相を示すSE4790出土品は、14世紀でも半ばから後半に差しかかる時期のものと考えられる。

SJ5029出土土器（Pl. 35）　調査区北西部のSB5030の南側柱列中央やや内側に位置する土坑からの出土品。12枚折り重なった状態で出土した土師器皿のうち、6枚を図示した。いずれも口縁部に沿ってヨコナデを施し、調整はｅ手法である。口径は8.6～9.3㎝で、胎土は明赤褐色を呈する。類品が奈良市教育委員会によるHJ第531次調査の土坑SK16から、前述の楊梅小路南側溝SD19出土品よりも僅かに古相を示す京都近郊産土師器皿に伴って出土[12]しており、14世紀前半でも初頭に近い時期のものと考えられる。

SJ5007出土土器（Pl. 35）　中世の土坑SK5004の北肩に位置する小土坑から出土した土師器皿のうち、6枚を図示した。形質的な特徴は全般的にSJ5029出土品と高い共通性を示す一方で、口径が8.6～9.5㎝と僅かに大型で、口縁部にヨコナデを強く施す傾向がある。SJ5029出土品とおよそ同時期と考えられるが、13世紀末頃にまで遡るかもしれない。

SD4744・4745・4755出土土器（Pl. 35）　中世の集落を区画すると考えられる溝からの出土品。これらの溝は一連の遺構であり、出土土器にも高い共通性が認められるため、ここでは一括して記述する。瓦器椀、土師器皿・羽釜、灰釉陶器筒形容器・平椀、青磁椀、瓦質土器羽釜・鉢・甕、焼締陶器甕がある。瓦器椀（1108・1109）は口縁部にのみ炭素を吸着させるもので、内外面ともミガキ調整は認められず、第Ⅳ段階Ｄ・Ｅ型式[13]に相当する。土師器皿（663～688）は、胎土がにぶい褐色から明赤褐色を呈する一群（褐色系：668～677）とやや黄ばんだ灰白色を呈する一群（白色系：678～688）に大別でき、さらに前者は口径7.5㎝前後（663～671）と9㎝台（672～677）の二群に、後者は口径7㎝前後（678・679）、10㎝前後（680～684）、12㎝前後（685）、14㎝台（686～688）の四群に法量分化する。いずれも調整はｅ手法で、口縁部に沿ってヨコナデを施すことも共通するが、白色系の土師器皿には概して幅広のナデを施す。土師器羽釜（689）は胎土に0.5㎜大の砂粒を多く含んでおり、にぶい褐色を呈する。強く内側に折れ曲がる独特な形状の口縁部には内外面ともにヨコナデ調整を施し、胴部内面には成形時の圧痕が明瞭に残る。大和H3型[14]に属するもので、鍔と鍔より下位の胴部外面には二次的な炭素（煤）の付着が認められる。瓦質土器（1110・1111）は胎土に石英とおぼしき0.2～0.5㎜大の砂粒を多く含む。羽釜（1110）は内面をハケ目で調整しており、鍔より下位の胴部外面にはヘラ削りを施す。鉢（1111）は磨耗のため調整手法が明瞭ではないが、口縁部のヨコナデ調整は確認できる。灰釉陶器（1112・1114）はいずれも愛知県の瀬戸窯産と目され、灰白色を呈

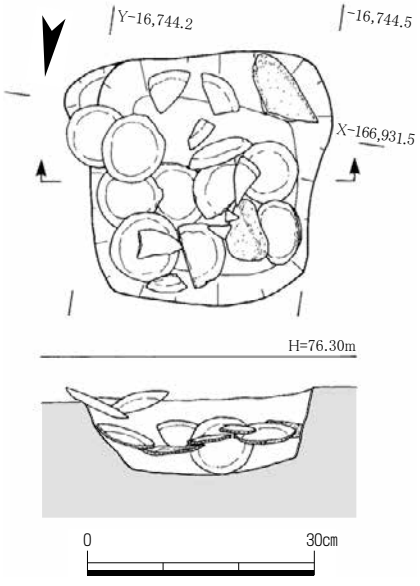


Fig. 142　SJ5007土器出土状況　1:8

する胎土は0.2～0.3㎜大の長石、石英粒を多く含む。筒形容器（1112）は見込みと高台周辺が露胎で、時計回りのロクロで削り出した高台の下端面（畳付）には回転糸切痕が残る。淡緑色の灰釉は二次被熱によって変質（発泡）しており、剥落も著しい。1114は平椀の口縁部片で、やや黄ばんだ淡緑色を呈する灰釉は1112と同様に二次被熱によって変質している。青磁椀（1113）は中国南方系窯の産と考えられるもので、見込みに印花文を施すが、高台を除いて厚くかけられた青磁釉に遮られ、文様は不鮮明である。灰釉陶器と同じく、二次被熱によって口縁部の釉薬が変質し、発泡している。焼締陶器には胎土の特徴から信楽窯産と目されるものと常滑窯産と考えられる甕があるが、後者は細片で量的にも少ない。1115は1㎜大の長石粒を多数含む胎土の特徴から信楽窯産と推定されるもので、器表面はにぶい褐色から橙色、割れ口は明るい灰白色を呈する。内面には、紐輪積成形による粘土紐の接合痕跡が認められる。

この土器群の年代を考える際には、瀬戸窯産の灰釉陶器と青磁椀、土師器羽釜が有力な手がかりとなる。筒形容器（1112）の類品は平安京左京五条三坊九町跡（烏丸綾小路遺跡）土坑130[15]から、灰釉陶器平椀（1114）の類品は史跡・名勝嵐山土坑170[16]から、青磁椀（1113）の類品は平安京左京四条三坊十二町SK769[17]から、いずれも平尾政幸の編年[18]による9Bの土師器皿と共に出土している。史跡・名勝嵐山土坑170出土の土師器皿が文安4年（1447）の天龍寺の火災に伴う廃棄物処理土坑と考えられる[19]ことを勘案するならば、SD4744・4745・4755出土土器には、15世紀半ばを中心とする年代観を与えることが許されよう。この年代観は、古市城跡城山地区から出土した寛正7年・文正元年（1466）の墨書銘を有する土師器羽釜[20]と689との形態的類似性からも裏付けられる[21]。

F　陶硯・特殊土製品

i　陶　硯

硯は定型硯[22]20点、転用硯12点の全32点が出土した。転用硯には2点の朱墨硯を含む。出土位置はSD4130とその周辺の遺構や包含層に偏るが、少量ながらSD4130から離れた地点でも出土する（Fig. 272）。

a　定型硯（Fig. 143・145，Ph. 115・116）

緑釉獣脚硯（Fig. 143）　1は緑釉獣脚硯である。調査区北西のSD4130中層およびSD4130周辺の耕作溝から出土した破片が接合した。硯部は直径18㎝で、外堤径15.6㎝である。硯部はロクロナデ調整により、ほぼ水平の陸部から緩やかに外方へ開きながら厚みのある外縁に至る。硯部外縁の内寄りに外堤部を貼り付け、外傾する断面逆台形の海部をつくる。外堤端部は外傾する平坦面をなす。硯部外縁の上端に稜がつき、側面には文様を施すためにロクロナデ調整を施す。この硯部外側面に型抜きの獣脚を貼り付ける。獣脚の数は5本が残存し、11本に復元できる。獣脚は、半球形の脚頭部と蓮弁文を陽刻した脚裾部からなる。脚頭部は倒卵形を呈し、脚裾部の蓮弁文は、中心のものが先端のやや尖る単弁で、子葉の表現がある。硯部外側面の脚頭部の左右にわずかに平坦面が残り、これは型を押しつけた痕跡と判断される。硯部外縁上端を脚頭部の頂部の目安として粘土を入れた型を硯部に接合し、背面から粘土により補強する。その後、

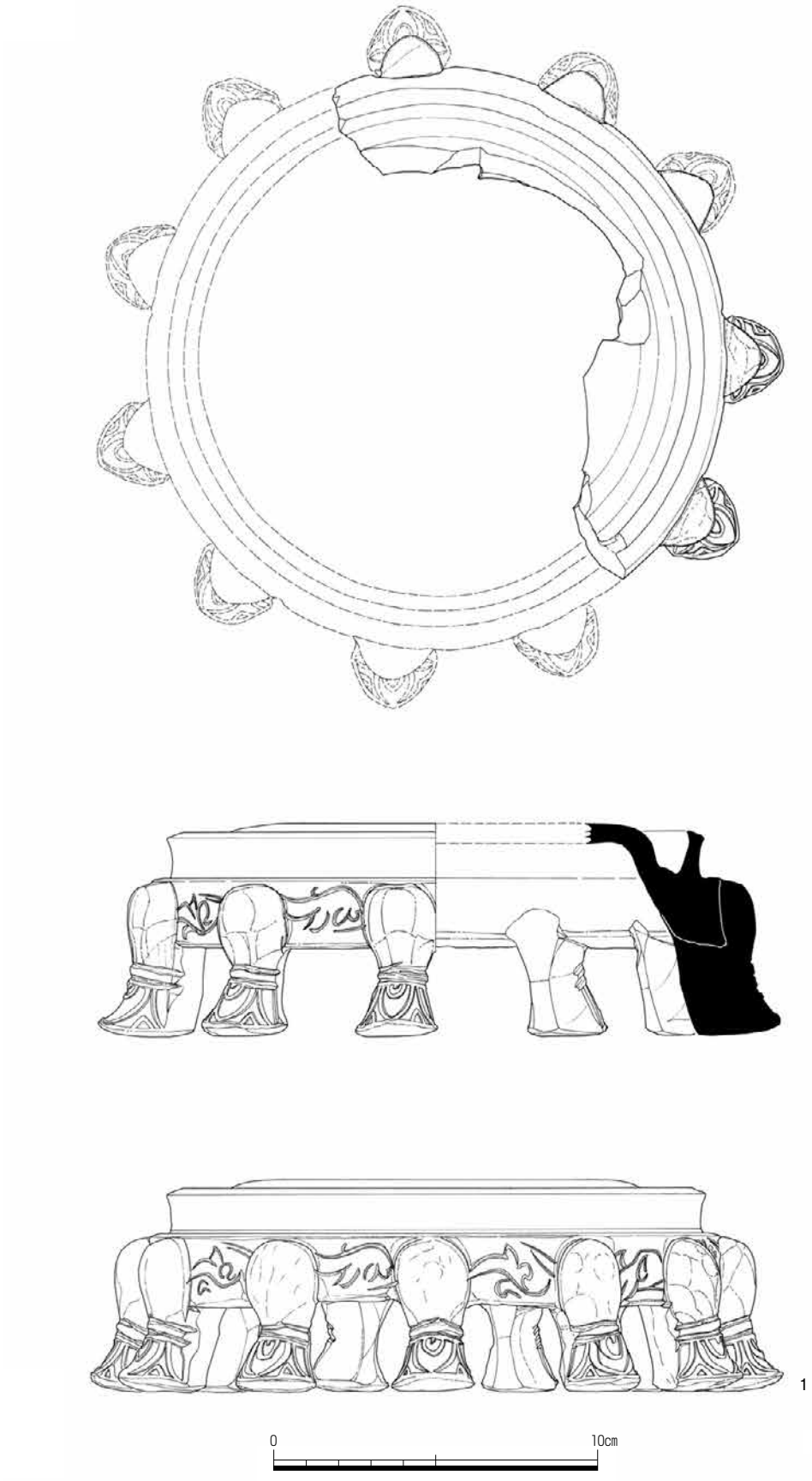


Fig. 143　緑釉獣脚硯　1:2

脚頭部のまわりをヘラで縁取り、背面と側面は上から下方向へのヘラケズリによって面取りを行う。脚端部にも面取りを行う。脚部側面の一部には型と補強粘土との段が残る。この後、獣脚のくびれ部にはヘラ描きで2条の沈線を施す。上の沈線は左右から描き始めており、中央で接する。

硯部外側面には忍冬唐草文をヘラ描きで陰刻する。これは、脚頭部および、その周囲の縁取りの沈線と重複していることから、獣脚を貼り付けた後に描かれたことが分かる。文様は残りの良いA区間（左から脚1・2の間）、B区間（同脚2・3の間）をみると、A区間では唐草の主弁が脚1へ伸び、上方に小さく1本の小弁、下方に3本の小弁を表現し、5葉の唐草が表現されている。B区間では主弁が脚2へ伸び、上方に2本の小弁と下方に1本の小弁を表現し、4葉の唐草となる。また、脚2左の左下に下がる1本の沈線と、脚3左の左上へ上がる2本の平行線は波状の茎を表現しているものと考えられ、この文様は右向きの忍冬唐草文であることが分かる。類例としては法隆寺献納宝物金銅小幡の坪縁を囲む忍冬唐草文[23]（特に第7坪B面部分。Fig. 144）があり、これとの対比から獣脚の脚頭部を結節点の萼に、脚裾部の蓮弁を結節点からのびる蕾に見立てた意匠とする見解がある[24]。

胎土は灰白色を呈し、精良である。緑釉は硯面を含め、全面に施すが、脚端部は露胎である。ただし、脚端部は使用による擦れにより釉が剥落した可能性も残る。釉調は淡い緑色で、一部褐色を呈する箇所もある。全体的に薄く施釉されているが、文様の沈線内の釉溜まりからみて、正置状態で焼成されたことが分かる。硯面および海部底に墨はみられない。実際に硯として使用されたか否かは不明である。

当該硯をめぐっては、その産地について韓半島（百済）に求める説[25]と、国内での生産を求める説[26]がある。同様の獣脚硯は百済を中心に類例が多く、特に扶余扶蘇山城出土緑釉獣脚硯は、形態、釉調、獣脚の蓮弁文様からみて、非常によく似ている。ただし、先行研究にあるとおり、現在までに硯部側面に唐草文様を施す獣脚硯は百済地域でも発見されていない。そもそも韓半

Fig. 144　法隆寺献納宝物金銅小幡と緑釉獣脚硯

島では印花文出現以前の新羅の陶質土器外面に幾何学文を施す例を除き、器物に唐草文などの文様をヘラ描きする例はきわめて少ない。むしろ、この唐草文様のモチーフが藤原宮式軒平瓦6647型式と類似している点もふまえ、百済の緑釉獣脚硯を熟知し、唐草文様の表現にも通じた工人が国内で製作した可能性を考えたい。

蹄脚円面硯（Fig.145）　4点出土した。いずれも脚台部と硯部を別に作る蹄脚円面硯Ａである。2は硯部の下端が残存し、脚柱部は剥離する。外面に1条の凹線を施し、その下に脚柱部を貼り付ける。脚頭部の周囲をヘラ状工具で縁取る。灰白色を呈し、胎土に白色微砂を含む。硯部下端と内面に降灰があり、倒置焼成されたことが分かる。SD4130下層出土。3は外堤部が低く、外面に1条の突帯を巡らせ、その下に脚柱部を貼り付ける。脚柱部は型作りではなく、粘土を貼り付けた後、外面と側面をヘラケズリ、内面をナデ調整により脚頭部、脚柱部を表現する。また、ヘラケズリにより花弁状の透孔を繰り込む。青灰色を呈し、胎土に黒色粒子と白色微砂を含む。SD4130中層出土。

10は脚台部である。二段構成であり、下段は断面が逆台形を呈し、その上に上段の粘土を貼り付ける。上段脚台の内端に脚柱部を貼り付ける。上段は脚柱部右側に斜めに切り込みを入れており、この切り込み部分に剥離痕がみられることから、何らかの装飾を貼り付けていたものとみられる。ただし、脚柱部の左側に切り込みはみられないことから、装飾の間隔は一様ではなかったと考えられる。脚台部の内外側面および脚台下面にヘラケズリ調整を施す。脚柱部は低い三角形を呈し、脚節部を有する。型作り成形であり、両側面にヘラケズリ調整を施し、内面は縦方向のナデ調整を施す。胎土に1～3㎜の白色砂粒を含む。藤原京期（Ⅲ-Ｂ・Ｃ期）の正殿SB5000の北東、NA34地区の包含層出土。11も脚台部である。脚台は断面形が長方形を呈し、脚柱を脚台の中央外寄りに貼り付ける。脚柱は正面観が丸みをもった三角形を呈し、外面は裏側までヘラケズリを施して整形する。脚台は外側面にヘラケズリ、内側面にナデ調整を施す。胎土に白色微砂をやや多く含む。脚台下面に降灰があり、倒置焼成されたことが分かる。SD4130中層出土。

圏足円面硯（Fig.145）　10点が出土した。硯面が残るものは、全て硯面が明瞭に隆起する圏足円面硯Ａである。硯面径や脚台径により、大型品（4・5）、中型品（6～8）、小型品（9）が認められる。4は外堤部と硯面を欠損しており、海部がわずかに残る。体部外面に突帯が巡り、突帯から硯面までの間隔が長い点が特徴である。突帯の側面にロクロナデ調整を施し、下端部はわずかに内側に折り込む。幅4㎝以上の広い透孔を開けるが、間隔や形状は不明である。青灰色を呈し、胎土に1～3㎜の白色砂粒を少量含む。調査区中央西より、NB27地区のⅢ-Ｃ期東西塀SA4731の柱穴から出土した。5はSD4130中層、上層と、SE4770上層から出土した同一個体の破片から図上復元した。陸部はゆるやかに盛り上がり、陸部と海部の境に低い突帯を貼り付ける。外堤部は上方に開き、端部に平坦面をもつ。外面に断面三角形の太い突帯を貼り付ける。脚部はハの字状に開き、端部は丸みをもつ。端部直上に断面蒲鉾形の突帯を貼り付ける。脚部にヘラで切り込みを入れて、楕円形の透孔を開ける。胎土に1～5㎜の白色砂粒を多く含む。6は陸部の中央がやや窪み、海部との境には緩やかな稜がつく。低い外堤部の下に1条の突帯が巡る。幅2～2.7㎝の透孔が7～8箇所開く。硯面は良く擦れている。胎土に白色微砂と2～3㎜の白色砂粒を少量含む。調査区東南部のSD4143西側、BS90地区包含層出土。7は陸部

が平坦で、浅い溝状の海部との境に稜がつく。堤部外面に1条の突帯をもち、外堤部を貼り付ける。硯面は良く擦れている。淡青灰色を呈し、黒色粒子と白色微砂を少量含む。調査区北西部FM97地区包含層出土。23（Ph.116）は小破片のために図示しえないが、外堤部は粘土紐を重ねて器壁を厚くする。外面直下に突帯が巡るが、下部を欠損しており、突帯の数や透孔の形状等は不明である。灰白色を呈し、やや砂粒が目立つ胎土である。SD4130上層出土。

8・9は脚部である。8は外面に1条の沈線を施し、ここを下端として方形の透孔を切り込んでいる。灰白色を呈し、黒色粒子をわずかに含む。調査区中央部、HQ20地区の土坑SK4327周辺の包含層出土。9は小型品の脚部で、脚部外端は接地せず、内端部は内側に肥厚させる。方形の透孔をヘラで切り込むが、透孔の数等は不明である。胎土に黒色粒子を少量含む。SD4130上層出土。

この他、図示はできないが、脚柱部が出土している。脚柱部が幅1.5㎝以下の細いもの（Ph.116-24・25）と2.5㎝前後の太いもの（Ph.116-26）とがある。24はハの字状に広がる脚部で、端部を内側に折り曲げる。外面に2条の沈線を施し、下の沈線を下端として透孔を切り込む。調査区北東部のNM25地区の小土坑出土。25は外面の突帯下部が残り、透孔が突帯直下から切り込んでいることがわかる。下端に沈線が残る。器高の低い小型圏足円面硯であろう。調査区中央部東よりのNA11地区包含層出土。26は透孔をヘラで切り込んだ後、内側、外側に面取りを行う。外面下位に1条の沈線が巡る。内面に降灰がみられることから、倒置焼成したものと考えられる。NG34地区のSK5015下層出土。

風字硯（Fig.145）　1点出土した。12は黒色土器A類の風字硯の硯頭部で、内面を黒色に燻し、ヘラミガキを施す。外面に円形の剥離痕跡があり、脚を貼り付けていたとみられる。胎土に金雲母と白色微砂を含む。奈良時代末以降、平安時代前半の所産であろう。SD4130上層出土。

猿面硯（Fig.145）　4点ある。13は甕の体部下半を利用したもので、頭が尖る隅丸方形の硯面をなす。側面は研磨している。外面に擬格子状の平行叩き目と内面に当て具痕が残る。内面は使用により、当て具痕の凹凸が磨り減っている。調査区東部、HI11地区のSD4130周辺の包含層出土。14は甕の肩部を利用したもので、細かな敲打により円形に成形した後、側面を研磨する。内面は使用により平滑になる。器壁は薄く、外面に平行叩きを施し、内面に無文当て具痕があり、一部はナデ調整により磨り消されている。また、外面には緑色がかった自然釉が降着する。胎土は精良で、白色微砂と黒色粒子をわずかに含む。猿投窯産の甕である。SD4130下層出土。15は14と同様、甕の体部を利用したもので、頭が尖る隅丸方形の硯面をなす。側面は丁寧に調整しており、平滑である。一部に成形した際についた細かい条線がみられる。胎土はやや軟質だが焼成は堅緻で、外面に灰褐色の自然釉が降着する。外面に平行叩きを施す。内面は当て具痕跡がわからないほど磨られている。調査区西部、藤原京期前半（Ⅲ-B期）の東脇殿SB4332付近の、HG32地区の包含層出土。

16は壺の胴部下半で、側面および外面を研磨して成形する。外面には壺を製作した際のロクロケズリ調整が残る。硯面は平滑である。SD4130上層出土。

この他、硯に付属する筆立て（Ph.116-27）が出土した。上端と下端を欠損するが、上部に径8㎜の筆立て穴が開けられており、これは貫通しない。外面は表面と両側面をヘラケズリ調整し、角を面取りする。裏面はナデ調整である。

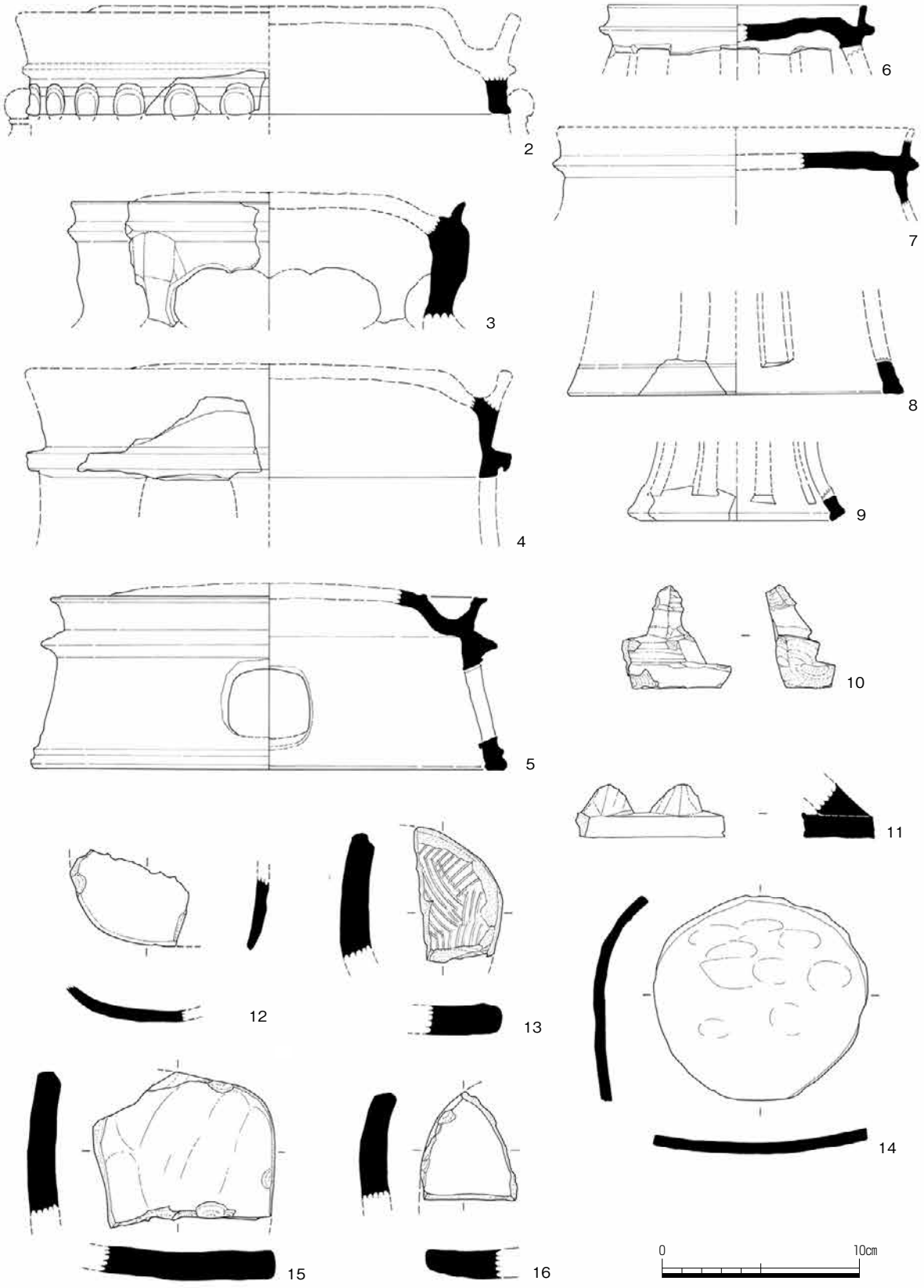


Fig. 145　定型硯　1:3

b　転用硯（Fig. 146，Ph. 116）

転用硯は12点ある。全て須恵器で、器種には杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｂ蓋、壺底部、盤、甕がある。うち２点（19・20）は朱墨が付着する。

杯Ａ（20）はSK4325出土土器の項で報告（Pl. 34-1016）したが、ここで再掲する。直接接合はしないものの、同一個体の底部と口縁部から図上復元した。底部は平底で、口縁部との境に稜をもつ。内面は口縁端部付近まで朱墨が付着し、器面も平滑である。この他、杯ＡはSD4130中層から１点（Ph. 116-30）が出土した。平底の底部で、口縁部との境に稜をもつ。底部外面はロクロケズリ調整を施す。内面に墨が付着し、器面も平滑である。

19は杯Ｂ。底部から丸みをもって口縁部が立ち上がり、断面が三角形に近い低い高台を底部外寄りに貼り付ける。底部外面はヘラ切り後、軽いナデ調整を施す。内面に朱墨が付着する。SD4130中層から出土。

杯Ｂ蓋は、SD4130中層（17・18・28・29）から５点の他、SK4325（Pl. 34-1012）、SB4737から出土した。17は頂部が平坦で、口縁部がゆるやかに降り、端部で屈曲する。かえりはなく、口縁端部を折り曲げる。頂部中心から少しずれた位置にボタン状のつまみを貼り付ける。胎土に１～３㎜の白色砂粒を含む。内面に墨が付着し、器面も平滑である。18は頂部が平坦で、ゆるやかに口縁部が降る。低い擬宝珠状のつまみを貼り付ける。外面は全面に降灰がみられる。胎土に１～５㎜の白色砂粒を含む。内面に墨が付着し、器面も平滑である。つまみと頂部内面の破片（Ph. 125-28）は内面に墨が付着し、器面も平滑である。頂部の破片（Ph. 116-29）は内面に墨が付着し、器面も平滑である。

21は丸底の壺底部を利用したもので、外方へのびる高台をもつ。底部内面に無文当て具痕が残り、叩きによって成形したとみられる。底部外面にロクロナデ調整を施す。高台を外堤部に、

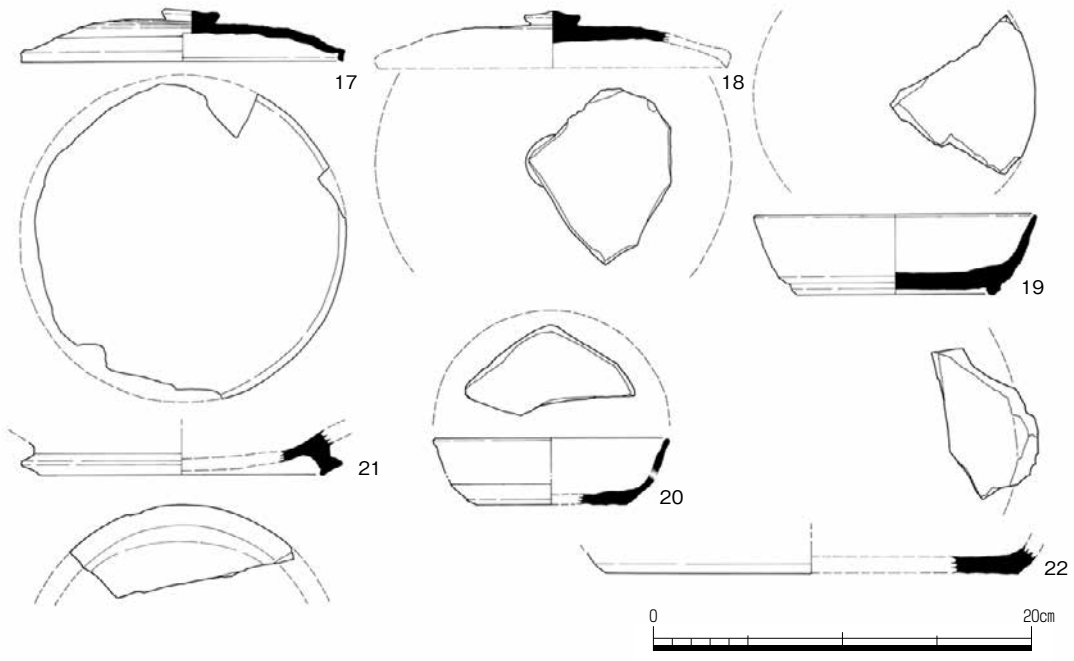


Fig. 146　転用硯　1:4

底部外面を硯面として使用しており、全体に墨が付着する。SD4130中層出土。

22は盤の底部片と考えられる。平底の底部と体部の境に稜をもつ。外面が暗灰色を呈し、内面は淡青灰色である。胎土に白色微砂を含む。内面に墨が付着する。SD4130中層出土。

これらの転用硯は、形態的特徴からみて、藤原宮期を中心としたものであろう。

ⅱ　土　馬（Ph. 117）

土馬は全20点出土した。出土位置は、大半が東西大溝SD4130および周辺の包含層であり、一部は調査地西南の第46次調査区から出土した。出土した土馬は以下のようにⅠ～Ⅲの3型式に分類できる。

Ⅰ型式（Fig. 147）　胴部を棒状粘土でつくり、径2㎝を超える円柱状の脚部を接合する。尻尾は下向きに垂れる。胴部の横断面は円形から長楕円形を呈する。脚部を胴部と接合する際に胴部を少し窪ませ、脚部を差し込んでおり、接合粘土を用いる点が特徴である。小笠原Ｂ型式[27]にあたる。8点が当該型式に属する。

1は脚部と頭部の一部を欠失するが、頭部から尻尾までの形がわかる良好な資料である。棒状粘土で胴部を作り、頭部から胴部にかけてヘラケズリ調整、尻尾にナデ調整を施す。頭部は

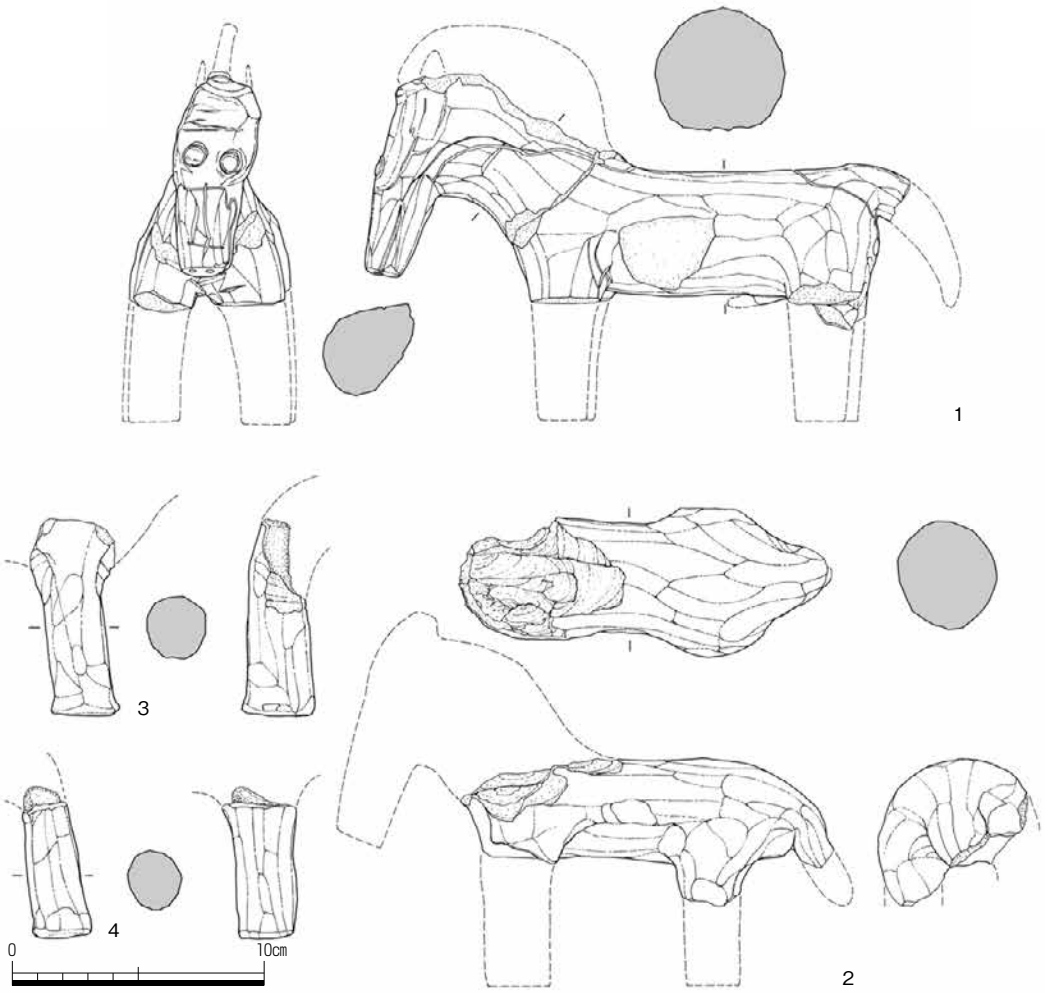


Fig. 147　土馬Ⅰ型式　1:3

顔面が平坦で、目は竹管を押圧して表現する。口の先端部は平坦面をなし、鼻は棒状工具による刺突、口は側面にヘラで切り込みを入れて表現する。たてがみは欠損するが、ナデ調整により粘土を延ばして表現する。その後、耳を粘土で貼り付けるが、剥離しており残存しない。手綱と尻繋をヘラで線刻するが、鞍の表現はない。胴部には生殖器の表現がある。粘土を貼り付けて成形した後に、ヘラで両脇を刺突して整形したものとみられ、胴部にヘラの痕跡が残る。尻尾は下向きに垂れ、肛門を刺突により表現する。褐色を呈し、胎土に1～5㎜の白色砂粒を

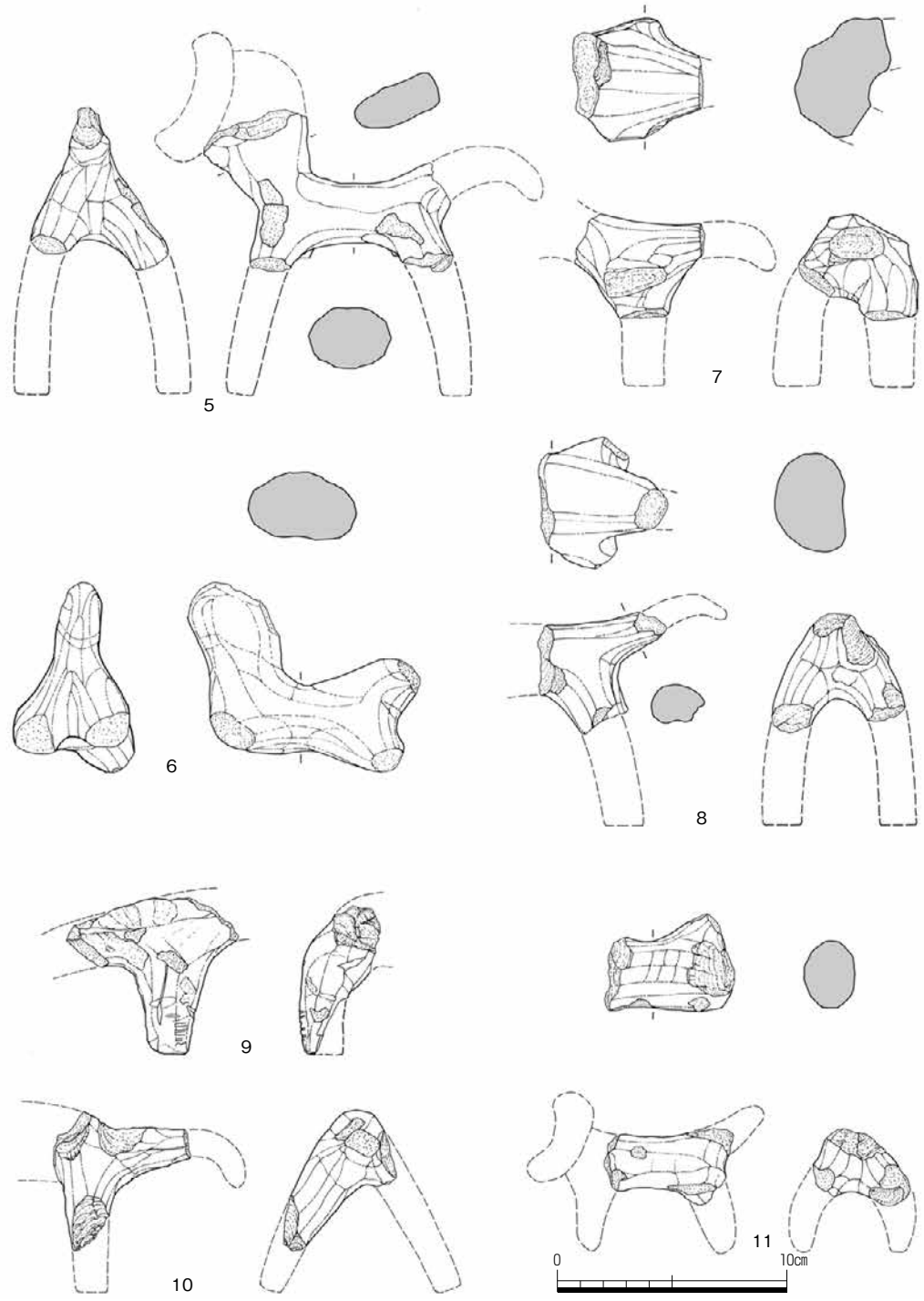


Fig. 148　土馬Ⅱ・Ⅲ型式　1:3

やや多く含む。SD4130中層出土。2は胴部から尻尾にかけて残存する。粘土の剥離痕跡から、胴部に脚部を差し込み、接合粘土を貼り付けていることがわかる。頭部も同様に、胴部に差し込んで成形した可能性がある。また、下向きに垂れる尻尾も棒状の粘土を差し込み、粘土を貼り付けて接合したとみられる。鞍の表現はない。外面にナデ調整を施す。淡褐色を呈し、胎土に白色砂粒と赤褐色粒子を含む。SD4130中層出土。3は左前脚か。粘土を貼り付けて胴部に接合し、上から下へのナデ調整により、脚裾を広げている。NF20地区の包含層出土。4は左後脚である。粘土を貼り付けて胴部に接合し、外面はナデ調整である。SD4130下層出土。

Ⅱ型式（Fig.148）　Ⅰ型式よりも小型になり、正面から見ると脚部と胴部が逆U字状になり、脚部が直線的に開く。胴部の横断面は長楕円形を呈する。尻尾は水平、もしくは上向きに突き上げる。頸部や脚部が短く、脚部は円柱状だが、径1.5cmとやや細くなる。一枚の粘土板を折り曲げて成形した可能性が考えられるが、確実に観察できるものはない。小笠原D形式、巽分類[28]のⅣ型式またはⅤ型式にあたる。9点出土した。

5は頭部上半と脚部を欠失する。頭部に三日月状の粘土を貼り付けていたものとみられ、その粘土を貼り付けた際のナデが残る。外面は全面ナデ調整を施す。尻尾は斜め上方にのびる。灰褐色を呈し、微細な赤褐色粒子を少量含む。SD4130上層出土。6も頭部と脚部を欠失する。尻尾は斜め上方にのびる。表面の磨耗が著しく、破面も丸みをもつ。褐色を呈し、胎土に赤褐色粒子と1～5㎜の白色砂粒を非常に多く含む。HG32地区の包含層出土。7は胴部後半のみ残存する。外面にナデ調整を施し、尻尾は水平にのびる。胎土に1～5㎜の赤褐色粒子を非常に多く含む。NH14地区の包含層出土。8も胴部後半のみ残存する。尻尾は斜め上方にのびる。胎土に赤褐色粒子と1～3㎜の白色砂粒をやや多く含む。SD4130上層出土。9は右後脚と尻尾である。尻尾は水平よりやや下方に垂れてのびる。淡褐色を呈し、胎土に白色微砂と赤褐色粒子を含む。NN23地区の包含層出土。10は左後脚と尻尾である。尻尾は水平に近くのびる。淡褐色を呈し、胎土に白色砂粒と赤褐色粒子を多く含む。SD4130上層出土。

Ⅲ型式（Fig.148）　Ⅱ型式よりもさらに小型化する。脚部が短くなり、先端が細い三日月状を呈する。巽分類のⅥ・Ⅶ型式にあたる。3点出土した。

11は胴部片。斜め上方にのびる尻尾を整形する際のナデが残る。淡褐色を呈し、胎土に白色砂粒と赤褐色粒子を多く含む。表面の磨耗が著しい。SD4130上層出土。

以上の土馬は、Ⅰ型式が藤原宮期、Ⅱ型式が奈良時代中頃～後半、Ⅲ型式が奈良時代末～平安時代初頭に位置づけられる。

ⅲ　小型模造土器（Fig.149）

1はSD4130中層出土の土師器小型模造土器の壺。口縁部の一部を欠くが、それ以外は完存する。体部は円盤閉塞法で成形しており、円盤の痕跡が体部側面にみられ、須恵器横瓶と共通する製作方法をとる。調整は、口縁部をヨコナデするのみである。灰黄色を呈し、胎土に赤色粒子や雲母を含む。

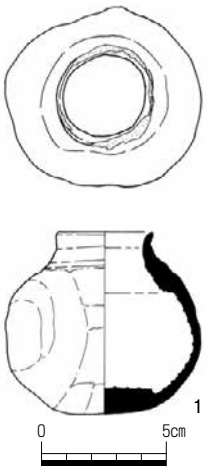


Fig. 149　小型模造土器　1:3

ⅳ　製塩土器（Fig. 150）

製塩土器はSD4130・SE4740からの出土が主体であり、その他の遺構では建物SB5050からの出土が目立つ程度である。古墳時代竪穴建物から出土したものは、個別に記述を行った。

古代に属する遺構から出土した製塩土器は、形態から筒形タイプと砲弾形タイプに分類できる。これらは製作技法や器壁の厚さ、胎土からさらに細分される。

筒形タイプはヨコナデで整形するが、内面にヨコナデをした際の段が明瞭につくものとつかないものがある。また器壁が厚いタイプと薄いタイプに分かれる。また、胎土にも混和剤として、丸みをもち、大きさが揃った砂粒を含むもの、大小の砂粒が混在し赤褐色粒子や針状の白色物質を含むもの、砂粒を全く含まないものがある。砲弾形タイプは底部に向かってすぼまる形態である。粘土紐を積み上げて成形し、ナデ調整を施す。厚いタイプと薄いタイプがあるが、厚いものが多い。

1～7は筒形タイプである。1は口縁部内面にやや幅の広いヨコナデ調整を施す。口縁端部上面に外傾する面をもち、沈線状の段がつく。胎土に1～4㎜の砂粒を多く含む。SE4740出土。2は口縁端部をわずかに内側に折り曲げる。焼成が堅緻で淡灰色を呈する。胎土に1～2㎜の白色微砂と黒色粒子を含む。SD4130中層出土。3は口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。胎土に白色微砂を少量含む。SD4130上層出土。4は口縁端部に強いヨコナデ調整を施し、内面に段がつく。器壁が薄く、精良な胎土で、砂粒をあまり含まない。SD4130中層出土。5は復元口径13.6㎝の大型品。口縁端部上面に平坦面をもつ。内面にヨコナデ調整による右上がりの凹凸が明瞭に残る。胎土に1～3㎜の丸みを帯びた砂粒を含む。SD4130中層出土。6は口縁部内面にやや幅の広いヨコナデ調整を施す。黄褐色を呈し、胎土に1～3㎜の円形砂粒と赤褐色粒を含む。SD4130上層出土。7は口縁端部内面まで強いヨコナデ調整を施す。器壁が厚く、胎土に1～4㎜の砂粒を多く含む。SD4130上層出土。

8・9は砲弾形タイプである。8は丸みをもって体部が立ち上がる形態である。口縁端部はわずかに内側に折り曲げる。口縁部内面に幅広くヨコナデ調整を施し、下位には右上がりの斜め方向のナデ調整を施す。外面に幅2.8㎝ほどの粘土紐積み上げ痕跡が明瞭に残る。胎土に1～3㎜の白色砂粒をやや多く含む。SD4130上層出土。9は直線的に体部が開く形態である。内面にやや幅の広いナデ調整を施す。胎土に1～3㎜の丸みを帯びた砂粒を多く含む。SD4130上層出土。

SD4130からは、口縁部が残存する破片数で集計すると、計193点の製塩土器が出土した。そ

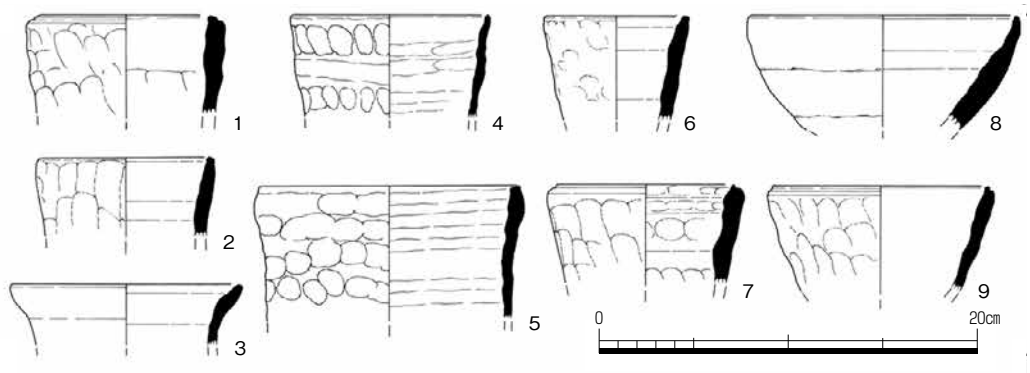


Fig. 150　製塩土器　1:4

の内訳をみると、筒形タイプが146点、砲弾形タイプが37点、不明が10点であった。層ごとの分布では、上層が121点（筒形91点、砲弾形25点、不明5点）、中層が69点（筒形53点、砲弾形12点、不明4点）、下層が3点（筒形2点、不明1点）である。口縁部が残存しない体部片をみても、同様の傾向を示し、上層と中層からの出土が大半で、筒形タイプが全体の8割を占める。

SE4740では、埋土全体から61点の製塩土器が出土した。筒形タイプが53点で、砲弾形タイプが8点である。

G　墨書・刻書土器

左京六条三坊の調査では、134点の墨書土器と3点の刻書土器、1点の刻印土器が出土した。出土遺構別にみると、墨書土器はSD4130から98点、SE4740から31点、SE5950から2点、SB5020から1点、SD4745から1点、その他遺構から1点となり、全体の95％以上がSD4130とSE4740からの出土である。器種の割合をみると、土師器では115点のうち114点が杯、皿、椀の食器で、特に椀Cが53点と多い。須恵器は19点で、うち18点が杯皿類である。墨書の記載内容は、「香山」や「香」「山」を含むものが突出して多く、22点を数える。次いで「大」を含む資料が4点、「宅」「佐」を含む資料がそれぞれ3点、「飛」「福」を含む資料がそれぞれ2点ある。また「｜」のみを記す資料は9点ある。SE4740出土品には完形のものが多く、18点が完形またはほぼ完形である。刻書土器はSD4130から2点、SD4311から1点出土し、刻印土器はSD4130から出土した。これらは別表8に一覧を示したので、参照されたい。

以下、遺構ごとにまず墨書土器、次いで刻書土器について記述するが、文字が判読できたものを中心に報告し、墨痕や筆慣らしの類については基本的に言及しない。

i　墨書土器

a　SD4130出土墨書土器（Pl. 36～41，Ph. 118～120）

下層出土墨書土器　1は土師器杯類[29]の底部。外面はケズリ調整で、「□〔佐ヵ〕」と墨書する。内面には一段暗文を施す。

中層出土墨書土器　2・3は土師器杯B蓋で、頂部外面に墨書する。2は「福」、3は「□〔福ヵ〕」。両者とも、縁部と頂部それぞれにヘラミガキを四分割で施す。2の内面と、3の内面およびつまみ上部に螺旋暗文がある。4～6は土師器椀C。5は完形、6はほぼ完形である。いずれも口縁部外面に記号とみられる墨書があり、字形は「p」を横にした形に近い。墨書は図の左端から始まり、右端で下へ曲げ、最後は上へはね上げるようにして終わる。3個体とも口縁部内面に斜め方向の工具痕があり、胎土には雲母を多く含む。7は土師器杯Cで、外面に「□也」と墨書する。内面には一段暗文を施す。8～11は土師器杯類底部で、いずれも外面に墨書がみられる。釈文は8が「□宅」、9が「□〔大ヵ〕」もしくは記号で、10が「□〔廿ヵ〕」、11は井桁状の囲いの中央に墨点を打つ。8の内面には螺旋暗文がみられ、10・11は外面にヘラケズリを施す。12は土師器椀C、13は土師器杯類底部で、ともに外面に「佐」と墨書する。12の内面には斜め方向の工具痕が残る。13の内面には螺旋暗文がみられ、外面はケズリ調整である。

14～19は「香山」に関係するものである。14は土師器杯A。口縁端部が外方に屈曲し、内面

には弱い凹線が1条巡る。底部外面に「□〔香ヵ〕山」の墨書がある。15は土師器椀Cで、口縁端部は丸くおさめる。底部外面に「香山」の墨書を記す。外面に粘土の接合痕が残り、胎土には雲母を含む。16は須恵器杯B。底部外面に「香山」と書く。底部外面はヘラ切り不調整。17は須恵器杯類の底部で、外面に「□〔香ヵ〕□」の墨書がある。18・19は土師器杯類底部で、外面に墨書する。18は「□〔香ヵ〕」、19は「□山」。18は内面に一段暗文と螺旋暗文を施し、胎土には雲母を多く含む。19の胎土には赤色粒子が目立つ。

20は土師器杯A。底部外面に「大□〔山ヵ〕」と墨書する。b0手法で調整し、内面に粗い一段暗文と螺旋暗文をもつ。底部内面には刀子状利器による細い線刻が数条みられる。平城宮土器Ⅲ新段階の年代が与えられる。

21は土師器ⅢA。底部外面に「部」の墨書がある。a0手法で調整し、内面に一段暗文と螺旋暗文を施す。胎土に雲母を多く含む。22は土師器杯C。底部外面に「□□町」と書く。b1手法で調整し、内面に一段暗文と螺旋暗文を施す。胎土に1～2㎜の大きめの赤色粒子を含む。23は須恵器杯B。底部外面に「多母□」と墨書する。人名または地名と考えられる。底部外面はヘラ切り不調整。24・25は土師器椀C。ともに底部外面に「飛」の一字を書き、内面に斜め方向の工具痕が残る。24の胎土には雲母と砂粒を多く含む。

26～31は土師器椀C。26は底部外面に「□□〔山部ヵ〕□」と墨書する。27～31はいずれも底部外面に一本線を記すが、30の線は途中で一度屈曲させ、末端を払う。30の内面には斜め右上がりの工具痕が深く残る。27は口縁部の残存率が低いため、口径は多少変わる可能性もある。

39は土師器ⅢA。底部外面に墨線がみられる。a0手法で調整し、内面には一段暗文と螺旋暗文を施す。

上層出土墨書土器（Pl.40・41，Ph.120）　32～36は、「香山」関係の墨書土器である。32は土師器杯B蓋。つまみ上面に「香」の一字がみられる。外面には丁寧にヘラミガキを施す。内面に暗文はみられない。33は須恵器杯B。底部外面に「香山」と記す。34は土師器椀A。底部外面に「香□」と墨書する。外面全面に密なヘラミガキを施す。35は土師器杯類底部で、外面に「□〔香ヵ〕□」と墨書する。36は須恵器杯A底部。外面に「□〔香ヵ〕」の墨書がみられる。底部外面はヘラ切り不調整である。

37は土師器椀Cの底部と考えられる。外面に「大」と記す。38は須恵器壺の底部。底部外面に「荒田大年」と墨書がある。人名と考えられる。底部外面には布目の圧痕がよく残る。

40は土師器椀C。中層出土の27～31と同様に、底部外面に一本線を記す。口縁部内面には、斜め右上がりの工具痕が一定間隔で並ぶ。胎土に1～2㎜ほどの砂粒が目立つ。

b　SE4740出土墨書土器（Pl.42～46，Ph.121・122）

SE4740の層位は最下層、下層、中層、上層と分けられるが、上層から墨書土器は出土していない。各層のおよその年代は、最下層が飛鳥Ⅴ～平城宮土器Ⅲ頃、下層が平城宮土器Ⅲ～Ⅴ、中層が平城宮土器Ⅴから長岡京期に位置づけられている。また、各層位に帰属させることはできないものの、SE4740周囲では井戸枠内出土土器と強い関連を示す墨書土器が出土しており、ここではそれも含めて報告する。

最下層出土墨書土器　44は土師器椀C。口縁部外面に「井」と記す。胎土には赤色粒子が目立

つ。45は土師器甕の体部と考えられる。外面に「支」と墨書する。内外面ともハケ目調整である。

下層出土墨書土器　46は土師器杯類の底部で、外面に「山」の墨書がある。47はc0手法で調整する土師器皿Aで、底部外面に「安」と墨書する。胎土には雲母を多く含む。48はc3手法で調整する土師器椀Aで、底部外面に「米」と書く。

49～57はいずれも底部外面に「香山」と記す資料である。後に詳述するが、「香山」の字形は全て同筆というわけではなく、いくつかに分類される。49はc0手法で調整する土師器皿A。底部は一方向にヘラケズリを行い、口縁部は5分割でヘラケズリを施す。胎土に雲母を多く含む。50～57は土師器椀C。いずれも完形あるいはほぼ完形である。8点とも「香山」と墨書する点は共通するが、胎土や色調では、灰白色を呈し、胎土に赤色粒子を含むもの（50～54・57）、外面が浅黄橙色を呈し、胎土に雲母の目立つもの（55）、外面が灰黄色を呈すもの（56）に分けられる。56は底部内面にハケ目を施し、56以外は口縁部内面に斜め右上がりの工具痕がある。8点とも外面には粘土の接合痕が残る。

中層出土墨書土器　8点あり、いずれも完形あるいはほぼ完形である。58～60は土師器椀C、61は土師器椀A、62は須恵器杯Bで、5点とも底部外面に同様の記号を墨書する。記号は細長い人字形の下に小点を3点あるいは4点入れるもので、これらは後述するように、「香山」の崩れたものとする見解がある。59の底部内面には不定方向のハケ目がみられる。60の底部外面には一方向の軽いヘラケズリがみられ、口縁部内面には斜め方向の工具痕が残る。61はe手法で調整し、底部外面に粗いヘラミガキを施す。外面には粘土の接合痕が明瞭に残る。62は高台の位置が底部外周縁に寄る。

63はc0手法で調整する土師器杯A、64は土師器椀Cである。ともに「宅」の一字を記すが、字形は明らかに異なり、別筆である。63は胎土に赤色粒子と雲母を多く含み、64は胎土に雲母を多く含む。65は土師器皿A。底部外面に「□〔人ヵ〕」と墨書する。e手法で調整し、胎土に赤色粒子と多くの雲母を含む。

SE4740周囲出土墨書土器　66は土師器杯B蓋。つまみ上面に「香山」と墨書する。外面全体に密なヘラミガキを施す。67・68は土師器椀Cで、ともに底部外面に墨書がみられる。67は「□〔刀ヵ〕」、68は「下□」と記す。68は底部内面にハケ目を施す。

c　その他の遺構出土墨書土器（Ph. 120）

上記SD4130・SE4740以外の遺構から出土した墨書土器については、既に各遺構の項で報告しているが、ここではそれを再掲する。

第53次調査中区で検出した、藤原京造営期（Ⅲ-A期）の素掘りの井戸SE5950からは、底部外面に「□記」の墨書がある土師器杯AⅢ（Pl. 33-455）が出土した。内面の二段暗文は、上段の暗文帯幅が狭く、放射暗文の傾きが大きい。第50次調査西区で検出した、藤原京A期の総柱南北棟建物SB5020出土の土師器杯A（Fig. 135-545）は、底部外面に「部女」の墨書がある。「部女」は人名と考えられる。

ⅱ　刻書・刻印土器（Pl. 32・41，Ph. 123～126）

ここではヘラで記した文字のみられる資料、および刻印のある資料について述べる。刻書土

器のうち、明らかに記号と判断されるものについては各遺構出土土器の項で記載している。なお、記号の詳細についてはPh. 123～126で示した。

文字を刻書あるいは刻印した土器は、4点出土した。41はSD4130下層出土の土師器杯Cで、底部内面に焼成後の「天」のヘラ書きがある。a0手法で調整し、内面には一段暗文を施す。42はSD4130中層出土の須恵器底部で、器壁がやや厚く、大型の杯皿類の可能性がある。外面に焼成前に「馬」とヘラ書きし、内面には刀子状利器による細い線刻が3条確認できる。外面はロクロケズリ調整である。六条条間路南側溝SD4311出土の須恵器壺C（Pl. 32-971）は、肩部外面に「惣」の一文字を記す。また「惣」の左上と左下に、それぞれ縦方向の細い線刻が数条みられる。器形や胎土から東海地方産と考えられる。

43は刻印土器で、SD4130上層出土の須恵器杯B蓋である。頂部外面に「美」の一字が残り、「美濃」あるいは「美濃国」の刻印を押捺していたことがわかる。頂部外面に1条の凹線が巡ることや、砂粒が少なく灰白色を呈する胎土なども、美濃国産須恵器の特徴を示す。奈良時代前半のものであろう。

H　墨書土器「香山」とその字形

墨書土器「香山」　本書が対象とする藤原京左京六条三坊では、第47・50次調査において、134点の墨書土器が出土した。このうち、「香山」と記した墨書土器は、その一部と推定するものも含み22点認められ、東西大溝SD4130と井戸SE4740の2つの遺構から出土している。墨書土器「香山」は、天平2年度（730）大倭国正税帳（正倉院文書正朱一〇、『大日本古文書一』396～413頁）にみえる「香山正倉」との関係が推測されるなど、当該遺跡の性格を考える重要な手がかりとして注目されてきた[30]。本書の報告にあたり、墨書土器をあらためて釈読（釈文などはTab. 4に掲載。）したところ、墨書土器「香山」は、その字形からいくつかのグループに分類することができた。以下、その知見を示し、後に論じられる考察の手がかりとして提示したい。

「香山」の字形　管見の限り、「香山」墨書土器の字形は、少なくとも3つに分類される。その分類は、Fig. 151に示した通りである。分類の基準と特徴は、以下の通りである。

分類A（Fig. 152-1～6）「香」字の禾の部分の払いが大きく伸びる点が指標で、いずれも流暢な筆致と言える。左の払いに比して右払いがとりわけ長く伸びる点が特徴である。日の部分は省画が顕著で、「香」字の日の最終画は省略され、3画目[31]の横棒がそのまま「山」字の1画目へと連続して書かれる。この部分の起筆の画が「了」の1画目のように残るか、点の様に記されるのみで省画が著しいかにより、A1（1・2）とA2（3～5）の2つに細分することができる。6は、日の部分の起筆の画が「了」の1画目の様に残る点でA1に近い字形であるが、禾の部分の払いはさほど伸びない点で分類Aのなかでやや孤立している。

分類B（Fig. 152-7～9）「香」字は比較的整っており、禾の部分、日の部分ともに省画はほとんどない。禾の払いは分類Aほど大きくなく、左右がバランス良く記されている。「山」字の3画目は、末端部分を撥ねるか長く左下に払うなど、強調して書かれる傾向がある。

分類C（Fig. 152-10～12）　分類Bと同じく、「香」字は比較的整っており、日の部分の省画はほとんどない。ただし、「香」字の左右の払いを点のようにうち、左払いを右へ連続させるように撥ね、右で受け止め、日に続くような運筆がみてとれる。この点は、分類Bの特徴をもちつつ、

分類Ａの伸びやかな筆致とは対照的である。なお、分類Ｃの３点について、「山」字に共通する特徴は認めがたい。10は２画目が右に倒れており、３画目は２画目の横画と重なり判別しがたいが、わずかに払っている。11・12は、分類Ｂと同じく、３画目の末端を撥ねるか払う。

分類Ｄ（Fig.152-13～16）　上記のいずれにも分類しがたいものを分類Ｄとして一括した。「香」１文字のみが書かれたものが３点（13～15）、土師器杯蓋のつまみ上面に「香山」と書かれたものが１点（16）ある。13～15の「香」字は、いずれも分類Ｂに近い傾向を示すが、「香山」の２文字ではないため、ここに含めた。

なお、「香山」の可能性があるが、欠損ないし墨痕不鮮明で確定できないものを、分類Ｚ（Fig.152-17～22）として参考までに掲げた。また、Zaとした２点（17・18）は、大きく払われる筆画が、「香」字の禾の部分の払いの一部であるとすれば「香」字と認定できるが、18は小片であり不詳。17は、左払いが非常に大きく、右払いが長く伸びる点に特徴的な分類Ａの特徴とも必ずしも一致しない。19・20は、「香」字について、小断片もしくは墨書が鮮明ではないため、筆画を追えず字形を確定できない。Zy（21・22）は、確実に釈読できる文字は「山」字のみにとどまるか、あるいは「山」の上の文字が不鮮明で「香」と確定できないものである。

分類と出土遺構　以上のように、「香山」の字形は、少なくとも３つに分類することが可能である。それらの特徴は極めて顕著なものといえ、分類Ａ、分類Ｂ、分類Ｃの墨書は異筆であると考えて差し支えないと思われる。細分化したＡ１・Ａ２には別筆とみられるものが存在するものの、同筆か異筆かを確定するには至っていない。以下、「香山」字の分類と出土遺構との関係を整理するが、注目すべきは字形に即した分類が、出土遺構の相違と見事に一致することである。

分類Ａは、全てSE4740下層から出土している。分類Ｃも同様である。これらに属する墨書土器は、分類Ｃの１点が土師器皿Ａである他は、全て土師器椀Ｃである。加えて、完形またはほぼ完形で出土するという点にも共通点が認められる。これに対して分類Ｂは、全てSD4130の上層ないし中層から出土している。個体数が少なく有効な分析には

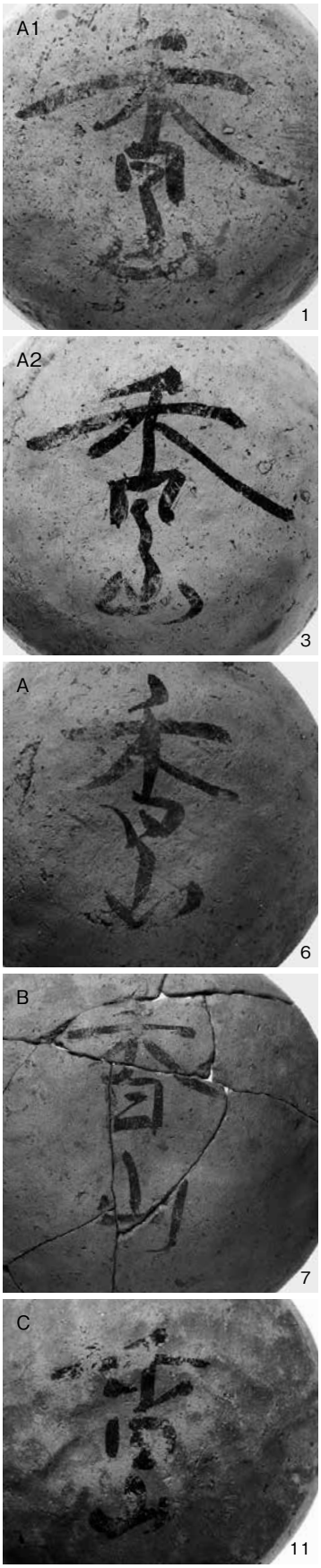


Fig. 151　「香山」の代表例

Fig. 152　「香山」の字形　1：2（13・14のみ1：1）

Tab. 4　墨書土器「香山」等一覧

No.	分　類	PL.	番　号	遺　構	層　位	種　類	器　種	部　位	釈　文	残　存　率
1	A1	43	50	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	完形
2	A1	43	51	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	ほぼ完形
3	A2	43	52	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	完形
4	A2	43	53	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	ほぼ完形
5	A2	44	54	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	完形
6	A	44	55	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	完形
7	B	37	15	SD4130	中層	土師	椀C	底部外面	香山	ほぼ完形
8	B	37	16	SD4130	中層	須恵	杯B	底部外面	香山	ほぼ完形
9	B	40	33	SD4130	上層	須恵	杯B	底部外面	香山	底部のみ
10	C	40	49	SE4740	下層	土師	皿A	底部外面	香山	ほぼ完形
11	C	44	56	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	完形
12	C?	44	57	SE4740	下層	土師	椀C	底部外面	香山	完形
13	D	37	18	SD4130	中層	土師	杯類	底部外面	□〔香ヵ〕	底部片
14	D	40	32	SD4130	上層	土師	杯B蓋	つまみ上面	香	1/3残存
15	D	40	34	SD4130	上層	土師	椀A	底部外面	香□	1/2残存
16	D	46	66	SE4740	周囲	土師	杯B蓋	つまみ上面	香山	1/4残存
17	Za	40	36	SD4130	上層	土師	杯類	底部外面	□〔香ヵ〕□	底部片
18	Za	40	35	SD4130	上層	須恵	杯類	底部外面	□〔香ヵ〕	底部片
19	Z	37	14	SD4130	中層	土師	杯A	底部外面	□〔香ヵ〕山	1/2残存
20	Z	37	17	SD4130	中層	須恵	杯類	底部外面	□〔香ヵ〕□	底部片
21	Zy	37	19	SD4130	中層	土師	杯類	底部外面	□山	底部片
22	Zy	42	46	SE4740	下層	土師	杯類	底部外面	山	体部片
23	K	45	58	SE4740	中層	土師	椀C	底部外面	記号	完形
24	K−	45	59	SE4740	中層	土師	椀C	底部外面	記号	ほぼ完形
25	K	45	60	SE4740	中層	土師	椀C	底部外面	記号	ほぼ完形
26	K	45	61	SE4740	中層	土師	椀A	底部外面	記号	完形
27	K	45	62	SE4740	中層	須恵	杯B	底部外面	記号	ほぼ完形

なりえないが、須恵器杯Bが2点、土師器椀Cが1点と器種にばらつきがみえる他、必ずしも完形で出土している訳ではない。分類Dとして把握した雑多な種類の「香山」墨書土器は、SD4130を主体としつつも、SE4740のいずれからも出土している。ほとんどが断片であり、その多くは器種を特定できない。

ところで、SE4740中層からは、23～27のごとく特徴的な記号を記した墨書土器が5点出土している（分類K）。同じ記号を記したものと推測されるが、やや形の崩れた24はK－とした。現在のところ、SE4740以外の遺構からは出土していない。この記号は、あるいは「香山」の重要な筆画だけを残したものとはみられないであろうか。すなわち、細長い人字形は「香」字の左右の払いに由来し、下部の4つの点は「香」字の日と「山」字の縦棒3画を記号化したものと理解するのである。「香山」から記号への変化がみてとれる可能性は否定できないであろう。

SE4740に廃棄された墨書土器は、分類A、分類C、さらには分類Kなど、特定の字形が集中する傾向が強く、これらがSE4740以外の遺構から出土しない点も注目される。SE4740の遺物は、その廃棄元が限定されていたとみる余地もあろう。同じくSE4740中層から出土した2点の墨書土器「宅」は、この地に何らかの経営拠点が存在したことを物語っている。井戸廃絶期、奈良時代半ば頃の遺跡の性格を示す資料の一つといえる。

小　結　以上、「香山」墨書土器の字形の分類を行い、字形の相違が出土遺構と見事に対応することを示してきた。ここで示した分類が、時期差を伴うものとみられるか、さらなる検討が望まれる。

1）奈文研1987『藤原京右京七条一坊西南坪』。

2）従来大和A型と呼んでいた甕であるが、長岡京、平安京でも同巧の甕がみられ、都城に寄生して製作集団が移動していくことが認識されたため、呼称を変更した（古代の土器研究会1996『古代の土器研究4』）。鍋もこれにしたがう。

3） 高橋透2012「藤原宮東面内濠SD2300出土土器（1）第24次調査から」『奈文研紀要2012』。
4） 奈文研2015『飛鳥池遺跡発掘調査報告』。
5） 従来は杯Ｇなどと呼称していたが、本書では椀Ｃの呼称を用いる（別表2参照）。
6） 当調査部の降幡順子の分析による。
7） 口縁部形態は青平Ⅱ・Ⅲ号窯に類例がある（静岡県湖西市教育委員会1984『青平古窯跡・新古古窯跡発掘調査報告書』）。
8） 辻美紀1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学―大阪大学考古学研究室10周年記念論集―』大阪大学考古学研究室。
9） 川越俊一1983「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』同朋舎出版。
10） 菅原正明1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』同朋舎出版。
11） 上村和直2012「平安京左京六条二坊五町・猪熊殿跡・本國寺跡」『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所。
12） 中島和彦・佐藤亜聖2014『南都出土中近世土器資料集―奈良町高天町遺跡（HJ第559次調査）出土資料―』奈良市教育委員会。
13） 前掲註9に同じ。
14） 前掲註10に同じ。
15） 網伸也・柏田有香2008『京都市埋蔵文化財発掘調査概報2008-10　平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所。
16） 内田好昭2004『京都市埋蔵文化財発掘調査概報2004-7　史跡・名勝嵐山』京都市埋蔵文化財研究所。
17） 平尾政幸ほか2007『京都市埋蔵文化財発掘調査報告2006-25　平安京左京四条三坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所。
18） ａ平尾政幸ほか2003『京都市埋蔵文化財発掘調査概報2003-5　平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所。
ｂ註17に同じ。
19） 尾野善裕2013「京都からみた〈山茶碗〉編年～空白の14・15世紀をめぐって～」『第2回東海土器研究会資料集　渥美窯編年の再構築』東海土器研究会。
20） 森下恵介ほか1981「古市城跡発掘調査報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和55年度』奈良市教育委員会。
21） 瓦器椀については終末を1330年頃とする見解が近年有力視されており（橋本久和2009『中世考古学と地域・流通』真陽社）、いま少し新しく考える意見（註13）の存在を考慮しても、他の土器の年代観との間に著しい不整合があることは否めない。図示しなかった土師器皿の中には時期的に先行する形質的特徴を有するものが一定量含まれており、41・42については古い時期の遺物の混入とみなしてよいと思われる。
22） 定型硯の型式、部位名称については、奈文研2006『平城京出土陶硯集成Ⅰ』（奈文研史料第77冊）に従う。また、猿面硯も定型硯に含めた。
23） 東京国立博物館1992『法隆寺献納宝物特別調査概報ⅩⅡ』。
24） 西口壽生2012「初期施釉陶器の文様と産地」『奈文研紀要2012』。
25） 千田剛道1995「獣脚硯にみる百済・新羅と日本」『文化財論叢Ⅱ』奈文研。
山本孝文2003「百済泗沘期의陶硯」『百済研究』第38輯忠南大学校百済研究所。
白井克也2004「筑紫出土の獣脚硯」『九州考古学』第79号九州考古学会。
26） 巽淳一郎1998「七世紀後葉の海外交渉を物語る焼物」『季刊明日香風』第66号（財）飛鳥保存財団。西口前掲註24。
27） 小笠原好彦1975「土馬考」『物質文化』vol.25物質文化研究会。
28） 小笠原前掲註16、巽淳一郎1984「祭祀用土器・土製品」『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』奈文研。
29） 杯、皿、椀などの食器であるが、器種を確定できないものを杯類と呼ぶこととする。
30） 奈文研1987『藤原概報17』、川越俊一1995「藤原京「香山」墨書土器」（奈文研創立40周年記念論文集刊行会編『文化財論叢Ⅱ』同朋舎出版）など。
31） 何画目という表現は、現行の常用字体の筆順によって示す。以下同じ。

3　木製品

調査区全域から、整理用コンテナで120箱程度の木製品が出土した。大半は東西大溝SD4130および井戸SE4740から出土している。器種は多様で、曲物、刳物、漆器などの容器類、紡錘車、糸巻などの紡織具、横櫛、下駄などの服飾具、琴柱などの遊戯具、人形、馬形、斎串などの祭祀具、刀子柄などの工具や、杭、加工棒がある。この他、井戸枠として使用した曲物が多数出土した。ここでは、器種や形態を確定できた資料を中心に報告する。柄を装着したままの短刀や鎌も出土しているが、それらは金属製品の項で詳述する。また、中世の井戸SE4464・4468などから出土した井戸枠については、溝から出土した木製品とは区別して後述する。以下、木製品の分類は基本的に奈文研1985『木器集成図録 近畿古代編』（奈文研史料第27冊）による。

A　東西大溝SD4130出土木製品

調査区中央を流れる東西大溝SD4130から、多量の木製品が出土した。層位は下層、中層、上層に大別されている。木製品の大半は上層と中層から出土し、とくに中層からの出土が多い。以下、層位ごとに製品を詳述する。

i　中層出土木製品（Fig. 153～167，Ph. 127～137）

曲物底板・蓋（Fig. 153～158-1～23）　円形曲物の底板および蓋である。1は樺皮結合曲物の底

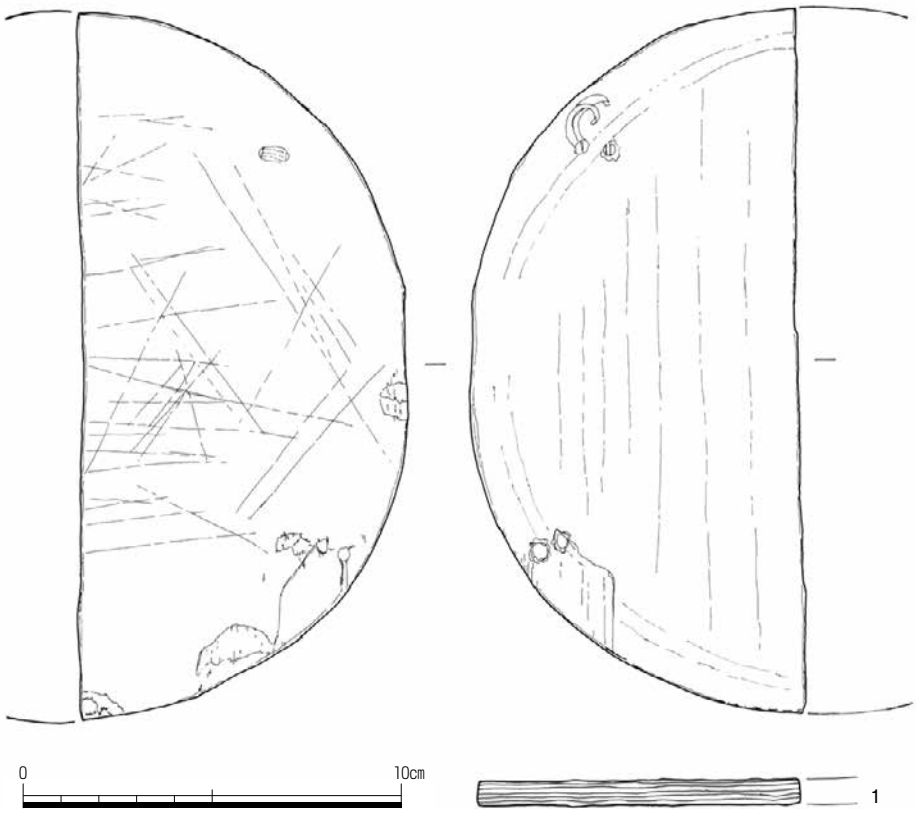


Fig. 153　SD4130中層出土木製品（1）　1:2

板で、半分程度が残存し、復元径は約19cm。２個１組で開けた穴が２箇所に残存し、そのうち１つには樺皮が残存する。外面にはケビキ、内面には側板のアタリと削りの痕跡が残る。ヒノキ科の板目材。2は樺皮結合曲物の底板小片。内面には側板のアタリがある。穴は１箇所残存し、

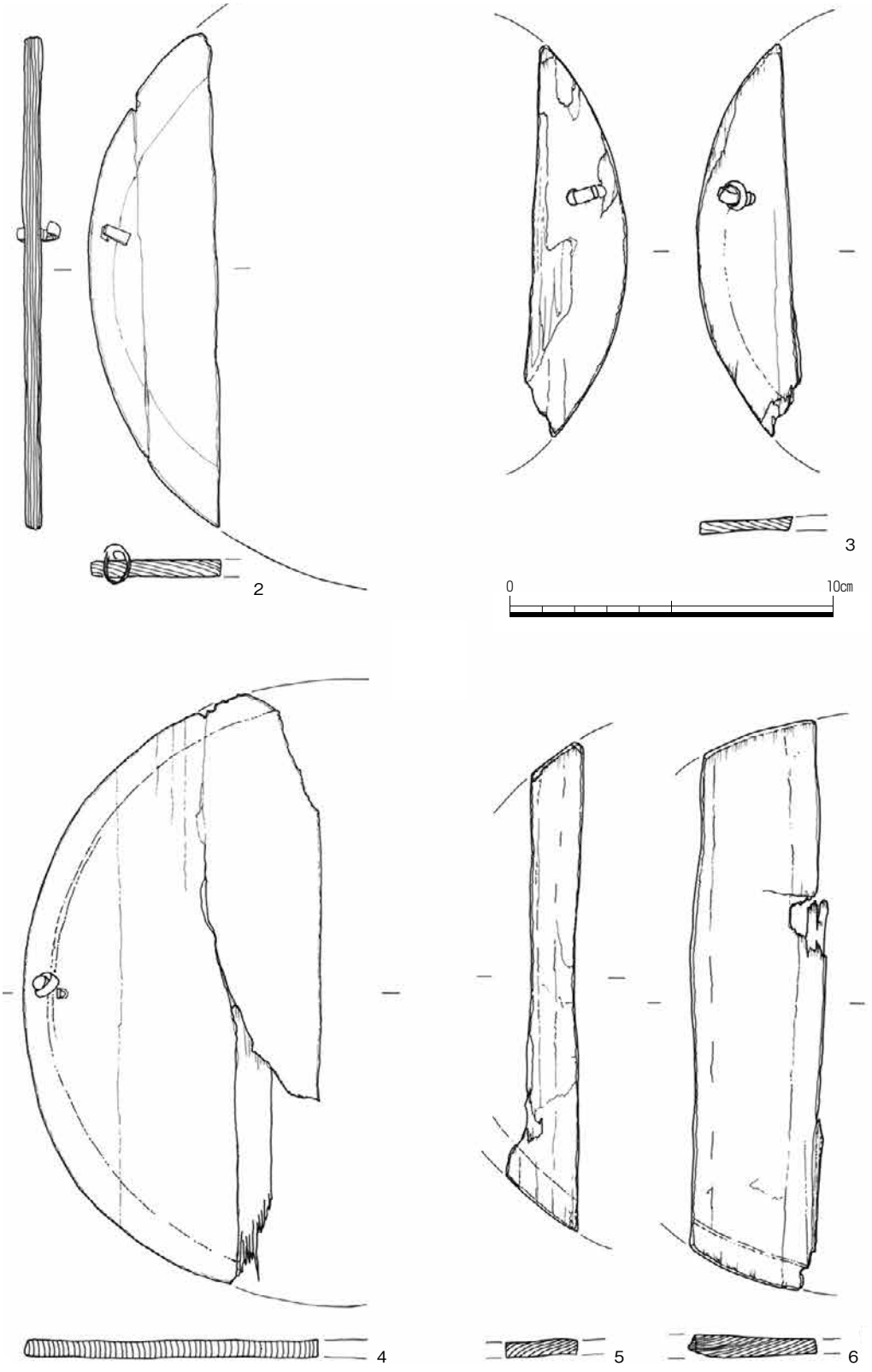


Fig. 154　SD4130中層出土木製品（2）　1:2

そこに樺皮が残る。ヒノキ属の板目材。3は樺皮結合曲物の底板小片。1箇所に穴が残り、樺皮が残存する。ヒノキの板目材。4は樺皮結合曲物の破片。復元径は約19㎝。内面に側板のアタリがある。穴は1箇所残存し、そこに樺皮が残る。ヒノキ属の柾目材。5は曲物底板の小片。内面に側板痕跡が残り、樺皮結合であると判断される。ヒノキの板目材。6は曲物底板の小片。内面に側板のアタリが残る。ヒノキ属の板目材。7は曲物底板の小片。内面に削りの痕跡と側

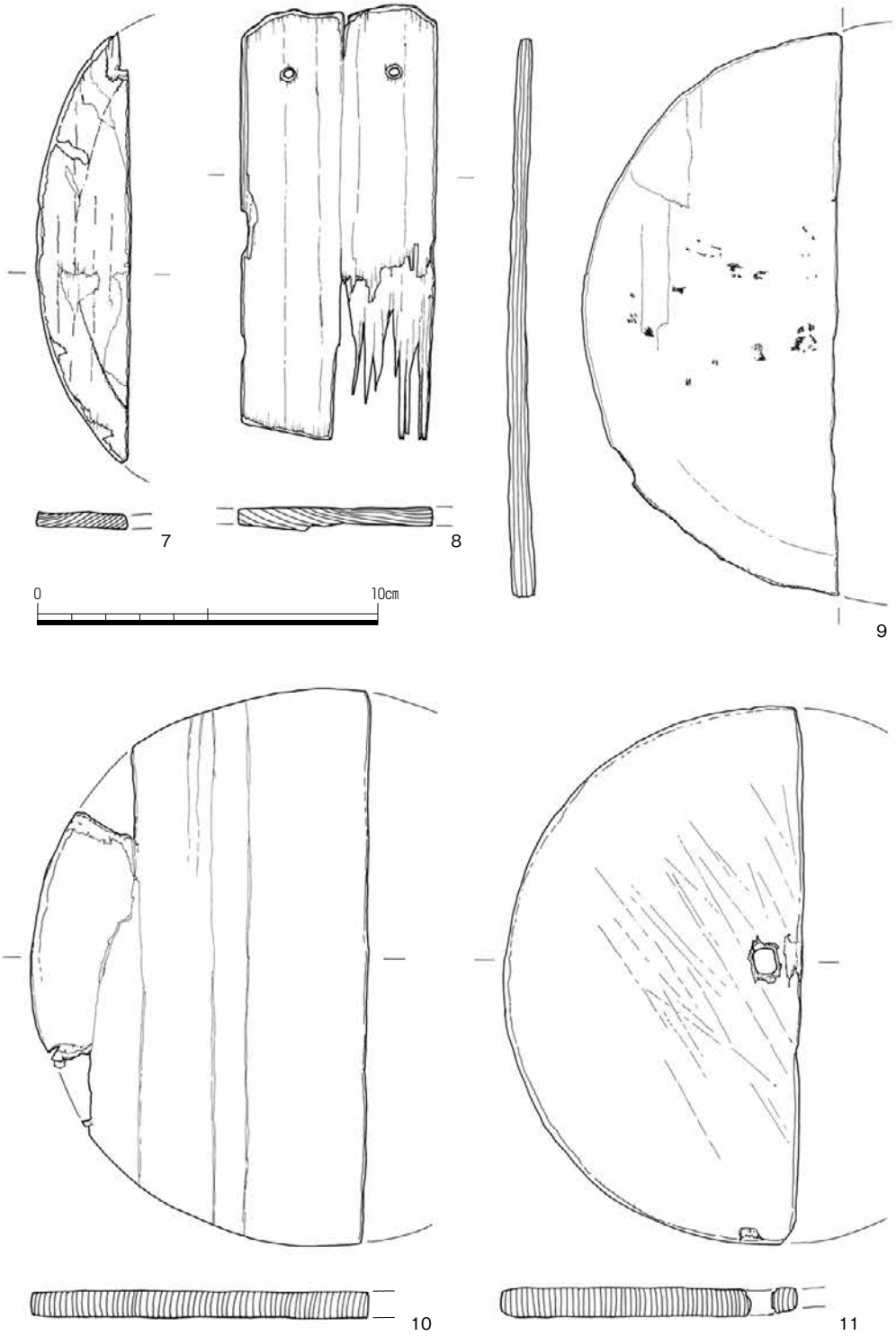


Fig. 155　SD4130中層出土木製品（3）　1:2

板のアタリが残る。ヒノキ属の板目材。8は曲物底板の小片。側板のアタリ等は見られない。2箇所に約3cm間隔で径5㎜の穴をあけるが、反対側の縁部に穿孔はしていない。ヒノキ科の板目材。9は円形曲物の底板で、半分程度が残存し、復元径は16.4cm。側面に釘穴はみあたらず、内面に側板のアタリが残る。内面に黒い付着物がある。ヒノキの板目材。10は円形曲物の底板で、直径は16.4cm。半分強が残存する。側面の釘穴および樺皮の通し穴、側板のアタリがみられず、蓋板である可能性もある。ヒノキ属の柾目材。11は円形曲物の蓋板で、直径15.8cm。中心に径8㎜の穴をあける。把手は残存しない。ヒノキ属の柾目材。12～14は円形曲物の底板小片で、いずれも側面の釘穴、樺皮の通し穴は見られない。12には、側板のアタリがわずかに残る。樹種は12がヒノキ属の柾目材で、13・14はヒノキ科の柾目材。

15は釘結合曲物の底板で、長径17.6cm、短径16.9cmを測り、やや楕円形を呈する。釘穴は1箇所しか確認できないが、周縁の破損部分に他の釘穴があったと考えられる。ヒノキの柾目材。16は釘結合曲物底板の小片。釘穴が1箇所に残る。ヒノキの柾目材。17は釘結合曲物の底板で、一部を欠く。直径17.7cm。側縁に3箇所の釘穴をもつ。ヒノキ属の柾目材。18は釘結合曲物の底板。内面にケビキが残る。側縁に3箇所の釘穴をもつ。ヒノキ属の柾目材。19は釘結合曲物の底板片で、残存長25.0cmにおよぶ大型品である。側縁には5箇所の釘穴をもつ。表面には削りとケビキの痕跡が残る。ヒノキ科の板目材。20は釘結合曲物の底板片。約半分が残存し、直径は15.9cm。側面に2箇所の釘穴をもつ。ヒノキ属の柾目材。21は釘結合曲物の底板片。側縁に2箇所の釘穴をもつ。表面にケビキが見られる。ヒノキ属の柾目材。22・23は釘結合曲物の底板小片。どちらも1箇所の釘穴をもつ。22はヒノキ科の柾目材、23はヒノキの柾目材。

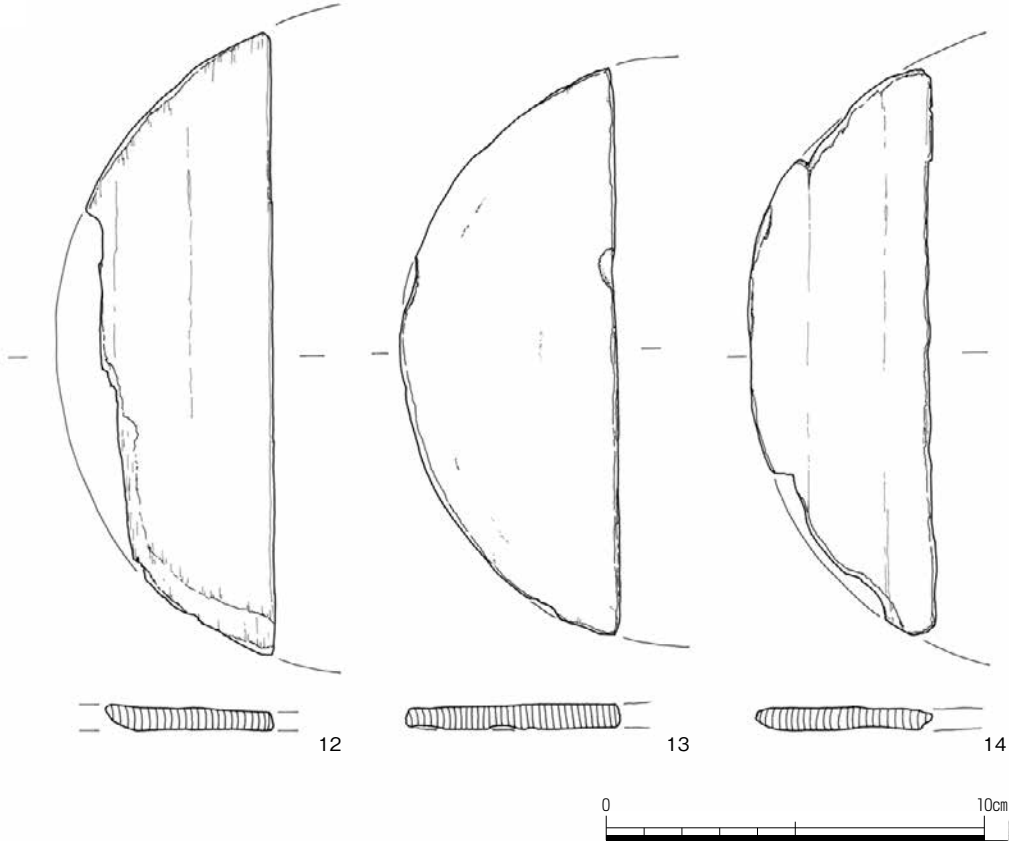


Fig. 156　SD4130中層出土木製品（4）　1:2

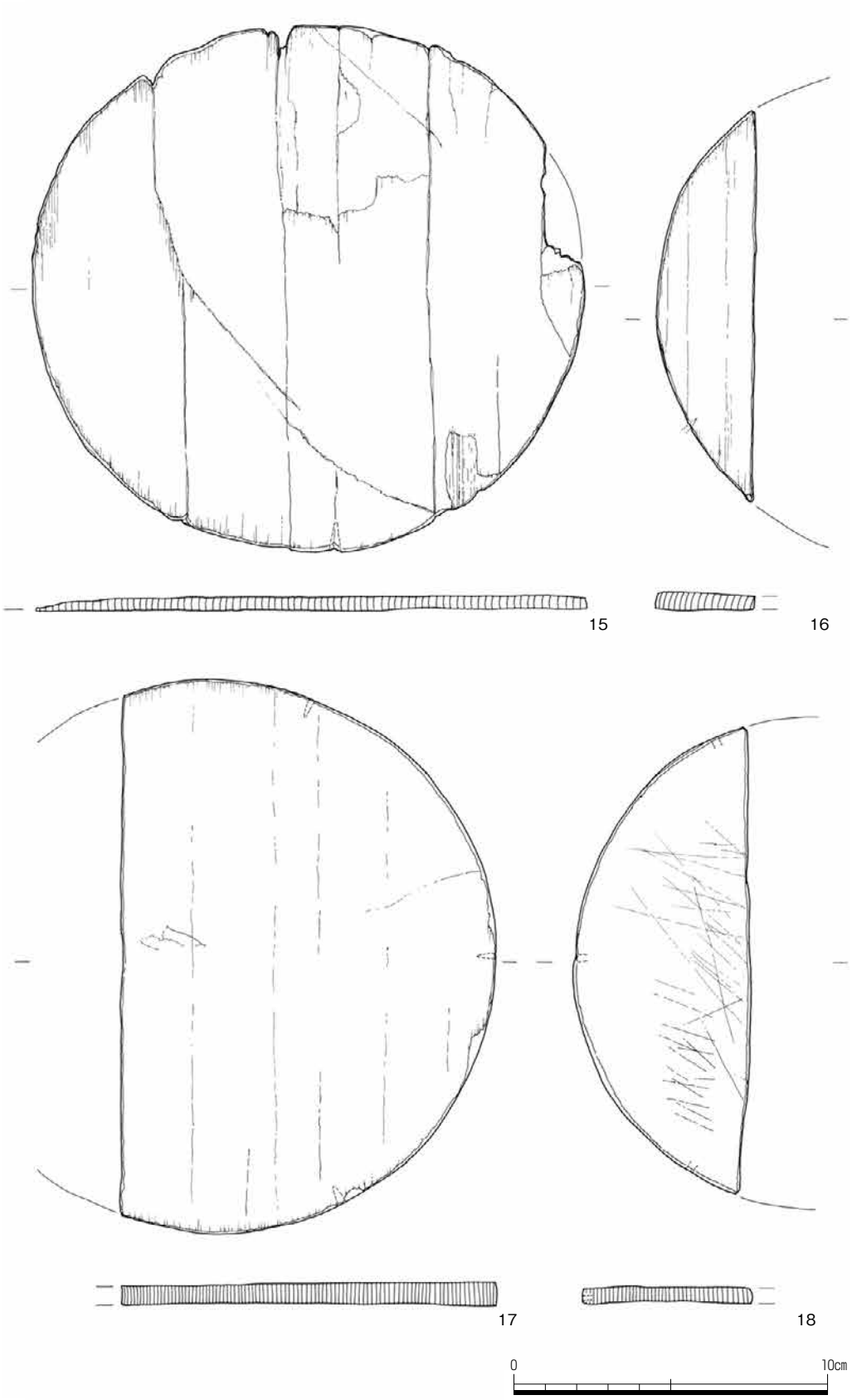


Fig. 157　SD4130中層出土木製品（5）　1:2

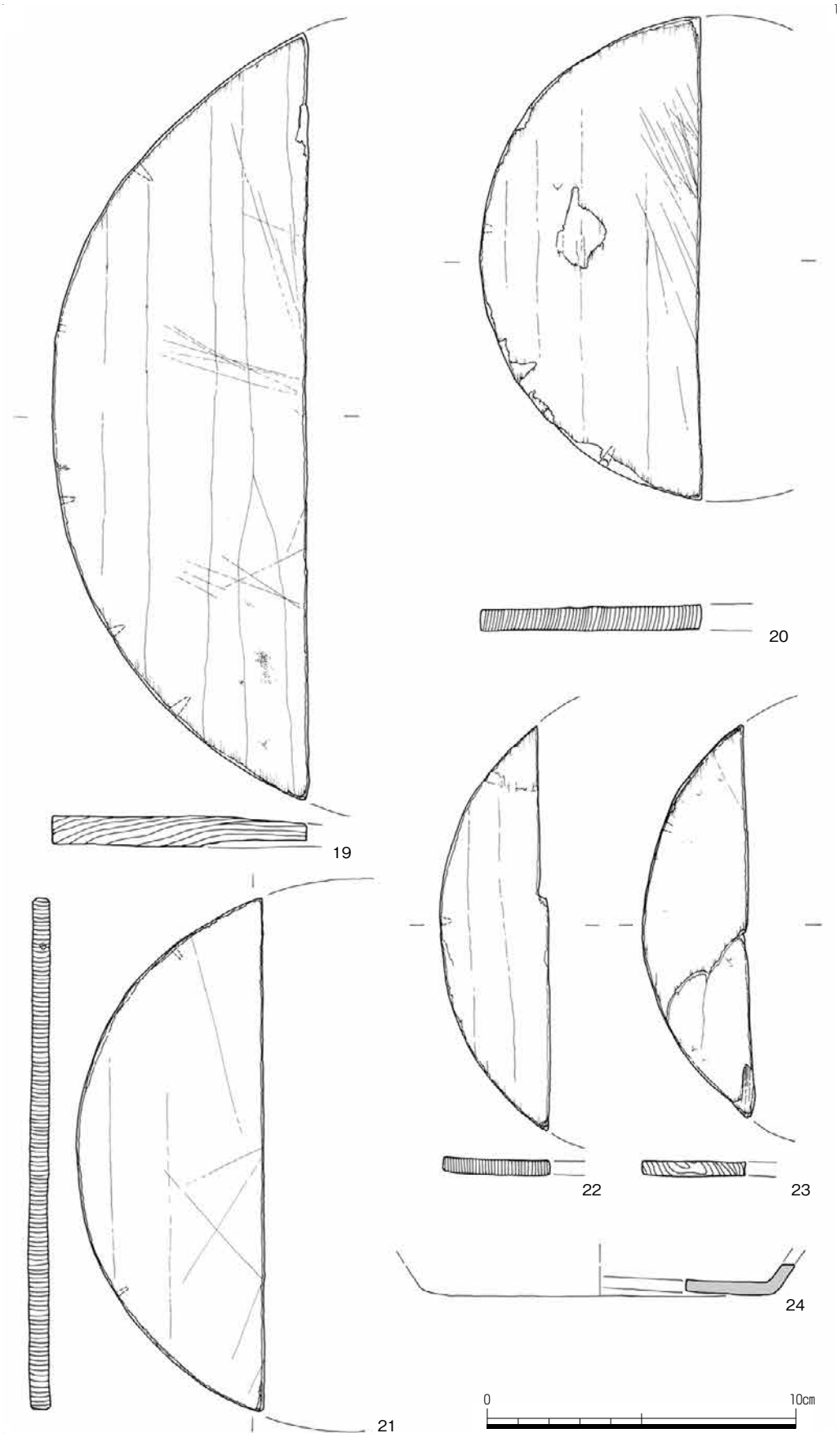


Fig. 158　SD4130中層出土木製品（6）　1:2

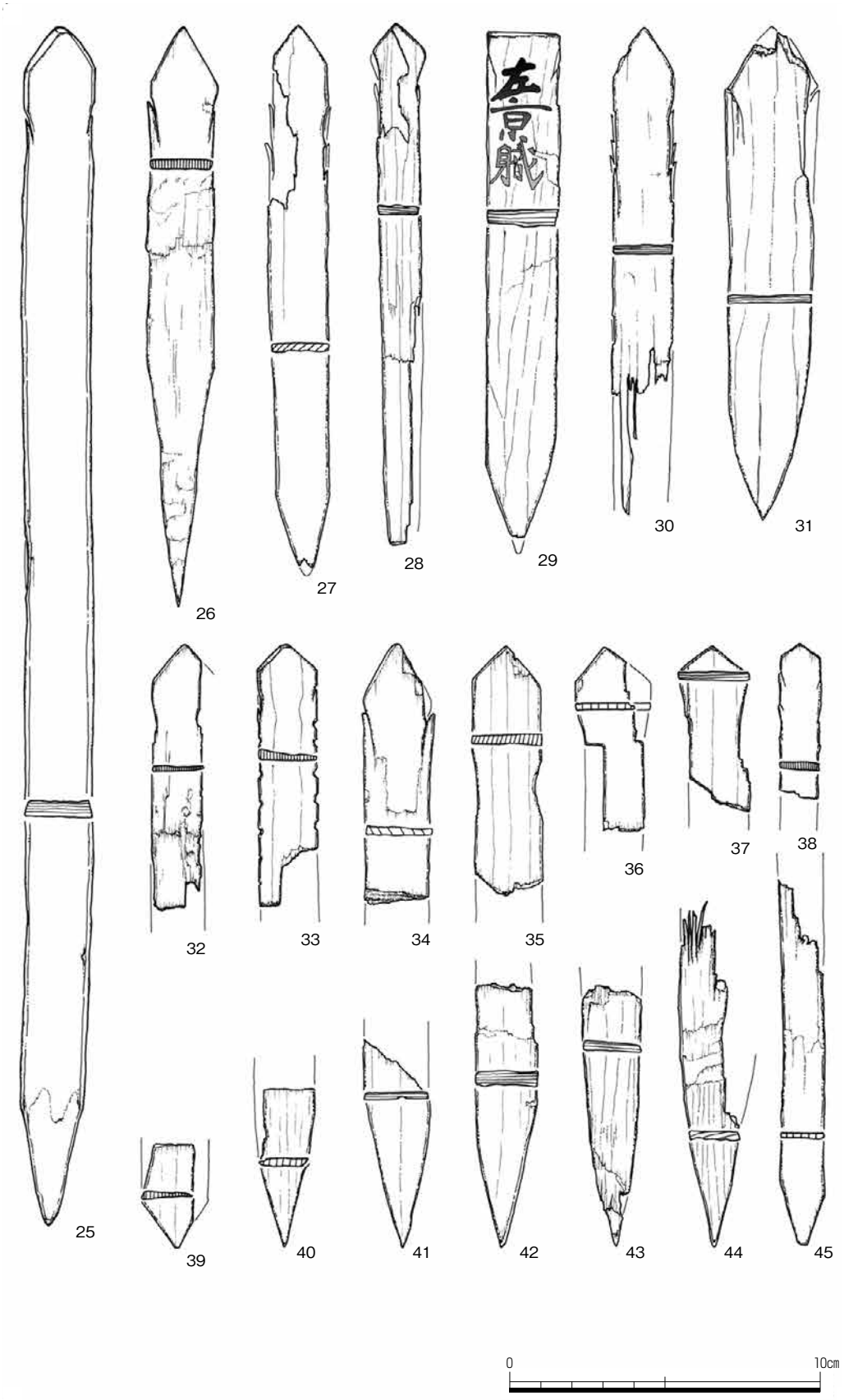


Fig. 159　SD4130中層出土木製品（7）　1:2

漆器皿（Fig.158-24）　漆器皿の小片。残存率は低いが、底径11.5cm程度に復元できる。内外面に黒漆が塗られている。高台部は遺存状況が悪く、底部外面の漆は確認できない。樹種はヤマグワである。

斎　串（Fig.159・160-25～64）　斎串は、板両端の形状によってＡ～Ｄの４型式、板材の側面からの切り込みによって８式に分類している。25は板材の両端を圭頭状につくり、上端近くの側面の左右１箇所に切り込みを入れるBⅢ式の大型品で、全長38.8cmを測る完形品。ヒノキ属の板目材。26はBⅢ式の小型品で、下半の削り出し部分が著しく長い。２片に折れているが、接合すれば全長18.8cmを測る。ヒノキ科の柾目材。27は両側面の左右対称位置を三角形に切り欠くBⅣ式。先端を欠き、残存長は17.5cm。切り込みは上下二段に施す。ヒノキ属の柾目材。28はⅢ式の破片。残存長16.8cm。ヒノキ科の板目材。

29は木簡に転用されたBⅢ式。先端部をわずかに欠き、残存長は16.3cm。頭部は直線的に切り落とし、そこに収まるように「左京職」の文字を配置していることから、斎串から木簡に転用したと考えられる。本調査区が左京職に関連する施設である可能性を示唆する資料である。ヒノキ属の板目材。

30はⅣ式の破片。先端部を欠き、残存長15.7cm。ヒノキ属の板目材。31は板材の上端を圭頭状にして下端を剣先状につくるCⅣ式。残存長15.5cm。ヒノキ属の板目材。32はⅣ式の破片。残存長8.6cm。ヒノキ科の柾目材。33はⅦ式の破片。上端近くの側面の左右１箇所に切り込みを入れ、両側縁に６箇所以上の刻みを入れる。今回の調査では唯一の型式である。残存長9.0cm。ヒノキの柾目材。34はⅢ式の破片。残存長8.4cm。ヒノキ科の柾目材。35～37はⅢ式またはⅣ式の小片である。35はヒノキ属の柾目材、36はヒノキ科の柾目材、37はヒノキ属の板目材である。38はⅣ式の小片で、両側縁に３箇所の切り込みを入れる。ヒノキ科の柾目材である。39～45は斎串の先端部の破片。いずれもＢ型式で、39・40・45がヒノキ属の柾目材、41～44がヒノキ属の板目材である。

46はCⅣ式。全長15.6cm。ヒノキ属の柾目材。47は、側面を割り裂くように上端木口から割れ目を入れるBⅡ式。全長14.0cm。ヒノキ科の板目材。48・49はⅣ式の破片。残存長はそれぞれ11.1cmと9.7cm。48はヒノキ属の柾目材、49はヒノキ科の柾目材。50はⅢ式の破片。ヒノキ属の板目材。51は切り込みを入れないＤⅠ式の完形品。全長17.1cm、幅1.0cmを測る。断面形は半円形に近く、切先の突出も弱い。斎串ではない可能性も残る。ヒノキ属の板目材。52はDⅣ式の完形品。全長19.6cm、幅1.1cm。片側の側縁に８箇所、反対側に１箇所わずかに切り欠きをもつ。ヒノキ属の板目材。53はＢⅠ式の完形品。全長19.5cm、最大幅1.1cm。ヒノキ属の板目材。

54～60は上端部の小片。55・56がⅢ式、58がⅠ式であるほかは、型式を確定できない。54・57・58・60がヒノキ属の柾目材、55がヒノキ科の板目材、56・59がヒノキ属の板目材。61～64は下端部の小片。61・62が板材の両端をそれぞれ一側面から鋭く斜めに切り落とすＡ型式、63・64がＢ型式である。61がヒノキ科の板目材、62・63がヒノキ属の板目材、64がヒノキ属の柾目材。

人　形（Fig.160-65）　正面全身人形で、頭頂部と右足を欠く。残存長14.4cm、肩部幅3.3cm、厚さ0.3cmを測る。眉、目、鼻、口は線刻によって表現する。腕は両面に線刻を施すことで表現し、足は切り抜きによって作る。ヒノキの板目材。

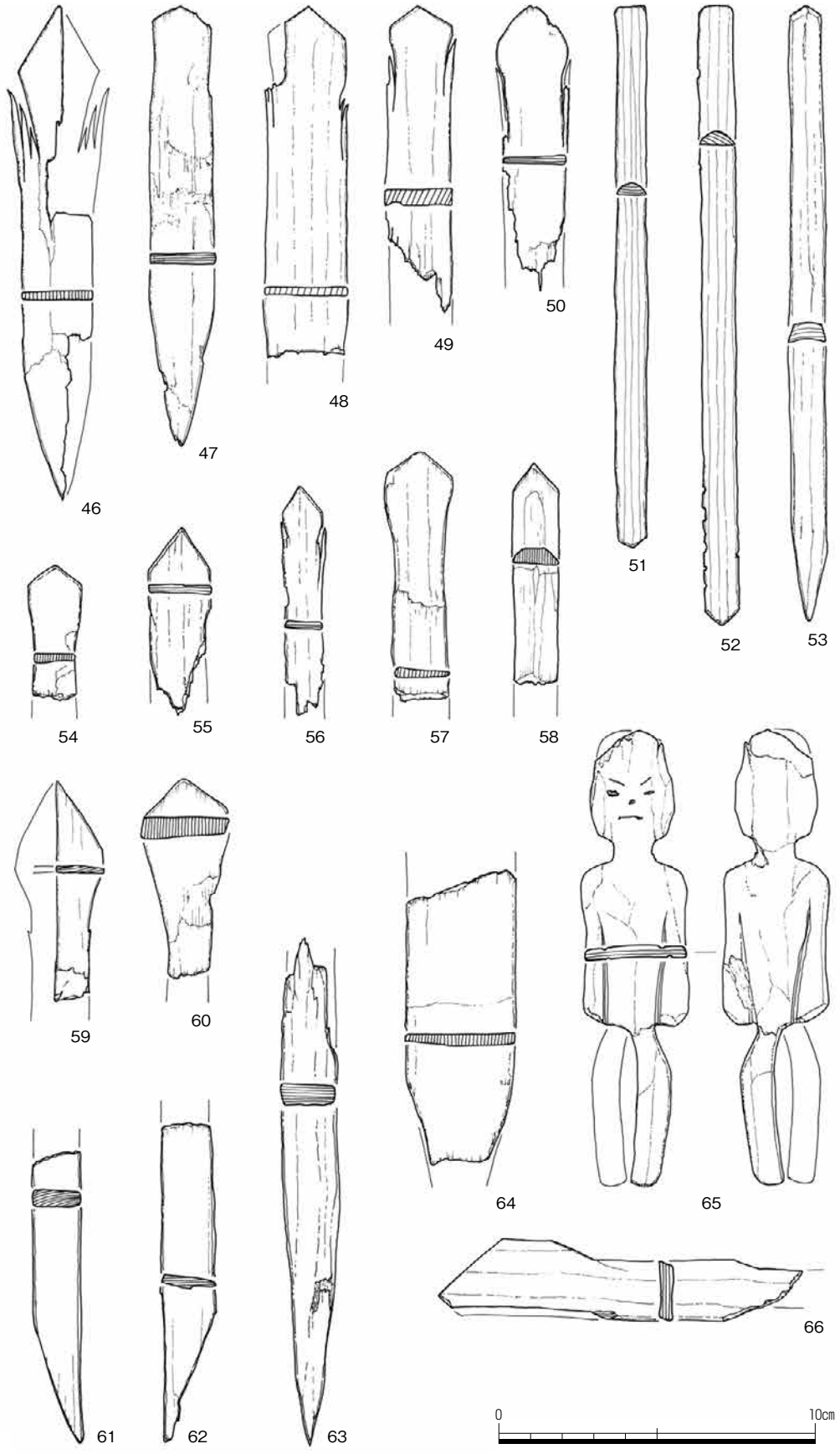


Fig. 160　SD4130中層出土木製品（8）　1:2

馬　形（Fig.160-66）　鞍の表現をもたないＡＩ型式。下半身の端部を欠き、残存長は11.5㎝。ヒノキ属の板目材。

尖端棒（Fig.161-67～72）　先端を尖らせた棒である。67と69は三角柱状を呈し、残存長はそれぞれ21.8㎝と18.4㎝。67はアスナロ属の柾目材、69がヒノキ属の板目材。68は先端を薄く加工した篦状を呈する。ヒノキ科の板目材。70は一端を茎状に作り、反対側を刀子の刃部状に加工する。全長17.8㎝。サワラの柾目材。71は残存長13.7㎝。ヒノキ属の板目材。72は先端を切先状に加工した棒状品。残存長11.8㎝。ヒノキ属の柾目材。

紡　輪（Fig.161-73）　紡輪の完形品。長径6.2㎝、短径5.5㎝の楕円形を呈する。側面は粗く削る。中央に0.7㎝の穴を穿つ。ヒノキの板目材。

琴　柱（Fig.161-74）　片側の脚部を若干欠き、残存幅3.2㎝、高さ1.6㎝、厚さ0.3㎝を測る。ヒノキの柾目材。

横　櫛（Fig.161-76・77）　いずれも全体が長方形を呈し、やや肩部が張るＡＩ型式。76は２片に分かれるが、同一個体と考えられる。推定長11㎝前後、最大幅5.0㎝、厚さ1.1㎝を測る。77は細片で、肩部と歯の一部が残存する。樹種は76がネジキ、77がイスノキの板目材である。

部　材（Fig.161-78）　四角い箱の一辺と考えられる。短辺の両側に枘を入れて組み合わせる構造で、四隅と下辺（あるいは上辺）に４箇所ずつ木釘を打ち込む。長さ13.3㎝、幅6.3㎝、厚さ1.2㎝。ヒノキ属の板目材。

用途不明品（Fig.161・162-75・79～89）　用途不明品や部材の破片。75は木材ではなく何らかの樹皮で、中央に径0.5㎝の穴を穿つ。79は残存長10.2㎝の棒状品で、両端を細く削り出す。糸巻軸棒の可能性もあるが、削り出し部分が長すぎる。ヒノキ属の柾目材。80は平面台形の棒状品。全長11.1㎝、残存幅3.1㎝、厚さ1.8㎝。アカガシ亜属の板目材。81・82は長方形の板。81は全長13.8㎝、幅3.0㎝、ヒノキ属の柾目材。82は全長16.5㎝、幅2.5㎝、ヒノキ属の柾目材。83は一方を尖らせた板状品で、残存長16.2㎝、上端幅1.7㎝。両側縁に４箇所ずつと上辺に１箇所、計９箇所の穿孔を施す。ヒノキ属の板目材。

84は台形状の不明部材。下端の長さは15.8㎝、高さは6.7㎝で、下辺に高さ1.1㎝の切り込みを入れる。ヒノキ属の柾目材。85・86は板状品の破片。85は台形を呈し、残存長7.7㎝。スギの板目材。86は端部付近に小孔を穿つ。ヒノキ属の柾目材。

87は短い棒状の部材で、一端は断面が方形の枘状に削り出し、反対側は面取りして尖らせる。全長10.0㎝。樹種はアカガシ亜属。88は円柱状の部材で、中央付近に長方形の枘穴をあける。木槌の頭部の可能性もある。残存長10.9㎝。樹種はアカガシ亜属。89は木の葉形の加工板。中央部分が厚くなり、厚さ0.9㎝。中央の下部に直径0.5㎝の穴を穿つ。欠損している上端中央にも同様の穴の一部が残る。ニヨウマツ類の柾目材。

杭（Fig.163-90～96）　90のみ完形品。90は角柱状を呈し、全長34.6㎝。最大幅3.0㎝、厚さ1.8㎝。先端付近は断面円形に面取りするが、加工はあまり鋭くない。ヒノキ属の板目材。91は円柱状の杭。残存長28.5㎝、太さ5.1㎝。一部に樹皮を留める。ナシ亜科の心持材。92は先端付近の小片。残存長13.1㎝。樹種はナシ亜科。93は残存長23.0㎝。一部に樹皮を留める。コナラ亜属コナラ節の心持材。94は先端部の破片。残存長12.9㎝。アカガシ亜属の心持材。95は基部から先端部にかけての破片。樹皮を留め、残存長21.9㎝。アカガシ亜属の心持材。96は先端付近の破片。

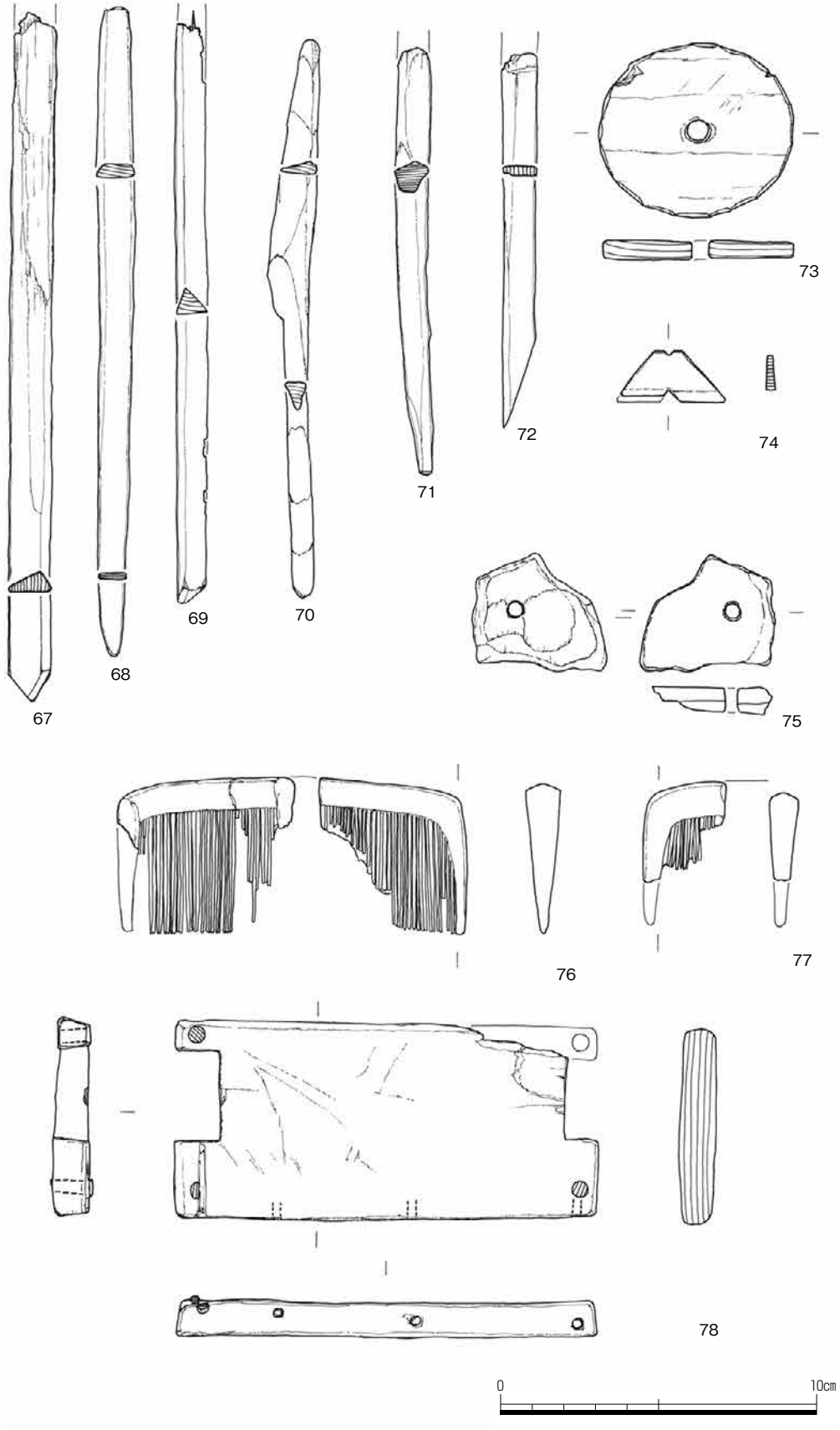


Fig. 161　SD4130中層出土木製品（9）　1:2

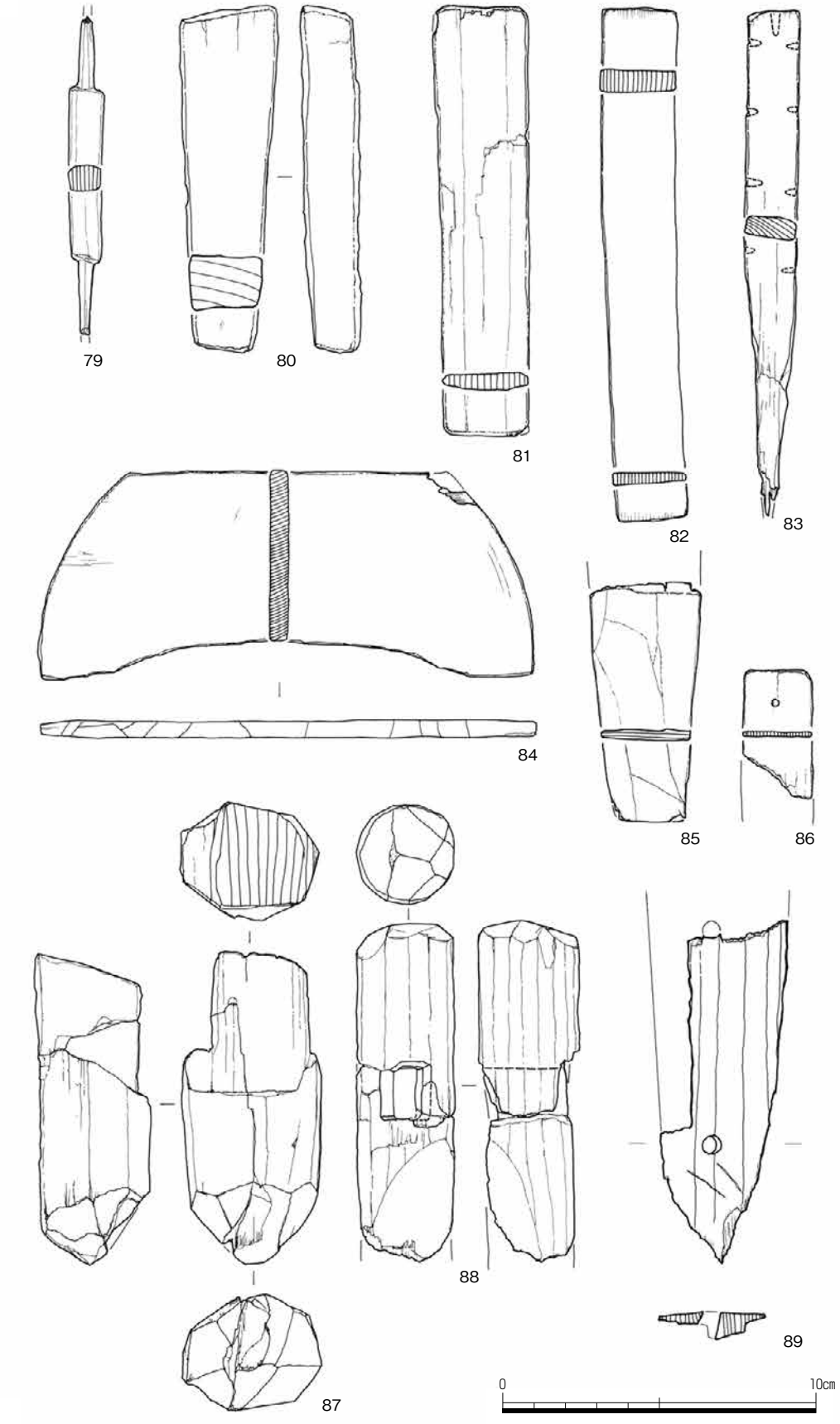


Fig. 162　SD4130中層出土木製品（10）　1:2

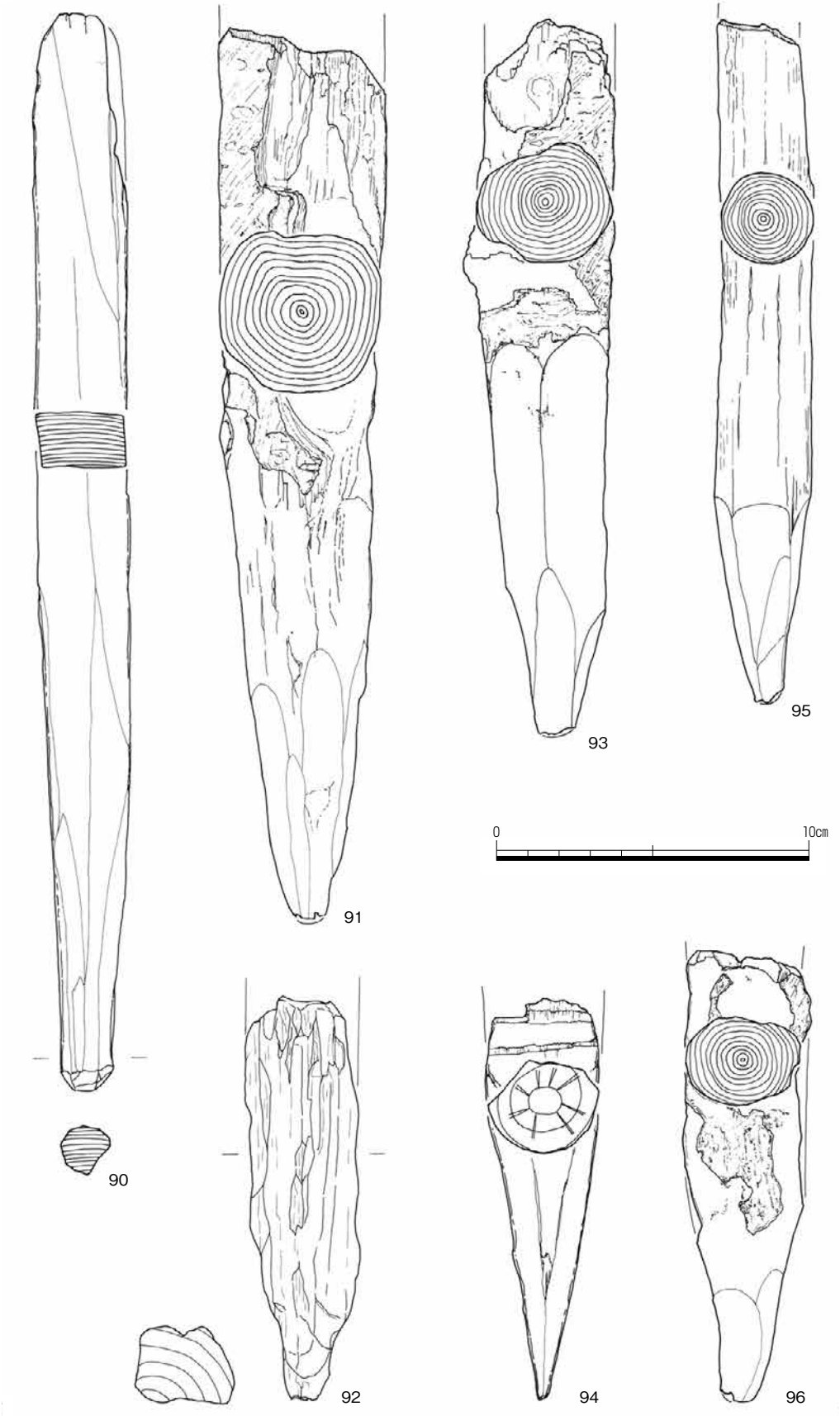


Fig. 163　SD4130中層出土木製品（11）　1:2

一部に樹皮を留める。残存長14.5cm。シキミの心持材。

加工棒（Fig. 164～167-97～166）　加工棒には、径が比較的太く、端部を尖らせたり、段差加工を施したりするもの（97～107）と、細い角棒や板状を呈し、一端または両端を平滑に仕上げたもの（108～166）の2種類がある。前者には工具柄の破片、杭の破片、部材など様々な器種が含まれ、後者は籌木が大半を占めると考えられよう。まず前者について報告したい。

97は断面円形の加工棒。全長58.8cm、最大径2.3cmを測る完形品で、一端を面取りして細く加工する。何らかの柄と考えられる。ウツギ属の中空の部位を用い、内径は8㎜である。98はやや扁平な加工棒。残存長37.6cm。全体を扁平な八角形に面取りする。柄杓の柄か。ヒノキの板目材。99は丸棒の完形品。一端を一回り細く削り、そこに別材をはめたと思われる。全長31.2cm。ヒノキの柾目材。100は断面隅丸方形の加工棒。残存長29.9cm。ヒノキの板目材。101は丸棒の破片。2つに折れ、完全には接合しないが、残存長は28.0cm。先端付近を人頭状に加工する。散孔材の心持材。102は角棒の破片。一端を面取りして尖らせる。残存長20.6cm。ヒノキの板目材。103は断面蒲鉾形の棒状品で、一端を斜めに切り落とす。残存長16.5cm。ヒノキ科の柾目材。104は細い丸棒で、一端を両側から斜めに切り落とす。残存長7.8cm。ニシキギ属の心持材。105も細い丸棒。一端を弓弭状に加工する。残存長8.9cm。ニシキギ属の心持材。106は尖端棒。残存長10.1cm。樹種はヒノキ。栓の可能性もある。107も尖端棒。断面円形の棒状品で、残存長12.6cm。ヒノキ属の柾目材。

108～166は籌木と考えられる加工棒である。大半は簡単な加工を施したのみの棒にすぎないが、特に丁寧に削られた完形品（138・140・153・157）も出土している。これらの法量や樹種等は、Tab. 5に示す。

Tab. 5　SD4130中層出土加工棒一覧（単位：cm）

図面番号	全　長	最大幅	最大厚	樹　種	図面番号	全　長	最大幅	最大厚	樹　種
108	26.2	0.8	0.8	ヒノキ属	138	19.0	1.0	0.4	ヒノキ属
109	23.7	1.4	0.6	ヒノキ属	139	18.2	0.8	0.3	ヒノキ属
110	23.6	0.7	0.5	ヒノキ属	140	17.7	1.0	0.4	ヒノキ属
111	23.2	1.2	0.5	ヒノキ	141	7.9	0.8	0.3	ヒノキ属
112	23.5	0.8	0.8	ヒノキ属	142	8.4	0.7	0.4	ヒノキ
113	21.8	0.9	0.6	ヒノキ属	143	8.6	0.8	0.4	ヒノキ属
114	19.5	0.8	0.5	ヒノキ属	144	8.7	0.9	0.9	ウツギ属
115	18.7	0.8	0.5	ヒノキ属	145	9.2	0.9	0.9	ヒノキ属
116	18.7	0.9	0.9	ヒノキ属	146	9.3	0.7	0.5	ヒノキ属
117	18.4	0.6	0.6	ヒノキ	147	11.2	1.0	0.5	ヒノキ属
118	18.0	1.0	0.6	ヒノキ属	148	11.7	1.1	0.6	ヒノキ
119	12.0	0.8	0.3	ヒノキ科	149	12.1	0.9	0.7	コウヤマキ
120	12.8	0.7	0.4	ヒノキ属	150	12.4	1.1	0.4	ヒノキ科
121	13.4	0.9	0.7	ヒノキ属	151	14.6	1.1	0.4	ヒノキ
122	13.3	1.2	0.7	ヒノキ属	152	23.9	1.3	0.6	ヒノキ
123	14.5	0.8	0.8	ヒノキ	153	22.1	1.3	0.6	ヒノキ
124	15.7	0.7	0.4	ヒノキ属	154	20.9	1.4	0.4	ヒノキ
125	16.5	1.0	0.5	ヒノキ	155	18.6	1.5	0.3	ヒノキ
126	15.5	1.0	0.4	ヒノキ	156	15.8	1.8	0.4	ヒノキ属
127	17.3	0.6	0.3	ヒノキ属	157	15.2	1.9	0.6	ヒノキ
128	18.0	0.6	0.3	ヒノキ	158	12.1	1.4	0.8	ヒノキ属
129	19.3	0.7	0.6	針葉樹	159	11.4	1.1	1.1	ヒノキ
130	27.9	1.1	0.5	ヒノキ属	160	9.4	1.4	0.4	ヒノキ
131	25.8	1.1	0.7	ス　ギ	161	7.0	0.7	0.6	ヒノキ属
132	24.4	1.5	0.7	ヒノキ属	162	9.1	0.8	0.6	ヒノキ属
133	24.0	1.0	0.4	ヒノキ	163	10.2	0.8	0.8	ヒノキ
134	23.1	0.7	0.6	ヒノキ	164	11.3	1.0	0.8	ヒノキ属
135	22.8	0.8	0.8	ヒノキ属	165	11.4	1.1	0.9	ヒノキ
136	22.0	0.8	0.5	ヒノキ	166	12.1	0.9	0.9	ヒノキ
137	19.4	1.1	0.5	ヒノキ					

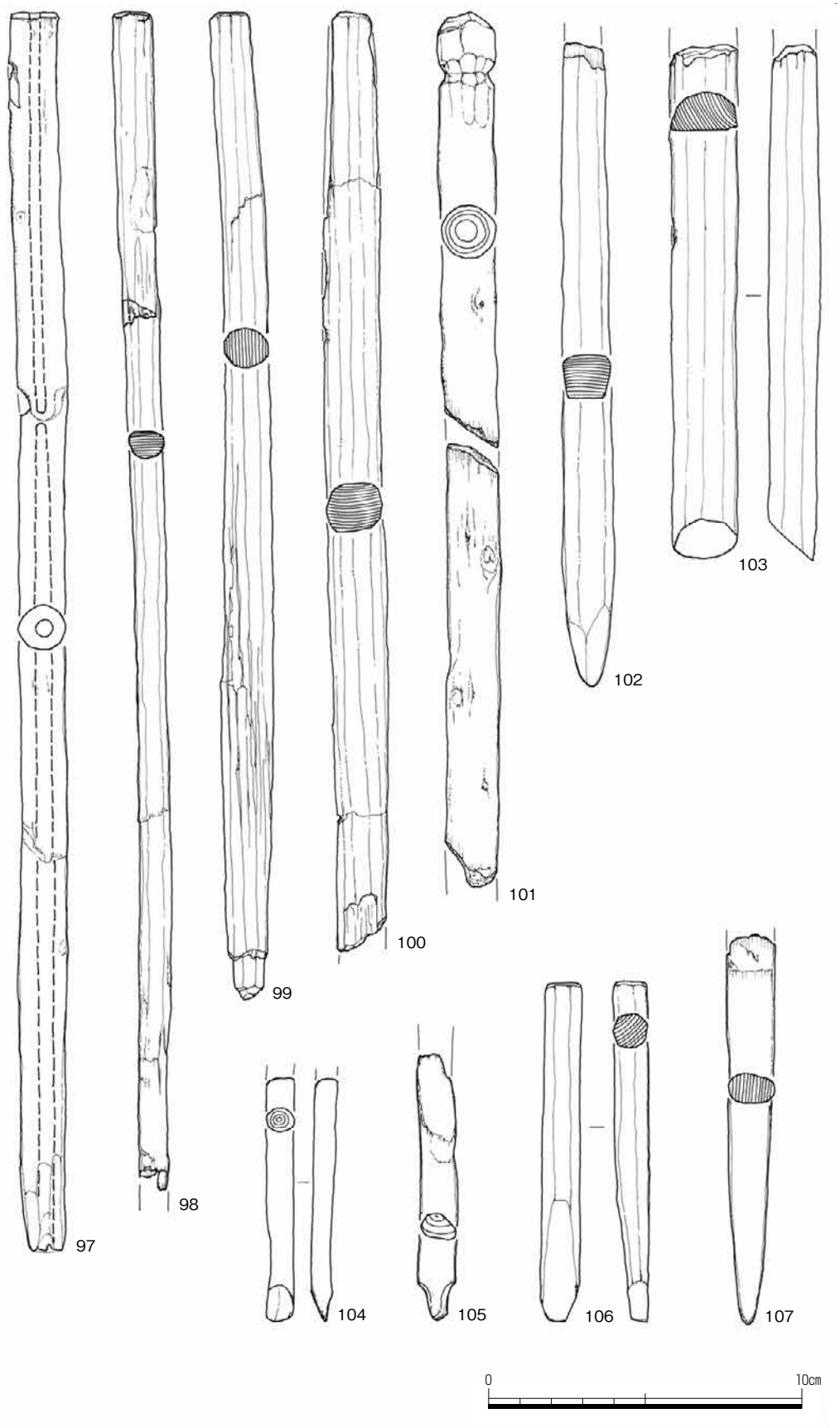


Fig. 164　SD4130中層出土木製品（12）　1:2（97のみ　1:3）

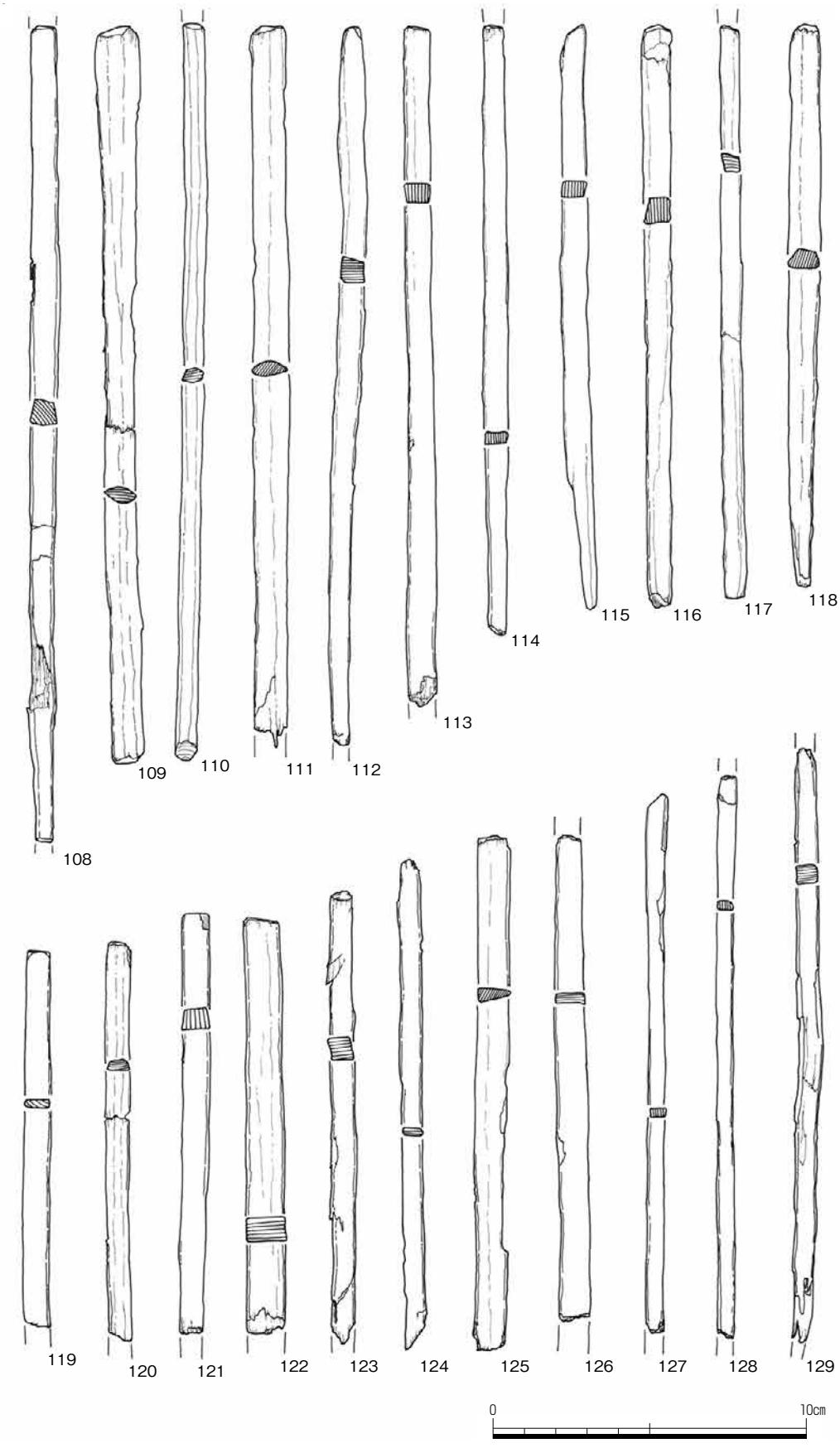


Fig. 165　SD4130中層出土木製品（13）　1:2

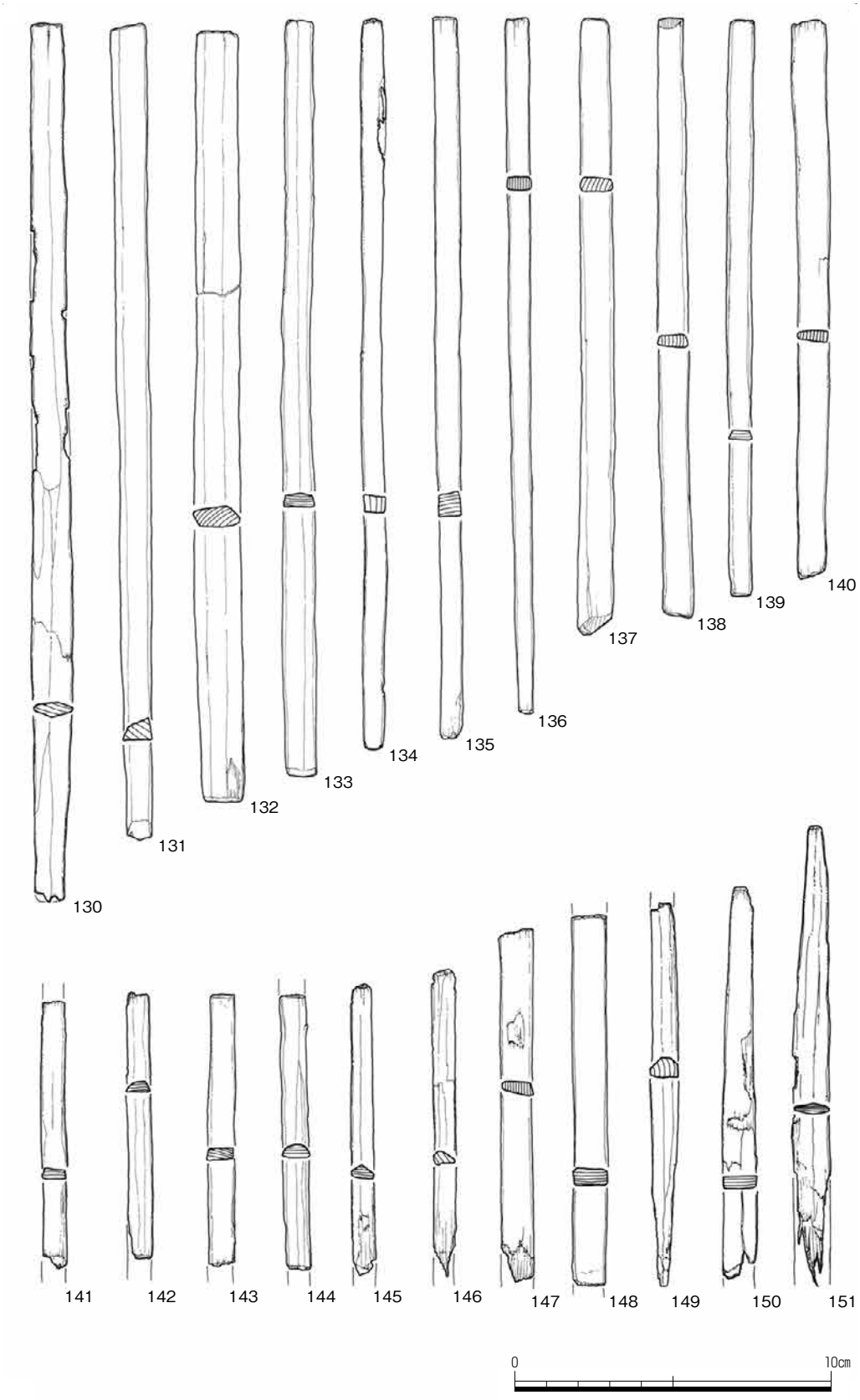


Fig. 166　SD4130中層出土木製品（14）　1:2

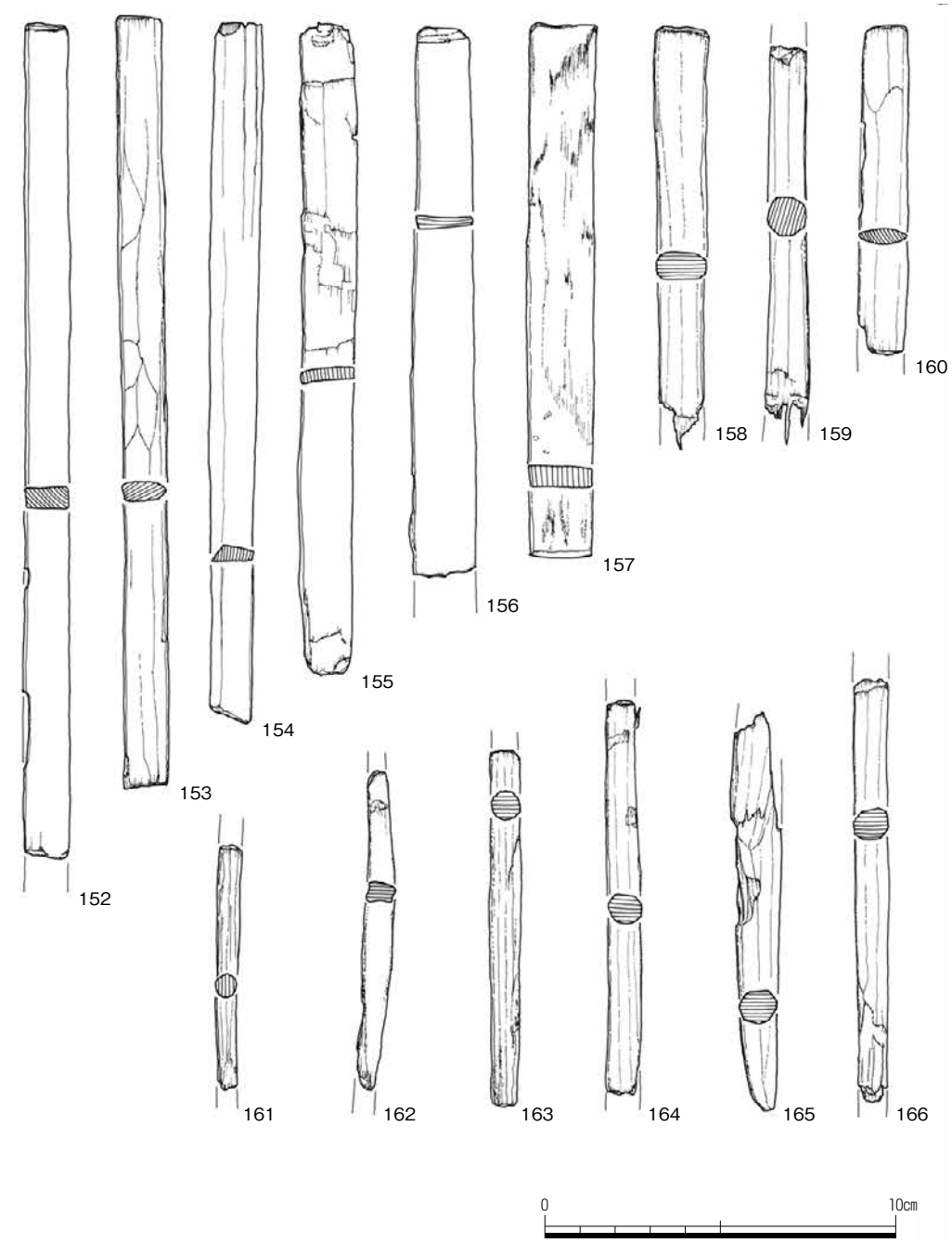


Fig. 167　SD4130中層出土木製品（15）　1:2

ⅱ　上層出土木製品（Fig. 168～173，Ph. 138～140）

曲物底板・蓋（Fig. 168～170-167～173）　円形曲物の底板・蓋である。167は釘結合曲物の底板。側縁を若干欠損する。最大径16.2㎝。側面には側板を固定する釘穴を３箇所以上もち、内面には刀子によるケビキ痕跡と側板のアタリが残る。表面の各所にも釘穴らしきものが認められ、穴が貫通しているものもある。通気あるいは水抜きの工夫かもしれない。ヒノキの柾目板。168は釘結合曲物底板の破片。側縁に２箇所以上の釘穴をもつ。表面１箇所に径５㎜程度の穴を穿つ。ヒノキの板目材。169は蓋板で、ほぼ完形。最大径13.2㎝を測る。中央に把手を付けたと思われ

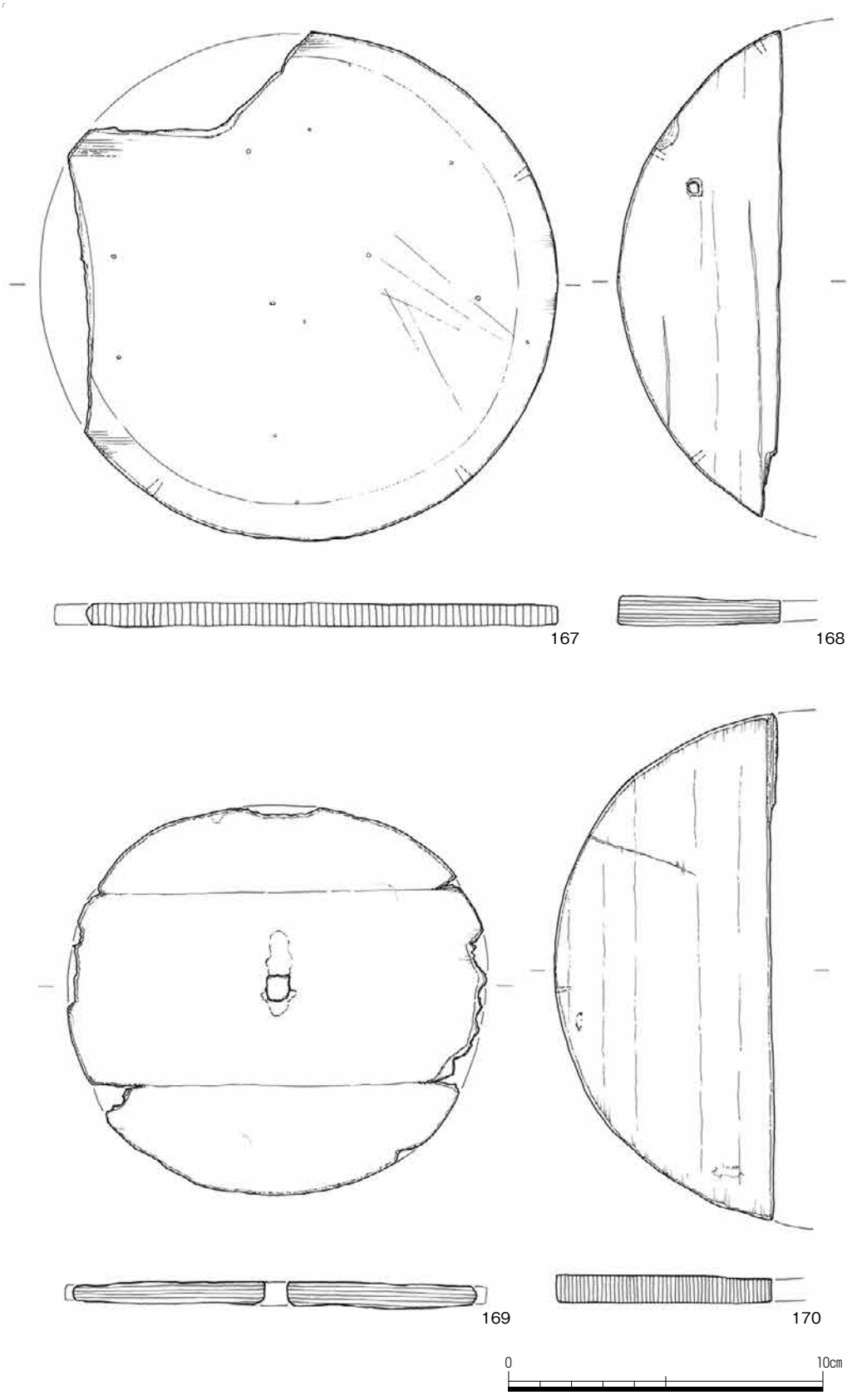


Fig. 168　SD4130上層出土木製品（1）　1:2

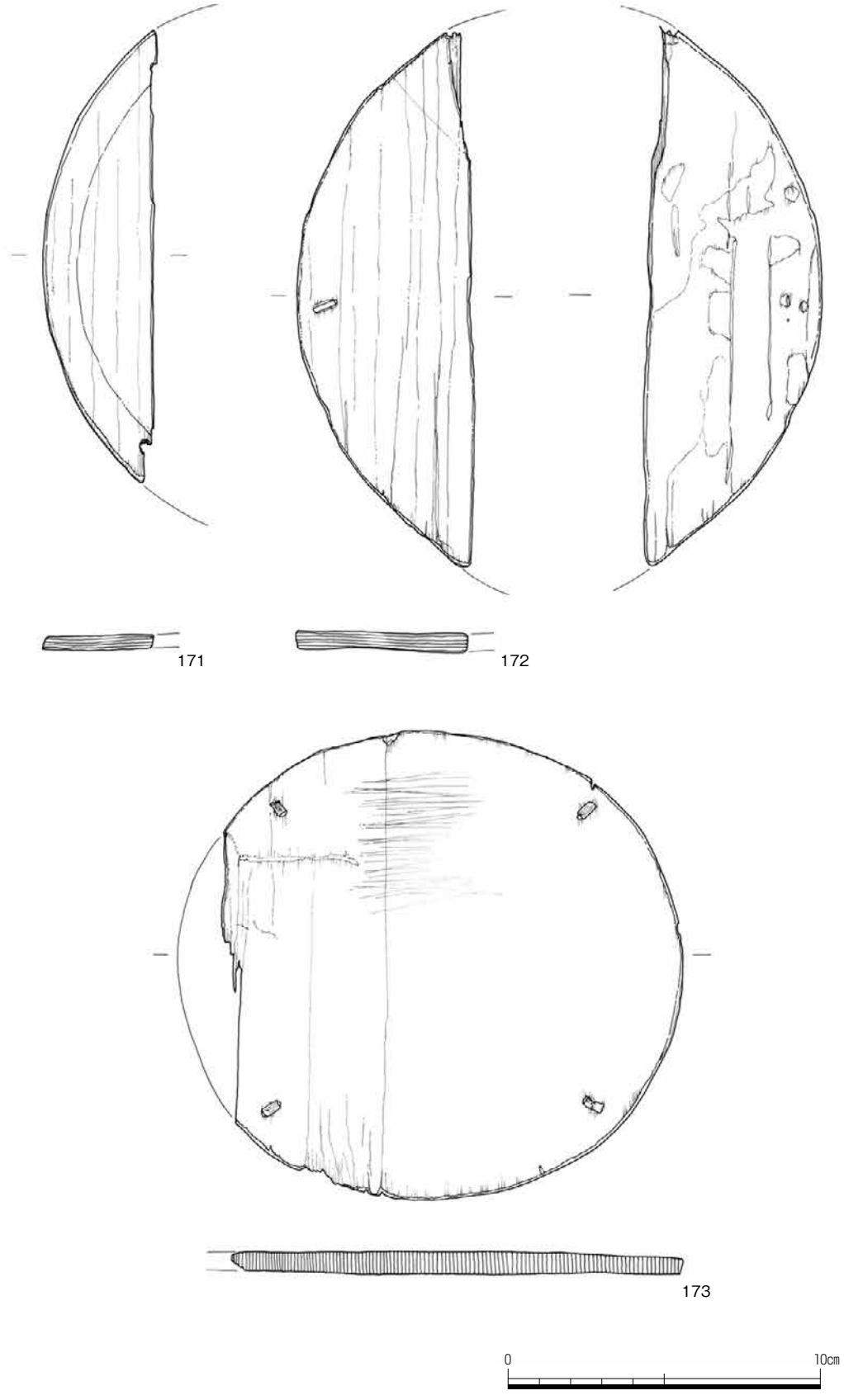


Fig. 169　SD4130上層出土木製品（2）　1:2

る径8㎜の穴をあける。ヒノキの板目材。170は釘結合曲物の底板片で、側縁に1箇所の釘穴をもつ。残存部の最大径は16.2㎝。ヒノキの柾目材。171は樺皮結合曲物の小片で、内面に側板のアタリの痕跡が残り、端部には側板を固定した穿孔もわずかに残る。ヒノキ属の板目材。172は樺皮結合式曲物の破片で、側縁の1箇所に長方形の紐通し穴をもつ。ヒノキの板目材。173は樺皮結合式曲物の底板。ほぼ完形で、最大径16.2㎝を測る。表面にケビキが残る。紐通し穴は4箇所で、幅4㎜程度の樺皮が残存している。ヒノキの柾目材。

紡　輪（Fig.170-174～176）　174は楕円形を呈し、最大径5.8㎝を測る。中心に径5㎜の小穴を穿つ。ヒノキ科の柾目材。175もほぼ同様のもので、最大径5.8㎝。中心に糸巻棒が残存する。ヒノキ属の柾目材。176は174・175よりも大型の紡輪で、最大径7.9㎝側面を粗く削り、側縁を斜めに面取りした部分もある。中心には最大径1.1㎝の穴をあける。ヒノキの板目材。

糸　巻（Fig.171-177）　糸巻横木の破片。軸棒を通す穴を挟んで片側を欠損する。残存長5.3㎝、最大幅1.3㎝。ヒノキ属の柾目材。

杭（Fig.171-178）　径約2㎝で中空の心持材の先端を鋭利に尖らせる。約28㎝が残存し、基部は破損している。樹種はウツギ属。

用途不明品（Fig.171-179・180）　179は一方がすぼまる角柱状をなし、表面には削りの痕跡が残る。全長27.2㎝、厚さは約3㎝。ヒノキ属の板目材。180は一方を尖らせた板状品で、端部に突起を作り出す。径3㎜程度の小穴を4箇所にあけている。全長16.0㎝、最大幅5.5㎝、厚さ7㎜。ヒノキ属の柾目材。

斎　串（Fig.172-181～190）　上層からは10点の斎串が出土している。181はBⅣ式で、側面の切り込みは各3箇所。先端をわずかに欠く。残存長15.6㎝、最大幅2.3㎝を測る。ヒノキ属の板目材。182はⅣ式で、下半を欠く。残存長8.8㎝。ヒノキ属の柾目材。183はⅣ式の破片。残存長6.9㎝。ヒノキ属の板目材。184はⅢ式の破片。残存長6.9㎝。ヒノキ科の柾目材。185はⅢ式の小片。残存長5.0㎝。ヒノキの柾目材。186はⅢ式の小片。残存長4.9㎝。ヒノキ科の柾目材。187はB型式の完形品と考えられるが、全長が5.8㎝と短く、厚みも0.6㎝と他の斎串より厚いことから、斎串ではない可能性も残る。ヒノキ科の板目材。188はC型式の破片。残存長9.6㎝。ヒノキ属の柾目材。189はB型式の破片。残存長9.0㎝。ヒノキ属の柾目材。190はB型式の小片。残存長8.2㎝。ヒノキ属の柾目材。

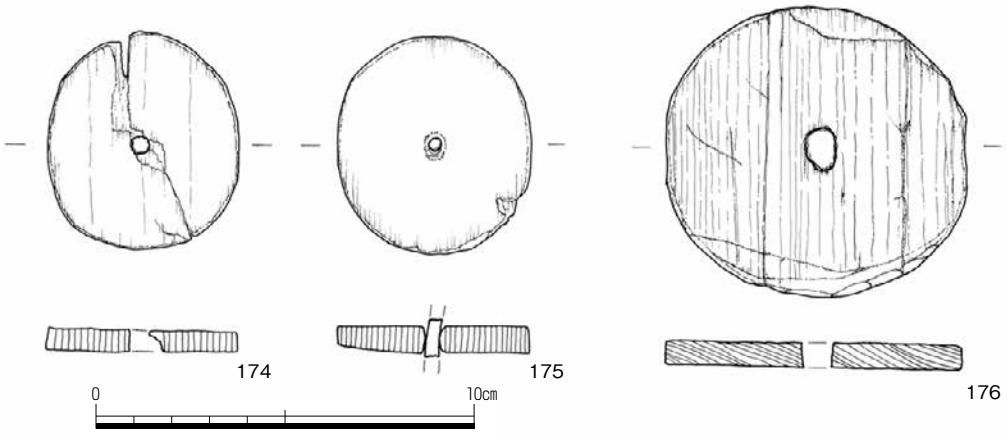


Fig. 170　SD4130上層出土木製品（3）　1:2

刀子柄（Fig.172-191）　ムクノキの板目材を丁寧に削り、楕円柱状に加工する。刃部に向かって若干の反りをもつ。全長10cm、最大幅1.4cm、厚さ1.2cm。

加工棒（Fig.172-192～198）　加工棒として一括するが、板状品や断面円形に近い棒状品を含み、様々な用途が想定される。192は全長25.4cm、幅1.0cmを測る棒状品で、一方を丸く削り出す。ヒノキ属の板目材。193は残存長22.7cm、最大幅2.2cm、厚さ1.0cmを測る板状品。ヒノキ属の柾目材。194は残存長13.7cm、幅1.2cmの角棒。片側は炭化している。ヒノキ科の板目材。195は残存長11.6cm、径1.0cmの丸棒。両端を欠く。樹種はヒノキ属。196は残存長10.0cm、径1.3cmの丸棒。両端を欠く。樹種はヒノキ属。197は残存長10.7cmの楕円柱状を呈する。ヒノキの柾目材。198は残存長9.6cm、径0.8cmの丸棒。樹種はヒノキ属。

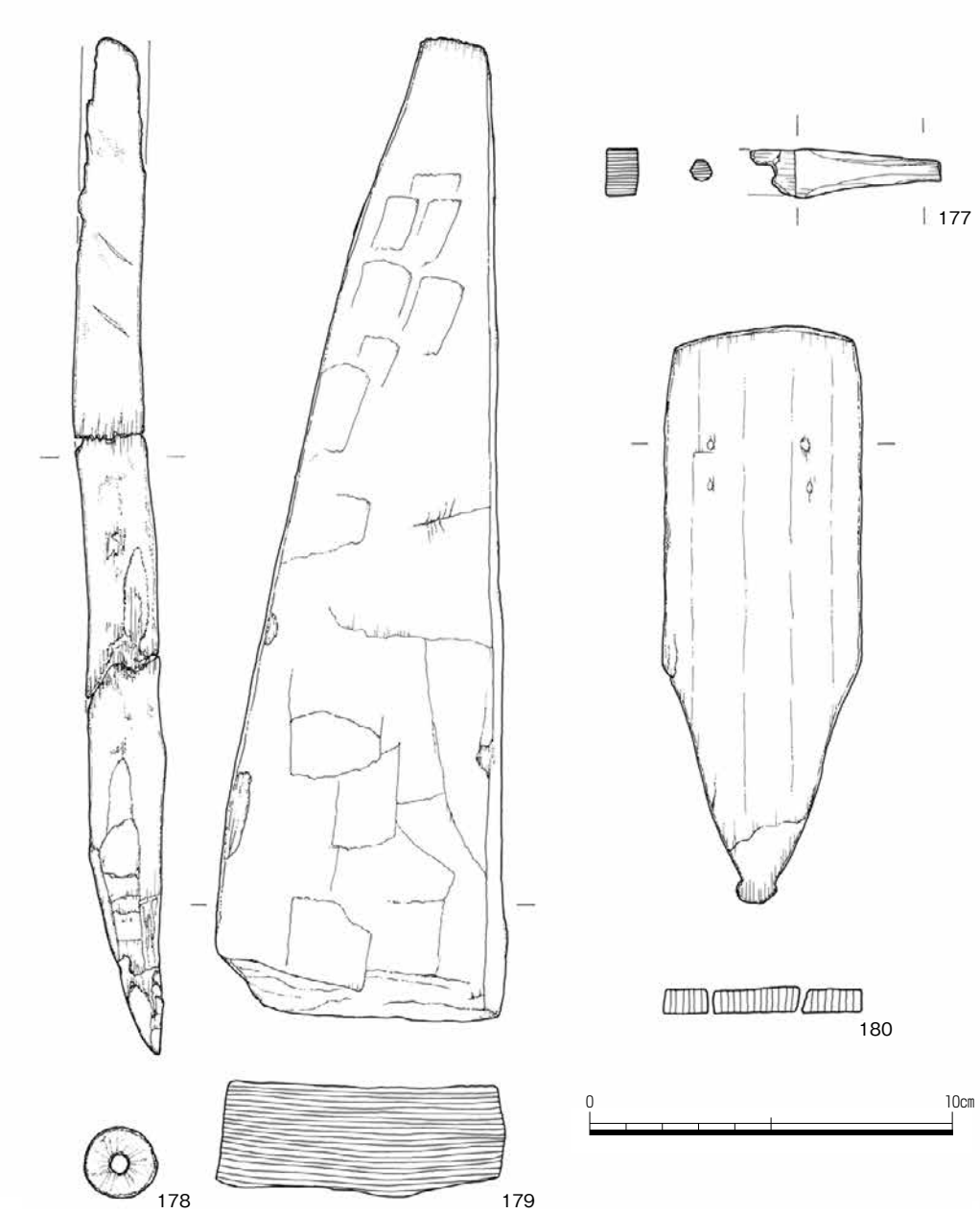


Fig. 171　SD4130上層出土木製品（4）　1:2

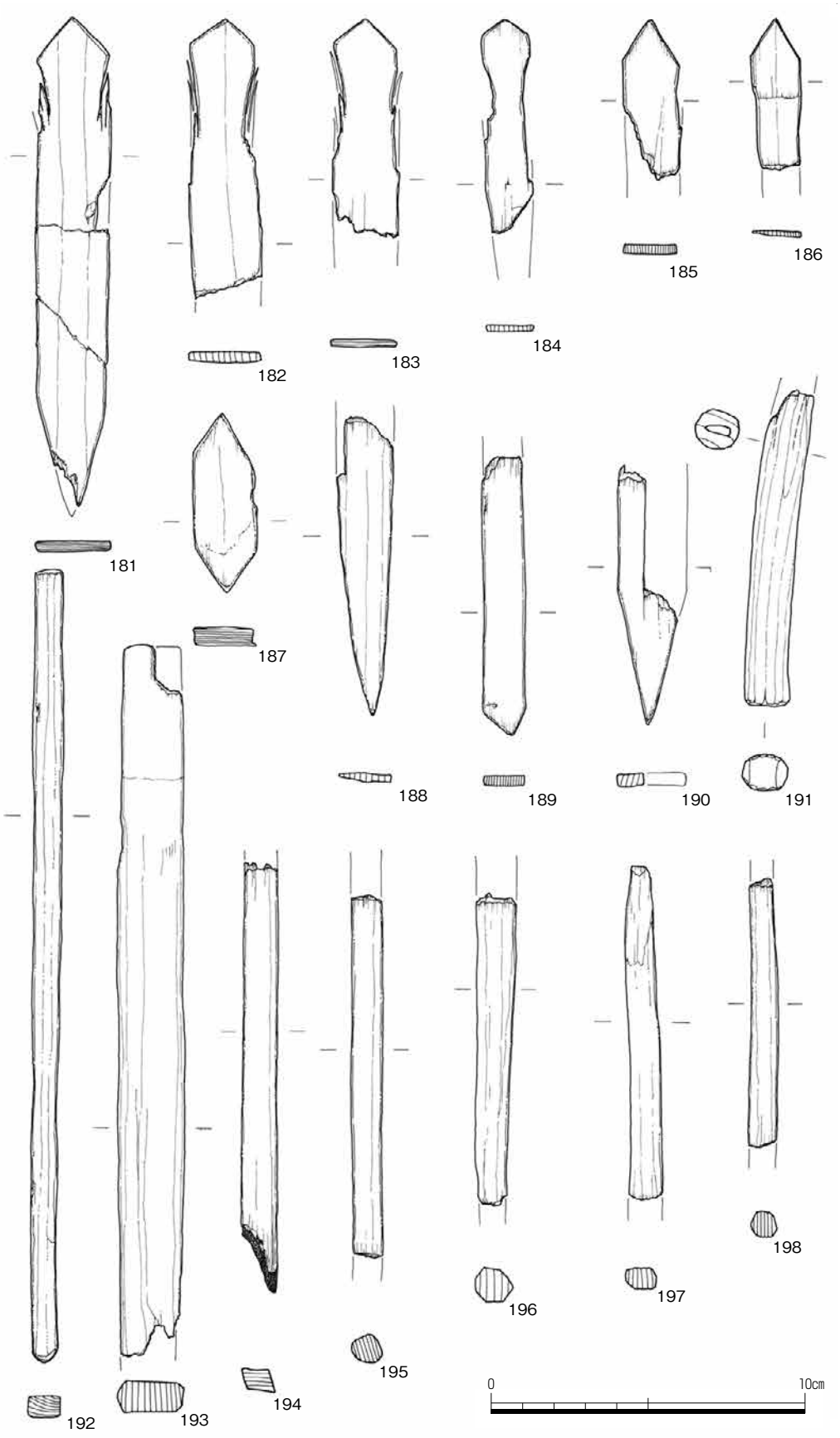


Fig. 172　SD4130上層出土木製品（5）　1:2

B　井戸SE4740出土木製品（Fig. 173～179，Ph. 141～145）

調査区北西部にある藤原京期から奈良・平安時代の井戸SE4740からも、まとまった量の木製品が出土した。SE4740は東西大溝SD4130南岸に近接して掘られた方形横板組の井戸で、井戸枠の大きさは一辺0.9ｍを測る。井戸枠は横板材12段分で、高さ約３ｍが残存していた。井戸掘方の埋土は、底から0.7～１ｍの高さまでは青灰色砂礫である。なお、掘方から木製品は出土していない。

井戸枠内の遺物の取り上げは、最下層、下層、中層、上層の４層に分けて行った。最下層は灰褐色砂礫で、土器、木製品、金属製品が出土した。下層は褐色砂質土で、多量の土器と木製品を含む。中層は砂交じりの褐色粘質土で、多量の土器と木製品が出土した。上層は青灰色から暗褐色を呈する粘質土で、土器や漆器が出土したが比較的遺物は少ない。

各層のおよその年代であるが、出土土器の分析から以下の様に考えられている（本書第Ⅵ章2参照）。掘方は飛鳥Ⅳ～Ⅴに位置付けられ、藤原京期には既に掘削されていることが知られる。最下層は藤原京期から、奈良時代後半の平城宮土器Ⅲ～Ⅳまでにあたる。出土資料の一括性は低く、短期間で堆積した層とみなすことは難しい。下層は平城宮土器Ⅲ～Ⅴで奈良時代後半、中層は奈良時代末から長岡京期に比定される。上層は９世紀前半から10世紀前半までで、その頃にはほぼ埋没したとみられる。

これらSE4740の各層は、SD4130の各層とある程度の対応関係が認められる。SE4740最下層と下層は、SD4130中層との堆積が並行していたと理解でき、それらの堆積は奈良時代には完了していたとみられる。SE4740中層と上層は、SD4130上層にほぼ対応するものと考えられる。

また、別項で述べるように、最下層・下層からは無文銀銭１点と和同開珎26点がまとまって出土した。以下、層位ごとに報告する。

ⅰ　最下層出土木製品（Fig. 173，Ph. 141）

刀子柄（Fig. 173-199・200）　２点出土した。199は残存長14.8㎝、幅1.9㎝で、厚さ1.3㎝を測る。断面楕円状の心持材である。刃部装着部分の断面形態はレンズ状を呈している。樹種はシャシャンボ。200は残存長17.5㎝、幅1.9㎝、厚さ1.7㎝を測る。断面円形の辺材。刃部の装着部分は長方形を呈する。柄の下端付近は握りやすいように削りが施される。樹種はケヤキ。

用途不明品（Fig. 173-201）　丸太状の部材であり、両端が加工されて尖っている。全長9.4㎝、幅5.5㎝の心持丸木である。樹種はアカガシ亜属。

ⅱ　下層出土木製品（Fig. 173～175，Ph. 141・142）

斎　串（Fig. 173-202）　板材の上端を圭頭状につくり、上端近くの側面の左右に切り込みを入れるCⅢ式で、切り込みは各２箇所。完形品であり、全長は20.4㎝、幅2.3㎝、厚さ0.2㎝を測る。ヒノキの板目材。

曲物底板（Fig.174・175-203～208）　203は釘結合曲物の底板。一部を欠損する。最大径19.5cm、厚さ0.7cmを測る。周囲に3箇所の釘穴があり、片面には刀子状の工具によるキズが確認できる。ヒノキの板目材。204は円形曲物底板の破片で、およそ半分が残存する。残存部に釘穴等は確認できない。復元径19.8cm、厚さ0.7cm。ヒノキの板目材。205は円形曲物底板。ほぼ完形で、最大径13.3cm、厚さ0.8cm。片面には削りの痕跡が明瞭に残る。側縁の釘穴等は確認できない。ヒノキ属の板目材。206は円形曲物底板の小片。径は20cm程度か。厚さは0.9cm。ヒノキ属の板目材。207は釘結合式曲物底板の破片。約半分が残存し、復元径は19.4cm、厚さ0.7～0.9cm。側縁に4箇所の釘穴、内面に側板のアタリが認められる。ヒノキ属の板目材。208は曲物底板の破片。一端が直線的にみえるが、円形曲物の端部が破損した可能性もある。残存長20.0cm、厚さ0.8cm。側縁の釘穴等は認められない。ヒノキ属の板目材。このほか、曲物柄杓残欠がある。

下　駄（Fig.175-209）　下駄の破片。最大長9.0cm。中央付近に鼻緒を通す径9㎜の穴を開ける。台表面には足指のアタリが残り、右足用と考えられる。歯の高さは4.0cm程度で、端部が丸く磨り減っている。樹種はケヤキ。

把　手（Fig.175-210）　角棒状の不明品で、両端付近の側縁に窪みが認められる。この窪みを紐等による緊縛痕とみれば、曲物を固定する把手の可能性が考えられる。全長22.8cm、幅2.0cm、厚さ1.2cm。ヒノキの柾目材。

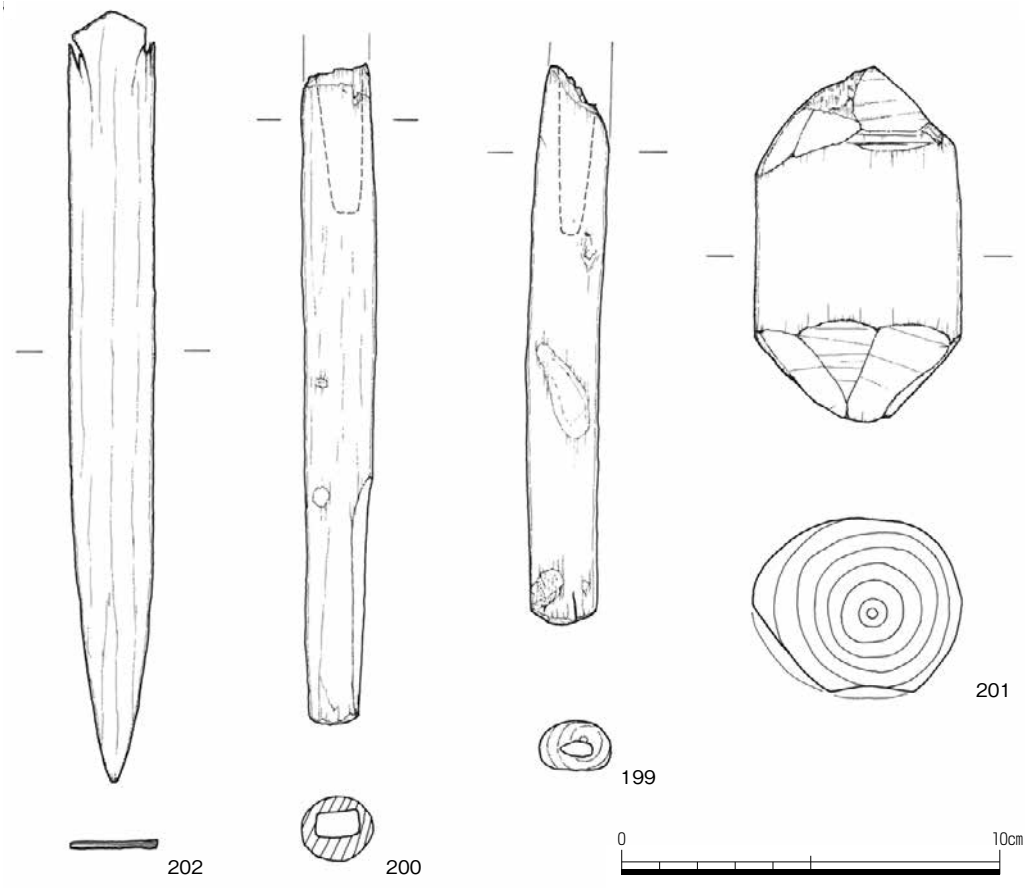


Fig. 173　SE4740最下層・下層出土木製品　1:2

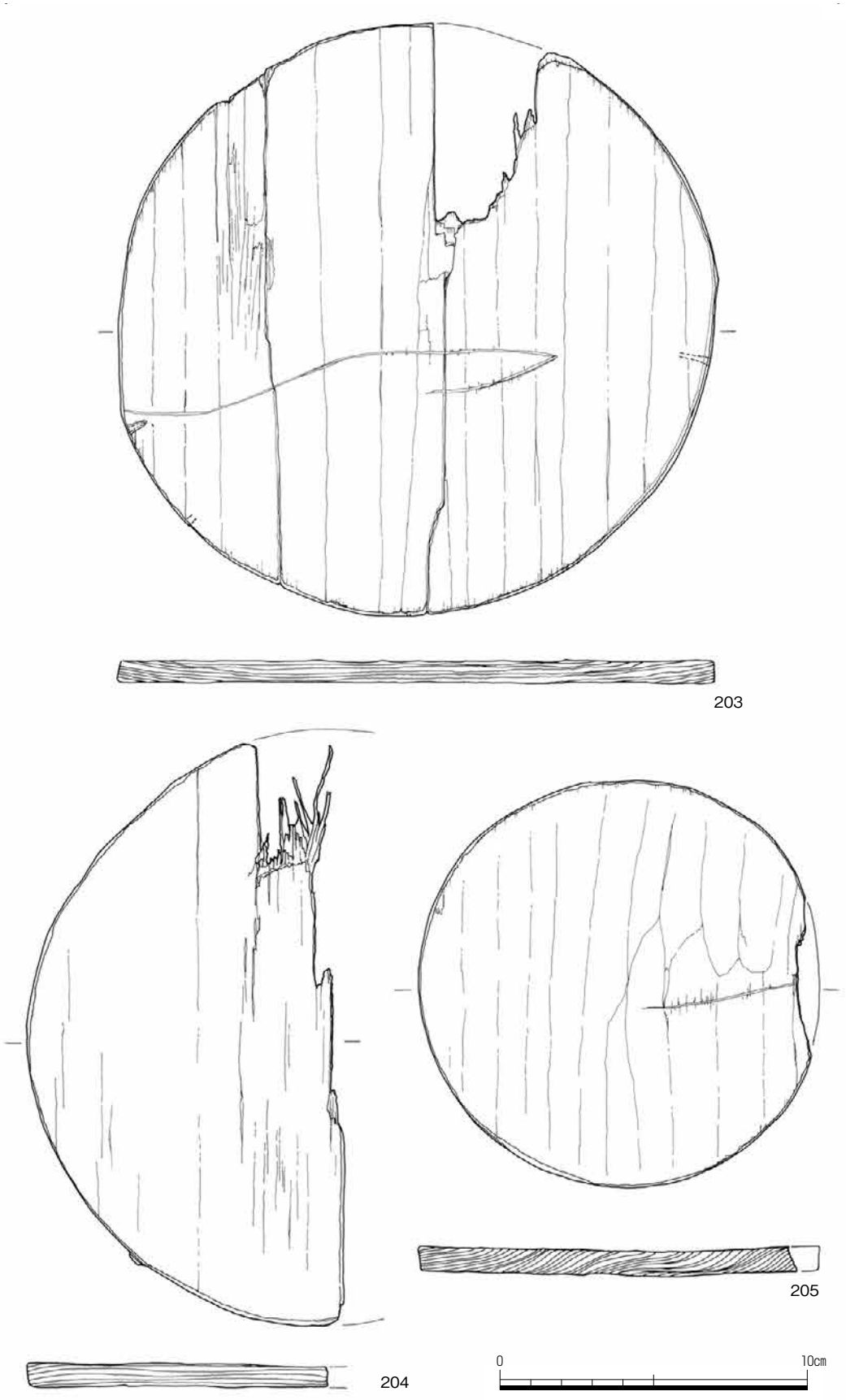


Fig. 174　SE4740下層出土木製品（1）　1:2

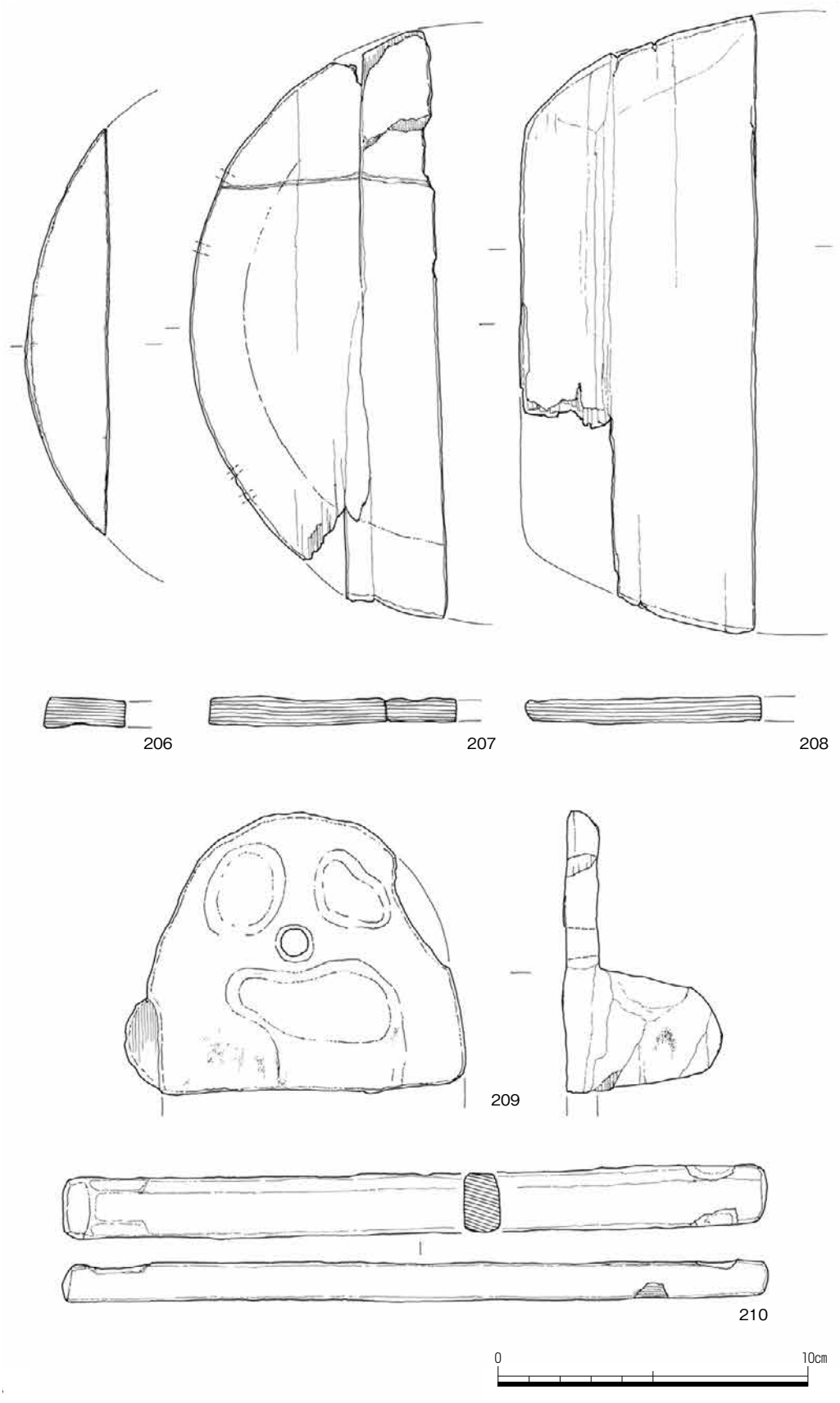


Fig. 175　SE4740下層出土木製品（2）　1:2

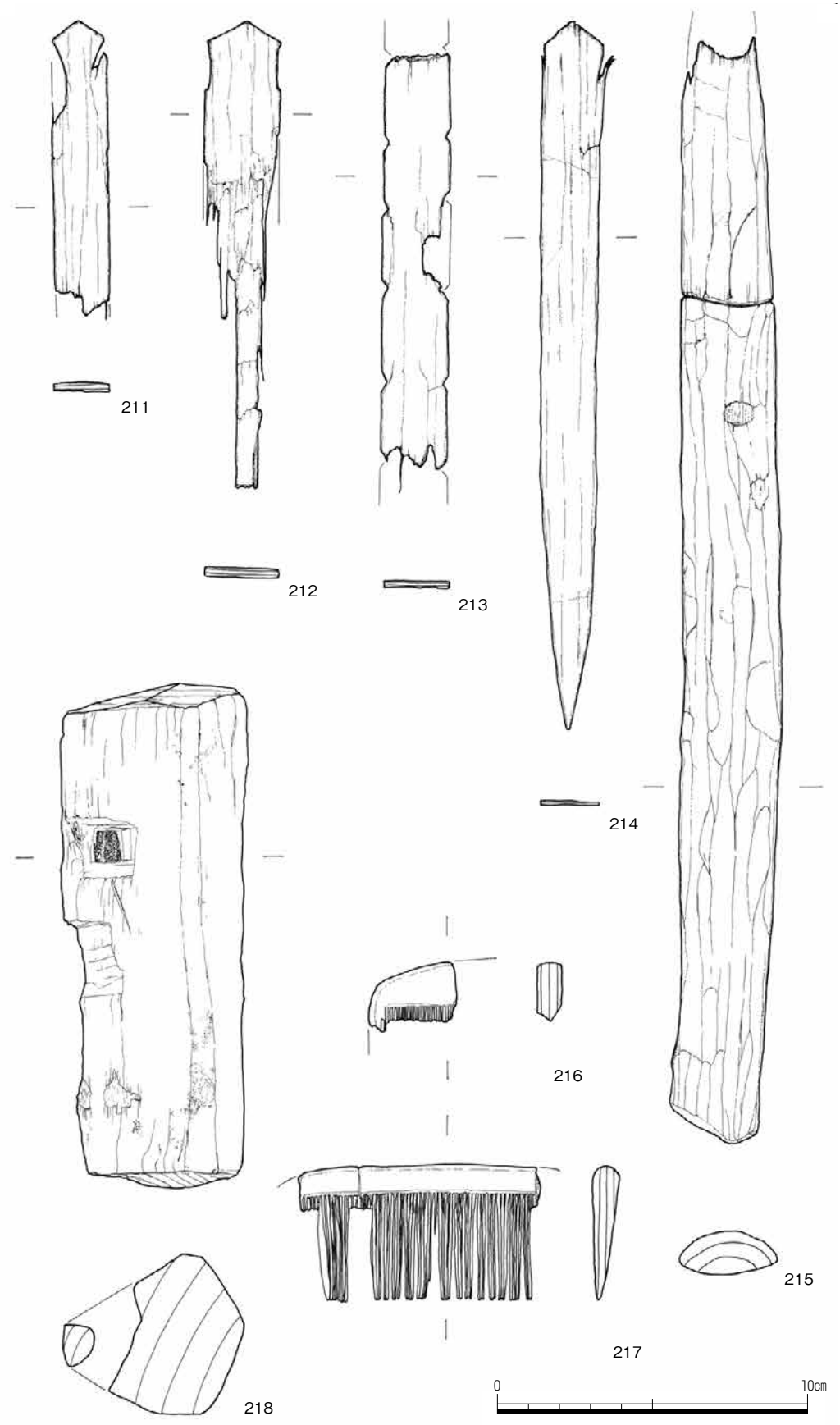


Fig. 176　SE4740中層出土木製品　1:2

ⅲ　中層出土木製品（Fig. 176，Ph. 143・144）

斎　串（Fig. 176-211～214）　211はCⅢ式で、残存長9.5cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmを測る。片側面の切込みおよび下半部が欠損。ヒノキの板目材。212はCⅢ式で、残存長15.1cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmを測る。下部は破損。ヒノキの板目材。213はⅥ式で、残存長13.5cm、幅2.2cm、厚さ0.3cmを測る。ヒノキの板目材。214はCⅢ式で、全長22.9cm、幅1.9cm、厚さ0.1cmを測る。薄くて精巧なつくりである。ヒノキ属の板目材。

加工棒（Fig. 176-215）　残存長35.6cm、幅3.3cm、厚さ1.4cmの加工棒である。尖端状に加工され、外面は丁寧に削られている。ウツギ属の辺材。

横　櫛（Fig. 176-216・217）　216は長方形で肩部に丸みをもたすAⅡ型式である。残存長2.8cm、残存幅2.4cm。イスノキの板目材。217は残存長7.8cm、幅4.4cmを測る。イスノキの板目材。

用途不明品（Fig. 176-218）　残存長16.4cm、最大幅6.1cm、最大厚5.2cmを測る。片側の側面下半は削られ、ノミ痕がみられる。四角柱の一辺から一辺へ、方形の孔が「く」字状に穿たれている。用途は不明である。穿孔の外側になる材が薄く、重量には耐えないことから、比較的負荷の少ないものを孔に通して利用したと考えられる。樹種はアカガシ亜属。

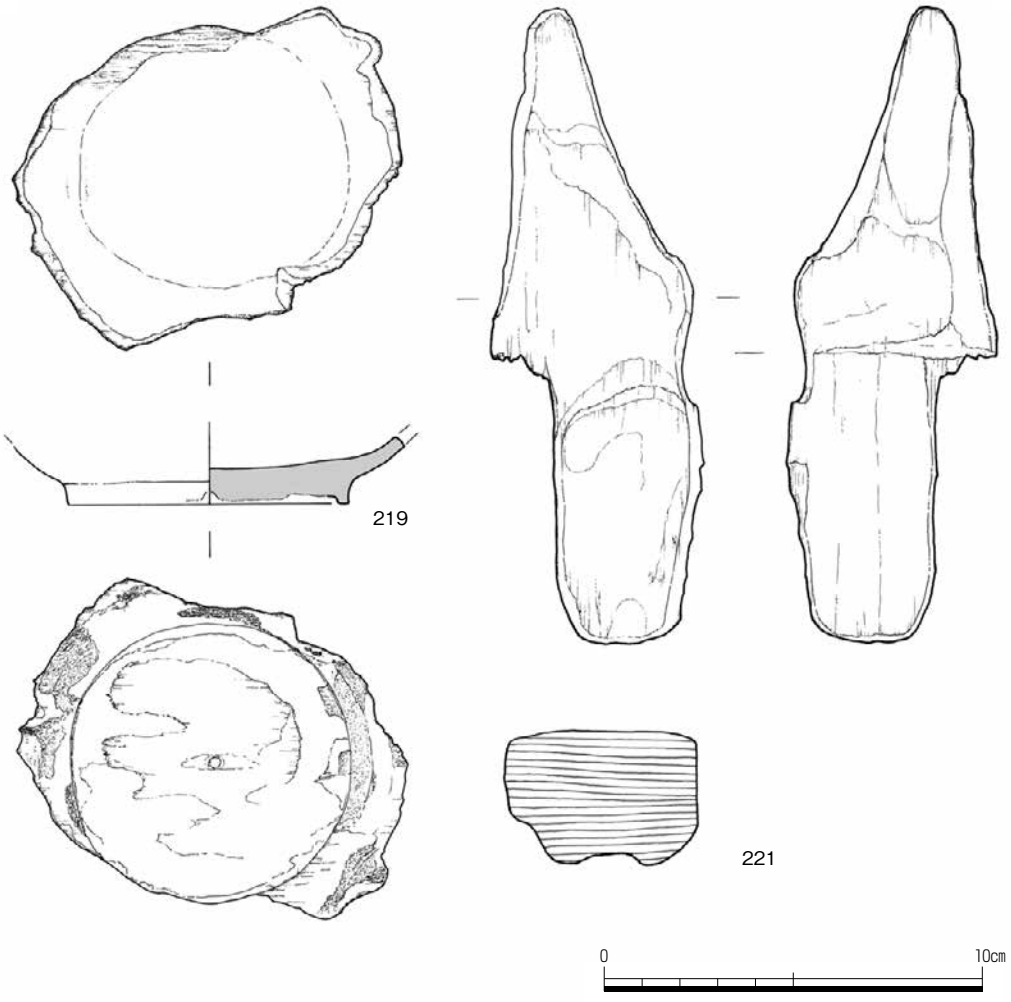


Fig. 177　SE4740上層出土木製品（1）　1:2

iv　上層出土木製品（Fig. 177～179，Ph. 143～145）

漆器椀（Fig. 177-219）　高台付の椀で、底部付近のみが残存する。底部内面中央に径0.2cm程度の窪みをもつ。外面に黒漆を塗布する。樹種はケヤキ。

用途不明品（Fig. 177・178-220・221）　221は残存長16.9cm、最大幅5.1cm、厚さ3.5cmを測る。全体に腐食が進む。樹種はスギ。用途は不明であるものの、井戸上層からの出土であることから、井戸枠の部材の可能性も考えられよう。220も221と同様の加工がなされた木製品である。残存長17.5cm、最大幅6.3cm、厚さ4.8cmを測る。樹種はスギ。

加工棒（Fig. 179-222～232）　断面形態に違いがあり、222～227は方形で、228～232は円形である。222は残存長18.3cm、幅1.2cm、厚さ0.9cmを測り、両端を欠く。樹種はヒノキ。223は全長18.7cm、幅0.8cm、厚さ0.7cmの尖端棒で、屈曲箇所がある。樹種はコウヤマキ。224は残存長16.8cm、幅1.0cm、厚さ1.0cmで、一端を欠く。樹種はヒノキ属。225は全長15.2cm、幅0.8cm、厚さ0.6cmの尖端棒。樹種はコウヤマキ。226は残存長14.5cm、幅1.3cmの尖端棒。上端を欠損。樹種はヒノキ属。227は残存長14.5cm、幅1.6cmの角棒。両端を欠く。樹種はヒノキ属。228は残存長10.2cm、最大幅0.9cmの丸棒。両端を欠損。樹種はコウヤマキ。229は残存長10.2cm、幅1.2cmを測る棒状品。表面が面取りされており、断面が多角形を呈する。両端を欠く。樹種はモミ属。230は残存長16.0cm、最大幅1.8cmの丸棒。両端を欠く。231は残存長16.3cm、最大幅1.7cmの丸棒。下端を欠く。230・231は散孔材の心持材。232は残存長20.2cm、幅1.3cmの加工棒。弓なりに曲がり、両端を欠く。樹種はニヨウマツ類。

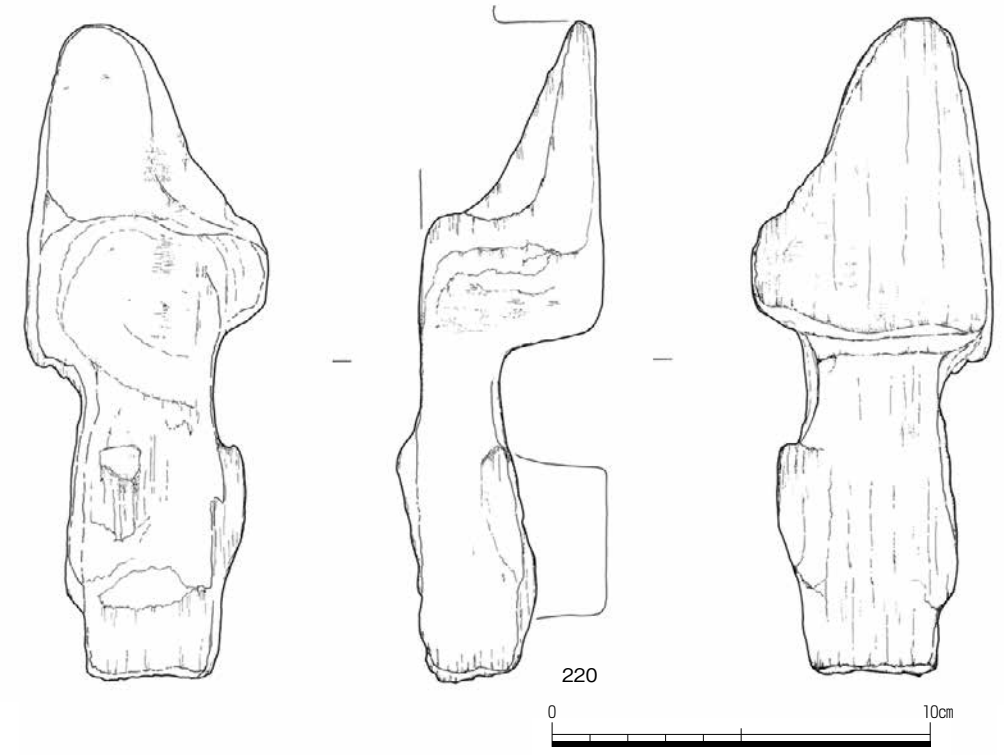


Fig. 178　SE4740上層出土木製品（2）　1:2

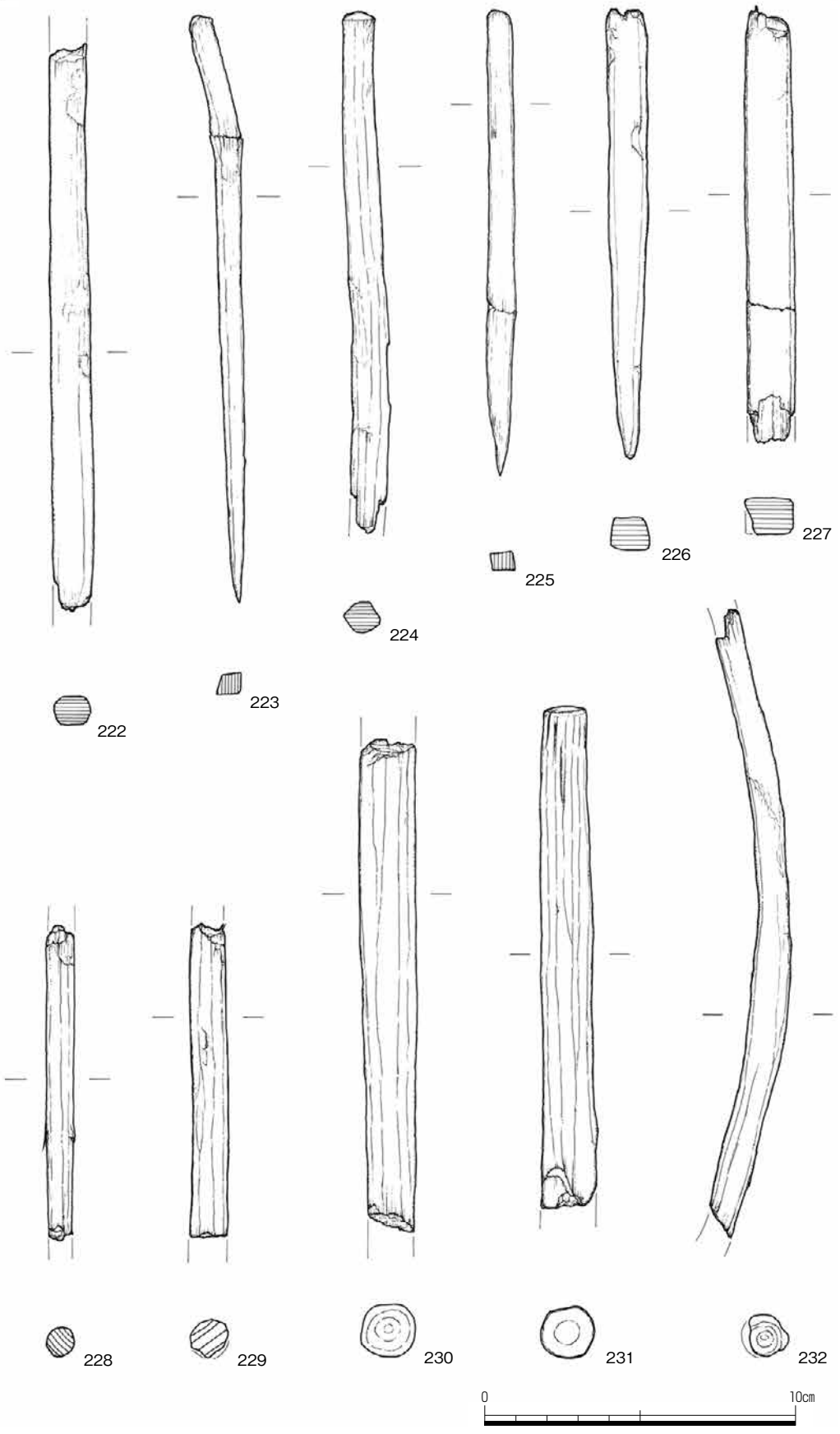


Fig. 179　SE4740上層出土木製品（3）　1:2

C　その他の遺構・包含層出土木製品

i　藤原京期の遺構出土木製品（Fig. 180・181，Ph. 145）

藤原京期の掘立柱建物や土坑等からも、少量の木製品が出土した。ここでは図化が可能であったものについて述べる。

掘立柱建物SB4332出土木製品（Fig. 180-233）　SB4332は藤原京期前半（Ⅲ-B期）の東脇殿。南妻柱の掘方から出土した。断面多角形状に加工した辺材で、残存長2.7cm、幅3.2cm、厚さ2.7cmを測る。用途は不明であるが、同様の木製品がSB4332より全部で4点出土している。樹種はコウヤマキ。

掘立柱建物SB4737出土木製品（Fig. 180-234）　SB4737は正殿SB5000の東北方に位置する藤原京期前半（Ⅲ-B期）の建物。234は残存長13.1cm、幅0.7cm、厚さ0.5cmを測る。先端を一側面から鋭く斜めに切断する。用途不明だが、籌木の可能性もある。ヒノキの板目材。

土坑SK4325出土木製品（Fig. 181-235・236）　SK4325は、藤原京期前半（Ⅲ-B期）から後半（Ⅲ-C期）への改作の際のゴミ捨て穴とされる土坑。235・236は用途不明の木製品。235は残存長25.4cm、幅3.3cm、厚さ1.2cmの板目材である。両端を欠く。中ほどに楕円形に穴が開く。樹種はコウヤマキ。236は残存長24.4cm、幅2.5cm、厚さ1.1cmの板目材。用途は不明であるが、先端は面取りしている。もう一方の端部は破損している。樹種はヒノキ。

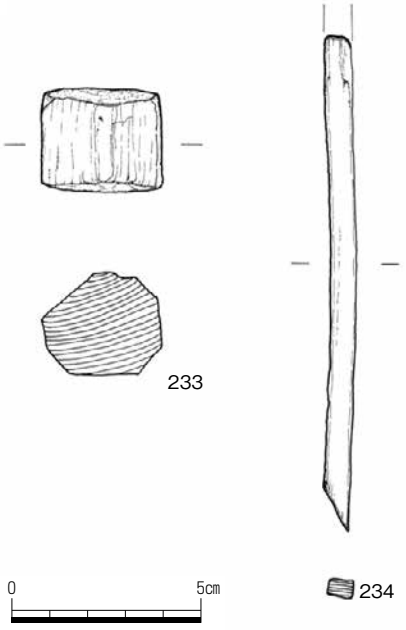


Fig. 180　SB4332・4737出土木製品　1:2

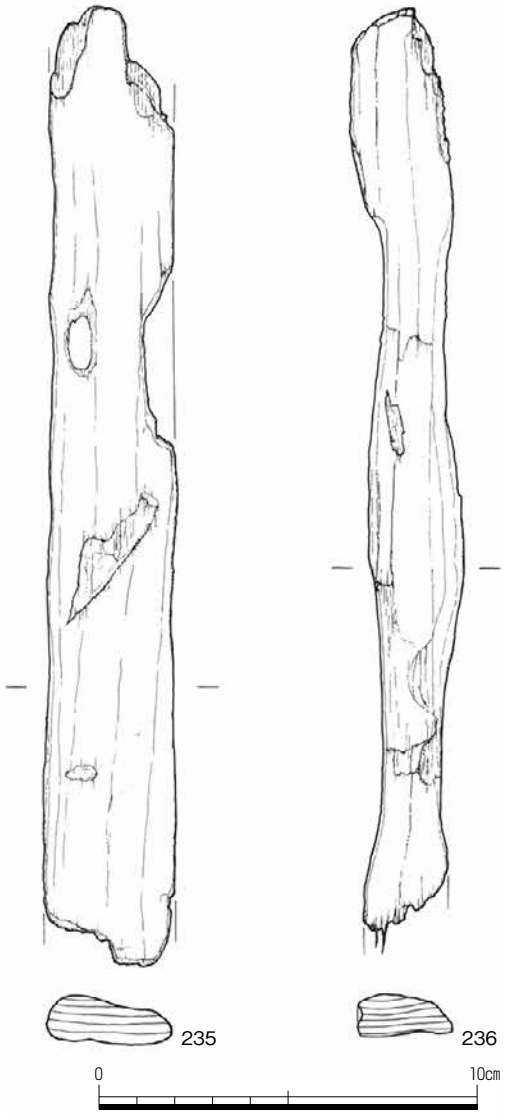


Fig. 181　SK4325出土木製品　1:2

ii　中世の井戸および包含層出土木製品（Fig. 182～186，Ph. 145～147）

調査区全域に所在する中世の井戸や包含層からも、多数の木製品が出土した。ここでは比較的まとまった資料を出土した13世紀末～14世紀の井戸SE4790出土のものについてまず述べ、その後は器種ごとに記述する。

a　SE4790出土木製品（Fig. 182・183，Ph. 145）

箸（Fig. 183-237～251）　棒状製品で、両端または一端を細く加工する。いずれも多角形状に丁寧に面取りしている。断面形はやや扁平な形態が多く、最大幅0.6cm、最大厚0.5cmほどのものが多い。樹種はヒノキが多い。法量等はTab. 6に示した。

加工棒（Fig. 183-252・253）　252は残存長11.2cm、幅0.7cm、厚さ0.5cmの尖端棒。やや太いが、箸の可能性もある。樹種はヒノキ属。253は両端を欠損している。残存長10.0cm、幅0.9cm、厚さ0.8cmを測る。樹種はコウヤマキ。

用途不明品（Fig. 183-254～256）　254は板状の部材。横方向の盛り上がりがあり、刃物による加工痕とみられる。残存長7.7cm、残存幅2.5cm、厚さ2.5cm。ムクノキの辺材。255は全面に加工痕がみられ、断面形態は台形を呈する。一端を欠損している。残存長は15.4cm、幅3.4cm、厚さ3.1cm。ムクノキの板目材。256は柄状の部材。断面形は隅丸方形で、一側面を山形に削り込み、突起を作り出す。残存長16.6cm、幅3.8cm、厚さ2.4cm。アカガシ亜属の柾目材。261・262と形態が類似する。

この他、黒漆の地に朱漆の印判の花文を内外面にあしらう漆絵椀の破片が出土した（Fig. 182）。蛍光X線分析により、朱色部分で水銀を検出した[1]。

Fig. 182　SE4790出土漆器

Tab. 6　SE4790出土箸一覧（単位：cm）

番　号	残存長	最大幅	最大厚	樹　種	備　考
237	21.2	0.6	0.5	ヒノキ属	両端先細り。
238	12.3	0.7	0.4	ヒノキ属	扁平な円柱状に加工。尖端状。
239	11.8	0.6	0.6	ヒノキ属	丁寧に面取りされている。
240	5.8	0.5	0.4	ヒノキ	断面五角形だが、隅が丸く円形に近い。
241	16.1	0.6	0.5	サワラ	両端先細り。
242	9.9	0.5	0.5	ヒノキ	尖端状。
243	13.6	0.6	0.5	ヒノキ	断面五角形に面取り。尖端状。
244	7.4	0.5	0.4	ヒノキ	尖端状。
245	10.6	0.6	0.4	ヒノキ科	尖端状。
246	20.4	0.6	0.4	ヒノキ	両端先細り。
247	15.5	0.6	0.6	ヒノキ	断面六角形。先細りに加工。途中屈曲。
248	12.9	0.5	0.4	ヒノキ	断面隅丸方形。先細りに加工。
249	15.0	0.7	0.3	ヒノキ	断面は扁平な五角形。先細りに加工。
250	7.2	0.6	0.5	ヒノキ属	断面六角形。
251	7.2	0.6	0.5	コウヤマキ	断面六角形に面取り。

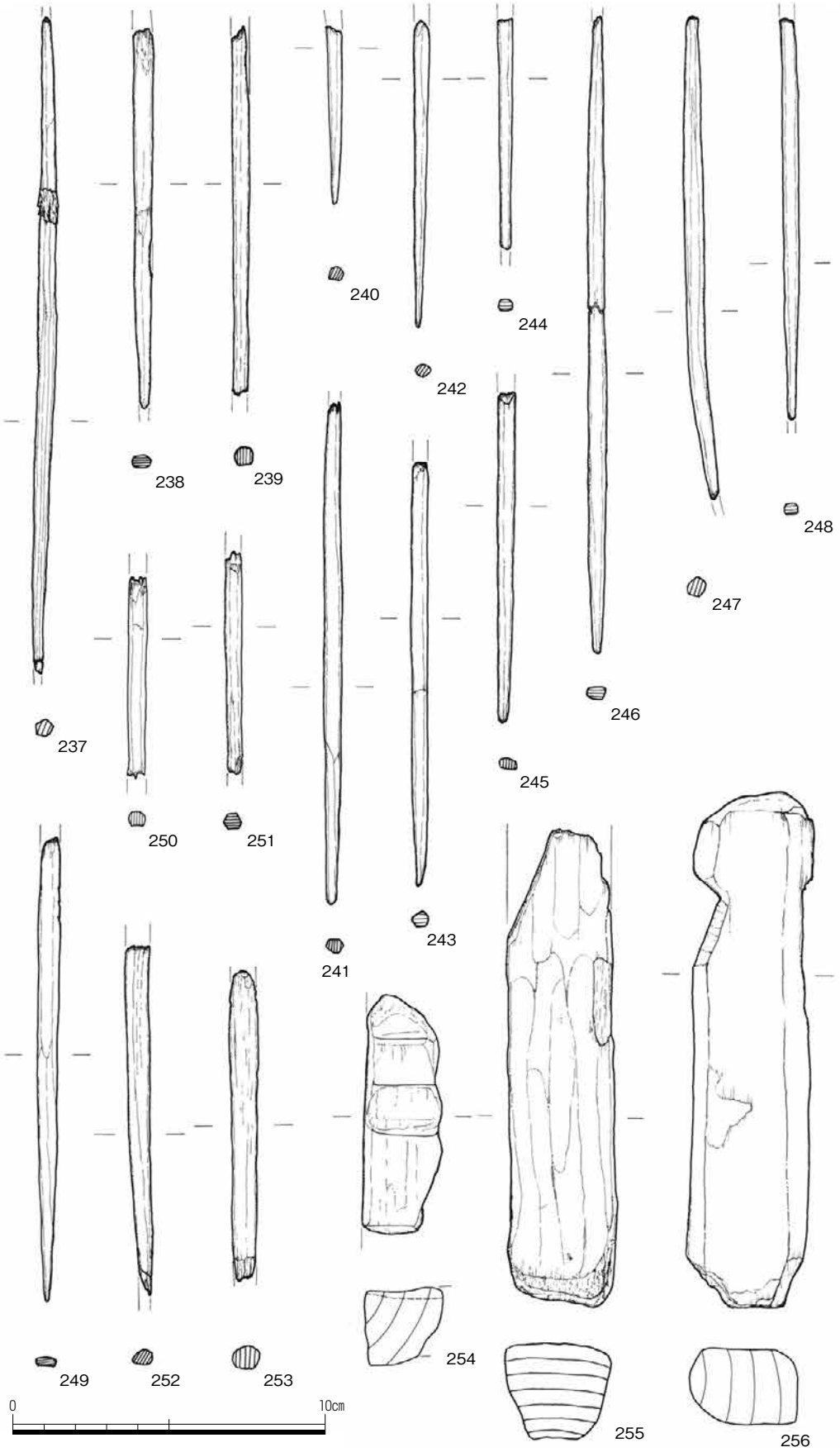


Fig. 183　SE4790出土木製品　1:2

b　その他の井戸・包含層出土木製品（Fig. 184～186，Ph. 145～147）

箸（Fig. 184-257）　残存長4.0cm、幅0.5cm、厚さ0.4cmの箸で、両端が欠損している。断面が五角形になるよう面取りされている。11世紀代の井戸SE4782より出土。樹種はヒノキ属。

横　櫛（Fig. 184-258）　残存長9.0cmの櫛。歯先は欠損し、両面から挽きだした歯の根元部分（挽実）と棟だけが残る。イスノキの板目材。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4474より出土。

漆器椀（Fig. 184-259）　赤漆が塗られた椀で、底部径5.8cm、残存高4.0cm、残存率は約50％である。高台の接地面には漆を塗っていない。体部には、黒色の図柄が描きこまれている。おそらく3箇所に同様の図柄が描かれていたであろう。樹種はトチノキ。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4463から出土。蛍光X線分析により赤色部分で鉄を検出した[2]。

刳　物（Fig. 184-260）　復元口径14.5cm、残存高8.3cmの刳物。外面にはノミ痕が明瞭に残る。小型の臼か鉢のような容器であったと推測できる。下半部を欠くため、脚部が続くかどうかは不明。井戸から出土しているので釣瓶とも考えられるが、器高が低すぎるきらいがある。ニヨウマツ類の心持材を刳り抜く。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4471より出土。

杭（Fig. 185-265）　包含層より出土した杭。尖端状にする加工痕が明瞭に確認できる。上端を欠く。断面は楕円形。残存長35.4cm、直径5.7cmである。トネリコ属の心持材。

用途不明品（Fig. 185・186-261～264・266・267）　261・262は柄状の部材。SE4790出土の256と形態がやや類似している。261は断面楕円形で、一端に鎌柄のすべり止めに似た山形突起を作り出す。一端を欠くが、その破損部に鉄釘を2cm程度打ち込んでいる。残存長23.8cm、柄の幅2.2cm、厚さ1.7cm。樹種はクリ。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4467から出土。262も断面形は楕円形で、一端に鎌柄の滑り止めに似た山形突起を作り出す。残存長23.6cm、幅2.8cm、厚さ2.0cm。下半部を欠く。コナラ亜属の心持材。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4473から出土。263は残存長9.8cm、幅6.5cm、厚さ4.0cmの木製品。用途は不明であるが、部材の一部かもしれない。樹種はヒノキ科。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4462出土。264は断面が楕円形を呈する杭状の木製品である。残存長13.2cm、幅2.2cm、厚さ1.2cmを測る。クリの板目

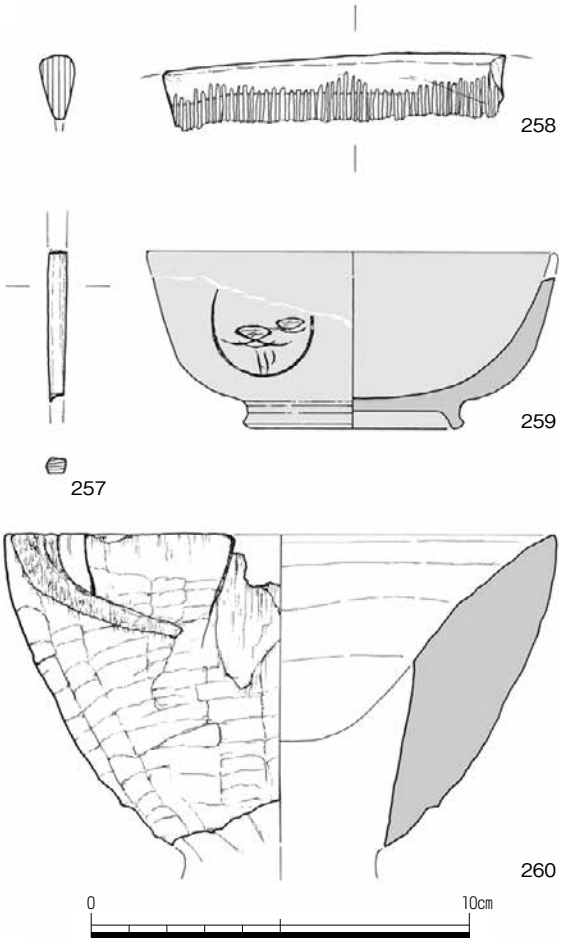


Fig. 184　中世井戸出土木製品（1）　1:2

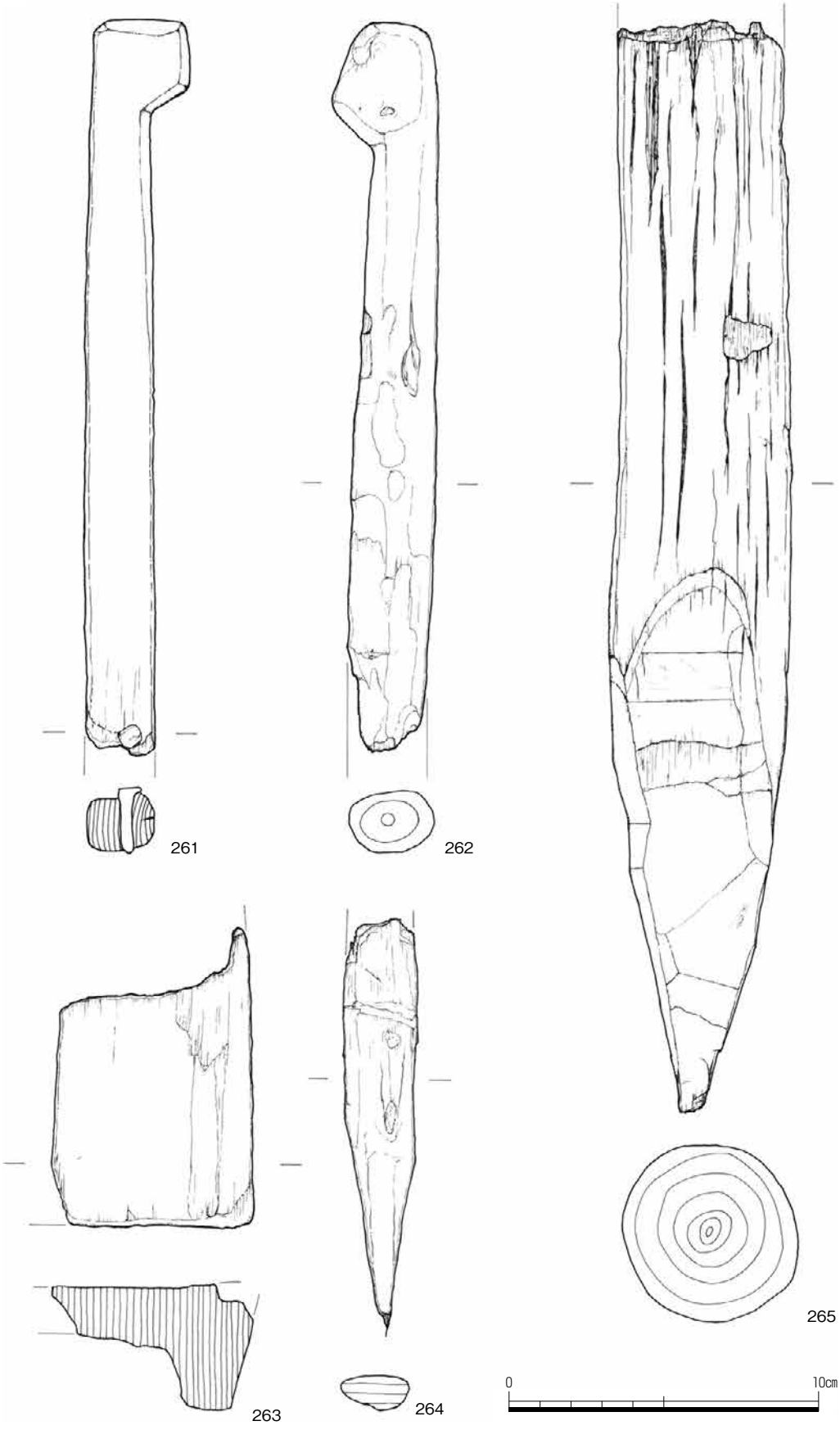


Fig. 185　中世井戸（2）・包含層出土木製品　1:2

材。中世の包含層より出土。266は板状の木製品。残存長30.6cm、幅2.7cm、厚さ0.6cm。双孔が2箇所にみられる。中央付近には丸い断面形態をした痕跡が2箇所に残る。ケビキのような痕跡が一方の面に確認できることから、曲物の底板を転用している可能性がある。用途は不明。ヒノキ科の板目材。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4461より出土。267は残存長30.6cm、幅1.7cm、厚さ1.1cmの棒状木製品。一端は斜めに切断されている。もう一端は欠損しているが、こちらも斜めに切りこんだように加工されていたと考えられる。スギの板目材。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4469出土。

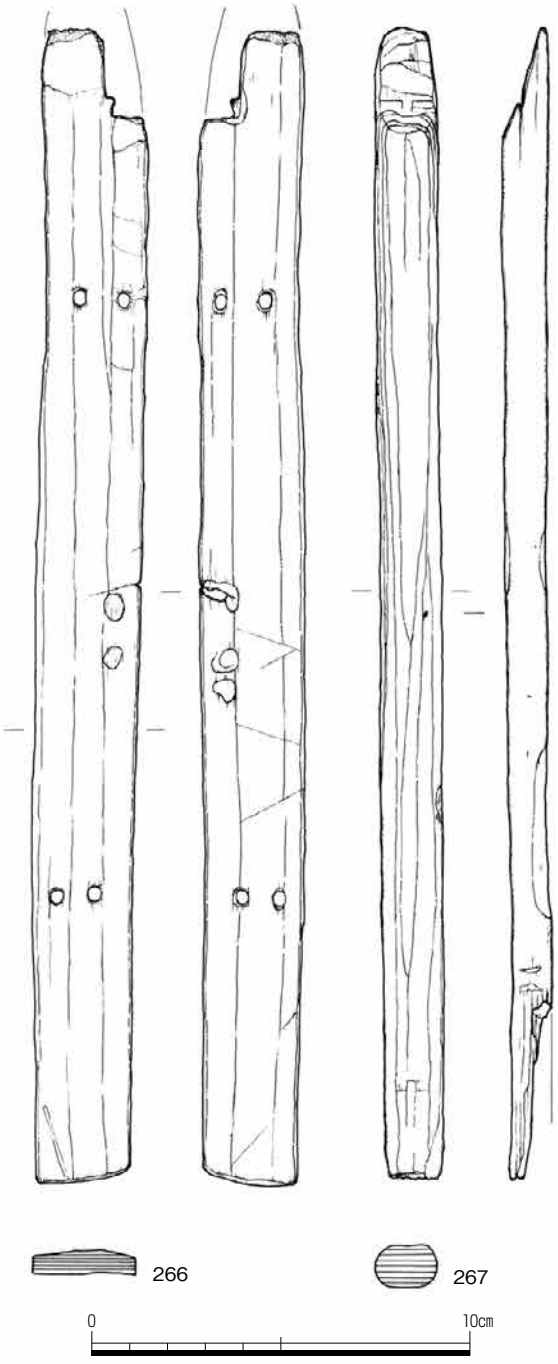


Fig. 186　中世井戸出土木製品（3）　1:2

D　中世井戸内出土曲物

ここで報告するのは、SE4177の出土例を除き、調査区内の井戸で井戸枠として使用した曲物である。曲物は可能な限り取り上げたが、いずれも遺存状態が悪く、図化できなかったものや写真撮影が不可能であったものも多い。

SE4177出土曲物（Fig. 187・Ph. 148-268）　中世の石組井戸SE4177から出土した釘結合曲物で、木釘は箍と側板をまとめて底板に固定するように6箇所打ち込まれている。箍の部分は1列内4段綴じである。底板の内面には削りの痕跡が明瞭に認められる。径14.4cm、高さ11.6cm。樹種は底板がスギ、側板と箍、木釘がヒノキ科である。

SE4468出土曲物（Fig. 187・Ph. 148-269・270）　平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4468は、井戸底に井戸枠として4点の円形曲物を重ねていた（Fig. 65）。ここでは、そのうち2点を図示した[3]。269は上から3段目に使われた曲物。底板はない。本体は樺皮の1列内4段綴じ。本体の口径は51.3cm、高さ23.0cm。本体の外面には斜め方向、内面には縦方向のケビキが残る。樹種はヒノキ。270は上から2段目に使われた曲物。底板はない。本体は樺皮の1列内6段綴じ。箍は木釘で固定する。内面には縦方向のケビキが残る。本体の口径は66.0cm、高さ51.6cm。箍の口径は66.6cm。樹種はヒノキ科。

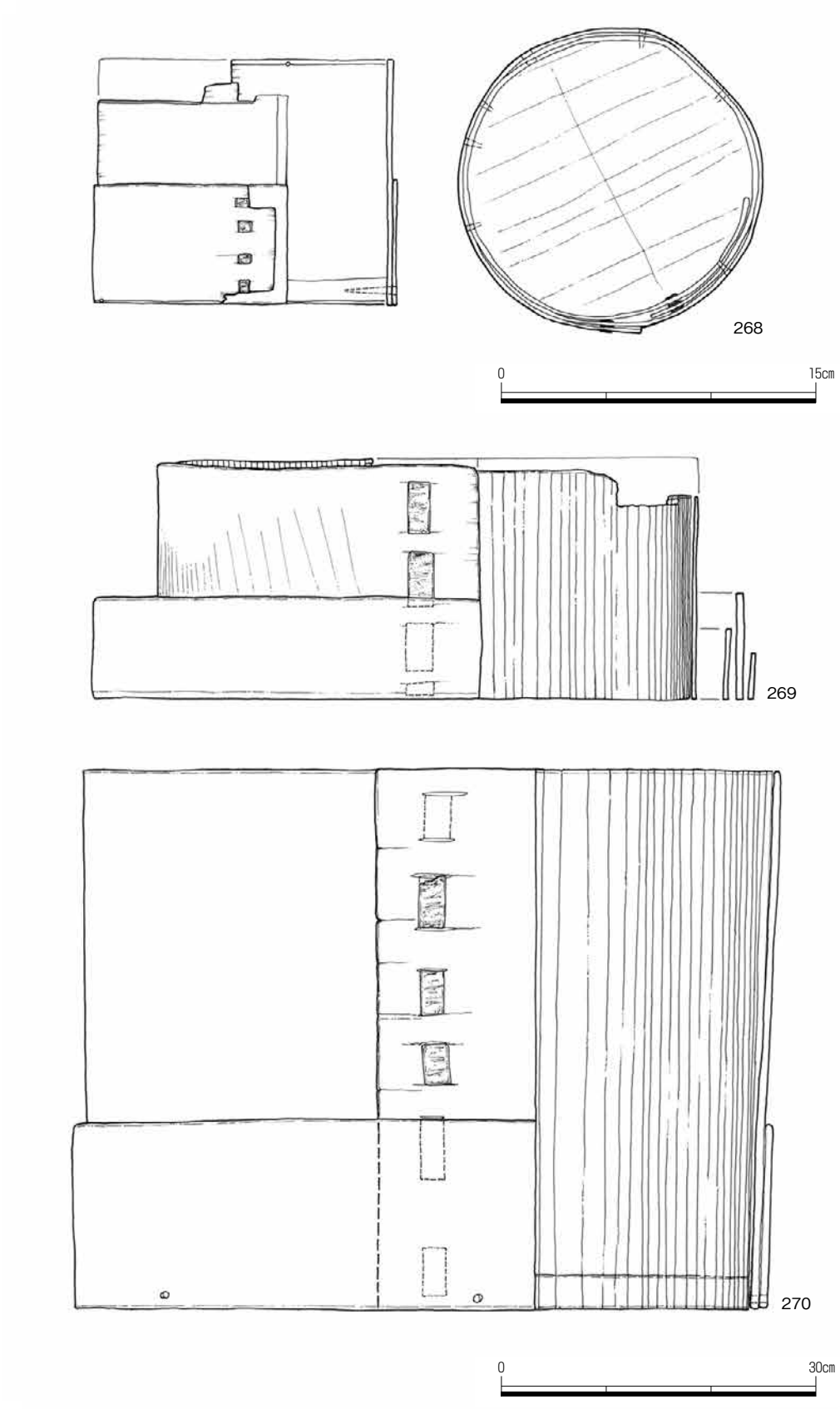


Fig. 187　SE4177・4468出土曲物　1:6（268のみ 1:3）

SE5001出土曲物（Fig.188-271）　14世紀の井戸SE5001から出土した曲物。本体は樺皮の1列内8段綴じ。箍は1列内4段綴じ。本体と箍は木釘で固定する。口縁部付近に穿孔を施す。本体の内面には縦方向のケビキが残る。本体の口径は48.8cm、高さ23.5cm。箍の口径は50.4cm。樹種はヒノキ科。

SE4464出土曲物（Fig.188-272・273）　平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4464は上下二段、計3点の曲物を井戸枠に使用していた（別図2）。272は上段の下に使用されたもの。樺皮の1列内4段綴じで、口径52.0cm、高さ23.0cm。外面には斜め方向、内面には縦方向のケビキが認められる。樹種はヒノキ科。273は上段の上に使用されたもの。本体は樺皮の1列内5段綴じで、口縁部に穿孔を施す。内面には縦方向のケビキが認められる。口径54.0cm、高さ23.6cm。箍は1列上内下外3段綴じ。口径54.8cm。樹種はヒノキ科。

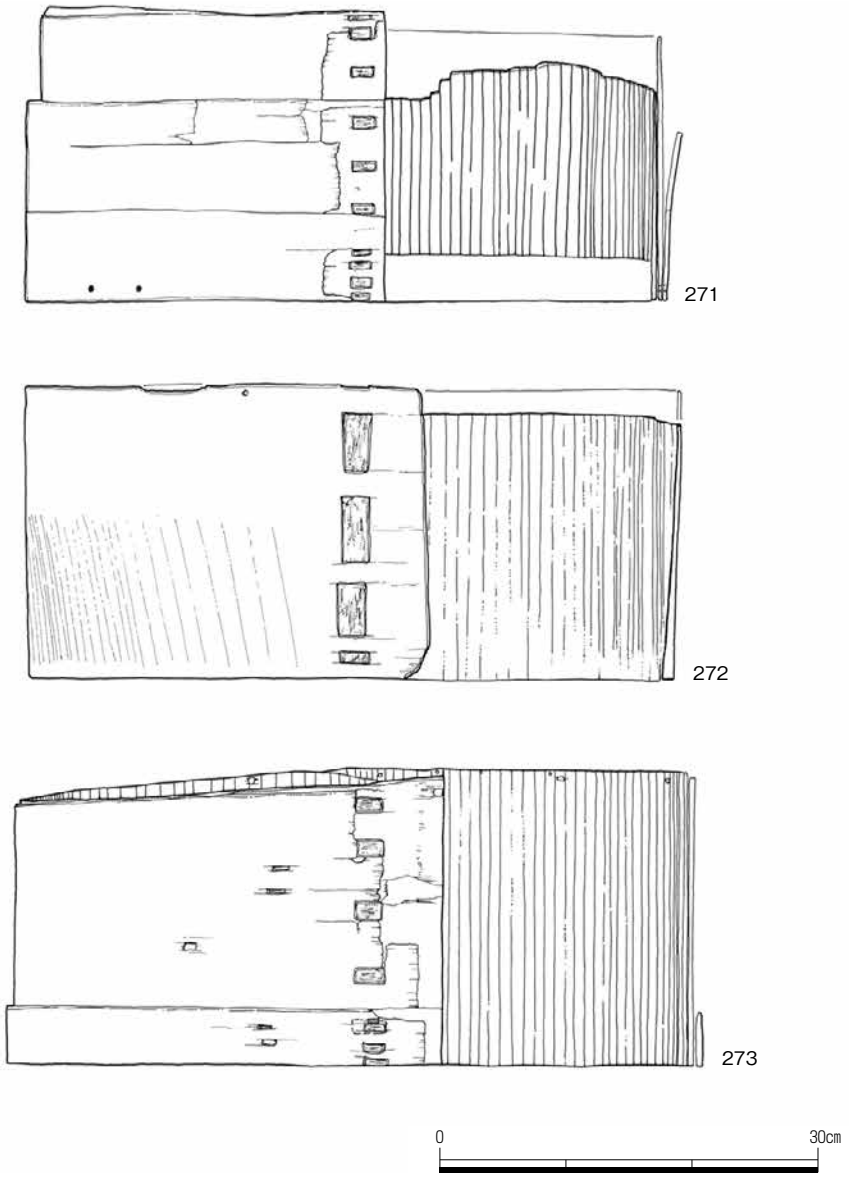


Fig. 188　SE5001・4464出土曲物　1:6

E　建築部材・井戸枠

i　建築部材

建築部材は、掘立柱建物や掘立柱塀の柱穴から柱根11点と礎板２点が出土している。全体として柱根や礎板が遺存している柱穴は少なく、部材の遺存状況もあまり良くない。ここでは数少ない遺存状況の良い部材を中心に、遺構ごとに報告する。

a　藤原京期の掘立柱柱穴から出土した部材

SA4730出土部材（Fig. 191-4）　Ⅲ-Ｂ期の南北塀SA4730の南端から３基目の柱穴から、柱根が出土した。直径22.5㎝の円柱で、長さ81.5㎝が遺存する。側面の下部に幅15.0㎝、高さ15.0㎝の窪みがあり、えつり穴の痕跡とみられる（Fig. 189）。腐食により側面には加工痕跡は残らないが、北東側は比較的当初に近い面が残る。底面は平坦で、ノコとみられる加工痕が残る。樹種はコウヤマキ。

SB5000出土部材（Fig. 191-1～3）　Ⅲ-Ｂ・Ｃ期の正殿SB5000からは柱根３点、礎板１点が出土した。礎板と、残りの良い柱根２点を報告する。１はSB5000の「ホ二」の柱穴から出土した礎板。上面33.0×26.0㎝、下面38.3×34.3㎝の方形平面、厚さ9.8㎝で側面は台形を呈する厚板材である。板目材の木表を上面とする。柱のアタリ痕跡はみられない。下面は割れ肌の部分とチョウナ痕跡が残る部分があり、板を割る際に出っ張って残った部分のみチョウナはつりしたものとみられる。両側面にノタを残す。側面と下面がなす鋭角をヨキまたはチョウナではつった痕跡が残る。２はSB5000の「ホ三」の柱穴から出土した柱根。直径34.2㎝の芯持ち材で、長さ64.6㎝が遺存する。南面は腐食し欠損するが、北面の下部は比較的腐食が少なく、加工面に近い平らな面が残る。丸太材を多角形断面になるように表面を加工していたとみられる。底面は柱の垂直方向に対しやや角度をつけて切断している。３はSB5000「ホ六」の柱穴から出土した柱根。直径35.1㎝の心持丸太材で、長さ64.2㎝が残存する。根元の10㎝ほど当初の材表面が残るが、腐食のため加工痕跡はみられない。柱根はいずれも底面に加工痕跡はみられないが比較的平滑で、ノコにより切断したとみられる。１～３の３点とも、樹種はコウヤマキ。

Fig. 189　SA4730出土柱根のえつり穴

Fig. 190　SB4445出土柱根の底面加工痕跡

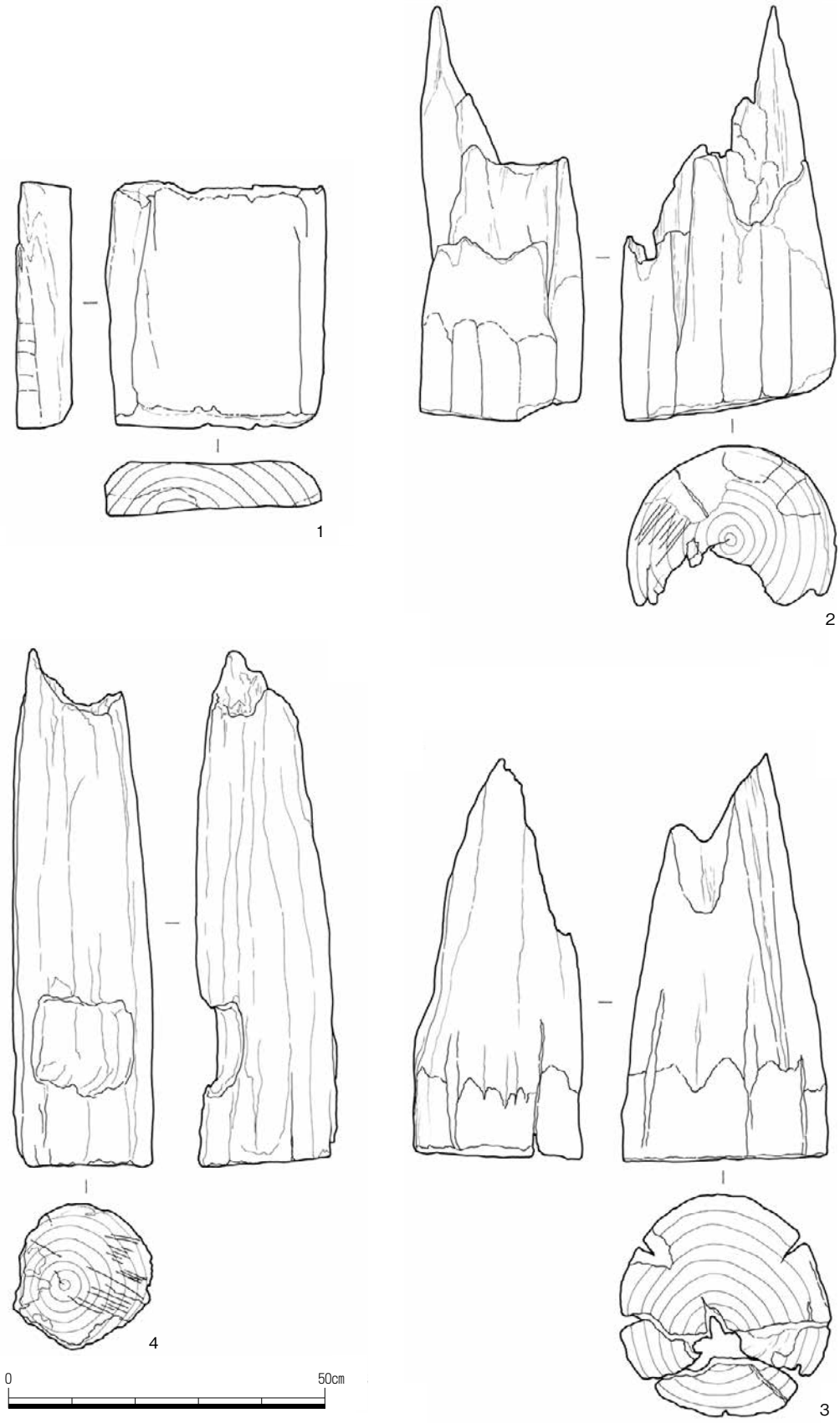


Fig. 191　SA4730・SB5000出土部材　1:10

SB4332出土部材（Fig.192-5）　Ⅲ-Ｂ期の建物SB4332の「ト一」の柱穴から出土した礎板。22.8×19.1㎝の方形平面、厚さ10.4㎝の厚板材である。大径材を年輪に沿って割った材とみられ、側面は柾目を呈する。上面と側面には部分的にチョウナ痕跡がみられ、割れ肌の凸部分のみチョウナではつっていたとみられる。木口にはノコの痕跡が重複して残っており、ノコを入れる方向を何度か変えながら切断したものであろう。樹種はヒノキ。

SB4330出土部材（Fig.192-6）　Ⅲ-Ｃ期の建物SB4330の「へ一」の柱穴から出土した柱根。直径30.0㎝の円柱で、長さ48.0㎝が遺存する。芯持ちではあるが芯は隅に寄り、丸太材を４つ割りした木取りとみられる。側面に加工面とみられる面が残る個所があり、曲面と割った面の間の角を面取りしたものと考えられる。底面には凹凸があり、明瞭ではないがヨキの痕跡とみられる。樹種はコウヤマキ。

SB4331出土部材（Fig.192-7）　Ⅲ-Ｃ期の建物SB4331の「チ一」の柱穴から出土した柱根。直径32.5㎝の丸太を半割にした芯去り材で、長さ62.5㎝が遺存する。不明瞭ながらも曲面には面取りの痕跡が残る。底面にはヨキの痕跡がみられる。樹種はコウヤマキ。

SB4738出土部材（Fig.192-8）　Ⅲ-Ｃ期の建物SB4738の「ロ六」の柱穴から出土した柱根。腐食が激しく材径も当初より小さくなっているとみられるが、最大径16.0㎝、長さ29.0㎝が遺存する。心去材で、木口の年輪からは、丸太を４つ割りした木取りとみられる。樹種はコウヤマキ。

b　奈良時代以降の掘立柱柱穴から出土した部材

SB5050出土部材（Fig.192-9）　調査区北西部にあるⅣ期の総柱建物SB5050では、２基の柱穴に柱根が遺存していた。いずれも腐食のため粘土化した部分が多く、木質は小片となって出土している。９はこのうち「ハ一」の柱穴から出土した柱根で、３材に分かれて出土した。いずれも腐食が激しく互いに接合する箇所もないが、出土状況とあわせると、直径約40㎝の円柱に復元できる。樹種はコウヤマキ。

SB4445出土部材（Fig.192-10）　Ⅵ期の建物集中区のうちＢ区に位置するSB4445の南西隅の柱穴から出土した柱根。直径15.4㎝の円柱で、長さ29.2㎝が遺存する。心去材で、大径材を４つ割りないしは６つ割りした木取りとみられる。側面にはチョウナ痕跡が残り、チョウナで円柱に加工したとみられる。底面にもチョウナとみられる痕跡が不明瞭ながらも残る（Fig.190）。樹種はコウヤマキ。

ⅱ　井戸枠

木製の井戸枠が出土した井戸は、Ⅲ期のSE4335、Ⅲ期からⅣ期のSE4740、Ⅴ期のSE4765、Ⅵ期のSE4467・4474・5940の合計６基である。このうちSE4740は方形横板組井戸で、これを除く５基は方形または円形の縦板組井戸である。ここでは調査区内最大規模であり、かつ唯一の方形横板組井戸であるSE4740の井戸枠部材について報告する。なお、井戸枠として使用された曲物については本節「Ｄ　中世井戸出土曲物」で報告している。

SE4740は一辺0.9ｍ、深さ3.6ｍの方形横板組井戸である。井戸枠は組まれた状態で出土した。隅柱を井戸掘方底に立て、底から0.5～0.6ｍの高さで背違いに枘穴をあけ、横桟を枘差しして隅柱を固定する。横板は隅柱の外側にあて、粘土で押さえる。井戸枠として不要な仕口が隅柱

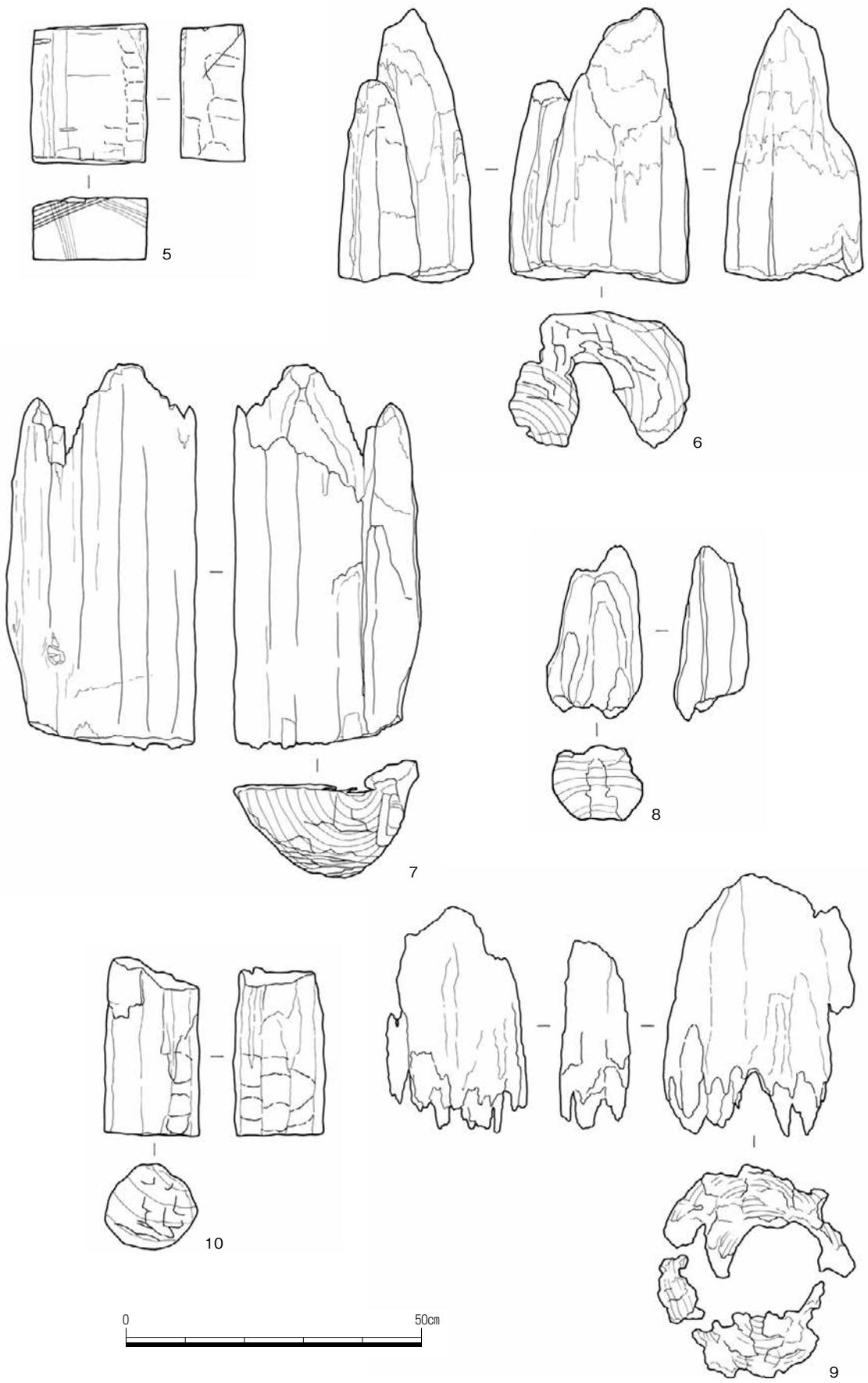


Fig. 192　SB4330・4331・4332・4445・4738・5050出土部材　1:10

４点、横桟１点、横板３点に認められ、建築部材などを転用したとみられる。以下、部材の種類ごとに詳述する。

隅　柱（Fig.196・197）　井戸枠の四隅に立てた柱。角材で底の方が残りは良く、上端は腐食し細くなる。部材には枘穴を中心とした仕口が多数残されており、その用途と形状から３種類に分類できる。隅柱に横桟を枘差しするための枘穴を「新枘穴」とする。新枘穴は各部材に２箇所、背違いに設けられており、東西方向のものが南北方向のものより一段高い位置にある。この他に井戸SE4740の組立には関係ない仕口が各部材に２～６箇所みられる。その寸法と形状から、６㎝前後で方形の小枘穴を「旧枘穴」、長さ12～３㎝の窪みを「旧仕口」とする。樹種は、11～14の４点ともコウヤマキ。

北西隅柱（Fig.196-11）は南北方向15.3㎝×東西方向13.2㎝、長さ317.1㎝が残る心持ちの角材。新枘穴は、南面が底から56.0㎝の位置に幅6.4㎝×高さ11.4㎝、東面が底から71.5㎝の位置に幅6.1㎝×高さ8.7㎝であけられており、その周囲には横桟断面の圧痕がみられる（Fig.193）。旧枘穴は北面に２箇所ある。

北東隅柱（Fig.196-12）は南北方向17.5㎝×東西方向14.5㎝、長さ317.8㎝が残る心去りの角材。新枘穴は、南面が底から57.2㎝の位置に幅6.2㎝×高さ10㎝、西面が底から69.8㎝の位置に幅5.5㎝×高さ12.0㎝であけられており、その周囲には横桟断面の圧痕がみられる。旧枘穴は、西面に３箇所、北面に２箇所ある。うち西面の２箇所は穴が北面にかかる（Fig.194）。先端部分の西面から北面にかけて旧仕口が幅5.7㎝×高さ13.0㎝×深さ4.2㎝（以下、●×●×●㎝とする。）で残る。

南西隅柱（Fig.197-13）は南北方向14.9㎝×東西方向17.6㎝、長さ311.0㎝が残る心持ちの角材。新枘穴は、北面が底から54.7㎝の位置に幅7.4㎝×高さ12.5㎝、西面が底から68.6㎝の位置に幅7.2㎝×高さ11.4㎝であけられており、その周囲には横桟断面の圧痕がみられる。旧枘穴は、西面に３箇所、北面に２箇所ある。

南東隅柱（Fig.197-14）は東西・南北方向とも16.0㎝、長さ316.5㎝が残る心持ちの角材。新枘穴は、北面が底から56㎝の位置に幅7.0㎝×高さ12.0㎝、西面が底から70.0㎝の位置に幅7.6㎝×高さ12.0㎝であけられており、北面新枘穴の周囲には横桟断面の圧痕がみられる。旧枘穴は、南面・東面に各２箇所ある。先端部分の南面から東面にかけて旧仕口が9.5×11.5×10.0㎝で残る（Fig.195）。

新枘穴はいずれもノミ痕跡が明瞭に残るが、それ以外の枘穴や仕口に加工痕跡はほぼみられない。新枘穴の高さを南北方向、東西方向ごとに比較すると、南北方向上端の差が0.8㎝と最も少ない。東西方向も上端の方が差が少なく2.0㎝である。枘穴そのものの高さが２㎝以上異なる

Fig.193　北西隅柱新枘穴と横桟圧痕

Fig.194　北東隅柱旧枘穴

Fig.195　南東隅柱旧仕口

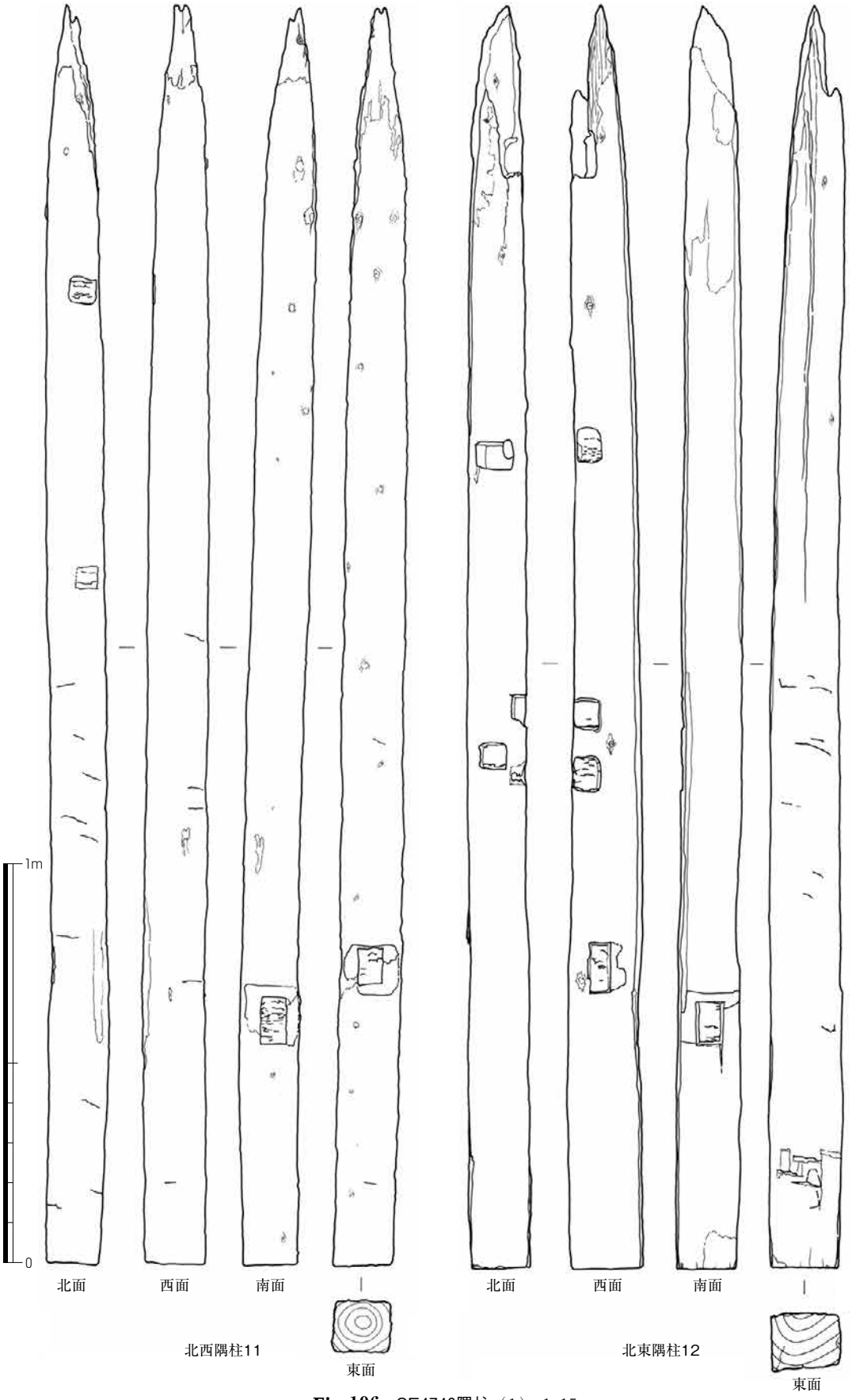


Fig. 196　SE4740隅柱（1）　1:15

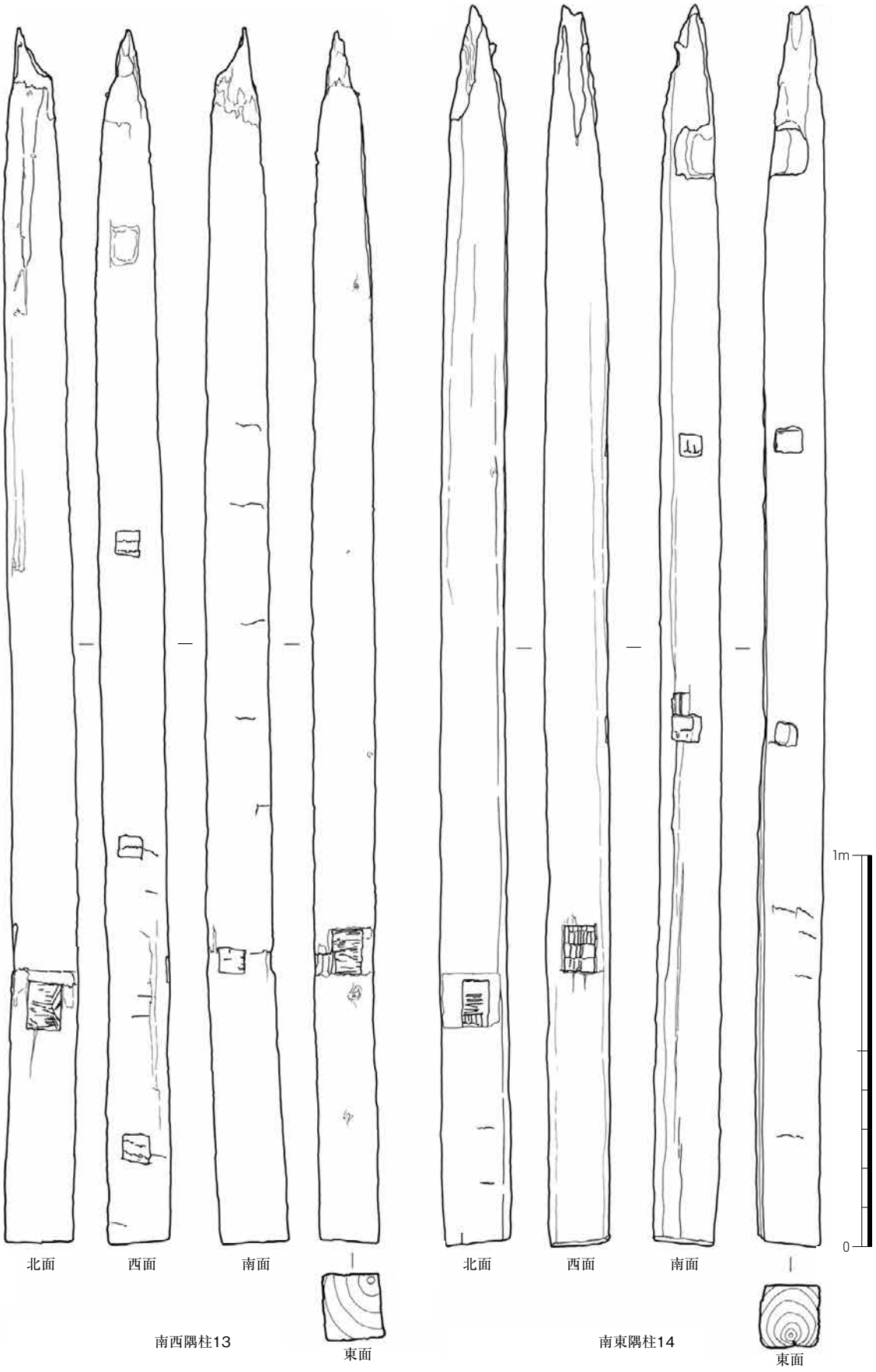


Fig. 197　SE4740隅柱（2）　1:15

ので、枘穴の位置は上端を基準に加工していた可能性も考えられる。北東隅柱を除き、旧枘穴は新枘穴のない面に残されている。いずれの材に残る旧枘穴も新枘穴と同様に、隣り合う2面にのみ確認された。旧枘穴は平面寸法と旧枘穴同士の間隔が比較的揃っている。旧仕口も旧枘穴との間隔が60～70cmと旧枘穴同士の間隔と揃っており、同時期に機能していた可能性もある。

横　桟（Fig. 200）　隅柱の間に渡し、固定した横架材。角材で両端に角枘を造り出す。東西方向のものは南北方向のものよりやや太い。

西横桟（15）は長さ105.9cm、幅14.5cm、高さ14.2cmの角材。心去材で、木口年輪より丸太を4つ割りにした材とみられる。枘の寸法は北側が6.9×6.2×11.5cm、南側が5.0×5.0×9.6cm。木口には枘を切り出したノコの痕跡と、それを整えたノミの痕跡が残る。また、北側枘の下端に枘穴に納まっていた際の圧痕が残る。樹種はヒノキ。

東横桟（16）は長さ105.3cm、幅14.5cm、高さ14.3cmの角材。心去材で、木口年輪より丸太を4つ割りにした材とみられる。枘の寸法は南側が6.5×6.0×11cm、北側が5.5×8.0×11.8cm。枘の根元にノミの痕跡が残る。また、両枘の下端に枘穴に納まっていた際の圧痕が残る。樹種はヒノキ属。

南横桟（17）は長さ107.0cm、幅10.9cm、高さ11.8cmの角材。心去材で、木口年輪より丸太を4つ割りにした材とみられる。材中央部と枘部の断面寸法にあまり差がなく、側面を両端から15～20cmの長さで斜めにそぎ落とし角枘とする（Fig. 199）。圧痕及び風食差より、枘として隅柱に納まっていた部分の寸法は西側が6.6×6.0×11.0cm、西側が7.5×6.6×11.3cm。樹種はコウヤマキ。

北横桟（18）は長さ103.0cm、幅14.5cm、高さ12.3cmの角材。心持材で、ノタが多く残り、径15～16cmの丸太材を側面4面そぎ落としたとみられる。両端に角枘を造り出す。枘の寸法は東側が4.0×6.5×11.9cm、西側が4.9×6.3×9.0cm。内側に2箇所、外側に1箇所、井戸枠とは関係ない枘穴が残る（Fig. 198）。4.3～3.5×4.0～3.3cmの方形で深さは2.0～2.7cmと浅い。SE4740に転用する前の仕口で、穴の浅さから当初は丸太材のまま使用していた可能性がある。樹種はヒノキ属。

横　板（Fig. 201～203）　井戸枠の壁をなす板材。東西南北各面に11～12枚を隅柱の外側にあてて積み上げられていた。東西南北の各辺について、上から「1、2……」と番付をしながら取り上げたが、一部、同じ番号に2材が割り当てられ、さらに「上」「下」を付すものがある（「南2下」など）。横板は製材方法により、内側、外側とも平坦に加工した「板材」、内側のみ平

Fig. 198　北横桟角枘

Fig. 199　南横桟角枘

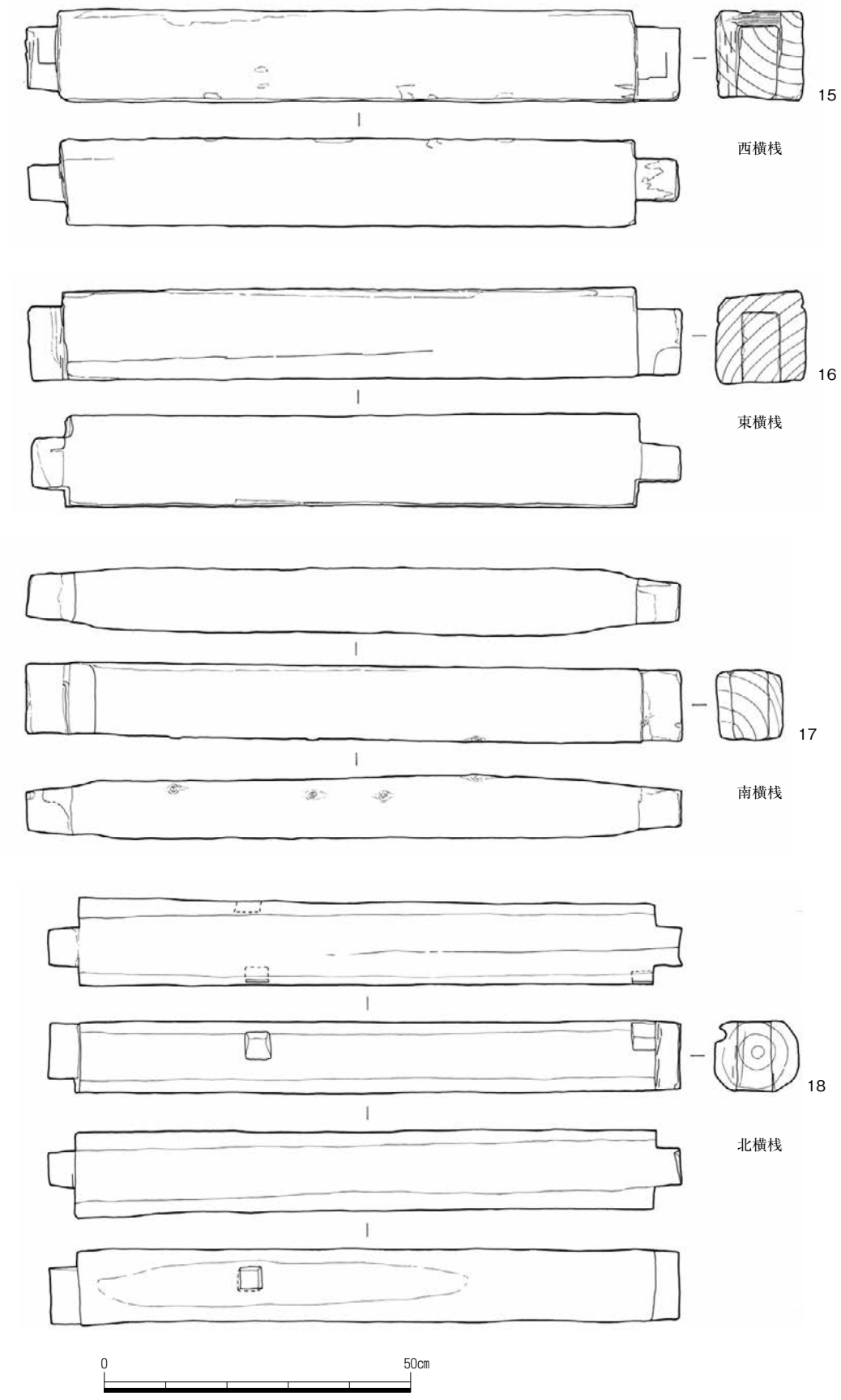


Fig. 200　SE4740横桟　1:10

坦に加工し外側は割れ肌のままの「割板材」、外側はノタの曲面を残す「背板材」の3つに分類できる。腐食が激しくいずれに該当するか判断しかねるものも数点あった。ここでは、各種類のうちの残りの良い部材と、仕口をもつ部材について報告する。樹種同定は横板全点について行い、結果は312頁のTab. 7にまとめた。

板材（Fig. 201）は計18点あった。内側、外側ともチョウナで仕上げ、また端部を斜めにそぎ落とすものが多い。厚さは3～4㎝のものが多く、最大でも5㎝である。木取りは柾目材と板目材の両方がある。南11（19）は長さ116.5㎝、幅27.5㎝、厚さ4㎝の板材。心去りの板目材で、

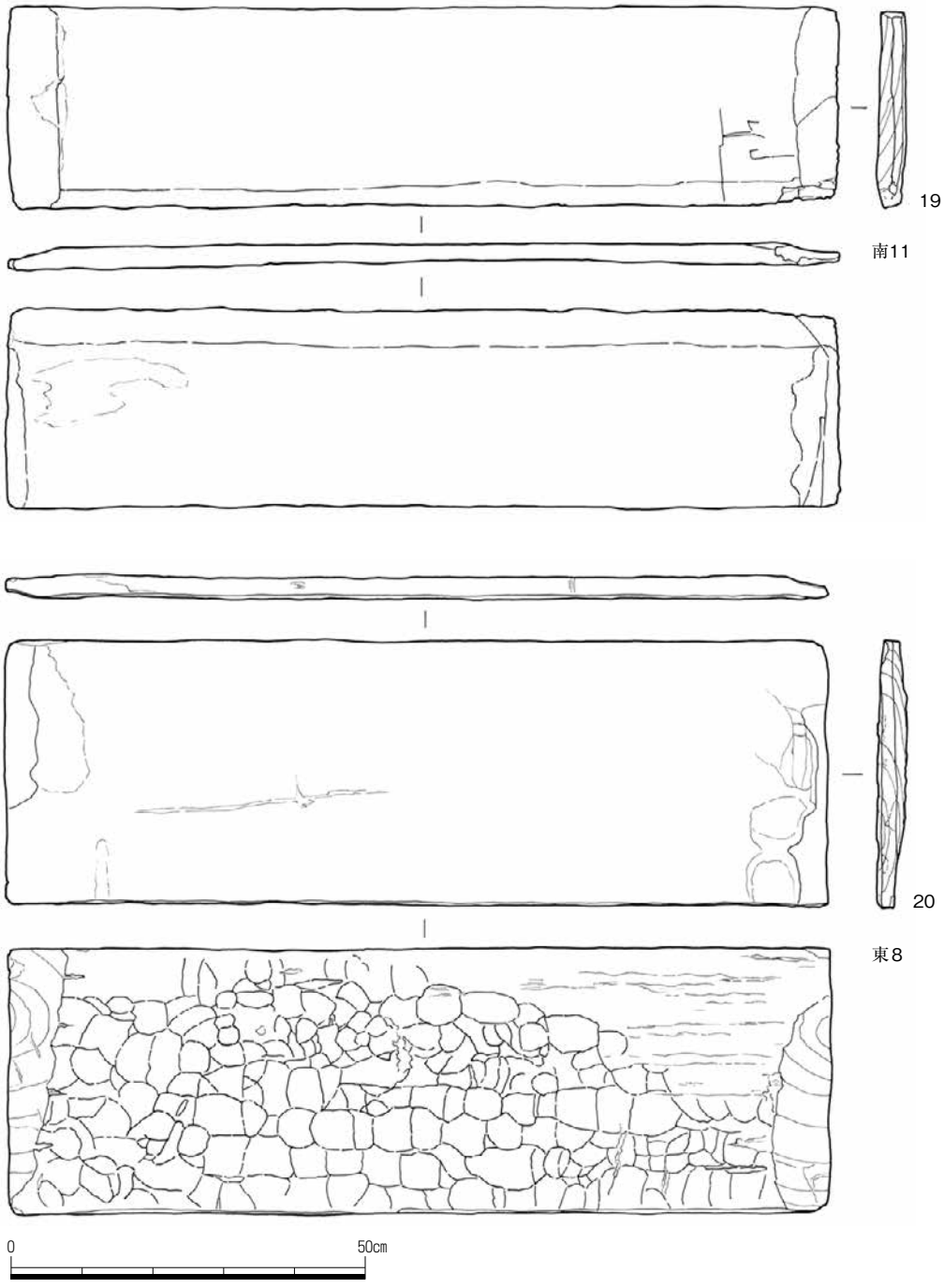


Fig. 201　SE4740横板（1）　1:10

木表が内側にあたる。内側両端を６～７㎝の長さで厚さ２㎝まで削ぎ落す。内側両端には隅柱の圧痕が残る。腐食がやや進み、加工痕跡は外側にチョウナ痕跡がわずかに残るのみである。東８（20）は長さ115.8㎝、幅37.3㎝、厚さ3.7㎝の板材。心去りの板目材で、木裏が内側にあたる。内側、外側とも端部を厚さ2.2㎝までそぎ落とす。内側には隅柱のアタリとみられる風食差が残る。外側にはチョウナ痕跡がよく残り、刃幅は６㎝程とみられる（Ph.154）。

割板材（Fig.202）は13点あった。内側は平坦に仕上げ、外側は割れ肌のままとする。厚さは７㎝程度のものが多く、最大10㎝のものもある。外側には木の繊維を切断するヨキ痕跡がままみられる。側面にチョウナまたはヨキによるはつり痕跡が残るものもあり、丸太の表面を加工した後、割れ板に製材したものとみられる。木取りは柾目と板目の２種類がある。柾目の材はミカン割りに近い形状で、板幅は原木の半径より小さい。板目は心持か、心去りでも心に近いいわゆる中杢目の木取りであり、板幅が原木の直径に近いと考えられる。前者の例として西７（22）、後者の例として東４（21）がある。西７は長さ112.0㎝、幅21.6㎝、厚さ8.5㎝の割板材。心去りの柾目材である。外側は割れ肌のままで、内側は加工痕が残らないが比較的平坦で、チョウナなどで仕上げたものとみられる。上側面にはチョウナ痕跡が残る。木口にはノコの痕跡が

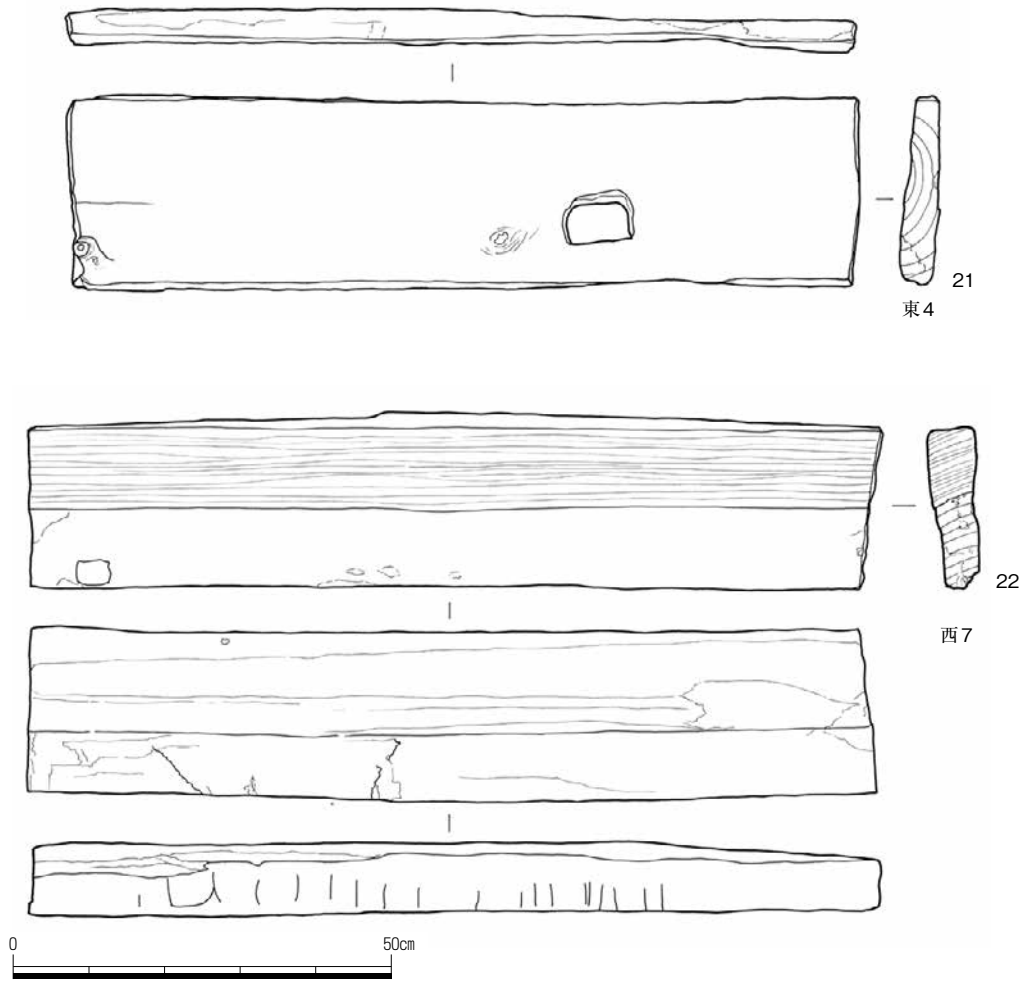


Fig. 202　SE4740横板（２）　1:10

残る。東４は長さ103.0cm、幅25.0cm、厚さ4.6cmの割板材。心去りの板目材で、木裏を内側とする。内側には加工痕跡は残らないが比較的平滑で、チョウナなどで仕上げたとみられる。外側は割れ肌のまま用いる。

背板材（Fig. 203）は12点あった。木裏は平坦に仕上げ、木表はノタの曲面を残す。平坦な木裏を内側、木表を外側として用いる。木取りは２種類あり、ひとつは木表の曲面にノタがほぼ残る、原木の曲面を利用した木取りである。もうひとつは木表の曲面にノタがほとんど残らない、大径材の背板材の木表を削り、あえて小さい曲面に仕上げているものである。前者の例として東５（25）、後者の例として北３（23）、南２（24）があげられる。東５は長さ135cm、幅20.0cm、厚さ6.5cmの背板材。内側には加工痕跡は残らないが比較的平坦で、チョウナなどで仕上げたものとみられる。外側は加工したチョウナ痕跡が一部に残る。北３は長さ104.6cm、幅19.2cm、厚さ6.3cm、南２（24）は長さ102.3cm、幅18.5cm、厚さ5.0cmである。

横板のうち３点に穴や欠き込みが残る。東４（21）は板のやや下寄りに9.2×6.0cmの平面隅丸長方形の穴が貫通する。穴の長辺が板の長辺に対してやや振れる（Ph. 154）。北３（23）は上辺に12.0×7.0cmの欠き込みが残る（Ph. 154）。南２（24）は下端に10.5×8.0cmの欠き込みが残る。

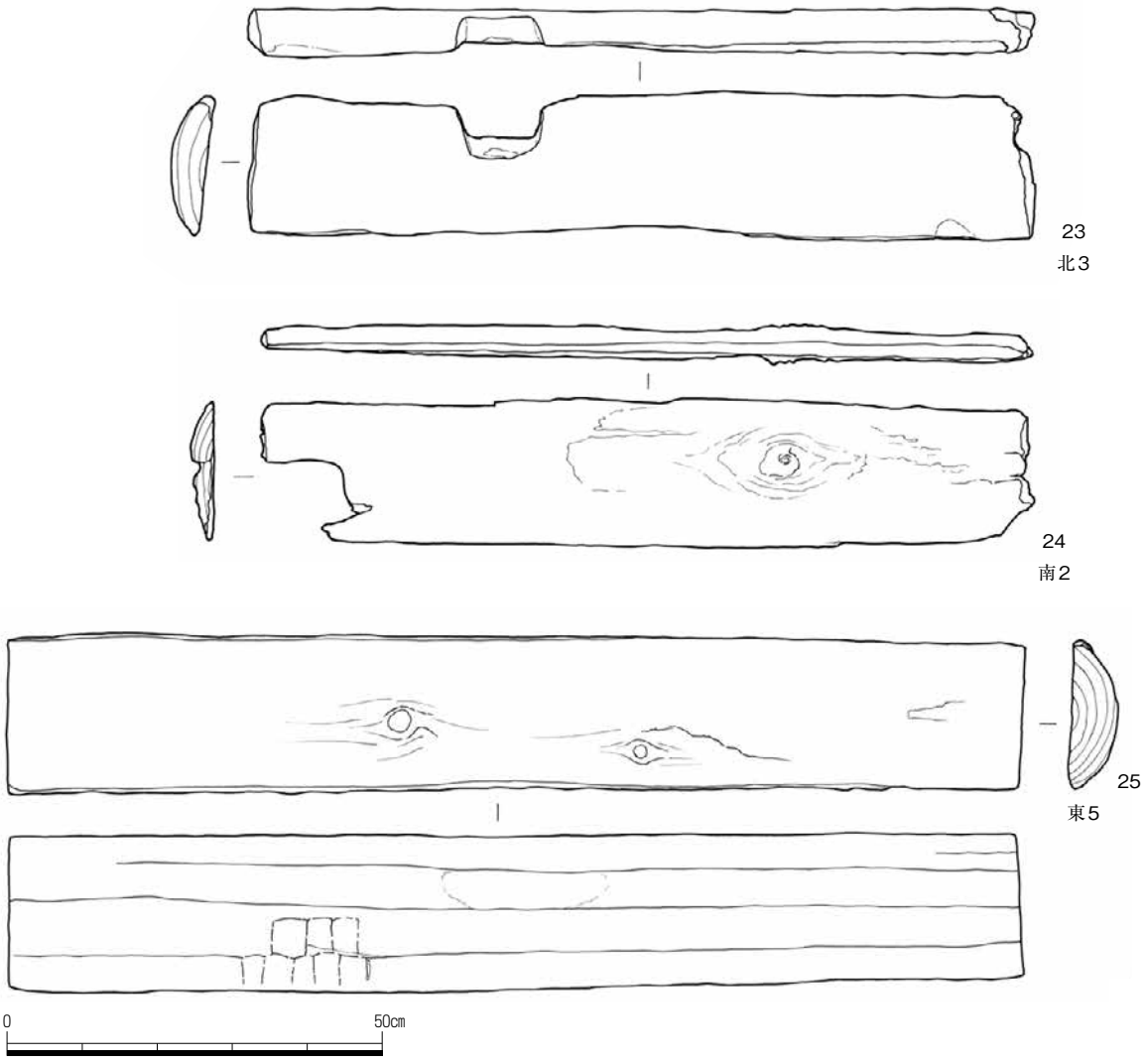


Fig. 203　SE4740横板（3）　1:10

Tab. 7　SE4740横板　樹種・製材方法一覧

段		北				東				南				西			
		No.	整理番号	樹　種	製材	No.	整理番号	樹　種	製材	No.	整理番号	樹　種	製材	No.	整理番号	樹　種	製材
1	上		904	ヒノキ属	背板	－	1063A	ヒノキ属	不明	－	917	ヒノキ科	背板又は割板	－	1040	コウヤマキ	不明
						－	1063B	ヒノキ科	割板ヵ					－			
	下					－	898	ヒノキ	割板	－	958	コウヤマキ	背板	－	1041	コウヤマキ	不明
2	上		967	コウヤマキ	背板	－	918	コウヤマキ	板又は割板	24	860	コウヤマキ	背板	－	893	コウヤマキ	背板ヵ
	下									－	890	コウヤマキ	背板				
3		23	891	コウヤマキ	背板	－	858	コウヤマキ	割板ヵ	－	863	コウヤマキ	割板	－	892	コウヤマキ	背板
4		－	895	コウヤマキ	割板	21	865	コウヤマキ	割板	－	862	コウヤマキ	背板	－	871	コウヤマキ	割板
5		－	889	コウヤマキ	背板	25	873	コウヤマキ	背板	－	869	コウヤマキ	割板	－	859	コウヤマキ	背板
6		－	861	コウヤマキ	割板	－	2057	コウヤマキ	割板	－	896	コウヤマキ	割板	－	894	コウヤマキ	背板
7		－	852	コウヤマキ	割板	－	872	コウヤマキ	割板	－	866	ヒノキ属	板	22	867	コウヤマキ	割板
8		－	856	コウヤマキ	板	20	857	ヒノキ属	板	－	850	ヒノキ属	板	－	864	コウヤマキ	割板
9		－	2058	サワラ	板	－	2059	ヒノキ属	板	－	870	ヒノキ属	板	－	874	ヒノキ属	板
10		－	1998	ヒノキ属	板					－	2060	ヒノキ属	板	－	851	ヒノキ属	板
11	上	－	2061	ヒノキ属	板	－	855	コウヤマキ	板	19	868	ヒノキ属	板	－	899	ヒノキ属	板
	下														854	ヒノキ科	板
12						－	849	ヒノキ属	板					－	853	ヒノキ属	板

いずれの穴や欠き込みも、SE4740の井戸枠として必要な仕口ではない。しかしながら、仕口の形状や角度などからみて、少なくとも板の形状で建築部材に用いられていたものではない。また、これらの仕口が残る部材は割板材・背板材といった製材が簡略化されたものであり、建築部材を加工し転用したものとも考えにくい。

Tab. 7は、横板の樹種および製材方法をまとめたものである。東西南北いずれの面でも、井戸下方は板材、中ほどは割板材、上方は背板材を用いる傾向がある。板材にみられる端部の斜めそぎ落としはSE4740の井戸枠構造には不要のものである。板材は長さが115～122㎝と比較的揃うことから、溝を切った柱に落とし込むように作られた横板を転用したものと考えられる。

1）蛍光X線分析は降幡順子による。
2）蛍光X線分析は降幡順子による。
3）調査日誌には取り上げ時に破損したことが記録されており、遊離している箍や側板と思われる破片群がどのように復元できるかなど、不明確な要素も多いが、現状から図化した。

4　金属製品・銭貨

A　金属製品

金属製品では短刀、鎌、釘などの鉄製品、花形飾金具、銅釧などの銅製品がある。断片的な資料が多く、時期的にも古墳時代から中世までと幅がある。そのため、ここでは鉄製品、銅製品の順に、器種ごとにまとめて記述する。また、銅製品のうち、棒状金銅製品、銅釧、花形飾金具、銅鏡については、透過Ｘ線撮影による内部構造調査、蛍光Ｘ線分析法による材質調査を行った。その結果は第Ⅴ章４に示したので、参照されたい。

ⅰ　鉄製品（Fig. 204～206，Ph. 155～157）

短　刀（Fig. 204-1・2）　把付の短刀。１は切先と刃部を欠き、把を含めた残存長は28.5cm。片関で、茎の長さは5.1cm。把は一木造りで、長さ13.4cm、幅2.9cm、厚さ2.0cm。把縁側の端面から茎挿入孔をあける。把縁寄りには幅0.5cmの溝を彫り込む。樹皮等で緊縛するための加工と思われる。把の樹種はコウヤマキ。調査区中央部の、平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4474から出土した。２は全長26.2cmを測る完形品である。刃部は17.0cm、茎の長さ8.8cm、両関で１箇所の目釘穴をもつ。把は２枚合わせの構造で、長さ11.5cm、幅3.0cm、厚さ1.8cm。刀身の一部まで把に覆われる。把縁付近には緊縛した樹皮が残る。把には目釘穴がなく、鉄本体の目釘穴は未使用である。把の樹種はヒノキ属。調査区西北部の、13世紀後半から14世紀前半の井戸SE4790出土。

環状鉄製品（Fig. 204-3～5）　断面円形の鉄棒をＣ字状に折り曲げて環状とする鉄製品。３は幅8.3cm、高さ5.6cm。４は幅6.7cm、高さ5.1cm。５は正円に近く、径6.5cm。５のみ両端の片側に面取りを施す。このほか、錆化が著しいが、現状で外径1.9cm、内径0.4cm、厚さ0.6cmの小型品がある。すべて藤原京期から奈良時代の井戸SE4740最下層出土で、釣瓶等に使用された金具と思われる。

鉄　鎌（Fig. 205-6～8）　６は柄付の完形品で、全長36.0cmを測る。刃部は長さ12.0cm、最大幅3.9cm。茎の長さは6.5cmで、先端を刃部側に折り曲げる。柄の長さは30.0cm、最大幅2.6cm、厚さ1.7cm。刃部側から約11cmの位置に片面から切り込みを入れ、そこまでを２枚合わせにする構造である。鎌の茎を挟み、幅0.8cmの鉄製ハバキを装着し、鉄製目釘で固定する。茎の背の部分には別材の木製楔が２枚はめ込まれている。柄の樹種はアカガシ亜属。13世紀後半から14世紀前半の井戸SE4790出土。７は刃部の最大幅1.8cmの小型品で、茎に柄の木質が残存する。平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4467出土。８は切先部分を欠く。刃部の最大幅3.3cm。柄の木質等は遺存しない。調査区中央部付近にある、平安時代後期から鎌倉時代の井戸SE4473出土。

不明鉄製品（Fig. 205-9）　板状鉄製品の破片。残存長11.1cm、幅2.6cm、厚さ0.3cm。刃部等は認められない。井戸SE4740最下層出土。

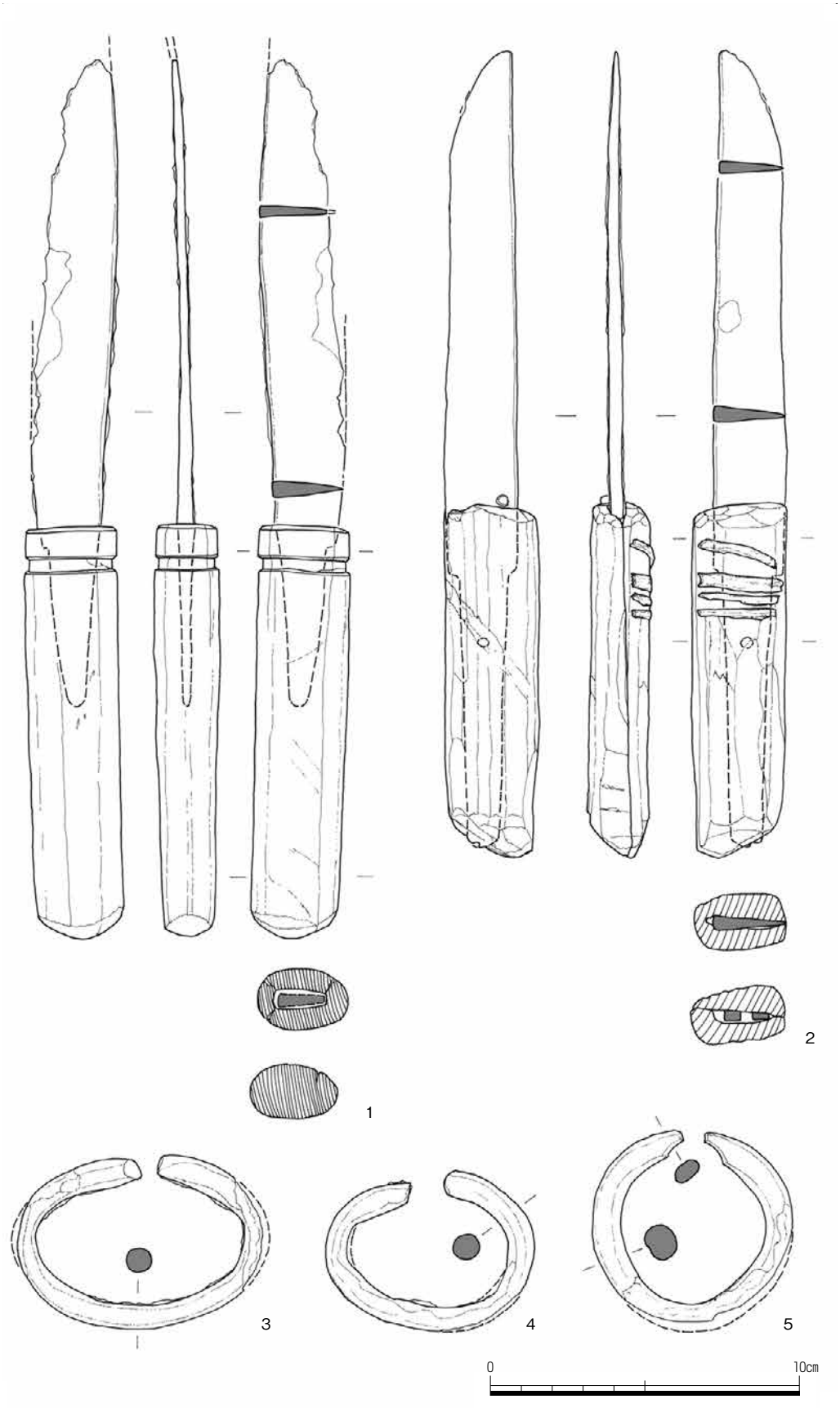


Fig. 204　鉄製品（1）　1:2

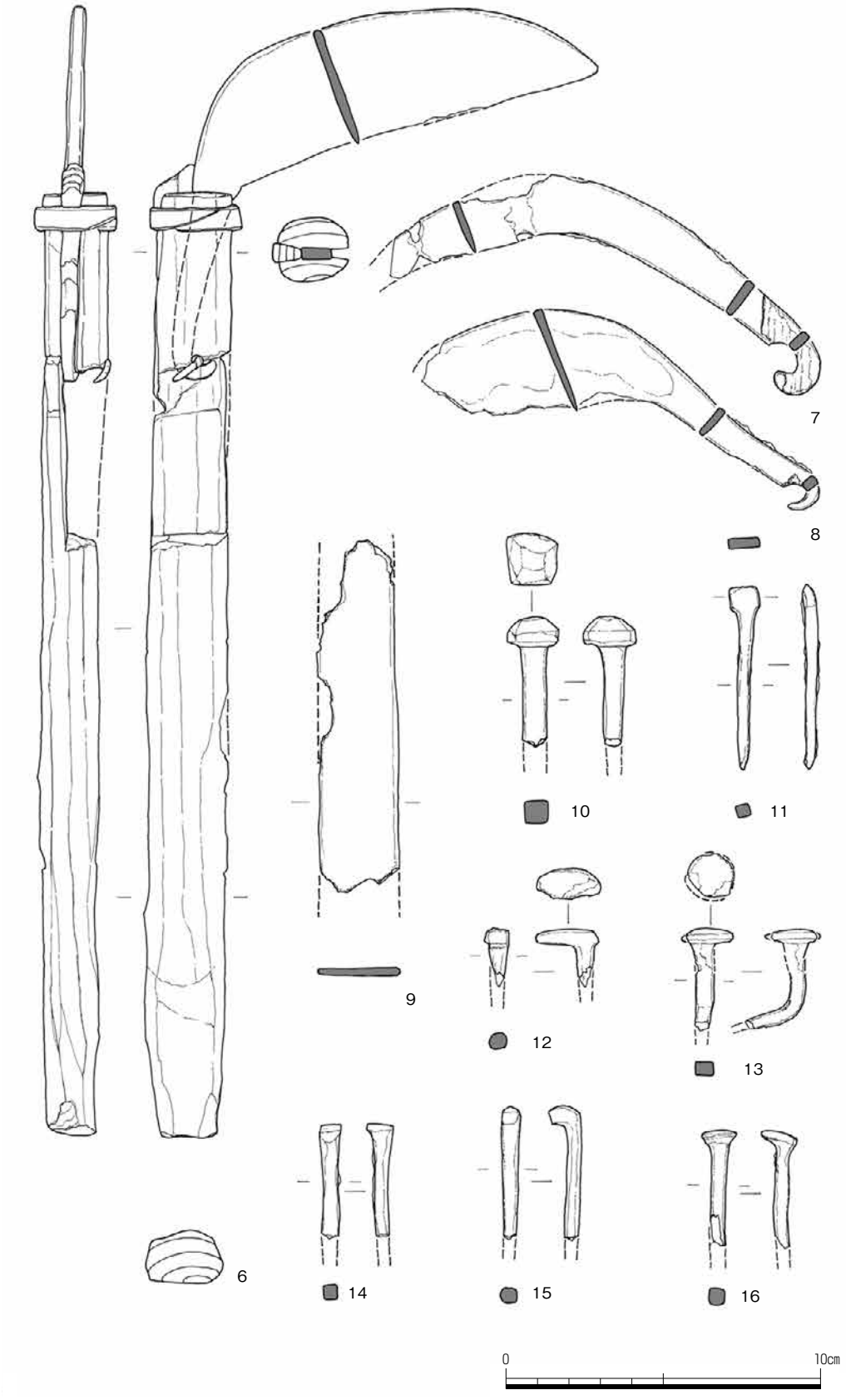


Fig. 205　鉄製品（2）　1:2

鉄　釘（Fig. 205・206-10～25）　10は方頭釘、13が円頭釘、17と18は方頭釘、その他が叩折釘である。11のみ完形品で、全長5.9cmを測る。その他は全長不明。10～16は井戸SE4740の最下層から出土したもの。17は東西大溝SD4130中層出土で、18～25は包含層からの出土である。

鉄　鍋（Fig. 206-28）　小片のため、復元径は不明。内面に稜線をもつ。口縁端部の厚さは0.6cmで、胴部は0.4～0.5cm。東西大溝SD4130上層出土。

その他鉄製品（Fig. 206-26・27）　26は刀子の破片。切先と茎を欠失する。片関で、刃部幅は2.1cmを測る。27は棒状の鉄製品で、先端が尖る。鉄鏃の破片か。残存長4.2cm。いずれも包含層からの出土である。

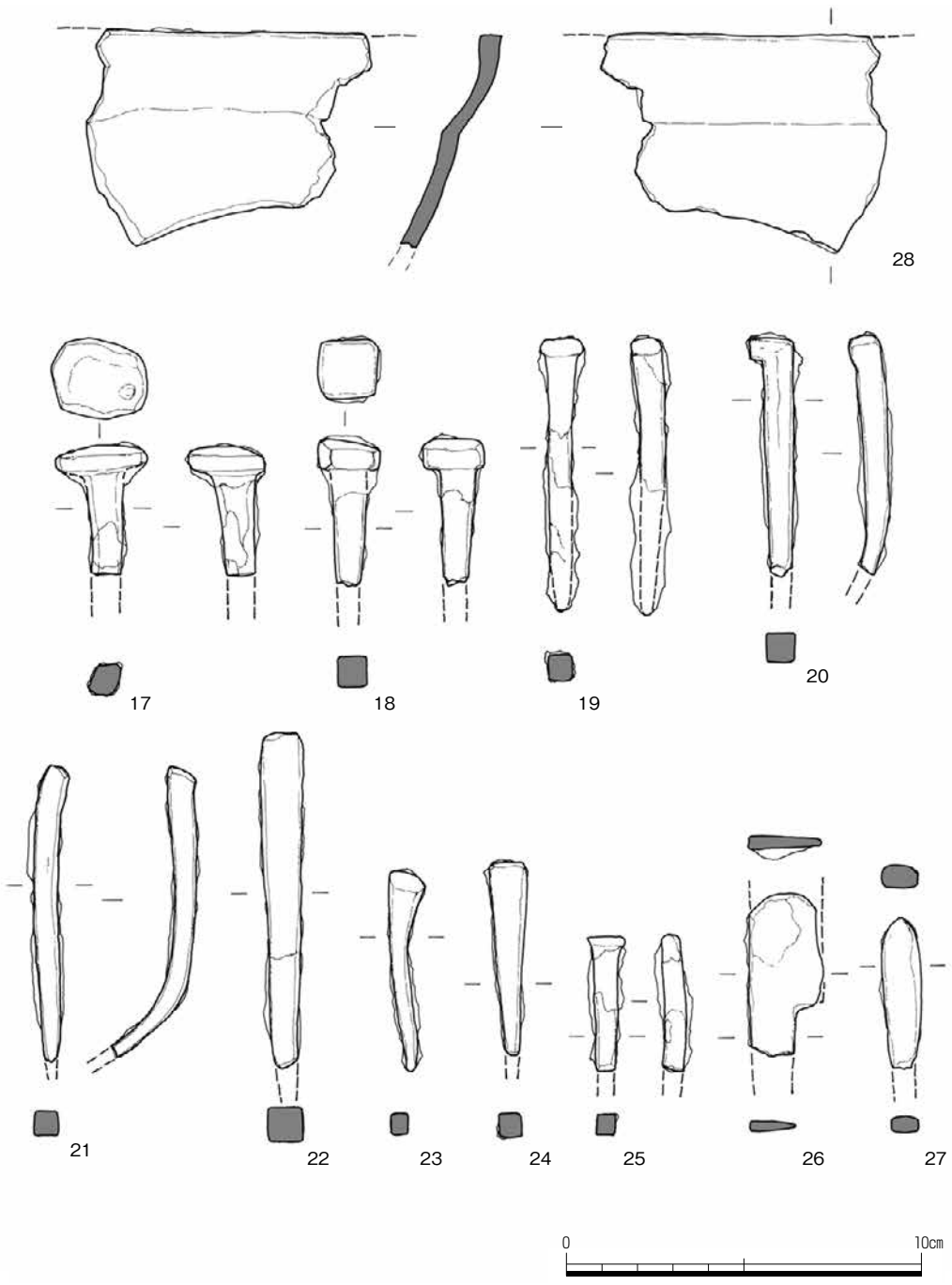


Fig. 206　鉄製品（3）　1:2

ii　銅製品（Fig. 207，Ph. 156・157）

帯金具（Fig. 207-29・30）　29は蛇尾。全体に錆化して破損しており、先端を欠く。現状で長さ2.7cm、幅2.9cm、脚下端から上面までの高さ0.4cm。銅板の厚さ1.2㎜。重量2.2ｇ。内面には直径0.2cmの脚が残り、広端側は2箇所に1脚ずつ、先端側は1箇所で2脚の配置である。表裏とも塗装は認められない。NO20地区の包含層から出土。30は蛇尾と考えられる残欠。現状で長さ2.3cm、幅2.4cm、高さ0.2cm。銅板の厚さ0.5～0.8㎜。重量2.1ｇ。表裏とも塗装は認められない。脚は遺存していない。全体にねじれており、左右両端を切断している。保存状態良好で銅の色が残る。SD4130下層出土。

花形飾金具（Fig. 207-31）　完形の青銅製花形飾金具[1]。全長4.6cmで本体部分は12葉の花弁状を呈し、頂部に山形の釣手をもつ。裏面は花弁端部がほぼ平坦で揃い、釣手部分が厚いため0.4cmの段をなす。花弁部分は径3.5cm、厚さ0.1～0.3cm。釣手は厚さ0.5cm、中央に穿たれた円孔は径0.5cmを測る。花弁の中心に円形鋲を打ち込む。鋲は頭部径1.1cm、頭部高0.4cm、脚部径0.3cm、全長0.9cmを測る。円形鋲と本体との間に径1.4cmの円形波板をかませており、幅0.1cmの放射状文様帯をなす。材質はいずれも銅、錫、鉛を主とするが、本体は錫の割合が極めて高い。円形波

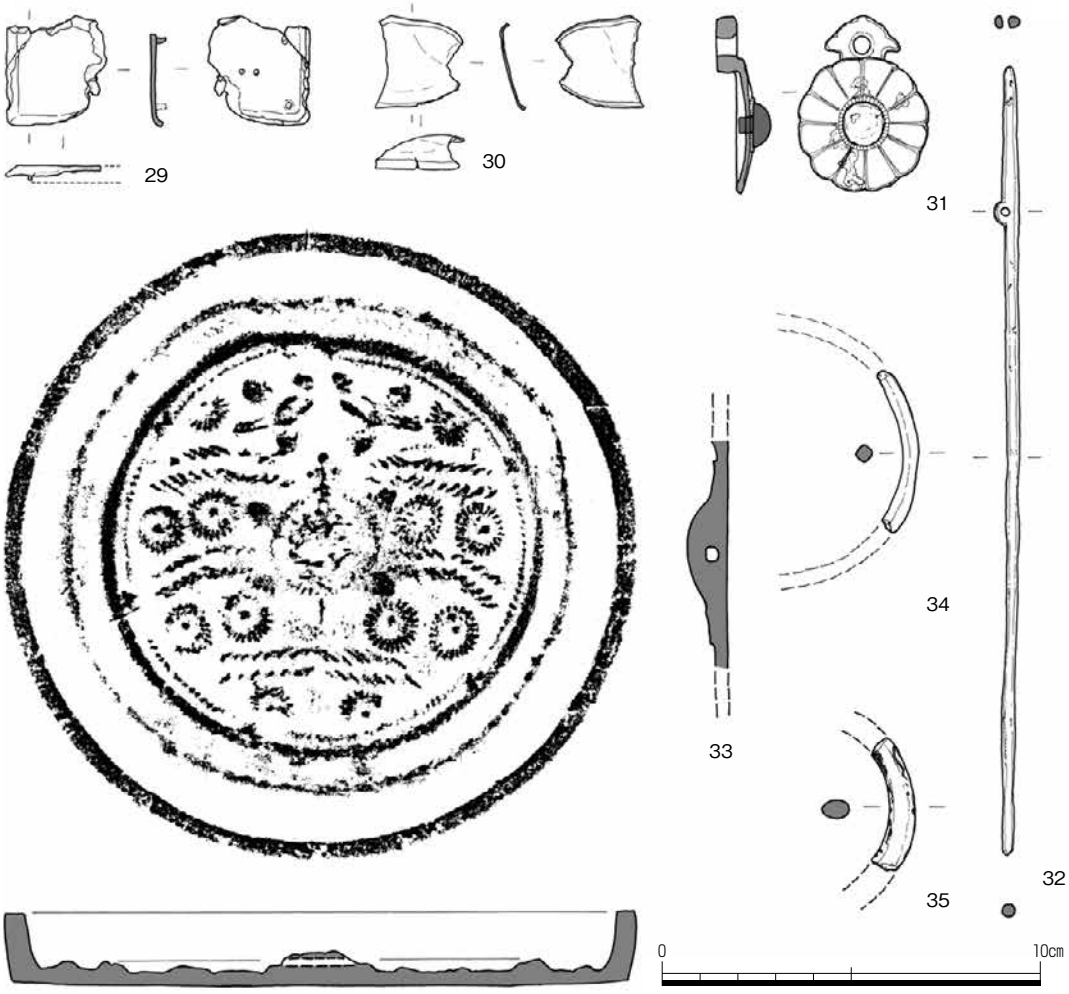


Fig. 207　銅製品　1:2（33は1:1）

板部分は現状で黒色を呈し、銅の比率が高く鉛が少ない。鋲は現状で黄褐色を呈し、円形波板部分より錫が多い。調査区中央部にある、平安時代後期から鎌倉時時代の井戸SE4467上層出土。

棒状金銅製品（Fig. 205-32）　棒状の金銅製品で、全長20.8cm、中心付近の径0.4cmを測る。表面にはわずかに鍍金が残る。片側に半円形の突起をもち、径0.3cmの小孔を穿つ。井戸SE4740最下層出土。

銅　鏡（Fig. 207-33）　青銅製の菊水双雀鏡である。中世大溝SD4755より出土した。重量は115.3ｇ。円鏡で、直径は8.4cm、鏡面径は8.2cmを測る。外縁高0.9cm、外縁厚0.3cmの直角式中縁を持つ。亀形紐を有し、紐孔は1つである。紐孔には紐が残存している。内区には、菊水文が描かれ、雀2羽が上方で相対向して配置されている。界圏は縄文式の特殊圏であり[2]、外区には擬漢式文様が描かれている。製作年代は室町時代と推測できる。法隆寺西円堂奉納の鏡には、菊水双雀鏡は含まれていないものの、類品が数多くみられる。この他類品には、岐阜県白山神社蔵の菊水双雀鏡がある。

銅　釧（Fig. 207-34・35）　古墳時代の銅釧片が2点出土している。34は全体の五分の一程度が残存し、径は7.5cm前後に復元できる。環の断面形は菱形に近い。古墳時代の竪穴建物SI4234出土。35は小片で、径の復元は難しい。断面形は内側のやや尖った卵形を呈する。NB19地区の包含層から出土。

この他、包含層などから少量の銅滴、銅針金、銅釘などが出土している。

B　銭　貨

調査区内からは46点の銭貨が出土した。このうち、SE4740の井戸枠内最下層・下層からは、無文銀銭1点と和同開珎26点が一括で出土した。計測可能な銭貨の法量等は、Tab. 8に示す。無文銀銭と和同開珎について実施した自然科学分析については、第Ⅴ章4を参照されたい。

無文銀銭（Fig. 208・Ph. 158・159-1）　外形は正円形を呈さず、角のとれた五角形に近い。最大径は27.5㎜、厚さ1.5㎜前後、方形を呈する中心孔の径は3.0㎜、重さ8.45ｇ。片側から穿孔したため、裏側の孔の周縁が盛り上がっており、バリを平坦に整えている。孔の位置が中心から若干ずれるため、周囲を削った可能性が指摘されている[3]。銀片の貼り付けや線刻は認められない。表面は酸化により黒く変色している。SE4740最下層出土。

和同開珎（Ph. 158～161-2～28）　2～27はSE4740出土の和同開珎で、すべて完形品。和同開珎Ａに属し、「開」の字の門構えの上端が開いた「新和同[4]」である。2～5は最下層、6～27は下層出土。このうち6～14は井戸内の北側桟上で検出した（Fig. 53）。北側板に沿って、重なる2枚（11の上に10）とその東隣に横位で3枚（西から14・13・12）を連ねたような状態であった。また6～9はその直近の横桟上に散らばった状態と復元される。10～14の状態からみて、ばらばらの銭を散布したのではなく、まとまった状態で置いたものと推察される。坂田寺などで10枚前後の緡銭や

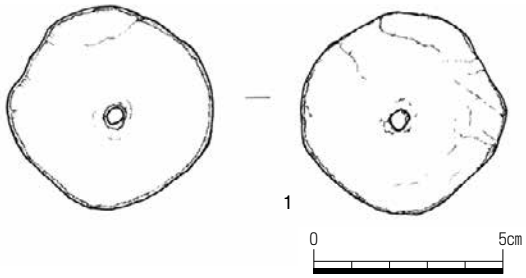


Fig. 208　無文銀銭　1:1

Tab. 8　銭貨計測表

番号	次数	出土地点	出土銭貨	重量（g）	G（㎜）	N（㎜）	g（㎜）	n（㎜）	T（㎜）	t（㎜）
1	47次	SE4740　灰褐砂礫土（最下層）	無文銀銭	8.45	26.74	—	—	—	1.54	1.51
2	47次	SE4740　灰褐砂礫土（最下層）	和同開珎	1.99	24.79	21.29	8.15	6.81	1.26	0.45
3	47次	SE4740　灰褐砂礫土（最下層）	和同開珎	2.63	25.09	21.04	8.30	6.57	1.36	0.42
4	47次	SE4740　灰褐砂礫土（最下層）	和同開珎	2.94	24.98	21.07	8.11	7.12	1.41	0.55
5	47次	SE4740　灰褐砂礫土（最下層）	和同開珎	2.03	24.80	21.09	8.23	6.97	1.16	0.59
6	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	3.23	24.80	21.22	8.25	7.52	1.33	0.49
7	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	3.65	25.06	21.35	8.29	6.73	1.47	0.58
8	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	2.32	24.27	20.78	8.00	6.59	0.96	0.42
9	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	3.79	25.32	21.33	7.83	6.85	1.58	0.56
10	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	2.60	24.52	21.22	8.07	6.72	1.18	0.45
11	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	3.03	24.65	21.11	8.12	6.57	1.44	0.61
12	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	4.16	24.76	21.28	8.15	6.96	1.68	0.99
13	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	2.98	24.15	20.42	8.10	6.50	1.37	0.46
14	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	3.10	25.25	21.08	8.23	6.83	1.37	0.50
15	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	3.07	25.17	21.13	8.07	6.90	1.47	0.40
16	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	2.90	24.87	21.20	8.63	6.65	1.40	0.52
17	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	3.84	24.88	20.93	7.76	6.58	1.52	0.77
18	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	2.88	25.39	21.59	8.36	6.93	1.40	0.63
19	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	2.36	24.24	21.27	8.72	6.45	1.13	0.57
20	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	2.79	24.80	20.87	8.12	6.86	1.38	0.50
21	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	3.10	24.67	21.65	8.13	6.86	1.47	0.54
22	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	2.03	24.57	21.21	8.36	7.12	1.24	0.49
23	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	1.69	25.17	21.39	8.05	6.81	1.35	0.37
24	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	2.04	24.73	21.12	8.27	6.78	1.27	0.39
25	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	3.50	24.43	20.56	7.98	6.93	1.46	0.60
26	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	2.08	24.34	21.37	8.20	6.84	1.20	0.45
27	47次	SE4740　褐色粘質土（下層）	和同開珎	2.29	24.20	21.30	8.21	6.99	1.36	0.35
28	50次	SD4130　暗灰砂土（中層）	和同開珎	2.12	24.46	21.41	8.33	6.97	1.48	0.57
29	50次	SK4796	開元通寶カ	2.60	23.91	20.54	8.59	6.90	1.33	0.93
30	47次	遺物包含層	天禧通寶	2.26	24.51	19.73	7.46	6.23	1.11	0.58
31	47次	耕作溝	天禧通寶	2.31	24.62	19.99	7.56	6.65	1.34	0.69
32	47次	SE4790　青灰粘土混青灰砂質土	天聖元寶	4.99	25.31	20.71	8.70	6.32	1.38	1.11
33	50次	遺物包含層	天聖元寶	1.82	24.42	20.26	8.16	6.32	1.02	0.77
34	50次	遺物包含層	天聖元寶	2.90	25.21	20.67	8.55	7.33	1.44	1.09
35	50次	遺物包含層	皇宋通寶	2.11	24.11	19.22	8.35	6.99	1.23	0.67
36	47次	耕作溝	熙寧元寶	2.86	23.41	18.61	7.60	6.26	1.38	0.80
37	47次	不明	熙寧元寶	2.22	24.34	19.35	8.73	7.05	1.29	0.96
38	47次	不明	熙寧元寶	2.66	24.89	19.95	8.59	7.36	1.06	0.82
39	46次	遺物包含層	元豊通寶	2.65	24.31	18.72	8.33	6.77	1.25	0.87
40	53次	床土	元豊通寶	2.27	24.05	18.61	7.43	6.43	1.21	0.83
41	50次	遺物包含層	元豊通寶	2.15	25.17	19.80	9.22	6.93	1.16	0.75
42	45次	遺物包含層	政和通寶	1.53	22.08	19.11	7.49	6.32	1.01	0.71
43	50次	床土	寛永通寶	1.80	23.97	20.04	7.88	5.93	1.01	1.37
44	47次	SD4755　焼土混灰褐土	大観通寶	1.68	—	—	—	—	—	—

銭貨の各部測点については右のとおりである。

外縁外径 $G=\frac{Ga+Gb}{2}$,　外縁内径 $N=\frac{Na+Nb}{2}$,

内郭外径 $g=\frac{ga+gb}{2}$,　内郭内径 $n=\frac{na+nb}{2}$,

外縁厚 $T=\frac{A+B+C+D}{4}$,　文字面厚 $t=\frac{a+b+c+d}{4}$

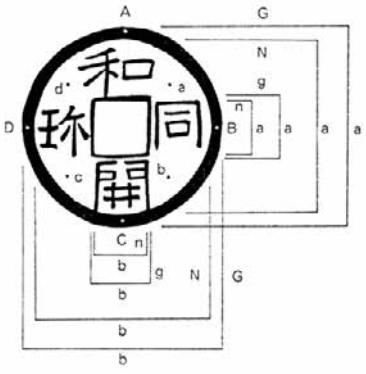


Fig. 209　銭貨の計測点

布に包んだ銭の存在が知られており[5]、同様なものだった可能性があろう。しかし、その他の銭貨は出土時に位置関係などの詳細が把握できなかったので、全体として一連だったのか、散布したのか、井戸の改修に伴って置いたものかどうかなどは、判断しがたい。

この他、28は東西大溝SD4130中層出土。周縁部をわずかに欠く。和同開珎Ａに属するものである。SD4130のうちNH32地区の南岸から出土しており、SE4740からはほど近い西へ５ｍほどの地点にあたる。

中国銭（Ph.160・161-29～42）　大半が北宋銭である。29は銭文が不鮮明だが、開元通寶（唐、621年初鋳）の可能性が高い。SK4796出土。30・31は天禧通寶（北宋、1017年初鋳）で、いずれも包含層から出土。32～34は天聖元寶（北宋、1023年初鋳）。32はSE4790上層出土で、33・34は包含層出土。35は皇宋通寶（北宋、1038年初鋳）。36～38は熙寧元寶（北宋、1068年初鋳）。39～41は元豊通寶（北宋、1078年初鋳）で、41は元符通寶（北宋、1098年初鋳）の可能性もある。42は政和通寶（北宋、1111年初鋳）。35～42は包含層出土。これらの他、南北大溝SD4755から大観通寶（北宋、1107年初鋳）が出土しているが、劣化が進んでいるため拓本を採取していない。

寛永通寶（Ph.160・161-43）　銭文は不鮮明で型式は不明だが、背文はない。包含層出土。

参考文献

法隆寺昭和資材帳編集委員会1988『法隆寺の至宝 第9巻 工芸 鏡』小学館
中野政樹1969『日本の美術 第42号 和鏡』至文堂
久保智康1999『日本の美術 第394号 中世・近世の鏡』至文堂
奈文研2004『川原寺寺域北限の調査』
松村恵司2004「無文銀銭の再検討」松村恵司・栄原永遠男編『古代の銀と銀銭をめぐる史的検討』

1）表面が白色を呈するためか『藤原概報16』では銀製と記すが、今回分析したところ青銅製である。分析は降幡順子による。
2）広瀬都巽1974『和鏡の研究』角川書店。
3）松村恵司2004「無文銀銭の再検討」松村恵司・栄原永遠男編『古代の銀と銀銭をめぐる史的検討』。
4）奈文研1975『平城宮発掘調査報告Ⅵ』。
5）木村理恵2011「坂田寺SK160出土地鎮具」『奈文研紀要2011』。

5　石製品・鋳造関係品・石器

A　石製品・鋳造関係品（Fig. 210～216，Ph. 161・162）

砥　石（Fig. 210～213-1～11）　1は表裏と側面に擦痕をもつ。残存長11.2cm、残存幅9.2cm、厚さ4.1cmを測る。重量673.7ｇ。調査区西北部にある、平安時代後期の井戸SE5023出土。石材は流紋岩質凝灰岩[1]。

2は長方形を呈し、上半部を欠く。表裏、側面のほか、小口面にも擦痕を残す。残存長8.0cm、幅4.5cm、厚さ2.7cm。重量108.9ｇ。藤原京期から奈良～平安時代の井戸SE4740出土。石材は流紋岩質凝灰岩。

3は一側が大きく弯曲する角柱状の製品である。長軸方向の1面を使用している。残存長10.8cm、最大幅5.3cm、厚さ3.7cmを測る。重量234.8ｇ。NI29地区の東西大溝SD4130上層出土。石材は片麻岩。4は長軸方向の4面を使用している。残存長7.5cm、幅5.3cm、厚さ4.5cmを測る。重量246.4ｇ。NI28地区のSD4130中層出土。石材は流紋岩。5は長軸方向の4面と単軸方向の

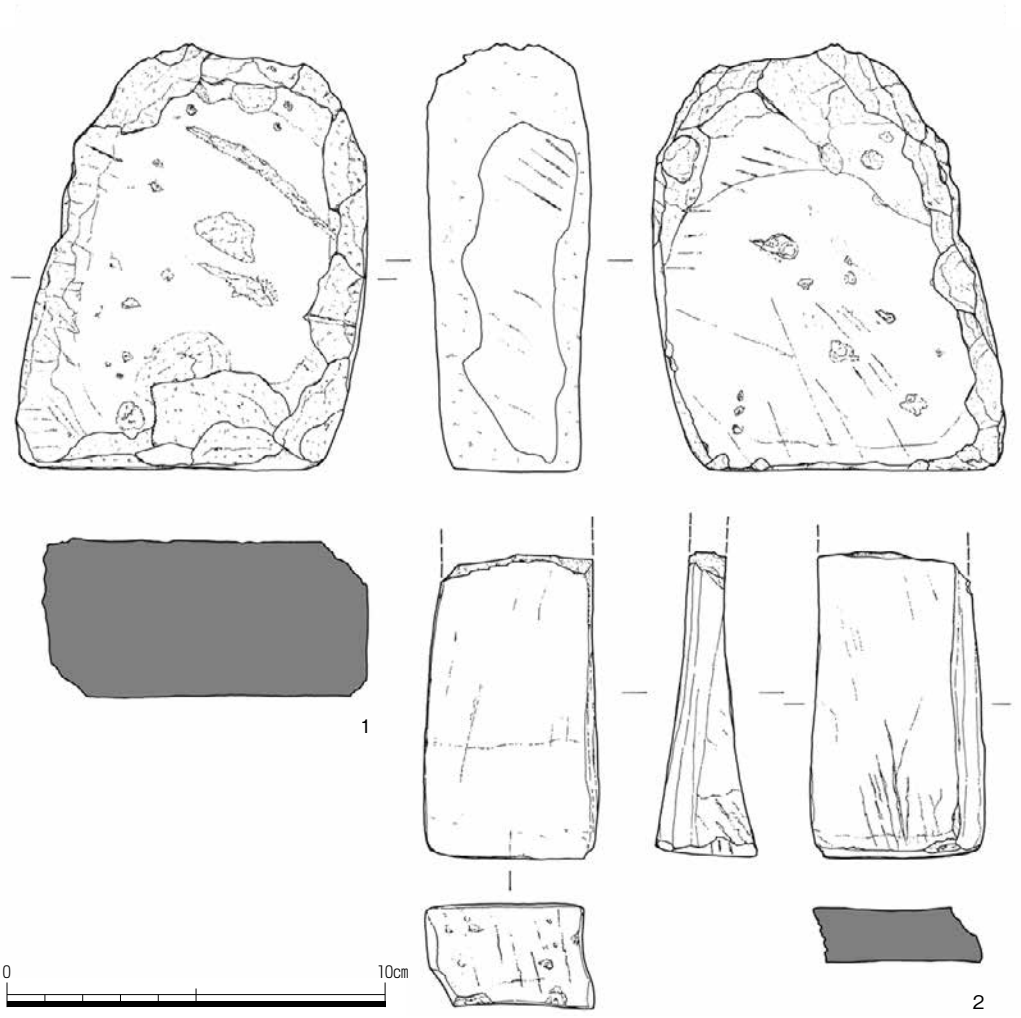


Fig. 210　石製品（1）　1:2

1面の計5面を使用している。残存長5.6cm、幅4.4cm、厚さ4.5cm。重量139.4ｇ。NI35地区のSD4130中層出土。石材は流紋岩。6は直方体状を呈し、上半部を欠く。長軸の3面と短軸の1面の計4面を使用している。残存長13.4cm、幅6.7cm、厚さ5.8cm。重量860.4ｇ。NI30地区のSD4130中層出土。石材は流紋岩。

7は長方形を呈し、上面下面ともに欠損している。長軸の4面を使用している。残存長5.1cm、幅3.1cm、厚さ2.3cm。重量58ｇ。NH26地区の包含層出土。石材は流紋岩。8は両端を欠き、長軸の4面に使用痕がみられる。残存長4.1cm、幅2.6cm、厚さ2.0cmを測る。重量27.1ｇ。NC20地区の包含層出土。石材は流紋岩。9は長軸4面を使用している。うち1面には径0.6～0.8cm、深さ0.2～0.3cmの半球形の窪みが2箇所にみられる。残存長5.8cm、幅5.5cm、厚さ2.6cm。重量106.2ｇ。NH25地区の包含層出土。石材は流紋岩。10は両端を欠損している。表裏と側面の4面に使用痕がみられる。表裏面には幅0.5～0.6cm、深さ0.1～0.3cmの溝状の研磨痕がそれぞれ2条ずつ確認できる。残存長7.5cm、幅4.5cm、厚さ2.2cmを測る。重量125.6ｇ。NG18地区の包含層出土。石材はアプライト質花崗岩。11は台形状を呈し、6面全面を使用している。表面が弯曲しており、中心ほどすり減っている。長さ5.8cm、幅6.2cm、厚さ1.6cmを測る。重量97.6ｇ。後述する井戸SE4765の北、NM18地区の包含層出土。石材は不明。

SD4130から出土した砥石（3～6）の出土層位は、3が上層、4～6が中層である。土器による年代観は、中層が奈良時代前半から中頃、上層は奈良時代後半から10世紀初めとなる。また、砥石の分布をみると、他の遺構・包含層出土のものも含めても、南北はNC～NNライン間、東西は19～36ライン間となる。このうち、SD4130より北のものは1と11のみで、8はNC20地区とやや南に偏する。これらを除けば、南北はNGラインからSD4130（NJライン）間で、東西は18～36ライン間の範囲に8点がまとまることが注意される。

羽　口（Fig.214-12～15）　直線的なもの（12・13）と先端側がすぼまるもの（14・15）がある。12は残存長10.7cm、復元径7.9cm、内径2.7cm。先端付近は融解してガラス化し、その周囲は長

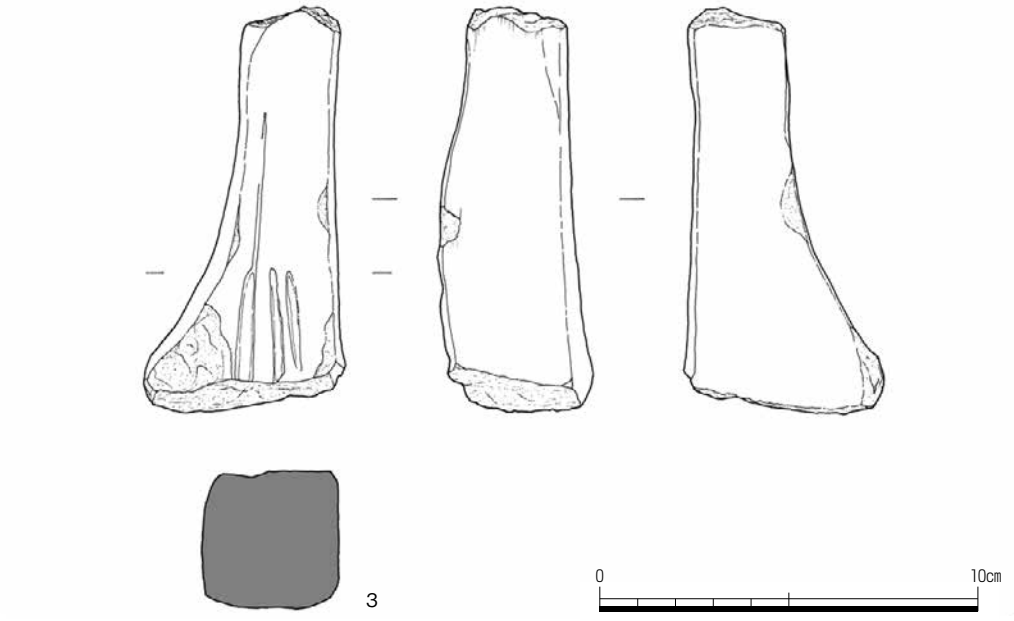


Fig. 211　石製品（2）　1:2

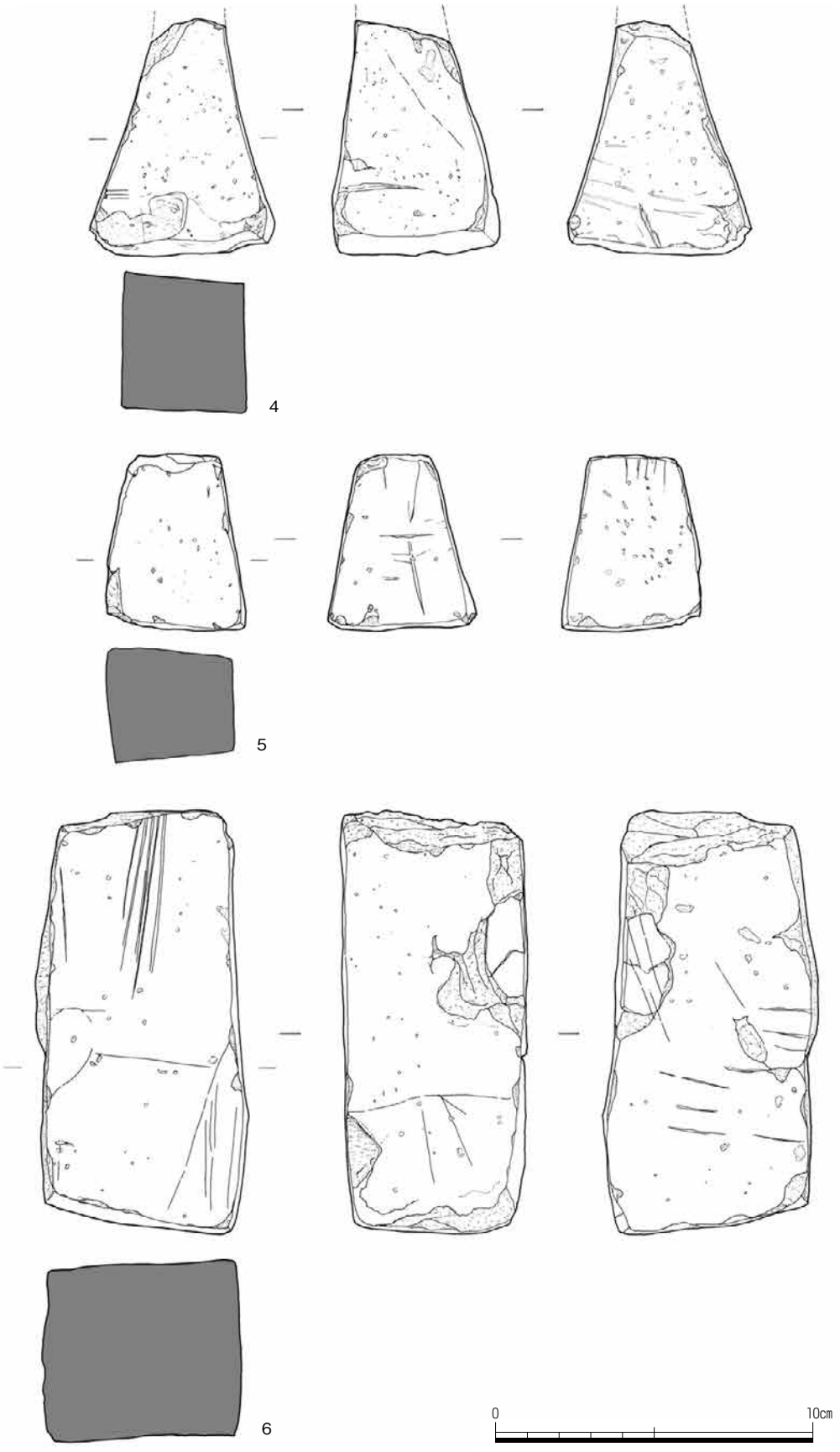


Fig. 212　石製品（3）　1:2

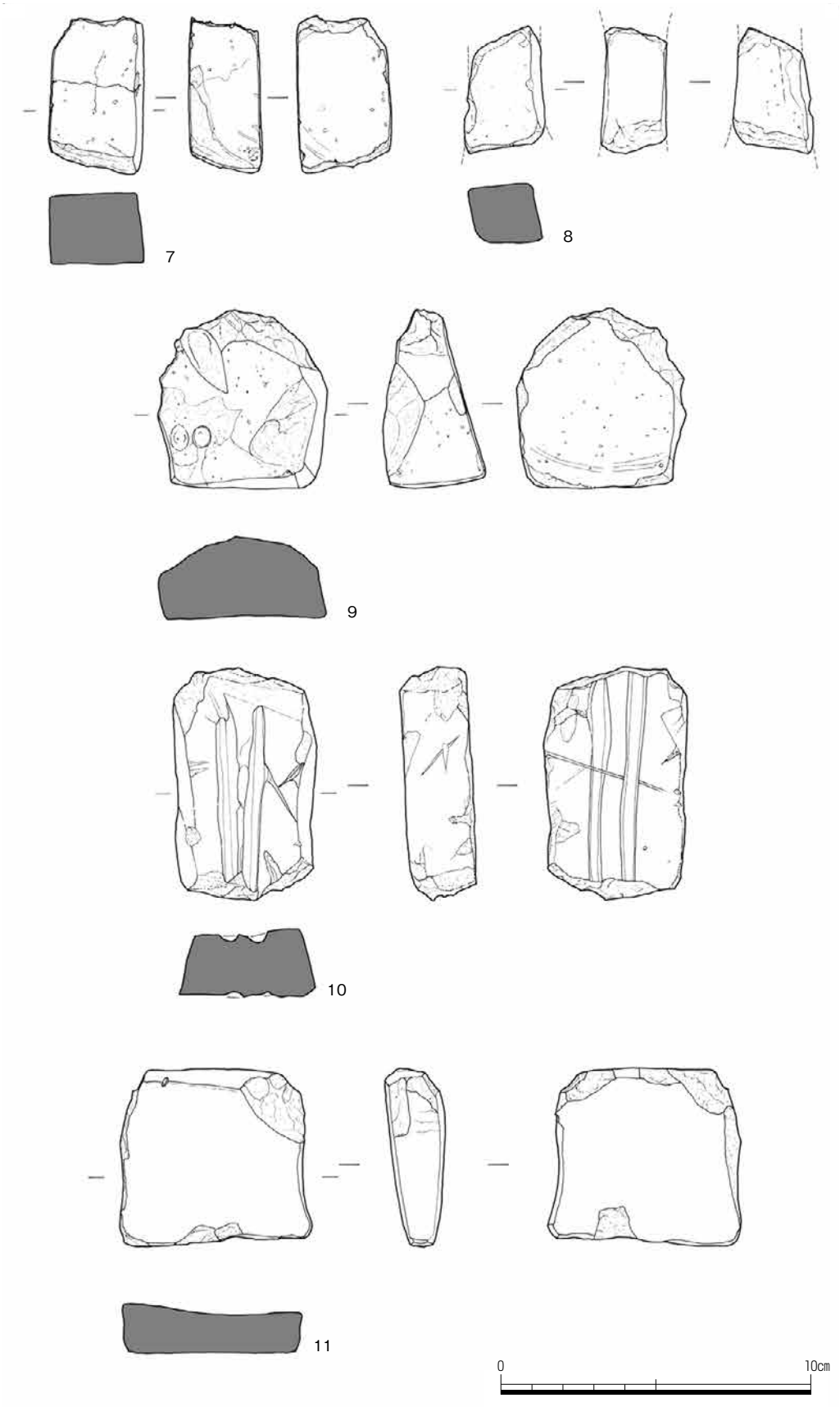


Fig. 213　石製品（4）　1:2

軸に対して斜めに変色して灰白色の帯状を呈する。13は残存長8.8㎝、径6.8㎝、内径2.8㎝。12と同様に先端はガラス化し、周囲は斜めに変色して灰白色を呈する。12・13は調査区東端の、SD4143西岸近くにある11世紀初頭の井戸SE5095出土。14は残存長6.4㎝、径6.5㎝、内径2.4～2.8㎝。胴部表面に長軸方向の成形痕が明瞭に残る。丸棒を芯として粘土を巻き付け、簾状の道具で外面を巻き締めて成形したと考えられる。藤原京期前半（Ⅲ-B期）に属する掘立柱東西棟建物SB4737南側柱列の、東から3基目の柱穴から出土した。15は残存長6.2㎝、径4.8㎝、内径2.1～2.5㎝。胴部表面に指頭圧痕がみられる。横断面には粘土接合痕がみられることから、丸棒を芯として粘土を巻き付け成形したと考えられる。9～10世紀の井戸SE4765から出土した。

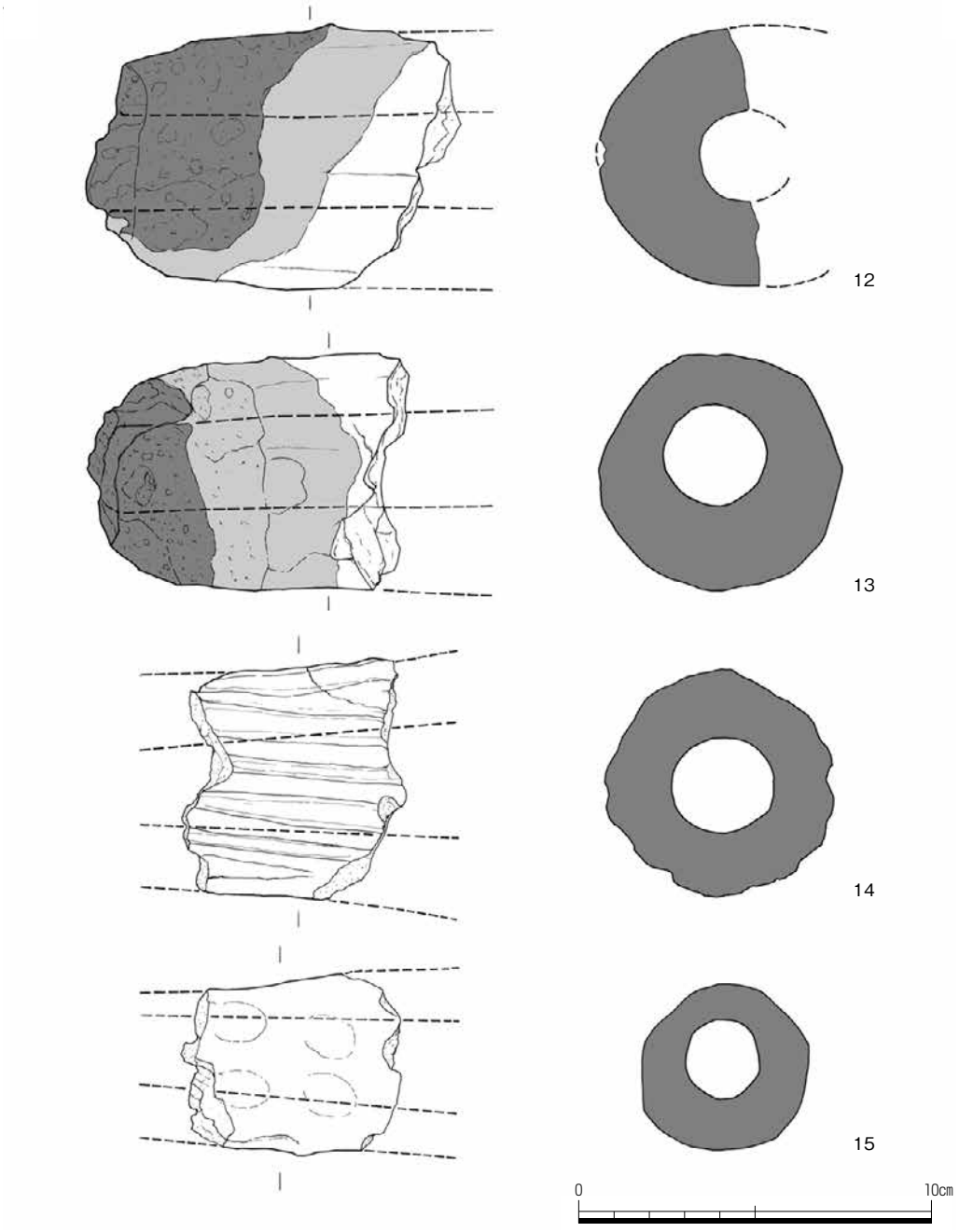


Fig. 214　鋳造関係品（1）　1:2

坩　堝（Fig. 215-16）　口縁部の破片。復元口径18.6㎝で、半球形を呈していたものと推測できる。溶融した金属を鋳型に移す「とりべ」との区別が難しいが、ここでは坩堝として記述しておく。胎土にスサを多く含み、器表面は凹凸を成す。9～10世紀の井戸SE4765上層から出土した。

鋳　型（Fig. 215-17・18）　17は破片資料のため復元しがたいが、金属製品の鋳型の可能性がある。胎土にスサを含み、表面は橙色を呈するが、破断面は黒色に変色する。残存長5.2㎝、残存幅3.5㎝、残存厚1.9㎝。18は金属製品の鋳型。最大径18.0㎝、高さ5.9㎝の深皿形の鋳型外型で、内面は屈曲して口縁端部に至る。鋳型の口縁部は片口状を呈する。内面の底径9.7㎝、屈曲部径11.2㎝、上端の径17.2㎝、深さ4.5㎝を測る。内面中央に穿孔がある。器壁の厚さは1.3～1.8㎝。スサを含む胎土で椀状に外形部分をつくる。内面下部に0.2㎝程度の厚さできめ細かい砂質の土

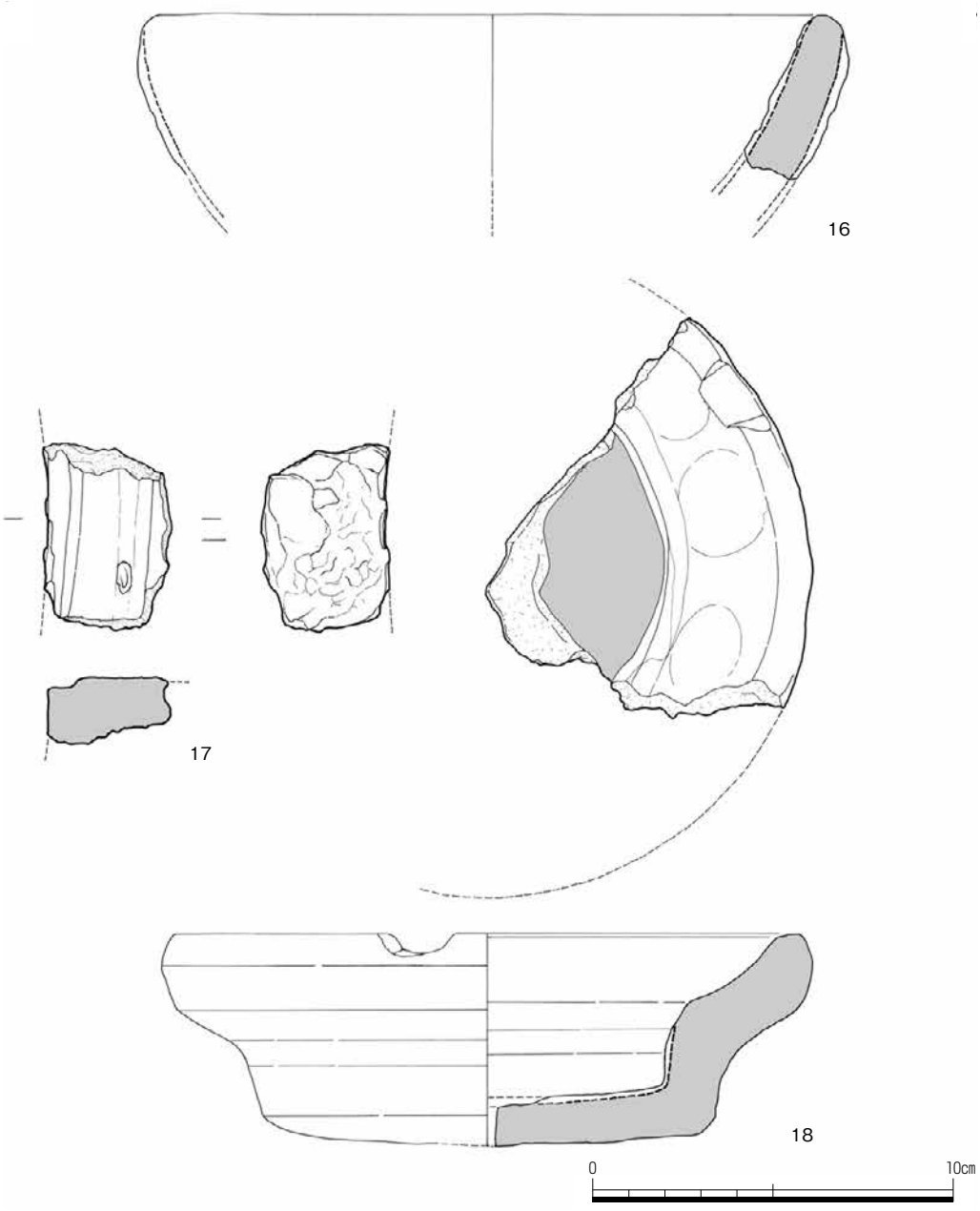


Fig. 215　鋳造関係品（2）　1:2

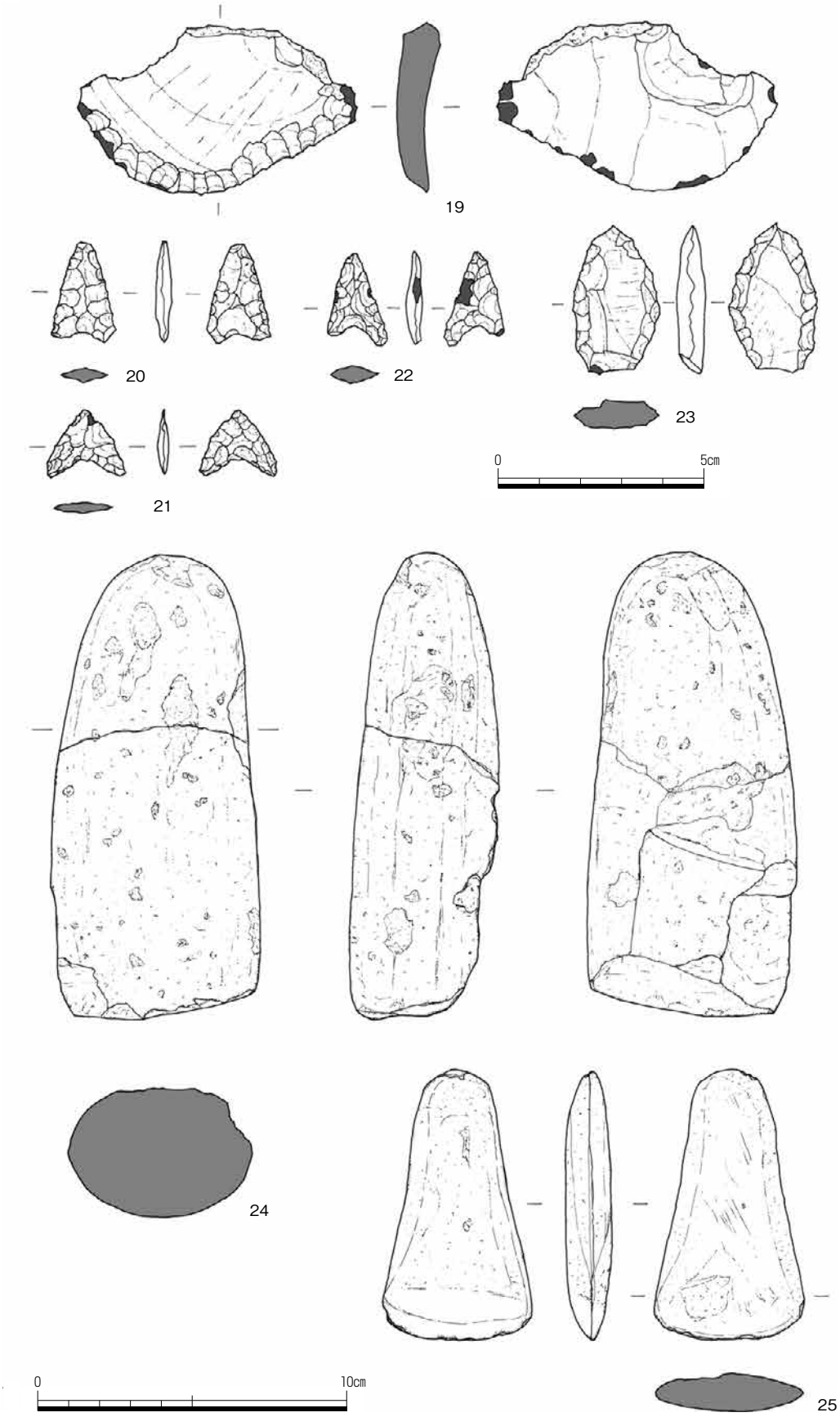


Fig. 216　石　器　2:3（24・25は1：2）

Tab. 9　小円礫計測表

No.	色調	長軸（mm）	短軸（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	出土遺構
26	白	10.9	10.3	6	0.8	包含層
27	黒	11.9	10.4	6.8	1.2	SE4740
28	灰	12.6	12	3.9	0.9	包含層
29	黒	20.8	16.9	7.3	3.7	包含層
30	灰	19.7	17.2	6.5	3.4	包含層
31	灰	17.4	15.9	6.4	2.7	包含層
32	白	18.1	16.3	7.5	3.3	包含層
33	黒	23.1	21.6	8.9	6.6	SE4740

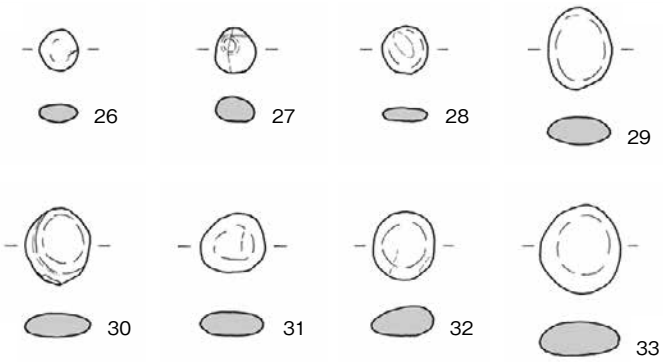


Fig. 217　小円礫　1:2

を貼っている。外面の色調は橙色で、内面は灰色や黒色に変色している。明確な器種は不明であるが、類品が川原寺寺域北限のSK609から出土している[2]。17・18ともに9～10世紀の井戸SE4765上層より出土した。

以上の様に、井戸SE4765上層からは羽口や坩堝、鋳型などの鋳造関連遺物が出土しており、すぐ北の包含層からは砥石も出土した。周辺に炉跡等の遺構は確認していないが、平安時代に金属製品の鋳造が行われた可能性を示唆する。

その他、小円礫が8点出土している（Fig. 217-26～33）。法量等はTab. 9に示す。通常みられない円礫であり、白色、黒色があることから碁石の可能性もある。27・33は井戸SE4740の井戸枠内から出土。また、古墳時代の竪穴建物SI4231からガラス小玉が出土した。

B　石器（Fig. 216，Ph. 162）

調査区内からは、縄文時代から弥生時代の石器が若干出土している。

削　器（19）　基部に自然面を残す大型の剥片を用い、刃部の片面から丁寧な調整剥離を連続して加える。長さ6.7cm、最大幅4.1cm、重量24.8ｇ。石材はサヌカイト。SD4143の青灰色砂礫層（下層）出土。

打製石鏃（20～23）　20～22は凹基式の打製石鏃。20は長さ2.8cm、最大幅1.6cm、重量1.2ｇ。NL16地区の包含層出土。21は長さ1.6cm、最大幅1.9cm、重量0.6ｇ。SA4284の柱穴出土。22は長さ2.3cm、最大幅1.5cm、重量0.9ｇ。調査区東部、AO89地区の包含層出土。23は平基式の打製石鏃。SB5030の柱穴から出土した。長さ3.6cm、最大幅2.1cmを測る大型品。重量5.9ｇ。石材はすべてサヌカイト。

磨製石斧（24・25）　24は太形蛤刃石斧。刃部を欠く。残存長15.1cm、最大幅6.7cm、重量704.4ｇを測る。SE4469裏込め出土。25は小型の磨製石斧。刃部にかけて撥形に広がり、薄い作りである。全長8.8cm、刃部幅4.8cm、重量88.1ｇ。HH27地区の包含層から出土。

1）以下、石材同定は埋蔵文化財センター保存修復科学研究室の脇谷草一郎、田村朋美による。

2）奈文研2004『川原寺寺域北限の調査』。

6 木 簡

出土遺構と点数 木簡は、第47・50次調査で28点（うち削屑5点）出土した。本稿では、1987年度に調査地西方約20mで行った第54-1次調査で出土した1点も含め、計29点（うち削屑5点）を扱うこととする。これらを出土遺構別にみると、井戸SE4740が1点、東西大溝SD4130が28点（うち削屑5点）となる。釈文は『藤原木簡概報8』（1987年）で14点を報告し、その後『飛鳥藤原京木簡二』（2009年）で3点を追加した。残り12点は釈読が困難であるので、以下、釈読の可能な17点について改めて報告したい。なお、釈文は巻末に示したとおりで、以下、その番号にしたがって記述する。

SE4740出土木簡 SE4740は藤原京期から奈良・平安時代にかけての井戸。井戸枠内の最下層から、呪符木簡である1が出土した。出土状況から、井戸を掘削して間もなく入れられたものとみられる。4片接続でほぼ完形。断面形は半円形を呈す。裏面は自然木の皮を剥いだだけで、特に整形されていない。一方、書写面となる表面は綺麗に削ってある。上端および下端も削りで、上端には面取りもなされている。また、図版では特に示していないが、上端には墨線が一本引かれている。墨書は符籙（呪いの記号）を挟んで上下2箇所に分かれる。文字はほぼ中央行に書かれるが、符籙は幾分か右寄りになっている。記号と文字という違いもあろうが、筆の感じが少しばかり異なってみえる。全体の字配りもあわせて考えると、まず最初に符籙を描き、その上下の余白部分に文字を書いたとみられる。上部には「不殺」の文字が確認でき[1]、「殺」には「かれる」の意味があることから、井戸が涸れないことを祈願する内容とみることができるかもしれない。符籙は、大きく「山」字を記し（3画目の縦画がやや長い。）、その下に上下4段にわたって、1・2段目は「日」字を、3・4段目は「月」字をそれぞれ3文字ずつ、計12文字を配す。下部の「未方女者」は「南南西の方角にいる女性」という意味であろうが、あるいは水神への捧げものとしての意識で書かれたものかもしれない。広葉樹散孔材の丸太半截。

SD4130出土木簡 SD4130は、調査区北部を西流する、藤原京期から奈良・平安時代にかけて機能した東西大溝。木簡が出土した場所は、1987年4月に西隣接地で実施した第54-1次調査出土の12を除いて、前述の井戸SE4740の付近に限られる。出土層位は中層で、奈良時代の遺物を多く含む層である。時期が判別できる木簡も、以下みていくように、8世紀前半代のものである。ただし、この溝は藤原京期から機能しているので、この時期の木簡が含まれている可能性も念頭においておく必要がある。

2はほぼ完形の文書木簡。上中下の3片接続であるが、中片の左上など一部欠損もみられる。下端・左右両辺削り。上端は表裏それぞれから刃を入れて切断するが、木簡当初のものである。左辺の上中下の3箇所、右辺の中央の1箇所に浅い切り込みがある。上下の切り込みはなぜか左側だけにしか存在せず、左右対称になっていない。中央の切り込みのみ、左右対称である。木簡の内容からみても、物に括り付けて使用されたとは少し考えにくい。切り込みが極めて浅いこととあわせて、その意味について今後類例を集めて検討する必要がある。スギの板目材。

書き出しの「菜採司謹白」については、A「菜採司、謹みて（○○に）白す」（上申先が省略。）、B「菜採司に謹みて白す」、のいずれの読み方も可能で[2]、全体の内容を踏まえて解釈する必要が

ある。まず「菜採司」の「菜採」は日本語の語順で書かれている。「司」も二官八省の体系にもとづいた官司呼称としてのそれではなかろう。「菜採司」と仰々しく書かれているが、菜を採ることを職掌とした部署、といった意味にすぎないであろう。次の「奴」字は、「白」字と半角分程度の空白を設けて書かれており、意味の切れ目を示すための空格と考えられる。上申内容は奴の逃行と病女（この女は婢か。）の2件で、それにあわせて文末も「以前如□」で結ばれている。これらの奴婢は菜採司の統括のもと菜を採る作業に従事していたのであろう。先にA・B2つの読み方を示したが、Aの可能性がより高いと考えられる。その場合、木簡の出土地点こそ、上級機関の所在地ということになる。

3は文書木簡の断片か。左右2片接続。上下両端折れ、左右両辺割れ。1文字目は下半分が残存するにすぎない。「人」の可能性もあるが、ここでは「大ヵ」とした。

4～10は記録木簡、もしくはその可能性があるもの。4は上端・右辺削り。下端は折れであるが、二次的切断の可能性も否定できない。左辺は二次的割截。裏面は左側および下部が剥離する。「霊亀三年」（717）は11月17日に改元され、養老元年となる。したがって、木簡の下端には「養老二年」以後の年紀が書かれていた可能性が高い。ヒノキ属の板目材。

5は3片からなり、1片は直接接続しない。木簡の上部は2片接続で、上端・左右両辺削り、下端折れ。下の1片は上下両端折れ、左右両辺割れ。現状では小断片にすぎないが、幅広で文字も大きく、元来はそれなりの大きさの木簡であった可能性がある。裏面1文字目は「代」で、何かの代納物として「斗」で数えられる米などを納めたことを示すか。ヒノキ科の板目材。

6は削屑木簡。「束」「把」の単位から、稲に関わる記録木簡に由来するとみられる。

7は上下2片接続。下端・右辺削り、左辺割截、上端折れ。何度も削られたようで、厚さは一様ではない。5文字目「束」の第1画から上端にかけては、墨書以前の削り痕跡が認められ、下半部に比べて薄くなっている。長さ30.2㎝以上の細長い木簡であるが、文字は材の右上にあるにすぎない。その後も記載することを考慮して、このように寄せたのであろうが、結果的には当該部のみの記載で終わったようである。この記載がなされた後、現1文字目の途中から上端に向かって二次的に削り取られ、文字情報は失われている。「束」が2箇所あり、稲の収支状況を記したものと推定される。下から3文字目は「遣」のようにもみえるが、意味的に「遺」と釈読すべきであろう。なお、2文字目の「斤」は重量単位であるが、稲の場合にも使われることがあった。ヒノキ属の板目材。

8は左右2片接続。上下両端・左辺削り。右辺は少し割れ。ただし下半分は左右ともに大きく欠損する。墨書は材の上半分のみ。現状では1文字目が「斗」となり、その上に数字は確認できない。「一斗」の意味であるため、「一」を省略したものであろう。ただし、上端が二次的に削られた可能性も完全には否定できない。特に二次的な整形を被っていないとすれば、米などの数量を記したメモ的なものということになる。スギの追柾目材。

9は下端・左右両辺削り、上端折れ。現状では表面がふくらむように反り返る。「小豆」以外の文字ははっきりしない。下から2文字目は「田」の可能性がある。ヒノキ科の板目材。

10は左右両辺削り。上下両端は折れであるが、二次的切断の可能性も残る。「文」は銭の単位で、おそらく和銅開珎（銅銭）に関わるものであろう。「十八文」の左下の墨痕ははっきりとしないが、「買」のようにもみえる。ヒノキの板目材。

11は上下両端削り、左右両辺割截。上端は切断前のアタリが残る。下端は稜のある剣先形で、先端部は尖らせない。左右両辺には刃が入れられており、形状から斎串と判断される。文字は大きく「左京職」と記すのみ。「京」は「口」が「日」になる字形、「職」は「耳」を「身」で記す字形である。京職が分離して左右京職になるのは701年の大宝令施行後である。ヒノキ属の板目材。

12・13は荷札木簡。12は四周削り。上下の左右に台形の切り込みがあり、幅は上部は狭いが、下部は広い。郡制下の荷札木簡で、701年以後のものである。文字は極めて達筆である。貢進物の「魚鮨」は、魚を素材に「熟れずし」にしたものである。「鮨」は「鮓」とも表記するが、特に意味は変わらない[3]。『延喜式』によれば、尾張国は中男作物として中央に「雑魚鮨」を納め（主計式上16尾張国条）、斎宮寮に「雑魚鮨」5石を納めることになっていた（斎宮式78調庸雑物条）。養老元年（717）に成立した中男作物は、郡を単位として貢進されるのが一般的で、本木簡も「尾張国海部郡」が貢進主体となっている。本木簡が養老元年以後のものか不明であるが、系譜的に中男作物につながることはほぼ間違いない。ヒノキの板目材。

13は上端・左右両辺削り、下端折れ。上端は右端のみ少し削り落とす。上部左右に三角形の切り込みがある。近江国蒲生郡の荷札木簡である。裏面2文字目は「田」の可能性がある。「宿田」は戸主の個人名と推測される。最後は「戸口」と続くと推定される。貢進者の名前を書く際、養老年間（717～724）頃を境に、「国＋郡＋里＋人」から「国＋郡＋里＋戸主＋戸口」に変化する大きな流れがあり、本木簡の年代を知る上でも参考になる。ヒノキ属の柾目材。

14は上下2片接続。下端・左右両辺削り。上下両端は表裏それぞれから刃を入れて切断する。上部左右に台形の切り込みがある。現状では上部に「六斗」とのみ記す。「六斗」は庸米木簡に広くみられるが、本木簡には地名や人名などは書かれていない。ヒノキの板目材。

15は上中下の3片接続。上端・左右両辺削り。下端は焼損する。他の場所にも焼痕が認められる。字配りから表裏を決めたが、詳細は不明。ヒノキ属の板目材。

16は右辺削り、左辺割れ。上端は裏面から斜めに刃を入れて切断する。下端は焼損する。ヒノキの板目材。

17は上端折れ。下端は表面から刃を入れて二次的切断。左右両辺は二次的割截で、細長い小断片となっている。1文字目はわずかな墨付が残るのみ。2文字目は、3文字目に残された土偏を手がかりに文字のセンターラインを推定し、「京ヵ」と釈読した。ヒノキ属の柾目材。

1） 奈文研2009『飛鳥藤原京木簡二』（奈文研史料第82冊）では「殺」を「熟」と釈読したが、「殺」に訂正したい。

2） Aは当然として、Bの読みを考慮するのは、次の事例を参考にしている。飛鳥池遺跡南地区（工房地区）から、「官大夫前白（後略）」という木簡と、「官白（後略）」という木簡が出土した（奈文研2007『飛鳥藤原京木簡一』（奈文研史料第79冊）1・147号木簡）。このうち「官白」は、「官大夫前白」と類似した表現であることを踏まえると、「官に白す」という読みが可能となる。「某白」と書かれてあるからといって、「某、白す」という読みが絶対的ではないのである。「某に白す」と訓読できる「某白」は、「某前白」（某の前に白す）の「前」字が省略されたものであろう。その他の事例も含めて、市大樹2010『飛鳥藤原木簡の研究』塙書房など参照。

3） 櫻井信也2002「日本古代の鮨（鮓）」『続日本紀研究』339号など。

第Ⅴ章　自然科学分析

1　動物遺存体

左京六条三坊の発掘調査では、合計212点の動物遺存体が出土した。このうち古代に属する資料としては、東西大溝SD4130から54点が出土した。下層（藤原京期）からはニホンジカの角1点、中層（奈良時代前半～中頃）からはイシガイ科の殻皮1点、上層（奈良時代後半～11世紀初頭）からはウマの歯の破片1点を同定した。その他は全て中世の遺構や包含層から出土したもので、種が同定できたものとしては、ウマ、ウシ、ヒト、スッポンがみられる。

調査区中央部のHJ19地区にある小土坑SK4061からは、種不明も含めると23点の哺乳類歯・骨が出土しており、ウマの上顎骨の破片のうち少なくとも4点は同一個体と考えられる。歯冠高から年齢を査定すると[1]、5～6歳程度である。SK4061はSB4420の南廂部にあり、SB4420の西南部には牛馬小屋とみられるSX4500がある。これら3つの遺構は相互に関係する可能性が強く、そのなかでSK4061からウマの歯や骨が出土したことは興味深い。

また、第45次調査区のND11地区の包含層からもウマの上顎骨の破片がまとまって出土しており、哺乳類種不明の歯・骨破片も含めると51点ある。少なくとも8点は同一個体と考えられ、歯冠高から年齢を査定すると、3～4歳程度の幼齢馬と推定することができる。

Tab. 10　動物遺存体一覧

遺構・土層	種	部位（左：L　右：R）	点数
SD4130下層	ニホンジカ	角破片	1
SD4130中層	イシガイ科	殻皮	1
SD4130中層	哺乳類種不明	骨破片	32
SD4130上層	ウマ	歯破片	1
SD4130上層	哺乳類種不明	歯破片	18
SD4130	ウマ	臼歯	1
SK4061	ウマ	上顎歯P2（L）	1
SK4061	ウマ	上顎歯P2（R）	1
SK4061	ウマ	上顎歯P3（L）	1
SK4061	ウマ	上顎歯P3（R）	1
SK4061	ウマ	上顎歯P3-M2（L）	1
SK4061	哺乳類種不明	歯槽骨	1
SK4061	哺乳類種不明	歯破片	13
SK4061	哺乳類種不明	骨破片	4
SK5078	スッポン	背甲骨板	3
SK5078	ヒト	歯	1
SE4461	ウマ	臼歯	1
SD4182	ウシ	歯破片	2
SD4182	哺乳類種不明	歯破片	3

遺構・土層（次数）	種	部位（左：L　右：R）	点数
SD4755	哺乳類種不明	骨破片	2
SD4832	ウマ	臼歯	1
包含層(45)	ウマ	上顎歯I2(R)	1
包含層(45)	ウマ	上顎歯P2(L)	1
包含層(45)	ウマ	上顎歯P2(R)	1
包含層(45)	ウマ	上顎歯P3(L)	1
包含層(45)	ウマ	上顎歯P4(L)	1
包含層(45)	ウマ	上顎歯P4(R)	1
包含層(45)	ウマ	上顎歯M1(L)	1
包含層(45)	ウマ	上顎歯M2(L)	1
包含層(45)	ウマ	脛骨・遠位端(L)	1
包含層(45)	哺乳類種不明	歯破片	14
包含層(45)	哺乳類種不明	骨破片	28
包含層(45)	哺乳類種不明	不明	1
包含層(46)	ウマ	歯破片	1
包含層(46)	ウマ	臼歯	1
包含層(46)	哺乳類種不明	歯破片	7
包含層(47)	哺乳類種不明	歯破片	8
包含層(53)	哺乳類種不明	骨破片	15

1）西中川駿編1991『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛，馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書。

2　植物遺存体

植物の種子や果実を堆積物などから検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や植物の栽培を明らかにすることができる。左京六条三坊の発掘調査では、大量の種実が出土した。これら種実の同定を行い、堆積当時の植生ならびに栽培植物（食料）について検討した。

試　料　試料は、東西大溝SD4130、井戸SE4740・4468・4782・4790、SD4755、SK4325・4982より出土した種実である。古代に属するのはSD4130、SE4740、SK4325で、その他は中世の遺構である。これらの試料は、発掘調査中に肉眼で取り上げられたものである。

方　法　試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

A　分析結果

i　分類群

樹木9、草本2の計11分類群が同定された。遺構別の学名、和名および粒数をTab. 11に、計測値を別表11・12に示す。計測については、計測可能な個体に限り、その対象とした。主要な分類群は、写真をFig. 218・219に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記載する。

a　樹　木

マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　毬果　マツ科

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平5角形であり、その中央にはへそがある。

ヤマモモ　*Myrica rubra* S. et Z.　核　ヤマモモ科

茶褐色で楕円形を呈し、両端がやや尖る。一端にへそがあり表面は粗い。断面は扁平である。

オニグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr.　核（半形・破片）　クルミ科

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端が尖る。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。

ヒメグルミ　*Juglans mandshurica* var *cordiformis* Rehder　核（完形・半形）　クルミ科

淡褐色で円形を呈し、一端が尖る。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる（漢字？）。表面にはオニグルミと比べて明瞭な隆起はない。断面は円～楕円形である。

コナラ属　*Quercus*　堅果（破片）　ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し、破片のため属レベルの同定までである。

ウ　メ　*Prunus mume* S. et Z.　核　バラ科

茶褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には小孔が散在する。

モ　モ　*Prunus persica* Batsch　核（完形・半形・破片）　バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

センダン　*Melia azedarach* var. *subtripinnata* Miq.　核（完形・破片）　センダン科

黒褐色で楕円形を呈し、一端は円孔となる。縦に５本の発達した稜が走る。

トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　種子（破片）　トチノキ科

楕円形を呈し、黒色と茶褐色の部分とに分かれ、黒色の部分に光沢がある。保存状況が悪く破片であるが、同一個体と考えられる。

b　草　本

ゴキヅル　*Actinostemma lobatum* Maxim.　種子（完形・破片）　ウリ科

黄褐色で卵形を呈し、断面は扁平である。表面は粗い。

ヒョウタン類　*Lagenaria siceraria* Standl.　種子・果皮　ウリ科

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に２本の低い稜が走る。果皮は、木質化しやや厚みがある。表面はなめらかで裏面は粗い。

ヒョウタン仲間とするものには、ヒョウタン、フクベ、カンピョウが含まれ（藤下1982）、このうちフクベ、カンピョウは食用になる。表面の稜が発達せず未成熟な「しいな」である。

ⅱ　種実の計測値

モモが最も多く、サイズ（長さ×幅×厚さ）の平均値は22.19㎜×17.57㎜×18.80㎜、最大値は34.74㎜×24.28㎜×18.66㎜、最小値は14.39㎜×10.51㎜×7.21㎜、齧歯類の咬み跡がある核が24点、未成熟の核が４点であった。センダンのサイズ（長さ×幅）の平均値は12.75㎜×7.05㎜、最大値は13.66㎜×7.13㎜、最小値は11.67㎜×6.57㎜、ゴキヅルのサイズ（長さ×幅）の平均値は9.97㎜×6.34㎜、最大値は11.67㎜×6.51㎜、最小値は8.21㎜×5.37㎜であった。ヒョウタン類種子のサイズ（長さ×幅）の平均値は10.69㎜×5.38㎜、最大値は13.76㎜×7.06㎜、最小値は8.73㎜×4.37㎜であった。

B　考　察

左京六条三坊より出土した種実は全て大型種実であり、ほとんどが古代の遺構から出土したものであった。樹木種実はマツ属複維管束亜属、ヤマモモ、オニグルミ、ヒメグルミ、コナラ属、ウメ、モモ、センダン、トチノキ、草本種実はゴキヅル、ヒョウタン類が同定された。食用となるものにはヤマモモ、オニグルミ、ヒメグルミ、ウメ、モモ、ヒョウタン類、（コナラ属、トチノキ）があり、ウメ、モモ、ヒョウタン類は栽培植物である。食べられる植物の種実が多く、食用にされた残滓が投棄されたものと考えられる。なお土壌選別を実施していないため、微細な種実については検討できていない。

モモ核は金原正明氏（奈良教育大学）に教示を得た。核（内果皮）の表面に維管束の通る小孔がなく、丸い形のもの（A類）、表面に小孔があり、しわ間のひだの先端が尖る傾向にあり、長さの長いもの（B類）、表面に維管束の通る小孔が多いものと少ないものがあり、左右がやや非対称になるもの（CD類）が認められた（金原1996）。ここで仮にCD類としたものはC類ほど先端が尖らず、D類ほど左右が非対称および薄く軽軟ではない。７世紀にはC類に相当するモモ核は多様化し、５～６世紀のものとは同一でない可能性があると金原氏は指摘している。

Tab. 11　種実同定結果

遺構	層位	時期	分類群 学名	和名	部位	個数	備考
SD4130	下層	藤原京期	*Prunus persica* Batsch	モモ	核	6	
					核(半形)	1	
					核(破片)	1	
			Juglans ailanthifolia Carr	オニグルミ	核(半形)	1	
	中層	奈良時代前半～中頃	*Prunus persica* Batsch	モモ	核	62	齧歯類咬み跡（15）
							未成熟（4）
					核(半形)	31	
					核(破片)	10	
			Juglans ailanthifolia Carr	オニグルミ	核(半形)	1	
					核(破片)	1	
			Melia azedarach L. var. *Subtripinnata* Miq.	センダン	核	5	
					核(破片)	1	
			Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	毬果	1	
			Actinostemma lobatum	ゴキヅル	種子	11	
					種子(破片)	27	
	不明		*Prunus persica* Batsch	モモ	核	1	
					核(半形)	1	
SE4740	掘方	藤原京期	*Prunus persica* Batsch	モモ	核	4	
	最下層	藤原京期～奈良時代前半	*Prunus persica* Batsch	モモ	核	64	齧歯類咬み跡（8）
					核(半形)	22	
			Myrica rubra S. et Z.	ヤマモモ	核	1	
			Juglans mandshurica var. Rehder	ヒメグルミ	核	1	
					核(半形)	1	
			Quercus	コナラ属	堅果	1	
			Lagenaria siceraria Standl.	ヒョウタン類	果皮(破片)	8	
	下層	奈良時代中頃～後半	*Prunus persica* Batsch	モモ	核	2	
					核(半形)	1	
					核(破片)	2	
			Lagenaria siceraria Standl.	ヒョウタン類	果皮(破片)	52	
	中層	奈良時代末	*Prunus persica* Batsch	モモ	核	1	
			Lagenaria siceraria Standl.	ヒョウタン類	果皮(破片)	90	
	上層	9世紀～10世紀前半	*Prunus mume* S. et Z.	ウメ	核	1	
			Lagenaria siceraria Standl.	ヒョウタン類	果皮(破片)	70	
	不明		*Lagenaria siceraria* Standl.	ヒョウタン類	種子	410	
					種子(破片)	40	
					果皮(破片)	4	
SK4325		藤原京期	*Prunus persica* Batsch	モモ	核	1	
SE4782		11世紀	*Aesculus turbinata* Blume	トチノキ	種子(破片)	9	
			Lagenaria siceraria Standl.	ヒョウタン類	種子(破片)	1	
SE4468		平安時代後期～鎌倉時代	*Prunus mume* S. et Z.	ウメ	核	1	
			Prunus persica Batsch	モモ	核	1	
SE4790	中層	13世紀末～14世紀	*Prunus mume* S. et Z.	ウメ	核	1	齧歯類咬み跡（1）
			Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	毬果	1	
			Quercus	コナラ属	堅果(破片)	1	
SD4755		14世紀後半	*Prunus persica* Batsch	モモ	核	2	
SK4982		14世紀末～15世紀	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	毬果	1	
土坑②			*Prunus persica* Batsch	モモ	核	1	

Fig. 218　藤原京左京六条三坊のモモ核

ヒョウタン類の種子は、表面の稜が発達せず未成熟な「しいな」であり、果実が食用になった可能性も考えられる。

参考文献

笠原安夫1985『日本雑草図説』養賢堂
笠原安夫1988「作物および田畑雑草種類」『弥生文化の研究 第2巻 生業』雄山閣出版
金原正明1996「古代モモの形態と品種」『月刊考古学ジャーナルNo. 409』ニューサイエンス社
藤下典之1982「菜畑遺跡から出土したメロン仲間*Cucumis melo* L.とヒョウタン仲間*Lagenaria siceraria* Standl.の種子について」『唐津市文化財調査報告第5集菜畑遺跡』唐津市教育委員会
南木睦彦1991「栽培植物」『古墳時代の研究第4巻生産と流通 Ⅰ』雄山閣出版
南木睦彦1993「葉・果実・種子」『日本第四紀学会編　第四紀試料分析法』東京大学出版会
吉崎昌一1992「古代雑穀の検出」『月刊考古学ジャーナル No. 355』ニューサイエンス社

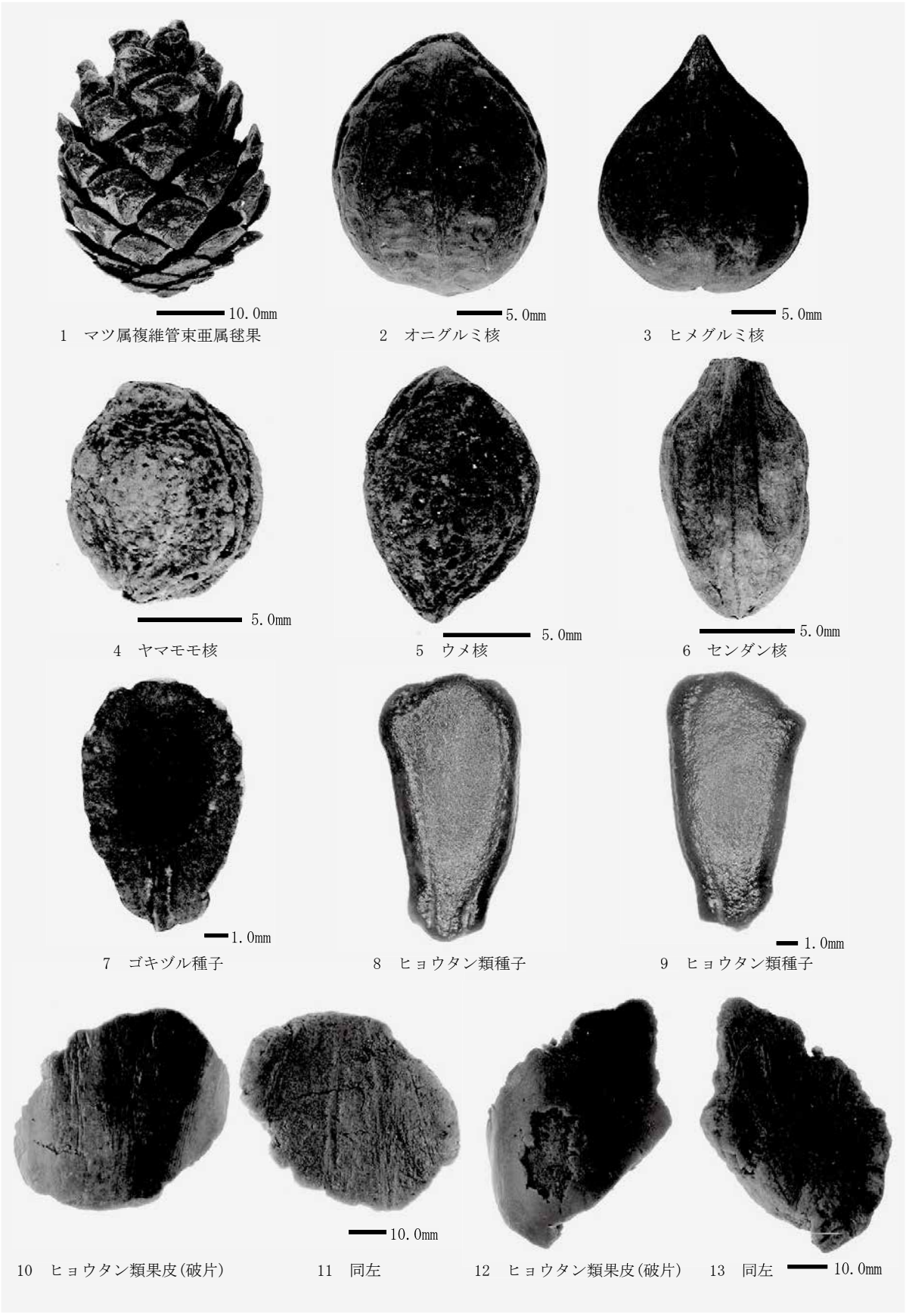


Fig. 219　藤原京左京六条三坊の種実

3　木製品の樹種調査

本書に収録したほぼ全ての木質遺物を対象に、樹種調査を実施した。その結果は既に第Ⅳ章3に記載したとおりであるが、ここであらためて詳細を報告することにしたい。

試料と方法　対象とした木質遺物は、木製品273点、木質部を伴う鉄製品3点、木簡13点（ただし、木製品の項目で斎串（Fig.159-29）として報告した左京職木簡（11）を除外した数。）、建築部材70点の、あわせて359点である。ただし、曲物（269）については4つの構成部材ごとに、SE4740の部材（別表12-整理番号1063A・B）については、発掘当時に同一個体として取り上げられた2材それぞれを調査したので、実際の調査点数は合計363点である。

樹種の調査は、遺物ごとに木材組織プレパラート（透過断面標本）を作製し、これを生物顕微鏡で観察する方法で実施した。その詳しい手順は下記のとおりである。

まず、遺物から木口、柾目、板目の3種類の木材組織試料（おおむね1～2㎜角、厚さ数十μm程度。）を徒手により直接採取し、スライドガラス上に並べた後、カバーガラスをかけて封入し、観察用のプレパラートを作成した（徒手切片法）。この際、封入剤にはガム・クロラール（抱水クロラール50ｇ、グリセリン20ml、アラビアゴム粉末40ｇ、蒸留水50mlの混合物）を使用した。次に、このプレパラート上の木材解剖学的な特徴を生物顕微鏡（カール・ツァイス社、Axioplan2）で観察し、次項で述べる識別拠点にもとづいて樹種を同定した。また、必要に応じて上記顕微鏡に組み込んだデジタル撮影装置（島津理化、Moticam2000）により写真画像を記録した。

試料の採取は、破面や目立たない部分を中心に行ない、遺物の形状や加工痕跡等を大きく損なわないよう、作業には細心の注意を払った。ただし、芯持材などで必要な試料が遺物の表面から採取できなかった場合は、やむを得ず5～7㎜角程度のブロック試料をいったん切り出し、ここから試料を採取したものがある。これらの採取箇所については必ず台帳に記録し、後から参照できるようにした。また、とくに木簡に関しては、奈文研2010『平城宮木簡七』や、奈文研2012『藤原宮木簡三』で行った作業方法を踏襲した。すなわち、木簡本体に残る墨や加工の痕跡への影響を最小限に抑える観点から、目視観察により明らかに針葉樹と考えられたものについては、識別のポイントが端的にあらわれやすい柾目面に試料の採取箇所を限定することとし、木口面や板目面からの採取は行わないことにした。

樹種の識別に際しては、埋蔵文化財センター年代学研究室所蔵の現生木材組織プレパラートを利用したほか、適宜文献（小林・須藤1960、島地・伊東1982、伊東1995・1996・1997・1998・1999など）を参照した。また、広葉樹材の検索にあたっては独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベース（URL: http://f030091.ffpri.affrc.go.jp/IDB/home.php）も参考とした。学名および植物学的分類は北村・村田1979によった。ただし、本稿でいうヒノキ科にスギは含めないものとする。

識別拠点の記載

・モミ属（*Abies* sp.）マツ科

針葉樹。樹脂細胞および樹脂道、放射仮道管を持たない。分野壁孔はスギ型で、1分野に1～4個程度が存在する。放射柔細胞の末端壁は数珠状を呈する。

・マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）（*Pinus* Subgen. *Diploxylon* sp.）マツ科

針葉樹。垂直樹脂道、水平樹脂道、放射仮道管を有する。放射仮道管の内壁には鋸歯状の突起が観察できる。分野壁孔は窓状。

・スギ （*Cryptmeria japonica* D.Don）ヒノキ科スギ属

針葉樹。樹脂細胞があり、晩材部に接線方向に並ぶ。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。分野にはスギ型の壁孔が1分野あたりおおむね2個存在している。

・コウヤマキ（*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.）コウヤマキ科コウヤマキ属

針葉樹。樹脂細胞、樹脂道、放射仮道管は存在しない。分野壁孔は窓状。

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* Endl.）ヒノキ科ヒノキ属

針葉樹。樹脂細胞があり、晩材部に接線方向に並ぶ。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。分野壁孔はヒノキ～トウヒ型で、1分野に2個程度存在している。

・サワラ（*Chamaecyparis pisifera* Endl.）ヒノキ科ヒノキ属

針葉樹。ヒノキと同様であるが、分野壁孔はスギ～ヒノキ型。

なお、上記のヒノキまたはサワラの可能性が考えられるものであって、分野壁孔の種類が明確でないものは、ヒノキ属（*Chamaecyparis* sp.）とした。また、同様に、分野壁孔の数が明確でないものはヒノキ科（Cupressaceae）とした。

・アスナロ属（*Thujopsis* sp.）ヒノキ科

針葉樹。樹脂細胞あり。ヒノキ、サワラと類似した特徴を有するが、分野壁孔がスギ～ヒノキ型で、1分野に1～5個程度。放射柔細胞には樹脂の充填が目立つ。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）ブナ科クリ属

広葉樹環孔材。孔圏部道管の径は非常に大きく、孔圏外では徐々に径を減じて火炎状に排列する。道管の穿孔は単穿孔。放射組織は単列でほぼ同性。

・アカガシ亜属（*Quercus* Subgen. *Cyclobalanopsis* sp.）ブナ科コナラ属

広葉樹放射孔材。道管は年輪とは無関係に放射方向に列をなして分布する。広放射組織が見られる。

・コナラ亜属コナラ節（*Quercus* Subgen. *Quercus* Sect. Prinus sp.）ブナ科コナラ属

広葉樹環孔材。孔圏部の道管は大きいが、孔圏外では徐々に径を減じて火炎状に分布する。孔圏外の道管の壁は薄く角張る。広放射組織が見られる。

・ケヤキ（*Zelkova serrata* Makino）ニレ科ケヤキ属

広葉樹環孔材。孔圏部道管の径は非常に大きく、ほぼ1列にならび、孔圏外では径を減じ斜線状、あるいは花づな状に分布する。道管の穿孔は単穿孔。放射組織は異性、1～8列程度で、上下縁辺に大型の結晶細胞が見られる。

・ムクノキ（*Aphananthe aspera* Planchon）ニレ科ムクノキ属

広葉樹散孔材。中～小規模の道管が単独または複合しつつ、年輪界とは無関係に散在する。放射組織は異性で1～5列。接線状に3列幅ほどで広がる帯状柔組織をもつ。

・ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）クワ科クワ属

広葉樹環孔材。道管の径は孔圏部で非常に大きく1～5列程度で、孔圏外にかかるにつれ漸移的に小さくなっていく。道管の穿孔は単穿孔。チロースが認められる。放射組織は異性で1

～6列程度。柔細胞は周囲状。結晶細胞が認められる。

・シキミ（*Illicium anisatum* L.）シキミ科シキミ属

広葉樹散孔材。道管の穿孔は階段穿孔で段の数は40以上。放射組織は異性で2列、直立細胞は上下に長い。タイル細胞が目立つ。

・イスノキ（*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.）マンサク科イスノキ属

広葉樹散孔材。道管の穿孔は階段穿孔で、段の数は10程度。軸方向柔細胞は放射方向に等間隔に分布する。放射組織は異性で1～2列程度。随所に肥大した多室結晶細胞が見られる。

・ウツギ属（*Deutzia* sp.）ユキノシタ科

広葉樹散孔材。道管の穿孔は階段穿孔で段の数は多い。道管内壁には対列壁孔が見られる。放射組織は異性で2～5列で、上下に非常に長い。さや細胞が顕著である。髄は中空になりがちである。

・ナシ亜科（Rosaceae Subfam. Maloideae sp.）バラ科

広葉樹散孔材。道管は基本的に複合せずに分布するが、年輪の末端寄りの道管は径が小さい。道管の穿孔は単穿孔。放射組織は同性で2列程度、上下縁辺のみ成がやや高く形が不規則。柔組織は短接線状。

・トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）トチノキ科トチノキ属

広葉樹散孔材。道管は単独または2～4個が放射方向に複合し、年輪の中央部を中心に分布する。道管の穿孔は単穿孔。放射組織は単列で同性、層階状に規則正しく配列している。

・ニシキギ属（*Euonymus* sp.）ニシキギ科

広葉樹散孔材。道管の穿孔は単穿孔。年輪の始めでは径が大きめの道管が1列にならぶ。道管の側壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は単列で同性。

・ネジキ（*Lyonia ovalifolia* Drude）ツツジ科ツツジ亜科ネジキ属

広葉樹散孔材。道管の穿孔は階段穿孔で段の数は10～20程度。放射組織は異性で1～3列。多列部の上下縁辺は長く直立細胞になっている。

・シャシャンボ（*Vaccinium bracteatum* Thunb.）ツツジ科スノキ亜科スノキ属シャシャンボ節

広葉樹散孔材。道管の穿孔は階段穿孔で、段数は非常に少ない。放射組織は異性で1～5列。上下に長い。単列の放射組織は直立細胞のみからなる。多列部にさや細胞が認められる。

・トネリコ属（*Fraxinus* sp.）モクセイ科

広葉樹環孔材。孔圏部道管の径は非常に大きい。道管の穿孔は単穿孔。道管の内壁には対列壁孔が見られる。放射組織は同性で1～2列。柔細胞は周囲状、および顕著なターミナル状。

結　果　結果はTab. 12、別表11・12ならびに第Ⅳ章3・4の報文中に示したとおりである。劣化の影響により樹種の同定に至らなかった試料は、針葉樹、あるいは散孔材、の様に、分類できる範囲で一括して表記した。得られた結果は類例に照らして妥当なものである。たとえば、櫛はイスノキ、またはネジキであったが、この両者はツゲなどと並び、古代に限らず近世に至るまで櫛の素材に使われ続けた樹種である。また、水湿によく耐えるコウヤマキは、柱根や井戸の部材として顕著であった。量的にみると、今回の試料の圧倒的多数はヒノキ系の針葉樹であった点が特筆される。

試料のうち、用途不明品（Fig. 101-75）は木材ではなく、何らかの樹木の樹皮であろう。板目

切片を見ると、単列の放射組織が層階状に配列している状況が認められる。しかし、樹皮に関しては現在のところ標本が十分に整備されていないため、針葉樹であるか広葉樹であるかという点も含め、これ以上の特定は難しい。

Tab. 12　木製品の器種別樹種

SD4130出土木製品

器種	樹種	点数
曲物	ヒノキ	12
	ヒノキ属	12
	ヒノキ科	6

器種	樹種	点数
斎串	ヒノキ	2
	ヒノキ属	35
	ヒノキ科	13

SE4740出土木製品

器種	樹種	点数
曲物	ヒノキ	2
	ヒノキ属	4
斎串	ヒノキ	1

今回調査した試料は、先に藤原宮木簡の樹種を調査した際の例と同様、大半の試料で木材組織の劣化が著しく、とりわけヒノキ系のものに関しては、属どまり、あるいは科どまりの同定とせざるを得ないものが多くあった。しかしながら、別表10～12に示したように、ヒノキ系の樹種のうち具体的な同定に至った試料の圧倒的多数がヒノキであったことをふまえると、そうしたヒノキ系試料の大半も、本来はヒノキであった可能性が高い。

今回の試料には、古代から中世のものまで含まれている。古代の遺構で、木製品の出土量が比較的多いSD4130とSE4740の曲物と斎串の樹種についてふれておく（Tab.12）。SD4130出土曲物30点のうち、12点がヒノキ、12点がヒノキ属、6点がヒノキ科であり、ヒノキ科の木材が曲物に利用されていたことがわかる。斎串50点に関しても、ヒノキ2点、ヒノキ属35点、ヒノキ科13点と、ヒノキ科の樹種が主に利用されている。SE4740出土木製品に関しては、曲物6点のうち、2点がヒノキ、4点がヒノキ属と同定された。斎串1点に関しても、樹種はヒノキである。以上から、左京六条三坊における古代の曲物や斎串には、ヒノキ科の樹種を好んで用いていたと言うことができよう。

参考文献

奈文研2010『平城宮木簡七』（奈文研史料第85冊）
奈文研2012『藤原宮木簡三』（奈文研史料第88冊）
IAWA委員会編/日本木材学会組織と材質研究会　伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩日本語版監修1998『広葉樹材の識別―IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト―』海青社
IAWA委員会編/日本木材学会組織と材質研究会　伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘日本語版監修2006『針葉樹材の識別―IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』海青社
伊東隆夫1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31
伊東隆夫1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32
伊東隆夫1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33
伊東隆夫1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34
伊東隆夫1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35
北村四郎・村田源1971『原色日本植物図鑑・木本編［Ⅰ］』保育社
北村四郎・村田源1979『原色日本植物図鑑・木本編［Ⅱ］』保育社
小林弥一・須藤彰司1960『木材識別カード』日本林業技術協会
島地謙・伊東隆夫1982『図説木材組織』地球社
島地謙・伊東隆夫（編）1986『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版

4　金属製品・銭貨・塼仏の分析

A　金属製品

第47次調査で出土した金属製品のうち棒状金銅製品、銅釧、花形飾金具、銅鏡の５点について、透過Ｘ線撮影による内部構造調査、蛍光Ｘ線分析法による材質調査を行った。

透過Ｘ線撮影は、Ｘ線発生装置SoftexM150Wを使用し、データの取り込みにはGE製FLA7000システム、イメージングプレートはSR2040を使用した。撮影条件は、材質および劣化の程度により調整し、管電圧70～80kV、電流1.0～2.0mA、照射時間30秒とした。主成分元素は、非破壊にて蛍光Ｘ線分析法にて求めた。使用した装置は、蛍光Ｘ線分析装置EAGLEⅢ（EDAX）、測定条件は管電圧40kV、管電流40μA、Ｘ線照射径50μm、測定時間200秒、大気中である。分析箇所は、顕微鏡下で腐食の程度の少ない箇所を選択した。得られた値は、腐食層を含む表面の値であることから、あくまでも参考値と考えている。

棒状金銅製品（Fig. 205-32）　棒状金銅製品は黒色～暗灰青色を呈し、この黒色～暗灰青色層が層状に剥離している箇所から金色の層を観察することができる（Fig. 220）。また小孔周囲では縞状の凹凸が観察できる。黒色から暗灰青色部分の非破壊による表面分析では、銅（Cu）、錫（Sn）を顕著に検出し、わずかにヒ素（As）、鉄（Fe）を検出する。

銅　釧（Fig. 207-34・35）　34は腐食が進行し、全体が淡緑色を呈する。非破壊による表面部分の分析では、銅、錫、鉛（Pb）を主成分とし、さらに鉄、銀（Ag）、ヒ素、アンチモン（Ab）を、わずかにビスマス（Bi）を検出する。35は腐食が進行し全体が淡緑色を呈するが、一部褐色、黒色を呈する箇所がある。淡緑色部からは銅、アンチモン、鉛、ビスマスを検出し、わずかに鉄、銀、錫、ヒ素を検出した。褐色部分からは鉄を顕著に検出する。黒色部分は、淡緑色と同様の元素を検出するものの、淡緑色よりも鉄が多い。これらの銅釧は、その主成分元素がそれぞれ銅、錫、鉛、銅、アンチモン、鉛であり材質が異なることが判明した。

花形飾金具（Fig. 207-31）　中心の円形鋲の淡褐色部分とその周囲の黒色部分の成分は、銅を顕著に検出し、さらに錫、鉛、鉄、ヒ素、ビスマス、銀を検出した。本体の花弁状部分は、径0.6

Fig. 220　棒状金銅製品とその顕微鏡写真
（下左；小孔部分、下右；層状剥離と金色層）

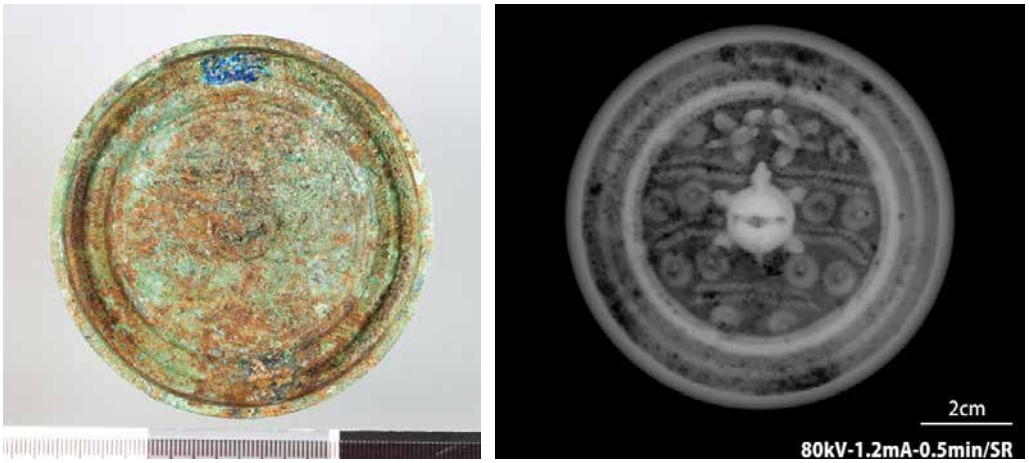


Fig. 221　銅鏡と透過Ｘ線画像

㎜程度の範囲で腐食層を除去した金属光沢部分を測定し、銅66％、錫27％、鉛４％、ヒ素２％、そのほか鉄、ビスマス、銀をわずかに検出した。腐食の影響も考慮しなければならないが、円形鈕と本体の花弁状部分では錫の量が異なることから、材質が異なるものである可能性も考えられる。

銅　鏡（Fig. 207-33）　銅鏡は全体に淡緑色、緑色、青色を呈する。透過Ｘ線画像から腐食が進行していることがうかがえ、気泡状の鬆を表面からも観察できる（Fig. 221）。表面には褐色の鉄サビ状のものが付着しているため、分析ではこれらの箇所を出来るだけ避けるようにし、鏡背面および鏡面の暗緑色部で、各１箇所ずつ測定を行った。その結果、銅を顕著に検出し、わずかに錫、鉛、鉄を検出した。鏡面および鏡背面からの検出元素に大きな差異はみられないため、鍍錫の有無は不明である。

Ｂ　銭　貨

第47次調査で出土した無文銀銭１点、第47・50次調査で出土した和同開珎27点、第47次調査で出土した中国銭・寛永通宝等15点について、顕微鏡観察、透過Ｘ線撮影、蛍光Ｘ線分析法による材質調査を行った。資料写真および透過Ｘ線画像はPh. 158～161・170に示す。

透過Ｘ線撮影は、Ｘ線発生装置SoftexM150Wを使用し、データの取り込みにはGE製FLA7000システム、イメージングプレートはSR2040を使用した。撮影条件は、材質および劣化の程度により調整し、管電圧40～75kV、電流1.0～2.0mA、照射時間30秒とした。化学組成は、非破壊にて蛍光Ｘ線分析法にて求めた。使用した装置は、蛍光Ｘ線分析装置EAGLEⅢ（EDAX）、測定条件は管電圧40kV、管電流40μA、Ｘ線照射径50μm、測定時間200秒、大気中である。分析箇所は、顕微鏡下で腐食の程度の少ない箇所を選択した。得られた値は、腐食層を含む表面の値であることから、あくまでも参考値と考えている。

無文銀銭（Ph. 158・159-1）　亀裂が一部で確認でき、中央の穴は方形を呈する。穴をあける際に生じたバリを平坦に整えており、また穴の内部には銀の小塊を観察できる（Fig. 222）。蛍光Ｘ線分析では、白銀色の金属光沢が残存する箇所を顕微鏡下で選択し非破壊にて測定を行った。銀を主成分として、銅、鉄、ビスマスを検出した（Tab. 13）。左京六条三坊で出土した無文銀銭と比較するため、飛鳥・藤原京から出土した銀銭[1]として、石神遺跡第６次調査で出土した無文

（左）表側から　　（中央）裏側から　　（右）穴内部の銀付着塊

Fig. 222　無文銀銭の穴部分の顕微鏡写真

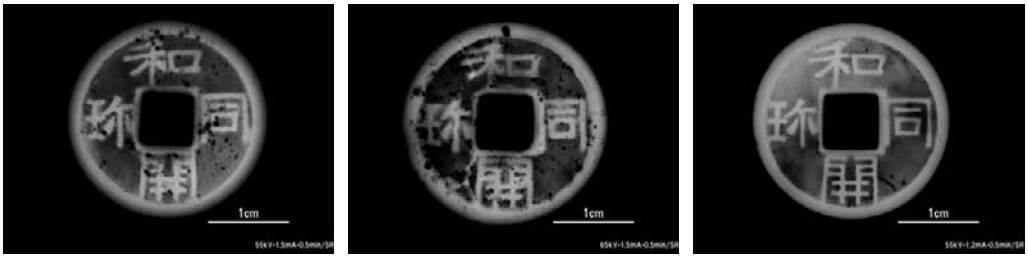
Tab. 13　飛鳥・藤原京出土銀銭の蛍光Ｘ線分析結果（wt%）

出土地		Ag	Cu	Fe	その他
藤原京左京六条三坊	無文銀銭	98.0	0.58	0.19	Bi
石神遺跡	無文銀銭	97.5	1.1	0.50	Ti、Bi
川原寺跡	無文銀銭	97.2	1.6	0.27	Ti
坂田寺跡	和銅銀銭	96.8	2.1	0.28	Ti
藤原京左京二条一坊・東一坊大路西側溝	和銅銀銭1	98.9	0.74	0.30	
	和銅銀銭2	98.6	1.4	tr	
	和銅銀銭3	98.7	1.1	0.42	

銀銭１点、川原寺塔跡から出土した金銅製品が付着した無文銀銭１点、坂田寺第３次調査で出土した和銅銀銭１点、藤原京左京二条一坊・東一坊大路西側溝から出土した和銅銀銭３点について成分分析を行った。その結果をTab. 13に示す。分析から、銀を主成分とし、若干の銅、鉄が含まれ、資料によってはビスマス、チタン（Ti）を検出することがわかった。これらの７点の銀銭の平均値は、銀98％、銅1.2％、鉄0.33％であり、いずれも銀含有量が高い。本資料と左京二条一坊出土資料の銅含有量は１％以下と少なく、銅は銀に含まれる不純物と考えられるが、坂田寺跡出土資料は２％とやや多いと言える。また石神遺跡出土資料では、金（Au）を検出した測定箇所があるなど、微量に検出される元素には資料により若干の差異が認められる。

和同開珎（Ph. 158～161-2～28）　27点全てで腐食が進行しており、表面は暗緑色から黒色を呈している部分が多い。透過Ｘ線画像からは、内部に亀裂や鬆（す）を顕著に観察できる資料（7・14・22）、内区に型ズレによるバリや、鋳型の割れや隙間に溶湯が侵入した脈状の鋳張りがみられる資料（10・14・21）などが確認できる（Fig. 223）。

蛍光Ｘ線分析による成分分析は、各資料の金属光沢もしくは暗緑色、淡灰緑色を呈する部分において非破壊にて測定した。Tab. 14に分析結果を示す。



（左）鬆（7）　　（中央）鬆および鋳張り（14）　　（右）内部亀裂（22）

Fig. 223　和同開珎の透過Ｘ線画像

主成分である銅は約78～94％であり、平均すると約88％、鉛は微少量～約12％、錫は約0.3～6％、ヒ素は約1～11％であり、そのほかにはアンチモン、銀、ビスマス、鉄を検出した。齋藤らの報告[2]によると皇朝十二銭のうち和同開珎～神功開寶には錫が数％以上、鉄が数％程度まで含まれているとされる。そこで本資料の銅－錫－鉛および鉄－銅の化学組成をFig. 224およびFig. 225に示す。Fig. 224から既報告と類似する分布を示すものの、錫はやや少ない傾向を示すことから、表面腐食の影響なども一因として考慮する必要があると考えている。Fig. 225からは鉄が数％程度まで認められ、既報告の値と比較すると鉄がより少ない（本調査では約1％以下。）資料の割合が多いこともわかった。これらの非破壊分析の結果から、含有量に若干の差異は認められるが既報告と同様の特徴を有していると言える。また和同開珎の成分には錫と鉛の含有量に違いがみられると報告されている[2]。これをふまえて、本資料を分類すると、化学組成の特徴により、①錫・ヒ素が多いタイプ（15点）、②錫・ヒ素よりも鉛が多いタイプ（6点）、③銅以外の含有量は少なく、錫・ヒ素よりも鉛が少ないタイプ（5点）、④アンチモンを顕著に検出するタイプ（1点）の4つに大別できることがわかった。化学組成による分類をFig. 226に示す。成分と銭文には相関があり、錫より鉛が少ないものは正字と呼ばれる銭文、錫よりも鉛が多く、鉛が10％以上ものは、それ以外の銭文が含まれると報告されている[3]。それぞれ今回のタイプ①、タイプ②に相当し、タイプ③はおそらく腐食の影響等によりこれらの中間的な値を示しているものであることが考えられ、既報告の結果を今回と同様に分類すると、正字とその他の銭文のどちらも含まれた（Fig. 227）。タイプ④はヒ素や錫、鉛が少ないことに対しアンチモンが比較的多く検出され、富本銭や古和同などにみられ、後世の鋳直しを除くと古い段階の資料に多く確認されている成分であると指摘されているものと考えらえる[4]。銭文と比較する必要があると考える。各タイプのスペクトルの一例をFig. 228に、各タイプの平均値を用いた化学組成の特徴をFig. 229に示した。

Tab. 14　無文銀銭および和同開珎定量分析結果（wt%）（tr；微少量、nd；検出限界以下）

No	次　数	Mn	Fe	Cu	As	Pb	Bi	Ag	Sn	Sb
1	47次	nd	0.19	0.58	nd	nd	1.26	98.0	nd	nd
2	47次	0.23	0.28	89.5	1.7	5.1	0.60	0.23	1.4	1.3
3	47次	0.29	0.27	90.8	3.4	0.48	0.49	0.29	3.5	0.56
4	47次	0.07	1.0	83.1	2.2	11.8	0.43	0.17	0.63	0.57
5	47次	0.12	1.1	87.9	5.4	tr	0.51	0.24	4.3	0.41
6	47次	0.20	2.8	86.0	5.2	0.83	0.87	0.20	3.3	0.59
7	47次	0.24	1.1	88.9	4.9	0.57	0.72	0.29	2.8	0.48
8	47次	0.13	0.91	88.1	5.6	3.8	0.40	0.26	0.35	0.43
9	47次	0.10	0.27	88.8	1.8	7.6	0.22	0.24	0.63	0.34
10	47次	tr	0.20	88.6	4.6	1.2	0.65	0.18	4.1	0.51
11	47次	tr	0.89	92.4	2.3	0.43	0.34	0.21	3.0	0.40
12	47次	0.09	0.16	93.5	2.2	1.9	0.72	0.26	0.79	0.38
13	47次	0.09	0.14	90.4	3.1	4.4	0.55	0.23	0.26	0.90
14	47次	0.10	0.91	85.1	4.6	1.4	0.72	0.23	6.2	0.72
15	47次	0.10	2.2	81.2	4.6	10.4	0.41	0.22	0.54	0.44
16	47次	0.16	1.1	90.8	3.0	0.73	0.47	0.21	3.3	0.36
17	47次	0.09	1.0	90.8	3.3	1.8	0.81	0.33	1.5	0.41
18	47次	0.13	2.2	84.8	3.5	1.6	0.66	0.28	6.2	0.75
19	47次	0.06	4.0	80.5	9.1	0.31	0.86	0.33	4.1	0.76
20	47次	0.05	1.1	82.6	7.3	0.88	0.83	0.28	4.6	2.4
21	47次	0.13	0.60	89.8	2.2	5.9	0.48	0.19	0.3	0.35
22	47次	0.21	0.96	87.8	2.5	2.2	0.83	0.22	4.4	0.89
23	47次	0.17	0.16	93.5	1.0	1.8	0.59	0.24	2.1	0.39
24	47次	0.10	0.22	88.9	2.6	0.50	0.67	0.26	0.51	6.3
25	47次	0.33	0.34	88.8	3.6	0.29	0.57	0.30	5.0	0.72
26	47次	0.11	0.34	90.0	5.9	2.4	0.47	0.17	0.34	0.34
27	47次	0.05	1.9	78.5	10.6	3.1	0.89	0.38	4.1	0.55
28	50次	tr	0.43	90.4	3.0	0.19	0.12	0.19	4.8	0.44

本資料群で最も出土数の多いタイプ①の化学組成の平均値は、およそ次の通りである。銅86％、錫４％、ヒ素４％、鉄１％で、１％以下は鉛、ビスマス、銀、アンチモンを検出。鉛が多いタイプ②の化学組成の平均値は、銅90％、鉛６％、ヒ素２％で、１％以下ではアンチモン、錫、ビスマス、銀、鉄を検出している。齋藤らの報告[4]と比較し、タイプ①は錫が少ない傾向が、タイプ②については鉛が少ない傾向がみられるが、これらは非破壊による分析であるため表面の腐食が影響しているのではないかと考えられる。

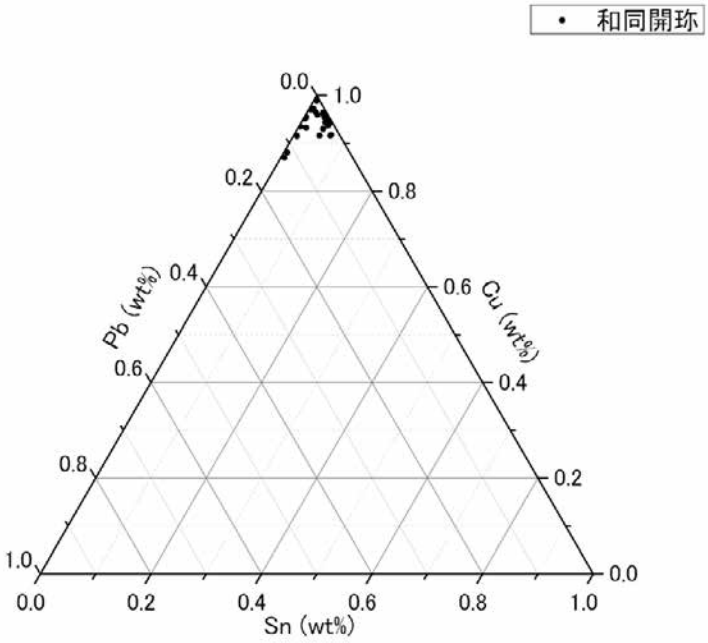


Fig. 224　和同開珎の化学組成（銅－錫－鉛）

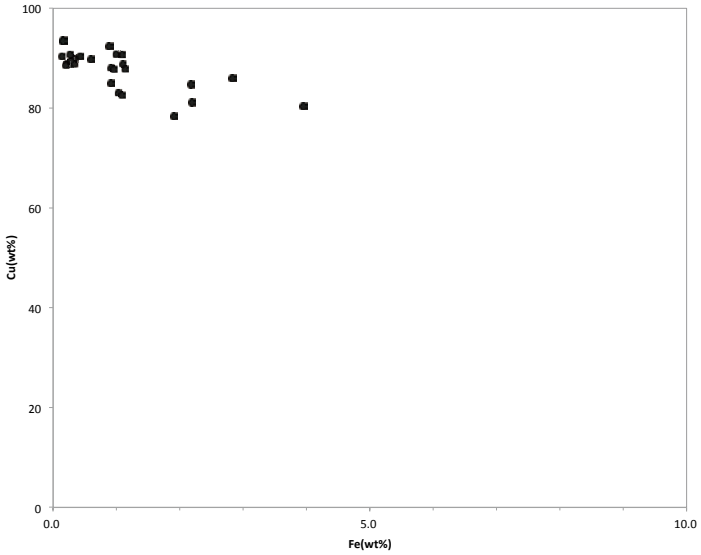


Fig. 225　和同開珎の化学組成（鉄－銅）

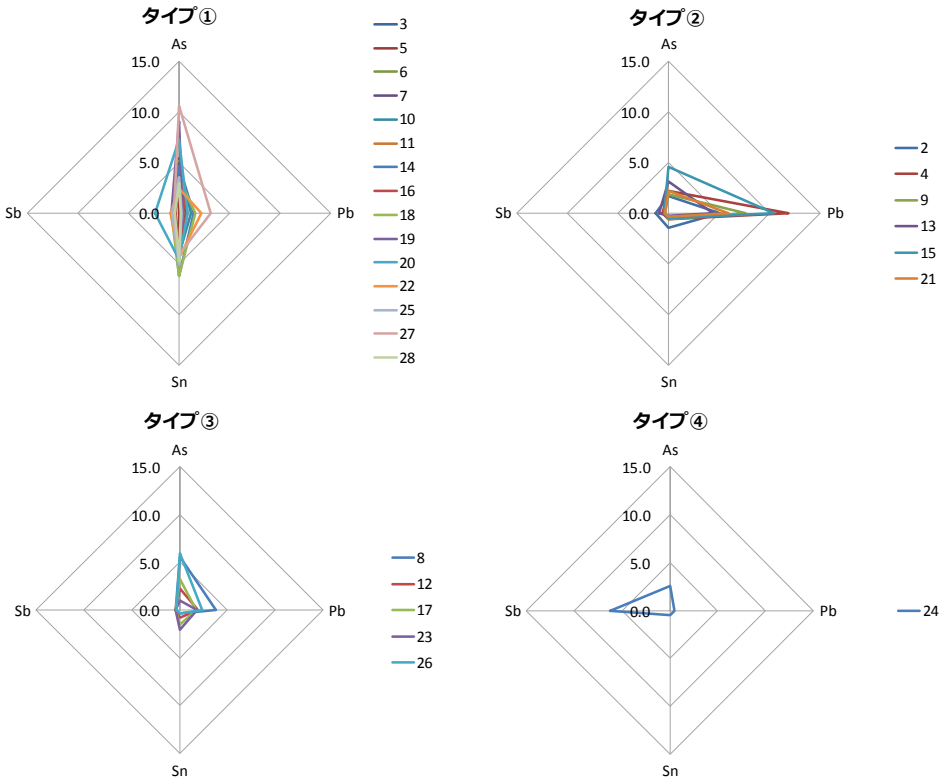


Fig. 226　各資料の化学組成の特徴

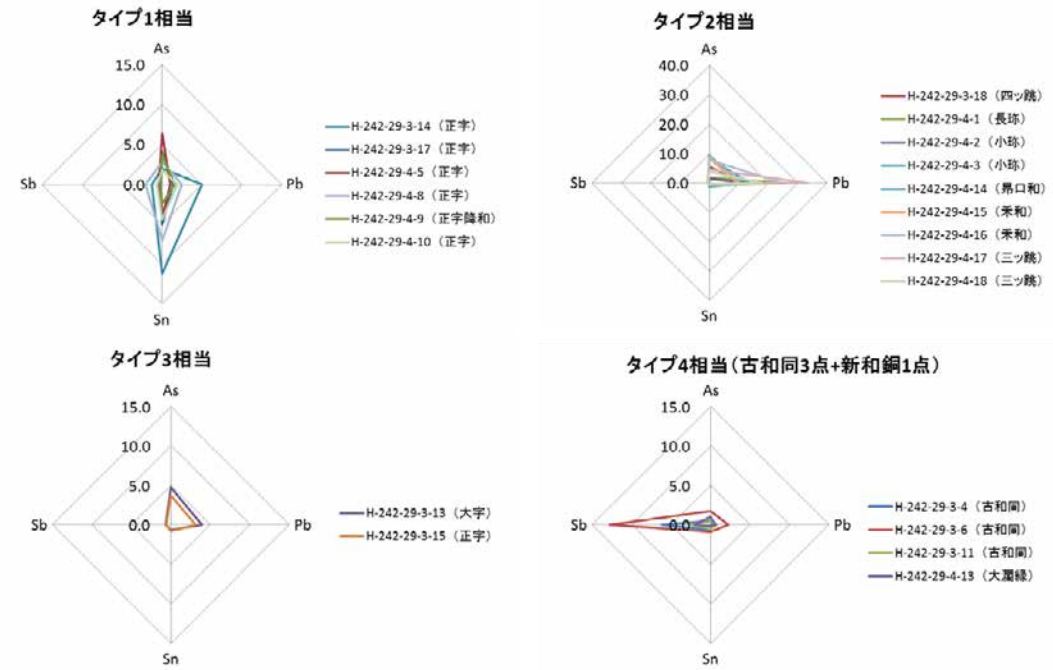


Fig. 227　既報告資料の化学組成の特徴と銭文

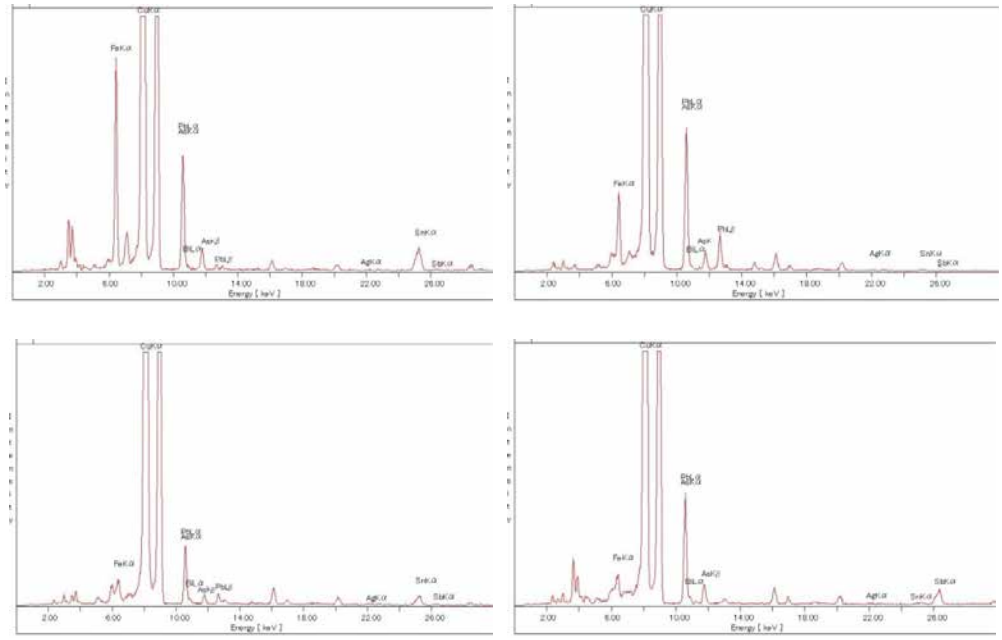


Fig. 228　各タイプのスペクトル一例

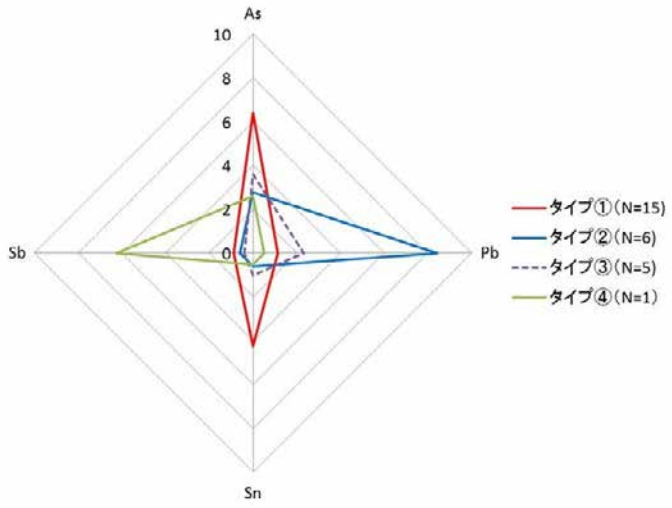


Fig. 229　化学組成の平均値による各タイプの特徴

中国銭・寛永通宝（Ph. 160・161-29～43）　中国銭14点、寛永通宝１点は、腐食の程度が著しい資料が多かったため、クリーニングを行った後に非破壊で表面部分において測定を実施した。またFig. 230には文字が鮮明ではないため銭種が明確ではない資料で、開元通寶ヵとされる銭（Ph. 160・161-29）の透過Ｘ線画像を示す。銭文は鮮明ではないが、開元通寶である蓋然性が高いと言える。

蛍光Ｘ線分析結果をTab. 15に示す。腐食により銅、錫、鉛の値にばらつきが大きい。金属光沢の残存していた32の値は、およそ銅81％、錫10％、鉛８％、鉄１％であり、他にビスマスをわずかに検出している。また42ではアンチモンを検出している。資料のうち29と43以外は10～11世紀に初鋳された銭貨である。元豊通寶からはヒ素が、政和通寶からはヒ素とアンチモンが検出され、他の銭種とやや異なる傾向を示した。開元通寶である可能性が高い29については、

Tab. 15　中国銭の測定結果（wt%）（tr；微少量、nd；検出限界以下）

No	次　数	銭　種	測定箇所	Fe	Cu	As	Pb	Bi	Ag	Sn	Sb
29	50次	開元通寶ヵ	黒色	7.6	66.9	tr	20.8	0.11	0.14	4.4	nd
30	47次	天禧通寶	灰緑色	4.7	29.3	tr	24.9	0.77	tr	40.3	nd
31	47次	天禧通寶	灰緑色	3.8	26.8	tr	29.1	0.35	tr	39.1	nd
32	47次	天聖元寶	金属光沢	1.0	80.5	tr	8.1	0.34	tr	10.1	nd
33	50次	天聖元寶	黒色	0.68	36.6	tr	29.6	0.87	0.64	31.6	nd
34	50次	天聖元寶	灰緑色	6.7	31.9	tr	17.1	1.6	0.44	42.2	nd
35	50次	皇宋通寶	黒色	1.2	45.8	tr	19.3	0.30	0.43	32.9	nd
36	47次	熙寧元寶	黒色	9.9	61.6	tr	9.7	0.16	tr	18.6	nd
37	47次	熙寧元寶	黒色	4.7	22.5	tr	50.4	0.47	tr	21.9	nd
38	47次	熙寧元寶	黒色	2.3	23.4	tr	20.4	0.46	tr	50.7	nd
39	46次	元豊通寶	黒色	4.8	42.0	0.11	17.5	0.43	tr	35.6	nd
40	53次	元豊通寶	暗緑色	0.39	36.7	0.14	16.6	0.38	0.40	44.9	tr
41	50次	元豊通寶	灰緑色	0.85	30.2	0.39	37.9	0.49	0.63	25.7	tr
42	45次	政和通寶	灰緑色	12.0	20.3	1.5	24.7	0.55	0.42	39.4	0.99
43	50次	寛永通寶	黒色	6.7	52.9	2.3	25.5	0.35	0.48	10.8	tr

Fig. 230　中国銭29と透過Ｘ線画像

時期的には和同開珎と比較できる資料と言えるものの、腐食が著しい。そのため今回の非破壊による分析値を直接比較することは難しいと言わざるを得ないが、化学組成の傾向としては鉛が多く、タイプ②と類似していることが考えられる。

Ｃ　塼　仏

第46・47・50次調査で出土した塼仏には、白色、褐色、赤色、金色などの付着物がみられる資料がある。破片Ａ～Ｅの５点について、顕微鏡観察、透過Ｘ線撮影、蛍光Ｘ線分析法による非破壊構造・材質調査、裏面の漆様付着物は、微小片を採取し、フーリエ変換赤外分光分析（FT-IR分析）法による材質調査を行った。

破片Ａ（Pl. 12-2）　方形三尊塼仏Ｂの破片（Fig. 231。○印と番号は分析箇所とFig.番号。以下同じ。）。衣文の凹部に下地と考えられる白色顔料（Fig. 232）が観察でき、部分的にではあるが、その上層にやや硬く、反りや亀裂を伴う褐色物質（Fig. 233・234）が残存している。裏面にも濃褐色・褐色を呈する漆様物質（Fig. 235）が部分的に被覆している。また比較的粒径が均一で赤褐色を呈する粒子（Fig. 236）が残存しているが、その下に白色下地は顕著にみられない。この破片は銅釘１本が、刺さった状態で出土している。この銅釘を側面から撮影した透過Ｘ線画像（Fig. 239）から、釘は貫通しており、銅釘の断面形は正方形に近く、塼仏の裏側から表側に向って徐々に

細くなり、先端は鋭角に加工されていることがわかる（Fig. 237）。釘孔周囲の金色部分（Fig. 238）から金（Au）を検出したことから（Fig. 252）、山田寺塼仏[5]のように、表面には金箔などによって装飾が施されていた可能性がある。

蛍光Ｘ線分析の結果、白色下地と考えられる測定箇所からはケイ素（Si）、アルミニウム（Al）を顕著に検出した（Fig. 252）。カルシウム（Ca）は胎土部の積分強度よりも少ないため、漆喰や石膏などではなく、また鉛（Pb）も検出限界以下であったことから鉛白などの鉛系白色顔料でもないと言え、この白色部は白土による白色下地である蓋然性が高い。この上層に残存する褐色物質からはカルシウム、チタン、鉄、ケイ素、アルミニウム、銅、硫黄（Ｓ）を検出した（Fig. 252）。褐色物質が漆であると仮定すると、カルシウムは混和剤の可能性が考えられる。赤褐色部は鉄を顕著に検出したため（Fig. 252）、ベンガラ・丹土のような鉄系赤色顔料と言えるが、その下には褐色物質や白色下地が顕著にみられないことから、後世の付着などの可能性も残る。裏面に付着している濃褐色・褐色部のFT-IR分析の結果、漆の特徴を示すスペクトルを得た（Fig. 253）。この塼仏を取り付けた表面に漆層が存在していた、もしくは取り付けるための接着剤として漆が使用されたことも考えられる。

破片Ｂ（Pl. 13-5）　方形三尊塼仏Ｂの破片（Fig. 240）。破片Ａにもみられた白色下地（Fig. 241）、その上層の漆と思われる褐色物質（Fig. 242）が残存している。裏面にも褐色付着物が部分的に残存している。蛍光Ｘ線分析の結果、褐色物質からは、カルシウムを顕著に検出するなど、破片Ｂは破片Ａと同様の特徴をもつことがわかった。

Fig. 231　破片Ａ（左：表面　右：裏面）

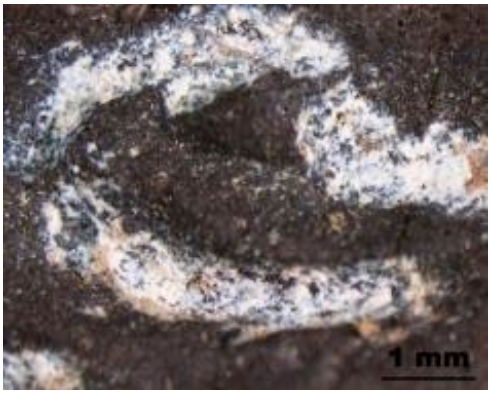


Fig. 232　破片Ａ衣文凹部の白色部

Fig. 233　破片Ａ白色下地の上の褐色物質

Fig. 234　破片Ａ白色下地の上の褐色物質（光沢有）

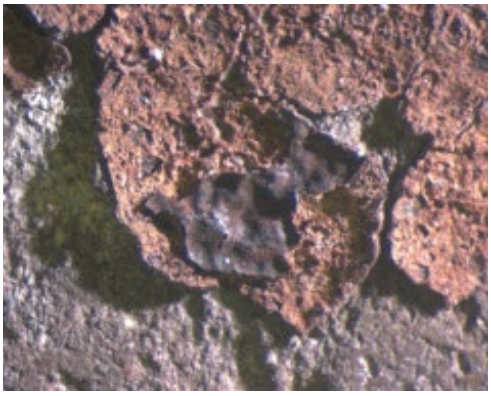


Fig. 235　破片Ａ裏面の濃褐色・褐色付着物（漆）

Fig. 236　破片Ａ赤褐色部

Fig. 237　破片Ａ銅釘の先端部

Fig. 238　破片Ａ金箔

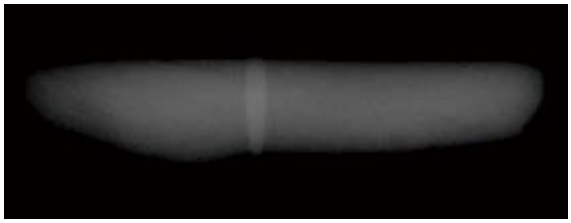


Fig. 239　破片Ａ銅釘の透過Ｘ線画像（側面から撮影）

Fig. 240　破片Ｂ（左：表面　右：裏面）

破片C（Pl. 13-3）　方形三尊塼仏Bの破片（Fig. 243）。下地と考えられる白色部（Fig. 244）、褐色物質（Fig. 245）が残存している。蛍光X線分析結果から、白色部分からは、ケイ素、アルミニウムを顕著に検出したため、白土による白色下地である蓋然性が高い。

破片D（Pl. 13-4）　方形三尊塼仏Bの破片（Fig. 246）。白色部、淡赤色部、赤褐色部（Fig. 247）が確認できる。他の破片で観察できた白色下地、その上層にある褐色物質という層序は確認できなかった。白色部は、淡赤色部の上層で観察できることから（Fig. 248）、白色下地とは言い難い。蛍光X線分析の結果、淡赤色部はリン（P）が多く、鉄は胎土との差異がみられない。赤褐色部は胎土よりもFeはやや多い傾向を示すものの、顕著ではないことから、どちらも鉄系赤色顔料と判断することは、本結果だけでは難しいと言える。

Fig. 241　脇侍破片Ｂ蓮華座凹部の白色下地

Fig. 242　破片Ｂ白色下地上層の褐色物質

Fig. 243　破片Ｃ（左：表面　右：裏面）

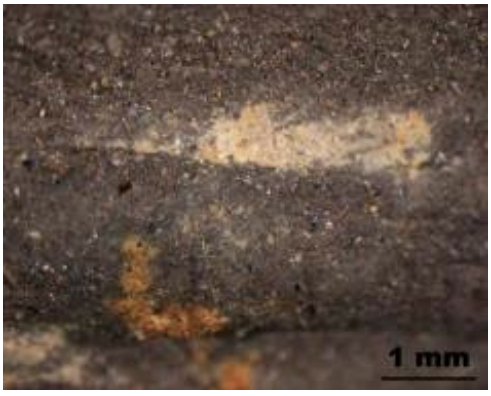


Fig. 244　破片Ｃ白色下地

Fig. 245　破片Ｃ褐色部

Fig. 246　破片Ｄ（左：表面　右：裏面）

Fig. 247　破片Ｄ胎土と赤褐色部

Fig. 248　破片Ｄ淡赤色部と白色部

Fig. 249　破片Ｅ（左：表面　右：裏面）

Fig. 250　破片Ｅ褐色物質

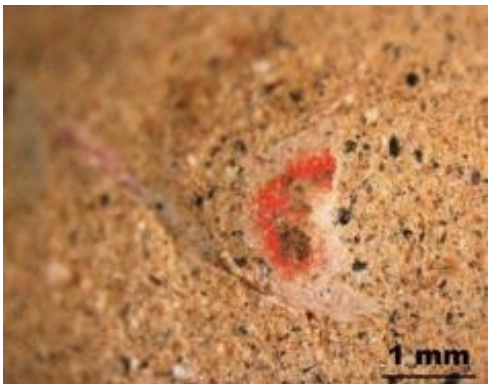


Fig. 251　破片Ｅ赤色顔料（朱）と白色下地もしくは白色顔料（鉛白）

破片Ｅ（Pl.13-1）　方形三尊塼仏Ａの破片（Fig.249）。脚およびその周囲、裳裾端部に亀裂や光沢を有する褐色物質（Fig.250）が僅かに残存する。また裳の部分には赤色部・白色部（Fig.251）が観察できる。蛍光Ｘ線分析の結果、赤色部からは水銀（Hg）を検出した。その周囲の白色部からは、Pbを顕著に検出したことから、赤色顔料は朱であり、白色下地もしくは白色顔料として、鉛白などの鉛系白色顔料が用いられている可能性がある。

蛍光Ｘ線による胎土分析の結果、破片Ｅ（方形三尊塼仏Ａ）の化学組成が他破片（方形三尊塼仏Ｂ）とは異なる傾向を示すことがわかった（Tab.16）。さらに破片Ｅは、破片Ａ～Ｃで使用されていると考えられる白土や鉄系赤色顔料ではなく鉛系白色顔料や水銀朱が使用されているなど、検出した顔料も異なり、他破片との差異が明確となった。

Tab.16　塼仏胎土分析の結果

破　片	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3
A	1.8	1.9	20.0	61.7	1.9	1.8	1.6	0.10	9.2
B	2.0	1.9	19.3	63.5	1.8	2.0	1.2	0.08	8.4
C	1.7	2.0	20.9	59.6	1.9	2.4	1.5	0.15	10.2
D	1.8	2.0	21.2	58.0	1.7	2.4	1.8	0.10	11.1
E	2.0	3.9	15.5	51.3	0.98	5.4	1.7	0.25	19.0

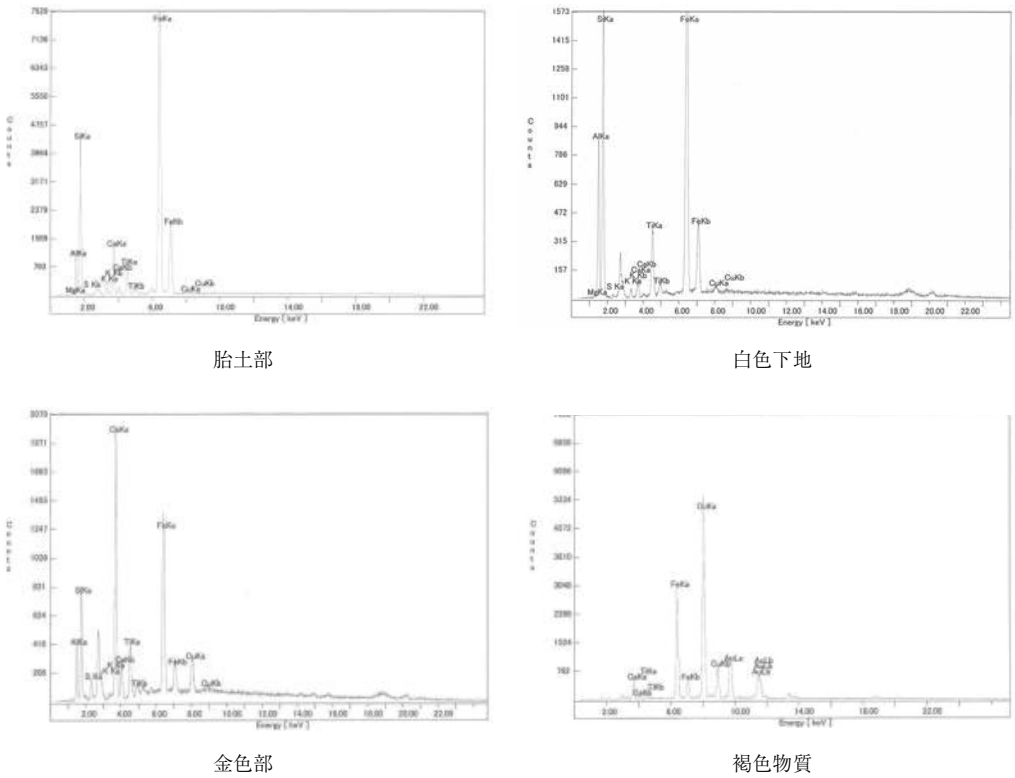


Fig.252　蛍光Ｘ線分析結果の一例（破片Ａ）

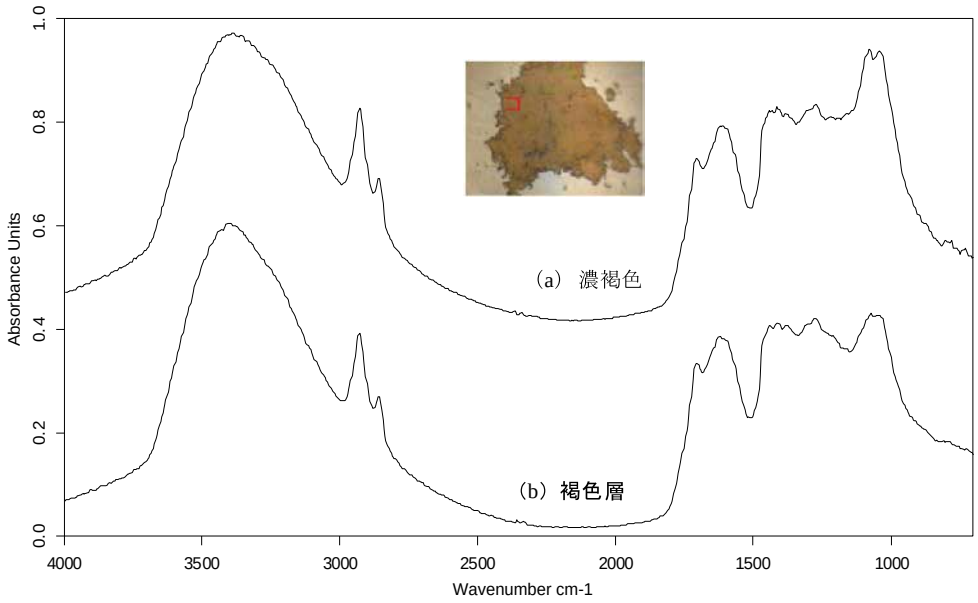


Fig. 253　破片Ａ裏面の褐色物質のFT-IR結果

1） 松村恵司1998「無文銀銭と和銅銀銭―飛鳥藤原地域出土銀銭を中心に―」『出土銭貨９』出土銭貨研究会。

2） 齋藤努・高橋照彦・西川裕一2002「古代銭貨に関する地科学的研究―「皇朝十二銭」の鉛同位体比および金属組成分析―」『IMESディスカッションペーパーシリーズNo. 2002-J-30』日本銀行金融研究所。奈文研1974『平城宮発掘調査報告Ⅵ』。

3） 前掲註２の齋藤ほか文献。奈文研1996「右京七条一坊の調査」『藤原概報26』。中村上隆・肥塚隆保・沢田正昭1997「古代銅製品にみられるアンチモンについて」『日本文化財科学会第14回大会要旨集』。村上隆・松村恵司・黒崎直1999「飛鳥池遺跡から出土した富本銭の材質について」『日本文化財科学会第16回大会要旨集』。

4） 前掲註３に同じ。

5） 飛鳥資料館2007『奇偉荘厳山田寺』。

第Ⅵ章　総　　括

1　遺　　構

A　遺構の変遷

本調査地で検出した遺構は、大きく3時期に分けられる。遺構の方向が正方位に対して振れがほとんどなく、柱穴の掘方などの規模が大きいものを中心とするのが、造営期を含めた藤原京の時期にあたる。そして、遺構の振れが明らかであり、柱穴の掘方などの規模の小さいものが、その前後の時期としてまとめることができる。この3時期の区分は、遺構の重複関係、出土遺物の年代によって裏付けられるものである。

以上の3時期のうち、藤原京造営期より前の時期は、出土遺物から古墳時代以降と位置付けられる。この時期は古墳時代と藤原京造営直前までの時期の2時期に分け、Ⅰ期、Ⅱ期とした。造営期を含めた藤原京の時期についてはⅢ期とし、藤原京造営期、藤原京期前半、藤原京期後半の3時期に細分し、それぞれⅢ-A期、Ⅲ-B期、Ⅲ-C期とした。これ以降の時期については、出土遺物から奈良時代から室町時代までと位置付けられる。ただし、室町時代の遺構はおもに調査区外へ広がっているとみられる。そこで奈良時代をⅣ期とし、それ以降については、出土遺物の傾向から平安時代前・中期と平安時代後期以降の2時期に分けて、Ⅴ期、Ⅵ期とした。

Ⅰ～Ⅵ期までの遺構変遷を示すうえでは、前述の通り遺構の重複関係と出土遺物の年代に依拠することを基本としたが、それだけでは時期を確定することができない遺構も多くあった。第Ⅲ章2では時期区分が不明なものは不明とするか、本節冒頭で示した3時期にあてはめるに止めたが、ここでは施設を復元的に考察することを目的として、判断の前提を示しつつ、細分化した時期に当てはめるように努めた。

なお、本調査地では礎石構造の建物を検出しなかったため、本節では建物と塀は特にことわりのない限り掘立柱構造をさす。

i　藤原京造営前の遺構

a　古墳時代（Ⅰ期）

Ⅰ期（Fig.254）に該当する遺構は、自然流路と竪穴建物群である。自然流路NR4225は調査区南から蛇行して流れ、その両岸の微高地に竪穴建物が数棟ずつ位置する。自然流路NR4225は北東方向へ続き、自然木の集積SX5922などは自然流路の一部と考えられる。

竪穴建物は一辺4ｍ前後の方形規模を基本とするが、NR4225から1棟だけ離れた竪穴建物SI4992は一辺6ｍにおよぶやや大きめの規模で、柱穴の柱間寸法と掘方の大きさもやや大きい。全体的に竪穴建物は壁際溝を巡らし、柱穴を矩形に4基配し、貯蔵穴、竈をもつものが多い。

遺構の方位の振れには規則性は認められない。これらの竪穴建物の時期は、5世紀中頃から後半と考えられる。韓式系土器の出土が顕著であり、8棟中6棟から出土している。土器の時期的位置付けでは、SI4231・(4234)・4230→SI4235・4236・4232→SI4233という前後関係で、遺構の重複関係と整合する。建て替えを行いながら、集落を営んだことがわかる。NR4225東岸の竪穴建物3棟中2棟は焼失建物である。

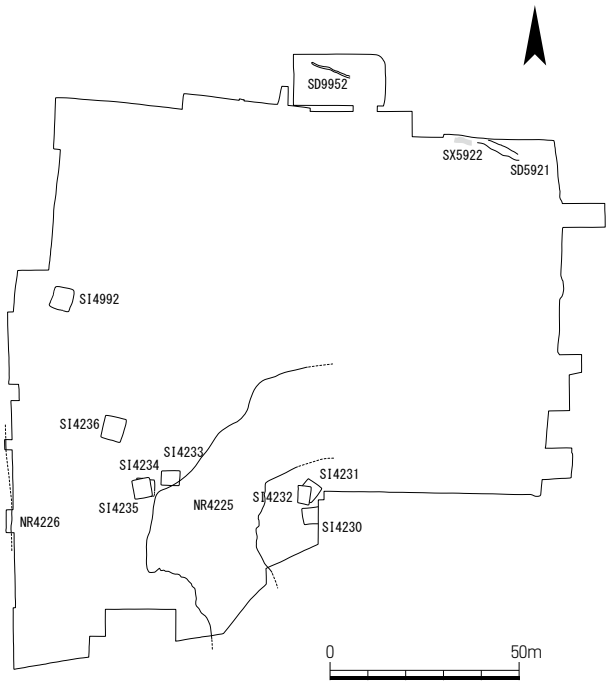


Fig. 254　Ⅰ期の遺構　1:2000

b　7世紀中頃（Ⅱ期）

Ⅱ期（Fig. 255）に該当する遺構は、調査区東端の南北大溝SD4143と、その西側に広がる掘立柱建物群である。

南北大溝SD4143は調査区東端を北流し、東岸は調査区外におよぶため規模は明らかでないが、地形的に東の香具山西裾が東岸になる。Ⅰ期の自然流路NR4225はすでに埋まっていることから、SD4143はNR4225の役割を継承したものと考えられる。SD4143は現在香具山西裾を流れる中ノ川の浸食ともみえるが、7世紀中頃の狂心渠に比定されているため[1]、大溝（SD）とした。

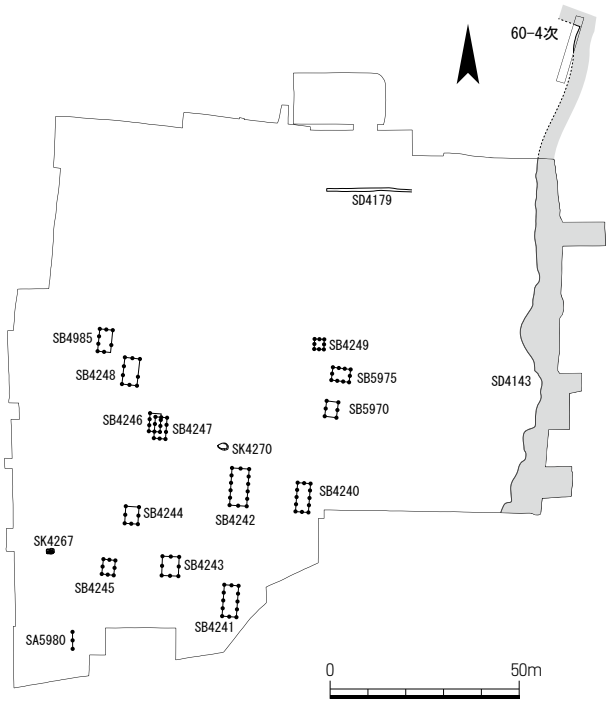


Fig. 255　Ⅱ期の遺構　1:2000

掘立柱建物群は調査区西半に散在するが、比較的規模が大きいSB4242を中心としてまとまりをみせることから、集落と理解することも可能である。掘立柱建物は北で東におよそ2～7°の振れをもち、大半が南北棟建物である。建物規模は桁行が2間から5間、1棟（梁行1間）を除くと全て梁行は2間である。柱穴の大きさは40cmから85cmまであり、概ね建物規模と比例している。SB4249のように規模が小さく、住居とは考えにくいものもある。建物の重複関係があるのはSB4246・4247による1箇所のみである。

ⅱ　藤原京造営から廃絶までの遺構

藤原京期（Ⅲ期）において本調査地は、藤原京左京六条三坊にあたる。左京六条三坊は東二坊大路をはさんだ藤原宮の東側隣接地であり、南側には藤原宮南面を通る六条大路、北側には藤原宮東面南門から延びる五条大路が通る。東側には香具山を控えて、その麓には藤原京の東堀河とも推定される南北大溝SD4143が流れる。なお、この東側の状況から左京六条三坊では東三坊大路推定位置には南北大溝SD4143が位置し、大路が存在する余地はないとみてよい。

造営期を含む藤原京期の遺構は、本節冒頭で述べたように、遺構に方位の振れがほとんどなく、柱穴が大きいなどの共通点が認められる。しかし、これらの遺構には重複して先後関係を示すものもあるため、藤原京期を細分化する必要がある。藤原京期を細分化した場合には、重複関係がない遺構についてもそれぞれの時期に当てはめる必要があるものの、時期を示す出土遺物を含まないものも多く、時期判定が困難である。そこで、以下では柱穴について、抜取穴が付随するかどうか、柱根が遺存するかどうかに着目し、時期判定の一助とした。すなわち、比較的短期間である藤原京期において建物群の建て替えを行う場合、造営期および前半期の建物群の掘立柱は腐朽が進まず抜き取って再利用した可能性が高く、一方、後半期の建物群の掘立柱は腐朽が進むか放置されて柱根が遺存することがあるという推定をした。ただし、藤原京期を通じて存続した建物も存在すると考えられるため、柱根が遺存したとしても後期以降に即断せず、建物配置の状況も合わせて考察している。

a　藤原京造営期（Ⅲ-A期）

Ⅲ-A期（Fig.256）の主な遺構は条坊側溝と掘立柱塀であり、これらによる区画の中に掘立柱建物が数棟建っている。以上の遺構は方位の振れがほとんどなく、方位に則った計画性が認められる。これらの他には、数基の井戸とⅡ期から継続して機能する南北大溝SD4143などが存在する。

条坊遺構は六条条間路と東三坊坊間路にあたり、左京六条三坊を四分割していることになる。分割されたそれぞれの坪はすなわち一町になるが、もっとも利用状況が明確であるのが東北坪である。東南坪は区画塀の他2棟の建物が確認できる。西北坪と西南坪は大部分が今回の調査区外のため明らかではないが、西南坪の一町を区画する塀を除くと、周辺の小規模調査を含めても建物などは見つかっていない。

東北坪　東北坪は、掘立柱塀により坪内施設の外周を区画する。ただし坪南辺の掘立柱塀は、坪西端から坪東西中心まで設けられ、そこから塀は北に折れて続いている。そのため坪を東西に分割した二分の一町占地の状況を呈する。

塀に囲まれた坪の西区画は、南辺掘立柱塀の中央に門SB4735を開く。この門を入った正面に目隠し塀もしくは幢竿支柱などと考えられる柱穴列SA4760がある。区画内東西には建物が建ち並び、西側には南北棟総柱建物SB5020があり、東側には南北棟建物SB4175・4761・4762がある。そのなかで総柱建物SB5020は柱間が狭いものの、柱痕跡が太いことから倉庫であると考えられる。その他には建物はなく、区画の中心建物は調査区外北にあると考えられ、空閑地（庭部）が広いことから、公的な施設の区画と考えることも可能である。

坪の東側は南辺に沿う区画塀はみられない。全体に遺構は稀薄で、掘立柱建物SB4140のみ存

在する。SB4140は間仕切をもつとみられる建物であるが、方位の振れがなく、柱穴は1辺80cm前後、柱痕跡は直径20cm前後と比較的大きいことからみて、Ⅲ期の建物と考えられる。東西二分の一町占地とすれば、その東西中心付近に位置する。Ⅲ-A期以外の土地利用ではこの位置に計画性が認められないため、この時期の遺構と判断した。建物の位置、間仕切りなどの特徴が認められるものの、その機能は不明である。

東北坪は東西に分割した二分の一町占地の状況を呈するとしたが、坪北半は調査区外のため明らかでない。したがって、四分の一町占地の可能性や、南北大溝SD4143が東側に位置するために、主要区画を西に寄せて建設した一町占地の可能性があることにも留意したい。調査区内で比較的多く瓦が出土した一帯でもあり、寺院の存在もうかがわせる。なお、東北坪西区画には現在、畝尾都多本神社が所在する。

東南坪　東南坪は、条坊側溝と坪西辺の掘立柱塀で外形を成す。坪南北中央付近に素掘溝と掘立柱塀が設置されており、坪を南北に分割した二分の一町占地の状況を呈する。しかし、坪を南北に区画する溝SD4285と塀SA4284は、坪西辺から東に延びるも約50mの位置で途切れてお

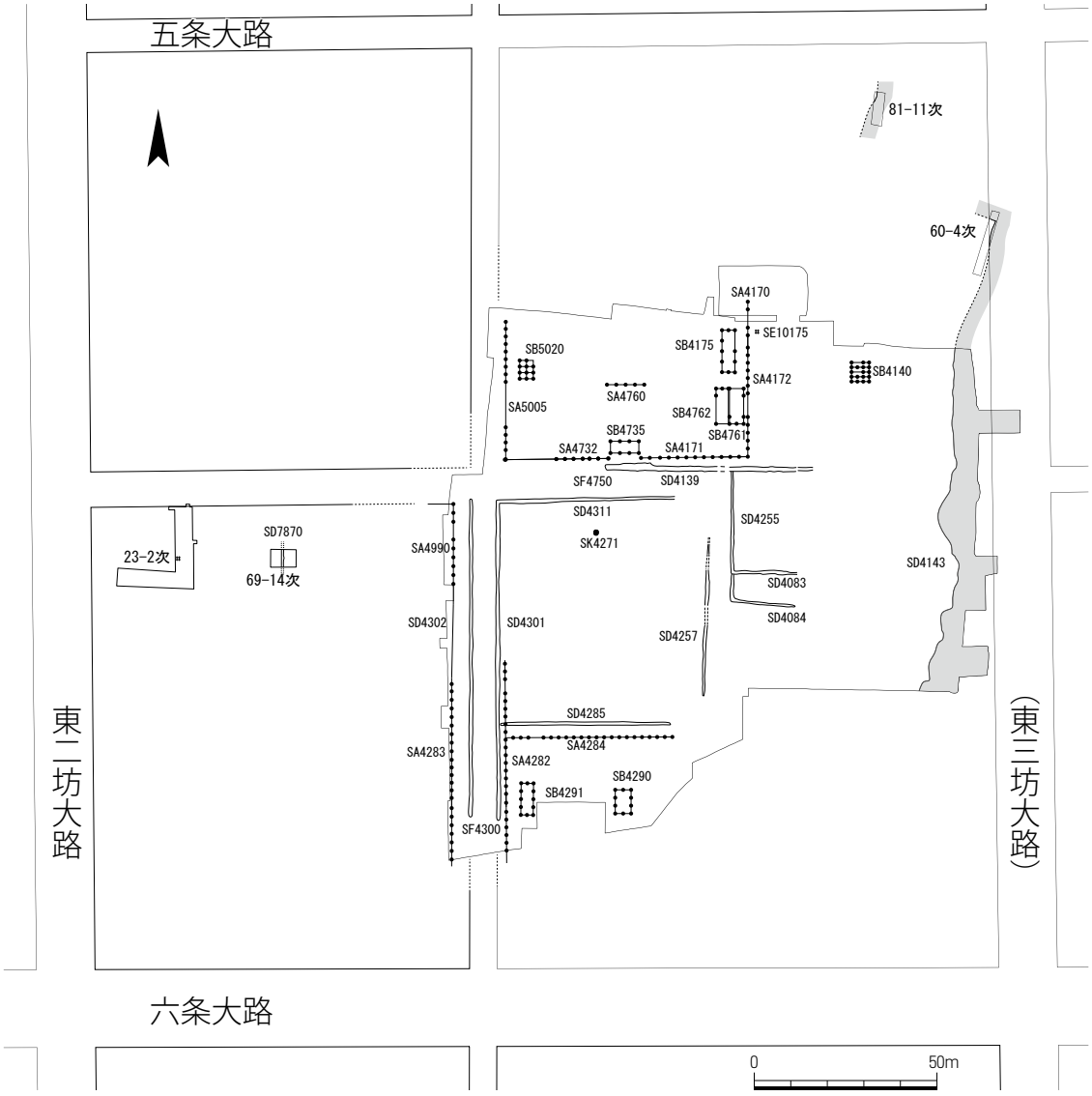


Fig. 256　Ⅲ-A期の遺構　1:2000

り、その東側を含めて南北二分の一町占地で利用されていたかは不明である。

東南坪南側の区画内には２棟の南北棟建物が建つ。この２棟は桁行規模と梁行柱間寸法が異なるが、桁行柱間寸法７尺、梁行２間で、柱痕跡の直径が25㎝前後である点は共通する。南北棟建物である点から、区画内の主要な建物ではないと推定できるが、柱は立派である。未調査部分が多いため全容は不明であるが、東北坪西区画のように整った利用がなされていた可能性もある。一方、東南坪北側の区画は北辺と西辺に条坊側溝が巡り、西辺では区画塀が併設されるものの[2]、その内部はほとんど利用されなかったものとみられる。

西北坪・西南坪　西北坪の小規模調査では、Ⅲ-Ａ期の遺構は見つかっていないと考えられる。少ない調査範囲の限りでは、左京六条三坊西側の利用は少なかったものとみられる。

西南坪は東辺と坪内の一部の状況が、本調査および周辺の小規模調査によって判明する。坪東辺は条坊側溝と掘立柱塀によって区画されている。東南坪と比較すると条坊側溝と区画塀の間隔が異なり、西南坪の方が条坊側溝と区画塀が離れている。また、東辺の区画塀は坪東北隅まで設けられ、北には続かない点からも、Ⅲ-Ａ期の左京六条三坊が一町占地を基本にしていたことがわかる。坪内では第69-14次調査で南北溝SD7870が見つかっている。南北溝は遺構方位の振れがないうえに、坪東西中心付近に位置することから、区画溝と考えることができる[3]。この他には坪北西側で井戸が１基見つかっている。

藤原京造営期の左京六条三坊　この時期の左京六条三坊は、条坊側溝によって一町占地を基本とした条坊地割りがなされ、塀によってそれぞれの坪が視覚的にも区画されていた。しかし、各坪の区画状況は坪ごとに異なる。東北坪西側は掘立柱塀で区画される。東南坪の西辺は条坊側溝と掘立柱塀によって区画され、北辺は条坊側溝で区画される。西南坪の東辺は条坊側溝と掘立柱塀によって区画され、北辺は掘立柱塀だけで区画されるとみられる。西北坪は調査区外につき不明である。したがって、条間路や坊間路の具体的な整備内容は、坪それぞれの整備計画に従うところが大きいと推定される。例えば、右京七条一坊では七条条間路において、西南坪側では条坊側溝と掘立柱塀で区画され、西北坪側では条坊側溝だけで区画されていたことが分かっている。

西北坪と西南坪は不明な点が多いものの、区画内施設の建設が進んでいたのは東北坪と東南坪の一部に限られていたとみられ、その他の坪は盛んな土地利用がまだなされていなかったのがこの時期の左京六条三坊の様相と考えられる。そのなかで、東北坪の施設は性格が不明であるが、邸宅と推定されている右京七条一坊西南坪[4]（Fig.257）の状況と、比較してみることとしたい。

右京七条一坊西南坪は一町占地で、内郭を中心に東西南北の４外郭に区画されていたと推定している。左京六条三坊東北坪は二分の一町占地の状況だが、調査区内の範囲は区画塀南辺中央に門（SB4735）をもつことから、右京七条一坊西南坪の南外郭に相当すると考えられる。しかし、南外郭の東西規模は明らかでないので、規模については北外郭、およびそこから推定される内郭と同規模として、中央区画と仮称する。すると、右京七条一坊西南坪の中央区画の東西規模は62ｍであり、左京六条三坊東北坪の区画規模は66ｍである。すなわち、東西規模の点では左京六条三坊東北坪の区画規模が、一町占地の中央区画よりも大きいということになる。次に、両者の南門を比較すると、右京七条一坊西南坪の南門SB4950は、桁行３間（約９尺等間）、梁行２間（約８尺等間）、柱直径20㎝（痕跡）であり、左京六条三坊東北坪の南門SB4735は、桁

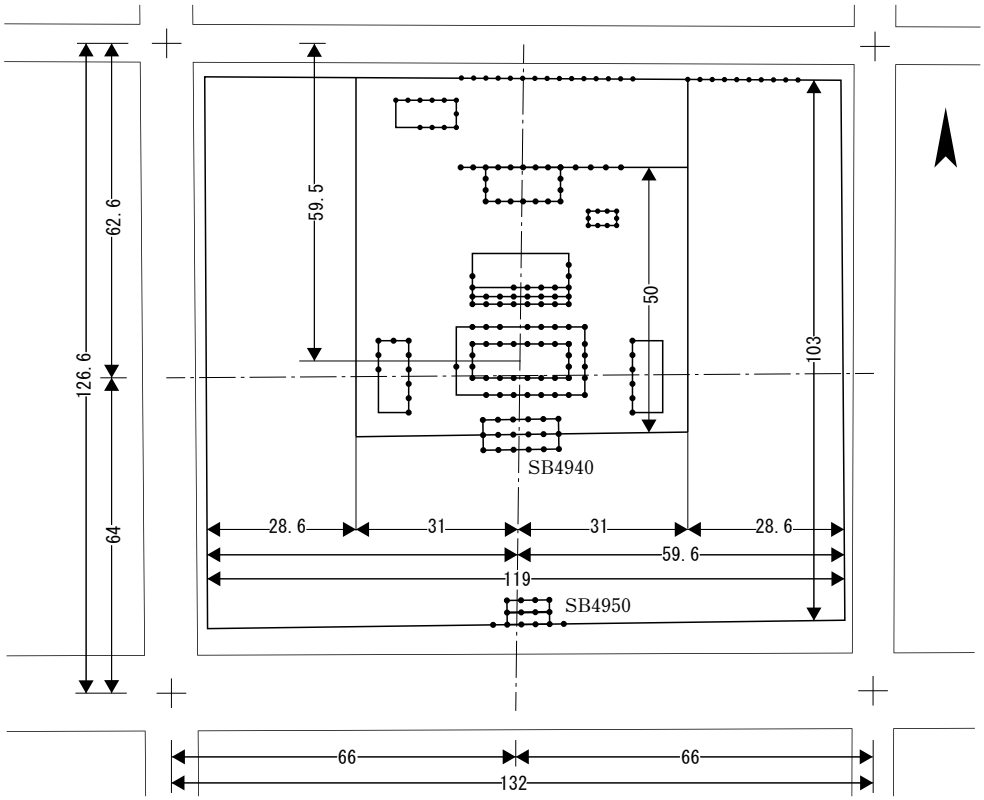


Fig. 257　藤原京右京七条一坊西南坪　単位m、1：2000

行3間（8尺等間）、梁行1間（11尺間）、柱直径18㎝（痕跡）である。南門に関しては右京七条一坊西南坪の方がやや立派である。また、右京七条一坊西南坪の南門と中門SB4940の距離は側柱間で約28mであるが、左京六条三坊東北坪の南門から北には柱列SA4760を除くと対応する建物がなく、調査区北端まで36mとより広い空閑地をもつ。

以上のことから、左京六条三坊東北坪は性格が不明であるものの、一町占地の邸宅（右京七条一坊西南坪）と同等程度の格式の施設で構成されていると考えられる。

b　藤原京期前半（Ⅲ-B期）

Ⅲ-B期（Fig. 258）は、大規模な掘立柱建物SB5000が左京六条三坊（東三坊坊間路）の中軸線上に建設され、一町占地から一新された四町占地での利用が始まる。中軸線上の建物はこの時期の中心的な建物と考えられ、これを取り囲むように建物が建ち並ぶ。また、坊内を区画する南北塀SA4730・4286が130m以上も連なり、建物群を含めて遺構方位の振れはほとんどない。整然とした配置からみて、これらは左右対称になるものと推定される。

また、上述の建物群を建設するにあたって水路が開削される。Ⅲ-A期から継続して機能する南北大溝SD4143は、藤原京の東堀河と考えられる。これに接続して西側へ延びる東西大溝SD4130と、さらに分岐して道路を形作るとみられる素掘溝SD4100・4131と橋SX4134、およびSD4132は、Ⅲ-A期の後に藤原京造営が新たに本格化した際に設けられたとみられる。これらの遺構は方位に振れがあり、藤原京期よりも前の遺構の方位の振れに近い。また、六条条間路北側溝SD4139には南北塀SA4730が後に重複して建設されることから、Ⅲ-B期の主要な施設が完成するとともに埋め立てられた短期間のものであることがわかる。これらの造営にあ

たって開削された水路のうち、SD4130はSD4143とともに藤原京期を通じて存続すると考えられ、最終的な埋没は10世紀以降である。

以下ではⅢ-Ｂ期の主要な建物群である、区画南北塀とその東側の外郭、次に内郭、そして内郭の建物についてみていくこととする。

区画南北塀・外郭　区画南北塀SA4286は、調査区南端からⅢ-Ａ期にあった六条条間路まで延びる。そして六条条間路道路の位置で柱心々間４ｍを空けて、さらに北へ南北区画塀SA4730が続く。４ｍの空きを構成するSA4286北端の柱穴とSA4730南端の柱穴は、それぞれに連なる柱穴よりも掘方が深く掘られてあるので、門状の施設であったと考えられる（SB4726）。また、北へ続くSA4730は調査区北端部分で途切れ、７ｍ北の位置から再び南北塀が続くとみられる（SP4830）。この７ｍの空きも通路状の機能だと考えられる。この区画南北塀から南北大溝SD4143までの一帯は東外郭となるが、利用はほとんどなかったものと思われる。ちなみに西外郭では、第23-２次調査で掘立柱南北塀SA2354が見つかっており、抜取穴を伴うことから、Ⅲ-

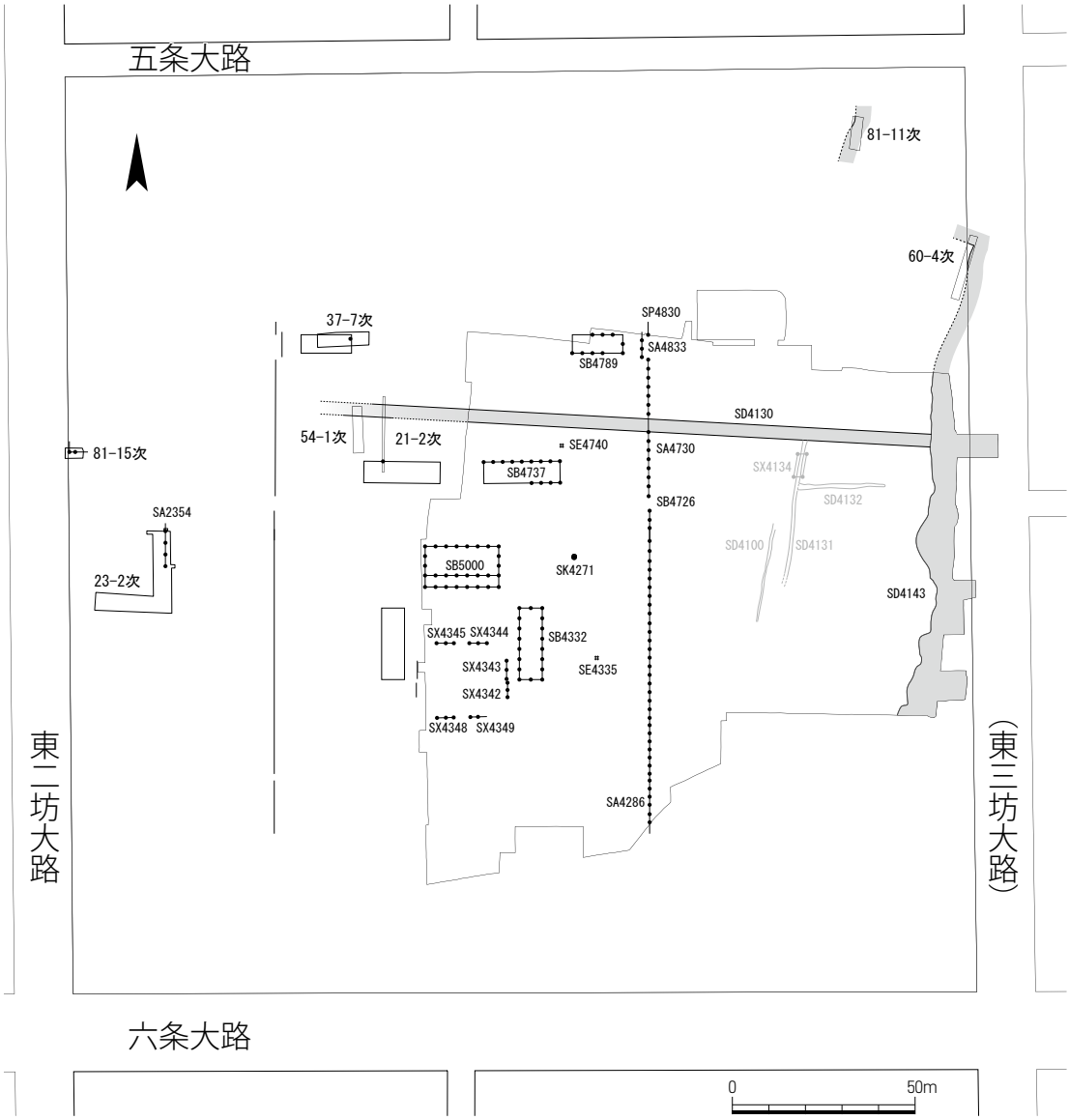


Fig. 258　Ⅲ-Ｂ期の遺構　1：2000

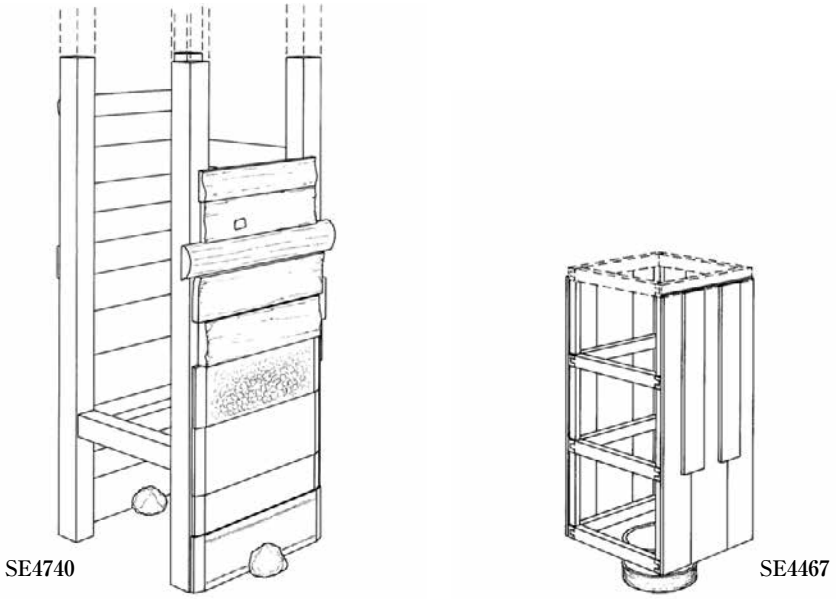


Fig. 259　藤原京期の井戸SE4740と平安時代の井戸SE4467

C期への改作で抜き取ったとみれば、この時期にあてられる。藤原宮に隣接する西外郭では何らかの利用がなされた可能性がある。

内　郭　掘立柱東西棟建物SB5000を中心として、東を南北塀SA4286によって区画される。建物SB5000は身舎の梁行が3間で、その規模、位置、南面廂付きであること、条坊中軸線上にこれより大きい建物がないことから、この区画の正殿とみてよい。そこで、この正殿SB5000の中心から南北塀SA4286までの距離を測ると、51.2mであり、これを西側にも折り返すと東西幅102.4mで、内郭の推定東西幅になる。これは350尺（0.292m/尺）に一致する。南北については明らかでなく、南北外郭の存在をうかがわせる遺構は見つかっていない。ただし、四町占地の施設群には、少なくとも南門の存在を認めるのが妥当であろう。また、外郭で述べた区画塀SA4730北側の幅7mの通路状空閑地の内郭側には目隠し塀SA4833があり、旧条間路に設けられた門SB4726とは形と機能が異なった通路であることがわかる。

内郭の建物配置は、正殿の東前方に南北棟の脇殿SB4332を置き、西前方にも脇殿があると考えられるため、正殿とともにコの字形になる。正殿の東後方には東西棟SB4737が位置し、さらに東西棟建物SB4789がある。正殿と中軸線を揃える後殿は存在しない。また、前殿に関しては後述する。

内郭には、井戸が数基掘られる。そのなかで、正殿後方の東西棟SB4737と東西大溝SD4130の間にある井戸SE4740は、厚板を横板組にして支柱と横桟で留めたもので、藤原京期を通じて利用されている。全ての時期を含めても調査区内で最も大規模な井戸であり（Fig. 259）、下段の井戸側板は面取を施すなど丁寧な作りで、藤原京期の内郭における重要な井戸である。

正　殿　正殿SB5000は桁行7間で、藤原京期において調査区内では数少ない梁行3間の建物である。また、平城京の建物に比べて藤原京の廂付き建物は少ない傾向があるため、この建物が南面廂付きであることも一般的な建物とは性質や格を異にすることを意味する。建物規模や柱の太さでは左京六条三坊のなかでも格段に立派な建物であり、四町占地の正殿に相応しい規模を誇る。正殿SB5000は藤原京期後半まで存続し、建て替えの痕跡がなく柱根も遺存する。

脇　殿　正殿SB5000の東前方に位置する南北棟建物で、正殿に対する脇殿となる。脇殿と考えられる南北棟建物はSB4330・4331・4332があり、いずれも桁行7間、梁行2間の規模である。しかし、SB4332だけが柱穴が大きくかつ深く、SB4330・4331は妻側中央柱穴が浅いという違いがある。この様相の違いは、SB4330・4331がSB4332の外側に並ぶことから、建物の序列など性質の違いと理解することも可能だが、柱の抜取状況の違いでも区別が可能であることが判明した。SB4332は全ての柱穴に抜取穴があるが、SB4330・4331の柱穴については抜取穴のないもの、さらに柱痕跡や柱根が残るものがある。そこで、以上の柱穴の違いについては建物の時期差と考え、SB4332を解体して柱を抜き取り、あらためてSB4330・4331を建設し、その後にこれらの建物群の廃絶期を迎えたものと推定した。したがって、SB4332を藤原京期前半の脇殿とし、SB4330・4331を藤原京期後半の脇殿とした。脇殿の配列について、東西それぞれ2列に並ぶ場合は類例が見あたらないこと、一方、1列の場合は藤原宮朝堂院をはじめとして類例に事欠かないといった点で、この時期差とした推定を補強するものと言える。類例については「Ｂiii　京内官衙の建物と配置」の項で後述する。

前　庭　正殿SB5000と、東脇殿SB4332およびこれを西に折り返した位置にあると推定される西脇殿に囲まれた空間が、前庭として利用されたとみられる。ここには正殿と正対する前殿SB4340と、柱穴列SX4342・4343・4344・4345・4348・4349（以下、SX4342～4349とする。）があるが、両者は併存しないとみて、柱穴列がこの時期の遺構と考えた。その根拠については「Ｂiv　藤原京期の官衙前殿」で後述する。SX4342～4349はその柱穴の規模からみて仮設的な構築物であり、前庭での儀礼に関わるものと考えられる。また、脇殿南辺および仮設構築物とみられる柱穴列SX4348・4349から南側は遺構が確認されず、より広い空閑地である。この空閑地も、前庭として機能した可能性があろう。

c　藤原京期後半（Ⅲ-Ｃ期）

Ⅲ-Ｃ期（Fig.260）は、Ⅲ-Ｂ期から継続して四町占地で利用され、正殿も引き続き機能する。一方、内郭の規模を拡大し、前殿や脇殿など前庭周囲の建物群を充実させ、左京六条三坊の施設の完成期を迎える。また、南北大溝SD4143と東西大溝SD4130は存続し、これらが分岐する地点には塀で囲った区画を設けたとみられるが、これは藤原京廃絶時期の短期間のものと考えた。以下、区画南北塀と外郭、次に内郭、そして内郭の建物についてみていく。

区画南北塀・外郭　Ⅲ-Ｂ期の区画南北塀を廃し、東に約10ｍの位置に内郭と東外郭を画する区画南北塀SA4320・4729を設置する。Ⅲ-Ｂ期の区画南北塀と同様に、六条条間路を踏襲して門状の施設を設定している。内郭と南北大溝SD4143との連絡を図り、利用に備えたと思われるが、東外郭内にはⅢ-Ｂ期と同様にほとんど遺構がなく、利用は盛んではなかったようだ。

西外郭では、Ⅲ-Ｂ期で抜取穴を伴った掘立柱南北塀SA2354の南西側で、桁行2間以上、梁行2間の南北棟掘立柱建物SB2352が見つかっている。柱根を残す柱穴もあるため、藤原京廃絶まで機能したと考えてこの時期にあてた。したがって、藤原京期（Ⅲ-Ｂ･Ｃ期）を通じて西外郭は何らかの利用がなされていることがうかがえ、東外郭と比較すると対照的な利用状況だと推測される。この差は西外郭が藤原宮に面するのに対して、東外郭は実態は河川とも言える南北大溝SD4143に面するためと考えられる。

南北大溝SD4143と東西大溝SD4130の分岐地点には、SA4110などで囲われた一角があるが、方位の振れがあることから藤原京期後半と言うよりは、藤原京廃絶時期から奈良時代にかけての遺構と考えた。区画内には建物は確認されず、性格は不明だが、大溝の結節点に位置していることは留意すべきと考えられる。

内　郭　Ⅲ-Ｂ期から継続して、東西棟建物SB5000は正殿として機能し、場所を移した南北塀によって東を区画する。正殿の中心から南北塀SA4320・4729までの距離を測ると、61.1ｍであり、これを西側にも折り返すと東西幅122.2ｍで、内郭の推定東西幅になる。これは420尺（0.290ｍ/尺）に一致する。Ⅲ-Ｃ期の内郭東西幅は350尺（0.292m/尺）であったので、ともに70尺の倍数で計画されている。また、1尺の長さが縮まっているが、Ⅲ-Ｂ期の南北区画塀SA4286・4730の平均柱間が2.38～2.48ｍ（0.297～0.31ｍ/尺）であるのに対し、Ⅲ-Ｃ期の南北区画塀SA4320・4729の平均柱間は2.31～2.32ｍ（0.290/尺）と、区画塀自体の1尺も縮まっており、傾向は一致している。

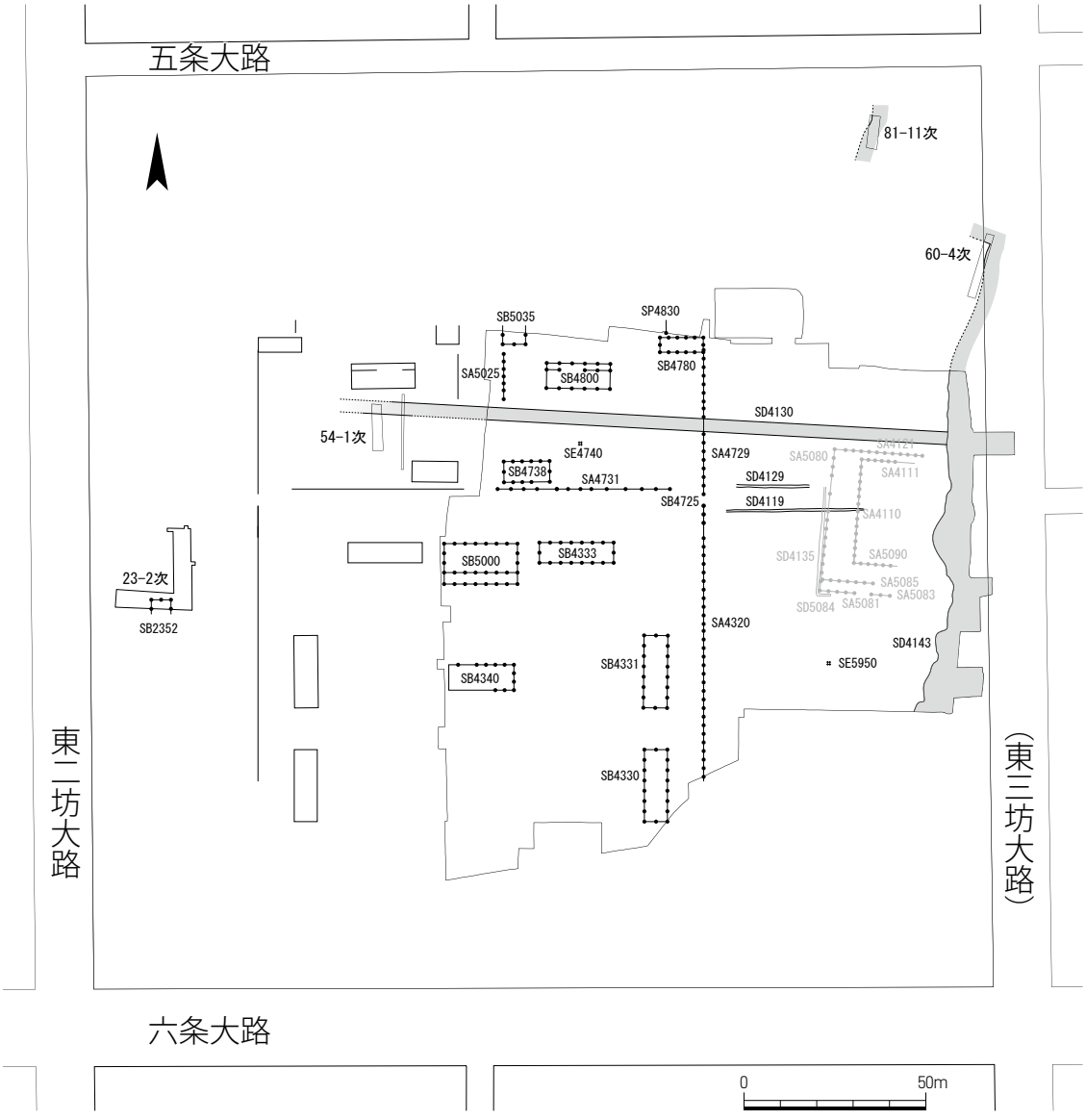


Fig. 260　Ⅲ-Ｃ期の遺構　1：2000

区画塀の移動によって拡大した内郭であるが、拡大は正殿を中心とした内郭前方で行われている。Ⅲ-Ｂ期において目隠し塀SA4833を付設した通路より北側の区画塀SP4830は、Ⅲ-Ｂ期から継続して機能する。それによって生じるくい違い部分は、掘立柱建物SB4780を建てて閉塞する。

内郭の建物配置は、正殿と北側柱筋を揃えて東側に東西棟建物SB4333（副殿と仮称）を並べ、その東前方に南北棟の脇殿SB4330・4331の２棟を南北に並べる。これらは西側対称位置にもあると考えられ、Ⅲ-Ｂ期と同様ながらもより広大な配置になる。

副殿・脇殿　正殿の東側には副殿SB4333が並ぶ。副殿はⅢ-Ｂ期には建てられていなかった建物だが、内郭が拡大したことで生まれる正殿と脇殿間の空間を埋めるとともに、広壮な構えの一部を担う。

区画塀沿いに並ぶ２棟の東脇殿は、副殿SB4333を含めて建物両妻の中央柱の柱穴が浅いという特徴が共通し、同時に計画された建物であったと考えられる。この特徴はⅢ-Ｂ期の脇殿SB4332にはみられない。

東脇殿の配置は、正殿中軸線から東に150尺（0.295m/尺）の位置に、正面となる西側柱を並べる計画がされている。南北位置については、調査区南側外にもう１棟並ぶかを含めて不明である。

前　殿　正殿SB5000と同じく、梁行３間の東西棟建物である。桁行間数は西側を削平されているために不明であるが、正殿と中軸線を揃えるとすれば、７間となる。また、平面形の縦横比率が正殿身舎部分とほぼ等しく、桁行と梁行の柱間数も同じなので、正殿身舎を縮小したと言える。

前殿と正殿SB5000の配置関係は、前殿の北側柱をSB5000の中心から100尺（0.292m/尺）の位置に置いている。一方、この位置は正殿の南面廂柱列から75尺（0.294m/尺）の位置にもあたり、配置計画はこちらを基準にしたと考える。それは、正殿がⅢ-Ｂ期から既に建っていることから、南面廂柱列の方が基準にしやすいことと、この時期に建てられた脇殿SB4330・4331が正殿中軸線から150尺東の位置にあるため、その半分の長さに設定したと考えることができるからである。

ⅲ　平城京遷都後の遺構

a　奈良時代（Ⅳ期）

Ⅳ期（Fig.261）は平城京遷都後、すなわち奈良時代にあたり、大溝からなる水系が存続して掘立柱建物が周囲に建ち並ぶ。この時期はⅢ期と異なり、遺構が方位に対して北で東に振れる[5]。

大溝はⅡ期から存続する藤原京東堀河であった南北大溝SD4143と、これに接続するⅢ-Ｂ期に開削された東西大溝SD4130である。この東西大溝SD4130沿いの南側には、小規模な南北棟建物SB4560・4727・4728・4987の４棟が建ち並ぶ。SD4130の北側にも掘立柱建物が確認でき、南北棟建物SB4787とこれに付属するSB4786、倉庫とみられる南北棟総柱建物SB5050が建ち並ぶ。これらのなかで、SB5050の柱痕跡は直径35㎝、SB4787の柱痕跡は直径25㎝あり、一般集落の建物とみるには、やや太く立派である。

調査区南側には、素掘溝SD4357・4358と掘立柱塀SA4355・4356によって区画された中に、正殿と前殿を構成するとみられる東西棟建物SB4350・4351の２棟が、中軸線を揃え、６ｍの間隔で建つ。正殿SB4350は南面廂付きで、前殿SB4351は廂をもたないが、これはⅢ-Ｃ期の正殿SB5000と前殿SB4340と同様である。ただし、正殿、前殿ともに梁行間数はⅢ-Ｃ期が３間で、Ⅳ期は２間となって異なるうえに、柱痕跡の直径はSB5000が約30㎝、SB4350が約20㎝で、柱の太さも細くなる。また、掘立柱塀SA4355・4356による正殿と前殿を取り巻く区画は、東側が削平によって明らかでないが、正殿中軸線で西側の掘立柱塀SA4356を折り返すと、その東西規模は45.1ｍになる。これは、１尺を0.301ｍとみれば150尺という完数が得られ、同時に正殿と前殿の間隔は20尺となり、計画性がうかがえる。したがって、この区画と建物は、Ⅲ-Ｃ期に比べると規模は格段に縮小されているものの、官衙的な特徴が認められると考えられる。脇殿に関しては調査区外に存在する可能性もあるが、本来脇殿が前殿を囲む機能を果たすとすれば存在しなかったことになり、規模縮小に伴う変化と言える。

Fig. 261　Ⅳ期の遺構　1：2000

正殿と前殿を構成するようにみられる区画があることや、柱径の大きい建物SB4787・5050の存在に加え、検出した遺構は広い範囲で展開することから、この時期の遺構は集落ではなく、官衙等の公的施設に関連するものと考えられる。ただし、SB4787・5050などが構成する遺構群は調査区外北西側に展開すると考えられること、平城京遷都後のSB4350・4351が藤原京期（Ⅲ期）のSB5000・4340からなる官衙機能をそのまま継承しているとは考えにくいことから、その規模や性格は今後の課題とすべきであろう。

b　平安時代前・中期（Ⅴ期）

Ⅴ期（Fig. 262）は調査区の東端に南北大溝SD4143が存続し、調査区南側にやや規模の大きな建物とそれに付属する小規模な建物がある。Ⅲ-Ｂ期から存続した東西大溝SD4130はほぼ埋まりかけ、東西大溝と言うよりも単なる東西溝程度で機能していたと考えられる。調査区北側には数基の井戸と、小規模な建物１棟が所在する。

調査区南側にある東西棟建物SB4370は身舎桁行９間、梁行２間で間仕切りが付き、南面廂と部分的に北面廂が付く。南北棟建物SB4371は桁行６間、梁行３間の総柱建物である。両者は奈良時代までの建物に比べると柱穴は小さいものの、規模の点からこの一画の中心建物と考えられる。ただし、これらは隣棟間隔が狭く、柱筋も揃わないことから併存はしないと考えられるが、前後関係は不明である。

これらの建物の西側には、庭園の池程度の大きさの土坑SK4390があり、位置関係からみて、SB4370と併存した可能性がある。中心建物の北西側に何度か建て替えた付属建物があるなど、概ね屋敷構えは調査区内にあるものと考えられる。一方、調査区北側の井戸と建物は屋敷構えの一部を確認したもので、調査区外北側に建物が展開するものと考えられる。

これらの建物の柱穴はⅣ期までの遺構に比べると小さく、Ⅳ期のSB4350を中心とした建物配置にみられた計画性が失われる。そのため、この時期の建物は比較的規模が大きいものもあるものの、官衙と言うよりは集落としての性格と推定される。また、土地利用密度も低いと言えるため、建物周辺は耕地化が始まったとの推定が可能である。藤原宮内では、平安時代に朝堂基壇を利用して、建物群による屋敷を構えていることが明らかになっている（第107・132・136次調査）。これを勘案するならば、藤原宮およびその周辺が、この時期にⅢ・Ⅳ期の官衙的な利用から性格が転換し、集落（荘園の一部）としての利用が始まったと考えられる。

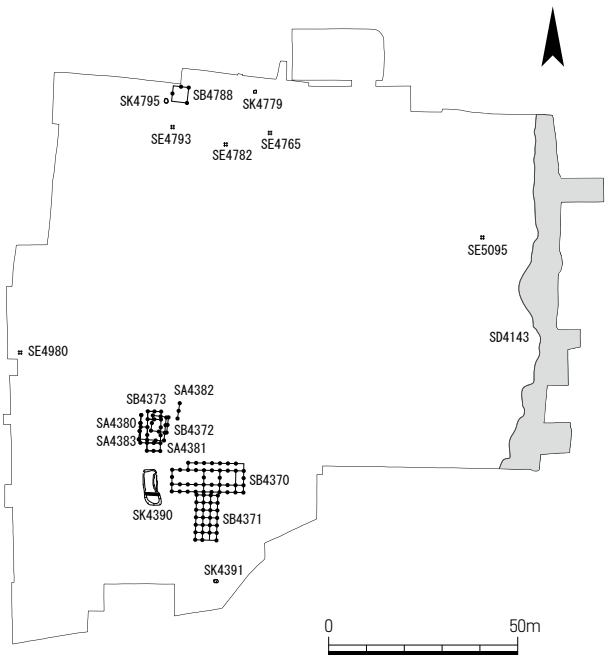


Fig. 262　Ⅴ期の遺構　1 : 2000

c　平安時代後期から鎌倉時代（Ⅵ期）およびそれ以降

Ⅵ期（Fig. 263）は全体に掘立柱建物や井戸が散在するが、Ⅴ期からの変化で言えば特に調査区中央での土地利用が盛んになる。調査区東端の南北大溝SD4143は東へ移動して、現状の中ノ川が形成されていったとみられる。

調査区中央での利用は建て替えが何度も行われている。そのなかで、中心的な建物SB4420・4440と付属建物、その西側に塀や溝、土坑というまとまりが、東西に並んで2つ確認できる。ただし、中心建物とそのまとまりの規模はⅤ期に比べると小さいため、土地利用（土地所有）の細分化が行われたと理解することも可能である。また、調査区南西部にも建て替えが行われている掘立柱建物と井戸のまとまりが確認できる。土地利用の細分化を反映するように井戸が各所に掘られているが、鎌倉時代以降は曲物を積み重ねた井戸や、石組井戸が現れる。調査区内で言えば、室町時代以降は石組井戸が築かれる傾向が認められる。

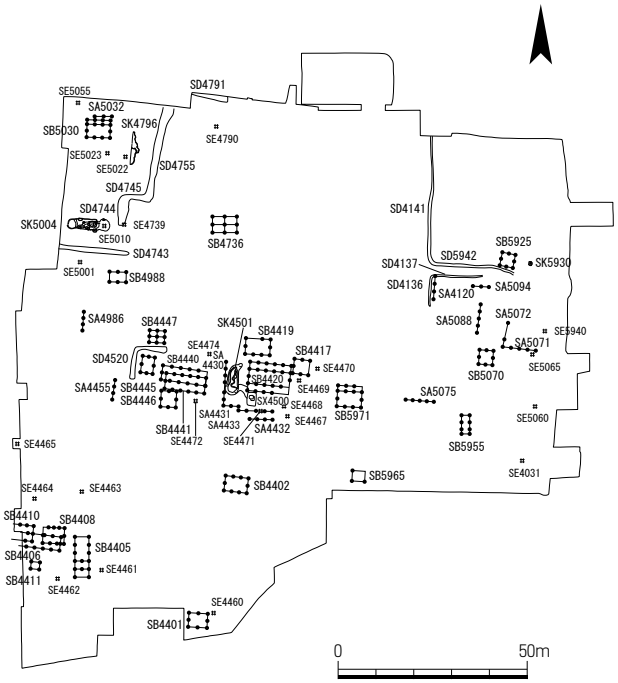


Fig. 263　**Ⅵ期の遺構**　1 : 2000

調査区東北部で確認したL字形の素掘溝SD4141・5942とSD4136・4137は、周辺で推定されている条里地割り[6]を延長すると、条里遺構に推定できる位置にある。同時に、調査開始時の水田畦畔にも近い位置で沿う。調査開始時の水田畦畔とⅣ期以降の遺構の多くは、方位の振れが近似するため、近年までの土地利用の基盤には条里地割りがあると推定できる。一方で、調査区西側の遺構は推定条里地割り（坪界）をまたぐため、遺構と条里地割りの関係は、坪界を現在通る道路地下の調査を待たねばならない。

鎌倉時代より後の遺構は耕作に伴う素掘溝が大半を占め、調査区の大半は耕作地に変貌したとみられる。一方、調査区北西部には出入口を設けたような環濠状の素掘溝SD4743・4744・4745・4755が巡り、その中に数基の井戸と東西棟建物SB5030が所在する。環濠状の溝からは中世の瓦が多数出土しているため、住居ではなく寺社などが調査区北西側にあったものと考えられ、北側調査区外に現在ある畝尾都多本神社に関連する可能性もある。また、本調査地から200mほど南方の調査（第81-1次調査：左京七条三坊）でも同時期とみられる環濠状の溝SD8720を検出しており、これは現在の木之本集落の旧環濠であることが現地形から読み取れる[7]。両者の環濠から出土した遺物からみて、14世紀後半頃とみられるため、この頃に畝尾都多本神社や木之本集落といった現在の農村空間構成が形成され始めたと考えられる。

B　藤原京内の官衙

i　藤原京左京六条三坊の機能―官衙と邸宅―

藤原京内で条坊内の正殿を中心にいくつかの建物配置が明らかであるのは、右京七条一坊西南坪である。左京六条三坊（Ⅲ-B･C期）の推定と同様に、左右対称の配置を基本とするが、右京七条一坊西南坪の正殿SB4900を中心とする建物群は、邸宅と推定されている[8]。この邸宅と推定した判断基準は以下の通りであり、左京六条三坊も併せて照らし合わせた。

［(左)：左京六条三坊（Fig.258・260)、(右)：右京七条一坊西南坪（Fig.257)］

① 正殿に対して脇殿が前方にあるのが官衙（左)、側面にあるのが邸宅（右)。

② 正殿に対して脇殿の桁行規模が大きいものが官衙（左)、小さいものが邸宅（右)。

③ 脇殿に廂がないものが官衙（左・右)、廂があるものが邸宅。

④ 後殿を欠くのが官衙（左)、有するものが邸宅（右)。特に邸宅で後殿に脇殿を伴う。

これによれば、左京六条三坊は官衙であり、右京七条一坊西南坪は邸宅と言えそうである。しかし、近年では発掘調査事例が増加し、上掲の基準は必ずしも官衙と邸宅を厳密に区分できるものではなく、いくつかの補正が必要と思われる。

平城宮の発掘調査では、左右対称の官衙として兵部省と式部省や、西池宮に比定される馬寮地区東方の遺構群が明らかになっている。このなかで例えば兵部省（Fig.264）では、正殿に対して脇殿が前方と側面に左右2棟ずつあり（①)、正殿と脇殿で桁行規模はともに7間である(②)。脇殿は廂がないものの（③)、後殿を有し、さらにこれに脇殿を伴う（④)。つまり兵部省が官衙の判断基準に合うものは③のみとなる。

左京六条三坊Ⅲ期以降、すなわち7世紀末以降で全国的に官衙と推定されている遺跡は、官衙中枢の建物配置が、ロの字形、コの字形、品の字形などに類型化されている。いずれの形式も左右対称であり、正殿の前方に建物に囲まれた、前殿を含めた広い前庭を確保する。この広い前庭で儀礼を執り行うと推定される。

建物に囲まれた広い前庭を確保するためには、正殿に対して脇殿が前方にあり、さらに脇殿

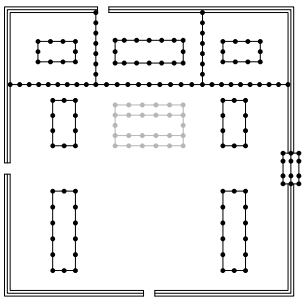


Fig. 264　平城宮兵部省　1:2000

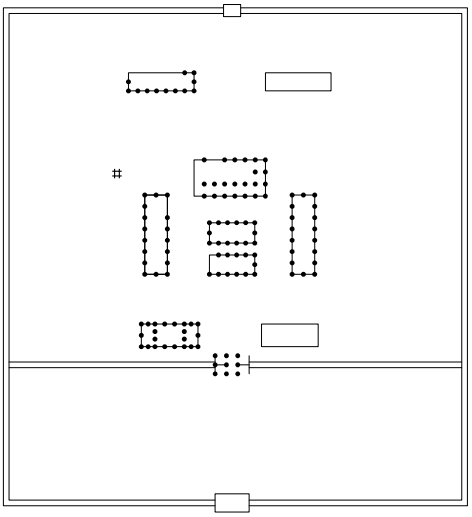


Fig. 265　平城京左京五条二坊十四坪　1:2000

の桁行規模が大きい必要がある。判断基準の①・②は妥当であろう。ただし、脇殿が左右それぞれに複数棟並んで前庭を確保できるならば、脇殿の桁行規模は小さくてもよいし、正殿の側面にあってもよいと考えられる。また、判断基準③は右京七条一坊西南坪ですでに該当せず、④は兵部省と式部省、馬寮地区東方では脇殿を伴う後殿が存在するため、再考が必要であろう。

結局のところ、官衙中枢部の条件とは左右対称で建物に囲まれた前庭を有するということに止まることなる。条件が緩くなった感があるが、これに従えば兵部省と式部省、馬寮地区東方、さらには平城京左京五条二坊十四坪のⅢ期遺構（Fig.265）が該当し[9]、そのうえで藤原京左京六条三坊も官衙と考えられる。藤原京右京七条一坊西南坪は前庭が狭く邸宅の要素が強いが、今回左京六条三坊で藤原京期に2時期を認めた考え方を敷衍すれば、柱根が残る正殿・後殿と、柱が抜き取られた中門・脇殿に区別でき、調査区外の状況によっては建物配置の様相が大きく変わる可能性がある。また、平城京左京三条二坊一・二・七・八坪（長屋王邸）では、調査区内でそもそも左右対称性が認められない。

官衙と邸宅を区別する基準の明確化は、さらなる調査事例の増加が求められよう。そのなかで例えば判断基準④では、後殿の規模や形式について、前庭空間と後庭（後殿）空間を塀や回廊などで画するか[10]、といったところに視点を置く必要もあるだろう。また、何よりも京内宅地の様相がわかる事例の増加が求められる。

いずれにしても、今回調査した藤原京左京六条三坊は、建物配置の点では京内官衙とみて妥当であると考えられる。そこで、以下では官衙としての規模や、建物配置および形式を通じて検証していく。

ⅱ　京内官衙としての規模

官衙とみられる左京六条三坊の中心区画（内郭）の規模は、Ⅲ-Ｂ期の区画南北塀を西に折り返すと東西幅350尺（102.4m）を測り、Ⅲ-Ｃ期の区画南北塀を折り返すと東西幅420尺（122.2m）を測る。この東西規模は、藤原宮中枢部や全国各地の国庁と同等以上である。

国庁の計画的な建物配置の成立を全国的にみると、2つの画期を経ていると考えられている。第一段階は7世紀末期から8世紀初頭である。その特徴としては、建物配置が南を正面としない、脇殿と区画塀が未分化で一体的、正殿が内郭の後方に位置して後殿やその空間がないなどの傾向が挙げられる。しかし、建物配置の形式を並べてみると、それほど定まったものではない。第二段階は8世紀前半以降である。第一段階で示した特徴を課題とすればそれらを解決し、3つほどに分類できるまで定型化している。

Tab. 17　官衙等の規模

名　称	時　期	区画東西幅
藤原京左京六条三坊	Ⅲ-Ｂ期	102.4m
藤原京左京六条三坊	Ⅲ-Ｃ期	122.2m
藤原宮大極殿院		118　m
藤原宮朝堂院		235　m
城輪柵政庁		178　m
多賀城政庁		104　m
常陸国庁	Ⅰ期	99　m
常陸国庁	Ⅱ期	104　m
常陸国庁	Ⅲb期	107　m
下野国庁	Ⅱ期	94　m
伊勢国庁		78　m
近江国庁		73　m
伯耆国庁	Ⅰ・Ⅱ期	69　m
伯耆国庁	Ⅲ期	81　m
大宰府政庁	Ⅱ期	117　m
大宰府政庁	Ⅲ期	114　m
肥前国庁	Ⅱb期	78　m

本調査地のⅢ-B･C期は藤原京期と考えられ、第一段階の遺構ということになる。したがって、官衙として比較する場合には同時代の事例と比較すべきであるが、後述するように建物配置は第二段階の特徴に当てはまる。そこでここでは、定型化した国庁との比較を行ってみた。[11]

Tab. 17に、第二段階以降の各地国庁内郭の東西幅を示した。比較対象は正方位で左右対称の配置を基本とするものである。これをみると、本調査地の内郭はⅢ-B･C期ともに、おおむね国庁規模と言ってよいことがわかる。そのうえ、大宰府政庁と同程度の大きさであり、城輪柵政庁を除けば、Ⅲ-C期の東西規模が最も大きい。この規模の点からも、本調査地のⅢ-B･C期の遺構が官衙であることを裏付けると言えよう。

また藤原宮では、大極殿院の東西幅は回廊棟通りで400尺（118m）であり、朝堂院はその2倍である。それぞれの回廊は梁行が10尺であるため、大極殿院の回廊外側柱の東西心々距離は420尺となり、本調査地Ⅲ-C期の東西幅と一致する。ただし、大極殿院と朝堂院の棟通り東西幅の関係は2倍であるので、大極殿院の計画は400尺を基準としたとするほうが妥当であろう。いずれにしても、大極殿院と本調査地Ⅲ-C期は直接的な関係は不明だが、同程度の規模となる。

ⅲ　京内官衙の建物と配置

a　建物配置について

本調査地のⅢ-C期について、規模において同等とみられる各地の国庁と比較するならば、両者には建物配置においても類似性が認められる。比較対象となる国庁は、主に8世紀以降の定型化国庁[12]と呼ばれる事例であり、正殿の東西前方に脇殿を配してコの字形を構成し、これらに囲まれた前庭部を形成する。そのなかで、常陸国庁の建物配置[13]は高い類似性が認められる。副殿を除けば8世紀前半頃と考えられているⅠa期からすでに類似性が認められ、9世紀後半頃のⅢb期では建物配置のうち、正殿・東西副殿・前殿・東脇殿2棟・西脇殿2棟からなる構成は同様と言える。常陸国庁Ⅲb期では建物形式についても、正殿が桁行7間、梁行3間の身舎に南面

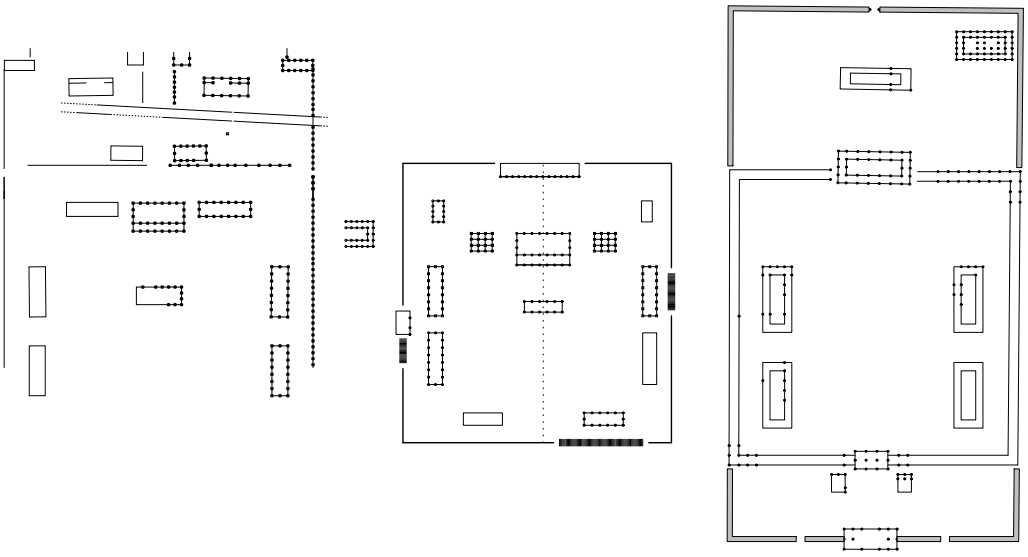


Fig. 266　藤原京左京六条三坊（Ⅲ-C期）・常陸国庁（Ⅲb期）・大宰府政庁（Ⅱ期）　1:3000

廂付きであることと、脇殿が桁行7間、梁行2間であることは共通する。また、Ⅰa期でみても正殿の梁行や第二脇殿などに共通点がみられる。

常陸国庁以外にも、部分的な類似性を認めることができる国庁は多い。規模の点で同程度の大きさであった大宰府政庁（Ⅱ期：8世紀初頭以降）にしても、前殿は確認されていないが、正殿に取り付く回廊が副殿的な機能を果たしたとすれば、本調査地Ⅲ-C期と建物配置では高い類似性を示す。

b　建物形式について

まず、本調査地Ⅲ-B・C期の正殿と藤原京坊内の中心建物とを比較する。京内でこれに該当するのは右京七条一坊西南坪の正殿SB4900で、これと比較するならば、以下の通りである。

左京六条三坊　SB5000

桁行7間（2.9m/間）、梁行3間（2.6m/間）、南面廂、身舎柱根直径35cm

右京七条一坊西南坪　SB4900

桁行7間（2.6m/間）、梁行3間（2.1m/間）、四面廂、身舎柱根直径25cm

廂については右京七条一坊西南坪正殿SB4900が四面廂であるが、建物規模や柱の太さでは左京六条三坊正殿SB5000が格段に立派な建物であり、四町占地の正殿に相応しい規模を誇る。右京七条一坊西南坪正殿SB4900が、規模が比較的小さいにも関わらず四面廂である点は、正殿SB5000とは建物の性質や機能が異なることを意味するのであろう。また、両者ともに掘立柱建物であり、瓦葺と判断できる遺物出土状況ではないため、板葺や檜皮葺などと考えられる。

次に8世紀以降の国庁建物とその形式を比較すると、常陸国庁Ⅱ・Ⅲ期の正殿SB1502は、桁行7間（3.0m/間）、梁行3間（2.7m/間）、南面廂付きで類似性が高い。しかし、その他の国庁正殿をみるならば、礎石建物であるものや四面廂付きもあり、一定しない。例えば肥前国庁正殿SB090は身舎桁行7間（2.98m/間）、梁行2間（3.3m/間）だが、掘立柱建物四面廂付きである点は、右京七条一坊西南坪SB4900に類似する。また、国庁の一つの祖型を藤原宮大極殿院や朝堂院に求めるならば、正殿である大極殿は礎石建物四面廂付きである。

現在のところ、官衙正殿について特徴を明らかにできないが、礎石建物と掘立柱建物の違いが建物形式に大きな影響を与えることは一般的に理解されていよう。肥前国庁にしても、正殿南面の調査は一部分に止まっているため、その実態は今後解明されることが期待される段階にあるといえる。礎石建物であるか掘立柱建物であるか、瓦葺であるかそれ以外であるか、建物形式に基づいて、廂の方向などを含めた検討を重ねることが今後の課題と言えるだろう。

ここまで建物の規模と形式についてみてきたが、本調査地Ⅲ-B・C期の正殿における規模と南面廂付きという建物形式は、国庁クラスの官衙正殿の範疇に入ると言える。

iv　藤原京期の官衙前殿

a　正殿南の仮設構築物について

ここでは、藤原京期（Ⅲ-B・C期）の正殿SB5000の正面で、藤原京期後半（Ⅲ-C期）の前殿SB4340の周囲にある仮設構築物とみられる柱穴列SX4342～4349について、その性格を考える

ことにする。遺構の特徴は以下の通りである。

・柱穴は一辺約50㎝で、柱根は確認されていない。

・3基1組で構成されている。

（SX4349については、東の柱穴がSE4463に壊されているとみられる。）

・前殿からの距離はそれぞれ北6.7m、南6.2m、東3.0mで不揃いである。

・前殿四方を取り囲むように並ぶが、正殿中軸線上と四隅が欠ける。

・柱穴列のうち、北のSX344・4355と南のSX4348・4349は、ほぼ東西位置を揃えて対応関係にある。（西の柱穴列は調査区外のため、東西の対応関係は不明。）

以上の特徴から「目隠し塀」「幢旗」「幄舎」の各案が提示できると思われる。まず、目隠し塀と考えると、正殿の正面前庭にある建物を塀で囲う事例が見あたらないこと、中軸線上や四隅を欠く理由が不明であること、東の柱穴列（SX4342・4343）の間隔と通りが揃わないことなどに難点があるように思われる。

次に、幢旗の場合は、柱穴列が3基1組であるので、幢旗そのものであれば3本、支柱であれば3本の支柱の間に2本の幢旗が立てられていたことになる。しかし、一般に幢竿支柱の柱穴と推定されているものは大きく深いのに対して、これらの柱穴に背の高い幢旗やそれを支える支柱を据えるには、柱穴がやや小さく浅いことが難点と言える

そして、現段階でもっとも可能性が高いと考えられるのが、幄舎である。柱穴列を幄舎の支持杭と理解する考えである。幄舎は『年中行事絵巻』などにいくつか描かれており、これを見ると桁行柱間は2間から7間まで様々であるが、梁行はいずれも2間である。つまり建物両妻側（梁行）に3本の柱が立つことになり、そこから綱を延ばして対応する3本の支持杭で固定している。幄舎の柱は掘立柱であるかは不明だが、仮設的な建物であることを考えると、掘立柱としても容易に撤去できる深さだと考えられる。より深く打ち込むのが支持杭だとすれば、幄舎の遺構は桁行方向の両側延長上にそれぞれ3個の小穴が残るはずである。『大饗雑事』によれば、幄舎建設に用いる工具として、「槌」と「鉄布久志」（鉄掘串）を挙げている。ここに「鋤」の類が挙げられていないことは、柱穴のように大きな穴を掘る必要がなかったことを示し、幄舎の遺構としては小穴程度しか残らないことを示唆する。鉄布久志は柱や杭を据える小穴を掘るのに利用し、槌は支持杭をさらに打ち込むのに利用したと考えられる。

前殿の四方に柱穴列がある点については、南北棟として2棟並べた時（SX4344・4345）と、東西棟としてはSX4342とSX4343の間隔が近くて通りが揃わないことから、1棟ずつ2度建てた時があったと考える。複数回の設置は仮設構築物としての性質にも相応しいと言える。『年中行事絵巻』にも主殿に対して南北棟に建てている場面と、東西棟で建てている場面がそれぞれ描かれる。遺構規模の点では、東西棟の場合は東の柱穴列SX4342を中軸線で折り返すと、その間隔は24.9mである。『延喜式』など各種の史料によれば、幄舎は桁行の長さで七丈幄、五丈幄、二丈幄に規格化されている。したがって、七丈幄であればおおよそ桁行21mであり、残りは建物柱頭付近（軒高）から斜めに綱を張った長さの2方向分と考えることができる。次に南北棟の場合、SX4345・4348間の南北柱穴列の間隔は20.4mである。五丈幄であればおおよそ桁行15mであり、残りは建物から杭までの長さの2方向分と考えることができる。『延喜式』には柱の長さ1丈と記してあり、仮に軒高3mとすると綱の角度は、東西棟の場合は約57°、南北棟の場

合は約48°である。ある程度は柱を地面に差し込むと考えられるので、軒高は3ｍより低くなるが、それぞれの綱の角度は妥当な範囲と言える。また、絵巻の杭は斜めに打ち込んでいるように描かれているものの、遺構にその特徴は認められない。しかし、柱穴列SX4342～4349は幄舎使用後の杭抜き取り穴と考えれば、必ずしも斜めの杭痕跡がなくてもよいだろう。

ただし、仮設的な建物である幄舎は古代における実態は明らかでなく、管見の限り発掘調査による報告例が少ないことが難点である。少ない事例として平城宮の壬生門北（兵部省と式部省の間）で掘立柱建物SB14380・14381、SB14390・14391が見つかっており、幄舎などの仮設建物と考えられている[14]。これらは桁行柱間1丈（10尺）であるが、柱間数は8間であり、それぞれの柱穴が残っている。これは本調査地の仮設建物や絵巻物の幄舎とはやや異なったものと考えておきたい。その実態としては鎌倉時代の『春日社寺曼荼羅』の興福寺部分に描かれているものが候補となろう。これは1999年度の興福寺中金堂院の発掘調査で柱穴を確認した掘立柱建物SB7530～7536等に該当するとみられている[15]が、描写も遺構も控えの杭跡が見あたらない。したがって、本調査地や中世絵巻に見られる控え杭の幄舎に比べれば、壬生門北や興福寺の幄舎は柱穴が残る（柱が固定される）点で恒常的な側面がうかがえる。いずれにしても幄舎が絵巻物に頻出することを考えると、今後の発掘調査事例の増加と実態解明に期待したい。

以上から、柱穴列SX4342～4349を幄舎の杭列とすれば、前殿SB4340からの距離が不揃いであるという問題も、前殿SB4340と共存するものではないという理解の下で解釈する。ここでは藤原京期後半（Ⅲ-C期）に内郭は規模と施設を拡充するので、Ⅲ-B期の前庭の仮設的な施設利用（幄舎）をⅢ-C期に常設化したと考えたい。

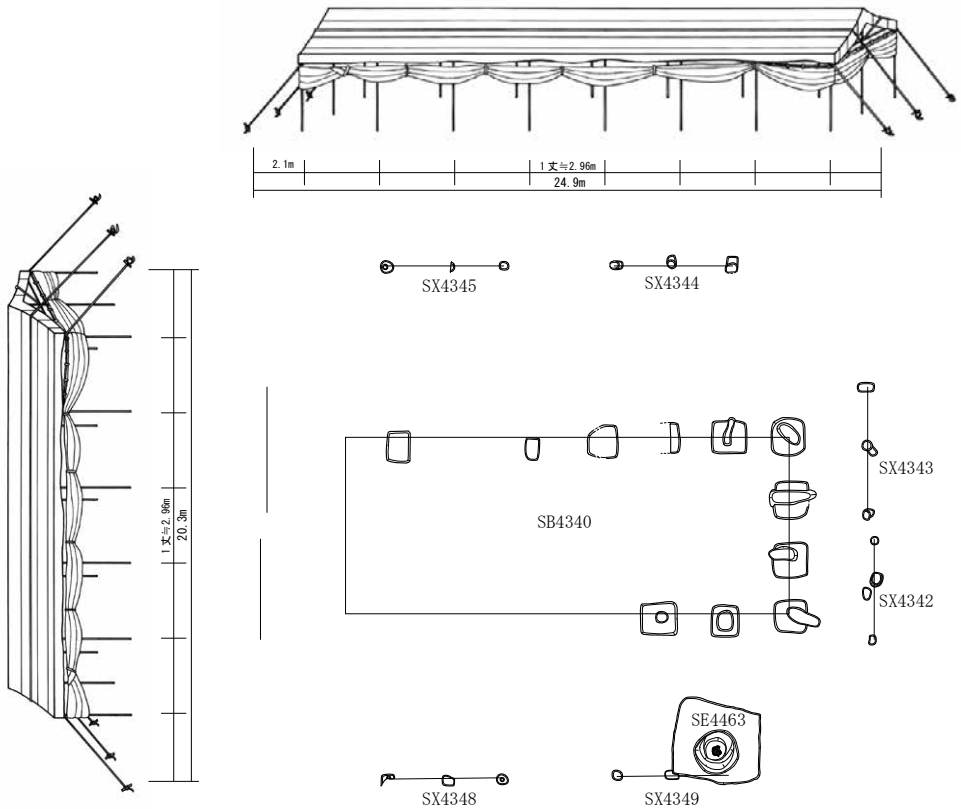


Fig. 267　前殿SB4340および周辺の柱穴列SX4342～4349と幄舎　1:300

b　前殿の機能について

柱穴列SX4342～4349を幄舎とすると、藤原京期前半（Ⅲ-B期）においても正殿と脇殿からなるコの字形配置の前庭部に位置するため、藤原京期後半（Ⅲ-C期）の前殿SB4340の前身建物と位置付けることが可能である。すなわち、SX4342～4349もまた前殿の役割を果たしていたと推測される。

官衙において前殿がどのような機能をもっていたかは、SB4340を含め、全国の国庁の発掘成果に基づいても不明である。しかしⅢ-B期には、柱穴列SX4342～4349によって幄舎が東西方向と南北方向の二通りに建てられたとみられること、さらに東西棟に1棟建てた場合は七丈幄であり、南北棟に2棟建てた場合が五丈幄であることが、前殿の機能を推測するうえで手掛かりになると考えられる。この時期の建物配置を藤原宮に重ね合わせるならば、中軸線上付近に位置する大極殿院南門、朝堂院第五・六堂、朝堂院南門のいずれかに近い機能を果たしたと考えられる。また、京内官衙としての機能を推定するならば、儀礼の場面や事務的な利用の場面が考えられる。

Ⅲ-C期の前殿SB4340は、推定桁行7間、梁行3間となるが、前述のように正殿身舎を縮小したような平面形をとる。この様に前殿と正殿に何らかの類似性が認められる事例としては、下野国庁（Ⅱ期）、武蔵国庁、三河国庁、肥前国庁などで桁行幅を揃えることが指摘されている[16]。前殿が正殿の下手（南側）に対面することで正殿と上下関係にありながら、正殿と類似性が認められるという二面性は、前殿の機能を推定するうえで手がかりになると考えられる。

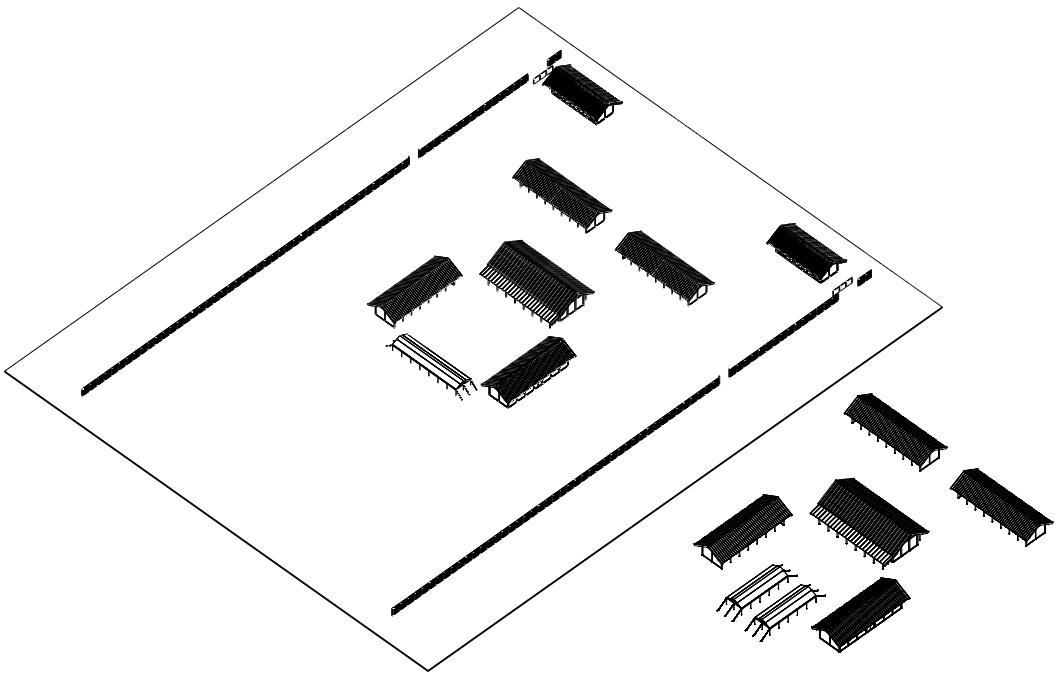


Fig. 268　藤原京左京六条三坊の建物配置復元図（Ⅲ-B期）

v　まとめ

正殿を中心として、方位に則ったコの字形などの建物配置で前庭を取り囲むという定型化した国庁は、いまだ例が少ないものの、7世紀末から8世紀初頭に出現すると考えられている。一方で、定型化国庁の構成は藤原宮朝堂院にも該当するため、時期的にみてこれを定型化国庁の祖型と考える意見もある[17]。

本調査地Ⅲ-B･C期の遺構は、その例が少ない7世紀末から8世紀初頭の事例である。Ⅲ-B期からⅢ-C期にかけての規模の拡大と建物の充実は、国庁が定型化に向かう様子を示しているようにもみえる。これらは、藤原宮とはほとんど時期差がないため、朝堂院の構成や大極殿院の規模といった藤原宮の計画理念が根底にあると考えられる。一方で、本調査地Ⅲ-B･C期の遺構は時期的にみて各地の国庁に対し、具体的な規模や構成について参考、雛型になり得る事例とすることもできよう。

以上のように、本調査地の藤原京期の遺構は各地の国庁相当であると考えられる。しかし、奈良時代には平城京内に大和国府が存在しないうえに、長岡京期や平安時代にも京域内に国府が推定されていない。したがって、これらに遡って藤原京期に京内に国庁が存在したとは考えにくい。また、既往研究では大和国府は本調査地以外の地に比定されている[18]。そこで、国庁に相当する規模や特徴がありながら、それとは異なる官衙を想定するならば、藤原宮隣接地にあるという点も踏まえて、京職（後に左京職）が有力な候補となり得るだろう。

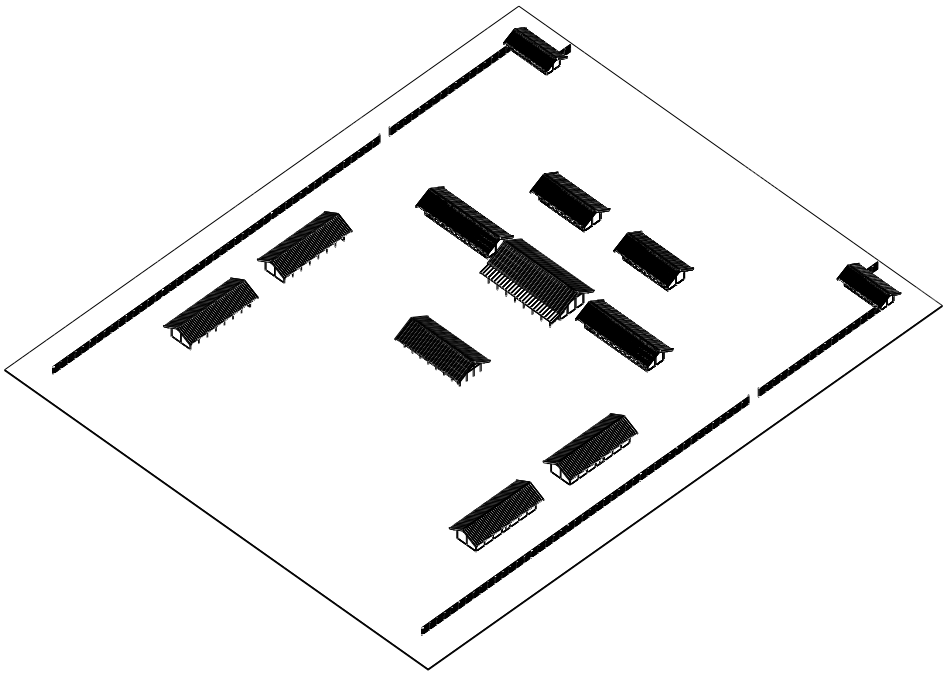


Fig. 269　藤原京左京六条三坊の建物配置復元図（Ⅲ-C期）

1） 明日香村教育委員会2006『酒船石遺跡発掘調査報告書』。
2） 北側は削平されたものとみられる。
3） ただし、藤原京期前半に位置付けることも可能である。
4） 奈文研1987『藤原京右京七条一坊発掘調査報告』。
5） 藤原京期との比較を容易にするため、Fig.261では条坊道路を薄線で示した。
6） 奈良県立橿原考古学研究所1980『大和国条里復原図』吉川弘文館。
7） 安田龍太郎2005「藤原宮周辺の中世方形区画」『飛鳥文化財論攷―納谷守幸氏追悼論文集―』納谷守幸氏追悼論文集刊行会。
8） 前掲註4文献。および、黒崎直1988「京におけるコ字型建物配置遺構の性格」『斎藤忠先生頌寿記念 考古学叢考』。
9） 山本忠尚1983「地方官衙の遺跡」『日本歴史考古学を学ぶ（上）』（有斐閣）では、平城京左京識の可能性が指摘されている。また本書第Ⅵ章2では、出土遺物の様相について藤原京左京六条三坊との類似性を指摘した。
10） 平城宮兵部省、式部省の他、大宰府政庁、伊勢・近江・肥前各国庁が該当。
11） 第一段階の国庁（初期国庁）は規模が明らかな調査事例が少ないため、初期国庁との比較は今後の課題である。
12） 阿部義平1986「国庁の類型について」『国立歴史民俗博物館研究報告10』において、8世紀以降の国庁を、城柵政庁・大宰府政庁・太政官院の各類型にあてはめた。このうち太政官院型を山中敏史1994『古代地方官衙遺跡の研究』（塙書房）で朝堂院型に改称した。これらの類型にあてはまるものを定型化国庁と呼んでいる。大橋泰夫2009「国郡制と地方官衙の成立」『古代地方行政単位の成立と在地社会』奈文研など。
13） 石岡市教育委員会2009『常陸国衙跡』。
14） 奈文研2005『平城宮発掘調査報告XVI 兵部省地区の調査』奈文研学報第70冊。
15） 興福寺1999『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅱ』。
16） 青木敬2012「宮都と国府の成立」『古代文化』第63巻第4号、古代学協会。
17） 仙台市教育委員会2005『郡山遺跡発掘調査報告書 総括編1』。
18） 和田萃1972「大和国府について」『赤松俊秀教授退官記念国史論集』では、御所市掖上（葛上国府）に設けられて藤原京の時期まで存続し、平城京遷都に伴い藤原京南西域に移転して（軽国府）、11世紀初頭まであったとしている。軽国府については橿原遺跡に比定している。

2 土　器

A　SD4130・SE4740出土土器の検討

東西大溝SD4130とその南に隣接する井戸SE4740からは、整理木箱104箱分（SD4130：88箱、SE4740：16箱）の多量の土器・土製品が出土した。土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、硯、土馬等があるが、主体となるのは藤原宮期から奈良時代までの土器であり、左京六条三坊における一連の調査（第45・46・47・50・53次調査）でこれほどまとまった量の土器が出土した例は他にない。本節ではこれらの資料の具体的様相を明らかにすることで、藤原宮の東に接し、香具山北西麓に位置するこの地区の土地利用のあり方を把握する一助としたい。

SD4130は左京六条三坊の中央やや北寄りを東西に流れる素掘りの大溝で、SE4740はその南に近接して存在する、一辺0.9m、深さ3.6mの方形横板組の井戸である。両遺構からは「香山」と記した墨書土器が出土しており、「香山」の字はすべて同筆ではないものの、遺構埋没の時間的な並行関係を推定する手がかりとなる。

埋土の層位は、SD4130が下層、中層、上層に3区分され、SE4740井戸枠内埋土は、最下層、下層、中層、上層の4層に区分される。整理作業の結果、層を越えて接合した資料が存在したが、これらは全体からみても少量であり、各層が大きく攪乱を被っている状況にはないと考える。

i　SD4130出土土器の年代

下層出土土器　下層から出土した土器の器種構成を、別表5にまとめた。土師器は半数以上が供膳具で、須恵器は貯蔵具が過半を占める。土師器杯Aの暗文構成をみると、二段暗文のものが6個体、一段暗文のものが2個体であるが、残存率を考慮せず小片まで含めた総破片数を算出すると、二段暗文が30点、連弧＋一段暗文（以下、連弧暗文とする。）が1点、一段暗文が4点となり、二段暗文のものが圧倒的多数となる。二段暗文の施文方法のうちでも古相を示す、上段の暗文幅が広いものが多いことも特徴的である。飛鳥Ⅴの基準資料である藤原宮東面内濠SD2300出土土器では、土師器杯Aの暗文構成は二段暗文のものが比率の大部分を占めており[1]、SD4130下層出土の土師器杯Aの分析から得られた状況に近い。一方、平城宮東院の斜行溝SD8600出土の土師器杯Aでは、二段暗文のものと連弧暗文のものがほぼ同数となることが指摘されている[2]。SD4130下層出土の土師器杯Aは、平城宮SD8600から出土した土師器杯Aよりも先行する特徴を有すると言えよう。

また、土師器杯Aおよび皿Aにおいて、奈良時代半ば以降に増加するc手法で調整したものはみられない。土師器杯Bでは、暗文構成を確認できるものは2点のみであるが、両者とも二段暗文をもつ。須恵器杯B蓋ではかえりのないものが主体をなすが、かえりを有する個体も一定量存在し、破片も含めた総数では前者が28点、後者が12点で、その比率は7：3となる。これらの特徴も土師器杯Aの示す年代観と大きな齟齬はきたさない。

一方、下層出土土器には、須恵器杯H蓋（Pl.15-719）や高台の高い須恵器杯B（Pl.15-707）

など、出土土器群全体の特徴と比較して古い時期の所産と考えられるものも若干含まれる。ただし、これらは出土量としては少量であり、素掘溝という出土遺構の性格を考慮すると混入として理解でき、出土土器全体の位置づけに影響を与えるものではない。

上で比較資料として挙げた藤原宮東面内濠SD2300出土土器は藤原宮廃絶時に廃棄されたもので、藤原京が都として機能していた時期に使用されていた土器群と考えられる。また平城宮SD8600からは和銅年間（708～715年）の紀年木簡が出土しており、実年代の一端を示す。これらの資料との比較から、SD4130下層出土の土器は飛鳥Ⅴに位置づけることができ、7世紀末から8世紀初頭の年代が与えられる。

中層出土土器　中層から出土した土器の器種構成を、別表5に示した。まず、土師器のうちまとまった出土をみせる杯Ａでは、藤原宮期に属する二段暗文をもつものから、連弧暗文や一段暗文を施すもの、あるいは奈良時代半ば以降に増加するｃ手法で調整するものまでが存在し、ある程度の時期幅をもった土器群であると理解できる。ただし、その中で主体をなすのは一段暗文をもつもので、二段暗文や連弧暗文のものと合わせると、暗文を施す個体が全体の7割以上を占める。一方、口縁部が八分の一以上残るもののうち、ｃ手法で調整する杯Ａは3点を数えるのみである。

土師器Ⅲａでも、暗文をもつ個体が全体の7割を超える。一方、ｃ手法で調整するものは5点で、杯Ａと同様にその数は少量である。このような杯ＡとⅢａの様相から判断すると、中層埋土の大部分は、土師器供膳具への暗文施文が存続している段階、主に平城宮土器Ⅱから平城宮土器Ⅲにかけての時期に堆積したと考えられる。

次に須恵器についてみてみると、杯Ｂ蓋にはかえりを有するものとかえりのないものがあり、また平瓶の体部形状には楕円形のものから台形状を呈すものまでが存在するなど、土師器と同様、一定の時期幅を認めることができる。ただし、杯Ａや杯ＢにⅠからⅤまでの多様な法量分化がみられる点は、中層出土土師器の主体が平城宮土器Ⅱ～Ⅲに比定できるとしたことと整合的である。

一方、中層出土土器には、外面にヘラミガキを施さない土師器椀Ａ（Pl.18-145）や、底部に糸切り痕跡を残し、ロクロ水挽きで成形した須恵器壺Ｇ（Pl.24-847）など、平城宮土器Ⅳ以降に位置づけられる個体も含まれる。土師器杯Ⅲ類のうち、ｃ手法で調整するものも同様の一群と言える。出土量は少ないものの、それら新相を示す土器群が存在することを考慮すると、中層出土土器は平城宮土器Ⅱ～Ⅲを主体とするが、一部に平城宮土器Ⅳに降るものも含むと結論づけられる。

上層出土土器　上層から出土した土器の器種構成を、別表5に示した。上層出土の土器には様々な時期のものが混在しており、資料の一括性は高くないが、主体となるのは奈良時代後半以降の土器である。出土した土器群のなかで、上層の堆積時期の下限を知る手がかりとなるのは、黒色土器（Pl.27-1061～1068）や平安時代の土師器Ⅲ（Pl.27-264～266）である。

黒色土器は一定量の出土があり、その総数は小片も含めると127点を数える。内訳は、内面のみを黒色化するＡ類が123点、全面黒色のＢ類が4点で、後者は全体の3％程度に過ぎず、Ａ類が主体をなす。黒色土器では、以下に記すPl.27-1062・1063のような特徴をもつ資料が最も多い。1062・1063は口径15.0～15.5㎝、器高4㎝ほどで、内面には両者とも密なヘラミガキが

みられる。外面は体部下半が不調整で、1063では口縁部にわずかにミガキを施す。1063の高台は断面三角形の低い高台である。上層出土の黒色土器の年代は、黒色土器Ｂ類がほとんどみられないことや、1062・1063などの主体をなす黒色土器Ａ類の特徴から、10世紀半ばから後半を中心とすると考えられる。

平安時代の土師器皿は出土点数が少ないが、特徴的なものを含む。264～266は、口径10㎝前後を測る。口縁の外反に強弱の差はみられるものの、いずれも「て」字状口縁を有し、調整はｅ手法である。これらの資料は、器形や法量から10世紀末から11世紀初頭に比定できる。

黒色土器と土師器皿の特徴から導出される年代には若干の開きがみられるが、上層出土土器の年代は、10世紀後半から11世紀初頭を下限とすると考える。

ⅱ　SE4740出土土器の年代

掘方出土土器　少量の土器しか出土しておらず、明確な時期比定は困難である。ただし、二段暗文をもつ土師器杯Ａ（Pl.30-301）や径高指数28.5前後の土師器杯Ｃ（Pl.30-302）があり、また確実に奈良時代に降る特徴をもつ土器が存在しないことを考慮すると、飛鳥Ⅳ～Ⅴに位置づけるのがもっとも蓋然性が高いと考える。

最下層出土土器　土師器では、杯Ａは総数が少ないが、二段暗文のものと連弧暗文のものが等量あり、一段暗文のみの個体はみられない。連弧暗文をもつ杯Ａは藤原宮東面内濠SD2300出土土器に少量みられ、平城宮東院西辺地区SD8600出土土器では、二段暗文のものと連弧暗文のものがほぼ等量となる。最下層から出土した杯Ａの特徴はこれらの土器群に類似し、藤原宮期から平城京遷都直後にかけての時期が与えられる。杯Ｃ（Pl.30-313）や、SD4130中層出土の破片と接合した杯Ｂ（Pl.17-81）もこの時期にあたる。

一方、暗文の間隔が粗い杯Ｃ（Pl.30-315）も存在し、口径に差はあるものの、313より新しい特徴を有す。皿Ａでは、316は315と同様な間隔の粗い暗文をもち、317はｃ手法で調整する。これらの一群は、上述した杯Ａや杯Ｃより新しい様相を示しており、平城宮土器Ⅲ～Ⅳに比定できる。この他、最下層出土土師器には、径高指数14.7を示す杯Ｃ（Pl.30-314）や、小片のため図化は行っていないが、間隔の狭い一段暗文を施す杯Ａが確認できるなど、奈良時代前半のものも含んでいる。また須恵器には、頂部が扁平で端部が屈曲する杯Ｂ蓋（Pl.30-942）があり、奈良時代後半のものも含まれていることがわかる。

以上の様に、最下層から出土した土器群は、藤原宮期から平城宮土器Ⅲ～Ⅳまでの特徴をもつ資料が混在している。土器群としての一括性は低く、これらの土器を短期間で堆積したものとみなすことは難しい。なお、最下層出土土器として扱った土師器杯Ｂ蓋（Pl.30-312）や皿Ａ（Pl.30-316）ではSE4740下層から出土した破片と接合関係がみられる。

下層出土土器　下層から出土した土師器をみると、杯Ａ（Pl.31-330）は暗文間隔が非常に粗くなっており、またｃ手法の皿Ａ（Pl.42-47・49）や丁寧なヘラミガキを施す椀Ａ（Pl.42-48）が存在する。年代的根拠となる資料が乏しいが、これらの土器の特徴から、平城宮土器Ⅲ～Ⅴに比定できよう。

中層出土土器　土師器には、ｃ手法の杯Ａ（Pl.46-63）、皿Ａ（Pl.31-338・339）に加え、ｅ手法の皿Ａ（Pl.46-65）がみられる。また、椀Ａには外面にヘラケズリを施すがヘラミガキがみられ

ないもの（Pl.31-341・342）と、ｅ手法で調整し、外面に粗いヘラミガキを施すもの（Pl.45-61）がある。これらの特徴は、平城宮土器Ⅴから長岡京期までのものである。

上層出土土器　上層出土土器は、多くが層の下半部分から出土している。土師器には9世紀前半に比定できる杯Ａ（Pl.31-346）や椀Ａ（Pl.31-347）がみられるとともに、口縁端部が強く屈曲する杯Ａ（Pl.31-350）や皿Ａ（Pl.31-351）等10世紀前半の特徴を有する資料もある。黒色土器Ａ類の椀Ｂ（Pl.31-1069・1070）は、内面に密なヘラミガキとともに粗雑な暗文を施す10世紀前半のものである。他の層に比べ出土量が少なく年代幅が大きいが、上層出土の土器は、10世紀前半を下限とする。

ⅲ　SD4130とSE4740各層の並行関係

遺構の先後関係と造営時期　SD4130とSE4740は近接して設けられた大溝と井戸であるが、両者に重複関係はなく、検出状況から直接遺構の先後関係を知ることはできない。

SD4130は、下層出土土器の様相から、藤原京期には確実に存在していたことがわかる。出土土器から考える限り、SD4130の掘削時期は、厳密には「藤原京期あるいはそれ以前」とまでしかしぼり込めないが、ここでは下層出土土器の示す年代から大きな隔たりはないとみて、溝の掘削時期を藤原京期と考えておきたい。

一方、SE4740については、掘方から出土した土器が飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できる。また、井戸枠内最下層から出土した土器のうち、最も古い資料は藤原宮期のものである。このことから、SE4740はSD4130同様、藤原京期に掘削されたと推定できる。藤原京期のなかで、SD4130とSE4740の掘削時期に差がある可能性は十分考えられるが、その先後関係を確定することはできない。

SD4130の埋没　SD4130の各層の厚さは、最も残りのよい50次調査西区西壁土層図で、下層が10～25㎝、中層が70～85㎝、上層が60～80㎝である。埋没が進行しつつある時期の堆積土である中層からは、飛鳥Ⅴから平城宮土器Ⅳまでの土器が豊富に出土している。この中で主体をなすのが平城宮土器Ⅱ～Ⅲの土器であり、奈良時代前半に多量の土器がSD4130に廃棄されたと考えられる。土層断面図によると、下層・中層を合わせた層の厚さは45次調査中央区東壁で約30㎝、50次調査西区の西壁で約90㎝となり、いずれも溝全体の半分ほどの厚さとなる。このことから、少なくともSD4130の下半部は、平城宮土器Ⅳの時期には埋没していたと理解できる。

また、上層出土の土器群は、8世紀後半から9世紀の土器を多く含み、年代に幅があることから、溝上半部は一時期に大規模な埋め立てが行われたわけではなく、長期間をかけて徐々に堆積が進んでいった状況が復元できよう。上層から一定量出土した黒色土器の年代から判断して、10世紀後半頃には溝の大部分が埋まっていたと考えられ、遅くとも11世紀初頭までに完全に埋没したと推定できる。

SE4740の埋没　井戸枠内の各層の堆積の様相は、最下層が灰褐色砂礫で厚さ約30㎝、下層が褐色砂質土で厚さ約50㎝、中層が砂混じりの褐色粘質土で厚さ約35㎝、上層は茶褐色粘質土、暗青灰色粘質土、青灰色粘土等からなり、厚さは220～230㎝である。

下層出土の土器は平城宮土器Ⅲ～Ⅴ、中層出土の土器は平城宮土器Ⅴから長岡京期までのも

のであり、8世紀末頃には井戸底から上1.2mほどまでが埋まっていたと理解できる。上層出土土器の多くは層の下半から出土しており、その下限年代は10世紀前半における。このことから、少なくとも上層のうち半分ほど（井戸底から上約2.4m）は10世紀前半までに埋没していたと推測できる。SE4740は、最上部をSD4130と共通の埋土で覆われていることから、SD4130と同様に11世紀初頭には完全に埋没したと考えられる。

接合関係からみた並行関係　土器の接合関係については、土師器杯B（Pl. 17-81）と須恵器杯B（Pl. 22-767）で、それぞれSD4130中層とSE4740最下層から出土した破片が接合している。さらにもう一例、SD4130中層とSE4740最下層出土の須恵器平瓶片で、接合はしないが同一個体と判断できるものが存在する。事例が3点のみであり、数量的には十分とは言い難いが、以上の接合関係からは、SD4130中層の堆積とSE4740最下層の堆積が時期的に並行していたと理解できる。

墨書土器からみた並行関係　また、墨書土器についても両遺構から同様の内容を記したものの出土がみられる。特に目を引くのが「香山」と記した土師器椀Cで、ほぼ完形のものがSD4130中層から1点、SE4740下層から8点出土している。全てが同筆ではなく、SD4130からの出土数が少ない点に若干の問題を残すが、SD4130中層とSE4740下層の堆積時期にも並行関係を読み取ることができる。

以上の検討から、SD4130中層とSE4740最下層・下層がほぼ並行して形成されたと理解でき、出土土器の示す年代から、各層の堆積は奈良時代後半には終わっていたと推測できる。SD4130上層は、出土土器の特徴からみて、SE4740中層と上層にほぼ対応すると考えられ、時間の経過とともに両遺構の埋没が徐々に進行していったのであろう。

iv　SD4130・SE4740出土土器の特色と調査地の性格

SD4130中層からは奈良時代前半の土器が多量に出土しており、平城京遷都後にも調査区一帯では活発な土地利用が行われていたと推測できる。奈良時代の文書木簡や記録木簡、荷札木簡等が多数出土していることも、これを裏付ける。ここでは、SD4130とSE4740から出土した奈良時代前半の土器群について検討したい。

土師器椀Cの多量出土　器種構成について、SD4130中層から出土した土器群で特筆すべき特徴は、土師器椀Cの大量出土である（別表5）。椀Cは200点以上を数え、中層出土の土師器供膳具に占める割合は50％以上で、中層から出土した土器全体では約3割を土師器椀Cが占める。SE4740下層では、土師器の半数以上が椀Cであり（別表6）、出土土器の総数には差があるが、SD4130中層と類似した特徴を示す。また、上述したように両者からは「香山」と記した墨書土器がそれぞれ出土しており、両層の関連性は強い。器種構成からは、奈良時代の調査地周辺で大量の椀Cが使用されていた状況が看取できる[3]。

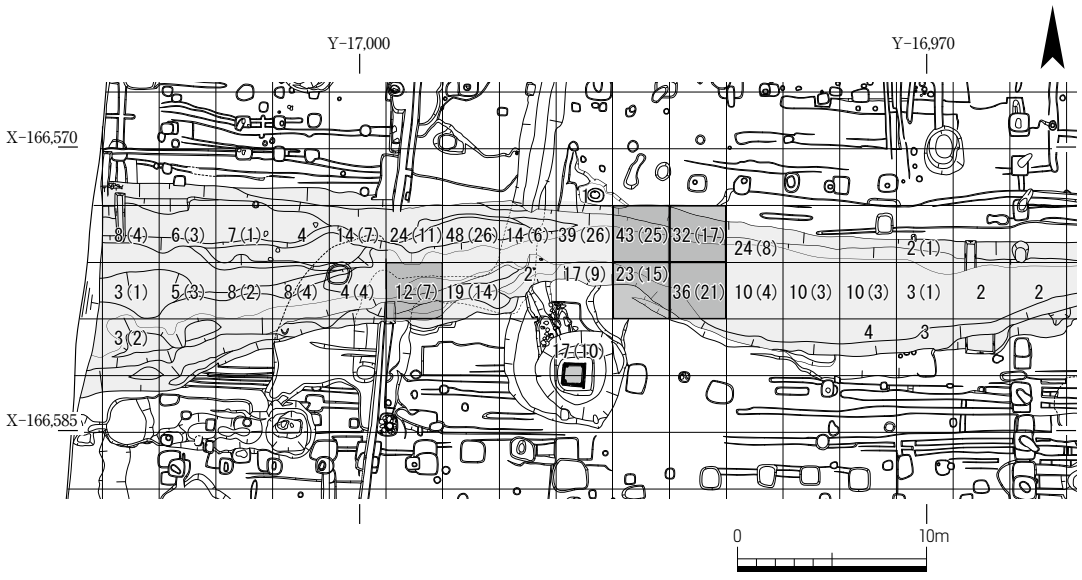
調査地近辺の調査事例では、「小治田宮」と記した墨書土器の存在から奈良時代の小治田宮との関連が注目される雷丘東方遺跡の井戸SE01で、8～9世紀の比較的まとまった量の土器が出土している[4]。井戸SE01は一辺1.7m、深さ2.4mで、井戸底には石が敷かれ、井戸枠内の堆積土は大きく4層に分けられる。そのうち、もっとも底に近い石敷内および石敷直上から出土した土器は型式的にまとまりがみられ、その特徴から8世紀末から9世紀初頭の年代が与えられる[5]。

器種には土師器杯Ａ、杯Ｂ、皿Ａ、椀Ａ、椀Ｃ、壺Ｂ、甕Ａ、黒色土器杯Ａがあり、多くが墨書土器である。それら石敷内や石敷直上出土の墨書土器では、椀Ｃが４割以上を占める[6]。SD4130中層やSE4740下層出土土器とは若干時期が異なるが、雷丘東方遺跡SE01石敷内および石敷直上出土土器でも、器種構成において土師器椀Ｃの割合が高いと考えられる。

平城宮や平城京の遺構では、通常、土師器の器種構成は杯Ａ、杯Ｃ、皿Ａが主体であり、SD4130・SE4740の様な椀Ｃの多量出土は特異である。奈良時代の飛鳥・藤原地域の良好な土器資料は多くなく、このような器種構成の背景にある具体的事象について、現段階では明確な解答を得られていないが、椀Ｃの多量使用（出土）は、本調査地を含むその近隣一帯の地域的特色の可能性もあろう。

「香山」墨書土器　SD4130・SE4740出土土器のうち、もうひとつ注目すべきは、「香山」と書かれた墨書土器（以下、「香山」墨書土器と記す。）の存在である。特に、SE4740下層からは完形品の「香山」墨書土器が多く出土しており、そのうち、Pl. 43-50と51、Pl. 42-49とPl. 44-56に書かれた「香山」は文字の筆致が酷似し、それぞれ同筆と判断できる。これら２組の同筆土器をみると、色調や胎土の特徴が各々共通しており、50・51はともに浅黄橙色で胎土に赤色微砂と細かい雲母を多く含み、49・56はオリーブ黄色を呈し、胎土に雲母を多く含む。２組の例しか確認できないものの、筆跡と土器の胎土等の一致は、土師器製作後ほどなく、本格的に土器を使用する前の段階において墨書がなされた状況も考えられる。

「香山」の墨書は多くが底部外面に書かれているが、底部外面に書かれた文字は食器としての通常使用時には見ることができず、運搬時や保管時に意味をなすと考えられる。このような墨書土器は、同一器種の土器を逆位で重ねた一番上に、供給先を示すために置かれた可能性が高いという見解[7]がある。本調査地が「香山」墨書土器の供給先であったとすると、この付近には「香山」と呼ばれたか、あるいは「香山」の２文字で他と区別可能な何らかの施設が存在したと推測できる。



（数字は土師器杯Ａ、皿Ａ、椀Ｃと須恵器杯Ａ、杯Ｂの合計。合計が１点のみのグリッドは省略。
（　）内の数字は合計のうちの土師器椀Ｃの点数。網掛けは「香山」関係の墨書土器の出土グリッド。）

Fig. 270　SD4130中層・SE4740下層における主要供膳具の出土地区と点数　1：400

Fig. 270には、「香山」墨書土器が出土したSD4130中層とSE4740下層について、供膳具の主体をなす土師器杯A、皿A、椀C、須恵器杯A、杯Bの出土地区と点数を示した。この図によると、SD4130では、SE4740北側付近からこれら供膳具の出土がもっとも多いことがわかり、SE4740下層からも比較的多くの土器が出土している。SD4130は調査区東側で後世の削平が著しく、東側で出土数が少ない要因としてはその影響も考慮する必要があるが、SD4130のうち、SE4740に近い場所から多量の土器が出土していることは間違いない。SD4130については、開渠という遺構の性格上、多少の位置の移動はあろうが、「香山」墨書土器を含む多量の土器は、SE4740と井戸近くのSD4130を中心として廃棄されたと理解できる。

以上のような土器の出土状況からは、調査区付近にこれら多量の土器を使用する施設が存在したとみられる。出土量の多いSD4130中層の土器の年代から、その施設は奈良時代前半から中頃を主とする時期のものであると考えられる。従来、奈良時代にはこの付近に大倭国正税帳にみえる香山正倉が存在したと推測されていたが、本書第Ⅵ章4の検討で、香山正倉は別の場所に所在する可能性が高まった。当地付近にあった施設の性格を現段階で確定することは難しいが、稲の収納に関わる木簡の存在から、正倉的機能を有していた可能性も考えられる。ただし、調査区内では奈良時代の遺構は稀薄であり、正倉的施設が当地付近に展開していたとしても、調査区外に求めざるをえない。上述のように、奈良時代の供膳具の出土は、SE4740と井戸近くのSD4130がもっとも多く、調査区北西部に集中している。出土土器の分布状況からは、「香山」墨書土器や多量の椀Cを使用した施設の本体は、調査区外でもその北西部を中心に展開していたと推測できる。本調査地周辺の今後の調査成果を待ち、奈良時代における調査地一帯の土地利用の実態解明を進める必要があろう。

B　陶硯からみた調査地の性格

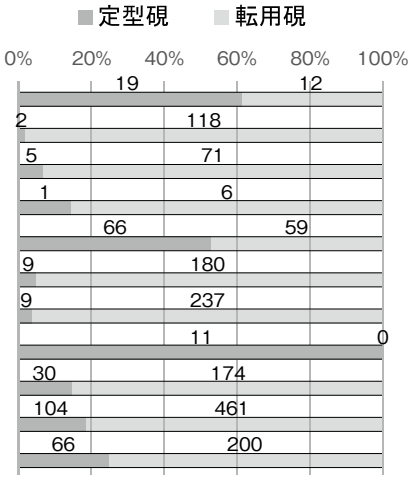
本調査区からは、緑釉獣脚円面硯（Fig. 143）をはじめとして、多数の陶硯が出土した。これは、調査地の性格の一端を示すとともに、藤原京期における陶硯の使用法や需給関係などを考えるうえで重要な情報を有している。本節では、藤原京内における陶硯の出土状況をまとめるとともに、本調査区から出土した硯の位置付けについて考えてみたい。

なお、本節での分析にあたり、分析の限界を明示しておく。遺構変遷からも明らかな様に、調査地の性格が各時期によって変化しており、硯が使用された場の性格が一つにしぼれない点に問題がある。また、調査地から出土した陶硯は、出土遺構から帰属時期をしぼることが可能な資料は少なく、陶硯自体の編年からも、明らかに奈良時代以降に降る風字硯を除くと、飛鳥時代後半～8世紀前半という以上に限定することは難しく、遺構変遷の各期への帰属を決めることも難しい。また、比較対象とした他遺跡も、藤原京期のみで廃絶したものから、複数時期にまたがるものまで一様ではなく、硯自体と遺跡のもつ時期幅が一様ではない点に注意が必要である。

以上の資料的制約を含んでいるが、硯の出土比率の問題や、従来数量が膨大であるとして、定量的把握があまりなされていなかった都城・官衙遺跡出土の転用硯のデータを提示することには意味があると考える。風字硯を除く資料は広い時期幅を示すものではなく、ひとまずそれらを一括して調査地出土陶硯として扱い、他遺跡の出土様相との比較検討を行う。

Tab. 18　各遺跡出土の陶硯比率

遺跡名	硯総数	定型硯	転用硯	指数
藤原京左京六条三坊	31	19	12	61.3
藤原京左京七条一坊西南坪	120	2	118	1.7
藤原京右京七条一坊西北坪	76	5	71	6.6
藤原京右京七条一坊西南坪	7	1	6	14.3
平城宮東区朝堂院	125	66	59	52.8
平城宮兵部省SD3715	189	9	180	4.8
平城宮兵部省（調査地全体）	246	9	237	3.7
平城京左京五条二坊十四坪	11	11	0	100.0
大宰府政庁（全体）	204	30	174	14.7
大宰府政庁　不丁地区官衙	565	104	461	18.4
多賀城政庁地区	266	66	200	24.8



調査区出土の硯　第Ⅳ章２で報告した様に、本調査区から出土した硯は、定型硯20点、転用硯12点である。定型硯の内訳は、緑釉獣脚円面硯１点、蹄脚円面硯４点、圏足円面硯10点、風字硯１点、猿面硯４点である。また、転用硯はすべて須恵器で、杯Ｂ蓋７点、杯Ａ２点、杯Ｂ１点、盤１点、壺底部１点を数え、うち杯Ａ１点と杯Ｂ１点は朱硯として使用されている。

複数型式の定型硯について　本遺跡から出土した風字硯を除く定型硯（Fig. 143・145）のなかで、硯面径（や外堤径）が復元できるものをみるといずれも15～25cm前後にまとまる。６が14cm程度で、やや小さい。脚部片では、８・９の圏足円面硯はこれよりも小型になりそうである。また、蹄脚硯の11は小片だが、復元脚部径は35～36cm前後になり、これは大型の可能性がある。以上より、平城宮・京ほどの細分はできないものの、大型・中型・小型と各大きさの硯が存在し、中型硯が主体であることがわかる。

そして、注目すべき点は、この中型硯には大きさがほぼ同一で、緑釉獣脚硯、蹄脚円面硯、圏足円面硯の各型式が存在することであり、さらに転用硯である杯Ｂ蓋の口径や杯Ｂ、壺の脚部高台径もこの大きさに該当することである。この同法量にも関わらず複数型式の陶硯が存在することは、硯使用における階層性が表示されている可能性が考えられる。陶硯の階層性について、西口壽生は陶硯の大きさと種類が階層を表現していると考え、蹄脚硯が最上位で、圏足硯、その他の順で、転用硯が最下層に位置づけられ、「形態こそが格式であった」とした[8]。本調査地における硯の様相は、この見解を支持するものと言える。すなわち、左京六条三坊では硯を使用する場面において、緑釉獣脚硯＞蹄脚円面硯＞圏足円面硯（大）＞圏足円面硯（小）＞転用硯という階層性の存在が考えられる。また、この硯の型式差は実際の机上において、形、大きさ、色調の違いが明瞭であり、硯の階層性が視覚的にも明らかな形で示されていた可能性が高い。

硯の組成について　次に、陶硯の組成について検討する。本調査区から出土した陶硯は定型硯が多く、転用硯の出土量が少ない。明らかに時期が下る風字硯を除くと、定型硯19点、転用硯12点であり、この定型硯と転用硯の比率を定型硯／全出土硯数（定型硯＋転用硯）×100で指数化すると61.3となる。これは、従来知られている都城・官衙遺跡の組成とは異なる特徴を示す。

そこで、まず藤原京内で出土遺構や遺物から遺跡の性格が推定されている遺跡と比較する。

対象とする遺跡は、衛門府と推定される左京七条一坊西南坪[9]（飛鳥藤原第115次調査）、右京職と推定される右京七条一坊西北坪[10]（藤原宮第17・19・58-22・62・63・63-12・66-12次調査）、一町占地の邸宅とされる右京七条一坊西南坪[11]（藤原宮第49次調査）である。

これらは、出土遺物を当研究所で所蔵しており、出土土器・土製品について再度全点精査し、定型硯、転用硯を抽出し、個体識別のうえ、個体数を数えた。なお、この際転用硯の認定にあたっては、器面に墨痕が残ること、磨耗痕跡があることを根拠とし、磨耗痕跡がありながら墨痕が肉眼で観察できない資料に関しては、小田和利[12]および青木敬[13]の観察方法を参考に、20倍のルーペと100倍の実体顕微鏡を使用し、器面に残る墨痕を観察し認定した。

観察結果によると（Tab. 18）、左京七条一坊西南坪は定型硯２点、転用硯118点で指数は1.7。右京七条一坊西北坪は定型硯５、転用硯71で指数は6.6。右京七条一坊西南坪は硯自体が少なく、定型硯１点、転用硯６点で、指数は14.3である。

次いで、奈良時代の都城・官衙遺跡の出土状況と比較する。平城宮東区朝堂院では定型硯が66点、転用硯が59点で指数は52.8である[14]。平城宮兵部省の遺物を主として投棄したとみられるSD3715から出土した硯[15]は、定型硯９点、転用硯180点で指数は4.8、兵部省全体では定型硯９点、転用硯237点で指数は3.7である。平城京左京五条二坊十四坪では定型硯11点に対し、転用硯は出土していない[16]。また大宰府政庁全体では定型硯30点、転用硯174点で指数は14.7（報告書では17.2とする）である。なお、政庁前面の不丁地区官衙では、定型硯104点、転用硯461点で指数は18.4である。多賀城[17]では、政庁地区では定型硯66点、転用硯200点で指数は24.8である。大畑地区官衙では20代後半から30代、城前地区で75である。

定型硯と転用硯の出土類型　以上をみると、本調査地における定型硯の占める割合の大きさが明らかになるとともに、各遺跡の定型硯および転用硯の出土傾向の類型化が可能である（Fig. 271）。まず、本調査地のように定型硯が主体となり、転用硯よりも多く出土する遺跡（Ⅰ型）である。次に、少数の定型硯と大多数の転用硯が出土する遺跡（Ⅱ型）である。従来、都城・官衙遺跡における硯の出土のあり方として認識されてきたパターンである。これに、硯自体の出土が少ない遺跡[18]（Ⅲ型）も加えて、３つの類型に分かれる。

Ⅰ型は本調査地を代表とし、平城京左京五条二坊十四坪、平城宮東区朝堂院が該当する[19]。正殿と脇殿のコの字形建物配置がみられる官衙中枢部が多く、執務空間であると同時に儀式空間を兼ねた場とみられる点が注目される。

Ⅱ型は、平城宮兵部省や藤原京左京七条一坊西南坪（衛門府）を代表とする。兵部省では、転用硯が128点出土したSD3715からは考選木簡が出土し、武官人事を主な職掌とする兵部省における文書行政を行うにあたって、転用硯が使用されていたことを示す。衛門府でも木簡が大量に出土しており、その内容の分析から、時期は大宝元・２年（701・702）を中心として、「衛門府の事務全体を統括する部署から廃棄されたとみるのが相応しい[20]」とされる。転用硯のほとんどは、木簡と同じSX501から出土しており、同様の経緯で廃棄された可能性が高い。これらからⅡ型は官衙の現業部門や実務部門にあたる場の特徴を示すと言える。

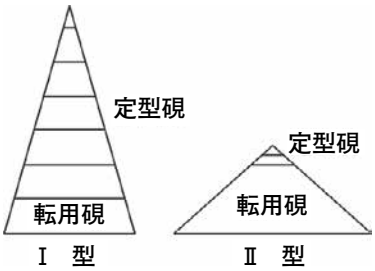


Fig. 271　硯の出土パターン

Ⅲ型は藤原京右京七条一坊西南坪である。一町占地の邸宅とされている遺跡である。このほか、一般的な集落内からも数点の硯が出土することがあり、都城・官衙遺跡以外で、硯が出土する遺跡では、Ⅲ型が一般的な出土傾向のあり方であろう。

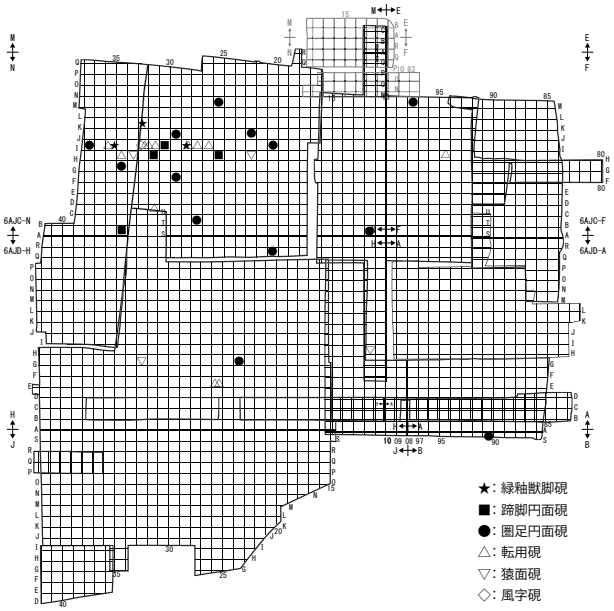


Fig. 272　陶硯の出土地分布

陶硯の出土傾向からみた本調査地の性格　以上の検討をもとに、本調査地から出土した硯について考えてみたい。硯の出土傾向は、各々の遺跡や区画内の「硯が使用された場の空間的性格」を反映している可能性が高い。本調査地はⅠ型にあたり、定型硯の占める割合が高く、さらに硯の多様な型式差、法量差により、階層性が示される場であったと考えられる。すなわち、定型硯から転用硯までを貫く形態差による階層性を視覚的にも伝わる形で表示し、執務を行う空間なのであり、転用硯（特に杯Ｂ蓋）を大量に使用し、実務的な事務処理を行う場とは性格が異なっていたことが考えられる。

本調査地における陶硯の出土位置（Fig. 272）をみると東西大溝SD4130周辺に多い傾向がみられるが、これは出土遺物全体の出土傾向と同じである。これらの陶硯が藤原京期（Ⅲ-Ｂ･Ｃ期）のコの字形建物配置をなす掘立柱建物群の内郭からはほとんど出土していない点は注目される。これらの陶硯は内郭ではなく、調査地西北部周辺で保管・管理されていたことを示している可能性がある。なお、陶硯の中で圏足円面硯の分布が他型式に比べ広がる傾向が認められるが、これが有意性をもつか否かは検討課題である。

建物配置や出土木簡の検討の結果、藤原京期には本調査地は京職、大宝元年（701）以降は左京職である蓋然性が高いと評価された。硯の出土傾向からは官衙のなかでも実務部門ではなく、「視覚的な階層差の表示」が必要となる場、という空間的性格を示しているものと言えよう。また、硯の型式差で階層性を表すことが可能となる前提条件として、各種の定型硯が入手可能であったことが挙げられる。また、硯を使う、すなわち文字を使用する機会があり、文字に熟達した人間が多数いたことも前提となる。本調査地は、「視覚的な階層差の表示」が行われる空間的性格をもち、識字層が多数存在していたこと、それらに対応できる物資が調達、搬入され、使用された場であったと評価する。

ただし、本調査地は四町占地の施設の中心部、特に正殿・脇殿など儀式・執務空間にあたり、実務部門は周囲に配置されていたことが予測される。ここでは、衛門府や兵部省と同様、少数の定型硯と大多数の転用硯が使用されていた可能性もあり、これらは本調査区周辺の今後の調査成果の蓄積を待って評価する必要がある[21]。

C　古墳時代の土器

本調査地では、古墳時代中期に位置づけられる竪穴建物を検出した。飛鳥・藤原地域は、5世紀以降渡来系の遺物が出土し、藤原宮東方官衙下層に豪族居館とみられる大型建物が検出されていることなどから、有力豪族およびそれに帰属した渡来人らによる土地開発が行われていたこと、それが6世紀後半以降この地域に宮殿が造られる前提となったと理解されている。

一方で、藤原京域においては、藤原京の造営に伴い、大規模な造成工事が行われたため、古墳時代の当地域周辺の様相は明らかでない部分も多い。本調査地で検出した竪穴建物および出土遺物は、古墳時代における当地域のあり方を探るうえで重要な資料となる。

ここでは、各竪穴建物出土土器を検討し、周辺の同時期に位置づけられる明日香村山田道第2次調査SD2570[22]と藤原宮第82次調査西方官衙南地区下層斜行溝SD3100[23]出土の土器群との比較により、時期的位置づけを検討する。山田道SD2570は韓式系土器と初期須恵器を含み、布留式新段階新相・TG232、辻美紀編年[24]Ⅱ期に位置づけられる。また、藤原宮西方官衙下層SD3100はTK73～216で、辻編年Ⅲ期に位置づけられる。

各竪穴建物出土土器のうち、特に高杯、甕、小型丸底壺に着目し、山田道SD2570、藤原宮西方官衙下層SD3100出土の各土器との前後関係を検討した。

甕の型式変化　甕は口縁部形態を分類した。①口縁端部を内側に巻き込む（山田道23・24・25：以下、番号は各報告での土器番号。）、②口縁端部を内側につまみ出し、内傾する面をもつ（Fig. 139-605、Fig. 140-616・624・626）、③口縁端部を外方につまみ出し、上方に面をもつ（Fig. 138-592・593、Fig. 140-625、藤原宮下層9・10・11・15）、④丸くおさめる（Fig. 138-585・591、Fig. 139-606、Fig. 140-622・623）、の4タイプに分かれる（Fig. 273）。このうち、①↔②↔③の型式組列を組むことができ、山田道SD2570出土土器と藤原宮西方官衙下層SD3100出土土器の先後関係からみて、変化の方向性は①→②→③とすることができる。

次に甕の長胴化傾向について径高指数（高さ/口径×100）を用いて比較する。山田道SD2570出土土器では、甕の口径は13.1cm～15.4cmとまとまるが、径高指数1.25、1.59の比較的球胴形態に近い甕の口径が13.1cm、14.2cmと小さく、1.68、1.73と長胴形態の甕の口径が15.3cm、15.4cmとやや大きい。藤原宮西方官衙下層出土土器では口径17.6cm、径高指数1.71の長胴甕と、口径10.0cm、径高指数1.02および口径11.2cm、径高指数1.13の球胴甕の二者があり、山田道SD2570出土土器で認められた長胴甕と球胴甕の二分化傾向がさらに進み、口径の大きな長胴甕と口径の小さな球胴甕という方向でセット関係が明確化することがわかる。

各竪穴建物出土甕をみると、口径の小さい球胴甕では、口径12.7cmで径高指数1.42（Fig. 139-605）、口径12.4cmで径高指数1.23（Fig. 138-592）、口径9.6cmで径高指数1.14（Fig. 138-591）と口径・径高指数ともに中間的形態を示す。口径の大きな長胴甕では口径15.4cmで径高指数1.68（Fig. 140-623）、口径15.6cmで径高指数1.82（Fig. 140-624）、口径16.0cmで径高指数1.59（Fig. 138-585）、口径16.2cmで径高指数1.56（Fig. 140-616）と山田道SD2570出土土器よりも口径の拡大および長胴化

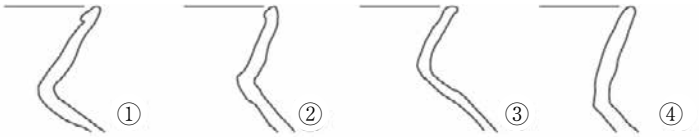


Fig. 273　甕口縁部の形態分類

Tab. 19　竪穴建物出土土器の各属性出現頻度

遺跡・遺構名	甕				高杯				高杯								小型丸底壺		
	型式				型式				杯部径高指数								くびれ高指数		
	①型式	②型式	③型式	④型式	有段	大型有段	無稜外反	椀形	20以下	20～22	23～25	26～28	29～31	32～34	35～37	38以上	60台	70台	80台
山田道下層SD2570	3				4				3	1	1						1	5	
SI4231				1			1				1							1	
SI4234																		1	
SI4230							1					1							
SI4235		1			1		2	2			1		1						
SI4236		2	1	2			2					2							
SI4232		1		1	1		1	1			1	2							1
SI4233			2	1			1												
藤原宮下層SD3100			3	1		2		2				1		1		2			

が進んでいることがわかる。

高杯の型式変化　高杯では、無稜外反高杯と椀形高杯の出現が指標となる。また、高杯全体の杯部が深みを増す傾向があり、杯部径高指数（杯部の深さ/口径×100）で示すと、山田道下層出土土器は18.7～24.3で、藤原宮下層出土土器は27.6～32.3および38（大型の有段高杯）となる。本調査地の竪穴建物出土土器は23.6～28.1の中におさまり、時期が下がるにつれて徐々に深みを増すと考えられる。

小型丸底壺の型式変化　小型丸底壺は、体部に対して口縁部が短くなる傾向にあり、くびれ高指数（くびれ高/器高×100）で表すと、山田道SD2570（30）の62.5が最も口縁部が長く、他の個体も含めると平均71.8である。竪穴建物では、完形のFig. 139-601（SI4232）が88.7で口縁部が短くなっている。Fig. 138-583（SI4231）、Fig. 139-597（SI4234）は図上復元で計測するとそれぞれ73.4、74.2となり、山田道出土土器より新しく、SI4232出土土器より古いと言える。また形態をみても、体部が丸いものから肩の張った形態へと変化し、外面調整手法もミガキ調整の省略がみられ、ハケ目調整がケズリ調整へと変化する傾向がある。

竪穴建物出土土器の時間的位置づけ　以上の各要素を、各遺構における供伴関係で整理すると（Tab. 19）、山田道下層SD2570→SI4231（・SI4234）・SI4230→SI4235・SI4236・SI4232→SI4233・藤原宮西方官衙下層SD3100という前後関係が得られる。これは竪穴建物どうしの重複関係とも整合的である。よって、竪穴建物出土土器群の時期的位置づけは、山田道下層SD2570出土土器よりも新しく、藤原宮西方官衙下層SD3100出土土器と同じかやや古い様相をもつといえ、TK73～TK216期、辻編年Ⅲ期に位置づけられる。

竪穴建物出土土器群の特徴　本調査地の竪穴建物出土土器群をみると、韓式系土器（Fig. 141・Ph. 113）の出土と、甕数点を除いて須恵器を含まない点が注目される。中久保辰夫[25]によると古墳時代中期前葉（TK73～TK216期）の土器様相として、陶質土器や初期須恵器の供膳具が供給されている集落は限定されている点、手持食器の定着は見いだせず、供膳具の主体は土師器の置食器である点を挙げ、中期後葉（TK208期）に入り須恵器供膳具（主に蓋杯＝杯H）が本格的に硬質、軟質の置食器、手持食器が入り混じった供膳具の構成に移行するとする。

本調査地の竪穴建物出土土器群では、供膳具は土師器高杯であり、陶質土器や初期須恵器の供膳具が供給されていない集落であると言える。しかし、一方で韓式系土器の出土や朝鮮半島の湖南地域に系譜が求められる両耳壺蓋の出土、カマドの定着と甑および長胴化傾向にある甕など韓式系土器の複数器種[26]が出土する様相などからは、渡来系文化の影響を受けた生活様式を復元できる。

本調査地周辺をみると、近接する高所寺池の調査[27]においても同時期の素掘井戸SE9570、溝SD9350から同様の組成の土師器高杯、甕、陶質土器大甕が出土している。また、藤原宮東方官衙下層（高殿町北部）では、5世紀後半代の棟持柱をもつ掘立柱建物が検出されており[28]、この地が香具山西麓において、中心的な位置を占める豪族居館であった可能性が高い[29]。本調査地および高所寺池で検出した遺構は、藤原宮東方官衙下層の居館を中心とした集落の周縁に居住地を配置された、渡来系の人々の居住地であると評価される。

1） 高橋透2012「藤原宮東面内濠SD2300出土土器（1）―第24次調査から」『奈文研紀要2012』。

2） 川越俊一・渡邉淳子・西口壽生2008「平城宮土器大別の検討（1）―前半期SD8600出土土器を中心に―」『奈文研紀要2008』。

3） 土師器椀Cは、成形技法や器表面の状況が非常に特徴的な土器であり、平城京域では奈良時代に多く出土する。飛鳥Vの基準資料である藤原宮東面内濠SD2300出土土器のなかには少量ではあるが椀Cの特徴を示す土器が存在しており、その出現は藤原宮期以前におくことができる（玉田芳英2012「椀C考」『文化財論叢Ⅳ』奈文研）。

4） 明日香村教育委員会1988『雷丘東方遺跡第3次発掘調査概報』。

5） 相原嘉之1999「小治田宮の土器～雷丘東方遺跡出土土器の再検討～」『瓦衣千年―森郁夫先生還暦記念論文集―』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会。

6） SE01出土土器の詳細については、明日香村教育委員会 相原嘉之氏に御教示いただいた。

7） 平城宮・京の墨書土器を分析した巽淳一郎は、役所名墨書土器について、食器を分配する役所が配布先を示すために、重ねの単位ごとに記したものと解釈した（巽淳一郎2003「都城出土墨書土器の性格」『古代官衙・集落と墨書土器』奈文研）。「香山」は役所名を示すとは限定できないが、場所・地名を表す墨書であり、供給先の明示のために墨書した可能性が高いと考える。

8） 西口壽生2003「畿内における陶硯の出現と普及」『古代の陶硯をめぐる諸問題』。

9） 奈文研2002「左京七条一坊の調査― 第115次」『奈文研紀要2002』。

10） 奈文研1976「藤原宮第17次の調査」『藤原概報6』。
1977「藤原宮第19次の調査」『藤原概報7』。
1990「右京七条一・二坊の調査（第58-17次）」『藤原概報20』。
1991「右京七条一坊の調査（第63次等）」『藤原概報21』。
1992「右京七条一坊の調査（第63-12次）」『藤原概報22』。
1993「右京七条一坊の調査（第66-12次）」『藤原概報23』。

11） 奈文研1987『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』。

12） 小田和利2002「陶硯」『大宰府政庁跡』。
小田和利2004「大宰府政庁における土器転用硯のあり方」『続文化財学論集』。

13） 青木敬2013「出土陶硯の顕微鏡観察とその所見」『奈文研紀要2013』。

14） 平城宮東区朝堂院は現在正式報告書を作成中であり、硯のデータに関しては青木敬より教示を受けた。詳細な数値については正式報告書を参照されたい。

15） 奈文研2003『平城宮発掘調査報告XIV』。

16） 平城京左京五条二坊十四坪の定型硯は蹄脚円面硯1点、圏足円面硯3点、有脚円面硯1点、風字硯3点、鳥形硯1点である。奈良市教育委員会1980「平城京左京五条二坊十四坪」『奈良市埋蔵文化財調査報告昭和54年度』。資料の実見に際しては、奈良市埋蔵文化財調査センター　三好美穂氏にお世話になった。

17） 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所1982『多賀城跡政庁跡』。

18） 硯の出土量の多寡を定量的に評価するのは難しい。硯の保有率について、定型硯所有率＝定型硯出土数/調査面積×100として指数化する望月精司の方法があるが（望月精司1998「古代の硯と墨書土器」『古代北陸と出土文字資料』）、この方法は調査面積が小さい遺跡のほうが、高い数値になってしまう点に問題があり、一定面積以上の調査が終了し、官衙などの区画や規模が明らかになっている遺跡でなければ数値化して比較することは難しい。参考までに、望月の方法で定型硯所有率を示すと、左京六条三坊は19/16,968㎡で0.11、兵部省は9/12,900㎡で0.07、大宰府政庁は30/9,710㎡で0.3。衛門府は2/3,000㎡で0.6。また、全硯数/調査面積×100とすると、左京六条三坊は31/16,968㎡で0.18、兵部省は246/12,900㎡で1.9、大宰府政庁は204/9,710㎡で2.1。衛門府は120/3,000㎡で4である。

19） この他、信濃国伊那郡衙に比定されている長野県飯田市恒川遺跡（長野県飯田市教育委員会2013『恒川遺跡群総括編』）もⅠ型に該当する。恒川遺跡では定型硯が83点に対し、転用硯が5点であり、指数は94.3となる。また、概報による集計値ではあるが、多賀城跡大畑地区や城前地区もⅠ型に該当する可能性がある（生田和宏2003「城柵官衙遺跡における陶硯の様相」『古代の陶硯をめぐる諸問題』）。これらの遺跡における定型硯の高い出土比率の背景について、各遺跡・地区の性格と関連付けて検討する必要がある。今後の課題とする。

20） 市大樹2011『飛鳥・藤原木簡の研究』塙書房。

21） なお、「陶硯の型式差による階層差の表示」がいつ出現し、どのように展開するのかについての検討も必要である。まず、藤原京期の遺跡である左京七条一坊西南坪（衛門府）がⅡ型であるから、藤原京期から既に、Ⅰ型・Ⅱ型の使い分けがなされていたことは間違いない。いつまで遡るのかについては、藤原京期より古い、飛鳥地域の各遺跡における定型硯・転用硯の定量的出土傾向の把握が進んでおらず、現状では出現時期については不明である。奈良時代に入ると、京職・左京職に匹敵する兵部省がⅡ型の陶硯出土傾向を示すことから、藤原京期から奈良時代に至る間に、省・職レベルで階層差の表示がみられなくなった可能性は考えられる。しかし、東区朝堂院ではⅠ型とみられるから、より儀礼色の濃い執務空間においては引き続き「陶硯の型式差による階層差の表示」が行われていた可能性がある。

22） 奈文研1991「山田道第2・3次調査」『藤原概報21』。

23） 奈文研1997「西方官衙南地区の調査―第82次」『奈文研年報1997-Ⅱ』。

24） 辻美紀1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室。

25） 中久保辰夫2009「5世紀における供膳器の変化と地域性」『待兼山論叢』第43号 大阪大学大学院文学研究科。

26） 今津啓子1994「渡来人の土器」『ヤマト王権と交流の諸相 古代王権と交流5』。

27） 奈文研2006『高所寺池発掘調査報告』。

28） 奈文研1985「藤原宮東方官衙地域の調査（第38・41・44次）」『藤原概報15』。

29） 藤原宮域では、宮整地層や包含層から埴輪が出土し、また宮造営によって破壊された古墳も検出されている（前岡孝彰2004「埴輪からみた藤原宮域の古墳時代」『奈文研紀要2004』ほか）。藤原宮下層の古墳時代集落の様相については今後も出土遺物の検討をふまえ、居住域や墓域の復元を行う必要がある。

3　瓦塼類

本調査区では、古代から中世に及ぶ軒丸瓦８型式100点、軒平瓦９型式83点と多様な軒瓦が出土した（Tab. 20）。発掘された当初から注目されていた吉備池廃寺同笵軒瓦以外にも、斑鳩地域で用いられた瓦や藤原宮式、大官大寺式など、古代の瓦には様々な種類が含まれることが注目される。本稿ではまず、従来注目を集めてきた吉備池廃寺同笵瓦について検討する。丸・平瓦についても本調査区出土品と吉備池廃寺出土品の比較を行う。この他、関連が考えられる他遺跡出土瓦についても言及する。続いて、軒瓦の型式別に出土遺構や分布について述べ、当地の性格を考える手がかりとしたい。

Tab. 20　本調査区出土軒瓦一覧

軒丸瓦		
型式		点数
1	山田寺式	35
2		2
3	（重文縁）	1
4	法隆寺式	1
5	藤原宮式	12
6	大官大寺式	8
7	奈良	1
8	室町	36
	中世	4

軒平瓦		
型式		点数
1	山田寺式	28
2	（重弧文）	14
3	法隆寺式	2
4	藤原宮式	10
5	大官大寺式	3
6	平安	1
7	鎌倉	6
8	室町	18
9		1

ⅰ　吉備池廃寺との関連

全型式の中で最も数多く出土した吉備池廃寺創建瓦同笵の軒丸瓦１型式・軒平瓦１型式について、吉備池廃寺出土資料と若干の比較をしておく。奈文研2003『吉備池廃寺発掘調査報告』（以下、『吉備池廃寺報告』とする。）では、本調査区を中心に出土した資料を「木之本廃寺」出土資料とし、「木之本廃寺出土例と吉備池廃寺出土例を比較すると、両者は笵傷が一致するばかりか、笵傷の大小あるいは多寡でも区別できず、胎土や焼成の具合もまったくかわらない。ことは軒平瓦でも同じだ。（中略）このように、二つの遺跡から出土する共通の瓦は、一つの瓦窯から同時に二箇所に供給されたか、一方から他方へと移送されたかのどちらかの状況を考えざるをえない。」と評価している。本報告において、「木之本廃寺」出土瓦の様相が具体的に明らかになり、ここで改めて吉備池廃寺出土瓦の特徴との比較をこころみたい。

軒丸瓦１A・1B型式の笵傷については、明瞭なものが確認できなかった。ただし、１Aについては笵傷の可能性がある部分が２箇所認められる（Fig. 274）。これが、本調査区出土資料の多数に確認できていれば笵傷とみなしてよいが、実際には残りの良好な資料は限られ、確実には言い切れない状況である。ただし、この「笵傷」は、吉備池廃寺ＩAには存在しない。

丸瓦先端の加工は、本調査区内では1A・1Bともに丸瓦の凹面を斜めに削って楔形にする点で共通し、キザミは1Aにはみられず、1Bはあるものとない

Fig. 274　軒丸瓦１A（左）と吉備池廃寺ＩA（右）の同箇所比較

ものが拮抗する。また、笵に瓦当粘土を詰める工程の中で、瓦当裏面に丸瓦を接合するものが1Bのみにみられる。一方、吉備池廃寺では、丸瓦を楔形にする点は共通するが、キザミはＩＡ・ＩＢともに存在する。ただし、ＩＡはキザミのないものが圧倒的に多く、主体は1Aと変わらないと言える。

笵に瓦当粘土を詰める工程の中で、瓦当裏面に丸瓦を接合するものはＩＡ・ＩＢ共に認められない。胎土、焼成について、1Aは砂粒が少なく、灰色で比較的硬質の焼成であるものが主体だが、ＩＡは石英、長石を多く含み、表面暗青灰色で内面が赤褐色を呈するグループと、含有粒子が少なく灰色を呈するグループの2者が存在する。出土地が違えば色調や磨滅具合等、異なることも考えられるが、ＩＡのうち前者は1Aの中には明らかにみられないグループである。1Bも1A同様、含有粒子が少なくやや硬質の焼成であるものが大多数を占めるが、ＩＢは石英、長石を多く含む焼成軟質のグループ、雲母を多く含む焼成軟質のグループ、含有粒子の少ない焼成硬質のグループが存在する。ただし、一つの瓦窯でも胎土や焼成が多岐にわたる可能性はあり、本調査区出土資料と吉備池廃寺出土資料にみられるこれらの違いの評価については、資料数の少なさもあり慎重にならねばならない。

次に軒平瓦についてであるが、瓦当の残りの良い資料が、本調査区1Aで10点あまり、1Bで3点、吉備池廃寺ＩＡで3点、ＩＢで1点と非常に少ない。笵傷についてはすでに詳細な検討があり（『吉備池廃寺報告』）、本調査区出土資料と吉備池廃寺出土資料の笵傷進行段階は全く同じである。胎土、焼成についても差があるとするには資料数が少なく、判断が難しい。施文順序については、1Aのうち右から左へと押捺されるものが5点、逆が2点である。一方、吉備池廃寺ＩＡでは左から右へと押捺されるものが2[1]点で、逆は確認できなかった。かつて「吉備池廃寺出土資料では、単位文様はほとんど常に、右側（以下、左右は、瓦当面を見た状態でいう）の単位文様が左側のそれを潰している。したがって、施文は、瓦当面を上にして逆時計回りに押捺を繰り返している、と判断してよい。」（『吉備池廃寺報告』）と報告したが、吉備池廃寺出土資料は少なく、施文順序の傾向をみてとることが難しい。一方、1Aについては、本調査区付近出土資料とあわせても、右から左への押捺がやや優位とみてよいだろう。そして、押し型よりも幅の狭い瓦当面に押捺した結果、唐草文の葉側よりも茎側が大きく切れているものが多いことが注目される。このことから、1Aの押し型押捺の際には、唐草文の葉側をなるべく瓦当面におさめるべく、葉が下に来る向きに押し型を持って粘土円筒の手前から（または、葉が上に来る向きに押し型を持って粘土円筒の奥から。）時計回りに押捺していった可能性を考えてよいのではないだろうか。そして、若干存在する逆方向のものについても、唐草文の茎側の方が切れているので、同様の方法で押し型を持って、反時計回りに押捺した可能性が考えられる[2]。

本調査区で出土した吉備池廃寺同笵軒瓦については、点数では吉備池廃寺よりも少ないものの、瓦当の残りが良好な資料が多い[3]。上記で述べた軒瓦の特徴の異同とあわせて、両者の関係を考えるうえでの一つの材料になるだろう。

『吉備池廃寺報告』では、丸・平瓦の共通性についても若干ふれられ「一つの瓦窯から同時に二箇所に供給されたか、一方から他方へと移送されたかのどちらかの状況を考えざるをえない」と評価している。今回、改めて整理した丸・平瓦と、吉備池廃寺創建期丸・平瓦を再度比較しておきたい。

吉備池廃寺の創建期丸瓦は、大型の玉縁式で、凸面に叩き目を残さないものである。凹面段部の形状を指標にA・Bに細分しており、Aは段部凹面がほぼ直角に屈折し、Bは段部凹面が緩やかに屈曲するものである。これを今回の分類基準（128頁）にあてはめると、吉備池廃寺1Aは本調査区丸瓦Ⅱ類（段部ア）（一部アとイの中間の屈曲。）、吉備池廃寺1Bは本調査区丸瓦Ⅱ類（段部エ）に相当する。法量や調整技法、胎土、焼成などを比較しても大差ない。本調査区における丸瓦Ⅱ類（段部エ）の出土数は、丸瓦Ⅱ類（段部ア）よりも格段に少なく、その点でも吉備池廃寺の様相と似る。

吉備池廃寺の創建期平瓦は、厚さ約2㎝以上の「厚手」の1類と、厚さ約2㎝未満の「薄手」の2類に大別される。2類はさらにA：凸面の叩き目を残さないもの、B：凸面調整せず平行叩きを残すもの、C：凸面調整せず格子叩き目を残すもの、に細分できる。1類平瓦は凹凸面ともにナデ・ケズリ調整を施して叩き目をほとんど残さず、側面調整は基本的にｃ手法、という特徴をもつ。この点においては、本調査区の資料にも共通するものが多く存在する。しかし、吉備池廃寺1類には焼成や色調にまとまりがみられず、同様の資料を本調査区資料の中に特定するとなると難しい。特に、本調査区の資料は小片が多いため、全長や広端幅、狭端幅などの法量を比較できる資料も限られる。ただし、全長の判明する資料がSK4325から2点出土し、それぞれ47.2㎝と45.6㎝を測る。吉備池廃寺で出土した平瓦1類（41.5㎝～42.7㎝）よりも大きいが、いずれもきわめて大型という特殊性は共通すると言えよう。

2類平瓦のうち、Aについても、1類と同様の理由で同様の資料を、本調査区の中で特定することが難しい。Aは凹凸面とも丁寧に調整して凹面に布目痕跡が残らず、側面調整がｂ手法やｃ手法、胎土は石英、長石、雲母、クサリ礫の粒を含む緻密なもので、焼成はやや甘いものと硬質のものがある、という特徴をもつ。本調査区でもその特徴に当てはまる資料は存在するものの、この特徴が吉備池廃寺出土瓦に限定的であるのかは明らかでない。

一方、BとCについてはある程度の特定が可能である。吉備池廃寺出土の平瓦2類Bの特徴として、凸面はごく稀に軽いナデ調整が入る程度で、ほとんどが叩き目を明瞭に残すことがあげられ、本調査区でも同様である。叩き板の細分を照らし合わせてみると、吉備池廃寺の「1㎝あたり3～4本程度の細い刻線をもつ叩き板」は本調査区平瓦Ⅰ類C10、同「刻線がやや太い叩き板」は同C4に、同「間隔がやや広く刻線が太い叩き板」は同C3と同C7に非常に似る。ただ、吉備池廃寺の「1㎝あたり7本前後のごく細い刻線を入れる叩き板」はFig.107で示した本調査区SD4130中層出土資料の叩き目に近く、木目の目立つ無文叩き板と理解した方がよいかもしれない。このほかの属性については、吉備池廃寺の側面調整がｃ0かｃ1、厚さが1.4～2.0㎝であるのに対し、本調査区資料は側面調整がｃ0かｃ1、厚さが1.6～1.9㎝のものが主体、と非常に近い。次に、吉備池廃寺出土の平瓦2類Cについてであるが、叩き板イ～トの7種類確認している。各分類の詳述は控えるが、ロは本調査区平瓦Ⅰ類A3に、ハは同B6に、ニは同B4に、ホは同B22に[4]、トは同B8に相当すると考えられる。イとヘについては、本調査区の資料中に似た叩き目はあるものの、双方いずれかの資料の残存状況が良好でなく、特定は難しい。このほかの属性については、吉備池廃寺の側面調整がc0、厚さが1.2㎝前後の薄いものが多い、というのに対し、本調査区資料は側面調整がc0、厚さが1.3～1.5㎝のものが主体、と非常に近い。

以上、本調査区と吉備池廃寺出土の丸・平瓦を比較してきたが、本調査区で出土した多様な

丸・平瓦の中には、やはり吉備池廃寺創建丸・平瓦と共通するものが存在すると言える。しかも、吉備池廃寺創建丸・平瓦のバラエティーの大部分を含んでいるとみてよい。

Fig. 275　本調査区出土溶着資料

ここでもう一つ、注目すべき資料として、焼け歪んだ瓦、溶着瓦がある（Fig. 275）。焼成後に被熱したというよりは、焼成時の失敗品とみられ、吉備池廃寺と、本調査区のいずれからも出土している。吉備池廃寺の発掘調査が行われる以前は、吉備池廃寺で表面採集された溶着瓦が、当地を木之本廃寺所用の瓦窯と推定する根拠の一つであった。本調査区でも、遺構や包含層において焼け歪み瓦が散見され、特に土坑SK4325ではまとまって出土している。この資料の特徴は、粘土板桶外巻き作り、凹凸面を丁寧にナデもしくはケズリ調整し、側面調整はｃ1、色調は灰色（N4/0）、焼成は硬質で胎土に石英、長石、褐色粒を含み、厚さ1.5～1.9㎝という非常に均質なものである。一方、吉備池廃寺出土の焼け歪み瓦は、硬質の焼成や調整などは非常に似るが、厚さが2.5㎝前後のものと分厚いもので、本調査区のものとは異なる。焼け歪み瓦については、双方で全く異なる特徴をもつと言えよう。

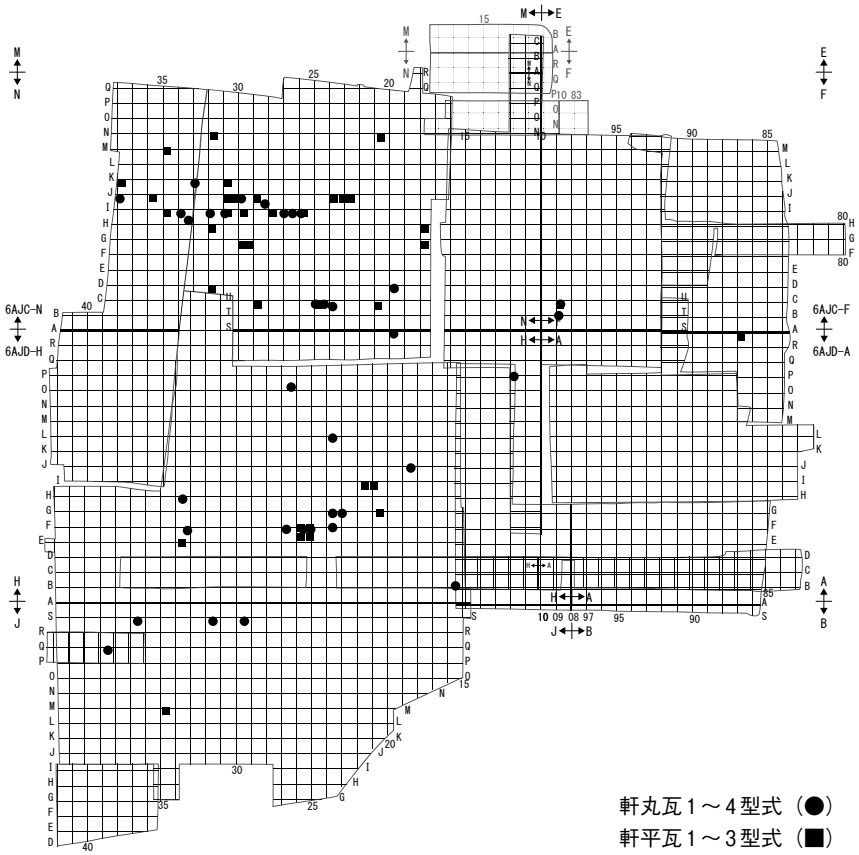
ⅱ　他寺院との関連

本調査区で出土する丸・平瓦には、吉備池廃寺にはみられない瓦も多く存在する。たとえば、近隣の左京七条二坊で出土し、小山廃寺所用瓦と推定した平瓦と同一の叩き目をもつものや、同じく小山廃寺所用平瓦に特徴的な、凸面に布目をもつものが一定数出土した。また、大官大寺と同笵軒瓦は9点、長林寺、法輪寺といった斑鳩地域の寺院の瓦が3点出土している。丸・平瓦については、特徴的な資料しか特定することができなかったが、他にも他寺院の所用瓦であったもの（または、所用瓦として製作されたもの。）が、一定数含まれるとみてよいだろう。

ⅲ　瓦の出土分布・出土遺構

本調査区の遺構変遷と各時期における施設の復元については既に述べたとおりである（第Ⅵ章1参照。）。各期を通じて、礎石構造の建物が検出されなかったにもかかわらず、瓦は一定数出土している。これらは屋根の一部、もしくは小規模な建物に葺かれていたと考えるのが自然であるが、まずはどの時期の建物と関連が深いのかを探るため、本調査区における軒瓦の分布状況をみておく。

軒丸瓦1～4型式と軒平瓦1～3型式、軒丸瓦5～7型式と軒平瓦4～6型式に大きく分けて分布をみたものが、Fig. 276である。いずれも、調査区の西側に分布が偏り、特に、西北部に集中する特徴がよく似る。平瓦についてみても（Fig. 277）同様の状況で、特にSD4130からの出土量が目立つ。



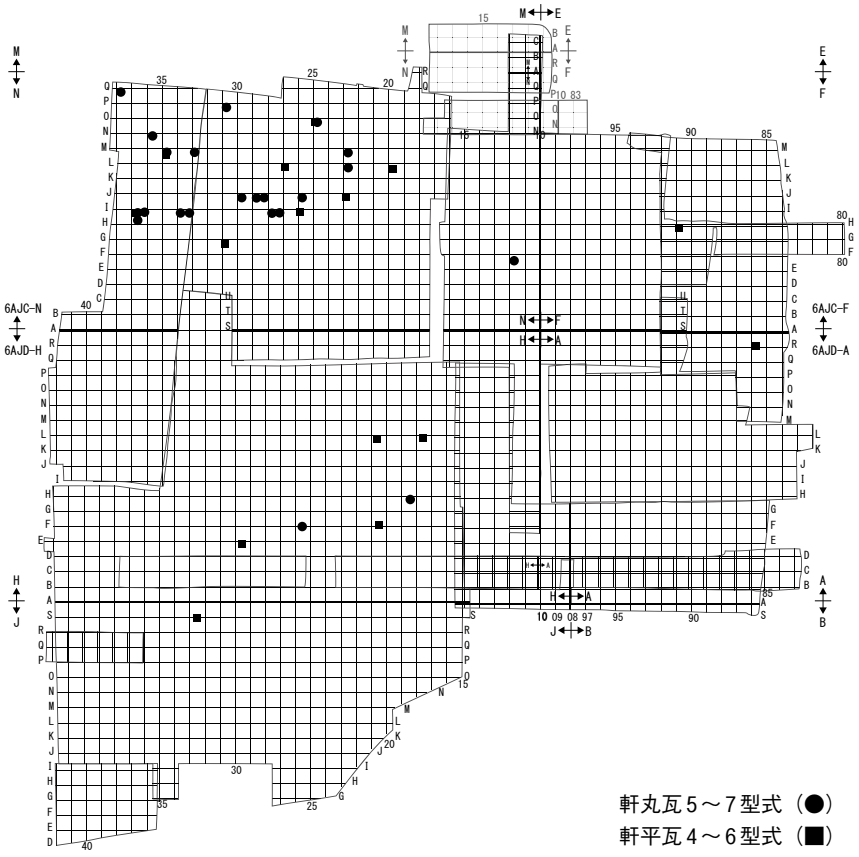


Fig. 276　軒瓦の分布

丸　瓦

平　瓦

Fig. 277　丸・平瓦の分布（重量）

Tab. 21　主要遺構出土の軒瓦

遺　構	型式	軒丸1･軒平1 山田寺式	軒平2 （重弧文）	軒丸3 （雷文縁）	軒丸4 法隆寺式	軒丸5･軒平4 藤原宮式	軒丸6･軒平5 大官大寺式	軒丸7 奈良	軒平6 平安
SK4270		2							
SD4139		1							
SD4131		1							
SK4325		6				1			
SE4740			2			1			
SD4130下層		3							
SD4130中層		8	1			5		1	
SD4130上層		6	4		1	6			
SE4460							1		
SX4500		1							
SE4790						1			1
SE5055		1					2		
SK4734			1						
SK4796							1		
SK5015			1	1			1		

このような瓦の分布状況と、遺構変遷の状況を照合したうえで留意される点について述べておく。まず、本調査区で一定数出土し、吉備池廃寺と同笵の軒瓦１型式についてみると、製作時期に近いⅡ期の遺構の分布範囲とは必ずしも一致しない。そもそもⅡ期の遺構は、集落とも理解される掘立柱建物群であり、瓦の使用は一般に考えにくい。続いて、同様に一定数出土した藤原宮式軒瓦の分布集中範囲をみると、Ⅲ-Ａ期（藤原京造営期）におかれる東北坪の施設の位置と重なり、強い関連がうかがわれる。実は、両者とも分布範囲が西北部に偏り、なかでもSD4130からの出土が目立つことから、当該溝が廃棄場所として利用された可能性が考えられる。

ここで、年代が絞り込める主な遺構から出土した軒瓦をみておく（Tab. 21）。SD4130での出土層位をみると、下層よりも奈良時代以降の中・上層から多く出土していること、軒瓦１型式と藤原宮式軒瓦が共伴していることが注目される。７世紀代の軒瓦が、奈良時代、平安時代にも分散して廃棄されたのか、または、溝底の撹乱によって下層の堆積時期に廃棄された瓦が中・上層に混入したのか、評価は難しい。Ⅲ-Ｂ期の建物建設時のゴミ捨て穴と評価できるSK4325からも、軒瓦１型式と藤原宮式軒瓦が一緒に出土しており、廃棄の時点で両者が共存していたことになる。他の遺構でも、軒瓦１型式と藤原宮式軒瓦の共伴が認められ、両者の廃棄の時間差はないとみてよい。

以上の瓦の出土状況からは、本調査区では様々な型式の瓦が、Ⅲ-Ａ期に東北坪の施設付近に集められ、Ⅲ-Ｂ期以降、SD4130を中心に廃棄された、という解釈が成り立つ。東北坪の施設の建物の屋根をかざったのか、または、東北坪の施設付近に集積されただけなのかなど、具体的な利用状況を絞り込む手掛かりを得ることはできなかった。遺構のあり方からは、藤原京期に京内官衙の存在がうかがわれるが、瓦の出土状況からその建物に瓦が葺かれた可能性を判断することは難しい。

１） 文様の重複から確認できる資料数に限る。押捺の重心からの判断は保留した。

２） 押捺は片手とは限らず、両手を用いる場合もあっただろう。その場合、反時計回りでなくても問題ない。

３） 吉備池廃寺軒丸瓦の総重量を総点数で割ると0.12kg、本調査区出土資料は0.22kg。

４） ホは刻線どうしが45° 前後の角度で交差する、とあるが、実際は60° ほどの角度をなし、本調査区斜格子ｗに相当するとみてよいだろう。

4　文字資料からみた調査地の性格

藤原京左京六条三坊にあたる本調査地（以下、調査地とする。）からは、Ⅰ期からⅥ期にいたる遺構のうち、Ⅲ期（藤原京期）、Ⅳ期（奈良時代）の遺構を中心に、木簡28点、墨書土器134点、刻書土器3点が出土している（第Ⅳ章2・6）。本節では、これらの出土文字資料を主たる素材として、その他の関連史料も参照しながら、調査地の性格を探ってみたい。

A　香山正倉をめぐって

「香山」の墨書土器　出土文字資料のうち、調査地の性格を暗示する固有名詞として、「香山」「左京職」「菜採司」があげられる。このうち最も大きな注目を集めてきたのは、「香山」（「香」や「山」も含む。）と墨書された22点の土器である。香山は調査地のすぐ東側にある香具山[1]のことで、耳成山、畝傍山とあわせて大和三山を構成する。なだらかな山間をなす香具山は、耳成山や畝傍山の様な独立性には乏しいが、6世紀に大王宮が営まれた磐余や、7世紀に大王宮が営まれた小墾田や飛鳥に近いこともあり、聖なる山として重要視された[2]。

香山の墨書土器は、東西大溝SD4130と井戸SE4740から出土している。基本的に平城宮土器Ⅲ段階に位置づけられる墨書土器で、8世紀中頃のものである。調査地の西北隅部（第50次調査西区）で奈良時代（Ⅳ期）の倉庫とみられる総柱建物SB5050を検出していること、調査地が香具山の西麓に立地することもあわせて、天平2年度（730）大倭国正税帳[3]に登場する「香山正倉」に関わるとする見方が広く受け入れられている[4]。

しかしながら、奈良時代の調査地に香山正倉、あるいはその関係機関が置かれていたという見方は、果たして盤石であろうか。従来、上記の様な見方を前提とした上で、その前段階の藤原京期の性格が議論されてきたが、再検討する必要があると考える。

以下、時間的推移と少し逆行することになるが、最初に奈良時代における香山正倉との関連性の有無について検討を加え、そのうえで藤原京期を中心に調査地の性格に迫ってみたい。

ⅰ　大倭国正税帳の「香山正倉」

前述のとおり、8世紀中頃の「香山」墨書土器の大量出土、奈良時代の総柱建物SB5050の検出もあって、調査地は天平2年度（730）大倭国正税帳に記載された香山正倉と関連づけられてきた。本項では、この様な見方が妥当かどうかを検討してみたい。

大倭国正税帳　現在、大倭国正税帳は5つの断簡に分断されており、完全な状態では残っていない。仮に『大日本古文書一』396～413頁の配列に従って、断簡Ａ～Ｅと呼んでおこう。本正税帳は，大倭国の管轄する14郡[5]の総計を記した首部（断簡Ａ･Ｂ）と、各郡の状況を記した郡部（断簡Ｃ～Ｅ）に大別される。このうち首部は、最末尾の付近のみ断簡Ａ･Ｂが連続する形で残存する。郡部は、平群・十市・城下・山辺・添上の5郡のみ完存で、添下・広湍（広瀬）・城上の3郡は一部残存、葛下・葛上・忍海・宇智・宇陀・高市の6郡は完全に欠損する。

問題の香山正倉は、首部にあたる断簡Ａの2箇所に登場しており、その関係箇所を引用しておきたい。なお、数字は大字が使用されているが、ここでは便宜的に小字に置き換えた。

（前　　欠）

養老二年検欠穀一千四百五十九斛五斗四升三合

　頴稲三千三百二十一束八把半

養老四年検欠**香山正倉**穀一百七十二斛七斗七升

宇智郡欠頴一千二百五十六束

養老七年検欠**香山正倉**穀二百五十九斛七升

これらは、養老2年（718）、同4年、同7年の3箇年にわたる正税の穀・頴稲を検査した際に発生した欠損量について記した部分にあたる。養老2年よりも前は欠けているが、少なくとも霊亀2年（716）にも検欠穀があったことは、断簡Ｅの添上郡における記載からみて間違いがない。一方、養老7年から天平2年までの間に検欠穀が発生していないことは、首部の残存状況からみて明らかである。この様に正税の検欠穀という形ではあるが、少なくとも養老4年（720）から同7年にかけて、香山正倉が存在したことが確認できる。

さて、調査地が香山正倉に関係するという見通しは、木簡の検討からも得られる。すなわち、香山墨書土器が出土した東西大溝SD4130からは、①霊亀3年（717）と養老年間（717～724）の収納に関わる「収霊亀三年　養□」という記載をもつ木簡や、②稲の出納状況を記したとみられる「□斤得三束〔遺カ〕□二束」という記載の木簡が出土している。同じく、③「百廿七束一〔把カ〕□」や、④「斗四升」の様に、稲や米の数量を記したと解される木簡も出土している。①～④は米・稲などを出納する際に使用されたとみられる木簡であり、すぐ近くに倉庫があったことを推測させる。とりわけ、①に書かれた年紀が、大倭国正税帳から確認される香山正倉の存置期間と近接することは注目に値する。さらに「小豆」や、銭に関わる「十八文」と書かれた木簡が出土しており、さまざまな資財を管理していたことをうかがわせる。また、税物に装着された荷札木簡もあり、調査地もしくはその近辺に何か公的機関が置かれていたとみられることも、調査地が「正倉」関連施設という見方の傍証となるであろう。

香山正倉の所在地　しかし一方で、調査地を香山正倉に比定するうえで気がかりな点もある。まず、調査地が香山正倉の所在地であれば、たくさんの倉庫が建ち並んだはずであるが、現状では1棟の倉庫（SB5050）しか検出されていない。ただし、未調査区、特に調査地の西北方に多数の倉庫が並んだ可能性も皆無ではないので、ここでは不問にしておく。

それ以外で特に問題としたいのは、香山正倉の所在郡に関してである。現存の大倭国正税帳では、香山正倉は首部のみに登場し、残存する郡部では確認できない。香山正倉の所在地は、その名称から香具山の近辺にあったと考えられ、十市・高市の2郡がその候補地となる。このうち十市郡については、郡部に記載が完全に残されているものの、香山正倉における検欠穀のことは何ら記されていない（首部にも記載のあった養老2年の検欠穀の場合、十市郡の郡部でも記載が確認される。）。このことは、香山正倉が十市郡には置かれていなかったことを物語る。したがって、もうひとつの候補地である高市郡に香山正倉が所在したと考えなければならない。

それでは、調査地は高市郡に属していたのであろうか。実は、調査地の周辺は高市郡と十市郡の郡界付近に位置しており、調査地がいずれの郡内にあったのか、その判断は難しい。近世以降、調査地が十市郡に属していたことは間違いないが、それ以前、特に古代においてはどうであったのか。この問題を考えるために、次の2点に着目してみたい。

畝尾都多本神社　第一に着目したいのが、調査地のすぐ北に隣接する畝尾都多本神社である。この神社は『延喜式』神名式上6条の大和国十市郡の項に登場する式内社である。『古事記』上巻・火神被殺段には、伊邪那岐命が伊邪那美命の死を悲しんで流した涙から「泣沢女神」が生まれ、「香山の畝尾の木本に坐す」という伝承が載り、これが畝尾都多本神社にあたると考えられている[6]。「香山の畝尾の木本」という立地は、現在の畝尾都多本神社にふさわしい。

神社はしばしば移動するので、現在の神社の所在地を積極的な根拠とすることはできないが、調査地が十市郡に属すると考えるのに有利な素材であることは否定できない。仮に神社が移動したのだとしても、「香山の畝尾の木本」が古代に十市郡に属していたことは確実であるので、そうした立地にある調査地が十市郡に含まれていた可能性は十分にあると言えよう。

ところで、現在の畝尾都多本神社の一帯には、古代寺院（仮称「木之本廃寺」）が存在した可能性が指摘されている。それは、調査地とその周辺において、吉備池廃寺（桜井市）と同笵の瓦が多くみつかったことなどによる（第Ⅳ章1）。調査地内に寺院跡を示す遺構は検出されていないため、未発掘である現在の畝尾都多本神社の一帯に、木之本廃寺の伽藍が推定されることになった。この木之本廃寺の寺名として、舒明天皇11年（639）に発願された百済大寺が有力視されたこともある。しかしその後、香具山の北東に位置する吉備池廃寺の発掘調査が行われ、これこそが百済大寺であることが判明する[7]。そこで、木之本廃寺は百済大寺以外の寺院を考える必要性が生じることになり、その候補のひとつとして高市大寺の名があがっている[8]。

高市大寺は百済大寺の後身寺院で、天武天皇2年（673）に百済の地から移転された。天武天皇6年、高市大寺は大官大寺に改称される。そして文武朝（697-704）には、大官大寺は別の場所（藤原京左京九条四坊の南半二町、同十条四坊の四町。現在の明日香村小山。）に新設される。吉備池廃寺の調査所見によって、百済大寺は建物ごと高市大寺に移築したと考えられているので、同笵瓦が多数出土する木之本廃寺は確かに高市大寺の有力な候補地といえよう。もし木之本廃寺を高市大寺に比定してよいとすれば、「高市」の名を冠する以上、調査地の一帯は十市郡ではなく高市郡であった可能性が高まることになる。

しかしながら、木之本廃寺を高市大寺とみるのは難しいであろう。調査地とその周辺部で寺院遺構が検出されていないことに加え、『日本三代実録』元慶4年（880）10月20日条が大きな障碍となるからである。元慶4年条には、大安寺からの申請を受けて、百済大寺の旧地であった「大和国十市郡百済川辺田一町七段百六十歩」と、高市大寺[9]の旧地であった「高市郡夜部村田十町七段二百五十歩」を、大安寺に返還したことが記されている。さらに、大安寺の申請には、百済大寺を天武天皇が「高市郡夜部村」に遷したことも記されている。

これらの内容から、高市大寺の伽藍と寺田は高市郡夜部村に所在したことが判明する。夜部村の場所は、桓武天皇の即位時に流布した童歌の「大宮に直に向かへる野辺（山辺）の坂[10]」の解釈をもとに、藤原宮の南正面に位置する日高山丘陵の坂を含む一帯とみる説が有力である[11]。夜部村の広がり具合にもよるが、調査地までもが夜部村に含まれていたことを示す積極的な根拠はない。したがって、木之本廃寺を高市大寺にあてることは難しいであろう。

喜殿荘関係史料　第二に着目したいのが、高市郡から十市郡にまたがって展開した喜殿荘[12]の関係史料のひとつ、承保3年（1076）9月10日付の大和国高市郡司并在地刀禰等解案である（『平安遺文三』1134号）。喜殿荘は「豊瀬庄」とも呼ばれ、11世紀前半に大和守を3度歴任した源頼

親が国守在任中に田畠山野池堰などを私領化したもので、子の源頼房に相伝された。その後、延久6年（1074）8月、源頼房の女子である小野とその女婿とみられる高階業房に処分されたが、女子分をめぐって争論となったため、業房を通じて摂関家領荘園として立券されることになった（以上、『平安遺文三』1132・1133号なども参照。）。

承保3年の解案には、条里坪付が次の様に記されている。

高市郡東廿四五六七条、以一里為女子分。業房朝臣領、東廿四条二里、同廿五条二里、同廿五条二里、東廿八条一里・二里・四里、十市飼条一里、同廿六条、同廿九条、高市廿九条一二三四里、同卅条一二三四里、同卅一条一二三里等、処分業房朝臣既了。

本史料は案文の写しということもあり、「業房朝臣領」において「同廿五条二里」が2度登場するなど、明らかに誤写が含まれている。また「十市飼条一里」という記載についても、その解釈がとても難しい部分である。これに関しては、大脇潔が興味深い解釈を提示している[13]。

大脇は、明治年間の地図をもとに、十市郡が高市郡側に大きく食い込んでいる部分がいくつかある点に着目する。「飼」は「餘」の誤写であった可能性も踏まえ、「飼条」あるいは「餘条」は、高市郡側に十市郡が食い込んだ土地を指す用語であったと考える。そして、「十市飼条一里」の具体的な場所については、高市郡の東24条から31条までは連続して1里に所領が含まれることから、それ以外の場所であるとし、高市郡路東24条1里の北、横大路で十市郡と分けられた、その北に位置する十市郡路東24条1里が該当すると推定した。さらに、「十市飼条一里」に続く「同廿六条、同廿九条」についても、前者は高市郡路東26条3里に十市郡が食い込む部分に、後者は高市郡路東29条4里に十市郡が食い込む部分にあたると推定した。

大脇が「憶測」と述べている様に、さらに検討の余地が残された推定ではある。しかし、それが当を得たものであれば、高市郡路東26条3里に十市郡が食い込む部分こそ、調査地の所在地に他ならない点は見逃せない。このことは、11世紀後半段階には調査地が十市郡に属していたことを示す史料的根拠となるのである。

郡界は必ずしも固定的なものではないが、調査地に関していえば、十市郡に属することを示す史料はあっても、高市郡に属することを示す史料は皆無である。完全な証明はできないが、8世紀においても十市郡に属したと考えるべきではなかろうか。そうであれば、香山正倉は十市郡には所在しない以上、調査地を香山正倉に比定する見解は再考する必要がある。

ⅱ　香山正倉と小墾田宮

あらためて振り返ってみると、調査地を香山正倉にあてる積極的な根拠は意外に乏しいことに気が付く。まず、香山墨書土器に関しては、調査地に香山正倉とは別の施設があったとしても、東隣の香具山にちなんで「香山○○」（○○は施設名。）と呼ばれたことは十分に考えられる。次に、奈良時代の倉庫（SB5050）にしても、倉庫を付属させた施設は特に珍しくないため、あえて正倉の一部であると考える必要はない。いかなる性格の施設であれ、1棟でも倉庫がある以上、米や稲などの出納に関わる木簡が出土しても特に不自然ではないからである。さらに、正倉は固有名詞で呼称されることは通常なく、その意味で香山の名を冠する本正倉は極めて特異である。これは香山正倉が由緒ある正倉であったことを示唆する。しかし、検出された倉庫は奈良時代になって新造されたものであり、古くまで遡るものではない。くわえて、正倉とい

えば、通常は数多くの倉庫が整然と建ち並ぶことになるが、現状では確認されていない。

そこで、香山正倉を新たな視点から考え直す必要がでてくる。香山正倉が由緒ある正倉であったと解されることから、現在有力視されているのが、高市皇子（天武天皇の第一皇子）の香具山宮に関わる施設という見方である。しかし、こうした見方は次のＢ項で成立困難であることを述べるので、ここでは別の可能性についてふれることにしよう。

香具山周辺の施設　さて、香具山の周辺に目を向けると、王家と深い関わりのある施設が多数存在する点が注目される。第一は大王宮である。香具山の北東の一帯には磐余の諸宮（磐余稚桜宮、磐余甕栗宮、磐余玉穂宮、磐余池辺双槻宮、訳語田宮、百済大井宮、百済宮など）があり、南側には小墾田宮があったと考えられる。また、香具山の西側には藤原宮も存在する。第二は皇子宮[14]である。高市皇子の香具山宮がよく知られるが、磐余には大津皇子の「訳語田の舎」があり、南方の雷丘の近くには忍部皇子の宮もあった。そして後述する様に、穂積皇子宮も香具山の北麓に所在した可能性が高い（いずれも天武天皇の皇子）。第三は天皇の勅願寺ともいうべき大寺である。香具山の北東には百済大寺（吉備池廃寺）が、南方には大官大寺が伽藍を構えた。高市大寺も南から南西にかけての一帯（有力なのはギヲ山の西隣。）に比定されている。

この様に香具山周辺には、大王宮、皇子宮、大寺など、王家に関わる施設が集中している。香山正倉の由来を考える際には、高市皇子の香具山宮に限定することなく、これら王家にまつわる種々の施設にも目を向ける必要があろう。前述のとおり、香山正倉は高市郡に所在したと考えられる。また香山の名を冠する以上、香具山と近距離の場所にあったと推定される。この2点を踏まえると、小墾田宮（小治田宮）の倉庫に由来する可能性が浮上してくる。

小墾田宮の倉庫と屯倉　小墾田宮は推古天皇の正宮（603-629）として著名であるが、推古天皇の没後も関係史料が散見し、少なくとも天平神護元年（765）まで存続したことが文献で確かめられる（『続日本紀』同年10月辛未条）。1987年、飛鳥川東岸にあたる雷丘の東南麓（雷丘東方遺跡）の井戸から、8世紀末から9世紀初頭頃の「小治田宮」と墨書した土器がまとまって出土した[15]。この発見は、飛鳥川西岸の豊浦寺北方に小墾田宮を推定してきた従来の見方を一新するとともに、この宮が平安時代初頭まで存続することを教えてくれた。雷丘東方遺跡では7世紀後半から9世紀にいたる遺構も確認しており[16]、この一帯に小墾田宮があった可能性は高い。当地は香具山の南方約1㎞にあたる。

もちろん、推古朝から平安時代初頭にいたる過程において、小墾田宮が何度か建て替えられたことは確実であり、宮殿の規模が縮小したり、中心施設の場所が移動したりする様な事態も十分にある。したがって、小墾田宮の所在地を雷丘東方遺跡の狭い範囲だけで捉えるのでなく、飛鳥川右岸、香具山以南、飛鳥寺以北の比較的広い範囲を視野に入れておく必要があろう。

さて、推古天皇以後の小墾田宮で特徴的な点として、大規模な倉庫の存在があげられる[17]。すなわち、天武天皇元年（672）の壬申の乱の際、大友皇子方の穂積臣百足が「小墾田兵庫」から武器を近江国に運び（『日本書紀』同年6月己丑条）、天平宝字4年（760）に淳仁天皇が小治田宮へ行幸した際には、播磨国の糒1000斛、備前国の糒500斛、備中国の糒500斛、讃岐国の糒1000斛を小治田宮に貯えたり、諸国の当年の調庸を収めたりしている（『続日本紀』同年8月辛未条、同乙亥条）。

これに関連して、『日本書紀』朱鳥元年（686）7月戊申条の「雷、南方に光りて、一たび大き

に鳴れり。則ち民部省の蔵庸舎屋に天災けり。或いは曰はく、忍壁皇子の宮の失火延りて、民部省を焼けり、と。」という記事も注目されよう。忍壁皇子宮からの失火によって、「民部省」（正しくは民官。）の「庸」（正しくは養。仕丁らの資養物。）を収納する倉庫が焼けたことをうかがわせる。『万葉集』巻2-235番歌によって、忍壁皇子宮は雷丘の近くに営まれたと推定されるので[18]、民官の倉庫も雷丘の近くにあったと考えられる。雷丘の近くに小墾田宮が立地していることからすれば、民官の倉庫は小墾田宮の倉庫（の一部）に由来する可能性は十分にある。

この様に7世紀後半から8世紀後半にかけて、小墾田宮には大規模な倉庫群があったと考えられる。もちろん、推古天皇の時代である7世紀前半段階も、そこが正宮であった以上、多くの倉庫が立ち並んだことは疑いがない。

さらに遡ると、6世紀半ばに紗手媛（安閑天皇の妻）に賜与されたと伝わる「小墾田屯倉」（『日本書紀』安閑天皇元年10月甲子条）との関係も考えることができる。この点については、山本崇による重要な指摘がある[19]。すなわち、小墾田宮は王家の直轄地である小墾田屯倉の周辺所領を取り込んで造営され、飛鳥川の右岸、雷丘周辺から香具山南方までに及んでいたと考える山本は、『日本霊異記』上巻第3縁に残された、飛鳥寺在住の道場法師と「諸王」との水争いに関する説話に注目する。これは飛鳥川に置かれた木の葉堰に関わる伝承とする和田萃説[20]をふまえ、蘇我氏ゆかりの飛鳥寺周辺の寺田と水争いをしたと伝える「諸王」の地とは、その下流にある小墾田屯倉を指している可能性があると指摘したのである。

小墾田宮の故地　この様に雷丘東方遺跡だけでなく、もう少し広い範囲で小墾田宮やその関連施設を捉えることができるとすれば、香具山のすぐ南方にある「兵庫田」や「犬飼」という小字地名が注目されてくる[21]。前者は小墾田兵庫との関連を、後者は屯倉の守衛にあたった犬養氏との関連を示唆した地名である。したがって、この小字地名の一帯に小墾田宮の倉庫が置かれていた可能性は十分にある。『日本書紀』壬申紀の小墾田兵庫についてふれた記事によれば、大友皇子方が軍営を置いた飛鳥寺西の槻木広場と、小墾田兵庫との間には一定の距離があった様に読み取れ、「兵庫田」の地は適正な場所だと言える[22]。

もう一つ有力な候補地として、雷丘のすぐ南東にあたる石神遺跡をあげられよう。本遺跡では7世紀末頃のC期整地土を中心に、鏃や鎌、斧などの鉄製品が大量に出土しており、小墾田兵庫との関連を示唆しているからである[23]。石神遺跡の北方域では7世紀後半代の木簡が多数出土したが、そのなかには、仕丁らの食料米となる養米の荷札木簡が多数含まれていた。養米の荷札木簡はその最終消費地（養米が支給される仕丁の労働現場など）で廃棄されるのが一般的であるので、荷札の出土地点に民官の倉庫があったとは即座に主張できない[24]。とは言え、民官の倉庫が雷丘の近くにあったことは先述のとおりであり、石神遺跡の北方域の周辺がその有力な候補地になることは否定できない。

小墾田宮の倉庫群が1箇所にだけ集中していたとも限らず、香具山周辺の発掘調査が十分に進んでいない現時点では、これ以上の追求は差し控えざるを得ない。しかしいずれであれ、香具山のすぐ南方に小墾田宮が位置することは動かない。この一帯も高市郡・十市郡の郡界付近にあたるため、古代の所在郡を確定させることは至難の業であるが[25]、少なくとも小墾田宮とその関連施設がすべて十市郡に含まれるという事態にはならないであろう。ここでは、小墾田のうち高市郡に属する場所に、香山正倉が置かれていた可能性があることを指摘しておきたい。

B　香具山宮をめぐって

前項で取り上げた香山正倉との関連もあって、高市皇子の香具山宮を調査地に求める見解があるが、本項ではその当否を検討してみたい。

高市皇子の香具山宮　高市皇子（654？-696）は天武天皇の第一皇子で、母は胸形君徳善の女の尼子娘。天武天皇元年（672）の壬申の乱では重要な役割を果たした。母の身分が低いため皇位を継承できなかったが、天武天皇と持統天皇の片腕となって活躍する。天武天皇14年の新冠位制にともない、草壁皇子・大津皇子に次ぐ浄広弐位が授与され、朱鳥元年（686）には封戸400戸の加増があった。持統天皇３年（689）４月、天武天皇の皇位を嗣ぐべき草壁皇子が死去し、翌年正月に持統天皇が即位すると、その年７月に高市皇子は太政大臣に任じられた。持統天皇５年正月に封戸2000戸が増封され、翌年正月にも封戸2000戸の加増があり、あわせて5000戸にも及ぶ莫大な封戸を所有する。持統天皇７年正月には浄広壱位を授けられるが、これは生前の草壁皇子と同じ冠位であった。こうして持統朝において、高市皇子は重みを増すが、持統天皇10年７月に死去してしまう（以上『日本書紀』）。

この高市皇子の構えた宮こそ、柿本人麻呂による高市皇子の挽歌に登場する「香来山之宮」（香具山宮）に他ならない（『万葉集』巻2-199番歌）。この挽歌には「埴安の御門の原」という地名も詠まれている。埴安には池があって堤が築かれていた（同巻1-52、2-201番歌）。さらに「或る書の反歌一首」のなかには「泣沢の神社」がでてくる（同巻2-202番歌）。「泣沢の神社」は『古事記』の「泣沢女神」に関わり、前項でふれた様に、畝尾都多本神社を指すと考えられる。畝尾都多本神社は現在、調査地のすぐ北側に鎮座していることも既述した。以上より、調査地が香具山宮に相当する可能性は確かにある[26]。

もうひとつ、香具山宮の場所を考えるうえで、参考となる所見が2003年の発掘調査で得られている。すなわち、香具山北方の藤原京左京一・二条の四坊と五坊を画する南北道路（東四坊大路＝中ツ道）の東側溝の溝底淀み部から、木簡133点が出土した[27]。木簡は流水による磨滅はほとんどなく、ごく近い場所から投棄された一群である。そのなかに「穂積親王宮」の帳内とみられる人名を列挙した木簡や、同じく「穂積」と釈読できる断片が含まれており、この近辺に穂積皇子宮が所在した可能性が高まった。『万葉集』には、「高市皇子宮」つまり香具山宮に居住していた但馬皇女が、穂積皇子と恋愛関係になり、それが露見した際に詠まれた歌が所収されている（巻2-114～116番歌）。その歌の内容から、高市皇子宮と穂積皇子宮は比較的近い場所にあったと推定されている[28]。調査地を高市皇子宮（香具山宮）にあてた場合、穂積皇子宮の推定地とほどよい位置関係になる。

長屋王家木簡　さらに、高市皇子の子である長屋王の邸宅（平城京左京三条二坊一・二・七・八坪）から出土した木簡も参考になる[29]。約３万5000点にも及ぶ大量の木簡のなかに、「後皇子宮」と記されたものが含まれていた。これは「後皇子尊」と尊称された高市皇子を指すとみてよかろう。長屋王家木簡は、ⓐ家令・扶・従・大書吏・少書吏のいる機関、ⓑ家令・書吏のみの機関、の２つの家政機関に関わる木簡群から構成される。これらの木簡の分析を通じて、ⓑは長屋王の家政機関であるのに対して、ⓐは高市皇子の家政機関であり、本主である高市皇子の死後も存続したとする見方が有力である[30]。ⓐ家政機関は長屋王の邸宅外にあったようであり、かつての

高市皇子宮である香具山宮に置かれ続けた可能性が高い。長屋王は自らの位階・官職にもとづく位封、位田、職封、職田に加え、封戸5000戸を中核とする高市皇子の莫大な家産を継承したことが明らかになってきたのである。

長屋王が高市皇子から引き継いだ家産のなかには、畿内の各所に置かれた御田や御薗があり、それは大和盆地の南部に特に多い[31]。御田から収穫した稲や米を収納する倉庫が必要となり、それは御田の所在地と香具山宮の双方に置かれていたことであろう。

また、『続日本紀』和銅6年（713）5月甲戌条に「故皇子命宮の飼丁」の良賤訴訟に関する記事がある。「故皇子命」が高市皇子を指すとすれば[32]、香具山宮には飼丁も属していたと考えることができる。ただし「故皇子命」については、草壁皇子とする見解もあり[33]、ここでは参考程度にとどめておきたい。

「菜採司」木簡　以上、高市皇子の香具山宮に関する史料を概観してみた。いずれも状況証拠にすぎないが、調査地に香具山宮があった可能性は確かに一考に価しよう。そこで注目したいのが、調査地出土の「菜採司謹白奴□嶋逃行□／別申病女以前如□」と記された上申文書木簡である。この木簡は、「菜採司、謹みて（○○に）白す」（上申先が省略。）、「菜採司に謹みて白す」、のいずれの読み方も可能であるが、前者の可能性がより高いと思われる（第Ⅳ章6）。すなわち、菜を採る作業に従事していた奴婢が逃亡したり病気になったりしたことを、菜採司がその上級の機関に対して報告をした木簡と考えられる。この様にみてよいとすれば、調査地には菜採司の上級機関が置かれていたことになる。

そこで再度、長屋王家木簡に目を向けてみたい。長屋王が父高市皇子が残した莫大な家産を受け継いだことは先に述べた。長屋王家木簡を分析すると、その家政機関は極めて多種多様にわたる部署から成り立っていたことが知られる。そのなかには、「菜採司」と類似した機関として、「菜司」の名を見いだすことができる。

また、長屋王家木簡のなかには、奴婢関係の木簡が多数含まれている。これらの木簡を整理した神野清一は、奴婢の具体的な仕事として、①食料米の受け取りとその運搬、②味物の受け取りと運搬、③松材あるいは松子の採集、④御薗・御田からの野菜等の運搬、⑤「御杯」の受領・運搬、⑥「大宮殿」の警備、⑦邸宅内の家政機関の各所における雑役、があったと指摘している[34]。このうち④は、菜を採る作業とも連動する可能性が高いであろう。

こうした長屋王家木簡の内容からすれば、菜採司を統括する上級の機関として、高市皇子の香具山宮を考えることは決して不当なものではない。

香具山宮の可能性の有無　しかしながら、調査地を香具山宮に比定できるかといえば、そう簡単にはいかない。第一は、文字資料以外の側面からみた調査地の性格である。Ⅲ期（藤原京造営から廃絶まで）・Ⅳ期（奈良時代）の建物配置などに着目すると、邸宅よりも官衙であった可能性の方が高いと判断される（第Ⅵ章1）。

第二は、調査地の土地利用のあり方である。発掘調査の所見によれば、藤原京造営期（Ⅲ-A期）は最大でも一町占地であったが、藤原京期には四町占地に一新され（Ⅲ-B期）、その前半から後半にかけて施設がより充実する（Ⅲ-C期）。だが藤原京廃都に伴って、より小規模で、まったく新たな建物配置がとられる（Ⅳ期）。調査地に香具山宮があったと仮定した場合、こうした遺構変遷とうまく合致するかどうかが問題となる。

まず、取り上げる必要があるのが、藤原京遷都の３年前となる持統天皇５年（691）に出された、藤原京の宅地班給に関する詔である（『日本書紀』同年12月乙巳条）。それによれば、右大臣は四町、直広弐（従四位下相当）以上は二町、直大参（正五位上相当）以下は一町で、勤位（六位）以下無位にいたるまでは、戸口の数に従って上戸は一町、中戸は二分の一町、下戸は四分の一町の宅地が賜与されることになった。そして、王らもこれに準じることとされた。宅地班給の詔が出される前年の持統天皇４年に太政大臣に任ぜられた高市皇子は、右大臣に四町の敷地が賜与されていることからも、その邸宅は最低でも四町占地であったとみることができよう。

そこで問題となるのが、藤原京造営段階における調査地の一帯は、最大でも一町占地にすぎなかった点である。藤原京前半には四町占地に改変されるので、持統天皇５年の宅地班給を経て、四町占地の宅地へと変貌を遂げたとみることも不可能ではないが、時期的にやや微妙な問題をはらんでいる。また、持統天皇５年の宅地班給について、現状を追認するという意味合いがあった可能性が指摘されている[35]。その場合、高市皇子宮の場所が持統天皇５年の宅地班給の前後で変化がなければ、持統天皇５年以前の邸宅は最大でも一町占地にすぎなかったことになる。だが高市皇子の政治的地位からすれば、その様なことはまずあり得ないであろう。

もうひとつ考えておくべきは、高市皇子は藤原京遷都の２年後にあたる持統天皇10年に死去した点である。調査地は藤原京期の後半になると施設が充実するが、すでに高市皇子が死去した後の段階である。香具山宮は長屋王に継承されたとみられるが、慶雲元年（704）に無位から正四位上に叙せられた長屋王に（『続日本紀』同年正月癸巳条）、果たして邸宅をより充実させるだけの巨大な力があったのか、疑問を抱かざるを得ない[36]。

さらに問題としたいのは、藤原京廃都（平城京遷都）に伴って、調査地の建物配置が一新されている点である。和銅３年（710）～霊亀３年（717）頃の木簡から構成される長屋王家木簡によれば、香具山宮に関わる家政機関は従前どおり維持されていたとみられる。家政機関の維持と邸宅の維持とは必ずしも直結するわけではないが、藤原京廃都によって香具山宮に大きな変化があったとは考えにくい点は看過することができない。

以上を総合的に判断すると、高市皇子の香具山宮は調査地とは別の場所に求めるのが妥当であろう。香具山宮の所在地については、かつて、香具山の東南麓に位置する興善寺跡（橿原市戒外町）が有力視されたことがある。興善寺跡では、７世紀末～８世紀初頭の７間×４間（東西約21m、南北約12m）の大型掘立柱東西棟建物や掘立柱塀、通路が検出されているからである[37]。断定はできないが、香具山宮の有力な候補地となる遺跡である。このほかにも、発掘調査の十分に及んでいない場所に香具山宮が眠っている可能性も考えなくてはならない。少なくとも現状では、調査地を高市皇子の香具山宮に比定することはかなり困難である。

香具山宮と香山正倉　本項を終えるにあたり、香具山宮に付属する倉庫が香山正倉に継承されたとする、仁藤敦史に代表される見方[38]があるので、それについても言及しておきたい。

前項で述べたとおり、天平２年度（730）大倭国正税帳の記載内容から、香山正倉が十市郡に所在しなかったことは明らかである。これに対して仁藤は、香具山宮が所在すると目される十市郡の郡部に香山正倉の関係記載がないのは、郡域を越える古いタイプの出挙のあり方と関わると指摘する。香山正倉はもともと、私出挙の拠点である高市皇子あるいは長屋王家の倉であったと推定したうえで、香具山宮周辺だけではなく、大倭国内の各所に置かれた長屋王家の御田

司の所在地に住む農民らに対しても出挙されたため、首部にのみ記載されたと推定した。また、養老年間に香山正倉で大量の欠損穀が計上されている点についても、養老4年（720）に過渡的な封戸で行われてきた私出挙の禁止が命令された（『続日本紀』同年3月己巳条）ことと関係すると理解した。

この仁藤の見解が妥当であれば、大倭国正税帳の十市郡の郡部に香山正倉に関する記載がみられないからといって、調査地を香山正倉に比定するうえでの障碍とはならないことになる。だが仁藤の見解には、以下の様な疑問点が浮かびあがってくる。

第一に、仮に郡域をこえた出挙の実態があったとしても、正倉はその設置郡で把握されていたはずであり、それは大倭国正税帳の郡部の記載にも当然反映されたとみられる。

第二に、香山正倉の由来としては、高市皇子の香具山宮に付属する倉庫群だけが候補となるわけではない。前項で述べた様に、小墾田宮に付属する倉庫を引き継ぐ可能性も十分にある。

第三に、仮に仁藤に従って、香山正倉が香具山宮に由来するとみた場合でも、次のような問題が生じることになる。そもそも、香山正倉は「正倉」とある以上、その存在が確認できる養老4年までの間に、大倭国の管理下に置かれた公的な倉庫となっていなければならない。つまり養老4年段階において、香山正倉は長屋王の所有する倉庫ではなくなっているのである。したがって、もし香山正倉が香具山宮関連施設に由来すると仮定した場合、少なくとも養老4年よりも前の段階に収公されていなければならない。しかし、長屋王家木簡によるかぎり、この段階までに収公された形跡はないのである。長屋王家木簡の対象外の時期となる霊亀3年以降についても、長屋王の変が起きた神亀6年（＝天平元年、729）であればともかく、それ以前に収公されたとみるだけの積極的な根拠は乏しい。

以上、仁藤の指摘は優れた問題提起であるが、にわかには従いにくいのが実状である。

C　左京職をめぐって

i　「左京職」の斎串

以上検討してきた様に、調査地が香山正倉や香具山宮ではないとすれば、それでは調査地には一体いかなる施設が置かれていたのであろうか。

「左京職」の墨書がある斎串　この問題を考えるにあたって注目したいのは、「左京職」と墨書された斎串である。言うまでもなく、左京職は、京の東半分にあたる左京の民政一般を掌る官司である。これに関連する遺物としては、「京」と釈読できそうな小片の木簡や、「□町」や「町」と墨書された土器がある。「町」は「マチ」で、京内の区割りである「坊」と同義であろう。この様に、京関係の出土文字資料が少なくとも4点あることは注目に値する。そこで以下において、「左京職」と墨書された斎串をめぐって、若干の検討をめぐらしてみることにしよう。

「左京職」と書かれた斎串は、東西大溝SD4130の奈良時代の堆積層から出土しており（「京」と釈読できそうな木簡も同様。）、ひとまずは奈良時代のものと考えられる。それにしても、藤原京から平城京への遷都が実施された和銅3年（710）以後において、この旧藤原京の地で「左京職」の斎串が使用された理由はどこにあるのか。一般に斎串は結界などに使用される祭祀具であるので、神祇信仰との関連性を探る必要があろう。この様な視点に立ったとき、次の『延喜式』

神名式上3京中条の記述が注目される[39]（〈　〉は割注。以下同じ。）。

京中坐神三座〈並大〉

左京二条坐神二座〈並月次・相嘗・新嘗〉

太詔戸命神〈本社、大和国添上郡、対馬国下県郡太祝詞神社〉

久慈真智命神〈本社、坐大和国十市郡天香山坐櫛真命神〉

同京四条坐神一座〈月次・新嘗〉

隼神社

ここには平安京の「京中に坐す神」として3座の名前があがる。うち隼神社は金剛寺本『延喜式』の頭書に「延」という記載があり、『延喜式』段階で官社に列したと推測される。よって平安京の京中神は、当初、太詔戸命神・久慈真智命神の2座であったことになる。この2座に関わる割注のうち、前者は九条家本および吉田家本の頭注、後者は九条家本および吉田家本の傍注として記されたものであるが、2座について貴重な情報を提供してくれる。

香具山所在の神社　ここで目を引くのが、久慈真智命神の本社は、大和国十市郡の天香山坐櫛真命神社[40]であった、という事実である。「くしまち」の語義から、この神は亀卜の神として香具山に祀られたと推定されている[41]。櫛真命神（久慈真智命神）が何度かの遷都を経て平安京内に祀られた後も、その本社は大和国十市郡にあり続けたのである。天香山坐櫛真命神社は、香具山北麓の天香具山神社にあてるのが一般的であるが、山頂の国常立神社とみる説もある。いずれにせよ、本神社の名称に「天香山に坐す」と書かれている以上、天香具山に鎮座したことは確実である。

一方の太詔戸命神も亀卜の神である[42]。その本社は、大和国添上郡および対馬国下県郡と書かれているが、『新撰亀相記』には「太詔戸命神社、本社在三国〈壱岐嶋壱岐郡、大和国添上郡、対馬嶋上県郡〉」とあり、壱岐嶋にも所在したことがわかる。『新撰亀相記』によれば、太詔戸命は「天香池」に住んでいたといい、その発祥地は香具山であったと推定される。

この様に、平安京の左京二条に鎮座する太詔戸命神・久慈真智命神は、ともに天香久山と深く関わる亀卜の神であった。太詔戸命神は平安京遷都にいたるまでに本社は移転したが、もう一方の久慈真智命神は藤原京左京の香具山の地に長く残されたのである。

それでは、左京職が亀卜の神である太詔戸命神の祭祀に関わっていたのかといえば、それを示す様な史料はない。そもそも職員令によれば、国司・大宰府・摂津職の職掌に「祀社」があるが、京職の場合はそうなってはいない。京職は国司などと違って、神祇祭祀の主催者としては位置づけられなかったのである[43]。京職は神祇祭祀に伴う人夫の供給などに携わることはあっても[44]、それを主催することはなかったと考えられる。都が平城京に遷った後の奈良時代において、亀卜のことを掌る陰陽寮や祭祀全般に関わる神祇官であればともかくも、左京職がわざわざ出向いてきて太詔戸命神を祀る様な事態は少し考えにくい。

また、調査地は天香山坐櫛真命神社に近在するといっても、本神社の候補地（天香具山神社、国常立神社）とは幾分か離れている点も看過できない。天香山坐櫛真命神社の本来の場所が正確にわからないため、断定は難しいが、天香山坐櫛真命神社の境内で使用された斎串でないことはほぼ確かであろう。あるいは、香具山の西麓に位置する調査地において、香具山を仰ぎ見ながら使用された斎串である、とする見解もでてくるかもしれない。しかしその場合には、なぜ

あえて調査地が選ばれることになったのか、合理的な説明が求められる。

斎串の時期　これまでは「左京職」の斎串は奈良時代の遺物として取り扱ってきたが、この斎串が出土したSD4130は藤原京の造営段階には掘削されていたようであり、藤原京期の土器も少なからず出土している。新しい時代の遺構から古い時代の遺物が出土することは珍しくないので、問題の斎串が藤原京期の遺物であった可能性も考慮しなければならない。

この斎串が藤原京期あるいは奈良時代のいずれのものであれ、これが調査地内から出土した最も単純かつ自然な想定は、調査地が左京職に深い関わりのある施設であったため、というものであろう。すなわち調査地には、藤原京期には左京職の官衙が、奈良時代には左京職の関連施設が置かれたと推定するのである。左京職の官衙や関連施設であれば、その敷地内における祭祀にともなって、「左京職」と書いた斎串を使うことは特に不自然なものではなくなる。この可能性が成り立つかどうかを考えるために、次に藤原京域の京内官衙について、簡単にみておきたい。

ⅱ　藤原京の京内官衙

これまでの発掘調査成果から、藤原京の京内官衙[45]としてその位置がほぼ確定しているのが、衛門府と右京職の所在地である。

左京七条一坊　まず、藤原宮のすぐ南、左京七条一坊に置かれた衛門府からみていこう[46]。2001年、左京七条一坊西南坪のほぼ中央の池状遺構SX501を中心に、1万2852点もの大量の木簡が出土した[47]。大宝元年（701）・同2年のものが大半を占め、藤原宮の宮城十二門の警備や、これらの門を通過する際に使用された門牓木簡が多く含まれていた。木簡全体の分析、とりわけ門牓木簡のライフサイクルをたどることによって、当地に衛門府の本司が置かれていたことが判明している。また、1994年度の橿原市教育委員会による調査でも、左京七条一坊東南坪の西北隅にある土坑（便所遺構か。）から木簡24点が出土しており[48]、2001年調査所見を踏まえて再検討したところ、門牓関連木簡が含まれていることが判明した。すなわち、左京七条一坊の異なる2つの坪で共通する性格をもつ木簡が出土したのである。

さらに遺構の上でも重要な知見が得られている。1994年度調査では、左京七条一坊の敷地内を一町ずつ四等分した場合に存在すべき小路クラスの条坊道路が検出されず、逆に道路の推定位置で建物や塀などを検出した。よって、左京七条一坊は四町占地であった可能性が考えられた。そして、これを傍証するかの様に、2001年の西南坪の調査では、調査区の東北隅部で前後2時期分あるL字状の溝が見つかった。これは敷地を区画する溝とみられ、藤原京期全体を通じて、四町分の敷地の中央に一町分の内郭があると考えられるにいたった。木簡の内容とあわせて、四町占地をなす左京七条一坊に、衛門府が官衙を構えていた可能性は極めて高い。

右京七条一坊　次に、右京七条一坊西北坪とその一帯に置かれた右京職を取り上げよう[49]。右京七条一坊の地は、朱雀大路をはさんで、衛門府とは対称をなす位置である。しかし、右京七条一坊は四町占地ではなかった。詳しくは第Ⅵ章5で検討する様に、藤原京期の前半段階は一町ずつ分割されていたが、後半段階に改作が加えられ、右京七条一坊西北坪は南の右京七条一坊西南坪および右京八条一坊西北坪と一体化して、縦長となる三町（以上）占地になったと考えられる。これまで右京七条一坊西南坪は一町占地の貴族の邸宅とみる見解が一般的であったが、

それはあくまでも藤原京期の前半段階のことであった。藤原京期の後半段階には、占地のあり方が大きく変わった可能性が高いのである。

このうち木簡は、右京七条一坊西北坪の北側から集中して出土しており、全部で792点を数える。南北溝SD7080を除くと、土坑やそれに類した遺構（土坑SK7071・7072・7073、便所遺構SX7420、井戸SE6500、小穴）からの出土であり、西北坪の北半部にある施設で利用されたと考えられる木簡である。この一帯の性格を考える際、次の２点の木簡が特に注目される。

①　〔右 京 職 解ヵ〕
□□□□

(95)×(7)×４　081

②・下戸雑戸戸主　　雑戸下戸戸主

・百済手人下戸戸主

166×(16)×３　081

①の「解」は所管官司に上申する際に使われる文書様式で、この原則に従えば、右京職が太政官に宛てたものとなる。文書木簡は宛所で捨てられることもあれば、差出元に戻されることもある。あるいは、墨書されたものの使用されなかったり、習書木簡であったりした可能性も否定できない。西北坪は立地的に太政官とは考えがたく、他に太政官に関わる木簡が入っているわけでもない。よって右京職で廃棄された可能性が最も高いであろう。

②には「百済手人」という記載がみえるが、これは雑戸の百済手部を指す。大蔵省・内蔵寮に所属し、種々の皮革生産に従事した。百済手部の本貫地は、藤原京の左京（大蔵省所属８戸、内蔵寮所属10戸）および右京（大蔵省所属２戸）にあった（『令集解』職員令７内蔵寮条・同33大蔵省条所引「別記」）。雑戸は特別な雑戸籍に付けられたが、これは４通作成され、本貫地（この場合は左京もしくは右京）、所属の官司（この場合は大蔵省もしくは内蔵寮。）、中務省、民部省にそれぞれ置かれた。②は雑戸籍にもとづいて記載されたとみられ、右京職に保管された雑戸籍を使用した可能性が最も高い。

①・②以外にも、「四坊刀禰」「坊」の様に藤原京の条坊記載や、京内の家屋に関するとみられる「□地損破板屋一間」「家地」「家」などの記載が確認できる。また右京職では、雑戸籍のほかに一般公戸の戸籍や計帳も管理していた。それらに関連しそうな木簡として、「戸主」「戸」「年六十三」「少女」「疾」などの語が書かれたものがある。このほか、木目方向に直交して文字を記した「横材木簡」が多数含まれている。横材木簡は集計時の帳簿として使われることが多く、活発な事務作業が行われたことを物語る。

ここで確認しておきたいのは、これらの木簡の年代である。木簡のなかには「和銅三」と記されたものがあり、藤原京から平城京への遷都が行われる710年に該当する。また、①の「右京職」に関しても、元来は単独の官司「京職」[50]であったのが、大宝元年（701）の大宝令施行を契機に左右に分割されたことが判明している。「茨田郡」「正八位上」「大初位」などの記載も、大宝令施行以後のものであることを裏づける。木簡の出土状況もあわせて、これらの木簡は藤原京期の後半段階に使用されたものと理解してよいであろう。

これらの所見を総合すると、藤原京期の後半段階には、右京七条一坊西北坪の地は、南の右京七条一坊西南坪および右京八条一坊西北坪とあわせて、右京職が三町（以上）占地で官衙を構

えていた可能性が高い。ちなみに、木簡の多数出土した右京七条一坊西北坪は、遺構の状況からみて、右京職の実務的な空間として使用されたと考えられる。

京職から左京職・右京職へ　以上、藤原京内に置かれた官衙として、衛門府と右京職の2つを取り上げた。ここで確認しておきたいのは、ともに藤原宮に接する場所に立地していた点と、衛門府は四町占地、右京職は三町（以上）占地という広大な敷地面積を誇っていた点である。この2点は左京六条三坊にあたる調査地についても当てはまり、調査地に京内官衙が置かれたと考えるうえで好都合な点である。候補となる京内官衙は複数あるが、調査地が左京に立地していることから、藤原京左京の行政全般を掌る左京職（右京職も右京に立地している。）が有力な候補になることは間違いあるまい。

しかも興味深いのは、右京職の一帯における藤原京期の遺構変遷である。前述した様に、右京七条一坊は藤原京期の前半段階は一町ずつ占地されており、そのうち西南坪には貴族の邸宅が置かれていたと考えられる。しかし後半段階になると、右京七条一坊西南坪は北の右京七条一坊西北坪および南の右京八条一坊西南坪と一体化し、縦長の三町（以上）占地となる。右京七条一坊西北坪の北側から出土した木簡の内容からみて、藤原京期の後半段階には右京職が官衙を構えた可能性は極めて高いのである。

ではなぜ、藤原京期の後半段階になって右京職が新たに官衙を構えたのか。それは、大宝令の施行に伴って、単独の官司であった京職から、左京職と右京職が分化したことが関係しよう。すなわち、藤原京期の前半段階は京職のために1箇所の敷地を用意すればよいが、後半段階には左京職と右京職のための2箇所の敷地が必要となってくるである。そこで、右京七条一坊・八条一坊の西半分に改作を加えることで、右京職の官衙地を確保したと考えられる。

この様にみて良いとすると、調査地である左京六条三坊については、藤原京期の前半、後半を通じて四町占地であり続けたことから、前半段階は京職が、後半段階は左京職が官衙を構えていた可能性が高まることになろう。

D　調査地の性格

本節における種々の考察の結果、調査地を香山正倉や香具山宮にあてる見方は成立しがたく、藤原京期には京職（左京職）が置かれていたとみるのが最も妥当であるとの結論に達した。最後に、藤原京期の前後の状況についても簡単に検討を加え、節を終えることにしたい。

藤原京期　さて、藤原京期に相当する遺構変遷のⅢ期は、遺構の上でⅢ-Ａ期（藤原京造営期）、Ⅲ-Ｂ期（藤原京期前半）、Ⅲ-Ｃ期（藤原京期後半）の3時期に細分できる。このうち、Ⅲ-Ｂ期は京職が置かれていた段階、Ⅲ-Ｃ期は左京職が置かれていた段階であると考えた。Ｂ期からＣ期に移行した際、左京六条三坊の地が四町占地である点は変わらないが、内郭の規模が拡大し、前殿や脇殿など前庭周囲の建物群が充実する。すなわち、京職から左京職への転換にあたって、その施設の充実が図られたことになる。ちなみに、大宝令の施行を受けて官衙の施設を充実させた事例としては、藤原宮の内裏東方官衙をはじめ、決して珍しくない。

藤原京造営期　次にⅢ-Ａ期について。当該期の左京六条三坊の地は、条坊側溝によって一町占地を基本とし、掘立柱塀によって各坪が視覚的にも区画されていた。自然地形にあわせて建物方位が大きく振れるⅠ・Ⅱ期とは異なって、ほぼ正方位に則った建物配置をとる様になり、こ

の点は続くⅢ-B・C期と共通している。ただし、区画内の施設が完成していたのは東北坪と東南坪の一部に限られており、その他の坪の土地利用は、周辺での小規模な調査での成果からみて、いまだ盛んではなかった様である。

さて、この藤原京造営期にあたるⅢ-A期には、『日本書紀』天武天皇14年（685）3月辛酉条に「京職大夫直大参許勢朝臣辛檀努卒りぬ。」という記事がある様に、すでに京職は存在していたと考えられる。藤原京の造営は天武天皇5年（676）の「新城」造営計画にまで遡るが（『日本書紀』同年是歳条）、こうした新たな動きに対応するかの様に、『日本書紀』には天武天皇5年9月乙亥条に「王卿を京及び畿内に遣して、人別の兵を校へしむ」とあるのを初見として、以後「京」「京師」の語が頻出する[51]。したがって、新城（藤原京）建設時には京職が誕生していた可能性が高いであろう。

そこで問題となるのが、この藤原京造営期における京職の所在地である。最も可能性が高いのは、藤原京期に（左）京職が置かれていた場所、すなわち調査地の一帯ではなかろうか。周知のとおり、藤原京の造営は難航した。藤原京への遷都は持統天皇8年（694）で、新城の造営が計画されてから18年後のことである。この点を踏まえると、調査地の一帯に京職の官衙が設けられたといっても、Ⅲ-A期には十分に整備されていなくても決して不自然ではない。Ⅲ-A期の遺構が藤原京造営期の京職の官衙であった可能性は十分にある。

とは言え、A期は一町ずつ占地されているので、京職以外の官衙やその関連施設が置かれていた可能性も残る。その有力な候補のひとつとして、藤原京造営の中心を担った造京司（『日本書紀』持統天皇7年2月己巳条）があげられよう。

これに関わって、藤原京の造営が本格化した際に、『日本書紀』斉明天皇2年（656）是歳条に登場する「狂心渠」の可能性がある南北大溝SD4143に取り付く形で、東西大溝SD4130が新たに掘削されている点が注目される。藤原宮・京の造営で必要となる資材などを運搬する機能をもったことは間違いがないであろう。著名な『万葉集』巻1-50番歌の「藤原宮の役民の作る歌」には、近江の田上山で伐採した木材を宇治川に流し、筏に組んで泉河（木津川）を遡らせた状況が詠まれているが、泉大津で陸揚げされた木材は、平城山を越えた後、佐保川、初瀬川、米川などの大和川水系を経て、これら運河を利用して運搬された可能性が高いのである。調査地はこうした運搬ルートの最終地点の屈曲部にあたっており、造京司が置かれる場所としてふさわしい。

奈良時代　それでは、奈良時代（Ⅳ期）の状況はどうか。発掘調査所見によると、Ⅲ期からⅣ期への移行に伴って、建物配置は抜本的な改変を被っている。区画は小規模になり、建物も小型化する。建物方位もⅠ・Ⅱ期ほどには振れが大きいわけではないが、Ⅲ期の様に明確な正方位をとってはいない。これらの点はⅣ期の性格を反映しているはずである。

Ⅳ期の遺構について、かつては香山正倉とみる見方が有力であった。しかし本節A項で検討したとおり、それは成立困難である。とは言え、香山正倉ではないにしても、何か公的な施設であった可能性は十分にある。出土木簡や墨書土器をみても、こうした考え方に抵触するものは特に含まれていない。本節B項において、「菜採司」の上申文書木簡を取り上げ、それを統括する上級の機関として香具山宮の可能性を探ってみたが、結果的にはそうした考え方を採用するにはいたらなかった。Ⅳ期の遺構が「菜採司」を統括する機関であった可能性はあるが、そ

れが公的機関であっても差し支えないのである。

残念ながら、いかなる名称の公的施設（機関）がⅣ期の段階に置かれていたのか、それはよくわからない。しかし少なくとも、前段階のⅢ期に公的施設が置かれていなかったとしたら、わざわざⅣ期になって藤原京の故地に公的施設が設置されることはなかったであろう。Ⅲ期に（左）京職という公的施設が置かれていたとみることによって、Ⅳ期への移行が説明しやすくなるのである。「左京職」と墨書された斎串が奈良時代のものであれば、左京職の関連施設であった可能性がやや高くなろうが、現状ではこれ以上確たることはいえない。

以上、資料が限られていることもあって、多くの推測を交えた考察とならざるを得なかったが、ひとつの見通しを示すことはできたと考える。今後、周辺地の調査が進み、新たな知見が得られることを期待したい。本節がそのたたき台になれば幸いである。

1） 香具山は「香具山」のほかに、「香山」「高山」「香久山」「香来山」「賀久山」など多様な表記があるが、文中では基本的に「香具山」で統一する。

2） 香具山に関わる研究は膨大にある。ここでは比較的新しい研究として、渡里恒信2008「天香久山の伝承について―その古層と新層―」『日本古代の伝承と歴史』思文閣出版（初出2001年）をあげるにとどめる。

3） 正税帳は、諸国に蓄積された官稲のうち正税の収納・運用に関する決算報告書である。正倉院文書のなかには、天平２年度（730）から同11年度までの正税帳（大税帳）が23通残されているが、大倭国正税帳は、伊賀、尾張、越前、紀伊国の大税帳とあわせて、最も古い一群をなしている。その復元、整理については、以下の文献が基本となる。舟尾好正1968「大倭国正税帳について―特にその記載をめぐって―」『続日本紀研究』第140・141合併号。井上辰雄1977『正税帳の研究―律令時代の地方政治―』塙書房、第一章。林陸朗・鈴木靖民編1985『天平諸国正税帳』現代思潮社。

4） 正面から論文形式で論証したものはないが、『藤原概報17』以来、広く受け入れられている見方である。多くの関係文献があるが、次の２点をあげるにとどめたい。鬼頭清明1992『古代宮都の日々』校倉書房。木下正史1993『飛鳥・藤原の都を掘る』吉川弘文館。

5） 天平２年時に吉野郡は吉野監の管轄下にあったので、15郡とはならない。

6） 池田源太1972『大和三山』学生社など。

7） 奈文研2003『吉備池廃寺発掘調査報告―百済大寺跡の調査―』奈文研創立50周年記念学報第68冊。

8） 木下正史2005『飛鳥幻の寺、大官大寺の謎』角川書店。

9） 史料には「高市大寺」ではなく「高市大官寺」とみえるため、高市大寺と大官大寺を兼ねた大安寺による創称とみる見解もあった。だが風間亜紀子が明らかにした様に、「高市大官寺」は高市に所在した大官大寺の意であり、高市大寺のことを指している。風間亜紀子2010「高市大寺関係史料の再検討―その所在地をめぐって―」『川内古代史論集』第７号。

10） 『日本後紀』大同元年（806）４月庚子条。同じ歌は『日本霊異記』下巻第38話にもみえる。また『万葉集』巻３-269番歌に「屋部の坂」が登場する。「野辺」「屋部」は「山部」に通じる。この童歌は、桓武天皇が山部親王と呼ばれたのと関わる。

11） 小澤毅2003「寺名比定とその沿革」奈文研『吉備池廃寺発掘調査報告』。西本昌弘2014「高市大寺（大官大寺）の所在地と藤原京朱雀大路」『飛鳥・藤原と古代王権』同成社（初出2011年）。なお、高市大寺の所在地については、小澤論文が提唱するギヲ山西方が有力であるが、西本論文など異論も出されている。

12） 朝倉弘1984「高市郡の荘園」『奈良県史』第10巻名著出版。同1987「荘園の様相」『橿原市史　本編 上巻』。熱田公1984「喜殿荘」『国史大辞典４』吉川弘文館など。

13） 大脇潔2005「大野岡北麓の池と飛鳥川の堰」『飛鳥文化財論攷―納谷守幸氏追悼論文集―』納谷守幸氏追悼論文集刊行会。

14） 皇子宮の所在地については、岸俊男が『万葉集』に所収された歌を中心に検討を加え、おおよその場所が明らかになりつつある。岸俊男1984「皇子たちの宮」『古代宮都の探究』塙書房（初出1981年）。

15） 明日香村教育委員会1988『雷丘東方遺跡第三次発掘調査概報―村道耳成線道路改良事業に伴う調

査―』。相原嘉之1999「小治田宮の土器―雷丘東方遺跡出土土器の再検討―」『瓦衣千年―森郁夫先生還暦記念論文集―』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会。

16）奈文研1980「雷丘東方遺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ―藤原宮西辺地区・内裏東外郭の調査―』奈文研学報第37冊。同1994「左京十一・十二条三坊（雷丘東方遺跡）の調査」『藤原概報24』など。

17）小澤毅2003「小墾田宮・飛鳥宮・嶋宮」『日本古代宮都構造の研究』青木書店（初出1995年）など。

18）前掲註14文献。

19）山本崇2012「壬申の乱と飛鳥寺西槻下―小墾田兵庫をめぐって―」『季刊明日香風』第122号。

20）和田萃1973「飛鳥川の堰―弥勒石と道場法師―」『日本史研究』第130号。

21）千田稔1991「小墾田・飛鳥・橘―槻と橘―」『古代日本の歴史地理学的研究』岩波書店（初出1986年）。

22）前掲註19・21文献。

23）相原嘉之2011「飛鳥古京の攻防―壬申紀にみる小墾田兵庫と留守司―」『琵琶湖と地域文化―林博通先生退任記念論集―』サンライズ出版。相原嘉之2013「飛鳥寺北方域の開発」『橿原考古学研究所論集』16 八木書店など。

24）市大樹2010『飛鳥藤原木簡の研究』塙書房、第二章など。

25）吉川真司は、小治田寺と大后寺が同一実体であることを論じた論考のなかで、南北朝時代の貞和3年（1347）2月興福寺造営料大和国八郡段米田数并済否注進状（『春日大社文書』4巻795号）に、大后寺領荘園のひとつに「十市郡 奥山荘 六町三段」があげられていることから、近世以降には高市郡に属していた奥山の地が、中世には十市郡に属していたことを指摘している。吉川真司2013「小治田寺・大后寺の基礎的考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集。

26）上野誠1997「高市皇子挽歌と香具山宮」『古代日本の文芸空間―万葉挽歌と葬送儀礼―』など。

27）露口真広・竹内亮2004「二〇〇三年出土の木簡 奈良・藤原京跡」『木簡研究』第26号。

28）岸俊男1984「皇子たちの宮」（前掲）。

29）奈文研1995『平城京木簡一―長屋王家木簡一―』奈文研史料第41冊。同2001『平城京木簡二―長屋王家木簡二―』奈文研史料第53冊など。

30）多数の研究があるが、特に重要なのが次の2点である。東野治之1996『長屋王家木簡の研究』塙書房。森公章2000『長屋王家木簡の基礎的研究』吉川弘文館。

31）長屋王家の御田・御薗の比定地については諸説あるが、舘野和己1998「長屋王家木簡の舞台」『日本古代の交通と社会』塙書房（初出1992年）をあげるにとどめる。

32）前掲註30森公章文献など。

33）定裕美2005「皇子命宮の飼丁に関する一考察」『日本歴史』第683号など。

34）神野清一1993「「長屋王家木簡」および「二条大路木簡」の奴婢」『日本古代奴婢の研究』名古屋大学出版会。

35）仁藤敦史1998「倭京から藤原京へ―律令国家と都城制―」『古代王権と都城』吉川弘文館（初出1992年）。

36）もちろん、長屋王の後見役として、母である御名部皇女（天智天皇の娘。のちの元明天皇の同母姉。）の存在を無視するわけにはいかないが、邸宅を維持するのに手一杯であったのではなかろうか。

37）濱口和宏1991「興善寺跡」奈良県立橿原考古学研究所編『大和を掘る―一九九〇年度発掘調査速報―』。

38）仁藤敦史前掲註35文献。仁藤敦史2012「貴族・地方豪族のイエとヤケ」『古代王権と支配構造』吉川弘文館（初出2007年）など。

39）以下、京中神に関しては、西本昌弘2013「古代都城と神・仏・天の祀り」『都城制研究』第7号奈良女子大学古代学学術研究センターを特に参照した。

40）『延喜式』神名式上6条にもみられる。『新抄格勅符抄』は「櫛麻知乃命神」と表記する。

41）池田源太前掲註6。狩野久1987「歴史の始源と諸伝承」『橿原市史 本編 上巻』19頁など。『古事記』上巻・天石屋戸段の「天香山の真男鹿の肩を内抜きに抜きて、天香山の天のははかを取りて占合ひまかなはしめて」など、香具山と占兆との関係は深いものがあった。

42）川端守幸1990「太詔戸命考―天児屋根命同神説をめぐつて―」『神道史研究』第38編第2号など。

43）都城は神社との関わりが薄かったことが指摘されている。榎村寛之1996「都城と神社との関係につ

いて」『律令天皇制祭祀の研究』塙書房（初出1993年）。榎村寛之2008『古代の都と神々』吉川弘文館など。

44）右京七条一坊西北坪からは右京職関連木簡が多数出土したが（後述）、そのなかに「符雩物□〔持ヵ〕」の語で始まる、祈雨祭祀に要する荷物の運搬に関わるとみられる木簡が含まれていた。この様に京職が祭祀とまったく無関係の存在でなかったことは確かであるが、主催者として関与することはなかったであろう。本木簡の理解と派生する問題については、竹本晃2008「京職と祈雨祭祀―藤原京右京七条一坊西北坪出土の木簡―」『奈文研紀要2008』を参照されたい。

45）平城京の京内官衙については、以下の文献が基本となる。北村優季2013「平城宮の「外司」」『平城京成立史論』吉川弘文館（初出1988年）。渡辺晃宏1993「史料からみた平城京の宮外官衙」奈文研『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』。

46）関連文献も含め、その詳細は、市大樹2010『飛鳥藤原木簡の研究』（前掲註24）第五・六章を参照のこと。

47）後述する1995年橿原市教育委員会調査出土の木簡とあわせて、次の史料集で正式に報告されている。奈文研編2009『飛鳥藤原京木簡二―藤原京木簡一―』奈文研史料第82冊。

48）橿原市教育委員会編1995『かしはらの歴史を探る3』。露口真広・橋本義則1995「一九九四年出土の木簡 奈良・藤原京跡左京七条一坊東南坪」『木簡研究』第17号。

49）木簡の釈文および概要は、奈文研編2009『飛鳥藤原京木簡二』（前掲註47）参照。これらの木簡の性格に迫った報文や論文として、次の文献があげられる。橋本義則1992「一九九一年出土の木簡 奈良・藤原京跡」『木簡研究』第14号。竹本晃2007「二〇〇六年出土の木簡 奈良・藤原京跡」『木簡研究』第29号。竹本晃前掲註44文献。市大樹前掲註24文献など。

50）『日本書紀』天武天皇14年（685）3月辛酉条、『続日本紀』文武天皇3年（699）正月壬午条、同養老元年（717）正月己未条など。なお最後の史料は、巨勢麻呂の薨伝で、父にあたる巨勢志丹の官職を「飛鳥朝京職」と記したものである。

51）岸俊男1988「都城と律令国家」『日本古代宮都の研究』岩波書店（初出1975年）。小澤毅2003「古代都市「藤原京」の成立」『日本古代宮都構造の研究』（初出1997年）。

5　藤原京の発掘調査

藤原京は、現在の行政区画では橿原市から桜井市、明日香村にかけての広大な地域にまたがる古代都城である。京内の様相は、両市・村教育委員会をはじめ、奈文研、奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿考研とする。）の各機関が継続的な発掘調査の成果を積み重ねて、少しずつ明らかになってきている。藤原京は面積が約29平方kmにも及ぶ古代随一の規模の都城であるが、平城京など他の都城に比較してまだ京内の調査面積が少ない現状にある。また、文献資料に乏しいこともあり、京内の様子は十分に明らかになっているとはまだ言い難い。そのため、ここでは藤原京期の遺構を検出した主要な調査をもとに、京内各坪についてその様相を検討することを通じ、日本最初の中国式都城である藤原京の実態に迫ってみたい。

藤原京の土地利用に関しては、藤原宮南辺を代表として、東辺や西辺にも一町やそれ以上を占地する大規模な施設があることがこれまでに判明している。一方その他の地域は、藤原宮北辺を含め、坪内を分割した小規模な宅地が分布するという解釈がされてきた。二町以上にまたがる複数町占地については、今回報告した左京六条三坊の他には、1990年の第63-7次調査で明らかとなった左京四条三坊東北坪・西北坪の二町占地が注目されていた程度であり、近年になって「衛門府」と推定される左京七条一坊が四町占地の可能性が高いことが指摘された[1]。今回あらためて京内の発掘調査成果について検討を加えた結果、1990年以前の調査においても複数町占地の認定に関する重要な知見が得られていることが明らかとなり、上述した見解は必ずしも実情を示したものではないと考えられる。そのため、ここではまず可能性のあるものをも含めて、占地の規模に基づいて分類して記述し、京内の宅地や施設の様相について検討する。その結果、左京六条三坊の特性がより明らかになるであろう。

A　藤原京における占地

藤原京内における宅地班給については、持統天皇5年（691）に「右大臣に賜う宅地四町。直廣貳より以上には二町。大参より以下には一町。勤より以下、無位に至るまでは、その戸口に随はむ。其の上戸には一町。中戸には半町。下戸には四分之一。王等もこれに准へよ。」という詔勅を出し、基準を示している。これを考古学的に裏付ける調査成果も蓄積されつつあるが、その坪の性格や居住者について特定するのは難しい。また、坪の占地規模についても、坪内外を広範囲に調査した事例は少なく、限られた情報から全体の様相を判断する必要がある。ここではまず、坪の占地状況を判断した根拠について提示する。

複数町占地については、左京四条三坊東北坪・西北坪の様に、条坊道路をまたぐ塀や建物の遺構により確定することができる。そうした遺構が存在しない場合でも、条坊道路が機能していないと判断できることや、坪を越えて出土する共通の内容をもつ遺物、特に木簡から一体としての利用が知られることもある。藤原宮南辺の左京七条一坊の四町占地が、この例にあたる。

一町占地は確実に認定することはより困難だが、広い面積を調査したこと等により、坪全体にわたる整然とした配置関係が認められる場合は、一町占地と判断できる。調査面積が広くない場合でも、比較的規模の大きな建物を検出し、整然とした配置が推定できるものについても、

一町占地と認定した。また、周囲を掘立柱塀で区画する坪で、坪の中軸線上に門が開く例も一町占地の可能性が高い。

坪内分割占地は、調査面積が狭い坪が多いこともあり、確定できる例は多くはない。坪内を区画する施設には道路、溝、塀があり、こうした遺構を坪をほぼ等分割する位置で検出した場合は、分割占地とした。また、井戸は一軒の宅地に基本的に1基程度あると考えられるため、井戸数の多さやその配置関係から、坪内を分割した宅地の単位が復元できることもある。条坊道路に開く門が坪の中軸線から外れている坪も、分割占地の可能性が高い。分割占地の宅地はほとんどが小規模な建物からなり、これも判断基準の一つとした。これらの諸点に加えて、出土遺物等から推定される施設の性格や、藤原宮との位置関係等も含めて総合的に判断した。

i　複数町占地

左京四条三坊東北坪・西北坪（Fig. 278）　藤原宮に東接する地で、東面中門の東北方にあたる。駐車場建設に伴い、東北坪と西北坪にかけて、約500㎡を調査した。調査地は、坪の南北二等分線付近にあたる。藤原京期の遺構には東三坊坊間路とその両側溝、掘立柱建物、掘立柱塀、土坑等があり、A・Bの2時期の変遷をたどる。A期は、坊間路に沿ってSA6956・6957を設ける。この塀には坪の南北二等分線付近でそれぞれ東西塀SA6958・6959が取り付き、両坪内を区分する。B期には東三坊坊間路を廃し、それをまたぐ形で東西塀SA6950を設け、その南方には掘立柱東西棟建物SB6945が建つ。この様に、一町占地とみられる宅地から、少なくとも東北坪と西北坪の二町以上にまたがる宅地へと変化する。ただし、A期における両坪の区画塀は、同位置で東西塀が取り付くという同様の構造であり、かつ少なくとも西北坪の南北塀は東西塀より北へ延びないことから、A期には坊間路は存在しているものの、両坪は一体として利用されていた可能性もあろう[2]。

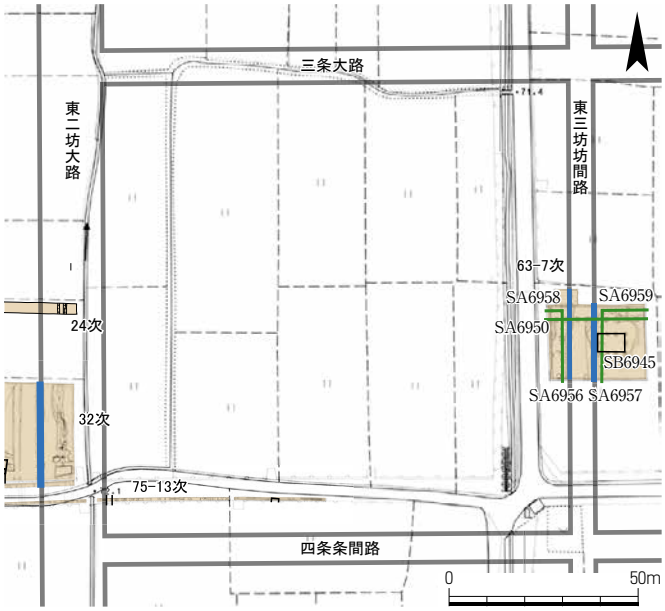


Fig. 278　左京四条三坊東北坪・西北坪遺構配置図　1：2000

左京七条一坊（Fig. 279）　藤原宮南面に接し、朱雀大路にも面する地。市道建設や市営住宅建て替えに伴い、奈文研と橿原市教育委員会（以下、橿教委とする。）が数次にわたる調査を行った。周辺の地形は本来谷筋の低湿地で、東北坪には現在春日神社が所在する小規模な丘陵があり、一帯に切土、盛土による大規模な整地を行っている。橿教委の1994年度の調査では、東一坊坊間路と七条条間路の遺構はいずれも確認できず、東北坪と東南坪間の条間路推定地で、藤原京期の重複する建物や土坑を検出した。土坑からは24点の木簡が出土し、「皇子宮」「帳内」の記載から、中務省関係の施設の存在が考えられていた。東南坪では、東寄りの場所で柱穴掘方が

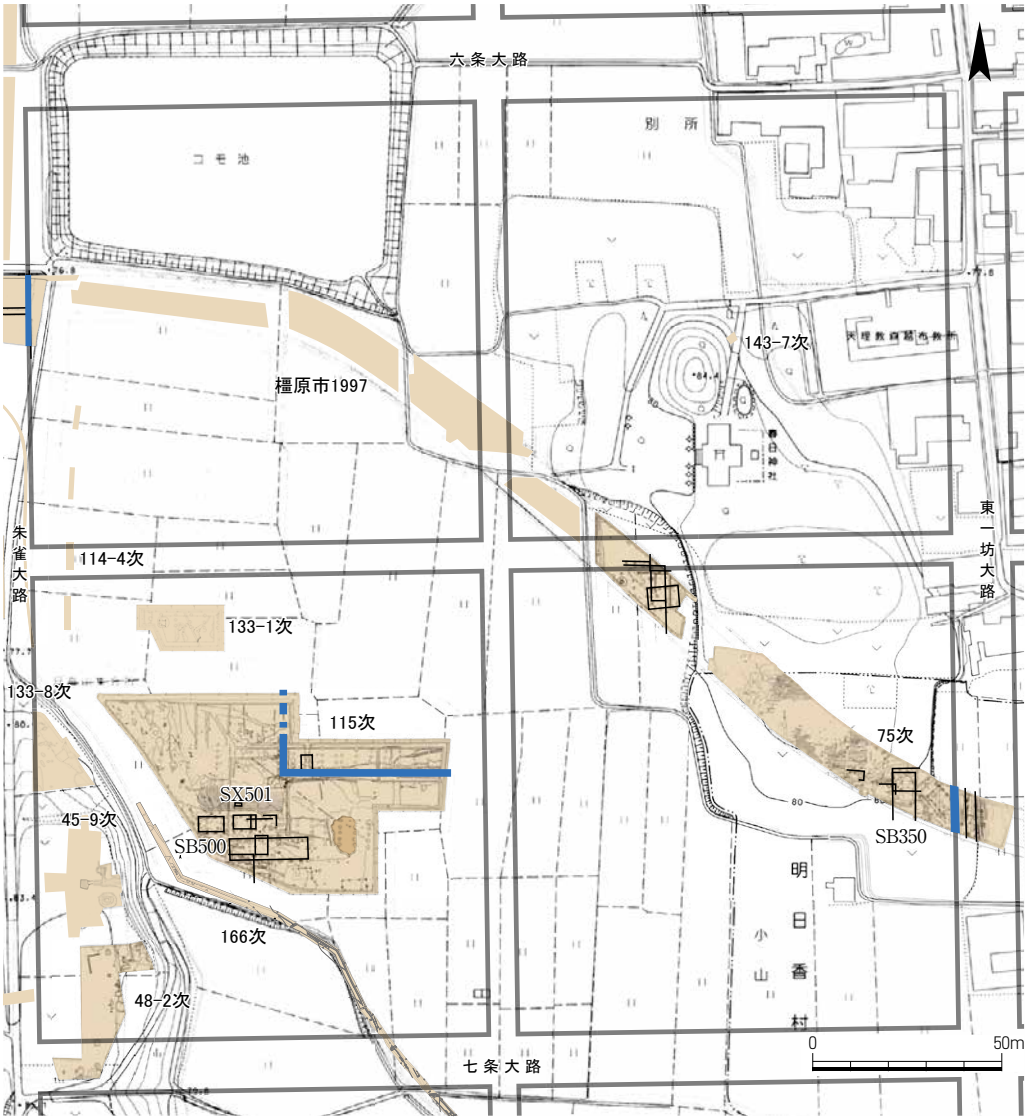


Fig. 279　左京七条一坊遺構配置図　1：2000

一辺１ｍ以上ある大規模な南北棟建物SB350を検出した（第75次調査）。

一方、西南坪では市営住宅建て替えに伴い、約3,000㎡を調査した（第115次調査）。坪の東西中軸線上に心をおく東西棟掘立柱建物SB500を検出し、その北の池状遺構SX501からは、１万3000点近くの多量の木簡が出土した。その内容は多岐にわたるが、門牓木簡が多く含まれていること等から、この地に衛門府の本司が置かれていたことが判明した[3]。

この所見をふまえ、橿教委の調査で出土した木簡を再検討したところ、門牓関連木簡を含むことを確認[4]した。東北坪と西南坪の木簡は共通する内容であることとなり、条坊遺構が検出できないこととあわせ、左京七条一坊の施設は四町占地である可能性が高い。なお、衛門府が広大な敷地を有することに関しては、衛士の宿舎等の関連施設を併設していたことによる、との見方[5]がある。

左京七条三坊東北坪・西北坪（附図2-13）　藤原宮東南隅の対角に位置し、本調査地の南方にあたる。宅地造成に伴い、東北坪から西北坪にかけて、428㎡を調査した。本調査地のSD4301の南延長に、東三坊坊間路東側溝と考えられる南北溝SD8700を検出した。西側溝は、削平のため

Fig. 280　右京二条一坊遺構配置図　1 : 2000

か検出できなかった。SD8700の埋土には流水の痕跡はみられず、一気に埋めた状況であり、その上に南北塀SA8701を設ける。このことから、東北坪と西北坪を一体として利用した時期があったことがわかり、六条大路をはさんで北と南で複数町占地をしていたこととなる。なお、東南坪でも東三坊坊間路にかけた位置で調査を行っている（第60-9次調査）が、削平が著しく、東側溝や塀は検出できなかった。

右京二条一坊東北坪・東南坪（Fig. 280）　住宅建設に伴う二条条間路の調査（第63-9次調査）では南側溝SD6412を検出し、北側溝は削平されていたものの、推定位置の北に東西に並ぶ柱穴列を確認した。条間路と西一坊坊間路交差点での調査（第66-8次調査）では、坊間路側溝と考えられる南北溝SD7331を検出した。他の側溝は削平されたとみられるが、東南坪西端に検出した南北塀SA7332は周辺の調査成果から知られる条間路を越えてさらに北に延びており、東北坪と東南坪が一体となった二町占地であることを強く示唆する。なお、東北坪では中央やや西寄りの場所での調査（第41-7次調査）で、藤原京期の南北柱穴列と井戸を検出している。

右京二条一坊西北坪・西南坪（Fig. 280）　両坪間の二条条間路は、2箇所で調査を行った。坪西半の第48-8次調査区では南側溝SD4880を検出したが、北側溝は既に削平されていた。条間路

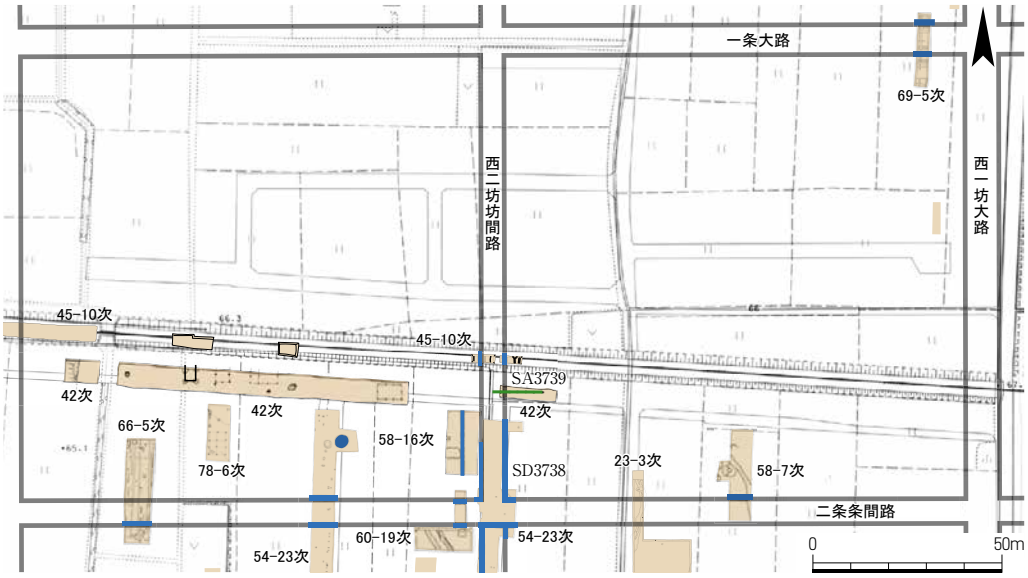


Fig. 281　右京二条二坊東北坪・西北坪遺構配置図　1：2000

上に南北棟建物SB4881を検出したが、時期不明とされている。この建物の柱穴には、礎板を置くものがある。坪東半の第60-5次調査区では、北側溝SD6411と南側溝SD6412を検出した。両側溝間の路面上には、1基の柱穴SX6413を確認した。調査区が狭小なために性格不明であるが、建物か塀になるものであろう。この様に、両調査において条間路をまたぐ何らかの施設の存在がともに確認でき、西北坪と西南坪は一体としての利用をしていた可能性が高い。西南坪の東北部では、大規模な南北棟掘立柱建物SB6835（『藤原概報20』ではSB01）を検出した。なお、東北坪と東南坪をも含めた四町占地である可能性も考えられるが、その点については判断する材料がない。

右京二条二坊東北坪・西北坪（Fig. 281）　数次にわたる調査で、二条条間路と西二坊坊間路の交差点および側溝を各所で確認している。第42次調査では、坊間路東側溝とみられる南北溝SD3738の出土土器が古い様相を示すことから、溝は藤原京期には廃絶するとしているが、出土土器は断片的なものである。SD3738を埋めた後には東西塀SA3739を設け、それは坊間路を越えて西に延びる。このことから、東北坪と西北坪を一体とした二町占地と考えられる。

右京七条二坊東北坪・東南坪（附図2-8）　橿教委が東南坪の東北隅部、および西一坊大路と七条条間路の交差点を1990年に調査し、それぞれ西側溝、南側溝を検出した。坪東辺と北辺に塀があり、当初は一町占地であったとみられる。しかし、条間路側溝は後に埋められ、東辺の南北塀が条間路を越えて北に延びる[6]ようになり、東南坪と東北坪を一体の敷地とする。ただし、この南北塀は東北坪北半の発掘調査（第78-9次調査）では検出していない。なお、東北坪では第54-13次調査で東西中軸線上に掘立柱南北塀を検出しているが、坪内での調査は進んでおらず、今後の調査の進展が期待される。

右京十一条二坊東北坪・西北坪（Fig. 282）　県道[7]建設に伴い、橿考研が調査を行った。この県道は橿原神宮前駅東口から飛鳥川までを東西に結ぶもので、様相が不明であった藤原京の南部で、右京十一条三坊から左京十一条二坊にかけて、長大なトレンチを入れることとなった。坊間路両側溝とみられる南北溝2条と、それより新しい大規模な掘立柱東西棟建物を検出した。建物は桁行16間、梁行2間で、全長21.5mに及ぶ。柱穴は1辺1.5～1.8mを測り、柱間は3～3.3mで

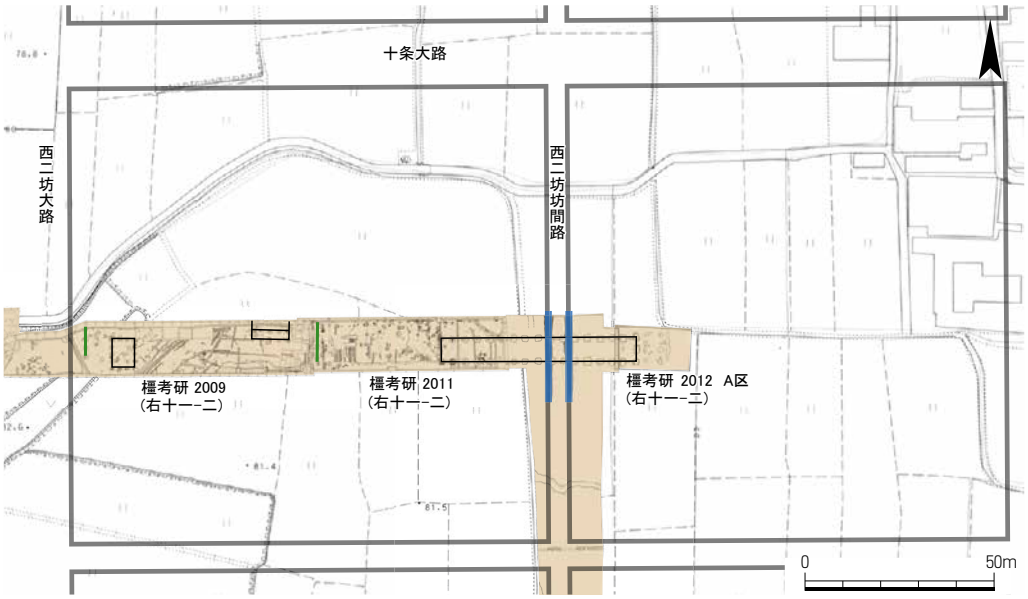


Fig. 282　右京十一条二坊東北坪・西北坪遺構配置図　1 : 2000

ある。柱穴の底には30～80cm大の根固め石を敷き詰め、柱径は30～40cmほどである。藤原京の南端に近い場所ではあるが、官衙的な施設が存在したと考えられる。その時期については、後述する雷丘北方遺跡等のように藤原京遷都以前の7世紀後半の可能性もあり、今後の検討課題となろう。

ii　一町占地

左京二条三坊西南坪（Fig. 283）　藤原宮東北隅の対角にある坪。住宅建設に伴い、3箇所で調査を行った。坪中央のやや北には、東廂付の大規模な南北棟とみられる建物がある。柱穴は一辺1.2～1.4mと大型で、坪内の主要な建物の一つと考えられる。その北では建物の西南隅部と南北塀を検出し、坪東辺では建物とも考えられる南北の柱穴列を確認した。南北棟建物の北妻は坪を四分割する線にほぼ一致する。こうした大規模建物の存在とその配置からみて、一町占地である可能性が高い。

左京七条三坊西南坪（Fig. 284）　市道建設に伴い、坪南部を東西に調査した。坪中央付近で大規模な柱穴を9基検出し、これを東西棟建物SB220の南側柱とみている。SB220は坪のほぼ東西中央に位置し、その西には南北の区画塀SA230、さらに坪西辺、東二坊大路東側溝の約12m東にはSA245がある。これらの

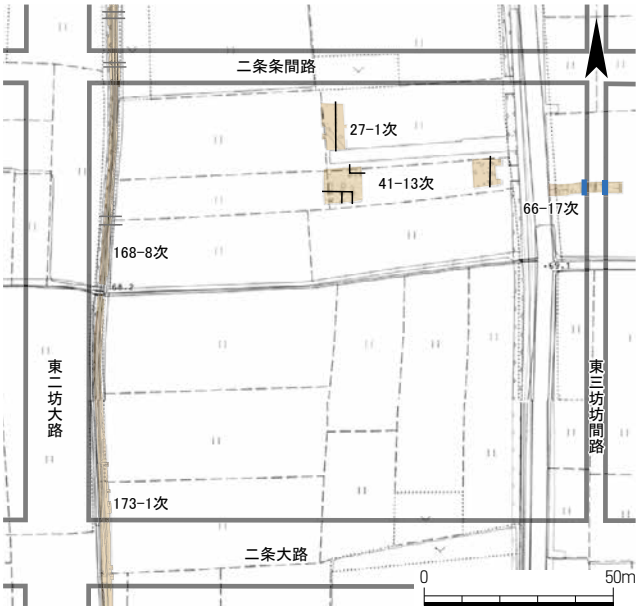


Fig. 283　左京二条三坊西南坪遺構配置図　1 : 2000

柱穴はいずれも一辺1ｍ以上の規模で、8尺方眼での配置計画が復元される。一方、SB220の東では区画塀は確認しておらず、T字形に接続する溝と、その交点に木製の桝状の木組みを配した導水施設を検出した。SA230が内郭、SA245が外郭の区画塀とみることもできるが、坪東半部には対応するような塀は検出しておらず、今後の調査の進展を待ちたい。建物や塀の規模と配置から、一町以上の占地であったとみられ、東南坪も一体として利用した可能性も考えられる。

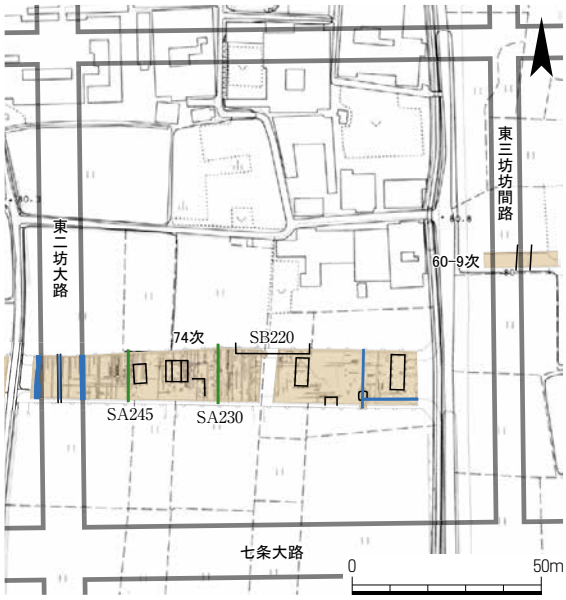


Fig. 284　左京七条三坊西南坪遺構配置図　1：2000

右京一条二坊東北坪（Fig. 285）　土地区画整理事業に伴い、東北坪の東南部分と条坊遺構を中心に、東南坪、西北坪、西南坪の一部を含めて、計約2,600㎡を調査した。北は岸説藤原京の北京極とされる横大路に面し、その南側溝をはじめ、西一坊大路・西二坊坊間路と両側溝などを検出した。東北坪は坪東南部で比較的広範囲を調査し、掘立柱建物24棟、掘立柱塀２条、溝等を検出した。これらは藤原京期を中心とした3時期以上にわたる。調査区内では、坪内を区画する施設は検出していない。坪南部には、ほぼ東西中軸上に比較的大きな南廂付東西棟建物SB7180がある。他の建物はいずれも小規模なものであるが、SB7180の東には北妻をSB7180の入側柱に揃える南北棟建物SB7158が建つとみられる。坪東辺でも柱筋を揃える建物群があるなど、規則的な配置も認められることから、一町占地の可能性がある。ガラス坩堝、フイゴ羽口、鉄滓、砥石、漆付着土器等、工房関係遺物が出土している。

右京二条三坊東南坪（Fig. 286）　藤原宮西北隅の対角にある坪。国道165号線橿原バイパスや住宅建設等に伴って数次にわたる調査を行い、坪内の様相が比較的明らかになっている。藤原京期の遺構は2時期にわたり、ともに大規模な建物を整然と配置する様相がうかがわれる。前半期には、東妻を検出しただけではあるが、坪の中央やや東南にSB3580・3595の東西棟建物２棟を南北に配し、その南方に門SB6840と区画塀SA3575を設ける配置が復元されている。SA3575は坪西南隅部での橿教委の調査で検出した南北塀に連なり、内郭と外郭を画する塀となるとも考えられるが、坪北

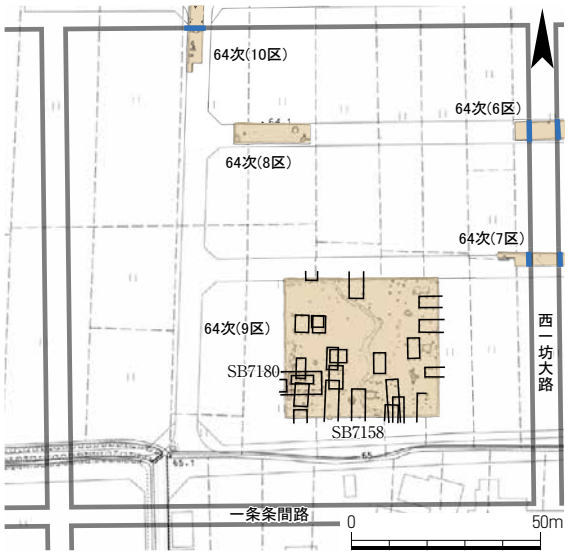


Fig. 285　右京一条二坊東北坪遺構配置図　1：2000

辺ではこれに類する区画塀は検出しておらず、坪東辺での状況は不明である。後半期にはこれらを廃して、坪のほぼ南北中軸線上に東西廂付南北棟建物SB3590を建てる。前半期、後半期ともにこれらの他に数棟の建物を配しているとみられ、坪内を分割する施設も見当たらないことから、藤原京期を通じて一町占地の施設であったのであろう。

なお西隣の西南坪では、橿教委による東南隅部の調査（二条三坊6次：1991年）で南辺、東辺に区画塀を検出し、一町占地の可能性も考えられるが、今後の調査の進展を待ちたい。

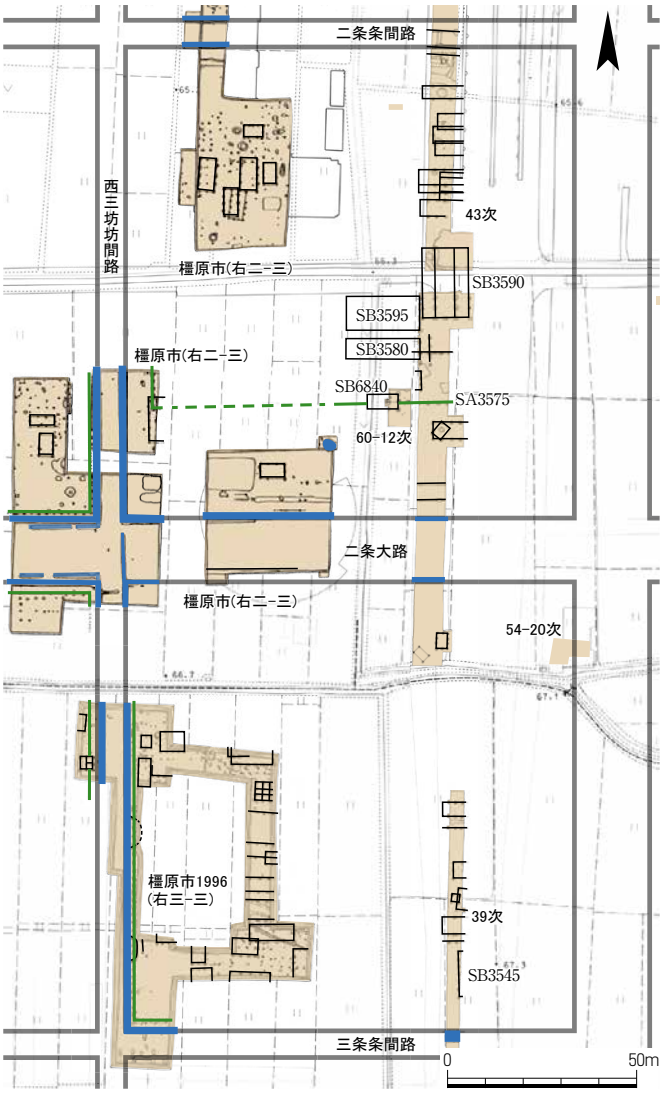


Fig. 286　右京二条三坊東南坪・西南坪・三条三坊東北坪・西北坪遺構配置図　1：2000

右京三条三坊東北坪（Fig. 286）藤原宮西北隅に接する坪。国道165号線橿原バイパスや区画整理に伴って、坪東半と西南部を調査した。その結果、西南部では西辺と南辺に沿って区画塀が巡り、内部には多数の建物や塀がある状況を確認した。西三坊坊間路東側溝に向けては、2条の弧状の溝が取排水しており、トイレ遺構とみられる。一方坪東半では、坪周囲を区画する塀は検出しておらず、東南部には桁行が6間の南北棟建物SB3545がある。比較的規模の大きな建物を配することと、藤原宮に接する地であることもあり、一町占地の可能性が高いが、坪周囲の区画塀の状況からみて、坪内の東西で利用形態が異なっていた可能性もある。

右京三条三坊西北坪（Fig. 286）　坪の北辺と東辺を、橿教委が調査した。周囲を塀で区画し、東辺では南北中軸よりやや北に門を検出した。坪内の調査は進んではいないものの、一町占地の可能性も考えられる。

右京七条一坊西北坪（Fig. 287）　住宅や市道建設の事前調査として、坪北半部を中心にかなりの範囲を調査し、橿教委も坪中央西部で調査を行っている。検出した遺構には中心的な建物と考えられるものは存在せず、小規模なものばかりである。坪北端には東西溝SD6510と、坪東辺でそれにT字形に接続する南北溝SD6512がある。藤原宮期の土器を出土するが、早い段階に埋められたようである。その後、SD6512のすぐ西に南北溝SD6511を掘り、西半にはSD7075[8]・7080

を設け、その間は坪内道路であったと考えられる。この様に、藤原京期前半には坪北半を三分割した利用がみてとれる。しかしSD7075上には後にトイレ遺構SX7420を設けていることから、ある段階でこの区画道路は廃されたと考えられる。橿教委の調査では、坪をほぼ南北に二分する位置で東西塀を検出した。坪東北部の区画溝SD6511は、この塀のすぐ北の第173-4次調査区までは延びるとみられるが、塀の南までは検出しておらず、坪の南半と北半では利用形態が異なっていたのであろう。

坪内では井戸等から多数の木簡が出土しており、その内容から藤原京期後半には右京職が存在していたことが明らかとなっている[9]。坪北半の区画施設が右京職の時期まで存続していたかについては判断する根拠に乏しいが、官衙の性格からみて、坪全体としての利用であったと考えられよう。藤原京期前半は坪を分割利用していた様だが、藤原京期後半には右京職の設置とともに、坪を一体とした占地へと変化した可能性が高い。

右京七条一坊西南坪（Fig. 287）　宅地造成に伴い、坪中央部を南北に調査した。坪中央には南側柱を南北中軸上におく7間×3間の身舎の四面に廂が付くSB4900があり、正殿とみられる。その東西には北妻をSB4900の北側柱にほぼ揃える5間×2間の南北棟建物SB4910・4920があり、それぞれ東西の脇殿となる。SB4900の北には7間×3間の身舎の南面に広縁となる廂が付く後殿SB4930があり、さらにその北には6間×3間の後々殿SB2000を配するとされている。坪の北面には掘立柱塀SA2029、南面には南門SB4950とSA4951・4952があり、四周を掘立柱塀で囲っていたのであろう。正殿のすぐ南には中門SB4940があり、東に延びる掘立柱塀SA4941は途中で北折し、北の区画塀SA2029にT字形に取り付く塀SA1997になるとみられ、これらが内郭の区画塀となる。検出した遺構は東西中軸線に対してほぼ対象となり、整然とした配置をとる。この様に、七条一坊西南坪は一町占地の施設であり、貴族の邸宅と考えられている。なお、坪北半の建物や塀には重複関係があり、途中で改作を行ったことを示す。

右京八条一坊東北坪（Fig. 287）　市営住宅建設に伴い、坪の北半部を調査した。藤原京期の遺構は、2時期の変遷がある。前半期は坪中央やや北寄りに桁行7間、梁行3間の東西棟建物SB104を建て、その北を東西塀SA116で区画する。後半期は、SB104とほぼ同位置に規模を縮小した東西棟建物3棟を建て、これらは桁行方向の柱筋を揃える。SA116は同位置でSA117に改修し、すぐ北には小規模な東西棟建物2棟がある。この2棟の建物は、L字形に巡る塀SA125・126とSA127・128にそれぞれ囲われる。なお、坪西端には柱筋を揃える南北棟建物SB461・462が坪北半と中央部にかけて南北に並ぶが、いずれの時期に属するかは決めがたい。坪中央付近に中心的建物が存在することと、整然とした配置が認められることから、一町占地の施設であったとしてよいであろう。

右京八条一坊西北坪（Fig. 287）　市営住宅建設に伴い、坪の東北部を調査した。周囲を掘立柱塀で区画し、内部に建物を整然と配する施設の存在が明らかとなった。区画塀は、東、北、西で検出した。これらの遺構は、2時期の変遷をたどる。前半期は3棟の東西棟建物SB431・430・468が柱筋を揃えて南北に並び、その東にSB425・428・467、西にはSB436・437・560が並ぶという整然とした配置をとる。後半期はこれらの建物を廃し、東端に北廂付東西棟建物SB466を建てるとされている。両時期ともに周囲を掘立柱塀で区画するが、西面の塀のみ位置を西にずらして建て替える。坪東北部のみの調査であり、南の区画塀については検出してはいないが、

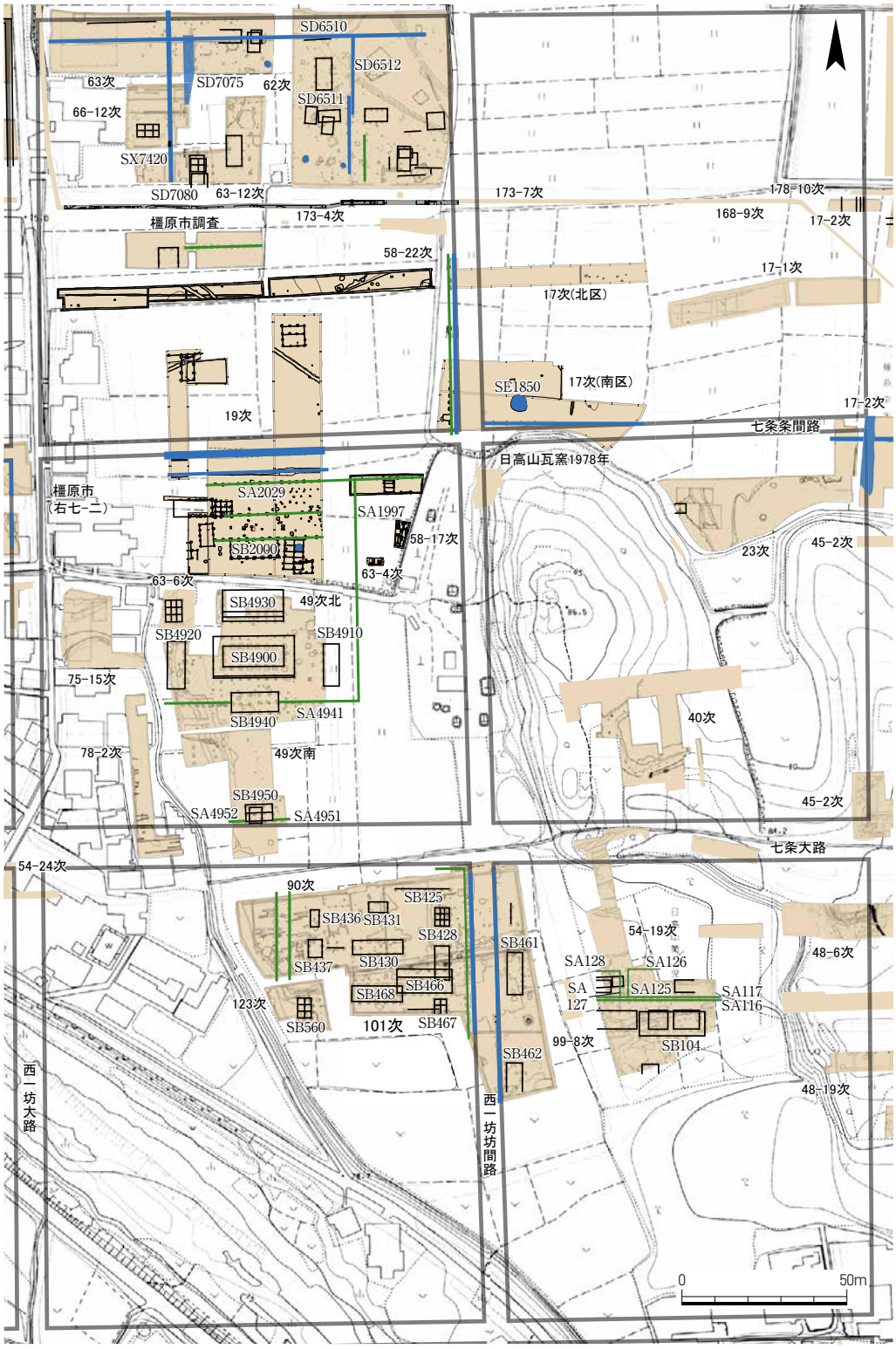


Fig. 287　右京七条一坊・八条一坊東北坪・西北坪遺構配置図　1 : 2000

ちょうど四分の一区画に納まる遺構群であることから、四分の一町占地と考えられている。しかし、西の区画塀は北の七条一坊西南坪の南門に向けて続き、西側の空閑地が通路状の機能をもつことが指摘されている。両坪は深い関係がある可能性が高く、八条一坊西北坪は坪内を区画している状況は認められるものの、個々の建物の規模も大きく、坪を一体として利用してい

たとみられる。なお、七条大路は推定位置に側溝は検出していないが、八条一坊西北坪の北区画塀と七条一坊西南坪の南区画塀間には道路状の空閑地が存在する余地はある。一方、西一坊坊間路では東西の両側溝を検出した。

ⅲ　坪内分割占地

左京北三条四坊西南坪（附図2-9）　橿教委が坪の東西中軸線上で南北に調査を行った。坪の北から四分の一の位置に東西道路、二分の一の位置には区画溝を検出し、南北は四分割していたと考えられる。

左京一条五坊西南坪（附図2-10）　店舗建設に伴い、橿教委が坪の東南部と西南隅部を調査した。小規模な掘立柱建物多数と井戸3基を検出し、3時期にわたる変遷がある。井戸は坪の東南隅部と、その西方で坪を三分割する位置、および西南隅部にあり、その位置関係から、坪内を東西に四分割して利用していたと考えられる。

左京二条二坊西北坪（Fig. 288）　藤原宮の北に接する坊で、北面東門の北約200mに位置する。住宅建設と公衆浴場建設に伴う調査を行い、坪西辺約三分の一の様相が判明している。周辺には「テンヤク」の字名が残り、1965年度の奈良県教育委員会の調査で出土した典薬寮関係木簡からも、典薬寮との関係が注目されていた。また、苑地の存在も推定されるなど、藤原宮の付属地とみられていた地である。しかし、調査結果はこれらを肯定するものではなく、遺構は比較的小規模なものである。検出した遺構は、天武朝から藤原京期にかけて、3時期ないしは4時期の変遷がある。いずれの時期も比較的小規模な建物や塀が散在する状況であり、中心的な建物は確認していない。藤原京期後半には坪を南北に二分する位置に坪内道路を設けており、坪内を分割した様子が明らかである。北の区画からは砥石や炉壁小片、漆付着土器が出土し、金属製品関係の工房の存在を示唆する。坪南半は坪を東西に四分割する位置に南北溝を掘り、さらに分割した利用がうかがえる。

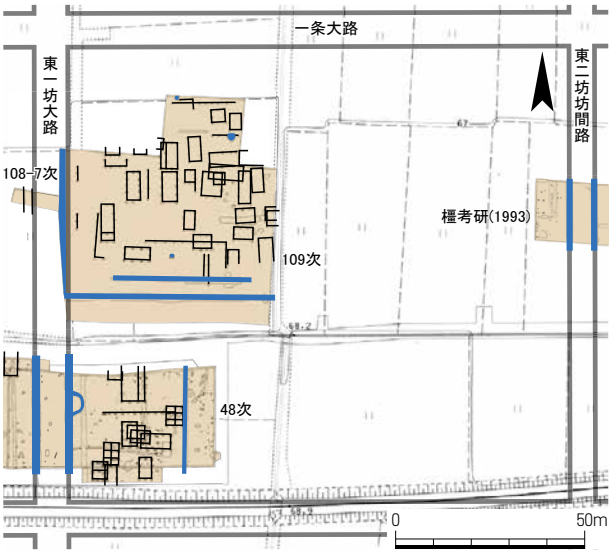


Fig. 288　左京二条二坊西北坪遺構配置図　1：2000

東一坊大路をはさんで西接する二条一坊東北坪では、遺構密度は薄く、建物は小規模なものが点在するだけである。

左京二条七坊東北坪（吉備大角遺跡）（附図2-11）　住宅建設に伴い、桜井市教育委員会が一条七坊東南坪から二条七坊東北坪にかけて調査を行った。検出した遺構は、いずれも小規模なものである。坪を東西、南北ともに二分する位置に掘立柱塀が認められ、四分割して利用していた可能性が高い。

左京四条十坊西北坪（吉備池遺跡）（附図2-12）　工場建設に伴い橿考研が試掘調査を行い、後に

桜井市教育委員会が同位置でより広範囲な調査を行った。調査地は吉備池廃寺の南方にあたる。坪の南から三分の一の位置で東西溝を検出し、これは坪内の区画溝と考えられる。その南北には小規模な建物が建つ。

左京七条二坊東南坪（Fig. 289）　藤原宮の南に接する坊で、東に東二坊大路が通る。市道建設に伴い、坪南部を東西に調査した。検出した建物はいずれも小規模なもので、東隣の七条三坊西南坪とは様相を異にする。坪の東西中央やや西の位置に南北溝SD290があり、東からおよそ三分の一の位置には南北溝SD266・267・268とその東にSA262・263を検出した。これらの塀や溝の位置や建物の規模からみて、坪内を分割していた可能性が高い。一帯の旧地形は谷筋であり、西隣の西南坪は中央に流路がある低湿地状の地で、小規模な建物や井戸以外は顕著な遺構は検出していない。この地は、南の左京八条二坊の地を占める紀寺に付属する苑院である可能性も指摘されている。

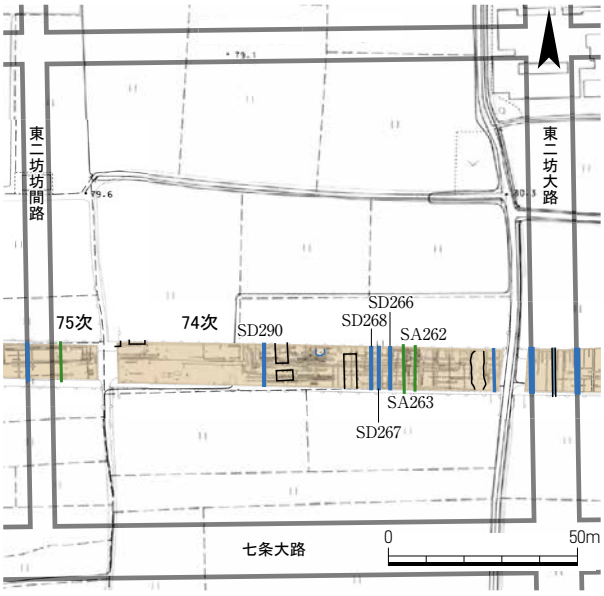


Fig. 289　左京七条二坊東南坪遺構配置図　1：2000

左京十一条一坊西南坪（Fig. 290）　県道建設に伴い、2000年から翌年にかけて橿考研が調査を行った。当該坪西の朱雀大路は東側溝とみられる溝を検出し、坪西辺には3条の南北塀がある。坪のほぼ東西中軸線には、平行する南北塀があり、それぞれ建て替えがある。塀の間は溝状の落ち込みとなり、東西に分割して利用した状況が知られる。西の区画には掘方が一辺1.1mほどある東西棟建物と、その北に東西塀がある。この区画内の中世の井戸からは凝灰岩切石と塼が出土しており、西方に存在する和田廃寺との関連がうかがわれる。東の区画には、区画内をさらに分割する塀や総柱建物がある。

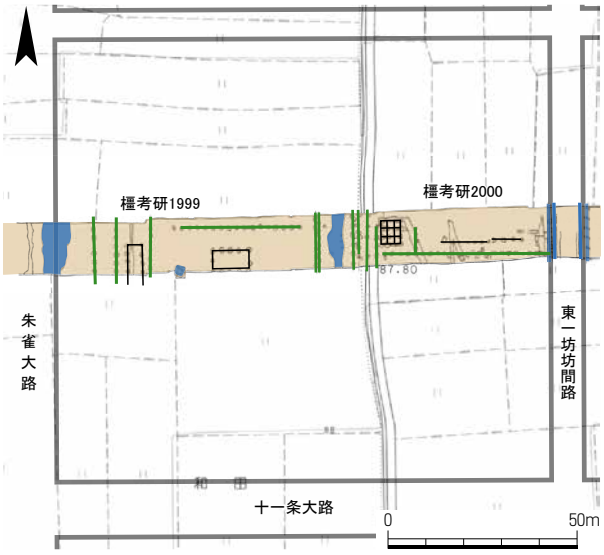


Fig. 290　左京十一条一坊西南坪遺構配置図　1：2000

東南坪は東一坊大路の西に区画塀と南北溝があるものの、古代の遺構は極めて希薄である。

左京十一条二坊西南坪（Fig. 291）　県道建設に伴い、橿考研が調査を行った。坪東西中軸よりやや西に、南北溝とそれに平行する塀を設け、東西に分割している様子がわかる。西の区画は西

端に総柱建物があり、井戸も検出した。東の区画には、南北棟建物が散在するが、いずれも小規模なものである。

右京北五条一坊西南坪（下明寺遺跡）（附図2-3）　橿教委が遺跡の内容確認のための調査を行った。狭小な調査区ではあるが区画塀ともみられる塀を検出し、南北を四分割していた可能性がある。

右京北五条十坊西南坪・東南坪・西北坪（土橋遺跡）（Fig. 292）　土地区画整理事業に伴い、西南坪と条坊遺構を中心に、橿教委が約8,000㎡を調査した。大藤原京の西京極を確定させた発掘調査として著名であり、あわせて坪内の利用状況も明らかとなった。西南坪内は区画溝によって大きく区切られ、東半分は四分の一町、西半分は八分の一町以下の規模の宅地となるとみられる。遺構の配置が判明した坪内東北部の区画では、東西ほぼ中軸上に主屋とみられる掘立柱南北棟建物があり、その北、東、西に付属建物を配する。建物はいずれも小規模なもので、柱穴も小さい。東西の建物の外側に沿って、掘立柱塀が南に延びる。坪内を分割した各区画の南東部には井戸があり、生活の様子をよく示す。

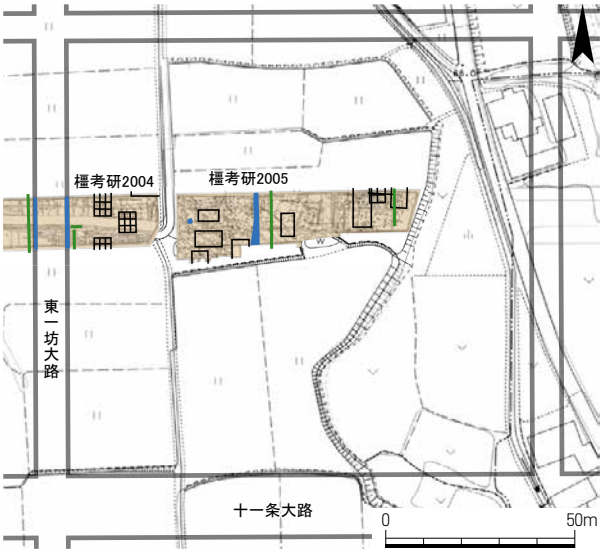


Fig. 291　左京十一条二坊西南坪遺構配置図　1：2000

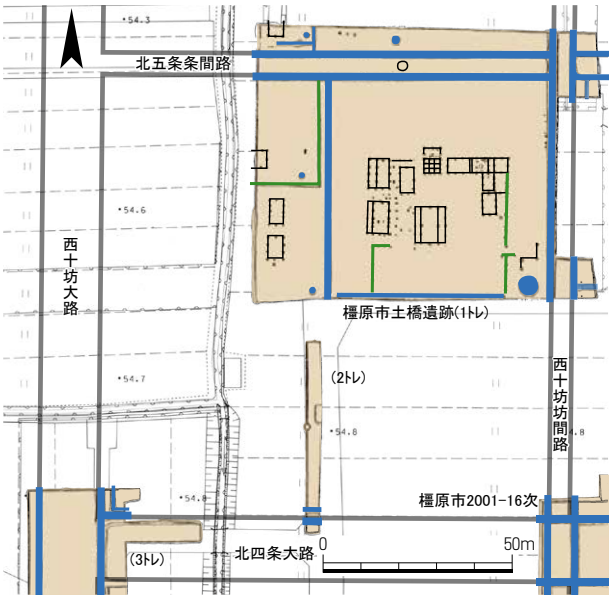


Fig. 292　右京北五条十坊西南坪構配置図　1：2000

東南坪と西北坪はその一部を調査したのみであるが、東南坪は南北、西北坪では東西に坪内を分割する区画溝をそれぞれ検出している。

右京北三条三坊東南坪（附図2-2）　店舗建設に伴い、橿教委が坪の西辺部から西南坪東部にかけて約2,500㎡を調査した。西三坊坊間路と両側溝を検出し、東側溝からは東に向けて東西溝が延びる。この溝は坪を南北にほぼ二分する位置にあり、区画溝と考えられる。東南坪での建物等の遺構は、削平が著しいためか、調査区内では検出していない。

右京一条一坊東北坪（Fig. 293）　店舗建設に伴い、橿教委が坪のほぼ中央部で約2,000㎡を調査した。坪をほぼ南北に二分する位置に東西道路があり、そのすぐ南には東西塀がある。北区画には小規模な建物が多数建つ。南区画は調査面積が少ないが、遺構密度は高くない。北区画で

Fig. 293　右京一条一坊遺構配置図　1:2000

は3基、南区画では2基の井戸を検出しており、調査面積に比して数が多い。周辺は工房関係遺物の出土が多い地域だが、当該坪からは出土しておらず、性格が異なるとみられる。

右京一条一坊西北坪（Fig. 293）　店舗建設に伴い、坪の中央から南東部よりの1,270㎡を調査した（第81次調査）。検出した遺構の時期は、天武朝から藤原京期、および奈良時代前半にわたる。藤原京期の建物は規模が小さく、分布も希薄である。坪内の利用状況は不明な点が多いが、東西道路とその南の塀により坪内を南北に二等分している可能性が指摘されている。また、工房関係遺物の出土が多いことが注意されている。検出した井戸は重複するものを含めて6基で、南方の第60次調査でも坪南端に1基を検出しており、調査面積に比して数が多いと言える。井戸には、廃絶が奈良時代に下るものがある。

右京一条一坊西南坪（Fig. 293）　店舗建設に伴い、一条条間路と坪の中央北部の約2,200㎡を調査した。検出した遺構の時期は、天武朝から藤原京期、および奈良時代前半にわたる。条間路沿いに坪の周囲を画する塀はなく、条間路南側溝付近まで建物が建つ。坪の東西中央にあたる場所であるが、藤原京期の建物は少ない。また、坪北端に柱穴が比較的大型の建物がある以外は、建物の規模は小さい。フイゴ羽口、坩堝、鋳型、銅滓、砥石、漆付着土器など、工房関係遺物の出土が極めて多い。井戸は3基検出し、2基は廃絶が奈良時代に下る。区画施設は検出

していないものの、井戸の検出数と建物の規模からみて分割した利用が考えられる。

右京一条六坊西南坪（院上遺跡）（附図2-1）　橿原郵便局と市役所別館建設に伴い、橿考研が坪の東辺を調査した。坪を二分する位置に東西溝を検出し、南北に分割していた可能性がある。一方、斎串や馬の骨等を埋納した祭祀土坑を3基検出し、鉈尾やガラス板も出土するなど、一般の宅地とは異なる様相をみせる。

右京四条六坊東北坪（四条遺跡）（Fig.294）　奈良県立医科大学附属病院改築に伴い、橿考研が数次にわたる調査を行い、坪内の広範囲の様相が判明している。遺構は、3時期ほどの変遷がある。坪の東辺には井戸が等間隔で南北に並び、その位置から南北は四等分に区画したことが判明する。東西には二等分程度の区画を推定し、全体で八分の一町占地としての利用とみられている。区画施設は調査地内では判然としないが、一部で区画溝ともみられる東西溝を検出した。東方に通る西五坊大路の側溝からは、斎串や鉄製人形等の祭祀具が出土し、また役人を呼ぶ際

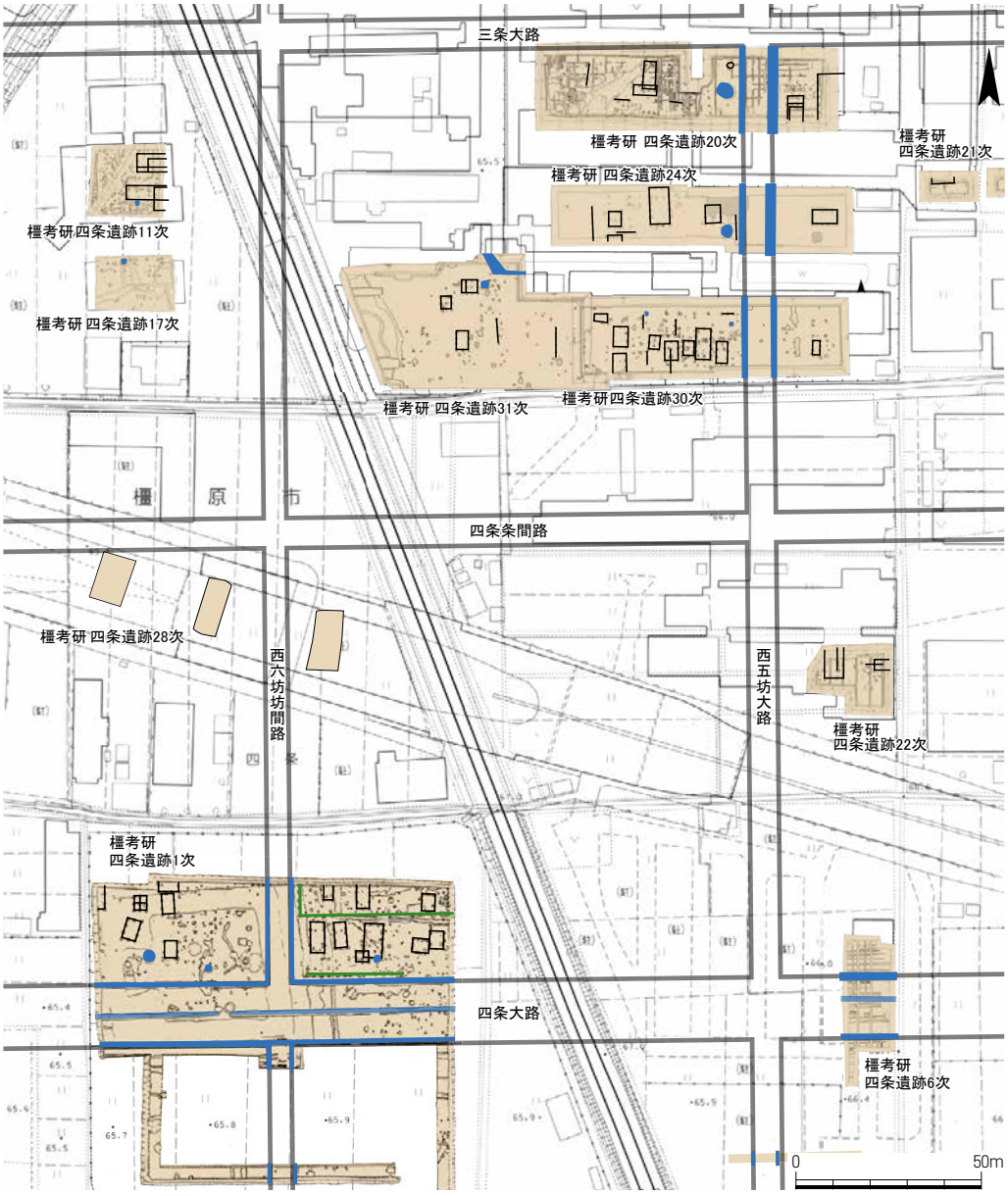


Fig. 294　右京四条六坊東北坪・東南坪遺構配置図　1:2000

の召文木簡も出土したことから、近辺に公的機関が存在する可能性も指摘されている。

西隣の西北坪では2箇所での小規模な調査を行っただけであるが、それぞれ井戸を検出しており、同様に分割した利用であったとみられる。

右京四条六坊東南坪（四条遺跡）（Fig.294）　奈良県立医科大学グラウンド造成に伴い、橿考研が四条大路と西六坊坊間路の交差点周辺を調査した。坪西南隅部では、塀によって細かい区画に分割する様子が判明した。区画内には小規模な建物や井戸があり、2時期の変遷がある。

西隣の西南坪東南隅部では、区画施設は見当たらないものの、同様に小規模な建物や井戸が散在している。

右京四条七坊東北坪（四条遺跡）（附図2-4）　国道建設に伴う調査で、橿考研が坪の南辺部を調査した。十数棟の建物や数条の塀、井戸等を検出した。これらの遺構はいくつかの単位をなし、複数回にわたる重複がある。区画に関わる施設は検出していないが、建物はいずれも小規模なものであり、坪内を分割して利用していた可能性が高い。西南部では、土師器短頸壺を据えた地鎮遺構を検出している。西六坊大路西側溝からは富本銭や土馬、帯金具、馬歯などが出土し、交差点での祭祀の可能性が考えられている。また、漆の付着した土器がまとまって出土し、西側溝の廃絶後には鍛冶も行なっている。

右京四条七坊西北坪（四条遺跡）（附図2-4）　国道建設に伴う調査で、橿考研が坪の東南隅を調査した。東北坪との間の、西七坊坊間路西側溝をまたぐ建物を2棟検出した。これらの建物の時期は藤原京期とされるが、小規模なもので、厠や橋的な性格とも考えられる。一方、東北坪西端の東西塀が東側溝をまたいで西に延び、路面まで達するともみられ、両坪を一体として利用した可能性も否定できない。しかし、検出した遺構は両坪ともに小規模で、藤原宮周辺での複数町占地の施設とは性格が異なるものであろう。

右京五条四坊西北坪（附図2-5）　かしはら万葉ホール建設に伴い、橿教委が坪西南隅から西辺中央部にかけて調査を行った。坪ほぼ中央で、坪を南北に二等分する東西道路を検出した。道路が西側の西四坊大路（下つ道）東側溝を越える場所には、橋が架かる。南側の区画では小規模な建物を3棟検出したが、遺構密度は高くはない。東側溝からは、斎串や鉄製人形、墨書人面土器、土馬、小型模造土器等の祭祀具が出土した。一部は奈良時代まで下る可能性がある。

右京五条六坊東南坪（Fig.295）　区画整理事業等に伴い、橿教委が坪東北部と西辺部を調査した。東辺と西辺には区画塀が巡る。坪をほぼ東西に二分する位置には南北の道路が通り、分割して利用していたことがわかる。坪内には南北棟を主体とした建物を、建て替えをしながら配置する。西辺では鍛冶関係の遺物が出土し、工房の存在も考えられている。

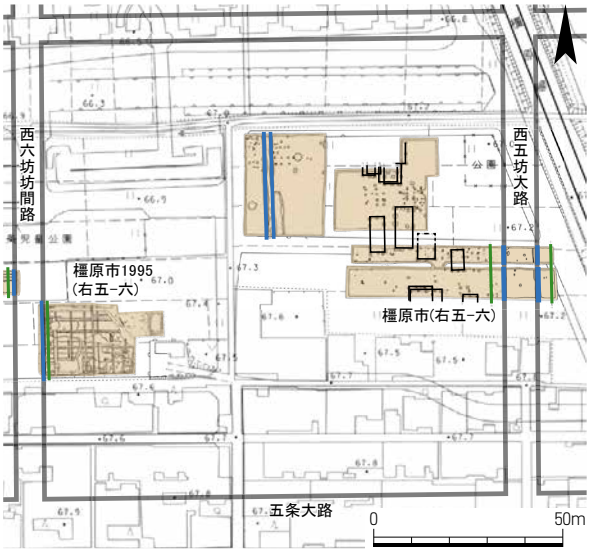


Fig. 295　右京五条六坊東南坪遺構配置図　1：2000

右京六条五坊東北坪（Fig. 296）　区画整理事業等に伴い、橿教委が坪東辺部と西南隅部付近を調査した。東辺部では建物が集中する範囲が4箇所にみられ、それぞれのまとまりの東北部には井戸が1基ある。井戸4基は約20m間隔で南北に並び、調査区南方の六条条間路までの間にもう1基存在する余地はある。こうした配置関係から、塀などの区画施設を伴わないものの、坪東半は四ないし五分割して利用していたと考えられる。坪西南隅部では、削平が著しいために遺構の密度は薄いが、坪西辺に井戸を1基検出した。坪東半と同様、分割しての利用が考えられる。西五坊坊間路は、削平のためか検出できなかった。一方、坪東南部の井戸抜取穴から金属製人形が出土しており、一般の宅地とは異なった様相もうかがわれる。また、坪東南部では焼土坑を多数検出し、鍛冶関係の遺物の出土や、あるいは内部に焼土坑がある建物の存在などから、工房であった可能性も指摘されている。ここでは、当坪は分割占地とみておくが、実際の占地はより大きなもので、規則的な遺構配置は坪内での利用状況の差を示す可能性もある。

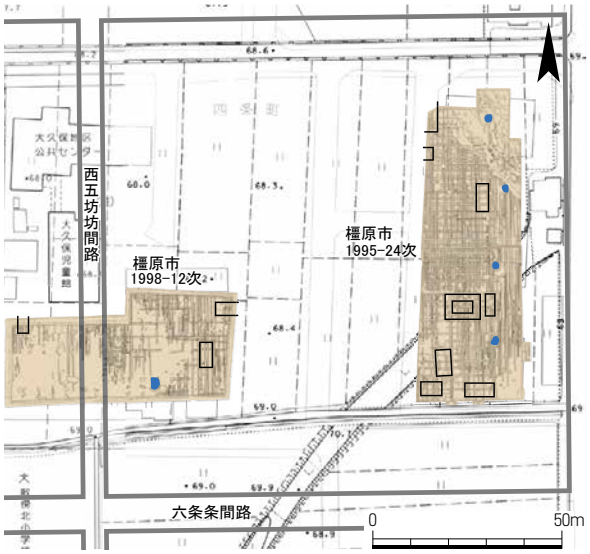


Fig. 296　右京六条五坊東北坪遺構配置図　1 : 2000

右京八条四坊西南坪（附図2-7）　マンション建設等に伴い、坪西半の南西部、中央付近と、北辺から西北坪にかけた場所で調査を行った。八条大路沿いには、東西の区画塀がある。この塀は坪西端から三分の一の位置で途切れ、塀の中ほどには門が開くことから、東西は三分割した利用が考えられる。

なお、西北坪では八条条間路に沿って区画塀があり、内部には小規模な建物を柱筋を揃えて配している。

右京八条五坊東南坪（附図2-6）　坪西北辺で、東北坪にかけて南北のトレンチ調査を行った。両坪ともに八条条間路に沿って東西の区画塀がある。東南坪では、さらに坪を南北にほぼ四分割する位置に区画塀を設けている様である。

右京十条四坊西北坪（Fig. 297）　マンション建設等に伴い、橿教委が数度にわたり調査した。坪東西中軸付近の調査では、坪を南北に二分割する東西道路と、それにT

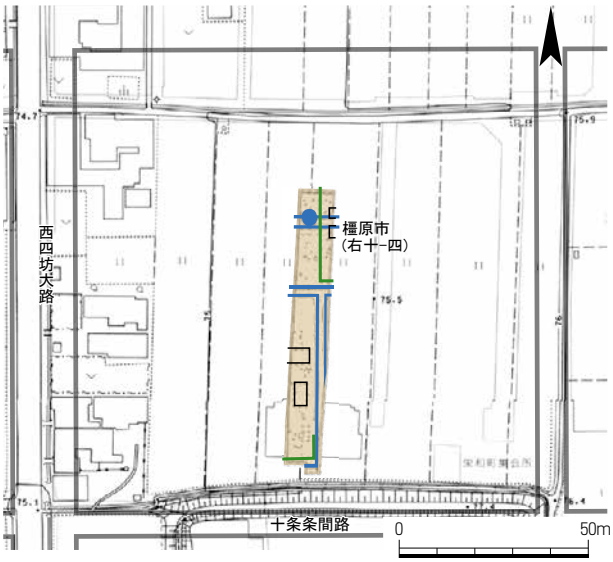


Fig. 297　右京十条四坊西北坪遺構配置図　1 : 2000

字形に取り付き、坪南半を二分割する南北道路を検出した。南北道路の北延長には、南北塀がある。これらは坪の東西、南北の中軸線上にあたり、坪を少なくとも四分割した占地がうかがわれる。南北塀の南端には東に向けて東西塀が取り付き、東北の区画は塀で囲っていた様である。また、西南の区画の東南隅には、逆Ｌ字形の区画塀が一部にみられ、南辺は塀で区劃していた様である。南北塀と重複した場所で、坪をほぼ南北に三分割する位置には、東西の道路がある。時期によって、区画のあり方を変更したことが知られる。

右京十条五坊東南坪（Fig. 298）　坪の西北部を橿教委が調査した。北辺と西辺は、条間路、坊間路に沿って塀で区画する。坪の南北二等分線上には東西溝があり、区画溝とみられる。北半の区画は、建物配置から四分の一町占地と考えられている。南の区画では、坪西辺を画する塀の東方約20ｍに区画溝から南へ延びる南北塀があり、さらに細かく区画していた様子がうかがえる。

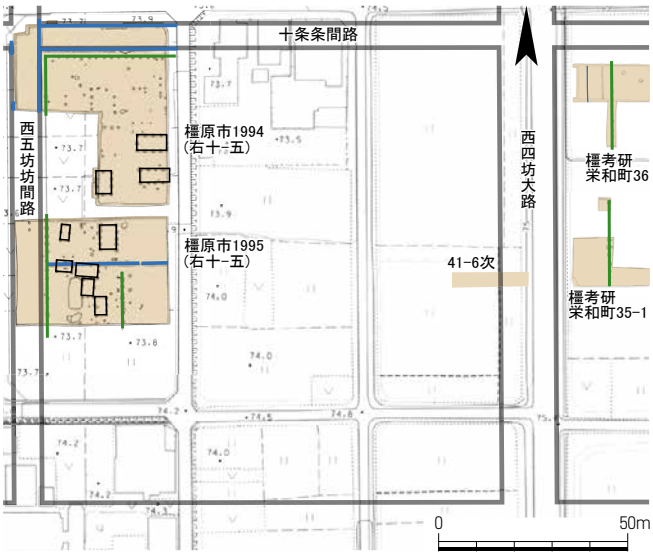


Fig. 298　右京十条五坊東南坪遺構配置図　1：2000

西四坊大路をはさんで対面する十条四坊西南坪では、坪西辺を画する南北塀を検出している。

右京十一条三坊東北坪（Fig. 299）　県道建設に伴い、橿考研が調査を行った。右京十一条三坊から左京十一条二坊にかけての一連の調査であり、坪の中央やや南を幅16～18ｍで東西に調査した。東西の中軸に近い位置に、南北の区画塀を検出した。塀の東には平行する南北溝があり、坪内道路の西側溝とも思われるが、東側溝の推定位置は未調査地にあたる。坪西半では南北中軸上に東西塀があり、さらに分割している。坪東半には区画塀とみられる南北塀があり、さらに分割していた様である。

西隣の西北坪では、坪東辺に南北塀と、井戸２基を検出している。

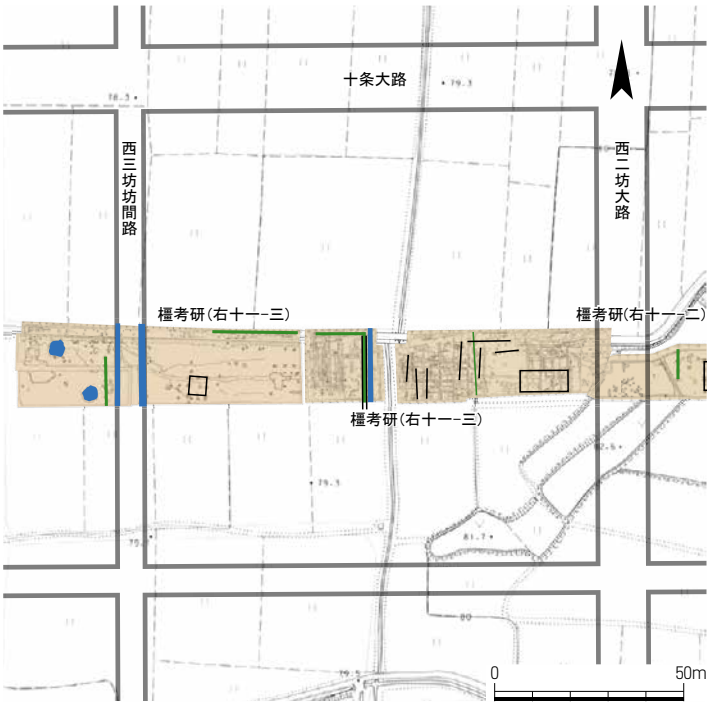


Fig. 299　右京十一条三坊東北坪遺構配置図　1：2000

ⅳ　藤原京遷都以前から存続する複数町占地

第Ⅰ章Ａでみた様に、藤原京の造営は本薬師寺発願の天武天皇９年（680）にはかなり進んでいたとみられ、本薬師寺の寺域は右京八条三坊の坊内に正しく収まっている。この様に藤原京遷都以前の７世紀後半に造営を開始した施設が、藤原京期もそのまま存続すると考えられる例がいくつかみられる。これらは全て藤原京の南端に近い場所であり、飛鳥浄御原宮の周辺部に所在している。

左京十一条三坊西北坪・西南坪（雷丘北方遺跡）（Fig. 300）　県道新設とそれに伴う住宅移設に伴い、東二坊大路から西南坪、東南坪にかけて計約2,810㎡を調査した。特に西南坪は坪西北部と南北中軸線付近を広範囲に調査し、多数の建物や塀、溝などを検出した。坪の北半に、５間×４間の四面廂付東西棟の正殿SB2661が建つ。その西南には東西に廂をもち、桁行17間という長大な西南脇殿SB2670があり、南妻は坪の南北二等分線とほぼ一致する。西南脇殿の北方には、桁行間数は不明ながら、柱筋を揃えた西北脇殿SB2672を配する。SB2672は十一条条間路を越えて西北坪までさらに延びると判断され、敷地は少なくとも西南坪と西北坪にわたる二町占地とみられる。東側の対称の位置でも、東南脇殿とみられる南北棟建物SB2830の南端を検出しており、その北では東北脇殿SB3000の西南隅を検出した。さらに、南には桁行17間の東西棟建物SB2850があり、正殿を囲んで閉鎖的な空間を構成する。建物群の周囲には区画塀が巡り、区画の南には大規模な溝がある。

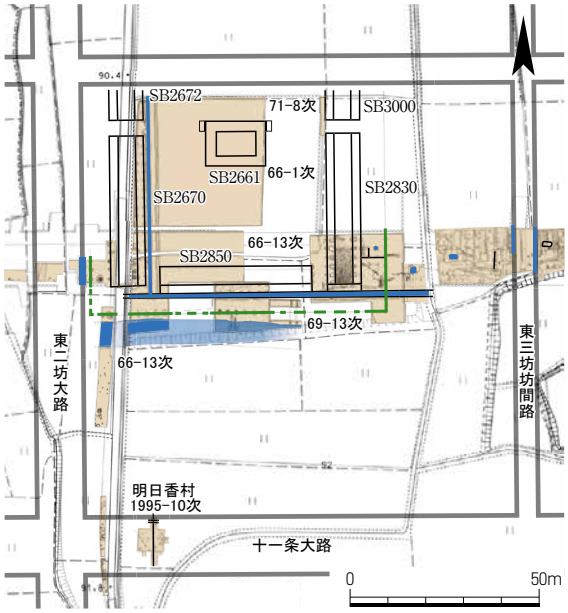


Fig. 300　左京十一条三坊西南坪遺構配置図　1：2000

これらの施設は、出土した土器から、７世紀後半の造営で藤原京期を通じて存続し、奈良時代に廃絶したと考えられる。この様な正殿と長大な脇殿による配置をとる建物群は藤原京内では極めて異例で、後殿の存在を考慮したうえで飛鳥稲淵宮殿と類似するという指摘もあるが、官衙、あるいは上級貴族の邸宅である可能性も含めて、検討の余地がある。

一方東南坪では、遺構面の削平が著しいこともあり、藤原京期の顕著な遺構は検出しておらず、占地がさらに広がるかについての判断材料は得られていない。

左京十一・十二条三坊東南坪・東北坪（雷丘東方遺跡）　住宅建設や道路拡幅に伴い、奈文研と明日香村教育委員会が計約4,500㎡を調査した。７世紀から奈良・平安時代にかけての遺構を検出し、そのうち奈良時代後半から平安時代初期の遺構は、出土した「小治田宮」銘墨書土器から『続日本紀』に記載がある小治田宮であることがほぼ確実となっている。７世紀後半の遺構は桁行９間以上の長大な南北棟建物が２棟あり、天武朝から藤原京期にかけて存続したとされている。調査区内には十二条条間路推定位置を含むが、関連する遺構は検出していない。

左京十三条三坊（石神遺跡）（附図2-14）　1981年度以降、石人像や須弥山石を出土した遺跡の様相解明のために継続的な調査を行った（石神遺跡1～21次調査）。その結果、7世紀代から奈良時代にわたる遺構の状況が明らかとなり、特に7世紀中頃の斉明朝には饗宴施設の存在が考えられている。遺構は大きくA期（7世紀前半～中頃）、B期（天武朝）、C期（藤原京期）に区分される。天武朝から藤原京期の遺構は、遺跡南西部の飛鳥川に近い地域にまとまっている。藤原京期には、方形の区画内に桁行7間の細長い南北棟建物や総柱建物が点在する。区画の南方には桁行7間の東西棟建物があるとみられる。区画の大きさは南北約70mで、東西もこれと同規模とみれば、藤原宮内裏東方官衙地区の規模との近似性も指摘されている。他には、区画の東北方にも南北に廂が付く東西棟建物や総柱建物がある。なお、遺跡の北方で7世紀中頃以降の山田道を確認したが、それ以外の条坊道路推定位置では該当する遺構を検出していない。

B　右京七条一坊西南坪をめぐって

i　右京七条一坊と八条一坊の占地

右京七条一坊（以下、七条一坊とする。）のうち、西南坪と西北坪は比較的広範囲を調査し、坪内の遺構の状況がある程度明らかとなっている。西南坪は正殿、脇殿、後殿、後々殿などからなる一町占地の貴族の邸宅と考えられている。一方、西北坪は区画溝の変遷から藤原京期に大きく2時期の変遷があると考えられ、大宝元年（701）以降には右京職が所在したことが出土した木簡から判明している。西南坪では坪北辺と南辺で外周の区画塀を検出し、南の区画塀には南門が開く。東辺と西辺の区画塀は未検出であるが、北辺と南辺の状況からみて、ここにも塀が存在し、坪全周を掘立柱塀で区画するとみられる。坪の南では、日高山の現地形を見ると七条大路推定位置に帯状の削平部があることから、そこが七条大路にあたるのであろう。しかし、これまでの周辺の調査では、七条大路の側溝は検出していない。

右京八条一坊（以下、八条一坊とする。）西北坪の調査では、坪の北東部に建物を整然と配する2時期にわたる施設があることが明らかとなった。これらの建物群の東、北、西では塀を検出し、周囲を塀で区画していたとみられる。東辺の区画塀SA421は、坊間路西側溝心から西に約2.0mの位置にある。西辺の塀は、当初のSA440を約4m西にずらしてSA441とするが、ともにその西側は空閑地となる。これは七条一坊西南坪の南門へ向かう通路としての機能も考えられており、七条大路をはさんだ両坪の強い関連性が示唆されていた。

七条一坊西北坪と西南坪周囲の区画施設をみると、西北坪東辺では第17次調査で西一坊坊間路西側溝と、その心から約1.5m西に坪東面を画する塀SA1855を検出した。この位置関係は、八条一坊西北坪での状況に近似する。一方、坪南面では第19次調査で七条条間路の両側溝を確認したが、その北には坪南面を画する施設は検出していない。即ち、坪東面と南面の区画は異なっていることがわかり、SA1855は条間路を越えてさらに南に延びる可能性も考えられる。一方、北に向けては第62次調査区では延長部を検出しておらず、坪北面でも区画施設は見あたらない。こうしてみると、七条一坊西北坪と西南坪は坪の東辺に一連の区画塀が通る時期があることも考えられるのであり、八条一坊西北坪とも密接に関連する可能性があることが知られる。

ⅱ　七条一坊西南坪の再検討

七条一坊西南坪は一町占地の貴族の邸宅と考えられており、その様な性格があったことは首肯できる。問題は、藤原京期全体を通じて貴族邸であったかである。検出した藤原京期の主要な遺構は、細かい変遷はあるものの、全て同時期であるとされている[10]。しかし、概報では詳しくふれられていないが、詳細に検討すると以下の諸点に再検討が必要なことに気づく。

① 敷地北側、第19次調査区で検出した遺構には重複関係があり、東西塀SA2020→東西棟建物SB2026→総柱建物SB2025の順に変遷したとされること。

② 区画塀の取り付き方や内郭の主要遺構の振れに、詳細な検討がなされていないこと。

③ 敷地東北部の第58-17次調査区で、東西塀を１間分検出した。これはSA1975の延長上にあり、柱間寸法はやや異なるものの、南北塀SA1997を越えて同一の塀となる可能性が指摘されていること。

④ SB2000の北には炉壁や焼土、炭を含む土坑が多く、小鍛冶に伴うものと考えられること。

⑤ 概報に記述はないが、第49次南調査区の西北部、西脇殿南方にあたる位置に、柱間2.3ｍで南北に並ぶ３基の柱穴を検出していること。断ち割った北端と南端の２基の柱穴はいずれも底に花崗岩の礎板石を置くもので、何らかの建物が存在したことを示唆する（Fig.302）。

①に関しては、SA2020はSB2026と重複関係があり、SA2020が古いとされている。SA2020は途中で柱穴を検出していない部分があり、その西での平均の柱間はおよそ2.7ｍである。SA2020はSB2026の南東隅の柱穴まで延びて途切れるとされるが、その西端１間分の柱間は3.4ｍとなり、広い。SA2020とSB2026南側柱の柱筋は一致している。SB2026の東南隅柱穴としている穴は土坑状で、桁行、梁行のいずれの方向とも柱筋が通らない。むしろSA2020西端とされている柱穴がSB2026の東南隅の柱穴であり、SA2020はSB2026の東で終わり、両者は同時併存でその間が通路となっていたとみるのが自然であろう。その後に、SB2025を建てる。従前の３時期の変遷案は２時期とするのが妥当である。

②では、内郭東限の塀SA1997は、北限の区画塀SA2029から２間分を検出した。柱間はおよそ2.3～2.4ｍである。SA2029の南方には２条の東西塀SA2020・1975があり、SA2029からの距離はそれぞれ9.6ｍと17.1ｍとなる。これをSA1997の柱間で割るとSA2020は北から４間目でSA1997に取り付くとみられる。一方、SA1975はSA1997に取り付くとするには無理がある。このことは、SA2020・1975の検出した最東端の柱穴から、平均の柱間でSA1997まで割り付けていった結果とも等しい。また、正殿SB4900と後殿SB4930、および後々殿SB2000が心を揃え、中門SB4940は少しずれるとされている。しかしこの中軸線は北で大きく東に振れており、北区画塀SA2029とも直交しない。SA2029は方位にほぼ正しくのっており、これまで知られている藤原京期の方位を示す。これに直交する軸を基準としてみると、中門SB4940、正殿SB4900と後殿SB4930は正しく心を揃え、むしろSB2000のほうがずれてくる。この３棟のSB4900・4930・4940と両脇殿SB4910・4920、それに北の区画塀SA2029、内郭の南区画塀SA4941・4942は同一の方位による一連の規格で設置されていることがわかる。内郭の遺構群ではSB2000が一連の規格から外れるものであり、それに取り付く塀SA1975・2005の振れも異なることは概報でも指摘されている。軸の方位からは、二群に分かれることとなる。途中で建物群の改作があった

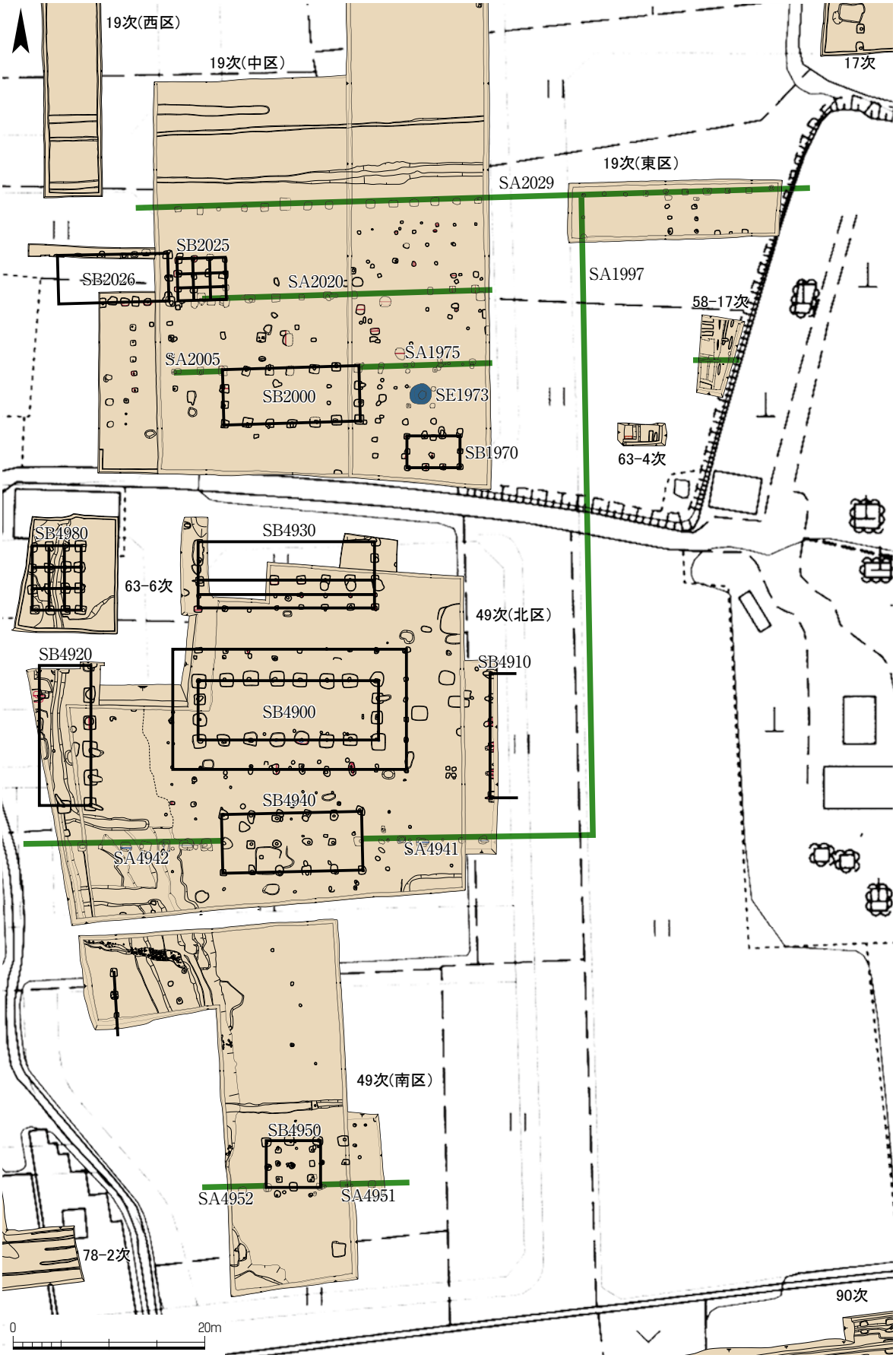


Fig. 301　右京七条一坊西南坪発掘遺構図　1：600

可能性が高いのである。

③はあまり注意されてこなかったが、②で示した様に内郭の東限を限る塀SA1997に取り付くのはSA2020であり、SA1975はSA1997と一連の造作であるとは考えがたい。即ちSA1975はSA1997とは同時併存しないのであり、さらに東へ延びて第58-17次調査区で検出した東西塀につながるものと考えられる。

⑤に関しては、検出した場所が調査区の南西端であったため、全容は不明である（Fig. 302）。建物であるとすれば、東には対応する柱穴列はない。北に1間延ばした先にはSD4957があるが、この溝は飛鳥Ⅰの土器を出土するもので、溝埋土上に柱穴はない。北端の柱穴を西に折り返した場所にも柱穴を検出していないが、周辺はかなり削平されており、浅い妻柱が消滅してしまった可能性があろう。柱穴列を北東隅とし、西の側柱は調査区外となる南北棟建物が存在すると考えられる。この建物を、SB4975とする。

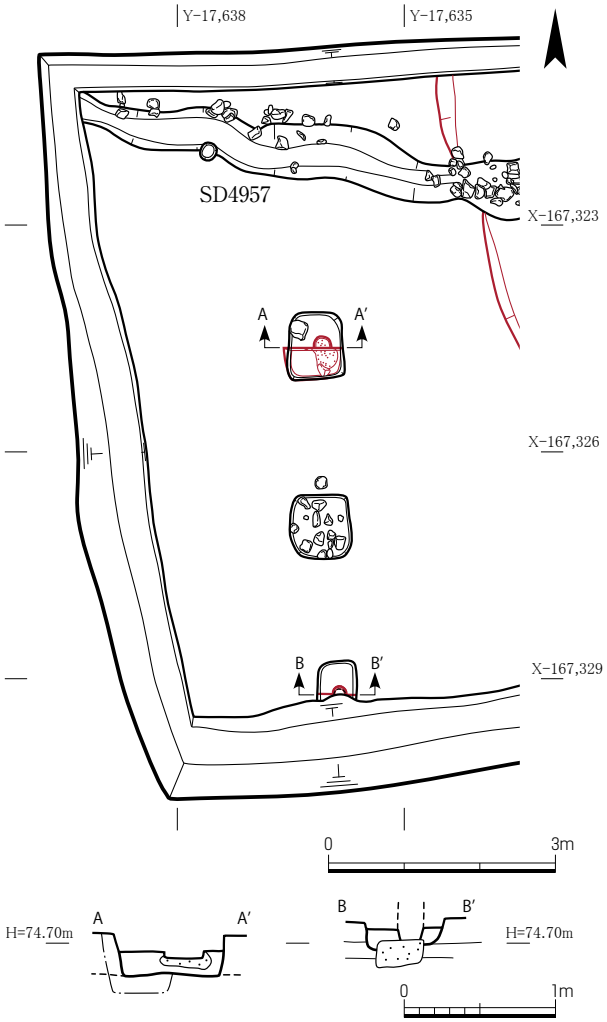


Fig. 302　SB4975平面図・断面図
（平面図　1：100　断面図　1：50）

ⅲ　七条一坊西南坪の遺構変遷

以上みてきた様に、七条一坊西南坪の遺構は、方位や配置計画によって2つの規格に分けることができ、大きく2時期の変遷があることが明らかとなってきた。また、西脇殿に比定できる建物SB4975が存在する可能性が高いことも判明した。主要な遺構のほとんどが同時期とみて、七条一坊西南坪には藤原京期を通じて一町占地の貴族邸宅が存在したとするこれまでの見解は、再考する必要がある。藤原京期のある時期に改作を受けた可能性が高いのであり、前項④で示した小鍛治に伴う炉壁や焼土、炭を含む土坑は、それを暗示するものと言えよう。以下、新たな変遷案を提示する。

藤原京期前半（Fig. 303）　従来の案の主要な遺構があたる。正殿SB4900を中心に、東西に脇殿SB4910・4920を配する。SB4900の北には後殿SB4930と、さらにその北西にSB2026を配し、SB2026の南側柱と筋を揃えてSA2020が東へ延びる。坪の北面には外郭の区画塀SA2029があり、SA1997が内郭の東限を画し、内郭南面の塀SA4941・4942には中門SB4940が開く。これら

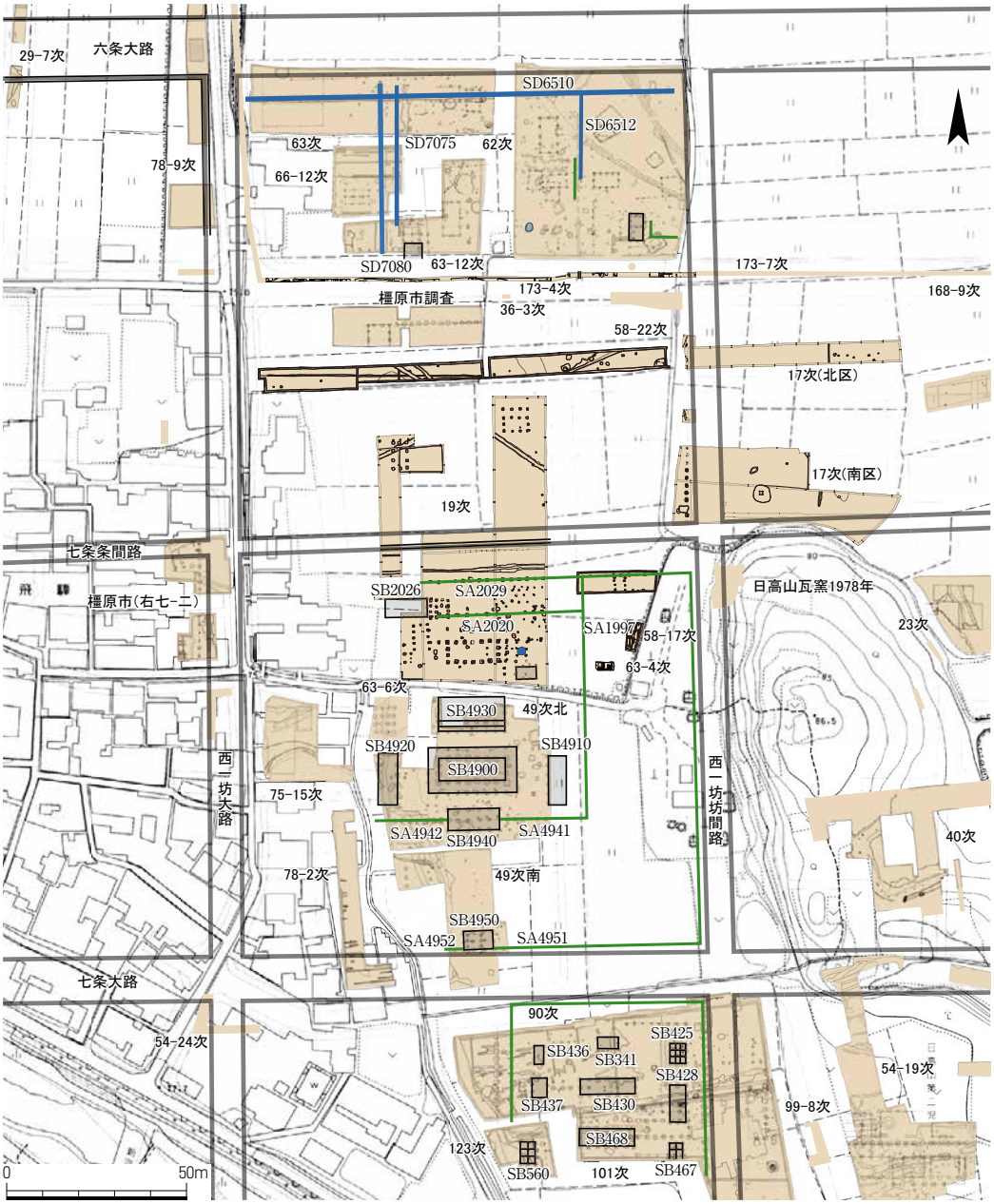


Fig. 303　右京七条一坊西北坪・西南坪・八条一坊西北坪遺構変遷図（1）　1 : 2000

は全て中軸線が一致し、方位の振れも同一で、同じ規格で配されている。一方、後々殿SB2000はこれらの遺構とは中軸線と方位の振れが異なり、前項②で北側柱に取り付く東西塀SA1975がSA4941との同時存在が困難としたことからも、この段階には存在していないとみられる。

南門SB4950の有無は判断する材料に乏しく、中軸線が他の建物や塀とは一致しないものの、坪周囲を掘立柱塀で囲っていた可能性が高いことから、この段階から存在していたとみられる。これらの遺構の性格は、従前の見解通り貴族の邸宅であろう。

藤原京期後半（Fig. 304）　正殿と後殿を除き、配置が一変する。後殿SB4930の北方に後々殿SB2000を建て、北側柱列から東にSA1975、西にSA2005の区画塀が延びる。SA1975は前述の様に内郭東限を画する南北塀SA1997とは併存せず、SA1997及び一連の塀SA4941・4942と、中門SB4940はこの段階で廃すると考えられる。SB4940の柱は全て抜き取っており、正殿

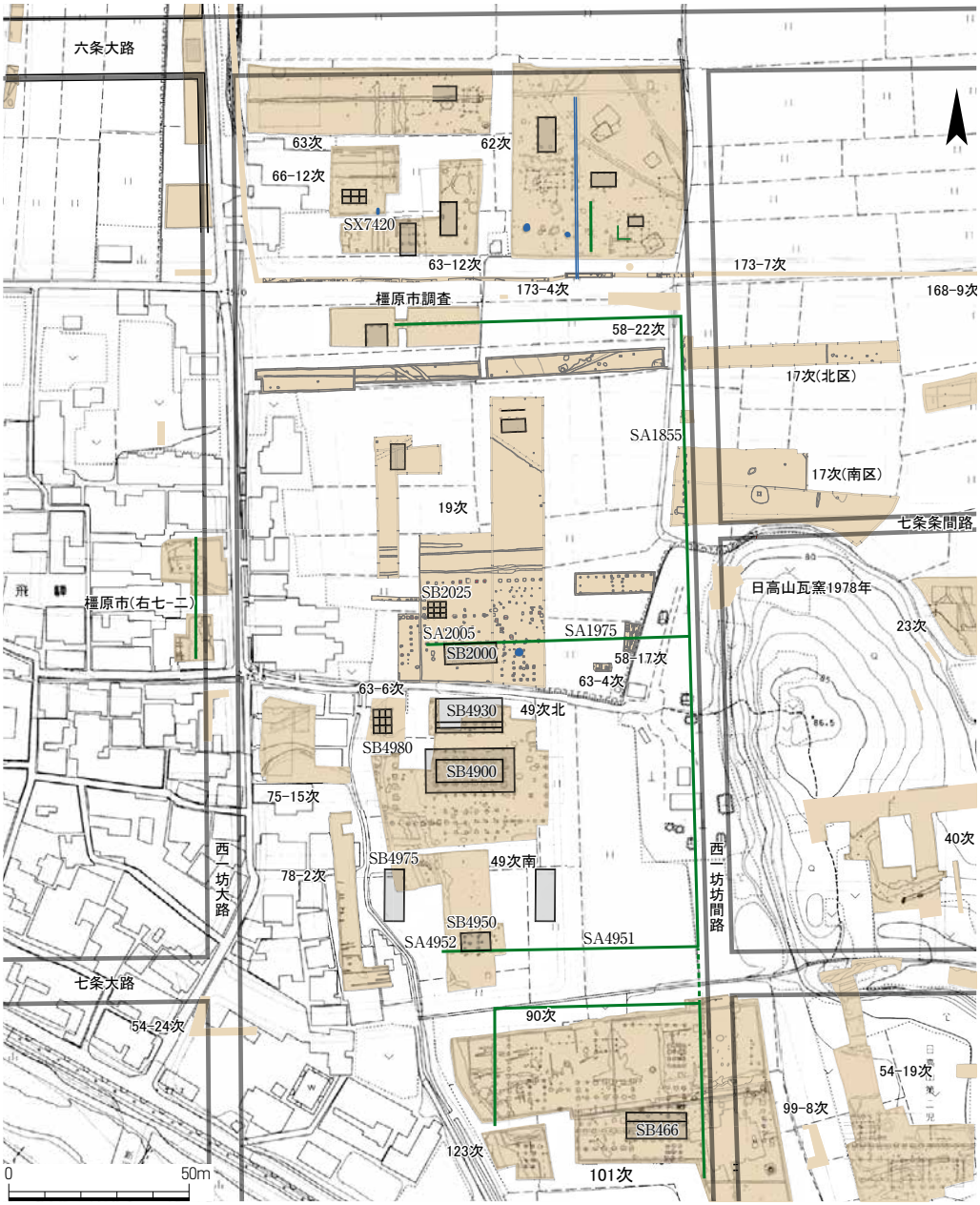


Fig. 304　右京七条一坊西北坪・西南坪・八条一坊西北坪遺構変遷図（2）　1：2000

SB4900と後殿SB4930には柱根が残ることと好対照をなす。東西の両脇殿SB4910・4920も柱を全て抜き取っていることから、同様に撤去したものと考えられる。SA1975は東方へ延び、第58-17次調査区で検出した東西塀を経て坪東面の区画塀に取り付くのであろう。南門SB4950は存続すると考えられるが、坪北面の区画塀SA2029は後述する様に廃された可能性がある。

正殿の南西方には、南北棟と考えられるSB4975を新たに建てる。中軸をはさんで対称となる未調査地にも、同規模の建物が存在したものとみられる。また、SB2000の北ではSB2026・SA2020を撤去し、総柱建物SB2025を建てる。後殿西の総柱建物SB4980もこの時期のものか。こうした一連の改作により、正殿を中心とした閉鎖的な内郭が廃され、広い前庭部が広がり、その東西に脇殿を置く配置となる可能性が高い。おそらくは、施設の性格が大きく変化したと考えられ、官衙的な配置となるのである。

iv　右京職の再検討

以上の分析から、七条一坊西南坪は従来考えられてきた様に藤原京期を通じて貴族邸宅であったわけではなく、途中で大規模な改作を受けた可能性が高いことが判明した。一方、北接する西北坪には、藤原京期後半に右京職が存在したことが明らかになっている。西北坪の右京職に関しては、四町占地の左京職とは面積の点で著しくバランスを欠くことと、検出した遺構は小規模なものばかりで、中心的な建物や、広い面積を占める儀礼空間が存在しない、という問題があった。以下、その点について検討してみることとする。

坪外周の状況　七条一坊西南坪は、藤原京期前半には周囲を掘立柱塀で区画していたと考えられる。南に隣接する八条一坊西北坪は、東北部に四分の一町を占める区画があり、東と北、西をそれぞれ画する掘立柱塀を検出した。西の区画塀SA440については、後に西方4.9mにずらしてSA441とする。北の七条一坊西北坪では、坪東辺に区画塀SA1855がある。この塀は坪南端から第17次調査区、坪をほぼ南北に二等分する位置までは検出しているが、その北の第62次調査区では検出していない。SA1855は断ち割り調査の所見では深さが40㎝以上残る大規模な塀で、第62次調査区では小規模な柱穴の遺構も検出している状況から、坪の北半では削平されてしまったとは考えがたい。途中で止まるか、西に折れるとみられ、西への行き先は坪中央西部で橿教委が行った調査で検出した東西塀が候補となる。また、坪南面では第19次調査で広い範囲を調査しているにもかかわらず、区画塀は検出していない。つまり、SA1855は坪南端で西折しないということであり、そこで止まることも考えられるが、むしろ南へそのまま延び、西南坪の東面を画する塀に接続する可能性が考えられる。西北坪と西南坪を一体として画する塀が東面に存在するとみられ、両坪は一体としての占地となるのである。その時期については、藤原京期後半に西南坪の施設を改作した時の可能性が高い。同時に、西南坪の北を画する塀SA2029を廃するのであろう。

複数町占地の右京職　藤原京期後半に、この両坪にまたがる施設の性格は、西北坪の調査成果から、右京職であることは疑えない。すなわち、西南坪が正殿を中心とした儀礼空間、西北坪が小規模な建物群からなる実務空間であったとすることができる。大宝令施行に伴う右京職の新設にあたり、七条一坊西南坪の一町占地の貴族邸宅を官が接収し、複数町占地の右京職へと改作した図式が考えられる。南に接する八条一坊西北坪については、先にみた様に七条一坊西南坪との強い関係がうかがわれ、東辺を一連の塀で区画していたかは不明であるものの、一体としての利用が考えられる。さらには、八条一坊西南坪までも含めた占地までもあったのかも知れない。右京七条一坊・八条一坊には、藤原京期後半には三町（以上）を占地する大規模な右京職が存在していたとみられるのである。占地が七条大路を越えた縦長の形態になることは、日高山による規制の結果であろう。なお、八条一坊東北坪にも２時期にわたる大規模な施設があるが、これとの関連は現状では不明であり、今後の検討課題である。

本書第Ⅵ章４で提示した分析で、左京六条三坊には四町占地の京職、次いで左京職が置かれていたことが明らかとなった。左京職は敷地の中央に、正殿を中心とした前殿、後殿、脇殿等からなる儀礼空間を配し、周囲を塀で区画する。実務空間は、本調査では一部を検出したのみであるが、北方の畝尾都多本神社が現在建つ場所にあると考えられる。そうすれば、第Ⅵ章２B

で指摘された様に、左京六条三坊と右京七条一坊西南坪で実務に用いる転用硯がほとんど出土しないことは、むしろ当然である。左京六条三坊の状況は、右京七条一坊西南坪・西北坪と比較して、建物配置での前殿の有無を除けば多くの共通点が認められる。従来指摘されていた、右京職の儀礼空間がどこにあるのかという問題や、右京職は左京職と比べて占地面積が著しく狭く、バランスを欠く、等々のこれまでの問題の全てが解決されるのである。

C　藤原京の実態

i　藤原宮周囲の状況

以上、藤原京内での占地や坪内の遺構の様相を検討してきた。藤原宮周辺には複数町占地を含む大規模な施設が多いことは、これまでの知見を追認するものである。宮南辺では左京七条一坊の衛門府が四町占地であり、右京七・八条一坊の三町以上の敷地を占めるとみられる右京職の例を今回加えた。西隣の右京七条二坊東北坪・東南坪も、藤原京期後半に七条条間路を越えて延びる塀を設けて条間路を廃し、二町占地となる。西一坊大路をはさんで東西で同様の状況が生じている様で、興味深い。

宮東辺では、本調査地である左京六条三坊の四町占地、左京四条三坊東南坪・西南坪が複数町占地である。占地の状況が確定できない坪でも、大規模な建物を建てている。また、宮東南部の左京七条三坊東北坪・西北坪も複数町占地となる。宮西辺では複数町占地は確認していないが、一町占地と推定される大規模な施設が展開している地域とみられる。

一方、宮北辺では、比較的広い範囲を調査した左京二条二坊西北坪や、右京一条一坊東北坪、西北坪を代表例として、坪内を分割した規模の小さい宅地が展開する地域であると思われてきた。これまでに実施した調査は小規模なものが主体であるが、条坊遺構の確認を目的にしたものが多く、そのため条間路や坊間路をまたぐ建物や塀の遺構を複数確認できている。これらはいずれも藤原京期以外のものとされてきたが、複数町占地がある程度普遍的に存在することが明らかになってきた現在の状況では、再検討する必要がある。先の分析では、右京二条一坊は東北坪と東南坪、および西北坪と西南坪がそれぞれ二町占地になると考えられることを示した。右京二条二坊では、東北坪と西北坪が二町占地となると推定された。この様に、藤原宮北方においても、宮の南辺、東辺と同様に複数町占地の施設が存在する可能性が高いのである。宮北方には典薬寮や禁苑の存在も指摘されており、これらとの関係も課題となってこよう。

その他、左京二条二坊西北坪、右京一条一坊西北坪、西南坪、右京一条二坊東北坪では工房の存在を示唆する遺物が出土しており、注意される。この地域での調査はまだ一部にとどまっており、周辺は既に市街化が著しいので困難が伴うが、小規模なものでも継続的な調査を実施して、実像に迫っていくことが望まれる。

また、右京一条一坊は横大路の南に位置する地で、すぐ北には耳成山がある。東北坪と西北坪は分割占地で、内部に建つ建物は小規模なものであり、遺構密度も高くない。一方、井戸は東北坪で5基、西北坪で7基検出しており、建物に対して井戸の数が多く、一般的な宅地とは様相を異にする。井戸の配置は等間隔で規則的なものではなく、坪内を分割して利用する状況を示すものではない様である。一部の井戸の廃絶は奈良時代前半まで下がる。[11]

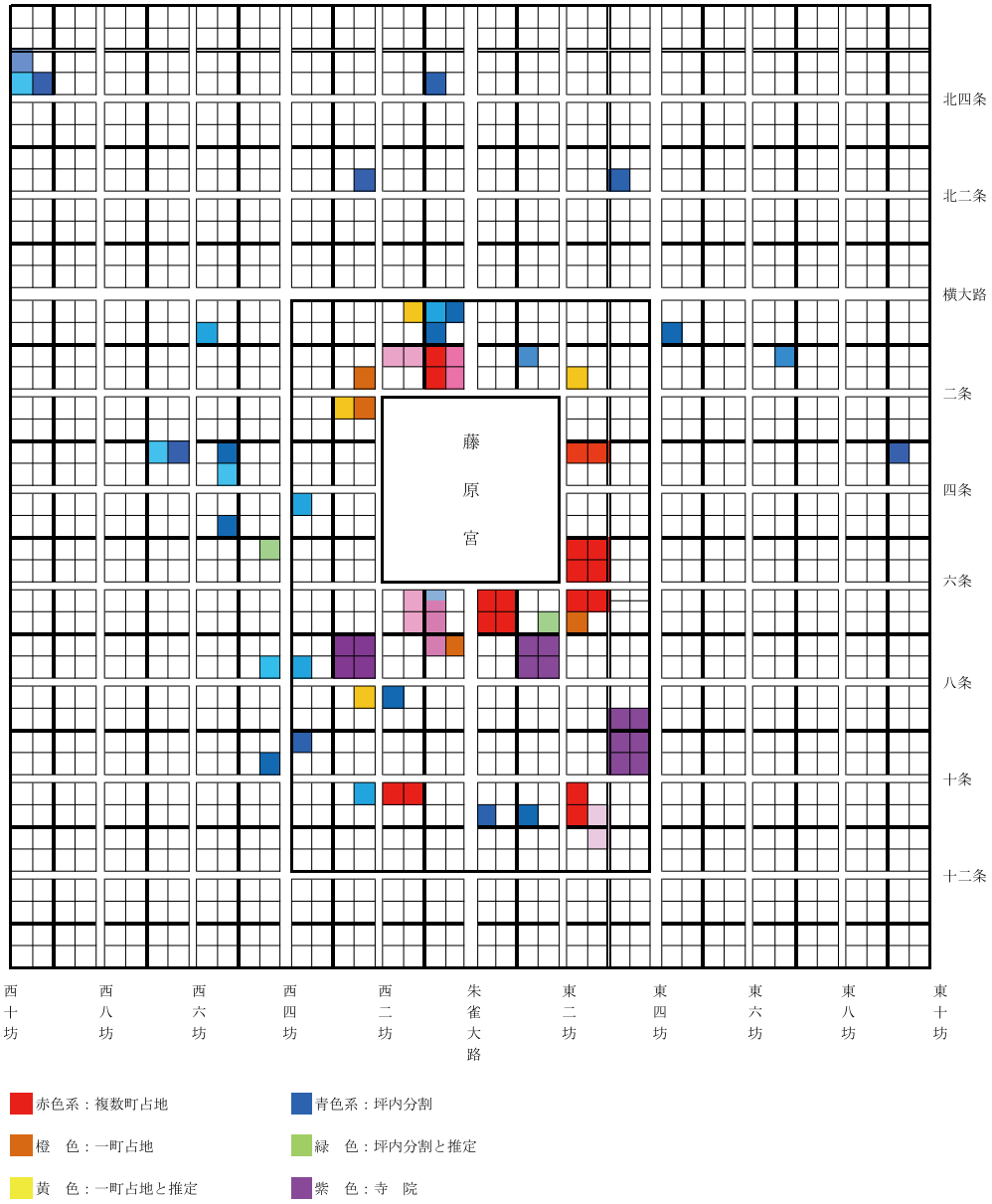


Fig. 305　藤原京における占地

ii　藤原京周縁部での状況

ここで言う藤原京周縁部とは、東西と北は岸説藤原京の範囲外の地、南は八条大路以南の地域を指すこととする。この地域では、基本的に坪内を分割した占地が多く認められる。坪内の広い範囲を調査した右京北五条十坊西南坪（土橋遺跡）では、東半は四分の一町、西半は八分の一町の区画割りをしており、多くの建物や井戸を検出した。藤原京の西京極にあたるこの地まで、宅地として利用していた状況を如実に示すものである。左京域でも、二条七坊や四条十坊（吉備池遺跡）をはじめ、坪内を分割して多くの建物を建てている状況が判明しており、宅地として活発に利用していた。京内での発掘調査は小規模なものが多く、坪内の様相をなかなか知ることはできないが、調査では柱穴や井戸を検出する事例も多く、京内の広い範囲で宅地としての広範な利用をしていた状況がみてとれる。

Tab. 22　藤原京占地一覧（右京域）

条	坊	坪	占地	主要調査（年度）	文　献	特記遺構・遺物	備　考
北五条	一坊	西南	分割	橿教下明寺遺跡6次（1985）	29		下明寺遺跡
	十坊	西北	分割	橿教1996-1次	28・34・58		土橋遺跡
		東南	分割				
		西南	分割				
北三条	三坊	東南	分割	橿教1995-19次	33		
一　条	一坊	東北	分割	橿教1998-11次	35	斎串	
		西北	分割	60次、64次、81次（1989・90・96）	8・10・24	斎串、工房関係遺物、漆付着土器	
		西南	分割	60次、65次（1989・90）	8・10	工房関係遺物、漆付着土器	
	二坊	東北	一町	64次（1990）	10	工房関係遺物、漆付着土器、円面硯	
	六坊	西南	分割	橿考院上遺跡（1979）	39	祭祀土坑（馬骨）、斎串、ガラス板、鉈尾	院上遺跡
二　条	一坊	東北・東南	二町	41-7次、63-9次、66-8次、71-3次（1984・1990・1991・1993）	4・9・10・12		四町の可能性も
		西北・西南	二町	48-8次、60-5・11次（1986・1989）	6・8		
	二坊	東北・西北	二町	42次（1984）	4		
	三坊	東南	一町	39・43次、60-12次（1984・1989）、橿教二条三坊5～7次（1992）、橿教二・三条三坊7次（1994）	4・8・27・32		
三　条	三坊	東北	一町	39次（1984）、橿教1996年	4・34	碁石	
		西北	一町	橿教二条三坊（1991）、橿教1996-13次	27・34		
四　条	六坊	東北	分割	橿考四条遺跡12・20・24・30・31次（1991～2005）	42・45・46・50～52	荷札木簡、召文木簡、斎串、鉄製人形、新羅印花文陶器	四条遺跡
		東南	分割	橿考四条遺跡25・28次（1998・2000）	41・48	圏足硯	四条遺跡
	七坊	東北	分割	橿考四条遺跡13・15・25・27次（1991・1992・1998・2000）	43・54	地鎮、交差点祭祀、富本銭2点、漆壺	四条遺跡
		西北	分割	橿考四条遺跡15次（1992）	43・54	西側溝上に建物	四条遺跡
五　条	四坊	西北	分割	橿教五条四坊（1992）	28・30	鉄製人形、祭祀遺物、陶硯	
	六坊	東南	分割	橿教五条六坊5～7次（1993～1995）	28・33	工房関係遺物	
六　条	五坊	東北	分割	橿教1995-4次、橿教1998-12次	33・35	工房関係遺物、金属製人形、蹄脚硯	
七　条	一坊	西北	分割→三町ヵ	17次、19次、62次（1985・1986・1989）、63次・63-12次（1990）、66-12次、173-4次（1992・2013）、橿教七条一坊1・3次（1990・1991）	1・2・8～11・21	木簡、工房関係遺物、蹄脚硯、円面硯	京期後半：右京職
		西南	一町→三町ヵ	19次、49次、58-17次、63-4・6次（1976・1986・1989・1990）	2・8・9・22	工房関係遺物、塼仏笵、	京期前半：邸宅 京期後半：右京職
	二坊	東北・東南	二町	橿教1990、41-3次（1984）、54-13次（1987）、78-9次（1995）、橿教1988-5次	4・15・26・28・35		
八　条	一坊	東北	一町	54-19次（1987）、90次（1998）、101次（1999）	7・16・17		
		西北	一町→三町ヵ	90次、101次、123次（1998・1999・2002）	16・17・20	葡萄唐草文須恵器	
	四坊	西南	分割	45-6・7次（1985）、橿教八・九条四坊（1992）	5・30		
	五坊	東南	分割	橿教八条五坊（1994）	32	斎串	
九　条	二坊	西北	分割	187次（2015）	25		
	三坊	東北	一町	187次（2015）	25		
十　条	四坊	西北	分割	橿教十条四坊（1994）	28・32		
	五坊	東南	分割	橿教十条五坊1～3次（1994～96）	28・34		
十一条	二坊	東北・西北	二町	橿考県道2010・2012	56・57		
	三坊	東北	分割	橿考県道2008	53	荷札木簡	

Tab. 23　藤原京占地一覧（左京域）

条	坊	坪	占地	主要調査（年度）	文　献	特記遺構・遺物	備　考
北三条	四坊	西南	分割	橿教北三条四坊2次（1993）	28・31		
一　条	五坊	西南	分割	橿教1999-2次	36		
二　条	二坊	西北	分割	48次（1986）、109次（2000）、橿考（1993）	23・18・44	圏足硯、工房関係遺物、漆付着土器	
	三坊	西南	一町	27-1次（1979）、41-13次（1984）	3・4		
	七坊	東北	分割	桜教（1981～86）	37		
四　条	三坊	東北 西北	一町→二町	63-7次（1990）	9		
	十坊	西北	分割	橿考吉備池遺跡（1984）、桜教（1987）	38・40		吉備池遺跡
六　条	三坊	全	四町	45～47・50・53次、133-7・13次	本書	左京職木簡、緑釉硯	京職→左京職
七　条	一坊	全	四町	橿教七条一坊（1994）、75次（1994）、115次（2001）	13・19・32	木簡、斎串、鳥形	衛門府
	二坊	東南	分割	74次（1993）	13		
	三坊	東北 西北	二町	81-1次（1996）	15		
		西南	一町	74次（1993）	13		
十一条	一坊	西南	分割	橿考県道2000・2001	47・52	算木、木簡「高志調」	
	二坊	西南	分割	橿考県道2005	51		
	三坊	西北 西南	二町	66-1・13次、69-13次、71-8・13次、75-16次、78-8次、81-8次（1991～97）	10・12～15	荷札木簡、大官大寺式軒瓦、墨書瓦、「寺ヵ」墨書土器、硯、漆塗須恵器、土馬、新羅土器	雷丘北方遺跡
十一条 十二条	三坊	東南 東北	二町	71-9・14次（1993）、75-3次（1994）、村雷丘東方1～3次（1987）	12・13・59	大型円面硯、奈良時代瓦	雷丘東方遺跡 小治田宮

右京一条六坊西南坪（院上遺跡）は坪を二分する位置に東西溝を検出し、南北に分割していた可能性がある坪である。坪の東辺の調査では斎串や馬の骨等を埋納した祭祀土坑を3基検出し、鉈尾やガラス板も出土するなど、一般の宅地とは異なる様相をみせる。占地は分割とみられるものの、高位の人物が居住していた可能性もある。

一方、京周縁部はすべて宅地や寺院であったわけではなく、特殊な性格の施設の存在を示す事例も確認している。右京五条六坊東南坪、右京六条五坊東北坪では、工房の存在を示唆する遺物が出土している。

右京四条六・七坊（四条遺跡）は検出した建物の規模も小さく、分割占地の地域とみられるが、興味ある調査成果が得られている。四条七坊東北坪・西北坪では、間の坊間路をまたぐ遺構を確認した。藤原京の西辺部でも二町占地の施設が存在していた可能性を否定できないが、調査面積が少ないこともあり、判断は今後の調査の進展を待ちたい。東隣の四条六坊では、西辺を通る西六坊大路の西側溝から富本銭や土馬、帯金具、馬歯などが出土し、東北坪東方の西五坊大路の側溝からは斎串や鉄製人形等の祭祀具が出土した。鉄製人形等の格の高い祭祀具を用いており、官が関与した祭祀を行っていた可能性がある。他に役人を呼ぶ際の召文木簡も出土しており、遺構のうえからは確認できないが、公的機関が存在していた可能性もある。

左京十一条三坊西北坪・西南坪（雷丘北方遺跡）は7世紀後半から存続する施設で、整然とした配置から官衙か上級貴族の邸宅と推測されている。左京十一・十二条三坊東南坪・東北坪（雷丘東方遺跡）も同様の性格であろう。左京十二条六坊に位置し、大規模な建物を検出した奥山・リウゲ遺跡[12]なども含め、この時期の大規模施設は阿倍山田道の周辺、飛鳥浄御原宮の周辺部に所在していることは先に指摘したとおりである。

平城京では、奈良時代末には太政官厨が左京三条二坊一坪にあったことが発掘調査の結果判明しており[13]、東一坊大路をはさんで西接する三条一坊十五・十六坪には、二町占地の大規模な施設が置かれていた[14]。また、左京五条四坊八・九坪は播磨国調邸である可能性が高いといい[15]、他にも左京職は左京五条二坊十四坪に比定されるなど、多くの京内官衙やそれに類する施設が判明している。藤原京ではまだこうした状況には至っていないが、調査研究の積み重ねにより、京内の様相の解明が望まれる。

ⅲ　藤原京の特質

以上、わが国初の中国式都城、藤原京の調査成果について概観し、分析を行ってきた。京内の調査事例は他の都城に比較してまだ少ないものの、藤原京の様相が徐々に明らかになってきていると言えよう。最後に、いくつかの点について考察を加え、藤原京の特質をみていくこととする。

藤原京の条坊については、まだ資料が十分に得られている状況ではないが、いくつかの点が特徴的である。道路の施工はまず道路心を設定し、それから振り分けて両側溝を掘削した様で、左京七条の東二坊大路や、右京六坊の六条大路では道路心に割付溝を検出した。こうした割付溝は平城宮東区朝堂院でも検出[16]しており、古代の測量技術の一端がうかがえる。また、同一の道路であっても場所によって幅が一定でない事例がみられ、右京五条四・五坊では、五条条間路が西四坊大路を境に、東西で道路心を揃えながらも幅が異なるという調査成果を得ている[17]。これが岸説藤原京の西京極であった西四坊大路（下つ道）周辺での事例であることが注意されるが、その評価は今後の調査例の増加を待って下したい。他に、近年では藤原京内の条坊道路が全て同時期に施工されたということに疑問を呈する見解や、先行条坊の施工範囲等の問題についての議論があるが、それは今回の検討課題ではないため、詳述は控えたい。

京内の街並みに関しては、坪の外周を囲う閉塞施設について、他の都城と比較して異なった状況がうかがえる。坪の周囲は掘立柱塀で囲う事例が多いが、明確な施設が検出できないことも多い。藤原宮朱雀門のすぐ南西に所在する右京職においても、坪の北面を限る塀は未検出である。これらは、遺構として残りにくい簡単な施設だったのであろうか。京内の調査では、造営期をも含めて多数の建物が各所で建てられていることが判明しており、街並みの整備はかなり進んでいた状況がみてとれるが、坪周囲の整備までは及ばなかったのであろうか。条坊道路においても、京南部での朱雀大路や、香具山西麓の東三坊大路など、遺構が検出できない例も増加している。特に、起伏の大きい場所に道路を施工したのかは疑問とされており、全域にわたって施工されたのではない様だ。藤原京はわずか16年という短命の都であったこともあり、広大な京域全体を整備するまでには至らなかった可能性もあろう。

坪周囲を囲う塀には出入りのための門を設けることがあり、藤原京ではこれまでに右京二条三坊東北坪、右京三条三坊西北坪、右京七条一坊西南坪、右京七条五坊東北坪、右京八条一坊西南坪で門を検出している。『続日本紀』の記事によれば、平城京では大路に門を開くことが禁止されており、門は条間路や坊間路、あるいは坪境小路に開いていた。左京三条二坊の長屋王邸と、それに対面する左京二条二坊五坪の藤原麻呂邸が二条大路に門を開いていたことが確認されているが、これは上級貴族に許された例外的な事例であろう。藤原京で確認した先の５例

のうち、右京三条三坊西北坪で西三坊坊間路、右京七条五坊東北坪で七条条間路に開く他は、それぞれ西二坊大路、七条大路、八条大路[18]に開く。これらは右京七条一坊西南坪をはじめ、一町占地と考えられる大規模施設が多いが、右京八条一坊西南坪は坪内を分割した小規模な宅地であり、平城京との違いが一層際立つ。

また、藤原京の街並みではトイレ遺構、特に水洗トイレの多さが注目される。水洗トイレは条坊側溝に接して弧状の溝を掘り、側溝に対して給排水する構造である。藤原京では現在までに左京北四条一坊東北坪（東一坊坊間路東側溝：文献36）、左京二条二坊西北坪（東一坊大路東側溝：文献23）、右京北四条五坊東南坪[19]（西四坊大路西側溝）、右京一条三坊西南坪[20]（西三坊大路東側溝）、右京三条三坊東北坪の２箇所（西三坊坊間路東側溝：文献34）の６例を確認している。一方平城京では、管見に及んだものは左京二条二坊五坪の藤原麻呂邸で検出した１例のみである。平城京におけるこの状況は、両京の違いをよく示している。藤原京は日本最初の条坊制に基づく都城であり、そのために未体験の事態が多数発生したことは想像に難くない。都市公害の発生はよく指摘されることであり、水洗トイレの多数設置による側溝、ひいては京域の汚染は、『続日本紀』慶雲３年（706）３月丁巳（14）条の「京城内外多有穢臭」にみることができる。こうした問題により、平城京では水洗トイレは激減したものと考えられる。平城京は、こうした面でも藤原京の経験を生かし、進化した都になったのである。

以上、日本最初の中国式都城、藤原京の様相について分析してきた。調査成果を集成し、京内の遺構を検討した結果では、これまで考えられているよりも大規模な占地が多いことが判明した。また、京内官衙についても新しい知見を加えた。その他の特徴的な点も示すことができ、藤原京の実態の一端を明らかにし得たと考える。

なお、十条十坊説での藤原京域の南方、五条野向イ遺跡[21]と五条野内垣内遺跡[22]でも大規模な宅地の遺構を検出している。今回は詳細な分析を加えることはできなかったが、京と宅地の関係に関して興味深い例であり、稿を改めて検討したい。また、本調査地で活発な活動を行っていた、奈良時代における藤原京の地の様相の解明等、残された課題も多い。今後も継続的な調査を行って、古代都市藤原京の姿がさらに具体的なものになっていくことが期待される。

【参考文献】（番号はTab. 22・23の文献番号に対応する）

1　奈文研1976『藤原概報６』
2　奈文研1977『藤原概報７』
3　奈文研1980『藤原概報10』
4　奈文研1985『藤原概報15』
5　奈文研1986『藤原概報16』
6　奈文研1987『藤原概報17』
7　奈文研1989『藤原概報19』
8　奈文研1990『藤原概報20』
9　奈文研1991『藤原概報21』
10　奈文研1992『藤原概報22』
11　奈文研1993『藤原概報23』
12　奈文研1994『藤原概報24』
13　奈文研1995『藤原概報25』
14　奈文研1996『藤原概報26』
15　奈文研1997『奈文研年報1997-Ⅱ』

16　奈文研1999『奈文研年報1999-Ⅱ』
17　奈文研2000『奈文研年報2000-Ⅱ』
18　奈文研2001『奈文研紀要2001』
19　奈文研2002『奈文研紀要2002』
20　奈文研2003『奈文研紀要2003』
21　奈文研2013『奈文研紀要2013』
22　奈文研1987『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』
23　奈文研1987『藤原京左京二条一坊・同二条二坊発掘調査報告』
24　奈文研1997『藤原京右京一条一坊発掘調査報告』
25　奈文研2016『藤原京右京九条二・三坊発掘調査現地見学会資料』
26　橿原市千塚資料館1991『平成２年度 埋蔵文化財発掘調査速報』
27　橿原市千塚資料館1992『平成３年度 埋蔵文化財発掘調査速報』
28　橿原市千塚資料館1997『藤原京―最近の調査成果より―』
29　橿原市教育委員会1986『昭和60年度・下明寺遺跡・岩船横穴墓群・千塚山遺跡発掘調査概報』
30　橿原市教育委員会1993『かしはらの歴史をさぐる』
31　橿原市教育委員会1994『かしはらの歴史をさぐる２』
32　橿原市教育委員会1995『かしはらの歴史をさぐる３』
33　橿原市教育委員会1996『かしはらの歴史をさぐる４』
34　橿原市教育委員会1997『かしはらの歴史をさぐる５』
35　橿原市教育委員会2000『かしはらの歴史をさぐる７』
36　橿原市教育委員会2001『かしはらの歴史をさぐる８』
37　桜井市教育委員会1986『吉備大角遺跡第三次発掘調査現地説明会資料』
38　桜井市教育委員会1988『桜井市吉備 吉備池遺跡切田地区調査報告書』
39　橿考研1983『橿原市 院上遺跡』（『奈良県文化財調査報告書 第40集』）
40　橿考研1985『奈良県遺跡調査概報1984年度（第二分冊）』
41　橿考研1988『奈良県遺跡調査概報1987年度（第二分冊）』
42　橿考研1992『奈良県遺跡調査概報1991年度（第二分冊）』
43　橿考研1993『奈良県遺跡調査概報1992年度（第二分冊）』
44　橿考研1994『奈良県遺跡調査概報1993年度（第二分冊）』
45　橿考研1995『奈良県遺跡調査概報1994年度（第二分冊）』
46　橿考研1998『奈良県遺跡調査概報1997年度（第二分冊）』
47　橿考研2000『奈良県遺跡調査概報1999年度（第三分冊）』
48　橿考研2001『奈良県遺跡調査概報2000年度（第二分冊）』
49　橿考研2001『奈良県遺跡調査概報2000年度（第三分冊）』
50　橿考研2005『奈良県遺跡調査概報2004年（第二分冊）』
51　橿考研2006『奈良県遺跡調査概報2005年（第二分冊）』
52　橿考研2007『奈良県遺跡調査概報2006年（第二分冊）』
53　橿考研2009『奈良県遺跡調査概報2008年（第三分冊）』
54　橿考研2010『四条遺跡Ⅱ 大和高田バイパス建設に伴う発掘調査報告書（Ⅳ）』
55　橿考研2012『奈良県遺跡調査概報2011年（第二分冊）』
56　橿考研2013『奈良県遺跡調査概報2012年（第二分冊）』
57　橿考研2015『藤原京右京十一条二坊 ―県道橿原神宮東口停車場飛鳥線建設事業に伴う発掘調査報告書Ⅲ―』
58　奈良県内市町村埋蔵文化財担当者連絡協議会1997『平成８年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
59　明日香村教育委員会1988『雷丘東方遺跡発掘調査概報 村道耳成線道路改良事業に伴う調査』
60　相原嘉之2015「新益京造営試論」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』
61　竹田政敬2015「藤原京の役所」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』

1） 内田和伸・小池伸彦ほか2002「左京七条一坊の調査 第115次」『奈文研紀要2002』。
2） 調査地は平城京では藤原不比等邸が所在する付近で、藤原宮東面北門の外濠SD170から出土した「右大殿□〔芹ヵ〕□」と記した木簡（奈文研2012『藤原宮木簡三』奈文研史料第88冊）との関係が注意されている。ちなみに、不比等は708年3月13日に右大臣となる。
3） 市大樹2004「藤原京左京七条一坊出土の衛門府関連木簡」『奈文研紀要2004』。
4） 橿原市教育委員会1995『かしはらの歴史を探る3』。露口真広・橋本義則1995「一九九四年出土の木簡 奈良・藤原京跡左京七条一坊東南坪」『木簡研究』17号。
5） 市大樹2012『飛鳥の木簡』吉川弘文館。
6） 報告時には塀は条間路南側溝より古いとされていたが、後にこの見解に改められた。
7） 正式名称は県道橿原神宮東口停車場飛鳥線。Tab.22・23の占地一覧を含め、「県道」と略称する。
8） これは坪北半のみで検出しているが、南の第19次調査区でも延長上に断続的に南北溝を検出しており、さらに南まで続く可能性もある。
9） 奈文研2009『飛鳥藤原京木簡二』奈文研史料第八二冊。
10） 奈文研1987『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』。
11） 平城京左京三条二坊出土の長屋王家木簡には、「耳梨御田」と記したものがあり、芹（セリ）、智佐（チシャ菜）、古自（コリアンダーの類）、阿夫毘（葵）などを進上していたことが知られる。耳梨御田の所在地については定説がないが、その名称から耳成山周辺であると考えられている。耳梨御田は藤原京の時代に父の高市皇子が所有していたもので、それを長屋王が受け継ぎ、平城京遷都後も邸宅に様々な物資が届けられていた。井戸は廃絶が奈良時代前半の平城宮土器Ⅱ期（715～730年頃）まで下がるものがあり、これは長屋王の変が起こった頃であることが注意される。現時点ではこの地が耳梨御田とする確証はないが、今後多方面からの検討を行い、実態を解明していくことが望まれる。
12） 明日香村教育委員会1990「5．奥山リュウゲ遺跡の調査」『明日香村遺跡発掘調査概報 平成元年度』。
13） 奈文研1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈文研学報第54冊。
14） 奈文研2015「平城京左京三条一坊十五坪の調査　第534次」『紀要2015』など。
15） 奈良市教育委員会2012「平城京跡（左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東四坊坊間東小路）の調査　第608次・622次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成21(2009)年度』。
16） 奈文研1996「第二次朝堂院東第六堂の調査 第261次調査」『一九九五年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』。
17） 文献28・30。また、右京八条四・五坊では、同様に西四坊大路を境に東西で八条条間路がずれるという調査結果を得ているが、これは慎重な検討が必要であろう。
18） 藤原京での条坊道路には三つの規格があるが、西二坊大路、八条大路については、平城京での規格に対比しても大路の規模である。
19） 橿原市教育委員会の教示による。
20） 橿考研1996『奈良県遺跡調査概報 1995年度（第二分冊）』。
21） 橿原市教育委員会1999「五条野向イ遺跡の調査」『平成10年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』。
22） 橿原市教育委員会2001『かしはらの歴史を探る8』。橿原市教育委員会2001「五条野内垣内遺跡の調査」『平成12年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』。

6　結　　語

A　遺　構

左京六条三坊の約17,000㎡におよぶ調査で、古墳時代から中世までの多数の遺構を検出した。主なものとしては、条坊道路２条、掘立柱建物83棟、竪穴建物８棟、掘立柱塀45条、井戸38基、溝37条、土器埋納坑４基などである。これらの遺構は藤原京期を中心とし、それに続く奈良時代（710～784年）にも比較的整然とした遺構が展開する。今回は５世紀代を中心とした古墳時代をⅠ期、７世紀代の藤原京造営直前までをⅡ期とした。造営期を含めた藤原京の時期についてはⅢ期とし、遷都までの藤原京造営期、遷都後の藤原京期前半、藤原京期後半の３時期に細分し、それぞれⅢ-Ａ期、Ⅲ-Ｂ期、Ⅲ-Ｃ期とした。奈良時代はⅣ期、平安時代前・中期をⅤ期、平安時代後期以降をⅥ期とした。

Ⅰ期の遺構は、調査区南から自然流路が蛇行して流れ、その両岸に竪穴建物が数棟ずつ点在する。Ⅱ期の遺構は、調査区東端の南北大溝SD4143と、その西側に広がる掘立柱建物群である。比較的規模が大きい建物を中心としてまとまりをみせる。

Ⅲ期において本調査地は、藤原京左京六条三坊にあたる。この地は藤原宮の東に隣接する地であり、南には藤原宮南面を通る六条大路、北には藤原宮東面南門から延びる五条大路が通る、京内でも一等地である。Ⅲ-Ａ期には六条条間路と東三坊坊間路により、左京六条三坊は東北坪、東南坪、西北坪、西南坪に四分割される。各坪のうち、東北坪と東南坪の様相が比較的判明している。東北坪は坪を東西に分割した状況を呈し、西側に塀に囲まれた区画がある。区画南辺の塀の中央に門を開き、区画内には建物が規則的に建ち並び、公的な施設とも考えられる。東南坪は、坪を南北に分割した二分の一町占地の状況を呈し、東北坪の西区画のように整った利用がなされていた可能性もある。Ⅲ-Ｂ期は、大規模な東西棟建物SB5000を左京六条三坊の中央に建設し、一町占地から一新された四町占地での利用となる。SB5000はその規模と位置、条坊中軸線上にこれより大きい建物がないことから、正殿とみられる。東には南北塀があり、外郭と内郭を区画する。内郭の建物配置は、正殿の東南方に南北棟の脇殿を置き、未調査の西南方にも正殿をはさんで対称の位置に脇殿があると考えられ、正殿とともにコの字形になるとみられる。正殿の東北方には東西棟が位置し、さらに東西棟建物がある。これらは、整然とした配置からみて、左右対称になるものと推定される。正殿南の前庭には仮設的な構築物があり、前庭での儀礼に関わるものと考えられる。また、南北大溝SD4143に接続して西側へ延びる東西大溝SD4130を開削し、大規模な井戸SE4740を設ける。Ⅲ-Ｃ期は、Ⅲ-Ｂ期から継続して四町占地で、内郭の規模を拡大する。内郭の建物配置は、正殿の東側に東西棟建物を置き、その東南方に南北棟の脇殿２棟を南北に並べる。これらは西側の対称位置にもあると考えられ、Ⅲ-Ｂ期と同様ながらもより広大なコの字形配置になる。また、正殿の南には前殿を建てる。

Ⅳ期は奈良時代で、大溝からなる水系が存続する。調査区南側には、掘立柱塀と素掘溝によって区画された中に、正殿と前殿とみられる東西棟建物２棟が、中軸線を揃えて南北に並ぶ。調査地の西北隅部では、倉庫とみられる総柱建物を検出した。この時期の遺構は、その規模と配

置から、官衙に関連するものと考えられる。

Ⅴ期は調査区の東端に南北大溝SD4143が存続するが、SD4130とSE4740はほぼ埋まる。調査区南側に、やや規模の大きな建物とそれに付属する小規模な建物がある。この時期の遺構は比較的規模が大きいものもあるが、官衙というよりは集落としての性格が考えられる。Ⅵ期は土地利用が細分化され、井戸を各所に掘る。中心的な建物と付属建物、塀や溝、土坑からなるまとまりが調査区中央部で東西２箇所に確認でき、建て替えが何度も行われている。鎌倉時代より後の遺構は、調査区北西部に環濠状の大溝が巡り、その中に数基の井戸と東西棟建物が存在する。瓦の出土が多く、寺社などもあったものとみられる。大溝から出土した遺物は14世紀後半頃のもので、この頃に現在の農村集落が形成され始めたと考えられる。

B　遺　物

東西大溝SD4130とそれに南接する井戸SE4740を中心に、瓦塼類、土器、土製品、木製品、金属製品、木簡など、多くの遺物が出土した。

瓦塼類　古代から中世の軒丸瓦が17種類121点、軒平瓦が25種類84点と多様な軒瓦が出土した。古代のものの大部分は、大和盆地内各地の寺院や藤原宮の所用瓦と同笵である。特に７世紀前半建立の吉備池廃寺（百済大寺）創建瓦である重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦と、型押し忍冬唐草文軒平瓦が注目される。奈良時代や平安時代の軒瓦はごくわずかである。中世の軒瓦は、鎌倉時代から室町時代にかけての13世紀後半～14世紀前半と、14世紀中頃～後半のものがある。出土した丸瓦は総重量966.1kg、破片数3,860点で、平瓦は総重量3,083.9kg、破片数22,993点に及ぶ。また、方形三尊塼仏の破片９点が主として調査区の北西部から出土した。

土器・土製品　縄文時代から近世に至るまで、整理用木箱で397箱分の土器・土製品が出土した。SD4130と井戸SE4740から出土した７・８世紀の土師器と須恵器が大半を占める。出土土器の年代は、SD4130が藤原京期～10世紀後半頃、SE4740は藤原京期～10世紀前半である。廃都後の奈良時代の土器が多量に出土していることが注目され、それらは器種構成、特に食器と他の器種の比率は官衙地区から出土する土器と同じである。これは、調査地が奈良時代に公的な施設であったことを示唆するものである。墨書土器は134点出土し、全体の95％以上がSD4130とSE4740からの出土である。記載内容は、「香山（かぐやま）」や「香」「山」と記すものが多く、22点を数える。

木製品・金属製品・銭貨　木製品は整理用コンテナにして120箱程度あり、大半はSD4130および井戸SE4740から出土した。曲物、漆器などの容器類、紡錘車などの紡織具、横櫛などの服飾具、琴柱などの遊戯具、人形、斎串などの祭祀具、刀子柄などの工具がある。金属製品では短刀、鎌、釘などの鉄製品、銅釧、花形飾金具などの青銅製品がある。銭貨は46点出土した。このうち、無文銀銭１点と和同開珎27点が、SE4740の井戸枠内最下層・下層から出土した。

木　簡　井戸SE4740からは、呪符木簡が１点出土した。東西大溝SD4130からは、「左京職」や「菜採司」という官衙名を記したもの、「束」「把」という単位を記した稲に関わる木簡や荷札木簡など、28点（うち削屑５点）が出土した。

自然科学分析　動物遺存体は、SD4130からニホンジカの角、ウマの歯の破片などを同定した。中世や近世の遺構や包含層からは、ウマ、ウシ、ヒト、スッポンが出土した。植物遺存体はヤ

マモモ、クルミ、ウメ、モモ等、すべて大型種実で、食用にした植物の残滓を投棄したものと考えられる。木製品の樹種調査からは、古代の曲物や斎串にはヒノキ科の樹種を好んで用いたことが知られた。和同開珎の蛍光Ｘ線分析による成分分析では、4つのタイプに大別できることがわかった。この成分のタイプ別は、銭文と関係がある。また、塼仏の付着物の分析結果からは、白色下地、漆、金箔などを塗布して装飾していた様子が明らかとなり、個体により使用した顔料に違いがあることも判明した。

Ｃ　調査地の性格

今回の分析で明らかとなった、調査地の性格について最後にみていく。

藤原京期　左京六条三坊の遺構は、整然とした建物配置と、建物に囲まれた前庭を有することから、官衙とみられる。また、出土した膨大な量の土器の分析からも、官衙的な性格が認められる。藤原京内に置かれた官衙の例としては、出土した木簡の記載内容から、左京七条一坊の衛門府と右京七条一坊の右京職が判明している。ともに藤原宮に隣接する場所に立地しており、衛門府は四町占地、右京職は三町（以上）占地という広大な敷地面積を占める。この2点は、左京六条三坊についても当てはまる。

藤原京期の中頃、701年に大宝令が施行された。それに伴って、単独の官司であった京職は左京職と右京職に分かれた。左京六条三坊からは、「左京職」と記した木簡が出土した。本調査地は左京域に位置していることからも、藤原京期後半には左京職が所在したと考えられる。当地は藤原京期を通じて四町占地であり続けることから、701年までは京職が所在し、その後は左京職となった可能性が高い。これに伴う整備拡充で、Ⅲ-Ｂ期からⅢ-Ｃ期への改作を行ったのであろう。

一方、右京職は新たな官衙の敷地が必要となり、右京七条一坊にその地を求めた。右京七条一坊は、藤原京期前半には一町単位の占地で、西南坪は一町占地の貴族の邸宅であると考えられる。藤原京期後半には、その邸宅を官衙政庁へと改作する。敷地は官衙の実務域である北の右京七条一坊西北坪、および南の右京八条一坊西南坪と一体化させ、縦長の三町（以上）占地となる可能性が高い。右京七条一坊・右京八条一坊の西半分に改作を加えることで、新たに右京職の敷地を確保したと考えられる。

奈良時代　奈良時代では、「香山」と墨書した土器が注目されてきた。香山は調査地のすぐ東側にある香具山のことで、耳成山、畝傍山とあわせて大和三山を構成し、聖なる山として重要視された。倉庫とみられる建物を検出していることもあわせて、天平2年度（730）大倭国正税帳に記載がある「香山正倉」に関わるとする見方が広く受け入れられてきた。大倭国正税帳の検討からは、香山正倉は十市郡ではなく、高市郡に所在したと考えられる。調査地は高市郡と十市郡の郡境付近にあたり、どちらの郡に所在したかを確定させることは容易ではない。『延喜式』や中世喜殿荘関係の11世紀後半の史料の分析などからは、調査地は高市郡ではなく十市郡に属する可能性が高いと考えられる。香山正倉は十市郡には所在しないため、調査地を香山正倉に比定する見解は再考する必要がある。当地には香山正倉とは別の、東隣の香具山にちなんで「香山○○」と呼ばれていた施設があり、「香山」と記した墨書土器はこれに関連するものと考えられる。

その他の時代　当地での各時期の土地利用の様子が明らかとなった。古墳時代では、竪穴建物から韓式系土器の多数の出土がみられ、飛鳥周辺地域の開発に関わった渡来系の人々の活動の様子がうかがえる。7世紀代には舒明天皇11年（639）に建立された百済大寺とみられる吉備池廃寺と同様の瓦が出土し、明確な遺構は検出できなかったものの、それとの関係が興味深い。平安時代以降は、現在見られる農村景観に徐々に変化していった様子が跡づけられた。

展望と課題　この様に、左京六条三坊における今回の発掘調査とそれに関わる一連の分析、考察により、多くの成果が上がった。今回の調査の主目的である藤原京期では、検出した遺構群は京職および左京職であることが判明し、京内官衙の実態に新たな知見を加えた。特に、建物配置などの具体的な様相を把握できたことは、他の京内官衙の情報が断片的であったこともあり、重要な成果であると言える。関連した分析では、藤原宮に近い地域での大規模な施設の展開がよりいっそう明確となった。左京職に対する右京職が、実は広大な敷地を有する官衙であることと考えられる様になったことは、京内官衙の実態を考える上で、重要な資料を提供したと言える。しかし、藤原京における発掘調査は他の都城に比較して少なく、今後とも継続的な調査を実施し、日本最初の中国式都城、藤原京の実態をより明らかにしていくことが望まれる。

補論　都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）庁舎および収蔵庫の建設

1　敷地の選定

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）庁舎および収蔵庫を建設するに至った経緯は、第Ⅰ章Ｂで述べた。ここでは、その用地取得と整備方針の決定、竣工までの経過を報告する。これらについては、既に『飛鳥藤原宮跡発掘調査部新営施設概要』[1]や当研究所発行の年報[2]等で各年度の事業報告としてまとめてきたが、今回はこれらの報告内容に、設計図書などの資料から情報を補ってとりまとめることとする。

建設用地は、藤原宮跡を外れることを基本原則とする一方で、調査部の発掘事業の遂行上、飛鳥地域からも藤原宮域からも離れない候補地のうち、1983年度に橿原市木之本町宮ノ脇に決定した。用地は1984年度から橿原市の財団法人土地開発公社によって先行取得がなされ、1985年度には土地購入を完了した。そして、1985・86年度には本書で報告する発掘調査を実施し、それに並行して建設省近畿地方建設局[3]が地形測量、ボーリング調査等を行った。

2　土質調査

庁舎の設計と施工を円滑に進めるための土質工学的基礎資料を得ることを目的に、近畿地方建設局が川崎地質株式会社に委託し、敷地調査の一環として、敷地測量調査と併せて1985年9月～11月に行った。調査内容は、調査ボーリングおよび標準貫入試験と、不攪乱試料採取による室内土質試験である[4]。

調査地にあたる香具山は、西南日本内帯の中央構造線のすぐ北側にそって分布する領家花崗岩質変成岩（白亜紀後期）により構成されており、特に調査地周辺では、花崗岩閃緑岩類（黒雲母花崗閃緑岩～石英閃緑岩）を主体とする。調査ボーリングでは、これらの花崗岩閃緑岩類を基盤層として、その上位を不整合に被覆する段丘砂礫層と地表面を形成する沖積堆積層が認められた。また地下水位は、敷地の西南部を最高位として北東方向へ傾斜し、水位等高線はほぼ等間隔の同心円状に描ける。

地表面付近に分布する沖積堆積層は、そのＮ値や一軸圧縮強度より推定されるせん断抵抗力や圧密特性から、地耐力はわずかなものしか期待できない。また段丘砂レキ層もＮ値が低く、良好な支持層とは言えない。よって、上部構造物に対する有効な支持地盤は基盤花崗岩と判断された。地表面が76.7m（OP：78m）前後であるのに対し、基盤花崗岩は、敷地西南部では69.7m（OP：71m）付近で、ほかは概ね71.2～72.2m（OP：72.5~73.5m）付近で出現し、全体に上部ほど風化が進み土砂化している。しかし一方で、実際に敷地全域にわたって行った発掘調査によって、当敷地内の遺構面は74.8～77.4mにあることが判明した。地盤層は遺構面より3～

6ｍ程度低い標高にあるものの、遺構の保存を最優先とする考え方から、杭基礎など遺構面を掘り下げる工法は採らないことを原則として、基礎工法を決定する際には遺構への影響を与えない方法を工夫することとなった。

3　設計と施工

A　建設の経過

1987・88年度の新営に際しては、基本設計と実施設計は近畿地方建設局営繕部、施工管理は建設省京都営繕工事事務所、工事請負は鉄建建設株式会社と村本建設株式会社に委託した。管理研究棟と収蔵庫棟の2棟を中心とする施設を計画し、1987年2月に建物の建築工事が起工、1988年8月には建物が完成し、9月に新庁舎へ移転した。植栽の完了は同年12月で、これをもって竣工をみた（Fig. 306）。

その後、1989年6月には公開部門の展示室が「藤原宮跡資料室」として開室した。1990年度には、遺構・遺物の保存処理および保存科学研究のための実験・処理棟が完成し、必要な設備を設置した。さらに出土遺物の増加から第二収蔵庫の新営を計画し、1995年度の補正予算により全体計画の南半分を竣工した。残りの半分は2004年度に事前調査を実施し、2005・06年度に増築した。

Fig. 306　完成した新庁舎（南西上空から）

B　設計の基本方針と構造

1987年度の建物設計に際しては、以下の基本方針を設定した。

① 敷地内の遺構の保存に配慮する

・遺構保存に対応する建物配置と構造計画

② 周辺環境との調和を図る

・第二種風致地区に相当する自主規制（建蔽率30％以下、最高高さ10m以下など）

・低層分棟型の配置計画

・建物を目立たせず既存樹林と調和する植栽計画

③ 古代文化の研究及び公開展示の施設にふさわしい外観と環境とする

・瓦葺の和風の外観

・正面道路沿いの開放的なオープンスペースと遺構を生かした屋外展示

④ 効率的で使いやすく快適な建築空間とする

・屋外作業場を取り囲む管理研究棟と収蔵庫棟の建物配置

・コンパクトな平面計画および人ともののスムーズな動線計画

・積層棚による効率的な遺物収蔵方式

⑤ 省エネルギー化に配慮しメンテナンスの容易さと経済性を重視する

・外壁の断熱化

・空調設備の用途別ゾーニングと蓄熱槽の設置

・節電型照明器具の採用と全館照明の中央点滅装置

⑥ 将来の増築を考慮して敷地の有効利用を図る

・建築面積　約1,050㎡の増築スペースを確保

この時、建物は敷地西方の主要遺構を避けて、管理研究棟を東寄りに配置し、敷地東部に南北棟の収蔵庫（第一収蔵庫棟）を建設した。工法は鉄筋コンクリート造で、管理研究棟、第一収蔵庫棟とも2階建である。

当敷地は香具山の麓に位置しており、南から北へやや下がる。また、敷地と香具山との間に中の川が流れているため、敷地内の東半は川へ向かって西から東に下がっている。この地勢は

Tab. 24　建築概要と構造

建物No.	名　称	竣工年度	面　積		構　造	棟高（m）	軒高（m）	屋　根
			建面積（㎡）	延面積（㎡）				
1	管理研究棟	1988	3,096	3,998	鉄筋コンクリート造 （一部鉄骨鉄筋コンクリート造） 2階建	10.00	6.25	和風桟瓦葺
2	第一収蔵庫棟	1988	1,303	2,338	鉄筋コンクリート造 2階建	10.00	7.98	和風桟瓦葺
3	第二収蔵庫棟	1995・ 2005	6,016	2,514	鉄筋コンクリート造 3階建	11.75	9.64	和風桟瓦葺
4	実験・処理棟	1990	220	293	鉄筋コンクリート造 2階建	10.00	7.98	和風桟瓦葺
5	付属棟	1988	90	90	鉄筋コンクリート造 （一部鉄骨造） 平屋建	2.30	2.15	フッ素樹脂鋼板
6	自転車置場	1988	—	—	鉄骨造 平屋建	3.10	2.30	和風桟瓦葺

遺構検出面においても同様であり、敷地内で標高が高いのが西南部、低いのが東北部、その比高は約2.5mである。このような高低差のある敷地において、遺構を保存しつつ景観に配慮するため、2階建以上の建物は敷地内の東部に配置し、その床レベルを下げることで建物の高さを調整し、第二種風致地区に相当する自主規制として棟高10m以内に抑えた。基礎は、遺構保存を最優先としてベタ基礎地中梁工法とし、基礎本体の施工に際する掘削深度は、遺構検出面＋30cmまでを基本とし、その上に良質土、さらに地盤改良土を厚20cmで敷いて、地盤の強度を高めた。

なお、後に第一収蔵庫北方に保存科学処理施設（実験・処理棟）と、敷地北方に東西棟の収蔵庫（第二収蔵庫棟）を増設したため、建物配置は全体として中庭を囲むロ字形の配置となった（Fig. 307）。実験・処理棟は2階建、第二収蔵庫棟は3階建である（Tab. 24）

C　各棟の概要

管理研究棟　管理研究棟は、西から公開部門、管理部門、整理・研究部門となる。

公開部門の展示スペースは、導入部としての玄関ロビー、第一展示室、第二展示室の3つに分かれる。講堂は約200名が収容可能で、主な設備として電動暗幕、電動スクリーン、ウォールバックシステムを設置している。展示室周辺の屋外には、本書報告の発掘調査で判明した藤原京関係の建物遺構の柱位置等を表示している（後述）。

管理部門は棟の北翼部分にあたり、庶務室、応接室、部長室、会議室のほか、現業部門の作業員控室、器材庫、車庫がある。さらに電気室、機械室、空調機械室があり、庶務室に設置した中央監視盤および複合防災盤によって管理している。

整理・研究部門は棟の東翼部分にあたり、ここだけが2階建である。1階が整理部門で遺物により土器、木製品（木簡）、瓦の3つの整理室に分かれる。東端には写真室を付置してある。ほかに特殊遺物保管庫がある。2階は研究室や図書室等で、大部屋を書架で仕切って20人分のスペースを設けた。図書室の蔵書は20,000冊。フィルム保管庫は恒温恒湿としており、各種のフィルム60,000コマを収める。図面資料室には、遺構実測図、大判地図など約18,500点が収納してある。

第一収蔵庫棟　第一収蔵庫の1階には、水漬けの木器や木簡を収納する場所と、袋詰めにした丸・平瓦を積み上げるための「馬房」がある。大型木製品用の水槽は地下式として木製の蓋を被せ、上面も利用できるようにした。2階は収容量を増やすために床を2層敷とし、箱詰めした土器、瓦を高層棚に収めてある。また遺物の上げ下ろしのために、搬入ホールに300kgまで積載可能のダムウェイターを設置し、大型遺物搬入のため、東側に電動シャッターによる開口部を設けた。

第二収蔵庫棟　第二収蔵庫の1階は、整理作業場としても使用も可能な収蔵庫、恒温恒湿の特殊保管庫などがある。2階と3階は全面に高層棚を設置し、箱詰めの遺物を収めている。建物外観、形状、仕上などは、周辺の既存建物との景観調和を基本とした。第一収蔵庫と同様に300kgまで積載可能のダムウェーターを設置し、大型遺物搬入のため、西側に電動シャッターによる開口部を設けた。

実験・処理棟　遺構・遺物の保存処理および保存科学研究のための実験・処理棟は、1階220㎡

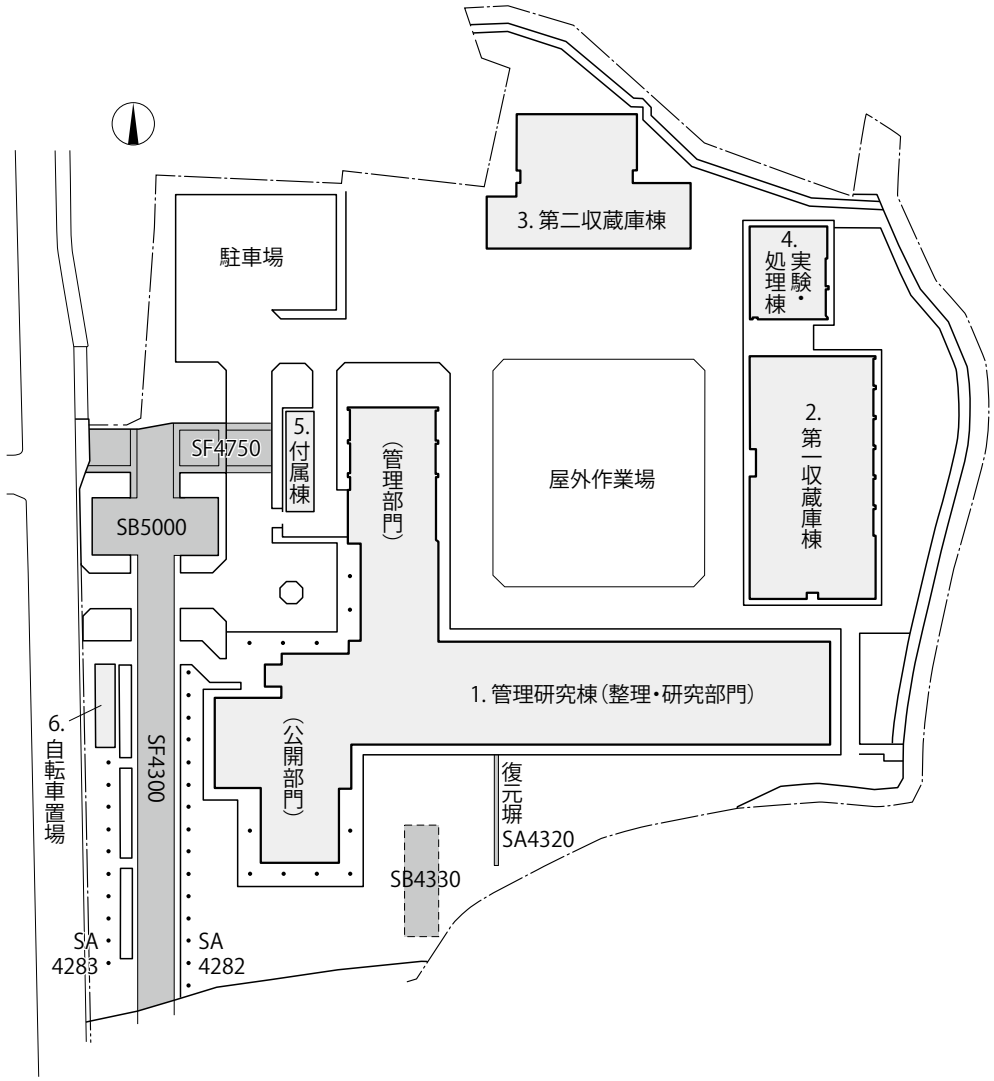


Fig. 307　新庁舎の現在の建物配置

と2階73㎡からなる。1階は保存処理室と処理に関する実験室で、2階は材質調査に関する実験室である。各実験室は、温湿度条件を整えるためパケージ形ヒートポンプエアコンを単独設置した。また1階保存処理室には、大型遺物を搬入するため、東側に幅4.4m、高さ3.7mの電動シャッターによる開口部を設けた。飛鳥藤原地域で出土の多い有機質遺物、金属製遺物、石造物などの保存処理・研究に対応できるよう、装置や設備の導入を行った。

4　藤原宮跡資料室の展示と屋外遺構表示

藤原宮・京に関する調査研究の成果について一般に公開し、その保存と活用に資することを目的に、庁舎には公開部門を設けている。導入部となる玄関ロビーには藤原宮・京の案内板を設置し、速報展などの企画展示を開催している。ロビーから「タイムトンネル」となる通路を通過すると、展示室に至る。第一展示室は、藤原宮・京について、あるいは発掘調査の進め方について、遺物、パネル、模型、マルチビジョンなどで説明している。第二展示室は「基準資料室」と名付け、さらなる理解を求める一般の方々や研究者を対象に、7世紀代の編年に関わ

る土器と瓦を展示している。

また屋外展示として、発掘調査で判明した敷地内の藤原京期の遺構の位置を表示している。敷地内で条坊道路を検出した一帯は敷地の入口にあたり、藤原京の東三坊坊間路SF4300、六条条間路SF4750と、SF4300の両側に併走する掘立柱南北塀SA4282・4283、および敷地内で最も主要な建物遺構である掘立柱東西棟建物SB5000について、位置と規模を陶柱やタイルで表示した（Ph.171）。また、展示室東南の中庭には、東脇殿SB4330の建物範囲を盛土によって表示し、ツゲの木を植栽して柱位置を示すとともに、掘立柱南北塀遺構SA4320の一部を当時の技法によって復元した（Ph.171）。展示室の南西には、屋外展示として、藤原宮西面中門の調査で出土した礎石と唐居敷を設置している。敷地内の最も主要な遺構が、道路際にあたる西部で確認されたため、建物建設に際して主要遺構を避けると同時に、敷地前面での遺構表示による屋外展示が可能となったと言えよう。

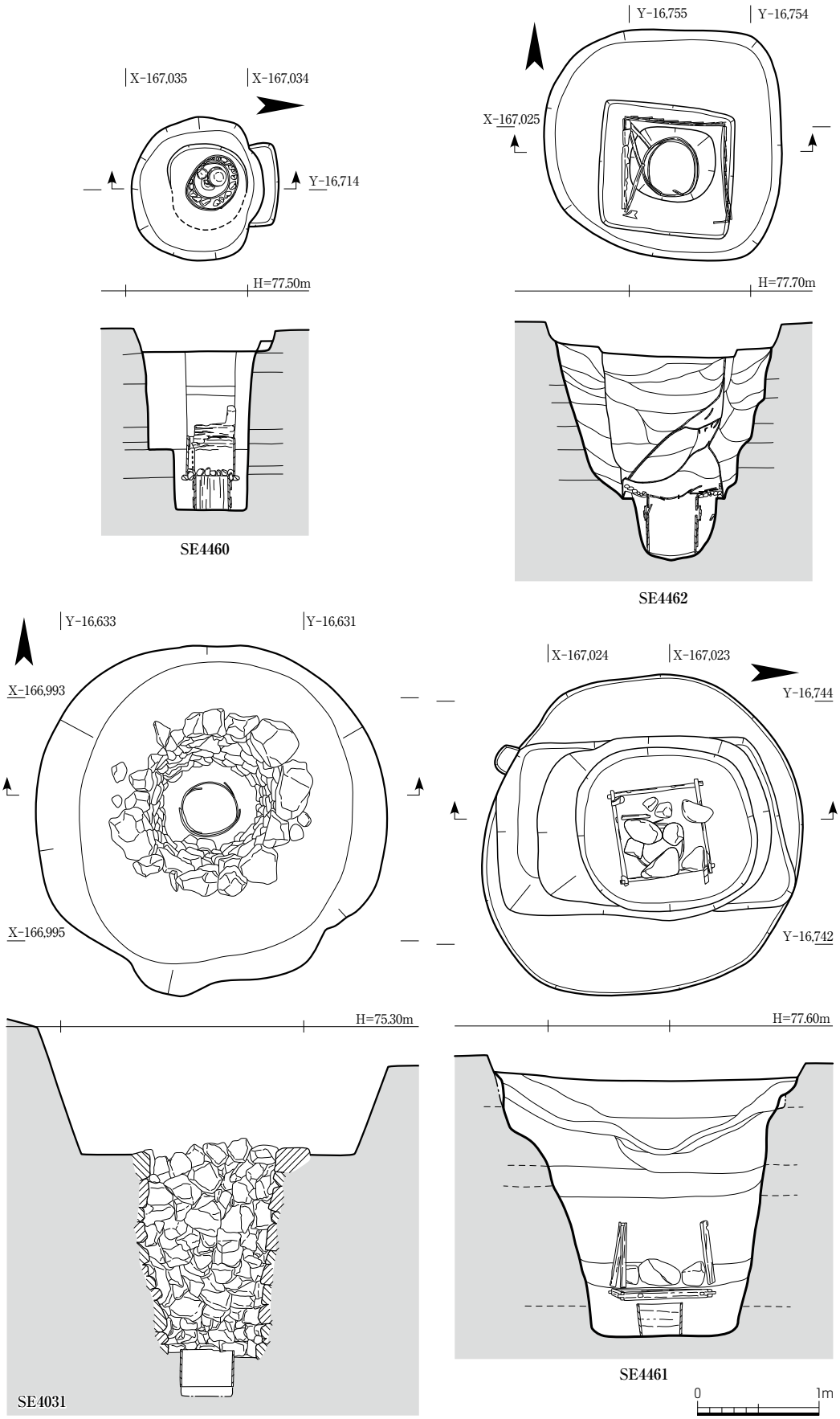
1） 奈文研1989『飛鳥藤原宮跡発掘調査部新営施設概要』。

2）『奈文研年報1989』、『同1990』、『同1991』、『同1997-Ⅰ』。

3） 現国土交通省近畿地方整備局。他にも省庁再編にともなって名称変更された部局があるが、ここでは当時の名称を用いた。

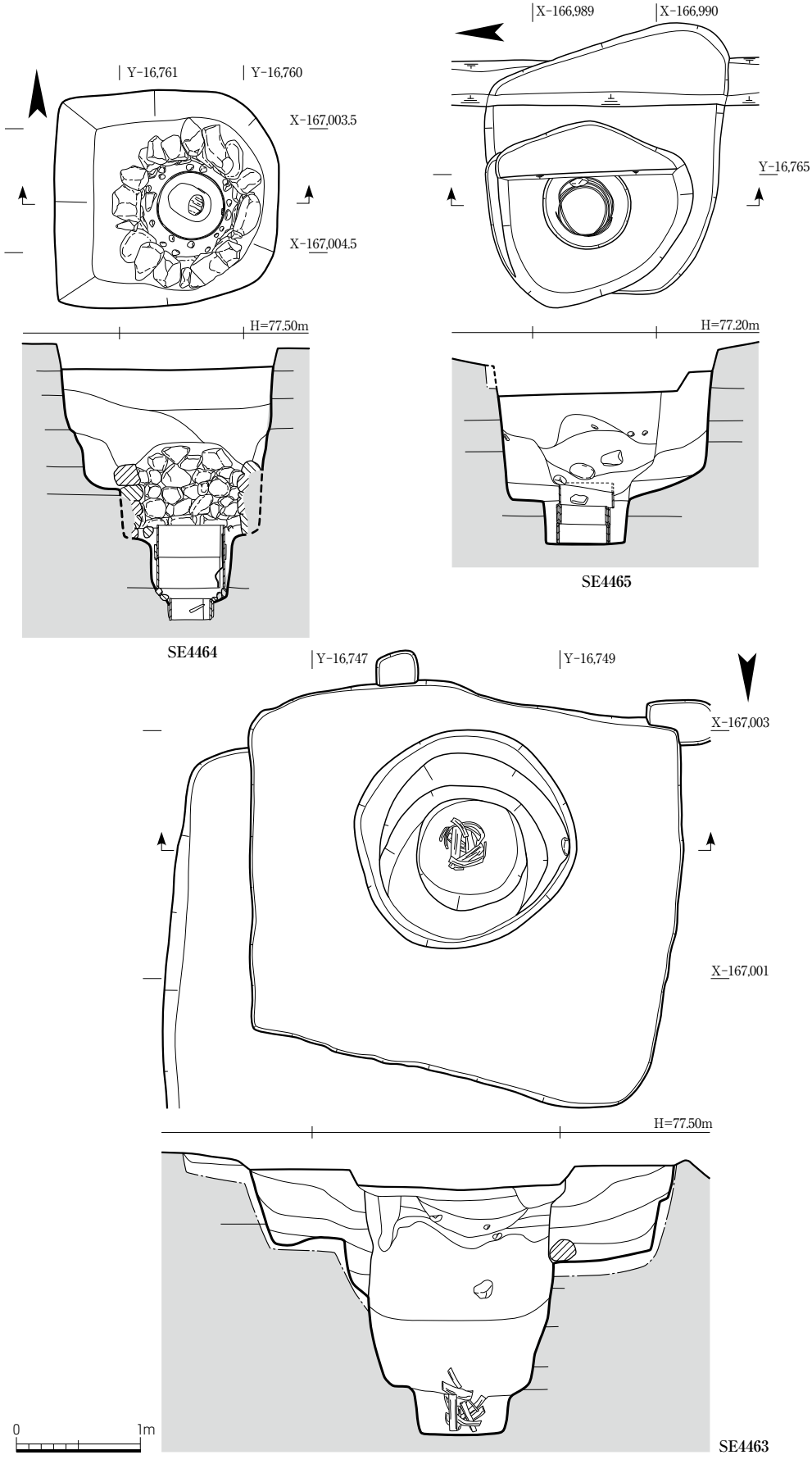
4） 近畿地方建設局営繕部・川崎地質株式会社1985『飛鳥藤原宮跡資料館敷地調査作業 報告書〔土質調査編〕』。

別　　図

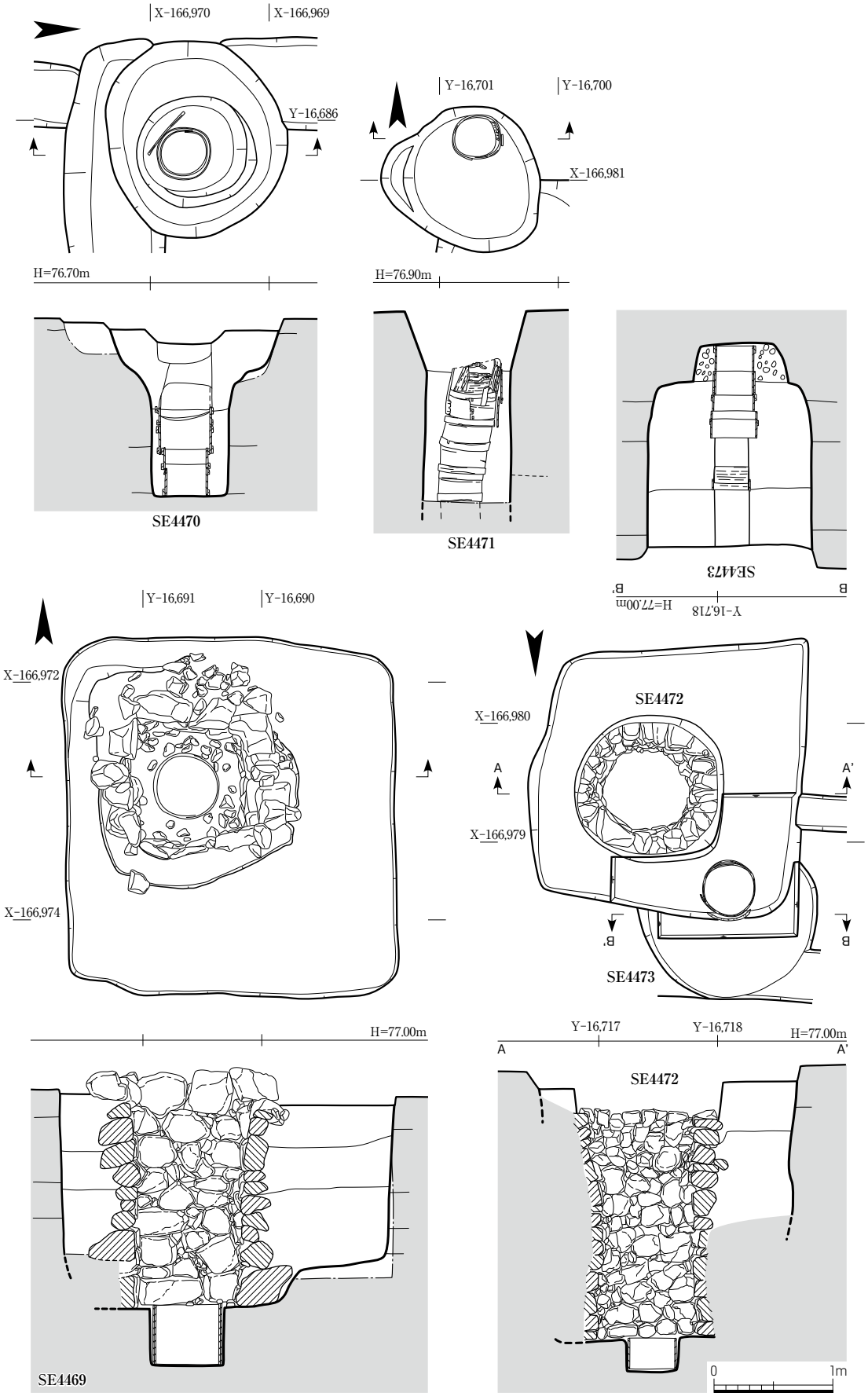


SE4031・4460・4461・4462　平面図・断面図　1:50

別　図 2

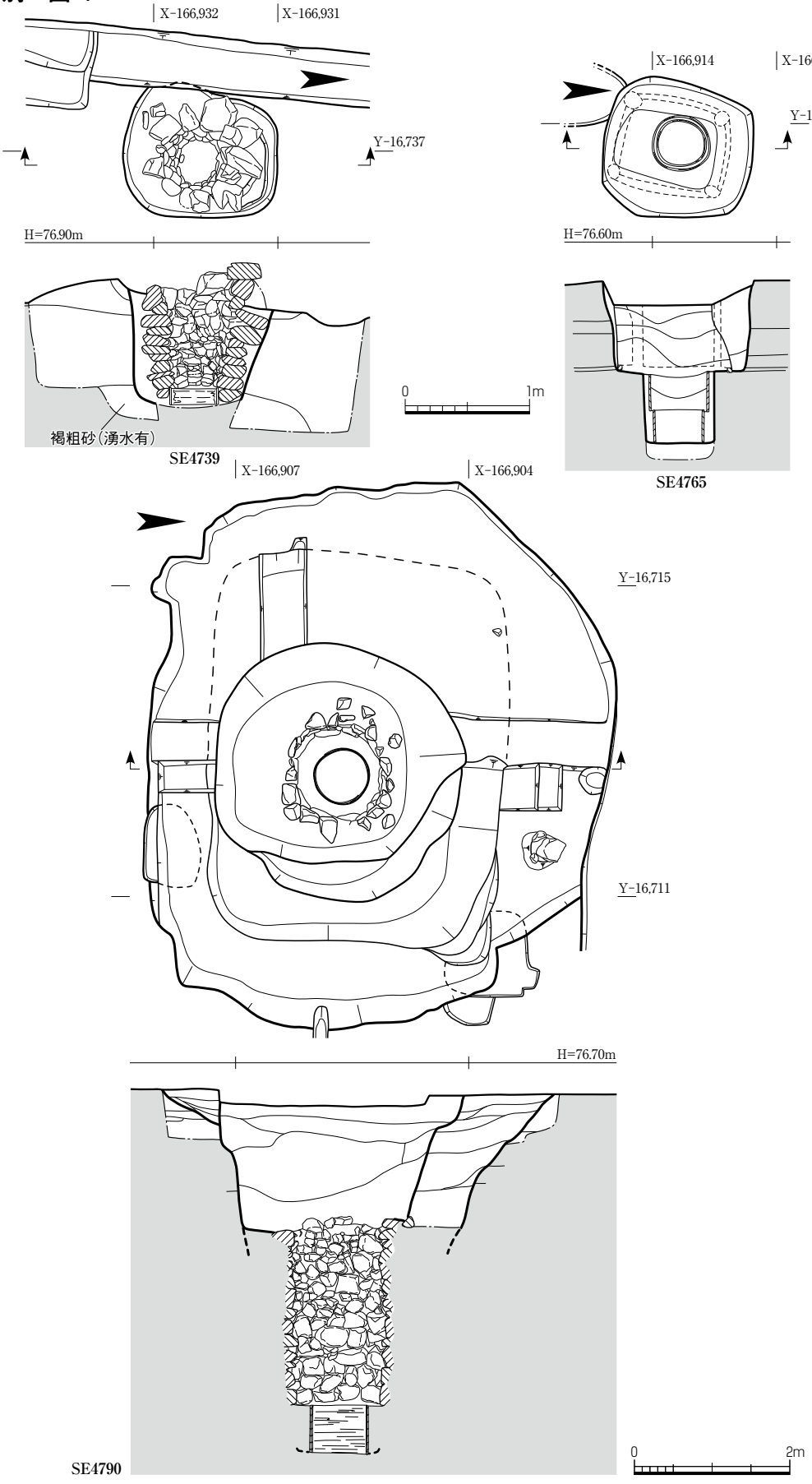


SE4463・4464・4465　平面図・断面図　1:50

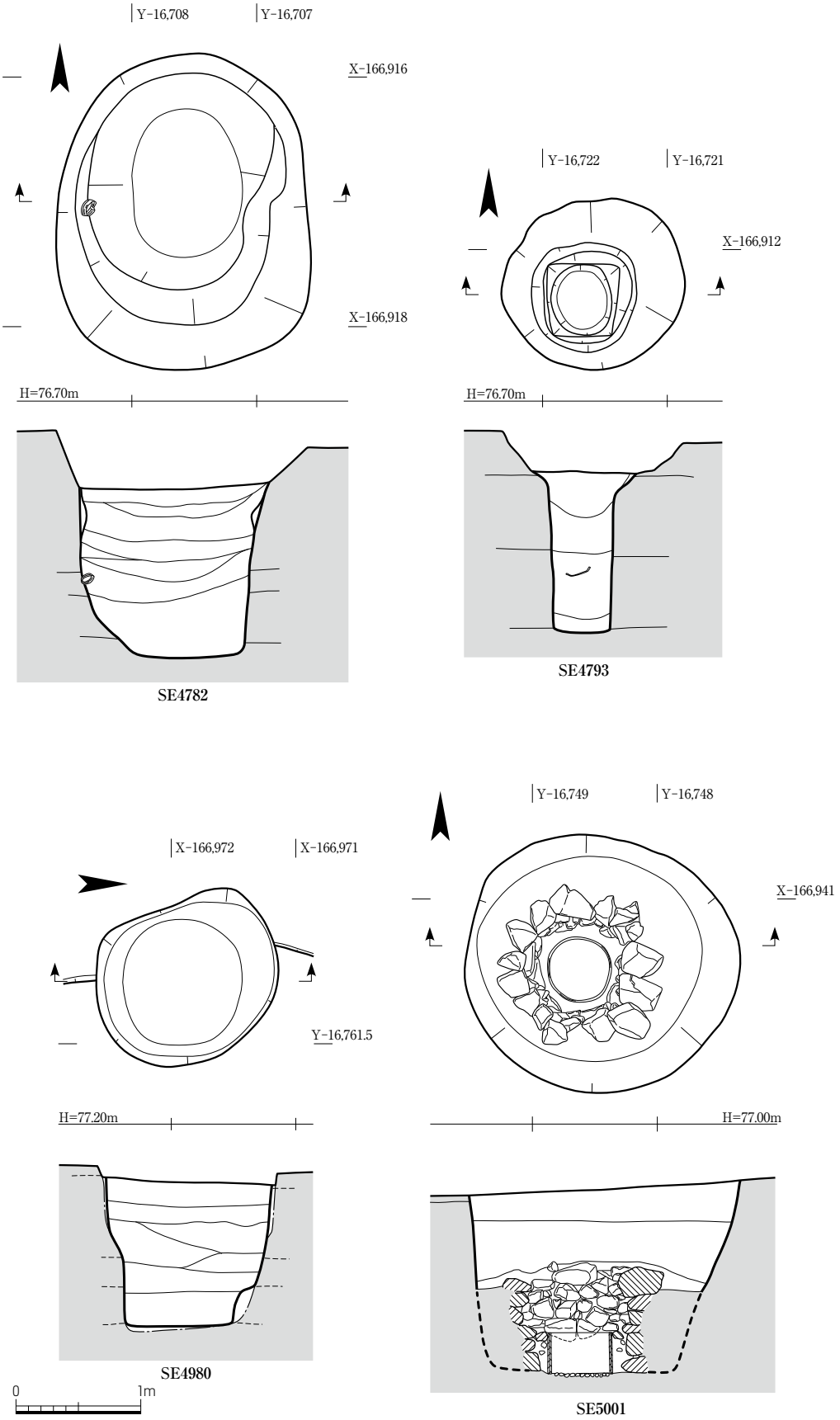


SE4469・4470・4471・4472・4473　平面図・断面図　1:50

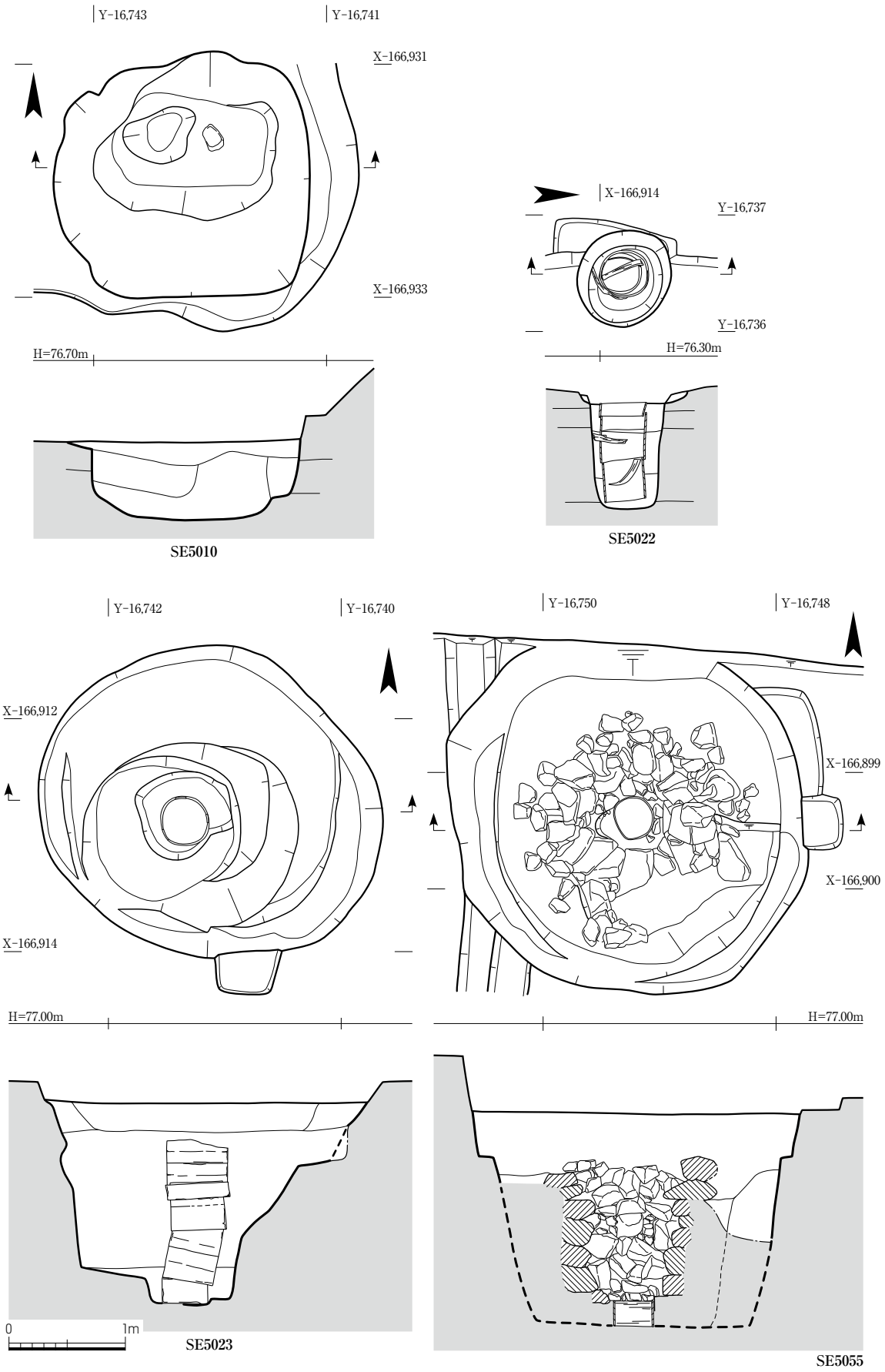
別　図４



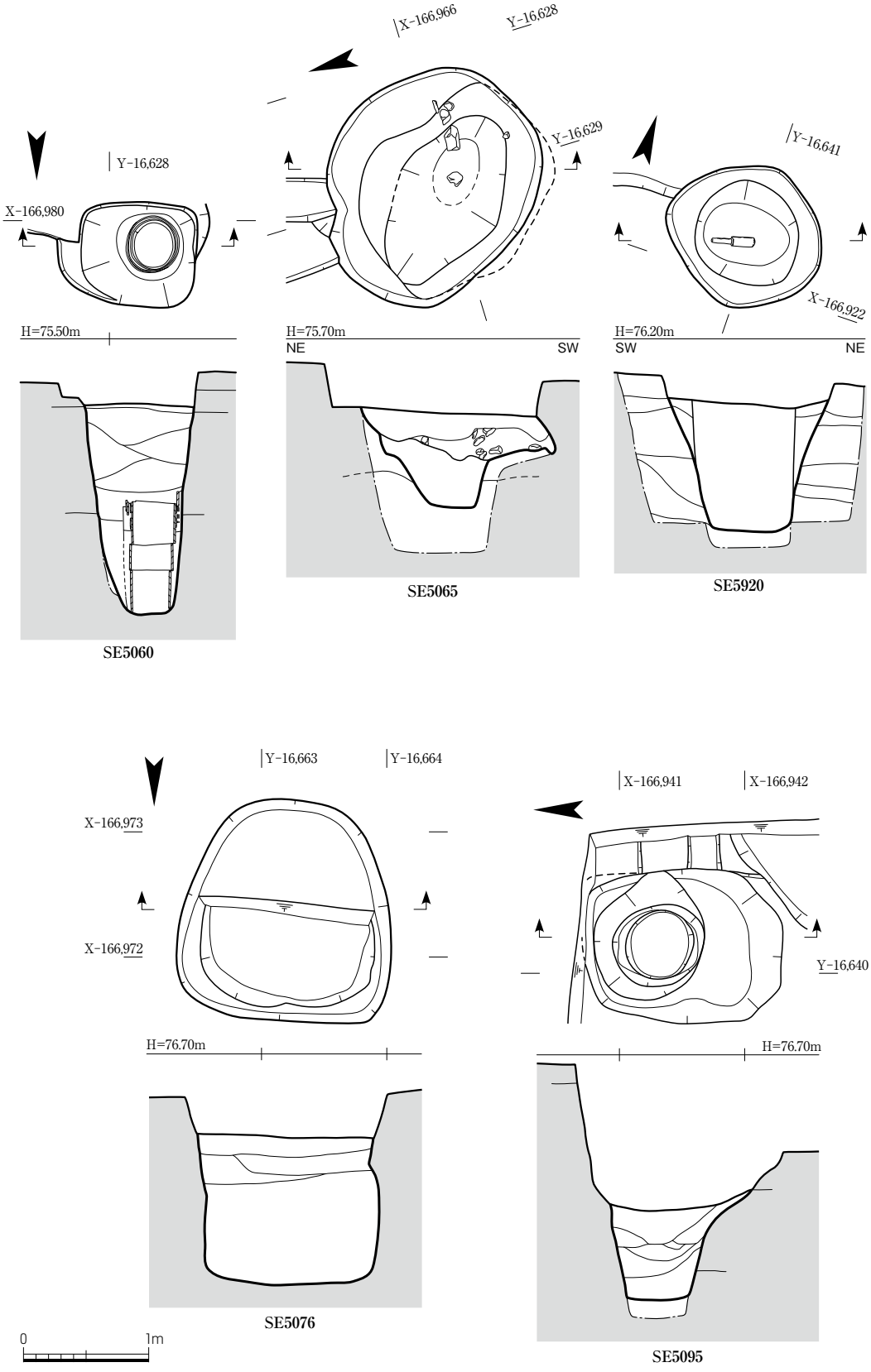
SE4739・4765・4790　平面図・断面図　1:50（SE4790　1:80）



SE4782・4793・4980・5001　平面図・断面図　1:50



SE5010・5022・5023・5055　平面図・断面図　1:50



SE5060・5065・5076・5095・5920　平面図・断面図　1:50

別　　表

別　表１　井戸一覧

遺構番号（太字は本文掲載）	掲載図番号	次数	時期	井戸構造						出土遺物（注記のない場合は枠内からの出土）
				構造 上段／下段	枠平面規模（m） 上段／下段	掘方形状	掘方規模（m）	深さ（m）	底標高（m）	
SE4031	別図1	45・53次	Ⅵ期	円形石組 曲物1段	径3.0 曲物径　0.4	円形	径2.9	3.0	72.30	12～13世紀の土器
SE4177	—	45・133-13次	Ⅵ期	円形石組	径1.3	円形	径1.8	1.0以上	74.64以下（未完掘）	曲物
SE4335	Fig.51	46次	Ⅲ-B期	円形縦板組 小判形曲物1段	長径0.5（幅0.2、8枚） 曲物径0.4	円形	径1.1	1.7	75.34	藤原宮期土器
SE4460	別図1	46次	Ⅵ期	曲物2段以上 曲物1段	上段曲物0.4 最下段曲物径0.3	円形 段掘り	径1.0	1.5	75.70	7世紀末軒丸瓦
SE4461	別図1	46次	Ⅵ期	方形縦板組 曲物1段	一辺0.7 曲物径0.4	長方形	2.3×1.3	2.3	75.04	木製品
SE4462	別図1	46次	Ⅵ期	方形縦板組 曲物2段	一辺0.8（幅0.15、12枚） 曲物径0.4	隅丸方形	一辺1.8	2.0	75.48	木製品
SE4463	別図2	46次	Ⅵ期	不明（曲物カ）	径1.4以内 曲物0.6以内	不整方形 段掘り	3.5×3.0	2.3	75.08	塼、漆器椀
SE4464	別図2	46次	Ⅵ期	円形石組 曲物2段	径0.8 曲物上0.5下0.35	隅丸方形	1.7×1.7	2.2	75.24	
SE4465	別図2	46次	Ⅵ期	不明 曲物3段	径0.35	不正方形	1.8×2.0	1.9	75.50	
SE4466	Fig.65	46次	Ⅵ期	抜取りカ	—	円形か 段掘り	長径1.7	2.0	74.55	
SE4467	Fig.65	46次	Ⅵ期	方形縦板組 曲物1段	一辺0.7（幅0.24、3枚） 曲物径0.4	隅丸方形 段掘り	一辺2.7	2.5	74.00	花形飾金具、鉄鎌、木製品
SE4468	Fig.65	46次	Ⅵ期	円形石組 曲物4段以上	径0.6 曲物径0.5	円形	径2.1	2.3以上	74.28以下（未完掘）	種実
SE4469	別図3	46次	Ⅵ期	方形石組 曲物1段	1.0×0.9 曲物径0.5	方形 段掘り	2.7×3.0	2.3	74.28	塼、木製品、石斧（裏込）
SE4470	別図3	46次	Ⅵ期	曲物4段以上	径0.4	円形	径1.5	1.4	74.91	
SE4471	別図3	46次	Ⅵ期	曲物5段以上	径0.35	不整円形	1.35×1.2	1.6以上	75.05以下（未完掘）	木製刳物
SE4472	別図3	46次	Ⅵ期	曲物7段以上	径0.4	円形	径1.5	1.9	74.87	
SE4473	別図3	46次	Ⅵ期	円形石組 曲物1段	径0.85 曲物径0.37	隅丸方形	2.3×2.3	2.6	74.20	木製品、鉄鎌
SE4474	Fig.66	46次	Ⅵ期	方形縦板組 曲物3段	一辺0.8 曲物径0.5	隅丸方形 段掘り	2.1×1.8	2.1	74.25	横櫛、短刀
SE4739	別図4	47次	Ⅵ期	円形石組 曲物1段	径0.5	隅丸方形	1.2×1.0	1.0	75.82	
SE4740	Fig.52～54	47次	Ⅲ-B期	方形横板組	一辺0.9	不整円形 段掘り	4.8×6.2	3.6	72.86	7世紀軒平瓦、「香山」墨書土器、硯、製塩土器、無文銀銭、和同開珎27点、斎串
SE4765	別図4	47次	Ⅴ期	方形縦板組 曲物2段	—	方形	一辺1.2	1.3	74.98	羽口、るつぼ、鋳型片（香炉カ）、鉄滓、砥石
SE4782	別図5	47次	Ⅴ期	不明	—	楕円形	長径1.4	1.8	74.65	箸、種実
SE4790	別図4	47次	Ⅵ期	円形石組 曲物1段	径1.0 曲物径0.7	長方形	2.5×1.9	4.65	71.65	13世紀後半～14世紀前半の軒平瓦、瓦器、短刀、鉄鎌、種実、天正元寶（上層）
SE4793	別図5	47次	Ⅴ期	不明（未使用カ）	—	円形 下部方形	径0.5	1.6	74.85	
SE4980	別図5	50次	Ⅴ期	不明	—	不整円形	径1.5	1.2	75.58	
SE5001	別図5	50次	Ⅵ期	石組 曲物1段	径0.8 曲物径0.5	円形	径2.2	1.5	75.00	瓦器
SE5010	別図6	50次	Ⅵ期	不明	—	隅丸方形	一辺2.2	0.7	75.30	瓦器
SE5022	別図6	50次	Ⅵ期	曲物3段	曲物径0.4	円形	径0.7	1.0	74.99	瓦器
SE5023	別図6	50次	Ⅵ期	曲物6段	径3.5	円形	径0.6	1.0	74.60	塼仏、瓦器、土師器、砥石
SE5055	別図6	50次	Ⅵ期	円形石組 曲物1段	径0.6 曲物径0.35	円形	径3.0	2.3	74.42	630～640年代の軒平瓦
SE5060	別図7	50次	Ⅵ期	曲物3段以上	径0.3	隅丸方形	1.0×0.9	1.95	73.30	
SE5065	別図7	50次	Ⅵ期	不明	—	不整円形	径1.7	1.1	74.36	
SE5076	別図7	50次	Ⅵ期	不明	—	不整円形	径1.6	1.5	74.86	
SE5095	別図7	50次	Ⅴ期	不明（抜取り、曲物カ）	—	隅丸長方形	1.6×1.2	1.2	75.74	羽口
SE5920	別図7	53次	Ⅳ期	円形素掘り	—	円形	径2.5	1.2	74.68	奈良時代後半の土器
SE5940	Fig.69	53次	Ⅵ期	方形縦板組	一辺0.5（幅0.1-0.3、2-3枚）	方形	一辺1.0	1.5	73.39	12世紀の土器
SE5950	Fig.57	53次	Ⅲ-C期	不明（未使用カ）	—	楕円形	2.0×1.6	2.5	74.05	
SE10175	Fig.44	133-13次	Ⅲ-A期	不明（抜取り、方形板組カ）	—	不整円形	2.5×2.7	1.6	74.30	

別　表２　7世紀の土師器の器種

器種名	番　号	器形等の特徴
杯A	1・2	広く平坦な底部から口縁部が斜め上にひらく器形。端部が内面に巻き込むものや、丸くおさめるものがある。外面にミガキ、内面に放射二段暗文を施したものが多い。法量差から杯AⅠ・AⅡがあるが、杯AⅡは少ない。飛鳥Ⅱで出現し、器高は徐々に低平化する。
杯B	4	杯Aに高台を付した器形。口縁部内面に放射二段暗文を施すものが多い
杯B蓋	3	笠形の頂部につまみを付し、端部が短く突出する蓋。外面に稠密なミガキを施す。
杯C	5・6	丸底に近い底部から口縁部が内弯気味に立ち上がる器形。口縁端部に内傾する面をもつ。口径差から杯CⅠ～杯CⅢがあり、器高は徐々に低平化する。内面に放射一段暗文を施すものが多い。
杯E	7	広い平底から口縁部が内弯気味に立ち上がる器形。外面をミガキする。把手を付すものがある。
杯F	8	杯Eに高台を付したもの。杯Eとともに、奈良時代に盛行。
杯G	9	丸底の底部と内弯気味の口縁部からなる杯。粘土紐巻き上げ痕を残す場合がある。ミガキや暗文はない。胎土等による細分が可能。『藤原報告Ⅰ』の杯A類、『藤原報告Ⅲ』の杯D。
杯H	10	口縁部を強くヨコナデし、底部を粗いヘラケズリで調整する粗製の杯。口縁部と底部の境に稜をなす。ミガキや暗文はなく、胎土は他の器種に比してやや粗い。『藤原報告Ⅰ』の杯B類
皿A	11	広く平坦な底部から短い口縁部が内弯気味に立ち上がる器形。端部は内側へ巻き込む。内面に放射一段暗文を施すものが多い。
皿B	13・15	皿Aに高台を付した器形。大型のものが多い。
皿B蓋	12・14	杯B蓋と同様の器形で、皿Bに組み合う。
皿C	16	小さく平坦な底部から口縁部が斜め上にひらく小型の皿。暗文は施さない。
皿H	17	小さく平坦な底部から短い口縁部が立ち上がる皿。底部外面をヘラケズリで調整する。
椀C	18	丸底の底部から内弯する口縁部が立ち上がる粗製の椀で、口縁端部には内傾する面をもつ。杯Gの系譜に連なるもので、外面に成形時の凹凸や粘土紐巻き上げ痕を残した例が多い。
把手付椀	19	口縁部が内弯する椀の胴部に角状の把手を付したもの。口縁端部は内傾し、わずかに面をなす。
鉢A	20	半球形の胴部と内弯気味にひらく口縁部とからなる深手の鉢で、口縁端部を丸くおさめる。内面に放射二段暗文を施すものがある。
鉢B	21	やや低平な半球形の胴部と内湾しながら立ち上がる口縁部からなる浅手の鉢で、口縁端部が短く外反する。内面に放射一段暗文を施すものがある。
鉢C	22	鉢Bに高台を付したもの。
鉢H	23	杯Hと同様の器形と調整で、直立気味の口縁部をもつ鉢。胎土も杯Hに同じ。『藤原報告Ⅲ』の杯E。
大型鉢	24	広く平坦な底部から口縁部が内弯気味に立ち上がる大型の鉢。内面に放射二段暗文を施す。
脚付椀	25	狭く平坦な底部からやや長く直線的な口縁部を付すコップ形の椀に、ラッパ形の脚柱を備える。角状の把手を1本付し、外面にミガキ、内面に暗文を施す。稀少器種。
蓋X	26	低平な円丘形の頂部にボタン形のつまみを付した蓋で、内面に放射一段暗文を施す。
盤A	27	平坦な底部から口縁部が斜め上に大きくひらく器形。大型で口縁端部には面をもつ。口縁部外面にミガキ、内面に放射二段暗文を施す。一対の把手を付したものもある。
盤B	28	盤Aに高台を付したもの。
高杯A	29・30	広く平坦な皿状の杯部に脚柱を付した器形。口縁端部は上方へ短く突出する。脚柱は周囲を縦方向のヘラケズリで面取りする。杯部内面に放射暗文と螺旋暗文を施す。奈良時代に盛行。
高杯C	31	杯Cに似た器形の杯部に、断面円形の脚柱を付したもの。口縁部内面に放射一段暗文を施す。杯部と脚部の接合部に段を残す。胎土等は杯Cに同じ。『藤原報告Ⅱ』の高杯B。
高杯G	32	杯Gに中実の脚柱を付したもの。暗文は施さない。
高杯H	33	杯Hにヘラケズリで面取りした中実の脚柱を付したもの。暗文は施さない。
壺A	35	肩の張った球形の胴部に直立する短い口縁部を付した広口の壺。いわゆる薬壺形。 胴部にミガキを施す。肩部に一対の把手をもつものが多い。
壺A蓋	34	ボタン状のつまみを付した平坦な頂部と短い口縁部とからなる蓋。壺Aに組み合う。
壺B	36	小さな平底といびつな球形の胴部とからなり、短く外反する口縁部をもつ広口の壺。胴部は手捏ねで成形し、外面は不調整のままとする。小型のものが多い。
甕A	37・38	球形の胴部と短く外反する口縁部とからなる広口の甕。いわゆる都城型甕。
甕B	39	甕Aの胴部中央に一対の把手を付したもの。
甕C	40	半球形の底部と長い胴部とからなり、短い口縁部が外方へとひらく背高の甕。いわゆる長胴甕。
鍔甕	41	甕Cの頸部直下に円環状の鍔を付したもの。
鍋A	42	半球形の胴部から外方へと大きくひらく口縁部とからなる広口の鍋。
鍋B	43	鍋Aに一対の把手を付したもの。
片口付鉢	44	胴部が半球形をなす大型の鉢で、口縁部の1箇所を折り曲げて片口としたもの。
甑	45	胴部がややひらき気味の円筒形をなす煮炊具の一種。底部に蒸気孔をもつものと、底部が開口したままのものがある。胴部中央に一対の把手を付す。
竈	46	截頭砲弾形の片側を大きく切りとり、その切開部の周縁に庇を付す移動式の竈。側面に手がかりの孔を開けたものがある。

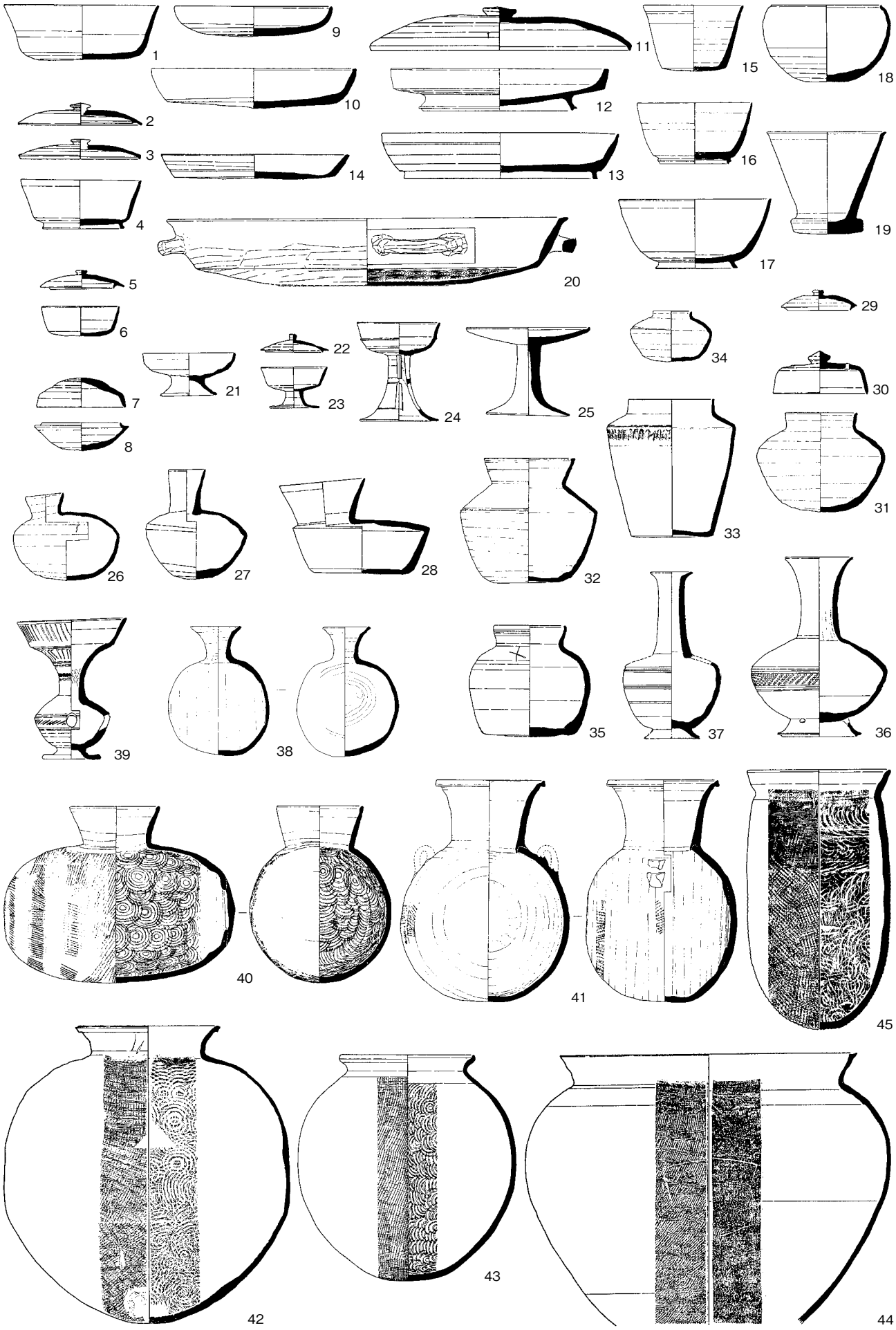
本報告書における土器の器種名は『平城宮発掘調査報告Ⅶ』『同XV』、『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』を踏襲するが、7世紀の器種名に関しては『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』『同Ⅲ』『同Ⅳ』、および『山田寺発掘調査報告』などにしたがうものとした。また、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』は『藤原報告』と略した。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46

別　表３　7世紀の須恵器の器種

器種名	番　号	器形等の特徴
杯A	1	やや広く平坦な底部から、外反気味の口縁部が立ち上がる器形。
杯B	4	杯Aと同様の器形で、高台を付したもの。
杯B蓋	2・3	笠形の頂部につまみを付した蓋。古い段階のものは口縁端部にかえりをもつが、7世紀後半にはもたないものが出現する。
杯G	6	小さく平坦な底部と、ほぼ直立する口縁部をもつ、口径9～11㎝の小型の杯
杯G蓋	5	笠形の頂部につまみを付した小型の蓋で、口縁端部にかえりをもつ。
杯H	8	丸底の底部からやや外反した「受け部」へとつながり、「受け部」の付け根から短い口縁部が内傾しながら立ち上がる器形。古墳時代以来の伝統的器種。
杯H蓋	7	円丘形の頂部から短い口縁部が垂下する蓋。杯Hに組み合う。
皿A	9・10	広く平坦な底部から、短く直線的な口縁が外反しながら立ち上がる器形。
皿B	12・13	皿Aに高台を付したもの。大型のものが多い
皿B蓋	11	笠形の頂部につまみを付した蓋。皿Bに組み合う。
皿C	14	皿Aと同様の器形で、口縁端部に平坦な面をもつもの。
椀A	15	杯Aと同様の器形だが、口径に比し器高が著しく大きいもの。
椀B	16	椀Aと同様の器形で、高台を付したもの。
椀C	17	椀Bに比し口縁部の立ち上がりが内弯気味で、丸みをおびたもの。
鉢A	18	ごく狭く平坦な底部から、強く内弯する口縁部が立ち上がる半球形の鉢。いわゆる鉄鉢形。
鉢F	19	厚い円盤状の底部から、長く直線的な口縁部が外方へと立ち上がる背高の器形。 底部下面に多数の穿孔を施すものもある。
盤	20	広く平坦な底部から短く外方へとひらく口縁部を立ち上げる大型で皿状の器形。 口縁部に吊り手形の一対の把手を付したものもある。
短脚高杯	21・23	小さく平らな底部から口縁部がほぼ直立して立ち上がる小型の杯部に、ラッパ形にひらく短い脚柱を付したもの。
短脚高杯蓋	22	頂部に小さなつまみを付した、かえり付の小型蓋。短脚高杯に組み合う。
長脚高杯	24	口縁部下半に1～2条の稜をもつ杯部に、二段透かしをもつ長い脚柱を付したもの。
高杯	25	浅い皿状を呈する杯部に脚柱を付したもの。
長頸壺蓋	29	扁平な頂部にボタン形のつまみを付し、口縁端部に内方へと鋭く突出するかえりをもつ小型の蓋。
壺A	31	肩の張った球形の胴部に直立する短い口縁部を付した広口の壺。いわゆる薬壺形。 7世紀には高台をもたないものが多い。
壺A蓋	30	宝珠形のつまみを付した平坦な頂部と、直角に折れ曲がる口縁部とからなる蓋。壺Aに組み合う。
壺B	32・33	平坦な底部から長い胴部が立ち上がり、肩部を強く屈曲させて短く直立する口縁部を付した背高で広口の壺。 肩部に1～2対の耳を付した例がある。
壺C	34	肩が丸みをおびた胴部に短く直立する口縁部を付した小型の壺。蓋がともなう。
壺F	35	平坦な底部で胴部は丸みをおび、内弯気味の短い口縁部を付した袋状の壺。
壺K	36	算盤玉形の胴部にラッパ形にひらく頸部を付した長頸の壺。高台を付すものもある。
細頸壺	37	倒卵形の胴部に細長い頸部を付した壺。
フラスコ形壺	38	球形に成形した胴部をいちど閉塞し、胴部の1箇所に開口して細長い頸部を付した壺。 まれに高台を付すものがある。
平瓶	26～28	扁平球形ないしは逆台形に成形した胴部をいちど閉塞し、器軸から外れた部位に開口して口縁部を付した器形。 7世紀のものは把手をもたず、胴部が扁球形を呈するものが多い。
瓶	39	球形ないし算盤玉形の胴部に、外方へとひらく長い頸部を付した壺形の器形。 胴部中央の1箇所に孔をあける。口径は胴径を上回る。
横瓶	40	俵形に成形した胴部をいちど閉塞し、側面の1箇所に開口して外方へとひらく口縁部を付した器形。
提瓶	41	偏球形に成形した胴部をいちど閉塞し、側面の1箇所に開口して頸部を付した壺。肩部に環状あるいは角状の把手を付したものがある。
甕A	42	倒卵形の胴部に外反する口縁部を付した甕。口縁端部が肥厚し、外傾する面をなす。
甕B	43	倒卵形の胴部に内弯気味にひらく口縁部を付した甕。口縁端部を丸くおさめるものや、内傾するものがある。
甕C	44	肩の張った広口短頸の甕。底部は平底となる
長胴甕	45	半球形の底部と長い胴部とからなり、短い口縁部が外方へとひらく背高の甕。土師器甕Cと同じ器形。外面にタタキ目やカキ目、内面に当具痕がある。

本報告書における土器の器種名は『平城宮発掘調査報告Ⅶ』『同XV』、『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』を踏襲するが、7世紀の器種名に関しては『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』『同Ⅲ』『同Ⅳ』、および『山田寺発掘調査報告』などにしたがうものとした。


1
9
11
15
18
10
12
2
3
14
13
16
19
4
20
17
5
29
6
22
34
21
23
24
25
30
7
8
33
31
26
27
28
32
39
38
35
37
36
40
41
45
42
43
44

別　表４　7世紀土器の大別

時　期	出土遺跡、遺構	径高指数 土師器 杯A	杯C	土器群の特徴	備　　考
飛鳥Ⅰ 以前	飛鳥寺下層			古墳時代的 土器様相	飛鳥寺造営開始588
飛鳥Ⅰ	小墾田宮推定地 SD050、SD124		41	律令的土器	
	川原寺下層斜行溝 SD02			様式の萌芽	川原宮：655以前
	山田寺下層 SD619、整地土		36	土師器杯C	山田寺造営641
	甘樫丘東麓遺跡焼土層 SX037		36	出現	
	飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層		34	須恵器杯G、	
	甘樫丘東麓遺跡 SK184			杯B出現	
飛鳥Ⅱ	坂田寺跡 SG100	32～34		土師器杯A、	
	水落遺跡基壇	39	32	皿A出現	斉明朝漏刻660
	西橘遺跡（未報告）		31	削り調整の 省略化	木簡：斉明天皇2年ヵ
飛鳥Ⅲ	大官大寺下層 SK121、SE116	32	28	須恵器杯A、	天智朝ヵ
	藤原宮西方官衙 SK1366			杯B定型化	
	藤原京左京六条三坊 SE2355		28	須恵器杯H 少量化	
飛鳥Ⅳ	上ノ井手遺跡 SD015			大型食器の	天武朝
	雷丘東方遺跡 SD110	29	22	成立	
	藤原宮下層運河 SD1901A		29		
飛鳥Ⅴ	藤原宮東大溝 SD105	26	22	土師器高杯A	藤原宮期
	藤原宮西方官衙 SE1105			定型化	木簡：大宝、慶雲、
	藤原宮東面内濠 SD2300				和銅
	平城宮下層下ツ道側溝 SD1900	26	22		

※本表で示した傾高指数の値はあくまでも概略のものであり、指標化をするものではない。

別　表 5　SD4130出土土器の器種構成（1）

下層　土師器

	器種	暗文	個体数			比率（%）	
供膳具	杯A	二段	6	11	54	6.5	55.4
		一段	2			2.2	
		無	3			3.3	
	杯B	二段	2			2.2	
	同蓋		3			—	
	杯C	一段	11			12.0	
	杯G		4			4.3	
	杯H		2			2.2	
	皿A	一段	4	6		4.3	
		無	2			2.2	
	椀A		1			1.1	
	椀C		1			1.1	
	鉢		3			3.3	
	高杯		6			6.5	
	盤		4			4.3	
貯蔵具	壺B		8		8	8.7	8.7
煮炊具	甕A・B		27		33	29.3	35.9
	甕C		1			1.1	
	鍋		2			2.2	
	甑		1			1.1	
	カマド		2			2.2	
	合計				95		100.0

下層　須恵器

	器　種		個体数			比率（%）	
供膳具	杯A		10		37	14.1	42.3
	杯B		6			—	
	同蓋	かえり有	3			4.2	
		かえり無	8			11.3	
	杯C		1			1.4	
	杯H		1			1.4	
	同蓋		1			-	
	皿A		1			1.4	
	皿B		1			1.4	
	椀A		1			1.4	
	椀B		1			1.4	
	鉢A		1			1.4	
	高杯		1			1.4	
	盤		1			1.4	
貯蔵具	平瓶		9		42	12.7	57.7
	提瓶		1			1.4	
	横瓶		2			2.8	
	瓶		1			1.4	
	壺A		1			—	
	同蓋		3			4.2	
	壺B		1			1.4	
	壺C		2			2.8	
	壺K		4			5.6	
	広口壺		2			2.8	
	甕A・B		13			18.3	
	甕C		3			4.2	
	合計				79		100.0

中層　土師器

	器種	暗文	個体数			比率（%）	
供膳具	杯A	二段	13	73	431	2.5	82.9
		連弧	11			2.1	
		一段	32			6.2	
		無	17			3.3	
	杯B	二段	2	5		—	
		連弧	1			—	
		無	2			—	
	同蓋		10			1.9	
	杯C	一段	10	15		1.8	
		無	5			1.0	
	杯E		5			1.0	
	杯F		1			0.2	
	杯G		3			0.6	
	杯H		4			0.8	
	杯X		2			0.4	
	皿A	一段	35	47		7.0	
		無	12			2.3	
	皿B	一段	2	3		0.4	
		無	1			0.2	
	皿C		2			0.4	
	椀A		5			1.0	
	椀C		227			44.2	
	鉢		8			1.6	
	高杯		21			4.1	
貯蔵具	壺A		3		8	0.6	1.6
	壺B		4			0.8	
	壺X		1			0.2	
煮炊具	甕A・B		57		80	11.1	15.6
	甕C		9			1.8	
	鍋		12			2.3	
	甑		1			0.2	
	カマド		1			0.2	
	合計				519		100.0

※同一器種で蓋と身がある場合は数の多い方で比率を算出。

別　表５　SD4130出土土器の器種構成（2）

中層　須恵器

	器種		個体数		比率（%）	
供膳具	杯A		45	152	21.8	58.3
	杯B		35		17.0	
	同蓋	かえり有	8		—	
		かえり無	24		—	
	杯C		7		3.4	
	杯E		1		0.5	
	杯F		1		0.5	
	杯G		2		1.0	
	杯H		1		0.5	
	杯X		3		1.5	
	皿A		7		3.4	
	皿B		4		1.9	
	皿E		1		0.5	
	椀B		1		0.5	
	鉢A		3		1.5	
	鉢D		3		1.5	
	高杯		5		2.4	
	盤		1		0.5	
貯蔵具	平瓶		10	89	4.9	41.7
	横瓶		1		0.5	
	瓶		1		0.5	
	壺A		5		2.4	
	同蓋		2		—	
	壺B		2		1.0	
	壺C		1		0.5	
	壺E		3		1.5	
	壺G		2		1.0	
	壺K		7		3.4	
	壺Q		5		2.4	
	広口壺		7		3.4	
	短頸壺		5		2.4	
	同蓋		1		—	
	細頸壺		2		1.0	
	甕A・B		32		15.5	
	甕C		3		1.5	
	合計			241		100.0

※同一器種で蓋と身がある場合は数の多い方で比率を算出。

上層　土師器

	器種	暗文	個体数			比率（%）	
供膳具	杯A	a/b	16	28	192	6.1	72.6
		c	9			3.4	
		e	3			1.1	
	杯B		1			—	
	同蓋		3			1.1	
	杯C		7			2.7	
	杯E		1			0.4	
	杯G		8			3.0	
	杯H		3			1.1	
	皿A	a/b	13	24		4.9	
		c	8			3.0	
		e	2			0.8	
		e-c	1			0.4	
	皿C		9			3.4	
	小型皿		3			1.1	
	椀A		12			4.6	
	椀C		64			24.3	
	鉢		3			1.1	
	高杯		25	26		9.5	
	短脚高杯		1			0.4	
貯蔵具	小型壺		2		6	0.8	2.3
	壺A		1			0.4	
	壺B		3			1.1	
煮炊具	甕A・B		48		66	18.3	25.1
	甕C		10			3.8	
	鍋		5			1.9	
	甑		2			0.8	
	カマド		1			0.4	
	合計				264		100.0

SD4130上層　黒色土器（A類）

	器種	個体数
供膳具	椀B	5
	合計	5

上層　須恵器

	器種		個体数		比率（%）	
供膳具	杯A		16	85	15.1	59.4
	杯B		23		21.7	
	同蓋	かえり有	8		—	
		かえり無	14		—	
	杯C		3		2.8	
	杯E		2		1.9	
	杯H蓋		1		0.9	
	皿A		3		2.8	
	皿B		2		1.9	
	皿D		2		1.9	
	椀A		1		0.9	
	椀B		1		0.9	
	椀X		1		0.9	
	鉢A		1		0.9	
	鉢D		2		1.9	
	高杯		4		3.8	
	盤		1		0.9	
貯蔵具	平瓶		10	45	9.4	40.6
	横瓶		1		0.9	
	瓶		1		0.9	
	壺A		2		—	
	壺A蓋		3		2.8	
	壺B		3		2.8	
	壺C		1		0.9	
	壺D		1		0.9	
	壺K		2		1.9	
	壺L		1		0.9	
	壺M		2		1.9	
	壺N		1		0.9	
	壺Q		2		1.9	
	広口壺		1		0.9	
	甕A・B		11		10.4	
	甕C		3		2.8	
	合計			130		100.0

別　表 6　SE4740出土土器の器種構成

掘方　土師器

	器種　暗文	個体数		比率（%）	
供膳具	杯A　二段	1	6	14.3	85.7
	杯C　一段	1		14.3	
	杯G	1		14.3	
	杯H	1		14.3	
	高杯C	1		14.3	
	鉢H	1		14.3	
煮炊具	甕A	1		14.3	
	合計	7		100.0	

最下層　土師器

	器種　暗文		個体数		比率（%）	
供膳具	杯A	二段	2	15	5.3	39.5
		連弧	2		5.3	
	杯B蓋		1		2.6	
	杯C　一段		3		7.9	
	椀C		5		13.2	
	皿A	一段	1		2.6	
		無	1		2.6	
貯蔵具	小型壺		2		5.3	
煮炊具	甕A		16	21	42.1	55.3
	甕C		4		10.5	
	鍋		1		2.6	
	合計		38		100.0	

最下層　須恵器

	器　種	個体数		比率（%）	
供膳具	杯A	2	6	9.1	18.2
	杯B	2		9.1	
	同蓋 かえり無	2		—	
貯蔵具	壺A	1	18	4.5	81.8
	壺	13		59.1	
	平瓶	3		13.6	
	甕A・B	1		4.5	
	合計	24		100.0	

（比率に杯B蓋は含まない）

下層　土師器

	器種　暗文		個体数		比率（%）	
供膳具	杯A	一段	1	16	5.3	84.2
		無	1		5.3	
	椀A		1		5.3	
	椀C		10		52.6	
	皿A　無		3		15.8	
煮炊具	甕A		3		15.8	
	合計		19		100.0	

下層　須恵器

	器種	個体数		比率（%）	
供膳具	杯A	1	4	11.1	44.4
	杯B	1		11.1	
	杯C	1		11.1	
	皿A	1		11.1	
貯蔵具	壺L	3	5	33.3	55.6
	壺M	1		11.1	
	壺	1		11.1	
	合計	9		100.0	

中層　土師器

	器種	個体数		比率（%）	
供膳具	杯A	1	13	6.3	81.3
	椀A	3		18.8	
	椀C	5		31.3	
	皿A	3		18.8	
	皿C	1		6.3	
貯蔵具	壺E	1	2	6.3	12.5
	小型壺	1		6.3	
煮炊具	甕A	1		6.3	
	合計	16		100.0	

中層　須恵器

	器種	個体数		比率（%）	
供膳具	杯A	1	2	33.3	66.7
	杯B	1		33.3	
貯蔵具	壺蓋	1		33.3	
	合計	3		100.0	

上層　土師器

	器　種	個体数	比率（%）
供膳具	杯A	3	42.9
	椀A	1	14.3
	椀C	1	14.3
	皿A	2	28.6
	合計	7	100.0

上層　土師器

	器　種	個体数	比率（%）
供膳具	杯B	1	50.0
貯蔵具	壺B	1	50.0
	合計	2	100.0

上層　黒色土器（A類）

	器　種	個体数
供膳具	椀B	2
	合計	2

別　表 7　SD4130・SE4740出土土器一覧（1）

層	Pl.	番号	器種	口径	器高	出土小地区
下層	14	1	杯A	19.2	5.2	NH33
		2		19.0	(4.7)	NH37
		3		16.0	(4.3)	NH25
		4		11.5	(2.9)	NH17
		5		10.8	2.5	NH18
		6	杯B	19.1	4.8	FG91
		7		14.8	4.1	FG91
		8	杯B蓋	11.8	2.8	FG89
		9	杯C	14.0	(3.3)	NH25
		10		16.0	(3.5)	NH36
		11		16.2	(3.5)	FG91
		12		15.4	(3.3)	FG88
		13		16.6	(2.9)	FG89
		14	杯G	11.0	3.3	不明
		15		13.0	(3.2)	NH19
		16	杯H	10.2	2.5	FG88
		17	Ⅲ A	18.6	2.9	FG91
		18		23.6	2.8	NH23
		19		22.6	2.7	NH26
		20	椀C	12.0	(3.8)	FG91
		21	鉢	30.0	(7.6)	NI36
		22		31.4	(6.5)	NH27·36
		23	高杯A	31.0	(2.1)	NH22
		24	盤	31.0	(4.6)	NG23·NH25
		25		54.6	(6.3)	NH25
		26	盤B	—	(6.4)	FG90·92
		27	壺B	7.0	5.6	NH20
		28	壺B	7.4	5.1	NH20
		29	壺B	6.6	5.1	NH18
		30	壺B	14.2	(3.9)	FG90
		31	壺B	14.0	(6.2)	NI32
		32	甕A	14.2	(5.6)	FG88
		33		15.0	(7.3)	FG89
		34		11.8	11.2	FG97
		35		18.0	(5.4)	NH26
		36		29.6	(6.1)	NH24
		37		26.6	(8.8)	FG91
		38	鍋A	34.0	(11.4)	NH14
	36	墨1	杯Cカ	—	—	NI34
	41	墨41	杯C	12.0	3.0	NH25
	15	701	杯A	16.5	4.0	FG91
		702		16.8	5.2	NH18
		703		17.4	6.8	NH25·26
		704		12.6	4.0	NH19·27
		705		9.6	3.8	NH20
		706	杯B	10.4	3.7	NH34
		707		11.6	5.3	NH24
		708		16.6	3.7	FG88·NH19
		709		15.1	4.8	FG91·92
		710		17.9	8.1	FG91
		711		20.6	4.6	NH23
		712	杯B蓋	15.2	(2.0)	NH37
		713		17.0	(1.5)	FG88
		714		18.0	(1.0)	NH20
		715		21.1	5.0	FG88·89
		716		17.6	2.0	FG90·91
		717		18.0	(2.7)	FG91
		718	杯C	16.3	4.2	NH23·24
		719	杯H蓋	9.8	3.2	NH25
		720	Ⅲ B	32.0	4.5	NH35
		721	Ⅲ A	23.2	2.5	NH32·NI33～35
		722	椀A	11.2	6.5	NH17
		723	椀B	12.5	(9.4)	FG91
		724	鉢A	15.8	(6.5)	FG88·91
		725	高杯	—	(4.2)	NI33
		726	壺A	12.0	(5.9)	FG91·92·NI28
		727	壺A蓋	12.0	(2.5)	NH14
		728		12.1	(3.5)	FG91
		729		9.1	2.8	NH22·25
		730	壺C	6.1	(5.1)	NH25
		731	壺K	—	(16.5)	NH33
		732		—	(20.8)	NG25
		733		7.7	21.3	FG93～95
		734	平瓶	4.6	(8.0)	FG91
		735	鼈	-	(7.6)	NH26
		736	甕A	20.6	42.6	FG91·92
	16	737	甕A	22.8	(12.5)	FG90·91
		738		—	(11.7)	NG25·NH19·25·26
		739		43.2	(13.3)	FG91·93
		740		27.0	(11.5)	FG90·NH35

層	Pl.	番号	器種	口径	器高	出土小地区
下層	16	741	甕A	19.2	(19.0)	FI99·NF10·NH15
		742		24.4	(8.3)	FG88
		743		21.6	(5.4)	FG90·91
		744	甕C	36.0	(15.0)	NI32
		745		48.0	(10.0)	FG87·91
		746		33.8	(29.6)	FG89·97
中層	17	39	杯A	18.6	4.9	NH17
		40		19.3	4.2	NI31
		41		19.0	3.5	NH28
		42		17.5	(3.7)	FG91
		43		17.5	3.1	NI31
		44		18.0	(3.9)	NI28
		45		21.2	(3.3)	NI27
		46		20.8	3.9	NH28·NI29
		47		18.8	(3.9)	NI30
		48		18.1	(4.4)	NI26
		49		21.7	3.9	NI28
		50		20.4	3.6	NH27
		51		19.5	3.7	NH29·NI35·36
		52		18.6	4.3	NJ35
		53		20.0	3.7	NH28·NI28·29
		54		19.3	3.6	NH33～35 NI31·32·35
		55		17.0	3.9	NH30
		56		16.6	3.5	NG·NH24
		57		19.4	4.1	NG·NH22
		58		19.4	3.8	NG·NH29
		59		19.5	3.5	NI26
		60		21.0	3.2	NH29
		61		—	(2.9)	NI29·30
		62		19.4	4.0	NG29·NH28·NI28·29
		63		18.4	3.8	NH25
		64		19.2	3.0	NH25·26·NI26
		65		17.6	(2.8)	NI34
		66		19.0	(4.2)	NI·NJ34
		67		17.0	3.7	NI32
		68		17.6	3.8	NI26
		69		13.0	2.8	NI31
		70		12.8	3.5	NI32
		71		13.6	3.2	NH37·38
		72		11.0	2.7	NI28
		73		15.1	(2.8)	NI32·33
		74		15.0	(3.4)	NI31
		75		15.4	2.9	NG23
		76		14.8	3.0	NH25
		77		14.8	2.9	NH26
		78		14.8	2.5	NH35
		79		14.7	3.3	NI30
		80		15.0	2.9	NH26
		81	杯B	19.3	4.7	NH30
		82		19.6	4.3	NI29
		83		23.4	4.9	NH28·NI28·29
		84		21.6	5.7	NI28·29
		85	杯B蓋	22.0	(1.7)	NI29
		86		19.0	(1.5)	NI28
		87		14.4	3.2	NI34
		88		15.5	1.9	NH25
		89	杯E	18.6	2.1	NH32
		90		18.6	2.5	NH24
		91		18.0	2.9	NH28·NI28·29
		92		13.5	2.8	NG29·NI29
		93		—	2.3	NI29
		94	杯F	20.0	4.7	NI31
		95	杯G	—	(3.2)	NH32
	18	96	杯C	17.8	3.4	NH28·NI28·29
		97		18.4	3.3	NI31·32
		98		18.0	3.4	NJ35
		99		19.2	3.6	NI29
		100		19.0	3.5	NI27
		101		16.0	2.6	NI29
		102		16.6	3.0	NH34·NI35·36
		103		17.0	(3.3)	NI29
		104		15.8	3.6	NI28
		105		11.6	3.2	NH-
		106	杯H	11.6	3.6	NG24
		107	杯X	15.0	2.8	NJ34·35

層	Pl.	番号	器種	口径	器高	出土小地区
中層	18	108	Ⅲ A	14.0	(2.1)	NI29·30
		109		15.0	2.3	NI31
		110		16.0	2.3	NH27
		111		15.6	2.2	NI23
		112		18.6	2.9	NH28
		113		17.5	2.6	NH27
		114		17.8	(2.7)	NI33
		115		18.0	2.6	NH24
		116		19.0	(2.0)	NH24
		117		24.0	2.7	NI28
		118		21.3	2.8	NG37
		119		22.0	(3.0)	NI31
		120		11.0	2.8	NH21·24
		121		18.6	2.3	NH27
		122		19.0	2.0	NG25
		123		19.6	2.6	NH31
		124		22.0	(2.9)	NH23
		125		23.3	2.6	NI31～33
		126		21.4	2.7	NH·NI32
		127		21.0	2.7	NI28·29
		128		21.8	2.4	NI32·33·35
		129		22.6	2.0	NI29
		130		21.5	2.2	NI31·32
		131		21.6	2.5	NH27
		132		21.2	2.6	NH·NI26
		133		24.4	2.3	NI31
		134		21.8	(2.5)	FH97
		135		22.4	3.0	NI26
		136		21.0	1.9	NG24
		137		22.0	2.4	NG29
		138		23.0	2.4	NI37
		139	Ⅲ B	31.0	4.0	NH29
		140	Ⅲ C	10.6	1.9	NH33
		141		10.2	2.4	NH31
		142	椀A	12.2	4.1	NI32
		143		12.6	(4.1)	NI28
		144		12.6	(3.3)	NG29
		145		13.2	3.8	NH28
		146		12.0	3.7	NH·NI28
		147	鉢B	27.6	(8.5)	NH25
		148		23.6	(6.8)	NH·NI28
		149		18.4	(4.8)	NH23·24
		150		18.7	(5.9)	NH26·27·NI26
		151		20.0	(5.8)	NI28
		152		21.0	(5.8)	NH27·NI28
	19	153	椀C	11.8	4.0	FH95
		154		11.9	3.4	NI36
		155		11.9	3.5	NH24
		156		12.4	3.1	NI26
		157		12.4	3.4	NI32
		158		12.4	3.7	NI29
		159		12.4	3.9	NH28·NI27
		160		12.4	4.2	NH·NI31
		161		12.5	3.7	NG29·NI28
		162		12.5	4.2	NH34·NI33·35
		163		13.0	3.3	NI29
		164		12.6	(3.3)	NH28
		165		12.6	3.3	NI27·28
		166		12.6	3.4	NH32
		167		12.6	(4.0)	NI32
		168		12.6	(3.8)	NI29
		169		12.8	3.5	NI29
		170		12.8	3.9	NI32
		171		12.8	3.9	NI31
		172		12.8	(4.0)	NH33·NI29·30
		173		14.8	4.0	NI28·29
		174		12.8	4.0	NI27
		175		12.9	3.7	NI28
		176		13.0	(3.3)	NH28
		177		13.0	3.5	NH31
		178		13.0	3.6	NG37·NH33·36·37
		179		13.0	3.9	NG26
		180		13.0	3.6	NI27
		181		13.0	3.7	NH27·28
		182		13.0	3.7	NI29
		183		13.0	3.8	NH28
		184		13.0	3.9	NI27
		185		13.0	3.9	NH31
		186		13.0	4.2	NI29

別　表 7　SD4130・SE4740出土土器一覧（2）

層	Pl.	番号	器種	口径	器高	出土小地区
中層	19	187	椀C	13.0	4.4	NI29
		188		13.2	3.4	NI28
		189		13.2	(3.6)	NH29
		190		13.2	3.8	NI28·29
		191		13.2	4.2	NI31
		192		13.3	3.8	NH25
		193		13.4	3.4	NI28
		194		13.4	3.5	NH27
		195		13.4	3.9	NI26·27
		196		13.5	3.6	NH33
		197		13.6	(3.7)	NI29·30
		198		13.6	3.9	NI26
		199		13.6	4.2	NH27·NI27·28
		200		13.8	3.9	NH32
		201		13.9	4.0	NH·NI27
		202		14.0	3.2	NH28
		203		14.0	3.6	NH32·33
		204		14.0	3.6	NI29
		205		14.0	(3.9)	NG·NH36
		206		14.0	4.0	NH·NI31
		207		14.4	3.6	NH27·NI28
		208		14.6	3.8	NI27
		209		14.6	4.1	NI26
		210		14.7	3.9	NI27
		211		15.0	3.8	NI27
		212		15.0	(4.5)	NI27
		213	高杯A	32.8	(2.5)	NH22·26
		214		–	(9.5)	NH29·NI28
		215		–	(9.4)	NJ29
		216		–	(9.5)	FG90
		217		–	(10.3)	NH25
	20	218	壺A	16.0	(6.5)	FG90
		219		13.2	(11.2)	NH26·27·NI26
		220		—	(21.2)	NH32·33·NI30·32·33
		221	壺X	9.7	(15.0)	NI36～38
		222	甕C	18.6	(9.5)	NI29
		223		27.6	(13.3)	NI30
		224		22.8	(12.5)	NH28
		225		23.6	(14.2)	NH35·NI31·32
		226	甕B	27.8	(16.5)	NH30·31·NI31
		227		31.0	(21.7)	NI29·30
		228		33.0	(26.2)	NG37·NH34·36～38·NI36·37
	21	229	甕A	31.0	(5.5)	NH26
		230		29.4	(9.7)	NI28
		231		29.0	(7.0)	NG29·NI28·29
		232		28.4	(8.7)	NG29·NH17·NI28
		233	鍋A	23.6	(7.2)	NI26
		234		26.4	(10.6)	NJ35
		235	鍋B	37.7	(12.9)	NI30·31·33
		236		38.4	(11.9)	NI31·32·35
		237		32.8	(16.0)	NH31·NI32
		238		48.0	22.4	NI36·37
	36	墨2	杯B蓋	17.6	(1.1)	NH24
		墨3		21.2	3.1	NH28·NI24
		墨4	椀C	13.6	3.8	NH25
		墨5		12.9	3.7	NH27
		墨6		13.4	4.5	NI28
		墨7		13.8	(3.1)	NI34
		墨8	杯類	—	—	NI33
		墨9		—	—	NI28
		墨10	杯カ	—	—	NI36
		墨11	杯類	—	—	NI28
		墨12	椀C	14.0	3.8	NH·NI27
		墨13	杯類	—	—	NH32
	37	墨14	杯A	15.0	3.3	NI27
		墨15	椀C	13.4	4.7	NH27
		墨18	杯類	—	—	NH25
		墨19		—	(1.2)	NI28
		墨20	杯A	19.0	(3.7)	NH24·NI26
	38	墨21	Ⅲ A	21.0	2.6	NI26
		墨22	杯C	17.3	3.5	NI28
		墨24	椀C	12.6	4.2	NI29
		墨25		12.9	3.6	NI28
	39	墨26	椀C	12.9	3.7	NI33
		墨27		13.9	3.9	NI26
		墨28		12.2	3.8	NH28

層	Pl.	番号	器種	口径	器高	出土小地区
中層	39	墨29	椀C	12.7	3.8	NH·NI28
		墨30		12.3	4.1	NI26
		墨31		13.0	3.9	NI31
	41	墨39	Ⅲ A	22.4	3.0	NI27
	22	747	杯B蓋	18.8	3.2	NI28
		748		19.0	3.5	FH97
		749		21.2	(3.8)	NH25
		750		16.5	3.5	NI27
		751		16.0	(1.7)	NI28·29
		752		16.6	(1.0)	NH28·NI31
		753		8.9	(2.1)	NI33
		754		13.0	2.7	NH33
		755	杯B	19.6	6.5	NI26
		756		18.4	4.6	NH25
		757		17.0	4.6	NH30
		758		24.0	(6.4)	NH17·NI28
		759		13.6	5.9	NH32
		760		15.9	5.0	NI·NJ37
		761		15.6	4.0	NI31～33
		762		15.3	4.3	NH31·32
		763		15.3	3.7	NI35
		764		15.1	3.7	NI29
		765		14.7	3.8	NI32·33
		766		14.6	3.9	NH37·NJ34
		767		14.5	4.0	NF·NG29·NH28·31·NI28
		768		14.6	3.7	要調査
		769		14.5	4.0	NI26·27
		770		14.4	3.8	NI26
		771		14.3	3.7	NI32
		772		13.9	3.4	NI28
		773		13.6	4.2	NI35
		774		12.4	4.6	NI27
		775		11.7	3.8	NH27
		776		11.6	3.6	NI27
		777		9.6	4.5	NI28
		778		10.8	4.2	NI27
		779		10.8	4.1	NH32
		780		11.2	4.0	NI28
		781		11.0	3.7	NJ36
		782	杯A	22.4	8.5	NI28
		783		22.1	5.5	NI37
		784		18.0	5.2	NG23
		785		18.4	3.7	NI30
		786		18.3	4.0	NI27
		787		19.8	3.6	NH31
		788		12.6	3.1	NI31
		789		12.6	3.1	NH35
		790		13.0	3.4	NI31
		791		12.5	3.6	NI28
		792		15.2	6.0	NI31
		793		15.2	4.5	NH27·NI24
		794		14.9	4.1	NI26
		795		13.9	4.0	NI27
		796		14.8	3.6	NJ35
		797		13.6	3.7	NH34·NI35
		798	杯C	17.4	3.8	NI26
		799		17.8	4.3	NI31
		800		18.6	3.6	NH27·28
		801		19.6	(4.6)	NI26
		802		20.5	3.8	NI31
		803	杯E	16.4	5.5	NI33
		804	杯X	16.6	(5.6)	NI27·28·33
		805		15.9	(3.8)	NJ29
	23	806	杯F	19.6	(4.7)	NH34·NI32·34·NJ29
		807	杯G	9.4	3.0	NG26
		808	Ⅲ A	20.0	2.3	NI35
		809		18.6	(2.8)	NG29·NH·NI28
		810		19.7	2.6	NH23
		811		21.6	(2.8)	NH24
		812		23.0	2.8	NI31
		813	Ⅲ B	23.5	5.2	NH23
		814		19.6	4.0	NI26
		815		31.4	3.8	FH97·NH14
		816		27.8	4.6	NI27·28
		817	Ⅲ E	10.2	2.3	NH28
		818	椀B	—	(7.5)	NH22
		819	盤	42.6	(8.0)	NI31
		820	高杯	15.8	(2.7)	NH21
		821		—	(3.5)	NH33

層	Pl.	番号	器種	口径	器高	出土小地区
中層	23	822	高杯	—	(4.6)	NH34
		823	鉢A	22.8	(6.2)	NI31
		824		24.6	(8.3)	NH·NI27
		825	鉢D	24.9	(16.5)	NG29·NH29·30
		826		23.4	21.4	NG29·NH27～29
		827		32.2	(13.1)	NH24·NI24·27
		828	壺E	—	(5.3)	NI31
		829		9.6	6.5	NH32
		830	平瓶	12.6	(24.9)	NI31·32
		831		—	(12.2)	NH25
		832		—	(9.8)	NH29
		833		—	(6.3)	NI32
	24	834	短頸壺蓋	5.0	1.3	NH22
		835	短頸壺	5.4	(5.4)	NG23
		836		6.6	(6.6)	NH18
		837		5.0	(6.2)	NI31
		838	壺C	5.9	6.8	NI27
		839	壺A蓋	13.8	3.2	NG29
		840		16.6	(2.8)	NH24·NI28·29
		841	壺A	9.7	(13.4)	NI26·27
		842		12.0	(13.5)	NI34～36·NJ35
		843		14.0	(9.5)	NH27 NI20·21·24
		844		—	(21.1)	NG25·32·NH24～29·NI24～29
		845		11.9	16.0	NH33·34·NI31·33·35·NJ35
		846	壺B	12.8	(7.5)	NH35
		847	壺G	—	(22.7)	NH28·29·NI27·34
		848	壺K	—	(9.9)	NG35～37·NH·NI36
		849		10.2	20.6	NH28
		850	壺Q	14.5	(9.0)	NH28·NI27
		851		17.4	(6.0)	NH31·32·NI32
		852		—	(13.8)	NI29
		853		—	(12.6)	NG29·NH28·29
	25	854	甕(A)	21.0	(8.1)	NH30·NI30·31
		855		36.4	(9.8)	NG36
		856		28.8	(13.4)	NH27·32·34·NI30·NF294740
		857		34.0	(13.0)	NH34
		858		17.6	(23.8)	NI28
		859		24.0	(14.4)	NH27·NI31
		860		23.2	(18.8)	NH27·28·NI28
		861		—	(39.6)	NG29·NH23·29·31
		862		19.8	(36.4)	NI26·29
		863		—	推定40.0	NG29·NI28·34·35 NJ34
		864		19.3	(7.4)	NH27·NI28
	26	865	甕(A)	20.2	(10.9)	NH34
		866		21.8	(10.7)	NH27·28
		867		23.8	(11.5)	NH25·27·NI26
		868		22.6	(5.9)	NI32·36
		869		20.3	(8.7)	NG24
		870		20.4	(36.7)	NH26·NI26·31
		871		23.7	(25.0)	NH27·NI26·27·31
		872		20.2	(13.3)	NH17·31·32·NI31
		873		26.8	(8.8)	NI29
		874		22.8	(5.8)	NH21～23
		875	甕C	35.2	(20.7)	NH24·NI26
		876		32.6	(11.7)	NH28·33·NI28·34
		877		52.1	(14.5)	NG·NJ29·NH27·29
	Fig 146	硯17	杯B蓋	16.5	2.5	NI31
		硯18		—	(1.7)	NI28
		硯19	杯B	14.8	4.3	FG·FH94
	37	墨16	杯B	13.5	4.0	NI28
		墨17	杯Aカ	—	—	NH27

別　表 7　SD4130・SE4740出土土器一覧（3）

層	Pl.	番号	器種	口径	器高	出土小地区
中層	38	墨23	杯B	14.5	4.6	NH21
	41	墨42	壺カ	—	—	NH25
上層	27	239	杯A	16.0	3.2	FG92
		240		16.8	3.0	FG90
		241		15.8	3.2	NI21
		242		18.6	4.3	FG92
		243		20.6	3.3	NI20
		244		20.5	3.7	NH21
		245		20.7	3.5	NI22
		246		17.6	3.1	NH36·38·NI38
		247		18.3	(3.0)	NI28
		248		13.0	2.7	NI28
		249		14.8	(3.0)	NI28
		250	杯B	17.2	4.9	NI29
		251	杯B蓋	18.4	(2.5)	NH29
		252	杯C	18.6	2.5	NH25
		253		15.0	3.3	NG35
		254	Ⅲ A	23.4	2.7	NH24·26·NI25
		255		23.0	3.1	NG23
		256		22.0	2.6	NI25
		257		20.4	2.2	NH22
		258		20.6	2.1	NI37
		259		24.0	2.8	NH27
		260		23.0	3.1	NH31
		261		17.0	1.9	NI28
		262	Ⅲ C	11.0	1.8	NH35
		263		10.6	1.6	NI24·31
		264	小型皿	9.4	1.9	NH35
		265		10.3	1.7	NI31
		266		10.3	1.8	NJ31
		267	椀A	13.0	(3.6)	NI35
		268		13.6	4.8	NH·NI38
		269		12.0	(3.7)	NG25
		270		12.9	4.0	NH27
		271		13.6	(3.0)	NI29
		272		13.6	3.3	NH35
		273	椀C	15.5	4.0	NG23
		274		12.3	4.0	NH33·34
		275		12.6	3.7	NH33
		276		13.6	4.5	NI34
		277		11.6	3.8	NI31
		278		12.6	3.3	NI24
		279		12.5	3.5	NH20·21
		280		12.0	(3.5)	NH28
		281		13.4	4.2	NH27
		282		13.4	3.6	FG90
		283		11.8	3.8	FG90
		284		13.0	4.0	NG25
		285		12.6	3.2	FG90
		286		12.4	3.2	FG90
		287	鉢	14.8	(5.0)	NI25·18
		288	鉢B	22.6	(6.8)	NI24·25
		289	高杯A	24.0	(2.6)	NH24
		290		—	(12.0)	NI29
		291	高杯C	—	(5.1)	NH24
		292	壺B	13.2	(5.2)	FG90
		293		14.7	(7.0)	NH23
		294		9.5	5.3	NH33
		295	甕A	17.6	(8.5)	NG·NH25
		296		27.0	(11.2)	FG94
		297		27.6	(9.5)	FG90
		298	鍋A	28.0	(13.8)	NG36·37
		299		30.4	(9.5)	NH24·26·NI18·24·25·28
		300		28.2	(9.3)	NI21
		1061	黒色椀	18.0	(4.0)	NI28
		1062		15.6	(4.0)	NI36
		1063		14.9	4.0	NI37·38
		1064		—	(1.5)	NG23
		1065		—	(2.2)	NH35
		1066		—	(1.1)	NH38
		1067		—	(1.2)	NJ34·35
		1068		—	(1.9)	NH36
	40	墨32	杯B蓋	16.2	3.2	NH32
		墨34	椀A	13.0	4.4	NH28
		墨36	杯類	—	要記	NH37
		墨37	椀C	—	要記	NI30
	41	墨40	椀C	12.4	3.5	NI28
	28	878	杯B蓋	10.3	1.5	NH15
		879		20.8	(2.3)	NH23·NI22
		880		20.2	(1.4)	NI33

層	Pl.	番号	器種	口径	器高	出土小地区
上層	28	881	杯B蓋	—	(2.1)	FG91
		882		14.2	2.2	NH19
		883	杯B	10.0	3.6	NI21
		884		12.0	(3.6)	NH·NI27
		885		12.0	3.9	NJ33
		886		12.2	3.9	NI24
		887		11.6	3.9	NJ34
		888		15.0	4.4	NH21
		889		15.0	4.2	NI24
		890		14.8	4.2	NH19
		891		22.8	7.4	NHI24·NI24·28
		892		19.0	7.3	NH·NI21
		893		19.5	5.6	NH21·22
		894		19.6	6.2	NI24
		895		19.2	5.5	NI26
		896	Ⅲ A	22.0	2.4	FG91
		897	Ⅲ B	19.4	4.8	NH29·NI26·27
		898		31.6	4.0	NG22·NI24
		899	Ⅲ D	22.6	3.2	NH25·NI24
		900		31.6	3.5	NI24
		901	杯A	15.0	2.9	NG25·29
		902		14.0	3.8	NI21
		903		13.7	3.9	NH24
		904		13.0	3.3	NH21
		905		13.6	3.7	NH35
		906	杯E	14.8	4.0	NI24
		907	鉢A	30.2	(11.5)	NH20·21·NI20
		908	鉢D	24.8	(9.9)	NG30·NH29
		909		28.4	(11.0)	NH24·25·NI23～25·27·29
		910	高杯	—	(5.1)	NI27
		911	平瓶	—	(7.7)	NG25·NH·NI24
	29	912	壺A蓋	22.0	5.3	NG24·NI21·NH20·21
		913		12.6	(2.4)	NH21
		914		12.6	(2.3)	NG23·NH24
		915	壺A	8.8	(9.9)	NH29
		916		14.1	(4.5)	NI12
		917	壺Q	—	(11.0)	NG22·NH·NI21
		918	甕	—	(9.3)	NH20
		919	壺M	—	(5.0)	NH33
		920		—	(6.4)	NI33
		921	壺L	—	(12.5)	NH23
		922	壺D	3.8	3.1	NJ22
		923	壺N	—	(16.0)	NH18·19
		924	壺B	10.6	(7.2)	NG18
		925		—	(16.4)	NG30
		926		—	(9.0)	NG23
		927	甕A	18.0	(6.8)	NI24
		928		20.6	(7.7)	NH29
		929		17.8	(8.7)	NI25～27·NJ26·28
		930		45.0	(4.7)	NG23·NH19
		931		21.7	(35.7)	NG·NI24
		932	甕C	45.6	(6.6)	NI25
	40	墨33	杯B	—	(3.5)	NI28
		墨35	杯A	—	(1.3)	NH27
		墨38	壺	—	(3.3)	NH28
	41	墨43	杯B蓋	16.9	2.9	FG96·97

SE4740

層	Pl.	番号	器種	口径	器高	出土小地区
掘方	30	301	杯A	18.0	(2.5)	NG29
		302	杯C	9.6	(2.7)	NF30
		303	杯G	11.0	(3.5)	NG29
		304	杯H	12.0	(2.6)	NF29
		305	鉢H	19.0	(4.2)	NF29
		306	高杯C	—	(3.5)	NF29
		307	甕A	15.6	(3.7)	NF29
最下層		308	杯A	19.0	(4.5)	NF29
		309		19.0	(4.3)	NF29
		310		19.6	3.5	NF29
		311		16.0	(2.9)	NF29
		312	杯B蓋	22.0	(1.7)	NF29
		313	杯C	13.8	(3.2)	NF29
		314		15.6	2.3	NF29
		315		17.6	(2.5)	NF29

層	Pl.	番号	器種	口径	器高	出土小地区
最下層	30	316	Ⅲ A	19.0	(2.4)	NF29
		317		23.0	(2.4)	NF29
		318	椀C	14.6	4.0	NF29
		319		13.0	(3.8)	NF29
		320	甕A	18.8	(14.8)	NF29
		321		18.0	16.9	NF29
		322		13.4	(11.7)	NF29
		323		15.1	(13.5)	NF29
		324		15.0	(17.4)	NF29
		325		15.6	(12.8)	NF29
		326		15.7	(9.5)	NF29
		327		15.6	(8.0)	NF29
		328		16.1	(16.8)	NF29
		329	鍋	24.8	(5.3)	NF28·29
	42	墨44	椀C	13.8	4.4	NF29
		墨45	甕	—	—	NF29
	30	941	杯B蓋	19.8	(2.3)	NF29
		942		16.0	(1.1)	NF29
		943	杯B	15.0	3.5	NF29
		944		14.4	3.5	NF29
		945	杯A	13.0	3.0	NF29
		946	壺A	—	(13.9)	NF29
下層	31	330	杯A	13.5	2.6	NF29
		331		14.2	2.8	NF29
		332	Ⅲ A	21.2	3.2	NF29
		333	椀C	12.4	4.5	NF29
		334		12.6	4.0	NF29
		335	甕A	19.0	20.0	NF29
		336		23.0	22.5	NF29
		337		26.1	24.3	NF29
	42	墨46	杯類	—	—	NF29
		墨47	Ⅲ A	20.8	2.7	NF29
		墨48	椀A	12.8	4.4	NF29
		墨49	Ⅲ A	17.0	3.1	NF29
	43	墨50	椀C	13.2	5.0	NF29
		墨51		12.6	4.9	NF29
		墨52		12.6	5.0	NF29
		墨53		13.0	4.6	NF29
	44	墨54	椀C	12.6	4.6	NF29
		墨55		12.8	4.6	NF29
		墨56		12.8	4.6	NF29
		墨57		13.0	3.7	NF29
	31	947	杯A	14.6	(3.7)	NF29
		948	杯B	17.3	5.2	NF29
		949	杯C	16.0	(3.8)	NF29
		950	Ⅲ A	19.4	3.2	NF29
		951	壺M	—	(5.9)	NF29
		952	壺L	—	(16.2)	NF29
		953		—	(18.8)	NF29
		954		8.4	19.5	NF29
中層	31	338	Ⅲ A	19.8	2.1	NF29
		339		16.0	2.8	NF29
		340	Ⅲ C	11.1	2.1	NF29
		341	椀A	12.2	4.1	NF29
		342		12.4	3.6	NF29
		343	椀C	12.6	4.0	NF29
		344	壺E	—	(3.4)	NF29
		345	甕A	14.8	12.8	NF29
	45	墨58	椀C	12.8	3.8	NF29
		墨59		13.0	4.5	NF29
		墨60		12.3	4.0	NF29
		墨61	椀A	11.8	3.8	NF29
	46	墨63	杯A	17.1	4.0	NF29
		墨64	椀C	12.6	3.8	NF29
		墨65	Ⅲ A	15.4	2.7	NF29
	31	955	壺蓋	7.6	(1.8)	NF29
		956	杯A	13.6	3.7	NF29
	45	墨62	杯B	15.9	5.3	NF29
上層	31	346	杯A	16.2	(4.0)	NF29
		347	椀A	13.4	(4.1)	NF29
		348	杯A	14.0	2.7	NF29
		349	Ⅲ A	13.0	1.9	NF29
		350	杯A	12.4	(2.6)	NF29
		351	Ⅲ A	16.2	2.5	NF29
		1069	黒椀B	18.1	6.1	NF29
		1070		17.8	5.4	NF29
周囲	46	墨66	杯B蓋	14.0	3.0	NF29
		墨67	椀C	12.4	(4.2)	NF～NI29-31
		墨68		12.0	(3.5)	NF29

別　表８　墨書土器一覧（1）

Pl.	番　号	遺　構	層　位	種　類	出土地区	器　種	記載内容	記載部位
36	1	SD4130	下層	土師器	NI34	杯Cヵ	□〔佐ヵ〕	底部外面
	2				NH24	杯B蓋	福	頂部外面
	3				NH28・NI24	杯B蓋	□〔福ヵ〕	頂部外面
	4				NH25	椀C	□（記号ヵ）	口縁部外面
	5				NH27	椀C	□（記号ヵ）	口縁部外面
	6				NI28	椀C	□（記号ヵ）	口縁部外面
	7		中層	土師器	NI34	杯C	□也	口縁部～底部外面
	8				NI33	杯or皿	□宅	底部外面
	9				NI28	杯or椀C	□〔大ヵ〕	底部外面
	10				NI36	杯ヵ	□〔廿ヵ〕	底部外面
	11				NI28	杯or皿	□（記号ヵ）	底部外面
	12				NH27	椀C	佐	口縁部外面
	13				NH32	杯or皿	佐	底部外面
37	14	SD4130	中層	土師器	NI27	杯A	□〔香ヵ〕山	底部外面
	15				NH27	椀C	香山	底部外面
	16			須恵器	NI28	杯B	香山	底部外面
	17				NH27	杯Aヵ	□〔香ヵ〕□	底部外面
	18				NH25	杯CorⅢA	□〔香ヵ〕	底部外面
	19			土師器	NI28	杯or皿	□山	底部外面
	20				NH24・NI26	杯A	大□〔山ヵ〕	底部外面
38	21	SD4130	中層	土師器	NI26	ⅢA	ア	底部外面
	22				NI28	杯C	□□町	底部外面
	23			須恵器	NH21	杯B	多母口	底部外面
	24			土師器	NI29	椀C	飛	底部外面
	25				NI28	椀C	飛	底部外面
39	26	SD4130	中層	土師器	NI33	椀C	□□〔山了ヵ〕□	底部外面
	27				NI26	椀C	｜（縦棒）	底部外面
	28				NH28	椀C	｜（縦棒）	底部外面
	29				NI28	椀C	｜（縦棒）	底部外面
	30				NI26	椀C	｜（縦棒）	底部外面
	31				NI31	椀C	｜（縦棒）	底部外面
40	32	SD4130	上層	土師器	NH32	杯B蓋	香	つまみ上面
	33			須恵器	NI28	杯B	香山	底部外面
	34			土師器	NH28	椀A	香□	底部外面
	35				NH37	杯AorⅢA	□〔香ヵ〕□	底部外面
	36			須恵器	NH27	杯A	□〔香ヵ〕	底部外面
	37			土師器	NI30	椀C	大	底部外面
	38			須恵器	NH28	壺	荒田大年	底部外面
41	39	SD4130	中層	土師器	NI27	ⅢA	□	底部外面
	40		上層	土師器	NI28	椀C	｜（縦棒）	底部外面
	41		下層	土師器	NH25	杯C	天（ヘラ書き）	底部内面
	42		中層	須恵器	NH25	壺ヵ	馬（ヘラ書き）	底部外面
	43		上層	須恵器	FG96･97	杯B蓋	美（刻印）	頂部外面

別　表８　墨書土器一覧（2）

Pl.	番　号	遺　構	層　位	種　類	出土地区	器　種	記載内容	記載部位
42	44	SE4740	最下層	土師器	NF29	椀C	井	口縁部外面
	45					甕	支	体部外面
	46		下層	土師器	NF29	杯C or 皿	山	底部外面
	47					皿A	安	底部外面
	48					椀A	米	底部外面
	49					皿A	香山	底部外面
43	50	SE4740	下層	土師器	NF29	椀C	香山	底部外面
	51					椀C	香山	底部外面
	52					椀C	香山	底部外面
	53					椀C	香山	底部外面
44	54	SE4740	下層	土師器	NF29	椀C	香山	底部外面
	55					椀C	香山	底部外面
	56					椀C	香山	底部外面
	57					椀C	香山	底部外面
45	58	SE4740	中層	土師器	NF29	椀C	記号	底部外面
	59					椀C	記号	底部外面
	60					椀C	記号	底部外面
	61					椀A	記号	底部外面
	62			須恵器	NF29	杯B	記号	底部外面
46	63	SE4740	中層	土師器	NF29	杯A	宅	底部外面
	64					椀C	宅	口縁部外面
	65		周囲	土師器	NF29	皿A	□〔人ヵ〕	底部外面
	66					杯B蓋	香山	つまみ上面
	67				NF～NI 29-31	椀C	□〔刀ヵ〕	底部外面
	68				NF29	椀C	下□	底部外面
32	971	SD4311		須恵器	HR22	壺C	惣（ヘラ書き）	肩部外面
33	454	SE5950		土師器	AD96	杯A	記号	底部外面
	455					杯A	□□記	底部外面
Fig. 135	545	SB5020		土師器	NK35	杯A	部女	底部外面

別　表 9　大型種実計測値（1）

モモ　SD4130下層出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	類
1	24.78	22.18	18.66	A
2	24.10	21.61	17.51	A
3	26.43	20.86	—	A
4	26.07	19.61	12.29	C?他
5	23.56	16.46	12.88	C?他
6	19.70	15.57	13.14	A
7	22.06	18.87	13.66	CD
平均	17.85	14.39	10.22	
最大	26.43	22.18	18.66	
最小	23.56	16.46	12.29	

モモ　SD4130中層出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	類
1	22.19	12.95	—	*
2	23.68	16.89	—	CD
3	25.80	19.68	14.82	A'?C?
4	22.21	16.53	12.91	A'?C?
5	22.43	18.15	14.69	A'?C?
6	24.53	19.02	14.28	CD
7	20.56	16.32	11.79	CD
8	19.60	16.10	12.28	A
9	26.98	21.23	15.18	A'?C?
10	23.08	20.31	15.20	A
11	26.69	20.24	14.84	CD
12	24.01	19.02	14.95	CD
13	22.62	18.01	14.71	A'?C?
14	20.88	15.96	12.28	CD
15	23.25	16.93	13.36	CD
16	24.20	21.36	16.27	A
17	21.11	—	13.73	*
18	—	15.33	12.31	A
19	23.23	—	11.38	*
20	24.09	17.76	—	A'?C?
21	21.79	17.47	—	A'?C?
22	18.69	15.89	—	A
23	20.97	16.45	—	A
24	20.29	15.48	—	A'?C?
25	19.67	16.84	—	A'?C?
26	21.33	15.83	—	*
27	19.34	15.73	—	*
28	19.61	14.15	11.35	A'?C?
29	20.00	16.77	13.09	A
30	21.66	16.63	12.99	A
31	20.19	17.11	13.07	CD
32	21.36	17.24	13.27	CD
33	19.17	—	12.07	*
34	22.00	—	12.12	*
35	17.30	—	13.70	A
36	21.81	—	13.63	CD
37	21.28	—	12.85	CD
38	24.31	18.42	—	A'?C?
39	24.17	14.88	—	A'?C?
40	19.57	15.53	—	A
41	19.86	16.93	—	A'?C?
42	21.93	18.88	—	A'?C?
43	27.47	21.73	14.97	A'?C?
44	25.54	22.42	16.85	CD
45	26.48	19.97	15.22	*
46	22.90	19.33	14.68	CD
47	23.78	18.58	14.94	A'?C?
48	20.16	14.40	11.96	A'?C?
49	27.16	18.46	13.93	A'?C?
50	22.09	19.43	15.17	A'?C?
51	20.27	17.53	13.89	A'?C?
52	25.30	16.88	14.50	CD
53	22.90	16.52	13.09	A'?C?
54	21.90	16.35	12.32	A'?C?
55	21.55	16.81	14.13	A
56	21.41	17.83	13.67	A
57	20.04	—	12.74	A
58	22.35	—	13.70	A'?C?
59	16.76	13.16	7.28	*
60	17.44	10.51	7.46	*
61	14.39	10.65	8.26	*
62	20.03	14.37	—	A'?C?
63	20.66	16.70	—	A'?C?
64	19.92	14.35	—	A'?C?
65	20.99	17.65	—	A'?C?
66	16.64	15.87	—	*
67	20.89	18.87	—	A
68	24.10	—	13.48	A'?C?
69	22.75	—	14.62	A'?C?
70	15.97	10.60	7.21	*
71	23.74	20.58	—	*
72	24.67	17.48	—	*
73	26.02	22.07	16.71	CD
74	20.07	17.42	13.38	A
75	21.16	14.80	11.96	*
76	22.10	17.90	—	*
77	24.76	16.66	14.76	C?他
78	20.56	17.47	15.18	A
79	24.93	20.93	14.27	A
80	24.85	18.99	—	CD
81	20.07	16.25	12.09	CD
82	22.80	15.26	12.91	C?他
83	23.59	18.99	15.55	C?他
84	18.97	18.13	—	a
85	22.34	18.52	—	CD
86	17.84	15.64	—	C?他
87	25.98	19.84	15.35	C?他
88	21.68	18.72	15.73	A
89	19.52	16.13	11.86	C?他
90	22.35	16.11	—	CD
91	25.85	18.45	14.68	A
92	24.93	18.93	—	CD
平均	21.96	17.24	13.41	
最大	27.47	22.42	16.85	
最小	14.39	10.51	7.21	

モモ　SD4130出土層位不明

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	類
1	21.95	17.52	13.45	A
2	17.90	16.34	—	A

齧歯類咬み跡
未成熟

A　表面に維管束の通る小孔がなく丸い形のもの
B　表面に小孔がありしわ間のひだの先端が尖る傾向にあり長さの長いもの
CD　表面に維管束の通る小孔が多いものと少ないものがあり、左右非対称のもの
A'?C?　表面に維管束の通る小孔が多いものと少ないものがあるが、先端が折れているもの
C?他　表面に維管束の通る小孔が多いものと少ないものがあるが、先端が折れているもの
もしくはその他
*　不明

別　表 9　大型種実計測値（2）

モモ　井戸SE4740最下層出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	類
1	23.11	17.71	13.86	CD
2	21.80	17.23	12.90	CD
3	23.86	18.24	—	C?他
4	20.48	15.08	12.78	CD
5	—	18.42	13.71	A
6	19.85	15.00	11.94	C?他
7	25.50	18.22	13.22	CD
8	21.18	17.30	12.66	CD
9	29.66	24.15	18.29	C?他
10	20.08	17.41	14.95	A
11	23.95	21.10	16.43	A
12	22.34	16.77	12.83	CD
13	21.47	18.14	14.68	A
14	20.27	17.99	13.81	A
15	26.58	20.84	16.12	A
16	22.98	17.05	12.53	CD
17	26.25	21.16	16.51	A
18	19.22	17.38	14.54	A
19	22.93	19.25	15.77	A
20	24.36	19.94	16.39	A
21	21.78	19.82	14.42	A
22	19.40	15.24	11.59	CD
23	19.18	15.70	13.58	A
24	19.09	15.28	11.55	CD
25	22.23	18.94	14.32	CD
26	20.97	16.87	12.47	CD
27	24.50	19.76	16.91	A
28	23.86	20.64	17.08	C?他
29	24.37	19.89	15.60	A
30	22.32	18.78	15.57	A
31	20.33	16.20	13.02	CD
32	23.34	18.25	—	C?他
33	21.26	18.50	—	C?他
34	20.09	14.19	—	C?他
35	25.85	19.14	—	C?他
36	19.47	16.43	—	C?他
37	20.45	14.98	—	CD
38	22.97	17.68	—	A
39	30.16	22.86	16.34	B
40	34.74	24.28	17.31	B
41	24.41	19.07	14.99	C?他
42	23.10	18.49	15.65	A
43	21.86	19.24	14.81	A
44	22.59	17.03	13.72	CD
45	26.04	21.56	17.50	CD
46	23.11	17.23	13.41	CD
47	22.80	19.10	15.80	CD
48	21.47	17.27	12.74	CD
49	21.96	16.27	13.28	A
50	24.94	21.10	15.69	C?他
51	19.32	16.44	13.17	CD
52	20.96	18.58	15.22	A
53	21.10	17.38	13.55	CD
54	21.59	16.87	13.15	CD
55	25.02	18.17	14.68	A
56	22.79	19.50	15.25	CD
57	21.33	17.51	12.74	CD
58	28.88	—	16.49	CD
59	21.27	—	12.74	C?他
60	21.32	—	13.70	CD
61	23.56	—	13.41	A
62	22.00	17.21	—	C?他
63	19.78	16.61	—	A
64	19.05	15.04	—	CD
65	24.80	18.35	—	A
66	20.33	17.61	—	A
67	20.78	18.82	—	A
68	23.51	15.90	—	C?他
69	19.68	15.96	—	CD
70	19.85	16.26	—	CD
71	22.56	17.58	—	A
72	26.91	21.65	17.17	A
73	26.53	19.58	14.73	C?他
74	23.79	17.16	14.20	CD
75	22.98	21.05	16.78	a
76	21.64	17.62	13.35	CD
77	26.58	20.81	14.85	A
78	22.57	19.39	13.56	CD
79	21.64	15.59	11.97	CD
80	21.23	16.77	13.33	CD
81	19.91	15.57	12.65	C?他
82	19.23	15.70	—	CD
83	20.48	16.10	—	CD
84	19.20	15.61	—	CD
85	19.59	15.93	—	CD
平均	22.57	18.03	14.41	
最大	34.74	24.28	18.29	
最小	19.05	14.19	11.55	

モモ　井戸SE4740下層出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	類
1	27.78	17.82	13.56	C?他
2	20.42	16.90	14.01	A
3	18.59	15.59	—	A

モモ　井戸SE4740中層出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	類
1	23.95	18.27	13.83	C?他

モモ　井戸SE4740掘方出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	類
1	26.20	21.61	15.80	CD
2	18.95	18.06	15.26	A
3	27.19	20.99	15.50	A
4	21.01	18.41	14.49	A

モモ　井戸SE4468出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	類
1	18.17	14.04	10.95	A

モモ　土坑SK4325出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	類
1	28.31	20.92	14.73	A

モモ　中世大溝SD4755出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	類
1	22.49	16.53	14.71	C?他

ヤマモモ　井戸SE4740最下層出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
1	10.62	9.07	8.20

オニグルミ　SD4130中層出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
1	—	24.02	—
2	29.42	24.01	—

オニグルミ　SD4130下層出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
1	30.22	26.88	—

ヒメグルミ　井戸SE4740最下層出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
1	26.51	21.81	17.53
2	29.56	23.98	—

ウメ　井戸SE4740上層出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
1	14.33	9.83	8.77

ウメ　井戸SE4468出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
1	17.12	10.80	6.54

ウメ　井戸SE4790中層出土

No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
1	13.40	8.29	7.04

別　表10　SD4130出土木製品樹種一覧

Fig.	No.	器　種	樹　種
153	1	曲物底板	ヒノキ科
154	2	曲物底板	ヒノキ属
	3	曲物底板	ヒノキ
	4	曲物底板	ヒノキ属
	5	曲物底板	ヒノキ
	6	曲物底板	ヒノキ属
155	7	曲物底板	ヒノキ属
	8	曲物底板	ヒノキ科
	9	曲物底板	ヒノキ
	10	曲物底板	ヒノキ属
	11	曲物底板	ヒノキ属
156	12	曲物底板	ヒノキ属
	13	曲物底板	ヒノキ科
	14	曲物底板	ヒノキ科
157	15	曲物底板	ヒノキ
	16	曲物底板	ヒノキ
	17	曲物底板	ヒノキ属
	18	曲物底板	ヒノキ属
158	19	曲物底板	ヒノキ科
	20	曲物底板	ヒノキ属
	21	曲物底板	ヒノキ属
	22	曲物底板	ヒノキ科
	23	曲物底板	ヒノキ
	24	漆器	ヤマグワ
159	25	斎串	ヒノキ属
	26	斎串	ヒノキ科
	27	斎串	ヒノキ属
	28	斎串	ヒノキ科
	29	斎串	ヒノキ属
	30	斎串	ヒノキ属
	31	斎串	ヒノキ属
	32	斎串	ヒノキ科
	33	斎串	ヒノキ
	34	斎串	ヒノキ科
	35	斎串	ヒノキ属
	36	斎串	ヒノキ科
	37	斎串	ヒノキ属
	38	斎串	ヒノキ科
	39	斎串	ヒノキ属
	40	斎串	ヒノキ属
	41	斎串	ヒノキ属
	42	斎串	ヒノキ属
	43	斎串	ヒノキ属
	44	斎串	ヒノキ属
	45	斎串	ヒノキ属
160	46	斎串	ヒノキ属
	47	斎串	ヒノキ科
	48	斎串	ヒノキ属
	49	斎串	ヒノキ科
	50	斎串	ヒノキ属
	51	斎串	ヒノキ属
	52	斎串	ヒノキ属
	53	斎串	ヒノキ属
	54	斎串	ヒノキ属
	55	斎串	ヒノキ科
	56	斎串	ヒノキ属
	57	斎串	ヒノキ属
	58	斎串	ヒノキ属
	59	斎串	ヒノキ属
	60	斎串	ヒノキ属
	61	斎串	ヒノキ科
	62	斎串	ヒノキ属
	63	斎串	ヒノキ属
	64	斎串	ヒノキ属
	65	人形	ヒノキ
	66	馬形	ヒノキ属

Fig.	No.	器　種	樹　種
161	67	尖頭棒	アスナロ属
	68	尖頭棒	ヒノキ科
	69	尖頭棒	ヒノキ属
	70	尖頭棒	サワラ
	71	尖頭棒	ヒノキ属
	72	尖頭棒	ヒノキ属
	73	紡輪	ヒノキ
	74	琴柱	ヒノキ
	75	用途不明品	樹皮
	76	横櫛	ネジキ
	77	横櫛	イスノキ
	78	部材	ヒノキ属
162	79	用途不明品	ヒノキ属
	80	用途不明品	アカガシ亜属
	81	用途不明品	ヒノキ属
	82	用途不明品	ヒノキ属
	83	用途不明品	ヒノキ属
	84	用途不明品	ヒノキ属
	85	用途不明品	スギ
	86	用途不明品	ヒノキ属
	87	用途不明品	アカガシ亜属
	88	用途不明品	アカガシ亜属
	89	用途不明品	ニヨウマツ類
163	90	杭	ヒノキ属
	91	杭	ナシ亜科
	92	杭	ナシ亜科
	93	杭	コナラ亜属コナラ節
	94	杭	アカガシ亜属
	95	杭	アカガシ亜属
	96	杭	シキミ
164	97	加工棒	ウツギ属
	98	加工棒	ヒノキ
	99	加工棒	ヒノキ
	100	加工棒	ヒノキ
	101	加工棒	散孔材
	102	加工棒	ヒノキ
	103	加工棒	ヒノキ科
	104	加工棒	ニシキギ属
	105	加工棒	ニシキギ属
	106	加工棒	ヒノキ
	107	加工棒	ヒノキ属
165	108	加工棒	ヒノキ属
	109	加工棒	ヒノキ属
	110	加工棒	ヒノキ属
	111	加工棒	ヒノキ
	112	加工棒	ヒノキ属
	113	加工棒	ヒノキ属
	114	加工棒	ヒノキ属
	115	加工棒	ヒノキ属
	116	加工棒	ヒノキ属
	117	加工棒	ヒノキ
	118	加工棒	ヒノキ属
	119	加工棒	ヒノキ科
	120	加工棒	ヒノキ属
	121	加工棒	ヒノキ属
	122	加工棒	ヒノキ属
	123	加工棒	ヒノキ
	124	加工棒	ヒノキ属
	125	加工棒	ヒノキ
	126	加工棒	ヒノキ
	127	加工棒	ヒノキ属
	128	加工棒	ヒノキ
	129	加工棒	針葉樹
166	130	加工棒	ヒノキ属
	131	加工棒	スギ
	132	加工棒	ヒノキ属

Fig.	No.	器　種	樹　種
166	133	加工棒	ヒノキ
	134	加工棒	ヒノキ
	135	加工棒	ヒノキ属
	136	加工棒	ヒノキ
	137	加工棒	ヒノキ
	138	加工棒	ヒノキ属
	139	加工棒	ヒノキ属
	140	加工棒	ヒノキ属
	141	加工棒	ヒノキ属
	142	加工棒	ヒノキ
	143	加工棒	ヒノキ属
	144	加工棒	ウツギ属
	145	加工棒	ヒノキ属
	146	加工棒	ヒノキ属
	147	加工棒	ヒノキ属
	148	加工棒	ヒノキ
	149	加工棒	コウヤマキ
	150	加工棒	ヒノキ科
	151	加工棒	ヒノキ
167	152	加工棒	ヒノキ
	153	加工棒	ヒノキ
	154	加工棒	ヒノキ
	155	加工棒	ヒノキ
	156	加工棒	ヒノキ属
	157	加工棒	ヒノキ
	158	加工棒	ヒノキ属
	159	加工棒	ヒノキ
	160	加工棒	ヒノキ
	161	加工棒	ヒノキ属
	162	加工棒	ヒノキ属
	163	加工棒	ヒノキ
	164	加工棒	ヒノキ属
	165	加工棒	ヒノキ
	166	加工棒	ヒノキ
168	167	曲物底板	ヒノキ
	168	曲物底板	ヒノキ
	169	曲物蓋板	ヒノキ
	170	曲物底板	ヒノキ
169	171	曲物底板	ヒノキ属
	172	曲物底板	ヒノキ
	173	曲物底板	ヒノキ
170	174	紡輪	ヒノキ科
	175	紡輪	ヒノキ属
	176	紡輪	ヒノキ
171	177	糸巻	ヒノキ属
	178	杭	ウツギ属
	179	用途不明品	ヒノキ属
	180	用途不明品	ヒノキ属
172	181	斎串	ヒノキ属
	182	斎串	ヒノキ属
	183	斎串	ヒノキ属
	184	斎串	ヒノキ科
	185	斎串	ヒノキ
	186	斎串	ヒノキ科
	187	斎串	ヒノキ科
	188	斎串	ヒノキ属
	189	斎串	ヒノキ属
	190	斎串	ヒノキ属
	191	刀子柄	ムクノキ
	192	加工棒	ヒノキ属
	193	加工棒	ヒノキ属
	194	加工棒	ヒノキ科
	195	加工棒	ヒノキ属
	196	加工棒	ヒノキ属
	197	加工棒	ヒノキ
	198	加工棒	ヒノキ属

No. 1～166：中層出土　167～198：上層出土

別　表11　SE4740他出土木製品樹種一覧

Fig.	No.	器　種	樹　種	遺　構
173	199	刀子柄	シャシャンボ	SE4740 最下層
	200	刀子柄	ケヤキ	
	201	不明品	アカガシ亜属	
	202	斎串	ヒノキ	SE4740 下層
174	203	曲物底板	ヒノキ	
	204	曲物底板	ヒノキ	
	205	曲物底板	ヒノキ属	
175	206	曲物底板	ヒノキ属	
	207	曲物底板	ヒノキ属	
	208	曲物底板	ヒノキ属	
	209	下駄	ケヤキ	
	210	把手	ヒノキ	
176	211	斎串	ヒノキ	SE4740 中層
	212	斎串	ヒノキ	
	213	斎串	ヒノキ	
	214	斎串	ヒノキ属	
	215	加工棒	ウツギ属	
	216	横櫛	イスノキ	
	217	横櫛	イスノキ	
	218	用途不明品	アカガシ亜属	
177	219	漆器椀	ケヤキ	SE4740 上層
	220	用途不明品	スギ	
178	221	用途不明品	スギ	
179	222	加工棒	ヒノキ	
	223	加工棒	コウヤマキ	
	224	加工棒	ヒノキ属	
	225	加工棒	コウヤマキ	
	226	加工棒	ヒノキ属	
	227	加工棒	ヒノキ属	
	228	加工棒	コウヤマキ	
	229	加工棒	モミ属	
	230	加工棒	散孔材	
	231	加工棒	散孔材	
	232	加工棒	ニヨウマツ類	
180	233	用途不明品	コウヤマキ	SB4332
	234	板状木製品	ヒノキ	SB4737
181	235	用途不明品	コウヤマキ	SK4325
	236	用途不明品	ヒノキ	SK4325

Fig.	No.	器　種	樹　種	遺　構	年　代
183	237	箸	ヒノキ属	SE4790	13世紀末～14世紀前半
	238	箸	ヒノキ属		
	239	箸	ヒノキ属		
	240	箸	ヒノキ		
	241	箸	サワラ		
	242	箸	ヒノキ		
	243	箸	ヒノキ		
	244	箸	ヒノキ		
	245	箸	ヒノキ科		
	246	箸	ヒノキ		
	247	箸	ヒノキ		
	248	箸	ヒノキ		
	249	箸	ヒノキ		
	250	箸	ヒノキ属		
	251	箸	コウヤマキ		
	252	箸	ヒノキ属		
	253	箸	コウヤマキ		
	254	用途不明品	ムクノキ		
	255	用途不明品	ムクノキ		
	256	用途不明品	アカガシ亜属		
184	257	箸	ヒノキ属	SE4782	11世紀
	258	横櫛	イスノキ	SE4474	平安時代後期～鎌倉時代
	259	漆器椀	トチノキ	SE4463	
	260	刳物	ニヨウマツ類	SE4471	
185	261	用途不明品	クリ	SE4467	
	262	用途不明品	コナラ亜属	SE4473	
	263	用途不明品	ヒノキ科	SE4462	
	264	用途不明品	クリ	包含層	
	265	杭	トネリコ属	包含層	
186	266	用途不明品	ヒノキ科	SE4461	
	267	用途不明品	スギ	SE4469	
187	268	釘結合曲物（底板）	スギ	SE4177	
		同（側板内）	ヒノキ科		
		同（側板外）	ヒノキ科		
		同（木釘）	ヒノキ科		
	269	曲物	ヒノキ	SE4468	
	270	曲物	ヒノキ科		
188	271	曲物	ヒノキ科	SE5001	
	272	曲物	ヒノキ科	SE4464	
	273	曲物	ヒノキ科		

鉄器随伴

Fig.	No.	器　種	樹　種	遺　構	年　代
204	1	短刀柄	コウヤマキ	SE4474	平安時代後期～鎌倉時代
	2	短刀柄	ヒノキ属	SE4790	13世紀末～14世紀
205	6	鎌鎌柄	アカガシ亜属		

木質遺物の器種構成

針葉樹 樹　種	点　数
モミ属	1
マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）	3
スギ	8
コウヤマキ	9
ヒノキ	70
サワラ	2
ヒノキ属	119
ヒノキ科	38
アスナロ属	1
針葉樹	1
計	252

その他	点　数
樹皮	1
不明	1
計	2

広葉樹 樹　種	点　数
クリ	2
アカガシ亜属	9
コナラ亜属コナラ節	2
ケヤキ	3
ムクノキ	3
ヤマグワ	1
シキミ	1
イスノキ	4
ウツギ属	4
ナシ亜科	2
トチノキ	1
ニシキギ属	2
ネジキ	1
シャシャンボ	1
トネリコ属	1
散孔材	4
計	41

別　表12　建築部材樹種一覧

遺　構	部材番号	部　材	位　置	樹　種	備　考	掲載図番号	
SB5000	955	礎板	北側柱東から2	コウヤマキ			1
	935	柱根	北側柱東から3	コウヤマキ			2
	907	柱根	北側柱東から6	コウヤマキ		Fig. 191	3
	963	柱根	北側柱東から4	コウヤマキ			−
SA4730	318	柱根	南端から3	コウヤマキ			4
SB4332	611	柱根	東側柱北から2	ヒノキ			5
SB4330	573	柱根	北東隅柱	コウヤマキ			6
SB4331	699	柱根	東側柱北から3	コウヤマキ			7
SB4738	968	柱根	西妻柱	コウヤマキ		Fig. 192	8
SB5050	965	柱根	東側柱北から2	コウヤマキ			9
	933	柱根	北東隅柱	コウヤマキ			−
SB4445	610	柱根	南西隅柱	コウヤマキ			10
SE4740	975	隅柱	北西	コウヤマキ		Fig. 196	11
	974	隅柱	北東	コウヤマキ			12
SE4740	973	隅柱	南西	コウヤマキ		Fig. 197	13
	972	隅柱	南東	コウヤマキ			14
SE4740	897	横桟	西	ヒノキ属			15
	886	横桟	東	ヒノキ		Fig. 200	16
	888	横桟	南	コウヤマキ			17
	875	横桟	北	ヒノキ属			18
SE4740	1063A	横板	東01	ヒノキ属	芯持材		
	1063B	横板	東01	ヒノキ科	柾目割板材ヵ		
	898	横板	東01	ヒノキ	割板材		
	918	横板	東02	コウヤマキ	板材または割板材		
	858	横板	東03	コウヤマキ	割板材ヵ		
	865	横板	東04	コウヤマキ	割板材	Fig. 202	21
	873	横板	東05	コウヤマキ	背板材	Fig. 203	25
	2057	横板	東06	コウヤマキ	割板材		
	872	横板	東07	コウヤマキ	割板材		
	857	横板	東08	ヒノキ属	板材	Fig. 201	20
	2059	横板	東09	ヒノキ属	板材		
	855	横板	東11	コウヤマキ	板材		
	849	横板	東12	ヒノキ属	板材		
SE4740	917	横板	南01の上	ヒノキ科	背板材または割板材		
	958	横板	南01	コウヤマキ	背板材		
	860	横板	南02	コウヤマキ	背板材	Fig. 203	24
	890	横板	南02下半	コウヤマキ	背板材		
	863	横板	南03	コウヤマキ	割板材		
	862	横板	南04	コウヤマキ	背板材		
	869	横板	南05	コウヤマキ	割板材		
	896	横板	南06	コウヤマキ	割板材		
	866	横板	南07	ヒノキ属	板材		
	850	横板	南08	ヒノキ属	板材		
	870	横板	南09	ヒノキ属	板材		
	2060	横板	南10	ヒノキ属	板材		
	868	横板	南11	ヒノキ属	板材	Fig. 201	19
SE4740	1040・1041	横板	西01	コウヤマキ	不明		
	893	横板	西02	コウヤマキ	背板材ヵ		
	892	横板	西03	コウヤマキ	背板材		
	871	横板	西04	コウヤマキ	割板材		
	859	横板	西05	コウヤマキ	背板材		
	894	横板	西06	コウヤマキ	背板材		
	867	横板	西07	コウヤマキ	割板材	Fig. 202	22
	864	横板	西08	コウヤマキ	割板材		
	874	横板	西09	ヒノキ属	板材		
	851	横板	西10	ヒノキ属	板材		
	899	横板	西11上の部分	ヒノキ属	板材		
	854	横板	西11	ヒノキ科	板材		
	853	横板	西12	ヒノキ属	板材		
SE4740	904	横板	北01	ヒノキ属	背板材		
	967	横板	北02	コウヤマキ	背板材		
	891	横板	北03	コウヤマキ	背板材	Fig. 203	23
	895	横板	北04	コウヤマキ	割板材		
	889	横板	北05	コウヤマキ	背板材		
	861	横板	北06	コウヤマキ	割板材		
	852	横板	北07	コウヤマキ	割板材		
	856	横板	北08	コウヤマキ	板材		
	2058	横板	北09	サワラ	板材		
	1998	横板	北10	ヒノキ属	板材		
	2061	横板	北11	ヒノキ属	板材		

Research Report, Nara National Research Institute For Cultural Properties No. 94

Asuka and Fujiwara palace sites
Excavation Report V

Investigation of the East third ward on sixth street of the Fujiwara capital site

2017

Nara National Research Institute
For Cultural Properties

ASUKA AND FUJIWARA PALACE SITES
EXCAVATION REPORT V

INVESTIGATION OF THE EAST THIRD WARD ON SIXTH STREET OF THE FUJIWARA CAPITAL SITE

CONTENTS

Chapter I Introduction ····· 1

1. Background ····· 1

A. The past and the present of Fujiwara Capital ····· 1

B. The urban planning *Jōbō* of Fujiwara Capital ····· 3

2. Process of investigation ····· 6

3. Organization of investigation ····· 9

4. Publication of the report ····· 9

Chapter II Outline of excavation ····· 12

1. Excavation areas ····· 12

A. Location and its setting ····· 12

B. Survey and division of precincts ····· 19

2. Summary of excavations ····· 22

A. 45th excavation ····· 22

B. 46th excavation ····· 22

C. 47th excavation ····· 23

D. 50th excavation ····· 24

E. 53rd excavation ····· 24

F. 133-7th and 13th excavations ····· 25

G. Related investigations ····· 25

3. Excavation log (excerpt) ····· 26

A. 45th excavation ····· 26

B. 46th excavation ····· 29

C. 47th excavation ····· 35

D. 50th excavation ····· 39

E. 53rd excavation ····· 43

F. 133-7th excavation ····· 45

G. 133-13th excavation ····· 45

Chapter III Archaeological Site ····· 46

1. Geographical setting and topography ····· 46
2. Archaeological features ····· 48

A. Features of Fujiwara period ····49 B. Features of Nara period ····· 71
C. Features of the period before Fujiwara Capital ····· 74
D. Features from Heian to the Middle Ages ····· 83

Chapter IV Artifacts ····· 96

1. Roof tiles ····· 96

A. Eaves tiles ····· 96 B. Round and flat tiles ····· 114
C. Constructional and stamped writing tiles ····· 122
D. Buddha images in relief on tiles (*Senbutsu*) ····· 176

2. Pottery and earthen wares ····· 180

A. Pottery recovered from east-west great ditch SD4130 and well SE4740 ····· 181
B. Pottery recovered from street gullies and other ditches ····· 206
C. Pottery recovered from wells and pits ····· 218
D. Pottery recovered from buildings and walls ····· 228
E. Pottery before Fujiwara Capital and during the Middle Ages ····· 233
F. Stoneware inkslab (*tōken*) and special earthen wares ····· 242
G. Pottery with inscriptions and stamps ····· 253
H. Pottery with inscriptions associated with *Kaguyama* and its character style ····· 256

3. Wooden objects ····· 261

A. Wooden objects recovered from great ditch east-west SD4130 ····· 261
B. Wooden objects recovered from well SE4740 ····· 284
C. Wooden objects recovered from other features and deposits ····· 292
D. Bent wood boxes recovered from wells during the Middle age ····· 297
E. Architecture members and frames of the well ····· 300

4. Metal objects and coins ····· 313

A. Metal objects ····· 313 B. Coins ····· 318

5. Stone objects, earthen wares associated with metallurgy and stone tools ····· 321

A. Stone objects and earthen wares associated with metallurgy ····· 321
B. Stone tools ····· 328

6. Wooden tablets with inscription (*mokkan*) ····· 329

Chapter V Scientific Analysis ····· 332

1. Faunal remains ····· 332
2. Floral remains ····· 333
   A. Result from the analysis ····· 333
   B. Conclusion ····· 334
3. Investigation on tree species of wooden objects ····· 338
4. Analysis on Metal objects, coins and Buddha images in relief on tiles (Senbutsu) ····· 342

Chapter VI General Overview ····· 356

1. Archaeological features ····· 356
   A. Transition of the features ····· 356
   B. Government offices (*kanga*) in Fujiwara Capital ····· 370
2. Pottery ····· 379
   A. Consideration of pottery recovered from SD4130 and SE4740 ····· 379
   B. Characteristics of the excavation site: A view from the stoneware inkslab (*tōken*) ···· 385
   C. Pottery of Kofun period ····· 389
3. Roof tiles and bricks ····· 393
4. Characteristics of the site: A view from historical documents ····· 400
   A. *Kaguyama Shōsō* (Kaguyama official warehouse) ····· 400
   B. Kaguyama Palace ····· 406
   C. *Sakyōshiki* (East Capital Administrative Office) ····· 409
5. Excavation of Fujiwara Capital ····· 418
   A. Land allocation of Fujiwara Capital ····· 418
   B. About Southwest Block, West First Ward on Seventh Street ····· 437
   C. Actual condition of Fujiwara Capital ····· 444
6. Conclusion ····· 452
   A. Archaeological features ····· 452
   B. Artifacts ····· 453
   C. Characteristics of the site ····· 454

Appendix

Construction of Office Buildings and Storages for the Department of Imperial Palace Sites Investigations (Asuka/Fujiwara), Nara National Research Institute for Cultural Properties ……456

1. Decision of the construction site ……456
2. Soil survey ……456
3. Layout and construction ……457
   - A. Process of construction ……457
   - B. Basic policy of construction and structure ……458
   - C. Outlines of the buildings ……459
4. Reference Room for Fujiwara Palace Site and outside displays for the archaeological features ……460

Figures ……463
Tables ……473
English summary ……495
Chinese summary ……525
Korean summary ……543
Transcriptions of *mokkan* inscriptions ……The end of this book

FIGURES

Fig.

1. Comparison between Fujiwara and Nara Capitals ····· 4
2. The area of Greater Fujiwara Capital and the location of investigation ····· 5
3. Sites around Fujiwara Capital·····16
4. Wooden tablet with inscription (*mokkan*) recovered from 54-1st excavation ·····17
5. Location of the investigation of East Third Ward on Sixth Street·····18
6. Excavation site and its divisions ·····20
7. 45th excavation : the areas of I, III, and the Center ·····26
8. Research scene (45th excavation) ·····27
9. Research scene (SE4031) ·····27
10. 45th excavation: the area of II (western part) and IV ·····28
11. 45th excavation: the areas of II (eastern part)·····29
12. 46th excavation area·····30
13. Research scene (46th excavation) ·····31
14. Research scene (46th excavation) ·····31
15. Public site viewing (46th excavation) ···32
16. Public site viewing (46th excavation) ···32
17. Orientation points making (46th excavation) ·····33
18. Aerial scene (46th excavation) ·····33
19. Research scene (SE4468) ·····34
20. Research scene (SE4469) ·····34
21. 47th excavation area·····35
22. Scene of photographing (47th excavation) ·····36
23. Research scene (47th excavation) ·····36
24. Orientation points making (47th excavation) ·····37
25. Public site viewing (47th excavation) ···37

Fig.

26. Scene of scale drawing of cross section (47th excavation) ·····38
27. Research scene (SE4740) ·····38
28. 50th excavation area (western part)····39
29. Research scene (50th excavation) ·····40
30. Research scene (50th excavation) ·····40
31. Visit of Commissioner of the Agency for Cultural Affairs (50th excavation) ·····41
32. 50th excavation area (eastern part) ····41
33. Public site viewing (50th excavation) ···42
34. Public site viewing (50th excavation) ···42
35. Research scene (SD4143) ·····43
36. 53rd excavation area·····43
37. Research scene (SE5940) ·····44
38. Research scene (53rd excavation) ·····44
39. 133-7th and 13th excavation areas ···45
40. Topographic map in the area of East Third Ward on Sixth Street····46
41. Excavation site and topography in the area ·····47
42. Cross section of SD4139 and 4311 ····49
43. Cross section of SD4143 ·····51
44. Plan and cross section of SE10175····54
45. Excavated situation about roof tiles of SD4255·····55
46. Posthole's plan and cross section of SA4283 and 4990 ·····56
47. Posthole's plan and cross section of SA4286 ·····57
48. Posthole's plan and cross section of SB4726 and SA4730 ·····58
49. Posthole's plan and cross section of SB5000 and 4332 ·····60
50. Posthole's plan and cross section of SB4340 and 4330 ·····62

Fig.

51. Plan and cross section of SK4325 and SE4335 ····· 64
52. Cross section of SE4740 ····· 65
53. Summary for Excavated situation of *Wadō Kaichin* coins at SE4740 ····· 65
54. Plan and cross section of SE4740 ····· 66
55. Cross section of SD4130 ····· 67
56. Plan view of SD4131, SX4133 and 4134 ····· 69
57. Plan and cross section of SE5950 ····· 70
58. Posthole's plan and cross section of SB5050 ····· 74
59. Plan and cross section of SJ4260 ····· 76
60. Estimated basin area of NR4225 and NR4226 and surrounding pit dwellings ····· 77
61. Plan and cross section of SI4231 and 4232 ····· 79
62. Plan and cross section of SI4233 ····· 80
63. Plan and cross section of SI4234 and 4235 ····· 81
64. Plan and cross section of SI4236 ····· 82
65. Plan and cross section of SE4466, 4467 and4468 ····· 87
66. Plan and cross section of SE4474 ····· 89
67. Posthole's plan and cross section of SB4405 ····· 89
68. Cross section of SD4745, 4755 and 4743 ····· 91
69. Plan and cross section of SE5940 ····· 93
70. Cross section of SK5015 ····· 95
71. Round eave tiles Type 1A ····· 97
72. Round eave tiles Type 1B ····· 99
73. Round eave tiles Types 2-5E ····· 101
74. Round eave tiles Types 5F-7 ····· 103
75. Round eave tiles Type 8 ····· 104
76. Flat eave tiles Type 1A ····· 106

Fig.

77. Flat eave tiles Type 1B ····· 107
78. Flat eave tiles Type 2 ····· 109
79. Flat eave tiles Types 3-6 ····· 111
80. Flat eave tiles Types 7-9 ····· 113
81. Filler tile ····· 115
82. Ridge tiles and clay drainage pipe ····· 116
83. Angle and flat tile ····· 117
84. Tiles, roof tile with stamped characters and stoneware disks ··· 119
85. Crowning tiles of Middle Age ····· 121
86. Filler tiles of Middle Age and ridge tiles ····· 123
87. Enel eave tiles of Middle Age roof tiles with stamped characters and unknown constructional tiles ····· 124
88. Round tiles Group I, B1-D1 ····· 126
89. Round tile Group I, D2 ····· 127
90. Four variations of step part of round tile Group II ····· 128
91. Type A of step part of round tile ··· 129
92. Type B of step part of round tile ··· 130
93. Type C of step part of round tile ··· 131
94. Type D of step part of round tile ··· 133
95. Round tiles Group III, D ····· 134
96. Flat tiles Group I, A ····· 137
97. Flat tiles Group I, B (1) ····· 139
98. Flat tiles Group I, B (2) ····· 141
99. Flat tiles Group I, B (3) ····· 143
100. Flat tiles Group I, B (4) ····· 145
101. Flat tile Group I, C (1) ····· 146
102. Flat tiles Group I, C (2) ····· 147
103. Flat tiles Group I, C (3) ····· 149
104. Flat tiles Group I, C (4) ····· 151
105. Flat tiles Group I, D (1) ····· 153
106. Flat tiles Group I, D (2) ····· 154

Fig.

107. Flat tiles Group I, E ····· 155
108. Flat tile Group II (1) ····· 157
109. Flat tiles Group II (2) ····· 158
110. Flat tiles Group II (3) ····· 159
111. Flat tile Group II (4) ····· 160
112. Flat tile Group II (5) ····· 161
113. Flat tile Group II (6) ····· 162
114. Flat tiles Group II (7) ····· 163
115. Flat tiles Group II (8) ····· 165
116. Flat tiles Group III ····· 166
117. Round tiles of Middle Age Group i (1) ····· 168
118. Round tiles of Middle Age Group i (2) ····· 169
119. Patterns of hanging straps on concave, round tile of Middle Age Group i ····· 170
120. Round tile of Middle age, Group ii (1) ····· 171
121. Round tiles of Middle Age, Group ii (2) ····· 172
122. Flat tile of Middle Age, Group i (1) ····· 173
123. Flat tile of Middle Age, Group i (2) ····· 174
124. Flat tiles of Middle Age, Group i (3) and ii ····· 175
125. Square-shaped triad of Buddha image in relief on a tile made in a mold Type B recovered from Fujiwara Palace ····· 176
126. Measure point for Sue wares Lid B and G ····· 180
127. Pottery recovered from SD4131 and 4132 ····· 211
128. Pottery recovered from SD4135 ···· 213
129. Pottery recovered from SD4143 ···· 215
130. Pottery recovered from other ditches ····· 217

Fig.

131. Pottery recovered from SK4327 ···· 223
132. Pottery recovered from SK4265 ···· 225
133. Pottery recovered from SK4271 ···· 226
134. Pottery recovered from SK4266, 4365 and SJ4260 ····· 227
135. Pottery recovered from the embedded- pillar buildings ····· 231
136. Pottery recovered from the pillared fences ····· 232
137. Jomon pottery ····· 233
138. Pottery recovered from SI4231 and 4233 ····· 235
139. Pottery recovered from SI4230, 4232 and 4234 ····· 237
140. Pottery recovered from SI4235 and 4236 ····· 239
141. Korean style pottery ····· 240
142. Situation about pottery recovered from SJ5007 ····· 241
143. Green glaze ink-slab with animal-foot-shaped pedestal ····· 243
144. Gilded bronze small banner stored in Hōryūji temple and Green glaze ink-slab with animal-foot-shaped pedestal ····· 244
145. Formal ink-slabs ····· 247
146. Converted ink-slabs ····· 248
147. Horse-shaped clay figurines Type I ····· 249
148. Horse-shaped clay figurines Type II and III ····· 250
149. Small miniature pottery ····· 251
150. Salt-making pottery ····· 252
151. Typical example of writing "*Kaguyama*" ····· 257
152. Shapes of writing "*Kaguyama*" ····· 258
153. Wooden object recovered from the middle layer at SD4130 (1) ····· 261

Fig.

154. Wooden objects recovered from the middle layer at SD4130 (2)····· 262

155. Wooden objects recovered from the middle layer at SD4130 (3)····· 263

156. Wooden objects recovered from the middle layer at SD4130 (4)····· 264

157. Wooden objects recovered from the middle layer at SD4130 (5)····· 265

158. Wooden objects recovered from the middle layer at SD4130 (6)····· 266

159. Wooden objects recovered from the middle layer at SD4130 (7)····· 267

160. Wooden objects recovered from the middle layer at SD4130 (8)····· 269

161. Wooden objects recovered from the middle layer at SD4130 (9)····· 271

162. Wooden objects recovered from the middle layer at SD4130 (10)···· 272

163. Wooden objects recovered from the middle layer at SD4130 (11)···· 273

164. Wooden objects recovered from the middle layer at SD4130 (12)···· 275

165. Wooden objects recovered from the middle layer at SD4130 (13)···· 276

166. Wooden objects recovered from the middle layer at SD4130 (14)···· 277

167. Wooden objects recovered from the middle layer at SD4130 (15)···· 278

168. Wooden objects recovered from the upper layer at SD4130 (1)····· 279

169. Wooden objects recovered from the upper layer at SD4130 (2)····· 280

170. Wooden objects recovered from the upper layer at SD4130 (3)····· 281

171. Wooden objects recovered from the upper layer at SD4130 (4)····· 282

172. Wooden objects recovered from the upper layer at SD4130 (5)····· 283

173. Wooden objects recovered from the bottom and lower layer at SE 4740····· 285

Fig.

174. Wooden objects recovered from the lower layer, SE4740 (1)····· 286

175. Wooden objects recovered from the lower layer, SE4740 (2)····· 287

176. Wooden objects recovered from the middle layer, SE4740····· 288

177. Wooden objects recovered from the upper layer, SE4740 (1) ····· 289

178. Wooden object recovered from the upper layer, SE4740 (2) ····· 290

179. Wooden objects recovered from the upper layer, SE4740 (3) ····· 291

180. Wooden objects recovered from SB4332 and 4737 ····· 292

181. Wooden objects recovered from SK4325 ····· 292

182. Lacquer ware recovered from SE4790····· 293

183. Wooden objects recovered from SE4790····· 294

184. Wooden objects recovered from the well in Middle Age (1)····· 295

185. Wooden objects recovered from the well in Middle Age (2) and disturbed layer····· 296

186. Wooden objects recovered from the well in Middle Age (3)····· 297

187. Bent wood boxes recovered from SE4177 and 4468 ····· 298

188. Bent wood boxes recovered from SE5001 and 4464 ····· 299

189. Hole for tie-up on remains of a pillar recovered from SA4730 ····· 300

190. Trace of shaping on the bottom of remains of a pillar recovered from SB4445 ····· 300

191. Wooden members recovered from SA4730 and SB5000····· 301

192. Wooden members recovered from SB4330, 4331, 4332, 4445, 4738, and 5050····· 303

Fig.

193. New mortise and the impression of cross rail on northwest corner pillar ····· 304
194. Old mortise on northeast corner pillar ····· 304
195. Old connection on southeast corner pillar ····· 304
196. Corner pillars of SE4740 (1) ····· 305
197. Corner pillars of SE4740 (2) ····· 306
198. Rectangular tenon on north cross rail ····· 307
199. Rectangular tenon on south cross rail ····· 307
200. Cross rails of SE4740 ····· 308
201. Crosscut planks of SE4740 (1) ····· 309
202. Crosscut planks of SE4740 (2) ····· 310
203. Crosscut planks of SE4740 (3) ····· 311
204. Ironwares (1) ····· 314
205. Ironwares (2) ····· 315
206. Ironwares (3) ····· 316
207. Copperwares ····· 317
208. Plain silver coin ····· 318
209. Measurement point of silver coins ····· 319
210. Stone implements (1) ····· 321
211. Stone implements (2) ····· 322
212. Stone implements (3) ····· 323
213. Stone implements (4) ····· 324
214. Objects associated with casting (1) ····· 325
215. Objects associated with casting (2) ····· 326
216. Stone tools ····· 327
217. Small rounded gravel ····· 328
218. Stones of peach ····· 336
219. Taxon of seeds ····· 337

Fig.

220. Gilded bronze stick and its photomicrograph ····· 342
221. Bronze mirror and its permeable X-ray image ····· 343
222. Photomicrograph of the hole on plain silver coin ····· 344
223. Permeable X-ray image of *Wadō Kaichin* coins ····· 344
224. Chemical composition of *Wadō Kaichin* coins (Cu-Sn-Pb) ····· 346
225. Chemical composition of *Wadō Kaichin* coins (Fe-Cu) ····· 346
226. Characteristics of chemical composition of the materials ····· 347
227. Characteristics of chemical composition of the existing materials and their relation with inscription ····· 347
228. Examples of spectrum of each type ····· 348
229. Characteristic of each type based on the average of chemical system ····· 348
230. Chinese coin No. 29 and its permeable X-ray image ····· 349
231. Debris A ····· 350
232. The white part on a concave of debris A ····· 350
233. Brown substance existed on white foundation of debris A ····· 350
234. Brown substance existed on white found-ation of debris A (with gloss) ····· 351
235. Dark brown backside of debris A and brown deposits ····· 351
236. Reddish brown part of debris A ···· 351
237. Head of copper nail of debris A ····· 351
238. Gold leaf of debris A ····· 351
239. Permeable X-ray image of copper nail of debris A ····· 351

Fig.

240. Debris B ····· 351

241. White foundation on a concave of relief of debris B ····· 352

242. Brown substance existed on white foundation of debris B ····· 352

243. Debris C ····· 352

244. White foundation of debris C ····· 352

245. Brown part of debris C ····· 352

246. Debris D ····· 353

247. Clay composition and reddish brown part of debris D ····· 353

248. Pale red and white parts of debris D ····· 353

249. Debris E ····· 353

250. Brown substance of debris E ····· 353

251. Red pigment (vermilion) and white found-ation (white lead) of debris E ····· 353

252. A result of X-ray fluorescence analysis ····· 354

253. A result of FT-IR analysis on brown substance backside of debris A ···· 355

254. Archaeological features of Phase I ····· 357

255. Archaeological features of Phase II ····· 357

256. Archaeological features of Phase III-A ····· 359

257. Southwest Block, West First Ward on the Seventh Street, Fujiwara Capital ····· 361

258. Archaeological features of Phase III-B ····· 362

259. The well SE4740 of Fujiwara period and the well SE4467 of Heian period ····· 363

260. Archaeological features of Phase III-C ····· 365

261. Archaeological features of Phase IV ····· 367

Fig.

262. Archaeological features of Phase V ····· 368

263. Archaeological features of Phase VI ····· 368

264. Ministry of Military Affairs in Nara Palace ····· 370

265. Block 14, East Second Ward on Fifth Street, Nara capital ····· 370

266. East Third Ward on Sixth Street (Phase III-C), Fujiwara Capital Hitachi Provincial Head-quarters (Phase III-b) and Dazaifu Government Office (Phase II) ····· 372

267. Fore Hall SB4340, the line of pillar holes SX4342-4349 and a tent house····· 375

268. Reconstruction view of buildings at East Third Ward on Sixth Street, Fujiwara Capital (Phase III-B) ····· 376

269. Reconstruction view of buildings at East Third Ward on Sixth Street Fujiwara Capital (Phase III-C) ····· 377

270. Distribution and number of major eating utensils recovered from the middle layer of SD4130 and the lower layer of SE4740 ····· 384

271. Pattern of excavated ink-slab ····· 387

272. Distribution of stoneware ink-slab··· 388

273. Classification of the pot's rim section ····· 389

274. Comparison between round eave tile Type 1a and that of Kibiike-haiji Type IA ····· 393

275. Adhered materials recovered from the excavation area ····· 396

276. Distribution of eave tiles ····· 397

277. Distribution of round and flat eave tiles ····· 398

278. Distribution of archaeological features at Northeast and Northwest Blocks, East Third Ward on Fourth Street ····· 419

Fig.

279. Distribution of archaeological features at East First Ward on Seventh Street ····· 420

280. Distribution of archaeological features at West First Ward on Second Street ····· 421

281. Distribution of archaeological features at Northeast and Northwest Blocks, West Second Ward on Second Street····· 422

282. Distribution of archaeological features at Northeast and Northwest Blocks, West Second Ward on Eleventh Street····· 423

283. Distribution of archaeological features at Southwest Block, East Third Ward on Second Street ····· 423

284. Distribution of archaeological features at Southwest Block, East Third Ward on Seventh Street ···· 424

285. Distribution of archaeological features at Northeast Block, West Second Ward on First Street ····· 424

286. Distribution of archaeological features at Southeast and Westeast Block, West Third Ward on Second Street and Northeast and Northwest Block, West Third Ward on Third Street ····· 425

287. Distribution of archaeological features at West First Ward on Seventh Street, Northeast and Northwest Blocks, First Ward on the Eighth Street ····· 427

288. Distribution of archaeological features at Northwest Block, East Second Ward on Second Street···· 428

289. Distribution of archaeological features at Southeast Block, East Second Ward on Seventh Street··· 429

290. Distribution of archaeological features at Southwest Block, East First Ward on Eleventh Street ···· 429

Fig.

291. Distribution of archaeological features at Southwest Block, East Second Ward on Eleventh Street ····· 430

292. Distribution of archaeological features at Southwest Block, West Tenth Ward on North Fifth Street ····· 430

293. Distribution of archaeological features at West First Ward on First Street····· 431

294. Distribution of archaeological features at Northeast and Southeast Blocks, West sixth Ward on Fourth Street····· 432

295. Distribution of archaeological features at Southeast Block, West Sixth Ward on Fifth Street····· 433

296. Distribution of archaeological features at Northeast Block, West Fifth Ward on Sixth Street····· 434

297. Distribution of archaeological features at Northwest Block, West Forth Ward on Tenth Street····· 434

298. Distribution of archaeological features at Southeast Block, West Fifth Ward on Tenth Street ····· 435

299. Distribution of archaeological features at Northeast Block, West Third Ward on Eleventh Street ··· 435

300. Distribution of archaeological features at Southwest Block, East Third Ward on Eleventh Street ··· 436

301. Distribution of archaeological features at Southwest Block, West First Ward on Seventh Street ····· 439

302. Plan and cross section of SB4975 ··· 440

303. Transition of archaeological features at Northwest, Southwest Blocks, West First Ward on Seventh Street and Northwest Block, West First Ward on Eighth Street (1)···· 441

Fig.

304. Transition of archaeological features at Northwest, Southwest Blocks, West First Ward on Seventh Street and Northwest Block, West First Ward on Eighth Street (2)···· 442

Fig.

305. Location selection of Fujiwara Capital ····· 445

306. New office buildings····· 457

307. Layout of new office buildings ····· 459

TABLES

Tab.

1. Excavation area and reference points ·····21
2. List of investigations ·····25
3. Surface finishing of Haji wares·····180
4. List of "*Kabuyama*" ink-inscribed pottery ·····259
5. List of modified sticks recovered from the middle layer of SD4130 ·····274
6. List of chopsticks recovered from SE4790 ·····293
7. List of tree species and lumber techniques of boards from SE4740 ·····312
8. Measurement values of silver and bronze coins ·····319
9. List of small rounded gravels ·····328
10. List of faunal remains·····332
11. List of identified seeds ·····335
12. List of tree species of wooden implements·····341
13. Result of X-ray fluorescence analysis on silver coins recovered from Asuka and Fujiwara Capitals ·····344
14. Result of analysis on quantitative determination on plain silver coins and *Wadō Kaichin* coins (wt%) ·····345
15. Result of analysis on Chinese coins (wt%)·····349
16. Result of analysis on prepared clay composition of Buddha image in relief on a tile·····354
17. Sizes of government offices·····371
18. Ratio of stoneware ink-slabs recovered from each archaeological sites ·····386
19. Frequency of pottery attribution recovered from pit dwellings·····390
20. List of eave tiles recovered from the excavation ·····393
21. Eave tiles recovered from major archaeological features ·····398
22. List of location of Fujiwara Capital (West Capital) ·····446
23. List of location of Fujiwara Capital (East Capital) ·····447
24. Outline of building and structure ·····458

Additional Figures

1. Plan and Cross section of SE4031, 4460, 4461 and 4462 ……465
2. Plan and Cross section of SE4463, 4464 and 4465 ……466
3. Plan and Cross section of SE4469, 4470, 4471, 4472 and 4473 ……467
4. Plan and Cross section of SE4739, 4765, 4790 ……468
5. Plan and Cross section of SE4782, 4793, 4980 and 5001 ……469
6. Plan and Cross section of SE5010, 5022, 5023 and 5055 ……470
7. Plan and Cross section of SE5060, 5065, 5076, 5095 and 5920 ……471

Additional Tables

1. List of well ……475
2. List of types of Haji wares during seventh century ……476
3. List of types of Sue wares during seventh century ……478
4. Classification of pottery during seventh century ……480
5. Constitution of pottery recovered from SD4130 ……481
6. Constitution of pottery recovered from SE4740 ……483
7. List of pottery recovered from SD4130 and SE 4740 ……484
8. List of ink-inscribed pottery ……487
9. Measurement values of large seeds ……489
10. List of tree species of wooden implements recovered from SD4130 ……491
11. List of tree species of wooden implements recovered from SE4740 and others ……492
12. List of tree species of wooden members ……493

Plates

Pl.

1. Division of the plan
2. Measured drawing at precinct 6AJC-N and 6AJD-H
3. Measured drawing at precinct 6AJC-N, 6AJD-H and 5AJC-M and N
4. Measured drawing at precincts 6AJC-F and N, 6AJD-A and H and 5AJC-E, F and M
5. Measured drawing at precinct 6AJC-F and 6AJD-A
6. Measured drawing at precinct 6AJC-N and 6AJD-H and J, No.1

Pl.

7. Measured drawing at precinct 6AJC-N and 6AJD-H and J, No.2
8. Measured drawing at precincts 6AJC-F and N and 6AJD-A, B, H and J
9. Measured drawing at precinct 6AJC-F and 6AJD-A and B
10. Measured drawing at precinct 6AJD-H and J, No.1
11. Measured drawing at precinct 6AJD-H and J, No.2
12. Measured drawing of Buddha image in relief on a tile made in a mold, No1
13. Measured drawing of Buddha image in relief on a tile made in a mold, No.2
14. Measured drawing of Haji wares recovered from lower layer at SD4130
15. Measured drawing of Sue wares recovered from lower layer at SD4130, No.1
16. Measured drawing of Sue wares recovered from lower layer at SD4130, No.2
17. Measured drawing of Haji wares recovered from middle layer at SD4130, No.1
18. Measured drawing of Haji wares recovered from middle layer at SD4130, No.2
19. Measured drawing of Haji wares recovered from middle layer at SD4130, No.3
20. Measured drawing of Haji wares recovered from middle layer at SD4130, No.4
21. Measured drawing of Haji wares recovered from middle layer at SD4130, No.5
22. Measured drawing of Sue wares recovered from middle layer at SD4130, No.1
23. Measured drawing of Sue wares recovered from middle layer at SD4130, No.2
24. Measured drawing of Sue wares recovered from middle layer at SD4130, No.3
25. Measured drawing of Sue wares recovered from middle layer at SD4130, No.4
26. Measured drawing of Sue wares recovered from middle layer at SD4130, No.5
27. Measured drawing of pottery recovered from upper layer at SD4130, No.1
28. Measured drawing of pottery recovered from upper layer at SD4130, No.2
29. Measured drawing of pottery recovered from upper layer at SD4130, No.3
30. Measured drawing of pottery recovered from SE4740, No.1
31. Measured drawing of pottery recovered from SE4740, No.2
32. Measured drawing of pottery recovered from side ditch between Sixth row avenue and Third East column avenue
33. Measured drawing of pottery recovered from SE5950 and 4335
34. Measured drawing of pottery recovered from SK4325
35. Measured drawing of pottery and ceramic of the Middle Age
36. Measured drawing of ink-inscribed pottery recovered from lower and middle layers at SD4130, No.1
37. Measured drawing of ink-inscribed pottery recovered from middle layer at SD4130, No.2
38. Measured drawing of ink-inscribed pottery recovered from middle layer at SD4130, No.3
39. Measured drawing of ink-inscribed pottery recovered from middle layer at SD4130, No.4

Pl.

40. Measured drawing of ink-inscribed pottery recovered from upper layer at SD4130
41. Measured drawing of ink-inscribed, incised writings and stamped characters pottery recovered from lower and middle layers at SD4130
42. Measured drawing of ink-inscribed pottery recovered from the lowest and lower layers at SE4740, No.1
43. Measured drawing of ink-inscribed pottery recovered from lower layer at SE4740, No.2
44. Measured drawing of ink-inscribed pottery recovered from lower layer at SE4740, No.3
45. Measured drawing of ink-inscribed pottery recovered from middle layer at SE4740, No.1
46. Measured drawing of ink-inscribed pottery recovered from middle layer, No.2 and surrounding area at SE4740

PHOTOGRAPHS

Ph.

1. Around the site and the urban plan *(jōbō)* of Fujiwara Capital
2. Distant view of the site
3. Full view of the site and research scene
4. 45th excavation, No.1
5. 45th excavation, No.2
6. 45th excavation, No.3
7. 45th excavation, No.4
8. 45th excavation, No.5
9. 45th excavation, No.6
10. 45th excavation, No.7
11. 46th excavation, No.1
12. 46th excavation, No.2
13. 46th excavation, No.3
14. 46th excavation, No.4
15. 46th excavation, No.5
16. 46th excavation, No.6
17. 46th excavation, No.7
18. 46th excavation, No.8
19. 46th excavation, No.9
20. 46th excavation, No.10

Ph.

21. 47th excavation, No.1
22. 47th excavation, No.2
23. 47th excavation, No.3
24. 47th excavation, No.4
25. 47th excavation, No.5
26. 47th excavation, No.6
27. 47th excavation, No.7
28. 47th excavation, No.8
29. 50th West excavation, No.1
30. 50th West excavation, No.2
31. 50th West excavation, No.3
32. 50th West excavation, No.4
33. 50th West excavation, No.5
34. 50th West excavation, No.6
35. 50th East excavation, No.1
36. 50th East excavation, No.2
37. 50th East excavation, No.3
38. 53rd North excavation, No.1
39. 53rd North excavation, No.2
40. 53rd Middle excavation, No.1
41. 53rd Middle excavation, No.2

Ph.

42. 53rd North, Middle and South Excavations
43. 133-7th and 13th excavations
44. Pit dwellings 1
45. Pit dwellings 2
46. Wells from Heian and Middle Age, No.1
47. Wells from Heian and Middle Age, No.2
48. Wells from Heian and Middle Age, No.3
49. Wells from Heian and Middle Age, No.4
50. Wells from Heian and Middle Age, No.5
51. Wells from Heian and Middle Age, No.6
52. Round eave tiles, Type 1A
53. Round eave tiles, Types 1B-4
54. Round eave tiles, Types 5 and 7
55. Round eave tiles, Types 6 and 8
56. Flat eave tiles, Types 1 and 2
57. Flat eave tiles, Type 3-9
58. Constructional roof tiles and tiles with stamped characters of ancient times
59. Constructional roof tiles of Middle Ages, No.1 (ridge-end tiles, bird perch tiles and crowing tiles)
60. Constructional roof tiles, No.2 (others) and tiles with stamped characters of Middle Age
61. Round tiles, Types I and II, No.1 (step Type A)
62. Round tiles, Type of II, No.2 (step Types B, C, and D)
63. Round tiles, Type of III (D) and details of paddled impression
64. Flat tiles, Type I, No.1 (A and B)
65. Flat tiles, Type I, No.2 (B and C)
66. Flat tiles, Type I, No.3 (C)
67. Flat tiles, Type I, No.4 (C and E)
68. Flat tiles, Type II, No.1 (recovered from SK4160, SD4255, 4751 and SK4325)

Ph.

69. Flat tiles, Types II, No.2 (recovered from SK4325, SD4130 and SE4740) and III
70. Paddle impression of flat tiles, Type I, No.1 (A and B1-11)
71. Paddle impression of flat tiles, Type I, No.2 (B12-26)
72. Paddle impression of flat tiles, Type I, No.3 (B27-31 and C1-10)
73. Paddle impression of flat tiles, Type I, No.4 (C11-15, D and E)
74. Round tiles of the Middle Age
75. Flat tiles of the Middle Age
76. Pottery recovered from lower and upper layers at SD4130
77. Pottery recovered from middle layer at SD4130
78. Pottery recovered from SE4740
79. Pottery recovered from the lowest and lower layers at SE4740
80. Haji wares and Sue wares recovered from lower layer at SD4130, No.1
81. Sue wares recovered from lower layer at SD4130, No.2
82. Haji wares recovered from middle layer at SD4130, No.1
83. Haji wares recovered from middle layer at SD4130, No.2
84. Haji wares recovered from middle layer at SD4130, No.3
85. Haji wares recovered from middle layer at SD4130, No.4
86. Sue wares recovered from middle layer at SD4130, No.1
87. Sue wares recovered from middle layer at SD4130, No.2
88. Sue wares recovered from middle layer at SD4130, No.3
89. Sue wares recovered from middle layer at SD4130, No.4

Ph.

90. Sue wares recovered from middle layer at SD4130, No.5
91. Sue wares recovered from middle layer at SD4130, No.6
92. Haji wares recovered from upper layer at SD4130
93. Sue wares recovered from upper layer at SD4130
94. Pottery recovered from the lowest layer at SE4740
95. Haji wares recovered from lower layer at SE4740, No.1
96. Haji wares recovered from lower layer at SE4740, No.2
97. Haji wares recovered from lower layer at SE4740, No.3 and Sue wares
98. Pottery recovered from middle and upper layers at SE4740
99. Haji wares recovered from middle layer at SE4740
100. Pottery recovered from middle and upper layer at SE4740, and surrounding area
101. Pottery recovered from SD4132, 4139 and 4311
102. Pottery recovered from SD4131
103. Pottery recovered from SD4135
104. Pottery recovered from SD4129, 4143, 4179, 4255, and 4357
105. Pottery recovered from SE5950 and SK4325, No.1
106. Pottery recovered from SK4325, No.2
107. Pottery recovered from SE4335
108. Pottery recovered from SK4327
109. Pottery recovered from SK4265, 4266, 4271, 4365 and SJ4260
110. Pottery recovered from SI4230, 4231 and 4233
111. Pottery recovered from SI4232 and 4234

Ph.

112. Pottery recovered from SI4235 and 4236
113. Korean style pottery and Jomon pottery
114. Pottery recovered from SE4790, SJ5007 and 5029
115. Green glaze inkslab with animal-foot shaped pedestal
116. Inkslabs
117. Horse-shaped clay figurines
118. Ink-scribed pottery recovered from lower and middle layers at SD4130, No.1
119. Ink-scribed pottery recovered from middle layer at SD4130, No.2
120. Ink-scribed pottery recovered from middle and upper layers at SD4130, No.3, SB5020 and SE5950
121. Ink-scribed pottery recovered from lower layer at SE4740, No.1
122. Ink-scribed pottery recovered from the lowest, lower, middle layers and surrounding area at SE4740, No.2
123. Pottery with incised writing and stamped characters recovered from SD4130, 4311 and others
124. Pottery with incised writing recovered from SD4130, No.1
125. Pottery with incised writing recovered from SD4130, No.2
126. Pottery with incised writing recovered from SE4740
127. Wooden implements recovered from middle layer at SD4130, No.1
128. Wooden implements recovered from middle layer at SD4130, No.2
129. Wooden implements recovered from middle layer at SD4130, No.3
130. Wooden implements recovered from middle layer at SD4130, No.4
131. Wooden implements recovered from middle layer at SD4130, No.5

Ph.

132. Wooden implements recovered from middle layer at SD4130, No.6
133. Wooden implements recovered from middle layer at SD4130, No.7
134. Wooden implements recovered from middle layer at SD4130, No.8
135. Wooden implements recovered from middle layer at SD4130, No.9
136. Wooden implements recovered from middle layer at SD4130, No.10
137. Wooden implements recovered from middle layer at SD4130, No.11
138. Wooden implements recovered from upper layer at SD4130, No.1
139. Wooden implements recovered from upper layer at SD4130, No.2
140. Wooden implements recovered from upper layer at SD4130, No.3
141. Wooden implements recovered from the lowest and lower layers at SE4740, No.1
142. Wooden implements recovered from lower layer at SE4740, No.2
143. Wooden implements recovered from middle and upper layers at SD4740, No.1
144. Wooden implements recovered from upper layer at SE4740, No.2
145. Wooden implements recovered from upper layer at SE4740, No.3 and SE4790 and 4782
146. Wooden implements recovered from other wells and disturbed layer, No.1
147. Wooden implements recovered from other wells and disturbed layer, No.2

Ph.

148. Bent wood boxes recovered from the wells of the Middle Age
149. Remains of pillars and foundation boards
150. Corner posts at SE4740, No.1
151. Corner posts at SE4740, No.2
152. Cross rails at SE4740
153. Crosscut planks at SE4740, No.1
154. Crosscut planks at SE4740, No.2
155. Ironwares, No.1
156. Ironwares, No.2 and copperwares, No.1
157. Ironwares, No.3 and copperwares, No.2
158. Coins No.1
159. Coins No.2
160. Coins No.3
161. Coins No.4
162. Stone implements, No.1 and stone tools
163. Stone implements, No.2 and artifacts associated with casting
164. Wooden writing tablet, *mokkan*, No.1
165. Wooden writing tablet, *mokkan*, No.2
166. Photomicrograph of wooden material, No.1
167. Photomicrograph of wooden material No.2
168. Photomicrograph of wooden material, No.3
169. Photomicrograph of wooden material, No.4
170. Transmission X-ray photo of coins
171. Presentation of the site

ATTACHED MAP

1. Map of archaeological features at the East Third Ward on Sixth Street of the Fujiwara Capital Site
2. Map of location selection of Fujiwara Capital

Chapter I　Introduction

This is the archaeological report of the excavations in the East Third Ward on Sixth Street of the Fujiwara Capital Site, conducted by the Department of Fujiwara Palace Sites Investigations, Nara National Research Institute for Cultural Properties, in advance of the construction of office building of the institute. The archaeological investigation was carried out for five seasons, in the period from April 1985 to May 1987. In addition, two supplemental investigations were conducted in 2004. A total of 17,000 m^2 areas were excavated.

Chapter II　Outline of the Fujiwara Capital

History of the Fujiwara Capital

The Fujiwara Capital was the first Chinese-style planned city that had a square-shaped Imperial Palace area spanned 1 km square in its center. The city area was divided in regular fashion into residential blocks by streets and avenues intersecting at right angles in the form of a checkerboard. Divided by the central north-south road called *Suzaku-Ōji*, the western part of the city was called the Right Capital (*Ukyō*), and the eastern part the Left Capital (*Sakyō*). The smallest residential block called *tsubo* or *chō* was ca. 130 m square, and four *tsubo* (*chō*) blocks composed one ward called *bō*, which was ca. 265 m square and equal to a half of the ancient Japanese mile called *ri*. There were a number of residential houses, Buddhist temples and government offices in the city area, and sizes of the residences varied depending on the rank of the owner, from a quarter of *chō* to four *chō*. Although each ward had its own name such as "*rinbō*", not all the original name has been known today, so we conventionally call a name of ward according to the name of facing road, such as East Third Ward on Six Street.

According to the Chronicles of Japan (*Nihon Shoki*), in AD 676 Emperor Tenmu decided to set up a new capital and planned to move from Asuka Kiyomihara Palace to the new palace. It was just after five years of his enthronement, but this plan was not realized at that time. He started the plan again to set up a capital in AD 682, but the construction was halted due to his death in AD 686. Succeeding Empress Jitō resumed the construction in AD 690, and relocated the capital to the newly founded

Fujiwara Capital in AD 694. Until the relocation of the capital to Nara in AD 710, the Fujiwara Capital had been served as the national capital of Japan for sixteen years.

The construction process of the capital has gradually been clarified by the results of successive archaeological investigations. The studies has revealed that the location of the palace had not been decided in the beginning of the construction, and the streets and avenues were firstly built covering all parts of the city. Excavations in the Fujiwara Palace Site revealed features of side ditches of the roads, which are called “precedent roads”. After the setting of the palace location, the side ditches of the “precedent roads” were buried, and channels were newly dug to facilitate the transportation of construction supplies for the palace. The wooden tablets dating back to AD 682 to 685 were recovered from the channels. This implies that the palace construction was ongoing at that time. In addition, it is considered that the construction of the Moto Yakushiji temple was started in AD 680, and archaeological investigations revealed that the Main Hall of temple had been accomplished in AD 688. The land of the temple precisely corresponded to the grid of the West Third Ward on Eighth Street. This suggests that the temple land was set using the streets and avenues as reference lines. In addition, the excavations revealed that the features of the small column avenue of the West Third Ward and the buildings and walls inside the ward existed below the prepared soil for the temple land. These evidences suggests that the city construction was ongoing at the time when the construction of the Moto Yakushiji was started. In addition, the small column avenue of the West Third Ward was buried at the time of the accomplishment of the capital, so this situation is equal to that of the “precedent roads” in the Fujiwara Palace. Therefore, not all the excavated roads in the city area necessarily continued to exist after the accomplishment of the capital, and it is possible that a residential area might spanned several blocks in the beginnings.

Plan of the Fujiwara Capital

About the plan of the Fujiwara Capital, Kishi Toshio had firstly proposed a hypothesis based on the investigations carried out from 1966 to 1968. He had shown

the plan that the capital spanned 8 wards from east to west and 12 wards from north to south, and that the eastern side corresponded to the Nakatsu-michi road, the western side corresponded to the Shimotsu-michi road, the northern side corresponded to the *Yoko-ōji* road, and the southern side corresponded to the *Abe-no-Yamada-michi* road respectively. The Kishi's reconstruction plan had been widely accepted for a long time; however, after 1979 a number of archaeological features of the streets and avenues have been revealed in the areas outside of the Kishi's plan. In the wake of the discoveries, many new reconstruction plans have been proposed as "Greater Fujiwara Capital". In 1996, T-junctions that corresponds to both the eastern and western sides of the capital were revealed, which assured that the capital spanned 10 wards from east to west. At present, the reconstruction plan that spanned 10 wards from east to west and 10 wards from north to south has been widely accepted. According to this plan, the Fujiwara Palace was positioned in the center of the city area, whereas the other ancient capitals in Japan had their palace area positioned in the north.

Chapter III　Archaeological Features

In the archaeological excavations in East Third Ward on Sixth Street of the Fujiwara Capital Site, the area of ca. 17,000 m^2 was opened. A number of archaeological features that date back to the period between the Kofun period and the Middle Ages were revealed, including 2 city roads, 83 buildings with embedded pillars, 8 pit dwellings, 45 walls with embedded pillars, 38 wells, 37 ditches, 4 pits for buried pottery, and so on. For the most part of the features date back to the period of the Fujiwara Capital. In addition, some features belong to the Nara period (from AD 710 to 784). In this report, we divide the period into six Phases as follow: Phase I includes the Kofun period, mainly around fifth century. Phase II includes the period before the construction of the Fujiwara Capital in the seventh century. Phase III includes the period of the Fujiwara Capital, including its construction period, and this Phase is subdivided into three sub-Phases as follow: Phase III-A corresponds to the construction period. Phase III-B corresponds to the early part of the Fujiwara Capital. Phase III-C corresponds to the later period of the Fujiwara Capital. Phase IV

includes the Nara Period in the eighth century. Phase V includes the later part of the Heian period from the tenth to eleventh centuries. Phase VI includes the period after the later part of the Heian period in the twelfth century.

In Phase I, some features of pit dwellings were distributed along a winding natural stream that ran from the south.

In Phase II, the feature of large north-south ditch SD 4143 was positioned in the eastern side of the excavated area, and some features of buildings with embedded pillars were distributed in the west side of the ditch. These buildings were congregated around a relatively large building.

In Phase III, the area was used as the East Third Ward on Sixth Street of the Fujiwara Capital. This land was in a prime location of the capital, since it faced the eastern side of the Fujiwara Palace. In addition, it faced the Sixth Street in the south side, which ran through the southern side of the Fujiwara Palace, and also faced the Fifth Street in the north side, which extended from the Southern East Gate of the palace.

In Phase III-A, the ward was divided into four *tsubo* blocks by the small row street of the Sixth Street and the small column avenue of the West Third Ward. Among the four *tsubo* blocks, the situation of the northeastern and southeastern blocks were clarified relatively. The northeastern block was subdivided into eastern and western parts, and there was a compartment surrounded by walls. The compartment had a gate in the middle of the southern side, and buildings were positioned systematically inside the compartment. This situation suggests that the compartment was an official facility. The southeastern block was also subdivided into northern and southern parts, and each part occupied an area of a half *chō*. This situation suggests that the compartment was used for organized purposes like the western part of the northeastern compartment.

In Phase III-B, the previously subdivided blocks became integrated as one, and the large building SB 5000 was positioned in the center of the East Third Ward on Sixth Street. It is probable that this building was used as the main building in the ward, since there were neither other buildings on the central line of the ward, nor other large-scale buildings in the ward. In the east, there was a line of wall in the

north-south direction that divided the outer and inner compartments. Inside the inner compartment, a north-south building was positioned in the southeast of the main building. Although the area in the southwest of the main building has not been excavated yet, it is likely that there was another north-south building symmetrically. It is probable that the main building and two north-south buildings were arranged in triangle. In the northeast of the main building was an east-west building, and another east-west building was positioned over there. These buildings were positioned systematically, so it is likely that another pair of buildings were positioned at bilaterally symmetric location. At the front courtyard in the south of the main building, there was a feature of temporary structure. It is probable that this structure was associated with a ritual performed at the front courtyard. In addition, large east-west ditch SD 4130 was extended from the large north-south ditch and ran to the west direction, and large well SE 4740 was positioned nearby.

In Phase III-C, the ward still occupied four *chō* blocks, which was same as before, and the inner compound became larger. In the inner compound, an east-west building was positioned in the east of the main building, and two north-south building were positioned on a line in the southeast of the main building. It is probable that a group of buildings were distributed symmetrically in the western part of the compound. Although the layout of the compound adhered fundamentally to the previous one, the extent became larger substantially. In addition, a small building was positioned just in the south of the main building.

In Phase IV in the Nara period, the water channels still continued to exist. In the south part of the excavated area, a compartment surrounded by walls with embedded pillars was revealed. A pair of small and large east-west building were positioned on a line in the north-south direction inside the compound. In the northwest corner of the excavated area, a building with internal pillars was revealed, which is estimated that it was a warehouse. Considering the layout and extent of the structures, it is probable that these structures belonged to a government office.

In Phase V, large north-south ditch SD 4143 was revealed in the eastern side of the excavated area; however, the previous ditches SD 4130 and SE 4740 were almost buried. A pair of small and large buildings were positioned in the south part of the

excavated area. Although there were some large building in this Phase, it is probable that these were not a part of government office but a settlement.

In Phase VI, the area was subdivided into small plots, and wells were dug at every plots. Two groups of structures including a large building with small buildings, walls, ditches and pits were revealed in the center of the excavated area. The layout of these structures was modified at short intervals. After the Kamakura period, a curved ditch, that was probably a moat, ran in the northwest part of the excavated area, and some wells and east-west buildings were distributed around the area inside the moat. In addition, a number of roof tiles were recovered. This implies that there was a temple or shrine. Artifacts recovered from the moat date back to the later part of the fourteenth century. The present landscape of agricultural community around this region may trace back to that period.

Chapter IV　Artifacts

A number of artifacts were recovered from the excavated area, especially from the large ditch SD 4130 and the well SE 4740 on the south side of the ditch, including roof tiles, bricks, pottery, earthen wares, wooden tools, metal tools and wooden writing tablets.

Roof tiles and bricks: A total of 121 round eave roof tiles, classified into 17 types, and 84 flat eave roof tiles, classified into 25 types, were recovered, which date back to the period between the ancient times and the Middle Ages. Most of the roof tiles of the ancient times were made from the same molds used in the Fujiwara Palace and Buddhist temples in the Yamato region. Especially, the existences of the round eave roof tiles with the design of simple lotus eight petals with concentric circle pattern and flat eave roof tiles with embossing palmette scroll design are worth noting, for the roof tiles of the same design are considered to be the earliest roof tiles used in the Kibiike abandoned temple (the Kudara Ōdera temple) erected in the early seventh century. The roof tiles of the Middle Ages includes two groups; the former dates back to the period between the late thirteenth and the early fourteenth centuries (in the transition period from Kamakura to Muromachi), and the latter dates back to the period between the middle and late fourteenth century. A total of 3,860

pieces and 966.1 kg in weight round roof tiles, and 22,993 pieces and 3,083.9 kg in weight flat roof tiles were recovered from the site. In addition, a total of 9 fragments of square-shaped tile with relief of triad Buddha images were recovered from the northwest part of the excavated area.

Pottery and earthen wares: A total of 397 wooden boxes of pottery and earthen wares were recovered, which date back to the period between the Jomon period and the early modern period. Most of them were Haji and Sue wares recovered from the ditch SD 4130 and the well SE 4740. The artifacts recovered from SD 4130 date back to the period between the Fujiwara period and the later part of the tenth century, and those from SE 4740 date back to the period between the Fujiwara period and the early part of the tenth century. It should be noted that a large amount of the artifacts of the Nara period were also recovered even though the capital had already been abandoned at that time. In addition, the occurrence rates of eating utensils and other distinctive types are similar to those from other areas used for government offices. This suggests that the site had been used for a certain official facility in the Nara period. A total of 134 pottery with ink inscription were recovered, and over the 95 percent of them were from the features of SD 4130 and SE 4740. A total of 22 pottery have inscriptions associated with Mt. Kaguyama.

Wooden tools, metal tools, and coins: A total of 120 containers of wooden tools were recovered, mainly from the ditch SD 4130 and the well SE 4740, including containers such as bent wood boxes and lacquer wares, textile manufacturing tools such as spindles, accessories such as combs, musical instruments such as *koto* bridges, ritual implements such as figurines and pointed boards, and tools such as hafts of knife. The unearthed metal tools include iron implements such as short swords, sickles and nails, and bronze implements such as bronze bracelets and flower-shaped ornaments. In addition, a total of 46 coins were recovered. Among them, one plain silver coin and 27 *Wadō Kaichin* coins were recovered from the lower layers of the filling soils of the well SE 4740.

Wooden writing tablets: One talisman tablet was recovered from the well SE 4740. A total of 28 tablets were recovered from the ditch SD 4230 including tablets with inscriptions of office names such as "*Sakyō-shiki*" and "*Natsumi-no-tsukasa*", tablets

and baggage tags with inscriptions of quantity terms such as "*soku*" and "*wa*", and so on.

Analyses of archaeological science: Faunal remains such as horns of Japanese deer and teeth of horse were recovered from the ditch SD 4130. Other faunal remains including horses, cows, humans and soft-shell turtles were recovered from the features and layers of the Middle Ages and the early modern period. Plants remains including seeds of bayberry, chestnuts, plums and peaches were also recovered. It is probable that these were residues of edible fruits. An analysis of species identification for wooden implements clarified that bent wood boxes and pointed boards were mostly made from cypress. An analysis by florescence X-ray for *Wadō Kaichin* coins clarified that they were divided into four groups by their components. This corresponds to the difference of letters inscribed on the coins. Another componential analysis for attached matters to the tiles with Buddha relief clarified that the tiles were originally covered by some materials such as a white base coat, lacquer, and gold leaf. In addition, the covering materials differs from one tile to another.

Chapter V　Conclusion

In conclusion we consider the characteristics of the site based on our investigations and studies.

In Fujiwara period: The site of the East Third Ward on Sixth Street was used for a government office, since the layout of the buildings was systematic and the front courtyard was placed surrounded by the buildings. The pottery recovered from the site also shows some distinctive characteristics of the ceramics used at government offices. Previous studies on excavated wooden writing tablets have clarified that there had been at least two government offices positioned in the city area; one was "*Emon-fu*", the Headquarter of the Palace Gate Guards, at the East First Ward on Seventh Street, and the other was "*Ukyō-shiki*", the West Capital Administrative Office, at the West First Ward on Seventh Street. Both of them were situated next to the palace. In addition, these facilities occupied large areas; the "*Emon-fu*" occupied four *chō* blocks and the "*Ukyō-shiki*" occupied more than three *chō* blocks.

These features are common to the counterparts of the site of the East Third Ward on Sixth Street.

During the Fujiwara period, the *Taihō* Code, the first full-fledged law system in Japan, was put in force in AD 701. In the wake of the implement, the "*Kyō-shiki*" was subdivided into the "*Sakyō-shiki*" and "*Ukyō-shiki*". The wooden writing tablet with the inscription of "*Sakyō-shiki*" was recovered from the site of the East Third Ward on Sixth Street. In addition, the site was situated in the area of East Capital (*Sakyō*). It is probable the site was used for the "*Sakyō-shiki*". From the beginning to the end of the Fujiwara period, the site had continued occupying four *chō* blocks. Therefore we consider that the "*Kyō-shiki*" had been placed on the site by AD 701, then the site had been used for the "*Sakyō-shiki*" after that. The change of the building layout from Phases III-B to III-C corresponds to the modification of the facility.

On the other hand, the "*Ukyō-shiki*" was placed on the new location at the West First Ward on Seventh Street. In the early part of the Fujiwara period, the West First Ward on Seventh Street was divided into four *chō* blocks, and it is considered that the southwestern *chō* block was used for a residence of an aristocrat. In the later part of the Fujiwara period, the residence at the southwest was modified into a government office, and it annexed the northwest block at the West First Ward on Seventh Street and the southwest block at the West First Ward on Eighth Street, then it occupied a long area covering more than three *chō* blocks. To secure the land for the "*Ukyō-shiki*", the western parts of the West First Ward on Seventh Street and the West First Ward on Eighth Street were modified accordingly.

In Nara period: It should be noted that there are some pottery with the inscriptions associated with "*Kaguyama*" in the collection of artifacts of the Nara period. The "*Kaguyama*" means the Mt. Kaguyama located in the east of the site. It has been regarded as a sacred mountain and composed the famous "Yamato Triad Mountains", together with Mt. Unebi and Mt. Miminashi. There has been a hypothesis that this site had some association with the facility named "*Kaguyama Shōsō*" (Kaguyama official warehouse) described on the "*Yamato-no-kuni Shōzei-chō*" (the tax list in Yamato Province) in *Tenpyō* 2 (AD 730), and the existence of the building that was possibly a

warehouse may support the hypothesis. In the studies on the "*Yamato-no-kuni Shōzei-chō*", it has been considered that the "*Kaguyama Shōsō*" was situated not in the *Toichi* district but in the *Takaichi* district. The site is just situated on the border between the *Toichi* and *Takaichi* districts. According to the previous studies on the *Engi-shiki*, the book about laws and customs written in the ninth century, and other historical documents associated with the *Kidono-shō* manor in the later eleventh century, it is probable that the site belonged to the *Toichi* district. Therefore, the hypothesis that the site was associated with the "*Kaguyama Shōsō*" needs to be reconsidered. Instead, it is probable that there was another facility named after Mt. Kaguyama, and the pottery with inscriptions of "*Kaguyama*" were derived from it.

In other periods: Our study also clarify the situations of land use in the other periods. In the Kofun period, a number of pottery in the Korean peninsula style were recovered from the pit dwellings. This implies that some immigrants from the Korean peninsula were based in the Asuka region at that time. Although there were a few archaeological features date back to the seventh century at the site, it should be noted that some roof tiles had the same designs as the counterparts in the Kibiike abandoned temple (the Kudara Ōdera temple) erected in the 11th year of Emperor Jomei (AD 639). After the Heian period, the site has gradually blended into the surrounding landscape of rural country.

Perspectives and future issues: The archaeological investigation at the East Third Ward on Sixth Street of the Fujiwara Capital Site produce good results for understanding the past of the site. The study clarified that the archaeological features of the Fujiwara period were associated with the "*Sakyō-shiki*". This is a new clue to understand the status of government facilities in the Fujiwara Capital. Especially, it is an important result to clarify the layout of the buildings in the government office, since there have been previously a few evidences to reconstruct the plan of the government offices. In addition, the study also shows that some important facilities were positioned around the palace. Especially, it is an important finding that both "*Sakyō-shiki*" and "*Ukyō-shiki*" occupied large areas, for understanding the situation of government offices in the Fujiwara Capital. However, there still have been a less investigations conducted on the Fujiwara Capital,

comparing to the other sites of the ancient capitals. Therefore, a full understanding of the Fujiwara Capital, the first full-fledged Chinese-style capital in Japan, awaits further investigations.

奈良文化财研究所　学报　第94冊

飞鸟・藤原宫发掘调查报告Ⅴ

藤原京左京六条三坊的发掘调查

2017

奈良文化财研究所

飞鸟·藤原宫发掘调查报告Ⅴ

——藤原京左京六条三坊的发掘调查——

目　　录

第Ⅰ章　序　　言……1

1　藤原京概括……1

A　藤原京的历史沿革……1　　B　藤原京的条坊名称……3

2　发掘调查经过……6

3　发掘调查组织……9

4　报告书编写……9

第Ⅱ章　发掘调查概述……12

1　发掘调查地点……12

A　位置与环境……12　　B　发掘区域划分与测量……19

2　发掘调查概述……22

A　第45次发掘调查……22　　E　第53次发掘调查……24

B　第46次发掘调查……22　　F　第133-7·13次发掘调查……25

C　第47次发掘调查……23　　G　相关发掘调查……25

D　第50次发掘调查……24

3　发掘日志摘抄……26

A　第45次发掘调查……26　　E　第53次发掘调查……43

B　第46次发掘调查……29　　F　第133-7次发掘调查……45

C　第47次发掘调查……35　　G　第133-13次发掘调查……45

D　第50次发掘调查……39

第Ⅲ章　遗　　址……46

1　遗址的布局与地形……46

2　遗迹概述……48

A　藤原京期的遗迹……49　　C　兴建藤原京之前的遗迹……74

B　奈良时代的遗迹……71　　D　平安时代－中世纪的遗迹……83

第Ⅳ章　遗　　物……96
1　瓦砖类……96
A　檐头瓦……96
B　构件瓦与戳印瓦等……114
C　筒瓦与板瓦……122
D　砖　佛……176
2　陶器与陶制品……180
A　东西大沟SD4130·水井SE4740出土陶器……181
B　路沟与其他土沟出土陶器……206
C　水井与灰坑出土陶器……218
D　房屋建筑与墙栅出土陶器……228
E　兴建藤原京之前的陶器与中世纪陶器……233
F　陶砚与特殊陶制品……242
G　墨书与刻字陶器……253
H　墨书“香山”及其字形……256
3　木制品……261
A　东西大沟SD4130出土木制品……261
B　水井SE4740出土木制品……284
C　其他遗迹与熟土层出土木制品……292
D　中世纪水井出土圆桶……297
E　建筑构件与水井构件……300
4　金属器与铜钱……313
A　金属器……313
B　铜　钱……318
5　石制品、铸造工艺遗物与石器……321
A　石制品与铸造工艺遗物……321
B　石　器……328
6　木　　简……329
第Ⅴ章　自然科学分析……332
1　动物遗存……332
2　植物遗存……333
A　分析结果……333
B　考　察……334
3　木制品树种调查……338
4　金属器、铜钱与砖佛的分析……342
第Ⅵ章　总　　结……356
1　遗　　迹……356
A　遗迹变迁……356
B　藤原京域内的官衙……370

2　陶　　器……379

A　关于大沟SD4130与水井SE4740出土陶器的研讨…… 379

B　从陶砚试论发掘调查地点的性质分析 ……385

C　古坟时代的陶器 ……389

3　瓦 砖 类 ……393

4　从文字资料看的发掘调查地点性格分析 ……400

A　关于“香山正仓”的考察…… 400

B　关于“香具山宫”的考察…… 406

C　关于“左京职”的考察 ……409

5　藤原京的发掘调查……418

A　藤原京的占地规模…… 418

B　关于右京七条一坊西南坪的考察…… 437

C　藤原京的真实情况 ……444

6　结　　语……452

A　遗　迹…… 452

B　遗　物…… 453

C　发掘调查地点的性质……454

补　语　都城发掘调查部（飞鸟·藤原地区）办公楼与收藏库的建设……456

1　地基选定……456

2　土质调查……456

3　设计与施工 ……457

A　建设经过 …… 457

B　设计基本方针与结构 …… 458

C　各栋楼的概要 ……459

4　藤原宫址资料室的展示与露天遗迹表示 ……460

别　　图……463

别　　表……473

英文堤要……495

中文提要……525

韩文提要……543

出土木简解释……卷末

插图目录

Fig.

1 藤原京·平城京对照图 ……4
2 大藤原京域与发掘调查地点 ……5
3 周边遗址 ……16
4 第54-1次发掘调查地点出土木简 ……17
5 左京六条三坊发掘调查位置图 ……18
6 发掘调查地点与发掘区域划分 ……20
7 第45次发掘调查Ⅰ区·Ⅲ区·中央区…26
8 发掘调查情景（第45次）……27
9 水井SE4031的发掘调查情景 ……27
10 第45次发掘调查Ⅱ区（西区）·Ⅳ区 ….28
11 第45次发掘调查Ⅱ区（东区）……29
12 第46次发掘调查区 ……30
13 发掘调查情景（第46次）……31
14 发掘调查情景（第45次）……31
15 现场说明会（第46次）……32
16 现场说明会（第46次）……32
17 标定点设定情景（第46次）……33
18 航摄情景（第46次）……33
19 水井SE4468发掘调查情景 ……34
20 水井SE4469发掘调查情景 ……34
21 第47次发掘调查区 ……35
22 摄影情景（第47次）……36
23 发掘调查情景（第47次）……36
24 标定点设定情景（第47次）……37
25 工地参观（第47次）……37
26 剖面图绘制情景（第47次）……38
27 水井SE4740发掘调查情景 ……38
28 第50次发掘调查 西区 ……39
29 发掘调查情景（第50次）……40
30 发掘调查情景（第50次）……40
31 文化厅厅长到访（第50次）……41
32 第50次发掘调查 东区 ……41
33 现场说明会（第50次）……42
34 现场说明会（第50次）……42
35 土沟SD4143的发掘调查情景 ……43
36 第53次发掘调查区 ……43

Fig.

37 水井SE5940的发掘调查情景 ……44
38 发掘调查情景（第53次）……44
39 第133-7·13次发掘调查区……45
40 左京六条三坊周边地形图 ……46
41 发掘调查区与周边地势……47
42 土沟SD4139和4311的剖面图 ……49
43 土沟SD4143的剖面图 ……51
44 水井SE10175平面图及剖面图 ……54
45 土沟SD4255的瓦出土状况 ……55
46 墙垣SA4283和4990的柱洞平面图及剖面图……56
47 墙垣SA4286柱洞平面图及剖面图 ……57
48 建筑遗迹SB4726和墙垣SA4730的柱洞平面图及剖面图……58
49 建筑遗迹SB5000和4332的柱洞平面图及剖面图 ……60
50 建筑遗迹SB4340和4330的柱洞平面图及剖面图 ……62
51 灰坑SK4325和水井SE4335的平面图及剖面图 ……64
52 水井SE4740的剖面图 ……65
53 水井SE4740和同开珧出土状况略图 ….65
54 水井SE4740的平面图及剖面图 ……66
55 大沟SD4130剖面图 ……67
56 土沟SD4131和不明遗迹SX4133及4134的平面图……69
57 水井SE5950的平面图及剖面图 ……70
58 建筑遗迹SB5050的柱洞平面图及剖面图……74
59 埋藏陶器遗迹SJ4260的平面图及剖面图……76
60 NR4225的推定流域与周边的半地下式房屋 ……77
61 半地下式房屋SI4231和4232的平面图及剖面图……79
62 半地下式房屋SI4233的平面图及剖面图……80
63 半地下式房屋SI4234和4235的平面图及剖面图 ……81
64 半地下式房屋SI4236的平面图及剖面图……82

Fig.

65 水井SE4466·4467·4468的平面图及剖面图……87
66 水井SE4474的平面图及剖面图……89
67 建筑遗迹SB4405的柱洞平面图及剖面图……89
68 土沟SD4745·4755·4743的剖面图…91
69 水井SE5940的平面图及剖面图……93
70 灰坑SK5015的剖面图……95
71 檐头筒瓦1A型式……97
72 檐头筒瓦1B型式……99
73 檐头筒瓦2～5E型式…… 101
74 檐头筒瓦5F～7型式…… 103
75 檐头筒瓦8型式…… 104
76 檐头板瓦1A型式…… 106
77 檐头板瓦1B型式…… 107
78 檐头板瓦2型式…… 109
79 檐头板瓦3～6型式…… 111
80 檐头板瓦7～9型式…… 113
81 脊瓦（当沟瓦）…… 115
82 脊瓦（压当条）·陶管…… 116
83 截角板瓦…… 117
84 砖·戳印瓦·瓦圆盘…… 119
85 中世纪脊瓦（冠瓦）…… 121
86 中世纪脊瓦（当沟瓦·压当条）…… 123
87 中世纪截角板瓦·戳印瓦·不明构件瓦…… 124
88 筒瓦Ⅰ类B1～D1…… 126
89 筒瓦Ⅰ类D2…… 127
90 筒瓦Ⅱ类窄头的形状四种…… 128
91 筒瓦Ⅱ类窄头ア…… 129
92 筒瓦Ⅱ类窄头イ…… 130
93 筒瓦Ⅱ类窄头ウ…… 131
94 筒瓦Ⅱ类窄头エ…… 133
95 筒瓦Ⅲ类D…… 134
96 板瓦Ⅰ类A…… 137
97 板瓦Ⅰ类B（1）…… 139
98 板瓦Ⅰ类B（2）…… 141
99 板瓦Ⅰ类B（3）…… 143
100 板瓦Ⅰ类B（4）…… 145

Fig.

101 板瓦Ⅰ类C（1）…… 146
102 板瓦Ⅰ类C（2）…… 147
103 板瓦Ⅰ类C（3）…… 149
104 板瓦Ⅰ类C（4）…… 151
105 板瓦Ⅰ类D（1）…… 153
106 板瓦Ⅰ类D（2）…… 154
107 板瓦Ⅰ类E…… 155
108 板瓦Ⅱ类（1）…… 157
109 板瓦Ⅱ类（2）…… 158
110 板瓦Ⅱ类（3）…… 159
111 板瓦Ⅱ类（4）…… 160
112 板瓦Ⅱ类（5）…… 161
113 板瓦Ⅱ类（6）…… 162
114 板瓦Ⅱ类（7）…… 163
115 板瓦Ⅱ类（8）…… 165
116 板瓦Ⅲ类…… 166
117 中世纪筒瓦ⅰ类（1）…… 168
118 中世纪筒瓦ⅰ类（2）…… 169
119 中世纪筒瓦ⅰ类凹面的绳子痕迹示意图…… 170
120 中世纪筒瓦ⅱ类（1）…… 171
121 中世纪筒瓦ⅱ类（2）…… 172
122 中世纪板瓦ⅰ类（1）…… 173
123 中世纪板瓦ⅰ类（2）…… 174
124 中世纪板瓦ⅰ类（3）·ⅱ类…… 175
125 藤原宫出土方形三尊砖佛B…… 176
126 须惠器杯B蓋和杯G蓋的测点…… 180
127 土沟SD4131和4132出土陶器…… 211
128 土沟SD4135出土陶器…… 213
129 土沟SD4143出土陶器…… 215
130 其他土沟出土陶器…… 217
131 灰坑SK4327出土陶器…… 223
132 灰坑SK4265出土陶器…… 225
133 灰坑SK4271出土陶器…… 226
134 灰坑SK4266·4365·埋藏陶器遗迹SJ4260出土陶器…… 227
135 柱洞式建筑物出土陶器…… 231
136 柱洞式墙栅出土陶器…… 232
137 绳纹陶器…… 233

Fig.

138 半地下式房屋SI4231和4233出土陶器 …… 235
139 半地下式房屋SI4230・4232・4234出土陶器 …… 237
140 半地下式房屋SI4235和4236出土陶器 …… 239
141 韩式系陶器 …… 240
142 埋藏陶器遗迹SJ5007陶器出土状况… 241
143 绿釉兽脚砚 …… 243
144 法隆寺献纳宝物金铜小幡和绿釉兽脚砚…… 244
145 定型砚 …… 247
146 转用砚 …… 248
147 陶马Ⅰ型式 …… 249
148 陶马Ⅱ・Ⅲ型式 …… 250
149 小型模型陶器…… 251
150 制盐陶器…… 252
151 “香山”的代表性例子…… 257
152 “香山”的字形 …… 258
153 大沟SD4130中层出土木制品（1）…… 261
154 大沟SD4130中层出土木制品（2）…… 262
155 大沟SD4130中层出土木制品（3）…… 263
156 大沟SD4130中层出土木制品（4）…… 264
157 大沟SD4130中层出土木制品（5）…… 265
158 大沟SD4130中层出土木制品（6）…… 266
159 大沟SD4130中层出土木制品（7）…… 267
160 大沟SD4130中层出土木制品（8）…… 269
161 大沟SD4130中层出土木制品（9）…… 271
162 大沟SD4130中层出土木制品（10）… 272
163 大沟SD4130中层出土木制品（11）… 273
164 大沟SD4130中层出土木制品（12）… 275
165 大沟SD4130中层出土木制品（13）… 276
166 大沟SD4130中层出土木制品（14）… 277
167 大沟SD4130中层出土木制品（15）… 278
168 大沟SD4130上层出土木制品（1）…… 279
169 大沟SD4130上层出土木制品（2）…… 280
170 大沟SD4130上层出土木制品（3）…… 281
171 大沟SD4130上层出土木制品（4）…… 282
172 大沟SD4130上层出土木制品（5）…… 283

Fig.

173 水井SE4740最下层・下层出土木制品…… 285
174 水井SE4740下层出土木制品（1）…… 286
175 水井SE4740下层出土木制品（2）…… 287
176 水井SE4740中层出土木制品 …… 288
177 水井SE4740上层出土木制品（1）…… 289
178 水井SE4740上层出土木制品（2）…… 290
179 水井SE4740上层出土木制品（3）…… 291
180 建筑遗迹SB4332和4737出土木制品… 292
181 灰坑SK4325出土木制品 …… 292
182 水井SE4790出土漆制品 …… 293
183 水井SE4790出土木制品 …… 294
184 中世纪水井出土木制品（1）…… 295
185 中世纪水井（2）・文化层出土木制品 …… 296
186 中世纪水井出土木制品（3）…… 297
187 水井SE4177和4468出土木盒 …… 298
188 水井SE5001和4464出土木盒 …… 299
189 墙垣SA4730出土柱子上的栈眼…… 300
190 建筑遗迹SB4445出土柱子底面的加工痕迹 …… 300
191 墙垣SA4730和建筑遗迹SB5000出土木材 …… 301
192 建筑遗迹SB4330・4331・4332・4445・4738・5050出土木材 …… 303
193 西北角柱子的新榫眼和横向栈木的压痕 …… 304
194 东北角柱子的旧榫眼 …… 304
195 东南角柱子的旧榫头 …… 304
196 水井SE4740隅角柱子（1）…… 305
197 水井SE4740隅角柱子（2）…… 306
198 北侧横向栈木的方榫头…… 307
199 南侧横向栈木的方榫头…… 307
200 水井SE4740的横向栈木 …… 308
201 水井SE4740的横向木板（1）…… 309
202 水井SE4740的横向木板（2）…… 310
203 水井SE4740的横向木板（3）…… 311
204 铁制品（1）…… 314
205 鉄制品（2）…… 315
206 鉄制品（3）…… 316

Fig.

207 铜制品 …… 317
208 无文银钱 …… 318
209 货币的测点 …… 319
210 石制品（1）…… 321
211 石制品（2）…… 322
212 石制品（3）…… 323
213 石制品（4）…… 324
214 铸造相关遗物（1）…… 325
215 铸造相关遗物（2）…… 326
216 卵石 …… 327
217 石器 …… 328
218 桃核 …… 336
219 种实的分类群 …… 337
220 棒状金铜制品和显微镜照片 …… 342
221 铜镜X光图像 …… 343
222 无文银钱中心孔边缘显微镜照片 …… 344
223 和同开珎X光图像 …… 344
224 和同开珎化学结构（铜－錫－铅）…… 346
225 和同开珎化学结构（铁－铜）…… 346
226 各个资料的化学结构特征 …… 347
227 已报告资料的化学结构特征与钱文 … 347
228 各类型的光谱例 …… 348
229 基于化学结构平均值的各类型特征 … 348
230 中国钱币29和X光图像 …… 349
231 碎片A …… 350
232 碎片A的浮雕凹陷处的白色部分 …… 350
233 碎片A的白色底子上面的褐色物 …… 350
234 碎片A的白色底子上面的褐色物（有光泽）…… 351
235 碎片A背面的浓褐色・褐色附着物（漆）…… 351
236 碎片A的红褐色部分 …… 351
237 碎片A的铜钉前端部分 …… 351
238 碎片A的金箔 …… 351
239 碎片A的铜钉X光图像 …… 351
240 碎片B …… 351
241 碎片B的浮雕凹陷部分的白色底子 … 352
242 碎片B的白色底上面的褐色物 …… 352
243 碎片C …… 352

Fig.

244 碎片C的白色底子 …… 352
245 碎片C的褐色部分 …… 352
246 碎片D …… 353
247 碎片D的胎土和红褐色部分 …… 353
248 碎片D的淡红色部分和白色部分 …… 353
249 碎片E …… 353
250 碎片E的褐色物 …… 353
251 碎片E的红色颜料（朱）和白色底子或白色颜料（铅白）…… 353
252 萤光X线分析结果的一例（碎片A）…… 354
253 碎片A背面的褐色物FT-IR结果 …… 355
254 Ⅰ期遗迹 …… 357
255 Ⅱ期遗迹 …… 357
256 Ⅲ-A期遗迹 …… 359
257 藤原京右京七条一坊西南坪 …… 361
258 Ⅲ-B期遗迹 …… 362
259 藤原京期水井SE4740与平安时代水井SE4467 …… 363
260 Ⅲ-C期遗迹 …… 365
261 Ⅳ期遗迹 …… 367
262 Ⅴ期遗迹 …… 368
263 Ⅵ期遗迹 …… 368
264 平城宫兵部省 …… 370
265 平城京左京五条二坊十四坪 …… 370
266 藤原京左京六条三坊（Ⅲ-C期）・常陆国厅（Ⅲb期）・大宰府政厅（Ⅱ期）…… 372
267 前殿SB4340和周辺柱洞排列SX4342～4349及帐篷 …… 375
268 藤原京左京六条三坊建筑物布局复元图（Ⅲ-B期）…… 376
269 藤原京左京六条三坊建筑物布局复元图（Ⅲ-C期）…… 377
270 SD4130中层及SE4740下层的主要供膳器出土地点和数量 …… 384
271 砚台出土模式 …… 387
272 陶砚出土地分布 …… 388
273 甕口唇部的形态分类 …… 389
274 檐头筒瓦1a和吉備池废寺ⅠA的同一部位比较 …… 393
275 本发掘调查区出土的溶着資料 …… 396

Fig.

276 板瓦分布…… 397
277 筒瓦・板瓦的分布…… 398
278 左京四条三坊东北坪・西北坪遗迹分布图…… 419
279 左京七条一坊遗迹分布图 …… 420
280 右京二条一坊遗迹分布图 …… 421
281 右京二条二坊东北坪・西北坪遗迹分布图…… 422
282 右京十一条二坊东北坪・西北坪遗迹分布图…… 423
283 左京二条三坊西南坪遗迹分布图…… 423
284 左京七条三坊西南坪遗迹分布图…… 424
285 右京一条二坊东北坪遗迹分布图…… 424
286 右京二条三坊东南坪・西南坪・三条三坊东北坪・西北坪遗迹分布图 … 425
287 右京七条一坊・八条一坊东北坪・西北坪遗迹分布图 …… 427
288 左京二条二坊西北坪遗迹分布图…… 428
289 左京七条二坊东南坪遗迹分布图…… 429
290 左京十一条一坊西南坪遗迹分布图 … 429
291 左京十一条二坊西南坪遗迹分布图 … 430
292 右京北五条十坊西南坪遗迹分布图 … 430
293 右京一条一坊遗迹分布图 …… 431
294 右京四条六坊东北坪・东南坪遗迹分布图…… 432
295 右京五条六坊东南坪遗迹分布图…… 433
296 右京六条五坊东北坪遗迹分布图…… 434
297 右京十条四坊西北坪遗迹分布图…… 434
298 右京十条五坊东南坪遗迹分布图…… 435
299 右京十一条三坊东北坪遗迹分布图 … 435
300 左京十一条三坊西南坪遗迹分布图 … 436
301 右京七条一坊西南坪发掘遗迹图…… 439
302 建筑遗迹SB4975 …… 440
303 右京七条一坊西北坪・西南坪・八条一坊西北坪遗迹变迁图（1）… 441
304 右京七条一坊西北坪・西南坪・八条一坊西北坪遗迹变迁图（2）… 442
305 在藤原京的占地 …… 445
306 竣工的新办公楼 …… 457
307 新办公楼的今日布局 …… 459

表目次

Tab.

1 各发掘调查区和测量基点……21
2 发掘调查一览表……25
3 土师器的调整手法 …… 180
4 墨书陶器「香山」等一览表 …… 259
5 大沟SD4130中层出土木棒一览表 …… 274
6 水井SE4790出土筷子一览表 …… 293
7 水井SE4740横向木板树种・制材方法一览表…… 312
8 钱貨計測表…… 319
9 卵石一览表…… 328
10 动物遗存体一览表 …… 332
11 种实签定結果 …… 335
12 木制品的器具和树种…… 341
13 飞鸟・藤原京出土银钱X线蛍光分析結果 …… 344
14 无文银钱与和同开珎定量分析结果（wt%）…… 345
15 中国钱币测定结果（wt%）…… 349
16 砖佛胎土分析结果 …… 354
17 官衙等规模…… 371
18 各遗址出土的陶砚比率 …… 386
19 半地下式房屋出土陶器的各个属性出现频度 …… 390
20 本发掘调查区出土板瓦一览表…… 393
21 主要遗迹出土板瓦 …… 398
22 藤原京占地一览表（右京域）…… 446
23 藤原京占地一览表（左京域）…… 447
24 建筑概要与其结构 …… 458

别图目次

1 水井SE4031·4460·4461·4462平面图及剖面图…… 465

2 水井SE4463·4464·4465平面图及剖面图…… 466

3 水井SE4470·4471·4472·4473·4469平面图及剖面图 …… 467

4 水井SE4739·4765·4790平面图及剖面图…… 468

5 水井SE4782·4793·4980·5001平面图及剖面图…… 469

6 水井SE5010·5022·5023·5055平面图及剖面图…… 470

7 水井SE5060·5065·5076·5095·5920平面图及剖面图 …… 471

别表目次

1 水井一览表…… 475

2 7世纪土师器　器具分类表…… 476

3 7世纪须惠器　器具分类表…… 478

4 7世纪陶器的大致分类…… 480

5 大沟SD4130出土陶器类型组成 …… 481

6 水井SE4740出土陶器类型组成…… 483

7 大沟SD4130和SE4740出土陶器一览表…… 484

8 墨书陶器一览表…… 487

9 大型种实测量值…… 489

10 大沟SD4130出土木器树种一览表 …… 491

11 水井SE4740等出土木器树种一览表 …… 492

12 建筑构件树种一览 …… 493

图版目次

Pl.

1 平面图划分

2 6AJC-N·6AJD-H区实测图

3 6AJC-N·6AJD-H·5AJC-M·N区实测图

4 6AJC-F·N·6AJD-A·H·5AJC-E·F·M区实测图

5 6AJC-F·6AJD-A区实测图

6 6AJC-N·6AJD-H·J区实测图 1

7 6AJC-N·6AJD-H·J区实测图 2

8 6AJC-F·N·6AJD-A·B·H·J区和域实测图

9 6AJC-F·6AJD-A·B区实测图

10 6AJD-H·J区实测图 1

11 6AJD-H·J区实测图 2

12 砖佛实测图 1

13 砖佛实测图 2

Pl.

14 大沟SD4130下层出土土师器（软质红陶）实测图

15 大沟SD4130下层出土须惠器（硬质灰陶）实测图 1

16 大沟SD4130下层出土须惠器实测图 2

17 大沟SD4130中层出土土师器实测图 1

18 大沟SD4130中层出土土师器实测图 2

19 大沟SD4130中层出土土师器实测图 3

20 大沟SD4130中层出土土师器实测图 4

21 大沟SD4130中层出土土师器实测图 5

22 大沟SD4130中层出土须惠器实测图 1

23 大沟SD4130中层出土须惠器实测图 2

24 大沟SD4130中层出土须惠器实测图 3

25 大沟SD4130中层出土须惠器实测图 4

26 大沟SD4130中层出土须惠器实测图 5

27 大沟SD4130上层出土陶器实测图 1

Pl.

28 大沟SD4130上层出土陶器实测图 2
29 大沟SD4130上层出土陶器实测图 3
30 水井SE4740出土陶器实测图 1
31 水井SE4740出土陶器实测图 2
32 六条条间路・东三坊坊间路侧沟出土陶器实测图
33 水井SE5950和4335出土陶器实测图
34 SK4325出土陶器实测图
35 中世纪陶器和陶瓷器实测图
36 大沟SD4130下层及中层出土墨书陶器实测图 1
37 大沟SD4130中层出土墨书陶器实测图 2

Pl.

38 大沟SD4130中层出土墨书陶器实测图 3
39 大沟SD4130中层出土墨书陶器实测图 4
40 大沟SD4130上层出土墨书陶器实测图
41 大沟SD4130下层及中层出土墨书・刻字・戳印陶器实测图
42 水井SE4740最下层及下层出土墨书陶器实测图 1
43 水井SE4740下层出土墨书陶器实测图 2
44 水井SE4740下层出土墨书陶器实测图 3
45 水井SE4740中层出土墨书陶器实测图 1
46 水井SE4740中层出土 2及水井SE4740周围出土墨书陶器实测图

写真目次

Ph.

1 遗址周边与藤原京条坊
2 遗址远景
3 遗址全景与发掘调查区
4 第45次发掘调查区 1
5 第45次发掘调查区 2
6 第45次发掘调查区 3
7 第45次发掘调查区 4
8 第45次发掘调查区 5
9 第45次发掘调查区 6
10 第45次发掘调查区 7
11 第46次发掘调查区 1
12 第46次发掘调查区 2
13 第46次发掘调查区 3
14 第46次发掘调查区 4
15 第46次发掘调查区 5
16 第46次发掘调查区 6
17 第46次发掘调查区 7
18 第46次发掘调查区 8
19 第46次发掘调查区 9
20 第46次发掘调查区 10
21 第47次发掘调查区 1
22 第47次发掘调查区 2

Ph.

23 第47次发掘调查区 3
24 第47次发掘调查区 4
25 第47次发掘调查区 5
26 第47次发掘调查区 6
27 第47次发掘调查区 7
28 第47次发掘调查区 8
29 第50次西发掘调查区 1
30 第50次西发掘调查区 2
31 第50次西发掘调查区 3
32 第50次西发掘调查区 4
33 第50次西发掘调查区 5
34 第50次西发掘调查区 6
35 第50次東发掘调查区 1
36 第50次東发掘调查区 2
37 第50次東发掘调查区 3
38 第53次北发掘调查区 1
39 第53次北发掘调查区 2
40 第53次中发掘调查区 1
41 第53次中发掘调查区 2
42 第53次北・中・南发掘调查区
43 第133-7・13次发掘调查区
44 半地下式房屋 1

Ph.

45 半地下式房屋 2
46 平安時代～中世紀的水井 1
47 平安時代～中世紀的水井 2
48 平安時代～中世紀的水井 3
49 平安時代～中世紀的水井 4
50 平安時代～中世紀的水井 5
51 平安時代～中世紀的水井 6
52 檐头筒瓦１A型式
53 檐头筒瓦１B～４型式
54 檐头筒瓦５・７型式
55 檐头筒瓦６・８型式
56 檐头板瓦１・２型式
57 檐头板瓦３～９型式
58 古代构件瓦・戳印瓦
59 中世纪构件瓦１（脊头瓦・曲背檐头瓦・盖脊板瓦）
60 中世纪构件瓦２（其他）・戳印瓦
61 筒瓦Ⅰ类・Ⅱ类１（窄头ア）
62 筒瓦Ⅱ类２（窄头イ・ウ・エ）
63 筒瓦Ⅲ类（D）・筒瓦拍子痕迹细部
64 板瓦Ⅰ类１（A・B）
65 板瓦Ⅰ类２（B・C）
66 板瓦Ⅰ类３（C）
67 板瓦Ⅰ类４（C・E）
68 板瓦Ⅱ类１（SK4160・SD4255・SD4751・SK4325出土）
69 板瓦Ⅱ类２（SK4325・SD4130・SE4740出土）・Ⅲ类
70 板瓦Ⅰ类拍子痕迹１（A・B1～11）
71 板瓦Ⅰ类拍子痕迹２（B12～26）
72 板瓦Ⅰ类拍子痕迹３（B27～31；C1～10）
73 板瓦Ⅰ类拍子痕迹４（C11～15；D・E）
74 中世纪筒瓦
75 中世纪板瓦
76 大沟SD4130下层及上层出土陶器
77 大沟SD4130中层出土陶器
78 水井SE4740出土陶器
79 水井SE4740最下层及下层出土陶器

Ph.

80 大沟SD4130下层出土土师器・须惠器 1
81 大沟SD4130下层出土须惠器 2
82 大沟SD4130中层出土土师器 1
83 大沟SD4130中层出土土师器 2
84 大沟SD4130中层出土土师器 3
85 大沟SD4130中层出土土师器 4
86 大沟SD4130中层出土须惠器 1
87 大沟SD4130中层出土须惠器 2
88 大沟SD4130中层出土须惠器 3
89 大沟SD4130中层出土须惠器 4
90 大沟SD4130中层出土须惠器 5
91 大沟SD4130中层出土须惠器 6
92 大沟SD4130上层出土土师器
93 大沟SD4130上层出土须惠器
94 水井SE4740最下层出土陶器
95 水井SE4740下层出土土师器 1
96 水井SE4740下层出土土师器 2
97 水井SE4740下层出土土师器 3・须惠器
98 水井SE4740中层・上层出土陶器
99 水井SE4740中层出土土师器 1
100 水井SE4740中层出土土师器 2和上层及周围出土陶器
101 土沟SD4132・4139・4311出土陶器
102 土沟SD4131出土陶器
103 土沟SD4135出土陶器
104 土沟SD4129・4143・4179・4255・4357出土陶器
105 水井SE5950和SK4325出土陶器
106 灰坑SK4325出土陶器
107 水井SE4335出土陶器
108 灰坑SK4327出土陶器
109 灰坑SK4265・4266・4271・4365・埋藏陶器遗迹SJ4260出土陶器
110 半地下式房屋SI4230・4231・4233出土陶器
111 半地下式房屋SI4232和4234出土陶器
112 半地下式房屋SI4235和4236出土陶器
113 韩式陶器和绳纹陶器

Ph.

114 水井SE4790・埋藏陶器遺迹SJ5007・5029出土陶器
115 大沟SD4130下层及中层出土墨书陶器 1
116 大沟SD4130中层出土墨书陶器 2
117 大沟SD4130中层出土3和上层・水井SE5020和5950出土墨书陶器
118 水井SE4740下层出土墨书陶器 1
119 水井SE4740最下层・下层出土 2・中层及SE4740周围出土墨书陶器
120 大沟SD4130和4311及其他遗迹出土刻字・戳印陶器
121 大沟SD4130出土刻字陶器 1
122 大沟SD4130出土刻字陶器 2
123 水井SE4740出土刻字陶器
124 绿釉兽脚砚台
125 砚台
126 陶马
127 大沟SD4130中层出土木制品 1
128 大沟SD4130中层出土木制品 2
129 大沟SD4130中层出土木制品 3
130 大沟SD4130中层出土木制品 4
131 大沟SD4130中层出土木制品 5
132 大沟SD4130中层出土木制品 6
133 大沟SD4130中层出土木制品 7
134 大沟SD4130中层出土木制品 8
135 大沟SD4130中层出土木制品 9
136 大沟SD4130中层出土木制品 10
137 大沟SD4130中层出土木制品 11
138 大沟SD4130上层出土木制品 1
139 大沟SD4130上层出土木制品 2
140 大沟SD4130上层出土木制品 3
141 水井SE4740最下层和下层出土木制品 1

Ph.

142 水井SE4740下层出土木制品 2
143 水井SE4740中层和上层出土木制品 1
144 水井SE4740上层出土木制品 2
145 水井SE4740上层出土 3・水井SE4790・4782出土木制品
146 其他水井・文化层出土木制品 1
147 其他水井・文化层出土木制品 2
148 中世纪水井出土木盒
149 柱子・基础木板
150 水井SE4740隅角柱子 1
151 水井SE4740隅角柱子 2
152 水井SE4740横向栈木
153 水井SE4740横向木板 1
154 水井SE4740横向木板 2
155 铁制品1
156 铁制品2・铜制品 1
157 铁制品3・铜制品 2
158 货币 1
159 货币 2
160 货币 3
161 货币 4
162 石制品1和石器
163 石制品2和铸造相关遗物
164 木简 1
165 木简 2
166 树种显微镜照片 1
167 树种显微镜照片 2
168 树种显微镜照片 3
169 树种显微镜照片 4
170 钱币的X光图像
171 整修状况

附　图

1 藤原京左京六条三坊发掘遗迹分布图
2 藤原京内占地状况图

Ⅰ 前　言

本书为奈良国立文化财研究所(2001年更名为奈良文化财研究所)飞鸟藤原宫遗址发掘调查部(2006年更名为都城发掘调查部)研究楼重建时，根据其所在地奈良县橿原市木之本町的藤原京左京六条三坊实施发掘结果所编制报告书。发掘自1985年4月－1987年5月共实施了5次，2004年实施了2次小规模发掘，发掘面积达17000平方米。

Ⅱ 藤原京

A 藤原京的沿革

藤原京指的是边长约1公里的正方形状藤原宫和在其外围根据条坊制建设的区域，是日本最早中国式都城。中央南北干道朱雀大路为中轴线，东侧为左京，西侧为右京。街区的最小划分单位为坪，边长约130米的正方形区域，一坊为边长半里(265米)的正方形区域，由四坪(四町)构成。城内不仅有宅地、寺院、官署林立之外，还规定把宅地细分为四町到四分之一町，并按照阶层分配。每坊均以“林坊”等学唐长安城的固有名词来起名，但今日无法查明其全貌，只能根据所面向的道路来称呼左京六条三坊等。

据≪日本书纪≫记载，天武5年(676)，身在飞鸟净御原宫的天武天皇，试图修建新城而未实现。直到682年又重新开始修建，而因686年的天皇逝世工程又被中断。持统天皇继位之后，公元690年工程重启，694年迁至藤原京。其后的16年，直到和铜3年(710)迁至平城京为止，藤原京一直为日本首都。

通过发掘发现，有关藤原京修建年代的鲜为人知的事实。藤原京修建初期，因为藤原宫的位置还没有确定，所以对全城实施了条坊制规划，藤原宫内的条坊道路两侧也挖掘了侧沟(先行条坊规划)。等藤原宫的位置确定之后，填回了按照先行规划挖掘的侧沟，并重建了搬运建筑材料的运河。从运河出土了推定为天武11年(682)至同14年(685)的木简，表示此时藤原宫已正式开工。680年开建的本药师寺金堂，最晚688年已建成。整个寺院整齐地座落在右京八条三坊地段内。从修建寺院的整地土层下面发现，西三坊坊间路和坪内住宅地的墙垣及建筑物，说明本药师寺开建时，藤原京已正式开工。根据本次调查推定，676年的新城修建并不是虚体的，而是在很大的范围内工程有了进展。此外，本药师寺的西三坊坊间路跟藤原宫内的先行条房规划具有同样的性质，迁都之前被回填。从上所述，京内所出条坊道路未必具有实用功能，而是迁都初期开始，这种规划区域或早已占据了多数坪的大面积土地。

B 藤原京的规模

根据1966年至1968年的发掘结果，岸俊男复原了藤原京。根据大和古道， 岸俊男将

东之中道，西之下道，北之横大路，南之阿部山田道为东西北南边界，把藤原京复原成南北12条东西8坊规模，其后的长时间岸俊男的解释成了学界的普遍看法。直到1979年，在岸俊男的复原范围外相继发现了条坊道路，使各种各样的“大藤原京”复原方案问世。1996年发现了相当于藤原京西边界和东边界的T字形条坊道路，便确定了藤原京的规模为10坊。如今有方案提出，应把藤原京的范围定为10条10坊。宫(宫城和皇城)通常在京北，而在“大藤原京”，宫在中央。

Ⅲ 遗　　迹

通过左京六条三坊约17000平方米的发掘，发现了古坟时代到中世纪的多数遗迹。出土遗迹主要有2条条坊道路，83座掘立柱建筑物(柱洞式建筑物)，8座半地下式房屋，45条掘立柱墙垣，38口水井，37条土沟，4处陶器埋藏坑等。这些遗迹主要建于藤原京时期，其后的奈良时代(710-784年)也有序开展了工程。本书把5世纪为中心的古坟时代划分为Ⅰ期，7世纪藤原京兴建之前为Ⅱ期，包括兴建期的藤原京时期再细分至以下Ⅲ期，迁都之前的兴建期；迁都后的早期和晚期；并将各个时期标注成Ⅲ-A期、Ⅲ-B期、Ⅲ-C期，同时把奈良时代(8世纪)标注成Ⅳ期，平安时代早期至中期(10-11世纪左右)为Ⅴ期，平安时代晚期以后为(12世纪以后)Ⅵ期。

Ⅰ期遗迹在发掘区中央有一条自然流路，从南往北蜿蜒流淌，两岸散在几座半地下式房屋。Ⅱ期遗迹为发掘区东段的南北大沟SD4143和西侧掘立柱房屋群，以较大规模房屋为中心聚集而成。

在Ⅲ期(藤原京时期)，发掘区相当于藤原京左京六条三坊。此处邻接藤原宫东侧，南邻通往藤原宫南六条大路，北邻自藤原宫东面南门延伸而来的五条大路，亦是藤原京一级地段。到了Ⅲ-A期，左京六条三坊因六条条间路和东三坊坊间路被分成东北坪，东南坪，西北坪，西南坪4坪。其中东北坪和东南坪的形状相对明确。东北坪呈东西分割的形状，西侧被墙垣围住。坪南墙垣中央设了门，坪内房屋有序排列，看似公共设施。东南坪则被南北分割之后，呈占据二分之一町的形状，跟东北坪西段同样曾被规划利用过。Ⅲ-B期，在左京六条三坊中央修建了大规模东西朝向建筑物SB5000，占地面积也从一町扩大到四町。从SB5000的位置和规模来看，条坊中轴线上没有比其更大的建筑物，推定它本身就是主殿。SB5000的东侧有南北墙，将城区分成内外郭。内郭主殿的东南侧设置了南北朝向的侧殿，隔着主殿的正对面，未经发掘的西南侧也曾设置了侧殿，三座建筑物形成品字状。主殿的东北侧有东西朝向的房屋，在其东北侧还有一座东西朝向的房屋，从整齐的布局来看，显然这些房屋曾经是个左右对称的建筑物。主殿南面的前庭设有临时性房屋，用于祭祀活动。此外，朝西挖掘了接通南北大沟的东西大沟SD4130，并开凿了大规模水井SE4740。Ⅲ-C期接着Ⅲ-B期占据四町地，扩大了内郭规模。内郭在主殿的东侧

设置了东西朝向的建筑物，东南侧并排布置了2座南北朝向的侧殿。主殿的西侧也做出了同样的房屋布局，比Ⅲ-B期品字格局扩大，主殿的南侧也增设了前殿。

Ⅳ期为奈良时代，保留了以大沟构成的水系。发掘区南侧，在被掘立柱墙垣和土沟划分的区域，东西朝向的主殿和前殿前后并排对齐，发掘区西北角落发现总柱建物结构的仓库。从Ⅳ期的遗迹规模和布局来推定，是跟官署相关的设施。

Ⅴ期的发掘区东段保留南北大沟SD4143，SD4130和SE4740几乎被埋没。发掘区南侧有较大规模的建筑物和与之相配的小房屋。Ⅴ期虽有些较大规模的遗迹，但从性质来看，不属于官署而属于村落。Ⅵ期的土地已被细分，各地挖了水井。发掘区中央部的东西两处发现了中心建筑物及与其配套的房屋、墙垣、土沟和灰坑等集聚处，经发掘确认曾被多次重建。镰仓时代以后的遗迹在发掘区西北部，由环状挖的壕沟围绕，围壕里面有几口水井和东西朝向的建筑物。因出土瓦件多数，推定曾经有了寺院神社。壕沟出土了14世纪晚期的遗物，显然此时已形成了今日村落。

Ⅳ 遗　　物

东西大沟SD4130和与此南邻的水井SE4740为中心，出土了瓦砖类、陶器、土制品、木制品、金属制品和木简等众多遗物。

瓦砖类　出土了古代到中世纪檐头筒瓦17种121件，檐头板瓦25种84件等多种檐头瓦。古代的大部分瓦和大和盆地各地寺院、藤原宫所用瓦是同一个模具烧制的瓦。尤其要关注的是7世纪早期所建吉备池废寺(百济大寺)创建期的瓦，即重圈文缘单弁莲华纹檐头筒瓦和模具压制的忍冬唐草纹檐头板瓦。奈良时代和平安时代的檐头瓦极少。中世纪出土瓦多为镰仓至室町时代的13世纪晚期至14世纪早期以及14世纪中期至晚期的。出土筒瓦重量为966.1公斤，瓦片数量为3860件，板瓦重量为3083.9公斤，瓦片数量为22993件。砖佛是一种在粘土板上压印佛像烧制而成的佛像，发掘区西北部出土了9件方形三尊砖佛的碎片。

陶器·陶制品　绳纹时代至近代，出土了397框(1框：75×47×12厘米)陶器和陶制品，其中多半为SD4130和SE4740出土的7-8世纪土师器(软质红陶)及须惠器(硬质灰陶)，SD4130为藤原京时期至10世纪晚期，SE4740为藤原京时期至10世纪早期。因出土大量废都之后的奈良时代陶器而被关注，尤其陶器种类组合以及食器和其他陶器比率跟官署地点相同，表明发掘地点为奈良时代的公共设施。墨画陶器出土134件，95%以上陶器出至于SD4130和SE4740。记载内容多为“香山”、“香”、“山”等共有22件。

木制品·金属制品·钱币　木制品出土120框(1框：44×28×7厘米)，多半出至于SD4130和SE4740。比如：曲物(弯制薄木板制作的圆盒)，漆器等容器类；纺锤车等纺织工具；梳子等服饰品；琴柱等游戏具；偶人、斋串(又名圭头板，巫术用具)等祭祀用具以及刀把等工具。金属制品有短刀、镰刀、钉子等铁制品之外，还有一些青铜制铜钏、花形装饰品等。钱币出土

46件。其中，无文银钱1件和和同开珎27件出至于SE4740的底层－最底层。

木　简　从SE4740出土呪符木简。SD4130出土28件写有“左京职”、“菜采司”等官署名称的木简及“束”、“把”等水稻相关单位的木简和木制货签。

自然化学分析　从SD4130确认了梅花鹿角、马齿碎片等动物遗存体。中世纪和近代遗迹，包含层出土马、牛、人、乌龟等。出土植物遗存体有杨梅、核桃、梅果、桃子等大核水果，是些食用之后废弃的渣滓。从木制品分析确认，古代的曲物和斋串多用桧木类树种。通过对和同开珎的萤光X线分析明确，成分大体可分为4种，成分跟花纹有关。再从砖佛的附着物分析结果表明，佛像是在白底上面涂漆、涂金箔来装饰的，并且每个体所用颜料也不同。

V　结　　语

最后重新梳理一下，通过这次分析得出的发掘地点性质。

藤原京时期　左京六条三坊的遗迹、房屋布局整齐，且围绕前院，推定为官署。通过对大量陶器分析推定，是一处具有官署性质的设施。从出土木简记载表明，设置官署为左京七条一坊的卫门府(负责藤原宫城十二门警备的部门)和右京七条一坊的右京职(掌管藤原京西半部地区右京的民政部门)。两个部门都邻接在藤原宫，卫门府占了四町地，右京职占了三町地，这一点跟左京六条三坊相同。

藤原京时期中期的701年实施日本最初法令“大宝律令”。随着法令的实施，原本是单独一个部门的京职也被分成左京职和右京职。左京六条三坊出土了记载“左京职”的木简。本发掘地点位于左京区域，表明藤原京时期晚期左京职曾被设于此处。藤原京时期这个区域一直占了四町地，推定701年为止此处为京职，后被改为左京职，伴随部门重组，ⅢB期改编至ⅢC期了。

右京职则需要新的用地，便定于右京七条一坊。右京七条一坊，藤原京时期早期只占了一町地，西南坪为贵族宅邸。藤原京时期晚期，将西南坪的贵族宅邸改为官署，并把北边右京七条一坊西北坪和南边右京八条一坊西北坪合为一体，使右京职占了细长的三町地。通过藤原京西半部的右京七条一坊和右京八条一坊的整顿，确保了右京职的建设用地。

奈良时代　奈良时代的遗物当中，用墨写之“香山”的陶器一直备受关注。香山即香具山，近邻发掘地点东侧，由耳成山，亩傍山一同构成大和三山，作为圣山被受重视。这里发现了仓库，一直被认为跟天平2年(760)大倭国正税帐所记“香山正仓”有关。通过对大倭国正税帐研究，初步推定，香山正仓不在十市郡，而是在高市郡。此次发掘地点在高市郡和十市郡交界附近，所以确定香山正仓的具体位置需要进一步研究。而根据9世纪法律书≪延喜式≫和11世纪晚期的中世纪喜殿荘相关资料推定，发掘地点在很大程度上属于十市郡，并不属于高市郡，因此需要重新考虑，发掘地点和香山正仓的对比解释。发掘地点东侧有座缘于香具山的“香山○○”(○○是设施名称)的设施，它跟香山正仓无关，而用墨写“香山”

的陶器，很有可能跟这个设施有关。

其他时代　调查地点各时期土地利用状况逐渐明显。古坟时代的遗迹和遗物有半地下式住居、多数韩式系陶器等，从中可以窥探到参加飞鸟周边地区开发的渡来人的身影。本发掘地点未出土明确的7世纪早期的遗迹，出土了视为舒明11年(639)所建百济大寺的吉备池废寺所用同样瓦，值得关注两者的关系。平安时代以后开始，这里逐渐变成如今的农村景象。

展望和课题　通过本次对左京六条三坊的发掘和于此相关的一系列分析、考证，取得了众多成果。本次发掘的主要目的为阐明藤原京时期。发掘收获表明，检测出的遗迹群为左京职，这一结果给此前的京内官署的相关资料增加了新的见解。在京内其他官署的资料不完全的情况下，这次能够掌握到建筑物的具体配置，可谓是一个很重要的成果。通过分析更加显明，藤原宫附近曾经展开了大规模设施建设。同时表明相对于左京职、右京职实际上是一个占地广大的官署，这一成果对京内官署的研究提供了宝贵资料。目前，藤原京发掘少于其他都城，今后还需继续发掘研究，有待阐明日本最早中国式都城藤原京的真实面貌。

奈良文化財研究所　学報　第94冊

飛鳥・藤原宮 발굴조사보고　V

藤原京左京六条三坊의 조사

2017

奈良文化財研究所

飛鳥·藤原宮 발굴조사보고 Ⅴ

── 藤原京左京六条三坊의 조사 ──

목 차

제Ⅰ장 서 언 …… 1

1 藤原京에 대하여 …… 1

A 藤原京의 연혁 …… 1
B 藤原京의 조방명칭 …… 3

2 조사 경위 …… 6

3 조사 조직 …… 9

4 보고서의 작성 …… 9

제Ⅱ장 조사 개요 …… 12

1 조사 지역 …… 12

A 위치와 환경 …… 12
B 지구 구획과 측량 …… 19

2 조사 개요 …… 22

A 제45차 조사 …… 22
B 제46차 조사 …… 22
C 제47차 조사 …… 23
D 제50차 조사 …… 24
E 제53차 조사 …… 24
F 제133-7·13차 조사 …… 25
G 관련 조사 …… 25

3 조사 일지 …… 26

A 제45차 조사 …… 26
B 제46차 조사 …… 29
C 제47차 조사 …… 35
D 제50차 조사 …… 39
E 제53차 조사 …… 43
F 제133-7차 조사 …… 45
G 제133-13차 조사 …… 45

제Ⅲ장 유 적 …… 46

1 유적의 입지와 지형 …… 46

2 각 유적의 설명 …… 48

A 藤原京期의 유구 …… 49
B 奈良時代의 유구 …… 71
C 藤原京조영 이전의 유구 …… 74
D 平安時代~중세의 유구 …… 83

제Ⅳ장 유 물 ····· 96
1 와전류 ····· 96
A 막새 ····· 96
B 도구기와 · 각인기와 ····· 114
C 수키와 · 암기와 ····· 122
D 전불 (塼仏) ····· 176
2 토기 · 토제품 ····· 180
A 東西大溝SD4130 · 우물SE4740 출토 토기 ···· 181
B 도로 측구 · 기타 구 출토 토기 ····· 206
C 우물 · 토광 출토 토기 ····· 218
D 건물 · 담 출토 토기 ····· 228
E 藤原京조영 이전의 토기 · 중세의 토기 ····· 233
F 벼루 · 특수토제품 ····· 242
G 흑서 · 각서토기 ····· 253
H 흑서토기「香山」와 글자 형태 ····· 256
3 목제품 ····· 261
A 東西大溝SD4130 출토 목제품 ····· 261
B 우물SE4740 출토 목제품 ···· 284
C 기타유구 · 포함층 출토 목제품 ····· 292
D 중세 우물 출토 목제그릇 ····· 297
E 건축부재 · 우물틀 ····· 300
4 금속제품 · 전화 (銭貨) ····· 313
A 금속제품 ····· 313
B 전화 (銭貨) ····· 318
5 석제품 · 주조관계품 · 석기 ····· 321
A 석제품 · 주조관련품 ····· 321
B 석기 ····· 328
6 목 간 ····· 329

제Ⅴ장 자연과학분석 ····· 332
1 동물유존체 ····· 332
2 식물유존체 ····· 333
A 분석결과 ····· 333
B 고찰 ····· 334
3 목제품의 수종분석 ····· 338
4 금속제품 · 전화 (銭貨) · 전불 (塼仏) 의 분석 ····· 342

제Ⅵ장 총 괄 ····· 356
1 유 구 ····· 356
A 유구의 변천 ····· 356
B 藤原京内의 관아 ····· 370

2 토 기 ……379

A SD4130 · SE4740 출토 토기의 검토 …… 379
B 벼루로 본 조사지의 성격 ……385
C 古墳時代의 토기 ……389

3 와전류 ……393

4 문헌자료로 본 조사지의 성격 ……400

A 香山창고에 관해서 …… 400
B 香具山宮에 관해서 …… 406
C 左京職에 관해서 ……409

5 藤原京의 발굴조사 ……418

A 藤原京의 땅의 공간선택 (占地) …… 418
B 右京七条一坊西南坪에 관해서 ……437
C 藤原京의 실태 ……444

6 결 어 ……452

A 유 구 …… 452
B 유 물 …… 453
C 조사지의 성격 ……454

보 론 都城発掘調査部 (飛鳥藤原地区) 청사 및 수장고의 건설 ……456

1 부지의 선정 ……456

2 토질조사 ……456

3 설계 및 시공 ……457

A 건설의 경과 …… 457
B 설계의 기본 방침과 구조 …· 458
C 각 동의 개요 ……459

4 藤原宮跡資料室의 전시와 옥외유구표시 ……460

별 도 ……463

별 표 ……473

영문 요지 ……495

중문 요지 ……525

한국어 요지 ……543

出土木簡釈文 ……권말

삽 도 목 차

Fig.

1 藤原京 · 平城京 비교대조도 ····· 4
2 大藤原京域과 조사 위치 ····· 5
3 주변 유적 ····· 16
4 제54-1차 조사 출토 목간 ····· 17
5 左京六条三坊 조사 위치도 ····· 18
6 조사지와 지역 구획 ····· 20
7 제45자 조사 Ⅰ구 · Ⅲ구 · 중앙구 ····· 26
8 조사전경 (제45차) ····· 27
9 SE4031 조사전경 ····· 27
10 제45차 조사 Ⅱ구 (서구) · Ⅳ구 ····· 28
11 제45차 조사Ⅱ구 (동구) ····· 29
12 제46차 조사구 ····· 30
13 조사풍경 (제46차) ····· 31
14 조사풍경 (제46차) ····· 31
15 현장설명회 (제46차) ····· 32
16 현장설명회 (제46차) ····· 32
17 표준점 설정풍경 (제46차) ····· 33
18 공중 촬영풍경 (제46차) ····· 33
19 SE4468 조사풍경 ····· 34
20 SE4469 조사풍경 ····· 34
21 제47차 조사구 ····· 35
22 사진 촬영풍경 (제47차) ····· 36
23 조사풍경 (제47차) ····· 36
24 표준점 설정풍경 (제47차) ····· 37
25 단면도 작성풍경 (제47차) ····· 37
26 사진촬영풍경 (제47차) ····· 38
27 SE4740 조사풍경 ····· 38
28 제50차 조사 서구 ····· 39
29 조사풍경 (제50차) ····· 40
30 조사풍경 (제50차) ····· 40
31 문화청장관 내방 (제50차) ····· 41
32 제50차 조사 동구 ····· 41
33 현장설명회 (제50차) ····· 42
34 현장설명회 (제50차) ····· 42
35 SD4143 조사풍경 ····· 43

Fig.

36 제53차 조사구 ····· 43
37 SE5940 조사풍경 ····· 44
38 조사풍경 (제53차) ····· 44
39 제133-7 · 13차 조사구 ····· 45
40 左京六条三坊 주변 지형도 ····· 46
41 조사구와 주변 지역 ····· 47
42 SD4139 · 4311 단면도 ····· 49
43 SD4143 단면도 ····· 51
44 SE10175 평면도 · 단면도 ····· 54
45 SD4255 기와 출토 상황 ····· 55
46 SA4283 · 4990 주혈평면도 · 단면도 ···· 56
47 SA4286 주혈평면도 · 단면도 ····· 57
48 SB4726 · SA4730 주혈평면도 · 단면도 ····· 58
49 SB5000 · 4332 주혈평면도 · 단면도 ···· 60
50 SB4340 · 4330 주혈평면도 · 단면도 ···· 62
51 SK4325 · SE4335 평면도 · 단면도 ····· 64
52 SE4740 단면도 ····· 65
53 SE4740 和同開珎 출토상황 약도 ····· 65
54 SE4740 평면도 · 단면도 ····· 66
55 SD4130 단면도 ····· 67
56 SD4131 · SX4133 · 4134 평면도 ····· 69
57 SE5950 평면도 · 단면도 ····· 70
58 SB5050 주혈평면도 · 단면도 ····· 74
59 SJ4260 평면도 · 단면도 ····· 76
60 NR4225 추정 유역과 주변의 수혈 건물 ····· 77
61 SI4231 · 4232 평면도 · 단면도 ····· 79
62 SI4233 평면도 · 단면도 ····· 80
63 SI4234 · 4235 평면도 · 단면도 ····· 81
64 SI4236 평면도 · 단면도 ····· 82
65 SE4466 · 4467 · 4468 평면도 · 단면도 ····· 87
66 SE4474 평면도 · 단면도 ····· 89
67 SB4405 주혈평면도 · 단면도 ····· 89
68 SD4745 · 4755 · 4743 단면도 ····· 91

Fig.

69 SE5940 평면도 · 단면도 ……93
70 SK5015 단면도 ……95
71 수막새 1A형식 ……97
72 수막새 1B형식 ……99
73 수막새 2～5E형식 ……101
74 수막새 5F～7형식 ……103
75 수막새 8형식 ……104
76 암막새 1A형식 ……106
77 암막새 1B형식 ……107
78 암막새 2형식 ……109
79 암막새 3～6형식 ……111
80 암막새 7～9형식 ……113
81 착고 (面戶瓦) ……115
82 熨斗瓦 (적새) · 토관 ……116
83 隅切 (암기와) ……117
84 벽돌 · 각인기와 · 기와제 원반 ……119
85 중세 雁振瓦 ……121
86 중세 착고 (面戶瓦) · 적새 (熨斗瓦) ····123
87 중세 隅軒瓦 · 刻印瓦 · 不明道具瓦 …124
88 수키와Ⅰ類B1～D1 ……126
89 수키와Ⅰ類D2 ……127
90 수키와Ⅱ類 단부의 굴곡 4종 ……128
91 수키와Ⅱ類 단부 ア ……129
92 수키와Ⅱ類 단부 イ ……130
93 수키와Ⅱ類 단부 ウ ……131
94 수키와Ⅱ類 단부 エ ……133
95 수키와Ⅲ類D ……134
96 암기와Ⅰ類A ……137
97 암기와Ⅰ類B (1) ……139
98 암기와Ⅰ類B (2) ……141
99 암기와Ⅰ類B (3) ……143
100 암기와Ⅰ類B (4) ……145
101 암기와Ⅰ類C (1) ……146
102 암기와Ⅰ類C (2) ……147
103 암기와Ⅰ類C (3) ……149
104 암기와Ⅰ類C (4) ……151
105 암기와Ⅰ類D (1) ……153

Fig.

106 암기와Ⅰ類D (2) ……154
107 암기와Ⅰ類E ……155
108 암기와Ⅱ類 (1) ……157
109 암기와Ⅱ類 (2) ……158
110 암기와Ⅱ類 (3) ……159
111 암기와Ⅱ類 (4) ……160
112 암기와Ⅱ類 (5) ……161
113 암기와Ⅱ類 (6) ……162
114 암기와Ⅱ類 (7) …… 163
115 암기와Ⅱ類 (8) ……165
116 암기와Ⅲ類 ……166
117 중세 수키와 i 類 (1) ……168
118 중세 수키와 i 類 (2) ……169
119 중세 수키와 i 類 凹面의 吊紐 패턴 …170
120 중세 수키와 ii 類 (1) ……171
121 중세 수키와 ii 類 (2) ……172
122 중세 암기와 i 類 (1) ……173
123 중세 암기와 i 類 (2) ……174
124 중세 암기와 i 類 (3) · ii 類 ……175
125 藤原宮출토 방형 삼존전불B ……176
126 須惠器 杯B두껑 · 杯G두껑의 계측점 …180
127 SD4131 · 4132 출토 토기 ……211
128 SD4135 출토 토기 ……213
129 SD4143 출토 토기 ……215
130 기타 구 출토 토기 ……217
131 SK4327 출토 토기 ……223
132 SK4265 출토 토기 ……225
133 SK4271 출토 토기 ……226
134 SK4266 · 4365 · SJ4260 출토 토기 ····227
135 굴립주 건물 출토 토기 ……231
136 굴립주 담 출토 토기 ……232
137 縄文토기 ……233
138 SI4231 · 4233 출토 토기 ……235
139 SI4230 · 4232 · 4234 출토 토기 ……237
140 SI4235 · 4236 출토 토기 ……239
141 한반도계토기 (韓式系土器) ……240
142 SJ5007토기 출토상황 ……241

Fig.

143 녹유수각벼루……243
144 法隆寺 헌납 보물 금동小幡과 녹유수각벼루……244
145 정형 벼루……247
146 전용 벼루……248
147 토마Ⅰ형식……249
148 토마Ⅱ·Ⅲ형식……250
149 소형모조토기……251
150 제염토기……252
151 「香山」의 대표 예……257
152 「香山」의 글자 형태……258
153 SD4130중층 출토 목제품 (1)……261
154 SD4130중층 출토 목제품 (2)……262
155 SD4130중층 출토 목제품 (3)……263
156 SD4130중층 출토 목제품 (4)……264
157 SD4130중층 출토 목제품 (5)……265
158 SD4130중층 출토 목제품 (6)……266
159 SD4130중층 출토 목제품 (7)……267
160 SD4130중층 출토 목제품 (8)……269
161 SD4130중층 출토 목제품 (9)……271
162 SD4130중층 출토 목제품 (10)……272
163 SD4130중층 출토 목제품 (11)……273
164 SD4130중층 출토 목제품 (12)……275
165 SD4130중층 출토 목제품 (13)……276
166 SD4130중층 출토 목제품 (14)……277
167 SD4130중층 출토 목제품 (15)……278
168 SD4130상층 출토 목제품 (1)……279
169 SD4130상층 출토 목제품 (2)……280
170 SD4130상층 출토 목제품 (3)……281
171 SD4130상층 출토 목제품 (4)……282
172 SD4130상층 출토 목제품 (5)……283
173 SE4740최하층·하층 출토 목제품……285
174 SE4740하층 출토 목제품 (1)……286
175 SE4740하층 출토 목제품 (2)……287
176 SE4740중층 출토 목제품……288
177 SE4740상층 출토 목제품 (1)……289
178 SE4740상층 출토 목제품 (2)……290

Fig.

179 SE4740상층 출토 목제품 (3)……291
180 SB4332·4737 출토 목제품……292
181 SK4325 출토 목제품……292
182 SE4790 출토 칠기……293
183 SE4790 출토 목제품……294
184 중세 우물 출토 목제품 (1)……295
185 중세 우물 (2)·포함층 출토 목제품……296
186 중세 우물 출토 목제품 (3)……297
187 SE4177·4468 출토 목제 그릇……298
188 SE5001·4464 출토 목제 그릇……299
189 SA4730 출토 기둥 (柱根) 의 가공 흔적……300
190 SB4445 출토 기둥 (柱根) 의 저면가공흔적……300
191 SA4730·SB5000 출토 부재……301
192 SB4330·4331·4332·4445·4738·5050 출토 부재……303
193 북서 모기둥 新枘구멍과 横桟압흔……304
194 북동 모기둥 旧枘구멍……304
195 남동 모기둥 旧결구부 (仕口)……304
196 SE4740 모기둥 (1)……305
197 SE4740 모기둥 (2)……306
198 北横桟角枘……307
199 南横桟角枘……307
200 SE4740 横桟……308
201 SE4740 횡판 (1)……309
202 SE4740 횡판 (2)……310
203 SE4740 횡판 (3)……311
204 철제품 (1)……314
205 철제품 (2)……315
206 철제품 (3)……316
207 동제품……317
208 무문은전……318
209 전화 (銭貨) 의 계측점……319
210 석제품 (1)……321
211 석제품 (2)……322
212 석제품 (3)……323

Fig.

213 석제품 (4) ·····324
214 주조관련품 (1) ·····325
215 주조관련품 (2) ·····326
216 자갈·····327
217 석기·····328
218 복숭아 씨앗 ·····336
219 씨앗 분류군 ·····337
220 봉상금동제품과 현미경사진·····342
221 동경과 투과X선 화상 ·····343
222 無文銀銭의 혈부분 현미경사진 ·····344
223 和同開珎의 투과X선화상·····344
224 和同開珎의 화학조성 (동－주석－납)
·····346
225 和同開珎의 화학조성 (철－동) ·····346
226 각 자료의 화학 조성 특징·····347
227 기 보고 자료의 화학조성의 특징과
전문·····347
228 각 타입의 스펙트럼 일례·····348
229 화학조성 평균치에 의한 각 타입의
특징·····348
230 중국전29와 투과X선화상 ·····349
231 파편A ·····350
232 파편A衣文凹部의 백색부 ·····350
233 파편A백색하지 위의 갈색물질 ·····351
234 파편A백색하지 위의 갈색물질
(광택有)·····351
235 파편A이면의 농갈색 갈색부물질
(칠)·····350
236 파편A적갈색부 ·····351
237 파편A동못의 선단부 ·····351
238 파편A금박 ·····351
239 파편A동못 투과X선화상·····351
240 파편B ·····351
241 파편B衣文凹部의 백색하지·····352
242 파편B백색하지 상층의 갈색물질·····352
243 파편C ·····352
244 파편C백색하지 ·····352
245 파편C갈색부·····352
246 파편D ·····353

Fig.

247 파편D태도와 적갈색부·····353
248 파편D 당적적색부와 백색부·····353
249 파편E ·····353
250 파편E갈색물질 ·····353
251 파편E적색안료 (주) 와 백색하지
혹은 백색안료 (연백) ·····353
252 형광X선 분석결과의 일례 (파편A) ···354
253 파편A뒷면의 갈색물질FT-IR 결과 ···355
254 Ⅰ기 유적·····357
255 Ⅱ기 유적·····357
256 Ⅲ－A기 유적·····359
257 藤原京右京七条一坊西南坪·····361
258 Ⅲ-B기 유적 ·····362
259 藤原京期의 우물SE4740과
平安時代 우물SE4467·····363
260 Ⅲ-C기 유적 ·····365
261 Ⅳ기 유적·····367
262 Ⅴ기 유적·····368
263 Ⅵ기 유적·····368
264 平城京兵部省·····370
265 平城京左京五条二坊十四坪·····370
266 藤原京左京六条三坊 (Ⅲ-C기)·
常陸国庁 (Ⅲb기)·
太宰府政庁 (Ⅱ기)·····372
267 前殿SB4340및 주변 주혈 예
SX4342～4349와 幄舎·····375
268 藤原京左京六条三坊 건물배치
복원도 (Ⅲ-B기)·····376
269 藤原京左京六条三坊 건물배치
복원도 (Ⅲ-C기)·····377
270 SD4130중층·SE4740하층에서의
주요 공선구 (供膳具) 의 출토
지구와 수량·····384
271 벼루의 출토 패턴 ·····387
272 벼루의 출토지 분포·····388
273 옹 구연부의 형식분류 ·····389
274 수막새1a와 吉備池廃寺ⅠA의
비교 (동일 위치)·····394
275 본 조사구 출토 용착자료·····396
276 막새의 분포 ·····397

Fig.

277 수키와 · 암기와의 분포 ……398
278 左京四条三坊東北坪 · 西北坪 유구배치도 ……419
279 左京七条一坊 유구배치도 ……420
280 右京二条一坊 유구배치도 ……421
281 右京二条二坊東北坪 · 西北坪 유구배치도 ……422
282 右京十一条二坊東北坪 · 西北坪 유구배치도 ……423
283 左京二条三坊西南坪 유구배치도 ……423
284 左京七条三坊西南坪 유구배치도 ……424
285 右京一条二坊東北坪 유구배치도 ……424
286 右京二条三坊東南坪 · 西南坪 · 三条三坊東北坪 · 西北坪 유구배치도 ……425
287 右京七条一坊 · 八条一坊東北坪 · 西北坪 유구배치도 ……427
288 左京二条二坊西北坪 유구배치도 ……428
289 左京七条二坊東南坪 유구배치도 ……429
290 左京十一条一坊西南坪 유구배치도 …429
291 左京十一条二坊西南坪 유구배치도 …430
292 右京北五条十坊西南坪 구배치도 ……430
293 右京一条一坊 유구배치도 ……431
294 右京四条六坊東北坪 · 東南坪 유구 배치도 ……432
295 右京五条六坊東南坪 유구배치도 ……433
296 右京六条五坊東北坪 유구배치도 ……434
297 右京十条四坊西北坪 유구배치도 ……434
298 右京十条五坊東南坪 유구배치도 ……435
299 右京十一条三坊東北坪 유구배치도 …435
300 左京十一条三坊西南坪 유구배치도 …436
301 右京七条一坊西南坪 발굴유구도 ……439
302 SB4975평면도 · 단면도 ……440
303 右京七条一坊西北坪 · 西南坪 · 八条一坊西北坪 유구변천도 (1) …441
304 右京七条一坊西北坪 · 西南坪 · 八条一坊西北坪 유구변천도 (2) …442
305 藤原京의 공간선택 (占地) ……445
306 완성된 신청사 ……457
307 신청사의 현재 건물배치 ……460

표 목 차

Tab.

1 각 조사지구와 기준점 ……21
2 발굴조사 일람 ……25
3 土師器 조정수법 ……180
4 목서토기「香山」등 일람 ……259
5 SD4130중층 출토 가공 봉 일람 ……274
6 SE4790 출토 젓가락 일람 ……293
7 SE4740 횡판 수종 · 製材方法 일람 …312
8 銭貨 計測表 ……319
9 小円礫 일람 ……328
10 동물유존체 일람 ……332
11 씨앗 동정 결과 ……335
12 목제품 기종별 수종 ……341
13 飛鳥 · 藤原京 출토 銀銭의 형광X선 분석 결과 ……344
14 무문은전 및 和同開珎 정량 분석 결과 (wt%) ……345
15 중국전의 측정 결과 (wt%) ……349
16 전불태토분석 결과 ……354
17 관아 등의 규모 ……371
18 각 유구 출토 벼루 비율 ……386
19 수혈건물 출토 토기의 각 속성출현빈도 ……390
20 본 조사구 출토 막새 일람 ……393
21 주요유구 출토 막새 ……398
22 藤原京 공간선택 (占地) 일람 (右京域) ……446
23 藤原京 공간선택 (占地) 일람 (左京域) ……447
24 건축개요와 구조 ……458

별 도 목 차

1 SE4031 · 4460 · 4461 · 4462 평면도 · 단면도……465

2 SE4463 · 4464 · 4465 평면도 · 단면도……466

3 SE4470 · 4471 · 4472 · 4473 · 4469 평면도 · 단면도……467

4 SE4739 · 4765 · 4790 평면도 · 단면도……468

5 SE4782 · 4793 · 4980 · 5001 평면도 · 단면도……469

6 SE5010 · 5022 · 5023 · 5055 평면도 · 단면도……470

7 SE5060 · 5065 · 5076 · 5095 · 5920 평면도 · 단면도……471

별 표 목 차

1 우물 일람……475

2 7세기 土師器 기종 분류표……476

3 7세기 須惠器 기종 분류표……478

4 7세기 토기의 대별……480

5 SD4130 출토 토기 기종구성……481

6 SE4740 출토 토기 기종구성……483

7 SD4130 · SE4740 출토 토기 일람……484

8 목서토기 일람……487

9 대형 씨앗 계측치……489

10 SD4130 출토 목제품 수종 일람……491

11 SE4740타 출토 목제품 수종 일람……492

12 건축부재 수종 일람……493

도 판 목 차

Pl.

1 평면도의 분할

2 6AJC-N · 6AJD-H구 실측도

3 6AJC-N · 6AJD-H · 5AJC-M · N구 실측도

4 6AJC-F · N · 6AJD-A · H · 5AJC-E · F · M구 · F구 실측도

5 6AJC-F · 6AJD-A구 실측도

6 6AJC-N · 6AJD-H · J구 실측도1

7 6AJC-N · 6AJD-H · J구 실측도2

8 6AJC-F · N · 6AJD-A · B · H · J구 실측도

9 6AJC-F · 6AJD-A · B구 실측도

10 6AJD-H · J구 실측도1

11 6AJD-H · J구 실측도2

12 전불 실측도1

13 전불 실측도2

14 SD4130하층 출토 土師器 실측도

15 SD4130하층 출토 須惠器 실측도1

Pl.

16 SD4130하층 출토 須惠器 실측도2

17 SD4130중층 출토 土師器 실측도1

18 SD4130중층 출토 土師器 실측도2

19 SD4130중층 출토 土師器 실측도3

20 SD4130중층 출토 土師器 실측도4

21 SD4130중층 출토 土師器 실측도5

22 SD4130중층 출토 須惠器 실측도1

23 SD4130중층 출토 須惠器 실측도2

24 SD4130중층 출토 須惠器 실측도3

25 SD4130중층 출토 須惠器 실측도4

26 SD4130중층 출토 須惠器 실측도5

27 SD4130상층 출토 토기 실측도1

28 SD4130상층 출토 토기 실측도2

29 SD4130상층 출토 토기 실측도3

30 SE4740 출토 토기 실측도1

31 SE4740 출토 토기 실측도2

Pl.

32 六条条間路 · 東三坊坊間路側溝 출토 토기실측도

33 SE5950 · 4335 출토 토기 실측도

34 SK4325 출토 토기 실측도

35 중세 토기 · 도자기 실측도

36 SD4130하층 · 중층 출토 목서토기 실측도 1

37 SD 4130중층 출토 목서토기 실측도 2

38 SD 4130중층 출토 목서토기 실측도 3

39 SD 4130중층 출토 목서토기 실측도 4

Pl.

40 SD 4130상층 출토 목서토기 실측도

41 SD4130하층 · 중층 출토 목서 · 각서 · 각인토기 실측도

42 SE4740최하층 · 하층 출토 목서토기 실측도 1

43 SE4740하층 출토 목서토기 실측도 2

44 SE4740하층 출토 목서토기 실측도 3

45 SE4740중층 출토 목서토기 실측도 1

46 SE4740중층 출토 2 · SE4740 주위 출토 목서토기 실측도

사 진 목 차

Ph.

1 유적 주변과 藤原京의 조방

2 유적 원경

3 유적 전경과 조사구

4 제45차 조사구 1

5 제45차 조사구 2

6 제45차 조사구 3

7 제45차 조사구 4

8 제45차 조사구 5

9 제45차 조사구 6

10 제45차 조사구 7

11 제46차 조사구 1

12 제46차 조사구 2

13 제46차 조사구 3

14 제46차 조사구 4

15 제46차 조사구 5

16 제46차 조사구 6

17 제46차 조사구 7

18 제46차 조사구 8

19 제46차 조사구 9

20 제46차 조사구10

21 제47차 조사구 1

22 제47차 조사구 2

23 제47차 조사구 3

Ph.

24 제47차 조사구 4

25 제47차 조사구 5

26 제47차 조사구 6

27 제47차 조사구 7

28 제47차 조사구 8

29 제50차 서조사구 1

30 제50차 서조사구 2

31 제50차 서조사구 3

32 제50차 서조사구 4

33 제50차 서조사구 5

34 제50차 서조사구 6

35 제50차 동조사구 1

36 제50차 동조사구 2

37 제50차 동조사구 3

38 제53차 북조사구 1

39 제53차 북조사구 2

40 제53차 중조사구 1

41 제53차 중조사구 2

42 제53차 중 · 북 · 남조사구

43 제133-7 · 13차 조사구

44 수혈건물 1

45 수혈건물 2

46 平安時代～중세 우물 1

Ph.

47 平安時代～중세 우물2
48 平安時代～중세 우물3
49 平安時代～중세 우물4
50 平安時代～중세 우물5
51 平安時代～중세 우물6
52 수막새1A형식
53 수막새1B～4형식
54 수막새5・7형식
55 수막새6・8형식
56 암막새1・2형식
57 암막새3～9형식
58 고대 도구기와・각인기와
59 중세 도구기와1（귀와・망와・雁振瓦）
60 중세 도구기와2（기타）・각인기와
61 수키와Ⅰ類・Ⅱ類1（단부ア）
62 수키와Ⅱ類2（단부イ・ウ・エ）
63 수키와Ⅲ類（D）・수키와 타날 세부
64 암기와Ⅰ類1（A・B）
65 암기와Ⅰ類2（B・C）
66 암기와Ⅰ類3（C）
67 암기와Ⅰ類4（C・E）
68 암기와Ⅱ類1（SK4160・SD4255・SD4751・SK4325출토）
69 암기와Ⅱ類2（SK4325・SD4130・SE4740출토）・Ⅲ類
70 암기와Ⅰ類 타날1（A・B1～11）
71 암기와Ⅰ類 타날2（B12～26）
72 암기와Ⅰ類 타날3（B27～31・C1～10）
73 암기와Ⅰ類 타날4（C11～15・D・E）
74 중세 수키와
75 중세 암기와
76 SD4130하층・상층 출토 토기
77 SD4130중층 출토 토기
78 SE4740 출토 토기
79 SE4740최하층・하층 출토 토기
80 SD4130하층 출토 土師器・須恵器1
81 SD4130하층 출토 須恵器2

Ph.

82 SD4130중층 출토 土師器1
83 SD4130중층 출토 土師器2
84 SD4130중층 출토 土師器3
85 SD4130중층 출토 土師器4
86 SD4130중층 출토 須恵器1
87 SD4130중층 출토 須恵器2
88 SD4130중층 출토 須恵器3
89 SD4130중층 출토 須恵器4
90 SD4130중층 출토 須恵器5
91 SD4130중층 출토 須恵器6
92 SD4130상층 출토 土師器
93 SD4130상층 출토 須恵器
94 SE4740최하층 출토 토기
95 SE4740하층 출토 土師器1
96 SE4740하층 출토 土師器2
97 SE4740하층 출토 土師器3・須恵器
98 SE4740중층・상층 출토 토기
99 SE4740중층 출토 土師器1
100 SE4740중층 출토 土師器2・상층・주위 출토 토기
101 SD4132・4139・4311 출토 토기
102 SD4131 출토 토기
103 SD4135 출토 토기
104 SD4129・4143・4179・4255・4357 출토 토기
105 SE5950・SK4325 출토 토기
106 SK4325 출토 토기
107 SE4335 출토 토기
108 SK4327 출토 토기
109 SK4265・4266・4271・4365・SJ4260 출토 토기
110 SI4230・4231・4233 출토 토기
111 SI4232・4234 출토 토기
112 SI4135・4236 출토 토기
113 한식계토기・縄文토기
114 SE4790・SJ5007・5029 출토 토기
115 녹유수각벼루
116 벼루

Ph.

117 토마
118 SD4130하층 · 중층 출토 목서토기 1
119 SD4130중층 출토 목서토기 2
120 SD4130중층 출토 3 · 상층SE5020 · 5950 출토 목서토기
121 SE4740하층 출토 목서토기 1
122 SE4740최하층 · 하층 출토 2 · 중층 · SE4740 주위 출토 목서토기
123 SD4130 · 4311타 출토 각서 · 각인토기
124 SD4130 출토 각서토기 1
125 SD4130 출토 각서토기 2
126 SE4740 출토각서토기
127 SD4130중층 출토 목제품 1
128 SD4130중층 출토 목제품 2
129 SD4130중층 출토 목제품 3
130 SD4130중층 출토 목제품 4
131 SD4130중층 출토 목제품 5
132 SD4130중층 출토 목제품 6
133 SD4130중층 출토 목제품 7
134 SD4130중층 출토 목제품 8
135 SD4130중층 출토 목제품 9
136 SD4130중층 출토 목제품10
137 SD4130중층 출토 목제품11
138 SD4130상층 출토 목제품 1
139 SD4130상층 출토 목제품 2
140 SD4130상층 출토 목제품 3
141 SE4740최하층 · 하층 출토 목제품 1
142 SE4740하층 출토 목제품 2
143 SE4740중층 · 상층 출토 목제품 1

Ph.

144 SE4740상층 출토 목제품 2
145 SE4740상층 · SE4790 · 4782 출토 목제품
146 기타 우물 · 포함층 출토 목제품 1
147 기타 우물 · 포함층 출토 목제품 2
148 중세 우물 내 출토 목제 그릇
149 기둥 (柱根) · 초판 (礎板)
150 SE4740 모기둥 1
151 SE4740 모기둥 2
152 SE4740 横桟
153 SE4740 횡판 1
154 SE4740 횡판 2
155 철제품 1
156 철제품 2 · 동제품 1
157 철제품 3 · 동제품 2
158 전화 (銭貨) 1
159 전화 (銭貨) 2
160 전화 (銭貨) 3
161 전화 (銭貨) 4
162 석제품 1 · 석기
163 석제품 2 · 주조관계품
164 목간 1
165 목간 2
166 수종현미경사진 1
167 수종현미경사진 2
168 수종현미경사진 3
169 수종현미경사진 4
170 전화 (銭貨) 의 투과X선화상
171 정비 상황

부 판

1 藤原京左京六条三坊 발굴조사유구도
2 藤原京内공간선택 (占地)

Ⅰ 머 리 말

본서는 奈良県橿原市木之本町에 있는 藤原京左京六条三坊을 奈良国立文化財研究所(2001년도 이후는 奈良文化財研究所)飛鳥藤原宮跡発掘調査部(2006년도 이후는 都城発掘調査部)가 飛鳥藤原宮跡 발굴조사부 신청사 건설에 동반해 실시한 조사성과를 정리한 것이다. 조사는 1985년 4월부터 1987년 5월까지 5차에 걸쳐 실시하였으며 2004년에는 두 번의 소규모 조사를 실시하였다. 조사면적은 약 17000㎡에 해당한다.

Ⅱ 藤原京에 대하여

A 藤原京의 연혁

藤原京은 한 변이 약 1km의 정방형으로 藤原宮의 바깥쪽 조방도로에 의해 반듯하게 구획된 京域을 동반한 일본 최초의 중국식 도성이다. 京의 가운데를 남북으로 뻗은 주작대로를 기준으로 東을 左京, 西를 右京이라 한다. 구획의 최소단위인 坪은 약 130m 四方, 1坊은 半里(約265m)四方으로 4개의 坪(4町)으로 구성된다. 京内에는 宅地와 절, 관아(官衙)가 늘어서 있는데 宅地의 면적은 신분에 따라 四町에서 四分의 一町까지 배급이 정해져 있었다. 각 坊에는「林坊」등 唐의 장안성과 같이 고유명사가 붙여져 있었으나 현재에는 그 전체를 알 수 없기 때문에 근처에 있는 조방도로의 이름을 따서 左京六条三坊 등으로 불린다.

『日本書紀』의 기재에 의하면 飛鳥浄御原宮에 거처한 天武天皇은 즉위 5年째의 676년, 새로운 京을 만들려 의도하였으나 그 당시에는 실현되지 못하였다. 682년 이후 다시 새로운 京을 만들기 시작하나 686년 天武天皇의 죽음에 의해 일단 중단된다. 뒤를 이은 持統天皇은 690년 조영을 재개하여 694년 藤原京으로 천도하였다. 이후 和銅3년(710)의 平城京천도까지 16년간에 걸쳐 일본의 수도가 된다.

藤原京의 조영시대에 관해서는 발굴조사를 통해 아주 흥미깊은 사실이 밝혀지고 있다. 藤原京의 조영개시때에는 藤原宮의 위치는 결정되지 않고 京 전역에 걸쳐 조방을 설치하였다. 이 때문에 藤原宮内에는 조방도로의 측구(側溝)가 파여져 있다(선행조방). 宮의 위치를 결정한 후에는 宮内의 선행조방의 측구를 메우고 조영을 위한 자재를 운반하기 위해 운하를 새로이 굴착한다. 운하에서는 天武天皇11년 (682)～685년으로 추정되는 목간이 출토되었는데 이 즈음에는 宮의 조영이 본격화 한 것으로 보인다. 또 680년에 조영되기 시작한 本薬師寺는 688년에는 적어도 금당이 완성되었다고 여겨진다. 寺域은 右京八条三坊의 부지내에 반듯하게 배치했다. 절을 조영하기 위한 정지토의 아래에서는 西三坊坊間路와 坪内宅地의 담장, 건물이 발견되었다. 本薬師寺의 조영 개시기에 京의 조영이 본격화한 것을 알 수 있다. 이러한 조사성과에 따라 676년의 새로운 京의 조영은 어느 정도 구체적인 계획을 가지고 넓은 범위에서 진행한 것으로 보인다. 또, 本薬師寺에서 발견한 西三坊坊間路는 천도시에는 매워져 藤原宮内의 先行条坊과 동일한 성격으로 추정된다. 즉 京内에서 검출된 条坊道路가 천도시까지 확실하게 존재하였음을 보증하는 것 뿐만이 아니라 条坊遺構를 확인해도 천도 당초부터 여러 개의 坪(복수의 坪으로 구성된 占地)을 활용한 건축계획도 생각할 수 있다.

B　藤原京의 규모

藤原京의 규모에 대해서는 1966년부터 1968년에 걸친 조사성과를 토대로 岸俊男이 복원하였다. 남북12条, 동서8坊으로 동은 中ッ道, 서는 下ッ道, 북은 横大路, 남은 阿倍山田道라는 大和의 옛길을 京極으로 이용하였다고 보는 것이 합리적인 것이다. 이후 岸説은 당분간 통설이 되었다. 그러나 1979년 이후, 岸説의 범위 외에 해당하는 곳의 조사에서 条坊道路로 보이는 유구의 검출이 이어져 「大藤原京」의 복원안이 여러 가지 나오게 되었다. 1996년에는 西京極과 東京極에 해당하는 T자형의 条坊道路를 확인하여 藤原京의 동서규모가 10坊인 것이 확인되었다. 현재는 京域을 10条10坊으로 보는 안 등이 제안되어 있다. 다른 도성의 경우 宮은 京의 북쪽에 위치하는 것에 반해 大藤原京에서는 京의 중앙에 위치하고 있다.

Ⅲ 유　　구

左京六条三坊의 약 17000㎡에 달하는 조사로 古墳時代부터 중세에 이르기까지 다수의 유구가 검출되었다. 주된 유구로는 条坊道路 2条, 굴립주건물 83동, 수혈건물 8동, 굴립주 담장 45条, 우물 38기, 도랑 37기, 토기매납구덩이 4기 등 이다. 이러한 유구는 藤原京期를 중심으로 다음에 이어지는 奈良時代(710～784년)에도 비교적 정연한 유구가 전개된다. 본서에서는 5세기대를 중심으로 한 古墳時代를 Ⅰ기, 7세기대의 藤原京 조영직전까지를 Ⅱ기로 한다. 조영기를 포함한 藤原京의 시기에 대해서는 Ⅲ기로 하여 천도까지의 藤原京조영기, 천도후의 藤原京期전반, 藤原京期후반의 3시기로 세분하여 각각 Ⅲ-A기, Ⅲ-B기, Ⅲ-C기로 한다. 奈良時代(8세기)는 Ⅳ기, 平安時代중기(10～11세기경)를 Ⅴ기, 平安時代전・후기 이후(12세기 이후)를 Ⅵ기로 한다.

Ⅰ기의 유구는 조사구역의 남쪽에서 하천의 유로가 휘어져 흐르고, 양쪽 연안에는 수혈건물이 수 동씩 점재한다. Ⅱ기의 유구는 조사구역의 동쪽 끝의 南北大溝SD4143과 그 서쪽에 펼쳐진 굴립주건물군이다. 비교적 규모가 큰 건물을 중심으로 한 군집이 보인다.

Ⅲ기의 본 조사지는 藤原京左京六条三坊에 해당한다. 여기는 藤原宮의 동편과 인접하는 곳으로 남에는 藤原宮南面으로 통하는 六条大路, 북에는 藤原宮東面南門에서 이어지는 五条大路가 지나가는 京内에서도 일등지에 해당한다. Ⅲ-A기에는 六条条間路와 東三坊坊間路에 의해 左京六条三坊은 이 도로로 東北坪, 東南坪, 西北坪, 西南坪으로 4분할 된다. 各坪 가운데 東北坪과 東南坪의 양상이 비교적 많이 밝혀져 있다. 東北坪은 坪을 동서로 분할한 상황을 이루고, 서편에 담장으로 둘러싼 구획이 있다. 구획 남쪽편의 담장 중앙에 문을 내고 구획 내에는 건물이 규칙적으로 늘어서있어 공공시설로 여겨진다. 東南坪은 坪을 남북으로 분할한 一町의 상황(一町占地)을 나타내며, 東北坪의 서구획과 같이 정돈되어 이용되었을 가능성도 있다. Ⅲ-B기는, 대규모의 東西棟建物SB5000을 左京六条三坊의 중앙에 만들어 一町단위의 크기에서 새로이 四町의 단위(一町占地에서 四町占地로)로 이용된다. SB5000는 그 규모와 위치, 条坊中軸선상에 이보다 큰 건물이 없다는 점에서 正殿으로 보인다. 동쪽에는 남북담장이 있어 외곽과 내곽으로

구획된다. 내곽의 건물배치는 正殿의 동남쪽에 南北棟의 脇殿을 두고 있는데, 아직 조사되지 않은 서남쪽에도 正殿을 중심으로 대칭해서 脇殿이 있었던 것으로 보여 正殿과 함께 品자상의 배치를 보인다. 正殿의 동북쪽에는 東西棟이 위치하고 추가로 東西棟건물이 있다. 이 유구들이 정연하게 배치된 것으로 볼 때 좌우대칭일 것으로 추정된다. 正殿남쪽의 앞마당에는 임시적인 구조물이 있어 의례에 관계된 것으로 생각된다. 또, 南北大溝에 접해 서편으로 이어지는 東西大溝SD4130을 만들고, 대규모의 우물 SE4740을 설치했다. Ⅲ-C기는 Ⅲ-B기부터 이어져 온 四町占地에서 내곽의 규모를 확대한다. 내곽의 건물배치는 正殿의 동편에 東西棟건물을 두고, 그 동남쪽에는 南北棟의 脇殿2동을 남북으로 배치하였다. 이러한 건물은 서편의 대칭한 위치에도 있었던 것으로 여겨져 Ⅲ-B기와 같은 모습을 하면서도 보다 확대된 品자 배치가 된다. 또한 正殿의 남쪽에는 前殿을 세웠다.

Ⅳ기는 奈良時代로 大溝에서 이어지는 水系가 존속한다. 조사구 남편에는 굴립주담장과 구(素掘溝)로 구획한 내부에 正殿과 前殿으로 보이는 東西棟건물 2동이 중심선(中軸線)을 맞추어 남북으로 늘어서 있다. 조사지의 서북모서리부에서는 총주건물(総柱建物)이 발견되었다. 이 시기의 유구는 그 규모와 배치로 볼 때 官衙와 관련된 것으로 여겨진다.

Ⅴ기는 조사구의 동쪽 끝에 南北大溝SD4143이 존속하지만 SD4130과 SE4740은 거의 매워져 있다. 조사구 남편에는 약간 규모가 큰 건물과 그에 부속되는 소규모의 건물이 있다. 이 시기의 유구는 비교적 규모가 큰 것도 있으나 官衙라기 보다는 集落으로서의 성격을 생각할 수 있다. Ⅵ기는 토지이용이 세분화되어 우물을 각지에 설치한다. 중심건물과 부속건물, 담장과 도랑, 구덩이가 한데 모이는 구조가 조사구 중앙부의 동서 2곳에서 확인되어 몇 번에 걸쳐 개축되었음을 알 수 있다. 鎌倉時代보다 후대의 유구는 조사구 북서부에 환호상의 구가 둘려져 있는데 그 내부에는 수 기의 우물과 東西棟건물이 있다. 기와가 다수 출토되었기 때문에 寺社 등이 있었던 것으로 보인다. 호에서 출토된 유물은 14세기후반경의 것으로 이 즈음에는 현재의 농촌 취락이 만들어지기 시작된 것으로 보인다.

Ⅳ 遺　　物

東西大溝SD4130과 이에 남쪽에 접한 우물 SE4740을 중심으로 기와와 와전류(瓦塼類), 토기, 토제품, 목제품, 금속제품, 목간 등 유물이 다수 출토되었다.

瓦塼類 고대에서 중세의 수막새가 17종류의 121점, 암막새가 25종류의 84점으로 다양한 막새가 출토되었다. 고대 기와의 대부분은 大和분지내 각지의 사원이나 藤原宮에 이용된 기와와 같은 기와틀로 만들어졌다. 특히 7세기전반 건물의 吉備池廃寺(百済大寺) 창건기와인 重圏文縁単弁八弁蓮華文수막새와 型押(스탬프식)忍冬唐草文암막새가 주목된다. 奈良時代와 平安時代의 막새는 극히 소수이다. 중세의 막새는 鎌倉時代에서 室町時代에 걸친 13세기후반～14세기전반과 14세기중～후반의 것이 있다. 출토된 숫기와는 총중량966.1㎏, 파편 수 3860점, 평기와는 총중량 3083.9㎏, 파편 수 22993点에 달한다. 塼仏은 점토판에 찍어낸 불상의 일종으로 方形三尊塼仏의 파편 9점이 조사구의 북서부에서 주로 출토되었다.

토기 · 토제품 縄文時代부터 근세에 이르기까지 정리용 상자로 397개분의 토기 · 토제품이 출토되었다. SD4130과 우물 SE4770에서 출토된 7 · 8세기의 土師器와 須恵器가 대부분을 차지한다. 출토토기의 연대는 SD4130이 藤原京期～10세기 후반경, SE4740은 藤原京期～10세기 전반경이다. 藤原京이 폐기된 후인 奈良時代 토기가 다량 출토되었음이 주목되었는데 이들의 기종구성, 특히 식기와 다른기종의 비율은 官衙지구에서 출토되는 토기와 같다. 이는 조사지가 奈良時代에 공공시설이었음을 시사한다. 묵서토기는 134점 출토되어 전체의 95％이상이 SD4130과 SE4740에서 출토되었다. 기재내용은「香山(카구야마)」와「香」,「山」가 많은데 22점에 달한다.

목제품 · 금속제품 · 화폐 목제품은 정리용 콘테이너에 120상자 정도 있는데 대부분은 SD4130 및 우물 SE4740에서 출토되었다. 판자를 구부려 만든 목제품(曲物), 칠기 등의 용기류, 방추차 등의 방직구, 빗(横櫛) 등 복식류, 거문고의 부속품(琴柱) 등의 유희구(遊戯具), 인형, 斎串 등의 제사구, 도자병 등의 공구가 있다. 금속제품으로는 단도, 낫, 못 등의 철제품, 동팔찌, 꽃모양장신구 등의 청동제품이 있다. 화폐는 46점 출토되었다. 그 중 無文銀銭 1점과 和同開珎 27점이 SE4740의 우물 최하층 · 하층에서 출토되었다.

목간 우물SE4740에서는 주술목간이 1점 출토되었다. 東西大溝SD4130에서는「左京職」이나「菜採司」이라는 官衙名이 쓰여진 것,「束」,「把」이라는 단위를 적은 쌀에 관한 목간과 꼬리표목간 등 28점이 출토되었다.

자연과학분석 동물유존체로는 SD4130에서 사슴의 뿔, 말의 이빨 파편 등이 출토되었다. 중세와 근세의 유구와 포함층에서는 말, 소, 사람, 자라의 뼈가가 출토되었다. 식물유존체는 소귀나무(ヤマモモ), 호두, 매실, 복숭아 등 전부 대형씨앗의 과실을 식용한 후 남은 부분을 버린 것으로 보인다. 목제품의 수종조사에서는 고대의 曲物과 斎串에 편백과(ヒノキ科)의 수종을 선호하여 이용한 것을 알 수 있다. 和同開珎의 형광 X선 분석에 의한 성분분석에서는 4개의 타입으로 크게 나눌 수 있음을 알 수 있다. 각각의 타입의 성분은 동전의 명문(銭文)과 관련되어 있다. 또, 塼仏의 부착물 분석결과에 의하면 백색하지(白色下地), 칠(漆), 금박 등을 도포하여 장식하였음이 밝혀져 개체마다 사용한 안료의 차이가 있었음이 판명되었다.

Ⅴ 맺음말

이번 분석으로 밝혀진 조사지의 성격에 대해 마지막으로 서술하고자 한다.

藤原京期 左京六条三坊의 유규는 정연한 건물배치와 건물로 둘러쌓인 앞마당이 있었던 것으로 볼 때 官衙로 여겨진다. 또한, 출토한 방대한 양의 토기분석으로도 官衙인 성격이 추정된다. 藤原京内에 설치된 官衙의 예는 모두 출토된 목간의 기재내용으로 左京七条一坊의 衛門府(藤原宮의 宮城十二門等의 경비를 담당하는 官司)와 右京七条一坊의 右京職(京의 西半分에 해당하는 右京의 민정 일반을 관장하는 官司)이라 판명되었다. 이는 藤原宮에 인접하고 있어 衛門府는 四町占地, 右京職은 三町(以上)占地라는 광대한 부지면적을 차지한다. 이 두가지 사실은 左京六条三坊에서도 해당한다.

藤原京期중반, 701년에 일본 최초의 본격적인 율령인 大宝律令이 실시되었다. 이에 따라 단독의 官司였던 京職은 左京職과 右京職으로 나뉘었다. 左京六条三坊에서는「左

京職」이라 쓰여진 목간이 출토되었다. 본 조사지는 左京域에 위치하고는 있으나 藤原京期후반에는 左京職이 존재한 것으로 보인다. 이 구역은 藤原京期에도 四町 면적(四町占地)을 유지하는 것으로 보아, 701년까지는 京職이 소재하고 그 후에는 左京職으로 되었을 가능성이 높다. 이에 따른 정비확충으로 ⅢB기에서 ⅢC기로의 다시 구획편성을 행했을 것이다.

한편, 右京職은 새로운 官衙의 부지가 필요하게 되어 右京七条一坊에 그 땅을 구하였다. 右京七条一坊은 藤原京期전반에는 一町 면적(一町占地)으로 西南坪은 귀족의 저택이었던 것으로 생각된다. 藤原京期후반에는 西南坪의 저택을 官衙政庁으로 바꾸고 부지는 북의 右京七条一坊西北坪 및 남의 右京八条一坊西南坪과 일체화시켜 縦長의 三町(以上)占地가 되었을 가능성이 크다. 右京七条一坊・右京八条一坊의 西半分에 개수를 더함으로서 새로운 右京職의 부지를 확보한 것으로 보인다.

奈良時代에는「香山」이라 묵서된 토기가 주목되어 왔다. 香山은 조사지의 바로 동쪽에 있는 香具山을 일컫는 것으로 耳成山, 畝傍山을 더해 大和三山을 구성하는 성스러운 산으로 중요시 되어왔다. 창고로 보이는 건물이 검출된 것과 함께 天平2년도(730)大倭国正税帳에 기재된「香山正倉」과 관련되는 것으로 보는 견해가 널리 받아들여져 왔다. 大倭国正税帳의 검토에서는 香山正倉은 十市郡이 아니라 高市郡에 있었던 것으로 보인다. 이번 조사지는 高市郡과 十市郡의 경계(郡境)부근에 해당되어 어느 郡에 존재하였는가를 확정하기는 쉽지 않다. 9세기의 法律書『延喜式』와 中世喜殿荘関係의 11세기후반의 사료분석 등으로 볼 때 조사지는 高市郡이 아니라 十市郡에 속하였을 가능성이 크다고 생각된다. 香山正倉은 十市郡에는 소재하지 않았기 때문에 조사지를 香山正倉에 비정하는 견해는 재고할 필요가 있다. 이 구획에는 香山正倉과는 별도로 동쪽으로 가까운 香具山에 따라「香山○○」(○○는 施設名)으로 불리었던 시설이 있어「香山」이라 쓰여진 묵서토기는 이와 관련된 것이라 생각된다.

그 외의 시대 이번 발굴조사지에서 각 시기의 토지이용 양상이 밝혀졌다. 古墳時代에는 수혈건물에서 한반도계토기(韓式系土器)가 다수 출토되는 것으로 볼 때 飛鳥주변지역 개발에 관여한 도래인들의 활동모습을 엿볼 수 있다. 7세기대에는 명확한 유구는 검출되지 않았으나 舒明天皇11년 (639년)에 설립된 百済大寺로 보이는 吉備池廃寺와 같은 기와가 출토되어 이들의의 관계가 흥미롭다. 平安時代이후에는 현재 보이는 농촌경관으로 서서히 변화해 나가는 모습을 볼 수 있다.

전망과 과제 이와 같이 左京六条三坊에 있어서 이번 발굴조사와 그에 관한 일련의 분석, 고찰에 의해 많은 성과를 이루었다. 이번 조사의 주목적인 藤原京기에서 발견한 유구군은 左京職인 것이 판명되어 京内官衙의 실태에 새로운 해석을 더했다. 특히, 건물배치 등의 구체적인 양상을 파악할 수 있었던 것은 다른 京内官衙의 정보가 단편적이었던 것에 있어 중요한 성과라 할 수 있다. 관련된 분석에서는 藤原宮에 가까운 지역에서 대규모 시설의 전개가 더욱더 명확해졌다. 左京職에 반해 右京職이 실제로 광대한 부지를 가진 官衙였던 것으로 여겨지게 된 것은 京内官衙의 실태를 생각할 때 중요한 자료를 제공하였다 하겠다. 그러나 藤原京의 발굴조사는 다른 도성에 비해 적어 앞으로도 계속적인 조사를 실시하여 일본최초의 중국식도성, 藤原京의 실태를 명확하게 할 필요가 있다.

釈文

井戸SE四七四〇

1 □不殺　（符籙）未方女者　150×15×5　011　NF29　三五六

東西大溝SD四一三〇

2・菜採司謹白奴□嶋逃行□
・別申病女以前如□　203×29×5　011　NH32　三五七

3 〔大カ〕□夫等　(41)×(18)×1　081　NH35　三五八

4 収霊亀三年稲　養□　(118)×(20)×4　081　NJ33　三五九

5・四月〔廿カ〕□□日
・代〔三カ〕□斗…□　(51+26)×32×2　019　NH35　三六〇

6 百廿七束一〔把カ〕□　091　NJ32　三六一

7 □斤得三束〔遺カ〕□二束　(302)×18×4　019　NH36　三六二

8 斗四升　97×(17)×3　081　NH36　三六三

9 □小豆□□□　(84)×29×4　081　NH35　三六四

10 十八文
□　(59)×21×3　081　NJ32　三六五

11 左京職　（斎串）　163×23×6　061　NJ31　三六六

12 尾張国海部郡魚鮨三斗六升　172×20×5　031　LJ47　三六七

13・近江国蒲□
・宿□戸□　(95)×22×4　039　NJ33　三六八

14 六斗　135×22×5　032　NJ32　三六九

15・□□　□　□
・貝〔斤カ〕□　(159)×27×3　081　NH32　三七〇

16 □〔充カ〕□　(83)×(15)×4　081　NJ29　三七一

17 □□□〔京カ〕□　(39)×(5)×3　081　NH32　三七二

凡　例

一、この出土木簡釈文（抄）は、本報告書が報告対象とする藤原京左京六条三坊から出土した木簡のうち主要なものを掲げる。

一、釈文は、『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（八）』において略報告し、『飛鳥藤原京木簡二』に正報告したものである。釈文が正報告と異なるものがあるが、それらについては今後は本報告書によられたい。

一、木簡は、調査次数にかかわらず出土遺構ごとにまとめて排列した。

一、出土遺構の中の木簡の排列は、木簡の内容分類により、概ね文書、荷札・物品付札、その他、不明の順に並べることを原則とし、木目と直交する方向に文字を書く木簡（横材木簡）のうち、内容の不明なものは最後にまとめることとした。

一、釈文の漢字は常用字体を用い、常用字体のない文字は、康熙字典の字体に準拠した。但し、實・證・龍・廣・盡・應・寶・宝・萬・万・ム・尓・弥・祢・麁・嶋・毗については木簡の表記を尊重した。

一、編者において加えた文字には次の二種の括弧を施した。括弧は原則として右傍に加えたが、組版の都合上左傍に施した場合もある。

〔　〕　校訂に関する註のうち、本文に置き換わるべき文字を含むもの。

（　）　右以外の校訂註、及び説明註。

一、本文に加えた符号は次の通りである。

・　木簡の表裏に文字がある場合、その区別を示す。

o　木簡の上端もしくは下端に孔が穿たれていることを示す。

□□□　欠損文字のうち字数の推定できるもの。

□〔□〕　欠損文字のうち字数が数えられないもの。

〔□〕　記載内容からみて、上または下に一字以上の文字を推定できるもの。但し削屑については煩雑になるので、この記号を省略した。

■■　抹消により判読が困難なもの。

〰　抹消した文字の字画が明らかな場合に限り、原字の左傍に付した。

「　」　異筆、追筆。

「　合点。

カ　編者が加えた註で、疑問が残るもの。

マ、　文字に疑問はないが、意味の通じ難いもの。

……　同一木簡と推定されるが直接つながらず、中間の一字以上が不明なことを示す。

……　木目と直交する方向の刻線が施されていることを示す。

〔×〕　文字の上に重書して原字を訂正している場合、訂正箇所の左傍に・を付し、原字を右傍に示した。

一、釈文下の上段のアラビア数字は、木簡の長さ・幅・厚さ（単位はミリメートル。いずれも最大値）を示す。欠損しているもの及び二次的な整形を受けている場合は、現存部分の法量を括弧付きで示した。なお、長さ・幅は木簡の文字の方向による。削屑は法量の表記を省略した。

一、法量下の三桁のアラビア数字（イタリック）は型式番号を示す。型式番号は次の通りである。

011型式　長方形の材（方頭・圭頭などもこれに含める）のもの。

015型式　長方形の材の側面に孔を穿ったもの。

019型式　一端が方頭で、他端は折損・腐蝕などによって、原形の失われたもの。原形は011・015・032・041・051型式のいずれかと推定される。

031型式　長方形の材の両端の左右に切り込みをいれたもの。

032型式　長方形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの。

033型式　長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。

039型式　長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損・腐蝕などによって、原形の失われたもの。原形は031・032・033・043型式のいずれかと推定される。

041型式　長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状に作ったもの。

043型式　長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状にし、他端の左右に切り込みをもつもの。

049型式　長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状にしているが、他端は折損・腐蝕などによって、原形の失われたもの。原形は041・043型式のいずれかと推定される。

051型式　長方形の材の一端を尖らせたもの。

059型式　材の一端を尖らせているが、他端は折損・腐蝕などによって、原形の失われたもの。原形は033・051型式のいずれかと推定される。

061型式　用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。

065型式　用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

081型式　折損・割截・腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

091型式　削屑。

一、釈文下の下段には、木簡が出土した小地区を掲げた。木簡が出土した小地区は、アルファベット二文字と二桁のアラビア数字で示した。詳細は、本文Fig.6を参照されたい。Zは地区不明を示す。複数の地区から出土した断片が接続した場合は、地区名を列記した。

一、最下段に改行して記した漢数字は、『飛鳥藤原京木簡二』の木簡番号である。

出土木簡釈文（抄）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	あすか・ふじわらきゅうはっくつちょうさほうこく
書　　名	飛鳥・藤原宮発掘調査報告
副 書 名	藤原京左京六条三坊の調査
巻　　次	Ⅴ
シ リ ー ズ 名	奈良文化財研究所学報
シリーズ番号	第94冊
編 著 者 名	玉田芳英・高橋知奈津・黒坂貴裕・番 光・中川あや・次山 淳・若杉智宏・小田裕樹・ 高橋 透・尾野善裕・山本 崇・豊島直博・木村理恵・石橋茂登・市 大樹・山﨑 健・ 金原美奈子・藤井裕之・降幡順子
編 集 機 関	独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所
所　　在　　地	〒630-8577　奈良市二条町2丁目９－１（奈良市佐紀町247－1に移転中）　TEL 0742-30-6733
発 行 年 月 日	2017年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふじわらきょうさきょう 藤原京左京 ろくじょうさんぼう 六条三坊	ならけん 奈良県 かしはらし 橿原市 きのもと 木之本 ちょう 町94-1	29205	14C-0576	34°29′52″	135°48′56″	1985.4.3 ～ 1987.5.12 2004.9.4 ～ 2005.4.18	16970㎡	飛鳥藤原宮跡発掘調査部新庁舎建設にともなう調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
藤原京左京六条三坊	都城遺跡、集落、包蔵地	縄文時代～中世	条坊道路、掘立柱建物、竪穴建物、掘立柱塀、井戸、溝、土器埋納坑ほか	吉備池廃寺同笵などの瓦塼類、塼仏、土器、「香山」墨書土器、土製品、緑釉獣脚硯、木製品、金属製品、無文銀銭、木簡、動植物遺存体、縄文土器ほか	藤原京期は四町占地の京職・左京職と判明し、京内官衙に貴重な例を加えた。奈良時代は官衙的施設。古墳時代では韓式系土器が多数出土した。

2017年３月21日　印刷
2017年３月31日　発行

飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ

―藤原京左京六条三坊の調査―

本文編

奈良文化財研究所学報第94冊

著作権所有
発　行　者　奈良市二条町2丁目9番１号
（奈良市佐紀町247-1に移転中）
独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所

印　刷　者　奈良県高市郡高取町車木215
岡村印刷工業株式会社

ISBN 978-4-905338-68-0